

青森市埋蔵文化財調査報告書第54集-3

野木遺跡

発掘調査報告書Ⅱ

(平安時代遺構編 1)

平成12年度

青森市教育委員会

青森市埋蔵文化財調査報告書第54集 - 3

野 木 遺 跡

発掘調査報告書

(平安時代遺構編 1)

平成12年度

青森市教育委員会



野木遺跡遠景（平成10年度）



SI - 108, SB - 12 · 13



SI - 138

例 言

1. 本書は、青森県青森市大字野木字山口・大字合子沢字松森に所在する野木遺跡（青森県遺跡番号01-210）発掘調査報告書である。
2. 本書に記載される内容は、青森市が地域振興整備公団の委託を受け、平成9・10年度に青森市教育委員会が発掘調査を実施した地区についてまとめたものである。
3. 調査は、青森中核工業団地造成工事に伴う発掘調査として平成9・10年度に実施した。二ヵ年次での総調査面積は69,900㎡である。
4. 野木遺跡は、平成7年度から青森中核工業団地整備事業に係る試掘調査を青森県埋蔵文化財調査センターで実施しており、平成8年度から地域振興整備公団の委託を受け青森県埋蔵文化財調査センターが一部の地区について発掘調査を実施している。平成9年度から青森市教育委員会が発掘調査に参加し、合同の発掘調査を実施した。調査担当地区については協議の上、野木遺跡南側部分の遺構密集地区を中心とする地区を青森県埋蔵文化財調査センターが、北側から南側の遺構密集地区に至る地区について青森市教育委員会が調査担当となっており、発掘調査成果の報告についても調査担当毎に報告している。
青森県埋蔵文化財調査センターの担当地区については、平成9～11年度にそれぞれ報告書が刊行されている。（青森県教育委員会1998・1999・2000）
5. 本報告書は当委員会が担当した新町野遺跡発掘調査報告書 と併せて6分冊構成とした。内容は、第1分冊＝新町野遺跡発掘調査報告書、第2分冊＝野木遺跡発掘調査報告書（調査概要・環境・縄文時代・弥生時代編）、第3分冊＝野木遺跡発掘調査報告書（平安時代遺構編1）、第4分冊＝野木遺跡発掘調査報告書（平安時代遺構編2）、第5分冊＝野木遺跡発掘調査報告書（平安時代遺物編・分析・総論編）、第6分冊＝野木遺跡発掘調査報告書（資料・写真図版編）である。本書は第3分冊目にあたる。
6. 基準点測量・グリッド杭打設・空中写真の一部は(株)みちのく計画に、ラジコンヘリによる空中写真測量図化については(株)シン技術コンサルに委託した。
7. 本書の執筆・編集は、青森市教育委員会が行い木村淳一・設楽政健が担当した。執筆分担については、各文末に記している。編集については木村が担当し、設楽が補助した。
8. 調査に関わる資料は、一括して青森市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 図版番号は、原則的に「第 図」とした。

2. 遺構の掲載について

(1) 方位は全て真北である。磁北については西に約8度振れている。

(2) 各図の縮尺は以下の通りである。

1/900 1/120 1/60 1/30

(3) 水平基準は海拔高をメートル(m)で表示した。

(4) 遺構の略号は、S I = 竪穴式住居跡・竪穴遺構、S B = 掘立柱建物跡、S K = 土坑、S D = 溝跡、S A = 柵、S N = 鉄生産関連炉・焼土状遺構、S P = ピット、S X = 性格不明遺構・その他の遺構である。

(5) 遺構番号については、遺構の種別毎に番号を付した。具体的には遺構の略号 - 番号とした。(例：第1号竪穴式住居跡 = S I - 01) ただし、発掘調査時の遺構番号については調査時の事由により断絶し不連続であったため、本書において新たに編集し遺構番号を付している。なお、調査時の遺構番号との対応については資料編内の遺構観察表で表記している。また、遺物整理については旧番号ベースで整理を実施している。

(6) 本書で使われるグリッドの呼称については、先行して調査にあっていた青森県埋蔵文化財調査センターのものに準拠した。具体的には、南北方向に算用数字、東西方向にアルファベットを付し(例：MA - 300) 呼称については、格子の北西隅の杭番号を使用した。

(7) 本書の土層の注記については、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄 1993)に準拠した。

(8) 遺構の規模については、基本的に長軸×短軸×深さをcmで表示した。このうち深さについては、遺構確認面からの計測値を記し、竪穴式住居跡内のピットの深さについては、床面からの計測値を記した。

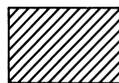
(9) 竪穴式住居跡の主軸方向については、基本的にカマドの主軸方向を代表させた。カマドの主軸方位は、袖部が残存しているものについては両袖、残存していないものについては、火床面の中央線と煙道部の中心線を基準線として真北との振れについて表示した。カマドが残存していない竪穴式住居跡の主軸方位については、各壁の中間点を交差させ、南北方向の軸線と真北との振れについて表示した。

また、住居内にカマド2基以上あるものについては、新旧関係の明確な場合、先に構築されたカマドの主軸方位を代表させた。

(10) 本書の遺構図中で使用されるスクリーントーン等の指示については以下のとおりである。

a) スクリーントーン

地山



205

炭化物



328

火床面・焼土(被熱強)

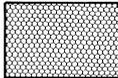
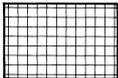


320

還元化部分



706

焼土 (被熱弱)		貼り床	
	788		415
粘土		灰 (アク)	
	304		310
To - a火山灰		B - Tm火山灰	
	42		121

b) グリッド杭

図中でグリッド杭が表示できない遺構図については基準としたグリッド杭からの位置を表示している。具体的には、グリッド+方位・距離として表示している。(例 グリッド MA - 300 から 1 m南の地点 MA - 300 + 1 m S)

目 次

卷首図版

例言

凡例

目次

図版目次

第 章 平安時代

第 1 節 概要7

第 2 節 検出遺構

1 . 竪穴式住居跡7

2 . 竪穴遺構530

図 版 目 次

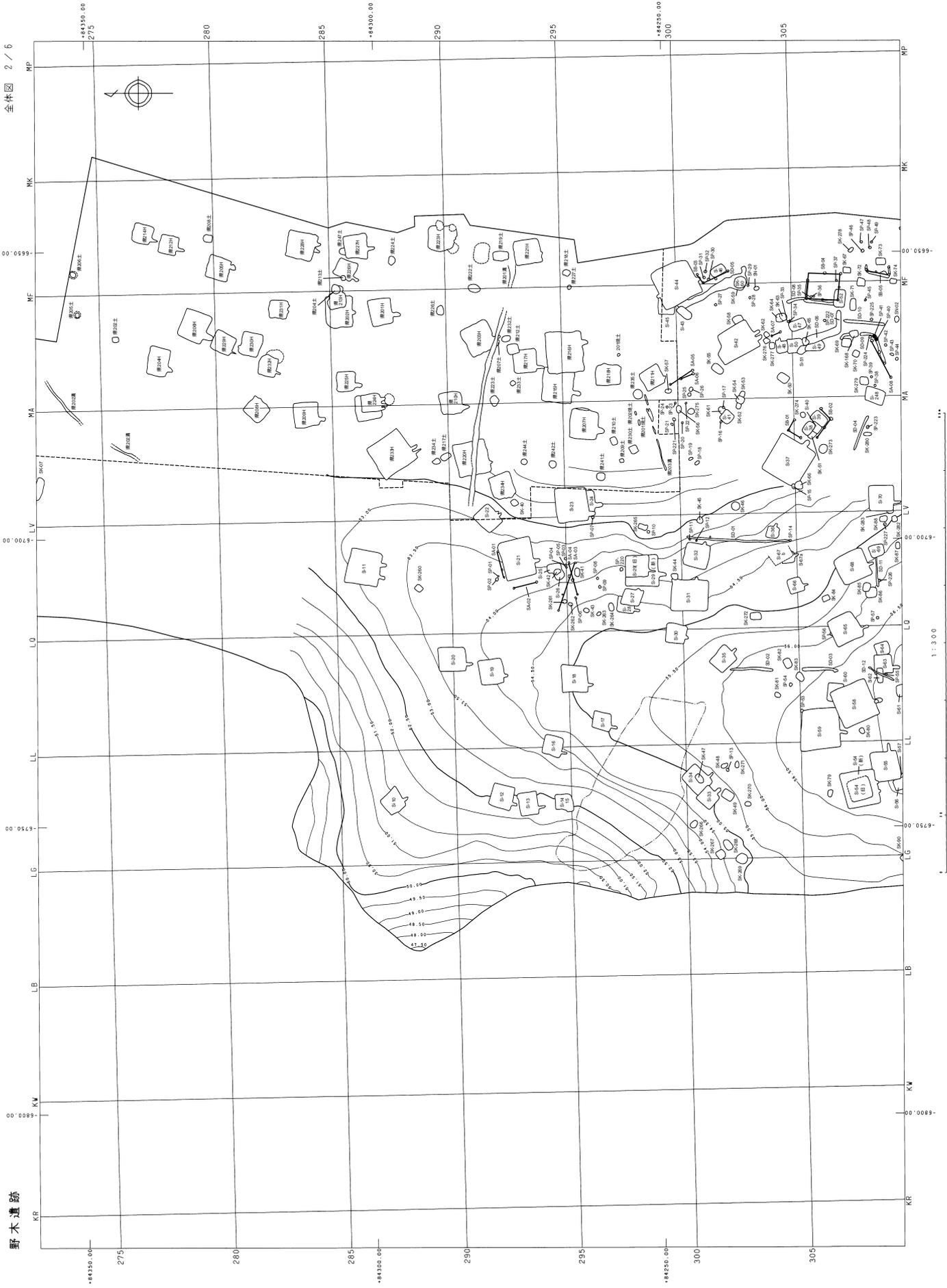
第77図 野木遺跡遺構配置図1	1	第118図 S I - 23	50
第78図 野木遺跡遺構配置図2	2	第119図 S I - 23	51
第79図 野木遺跡遺構配置図3	3	第120図 S I - 24	53
第80図 野木遺跡遺構配置図4	4	第121図 S I - 24	54
第81図 野木遺跡遺構配置図5	5	第122図 S I - 27.....	56
第82図 野木遺跡遺構配置図6	6	第123図 S I - 28.....	58
第83図 竪穴式住居跡の平面形模式図	7	第124図 S I - 29 (新)	59
第84図 竪穴式住居跡の断面形模式図	8	第125図 S I - 29 (新)	60
第85図 竪穴式住居跡の柱穴配置模式図1	8	第126図 S I - 29 (新)	61
第86図 竪穴式住居跡の柱穴配置模式図2	9	第127図 S I - 29 (旧)	63
第87図 竪穴式住居跡の壁溝配置模式図	9	第128図 S I - 29 (旧)	64
第88図 カマドの構造例	10	第129図 S I - 30.....	66
第89図 カマドの位置類型化凡例	11	第130図 S I - 31	68
第90図 カマドの主軸 + 規模	11	第131図 S I - 31	69
第91図 住居規模	12	第132図 S I - 31	70
第92図 火山灰検出状況模式図	14	第133図 S I - 32	72
第93図 S I - 10	16	第134図 S I - 32	73
第94図 S I - 11	17	第135図 S I - 33 ・ 34	75 ・ 76
第95図 S I - 11	18	第136図 S I - 33 ・ 34	77
第96図 S I - 11	19	第137図 S I - 35.....	79
第97図 S I - 12	21	第138図 S I - 36.....	81
第98図 S I - 13	22	第139図 S I - 37	82
第99図 S I - 13	23	第140図 S I - 37	84
第100図 S I - 14 ・ 15	25	第141図 S I - 37	85
第101図 S I - 14	27	第142図 S I - 37	86
第102図 S I - 16	27	第143図 S I - 37	87
第103図 S I - 16	28	第144図 S I - 42	88
第104図 S I - 17	30	第145図 S I - 42	89
第105図 S I - 17	31	第146図 S I - 42	90
第106図 S I - 18	32	第147図 S I - 42	91
第107図 S I - 18	33	第148図 S I - 44	94
第108図 S I - 19	35	第149図 S I - 44	95
第109図 S I - 19	36	第150図 S I - 44	96
第110図 S I - 19	37	第151図 S I - 44	97 ・ 98
第111図 S I - 20	39	第152図 S I - 48	100
第112図 S I - 20	40	第153図 S I - 54 (新) ・ 55	101 ・ 102
第113図 S I - 21	42	第154図 S I - 54 (新)	103
第114図 S I - 21	43 ・ 44	第155図 S I - 54 (新)	104
第115図 S I - 22	46	第156図 S I - 54 (旧)	107 ・ 108
第116図 S I - 22	47	第157図 S I - 55	109
第117図 S I - 23	49	第158図 S I - 55	110

第159図	S I - 58	111	第202図	S I - 79	169
第160図	S I - 58	112	第203図	S I - 81	171
第161図	S I - 58	113	第204図	S I - 81	172
第162図	S I - 59	115	第205図	S I - 81	173
第163図	S I - 59	116	第206図	S I - 82	・ 83175
第164図	S I - 59	117	第207図	S I - 82	176
第165図	S I - 63	119	第208図	S I - 84	177
第166図	S I - 63	120	第209図	S I - 84	178
第167図	S I - 65	122	第210図	S I - 85	180
第168図	S I - 65	123	第211図	S I - 85	181
第169図	S I - 66	124	第212図	S I - 86	182
第170図	S I - 67 a	126	第213図	S I - 87	・ 88 ・ 89183・184
第171図	S I - 67 b	128	第214図	S I - 87	185
第172図	S I - 68	129	第215図	S I - 88	187
第173図	S I - 68	130	第216図	S I - 89	189
第174図	S I - 70	132	第217図	S I - 90	190
第175図	S I - 70	133	第218図	S I - 90	191
第176図	S I - 70	134	第219図	S I - 90	192
第177図	S I - 70	135	第220図	S I - 91	194
第178図	S I - 70	136	第221図	S I - 91	・ 92 ・ 93195・196
第179図	S I - 71	137・138	第222図	S I - 91	197
第180図	S I - 71	140	第223図	S I - 92	199
第181図	S I - 71	141	第224図	S I - 92	200
第182図	S I - 72 (新)	・ (旧)143・144	第225図	S I - 95	202
第183図	S I - 72 (新)	145	第226図	S I - 95	203
第184図	S I - 72 (新)	146	第227図	S I - 95	204
第185図	S I - 72 (旧)	147	第228図	S I - 96	207・208
第186図	S I - 72 (旧)	148	第229図	S I - 96	209・210
第187図	S I - 73	150	第230図	S I - 104	211
第188図	S I - 74	151	第231図	S I - 104	212
第189図	S I - 74	152	第232図	S I - 105	213
第190図	S I - 74	153	第233図	S I - 106	215
第191図	S I - 75	155	第234図	S I - 106	216
第192図	S I - 76	156	第235図	S I - 107	218
第193図	S I - 76	157	第236図	S I - 107	219
第194図	S I - 76	158	第237図	S I - 108	221・222
第195図	S I - 76	159	第238図	S I - 108	223・224
第196図	S I - 77	・ 78162	第239図	S I - 108	225
第197図	S I - 77	163	第240図	S I - 108	226
第198図	S I - 77	・ 78164	第241図	S I - 108	227
第199図	S I - 79	166	第242図	S I - 108	228
第200図	S I - 79	167	第243図	S I - 109	230
第201図	S I - 79	168	第244図	S I - 109	231

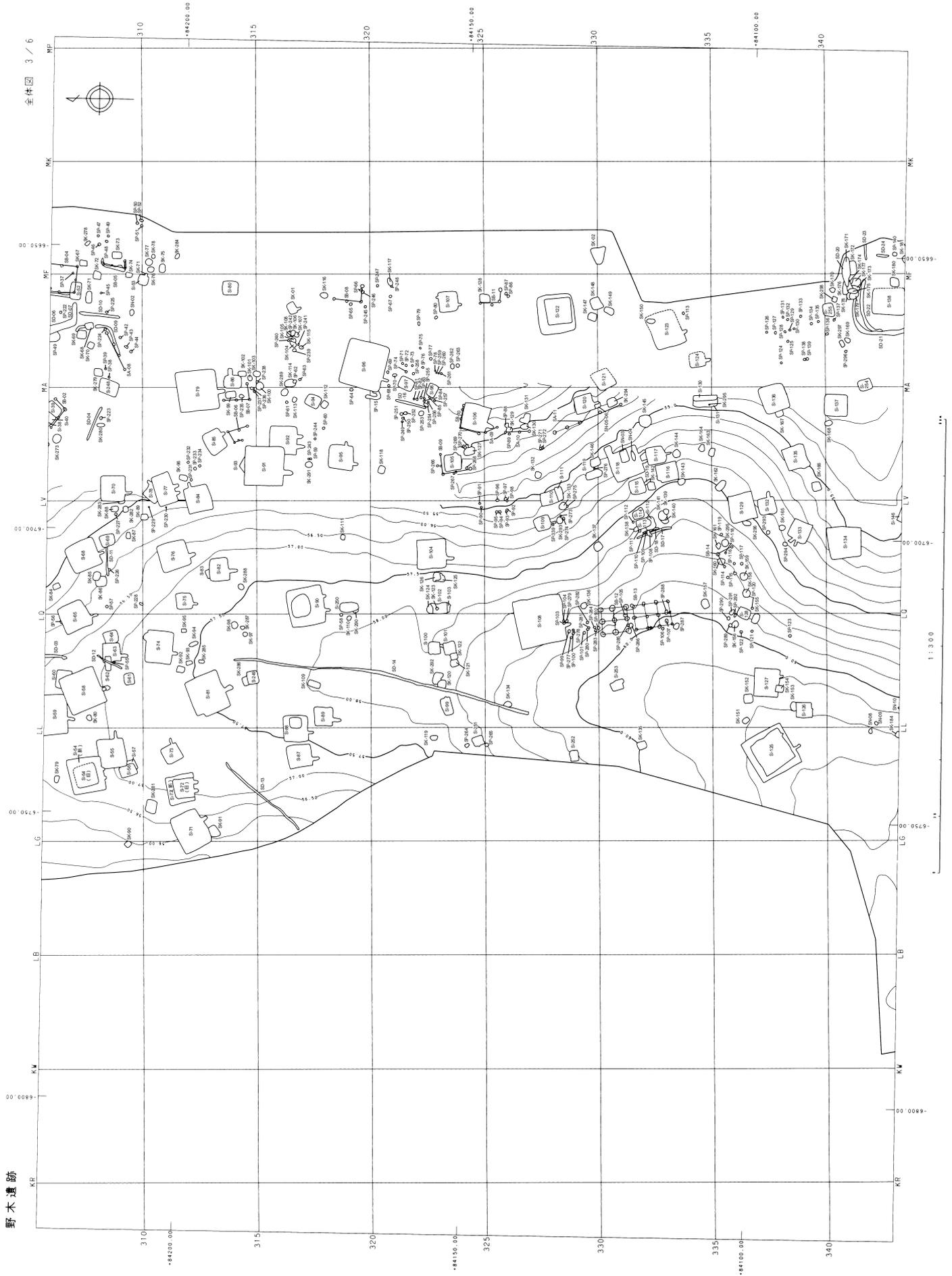
第245図	S I - 117	232	第287図	S I - 145	291
第246図	S I - 117	233	第288図	S I - 145	292
第247図	S I - 118	235	第289図	S I - 146	・ 147	294
第248図	S I - 118	236	第290図	S I - 146	295
第249図	S I - 118	237	第291図	S I - 148	296
第250図	S I - 120	239	第292図	S I - 148	297
第251図	S I - 120	240	第293図	S I - 148	298
第252図	S I - 121	242	第294図	S I - 148	299
第253図	S I - 122	243	第295図	S I - 149	301
第254図	S I - 122	245	第296図	S I - 149	302
第255図	S I - 123	247	第297図	S I - 150	303
第256図	S I - 123	248	第298図	S I - 150	304
第257図	S I - 124	249	第299図	S I - 151	306
第258図	S I - 125 (新)・(旧)	251・252	第300図	S I - 151	307
第259図	S I - 127	255	第301図	S I - 152	・ 153	308
第260図	S I - 127	256	第302図	S I - 154	310
第261図	S I - 129	257	第303図	S I - 154	311
第262図	S I - 129	258	第304図	S I - 155	313
第263図	S I - 132	259	第305図	S I - 156	314
第264図	S I - 132	260	第306図	S I - 156	315
第265図	S I - 133	261	第307図	S I - 156	316
第266図	S I - 133	262	第308図	S I - 157	318
第267図	S I - 134	264	第309図	S I - 157	319
第268図	S I - 135	265	第310図	S I - 158	321
第269図	S I - 135	266	第311図	S I - 158	322
第270図	S I - 136	268	第312図	S I - 159	324
第271図	S I - 136	269	第313図	S I - 159	325
第272図	S I - 137	270	第314図	S I - 160	326
第273図	S I - 138	272	第315図	S I - 160	327
第274図	S I - 138	273	第316図	S I - 160	328
第275図	S I - 138	274	第317図	S I - 161	330
第276図	S I - 138、S B - 15・16、 S D - 21・22	275・276	第318図	S I - 161	331
第277図	S I - 139	278	第319図	S I - 162	333
第278図	S I - 140	280	第320図	S I - 162	334
第279図	S I - 141	282	第321図	S I - 163	335
第280図	S I - 141	283	第322図	S I - 163	336
第281図	S I - 142	284	第323図	S I - 164	338
第282図	S I - 142	285	第324図	S I - 165	340
第283図	S I - 142	286	第325図	S I - 165	341
第284図	S I - 143	287	第326図	S I - 166	342
第285図	S I - 144	289	第327図	S I - 167	344
第286図	S I - 144	290	第328図	S I - 167	345
				第329図	S I - 168	347

第330回	S I - 169	348	第373回	S I - 190	・ 191	403
第331回	S I - 169	349	第374回	S I - 190	・ 191	404
第332回	S I - 170	351	第375回	S I - 192		406
第333回	S I - 170	352	第376回	S I - 192		407
第334回	S I - 170	353	第377回	S I - 193		409
第335回	S I - 171	・ 172	355	第378回	S I - 193	410
第336回	S I - 171	356	第379回	S I - 193		411
第337回	S I - 172	357	第380回	S I - 194		412
第338回	S I - 173	359	第381回	S I - 195		414
第339回	S I - 173	360	第382回	S I - 196		415
第340回	S I - 174	361	第383回	S I - 196		416
第341回	S I - 175	363	第384回	S I - 197		418
第342回	S I - 175	364	第385回	S I - 197		419
第343回	S I - 176	365	第386回	S I - 197		420
第344回	S I - 177	367	第387回	S I - 198		422
第345回	S I - 177	368	第388回	S I - 198		423
第346回	S I - 178	369	第389回	S I - 199		424
第347回	S I - 178	370	第390回	S I - 199		425
第348回	S I - 178	371	第391回	S I - 200		426
第349回	S I - 179	372	第392回	S I - 200		427
第350回	S I - 179	374	第393回	S I - 202		428
第351回	S I - 180	375	第394回	S I - 202		429
第352回	S I - 180	376	第395回	S I - 203		430
第353回	S I - 181	378	第396回	S I - 203		431
第354回	S I - 181	379	第397回	S I - 204		433
第355回	S I - 182	380	第398回	S I - 204		434
第356回	S I - 182	381	第399回	S I - 205	・ 206	435
第357回	S I - 182	382	第400回	S I - 205	・ 206	437
第358回	S I - 183	384	第401回	S I - 207		438
第359回	S I - 183	385	第402回	S I - 208		440
第360回	S I - 183	386	第403回	S I - 208		441
第361回	S I - 185	388	第404回	S I - 209		442
第362回	S I - 185	389	第405回	S I - 209		443
第363回	S I - 185	390	第406回	S I - 210		445
第364回	S I - 186	391	第407回	S I - 211		446
第365回	S I - 186	392	第408回	S I - 211		447
第366回	S I - 188	394	第409回	S I - 212 (新)	・ (旧)	449
第367回	S I - 188	395	第410回	S I - 212 (新)		450
第368回	S I - 188	396	第411回	S I - 212 (新)		451
第369回	S I - 188	397	第412回	S I - 212 (旧)		452
第370回	S I - 189	399	第413回	S I - 213		454
第371回	S I - 189	400	第414回	S I - 214		456
第372回	S I - 189	401	第415回	S I - 214		457

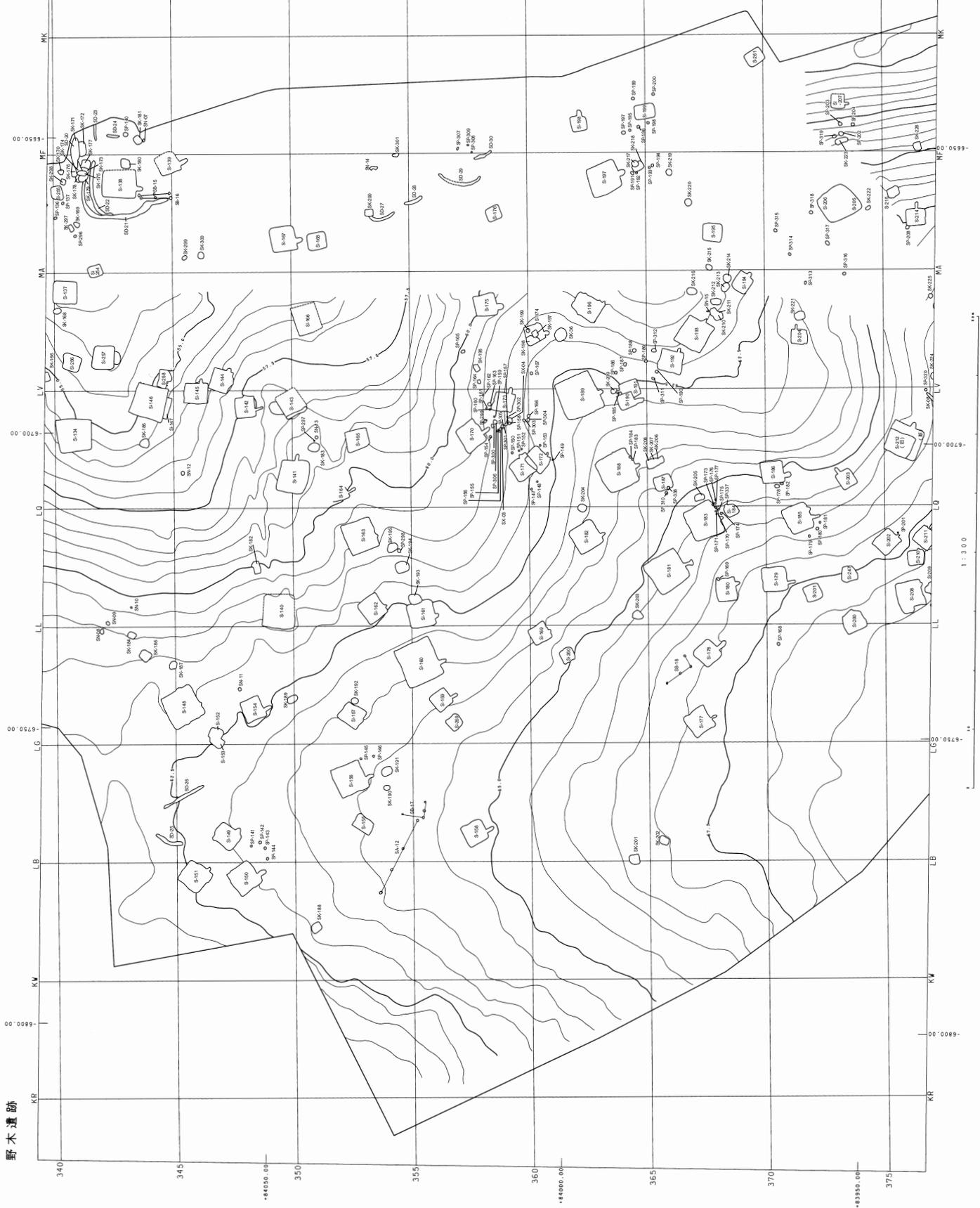
第416回	S I - 214	458	第459回	S I - 240	515
第417回	S I - 216	459	第460回	S I - 240	516
第418回	S I - 216	460	第461回	S I - 241	517
第419回	S I - 216	461	第462回	S I - 242	519
第420回	S I - 217	463	第463回	S I - 242	520
第421回	S I - 219	464	第464回	S I - 243	522
第422回	S I - 220	466	第465回	S I - 244	523
第423回	S I - 220	467	第466回	S I - 244	524
第424回	S I - 220	468	第467回	S I - 245	526
第425回	S I - 221	469	第468回	S I - 245	527
第426回	S I - 221	470	第469回	S I - 246	528
第427回	S I - 222	472	第470回	S I - 246	529
第428回	S I - 222	473	第471回	S I - 25・26・38・39・40	532
第429回	S I - 223	475	第472回	S I - 41・43・45・46	535
第430回	S I - 223	476	第473回	S I - 47・49・50・51	537
第431回	S I - 223	477	第474回	S I - 52・53・56・57	540
第432回	S I - 223	478	第475回	S I - 60・61・62	543
第433回	S I - 224	480	第476回	S I - 64・69・80	545
第434回	S I - 225	481	第477回	S I - 94・97・98・99	548
第435回	S I - 225	482	第478回	S I - 100・101・102・103・110・		
第436回	S I - 226	484		111	550
第437回	S I - 226	485	第479回	S I - 112・113・114・115	553
第438回	S I - 227	487	第480回	S I - 116・119	556
第439回	S I - 227	488	第481回	S I - 126・128	558
第440回	S I - 228	489	第482回	S I - 130・131	560
第441回	S I - 229	491	第483回	S I - 184・187	561
第442回	S I - 230	492	第484回	S I - 201・215・218	564
第443回	S I - 230	493	第485回	S I - 247・249	565
第444回	S I - 231	494	第486回	S I - 251	566
第445回	S I - 231	495				
第446回	S I - 232	497				
第447回	S I - 232	498				
第448回	S I - 233	500				
第449回	S I - 234	501				
第450回	S I - 234	502				
第451回	S I - 235	504				
第452回	S I - 236	505				
第453回	S I - 236	506				
第454回	S I - 237	508				
第455回	S I - 237	509				
第456回	S I - 238	511				
第457回	S I - 239	512				
第458回	S I - 239	513				



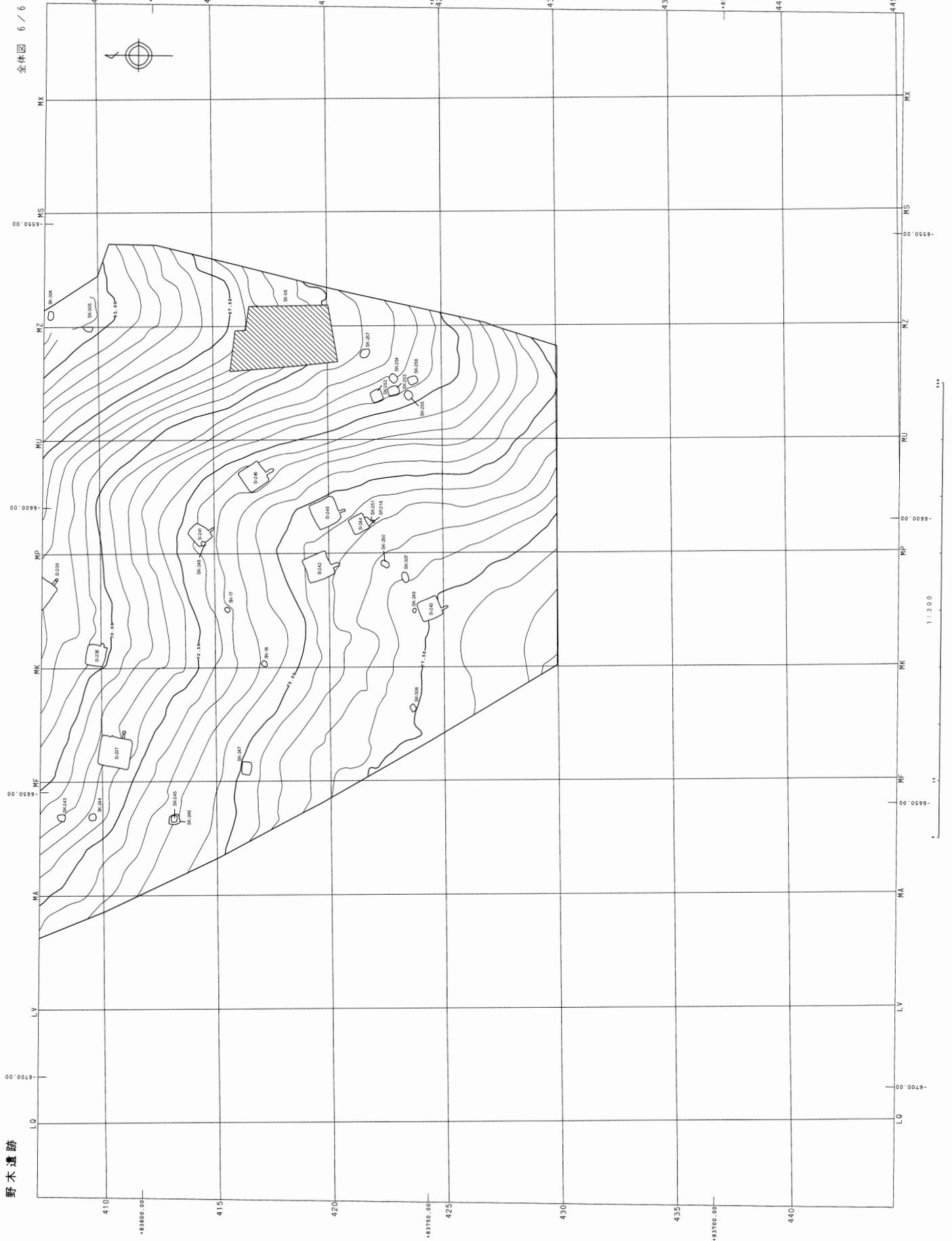
第78図 野木遺跡遺構配置図2



第79図 野木遺跡遺構配置図3



第80図 野木遺跡遺構配置図4



第82図 野木遺跡遺構配置図6

第 章 平安時代

第1節 概要

本遺跡における平安時代の遺構は、調査区最北端グリット261ラインから県埋文センター調査区と隣接する424ラインまで検出した。内訳は、竪穴式住居跡196軒（建て替え等を含む）、竪穴遺構52基、土坑221基、ピット221基、掘立柱建物跡19棟、柵12列、鉄生産関連遺構4基、焼土状遺構14基、畝状遺構1ヶ所、溝跡31条、性格不明遺構5基である。

第2節 検出遺構

1. 竪穴式住居跡

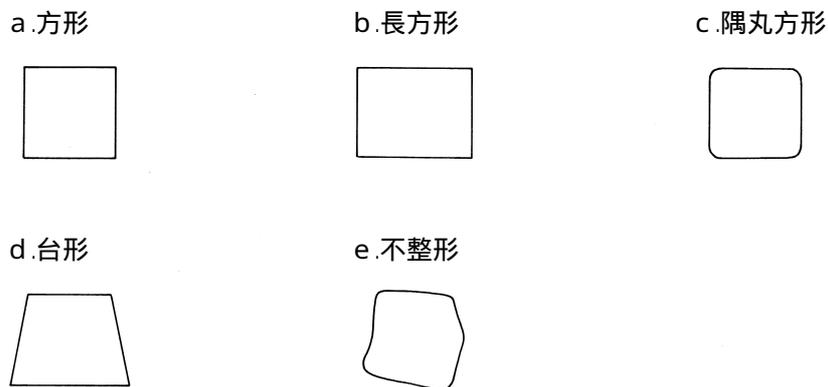
本報告における竪穴式住居跡とはカマドならびにカマド相当施設を有する（有した）遺構について呼称を適用した。平面規模において2m以下の竪穴状の施設等が想定される遺構については竪穴遺構という呼称を適用した。なお、両施設とも遺構略号としてS Iを付与している。

野木遺跡北地区の調査区内で検出した竪穴式住居跡について類型化をおこない。その事実に基づいて遺構単位で記述することとする。なお、資料編中の遺構観察表において、以下の類型に基づいて表記している。

A：構造

平面プラン

平面形に関しては、柵状施設や屋外施設等を含まない竪穴部下部の形を抽出した。竪穴部上部については、崩落や攪乱の要素を多分に受けており、類型化が難しいため適用外とした。

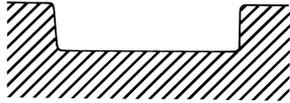


第83図 竪穴式住居跡の平面形模式図

断面プラン

断面形については、土層崩落や攪乱等により住居存続～廃絶時点での状況を呈する資料が少なく、堆積土や壁溝の存在（板壁）の要素を加味しながら類型化した。

a. ほぼ垂直に立ち上がる。



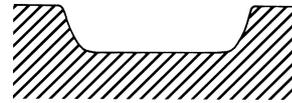
b. 壁上部で緩やかな傾斜が見られる。



c. 壁上部で一部緩やかな傾斜が見られる。



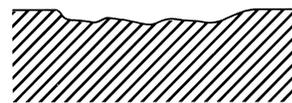
d. 緩やかに立ち上がる。



e. 棚状の段を有する。



f. 凹凸が激しく、壁・床の明確な区別がつかない。

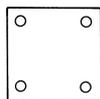


第84図 竪穴式住居跡の断面形模式図

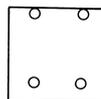
柱穴配置

柱穴配置については、屋外施設に関連する可能性をもつ住居跡も存在するが、住居内のみの配置について類型化した。支柱穴として明確な掘込跡を持つ住居のほか、柱穴がまったく検出されないあるいは、浅いピットが点在する住居跡の検出があった。

a. 4本柱
正方形配置



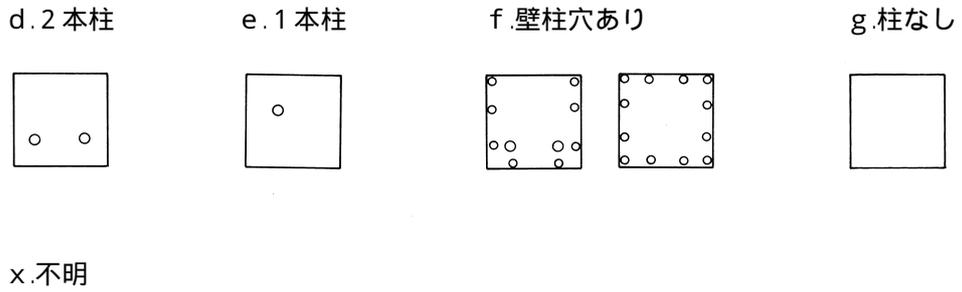
b. 4本柱
長方形配置



c. 4本柱 台形（不整形配置）



第85図 竪穴式住居跡の柱穴配置模式図 1



第86図 竪穴式住居跡の柱穴配置模式図2

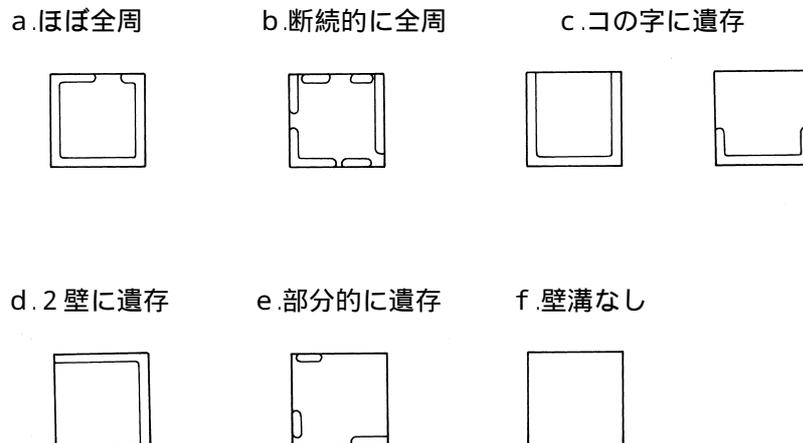
壁溝（周溝）

壁溝（周溝）は、竪穴住居内の湿気抜き・排水設備あるいは板壁の設置痕として捉えることができるが、必ずしも住居内を全周しているとは限らない。板壁設置として捉えた場合、住居のピットと同様地下構造に及ばない状況でも充足できる可能性がある。

また、住居構築時点でカマド構築前に壁溝が掘られ、カマド構築時点でその壁溝が埋められる事例等もあり、壁溝は板壁を設置・非設置に係らず掘り込まれた可能性についても考えられる。

住居の検出状況から、壁溝が板壁設置溝として上部構造について検討可能な資料については、焼失住居で板材の倒落状況が検出したS I - 19だけであり、それ以外については、部分的要素からの検討を余儀なくされた。

類型化にあたっては、下部構造の壁溝の住居内における遺存について以下のように分類した。



第87図 竪穴式住居跡の壁溝配置模式図

屋内施設

住居内では煮炊きを行うカマド等の燃焼施設ならびに、ロクロピット・鍛冶炉等生産関連施設等が見られた。

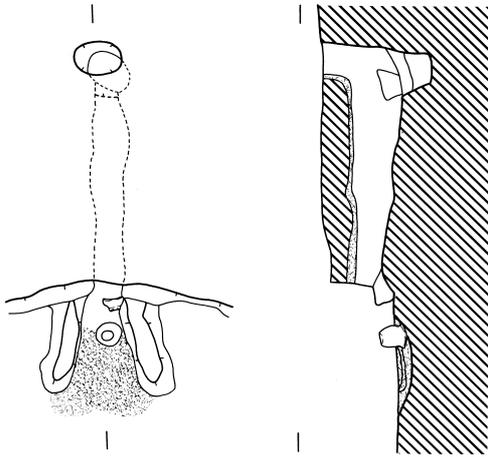
カマド

A. 構造

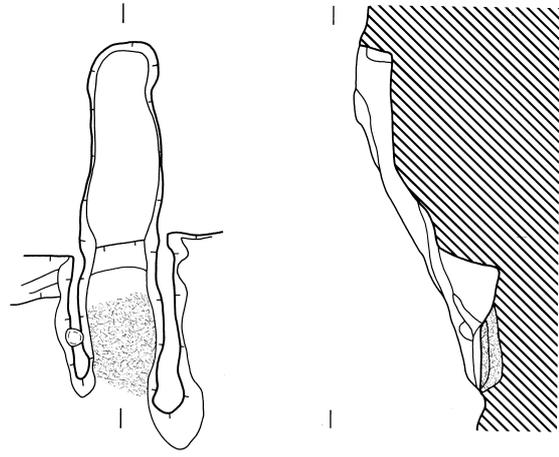
改築・廃絶により焚口・燃焼部が破損・破壊等により情報が欠落しているものが多く見られる。廃棄時点での行為（祭祀等）について考慮する余地はあるが調査時の事由により一定の規準で類型化できなかった。よって、類型化にあたっては、煙道部の構造を中心におこなった。

煙道部の構造

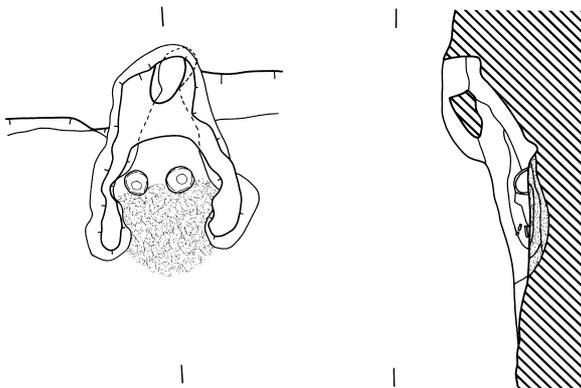
a. 地下式



b. 半地下式



c. 半地下式（簡易型）



g. 情報なし（火焼面のみ）

x. 不明（切り合い等により不明）

第88図 カマドの構造例

構築材

焚口・燃烧部の遺存が良好な事例が少ないため、遺存している袖部ならびにカマド周辺部の遺物出土状況も踏まえると、構築材は自然礫・羽口の転用品・土製の焼成粘土板・柱状粘土塊、土器等を芯材として利用している。また、芯材を使用せず粘土のみによる構築も見られる。

支脚は、袖部の構築材と同様自然礫、羽口の転用品、土器等が利用されている。カマドの中軸線上に位置するものと、2つ支脚が設置されている事例が見られる。燃烧部の開口部の数に起因する。

煙道部については、土層堆積等からほとんどが粘土による構築であり、半地下式の煙道部底面において天井部を支える支柱穴等の検出は見られなかった。

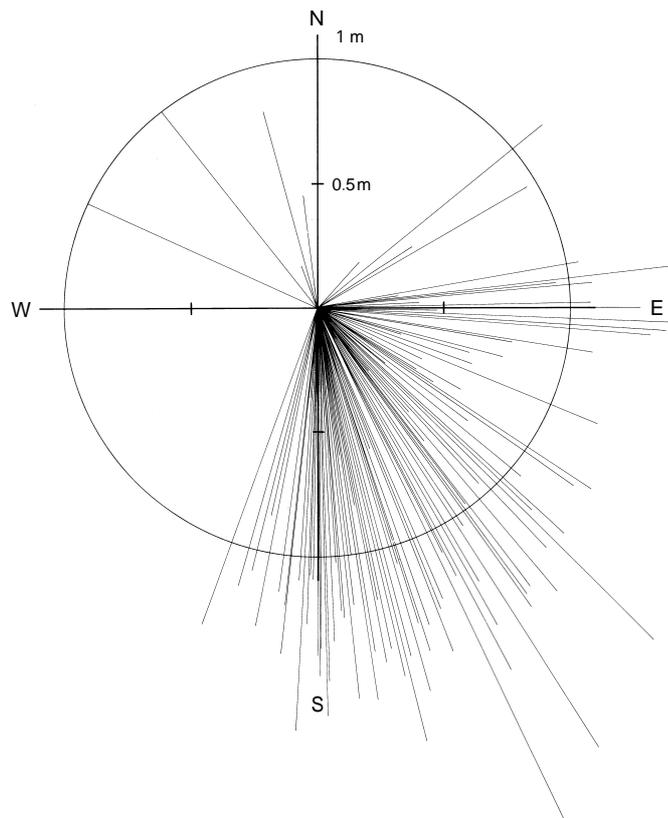
B. カマドの位置

カマドの設置位置については、カマドが設置されている壁を4分割し、カマドの中軸線が4分割した壁のどの部分に位置付けられるかおさえた。本文中において位置の表記は以下の類型化に基づいて表記している。



第89図 カマドの位置類型化凡例

C. 主軸+規模



第90図 カマドの主軸+規模

その他の屋内施設

カマド以外の屋内施設として、主に鉄生産・土器生産関連の設備の一部である炉やピット等を検出した住居跡が見られた。また、壁溝以外にカマド周辺部に排水用の溝が検出した住居跡もある。

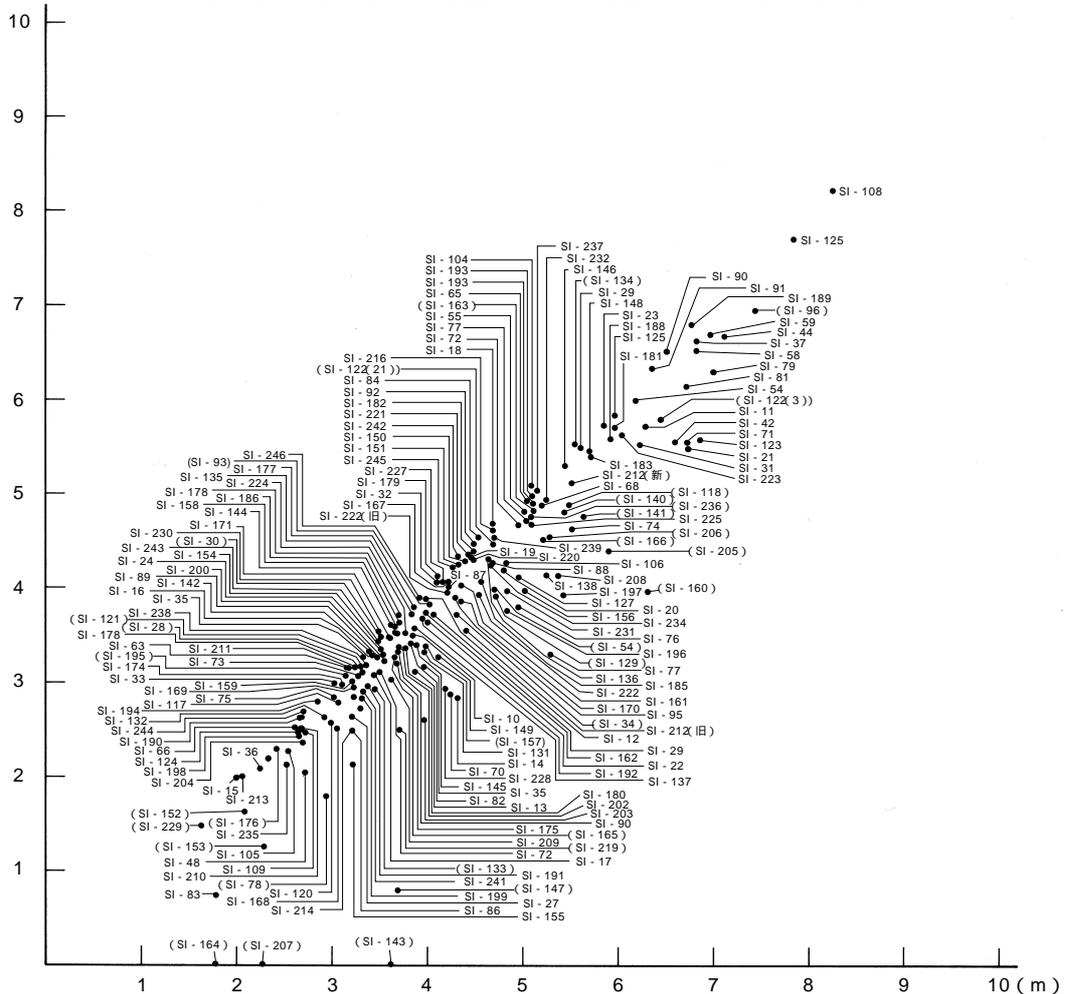
その他、カマドの灰溜ピットや貯蔵穴等に相当すると考えられるピットや土坑が検出した住居がある。沈下等による補修の要素や改築等による補強の要素等もあるが、明確に今回の調査結果から検討するには情報が不足している。記述に際しては、要素として可能性があるものについて取り上げるにとどめた。

屋外施設

屋外施設として、周堤・掘立柱建物跡・外周溝等の施設が付属することが想定されたが、調査時の事由により周堤の有無については確認不可能であった。それ以外の施設については検出事例がある。浪岡町周辺部で数多く検出する外周溝+掘立柱建物跡のセットの住居も2例認められた。ただし、掘立柱建物部については斜面上部の柱穴配置が明瞭でない事例が多く、本遺跡から約7km西方に所在する朝日山(3)遺跡で検出例と類似した検出状況であった。また、外周溝を伴わない掘立柱建物跡のみが付属する住居は3例認められた。

その他、住居を柱穴が囲むタイプの住居(SI-105)や斜面上部に柵列が伴う住居等が認められている。住居外柱穴としての機能が考えられるが、丘陵斜面上に構築されている住居からの検出例が多く、斜面上部からの土砂、雨水等の流入を防ぐ機能について考慮することができる。

B : 住居規模



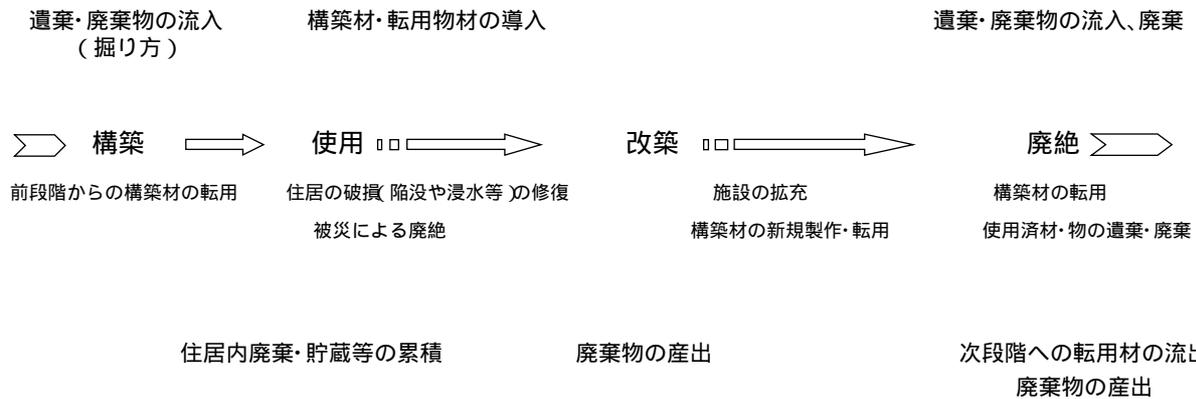
第91図 住居規模

C：廃絶と廃棄状況

現在でもほぼ同様であるが、人々が住居に居住するにあたって、住居そのもののライフサイクルは、不動産物であり流通という要因を除けば土器などと同じように構築（製作） 使用 改築（補修） 廃絶（廃棄） 廃絶後（廃棄後）という過程を繰り返し行うことに終始する。

発掘調査で検出する住居跡は、火災等の被災による使用時そのものでの廃絶を除いて、ほとんどが、廃絶直前後の情報が残った資料が多い。当然のことながら各段階における事象の位置付けも時間的に差異を生じている。

住居のサイクル



住居の廃絶にあたって、構築材等の抜き取り・転用等が想定されるが、柱穴の抜き取り痕が確認された住居跡は少ない。また、焼失住居跡の床面から遺物等がほとんど出土せず、遺棄がされなかった事例が多く確認されている。廃絶にあたって、意図的に家屋の上屋を焼失させたという可能性もあり、その取り扱いについては他遺跡の類例も併せ考慮にいれなければならない。

カマドに関しては、廃絶の時点で祭祀行為等による意図的破壊という行為の可能性もあり、袖部すら遺存しない住居等については構築材そのものを住居外に持ち出し廃棄した可能性についても検討する必要がある。

上屋構造が無くなった時点での廃絶過程については土層堆積と廃棄された遺物の出土状況を併せて考慮すべきであるが、調査時の遺物の取り上げ方法で床面・床直中心でそれ以外は覆土一括処理という方法を行ったため厳密な意味で廃絶過程に伴う遺棄・廃棄行為を直接裏付ける資料提示が全資料を通じて提示することが不可能であった。そのため、遺構間接合や廃棄行為について特筆された住居についてのみ資料提示という形となった。

住居の土層堆積において自然崩落の可能性を除いた住居中央部床面上に地山土中心の堆積を示す例については、基本的に埋め戻し行為等人為的堆積とした。

遺物の廃棄については上屋構造が無くなった初期の段階（廃絶直前後）の遺棄・廃棄資料が床面・床直出土として取り扱っている資料にあたる。また、廃絶後から竪穴部が埋まりきる時点までの資料については覆土一括として取り扱った資料が主である。そのため、出土遺物の要因が流入によるものなのか廃棄によるものか明確に判断ができない。廃絶後の住居は、竪穴部が埋まりきるまで窪地として廃棄の場所として利用された事例が見られる。住居覆土中層において多量に土器等が廃棄された一括資料として捉えられる資料については数例のみの検出であった。

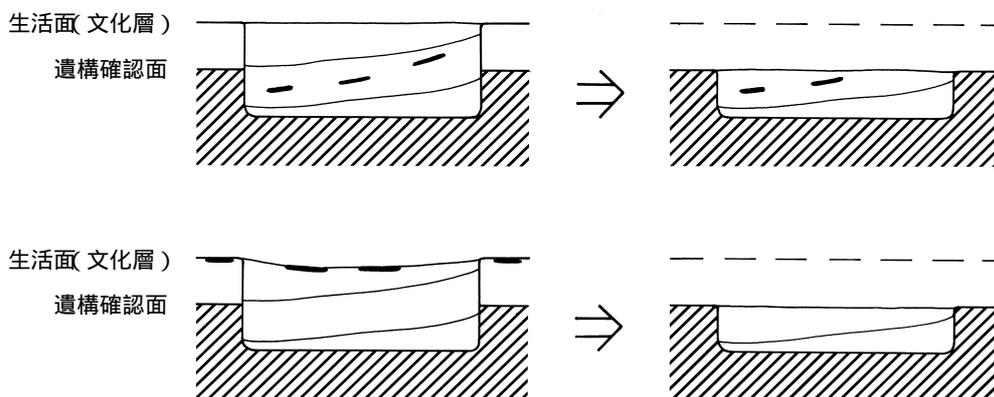
D：堆積土

住居廃絶後の堆積土は、崩落、流入等による自然堆積、埋め戻し・廃棄行為等人為的な堆積状況が想定されるが、本遺跡内に構築された竪穴式住居は、ある程度の継続性を持つ空間の中で、建築 使用 廃絶のサイクルが繰り返されたことが考えられ、埋め戻しによる人為堆積状況が多く見られた。また、埋まりきらない落ち込み部分に廃棄行為を行うケースも見られ、遺物と一緒に焼土粒や炭化粒等が多く包含し検出したケースが見られた。

青森県内の遺跡で平安時代の実年代の指標として認知されてきた十和田 a 火山灰（T o - a 火山灰）、白頭山 - 苫小牧火山灰（B - T m火山灰）2種類の火山灰については、本遺跡の調査が表土処理をされた後から遺構精査を行った平安時代の生活面の情報が欠落した遺構確認面（地山まで下げた部分）からの調査であるため、火山灰が降下した時点で穴や窪地など落ち込んでいた部分では、火山灰の堆積状況が容易に確認できるのであるが、平安時代の生活面レベル上に堆積した火山灰は、例え遺構の廃絶から埋没が火山灰の降下時点より前に埋まりきる状況であったとしても、精査時点では既に飛ばされているため火山灰の検出は確認できずに、時期を想定する時点で降下後の取り扱いとしてしまうような問題点が想定されたこと。S I - 37のB - T m火山灰の検出状況で、床面から汚染されたB - T m火山灰が検出し、堆積層からB - T m火山灰が層状に検出する例が認められ、一部の報告書等で触れられているような遺構の年代決定における火山灰に対する依存の危険性（青森県教育委員会 1998 第234集）について裏付ける資料となり得たこと。

以上の二点から本報告書では具体的な年代の指標とはせず、検出した事実を記述するのみにとどめた。

ただし、S I - 37のようなケースは、他の遺構ではサンプル検出の条件が整わず、かならずしも比較対照可能な資料ではなく、火山灰の参考値事由として絶対的ではないが、いずれにせよ年代観の設定については遺構・遺物の検出・堆積・出土状況等を総合的に解釈すべきであり、単独の要素に依存しすぎる解釈は、危険極まりないことである。



第92図 火山灰検出状況模式図

S I - 10 (第93図)

[位置] グリッドL I - 286・287、L J - 287で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 台形を呈し、384×350×75cmを測る。床面積は13.087㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁25cm、東壁60cm、南壁68cm、西壁35cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、若干起伏を持つ。床面は比較的堅緻である。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁4(78:22)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅44cm、煙道長98cmを測る。主軸はN-143°-Eである。燃烧部の構築は粘土によるもので、天井は第6層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道部天井についても燃烧部と同様に崩落した堆積状況を呈し、第4層が相当する。煙道は住居壁際から30°の角度で立ち上がり、煙出部付近で角度を5°に変え、やや窪んだ形状で立ち上がる。煙出奥壁はほぼ垂直に近い形で立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 6層に分層した。一部壁の崩落が生じた堆積で、暗褐色土系の土によって埋没している。上層に堆積する第1～3層についてはロームブロック、炭化物等を含み一部埋め戻し等による人為的要因が加わった可能性が考えられる。

(木村)

S I - 11 (第94～96図)

[位置] グリッドL S・L T - 285・286で検出した。

[重複] なし。

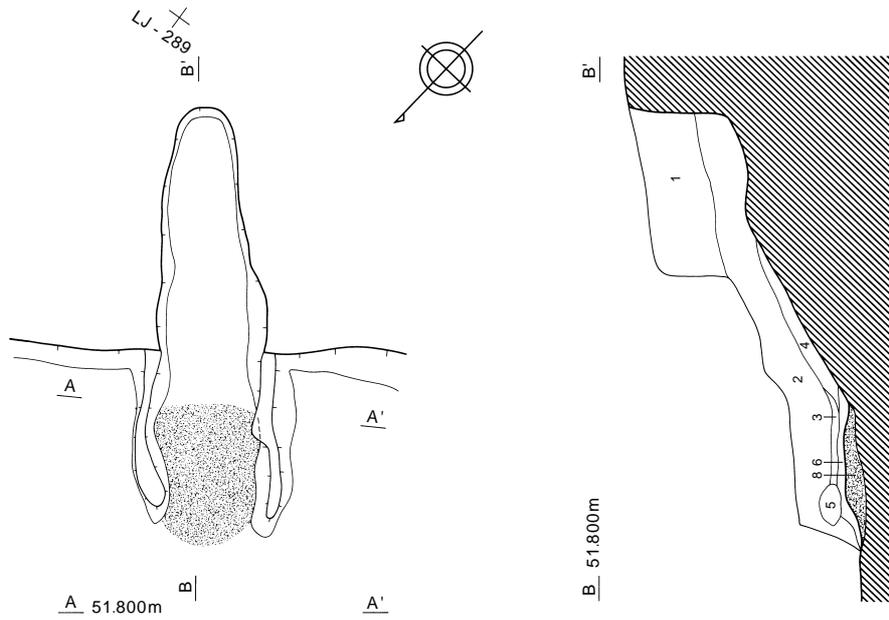
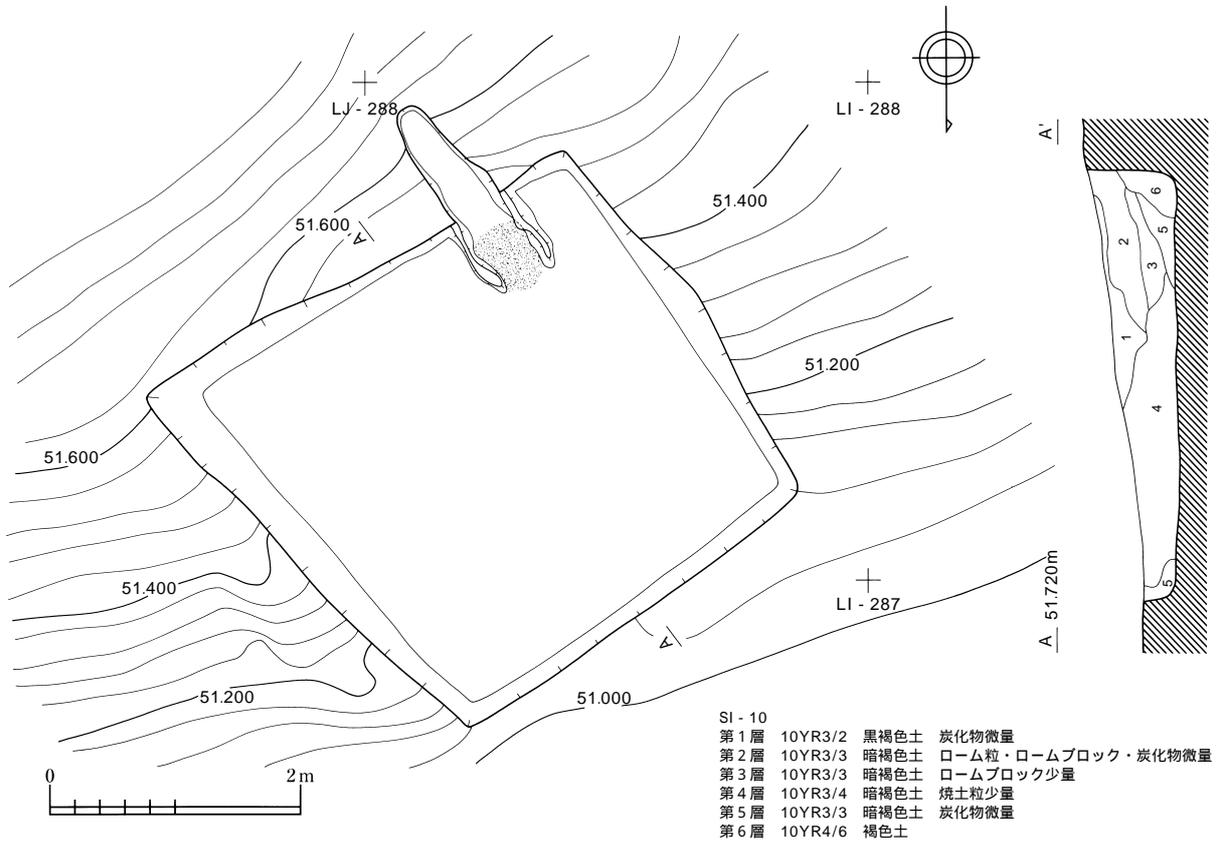
[平面形・規模] 方形を呈し、628×578×66cmを測る。床面積は35.048㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁50cm、東壁50cm、南壁66cm、西壁37cmを測る。断面形はcで、局所的にやや内傾がかった傾斜で立ち上がるが、全体的に外傾しながら立ち上がる。壁面は堅緻である。

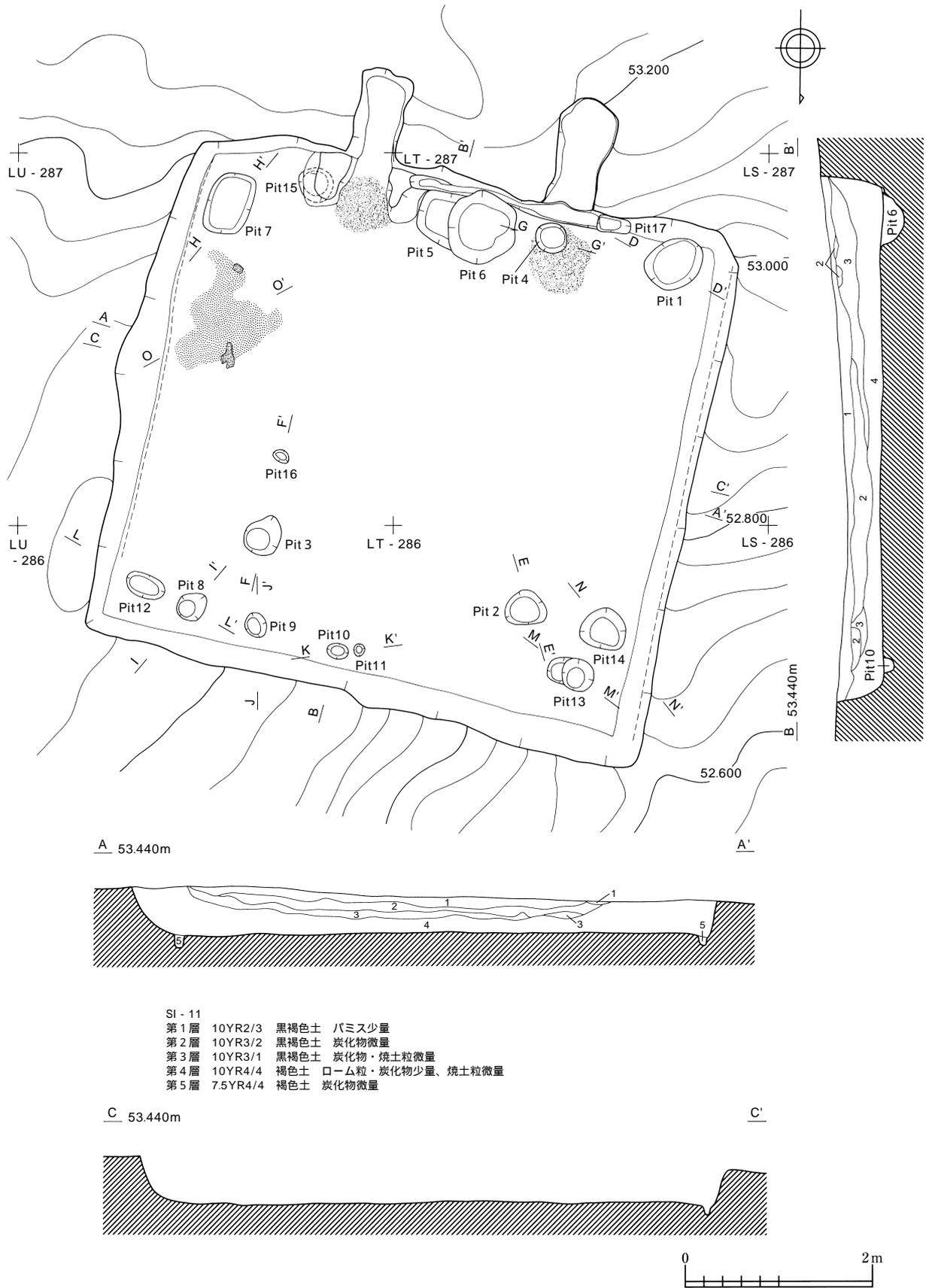
[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、若干起伏を持つ。床面は比較的堅緻である。また、東壁側の床面から、炭化材が伴う赤化面を120×110cmの範囲で検出した。

[壁溝] 東西壁ならびに南壁の一部から検出した。深さは15cmを測る。

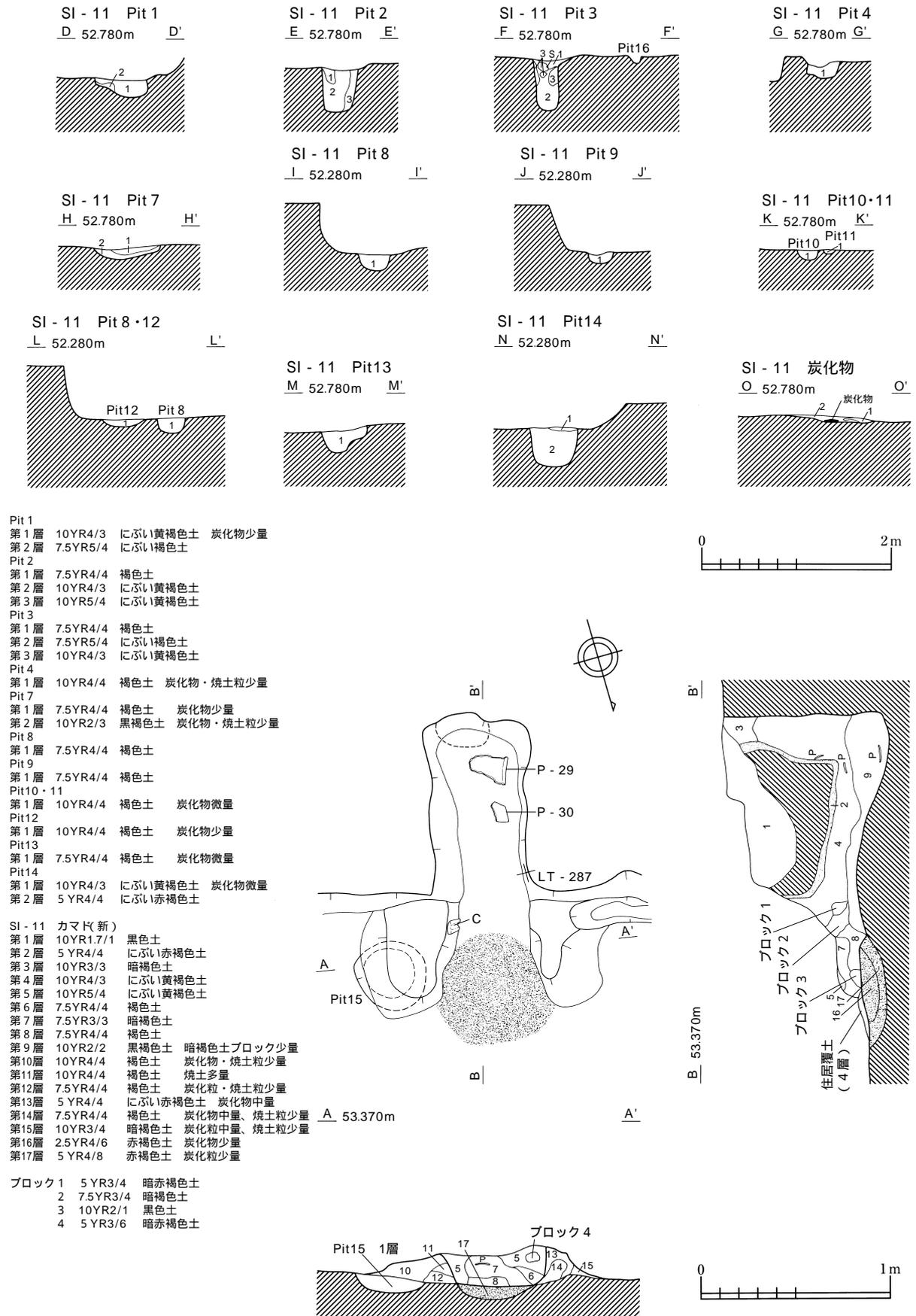
[ピット] 住居内から17基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 63×51×19cm、Pit 2 = 45×37×47cm、Pit 3 = 45×38×53cm、Pit 4 = 35×28×18cm、Pit 5 = (33)×56×13cm、Pit 6 = 79×72×30cm、Pit 7 = 71×47×12cm、Pit 8 = 34×29×17cm、Pit 9 = 27×23×11cm、Pit 10 = 23×16×10cm、Pit 11 = 14×11×5cm、Pit 12 = 44×25×8cm、Pit 13 = 35×35×28cm、Pit 14 = 48×48×41cm、Pit 15 = 38×37×9cm、Pit 16 = 19×13×8cm、Pit 17 = 37×12×34cmを測る。主柱穴として機能したと考えられるピットはPit 1、2、3、14、15、17でカマドの改築に伴って、柱穴の位置が変えられた可能性が考えられる。



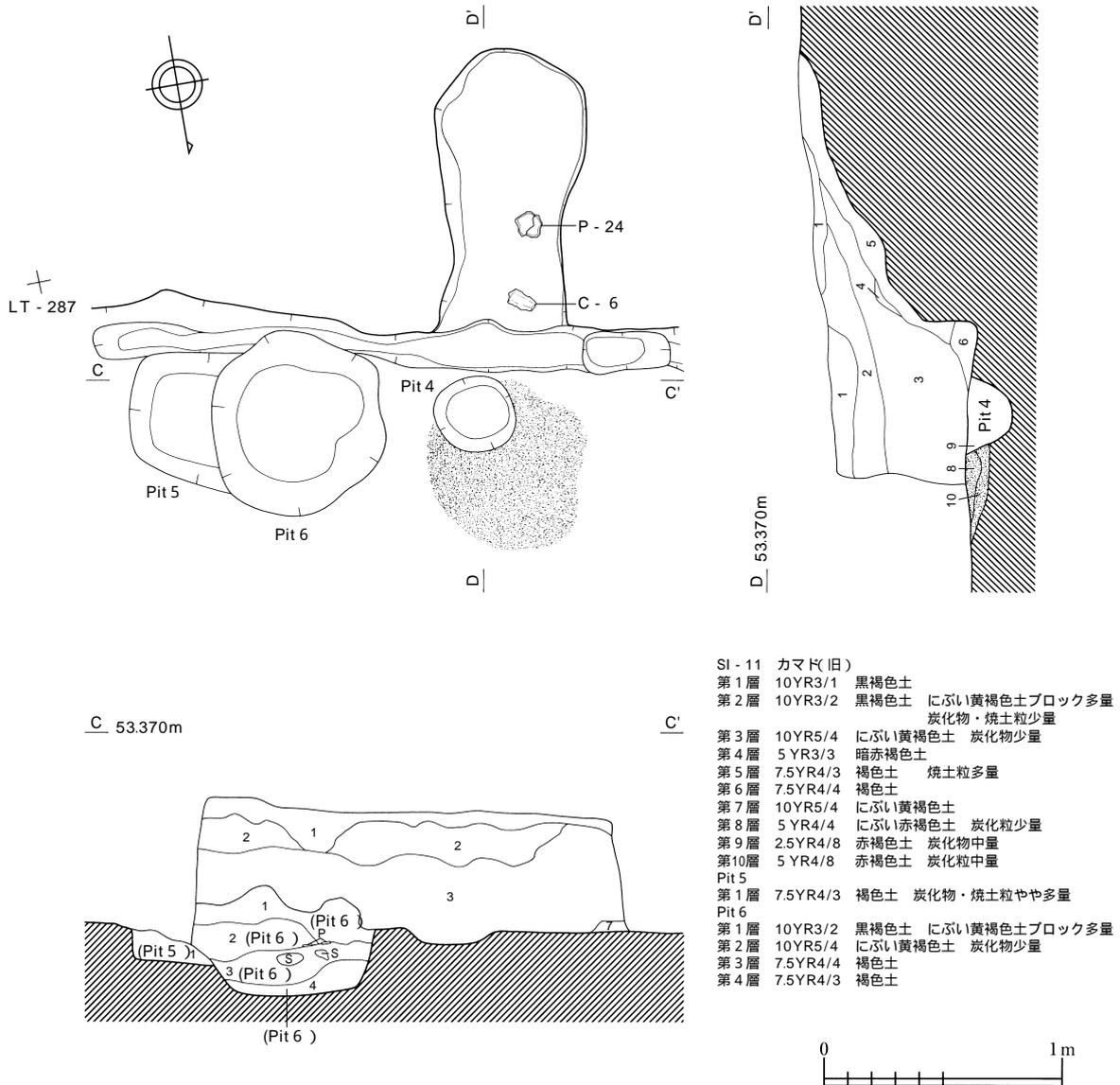
第93図 SI - 10



第94図 SI - 11



第95図 SI - 11



第96図 SI - 11

[カマド] 住居南壁側から2基検出した。南壁2(30:70)と南壁3(67:33)の位置から検出している。新旧関係は、南壁2>南壁3の関係である。南壁2側のカマドの構造は、地下式で、袖部幅は130cm、煙道長は90cmを測る。主軸はN-169°-Wで南壁3のカマドの主軸と同軸である。袖部は粘土により構築されており、芯材は検出していない。また、粘土ブロックとして天井部の土層が焚口付近に堆積しており、焚口付近のカマドの破壊が行われた可能性がある。煙道部については土圧による崩落が生じており、煙出付近の煙道から土器の出土が若干あったが人為的廃棄等は見受けられず、自然堆積である。煙道部底面の傾斜は焚口から10°の角度で立ち上がり、途中で煙出部にかけて15°の角度で傾斜する。煙出部底面はやや湾曲している。

南壁3のカマドの構造は、半地下式で、焚口では袖部・天井部とも遺存しておらず、煙道長は120cmを測る。主軸はN-169°-Wで南壁2のカマドの主軸と同軸である。煙道部は壁側から50°の角度で立ち上がり、途中でやや平坦がかり、中央付近から25°の角度に傾斜を変え立ち上がったあ

と、煙出部に向かってほぼ平坦な角度で立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 5層に分層した。第4層に焼土粒・炭化物等が混入する褐色土主体の土層が住居中央部付近で12cm、壁際で50cm堆積しており、埋め戻し等による人為的堆積状況を呈する。

(木 村)

S I - 12 (第98図)

[位 置] グリッドL I・L J - 291・292で検出した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、398×386×105cmを測る。床面積は14.96m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁42cm、東壁97cm、南壁55cm、西壁45cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で外傾しながら立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、若干起伏を持つ。床面は堅緻である。床面から全般的に2～5mmの炭化粒を検出した。

[壁 溝] 住居内を全周する形で検出した。深さは平均10cmを測る。

[ピット] なし。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(68:32)の位置から検出している。カマドの構造は、半地下式で、袖の遺存状態は良くないが、袖部幅50cm、煙道長103cmを測る。主軸はN - 166° - Wである。支脚として土師器椀を倒置している。袖部は、粘土により構築されているが、右袖側の一部が壊されており、周辺から芯材として利用可能な羽口の出土があったことから、一部構築材として羽口の利用の可能性が考えられる。土層堆積において燃烧部天井ならびに煙道部天井の土層は第7層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道部は住居壁側では50°の角度で立ち上がり、途中で26°に傾斜を変え、煙出部ではほぼ平坦な角度を呈する。

[その他の付属施設] 住居中央部から154×112×12cmの浅い土坑状の落ち込み1基を検出した。覆土中に炭化物、焼土粒等が含まれる。

[堆積土] 8層に分層した。暗褐色・褐色土主体の堆積でロームブロック、炭化物が混入する。埋め戻し等による人為的堆積状況を呈する。

(木 村)

S I - 13 (第98、99図)

[位 置] グリッドL I - 292・293で検出した。

[重 複] なし。

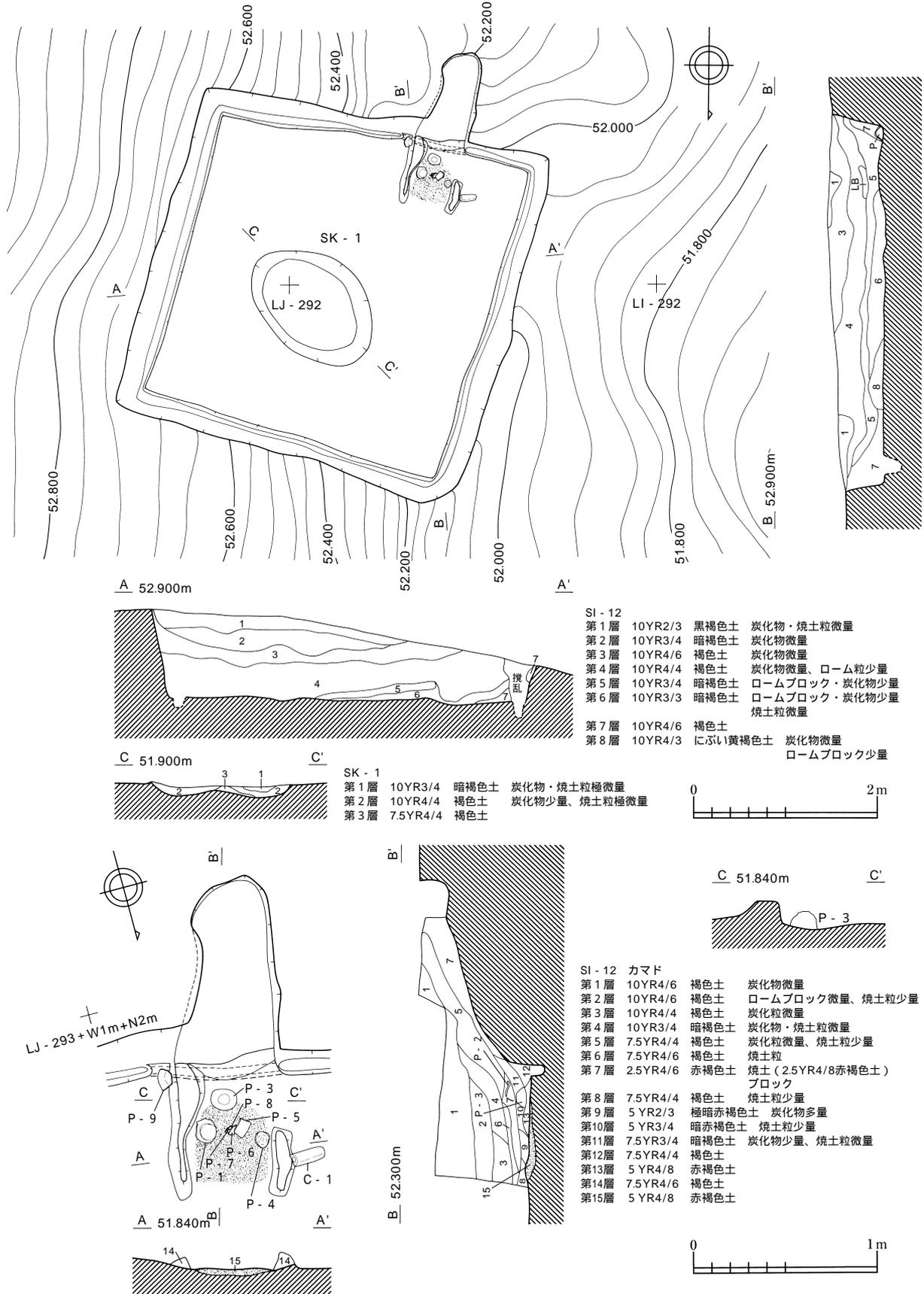
[平面形・規模] 長方形を呈し、386×318×93cmを測る。床面積は12.233m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁62cm、東壁87cm、南壁80cm、西壁48cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で外傾しながら立ち上がる。壁面は堅緻であり、特にカマド周辺部は硬化している。

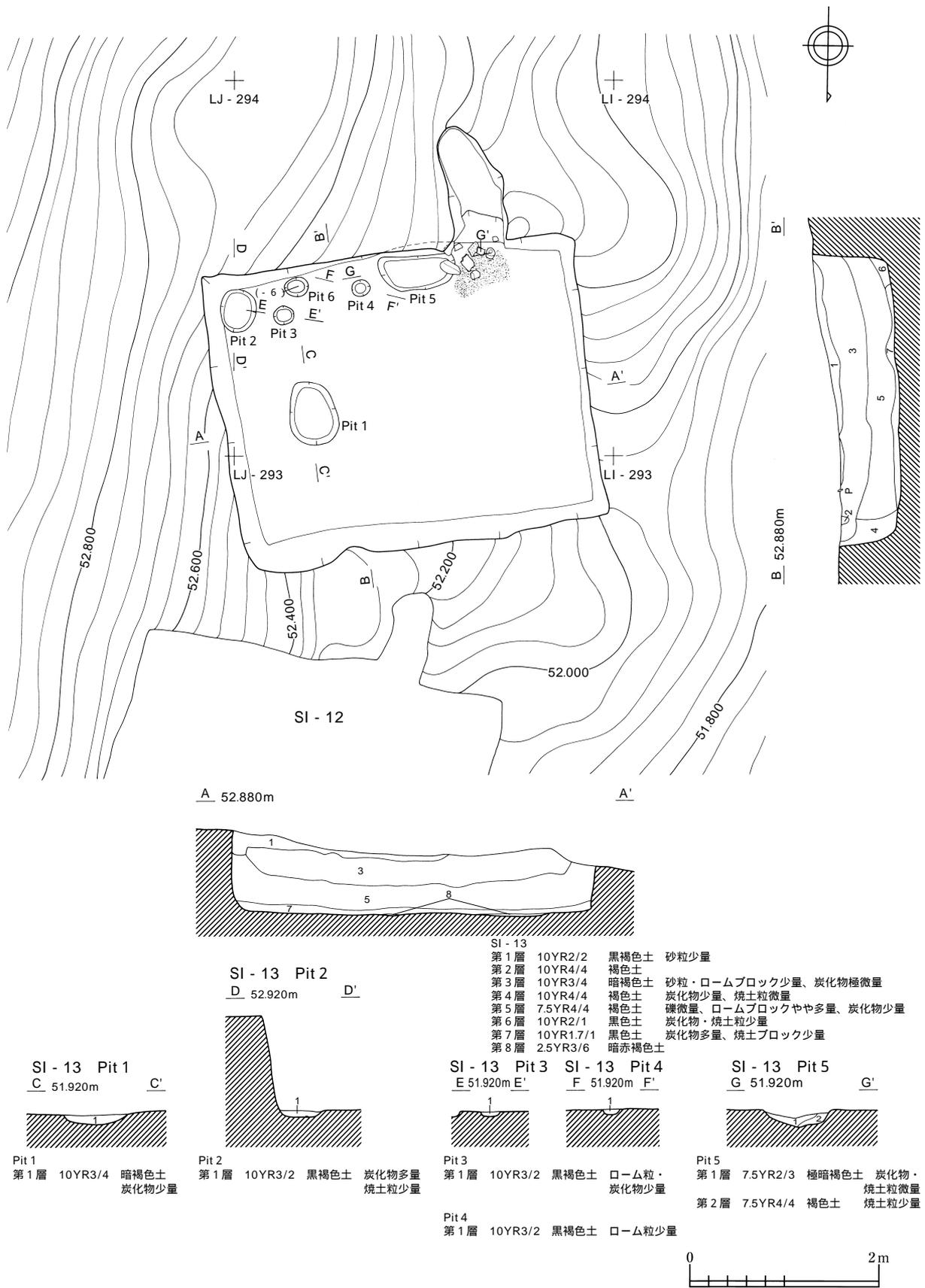
[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面は堅緻である。また、床面中央部から北西側から赤化面を295×275cmの範囲で検出した。

[壁 溝] なし。

[ピット] 住居内から6基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 69×50×10cm、Pit 2 = 45×38×



第97図 SI - 12



SI - 13 Pit 1
C 51.920m C'

Pit 1
第1層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物少量

SI - 13 Pit 2
D 52.920m D'

Pit 2
第1層 10YR3/2 黒褐色土 炭化物多量 焼土粒少量

SI - 13 Pit 3 E 51.920m E'

Pit 3
第1層 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒 炭化物少量

SI - 13 Pit 4 F 51.920m F'

Pit 4
第1層 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒少量

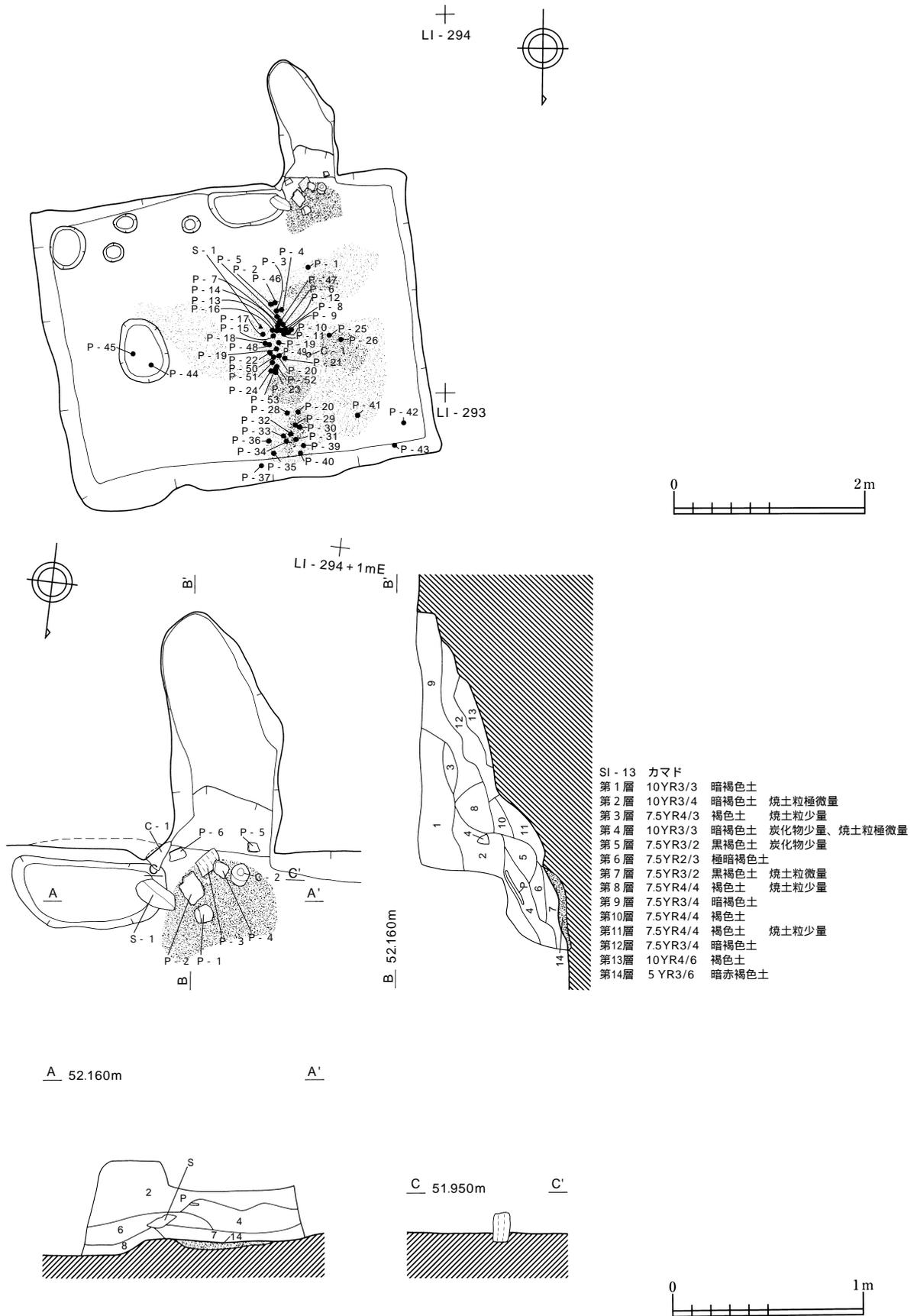
SI - 13 Pit 5 G 51.920m G'

Pit 5
第1層 7.5YR2/3 極暗褐色土 炭化物・焼土粒微量
第2層 7.5YR4/4 褐色土 焼土粒少量

SI - 13
第1層 10YR2/2 黒褐色土 砂粒少量
第2層 10YR4/4 褐色土
第3層 10YR3/4 暗褐色土 砂粒・ロームブロック少量、炭化物極微量
第4層 10YR4/4 褐色土 炭化物少量、焼土粒微量
第5層 7.5YR4/4 褐色土 礫微量、ロームブロックやや多量、炭化物少量
第6層 10YR2/1 黒色土 炭化物・焼土粒少量
第7層 10YR1.7/1 黒色土 炭化物多量、焼土ブロック少量
第8層 2.5YR3/6 暗赤褐色土



第98図 SI - 13



第99図 SI - 13

7 cm、Pit 3 = 22 × 21 × 5 cm、Pit 4 = 19 × 18 × 5 cm、Pit 5 = 82 × 37 × 14 cm、Pit 6 = 25 × 21 × 6 cmを測る。いずれのピットも比較的浅く、住居南壁側に集中しており、支柱穴としての機能を充足し得るものはないと考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁4(75:25)の位置から検出している。カマドの構造は、半地下式で、袖部は残存しておらず、また、煙道部についても軸線が途中でやや東よりに屈曲している。煙道長は127cmを測る。主軸はN - 175° - Eである。支脚として羽口を転用している。土層堆積において煙道部天井部の土層は第3層が相当し、部分的に遺存した状況を呈している。燃焼部は天井ならびに袖が土層堆積において確認できず、また、礫・土器等が散逸した状況で出土したことからカマドを意図的に破壊したものと考えられる。煙道部は、住居壁側から40°の角度で立ち上がり途中15°に角度を変え、やや段を持ちながら立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 8層に分層した。床面直上の第8層ならびに第7層は、第8層が焼土層、第7層が焼土ブロックを少量、炭化物を多量に含む土層で床面の赤化面を併せて焼失住居である。ただし、カマド廃棄の状況を踏まえると住居廃絶時点での意図的焼失という可能性がある。第7層上位の第5層は褐色土主体の土層堆積で埋め戻し等による人為的堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 14 (第100、101図)

[位置] グリッドL I - 294・295で検出した。

[重複] S I - 15と重複している。新旧関係については、S I - 15の堆積土を本遺構が切っており本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 不整形を呈し、420 × 298 × 77cmを測る。南壁側ならびに西壁の一部が攪乱により形状が張り出している。床面積は9.915m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁23cm、東壁45cm、南壁70cm、西壁16cmを測る。断面形はcで、S I - 15との切り合い部分については、壁上面でやや緩やかな立ち上がりを持つ。壁面は、切り合い部分を除いて地山を壁面としており、保水量が高くやや脆弱である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、若干起伏がある。床面は壁面と同様保水量が高くやや脆弱である。

[壁溝] なし。

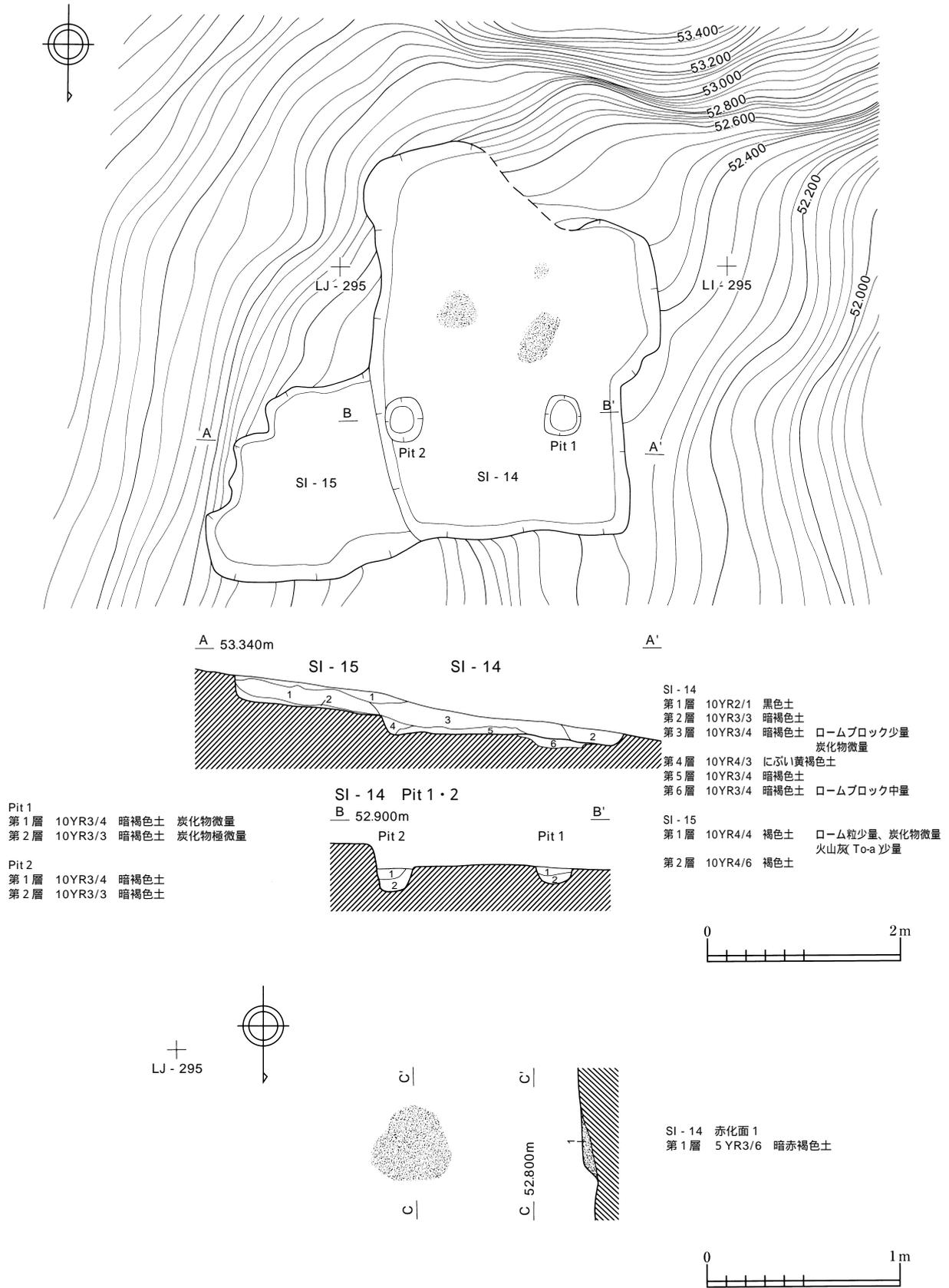
[ピット] 住居内から2基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 43 × 37 × 18cm、Pit 2 = 46 × 39 × 25cmを測る。柱間は5.5尺で、それ以外にピット等の検出は見られなかった。

[カマド] 南壁側が攪乱等により不明瞭で、カマドそのものの検出は認められなかったが、南壁側床面から赤化面を3ヶ所検出した。赤化面の範囲は、42 × 39cm、18 × 14cm、57 × 31cmを測る。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 6層に分層した。第6層は小規模な落ち込みに相当する。東壁際に堆積する第4層は、月見野火山灰層ベースの堆積土でS I - 15の重複部分のみから堆積が確認されており、重複部分の脆弱な壁面に貼り付けたロームが崩落した可能性が考えられる。自然堆積状況を呈する。

(木村)



第100図 SI - 14 ・ 15

S I - 15 (第100図)

[位置] グリッドL I・L J - 294から検出した。

[重複] S I - 14と重複している。新旧関係については、S I - 14の堆積土に本遺構が切られており、本遺構が古い。

[平面形・規模] 不整形を呈し、200×200×37cmを測る。東壁の南側部分がクランク状を呈する。床面積は、残存で3.24㎡を測る。

[壁] 切りあいのため、全容は不明であるが、北壁31cm、東壁28cm、南壁18cmを測る。断面形はaで、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。壁面は、S I - 14と同様地山を壁面としており、保水量が高く、やや脆弱である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、西壁にかけてやや傾斜している。床面は、壁面と同様保水量が高く、やや脆弱である。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[カマド] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 切りあいのため、全容は不明であるが、残存部分について2層に分層した。床面直上に堆積する第2層は大谷火山灰層ベースの地山土で、その直上に堆積する第1層については、同様の地山土にローム粒、T o - a火山灰、炭化粒等が混入する堆積土であった。埋め戻し等による人為堆積状況を呈し、S I - 14構築段階との関連性の可能性がある。

(木村)

S I - 16 (第102、103図)

[位置] グリッドL K・L L - 293・294で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、342×329×77cmを測る。床面積は11.309㎡である。

[壁] 壁高は、東壁70cm、西壁41cmを測る。断面形はaで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。住居西半に掘り方をもち、砂質ロームを混入するにぶい褐色土が充填されている。

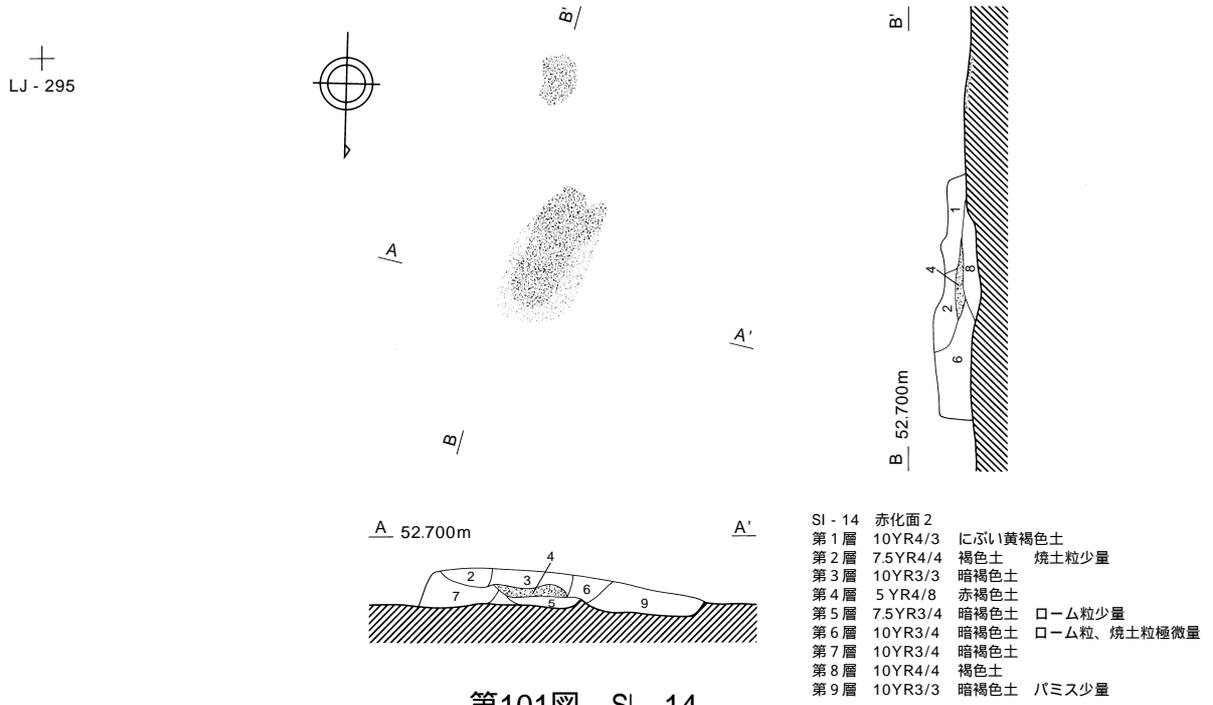
[壁溝] なし。

[ピット] なし。竪穴内北東側より1基検出した。規模は78×61cmである。

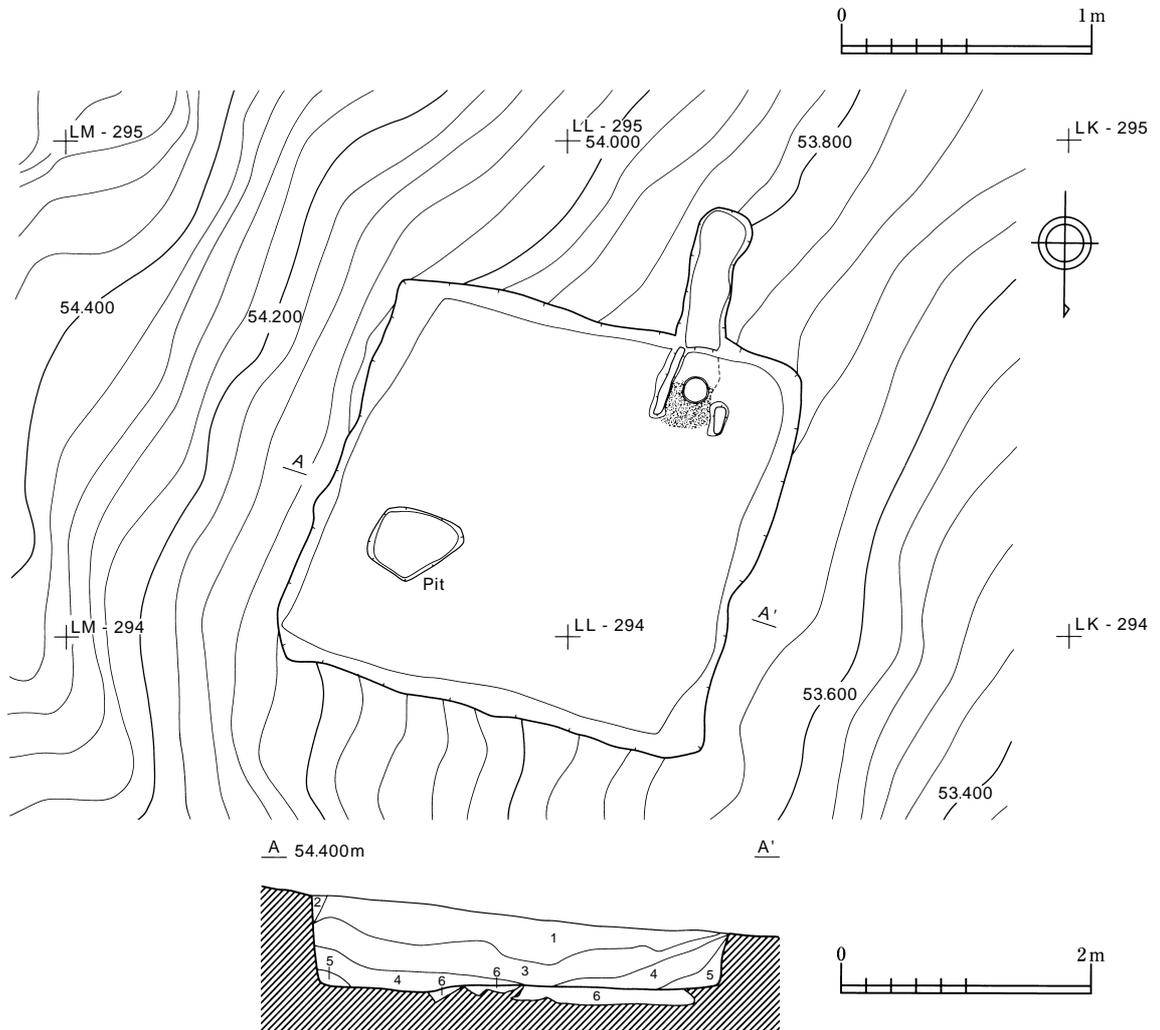
[カマド] 住居南壁3(78:22)の位置から1基検出した。構造は半地下式であり、燃烧部から煙道に至る部分に10cm程度の段を有し、そこから10°の角度で立ち上がり、煙出部付近でやや落ち込む。袖部幅42cm、煙道長115cmを測り、主軸はN - 172° - Wである。袖部は粘土によって構築されており、芯材は検出していない。燃烧部付近に堆積している土層においては、天井部や袖を構成していた粘土ブロック等は確認できなかった。燃烧部に底部を接した状態で甕の下半部が出土した。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方を含めて6層に分層した。下層の壁際には、壁の崩落によると思われる褐色土、中層にはロームブロックを少量混入した暗褐色土、上層にはロームブロックを混入した褐色土を確認でき、



第101図 SI - 14



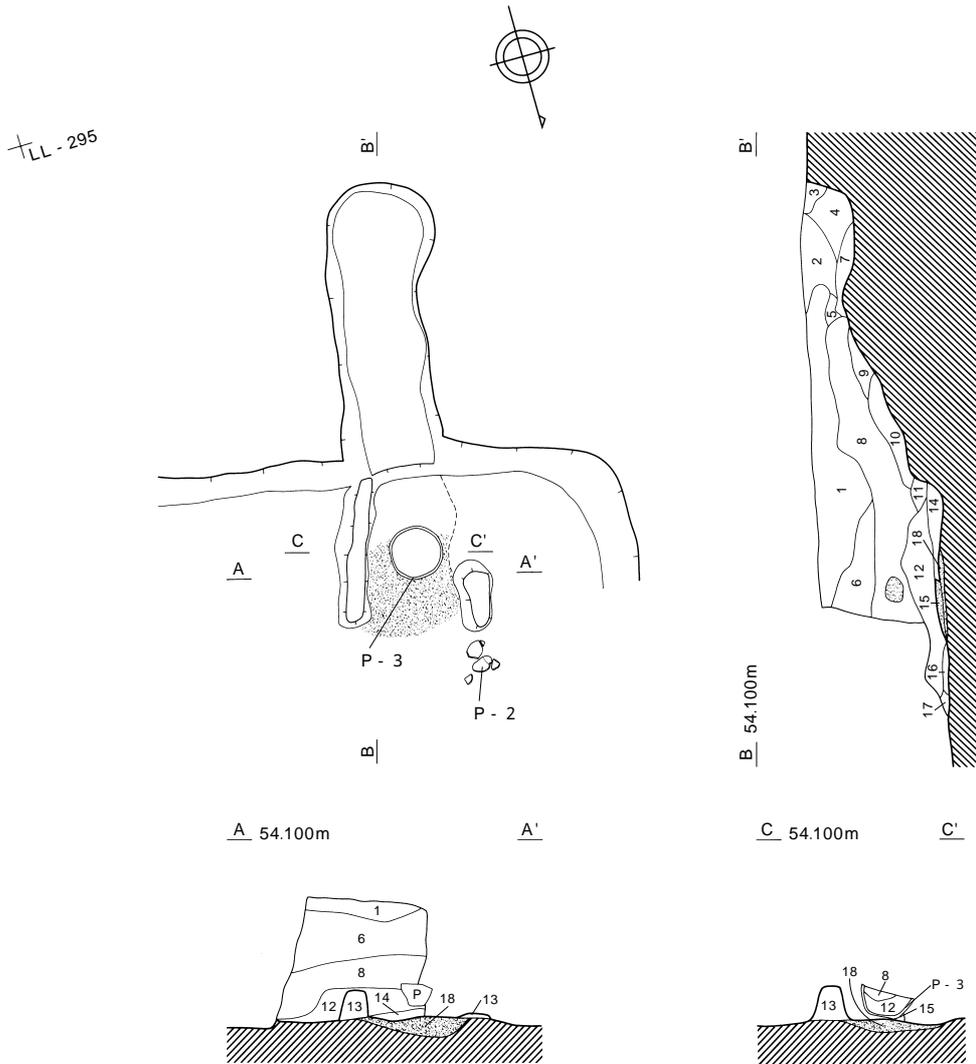
第102図 SI - 16

第 章 平安時代

SI - 16

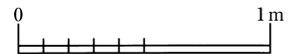
- 第1層 7.5YR3/4 暗褐色土 砂質ロームブロック少量、炭化物少量
- 第2層 10YR4/6 褐色土
- 第3層 10YR3/3 暗褐色土 ロームブロック少量
- 第4層 7.5YR4/4 褐色土 砂質ロームブロック少量
- 第5層 7.5YR3/2 黒褐色土 ローム粒少量
- 第6層 7.5YR5/4 にぶい褐色土 砂質ロームブロック中量、パミス少量

LK - 295



SI - 16 カマド

- 第1層 10YR4/6 褐色土 ロームブロック少量、炭化物微量
- 第2層 7.5YR3/2 黒褐色土 炭化物微量、焼土粒やや多量
- 第3層 7.5YR3/2 黒褐色土 ローム粒やや多量
- 第4層 7.5YR2/2 黒褐色土 炭化物・焼土ブロック微量、焼土粒少量
- 第5層 5 YR4/4 にぶい赤褐色土
- 第6層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック・炭化物・焼土粒少量
- 第7層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒やや多量、焼土粒少量
- 第8層 7.5YR4/4 褐色土 炭化物微量、焼土ブロック・焼土粒少量
- 第9層 7.5YR4/6 褐色土 焼土粒少量
- 第10層 7.5YR4/6 褐色土 焼土粒やや多量
- 第11層 7.5YR4/3 褐色土 焼土ブロック少量
- 第12層 7.5YR4/3 褐色土 焼土粒少量
- 第13層 10YR4/6 褐色土 焼土粒少量
- 第14層 7.5YR4/3 褐色土 焼土粒少量
- 第15層 5 YR4/8 赤褐色土
- 第16層 10YR5/2 灰黄褐色土 炭化物微量、焼土粒少量
- 第17層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化物微量、焼土粒少量
- 第18層 2.5YR4/6 赤褐色土



第103図 SI - 16

レンズ状の堆積状況を呈する。自然堆積を呈すると考えられる。

(設 楽)

S I - 17 (第104、105図)

[位置] グリッドLL・LM - 296で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、 $344 \times 314 \times 75\text{cm}$ を測る。床面積は 10.316m^2 である。住居北東隅からカマド東側にかけて若干の張り出しをもつ。

[壁] 壁高は、北壁55cm、東壁61cm、南壁66cm、西壁42cmを測る。断面形はeであり、壁は垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁溝] なし。

[ピット] カマド東側の壁際において1基検出した。規模は $50 \times 45\text{cm}$ である。

[カマド] 住居南壁3 (64 : 36) の位置から1基検出した。構造は半地下式で、袖部幅50cm、煙道長116cmを測り、主軸はN - 164° - Wである。袖部は粘土によって構築されており、袖の芯材や焚口の天井に据えられていたと考えられる安山岩質の石や羽口が、焚口及び燃焼部付近から出土している。これらの遺物は、土圧により崩れたような出土状況を呈していることから、意図的なカマドの破壊行為は行われていないと考えられる。煙道部は、燃焼部から 40° の角度で立ち上がり、中間部で 20° となり、煙出部付近で平坦になる。煙出部の底部付近から安山岩質の石が出土している。

[その他の付属施設] 住居北西隅から1基 (SK - 1)、東壁中間部付近より1基 (SK - 2)、計2基の土坑を検出した。規模はSK - 1が $165 \times 91 \times 52\text{cm}$ 、SK - 2が $96 \times 64 \times 39\text{cm}$ を測り、両者はともに平坦な底面を有する。両者の堆積土は褐色土の1層であり、人為的な埋め戻しによるものと考えられる。

[堆積土] 6層に分層した。下層から中層に相当する第3・4層は、炭化物を含む褐色土であり、人為的な埋め戻しによるものと考えられる。

(設 楽)

S I - 18 (第106、107図)

[位置] グリッドLN・LO - 294・295で検出した。

[重複] なし。

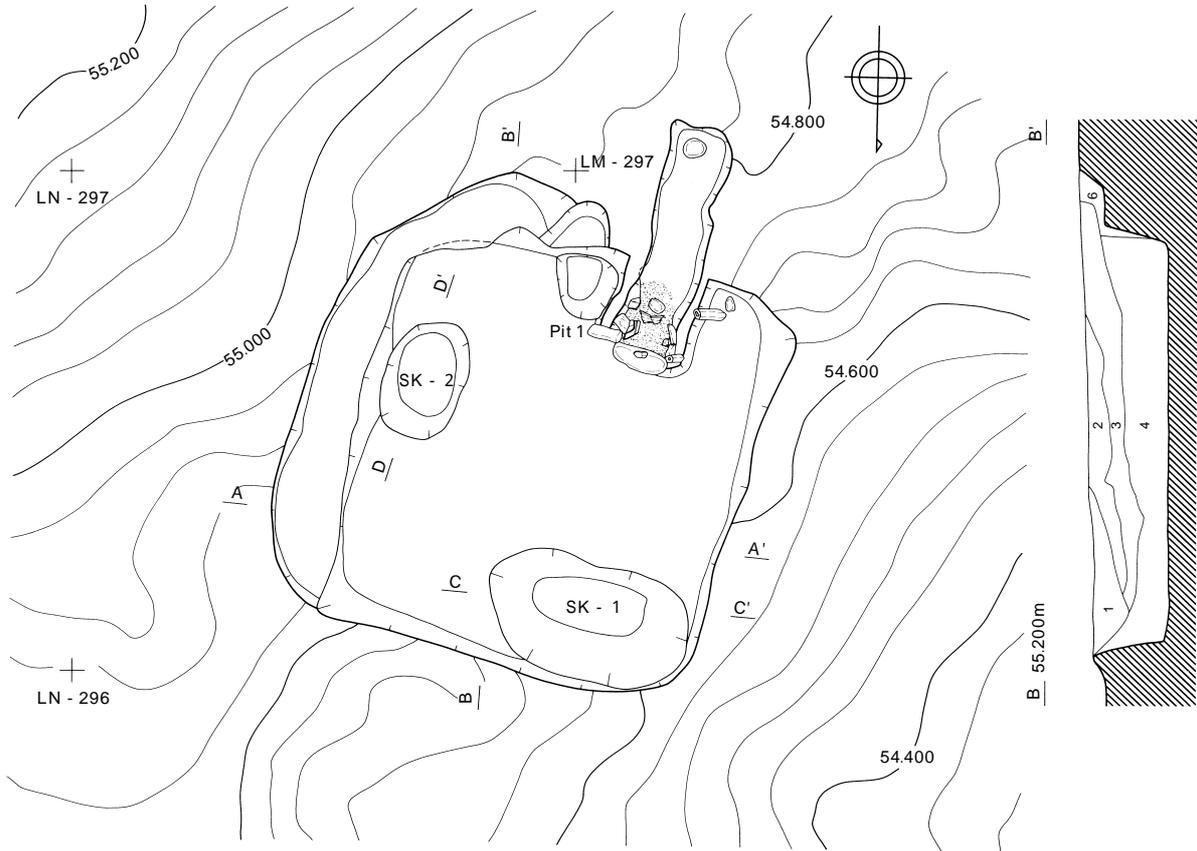
[平面形・規模] 方形を呈し、 $468 \times 466 \times 60\text{cm}$ を測る。床面積は 22.094m^2 である。

[壁] 壁高は、北壁60cm、東壁・西壁56cm、南壁51cmを測る。断面形はaで、やや外傾しながら立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面とし、平坦である。

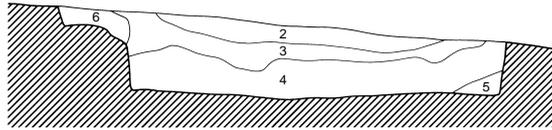
[壁溝] 南壁のカマド西寄りにおいても見られるが、概ね、西壁と北壁の2壁において検出した。深さは平均3cmである。

[ピット] 竪穴内より7基検出した。そのうち、Pit 6はロクロピットと考えられ、住居内の付属施設として特筆されるものであることから、[その他の付属施設]で記述したい。Pit 1 = $40 \times 38 \times 19\text{cm}$ 、



A 55.200m

A'



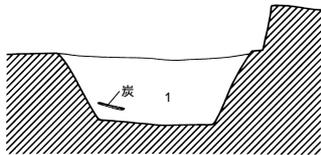
SI - 17

- 第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒・炭化物少量
- 第2層 7.5YR3/4 暗褐色土 炭化物少量
- 第3層 7.5YR4/3 褐色土 炭化物少量
- 第4層 7.5YR4/4 褐色土 炭化物微量
- 第5層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化物微量
- 第6層 10YR4/4 褐色土

SI - 17 SK - 1

C 54.800m

C'



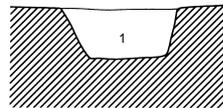
SK - 1

第1層 10YR4/4 褐色土 炭化物・焼土粒少量

SI - 17 SK - 2

D 54.800m

D'

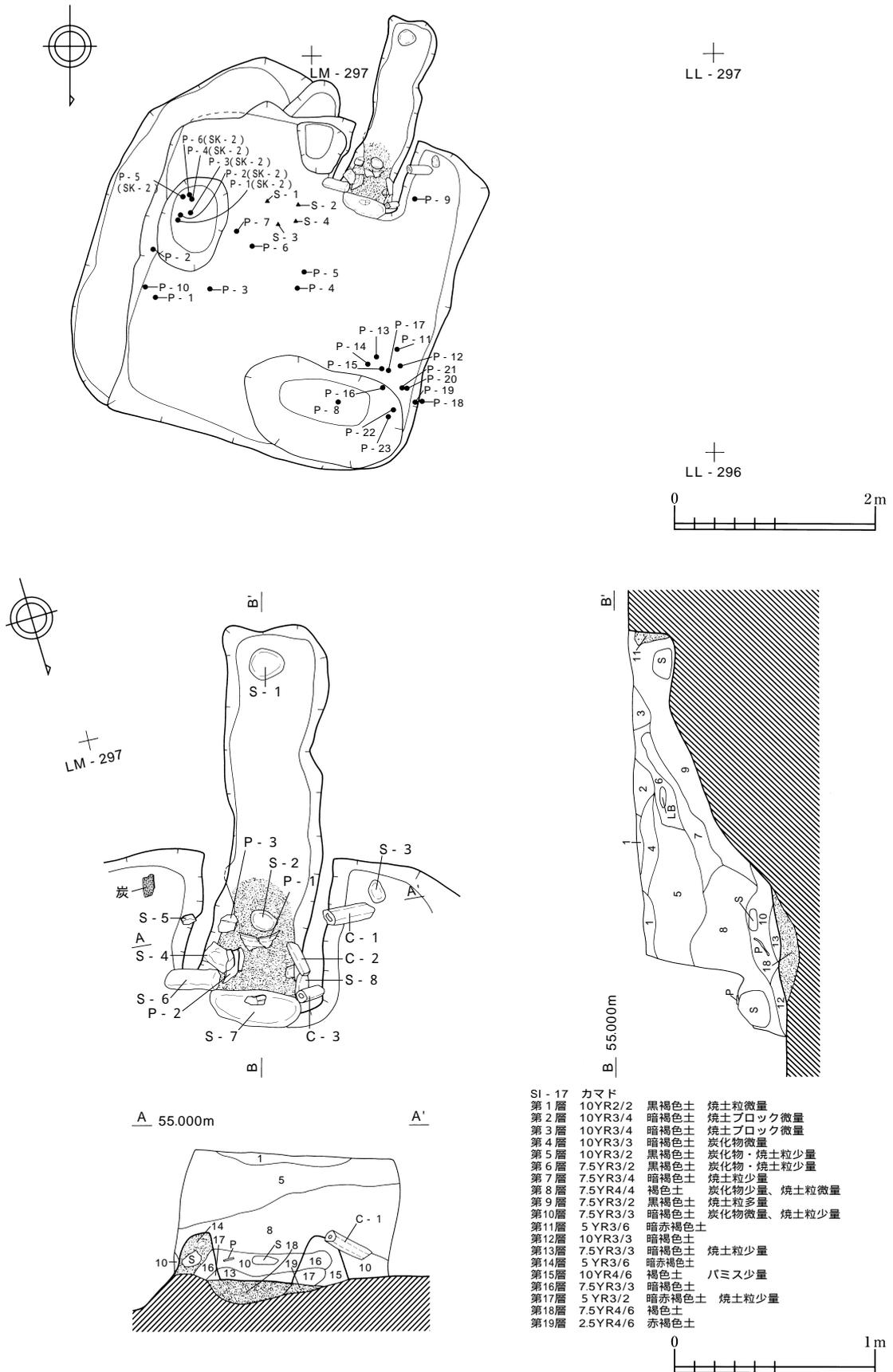


SK - 2

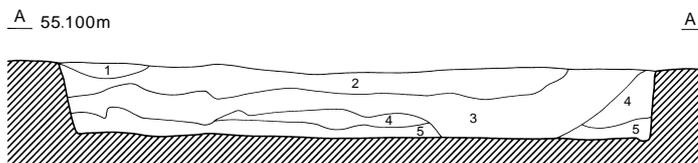
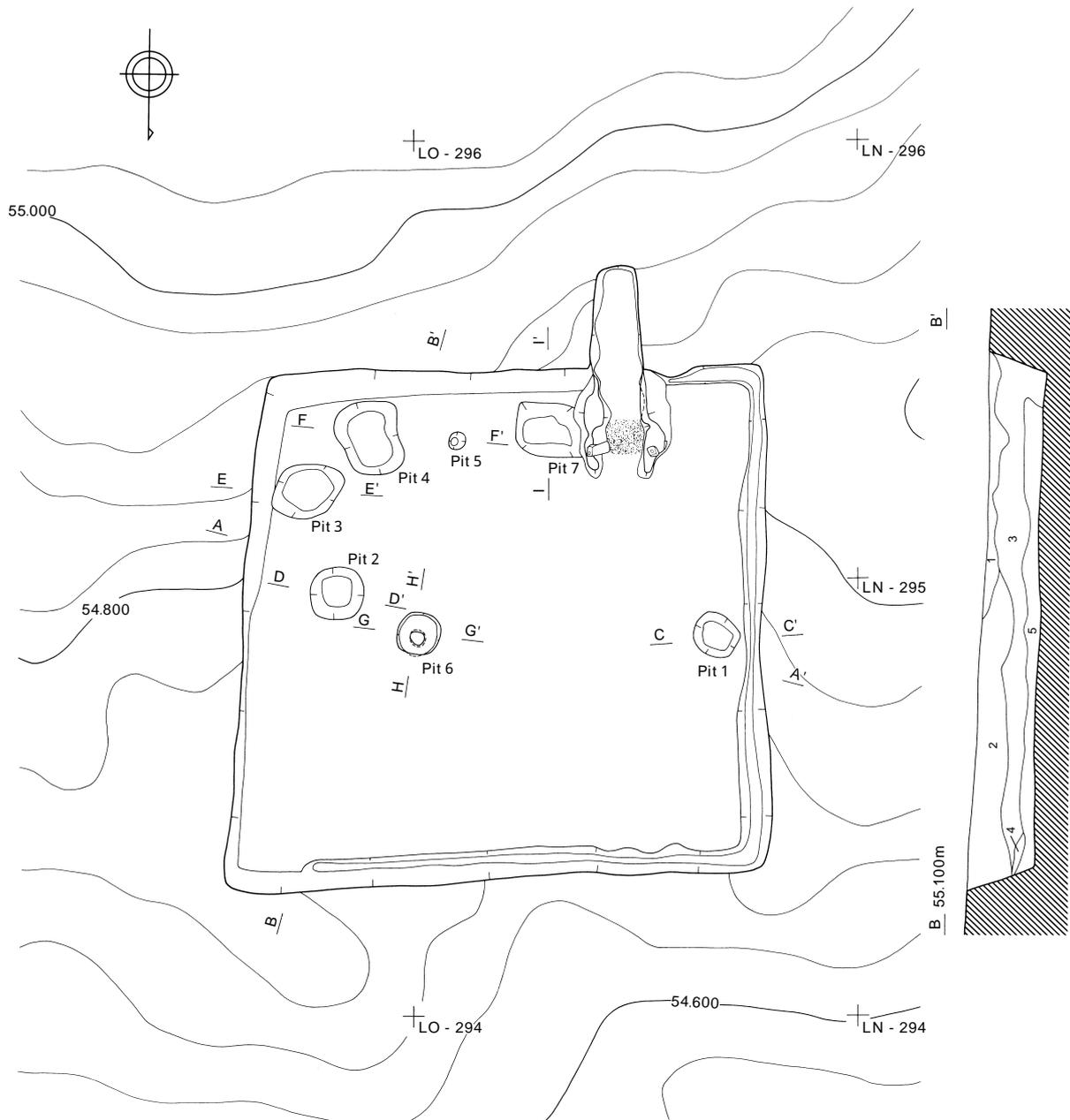
第1層 7.5YR4/4 褐色土



第104図 SI - 17



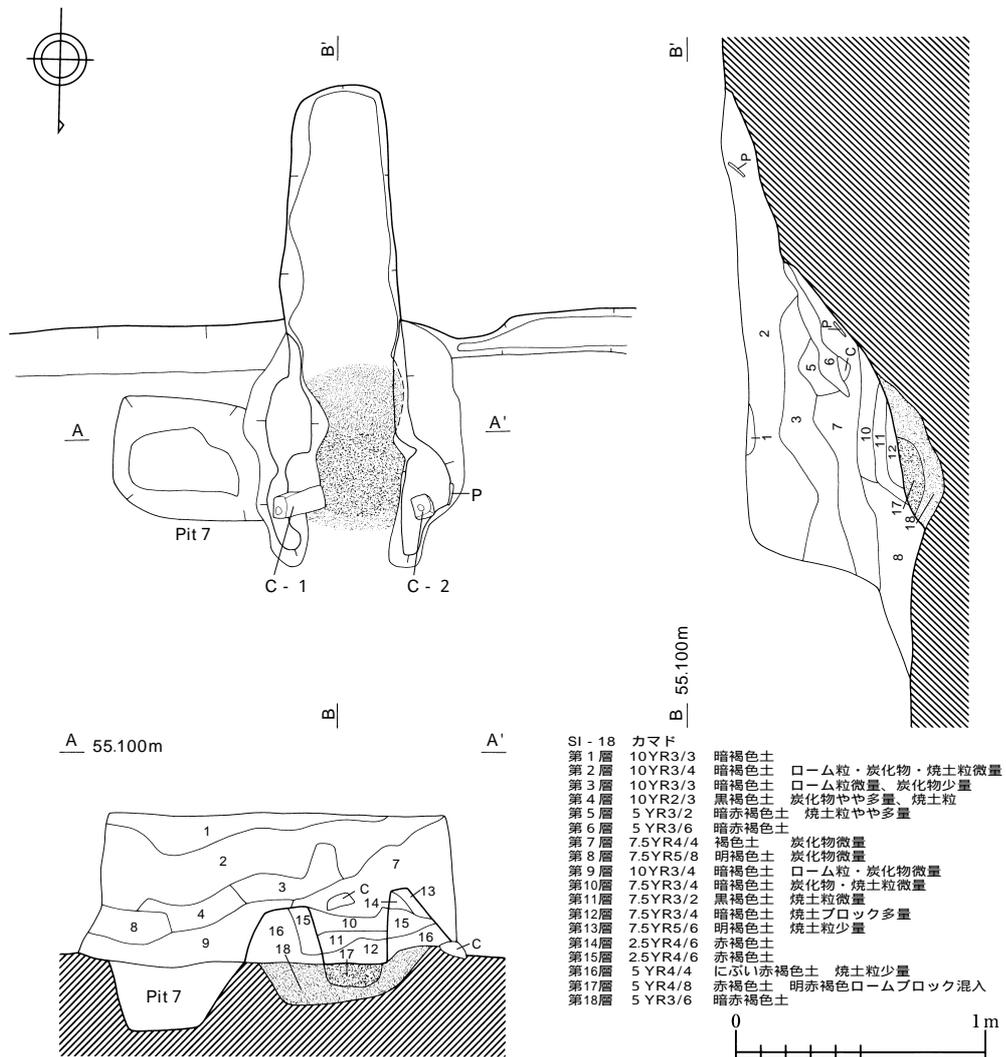
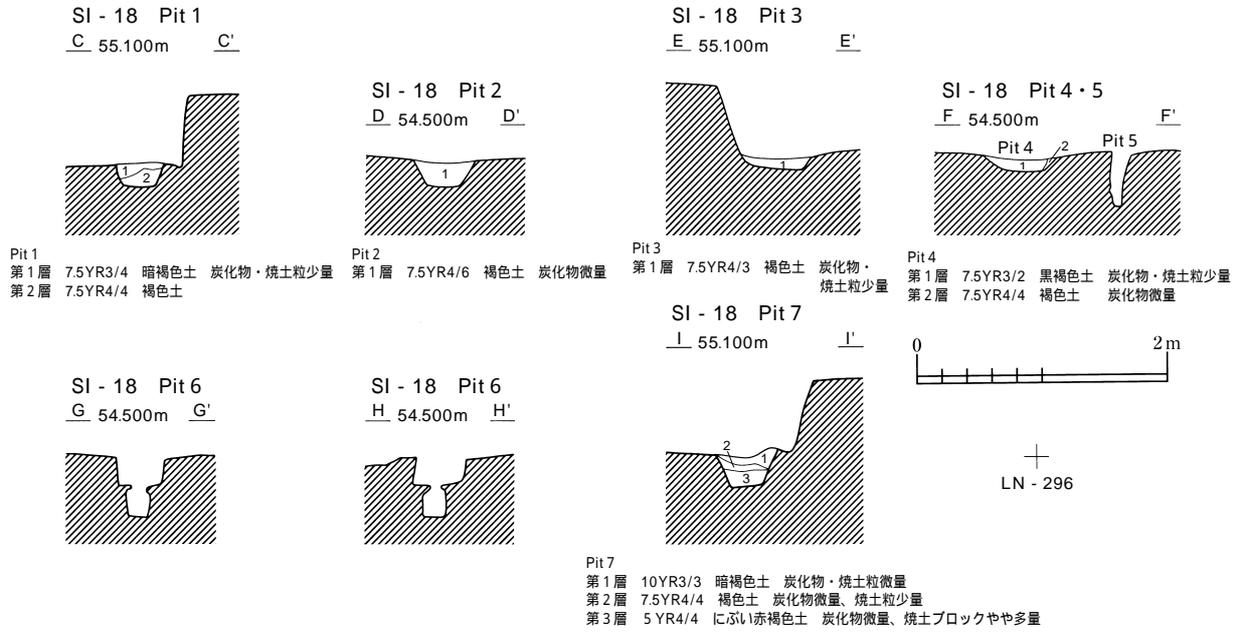
第105図 SI - 17



- SI - 18
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 炭化物・焼土粒微量
 第2層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物・焼土粒微量
 第3層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物・焼土粒微量
 第4層 10YR4/3 にぶい黄褐色土
 第5層 10YR3/2 黒褐色土 炭化物・焼土粒やや多量、炭化材微量



第106図 SI - 18



第107図 SI - 18

Pit 2 = 48 × 48 × 19cm、Pit 3 = 70 × 50 × 10cm、Pit 4 = 70 × 52 × 9 cm、Pit 5 = 15 × 15 × 45cm、Pit 7 = 54 × 49 × 27cmを測る。深さ、堆積状況からみると、いずれのピットも柱穴として機能していた可能性は低いと思われる。Pit 4 の土層は、炭化物、焼土粒を含んだ黒褐色土であり、下部より、土師器椀 1 個体と甕の破片が出土した。

[カマド] 住居南壁 3 (72 : 28) の位置から 1 基検出した。構造は、半地下式で、袖部幅 47cm、煙道長 100cm を測り、主軸は N - 177° - E である。袖部は粘土によって構築されており、袖部両側に、転用された羽口が芯材として装填されている。カマド天井部及び袖を形成していた粘土に相当すると考えられる 8 層が焚口付近及びカマド東側で確認でき、芯材として装填されていたと考えられる羽口が底面よりやや浮いた状態で出土していることから、廃絶してある程度自然堆積が進んだ後、廃棄などの人為的要因によって、崩落していったものと考えられる。燃焼部は、床面から 10° の角度で煙道部方向へ緩やかに傾斜している。煙道部は 30° の角度で立ち上がり、中間部で 15° に傾斜を変え、緩やかになる。

[その他の付属施設] 住居中央東側より、ロクロピットを検出した。平面が直径 40cm ほどの円形を呈し、深さ 20cm で平坦な底面の土坑の中央下部に、深さ 25cm の四角柱状の掘り込みをもつ。回転台等の部材は、出土しなかった。円形の土坑部分は、暗褐色中心の土が堆積し、その下部の四角柱状の掘り込みは、褐色中心の土が堆積している。

[堆積土] 5 層に分層した。最下層の第 5 層は、炭化物や焼土粒をやや多量に含んだ黒褐色土で、その上層ににぶい黄褐色を呈する土層、さらにその上層には、暗褐色を主体とした土層が確認できた。本住居跡の壁及び床面においては、焼失等による被熱の痕跡はみられないことから第 5 層は廃棄によるものと考えられる。また、第 4 層は西側から流れ込んだような状況を呈し、第 3 層は、第 4・5 層を切るような堆積状況を呈していることから、本住居跡の堆積は廃棄等の人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 19 (第 108 ~ 110 図)

[位置] グリッド LN・LO - 291・292 で検出した。

[重複] なし。

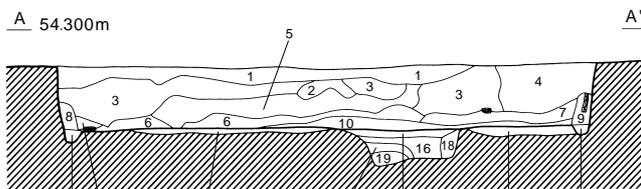
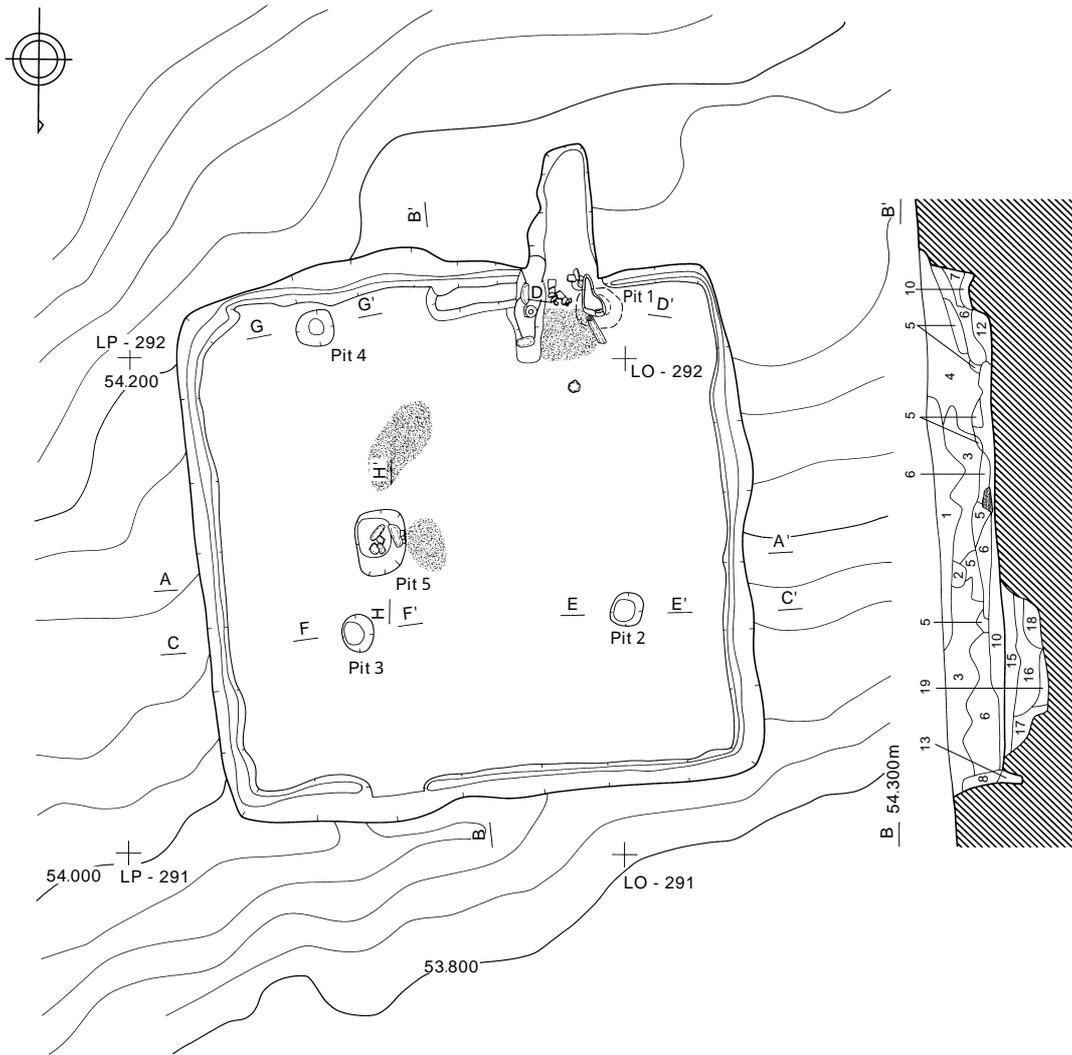
[平面形・規模] 方形を呈し、446 × 436 × 70cm を測る。床面積は 19.041 m² を測る。

[壁] 壁高は、北壁 40cm、東壁 52cm、南壁 40cm、西壁 50cm を測る。断面形は a で、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

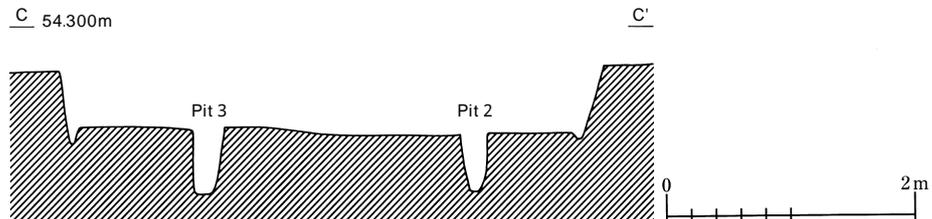
[床] 住居中央部から北西側に掘り方を持ち、その上に一部大谷火山灰層をベースとする焼土粒・炭化粒等を含む貼り床 (第 15 層) が貼られている。床面はほぼ平坦であり、堅緻である。また、本遺構は焼失住居であり、壁板が焼失によって倒落した状況で検出している。倒落の方向は住居内部に向かって放射状に倒れているが、カマドが設置されている南壁側については、壁際の一部のみしか板状の炭化材が検出しなかった。また、床面中央部からカヤ状炭化物が検出している。

[壁溝] 北壁の一部を除いてほぼ全周する。深さは平均 9 cm を測る。本遺構は焼失住居であり、壁板が北壁、東壁、西壁の一部から残存して検出した。

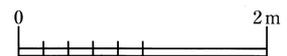
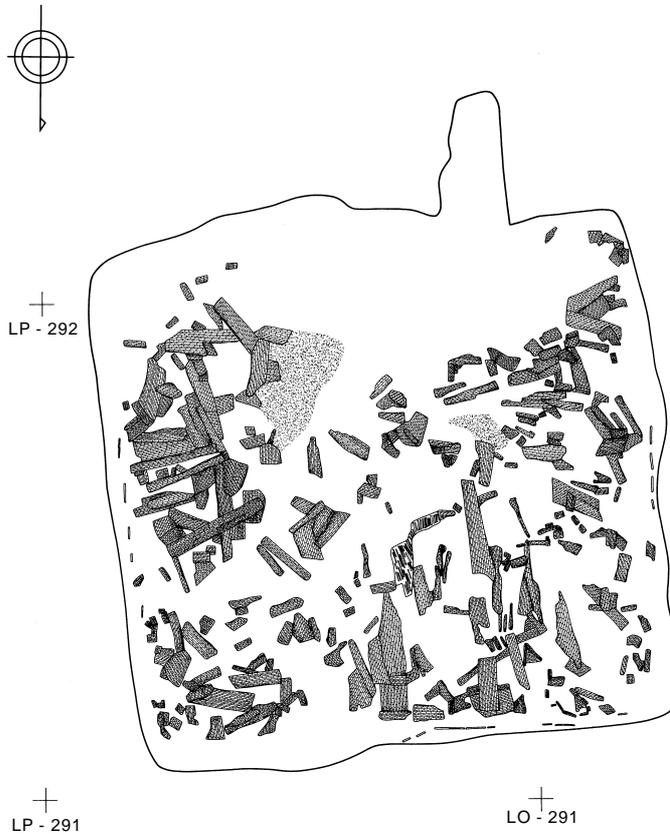
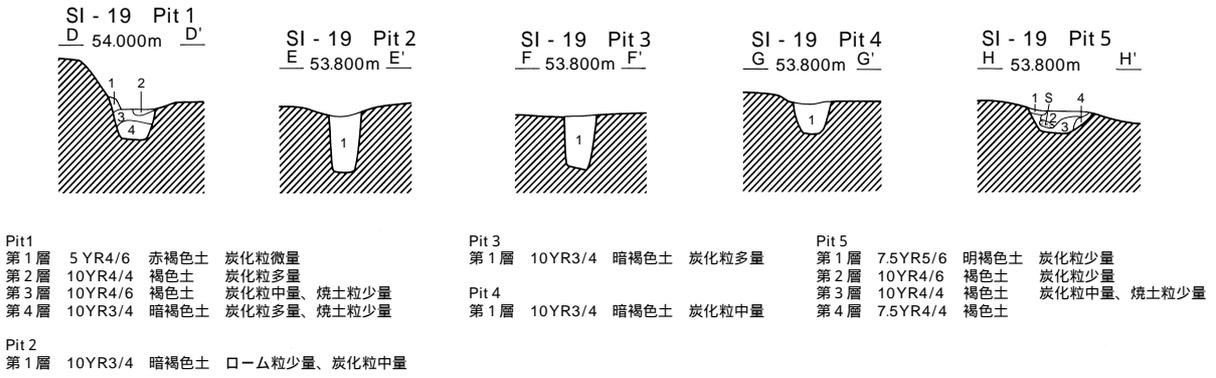
[ピット] 住居内から 5 基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 38 × 31 × 24cm、Pit 2 = 27 × 25 × 46cm、Pit 3 = 31 × 25 × 43cm、Pit 4 = 31 × 29 × 25cm、Pit 5 = 52 × 40 × 18cm を測る。主柱穴に相



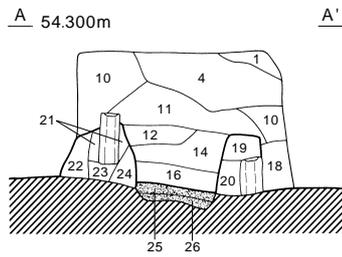
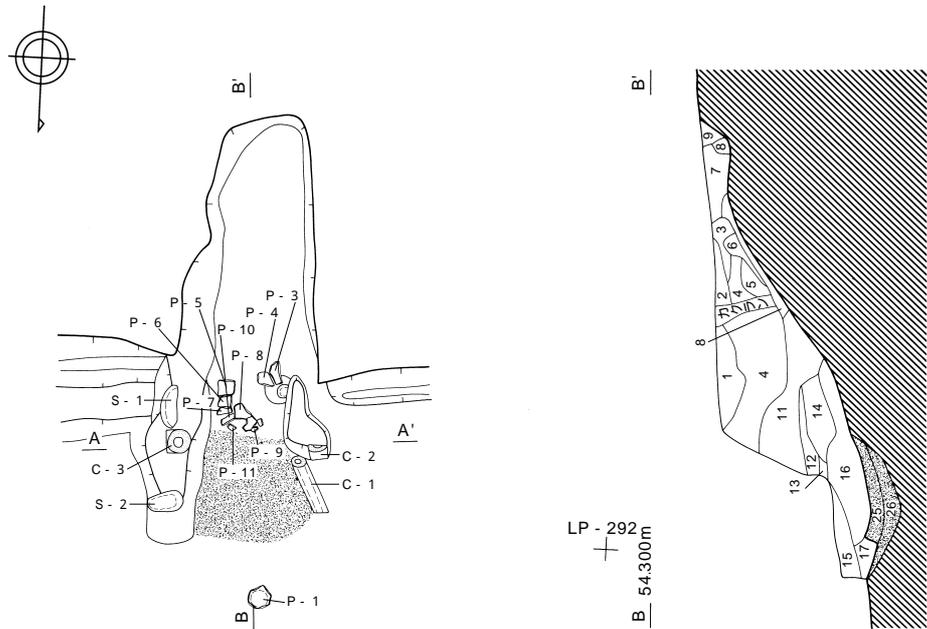
層	土質	特徴	層	土質	特徴		
第1層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒少量、炭化物中量、焼土粒微量	第11層	10YR3/4	暗褐色土	炭化粒・焼土粒中量
第2層	10YR4/4	褐色土	炭化物多量、焼土粒少量	第12層	10YR2/2	黒褐色土	炭化粒多量、焼土ブロック中量
第3層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	ローム粒中量、炭化粒、焼土粒中量	第13層	10YR4/6	褐色土	炭化粒多量、焼土粒中量
第4層	10YR4/4	褐色土	ローム粒少量、炭化粒中量、焼土粒微量	第14層	10YR4/6	褐色土	炭化粒中量
第5層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒少量、炭化粒中量、焼土粒微量	第15層	10YR4/6	褐色土	ローム粒・炭化物中量、炭化粒多量、焼土粒少量
第6層	10YR3/4	暗褐色土	炭化物中量、焼土粒少量				焼土ブロック微量
第7層	10YR4/3	にぶい黄褐色土		第16層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	ロームブロック・炭化粒中量
第8層	10YR1.7/1	黒色土	ローム粒中量	第17層	10YR3/2	黒褐色土	ロームブロック多量、炭化粒中量
第9層	10YR2/3	黒褐色土	炭化粒中量、焼土粒多量	第18層	10YR4/6	褐色土	炭化粒中量
第10層	10YR1.7/1	黒色土	ローム粒・焼土粒少量、炭化物層	第19層	10YR4/4	褐色土	炭化粒中量



第108図 SI - 19



第109図 SI - 19

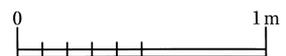
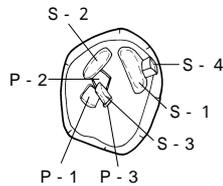


SI - 19 カマド

第1層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒少量
第2層	10YR4/4	褐色土	炭化粒微量
第3層	7.5YR4/4	褐色土	炭化粒少量
第4層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	炭化粒中量、焼土ブロック少量
第5層	10YR4/6	褐色土	
第6層	5 YR4/4	にぶい赤褐色土	炭化粒少量
第7層	10YR3/4	暗褐色土	炭化粒・焼土ブロック多量
第8層	10YR4/4	褐色土	炭化粒少量
第9層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒中量、パミス少量
第10層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	ローム粒少量、炭化粒中量
第11層	10YR3/4	暗褐色土	ロームブロック少量、炭化粒多量、焼土粒中量
第12層	5 YR4/3	にぶい黄褐色土	炭化粒中量
第13層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒少量
第14層	5 YR5/8	明赤褐色土	炭化粒少量
第15層	10YR3/4	暗褐色土	炭化粒多量
第16層	5 YR4/4	にぶい赤褐色土	炭化粒少量
第17層	10YR1.7/1	黒色土	
第18層	10YR4/4	褐色土	炭化粒中量、焼土粒少量
第19層	5 YR3/6	明赤褐色土	
第20層	10YR3/3	暗褐色土	炭化粒・焼土粒中量
第21層	5 YR4/8	赤褐色土	炭化粒少量
第22層	10YR3/4	暗褐色土	炭化粒中量、焼土粒少量
第23層	5 YR4/6	赤褐色土	炭化粒・焼土粒少量
第24層	5 YR4/4	にぶい赤褐色土	炭化粒中量
第25層	5 YR4/8	赤褐色土	炭化粒少量
第26層	5 YR5/8	明赤褐色土	炭化粒中量

SI - 19 Pit 5 遺物出土状況

LP - 292



第110図 SI - 19

当するピットはPit 1～4に相当し、長方形配置を呈する。本遺構は、焼失住居であるが、主柱配置のピットには炭化した柱の残存は見られなかった。土層堆積においても、住居の堆積土と比較して、焼失した炭化材の影響のある第10層よりは、その上面の埋め戻し土の可能性のある第6層と同様の暗褐色土主体の土層がPit 2～4に堆積していることから、住居の焼失時点で既に柱は抜き取られていた可能性がある。また、Pit 5から自然礫4点、土器2点が出土している。第1層の粘土層の上面は被熱を受け赤変しており、焼失時にはピットそのものは埋められていたものと考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(73:27)の位置から検出している。構造は、半地下式で袖部幅は残存長で40cmを測り、煙道長は108cmを測る。主軸はN-177°-Eである。構築材は、袖部に芯材として転用羽口を利用している。また、燃焼部天井ならびに煙道部天井には芯材は用いられずに粘土のみの構築である。崩落した燃焼部天井は第16層が相当し、一部焼失時点での被熱を受けた粘土層(第12・14層)の堆積が見られる。右袖部分の一部が欠落しており、主柱穴の状況等の様相と併せてみた場合、一部破壊という状況についても検討しなければならない。支脚は、中軸線よりやや西側の位置に土師器碗を1点倒置している。煙道は、燃焼部から傾斜を持ち、15°の傾斜角で立ち上がり、住居壁際の煙道部から33°に角度を変え、煙出部付近でほぼ平坦になり立ち上がる。

[その他の付属施設] カマドの左脇の部分から70×20×15cmの棚状の段を検出した。検出時点では、壁溝を一部埋める形での検出であったため、住居構築後、地山粘土による作りつけによるものであると考えられる。

[堆積土] 掘り方部分も含めて19層に分層した。[床]での記述のとおり、第15層は貼り床であり、局所的に検出している。第16層以下は土坑状の掘り方で褐色土を主体とする土層堆積であり、その上面を貼り床が覆っている。床面より上面の土層堆積は、焼失時点での倒壊した炭化材の影響による土層が第10層に相当し、その上面については炭化物・焼土粒を含む暗褐色土を主体の土層である。住居の焼失後、埋め戻し等による人為的堆積状況を呈する。また、柱の残存状況ならびにピットの土層堆積、カマドの右袖の一部が破壊されている点、床面からの遺物出土がほとんど無い点を踏まえると焼失住居の焼失事由が偶発的被災というよりは住居廃絶に伴う意図的焼失の可能性が考えられる。

(木村)

S I - 20 (第111、112図)

[位置] グリッドL O・L P - 289・290で検出した。

[重複] なし。

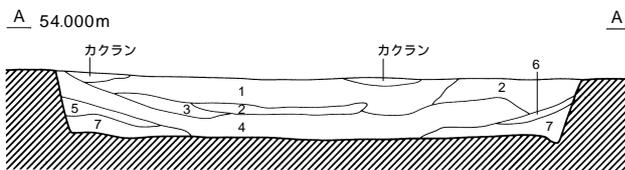
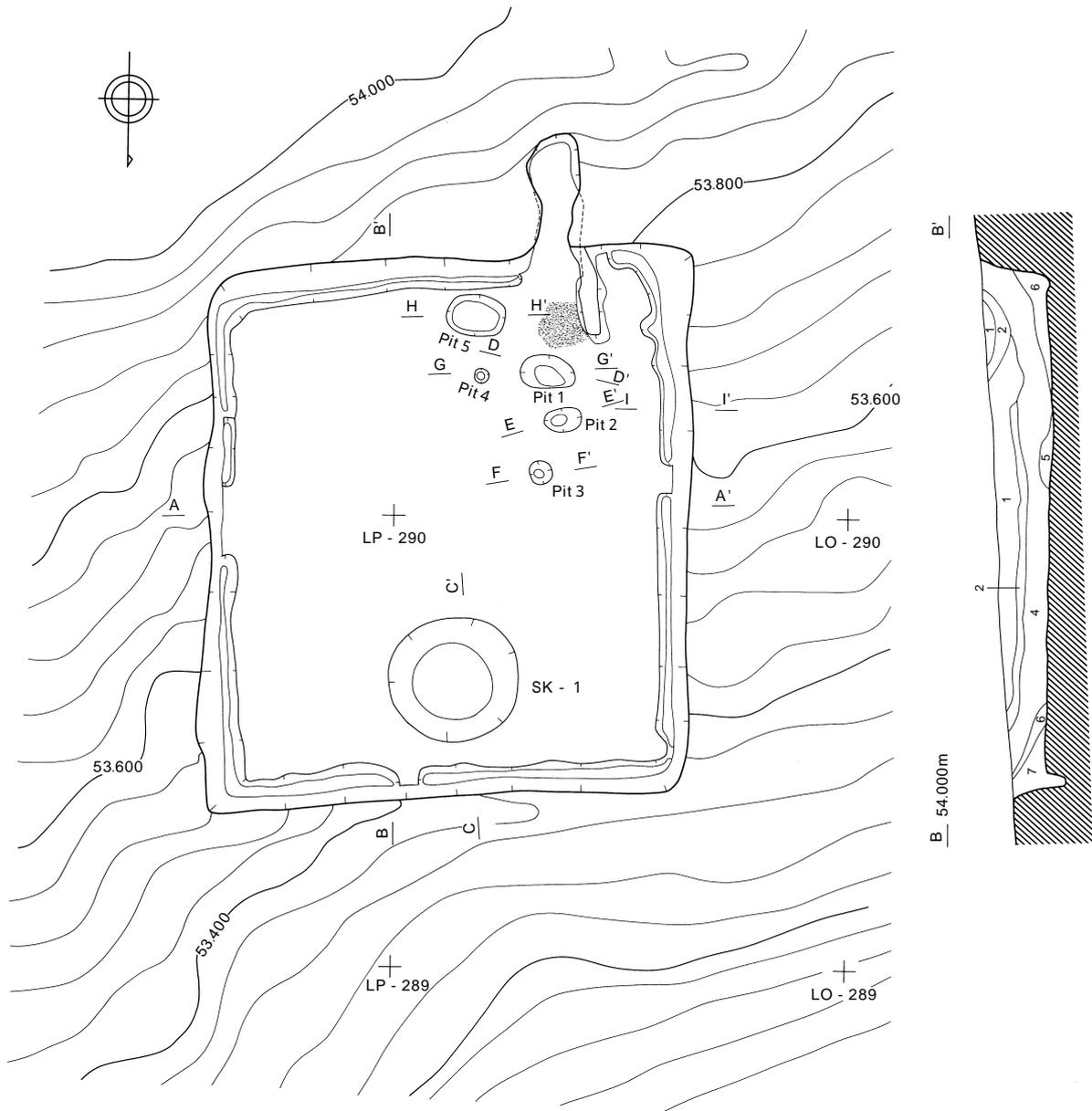
[平面形・規模] 長方形を呈し、480×420×65cmを測る。床面積は20.507m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁31cm、東壁50cm、南壁59cm、西壁47cmを測る。断面形はcで、ほぼ垂直に近い形で立ち上がるが、壁上面で緩やかに角度を変え立ち上がる部分が見られた。壁面は堅緻である。

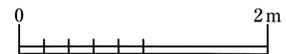
[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面は堅緻である。

[壁溝] 南壁のカマド設置部分ならびに北・東・西壁の中央部付近で断続しているが、ほぼ全周して検出した。深さは北壁側で18cmであったが、他の壁では4～6cmと比較的浅い。東壁の断続部分については、断続部分の中に60cm幅の壁溝の掘り込みを検出した。

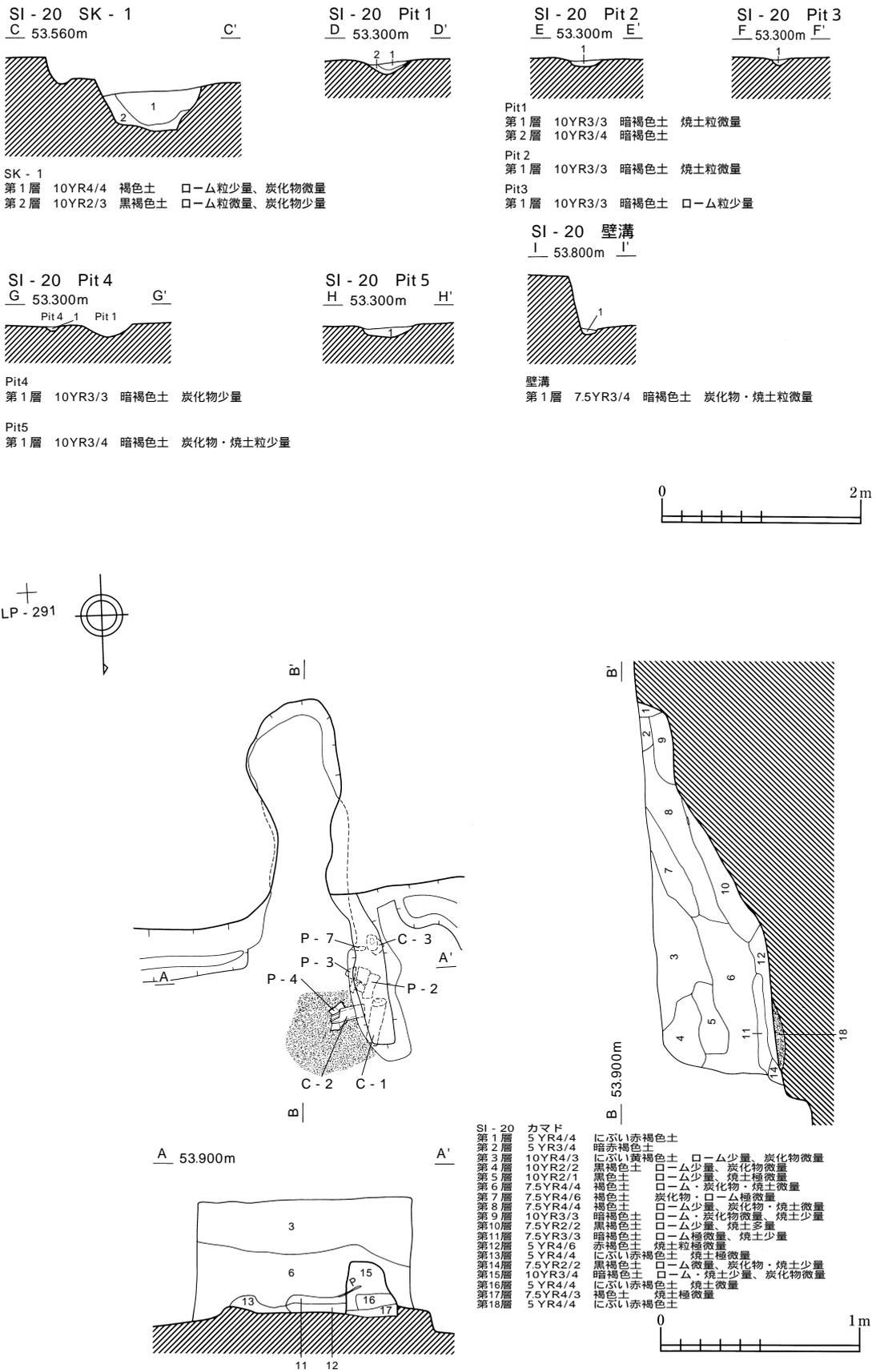
[ピット] 住居内から5基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 48×28×11cm、Pit 2 = 33×21×



SI - 20			
カクラン	10YR1.7/1	黒色土	ローム粒少量
第1層	10YR3/3	暗褐色土	炭化物微量
第2層	10YR1.7/1	黒色土	ローム粒少量
第3層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	炭化物微量
第4層	10YR3/4	暗褐色土	炭化物・パミス少量、焼土粒微量
第5層	7.5YR4/6	褐色土	
第6層	10YR3/1	黒褐色土	ローム粒少量
第7層	7.5YR4/4	褐色土	ローム粒中量、炭化物微量



第111図 SI - 20



第112図 SI - 20

6cm、Pit 3 = 21 × 20 × 6cm、Pit 4 = 13 × 13 × 4 cm、Pit 5 = 51 × 37 × 10cmを測る。いずれのピットも比較的浅く、カマド周辺部に集中しており、主柱穴としての機能を充足し得るものはないと考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(70:30)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部は右袖のみ残存しており、煙道長100cmを測る。主軸はN - 176° - Eである。残存している袖部から芯材である羽口が出土している。土層堆積において第6層に大谷火山灰層主体の地山土の堆積が見られるが住居の堆積土第7層と同様の土層であり、左袖の残存状況と土層堆積状況を踏まえて天井部の崩落土としては認定できない。燃焼部天井の残存土層は、第12・13層に相当する。煙道部天井の土層は第8層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道は、住居壁際から30°の角度で立ち上がり、煙出口付近で角度を変え、ほぼ平坦になり立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居北壁中央部から115 × 110 × 43cmの土坑1基を検出した。

[堆積土] 7層に分層した。上層は一部攪乱等土層に影響が見られたが、全体的に褐色土ならびに暗褐色土主体の土層堆積で、自然堆積の様相を呈する。遺物は、第4層の堆積土中に流入した状況で主に出土している。

(木村)

S I - 21 (第113、114図)

[位置] グリッドLS・LT - 292・293で検出した。

[重複] SA - 01P3と一部重複している。本遺構とSA - 01が同時併存した可能性がある。

[平面形・規模] 長方形を呈し、676 × 546 × 70cmを測る。床面積は36.26m²を測る。

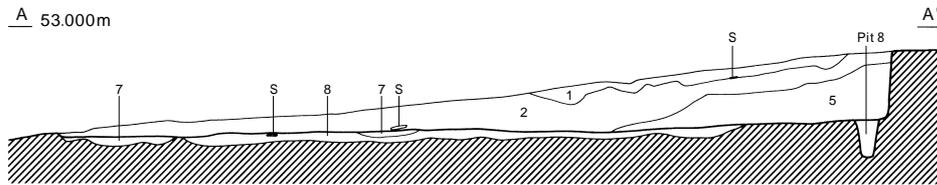
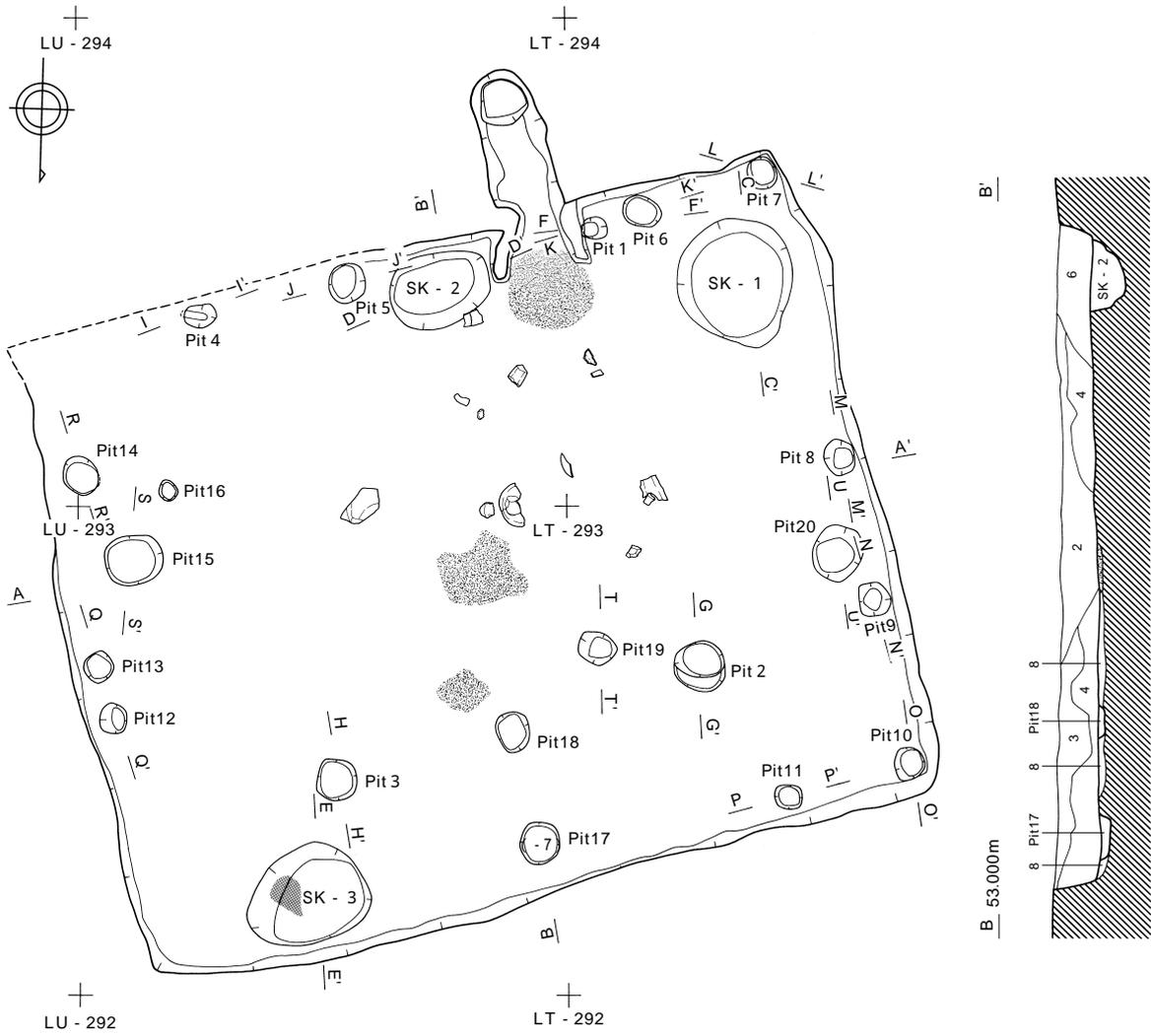
[壁] 一部削平を受けており、全容は不明であるが、壁高は、北壁35cm、東壁3cm、南壁27cm、西壁55cmを測る。断面形はcで、壁上部で一部緩やかな傾斜が見られる。壁面は堅緻である。

[床] カマド周辺部を除いて浅い掘り方を有しており、床面は貼り床と地山の床面との境界についてはやや段差を持っている。掘り方を有する床面は地山のみ床面に比べてやや脆弱であり、起伏がある。また、住居中央部とやや中央部より北壁寄りの部分に80 × 61cm、45 × 35cmの赤化面を検出した。

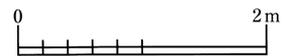
[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から20基検出した。壁柱穴を伴う住居で、各ピットの規模は、Pit 1 = 22 × 18 × 55cm、Pit 2 = 42 × 41 × 30cm、Pit 3 = 34 × 32 × 37cm、Pit 4 = 24 × 18 × 32cm、Pit 5 = 31 × 30 × 21cm、Pit 6 = 32 × 25 × 26cm、Pit 7 = 25 × 22 × 22cm、Pit 8 = 30 × 25 × 30cm、Pit 9 = 27 × 25 × 18cm、Pit10 = 27 × 25 × 25cm、Pit11 = 22 × 18 × 27cm、Pit12 = 26 × 22 × 18cm、Pit13 = 25 × 23 × 16cm、Pit14 = 34 × 29 × 23cm、Pit15 = 48 × 41 × 17cm、Pit16 = 17 × 16 × 8 cm、Pit17 = 34 × 32 × 7 cm、Pit18 = 33 × 27 × 6 cm、Pit19 = 31 × 26 × 61cm、Pit20 = 47 × 43 × 9 cmを測る。主柱穴として考えられるピットは、Pit 1 ~ 4である。壁柱穴はPit 5 ~ 14が相当すると考えられ、東壁南北隅からは検出しなかった。柱間については不均一である。また、Pit19は位置的に主柱配置に合致しないピットであるが、深さがあり、住居の構造上柱穴として機能した可能性がある。

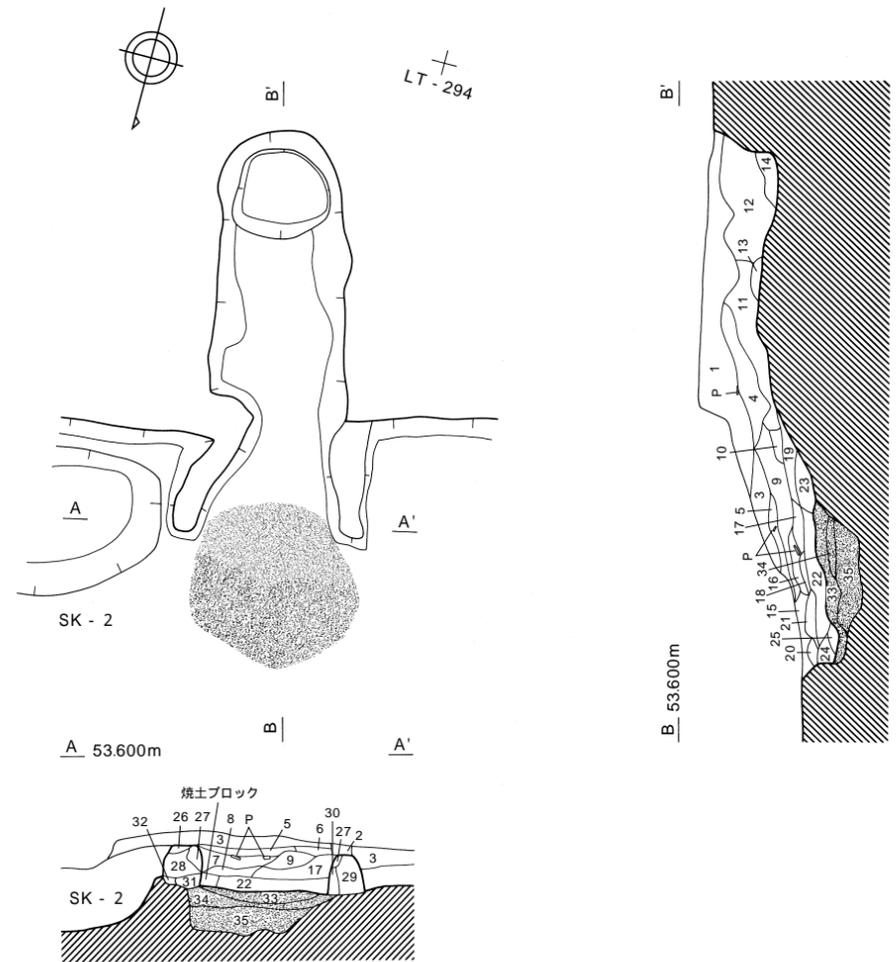
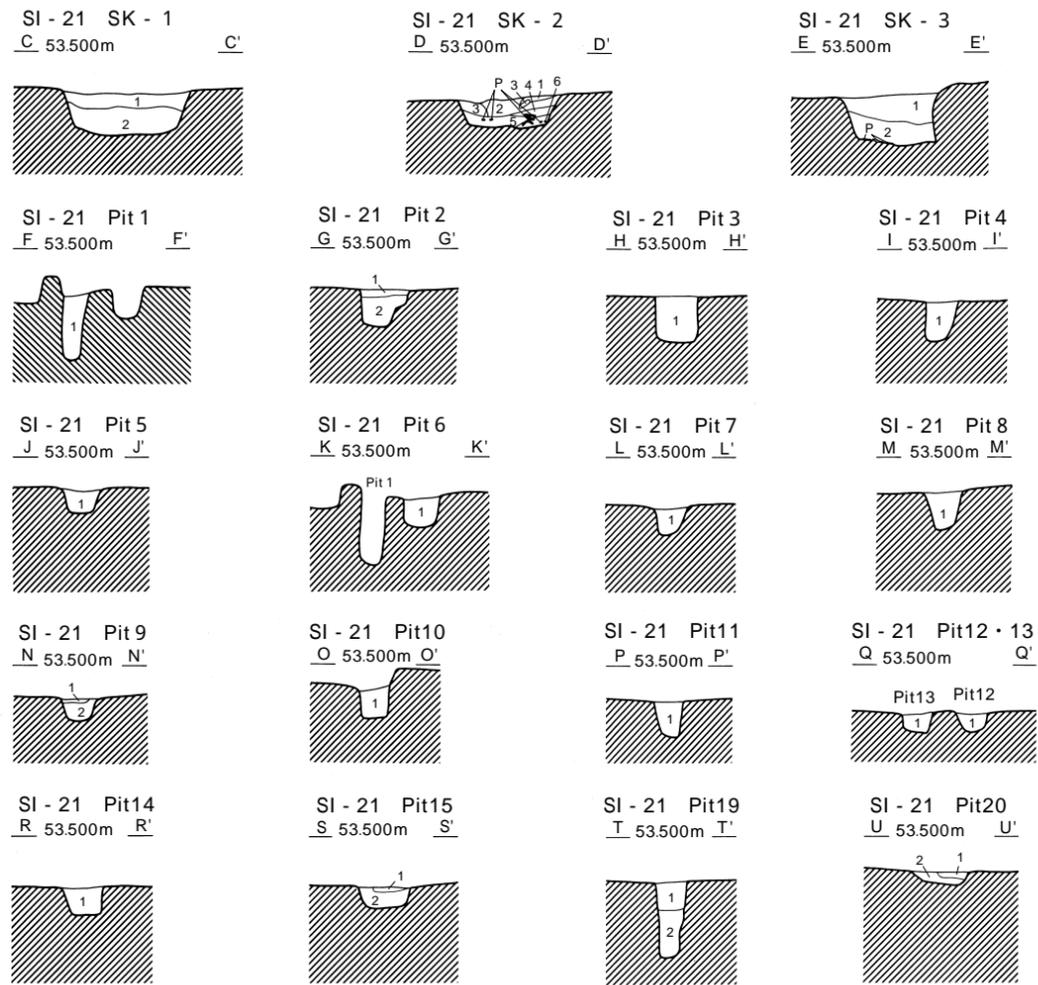
[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(70:30)の位置から検出している。構造は、半地下式で、焚口付近の袖は残存しておらず、燃焼部基部の残存長で袖部幅58cm、煙道長120cmを測る。



- SI - 21
- 第1層 10YR2/1 黒色土 焼土極微量
 - 第2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 □-ム粒・炭化物・火山灰(B-Tm・To-a)微量
 - 第3層 10YR4/4 褐色土
 - 第4層 10YR3/3 暗褐色土 火山灰(B-Tm・To-a)微量
 - 第5層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 □-ム微量、粘土少量、炭化物極微量
 - 第6層 10YR3/3 暗褐色土 □-ム粒・焼土・炭化物極微量
 - 第7層 10YR3/3 暗褐色土
 - 第8層 10YR1.7/1 黒色土



第113図 SI - 21

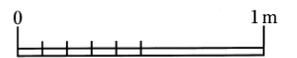
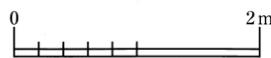


- SK - 1
 第1層 10YR4/4 褐色土 ローム少量、粘土多量、炭化物微量
 第2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ローム微量、粘土・炭化物・焼土少量
- Pit 1
 第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・炭化物微量
- Pit 2
 第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム微量
 第2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ローム微量、炭化物極微量
- Pit 3
 第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒極微量
- Pit 4
 第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒・炭化物極微量
- Pit 5
 第1層 10YR4/4 褐色土 粘土少量
- Pit 6
 第1層 10YR4/4 褐色土 ローム微量
- Pit 7
 第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム・炭化物・焼土微量
- Pit 8
 第1層 10YR4/4 褐色土 ローム粒・炭化物極微量、粘土少量
- Pit 9
 第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒極微量
 第2層 7.5YR4/4 褐色土 ローム粒微量
- Pit 10
 第1層 10YR4/4 褐色土 ローム粒・火山灰 (To-a)微量

- SK - 2
 第1層 10YR4/4 褐色土
 第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム・焼土極微量、炭化物少量
 第3層 10YR3/4 暗褐色土 焼土多量
 第4層 10YR2/3 黒褐色土 ローム極微量、炭化物微量、焼土少量
 第5層 7.5YR4/4 褐色土 焼土多量
 第6層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物少量、焼土極微量
- Pit 11
 第1層 10YR4/4 褐色土 ローム極微量
- Pit 12
 第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム少量、炭化物極微量
- Pit 13
 第1層 10YR4/4 褐色土 炭化物微量
- Pit 14
 第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム・焼土極微量、炭化物微量
- Pit 15
 第1層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物微量
 第2層 10YR4/6 褐色土 粘土多量
- Pit 19
 第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ロームブロック少量、炭化物極微量
 第2層 10YR4/6 褐色土 砂粒少量
- Pit 20
 第1層 10YR4/4 褐色土 ローム・粘土少量
 第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム微量、炭化物混入

- SK - 3
 第1層 10YR4/4 褐色土
 第2層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック少量

- SI - 21 カマド
 第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・焼土極微量、炭化物微量
 第2層 7.5YR4/4 褐色土
 第3層 7.5YR3/3 暗褐色土 ローム極微量、炭化物・焼土少量
 第4層 5YR3/4 暗赤褐色土 炭化物極微量
 第5層 10YR4/6 褐色土 ローム多量
 第6層 7.5YR3/4 暗褐色土 焼土少量
 第7層 7.5YR3/4 暗褐色土 ローム少量、焼土多量
 第8層 5YR3/6 暗赤褐色土 炭化物微量
 第9層 5YR3/6 暗赤褐色土
 第10層 7.5YR3/3 暗褐色土 焼土多量
 第11層 7.5YR3/4 暗褐色土 炭化物極微量、焼土微量
 第12層 7.5YR2/2 黒褐色土 炭化物極微量、焼土多量
 第13層 10YR3/4 暗褐色土 焼土多量
 第14層 7.5YR3/3 暗褐色土 炭化物・焼土微量
 第15層 7.5YR3/4 暗褐色土 炭化物・焼土少量
 第16層 7.5YR4/6 褐色土 焼土極微量
 第17層 5YR4/6 赤褐色土 炭化物極微量
 第18層 7.5YR4/4 褐色土 焼土極微量
 第19層 7.5YR3/4 暗褐色土 焼土微量
 第20層 5YR4/4 にぶい赤褐色土
 第21層 2.5YR4/6 赤褐色土
 第22層 7.5YR5/6 明褐色土 炭化物極微量
 第23層 5YR4/6 赤褐色土
 第24層 5YR4/4 にぶい赤褐色土 炭化物極微量、焼土少量
 第25層 5YR4/6 赤褐色土
 第26層 10YR6/4 褐色土 ローム多量
 第27層 5YR3/6 明赤褐色土 焼土多量
 第28層 7.5YR4/4 褐色土 焼土少量
 第29層 10YR4/6 褐色土
 第30層 5YR3/6 暗赤褐色土 炭化物・焼土極微量
 第31層 7.5YR4/4 褐色土 焼土少量
 第32層 7.5YR3/4 暗褐色土
 第33層 5YR4/6 赤褐色土
 第34層 5YR4/8 赤褐色土
 第35層 5YR4/6 赤褐色土



第114図 SI - 21

主軸はN - 165° - Eである。土層堆積において燃烧部天井は第22・23層が相当し、煙道部天井は第4層が相当する。構築は、芯材等の出土が見られないことから粘土のみによる構築であると考えられる。煙道は、住居壁際から28°の角度で立ち上がり、1/3の部分で角度を10°に変え、緩やかな段状に立ち上がったのち、煙出部に向かって5°の角度でピット状に掘り込まれた煙出部に向かって緩やかに傾斜する。

[その他の付属施設] 住居内から土坑3基を検出した。SK - 1は、西壁南側から検出した。規模は109×97×35cmを測る。住居堆積土との比較から住居廃絶時点で開口していたと考えられる。SK - 2は、カマド左袖脇から検出した。規模は83×61×26cmを測る。堆積土中に焼土粒、炭化粒等を含む。SK - 3は、北壁東寄りの部分から検出した。規模は103×80×90cmを測る。土坑底面から土器が出土しており、上面に炭化物が出土しており、貼り床と同様の土層が上面に堆積していることから廃絶時点で開口部は閉じていたと考えられる。

[堆積土] 掘り方部分を含めて8層に分層した。第2層ならびに第4層からB - Tm、To - a火山灰が粒状に混入して検出した。褐色土・にぶい黄褐色土・暗褐色土などやや明色系の土層が主体となるが混合して堆積しており、人為的堆積状況を呈する。

(木村)

SI - 22 (第115、116図)

[位置] グリッドLU・LV - 295・296で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、400×363×62cmを測る。床面積は14.397m²を測る。

[壁] 壁高は、北西壁57cm、北東壁60cm、南東壁29cm、南西壁45cmを測る。断面形はaで、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面は堅緻である。

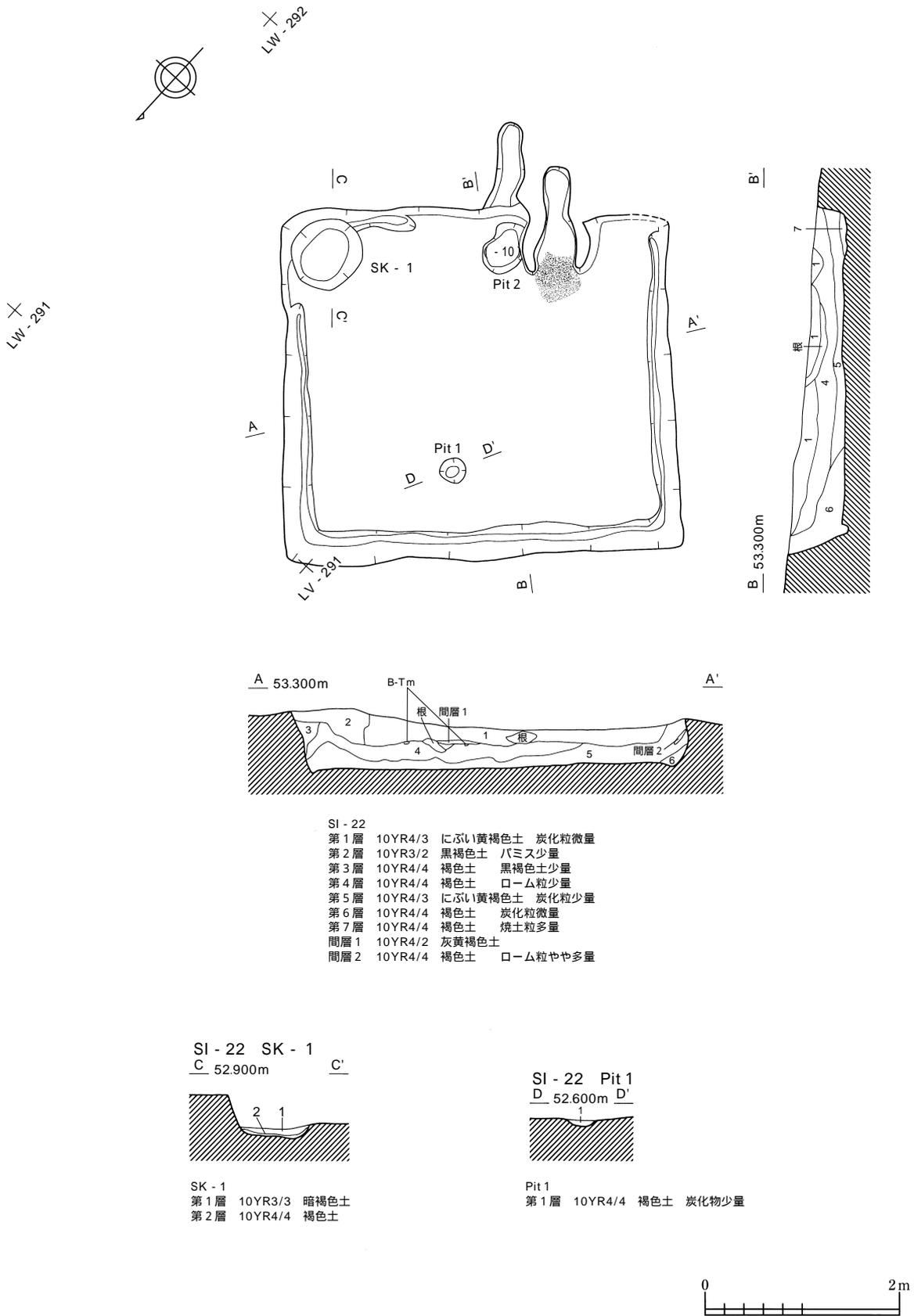
[壁溝] 南東壁の一部からも検出したが、コの字状に連続して検出した。深さは平均4cmと比較的浅い。

[ピット] 住居内から2基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 27×26×6cm、Pit 2 = 55×40×10cmを測る。Pit 2の堆積土中には焼土粒が含まれる。

[カマド] 住居南東壁から2基検出した。いずれも南東壁3の位置から検出している。新旧関係は、燃烧部袖の残存状況から(57.5 : 42.5) < (71 : 29)の関係である。カマド新の構造は、半地下式で、袖部幅81cm、煙道長55cmを測る。主軸はN - 139° - Eである。構築は、燃烧部袖の一部に自然礫を芯材としており、それ以外の部分については粘土で構築している。天井については、燃烧部ならびに煙道部とも土層が残存しておらず、焼土粒を多量に含む第7層が底面直上に堆積している。また支脚については破碎した甕の底部と椀の底部を倒位に3枚重ねて設置している。煙道は、住居壁際から30°の角度で立ち上がり、途中で角度を25°に変え、やや緩やかな勾配で立ち上がる。

カマド旧は、煙道部のみの残存であり、焚口の火床面等はカマド脇ピットにより切られており、残存していない。煙道長は86cmを測る。煙道部の構造は、半地下式で、住居壁中段から起伏を持ちながら5°の角度で立ち上がる。堆積土は、1層で焼土粒、炭化物を含む地山土主体の堆積である。

[その他の付属施設] なし。



第115図 SI - 22

[堆積土] 間層を含め9層に分層した。上層は根による攪乱により土層が変成を受けているが、概ね自然堆積の堆積状況を呈する。第1層ならびに間層1の下部にB T m火山灰が堆積している。

(木 村)

S I - 23 (第117~119図)

[位置] グリッドL V・L W - 294・295で検出した。

[重複] S I - 24と住居南壁側の部分で重複している。本遺構がS I - 24を切っており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、594×571×74cmを測る。床面積は33.543m²を測る。

[壁] 削平のため、東壁の情報は欠落している。壁高は、北壁28cm、東壁2cm、南壁31cm、西壁58cmを測る。断面形はaで、S I - 24の重複部分ならびに削平されている南壁側の情報は不明瞭であるが、残存している壁の情報からほぼ垂直に近い形で立ち上がっているものと考えられる。壁面は切りあっている南壁側部分は脆弱で、残存している北壁・西壁は堅緻である。

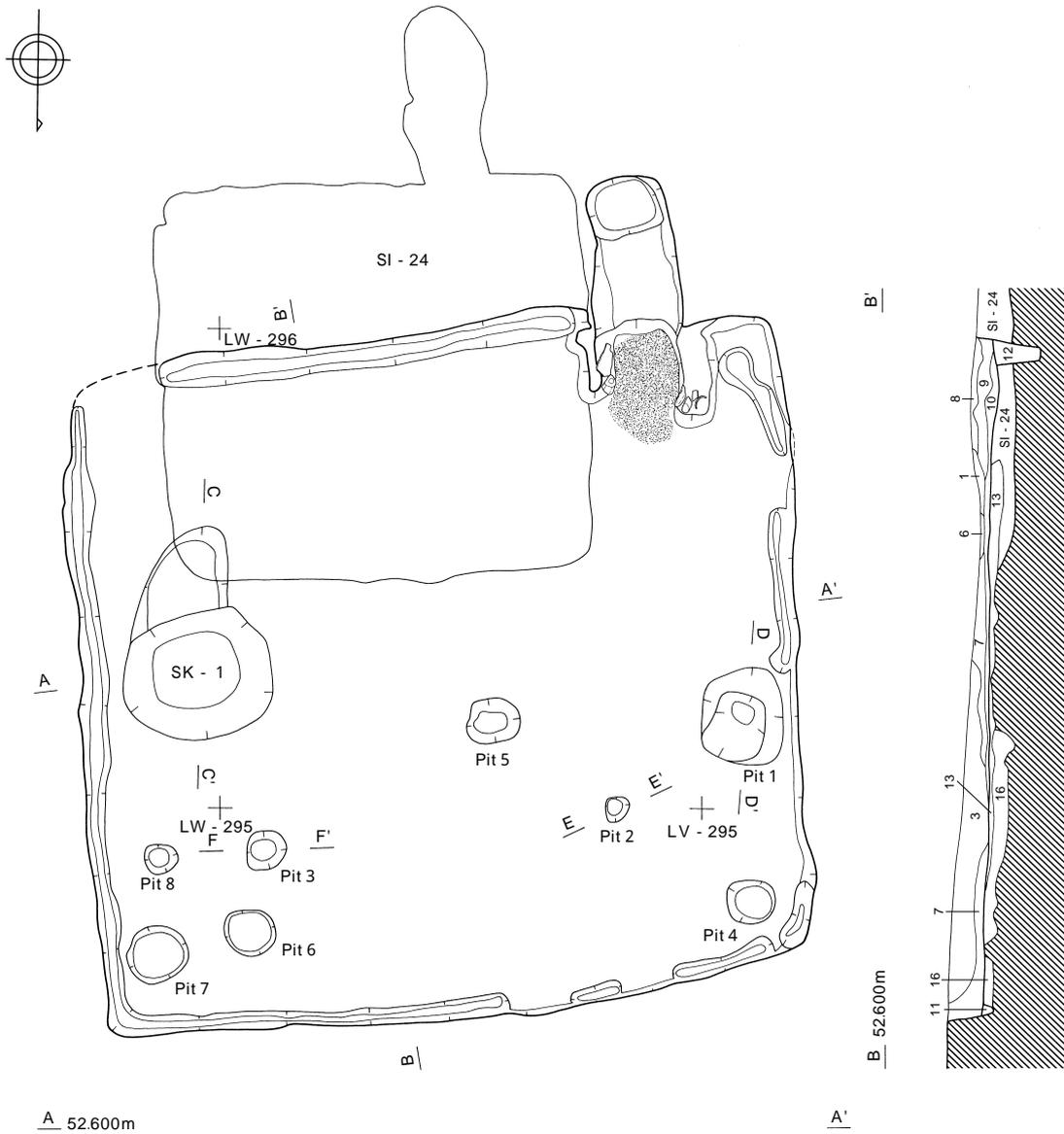
[床] 最深10cmの掘り方がS I - 24の切りあい部分以外に掘り込まれており、その上に暗褐色土、ならびに褐色土を主体とする貼り床が貼られており、その面を床としている。土質が不均一であるため硬度が一定ではない。

[壁溝] 住居内から断続的に全周して検出した。北壁西隅周辺が断続の幅が広い。深さは平均13cmを測る。

[ピット] 掘り方部分を含めて18基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 80×66×26cm、Pit 2 = 23×20×57cm、Pit 3 = 33×31×53cm、Pit 4 = 40×38×13cm、Pit 5 = 46×37×11cm、Pit 6 = 45×40×18cm、Pit 7 = 50×45×17cm、Pit 8 = 27×23×13cm、Pit 9 = 60×53×50cm、Pit 10 = 28×27×66cm、Pit 11 = 23×22×5cm、Pit 12 = 45×43×14cm、Pit 13 = 60×45×14cm、Pit 14 = 26×18×9cm、Pit 15 = 63×60×20cm、Pit 16 = 116×75×18cm、Pit 17 = 41×35×13cm、Pit 18 = 51×44×17cmを測る。主柱配置については、重複するS I - 24の住居内で検出したピットとの関連性も否定できず、明瞭ではないが、主柱穴として十分な深さを持つピットについては、Pit 2、3、9、10であり、他の住居の配置状況を踏まえると長方形配置を持つ住居であると考えられる。

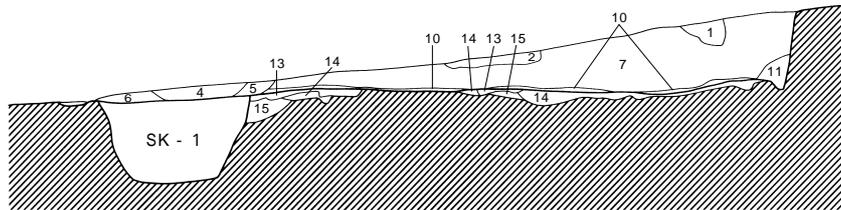
[カマド] 住居南壁西隅から1基検出した。南壁4(80:20)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅113cm、煙道長120cmを測る。主軸はN - 173° - Eである。構築は、切りあっているS I - 24の重複部分をさけるように煙道を構築している。燃烧部袖に転用羽口を芯材として使用している。袖は左袖が右袖に比べやや残存状況が悪い。燃烧部天井の土層は崩落しており、第12・13層が相当する。芯材等の出土はなく、天井は粘土のみによる構築である。煙道部天井は崩落しており、第7層が相当する。芯材等の出土はなかった。煙道は、住居壁際から壁面に沿うように50°の角度で立ち上がり住居壁中段から角度を15°に変え、やや起伏を持ちながら煙出部へ立ち上がる。煙出部は、ピット状に掘り込まれている。カマド周辺では、右袖脇を中心として遺物の出土があった。

[その他の付属施設] 住居内から掘り方の部分を含めて土坑2基を検出した。S K - 1は、住居東壁寄り中央で検出した。規模は177×120×71cmを測る。住居の堆積土と土層堆積の比較から住居廃絶時には開口部は閉じていたと考えられる。第2・3層は、土層堆積から掘り方に相当すると考えられる。



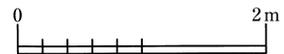
A 52.600m

A'

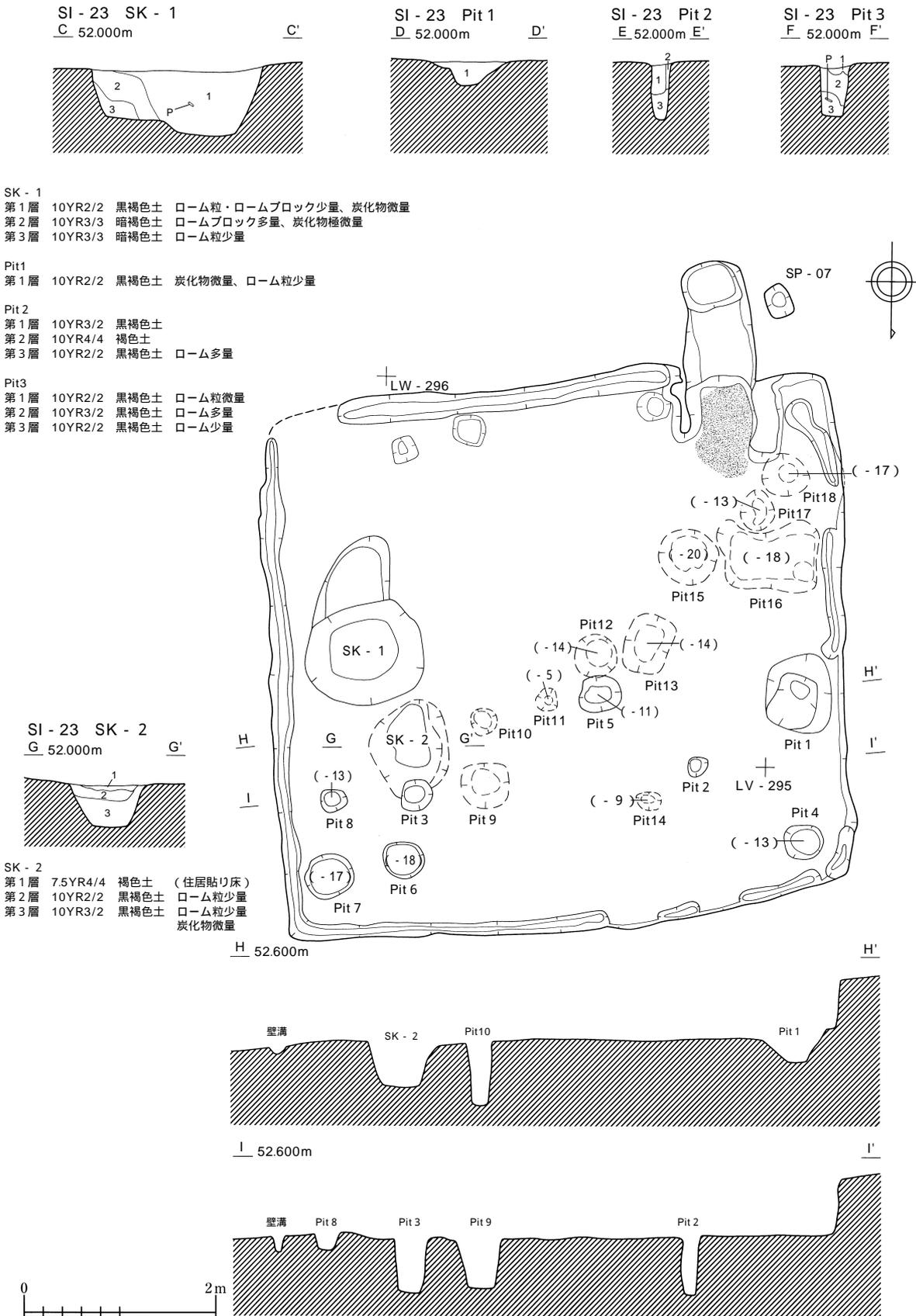


- SI - 23
- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 炭化物・パミス少量、焼土粒微量
 - 第2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化物・焼土粒微量、火山灰 B - Tm 少量
 - 第3層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物・焼土粒・ローム粒・パミス少量、ロームブロックやや多量
火山灰 B - Tm 混入
 - 第4層 10YR2/3 黒褐色土 パミス・炭化物・焼土粒少量
 - 第5層 7.5YR3/3 暗褐色土 炭化物微量、焼土粒・パミス少量
 - 第6層 10YR2/2 黒褐色土 炭化粒少量、ロームブロック混入
 - 第7層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物・焼土粒・ロームブロック微量、パミス少量
 - 第8層 7.5YR4/6 褐色土 炭化物・焼土粒・パミス微量、ロームブロック少量

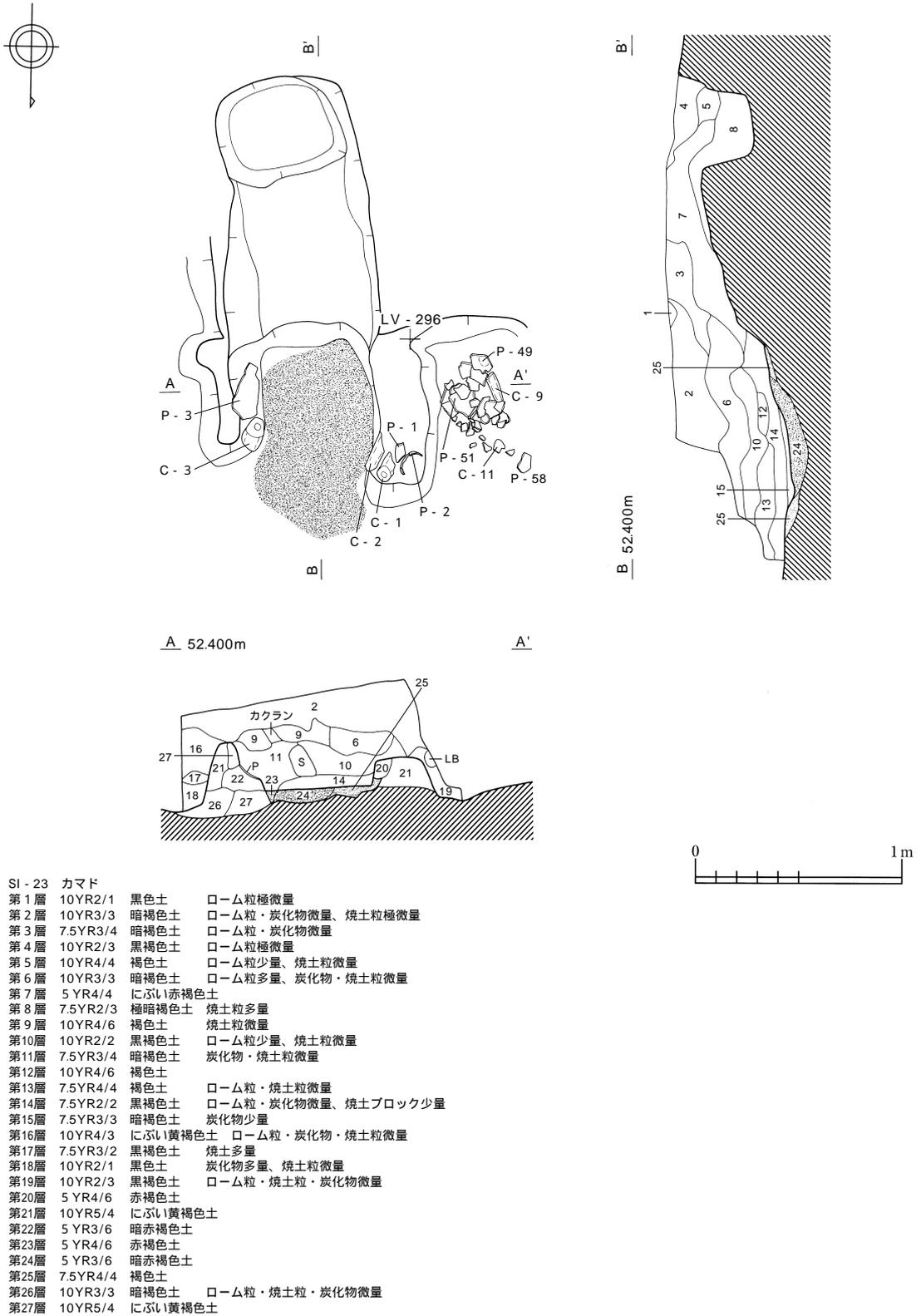
- 第9層 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒微量、ロームブロック少量
- 第10層 10YR3/3 暗褐色土 ロームブロック多量
- 第11層 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒微量、ロームブロック
- 第12層 10YR2/1 黒色土 ロームブロック少量
- 第13層 10YR4/4 褐色土
- 第14層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・炭化物微量、ロームブロック多量
- 第15層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック少量、焼土粒・炭化物微量
- 第16層 10YR3/2 黒褐色土 ロームブロック多量、炭化物微量



第117図 SI - 23



第118図 SI - 23



第119図 SI - 23

S K - 2 は、S K - 1 のやや北壁よりの部分から検出した。規模は99×85×42cmを測る。北壁側を Pit 3 に切られており、上層には貼り床が貼られており、Pit 3 の掘削時点で S K - 2 は、埋め戻されていたものと考えられる。

[堆積土] 掘り方部分も含めて16層に分層した。上層がやや変成を受けているが、堆積土の成層過程において、第7層までが自然堆積、第3層の成層については、廃棄もしくは埋め戻し等の人為堆積状況を呈する。全体的に焼土粒、炭化粒等が含まれる。本遺構の第3層からは、炉壁（溶解物を含む）102g、流動滓58g、椀形鍛冶滓3,032g、椀形鍛冶滓（含鉄）1,198g、含鉄鉄滓76g、鉄器62g、総重量4,528gの鍛冶関連遺物が出土している。近隣に存在した鍛冶炉からの排出物を廃絶した本遺構に廃棄したと考えられる。

（木 村）

S I - 24（第120、121図）

[位置] グリッドL V・L W - 295・296で検出した。

[重複] S I - 23と重複している。本遺構がS I - 23の堆積土に切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 方形を呈し、356×330×34cmを測る。床面積は11.526㎡を測る。

[壁] S I - 24の重複部分について住居の約半分が削平を受けており、住居北側の壁の情報は不明である。残存している壁の壁高は、東壁9cm、南壁10cm、西壁28cmを測る。断面形はdで、一部垂直に近い形で立ち上がる部分も見られるが、緩やかに外傾しながら立ち上がる。残存している壁面については、堅緻である。

[床] 住居北半分は、大谷火山灰層の地山を床面としており堅緻である。南半分は浅い掘り方を持ち、月見野火山灰層ベースの地山土とローム土の混合層を貼り床としている。床面は、貼り床部分は若干起伏を持ち、やや脆弱である。

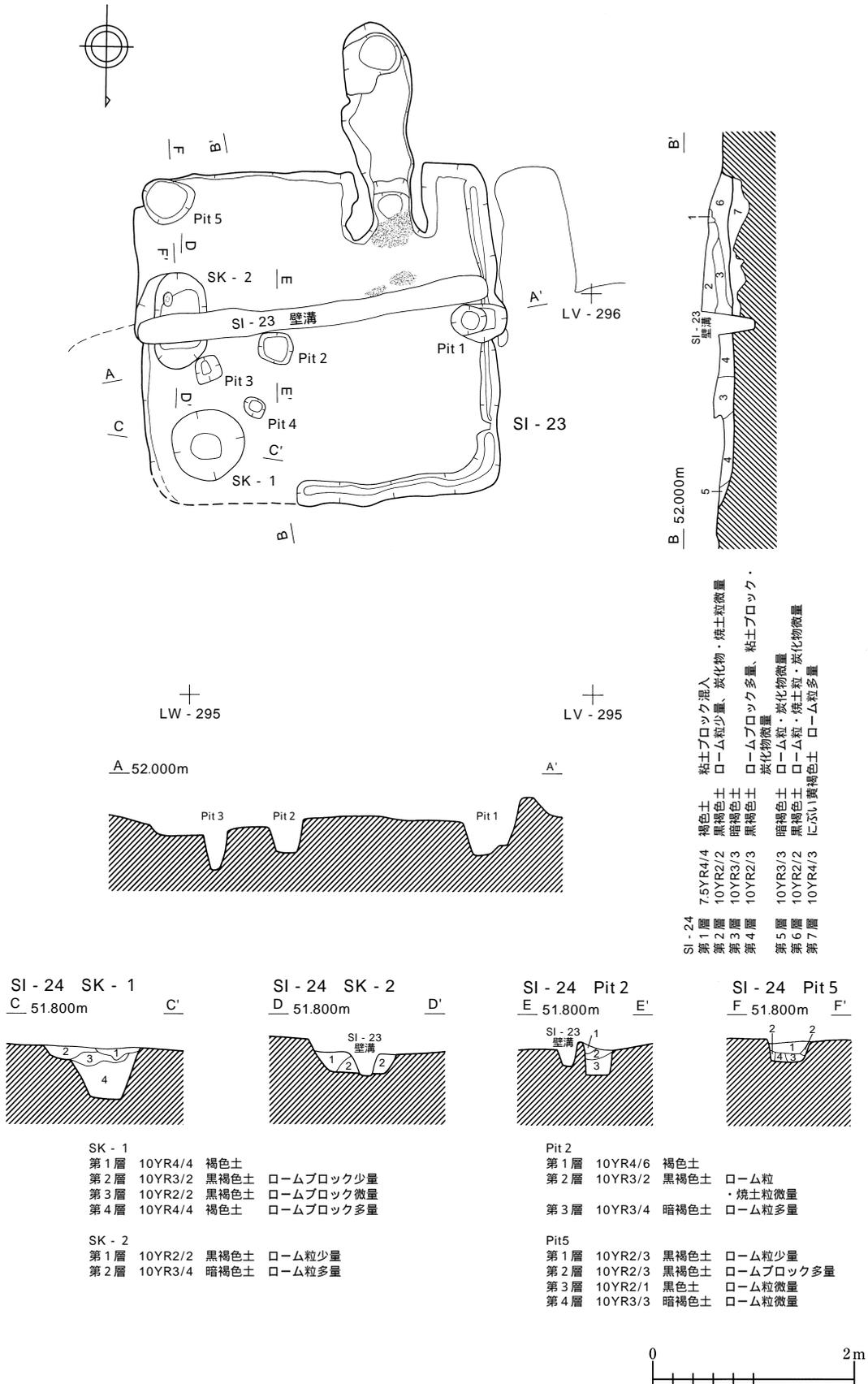
[壁溝] 住居北壁側から西壁にかけてL字状に検出した。深さは平均14cmである。

[ピット] 住居内から5基検出した。S I - 23の[ピット]の記述でも触れたが、切りあい関係のS I - 24の柱穴配置に関連があるピットが2基（Pit 1、Pit 2）ある。S I - 23の床面がS I - 24の混合した堆積土上に形成されており、ピットの下部で平面確認した恐れもある。各ピットの規模は、Pit 1 = 52×31×32cm、Pit 2 = 35×30×28cm、Pit 3 = 26×25×38cm、Pit 4 = 23×19×20cm、Pit 5 = 49×45×25cmを測る。

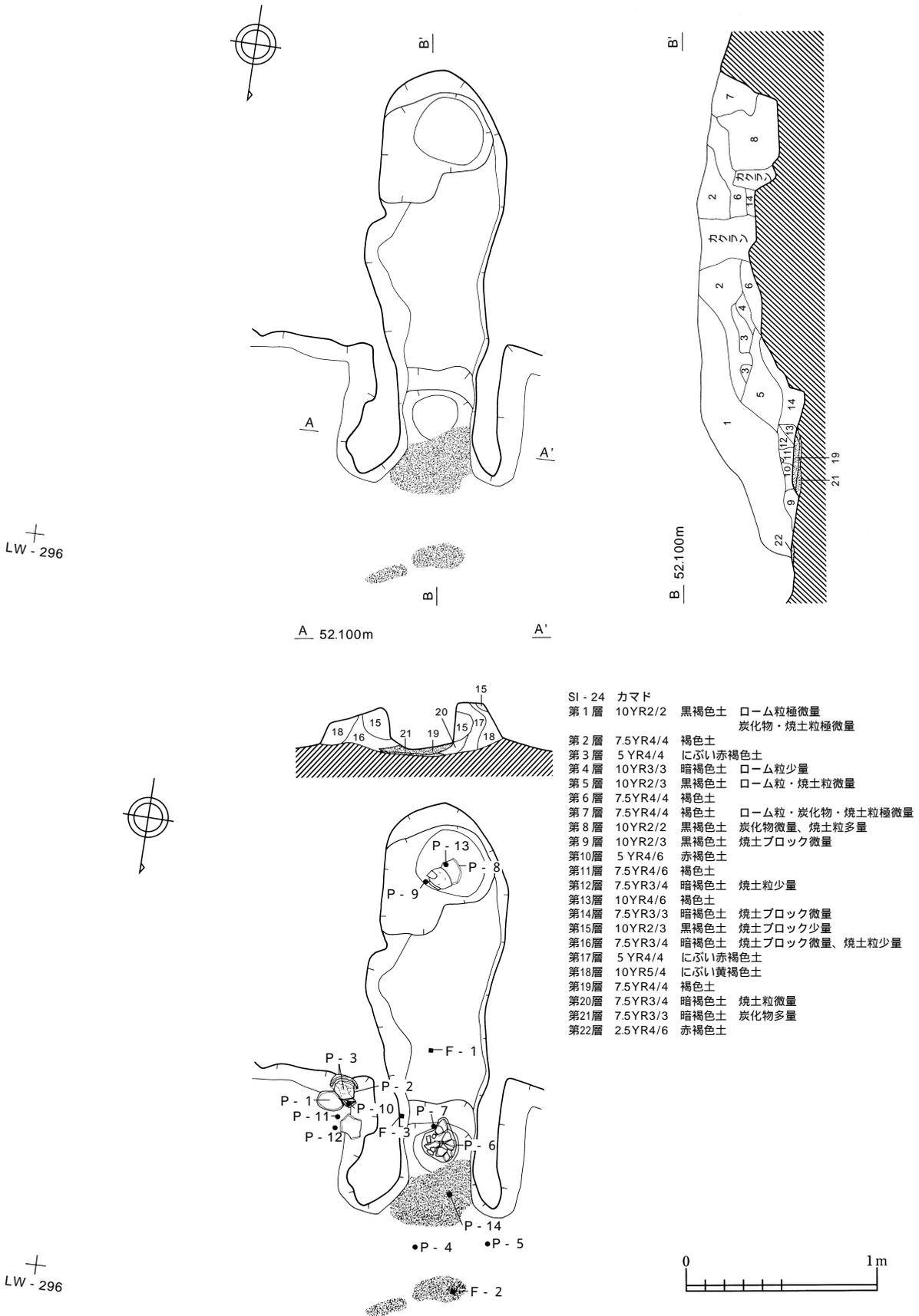
[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3（71：29）の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅94cm、煙道長158cmを測る。主軸はN - 174° - Eである。構築は、粘土による構築である。燃焼部付近の土層は、ブロック状につぶれた状況を呈しており、廃絶に際して破壊等の可能性がある。煙道部天井は第6・14層が相当し、崩落の様相を呈する。煙道は壁際から住居壁に沿って25°の角度で立ち上がり、途中で5°に角度を変え、起伏を持ちながら煙出部へ向かう。

煙出部はピット状に掘り込まれており、煙出奥壁は外傾しながら立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居内から土坑2基を検出した。S K - 1は住居北壁東隅から検出した。規模は72×71×50cmを測る。S K - 2は住居東壁寄り中央から検出した。規模は97×51×19cmを測る。S I - 23の壁溝に土層が切られている。住居の土層堆積との比較から住居廃絶時点で土坑は開口して



第120図 SI - 24



第121図 SI - 24

いたものと考えられる。

[堆積土] 掘り方を含め7層に分層した。堆積土全般にロームブロック・ローム粒、炭化物等が含まれ、人為的堆積状況を呈する。S I - 23の構築に際してカマドの構造、住居の主軸等あまり変化が見られないため、両遺構の変遷関係についてはS I - 24の廃絶からS I - 23の構築にかけてそれほど時間差は生じなかったものと考えられる。

(木村)

S I - 27 (第122図)

[位置] グリッドLR - 297・298で検出した。

[重複] S I - 28と重複している。本遺構がS I - 28の堆積土を切っており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 不整形を呈し、324×264×38cmを測る。床面積は8.825㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁19cm、東壁12cm、南壁29cm、西壁35cmを測る。断面形はdで、緩やかに立ち上がる。壁面は、S I - 28との切りあい部分は脆弱でそれ以外の壁については堅緻である。

[床] 床面は東向きに傾斜している。東側の部分は掘り方を有し、床面部分もその掘り方埋土上にあたり脆弱である。それ以外の部分は地山部分を床面としており、堅緻である。

[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から1基検出した。ピットの規模は36×27×51cmを測る。土層堆積において、上層に地山土主体のロームブロックが堆積しており、主柱穴として機能した後、廃棄に際して柱を抜き取り埋め戻している。

[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁3(71:29)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部残存幅98cm、煙道長25cmを測る。主軸はN - 107° - Eである。土層堆積において焼土ブロックならびに黄褐色土地山ブロック等カマド構築材がブロック状に混入して見られることと、芯材の可能性がある羽口が破片化した状態で焚口付近から出土していることから廃絶の時点でカマドの破壊がされた可能性がある。構築材については、前述のとおり、転用羽口、粘土の利用が考えられる。煙道は、住居壁際から30°の角度で傾斜し、途中で角度を変え、25°の角度でやや段を持ちながら立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方を含めて7層に分層した。床直に堆積する土層は地山土を主体とする土層で人為的堆積状況を呈する。

(木村)

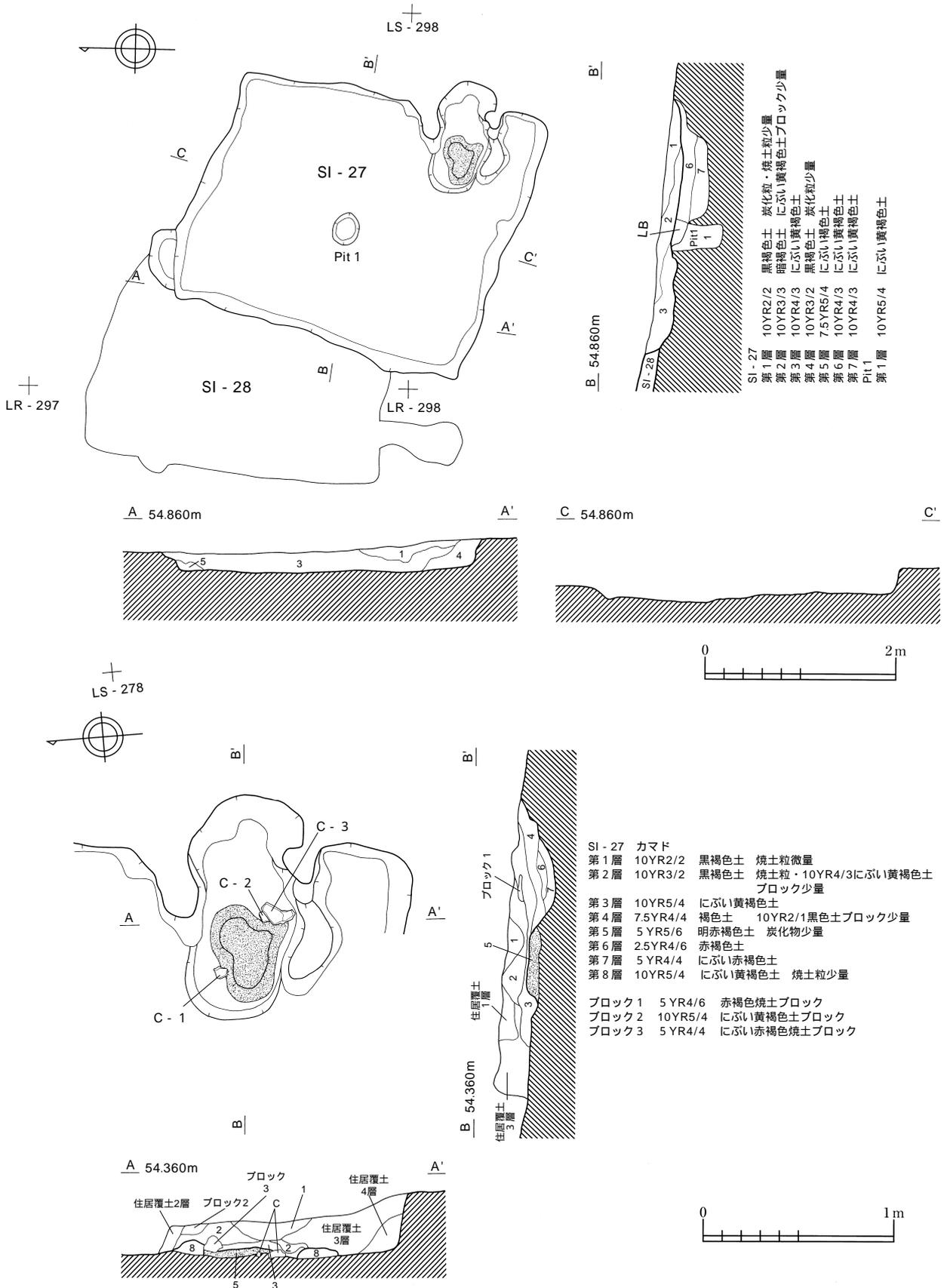
S I - 28 (第123図)

[位置] グリッドLQ・LR - 297で検出した。

[重複] S I - 27と重複している。本遺構の堆積土がS I - 27に切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 切りあいのため東壁側の情報が欠落しているが、残存している部分から台形を呈したと考えられる。300×(212)×41cmを測る。床面積は残存で(7.04)㎡を測る。

[壁] 切りあいのため、東壁側は残存していない。残存部分の壁高は、北壁5cm、南壁17cm、西壁



第122図 SI - 27

21cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 局所的に掘り込みがあるが、地山を床面としており、やや東向きに傾斜している。床面は堅緻である。また、北壁西隅の床面から炭化材が伴う赤化面を83×36cmの範囲で検出した。

[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から3基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 33×26×35cm、Pit 2 = 35×34×16cm、Pit 3 = 24×19×35cmを測る。主柱穴は、Pit 1、3で住居の主軸と軸線がずれた2本柱である。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。位置については東壁が切られているため推定位置であるが、南壁3((69):(31))の位置であったと考えられる。構造は、地下式で、袖部幅72cm、煙道長85cmを測る。主軸はN-168°-Wである。支脚として自然礫が設置されている。土層堆積において燃焼部付近については天井部ならびに袖部の崩落土等が堆積しておらず、ブロック状に少量検出されるのみであった。煙道は、住居壁際から25°の角度で煙出部に向かって傾斜しており、煙出部付近ではほぼ平坦になり、緩やかに外傾しながら立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 切りあいのため全容は不明であるが、残存部分について5層に分層した。ロームブロック、焼土粒ならびに炭化粒等を多く含む土層が住居中央部にかけて堆積しており、人為的堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 29 (新)(第124~126図)

[位置] グリッドLS・LT-297・298で検出した。

[重複] S I - 29 (旧)と重複している。本遺構がS I - 29 (旧)の上に構築されているため、本遺構の方が新しい。

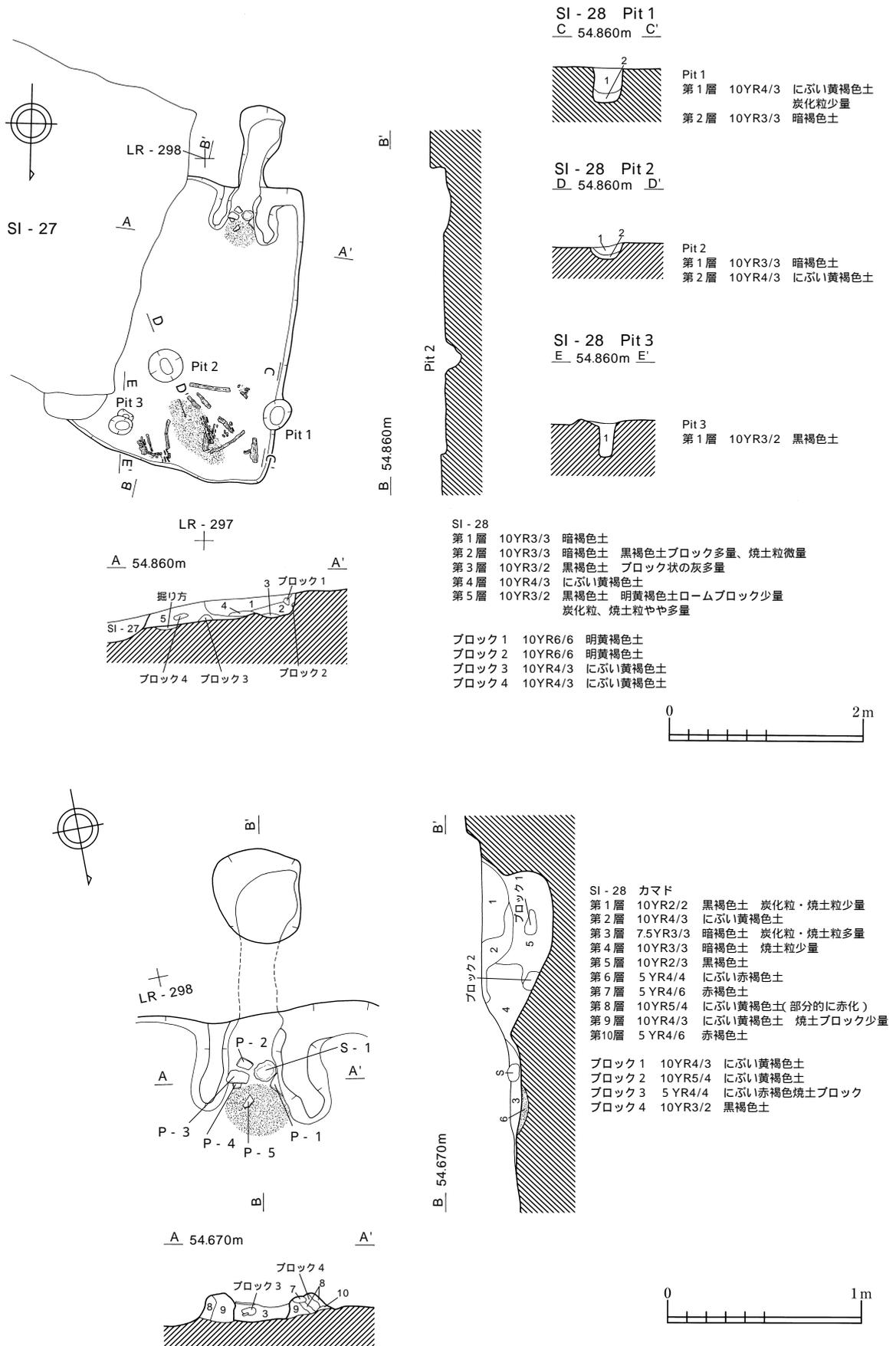
[平面形・規模] 方形を呈し、570×548×86cmを測る。床面積は30.852㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁48cm、東壁19cm、南壁37cm、西壁80cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

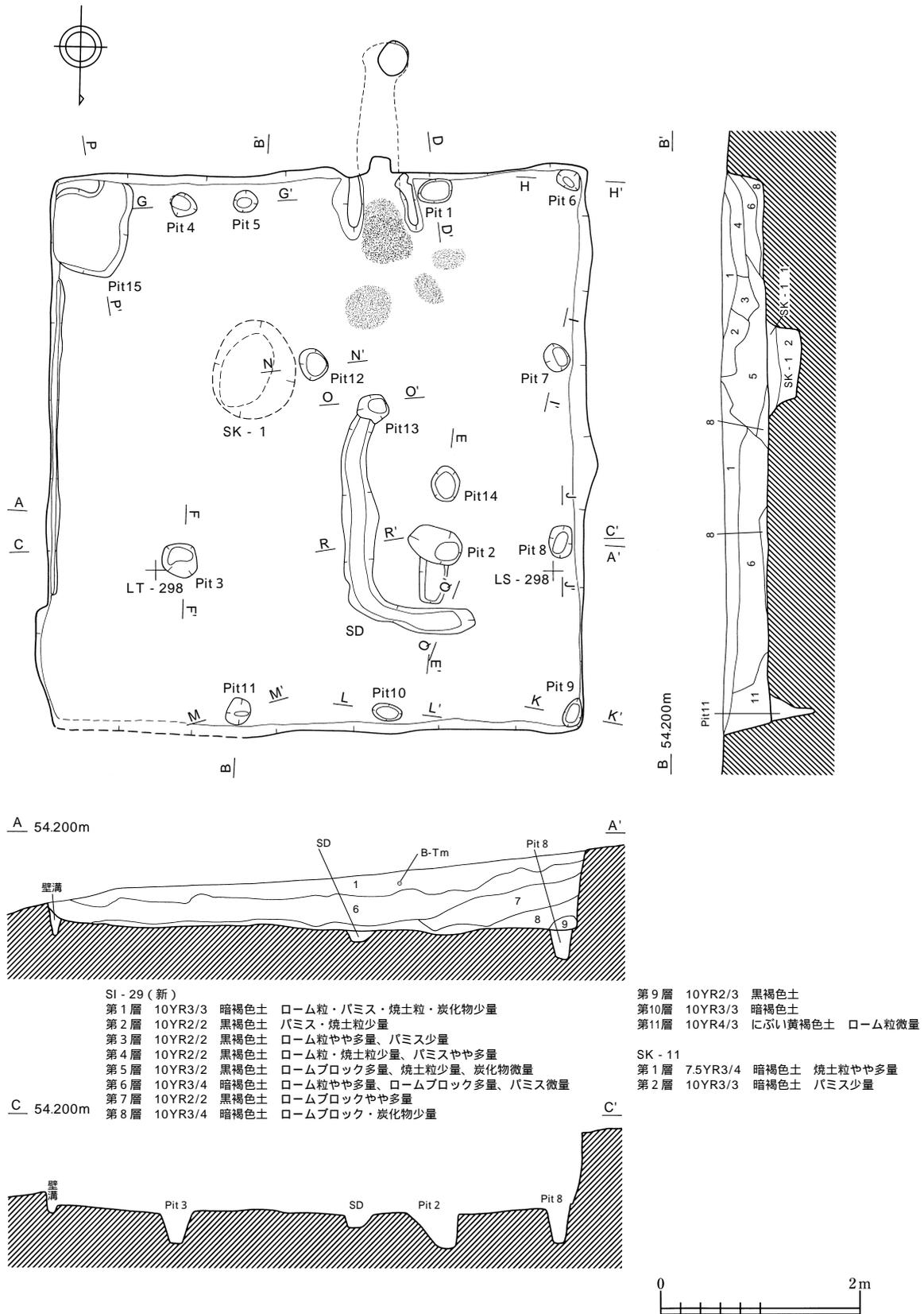
[床] S I - 29 (旧)の重複部分については、大谷火山灰層ベースの地山土を他の床面と同じ高さに貼っている。他の床面は地山を床面としている。床面は比較的堅緻である。

[壁溝] 東壁側から部分的に検出した。深さは17cmを測る。他の壁については、壁柱穴を検出しており、構造的に壁溝が必要でなかったものと考えられる。

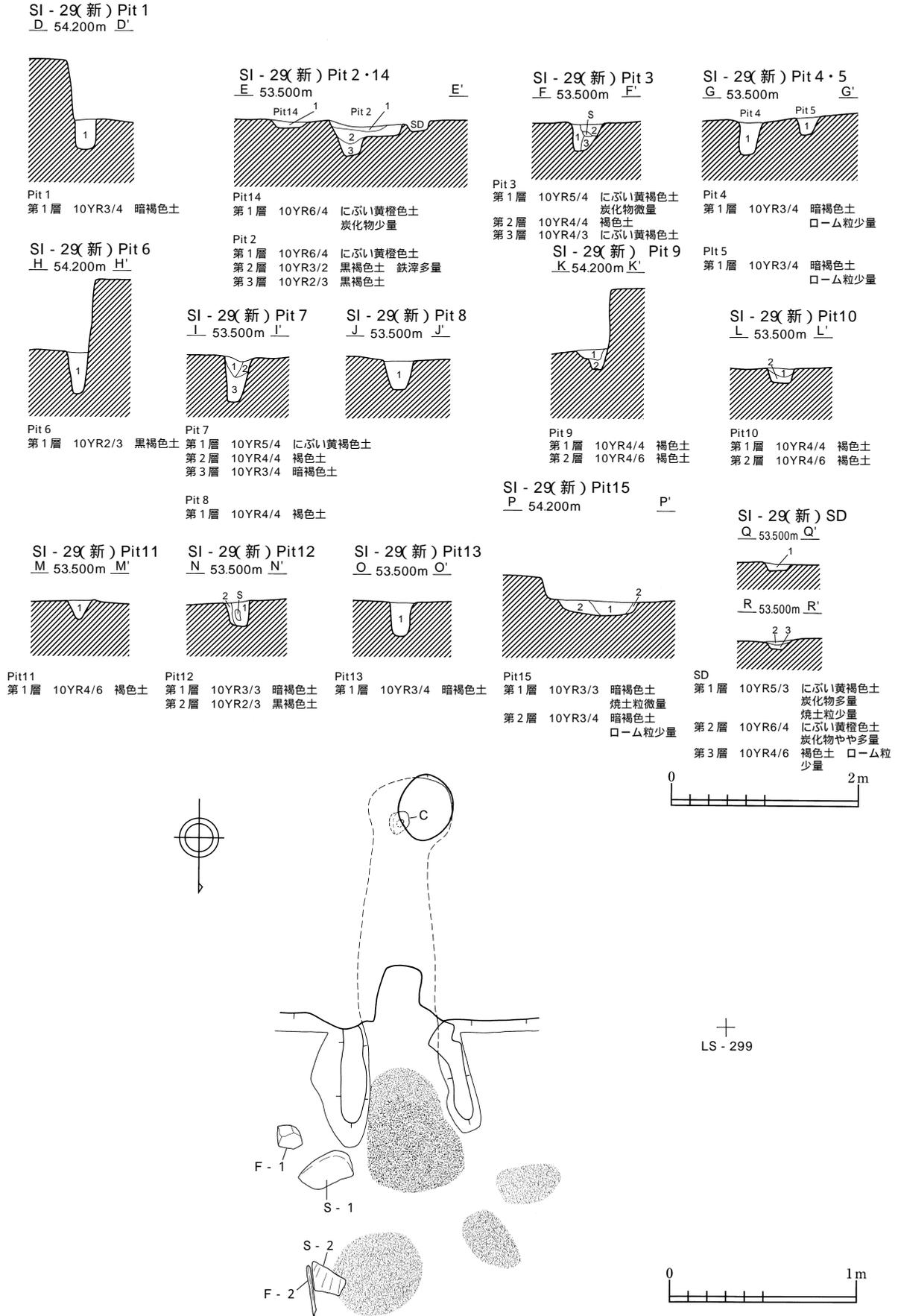
[ピット] 住居内から15基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 35×25×33cm、Pit 2 = 55×35×37cm、Pit 3 = 39×35×31cm、Pit 4 = 27×24×35cm、Pit 5 = 25×22×18cm、Pit 6 = 26×19×46cm、Pit 7 = 29×24×49cm、Pit 8 = 32×22×32cm、Pit 9 = 31×19×20cm、Pit 10 = 30×13×15cm、Pit 11 = 26×23×20cm、Pit 12 = 32×27×28cm、Pit 13 = 32×25×37cm、Pit 14 = 36×28×8cm、Pit 15 = 103×85×15cmを測る。主柱穴として機能したと考えられるピットはPit 1~4で、壁柱穴はPit 5~11である。住居東壁側から壁柱穴が検出しなかったのは、[壁溝]での記述のとおり板壁の存在が影響しているものと考えられる。Pit 2には抜き取り痕があり、抜き取った跡には、鉄滓や炭化物・焼土粒を含む土層の堆積があった。



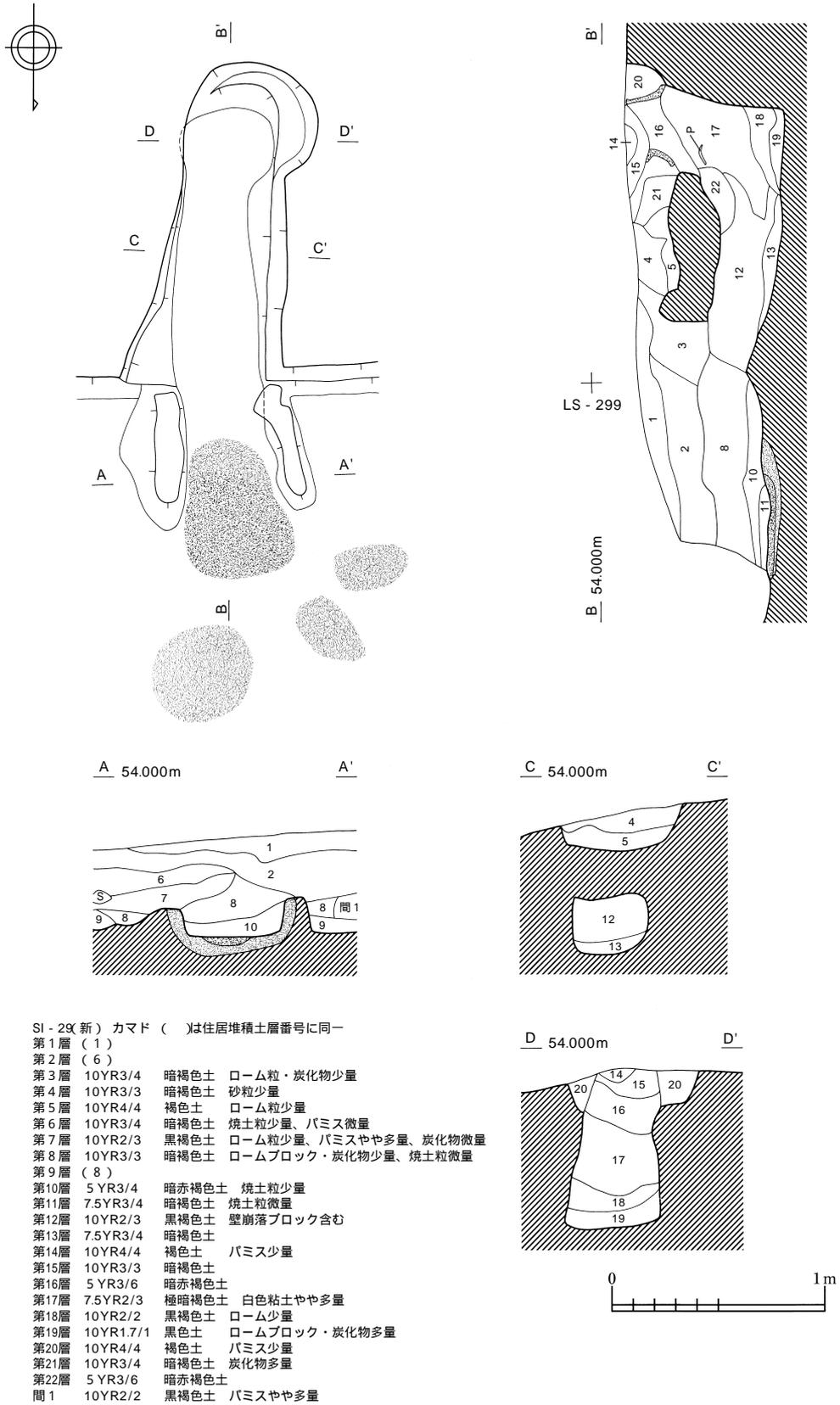
第123図 SI - 28



第124図 SI - 29(新)



第125図 SI - 29(新)



第126図 SI - 29(新)

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(56:24)の位置から検出している。構造は、地下式で、燃焼部において袖部上面ならびに天井が残存していないが、残存長で袖部幅88cm、煙道長134cmを測る。主軸はN-178°-Eである。芯材ならびに支脚は出土していない。土層堆積において燃焼部付近については、天井・袖部崩落土の一部が第10層にあたる。また、ブロック化した構築材がその上位の第8層中に混入している。煙道は住居壁際から22°の角度で傾斜し、途中で緩やかな起伏を持ちながら煙出部に向かって立ち上がる。煙出部上面は掘り方を持ち、地山土を掘り方に貼り付けている。また、焚口周辺から火床面以外に硬化した赤化面を3ヶ所検出した。その赤化面の脇から台石ならびに金箸1点が出土した。カマド左袖脇からも同様の台石が2点出土しており、鉄生産の鍛冶関連の作業が本遺構内において行われた可能性が考えられる。

[その他の付属施設] 住居中央部よりやや西壁寄りの部分から溝跡1条を検出した。逆L字状の形状を呈し、堆積土中に焼土粒、炭化物等が多く含まれる。Pit2の上層の堆積と関連性が考えられ、カマド周辺部と同様、鉄生産関連施設の可能性がある。

それ以外に土坑1基を検出した。規模は100×81×34cmを測る。第1層には焼土粒が多量に含まれている。

[堆積土] S I - 29(旧)との重複部分を除き11層に分層した。住居南壁側の土層堆積が乱れており、攪乱されている可能性もあるが、焼土粒・炭化物等の混入要素から人為的な埋め戻し等の可能性についても考えられる。第1層中からB-Tm火山灰を粒状に検出した。本遺構から出土した鍛冶関連遺物は、炉壁(溶解物を含む)722g、椀形鍛冶滓4,769g、椀形鍛冶滓(含鉄)806g、鉄塊系遺物L()14g、()46g、その他(工具痕付滓)60g、総重量6,697gである。なお、椀形鍛冶滓5,049gの中には、直径30cm程度と推定できる特大サイズの椀形鍛冶滓2,735gが含まれている。

(木村)

S I - 29(旧)(第127、128図)

[位置] グリッドLS・LT-297・298で検出した。

[重複] S I - 29(新)と重複している。本遺構の上面にS I - 29(新)が構築されており、本遺構の方が古い。

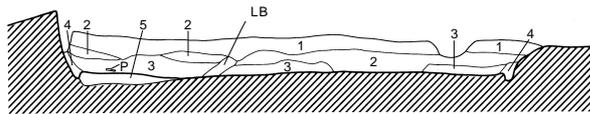
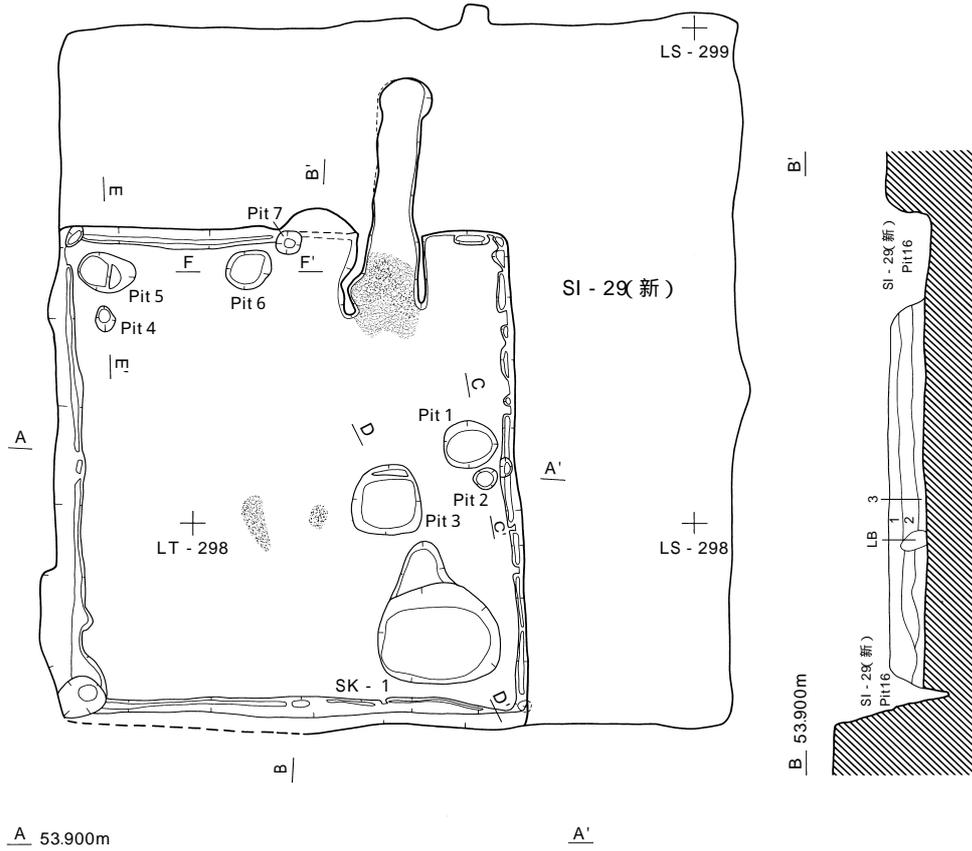
[平面形・規模] 方形を呈し、406×370×72cmを測る。床面積は15.012m²を測る。

[壁] 西壁ならびに南壁の上面がS I - 29(新)によって切られているため、全容は不明であるが、北壁71cm、東壁60cm、南壁(34)cm、西壁(26)cmを測る。断面形はcで、壁上部で一部緩やかな傾斜が見られる。壁面は堅緻である。

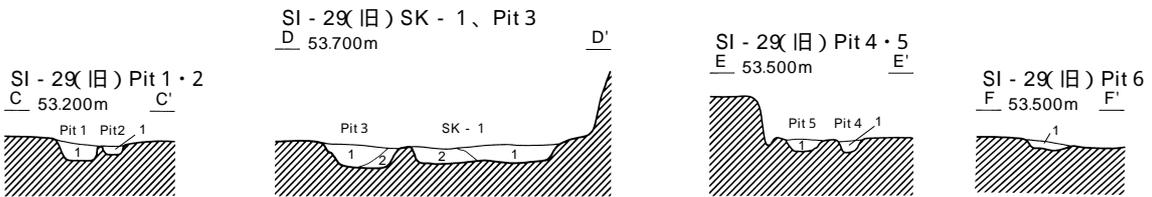
[床] 住居東壁側の一部に掘り方を持ち、貼り床を床面としているが、それ以外の部分については大谷火山灰層の地山を床面としており、若干起伏を持つ。床面は比較的堅緻である。住居中央部から41×18cm、20×14cmの赤化面を2ヶ所検出した。

[壁溝] 断続しながらほぼ全周して検出した。住居隅ならびに壁の中央部付近に浅い柱穴状の掘り込みが併存していたことから壁柱穴+板壁として機能していたことが考えられる。壁溝の深さは8cmを測る。

[ピット] 住居内から7基検出した。それ以外に前述のとおり、壁溝内に浅い掘り込みを数基検出している。各ピットの規模は、Pit1=44×39×16cm、Pit2=21×17×8cm、Pit3=57×56×



- SI - 29(旧)
- 第1層 10YR4/4 褐色土 炭化物微量、砂粒少量 (SI-29(新)の貼床)
 - 第2層 10YR4/6褐色土と10YR5/6黄褐色土の混合層 黒褐色土少量
 - 第3層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック多量
 - 第4層 10YR3/4 暗褐色土
 - 第5層 10YR4/6褐色土と10YR5/6黄褐色土の混合層



Pit 1
第1層 10YR3/2 黒褐色土

Pit 2
第1層 7.5YR3/4 暗褐色土 炭化物少量

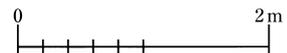
SK-1
第1層 10YR4/6 褐色土 黒褐色土少量
第2層 10YR4/6 褐色土 黒褐色土やや多量 焼土ブロック少量

Pit 3
第1層 10YR4/6 褐色土 砂粒少量
第2層 10YR3/2 黒褐色土

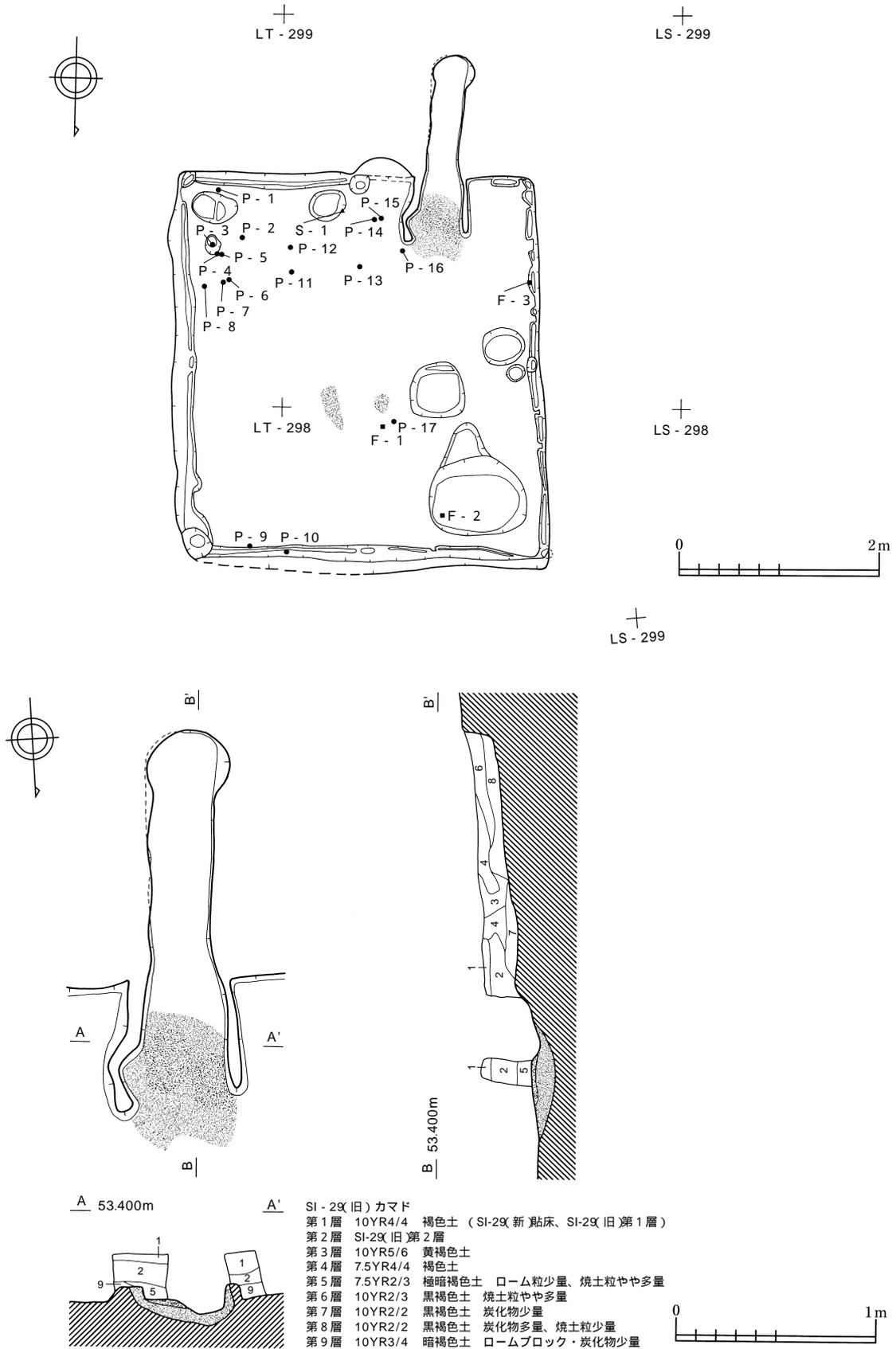
Pit 4
第1層 10YR3/2 黒褐色土 炭化物少量

Pit 5
第1層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物少量、焼土粒やや多量

Pit 6
第1層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物やや多量、焼土粒少量



第127図 SI - 29(旧)



第128図 SI-29(旧)

20cm、Pit 4 = 21 × 16 × 11cm、Pit 5 = 47 × 31 × 10cm、Pit 6 = 36 × 31 × 9 cm、Pit 7 = 20 × 19 × 9 cmを測る。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁4(75:25)の位置から検出している。構造は、煙道部上面がS I - 29(新)によって切られているため、詳細は不明であるが、煙道下部の構造から地下式であったと推定される。袖部幅72cm、煙道長127cmを測る。主軸はN - 178° - Wである。芯材ならびに支脚は出土していない。土層堆積において、燃焼部付近については、天井・袖部崩落土の一部が第5層にあたる。それ以外の土層についてはS I - 29(新)構築時点で破壊されており、堆積土にカマド構築土は残存していない。煙道は燃焼部から住居壁際に向かって住居壁面に沿うように約50°の角度で立ち上がり、煙道部では2°の角度で煙出部へ向かって立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居北壁西隅から土坑1基を検出した。規模は98 × 81 × 16cmを測る。

[堆積土] 掘り方を含めて5層に分層した。第1層はS I - 29(新)の貼り床である。第2～4層については、褐色土・黄褐色土の地山土主体でロームブロックが混入することから急激な埋め戻しが行われた人為的堆積状況を呈する。第5層は壁溝構築前に掘り込みが行われており、掘り方と判断した。S I - 29(旧)の廃絶からS I - 29(新)の構築にかけての時間幅は、急激なS I - 29(旧)の埋め戻しが伴って構築されており、連続したものであったことが考えられる。

(木村)

S I - 30(第129図)

[位置] グリッドLP・LQ - 299・300で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、356 × 346 × 40cmを測る。床面積は11.918㎡を測る。

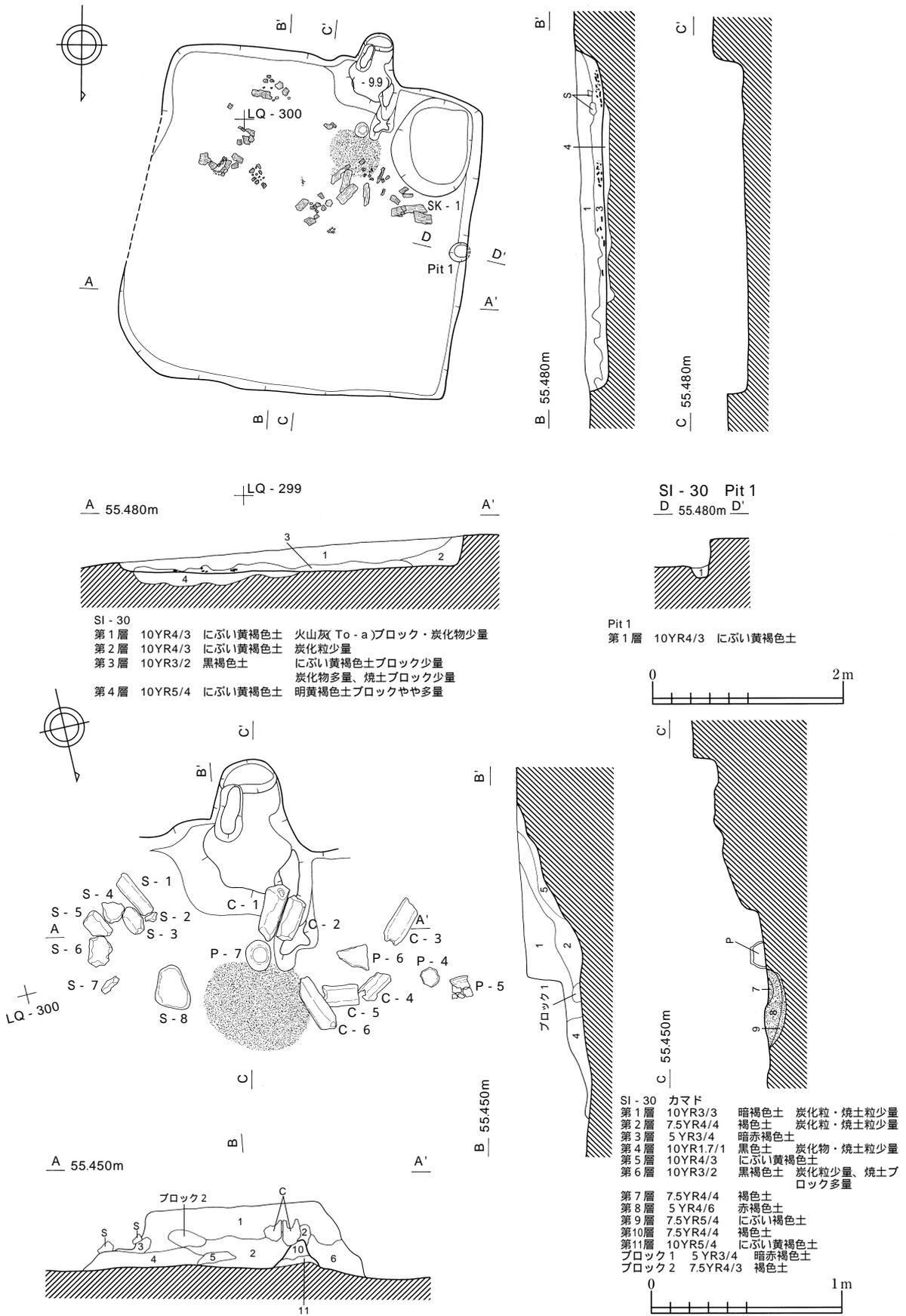
[壁] 壁高は、北壁20cm、東壁7cm、南壁25cm、西壁31cmを測る。断面形はdで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 住居東壁～南壁にかけて掘り方を持ち、月見野火山灰層の地山ブロックが充填されており、やや脆弱である。それ以外の部分については大谷火山灰層の地山を床面としており、堅緻である。床面はほぼ平坦である。また、南壁側の床面直上から炭化材が出土している。

[壁溝] なし。

[ピット] 西壁際中央部から1基検出した。規模は21 × 20 × 11cmを測る。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(63:37)の位置から検出している。構造は、半地下式で破壊が激しく、燃焼部はほとんど残存しておらず、煙道長69cmを測る。主軸はN - 169° - Wである。カマド周辺部から多量の羽口、自然礫等が出土しており、構築材として利用された可能性が考えられる。また、支脚として土師器椀が倒位に設置されている。煙道部が住居内に入り込んだ形で作られており、焚口部分についても他の住居のカマドに比べて住居内に入り込んだ位置にある。煙道は、住居壁際より35cm住居内に入った位置から住居壁と平行になる70°の角度で立ち上がり、途中で20°に角度を変え、煙出部へ向かってやや起伏を持ちながら立ち上がる。煙出は浅いピット状に掘り込まれている。煙道部天井の土層は第2層にあたり、崩落したものと考えられる。燃焼部の袖、天井の土層がカマド堆積土に残存していない点とカマド周辺部に芯材と考えられる遺物が散逸して出土した状況ならびに、床面直上から炭化材が出土している状況を踏まえるとカマドの燃焼部は、破壊された可能性が考



第129図 SI - 30

えられる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方を含めて4層に分層した。[床] での記述のとおり、床面直上から炭化材が出土しており、その炭化材が包含される第3層からは、他に焼土ブロック、地山ブロック等が含まれている。床面から赤化面が検出しなかった点と出土炭化材がカマド側に集中していること、ならびにカマドが破壊されている点から住居の廃絶に際して廃棄の要素があるため、焼失住居として明確に認定はできない。第1層中からTo-a火山灰をブロック状に少量検出した。

(木村)

SI-31 (第130~132図)

[位置] グリッドLQ・LR・LS-299・300で検出した。

[重複] SK-44と重複している。本遺構の壁がSK-44に切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 長方形を呈し、624×556×76cmを測る。床面積は34.926㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁25cm、東壁12cm、南壁44cm、西壁60cmを測る。断面形はcで、壁の一部で緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面は、西壁を除いて一部上面が黒褐色土層を壁面としておりやや脆弱である。

[床] 北壁ならびに東壁に掘り方を持ち、褐色土、黒褐色土等が充填されているが若干起伏があり脆弱である。それ以外の部分については、大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦で堅緻である。

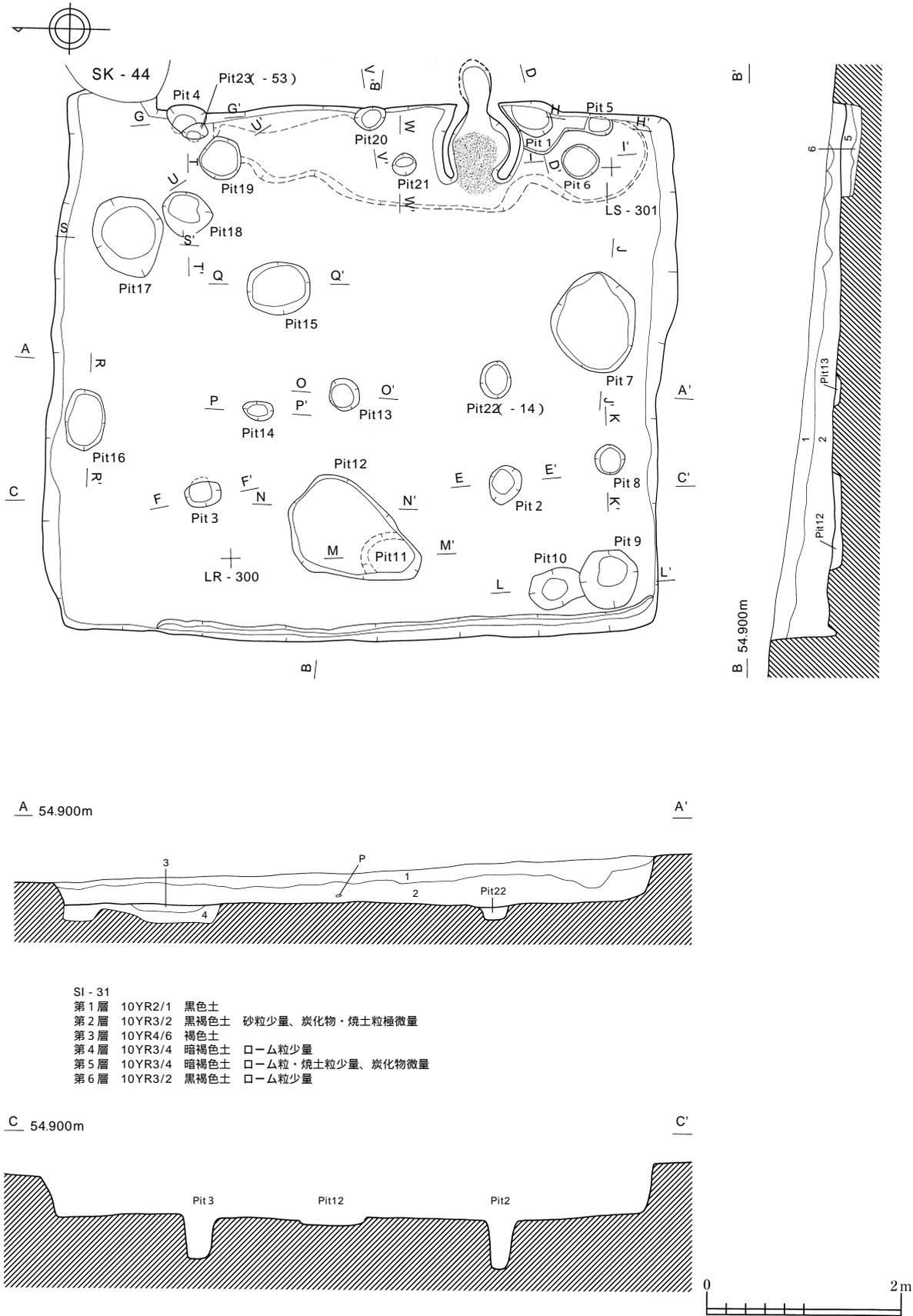
[壁溝] 住居西壁側から検出した。深さは9cmを測る。

[ピット] 住居内から23基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 38×35×40cm、Pit 2 = 41×33×41cm、Pit 3 = 37×26×35cm、Pit 4 = 40×32×28cm、Pit 5 = 28×23×28cm、Pit 6 = 39×36×10cm、Pit 7 = 107×85×8cm、Pit 8 = 31×31×4cm、Pit 9 = 60×59×18cm、Pit10 = 54×39×9cm、Pit11 = 62×50×6cm、Pit12 = 110×103×6cm、Pit13 = 35×31×4cm、Pit14 = 32×20×5cm、Pit15 = 65×55×10cm、Pit16 = 65×41×7cm、Pit17 = 85×72×26cm、Pit18 = 53×45×19cm、Pit19 = 45×42×6cm、Pit20 = 33×25×15cm、Pit21 = 25×22×13cm、Pit22 = 40×30×14cm、Pit23 = 26×15×53cmを測る。主柱穴は、Pit 1～4で、Pit 4については、Pit23によって切られており、Pit23については主柱穴として充足できる深さを持つため、柱の建て替えが行われた可能性がある。また、カマドが設置されている東壁は、主柱穴以外にPit5、Pit20と壁柱穴として機能したと考えられるピットも検出しており、斜面下の柱を支える補助柱として併存したことが考えられる。

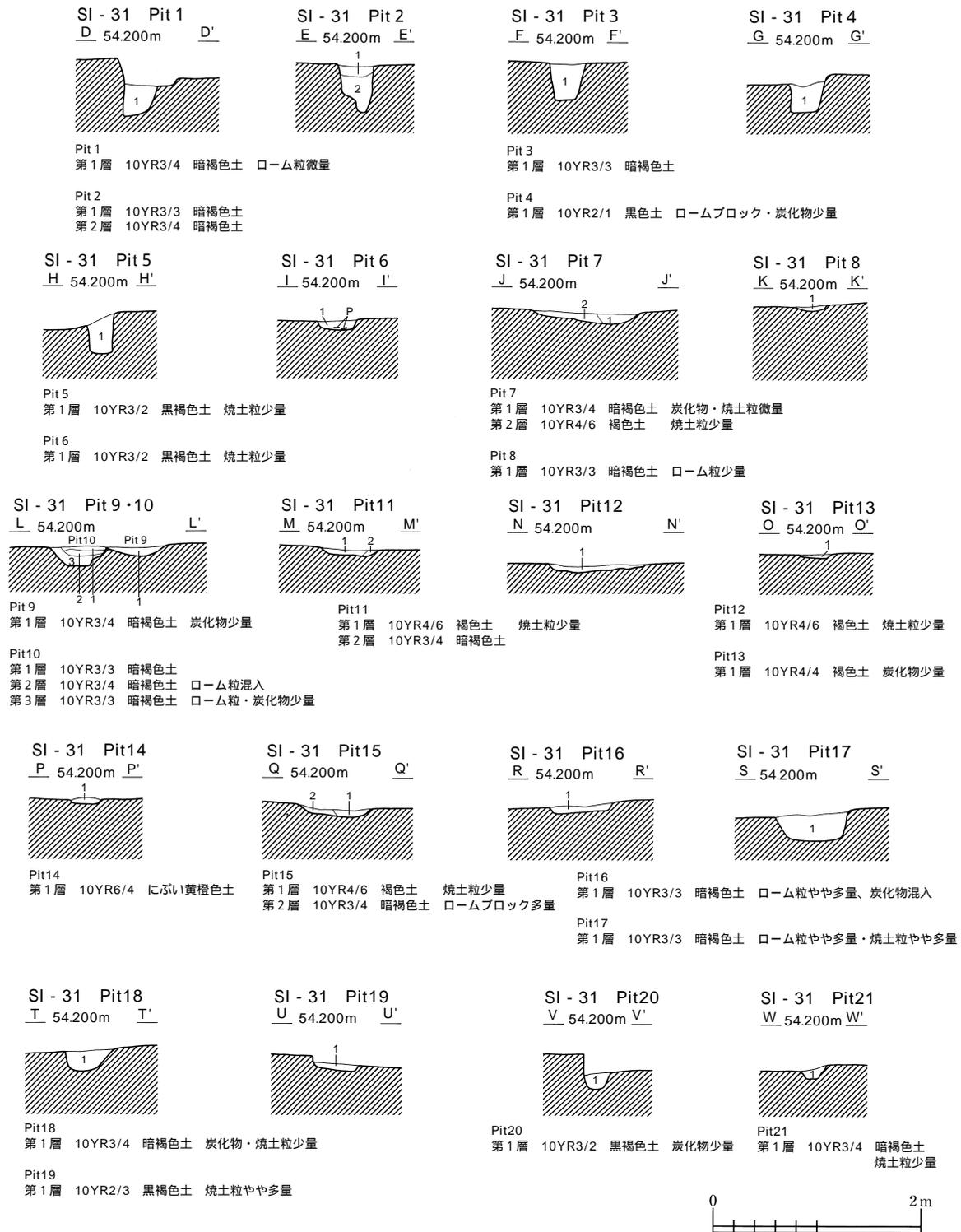
[カマド] 住居東壁から1基検出した。東壁3(67:33)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅93cm、煙道長47cmを測る。主軸はN-91°-Eである。燃焼部天井については、一部第6層が相当し、カマド右袖脇に芯材と考えられる自然礫や土器が散乱して出土していることから、破壊されていると考えられる。燃焼部の構築材は、転用羽口、自然礫を芯材とし、粘土を使っている。支脚として角状羽口と土師器椀を倒位に重ね組み合わせたものと、土師器椀を倒位に2枚重ねたものを2列設置している。煙道は、燃焼部から緩やかに10°の角度で立ち上がっている。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方を含め6層に分層した。住居廃絶後の堆積土第2層には砂粒を含み、自然堆積の様



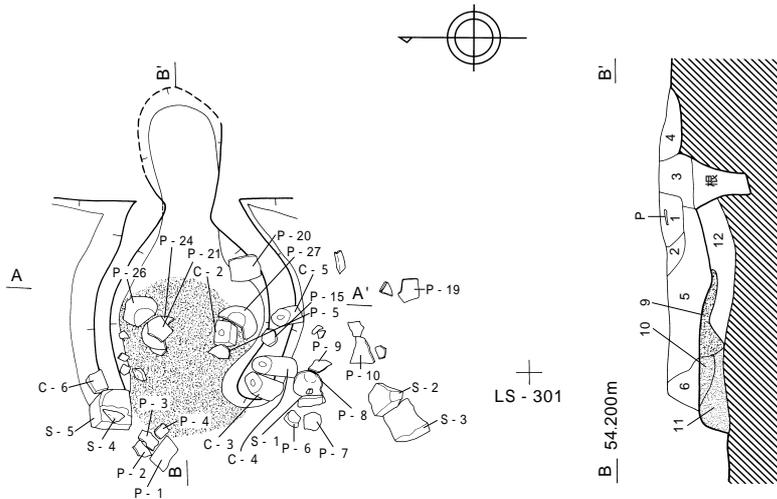
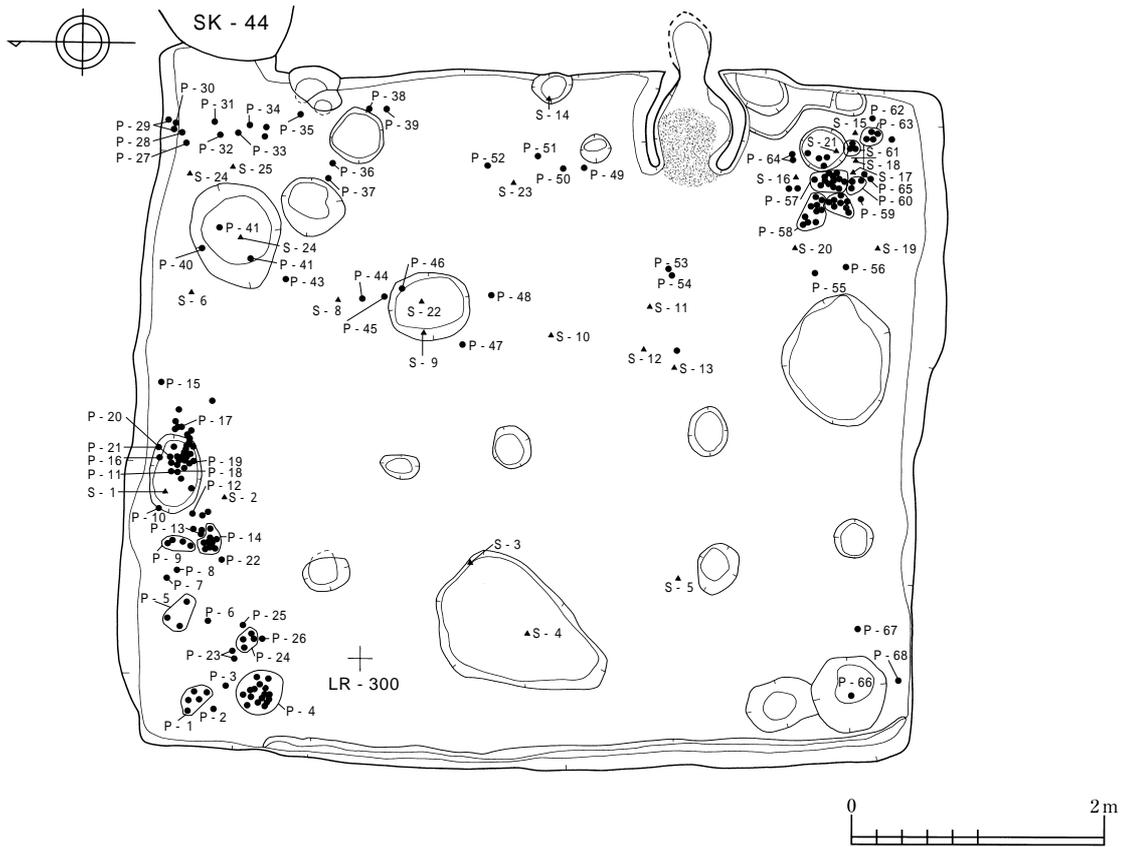
第130図 SI - 31



第131図 SI - 31

相を呈する。また、本遺構から床面ならびに床面直上から多量の土器が出土した。北壁際から出土した土師器甕（P - 9、13、14、17、19、20、22）については、S I - 58覆土出土の破片と接合関係がある。出土遺物の帰属については、住居廃絶直後の廃棄に伴う可能性が高いと考えられる。

（木村）



- SI - 31 カマド
- | | | | |
|------|----------|---------|--------|
| 第1層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第2層 | 5 YR4/4 | にぶい赤褐色土 | |
| 第3層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 口-ム粒少量 |
| 第4層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | |
| 第5層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第6層 | 5 YR4/6 | 赤褐色土 | |
| 第7層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土粒微量 |
| 第8層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | |
| 第9層 | 5 YR4/4 | にぶい赤褐色土 | |
| 第10層 | 7.5YR5/6 | 明褐色土 | |
| 第11層 | 5 YR4/8 | 赤褐色土 | |
| 第12層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 口-ム粒少量 |



第132図 SI - 31

S I - 32 (第133、134図)

[位置] グリッドL S・L T - 300・301で検出した。

[重複] 本遺構でS K - 1 ((169) × (145) × (69) cm) と取り扱った土坑1基と重複している。新旧関係はS K - 1が本遺構を切っており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 方形を呈し、418 × 408 × 74cmを測る。床面積は16.769㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁69cm、東壁25cm、南壁58cm、西壁58cmを測る。断面形はaで、垂直に立ち上がる。壁面は、上面が黒褐色土層を壁面としておりやや脆弱である。

[床] 東壁側に掘り方を持ち、月見野火山灰層主体の地山土が貼床として貼られている。床面は起伏がありやや脆弱である。また、住居北壁東隅、西壁中央、南壁中央から板状の炭化材が出土している。

[壁溝] 南壁の一部で断続が見られるが、カマド設置部分を除いてほぼ全周して検出した。深さは平均10cmを測る。

[ピット] 住居内から5基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 69 × 58 × 25cm、Pit 2 = 28 × 24 × 11cm、Pit 3 = 22 × 20 × 6 cm、Pit 4 = 90 × 70 × 17cm、Pit 5 = 25 × 25 × 24cmを測る。いずれも支柱穴として機能したものはないと考えられる。

[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁3 (69 : 31) の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅84cm、煙道長78cmを測る。主軸はN - 100° - Eである。燃烧部の天井については、土層堆積上に残存しておらず、煙道部天井についても同様であった。右袖には自然礫と転用羽口が芯材として利用されており、粘土をつかった構築である。また、支脚として土師器椀1点を倒置している。煙道は、段状の構造を持ち、住居壁面に沿って一度立ち上がり、4°の角度で傾斜し、煙道中央でもう一度段状に立ち上がった後、ほぼ平坦に煙出部へ立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居内北壁西隅から土坑2基を検出した。S K - 2は、114 × 83 × 29cmを測る。S K - 3は、128 × (87) × 20cmを測る。切りあっており、新旧関係については、S K - 2 < S K - 3である。S K - 3については、住居廃絶時に埋め戻しの堆積土が流入していることから廃絶時に開口していたものと考えられる。

[堆積土] 掘り方を含め11層に分層した。床面直上に堆積する第4層は炭化材の包含が見られた土層であるが、焼土ブロックやローム粒等を含み人為的堆積土である。さらにその上層の第2層には大谷火山灰層の地山土が堆積しており、本遺構の堆積については人為的堆積状況を呈する。また、S K - 1として取り扱った遺構の構築時点で堆積土の掘り返しが行われているため、住居南壁側の土層堆積においても影響が生じている。

(木村)

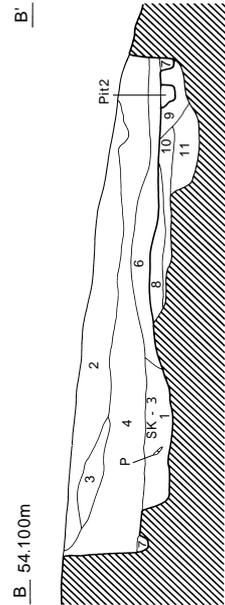
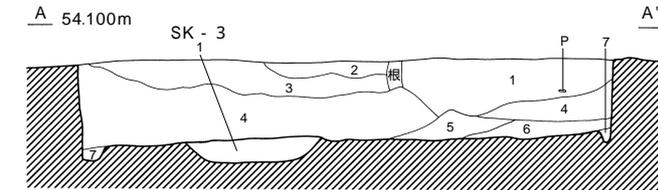
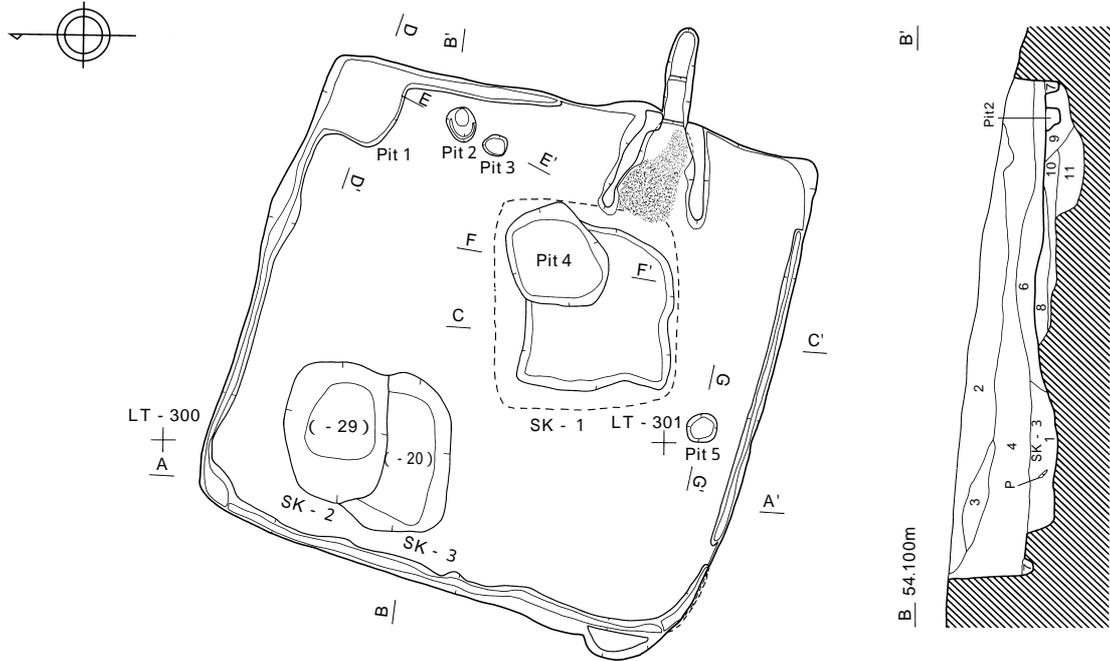
S I - 33 (第135、136図)

[位置] グリッドL I - 300・301で検出した。

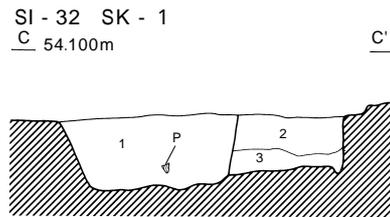
[重複] S I - 34と重複している。本遺構がS I - 34の堆積土を切っており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 台形を呈し、314 × 299 × 83cmを測る。床面積は9.208㎡を測る。

[壁] 壁高は、北東壁64cm、南東壁74cm、南西壁65cm、北西壁43cmを測る。断面形はaで、垂

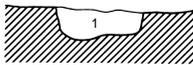


- SI - 32
- | | | | |
|------|-----------|---------|-----------------------|
| 第1層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ローム粒やや多量、炭化物少量、焼土粒微量 |
| 第2層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第3層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ロームブロック・炭化物少量 |
| 第4層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒やや多量、炭化物・焼土ブロック少量 |
| 第5層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒少量、炭化物多量 |
| 第6層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | ローム粒やや多量、炭化物多量 |
| 第7層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | |
| 第8層 | 10YR4/6 | 褐色土 | |
| 第9層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 砂質ローム多量 |
| 第10層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 黒褐色土少量、砂質・粘質ローム混入 |
| 第11層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 砂質ロームやや多量 |



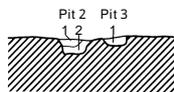
- SK - 1
- | | | | |
|-----|-----------|------|-----------------------|
| 第1層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒少量、炭化物やや多量 |
| 第2層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒少量、炭化粒微量 |
| 第3層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | ローム粒少量、炭化物多量
焼土粒少量 |
- SK - 3
- | | | | |
|-----|---------|------|--|
| 第1層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | |
|-----|---------|------|--|

SI - 32 Pit 1
D 53.400m D'



- Pit 1
- | | | | |
|-----|---------|------|---------|
| 第1層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 砂質ローム中量 |
|-----|---------|------|---------|

SI - 32 Pit 2・3
E 53.400m E'



- Pit 2
- | | | | |
|-----|---------|------|---------|
| 第1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | |
| 第2層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 砂質ローム中量 |
- Pit 3
- | | | | |
|-----|---------|------|---------|
| 第1層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 砂質ローム中量 |
|-----|---------|------|---------|

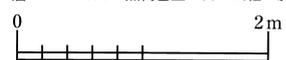
SI - 32 Pit 4
F 53.900m F'



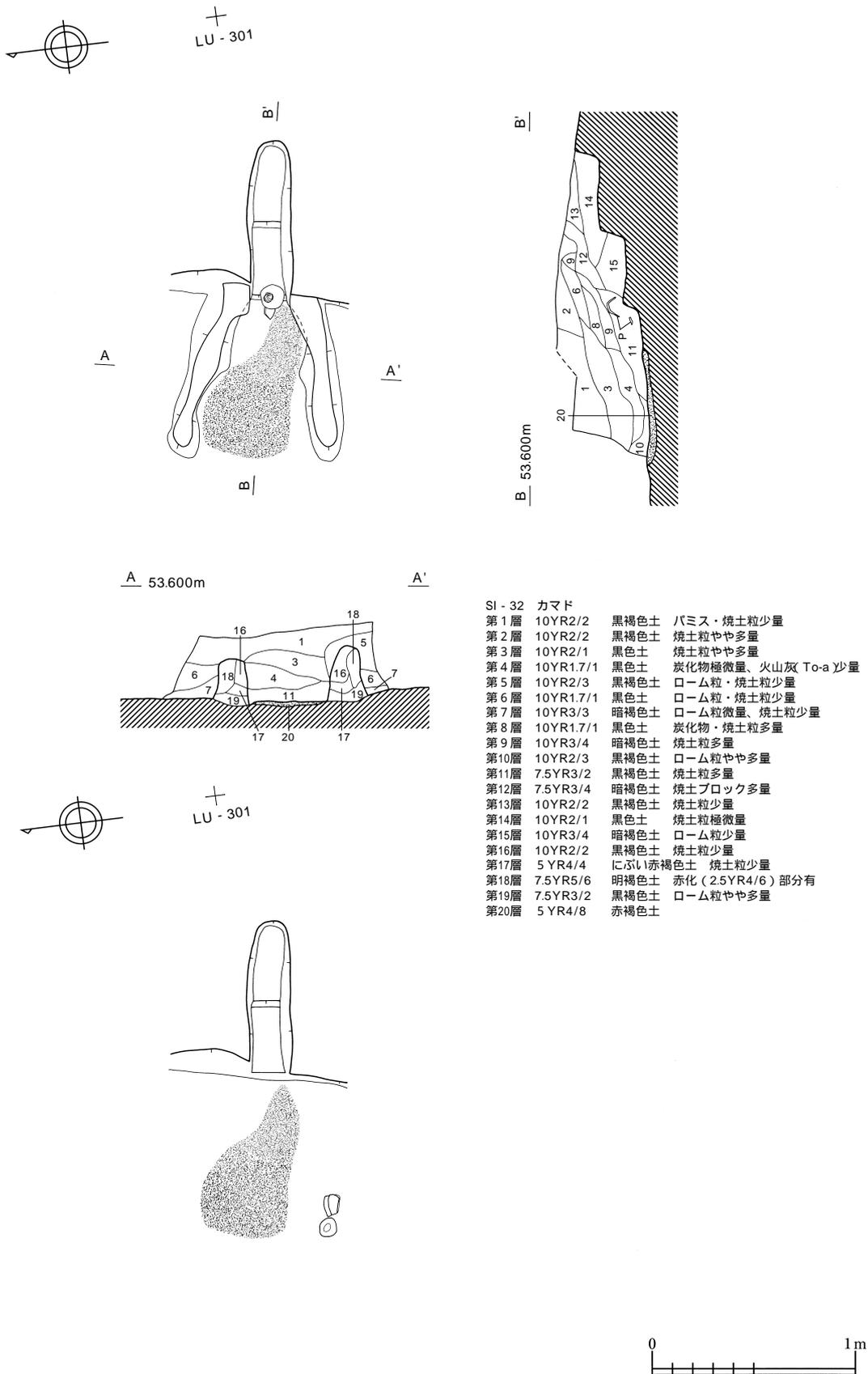
SI - 32 Pit 5
G 53.400m G'



- Pit 4
- | | | | |
|-----|---------|------|----------|
| 第1層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 炭化物少量 |
| 第2層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | ローム粒やや多量 |
| 第3層 | 10YR4/4 | 褐色土 | |
- Pit 5
- | | | | |
|-----|---------|------|------------|
| 第1層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | ローム粒・炭化物少量 |
|-----|---------|------|------------|



第133図 SI - 32



第134図 SI - 32

直に近い形で立ち上がる。S I - 34との切りあい部分の北東壁堆積土層を壁面としており、やや脆弱である。その他の壁面は地山を壁面としており堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。住居中央部よりやや北東壁側の部分から板状の炭化材が出土している。

[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から2基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 23 × 19 × 8 cm、Pit 2 = 32 × 25 × 10cmを測る。主柱穴として機能を充足し得るものはないと考えられる。

[カマド] 住居南東壁側から1基検出した。南東壁3(68:32)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅76cm、煙道長117cmを測る。主軸はN - 134° - Eである。左袖表面から羽口破片が1点出土したが、袖内部については粘土のみによる構築である。支脚は出土していない。燃烧部天井は第7層が相当し、部分的にブロックとして崩落している。煙道部天井は、第2、4、5層が相当し、崩落した堆積状況である。煙道は、住居壁際から35°の角度で立ち上がり、途中で20°に角度を変え、起伏を持ちながら立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 11層に分層した。住居壁際の第8～10層は、焼土層であり[床]で記述した板状炭化材の出土状況と踏まえるとS I - 30と同様住居廃絶時点で焼土ならびに炭化材を廃棄していることが考えられる。また、床面直上の第6層はロームブロック、炭化材等を含み第8～10層の堆積状況とあわせて人為的堆積状況を呈する。上層の第1～3層は自然堆積状況を呈する。第2層中にB - T m火山灰が2～3cmのブロック状に混入している。

(木村)

S I - 34 (第135、136図)

[位置] グリッドL I・L K - 300、L J - 300・301で検出した。

[重複] S I - 33ならびにS K - 47と重複している。本遺構がいずれの遺構にも切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 長方形を呈し、435 × 370 × 77cmを測る。床面積はS I - 34と切りあいのため残存値であるが(16.415) m²を測る。

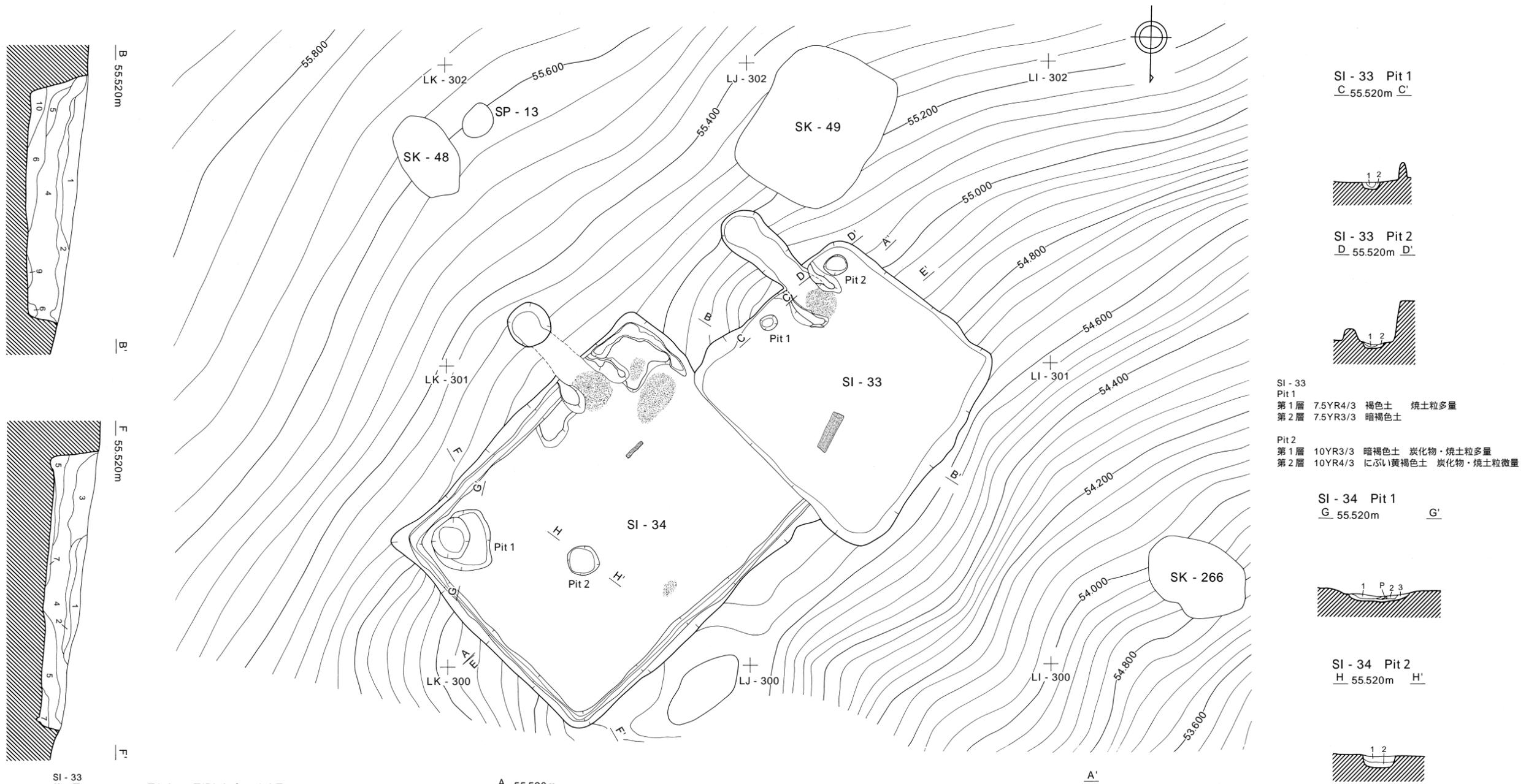
[壁] 壁高は、南西壁がS I - 33によって切られているため、全容は不明であるが、北東壁35cm、南東壁59cm、南西壁(46) cm、北西壁28cmを測る。断面形はaで、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 住居中央部にかけて掘り方を持ち、貼り床として暗褐色土と地山土を混合させ充填させており、やや起伏があり、脆弱である。それ以外の部分は、地山を床面としており、ほぼ平坦で堅緻である。

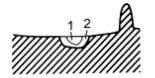
[壁溝] S I - 33によって切られている南西壁側の情報は不明であるが、それ以外の部分ではほぼ全周する形で検出した。深さは平均4 cmを測る。

[ピット] 住居内から2基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 80 × 80 × 8 cm、Pit 2 = 44 × 40 × 14cmを測る。主柱配置は、Pit 2のみの1本柱で板壁と組み合わせた住居構造であったことが考えられる。

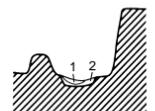
[カマド] 住居南東壁側から1基検出した。南東壁4(75:25)の位置から検出している。構造は、



SI - 33 Pit 1
C 55.520m C'



SI - 33 Pit 2
D 55.520m D'



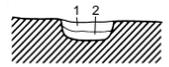
SI - 33
Pit 1
第1層 7.5YR4/3 褐色土 焼土粒多量
第2層 7.5YR3/3 暗褐色土

Pit 2
第1層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物・焼土粒多量
第2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化物・焼土粒微量

SI - 34 Pit 1
G 55.520m G'

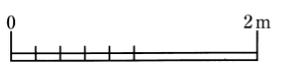


SI - 34 Pit 2
H 55.520m H'



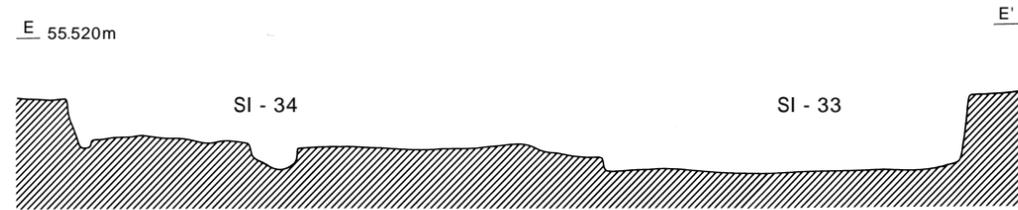
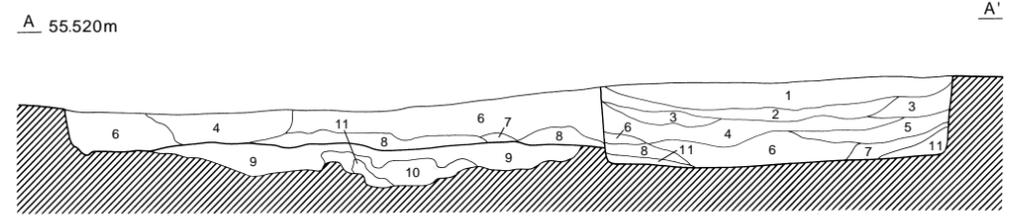
SI - 34
Pit 1
第1層 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒・焼土粒少量
第2層 10YR3/2 黒褐色土 炭化粒・焼土粒少量
第3層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化粒・焼土粒少量

Pit 2
第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化粒少量
第2層 10YR3/2 黒褐色土

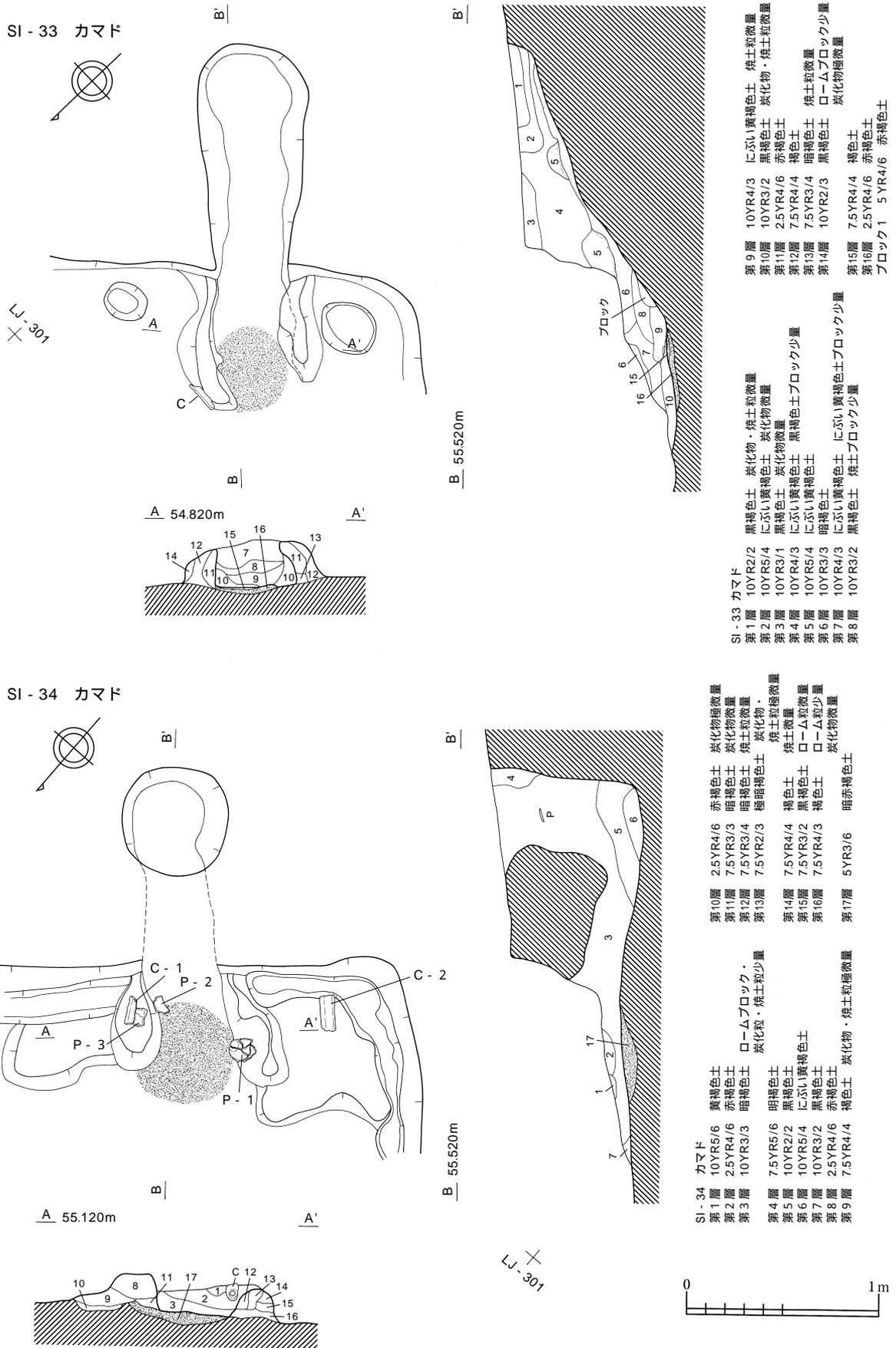


SI - 33
第1層 10YR2/1 黒色土 黒褐色土ブロック少量
第2層 10YR1.7/1 黒色土 黒褐色土ブロック・火山灰(B-Tm)ブロック少量
第3層 10YR3/2 黒褐色土 黒色土少量
第4層 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土ロームブロック・炭化粒少量
第5層 10YR3/3 暗褐色土 にぶい黄褐色土ブロック少量
第6層 10YR3/2 黒褐色土 にぶい黄褐色土・明黄褐色土ロームブロック・炭化粒少量
第7層 10YR5/4 にぶい黄褐色土
第8層 5YR4/6 赤褐色土 層状の黒褐色土少量
第9層 7.5YR4/6 褐色土
第10層 5YR4/8 赤褐色土
第11層 10YR3/2 黒褐色土

SI - 34
第1層 10YR2/1 黒色土 ロームブロック・焼土粒少量
第2層 10YR3/3 暗褐色土
第3層 10YR3/3 暗褐色土 にぶい黄褐色土多量、炭化粒・焼土粒少量
第4層 10YR4/3 にぶい黄褐色土
第5層 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒少量、焼土ブロック多量
第6層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ロームブロック多量、炭化粒少量
第7層 10YR2/1 黒色土
第8層 10YR3/2 黒褐色土 にぶい黄褐色土ブロック・炭化粒少量、焼土ブロック微量
第9層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 暗褐色土中量、ロームブロック少量
第10層 10YR3/2 黒褐色土 ロームブロック・炭化粒少量
第11層 10YR5/4 にぶい黄褐色土



第135図 SI - 33 ・ 34



第136図 SI - 33 ・ 34

地下式で、袖部幅90cm、煙道長107cmを測る。主軸はN - 135° - Eである。燃焼部天井の構築土であると考えられる第2層は、焼土がブロック状に堆積した状況で、また、芯材として利用されたと考えられる転用羽口は燃焼部上面ならびにカマド周辺部に散逸した出土状況であった。このことから燃焼部上面については破壊されたことが考えられる。構築材については前述のとおり転用羽口、粘土による構築である。煙道は、住居壁際から9°の角度で傾斜し、煙出部付近ではほぼ平坦になる。

カマド両袖脇から低い棚状の段を検出している。左袖脇の段は、56×35×7cmを測る。右袖脇の段は、62×60×5cmを測る。いずれもカマド袖構築土が段の上に堆積しており、また右袖脇の段については壁溝に切られていることから、住居構築時点で棚として機能したことが考えられる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 11層に分層した。全体的に地山ブロック、焼土ブロック等を含む混合層で急激に埋め戻された人為的堆積状況を呈する。S I - 33と主軸がほとんど変わらない点と急激な埋め戻しの要素をあわせるとS I - 34の廃絶からS I - 33の構築にかけての時間幅は連続したものであったことが考えられる。

(木 村)

S I - 35 (第137図)

[位置] グリッドLO・LP - 301、LO - 302で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 長方形を呈し、390×316×22cmを測る。床面積は12.415m²を測る。

[壁] 壁高は、北東壁8cm、南東壁15cm、南西壁21cm、北西壁18cmを測る。断面形はaで、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。壁面はやや脆弱である。

[床] 斜面下部の北東～南東壁側に掘り方を持ち、大谷火山灰層の地山土を貼床として貼り付けている。それ以外の部分は月見野火山灰層の地山を床面としている。床面は起伏があり、やや脆弱である。

[壁溝] なし。

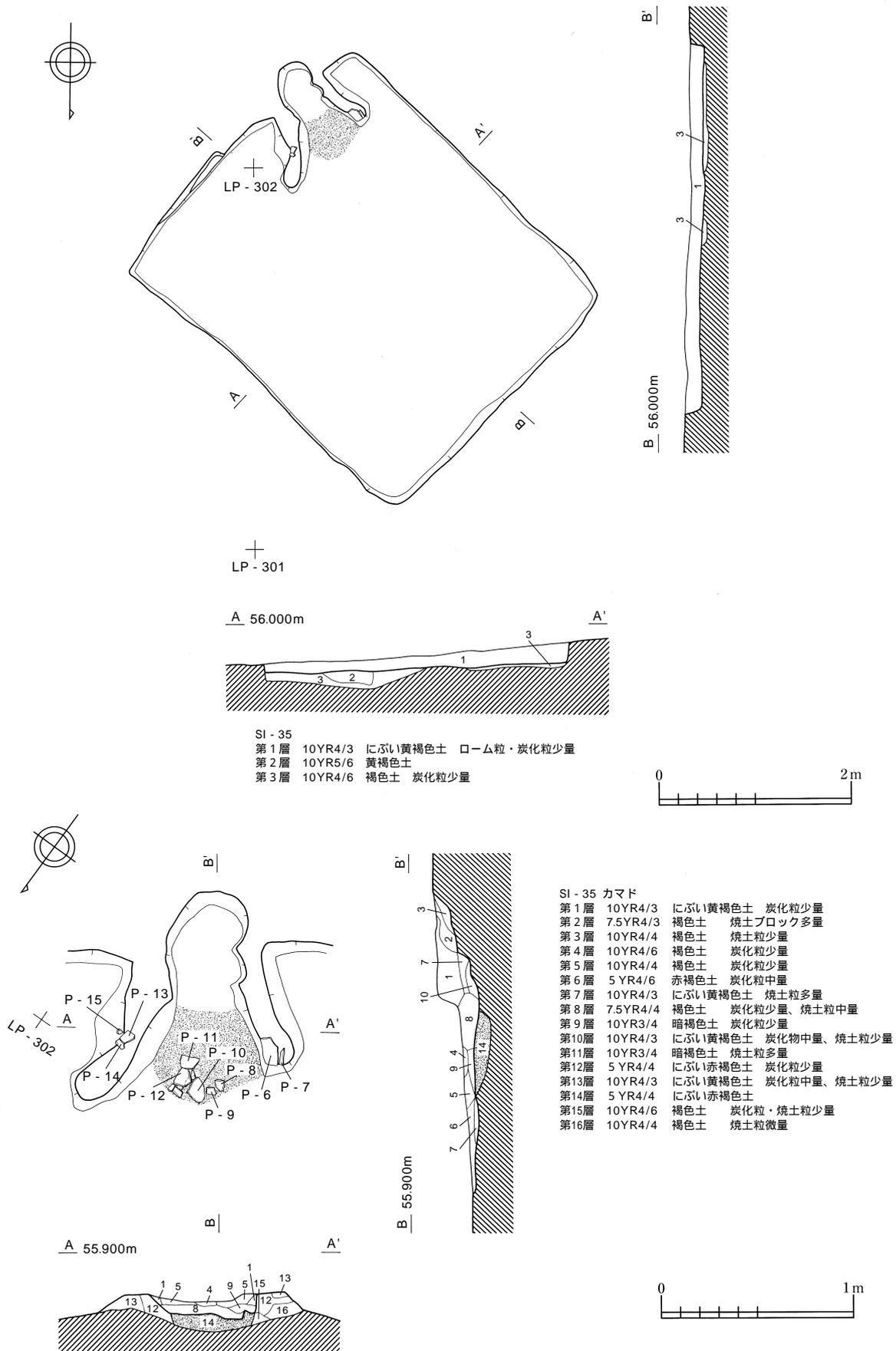
[ピット] なし。

[カマド] 住居南東壁側から1基検出した。南壁4(77:23)の位置で検出した。構造は、半地下式で袖部幅109cm、煙道長43cmを測る。主軸はN - 148° - Eである。燃焼部天井の崩落土は第8層が相当する。焚口付近については破壊されており、第6、7層が散逸した焼土層を含み堆積している。袖ならびに天井は粘土による構築である。燃焼部天井は第2、3、7、10層が相当し、芯材等は出土していない。煙道は住居壁の立ち上がりに沿うように立ち上がり、途中で5°の角度でやや起伏を持ちながら立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方を含めて3層に分層した。単層のみの堆積であり、暗褐色土層が地山土等の浸食土と混合したと考えられるにぶい黄褐色土が堆積していることから自然堆積の様相を呈する。

(木 村)



第137図 SI - 35

S I - 36 (第138図)

[位置] グリッドL T・L U - 303・304で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、224×208×42cmを測る。床面積は4.338m²を測る。

[壁] 壁溝は、北壁10cm、東壁12cm、南壁31cm、西壁33cmを測る。断面形はbで、壁上部で緩やかに立ち上がる。壁面はやや脆弱である。

[床] 月見野火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面はやや脆弱である。

[壁溝] なし。

[ピット] 住居内外から4基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 32×26×40cm、Pit 2 = 22×21×22cm、Pit 3 = 30×27×38cm、Pit 4 = 42×31×63cmを測る。Pit 1・3・4は、柱間がPit 3 (125cm) Pit 1 (110cm) Pit 4と間隔が一定ではないが、Pit 3とPit 4の底面の高さがほぼ同様の高さであり、Pit 3が本遺構に帰属すると判断した。Pit 2とあわせて4本柱配置を持つ。

[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁3 (61:39)の位置から検出している。袖部幅116cm、煙道長(43)cmを測る。主軸はN - 122° - Eである。土層堆積において焚口火床面ならびに燃焼部天井が残存しておらず、部分的に床面の第9層中に焼土粒が中量混入して検出したのみである。粘土による構築で芯材、支脚等は出土していない。煙道部天井は第3・4層が相当する。煙道は、緩やかに15°の角度で立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 2層に分層した。第1層上位からB - T m火山灰、下位からT o - a火山灰を検出した。自然堆積の様相を呈する。

(木村)

S I - 37 (第139~143図)

[位置] グリッドL X - 303、L W・L X・L Y - 304・305で検出した。

[重複] 住居西壁隅においてS K - 66ならびにS P - 15と重複している。本遺構が切られており、本遺構の方が古い。

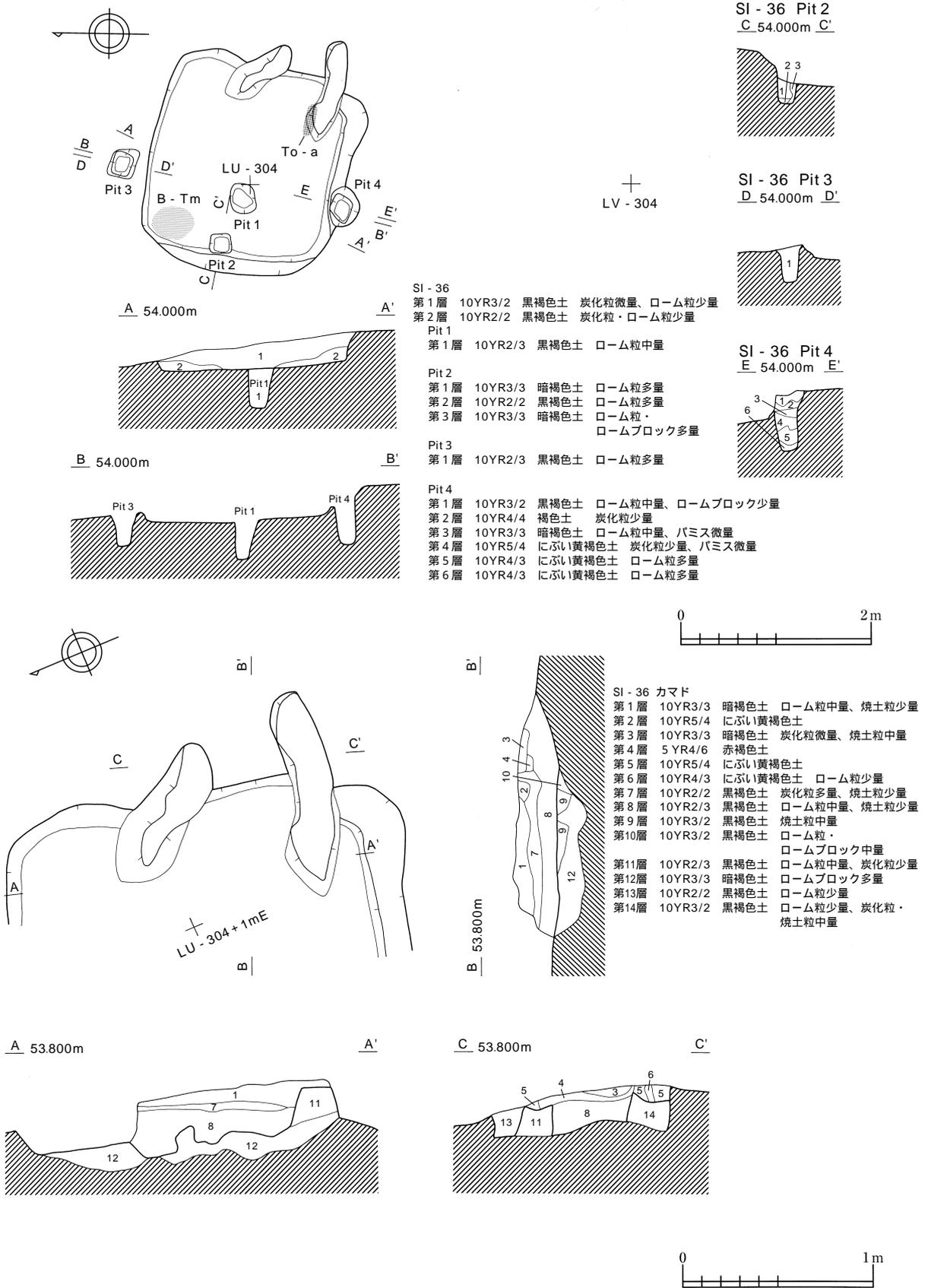
[平面形・規模] 方形を呈し、682×662×82cmを測る。床面積は45.546m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁18cm、東壁20cm、南壁59cm、西壁46cmを測る。断面形はcで、壁上部で一部緩やかな傾斜が見られる。壁面は堅緻である。

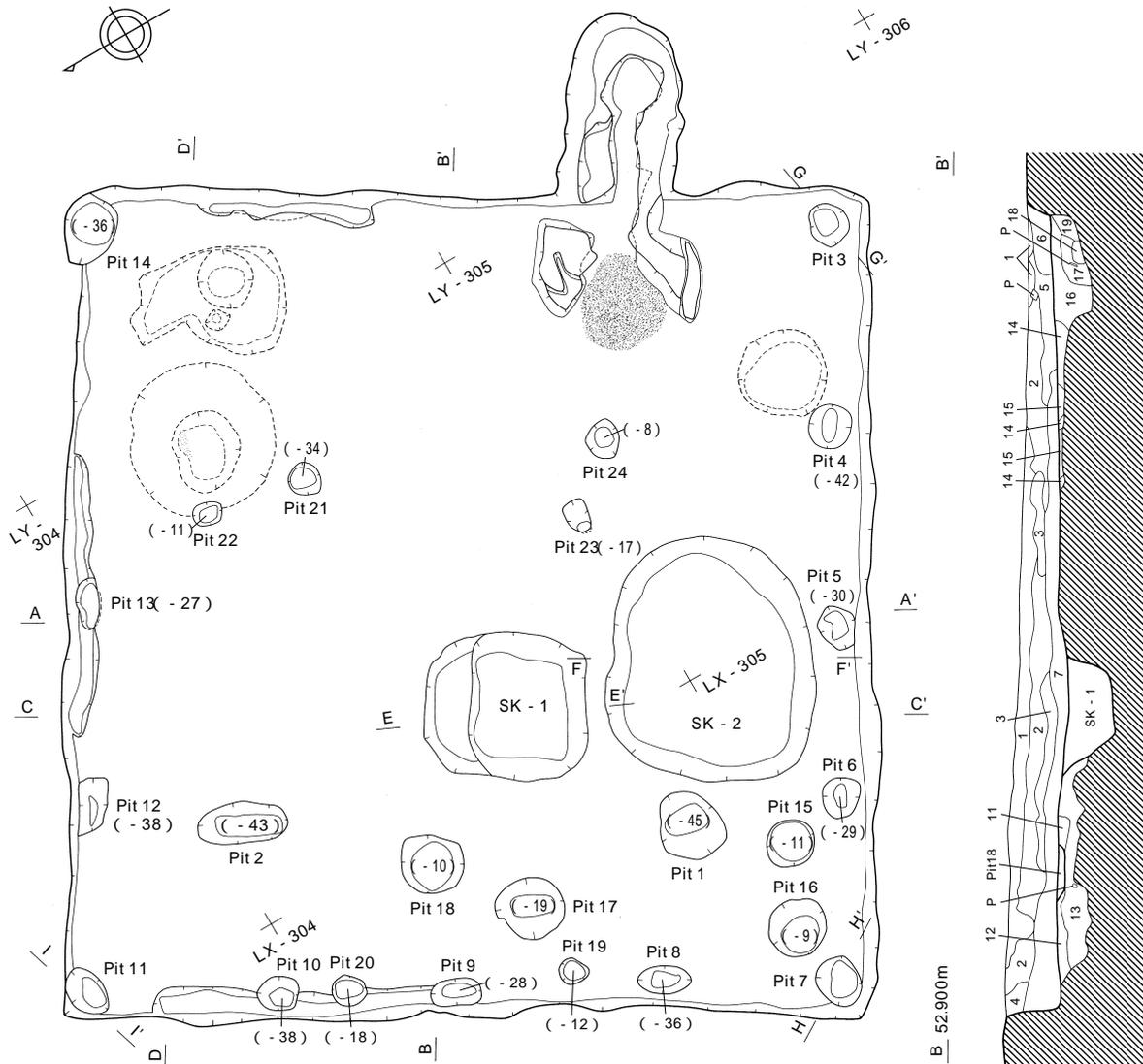
[床] 住居壁側に掘り方の土坑ならびに掘り方を持ち、黒褐色土と地山土の混合層が充填されており、ほぼ平坦であるが、地山のみを床面に比べやや脆弱である。住居中央部は、月見野火山灰層の地山を床面としており、平坦で堅緻である。

[壁溝] 住居北壁中央部、東壁北壁寄りの部分、西壁北壁寄りの部分から検出した。深さは平均24cmを測る。北壁ならびに西壁の壁溝は、壁柱穴によって切られており、板壁から草壁等に置き換わった可能性についても考えられる。

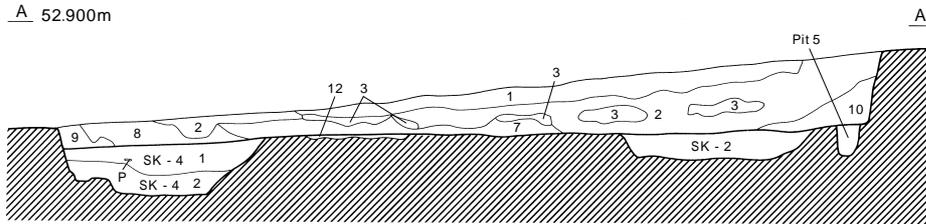
[ピット] 住居内から31基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 60×52×45cm、Pit 2 = 75×35×43cm、Pit 3 = 35×32×41cm、Pit 4 = 36×35×42cm、Pit 5 = 37×30×30cm、Pit 6 = 32×31×29cm、Pit 7 = 42×34×54cm、Pit 8 = 44×23×36cm、Pit 9 = 41×22×28cm、Pit 10 = 35×28×



第138図 SI - 36



A 52.900m



SI - 37

第1層	10YR1.7/1	黒色土	ローム粒・炭化物微量、焼土極微量	第16層	10YR3/4	暗褐色土	ローム・炭化物・焼土極微量
第2層	10YR2/2	黒褐色土	ローム・炭化物・火山灰(B-Tm)少量、焼土極微量	第17層	5YR2/2	黒褐色土	ローム少量、焼土極微量
第3層	10YR2/2	黒褐色土	炭化粒少量、火山灰(B-Tm)多量、火山灰層	第18層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	炭化物・ローム極微量
第4層	10YR2/1	黒色土	ローム粒少量	第19層	10YR3/3	暗褐色土	ローム極微量
第5層	7.5YR3/3	暗褐色土	ローム・粘土・炭化物少量、焼土微量	SK - 4			
第6層	7.5YR4/4	褐色土	ローム・粘土少量、炭化物・焼土極微量	第1層	10YR2/3	黒褐色土	ローム少量、粘土多量、炭化物微量、焼土極微量
第7層	10YR2/3	黒褐色土	ローム多量、炭化物少量、焼土極微量	第2層	10YR2/1	黒色土	ロームブロック・粘土多量、炭化物・焼土極微量
第8層	10YR3/3	暗褐色土	ローム・粘土多量、焼土極微量				
第9層	10YR2/3	黒褐色土	ローム少量				
第10層	10YR2/2	黒褐色土	ローム少量、炭化物微量				
第11層	10YR3/3	暗褐色土	ローム・焼土微量、炭化物極微量				
第12層	7.5YR4/4	褐色土	ローム粒微量				
第13層	10YR2/1	黒色土	ローム多量、粘土少量				
第14層	7.5YR3/4	暗褐色土	ローム少量、炭化物極微量、焼土微量				
第15層	5YR3/6	暗赤褐色土	ローム微量				



第139図 SI - 37

38cm、Pit11 = 45 × 25 × 45cm、Pit12 = 44 × 23 × 38cm、Pit13 = 42 × 21 × 27cm、Pit14 = 55 × 42 × 36cm、Pit15 = 40 × 38 × 11cm、Pit16 = 46 × 46 × 9 cm、Pit17 = 57 × 51 × 19cm、Pit18 = 52 × 48 × 10cm、Pit19 = 24 × 21 × 12cm、Pit20 = 28 × 26 × 18cm、Pit21 = 28 × 27 × 34cm、Pit22 = 25 × 19 × 11cm、Pit23 = 27 × 19 × 17cm、Pit24 = 30 × 27 × 8 cm、Pit25 = 40 × 40 × 30cm、Pit26 = 77 × 72 × 42cm、Pit27 = 76 × 72 × 12cm、Pit28 = 49 × 37 × 8 cm、Pit29 = 35 × 28 × 18cm、Pit30 = 80 × 54 × 25cm、Pit31 = 46 × 31 × 31cmを測る。主柱穴と壁柱穴を組み合わせた柱穴配置で、主柱穴は、Pit 1、2、25が相当すると考えられ、また、壁柱穴はPit 3 ~ 14が相当すると考えられる。また、東壁北側の部分から主柱穴は検出できなかったが、土坑として取り扱ったSK - 3、6とも柱穴の掘り方を持つ土層堆積であり、柱穴として機能した可能性について考えられる。また、カマド左袖脇のPit26から土師器壺等が出土した。

[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁3(69:31)の位置から検出している。構造は、半地下式で、燃烧部周辺の破損状況が激しいが、袖部幅138cm、煙道長130cmを測る。主軸はN - 124° - Eである。カマド焚口周辺部から多量の土器とともに自然礫・羽口の碎片等が出土している。また、焚口前庭部付近からも同様の自然礫等が出土している。土層堆積において燃烧部天井ならびに袖上部の土層が第30~32層まで攪乱した状態で堆積していることからカマドの廃絶に際して破壊されたと考えられる。煙道部天井は第17、20、25層が相当する。煙道は、住居壁際8°の角度で傾斜し、煙出部でほぼ平坦になり、内傾しながら立ち上がった後、オーバーハングして開口部に向けて立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居外、東壁の延長線上にSB - 01・02が位置する。SB - 01は、住居主軸とほぼ同軸線上に位置するが、SI - 38~40に柱穴配置を一部切られているため、明確に掘立柱建物跡として機能し、本遺構に付随したかどうかは不明である。

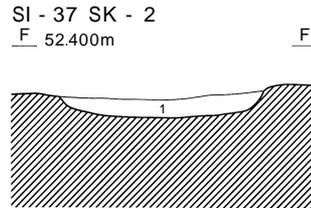
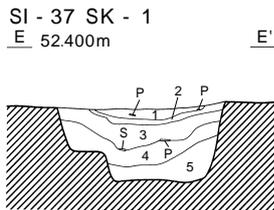
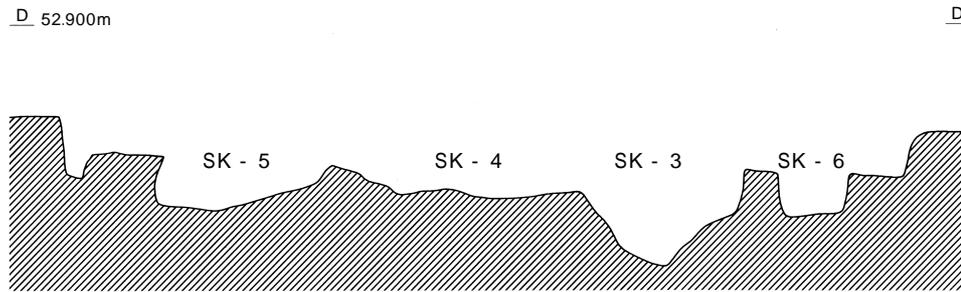
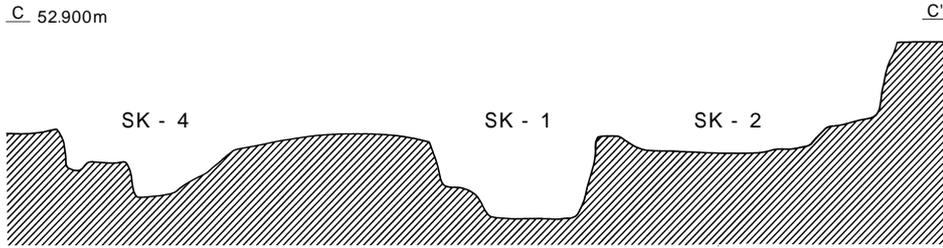
住居内から掘り方を含めて土坑6基を検出した。SK - 1は、住居中央部よりやや西壁寄りの位置から検出した。規模は140 × 120 × 62cmを測る。SK - 2は、SK - 1よりやや南壁寄りの位置から検出した。規模は210 × 163 × 20cmを測る。SK - 3は、住居北壁側中央部よりやや西寄りの位置から検出した。規模は198 × 153 × 86cmを測る。SK - 4は、SK - 3よりやや北壁中央寄りの位置から検出した。規模は150 × 104 × 40cmを測る。SK - 5は、溝状の不整形な形状でSK - 4よりやや西壁寄りの部分から検出した。規模は140 × 54 × 43cmを測る。SK - 6はSK - 3よりやや東壁寄りの部分から検出した。規模は166 × (118) × 35cmを測る。[ピット]で記述したが、SK - 3、6については、柱穴として機能した可能性が考えられる。

[堆積土] 掘り方部分を含めて19層に分層した。住居廃絶後以降の堆積は第1~10層である。住居床面から風化したB - Tm火山灰を検出している。また、第3層はB - Tm火山灰の堆積層である。第3層のB - Tmの堆積層は二次堆積による成層であり、自然堆積状況を呈する。本遺構SK - 1の堆積土中からは、流動滓36g、椀形鍛冶滓552g、椀形鍛冶滓(含鉄)128g、含鉄鉄滓298g、鉄器(未製品含む)40g、総重量1,054gの鍛冶関連遺物が出土している。近隣に存在した鍛冶炉から廃棄されたと考えられる。

(木村)

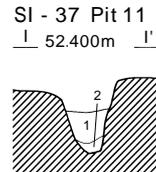
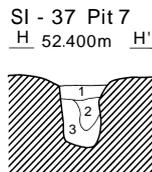
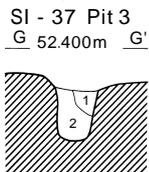
SI - 42(第144~147図)

[位置] グリッドMB - 301・302、MC - 302・303で検出した。



- SK - 1
- | | | | |
|-----|----------|------|----------------------|
| 第1層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム・炭化物少量、焼土極微量 |
| 第2層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ローム多量、炭化物微量、焼土極微量 |
| 第3層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | ローム・炭化物少量、焼土極微量 |
| 第4層 | 7.5YR4/3 | 褐色土 | 粘土・焼土多量、炭化物少量 |
| 第5層 | 7.5YR4/3 | 褐色土 | ローム・炭化物微量、粘土多量、焼土極微量 |

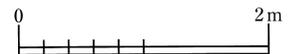
- SK - 2
- | | | | |
|-----|---------|------|-------------------|
| 第1層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | ローム多量、炭化物微量、焼土極微量 |
|-----|---------|------|-------------------|



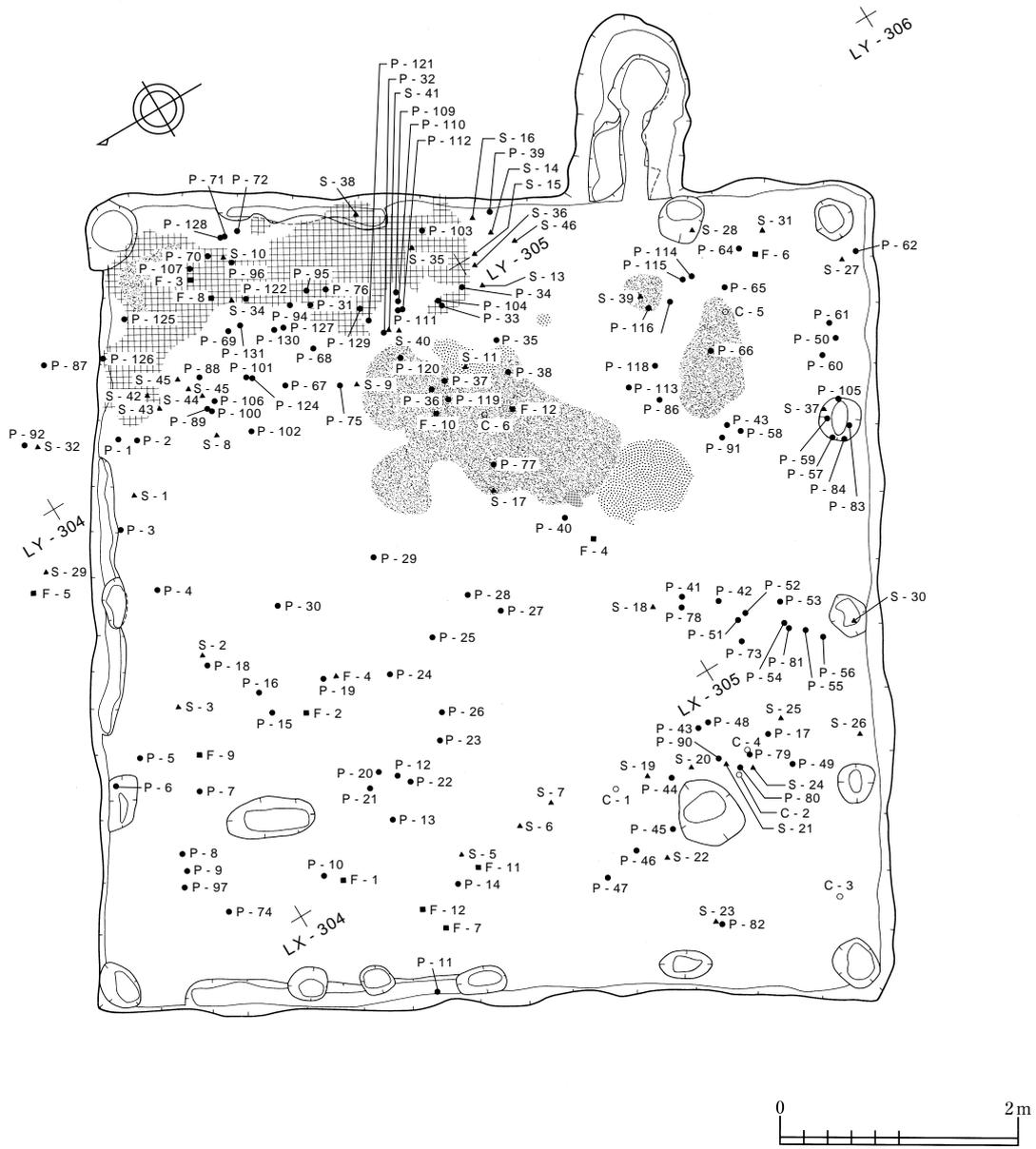
- Pit 3
- | | | | |
|-----|---------|------|------------|
| 第1層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 粘土多量 |
| 第2層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム・炭化物極微量 |

- Pit 7
- | | | | |
|-----|---------|------|---------------|
| 第1層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 粘土・ロームブロック少量 |
| 第2層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 粘土多量 |
| 第3層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム・ロームブロック多量 |

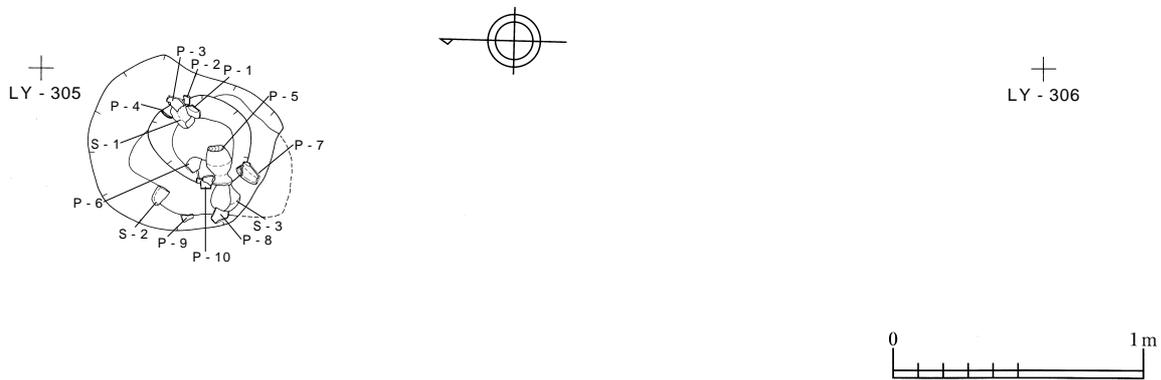
- Pit 11
- | | | | |
|-----|---------|------|------------------|
| 第1層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒少量
パミス極微量 |
| 第2層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ローム多量
粘土少量 |



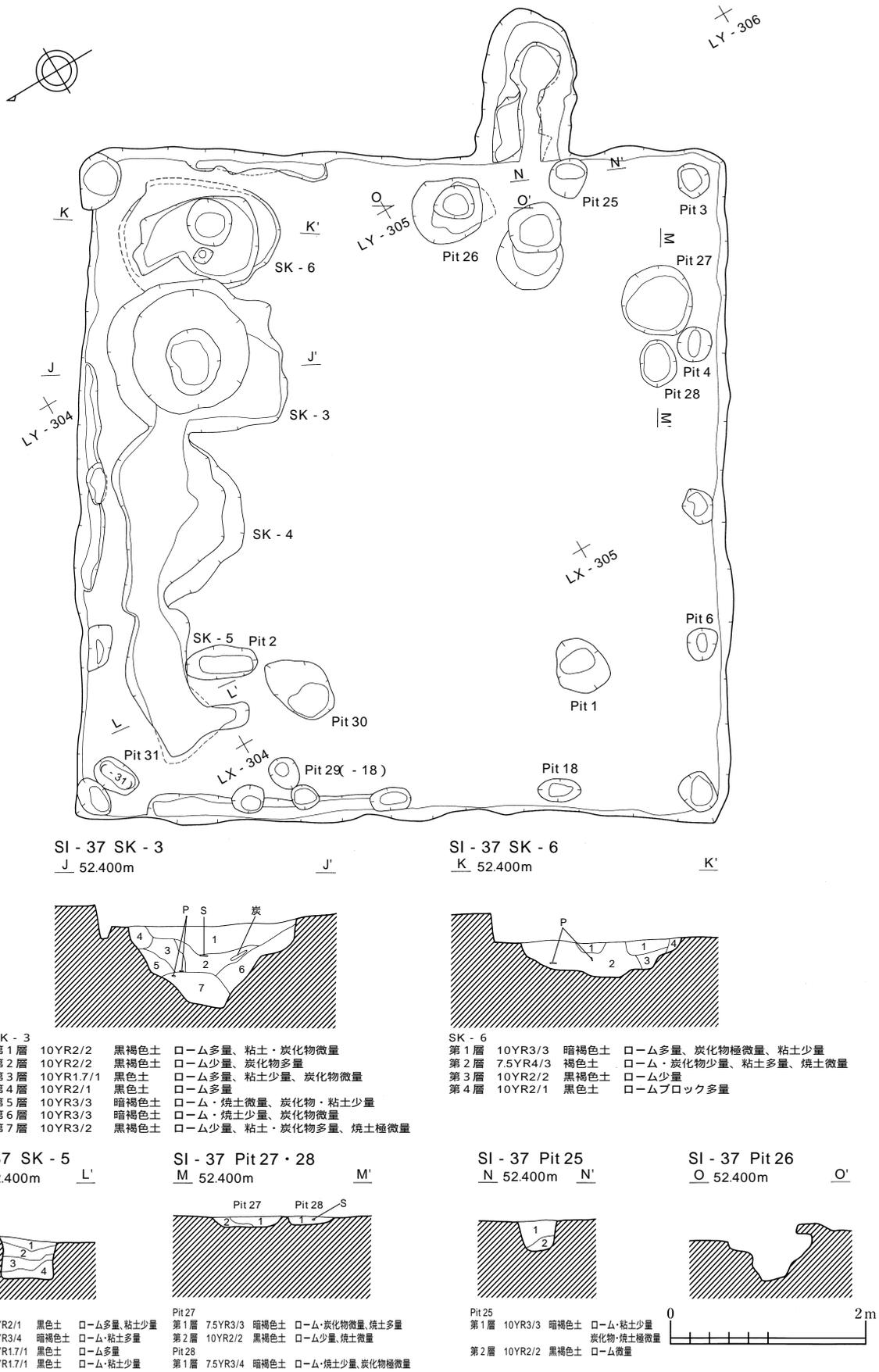
第140図 SI - 37



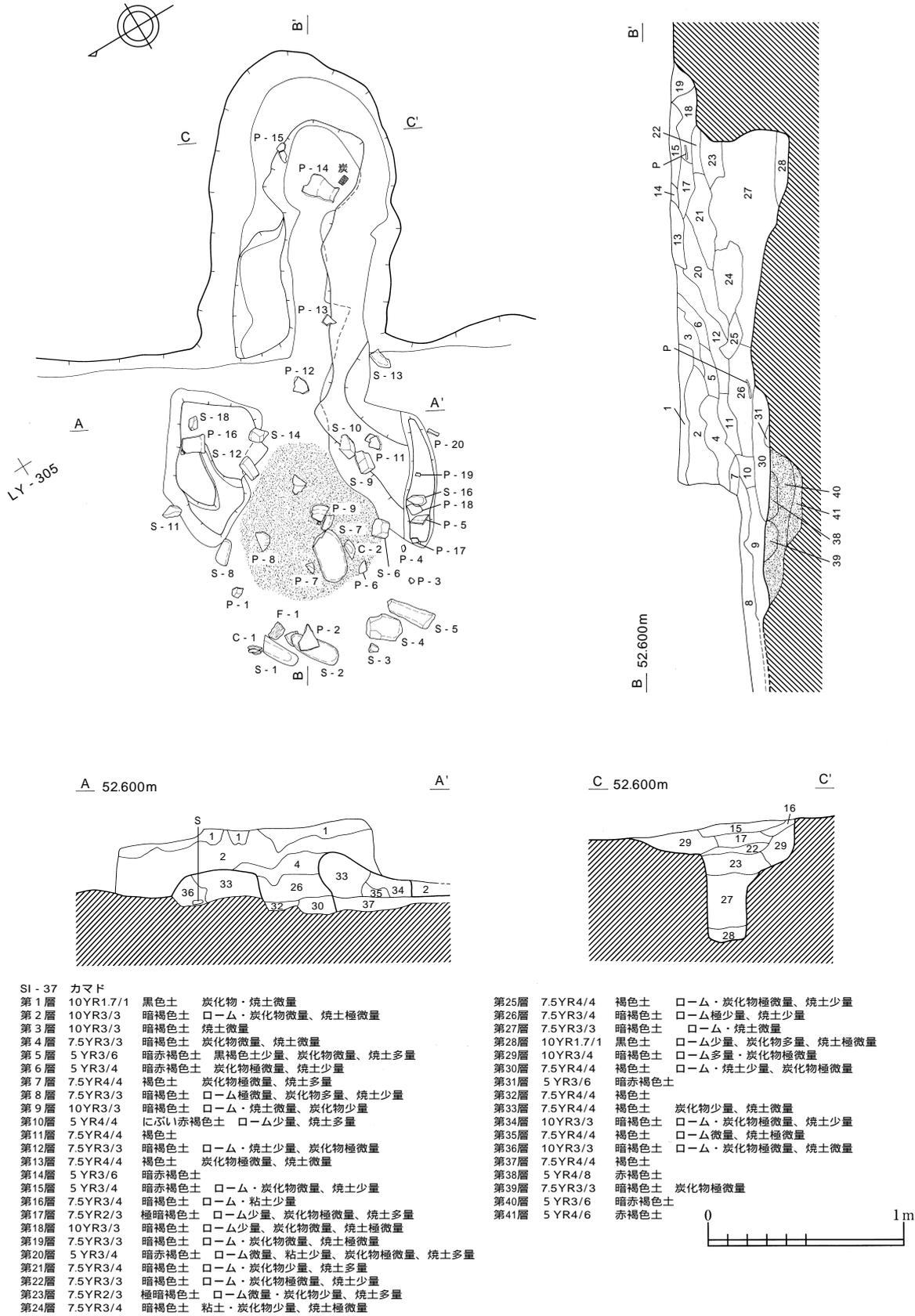
Pit 26 遺物出土状況



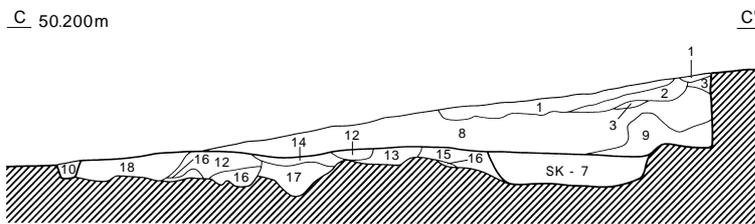
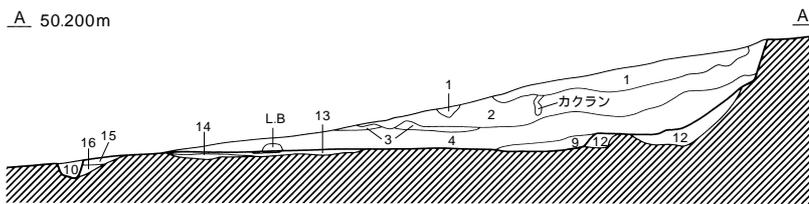
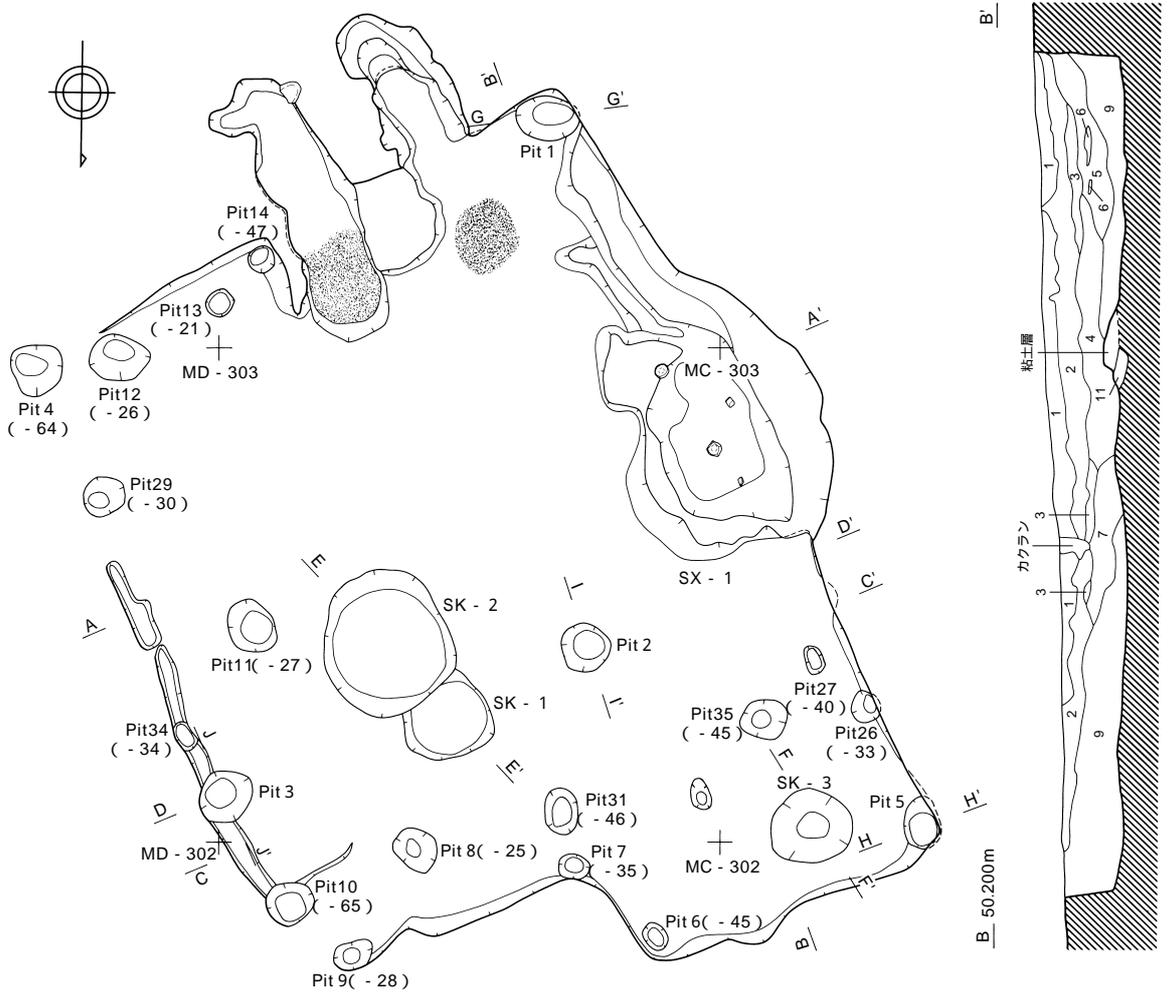
第141図 SI - 37



第142図 SI - 37

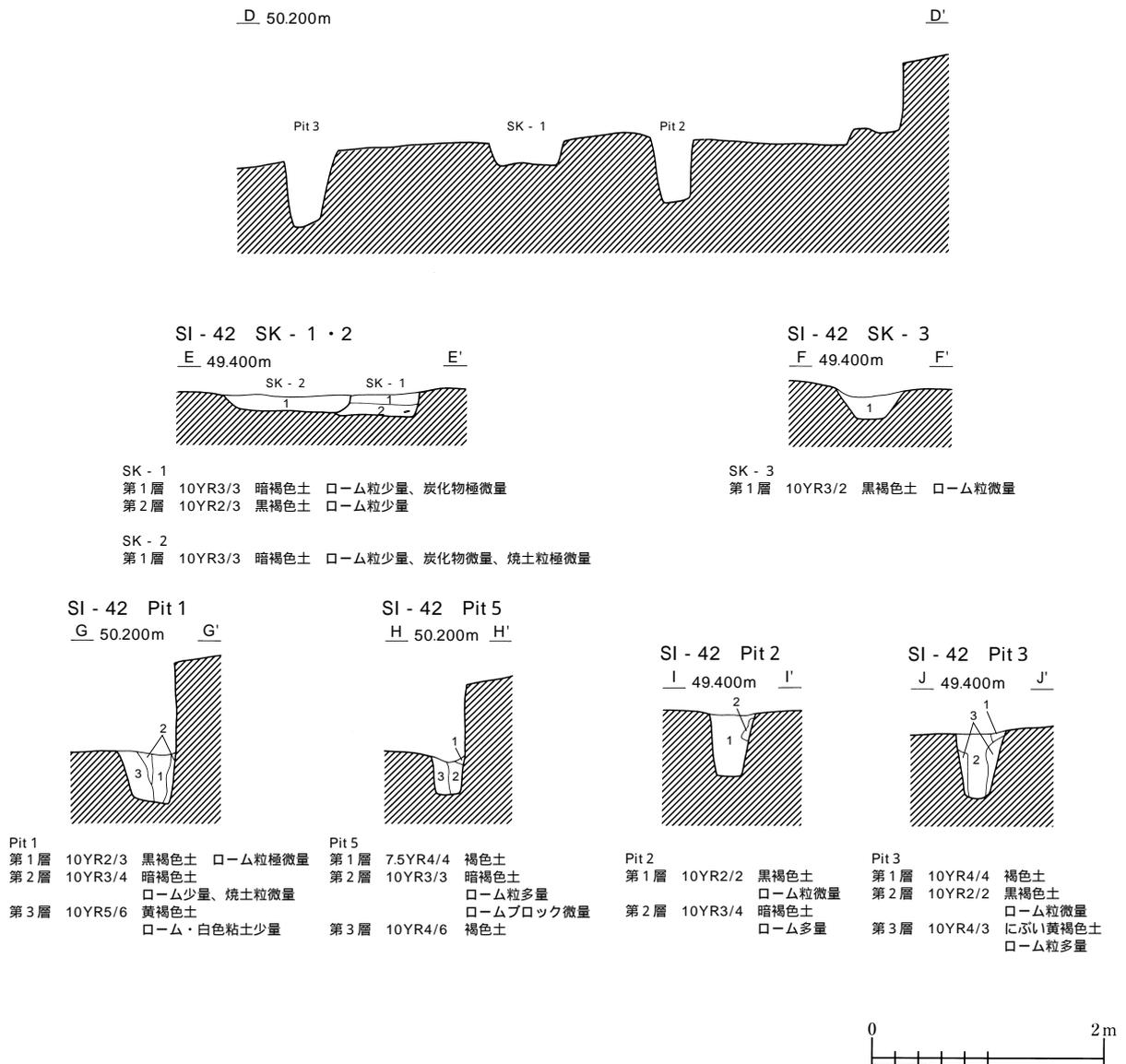


第143図 SI - 37



SI - 42	第11層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒・炭化物極微量			
第1層	10YR2/1	黒色土	ローム粒微量、焼土粒極微量	第12層	10YR5/6	黄褐色土	
第2層	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒・炭化物・焼土粒微量	第13層	10YR3/4	暗褐色土	
第3層	10YR3/3	暗褐色土	炭化物・焼土粒極微量、火山灰(B-Tm)混入	第14層	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒多量
第4層	10YR3/3	暗褐色土	ロームブロック・焼土粒・炭化物微量	第15層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	
第5層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒・炭化物微量、焼土少量	第16層	10YR2/2	黒褐色土	ロームブロック多量
第6層	10YR3/3	暗褐色土	焼土多量	第17層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒少量
第7層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒少量、炭化物極微量、焼土粒微量	第18層	10YR3/3	暗褐色土	ロームブロック多量
第8層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒少量				
第9層	10YR2/3	黒褐色土	ロームブロック少量、炭化物・焼土極微量				
第10層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒微量				

第144図 SI - 42



SK - 1
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒少量、炭化物極微量
第2層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒少量

SK - 3
第1層 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒微量

SK - 2
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒少量、炭化物微量、焼土粒極微量

Pit 1
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒極微量
第2層 10YR3/4 暗褐色土
ローム少量、焼土粒微量
第3層 10YR5/6 黄褐色土
ローム・白色粘土少量

Pit 5
第1層 7.5YR4/4 褐色土
第2層 10YR3/3 暗褐色土
ローム粒多量
ロームブロック微量
第3層 10YR4/6 褐色土

Pit 2
第1層 10YR2/2 黒褐色土
ローム粒微量
第2層 10YR3/4 暗褐色土
ローム多量

Pit 3
第1層 10YR4/4 褐色土
第2層 10YR2/2 黒褐色土
ローム粒微量
第3層 10YR4/3 にぶい黄褐色土
ローム粒多量

第145図 SI - 42

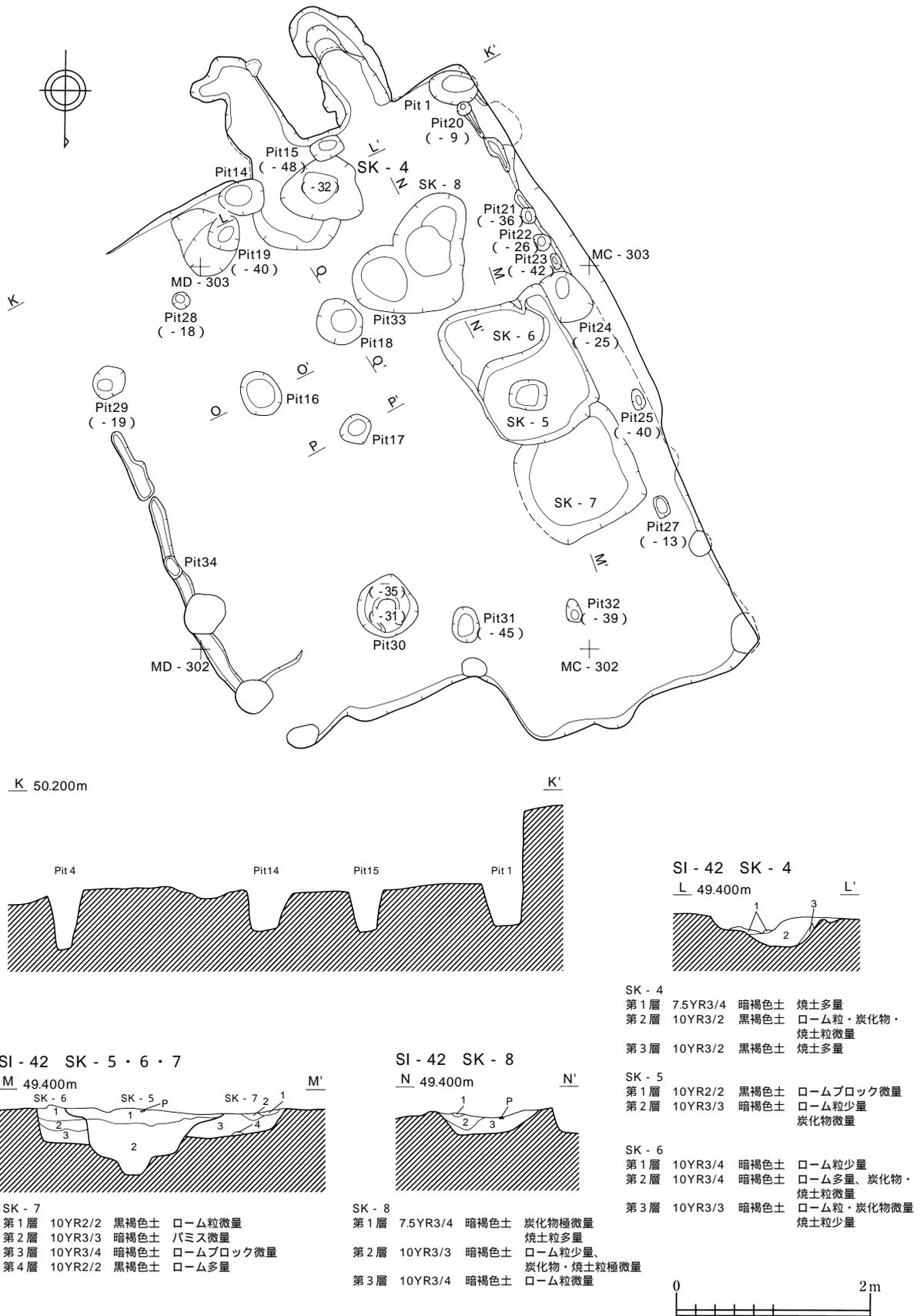
[重複] 住居東壁南隅でSK - 58と重複している。削平のため、新旧関係については不明である。

[平面形・規模] 方形を呈し、660×577×90cmを測る。また、北壁西隅から壁柱穴を伴う張り出しを検出した。規模は、260×100×67cmを測る。床面積は(33.264) m²を測る。

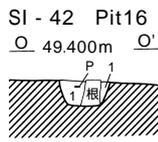
[壁] 東壁が削平されているため、全容は不明であるが、北壁40cm、南壁70cm、西壁84cmを測る。断面形はcで、西壁の壁上面は緩やかな傾斜が見られる。壁面は堅緻である。

[床] 住居北側半分～東壁側にかけて掘り方を持ち、北側部分が深く掘り込みがある。地山土ならびに暗褐色土が充填されている。しまりがありやや堅緻である。それ以外の部分については月見野火山灰層の地山を床面としており、貼り床と同様、しまりがあり堅緻である。

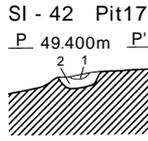
[壁溝] 住居東壁の一部ならびに西壁の南寄りの部分から部分的に検出した。深さは平均13cmを測る。



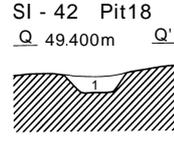
第146図 SI - 42



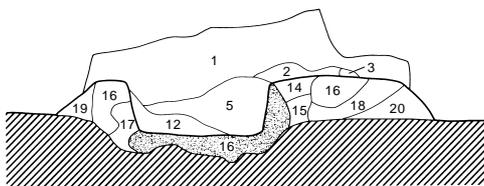
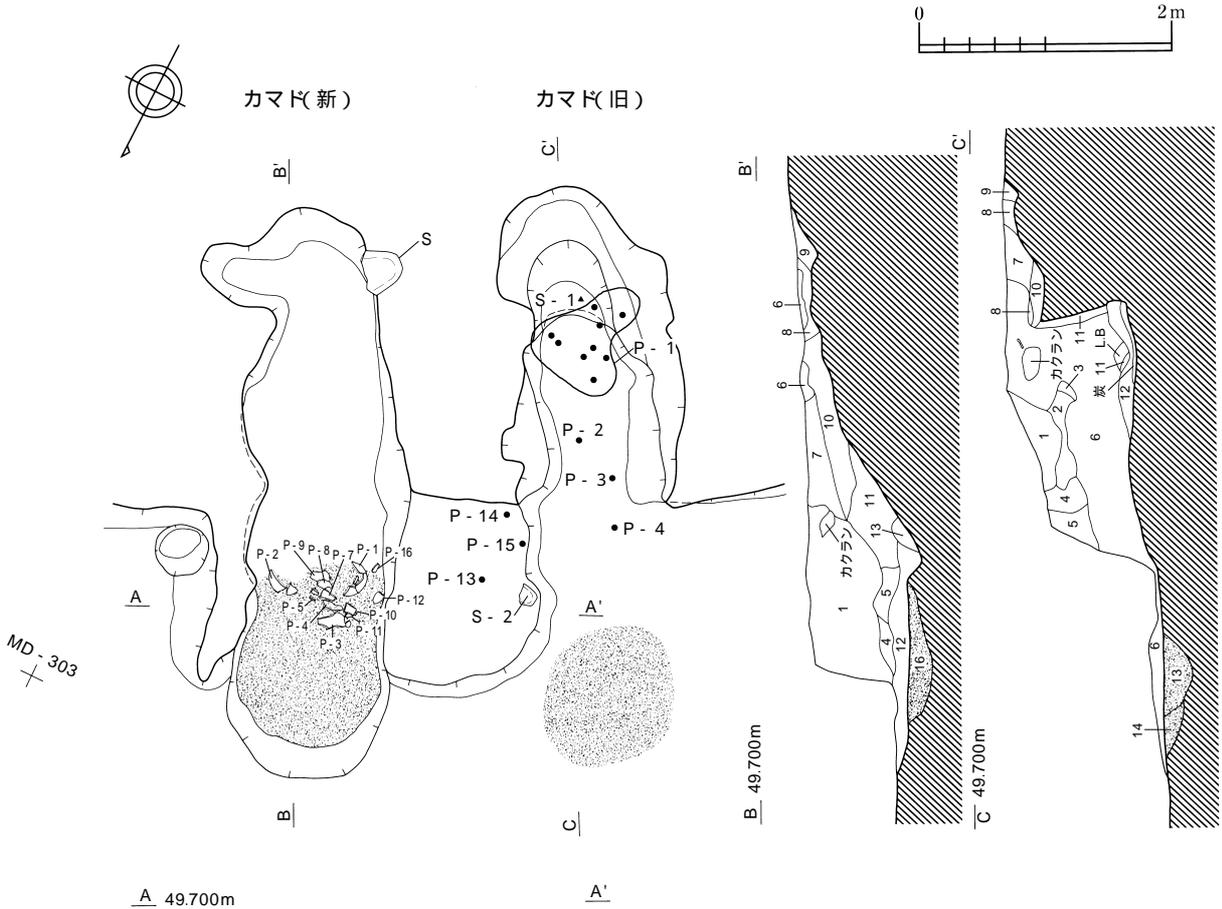
Pit16
第1層 7.5YR2/3 極暗褐色土 焼土粒少量



Pit17
第1層 7.5YR4/4 褐色土 焼土粒多量
第2層 10YR4/4 褐色土 ローム粒微量

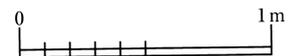


Pit18
第1層 7.5YR4/6 褐色土 炭化物極微量、焼土粒多量



- SI - 42 カマド(新)
- 第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒・炭化物極微量、焼土微量
 - 第2層 10YR4/4 褐色土
 - 第3層 7.5YR4/4 褐色土 焼土多量
 - 第4層 7.5YR3/4 暗褐色土 焼土多量
 - 第5層 10YR3/4 暗褐色土 焼土ブロック微量
 - 第6層 7.5YR3/4 暗褐色土 ローム多量、炭化物・焼土微量
 - 第7層 7.5YR4/4 褐色土 ローム粒微量、焼土極微量
 - 第8層 10YR3/4 暗褐色土 ローム多量
 - 第9層 10YR3/3 暗褐色土 ローム少量
 - 第10層 7.5YR3/4 暗褐色土 焼土極微量、焼土微量
 - 第11層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒・炭化物極微量
 - 第12層 7.5YR4/4 褐色土 炭化物極微量、焼土少量
 - 第13層 7.5YR4/4 褐色土
 - 第14層 7.5YR3/4 暗褐色土 焼土多量
 - 第15層 7.5YR4/4 褐色土 ローム多量
 - 第16層 5 YR3/6 暗赤褐色土
 - 第17層 7.5YR3/2 黒褐色土 焼土粒少量
 - 第18層 7.5YR4/4 褐色土
 - 第19層 10YR3/4 暗褐色土 ローム多量、炭化物・焼土粒微量
 - 第20層 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒・炭化物・焼土粒微量

- SI - 42 カマド(旧)
- 第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒・焼土微量
 - 第2層 10YR2/3 黒褐色土 焼土少量
 - 第3層 7.5YR3/3 暗褐色土 ローム多量
 - 第4層 7.5YR3/3 暗褐色土 炭化物極微量、焼土多量
 - 第5層 10YR3/4 暗褐色土 ローム少量、炭化物極微量
 - 第6層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・炭化物微量、焼土少量
 - 第7層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒微量、炭化物・焼土極微量
 - 第8層 7.5YR4/4 褐色土
 - 第9層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物極微量、焼土少量
 - 第10層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物極微量、焼土少量
 - 第11層 5 YR3/6 暗赤褐色土
 - 第12層 7.5YR2/2 黒褐色土 炭化物多量、焼土少量
 - 第13層 7.5YR3/3 暗褐色土 炭化物微量、焼土粒少量
 - 第14層 2.5YR4/6 赤褐色土



第147図 SI - 42

[ピット] 住居内から35基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 51 × 36 × 45cm、Pit 2 = 40 × 38 × 55cm、Pit 3 = 48 × 43 × 55cm、Pit 4 = 45 × 41 × 64cm、Pit 5 = 43 × 30 × 33cm、Pit 6 = 24 × 17 × 45cm、Pit 7 = 25 × 19 × 35cm、Pit 8 = 37 × 30 × 25cm、Pit 9 = 34 × 23 × 28cm、Pit10 = 39 × 35 × 65cm、Pit11 = 45 × 38 × 27cm、Pit12 = 50 × 38 × 26cm、Pit13 = 22 × 20 × 21cm、Pit14 = 21 × 20 × 47cm、Pit15 = 33 × 23 × 48cm、Pit16 = 49 × 40 × 20cm、Pit17 = 33 × 30 × 11cm、Pit18 = 50 × 45 × 14cm、Pit19 = 36 × 31 × 40cm、Pit20 = 20 × 19 × 9 cm、Pit21 = 16 × 15 × 36cm、Pit22 = 21 × 19 × 26cm、Pit23 = 17 × 10 × 42cm、Pit24 = 59 × 40 × 25cm、Pit25 = 23 × 12 × 40cm、Pit26 = 26 × 23 × 33cm、Pit27 = 22 × 15 × 13cm、Pit28 = 19 × 18 × 18cm、Pit29 = 37 × 30 × 29cm、Pit30 = 65 × 64 × 35cm、Pit31 = 37 × 27 × 45cm、Pit32 = 26 × 16 × 39cm、Pit33 = 69 × 65 × 20cm、Pit34 = 25 × 13 × 34cm、Pit35 = 40 × 30 × 45cmを測る。主柱配置については、壁柱穴と同様建て替えが行われた可能性があり、Pit 1 ~ 4、14、15が主柱穴として機能したと考えられる。また、SK - 5として取り扱った土坑は柱穴痕があり、主柱穴として機能した可能性が考えられる。壁柱穴は、張り出しを持つ住居北壁側で2列検出しており、Pit10付近で浅い段差を検出していること、ならびに住居掘り方が北側部分と南側部分で差異を生じている点を踏まえると本住居は、拡張が行われていたと考えられる。北壁部分の壁柱穴は拡張前がPit 8、10、26、31が壁柱穴として機能し、拡張後がPit 5、6、7、9と張り出しを持った住居形態になっている。

[カマド] 住居南壁側から2基検出した。南壁3(55:45)と南壁4(78:22)の位置から検出している。新旧関係は、袖の残存状況から南壁3 > 南壁4の関係である。南壁3側のカマドの構造は、半地下式で、袖部幅149cm、煙道長118cmを測る。主軸はN - 155° - Eである。一部自然礫を芯材とした粘土による構築である。支脚は、土師器椀を倒位に並列させ設置している。前庭部に浅い掘り込みを持ち、焚口部分が床面より5cmほど低い位置で燃焼できるよう構築している。燃焼部天井は第5層中にブロック化して堆積しており、それ以外の構築材が土層堆積に見られないことから破壊されたものと考えられる。煙道部の天井は、第10層が相当し崩落した堆積状況を呈する。煙道は、住居壁際から36°の角度で立ち上がり、途中で14°に角度を変え、起伏を持ちながら立ち上がる。

南壁4側のカマドは、半地下式で袖部は破壊されているため残存しておらず、煙道長は105cmを測る。主軸はN - 147° - Eである。第1~6層は、カマド廃絶に伴う人為的堆積土で、煙出上面には、土師器甕等の土器が廃棄されている。煙道は、住居壁際から16°の角度で緩やかに立ち上がった後、煙出部へ向かって3°の角度で傾斜し、煙出奥壁ではやや内傾しながら立ち上がり途中でオーバーハングする。

[その他の付属施設] 住居西壁中央部から土堤状の性格不明施設を1基検出した。規模は276 × 130 × 12cmを測る。壁面に沿って黄褐色土の地山土を貼り付けて構築している。その他、住居内から掘り方を含めて土坑8基を検出した。SK - 1は、住居中央部からやや北壁寄りの部分から検出した。規模は72 × 68 × 20cmを測る。SK - 2は、SK - 1と重複し、住居中央部分から検出した。規模は120 × 105 × 12cmを測る。SK - 3は、住居北壁張り出し部から検出した。規模は64 × 60 × 25cmを測る。SK - 4は、南壁3のカマド燃焼部下から検出した。規模は81 × 60 × 32cmを測る。SK - 5は、住居西壁寄り中央部から検出した。規模は166 × 165 × 71cmを測る。[ピット]で記述したが、柱穴として機能した可能性が考えられる。SK - 6は、SK - 5より南壁寄りの位置から検出した。規模は122 × (55) × 35cmを測る。SK - 7は、SK - 5より北壁寄りの位置から検出した。規模は

(121) × 121 × 23cmを測る。SK - 8は、Pit33より西壁よりの位置から検出した。規模は(100) × 79 × 23cmを測る。

[堆積土] 掘り方部分を含めて18層に分層した。住居廃絶後の堆積は第1～10層で住居中央部～南壁側の部分については、一部廃棄が伴った土層であるが、概ね自然堆積様相を呈する。第3層中にB - T m火山灰が粒状に堆積している。

(木村)

SI - 44 (第148～151図)

[位置] グリッドME・MF - 299・300で検出した。

[重複] SI - 45と重複している。本遺構に帰属するPit1がSI - 45を切っており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 方形を呈し、(690) × 666 × 108cmを測る。床面積は45.62㎡を測る。

[壁] 東壁側が削平のため全容は不明であるが、北壁59cm、南壁55cm、西壁87cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

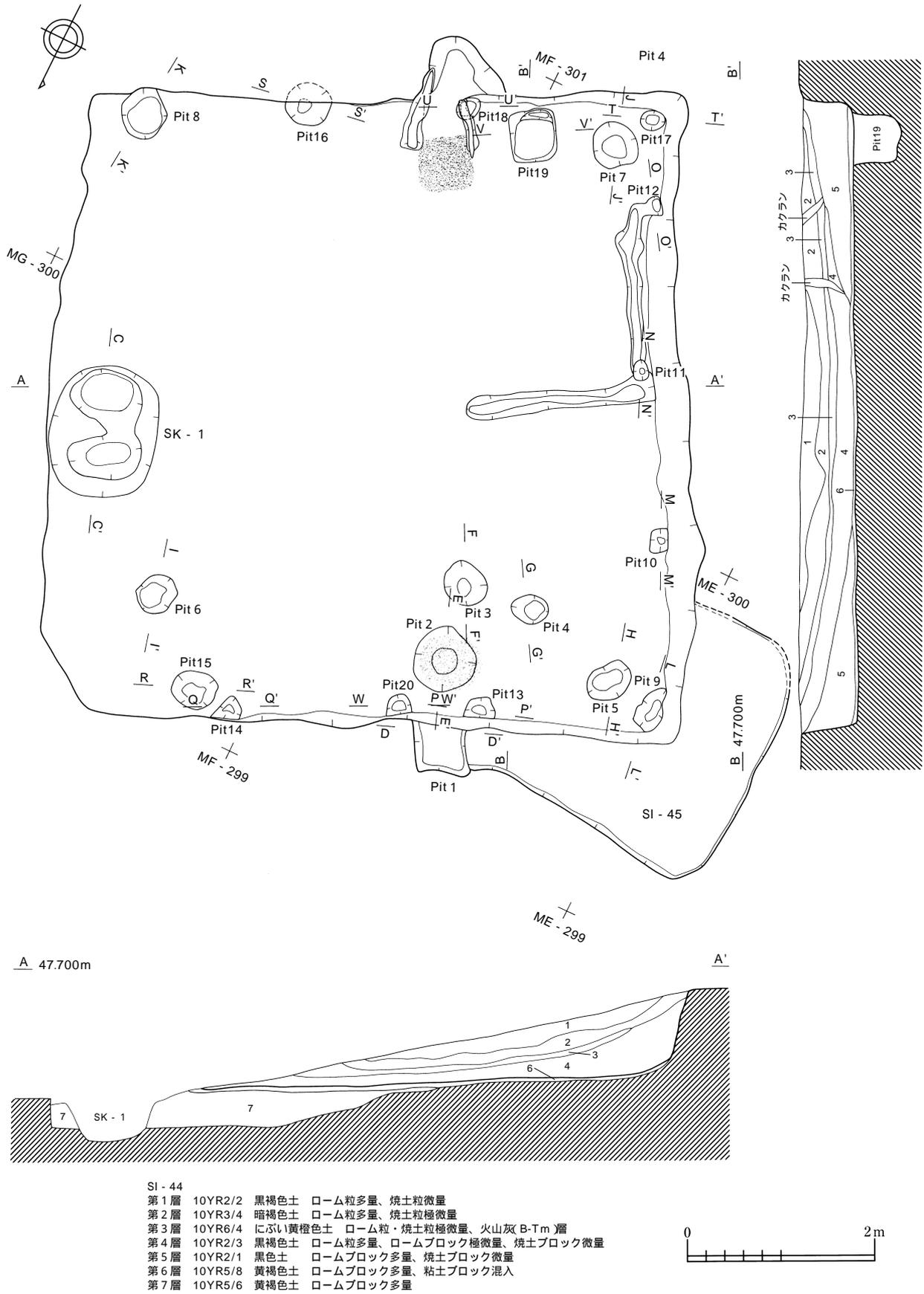
[床] 住居東壁側に掘り方を持ち、月見野火山灰層主体の地山土を充填している。その上に、貼り床を貼り、床面としている。それ以外の部分については月見野火山灰層の地山の上に黄褐色土と粘土ブロックの混合層を貼り床としており、やや起伏があり、堅緻である。Pit2から赤化面を65 × 61cm範囲で検出した。

[壁溝] 住居西壁中央付近からL字状に検出した。深さは2～3cmを測る。間仕切り溝としての機能が考えられる。

[ピット] 住居内外から20基検出した。各ピットの規模は、Pit1 = (50) × 55 × 31cm、Pit2 = 71 × 65 × 16cm、Pit3 = 48 × 48 × 17cm、Pit4 = 40 × 32 × 53cm、Pit5 = 50 × 35 × 9cm、Pit6 = 43 × 35 × 48cm、Pit7 = 50 × 47 × 13cm、Pit8 = 55 × 47 × 43cm、Pit9 = 49 × 30 × 16cm、Pit10 = 25 × 18 × 40cm、Pit11 = 22 × 15 × 25cm、Pit12 = 20 × 16 × 24cm、Pit13 = 30 × 22 × 36cm、Pit14 = 25 × 21 × 28cm、Pit15 = 49 × 40 × 17cm、Pit16 = 44 × 25 × 40cm、Pit17 = 25 × 21 × 36cm、Pit18 = 27 × 21 × 31cm、Pit19 = 65 × 48 × 35cm、Pit20 = 26 × (20) × 23cmを測る。主柱穴は、Pit3、6、8、19である。壁柱穴は、Pit9、10、11、12、13、14、16、17、20で、柱間が180cm弱で約6尺に相当する。Pit1、2として取り扱ったピットについては、Pit2の第2層が赤化面にあたり、Pit1の堆積土中にカマド天井と同様の土層が堆積していることからPit1、2でカマドとして機能した可能性が考えられる。

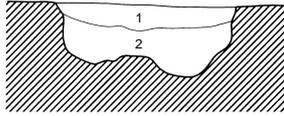
[カマド] 住居南壁側から1基検出した。[ピット]で記述したが北壁側にもカマドが存在した可能性があるが、発掘調査時での判断事由により南壁側のみの取り扱いとする。南壁3(62:38)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅84cm、煙道長63cmを測る。主軸はN - 153.5° - Eである。粘土による構築で、煙道部は掘り方を有する。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中20°の角度で煙出部へ向かい、煙出部では外傾しながら立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居外にSB - 03ならびにSD - 05が位置する。SB - 03については斜面上方の柱列が480cmで16尺に相当し、住居の主軸とほぼ同じであることから本遺構に帰属した可能性が高い。また、SD - 05については、溝の末端がSI - 45まで及んでおらず、住居西壁中央部よりやや



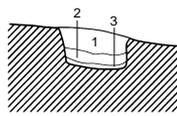
第148図 SI - 44

SI - 44 SK - 1
C 46.800m C'

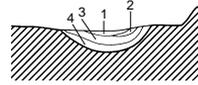


SK - 1
第1層 10YR2/1 黒色土 ロームブロック中量、粘土ブロック極微量
第2層 10YR5/6 黄褐色土 ロームブロック多量、炭化粒極微量
Pit 1
第1層 10YR2/1 黒色土 ローム粒多量、ロームブロック微量
第2層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック・焼土ブロック中量
第3層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒・焼土粒微量

SI - 44 Pit 1
D 47.700m D'

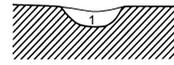


SI - 44 Pit 2
E 46.800m E'



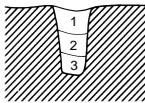
Pit 2
第1層 7.5YR3/4 暗褐色土 ローム粒・焼土粒多量、炭化物中量
第2層 7.5YR5/8 明褐色土
第3層 5YR4/8 赤褐色土 ロームブロック微量
第4層 10YR4/4 褐色土 粘土ブロック多量

SI - 44 Pit 3
F 46.800m F'



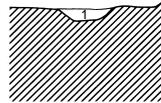
Pit 3
第1層 10YR4/4 褐色土 焼土粒多量、炭化物中量

SI - 44 Pit 4
G 46.800m G'

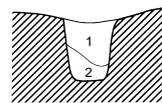


Pit 4
第1層 10YR2/1 黒色土 ロームブロック・粘土ブロック微量
第2層 10YR2/1 黒色土 ローム粒中量
第3層 10YR2/1 黒色土 ロームブロック多量
Pit 5
第1層 10YR2/1 黒色土 ローム粒・ロームブロック中量

SI - 44 Pit 5
H 46.800m H'

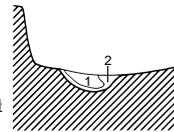


SI - 44 Pit 6
I 46.800m I'



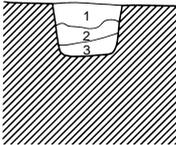
Pit 6
第1層 10YR2/1 黒色土 ローム粒多量、ロームブロック中量
第2層 10YR5/6 黄褐色土 ロームブロック中量

SI - 44 Pit 7
J 47.700m J'



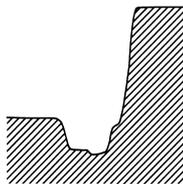
Pit 7
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ロームブロック微量、粘土ブロック多量
第2層 10YR2/1 黒色土 ロームブロック中量

SI - 44 Pit 8
K 46.800m K'

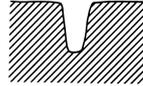


Pit 8
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ロームブロック中量、粘土ブロック微量
第2層 10YR2/3 黒褐色土 ロームブロック多量
第3層 10YR2/1 黒色土 ロームブロック微量

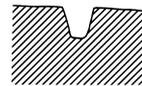
SI - 44 Pit 9
L 47.700m L'



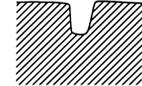
SI - 44 Pit 10
M 46.800m M'



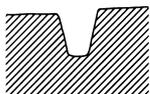
SI - 44 Pit 11
N 46.800m N'



SI - 44 Pit 12
O 46.800m O'



SI - 44 Pit 13
P 46.800m P'



SI - 44 Pit 14
Q 46.800m Q'



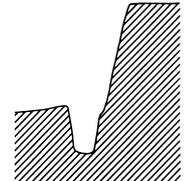
SI - 44 Pit 15
R 46.800m R'



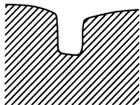
SI - 44 Pit 16
S 46.800m S'



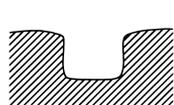
SI - 44 Pit 17
T 47.700m T'



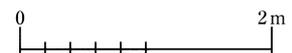
SI - 44 Pit 18
U 46.800m U'



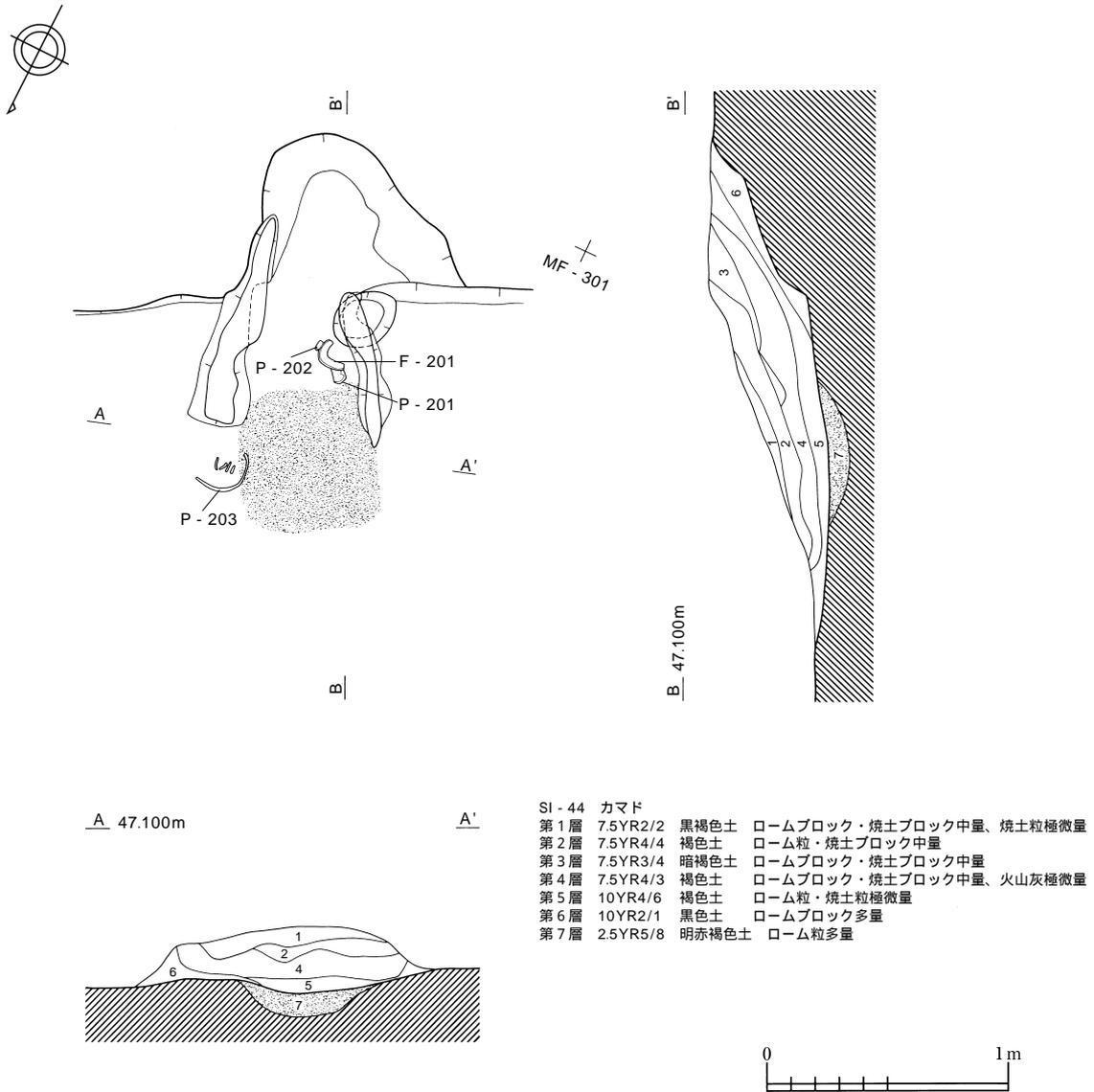
SI - 44 Pit 19
V 46.800m V'



SI - 44 Pit 20
W 46.800m W'



第149図 SI - 44



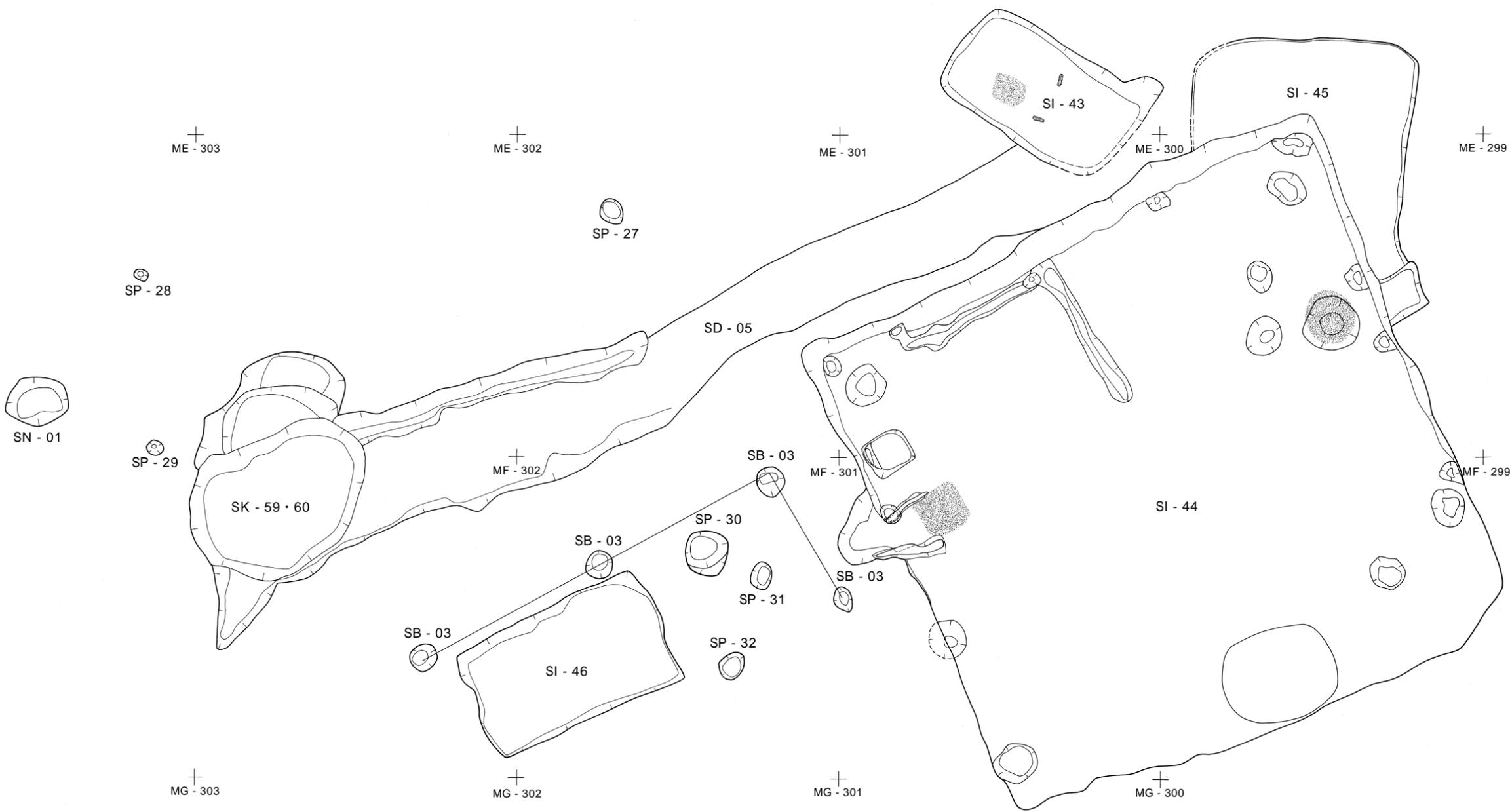
第150図 SI - 44

北壁寄りの部分から溝として掘削されていたと考えられる。先端部について幅の広い溝以外に細い溝や土坑等が掘削されており、排水機能を目的としたと考えるよりはむしろ土留め等の掘削痕としての役割が強いものと考えられる。

その他、住居内東壁中央から土坑1基を検出した。規模は142×116×55cmを測る。

[堆積土] 掘り方部分を含めて7層に分層した。第6層が貼り床にあたる。第3層中にB-Tm火山灰が堆積している。自然堆積の様相を呈する。

(木村)



第151図 SI - 44

S I - 48 (第152図)

[位置] グリッドMC - 304で検出した。

[重複] S I - 50と重複している。本遺構がS I - 50の堆積土を切っており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 長方形を呈し、 $274 \times 206 \times 88\text{cm}$ を測る。床面積は 5.424m^2 である。

[壁] 壁高は、北壁 57cm 、東壁 50cm 、西壁 88cm 、南壁 74cm を測る。断面形はdで、壁はやや外反して緩やかに立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁溝] 南西隅から部分的に検出した。深さは平均 7cm である。

[ピット] 南東隅の壁付近からピットを1基検出した。規模は $68 \times 46 \times 6\text{cm}$ である。堆積状況や深さからみて、柱穴として機能していたものではないと考えられる。

[カマド] 住居東壁1(15:85)の位置から1基検出した。当初、カマドをもたない竪穴遺構であると想定し、ある程度掘り下げた時点で、カマドをもつ遺構であることが判明したため、燃烧部の構造については明らかでない。構造は、半地下式で、煙道長 95cm を測る。主軸はN - 84° - Eである。煙道部は 35° の角度で立ち上がり、一旦緩やかに落ち込み、そこから 15° の角度で立ち上がる。袖部幅 42cm 、煙道長 115cm を測り、袖部は粘土によって構築されており、芯材は検出していない。燃烧部に底部を接した状態で甕の下半部が出土した。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 10層に分層した。下層は暗褐色土を主体とし、中層は焼土ブロックを混入した黄褐色土が流れ込んだような状況を呈し、上層は黒褐色土を主体とする。いずれも炭化物、ロームブロックを含んだ土であり、土砂の廃棄等による人為的堆積状況を呈すると考えられる。3層において粒状のB - T m火山灰を確認できるが、2次堆積によるものと考えられる。

(設楽)

S I - 54 (新)(第153~155図)

[位置] グリッドLI・LJ - 306~308で検出した。

[重複] S I - 54(旧)ならびにS I - 55と重複している。本遺構がS I - 54(旧)の上に構築されており、また、S I - 55の北壁を切っており、本遺構の方が新しい。

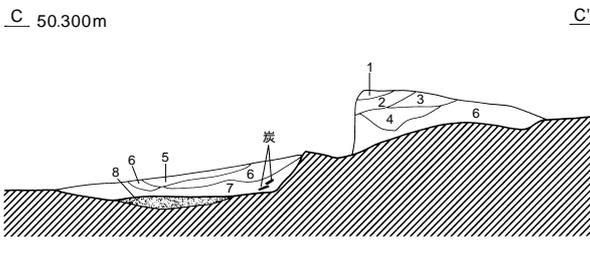
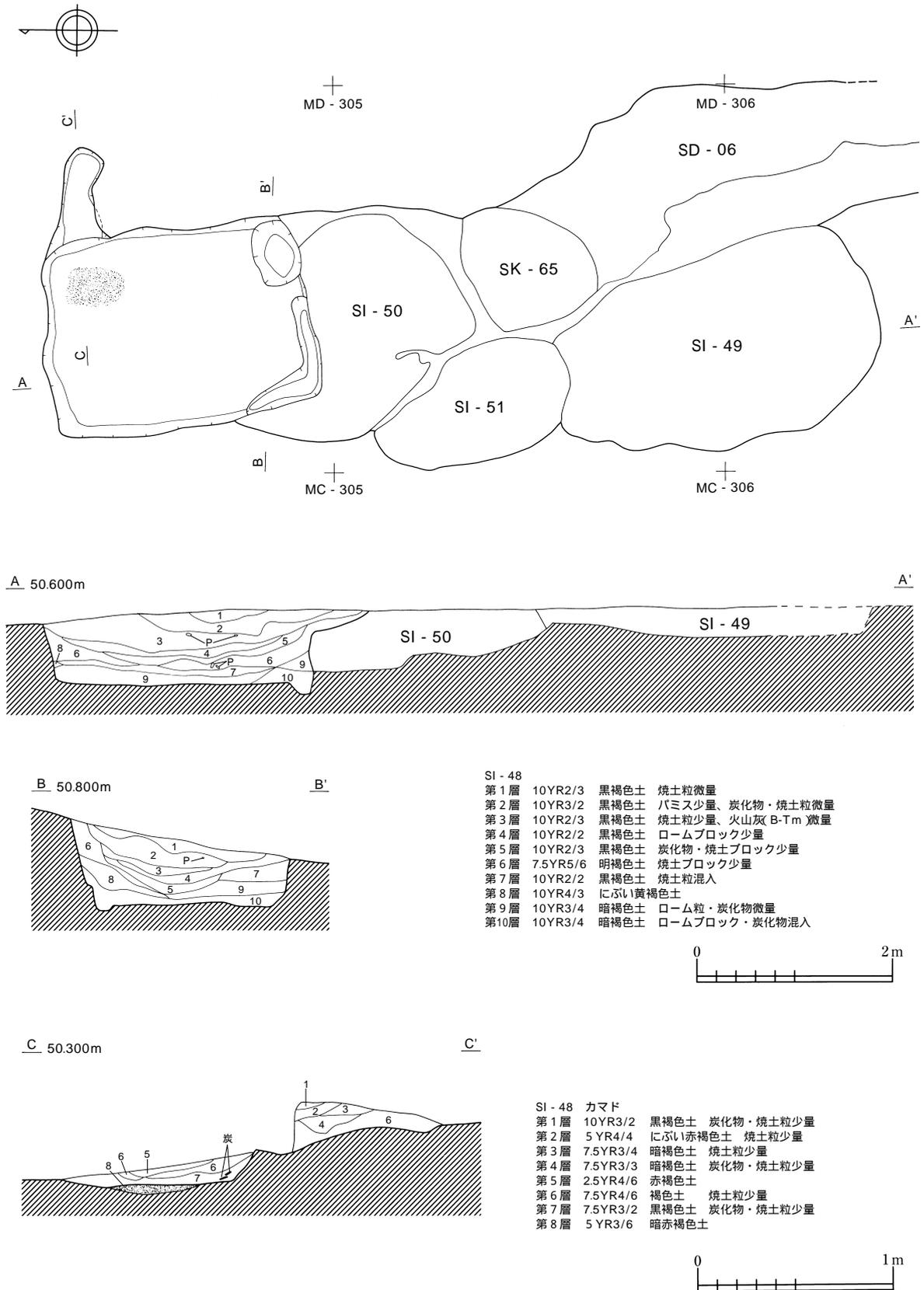
[平面形・規模] 方形を呈し、 $618 \times 600 \times 55\text{cm}$ を測る。床面積は 37.1m^2 を測る。

[壁] 壁高は、北壁 37cm 、東壁 51cm 、南壁 51cm 、西壁 26cm を測る。断面形はeで、南壁側S I - 55の重複部分について、S I - 55の床面の一部が棚状の段となっている。壁面は堅緻である。

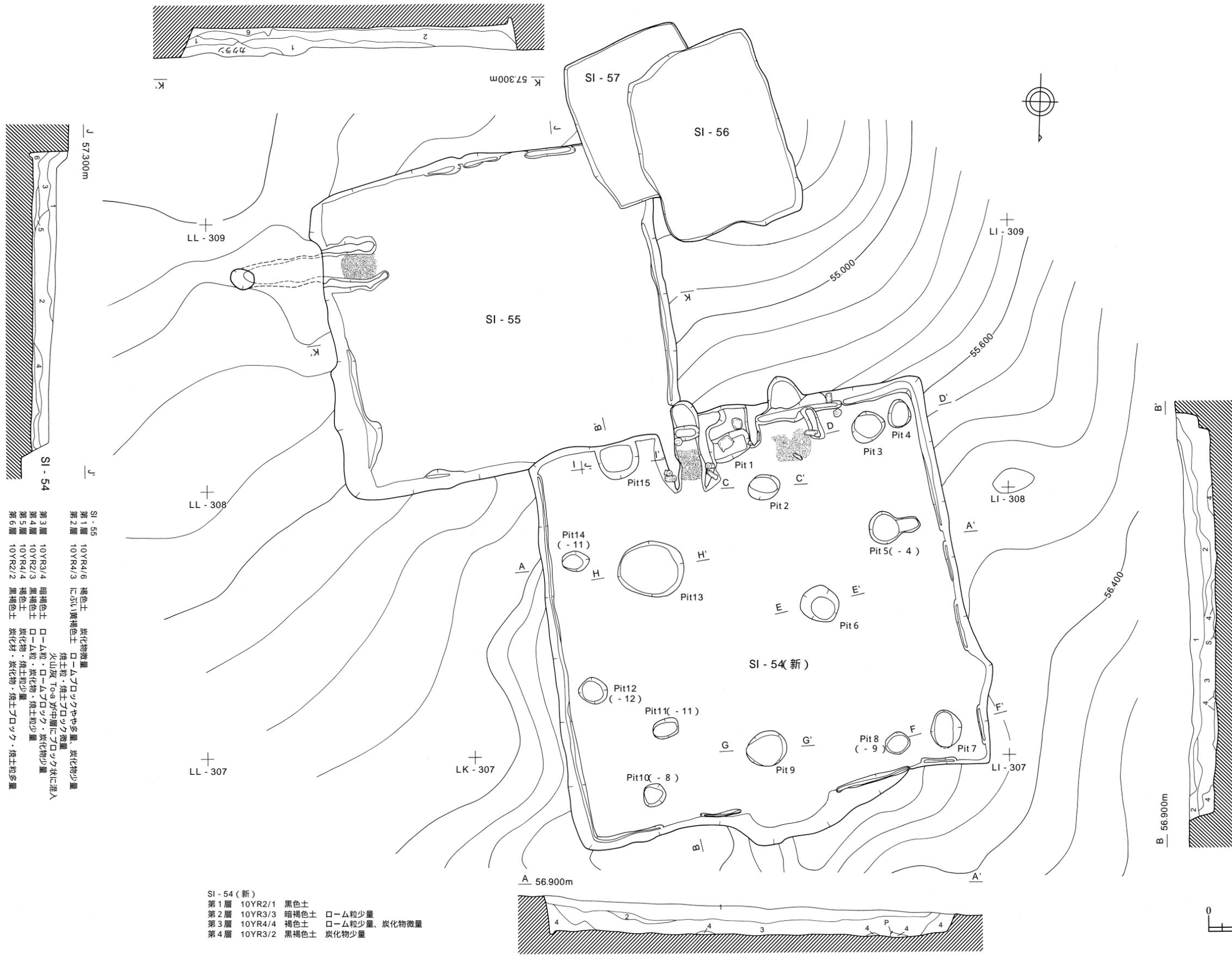
[床] 住居中央部にS I - 54(旧)が重複しており、重複部分については、ローム土を貼り床としている。それ以外の部分は、大谷火山灰層主体の地山土で、貼り床面と境界についてほとんど判別がつかない。床面はやや起伏があり、堅緻である。

[壁溝] 断続しながら南壁のS I - 55の重複部分を除き、ほぼ全周する形で検出した。深さは平均 8cm を測る。

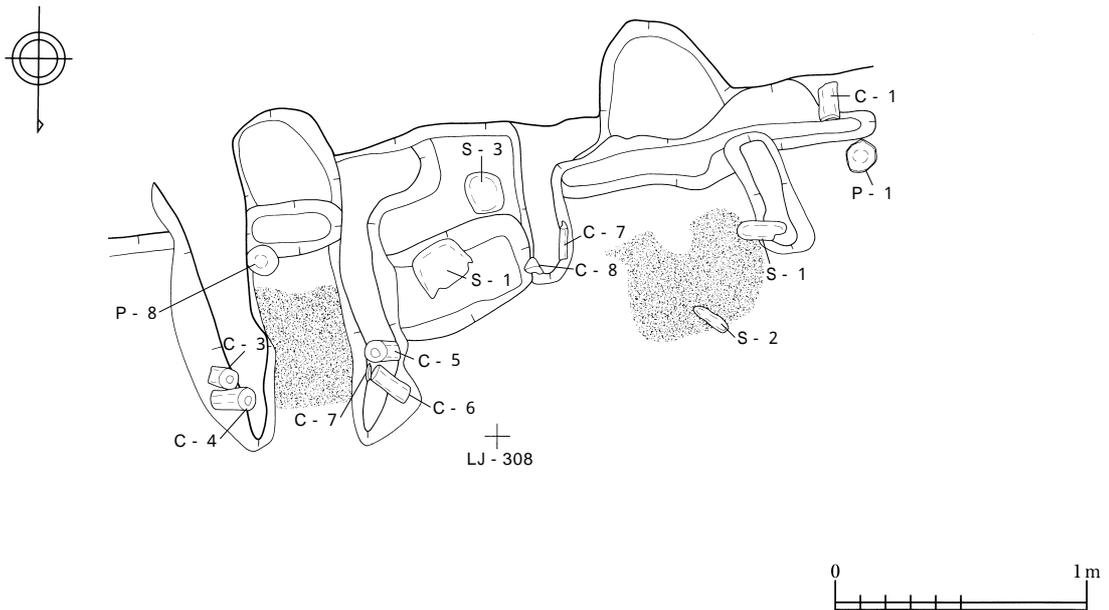
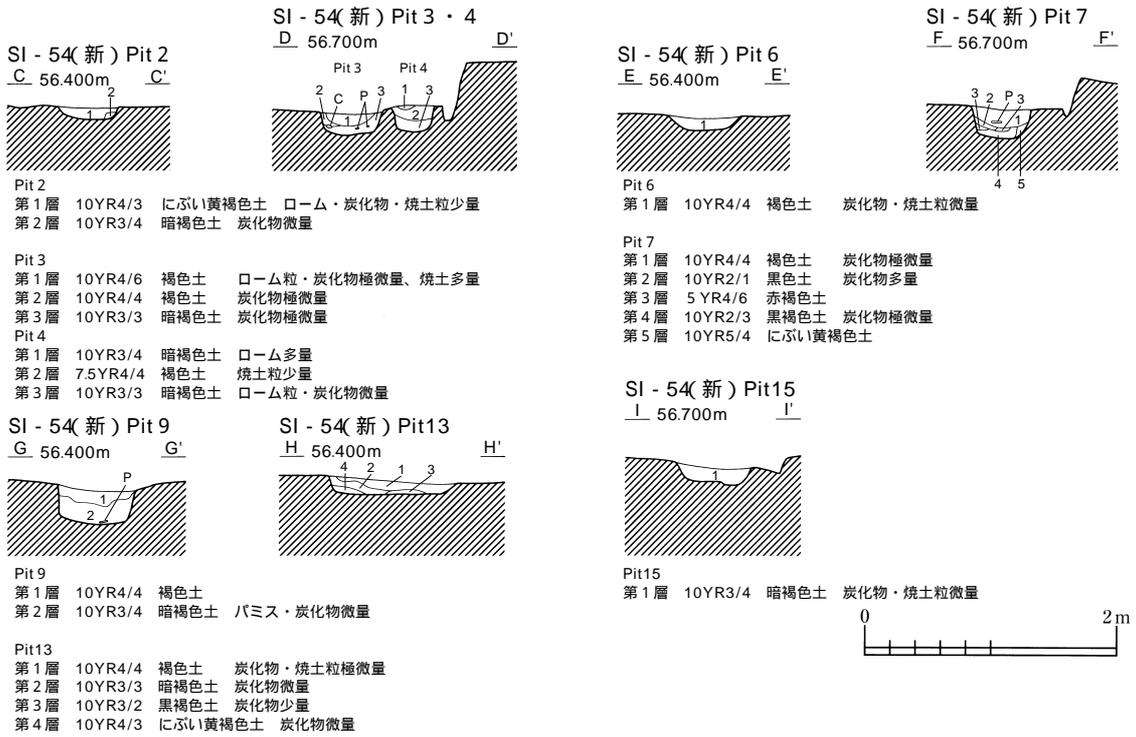
[ピット] 住居内から15基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = $65 \times 38 \times 13\text{cm}$ 、Pit 2 = $49 \times 38 \times 10\text{cm}$ 、Pit 3 = $50 \times 45 \times 18\text{cm}$ 、Pit 4 = $43 \times 34 \times 17\text{cm}$ 、Pit 5 = $72 \times 49 \times 4\text{cm}$ 、Pit 6 = $57 \times 51 \times 11\text{cm}$ 、Pit 7 = $54 \times 47 \times 23\text{cm}$ 、Pit 8 = $36 \times 35 \times 9\text{cm}$ 、Pit 9 = $61 \times 53 \times 30\text{cm}$ 、Pit 10 = $34 \times 31 \times$



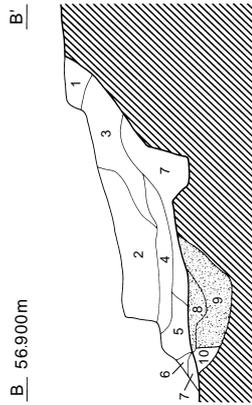
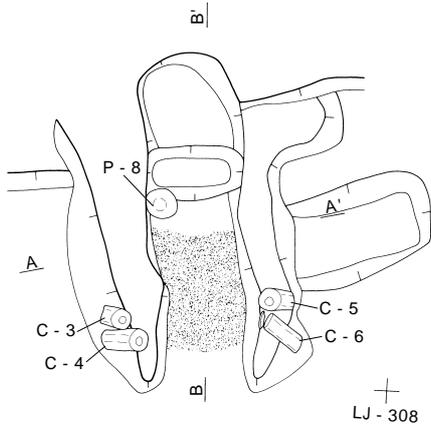
第152図 SI - 48



第153図 SI - 54 (新) ・ SI - 55

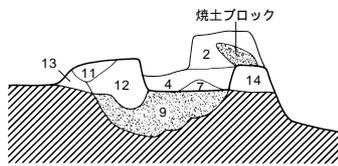


第154図 SI - 54(新)



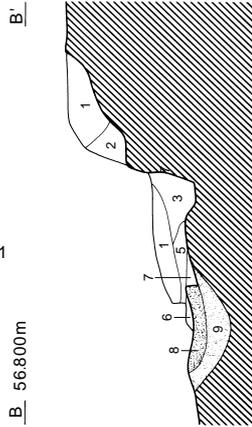
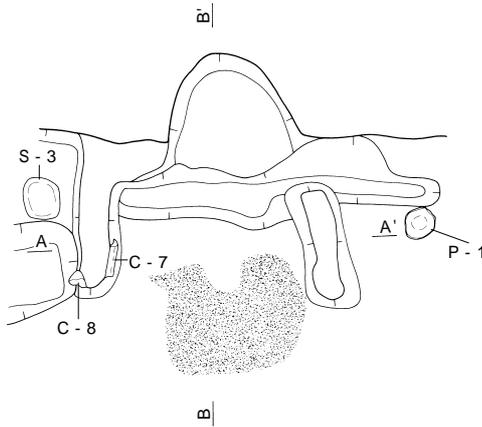
A 56.900m

A'



SI - 54(新) カマド(新)

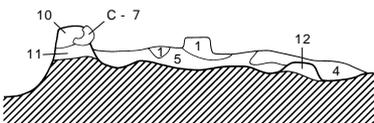
- 第1層 10YR4/6 褐色土
- 第2層 10YR4/4 褐色土 ローム粒少量
- 第3層 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒多量
- 第4層 10YR4/6 褐色土 焼土粒微量
- 第5層 10YR4/4 褐色土 焼土粒多量
- 第6層 10YR4/4 褐色土 炭化物極微量
- 第7層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物極微量、焼土粒少量
- 第8層 7.5YR4/4 褐色土 炭化物極微量
- 第9層 5YR4/6 赤褐色土
- 第10層 7.5YR3/4 暗褐色土 炭化物、焼土粒少量
- 第11層 5YR4/8 赤褐色土
- 第12層 7.5YR4/4 褐色土 焼土粒少量
- 第13層 10YR4/4 褐色土 炭化物、焼土粒少量
- 第14層 5YR3/6 暗赤褐色土



LJ - 308

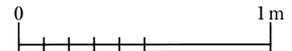
A 56.800m

A'



SI - 54(新) カマド(旧)

- 第1層 10YR4/6 褐色土 炭化物、焼土粒少量
- 第2層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物少量
- 第3層 7.5YR4/4 褐色土 焼土粒微量
- 第4層 10YR4/4 褐色土 炭化物、焼土粒微量
- 第5層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物微量
- 第6層 7.5YR4/6 褐色土
- 第7層 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒微量
- 第8層 2.5YR4/6 赤褐色土
- 第9層 5YR4/6 赤褐色土
- 第10層 10YR4/6 褐色土 炭化物極微量
- 第11層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物極微量
- 第12層 10YR4/6 褐色土 炭化物、焼土粒微量



第155図 SI - 54(新)

8 cm、Pit11 = 38 × 28 × 11cm、Pit12 = 42 × 40 × 12cm、Pit13 = 99 × 83 × 14cm、Pit14 = 41 × 29 × 11cm、Pit15 = 60 × 51 × 17cmを測る。主柱配置については、いずれのピットも浅く、不明瞭であるが、Pit 3、7、10、15が主柱穴として機能した可能性が考えられる。

[カマド] 住居南壁側から2基検出した。南壁2(39:61)と南壁3(64:36)の位置から検出している。新旧関係は、いずれのカマドからも袖を検出しているため、併存した可能性についても考えられるが南壁3側の袖の残存状況は、南壁2側に比べると基部のみが残存している状況ならびに天井部の土層が残存していないことから、南壁2側のカマドが住居廃絶時点で残存していたものとする。南壁2のカマドの構造は、半地下式で、袖部幅86、煙道長60cmを測る。主軸はN - 172° - Eである。燃烧部袖は、転用羽口を芯材とし、粘土による構築である。燃烧部天井は第4、5層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり途中で40°の角度で立ち上がる。煙道部東側の部分はS I - 55の重複部分であるが、粘土を用いて構築している。

南壁3のカマドの構造は、半地下式で、袖部幅115cm、煙道長47cmを測る。主軸はN - 170° - Eである。南壁2のカマドと同様燃烧部袖に転用羽口を芯材とし、粘土を用いて構築している。また、カマド周辺部から自然礫の出土があったことから自然礫についても芯材として利用された可能性が考えられる。天井の堆積土は土層堆積中に残存していない。煙道は、南壁2のカマドと同様住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で角度を変え、40°の角度で起伏を持ちながら立ち上がる。

[その他の付属施設] 北壁中央部から170cm × 50cmの半円状の張り出しを検出した。壁溝がその部分で途切れており、出入口等の施設に関連があるものとする。

[堆積土] 4層に分層した。住居中央床直部分を覆っている第3層は、地山土主体の堆積土で人為的堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 54(旧)(第156図)

[位置] グリッドL I・L J - 307で検出した。

[重複] S I - 54(新)と重複している。本遺構の上面にS I - 54(新)が構築されており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] S I - 54(新)と切りあっているため、住居壁面が部分的に残存するのみであり、残存規模であるが、(474) × (398) × 12cmを測る。床面積は(18.904) m²を測る。

[壁] 壁高は、S I - 54(新)と切りあっているため、ほとんどが残存していない。南壁側のみが計測可能で12cmを測る。断面形はfで、床面とほとんど区別がつかない。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、起伏があり、やや堅緻である。

[壁溝] 住居南壁側、ならびに東西壁の南壁よりの部分から検出した。深さは平均9cmを測る。

[ピット] 住居内から5基検出した。重複するS I - 54(新)に帰属する可能性があるピットがあるが、S I - 54(新)の床面下から検出したため、本遺構帰属のものとして取り扱った。各ピットの規模は、Pit 1 = 45 × 45 × 11cm、Pit 2 = 46 × 37 × 7 cm、Pit 3 = 90 × 54 × 9 cm、Pit 4 = 45 × 45 × 5 cm、Pit 5 = 41 × 33 × 8 cmを測る。主柱配置は不明である。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(71:29)の位置から検出している。S I - 54(新)と切りあっているため、燃烧部および煙道部上部については削平されており、火床面と煙道部

の下部構造の一部のみが残存して検出した。構造は、煙出部の下部構造から地下式であったことが推定される。残存部分での煙道長は125cmを測る。主軸はN - 175° - Eである。構築材等については不明である。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] S I - 54 (新) の貼り床部分を含めて4層に分層した。残存状況が悪いため詳細は不明であるが、地山土主体の堆積であり、人為的堆積状況を呈すると考えられる。

(木 村)

S I - 55 (第153、157、158図)

[位 置] グリッドL J・L K - 308・309で検出した。

[重 複] 北西側でS I - 54 (新)、南西側でS I - 57と重複している。S I - 54・57ともに本遺構の堆積土を切っており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 方形を呈し、502×482×58cmを測る。床面積は23.993m²である。

[壁] 壁高は、北壁48cm、東壁44cm、西壁38cm、南壁52cmを測る。断面形はdで、壁はやや外反して緩やかに立ち上がる。本住居跡は焼失住居であり、被熱により、壁が部分的に赤化している。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。被熱により、部分的に赤化している。焼け落ちた上屋の部材と思われる板状の炭化材や、粉状の炭化物を床面の広い範囲にわたって検出した。

[壁 溝] 各壁において部分的に検出した。西壁、南壁においては、壁板と考えられる板状の炭化材が部分的に残存していた。深さは平均10cmである。

[ピット] なし。

[カマド] 東壁3 (80:20) の位置から1基検出した。本遺構は工事用仮設道路下部より検出したものであり、確認面での削平が激しく、住居のプラン、煙出部の位置の把握が困難であったことに加え、焼失住居であったことから、燃焼部の推定も困難で、床面近くまで掘り下げた時点でカマドの位置を確認できたため、天井部等の崩落状況は明らかでない。構造は、地下式で、袖部幅76cm、煙道長140cmを測る。主軸はN - 83.5° - Eである。袖は粘土によって構築されており、芯材は装填されていない。煙道部は、中間部で若干の平坦面をもちながら、火床面から20°の角度で緩やかに下り、煙出部付近で平坦になって立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

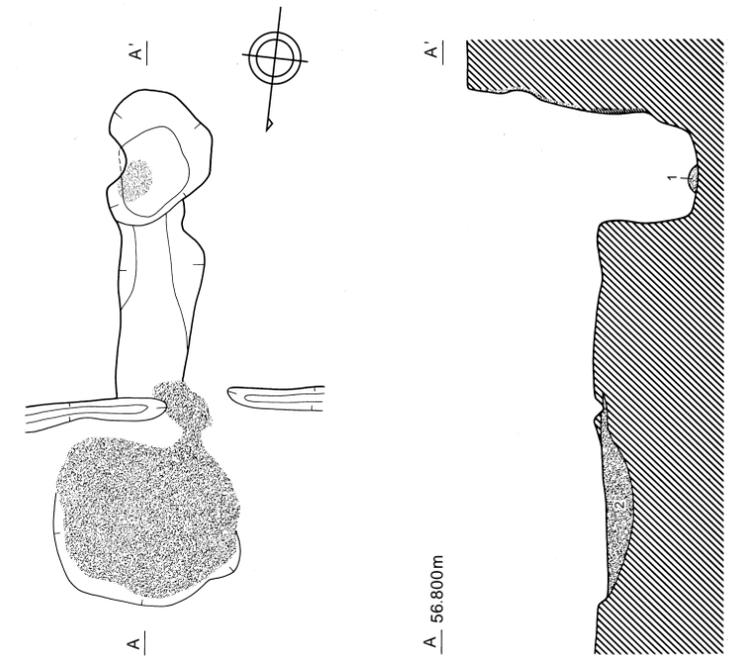
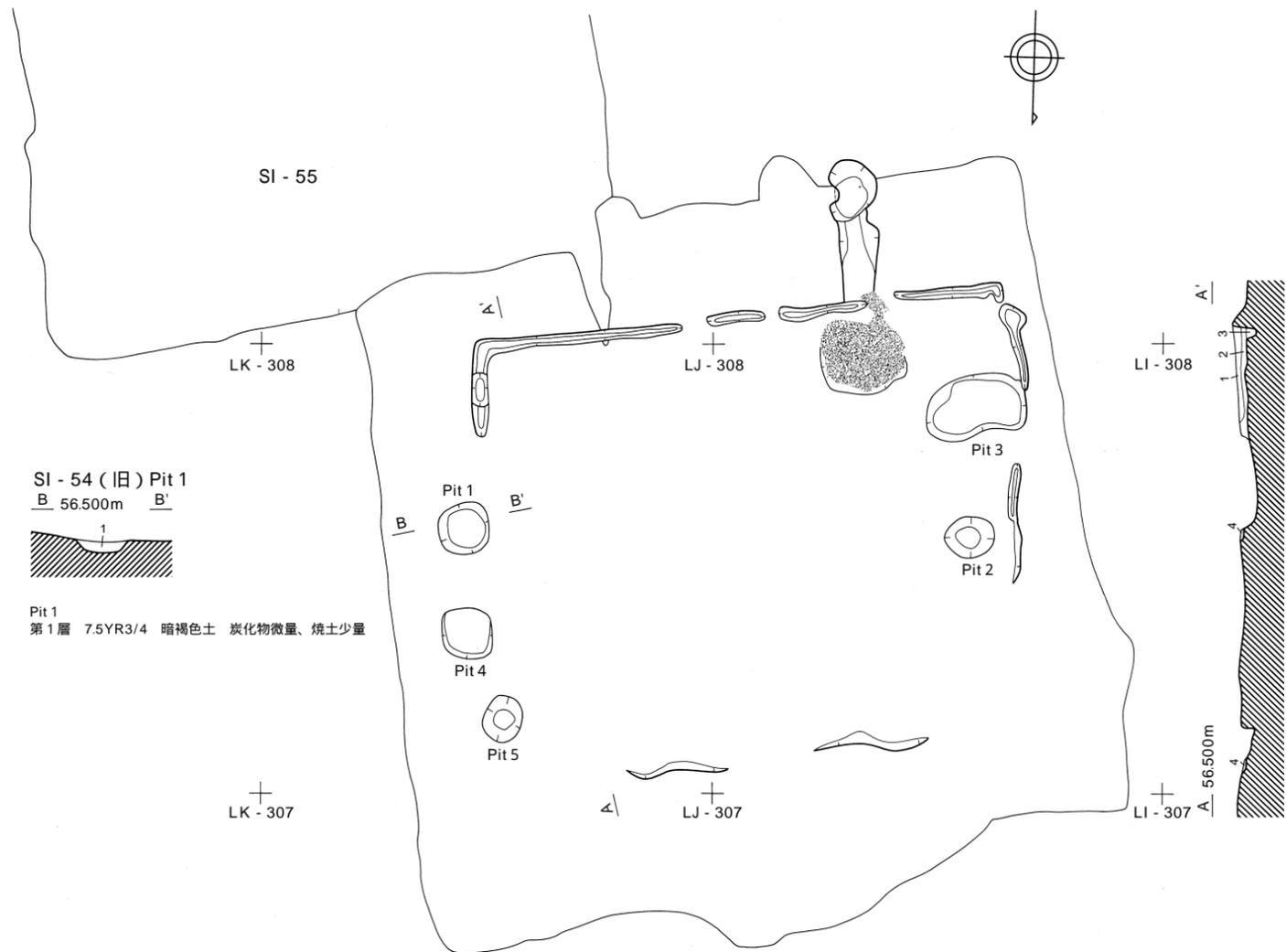
[堆積土] 6層に分層した。最下層は、焼け落ちた上屋と思われる炭化材や焼土を多量に含んだ黒褐色を呈する土層で、間に暗褐色の土層をはさんで、その上層ににぶい黄褐色を呈する2層が堆積しており、本遺構の堆積は、焼失後の埋め戻しなどの人為的要因が強いと考えられる。また2層には、炭化物・焼土に混じってT o - a火山灰がブロック上に混入する。

(設 楽)

S I - 58 (第159～161図)

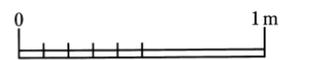
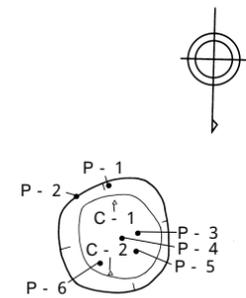
[位 置] グリッドL L・L M・L N - 306・307、L M・L N - 308で検出した。

[重 複] 住居北壁部分でS I - 59と重複している。本遺構がS I - 59を切っており、本遺構の方が



SI - 54 (旧) Pit 1 遺物出土状況

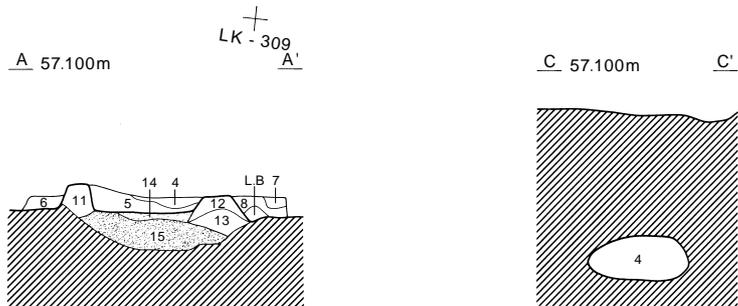
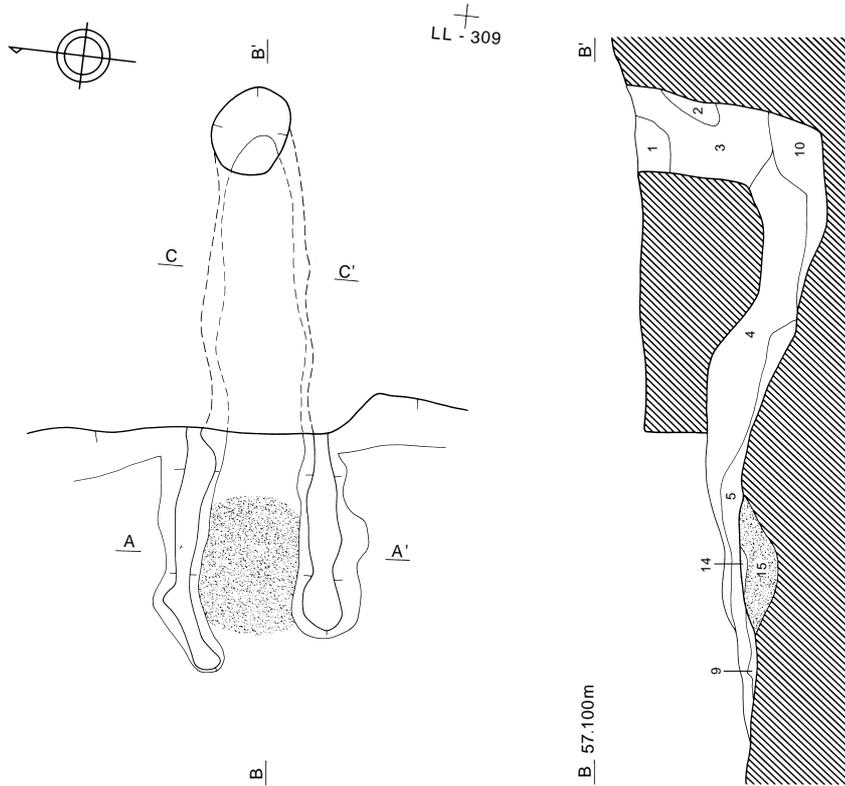
LK - 308+2mS



第156図 SI - 54 (旧)



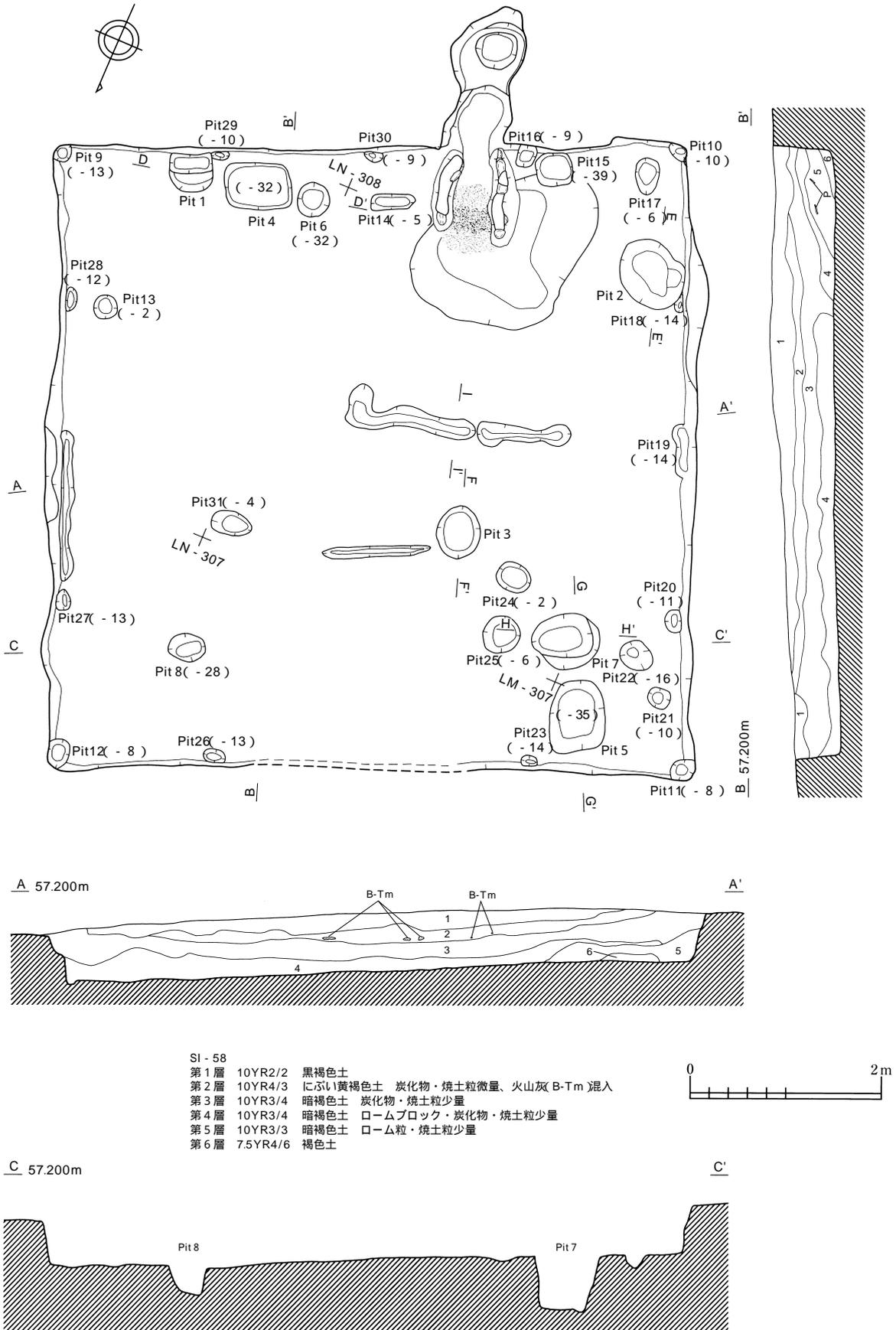
第157図 SI - 55



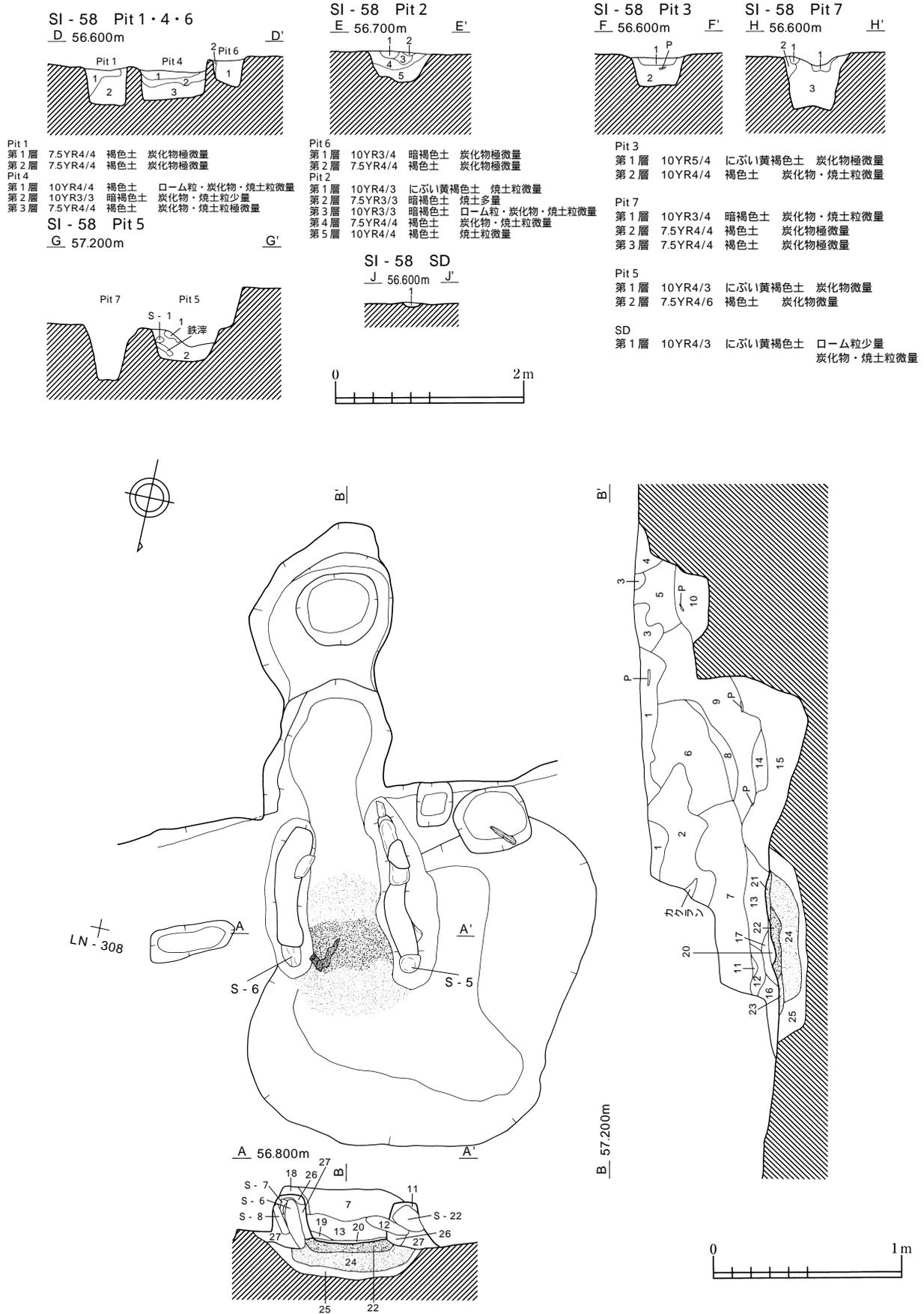
- SI - 55 カマド
- | | | | |
|------|------------|---------|----------------------|
| 第1層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第2層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ローム粒微量、焼土粒少量 |
| 第3層 | 7.5YR4/4 | 褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第4層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 炭化物・焼土粒少量 |
| 第5層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 炭化物・焼土粒少量 |
| 第6層 | 7.5YR1.7/1 | 黒色土 | 炭化物層、焼土粒微量 |
| 第7層 | 7.5YR4/6 | 褐色土 | |
| 第8層 | 7.5YR2/2 | 黒褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第9層 | 5 YR4/4 | にぶい赤褐色土 | |
| 第10層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | ロームブロック・焼土粒・焼土ブロック少量 |
| 第11層 | 7.5YR4/3 | 褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第12層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第13層 | 7.5YR4/6 | 褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第14層 | 7.5YR6/6 | 橙色土 | |
| 第15層 | 5 YR4/8 | 赤褐色土 | 炭化粒・焼土少量 |



第158図 SI - 55

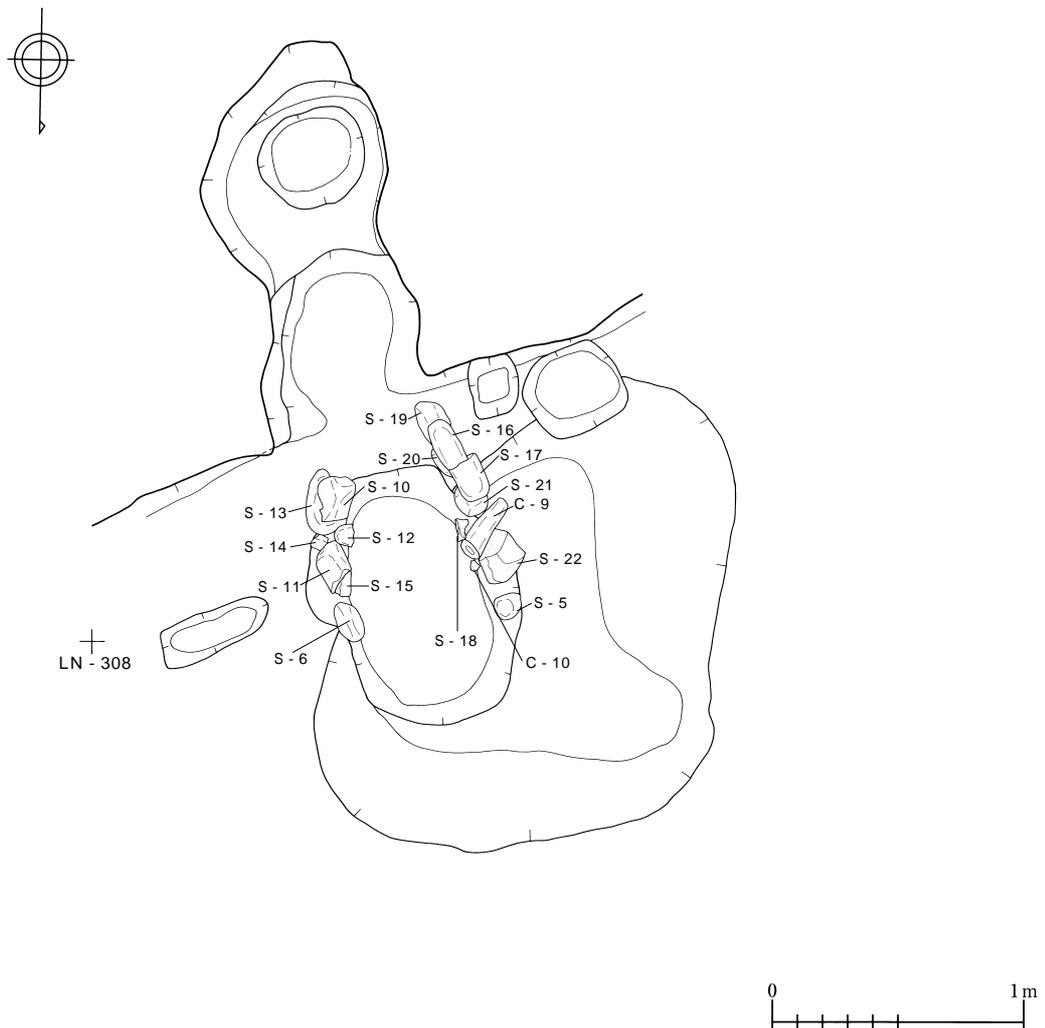


第159図 SI - 58



第160図 SI - 58

層数	色相	土質	特徴
SI - 58 カマド			
第1層	10YR2/2	黒褐色土	炭化物微量
第2層	10YR3/3	暗褐色土	炭化物・焼土粒微量
第3層	10YR4/6	褐色土	部分的(7.5YR3/4暗褐色土)に赤化
第4層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒・炭化物・焼土粒微量
第5層	7.5YR3/4	暗褐色土	焼土粒微量
第6層	7.5YR4/4	褐色土	炭化物・焼土粒微量
第7層	10YR2/3	黒褐色土	ローム少量・炭化物・焼土粒微量
第8層	5YR3/4	暗赤褐色土	
第9層	7.5YR3/2	黒褐色土	炭化物・焼土粒微量
第10層	7.5YR2/2	黒褐色土	焼土粒微量
第11層	7.5YR4/6	褐色土	炭化物・焼土粒極微量
第12層	2.5YR3/6	暗赤褐色土	
第13層	7.5YR3/3	暗褐色土	焼土粒多量
第14層	7.5YR4/4	褐色土	
第15層	7.5YR3/3	暗褐色土	焼土粒微量
第16層	10YR2/3	黒褐色土	焼土ブロック多量
第17層	7.5YR3/4	暗褐色土	焼土粒多量
第18層	10YR3/4	暗褐色土	焼土粒極微量
第19層	7.5YR5/6	明褐色土	焼土粒極微量
第20層	2.5YR2/1	赤黒色土	
第21層	2.5YR3/6	暗赤褐色土	
第22層	2.5YR4/8	赤褐色土	
第23層	5YR3/4	暗赤褐色土	焼土粒少量
第24層	2.5YR4/8	赤褐色土	
第25層	7.5YR4/6	褐色土	焼土粒極微量
第26層	7.5YR4/4	褐色土	焼土粒少量
第27層	7.5YR3/4	暗褐色土	焼土粒微量



第161図 SI - 58

新しい。また、東壁北側部分でS I - 60と重複している。本遺構がS I - 60の堆積土を切って構築されており本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 方形を呈し、682×656×63cmを測る。床面積は44.316㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁46cm、東壁42cm、南壁58cm、西壁52cmを測る。断面形はcで、壁面の一部で緩やかな立ち上がりが見られる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としておりやや起伏があり、堅緻である。

[壁溝] 東壁中央部から部分的に検出した。深さは2cmを測る。また、住居中央部で住居軸に平行する溝を2条検出した。深さは、それぞれ平均4cmを測る。間仕切り溝として機能したか、それ以外の施設に関連するものなのか不明である。

[ピット] 住居内から31基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 45×40×40cm、Pit 2 = 75×70×31cm、Pit 3 = 56×45×31cm、Pit 4 = 69×48×32cm、Pit 5 = 75×58×35cm、Pit 6 = 36×32×32cm、Pit 7 = 70×58×50cm、Pit 8 = 38×31×28cm、Pit 9 = 20×17×13cm、Pit10 = 25×15×10cm、Pit11 = 32×23×8cm、Pit12 = 32×20×8cm、Pit13 = 26×24×2cm、Pit14 = 47×18×5cm、Pit15 = 38×35×39cm、Pit16 = 23×17×9cm、Pit17 = 39×25×6cm、Pit18 = 16×8×14cm、Pit19 = 56×15×14cm、Pit20 = 25×17×11cm、Pit21 = 25×21×10cm、Pit22 = 36×30×16cm、Pit23 = 17×11×14cm、Pit24 = 36×30×2cm、Pit25 = 40×40×6cm、Pit26 = 22×18×13cm、Pit27 = 22×15×13cm、Pit28 = 25×11×12cm、Pit29 = 19×9×10cm、Pit30 = 20×11×9cm、Pit31 = 43×26×4cmを測る。主柱穴は、Pit 1、7、8、15である。壁柱穴は、Pit 9、10、11、12、16、18、19、20、23、26、27、28、29、30である。壁柱穴の多くは柱間が160cm前後で約5.5尺である。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(66:34)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅92cm、煙道長145cmを測る。主軸はN - 162° - Eである。袖部は、転用羽口、自然礫と粘土で構築されており、燃烧部天井は土層堆積上に残存していない。煙道部天井についても同様である。煙道は、有段の構造で地下式のように18°の角度で傾斜した後、一度内傾しながら立ち上がり、さらに柱穴状に掘り込まれた煙出部へ向かい立ち上がる。焚口付近では、210×150×16cmの土坑状の掘り方を持ち、焼土粒が混入した地山土が充填されている。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 6層に分層した。第2層中にB - T m火山灰が層状に堆積している。自然堆積の様相を呈する。

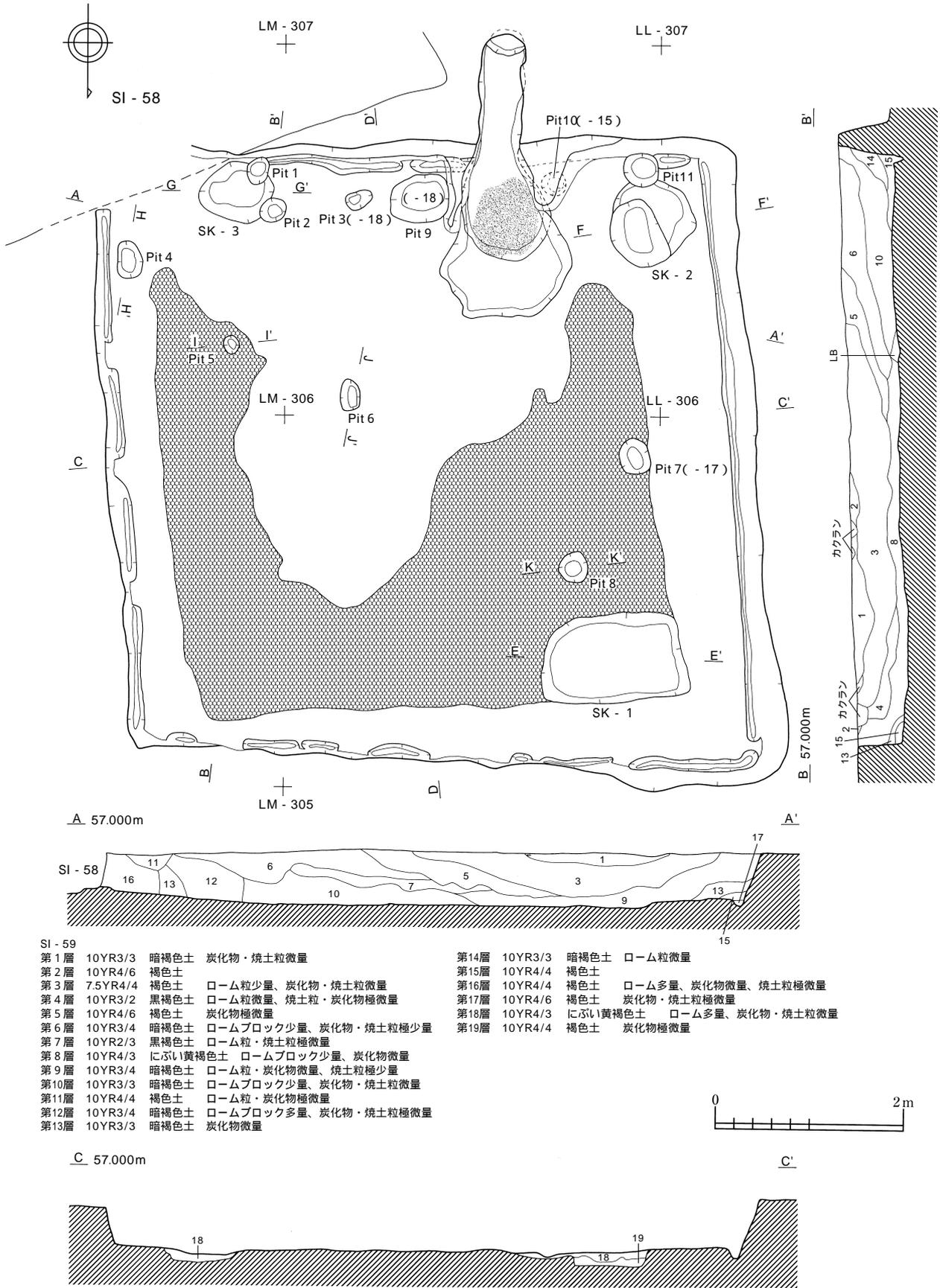
(木村)

S I - 59 (第162~164図)

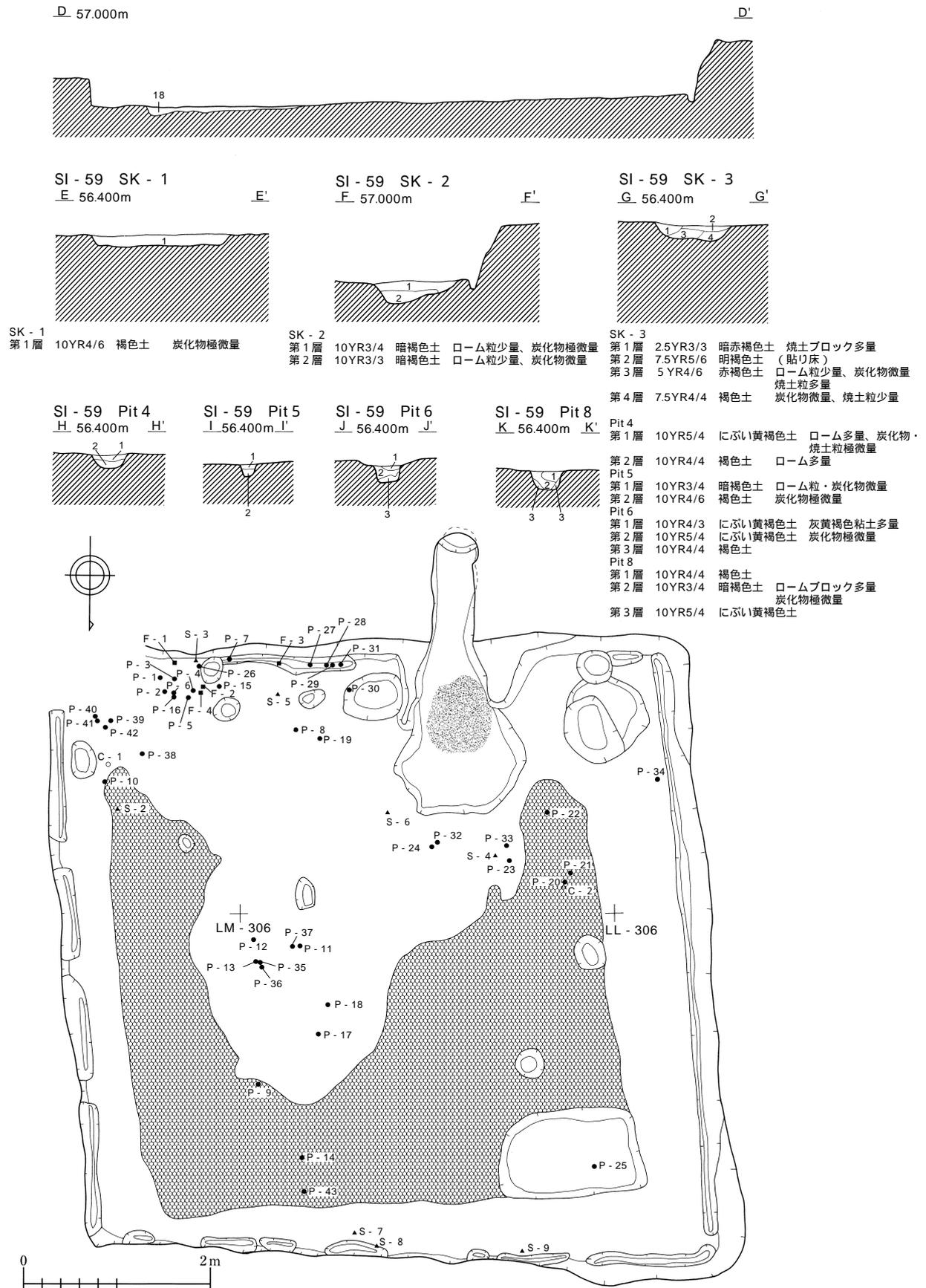
[位置] グリッドLK・LL・LM - 305・306で検出した。

[重複] S I - 58と重複している。本住居の壁がS I - 58に切られており、本遺構の方が古い。また、住居中央内には、本遺構と主軸が異なる方形の掘り方を検出している。ほとんど削平されており、長軸517cm、短軸488cmを測る。カマド等の痕跡が残存していないため長軸方位を採用したが、主軸方位はN - 85° - Eである。

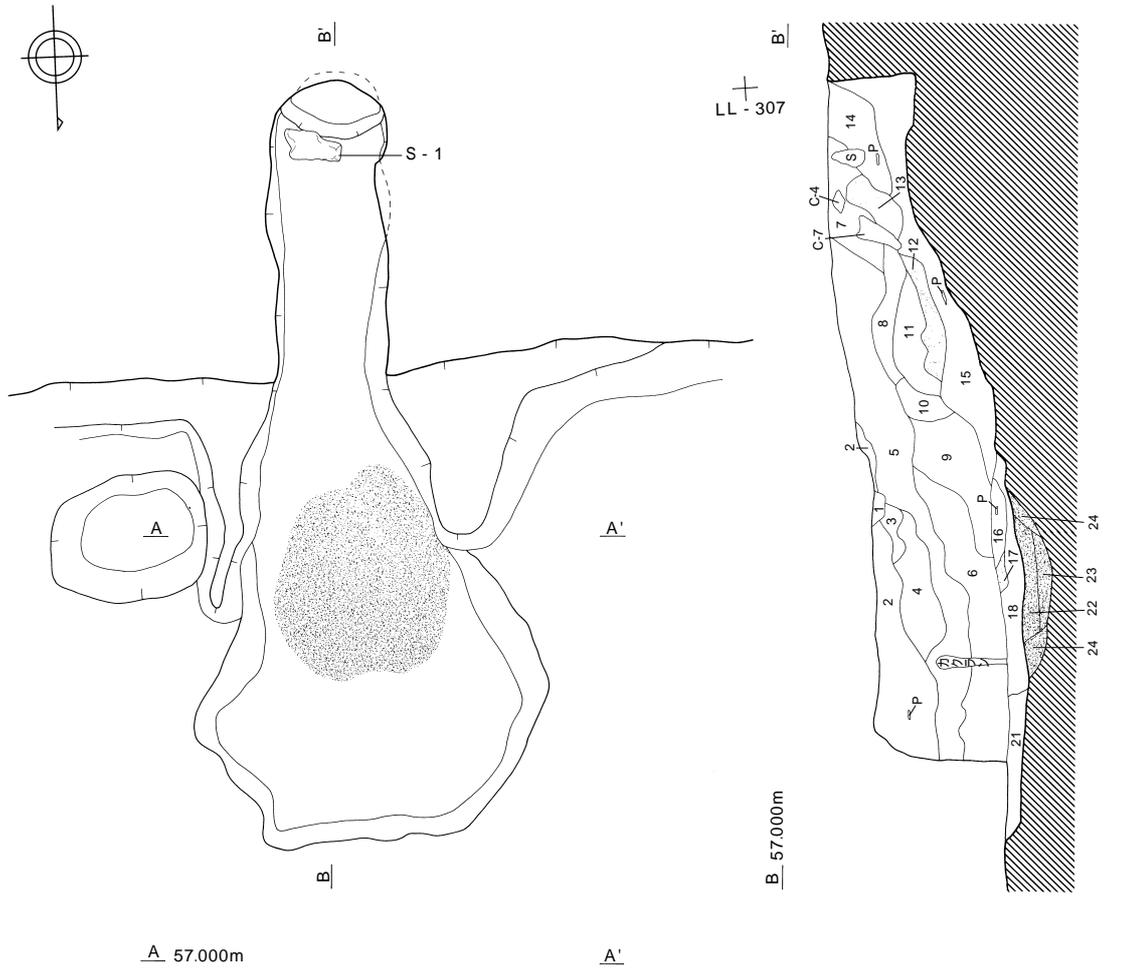
[平面形・規模] 方形を呈し、696×670×61cmを測る。床面積は(46.283)㎡を測る。



第162図 SI - 59

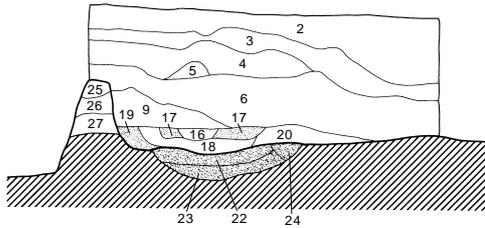


第163図 SI - 59



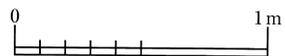
A 57.000m

A'



LL - 306

- | 層 | 色 | 特徴 |
|------|---------------|------------------|
| 第1層 | 10YR4/6 褐色土 | |
| 第2層 | 10YR3/4 暗褐色土 | 焼土粒少量、炭化物・ローム粒微量 |
| 第3層 | 10YR2/3 黒褐色土 | 焼土粒・炭化物・ローム粒微量 |
| 第4層 | 10YR3/3 暗褐色土 | 炭化物・焼土粒・ローム粒極微量 |
| 第5層 | 7.5YR4/4 褐色土 | 焼土粒・炭化物微量 |
| 第6層 | 10YR3/2 黒褐色土 | ローム粒少量、焼土粒・炭化物微量 |
| 第7層 | 7.5YR3/3 暗褐色土 | 炭化物微量 |
| 第8層 | 10YR3/4 暗褐色土 | 焼土粒・炭化物微量 |
| 第9層 | 10YR4/4 褐色土 | |
| 第10層 | 7.5YR4/4 褐色土 | 焼土粒・炭化物微量 |
| 第11層 | 7.5YR5/6 明褐色土 | |
| 第12層 | 5 YR3/6 暗赤褐色土 | |
| 第13層 | 5 YR4/8 赤褐色土 | |
| 第14層 | 7.5YR3/4 暗褐色土 | 焼土粒・炭化物微量 |
| 第15層 | 10YR3/4 暗褐色土 | 焼土粒多量、ローム粒・炭化物微量 |
| 第16層 | 7.5YR4/4 褐色土 | 焼土粒・ローム粒多量 |
| 第17層 | 5 YR4/6 赤褐色土 | |
| 第18層 | 7.5YR3/4 暗褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第19層 | 5 YR3/6 暗赤褐色土 | |
| 第20層 | 7.5YR4/4 褐色土 | 焼土粒・ローム粒多量、炭化物少量 |
| 第21層 | 7.5YR4/6 褐色土 | 焼土粒多量、炭化物微量 |
| 第22層 | 5 YR3/6 暗赤褐色土 | |
| 第23層 | 2.5YR4/6 赤褐色土 | |
| 第24層 | 5 YR3/4 暗赤褐色土 | |
| 第25層 | 10YR4/6 褐色土 | |
| 第26層 | 10YR3/4 暗褐色土 | 炭化物・焼土粒極微量 |
| 第27層 | 7.5YR4/4 褐色土 | 炭化物・焼土粒極微量 |



第164図 SI - 59

[壁] 壁高は、北壁48cm、東壁40cm、南壁58cm、西壁51cmを測る。断面形はaで、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 住居中央部に掘り方を検出しており、その面は、大谷火山灰層の地山と同様の土が1～2cm堆積しており、堅緻である。他の部分は、大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。

[壁 溝] 住居内から断続的にほぼ全周する形で検出した。深さは平均13cmを測る。

[ピット] 住居内から11基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 31×22×18cm、Pit 2 = 29×25×13cm、Pit 3 = 29×18×18cm、Pit 4 = 42×26×16cm、Pit 5 = 21×18×14cm、Pit 6 = 34×20×18cm、Pit 7 = 41×37×17cm、Pit 8 = 33×32×20cm、Pit 9 = 60×50×18cm、Pit 10 = 26×26×15cm、Pit 11 = 37×36×11cmを測る。主柱穴として考えられるピットについては、Pit 1、8、10、11で北東部分から主柱穴を検出することはできなかった。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(70:30)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅118cm、煙道長120cmを測る。主軸はN-178°-Eである。燃烧部袖は粘土による構築である。燃烧部の天井は、粘土による構築で土層堆積において第16、17、18層が相当し、崩落した堆積状況を呈する。煙道部天井は、粘土による構築で第11、12、13層が相当し、崩落した堆積状況を呈する。また、煙道部上層に羽口、自然礫が廃棄されている。煙道は、住居壁際から22°の角度で立ち上がり、全煙道長1/2の位置で5°の角度に傾斜を変え、柱穴状に掘り込まれた煙出部へ向かう。また、焚口付近は145×135×5cmの規模で掘り込まれている。

[その他の付属施設] 住居内から土坑3基検出した。SK-1は、住居西壁側北寄りの部分から検出した。規模は150×98×12cmを測る。SK-2は、住居西壁南隅から検出した。規模は94×94×20cmを測る。SK-3は、住居南壁東寄りの部分から検出した。規模は80×65×18cmを測る。

[堆積土] 掘り方部分を含めて19層に分層した。このうち、住居主軸の異なる掘り方の堆積土は第18、19層に相当する。住居床面からTo-a火山灰を検出している。地山土等が混入する堆積土で人為的堆積状況を呈する。

(木 村)

SI-63(第165、166図)

[位置] グリッドLO-308で検出した。

[重複] SI-62・64、SP-55、SD-12と重複している。本遺構がいずれの遺構にも切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 方形を呈し、318×316×28cmを測る。床面積は9.958m²を測る。

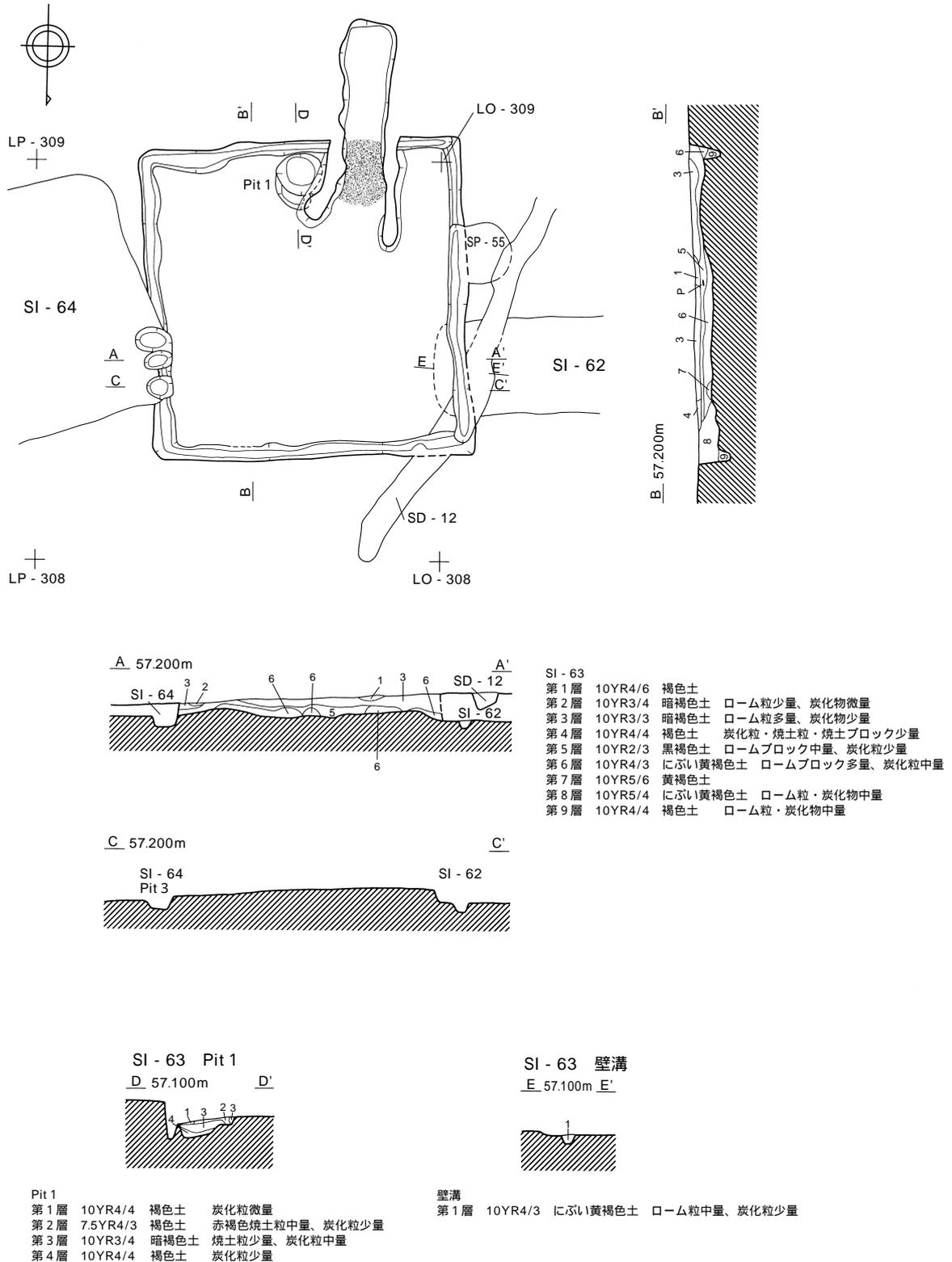
[壁] 壁高は、北壁20cm、東壁16cm、南壁19cm、西壁18cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は、やや脆弱である。

[床] 月見野火山灰層の地山を床面としており、起伏がある。床面はやや脆弱である。

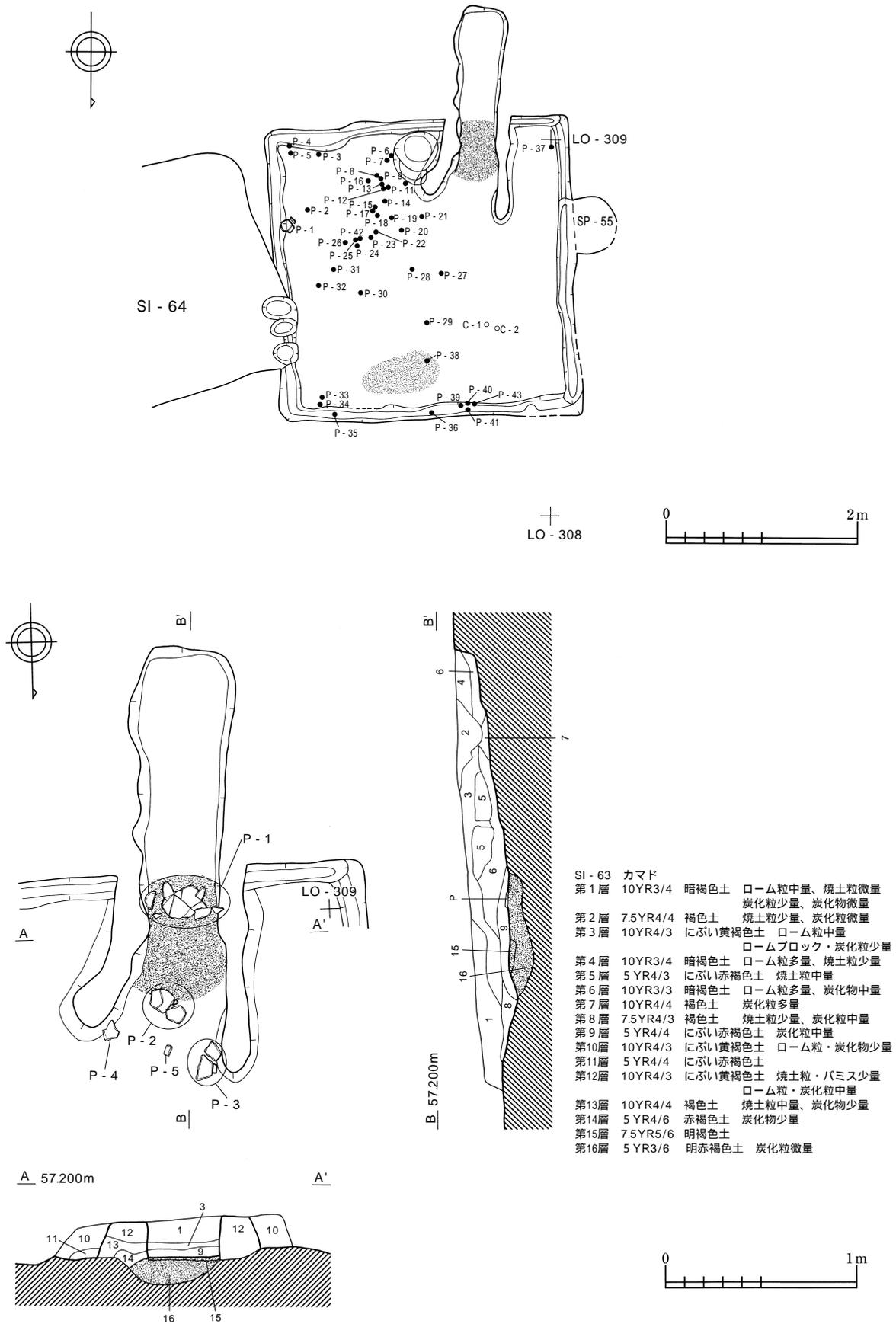
[壁 溝] 住居内から全周する形で検出した。深さは平均18cmを測る。

[ピット] 住居内から1基検出した。規模は55×45×20cmを測る。柱穴としての機能より堆積土中にローム土ならびに焼土粒等が含まれることから、カマド脇ピットとしての機能が考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(69:31)の位置から検出している。構造は、半地



第165図 SI - 63



第166図 SI - 63

下式で袖部幅86cm、煙道長115cmを測る。主軸はN - 179.5° - Eである。粘土による構築で、燃焼部ならびに煙道部天井は第3、5、9層が相当する。自然崩落による堆積である。煙道は、住居壁際から7°の角度で立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 9層に分層した。床面直上の第6層中に中量のロームブロック、炭化粒等が含まれ、埋め戻し等による人為堆積の堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 65 (第167、168図)

[位置] グリッドLP・LQ - 306・307で検出した。

[重複] SP - 56と重複している。本遺構がSP - 56に切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 方形を呈し、506×490×60cmを測る。床面積は6.537m²を測る。

[壁] 壁溝は、北壁18cm、東壁4cm、南壁40cm、西壁54cmを測る。壁面はやや脆弱である。

[床] 北壁、東壁、南壁隅側の部分に掘り方を持ち、地山土を充填している。それ以外の部分については、大谷火山灰層の地山を床面としている。床面は起伏があり、やや脆弱である。

[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から7基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 26×23×38cm、Pit 2 = 32×25×38cm、Pit 3 = 58×50×8cm、Pit 4 = 39×35×22cm、Pit 5 = 37×34×13cm、Pit 6 = 98×50×10cm、Pit 7 = 22×16×15cmを測る。主柱穴として機能したと考えられるピットは、Pit 1、2、3、5で、住居中央部に位置するピットが同じ深さを持つ。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(73:27)の位置から検出している。構造は、煙道部が土圧により崩落した地下式で、燃焼部は右袖の破損が激しく左袖の一部が残存するのみである。煙道長は148cmを測る。構築は、左袖から自然礫が出土していることから芯材に利用された可能性が考えられる。土層堆積において燃焼部天井の崩落土は、第14、20、21、22層に相当し、第14層が焼土等を混入する形で堆積しており、破壊された可能性が考えられる。煙道部天井は、第5、10、13層が相当し、掘り込み面が月見野火山灰層の地山に対して大谷火山灰層の地山を天井として貼って構築している。煙道は、住居壁際から10°の角度で立ち上がり、全煙道長1/3の位置から煙出部へ向かって23°の角度で傾斜する。煙出奥壁は垂直に近い形で立ち上がり、途中で角度を変え立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて18層に分層した。住居廃絶以後の堆積土は第1～13層で、堆積土中にロームブロック等が多量に含まれていた。埋め戻し等による人為的堆積状況を呈する。また、第2、3、4、13層中にTo - a火山灰が混入していた。

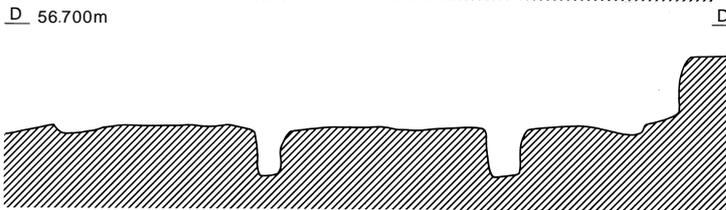
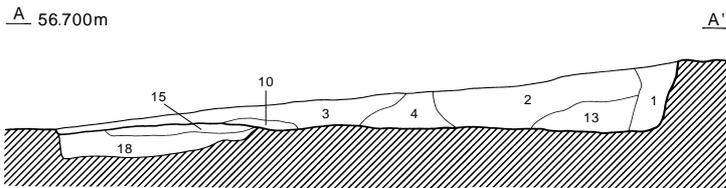
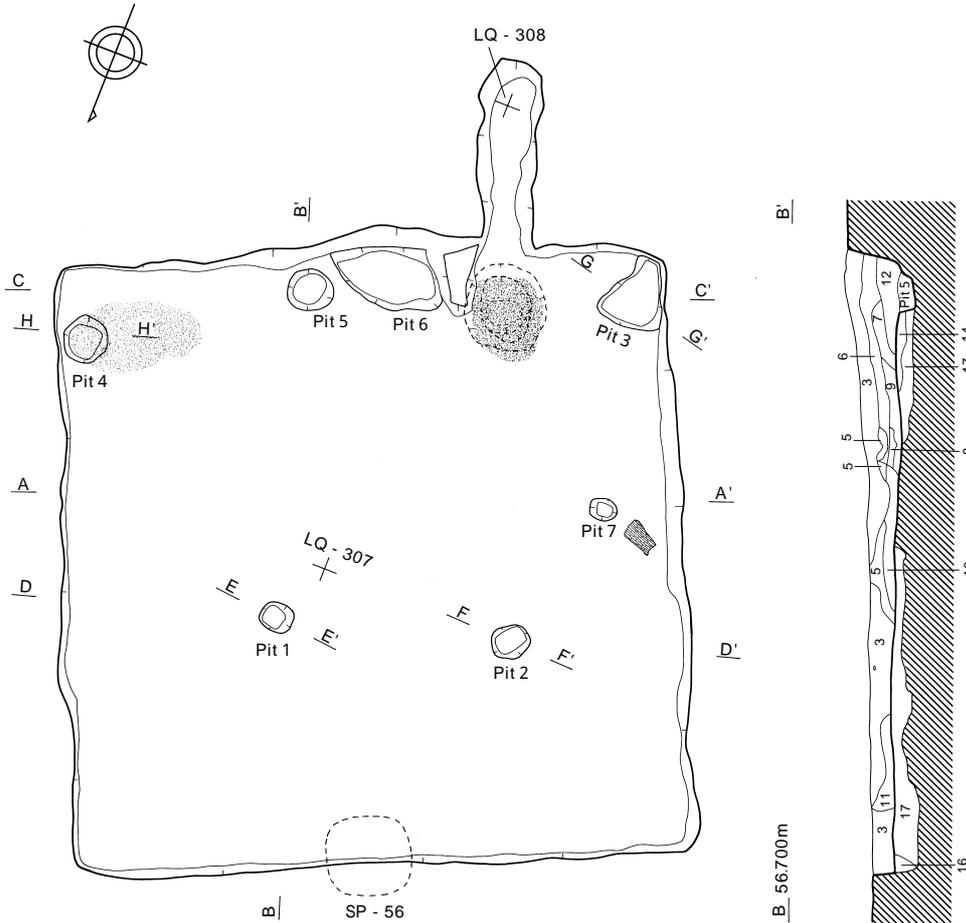
(木村)

S I - 66 (第169図)

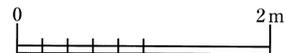
[位置] グリッドLR・LS - 304・305で検出した。

[重複] なし。

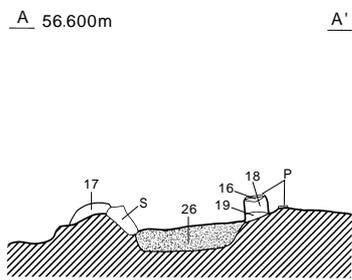
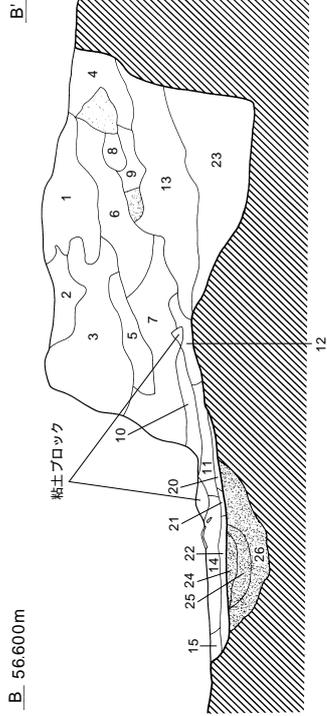
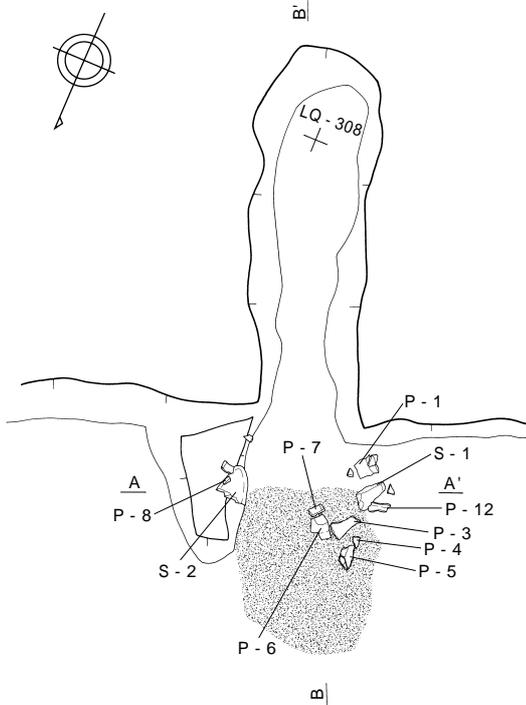
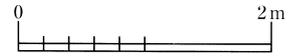
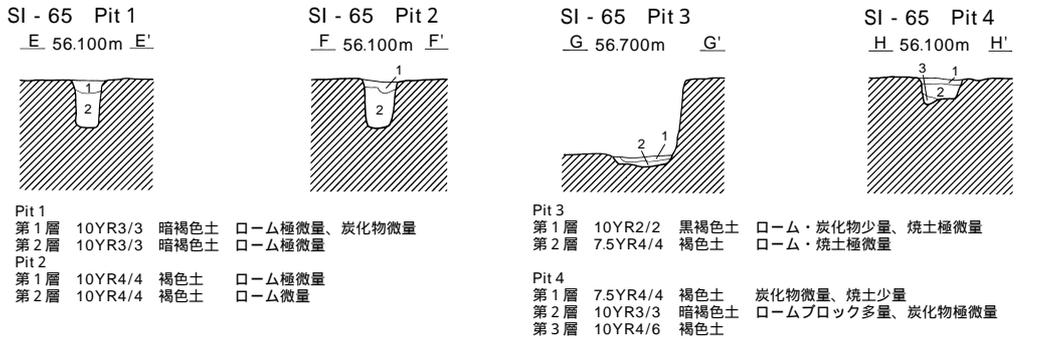
[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、264×256×44cmを測る。床面積は6.547m²を測る。



層	色澤	成分
第1層	10YR3/3 暗褐色土	□-△粒少量、炭化物微量、 焼土極微量
第2層	10YR3/3 暗褐色土	□-△・粘土少量、火山灰微量、 炭化物極微量
第3層	10YR3/3 暗褐色土	□-△少量、炭化物微量、焼土・ 火山灰 To-a 極微量
第4層	10YR3/3 暗褐色土	□-△少量、粘土多量、炭化物・ 火山灰 To-a 微量
第5層	10YR4/4 褐色土	粘土多量、炭化物微量
第6層	10YR2/2 黒褐色土	□-△・粘土少量、炭化物微量、 焼土極微量
第7層	7.5YR4/4 褐色土	□-△粒・焼土微量、粘土多量
第8層	10YR3/4 暗褐色土	□-△微量、粘土多量
第9層	10YR3/3 暗褐色土	□-△・粘土少量、炭化物・ 焼土微量
第10層	10YR3/3 暗褐色土	□-△・粘土少量、炭化物極微量
第11層	10YR3/4 暗褐色土	□-△少量、粘土多量
第12層	10YR3/3 暗褐色土	□-△少量、粘土多量
第13層	10YR4/4 褐色土	□-△少量、粘土多量、炭化物・ 火山灰 To-a 極微量
第14層	10YR2/2 黒褐色土	粘土多量、炭化物・焼土微量
第15層	10YR4/4 褐色土	□-△微量
第16層	10YR2/2 黒褐色土	□-△極微量
第17層	7.5YR4/4 褐色土	黒色土・□-△少量
第18層	10YR4/4 褐色土	□-△微量

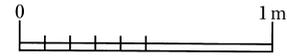


第167図 SI - 65

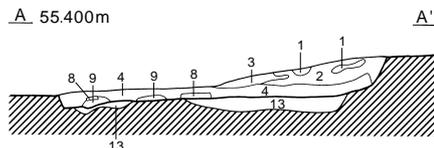
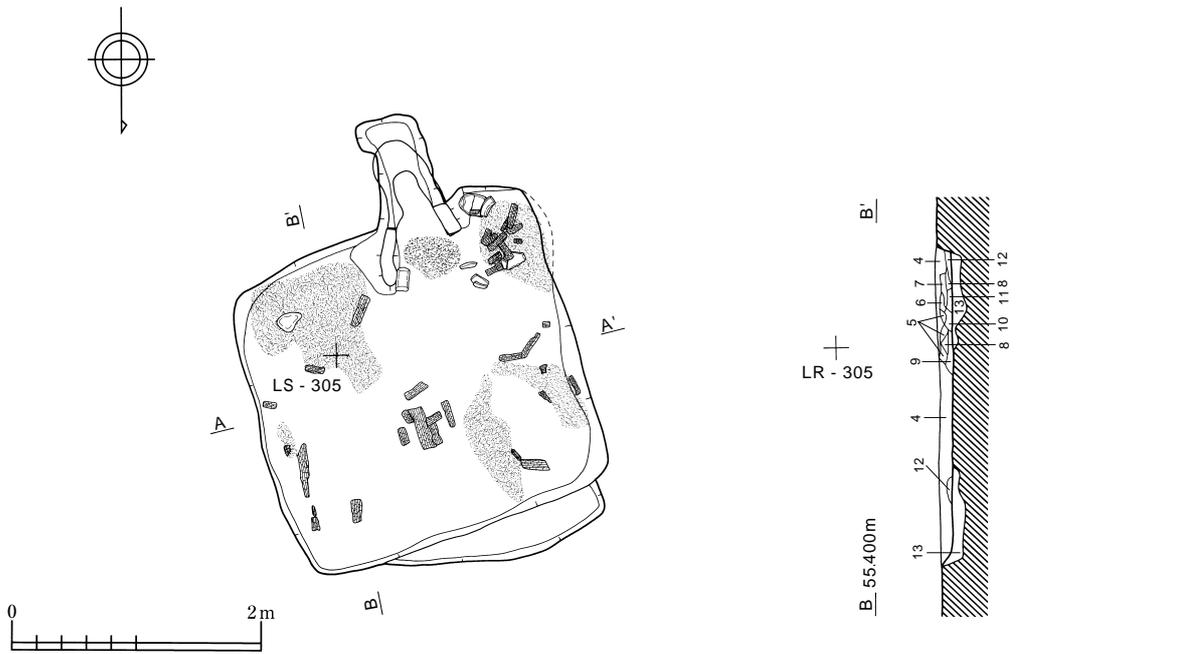


SI - 65 カマド

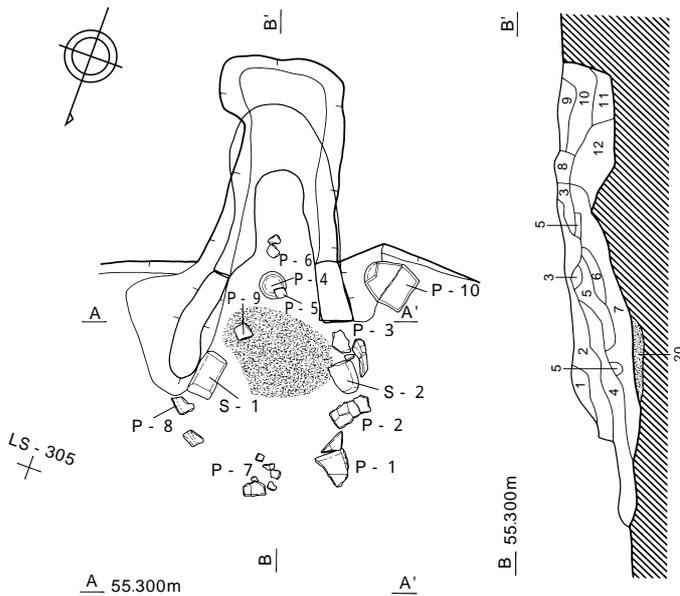
第1層	7.5YR4/4	褐色土	□-ム・炭化物極微量
第2層	10YR3/3	暗褐色土	黒色土少量、□-ム微量
第3層	10YR3/3	暗褐色土	□-ム少量、炭化物極微量
第4層	10YR3/4	暗褐色土	黒色土・□-ム少量
第5層	7.5YR4/4	褐色土	炭化物極微量
第6層	7.5YR4/3	褐色土	粘土少量、焼土微量
第7層	10YR3/3	暗褐色土	□-ム粒少量
第8層	7.5YR3/2	黒褐色土	焼土多量
第9層	10YR2/1	黒色土	□-ム多量、焼土微量
第10層	7.5YR4/4	褐色土	
第11層	7.5YR3/4	暗褐色土	焼土少量
第12層	7.5YR2/2	黒褐色土	□-ム・炭化物少量
第13層	10YR4/4	褐色土	□-ム・粘土多量
第14層	5 YR4/4	にぶい赤褐色土	炭化物微量、焼土多量
第15層	10YR3/3	暗褐色土	炭化物極微量、焼土微量
第16層	10YR3/2	暗褐色土	焼土微量
第17層	7.5YR4/4	褐色土	□-ム・焼土極微量
第18層	7.5YR5/6	明褐色土	焼土極微量
第19層	7.5YR3/3	暗褐色土	炭化物・焼土微量
第20層	7.5YR4/4	褐色土	□-ム・焼土微量
第21層	7.5YR2/2	黒褐色土	炭化物微量、焼土少量
第22層	5 YR4/4	にぶい赤褐色土	□-ム粒微量
第23層	10YR5/4	にぶい黄褐色土	□-ム少量、炭化物微量
第24層	5 YR4/6	赤褐色土	
第25層	2.5YR4/8	赤褐色土	
第26層	2.5YR4/6	赤褐色土	



第168図 SI - 65



- SI - 66
- | | | | |
|------|---------|---------|---------------------------|
| 第1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | |
| 第2層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | ローム微量、炭化粒少量 |
| 第3層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒少量、炭化粒微量 |
| 第4層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | ローム粒・炭化粒・炭化物・焼土粒少量 |
| 第5層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 炭化粒微量 |
| 第6層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 炭化粒少量、焼土粒多量 |
| 第7層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 炭化粒中量、焼土粒少量 |
| 第8層 | 5 YR4/4 | にぶい赤褐色土 | 炭化粒微量 |
| 第9層 | 10YR4/4 | 褐色土 | ローム粒・ロームブロック中量 |
| 第10層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第11層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 炭化粒少量 |
| 第12層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒微量、炭化粒多量 |
| 第13層 | 10YR4/6 | 褐色土 | ローム粒多量、ロームブロック中量
炭化粒少量 |



- SI - 66 カマト
- | | | | |
|------|----------|---------|--------------------------|
| 第1層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | ローム粒多量、炭化粒少量 |
| 第2層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | ローム粒中量、炭化粒少量 |
| 第3層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 炭化粒中量 |
| 第4層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ローム粒中量、炭化粒少量
炭化物帯状に中量 |
| 第5層 | 5 YR4/6 | 赤褐色土 | 炭化物少量 |
| 第6層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 炭化物中量 |
| 第7層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 炭化粒少量、焼土粒中量 |
| 第8層 | 7.5YR4/6 | 褐色土 | バミス・炭化粒少量 |
| 第9層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 炭化粒少量 |
| 第10層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | ローム粒・炭化粒中量 |
| 第11層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 炭化粒少量 |
| 第12層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | ローム粒中量 |
| 第13層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 炭化粒中量 |
| 第14層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒中量、炭化粒少量 |
| 第15層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | ローム粒少量、炭化粒中量 |
| 第16層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 炭化粒中量 |
| 第17層 | 7.5YR4/4 | 褐色土 | ローム粒中量、炭化粒・焼土粒少量 |
| 第18層 | 5 YR5/8 | 明赤褐色土 | 炭化粒中量 |
| 第19層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 炭化粒少量 |
| 第20層 | 5 YR4/8 | 赤褐色土 | |

第169図 SI - 66

[壁] 壁高は、北壁8cm、東壁10cm、南壁11cm、西壁21cmを測る。西壁の一部が内側に入り込んでおり、また北壁側では棚状の段差を検出した。それ以外の部分では、緩やかな立ち上がりが見られた。壁面はやや脆弱である。

[床] 住居中央部を除いて掘り方を持ち、その上に大谷火山灰層の地山土を貼り床として貼り付けている。床面はほぼ平坦で、堅緻である。また、住居南側～西側にかけて赤化面ならびに灰を検出し、併せて炭化材、炭化物が出土した。本遺構は焼失住居である。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(62:38)の位置から検出している。構造は、半地下式で、右袖の一部が壊れているが、袖部幅78cm、煙道長83cmを測る。主軸はN-164°-Eである。燃烧部袖は、自然礫を芯材とし、粘土で構築している。支脚として土師器甕底部を打ち欠き倒置している。土層堆積において燃烧部天井はブロック状に第5層ならびに第7層中で部分的堆積しており、廃絶にあたって破壊がされていたものと考えられる。煙道部天井は粘土による構築で第3、6、8層が相当する。煙道は、住居壁際から20°の角度で立ち上がり、全煙道長の1/2の位置で20°の角度で煙出部へ向かって傾斜する。煙出奥壁は外傾しながら立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居北壁側に170×37×8cmの棚状の段を検出した。床面は堅緻であり、出入口もしくは棚状施設としての機能が考えられる。

[堆積土] 掘り方を含めて13層に分層した。焼失時点での土層は第5～12層が相当し、床面から遺物の出土が見られた。廃絶以後その上に第1～4層が堆積している。廃絶後の堆積は、自然堆積状況を呈する。

(木村)

SI-67a(第170図)

[位置] グリッドLS・LT-304・305で検出した。

[重複] SI-67bと重複している。削平が著しく、明確な新旧関係については不明である。

[平面形・規模] 削平を受けているため、住居全体の平面形は不明であるが、残存する壁の情報から方形を呈したものと推定される。規模は(266)×(264)×20cmを測る。床面積は(6.865)m²を測る。

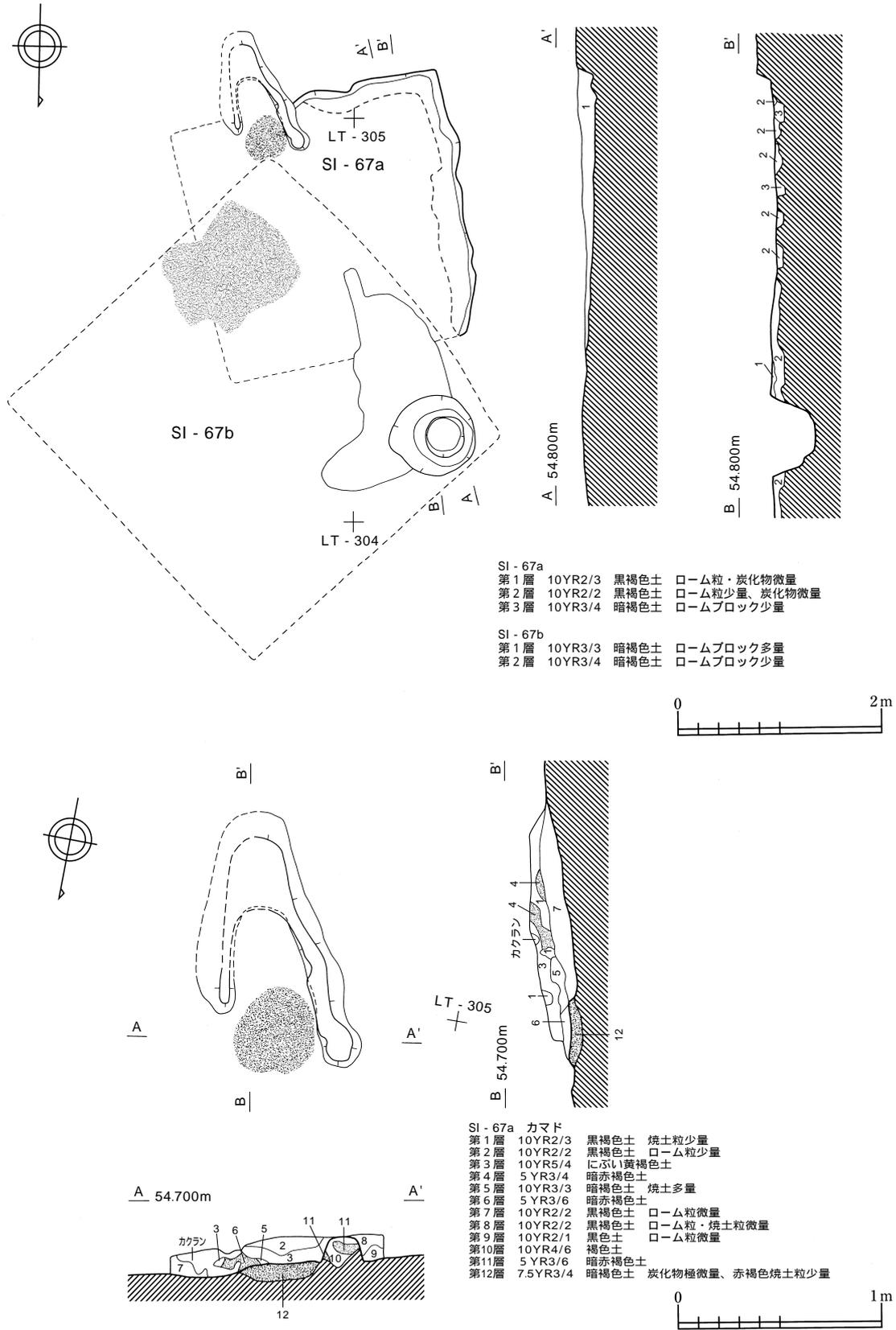
[壁] 削平のため残存している壁は西壁と南壁約半分のみであるが、壁高は、南壁10cm、西壁15cmを測る。断面形は、残存している壁についてはdで、緩やかに立ち上がる。壁面は、やや脆弱である。

[床] 北壁側～東壁側にかけてSI-247の掘り方が存在しており、堆積土についても本遺構に堆積している土質と同じであるため、詳細については不明である。小規模な浅い掘り方を持ち、その上に黒褐色土ならびに暗褐色土が充填されている。床面はやや起伏があり、脆弱である。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。カマドの位置については壁が削平されているため、推定位置であるが、南壁2(31:69)に位置したものと推定される。構造は、半地下式で、袖部幅(56)cm、煙道長80cmを測る。主軸はN-177°-Eである。煙道部の一部削平を受けているため、土層堆積から推定するしかないが、構築は粘土による構築で、燃烧部では、左袖部分が壊れている。また、天



第170図 SI - 67a

井部については崩落が生じており、天井は第5、6層に相当すると考えられる。煙道は、住居壁際から8°の角度で緩やかに立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて3層に分層した。住居廃絶後の堆積は、第1層のみの単層で、埋め戻し等の要因が確認できなかったことから、自然堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 67 b (第171図)

[位置] グリッドL S・L T - 303・304で検出した。

[重複] S I - 67 aと重複している。削平により明確な新旧関係については不明である。

[平面形・規模] 削平のため詳細は不明であるが、残存していた床面から方形を呈していたと推定され、規模は、長軸 360 × 短軸 356 cmを測る。床面積は 12.682 m²を測る。

[壁] 削平のため残存していない。

[床] 掘り方を持ち、S I - 67 aの掘り方に充填されている同一の土が充填されている。床面はほぼ平坦で脆弱である。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[カマド] 住居南壁側からカマドの残滓と考えられる焼土粒の散布範囲を検出した。規模は132 × 132cmを測る。詳細については不明である。

[その他の付属施設] 住居北壁西隅から土坑1基を検出した。規模は85 × 78 × 47cmを測る。

[堆積土] 掘り方部分の堆積土は一部S I - 67 aと重複している。住居廃絶後の堆積状況は不明である。

S I - 68 (第172、173図)

[位置] グリッドL S・L T - 306・307、L S - 308で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、522 × 494 × 88cmを測る。床面積は25.497m²である。

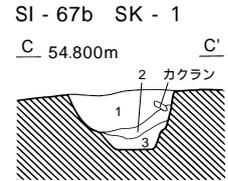
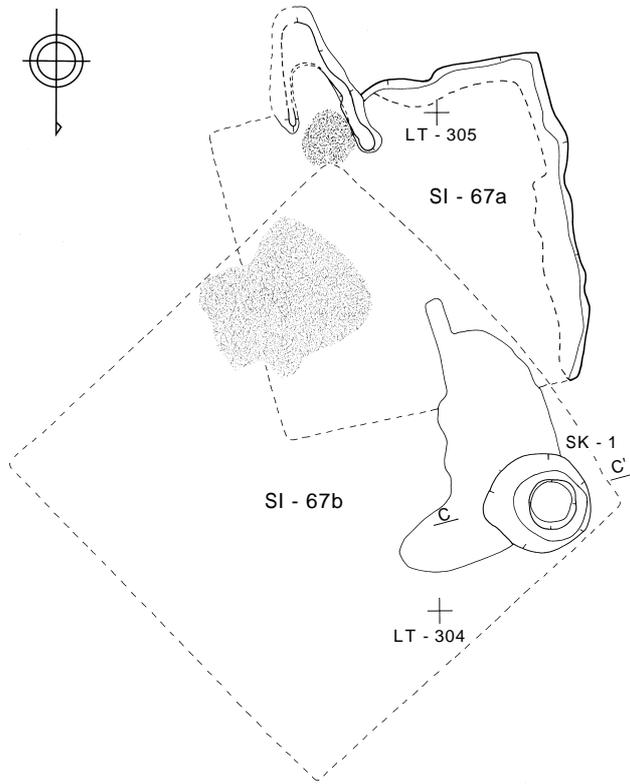
[壁] 壁高は、北西壁52cm、北東壁43cm、南西壁58cm、南東壁48cmを測る。断面形はdで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。本遺構は焼失住居であり、被熱により壁が部分的に赤化している。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。被熱により広い範囲で赤化している。その直上において、焼け落ちた上屋の部材と思われる板状の炭化材や、粉状の炭化物を床面の広い範囲で検出した。

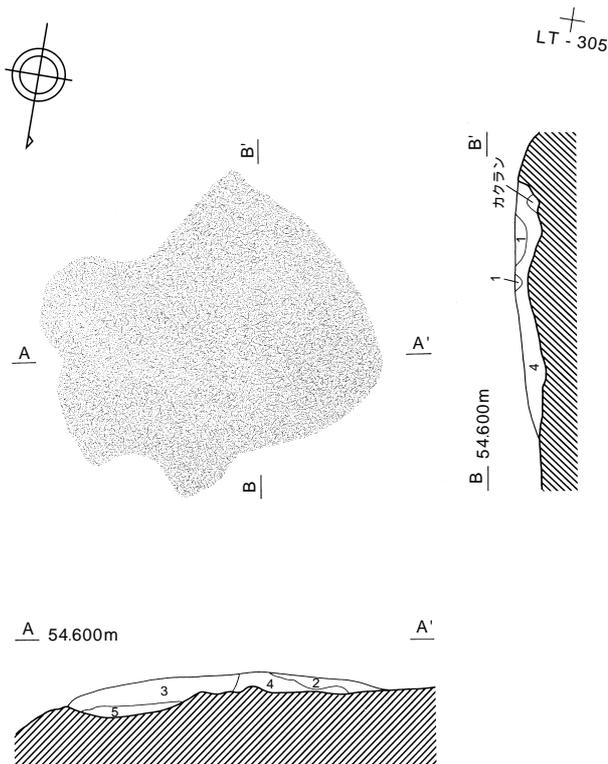
[壁溝] 北西壁及び南東壁において部分的に途切れるが、ほぼ全周している。西壁、南壁においては、壁板と考えられる板状の炭化材が部分的に残存していた。深さは平均10cmである。

[ピット] 竪穴内より8基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 45 × 21 × 55cm、Pit 2 = 89 × 79 × 54cm、Pit 3 = 41 × 37 × 48cm、Pit 4 = 31 × 30 × 11cm、Pit 5 = 28 × 27 × 28cm、Pit 6 = 90 × 81 × 6cm、Pit 7 = 50 × 49 × 47cm、Pit 8 = 44 × 32cmを測る。主柱穴として機能していたものは、Pit 1、Pit 3、Pit 7、Pit 8の4基であり、4本柱を長方形に配置するタイプである。

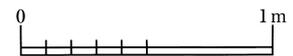
[カマド] 東壁3(80:20)の位置から1基検出した。構造は半地下式であり、袖部幅66cm、煙道長107cmを測る。主軸はN - 163° - Eである。袖は粘土によって構築されており、東側の袖に芯材と



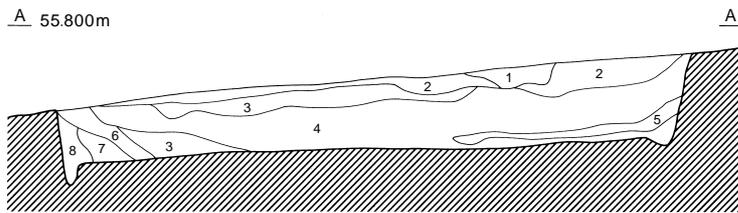
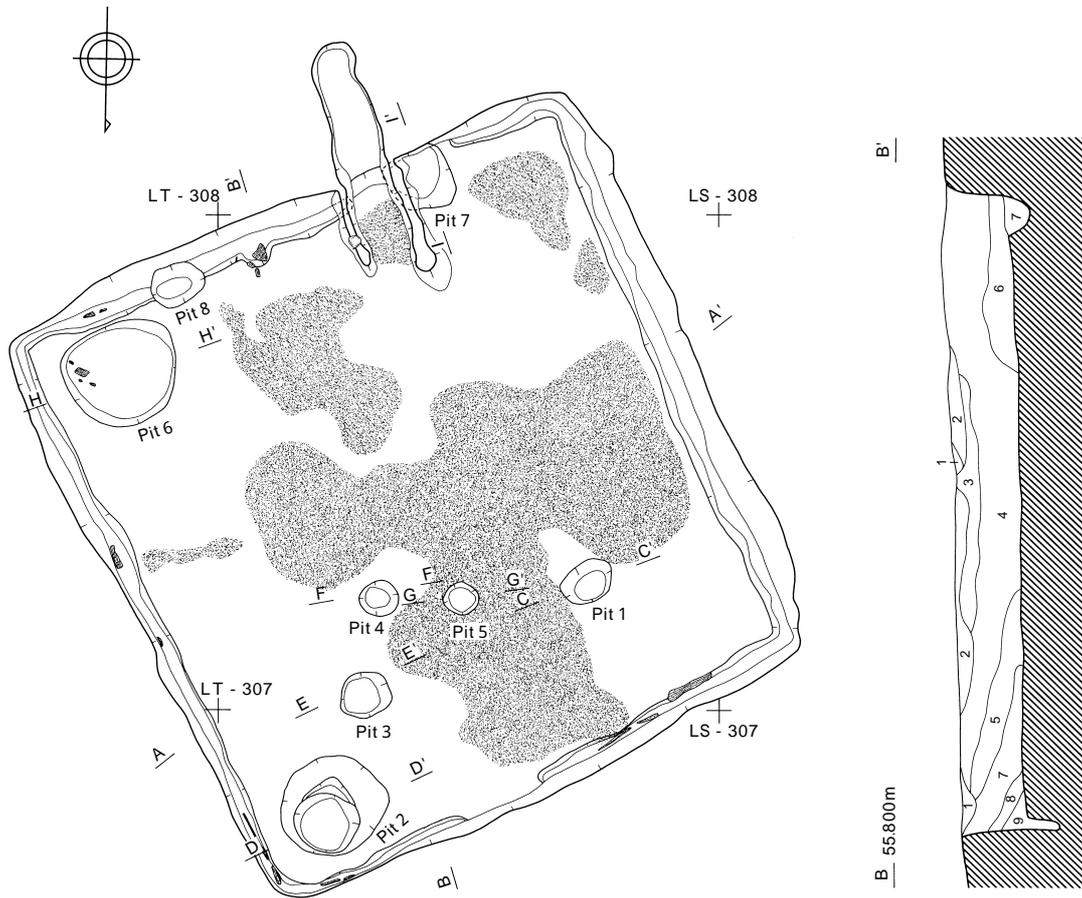
- SI - 67b SK - 1
- | | | | |
|-----|---------|------|---------------|
| 第1層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒微量、炭化物極微量 |
| 第2層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ロームブロック微量 |
| 第3層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | ローム多量 |



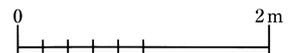
- SI - 67b カマド
- | | | | |
|-----|----------|------|-------------|
| 第1層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 炭化物微量 |
| 第2層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 炭化物微量、焼土粒少量 |
| 第3層 | 7.5YR4/6 | 褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第4層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 炭化物・焼土粒極微量 |
| 第5層 | 7.5YR5/6 | 明褐色土 | |



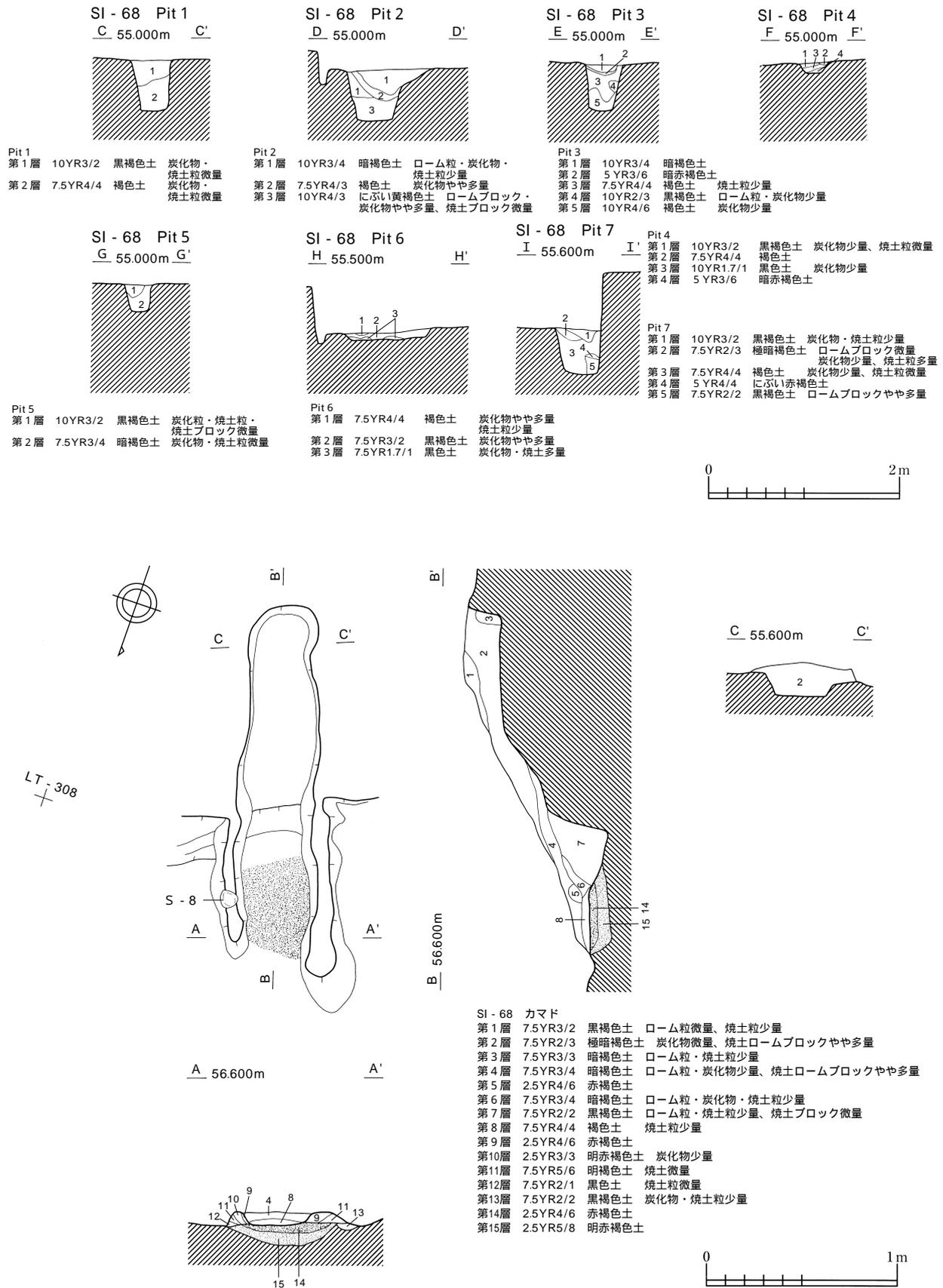
第171図 SI - 67b



- SI - 68
- | | | | |
|-----|----------|-------|----------------------------|
| 第1層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | バミス・焼土粒少量 |
| 第2層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | ローム粒・炭化物・焼土粒少量 |
| 第3層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 炭化物・焼土ブロック微量 |
| 第4層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | バミス・炭化物・焼土粒少量・鉄滓多量 |
| 第5層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ロームブロック・ローム粒・炭化物・焼土粒・バミス少量 |
| 第6層 | 7.5YR4/6 | 褐色土 | 炭化物少量・焼土粒微量 |
| 第7層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 炭化物微量 |
| 第8層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | バミス・炭化物・焼土粒少量 |
| 第9層 | 10YR6/8 | 明黄褐色土 | |



第172図 SI - 68



第173図 SI - 68

して石が装填されている。煙道部は、火床面から20°の角度で一旦下降し、住居の壁によって急角度に立ち上がるが、中間部で30°と緩やかになり、煙出部付近で平坦となる。ただし、住居壁付近の煙道部の立ち上がりについては、焼土ブロック、ローム粒を混入し、黒褐色を呈する7層が煙道部底面に相当する可能性がある。自然堆積を呈する。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 9層に分層した。床面直上に、焼け落ちた上屋と思われる炭化材や焼土が散在し、下層は暗褐色、上層は黒褐色を呈する土層である。中層から下層にかけての第4層において、炭化物や焼土粒のほか、炉壁や鉄滓が多量に出土している。これらの鉄滓のほとんどが製鉄炉の操業によって排出されたものと考えられ、近隣に存在した製鉄炉における廃棄物が、廃絶した住居の落ち込みに廃棄されたものと認められることから、本遺構の堆積は、人為的要因が強いと考えられる。本遺構から出土した製鉄関連遺物は、炉壁（溶解物を含む）1,452g、砂鉄焼結塊42g、炉内滓5,218g、流動滓（単位流動滓を含む）10,994g、流動滓（鳥の足状）1,042g、流出孔滓334g、流出溝滓1,362g、鉄塊系遺物（ ）32g、その他（工具痕付滓、工具付着滓等）182g、鉄器16gで、総重量20,924gである。本遺構のすぐ西側に存在するSK-85においても炉壁や鉄滓が多量に出土しており、本遺構に廃棄された遺物と同様に、製鉄炉の操業によって排出されたものであると考えられる。

（設 楽）

SI-70（第174～178図）

[位 置] グリッドLV-308・309で検出した。

[重 複] SK-283と重複している。本遺構がSK-283に切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 方形を呈し、426×387×74cmを測る。床面積は16.856m²である。

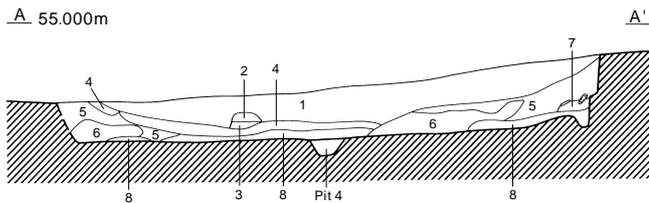
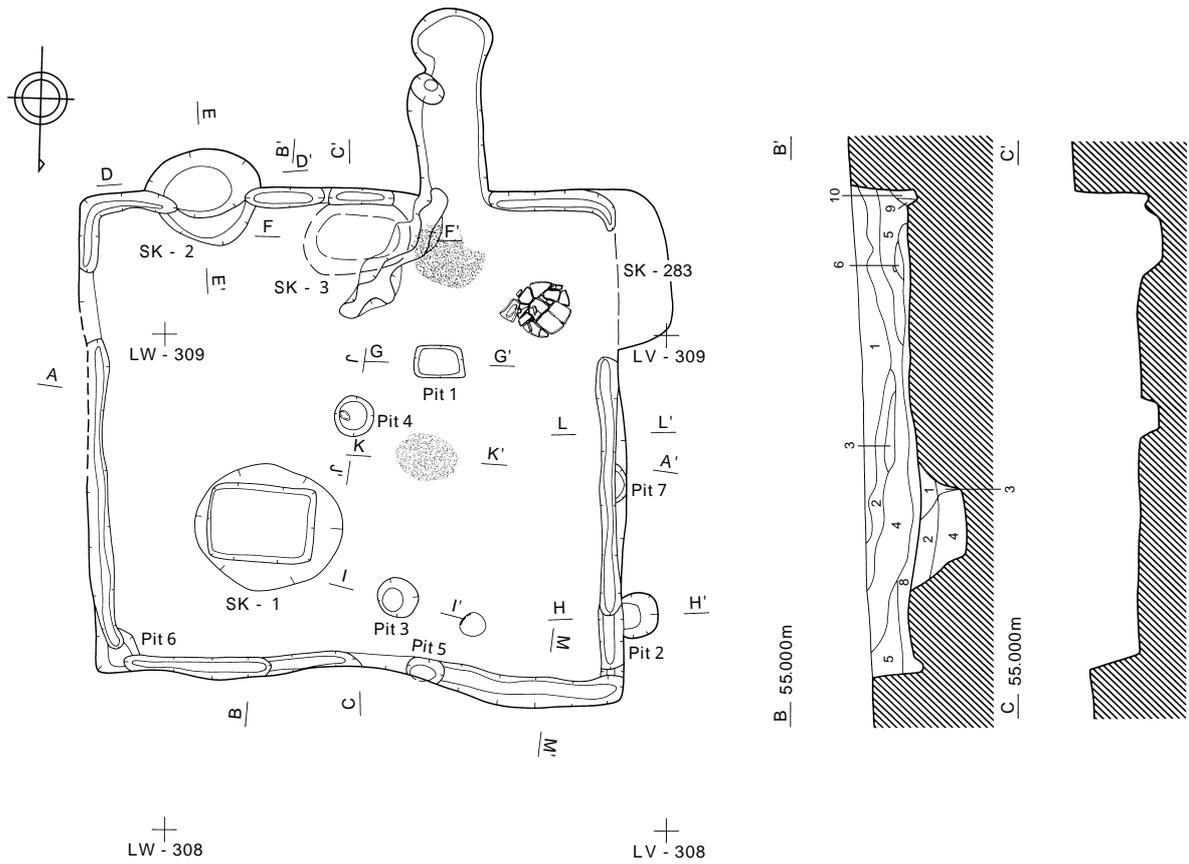
[壁] 壁高は、北壁33cm、南壁45cm、西壁50cm、東壁32cmを測る。断面形はaで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

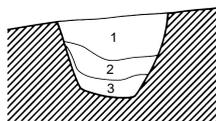
[壁 溝] 各面において部分的に途切れるが、断続的にほぼ全周している。深さは平均7cmである。

[ピット] 床面から3基（Pit 1、3、4）、壁溝部分から3基（Pit 5、6、7）、竪穴外から1基（Pit 2）計7基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 40×26×35cm、Pit 2 = 36×（30）×64cm、Pit 3 = 33×31×17cm、Pit 4 = 32×31×16cm、Pit 5 = 30×16×35cm、Pit 6 = 35×35×23cm、Pit 7 = 長軸30cmを測る。主柱穴として機能していたと考えられるものはないが、壁溝から検出したPit 5、6、7は壁柱穴として機能していたものと考えられる。

[カマド] 南壁3（71：29）の位置から1基検出した。構造は半地下式であり、袖部幅82cm、煙道長148cmを測る。主軸はN-179.5°-Eである。袖は粘土によって構築されており、芯材は装填されている。燃焼部の堆積をみると、火床面に相当する19、20層の上層に、にぶい黄褐色を呈する18層が存在し、西側の袖が崩落した土と考えられる。また、その上層の土層についても、7、8、13層が西側から流れ込んだような状況を呈していることから、本遺構のカマドは西側から流れ込んだ土の土圧によって押し潰されたと考えられる。煙道部は火床面から10°の角度で傾斜した後、住居の壁付近で急激に立ち上がり、そこから起伏をもちながら、5°の角度で立ち上がっていく。煙出部付近の煙道東側に28×21×22cmのピットを有する。自然堆積を呈すると思われる。



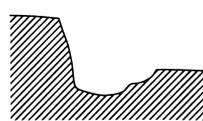
SI - 70 SK - 2
D 55.000m D'



- SK - 2
- 第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化粒・焼土粒中量
 - 第2層 10YR3/3 暗褐色土 ロームブロック・炭化粒中量、焼土粒微量
 - 第3層 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒少量、焼土粒微量

LV - 308

SI - 70 SK - 2
E 55.000m E'

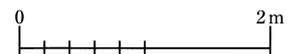
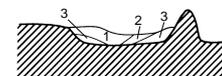


- SK - 3
- 第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化粒・ロームブロック少量・焼土粒中量
 - 第2層 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒多量、炭化粒少量
 - 第3層 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒多量、炭化粒少量

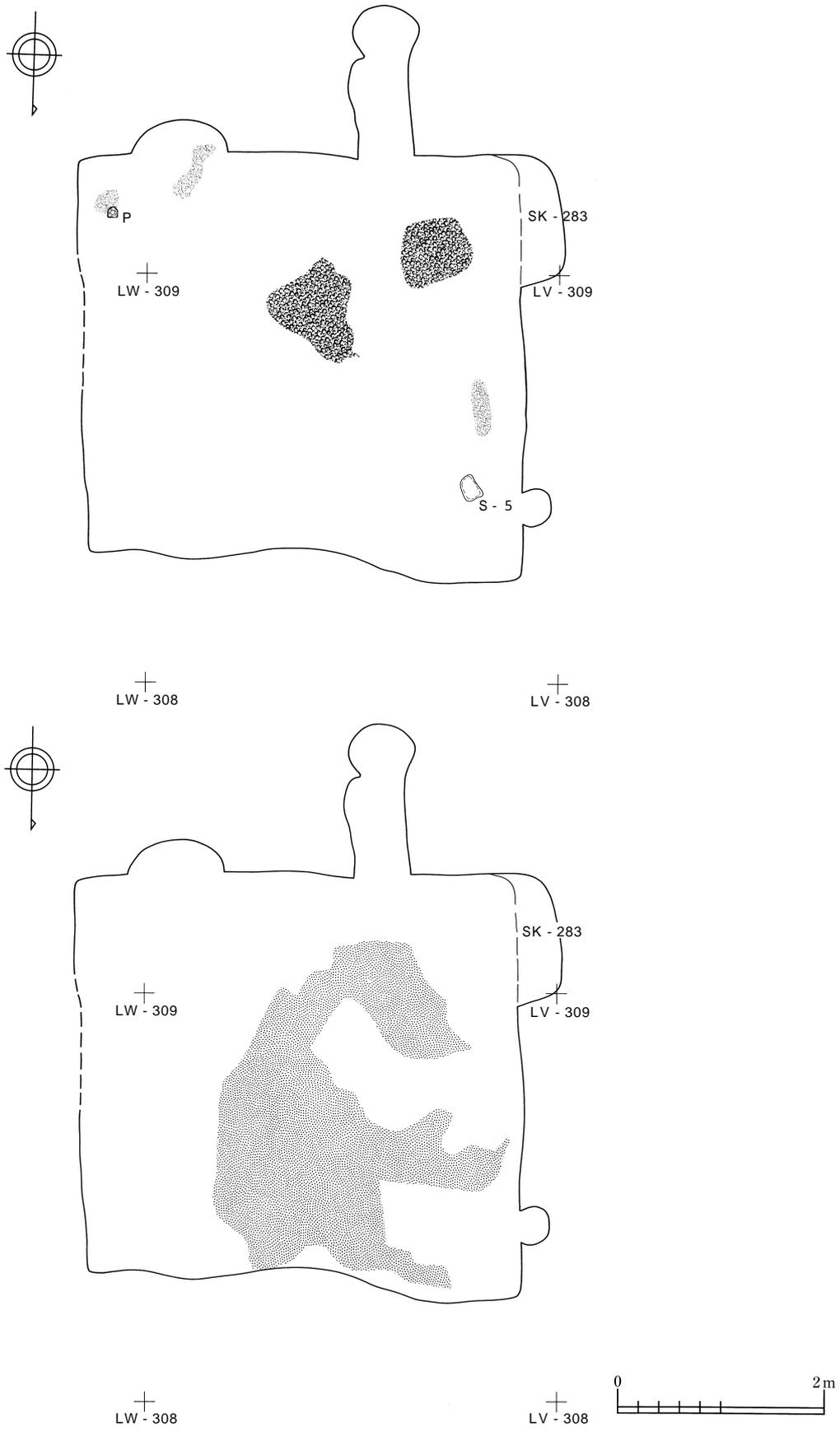
- SI - 70
- 第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒多量、炭化粒・焼土粒少量
 - 第2層 10YR4/4 褐色土 炭化物少量
 - 第3層 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒少量
 - 第4層 10YR4/6 褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、炭化粒中量
 - 第5層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量、炭化粒中量
 - 第6層 10YR4/3 にぶい黄褐色土
 - 第7層 7.5YR3/4 暗褐色土
 - 第8層 10YR3/4 暗褐色土 炭化粒中量、炭化物少量、鉄滓多量
 - 第9層 10YR4/6 褐色土
 - 第10層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・炭化粒微量

- SK - 1
- 第1層 10YR4/6 褐色土 炭化粒・焼土粒微量
 - 第2層 10YR4/6 褐色土 ロームブロック多量、炭化粒中量、焼土粒少量
 - 第3層 10YR4/6 褐色土 炭化粒少量
 - 第4層 10YR3/4 暗褐色土 炭化粒多量、焼土粒少量

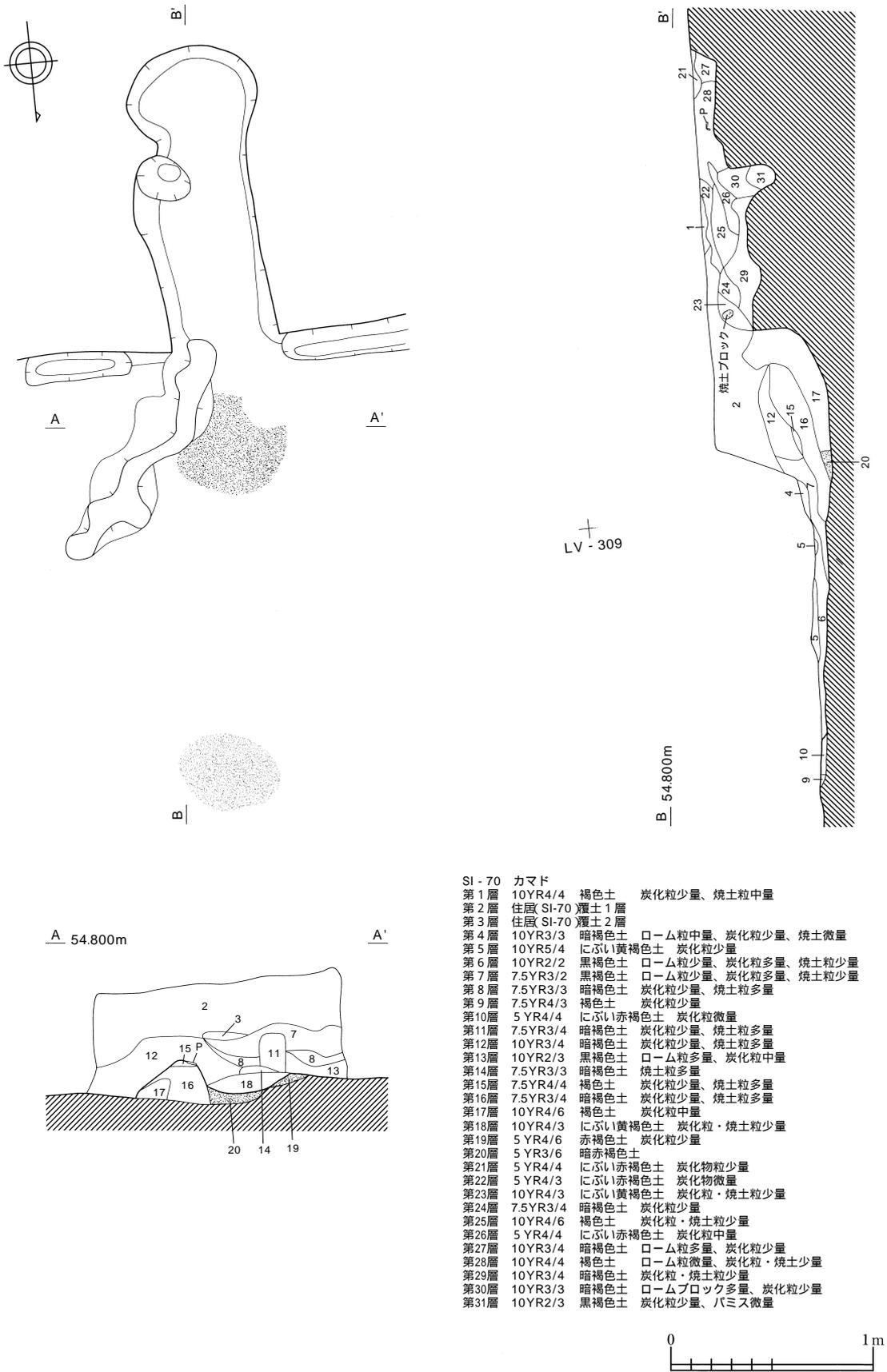
SI - 70 SK - 3
F 54.300m F'



第174図 SI - 70



第176図 SI - 70



第177図 SI - 70

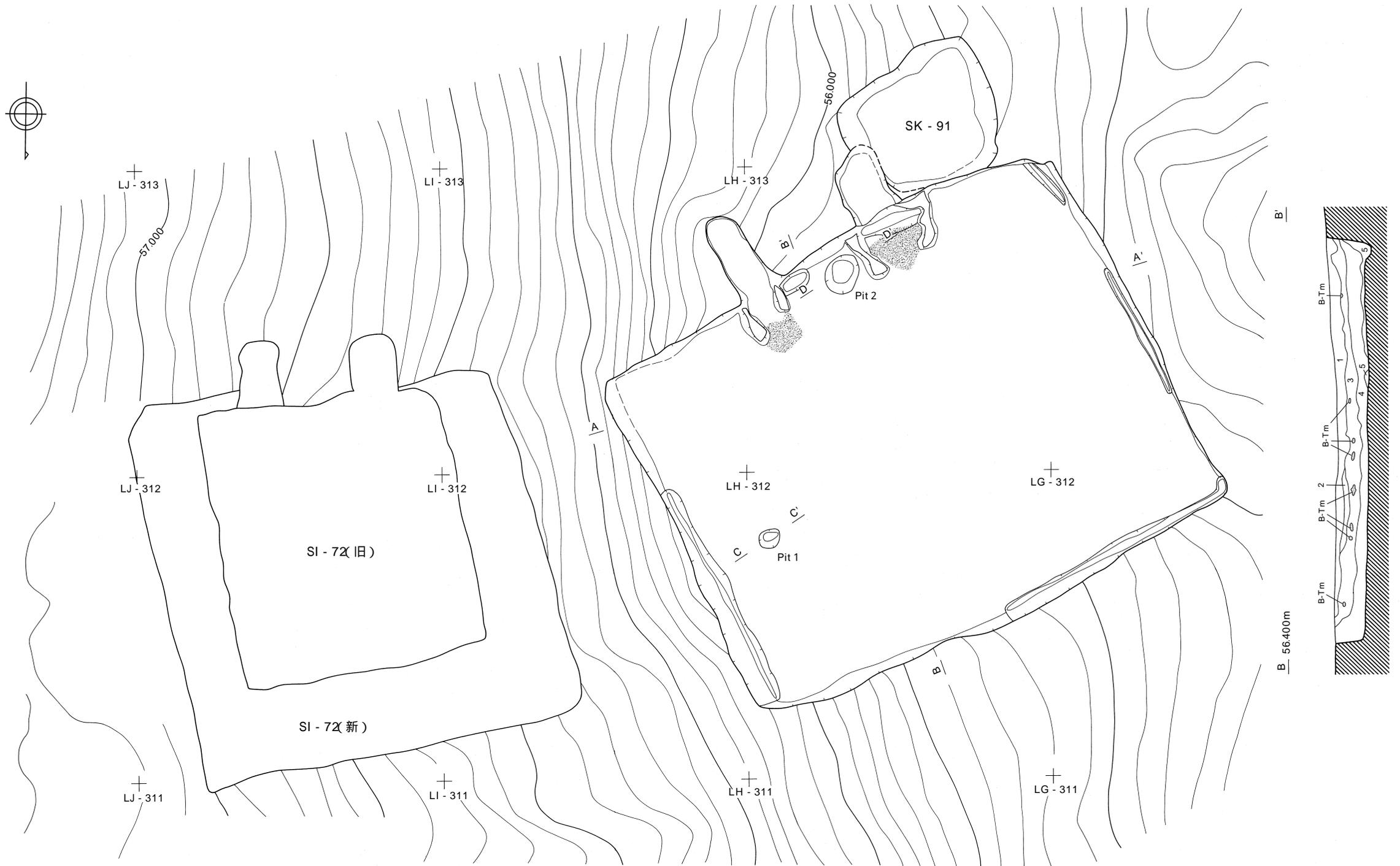


第178図 SI - 70

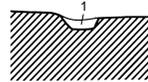
[その他の付属施設] 土坑3基と、炉1基を検出した。土坑の規模は、SK - 1 = 117 × 104 × 43cm、SK - 2 = 93 × 77 × 54cm、SK - 3 = 83 × 56 × 14cmを測る。SK - 1の平面形は、掘り込み面においては円形であるが、底面に向かうにつれて長方形に遷移するという特異な形状を呈する。

炉は、床面中央よりやや西側の部分から検出した。被熱によって52 × 32cmの楕円形に床面が赤化している。上部構造の有無については不明である。床面直上の8層より、鍛冶操業に関連する椀形鍛冶滓等の鉄滓がコンテナ1/2箱とやや多量に出土していることから、鍛冶炉の可能性も想定されるが、本遺跡で検出している他の鍛冶炉の炉形が地面を浅く掘り窪めたもので、底面に鉄や炭化物の付着が見られるのに対し、本遺構の炉は、単に床面が赤化しているものであり、炭化物・焼土は床面において広い範囲で確認できるものの、赤化面及びその周辺において鉄の付着等は確認できず、金床石、鍛造剥片等の鍛冶操業を裏付ける遺物が出土していないことから、鍛冶炉の可能性は低いと考えられる。床面直上の8層から出土している鍛冶関連遺物は外部から廃棄されたものである可能性が高い。

[堆積土] 10層に分層した。最下層に暗褐色を呈する8層、褐色を呈する6層、中層に褐色を呈する4層を挟んで、上層に暗褐色を主体とする土層が堆積している。最下層の8層からは鍛冶操業によって排出されたと思われる鉄滓が多量に出土しており、近隣に存在していた鍛冶炉において排出された鉄滓が、本遺構に廃棄されたものと考えられる。本遺構から出土した鍛冶関連遺物は、炉壁溶解物62g、流動滓8g、椀形鍛冶滓2,756g、椀形鍛冶滓(含鉄)368g、含鉄鉄滓248g、鉄器(未製品を含む)80g、総重量3,522gである。その上層には、ロームブロック、炭化物を含み、褐色を呈する4層が堆



SI - 71 Pit 1
C 55.800m C'



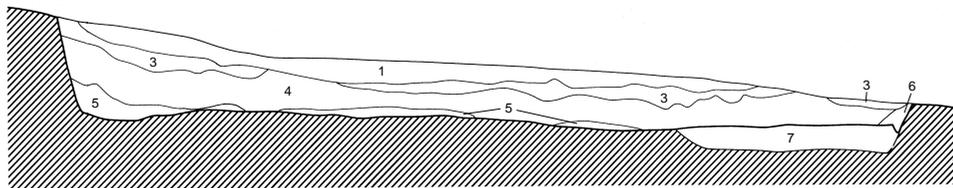
Pit 1
第1層 7.5YR4/4 褐色土 炭化物極微量

SI - 71 Pit 2
D 55.800m D'



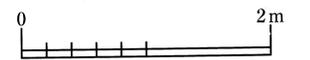
Pit 2
第1層 10YR3/2 黒褐色土 ローム微量、炭化物・焼土少量
第2層 5 YR3/6 暗赤褐色土
第3層 10YR3/3 暗褐色土 ローム・炭化物微量、焼土少量
第4層 7.5YR3/2 黒褐色土 焼土少量
第5層 10YR2/1 黒色土 炭化物多量
第6層 10YR3/3 暗褐色土 ローム・焼土微量

A 56.400m



A'

SI - 71
第1層 10YR2/2 黒褐色土
第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒少量
第3層 10YR3/2 黒褐色土 炭化物少量
焼土粒微量
火山灰(B-Tm)混入
第4層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化物微量
第5層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・焼土粒
少量
第6層 10YR3/3 暗褐色土
第7層 10YR4/4 褐色土



第179図 SI - 71

積しており、この土層も廃棄されたものと認められることから、本遺構の堆積は、人為的要因が強いと考えられる。カマドの北西側において、床面直上につぶれた状態で土師器埴1個体と、用途不明の土製品が出土している（第172図中・下段）。

（設 楽）

S I - 71（第179～181図）

[位置] グリッドLF～LH-311・312で検出した。

[重複] SK-91と重複している。本遺構がSK-91を切っており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 長方形を呈し、672×550×94cmを測る。床面積は35.635㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁37cm、東壁75cm、南壁53cm、西壁18cmを測る。断面形はdで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 西壁側の部分は、掘り方を持ち、地山土が充填されている。しまりがあり、やや堅緻である。それ以外の部分は、大谷火山灰層の地山を床面としており、起伏があるが堅緻である。

[壁溝] 住居各壁から部分的に検出している。深さは平均6cmを測る。

[ピット] 住居内から2基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 31×25×11cm、Pit 2 = 55×46×27cmを測る。いずれのピットについても支柱穴としての機能は無いものと考えられる。Pit 2については、焼土層が検出していることから、カマド脇ピットとしての機能が考えられる。

[カマド] 南壁側から2基検出した。南壁2（36：64）と南壁3（64：36）の位置から検出している。新旧関係については、S I - 54（新）と同様いずれのカマドにも袖が残存しており、併存の可能性についても考えられるが、南壁3側の袖の残存状況は、南壁2側に比べると基部のみが残存しており、ならびに天井部の土層が残存していないことから、南壁2側のカマドが住居廃絶時点で残存していたものと考えられる。

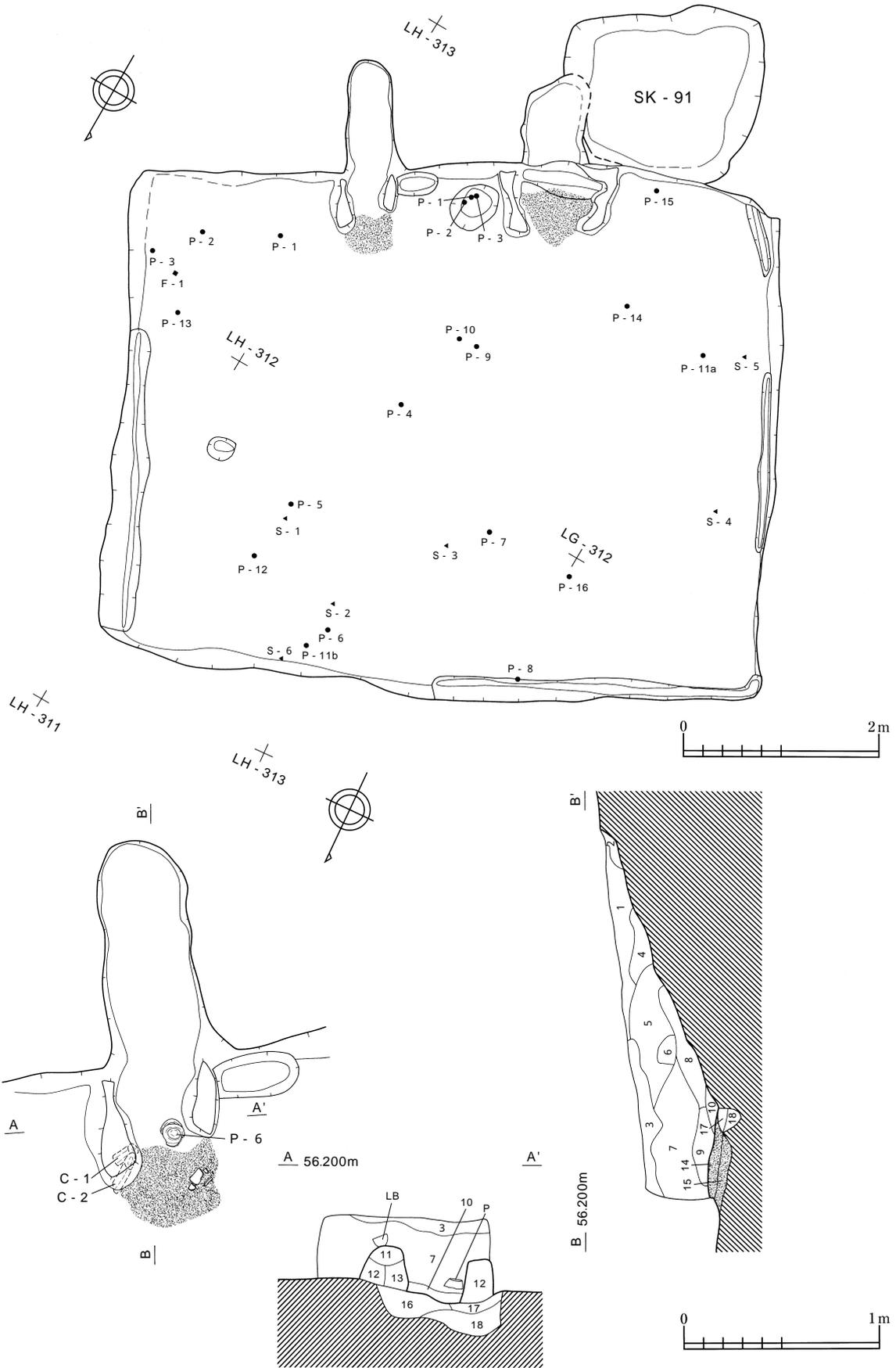
南壁2のカマドの構造は、半地下式で、袖部幅68cm、煙道長117cmを測る。主軸はN - 150° - Eである。燃烧部袖は、転用羽口を芯材とし、粘土による構築である。支脚は土師器椀を2点倒位に重ね設置している。燃烧部天井は第9層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。また、煙道部天井は第5層が相当する。煙道は、住居壁際から22°の角度で立ち上がる。

南壁3のカマドの構造は、半地下式で、袖部幅115cm、煙道長90cmを測る。主軸はN - 151° - Eである。燃烧部袖は、粘土を用いて構築している。燃烧部天井の構築土は土層堆積中に残存していない。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で角度を変え、18°の角度で起伏を持ちながら立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて7層に分層した。住居廃絶後の堆積土は第1～6層で、概ね自然堆積状況を呈する。第3層中にB - T m火山灰が層状に堆積している。

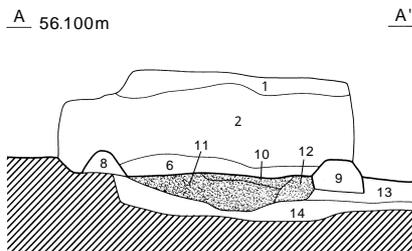
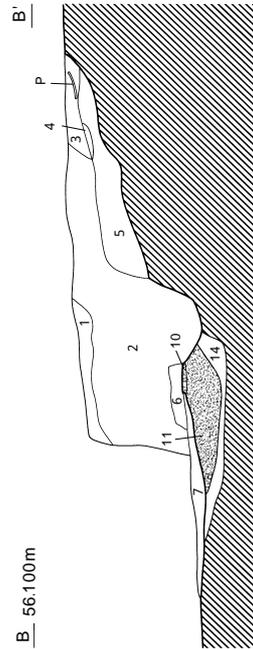
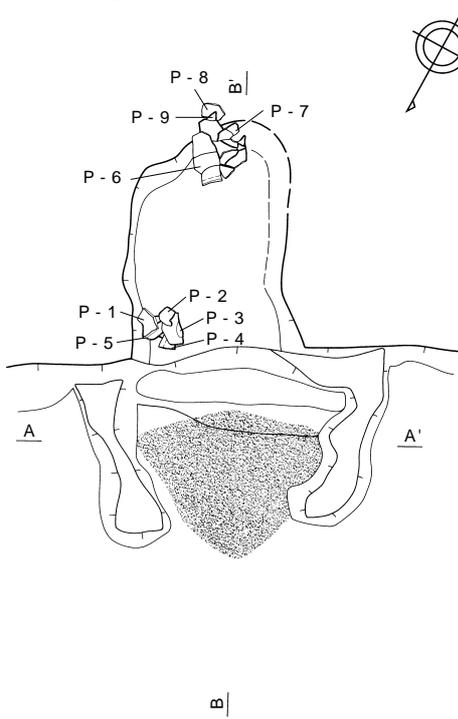
（木 村）



第180図 SI - 71

- SI - 71 カマド (新)
- 第1層 10YR3/4 暗褐色土 □-ム・炭化物少量、焼土極微量
 - 第2層 10YR3/4 暗褐色土 □-ム少量
 - 第3層 10YR4/4 褐色土 炭化物・焼土極微量
 - 第4層 7.5YR3/3 暗褐色土 □-ム極微量
 - 第5層 10YR4/4 褐色土 □-ム微量、炭化物極微量
 - 第6層 7.5YR4/4 褐色土 □-ム多量
 - 第7層 7.5YR4/4 褐色土 □-ム・炭化物極微量
 - 第8層 10YR3/3 暗褐色土 □-ム・焼土少量、炭化物極微量
 - 第9層 5YR4/4 にぶい赤褐色土 □-ム微量
 - 第10層 5YR4/4 にぶい赤褐色土
 - 第11層 10YR4/4 褐色土 □-ム微量
 - 第12層 7.5YR4/4 褐色土 □-ム・炭化物極微量
 - 第13層 5YR3/4 暗赤褐色土 焼土少量
 - 第14層 10YR3/3 暗褐色土
 - 第15層 2.5YR3/4 暗赤褐色土
 - 第16層 7.5YR4/6 褐色土 □-ム少量
 - 第17層 7.5YR4/4 褐色土 □-ム微量
 - 第18層 7.5YR3/3 暗褐色土 □-ム・焼土微量

LH-313



- SI - 71 カマド (旧)
- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 火山灰 (B-Tm) 多量、炭化物・焼土微量
 - 第2層 10YR3/3 暗褐色土 粘土少量、□-ム・炭化物微量、焼土極微量
 - 第3層 7.5YR4/4 褐色土 □-ム少量、焼土微量
 - 第4層 5YR3/6 暗赤褐色土
 - 第5層 7.5YR3/3 暗褐色土 □-ム・炭化物少量、焼土多量
 - 第6層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物極微量
 - 第7層 7.5YR2/2 黒褐色土 炭化物極微量、□-ム・焼土微量
 - 第8層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物・焼土微量
 - 第9層 10YR3/2 黒褐色土 炭化物極微量、焼土微量
 - 第10層 2.5YR4/6 赤褐色土
 - 第11層 5YR4/6 赤褐色土
 - 第12層 5YR3/4 暗赤褐色土 □-ム粒極微量
 - 第13層 7.5YR3/3 暗褐色土 □-ム粒・炭化物微量
 - 第14層 7.5YR4/6 褐色土 □-ム粒・炭化物微量



第181図 SI - 71

S I - 72 (新)(第182～184図)

[位置] グリッドLH・LI - 311・312で検出した。

[重複] S I - 72 (旧)と重複している。本遺構がS I - 72 (旧)の上部に構築されており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 方形を呈し、498×468×64cmを測る。床面積は24.176m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁30cm、東壁40cm、南壁35cm、西壁20cmを測る。断面形はaで、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] S I - 72 (旧)の重複部分については、大谷火山灰層の地山土を貼り床として貼り付けている。それ以外の部分については、大谷火山灰層の地山を床面としており、堅緻である。貼り床部分と地山の床面の境界については起伏がある。

[壁溝] 部分的に断続しながらほぼ全周して検出した。深さは平均16cmを測る。斜面の上の部分にあたる東壁側の壁溝は比較的浅い。

[ピット] 住居内から7基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 37×32×23cm、Pit 2 = 35×32×6cm、Pit 3 = 39×32×10cm、Pit 4 = 36×26×8cm、Pit 5 = 52×35×16cm、Pit 6 = 45×42×6cm、Pit 7 = 41×33×7cmを測る。

ピットの配置が南壁側の壁際に集中しており、Pit 1、3、5、6がそれぞれ対応した配置状況であるため、支柱配置の一部として機能した可能性が考えられるが、詳細は不明である。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁2(37.5:63.5)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅86cm、煙道長87cmを測る。主軸はN - 170° - Eである。燃烧部の袖は、倒位に設置した土師器甕ならびに転用羽口を芯材とし、粘土で構築している。また、燃烧部天井は第11、13、14層が相当し、羽口が出土していることから天井部分についても転用羽口を芯材としていた可能性が考えられる。支脚は、土師器椀を倒置している。燃烧部下部に掘り方を持ち、大谷火山灰層の地山を充填している。煙道部天井は、第7、8層が相当する。煙道は、住居壁際から35°の角度で立ち上がり、途中で20°に角度を変え立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 貼り床部分を含めて11層に分層した。第9層では焼土層が堆積しており、それ以外の土層についても地山土主体の堆積で埋め戻し等による人為的堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 72 (旧)(第182、185、186図)

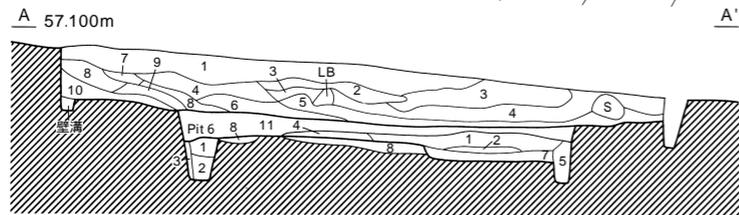
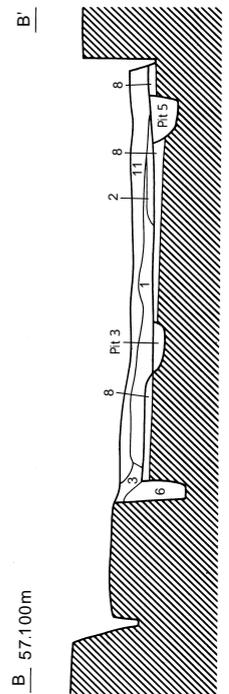
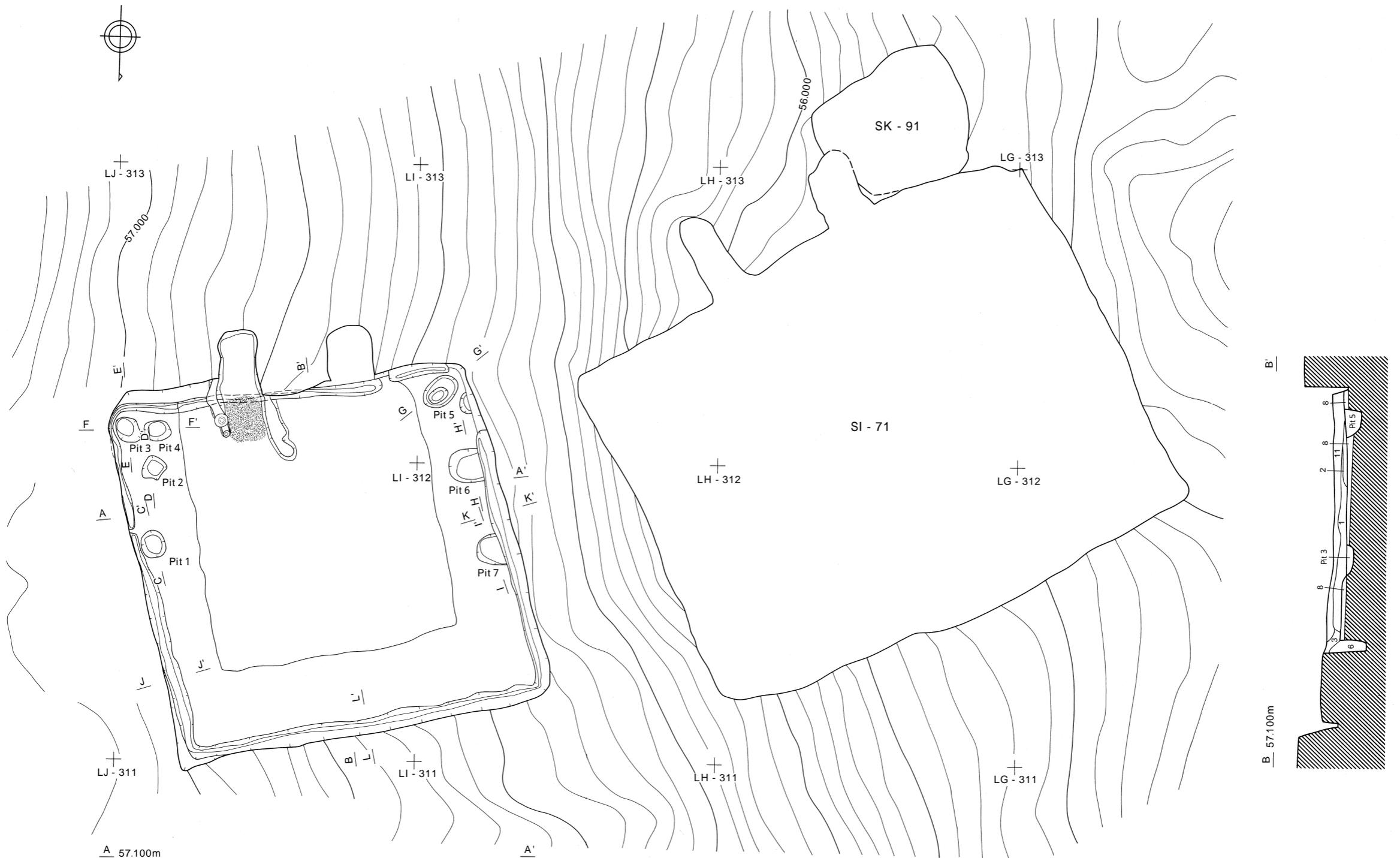
[位置] グリッドLH・LI - 311・312で検出した。

[重複] S I - 72 (新)と重複している。本遺構の上にS I - 72 (新)が構築されており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 方形を呈し、355×318×31cmを測る。床面積は11.508m²を測る。

[壁] 壁高は、壁面上部がS I - 72 (新)に切られているため、壁上部の形状について南壁以外詳細は、不明であるが、遺構確認面からの高さとして取り扱った。北壁56cm、東壁76cm、南壁50cm、西壁56cmを測る。断面形はaで、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 住居全体に掘り方を持ち、暗褐色土ならびに黒褐色土を充填し床面としている。床面は、ほぼ

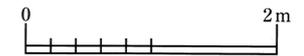


SI - 72 (新)

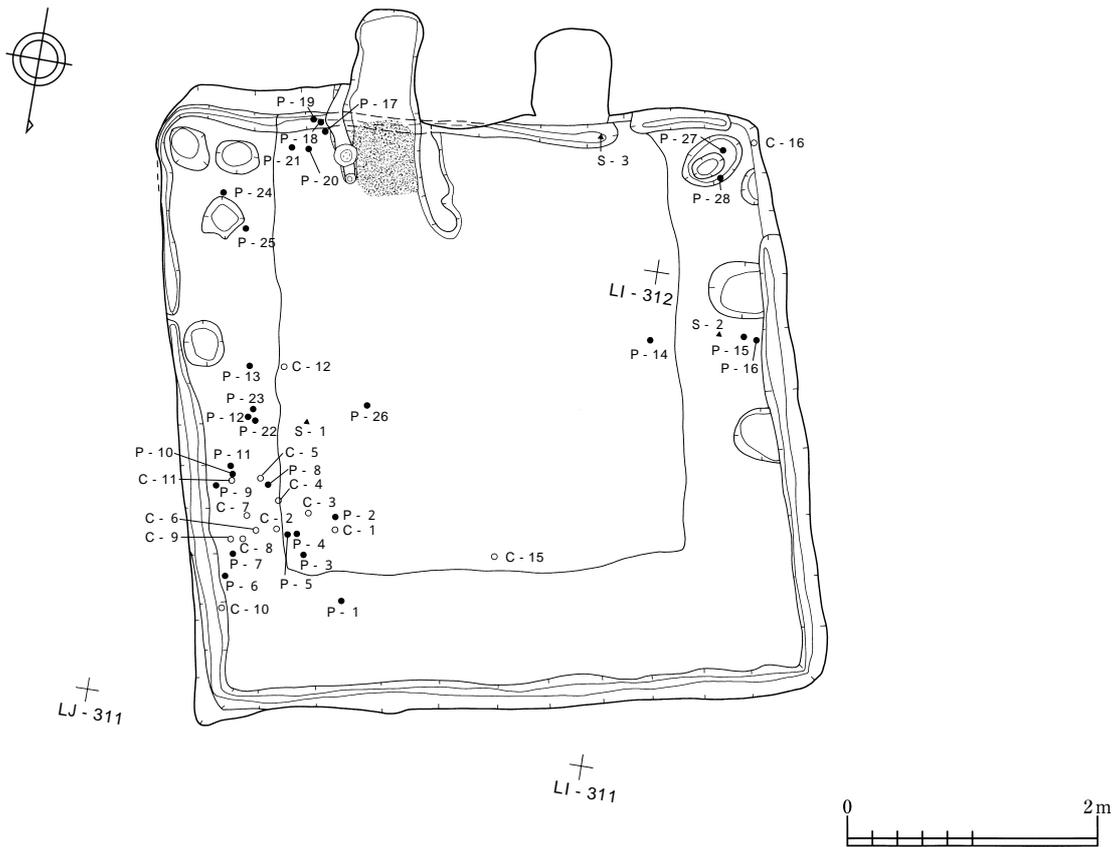
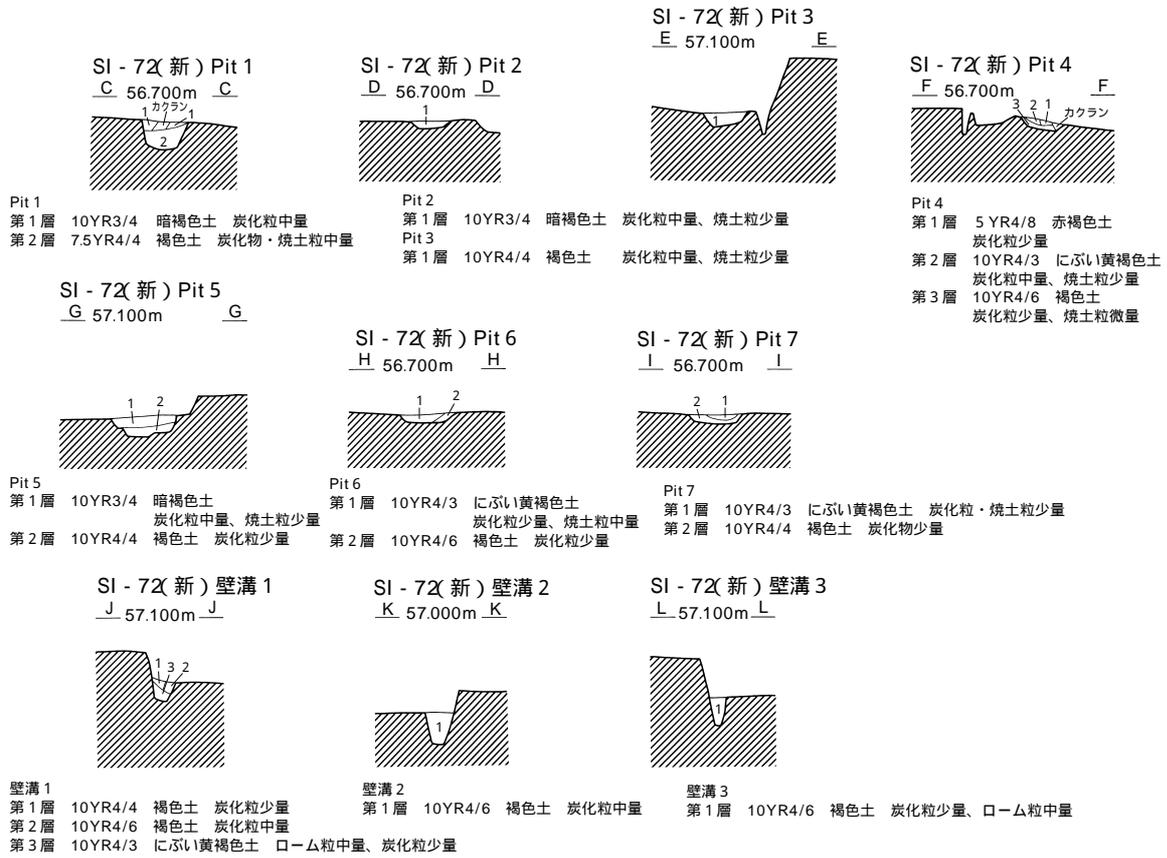
第1層	10YR4/4	褐色土	ローム粒・パミス少量、炭化物・焼土粒微量
第2層	7.5YR3/4	暗褐色土	炭化物微量、焼土ブロック少量
第3層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒少量、炭化物微量
第4層	10YR4/4	褐色土	ロームブロック少量、炭化物微量
第5層	10YR3/4	暗褐色土	炭化物極微量
第6層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒少量
第7層	10YR3/3	暗褐色土	礫微量
第8層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒少量、炭化物・焼土粒微量
第9層	7.5YR4/6	褐色土	
第10層	10YR3/4	暗褐色土	炭化物微量
第11層	10YR4/6	褐色土	パミス少量、炭化粒中量

SI - 72 (旧)

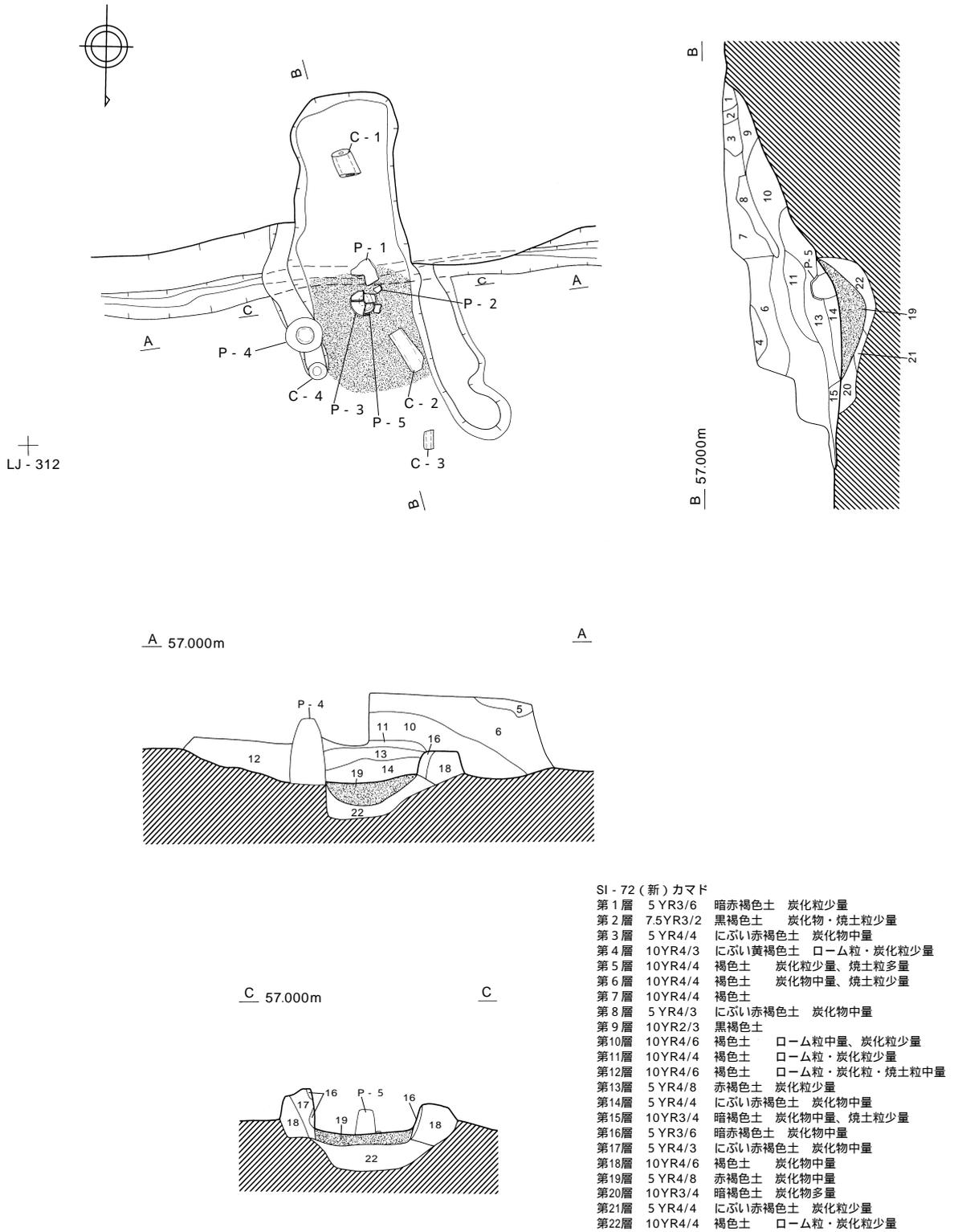
第1層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	ローム粒少量、ロームブロック・炭化粒中量
第2層	7.5YR4/4	褐色土	炭化粒・焼土粒少量
第3層	10YR4/6	褐色土	炭化粒少量
第4層	10YR4/4	褐色土	炭化粒少量
第5層	10YR4/4	褐色土	炭化物少量
第6層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	ローム粒・炭化粒中量
第7層	10YR3/4	暗褐色土	炭化粒少量、焼土粒中量
第8層	10YR4/6	褐色土	炭化粒中量、焼土粒少量



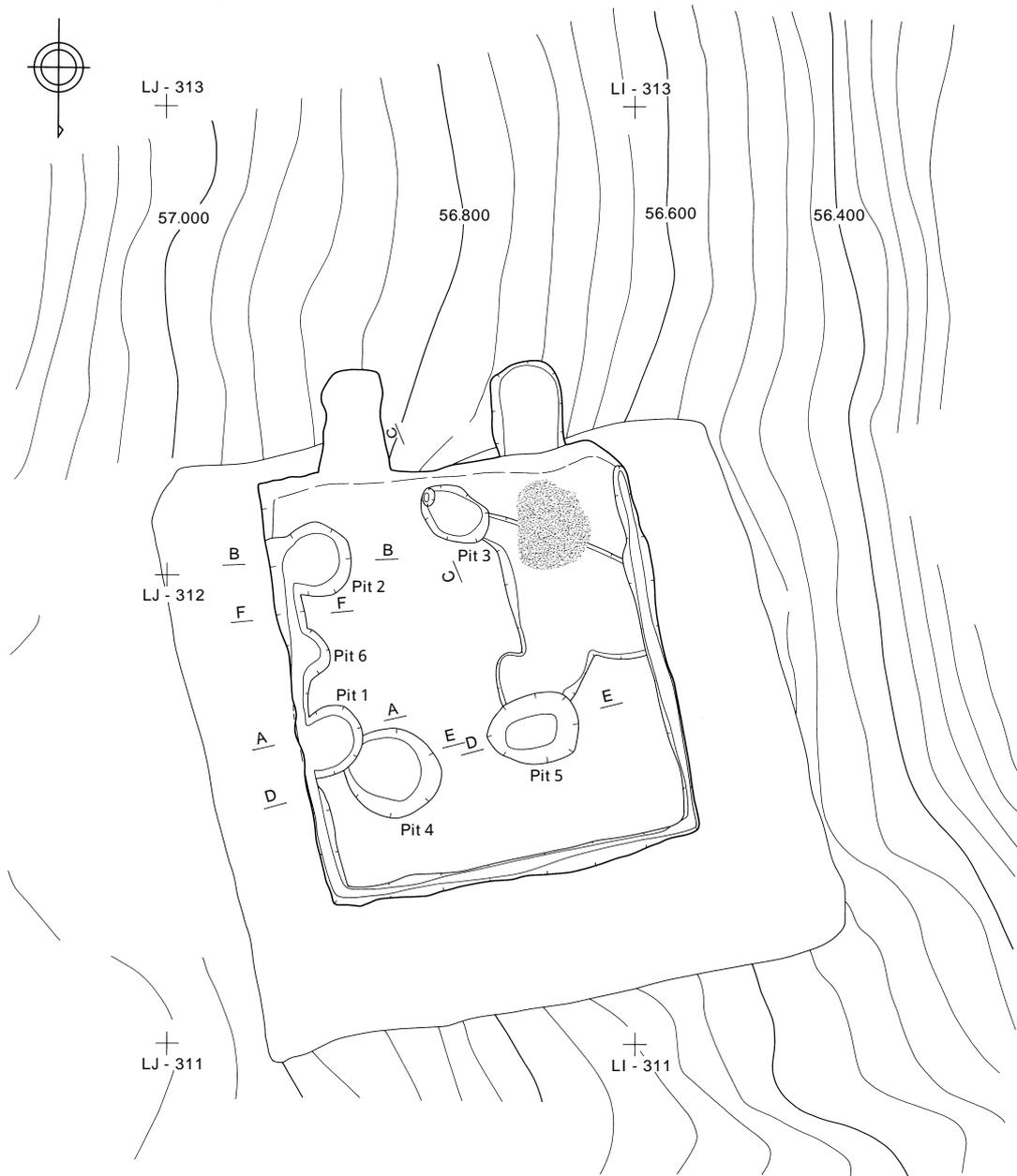
第182図 SI - 72 (新) ・ (旧)



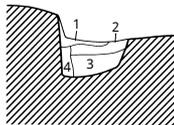
第183図 SI - 72(新)



第184図 SI - 72(新)

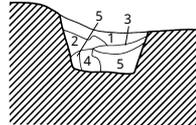


SI - 72(旧) Pit 1
A 56.600m A



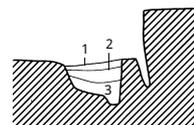
- Pit 1
- 第1層 10YR4/6 褐色土 パミス・炭化粒少量
 - 第2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土
 - 第3層 7.5YR3/4 暗褐色土
 - 第4層 10YR4/4 褐色土 炭化粒中量

SI - 72(旧) Pit 2
B 56.600m B



- Pit 2
- 第1層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 ローム粒中量、炭化粒少量
 - 第2層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物多量
 - 第3層 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒中量、焼土粒微量
 - 第4層 10YR4/6 褐色土 ローム粒中量
 - 第5層 10YR4/4 褐色土 炭化粒中量、炭化物少量

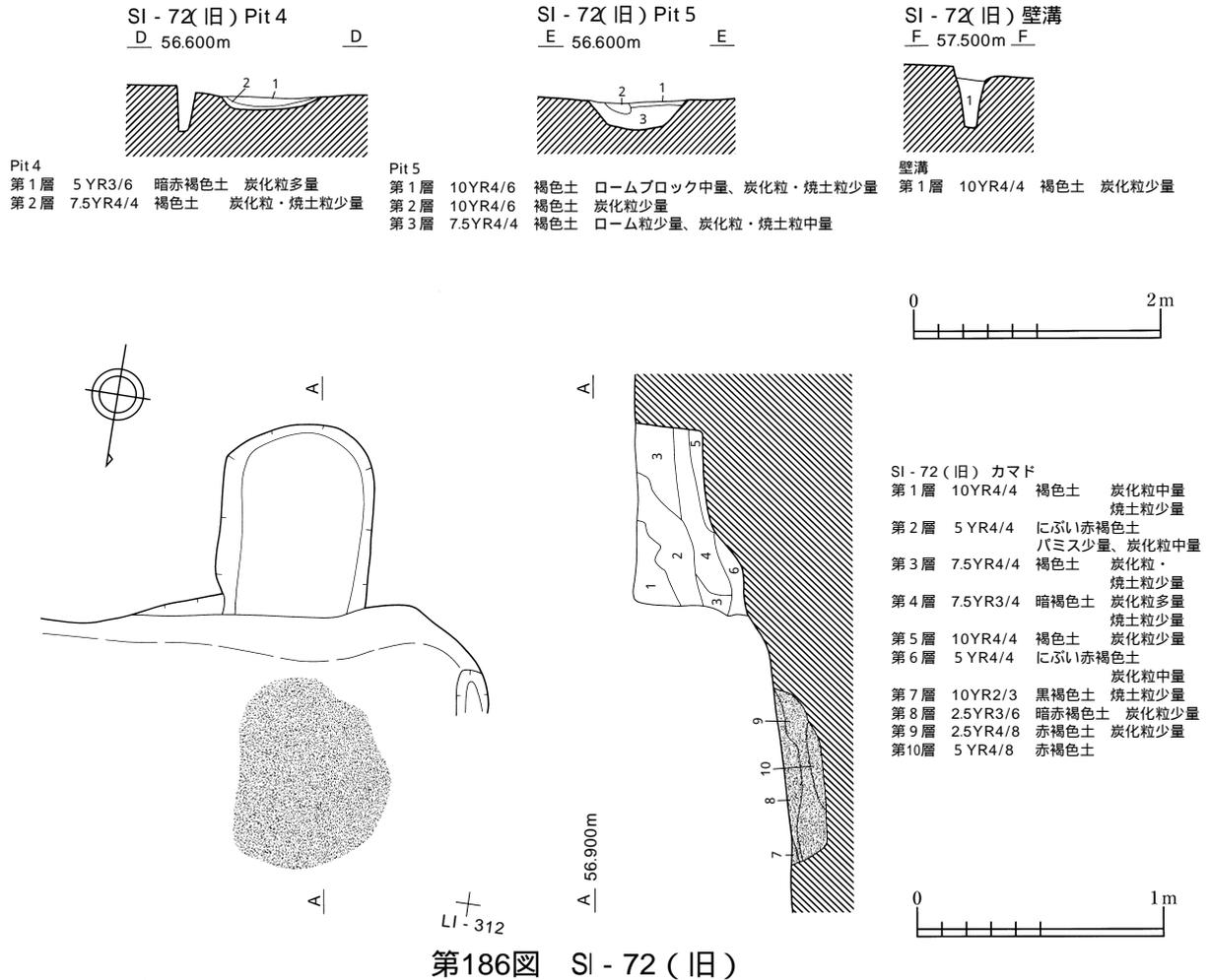
SI - 72(旧) Pit 3
C 57.500m C



- Pit 3
- 第1層 10YR4/4 褐色土 炭化粒少量、焼土粒微量
 - 第2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化粒中量、焼土粒少量
 - 第3層 10YR4/4 褐色土 炭化粒中量、焼土粒・焼土ブロック少量



第185図 SI - 72(旧)



平坦でやや脆弱である。

[壁溝] 住居北壁ならびに東西壁からコの字状に検出した。深さは25cmとS I - 72(新)同様深みを持つ。

[ピット] 住居内から6基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 59 × 55 × 32cm、Pit 2 = 70 × 63 × 32cm、Pit 3 = 64 × 45 × 36cm、Pit 4 = 80 × 75 × 9 cm、Pit 5 = 78 × 60 × 23cm、Pit 6 = (43) × 33 × 35cmを測る。Pit 1、2、6について主柱穴として機能した可能性があるが、明確な対応関係が追えず詳細は不明である。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁4(76:24)の位置から検出している。構造は、半地下式で、燃烧部の上部構造は残存しておらず、火床面ならびに煙道部のみの検出であった。煙道長は80cmを測る。主軸はN - 168° - Eである。煙道部の構築は、粘土によるもので天井部分は第1、2層に相当する。煙道は、住居壁際から25°の角度で段状に立ち上がり、煙出部付近ではほぼ平坦になる。煙出奥壁は、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて8層に分層した。月見野火山灰ならびに大谷火山灰主体の地山土が混合した状況で堆積しており、急激に埋め戻しが行われた人為的堆積状況を呈する。S I - 72(旧)の廃絶からS I - 72(新)の構築にかけての時間幅は、連続したものであったことが考えられる。

(木村)

S I - 73 (第187図)

[位置] グリッドL J・L K - 310・311で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、310×308×38cmを測る。床面積は9.613㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁26cm、東壁30cm、南壁25cm、西壁23cmを測る。断面形はcで、壁上部で緩やかな傾斜が見られる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。また、南壁のカマド左袖脇の部分(38×31cm)ならびに住居中央部で2ヶ所(24×15cm、36×21cm)赤化面を検出した。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁4(77:23)の位置から検出している。構造は、地下式で、燃焼部の上部構造は残存しておらず、煙道長96cmを測る。主軸はN-60°-Eである。煙道は、天井が土圧等により沈下しており、住居壁際から10°の角度で起伏を持ちながら傾斜し、煙出部付近でほぼ平坦になる。煙道奥壁では外傾しながら立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 8層に分層した。住居床直に相当する第7層は焼土層であり、[床]で記述した赤化面の検出状況を踏まえると本遺構が焼失住居であったことが考えられる。住居の構築材や遺物の出土がほとんどない状況であり、被災後の清掃の要素が考えられる。

(木村)

S I - 74 (第188~190図)

[位置] グリッドL O・L P - 310・311で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 長方形を呈し、558×462×66cmを測る。床面積は26.149㎡を測る。

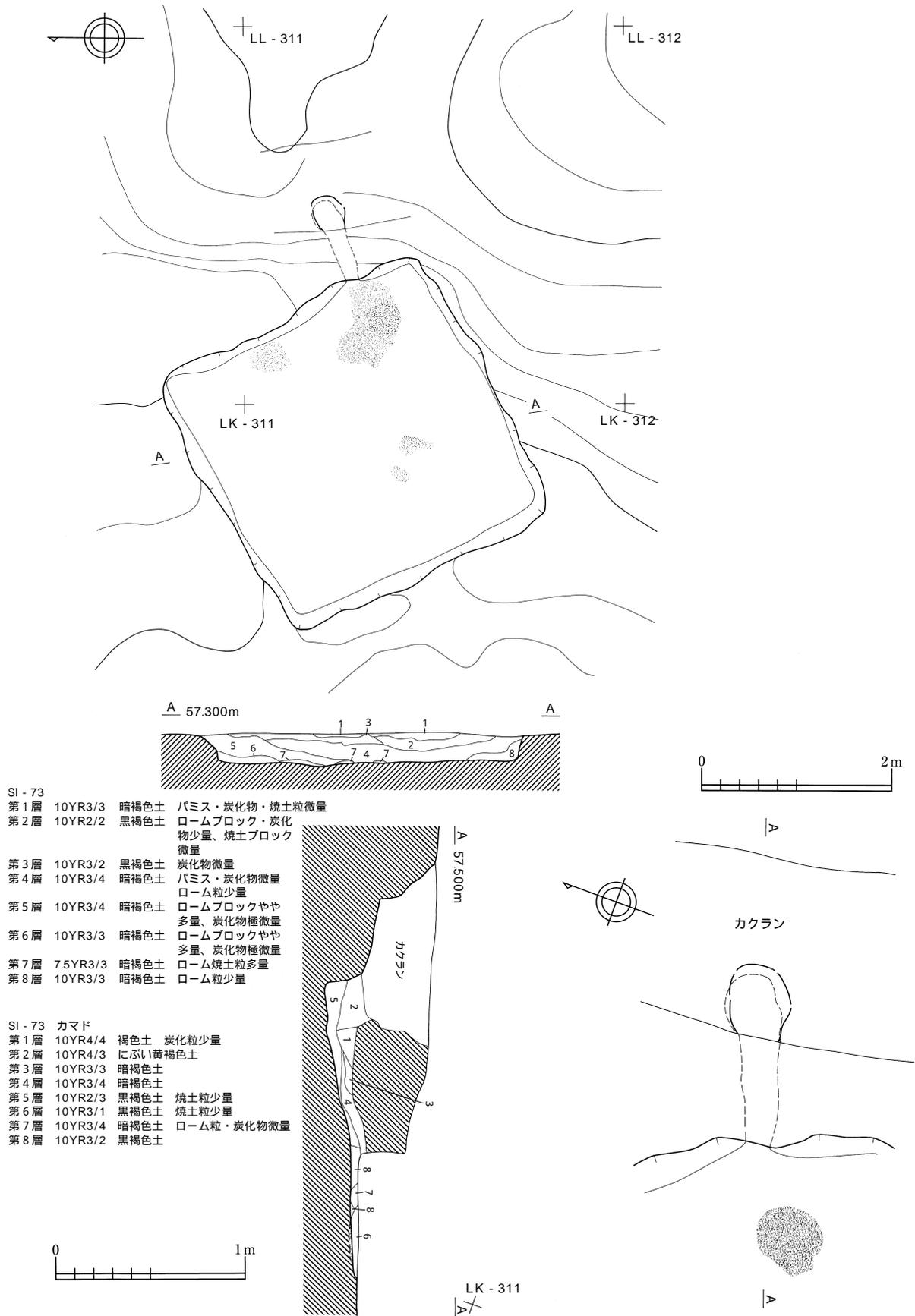
[壁] 壁高は、北壁40cm、東壁44cm、南壁52cm、西壁50cmを測る。断面形はaで、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。また、床面から炭化材・炭化物ならびに赤化面を検出しており、本遺構は焼失住居である。

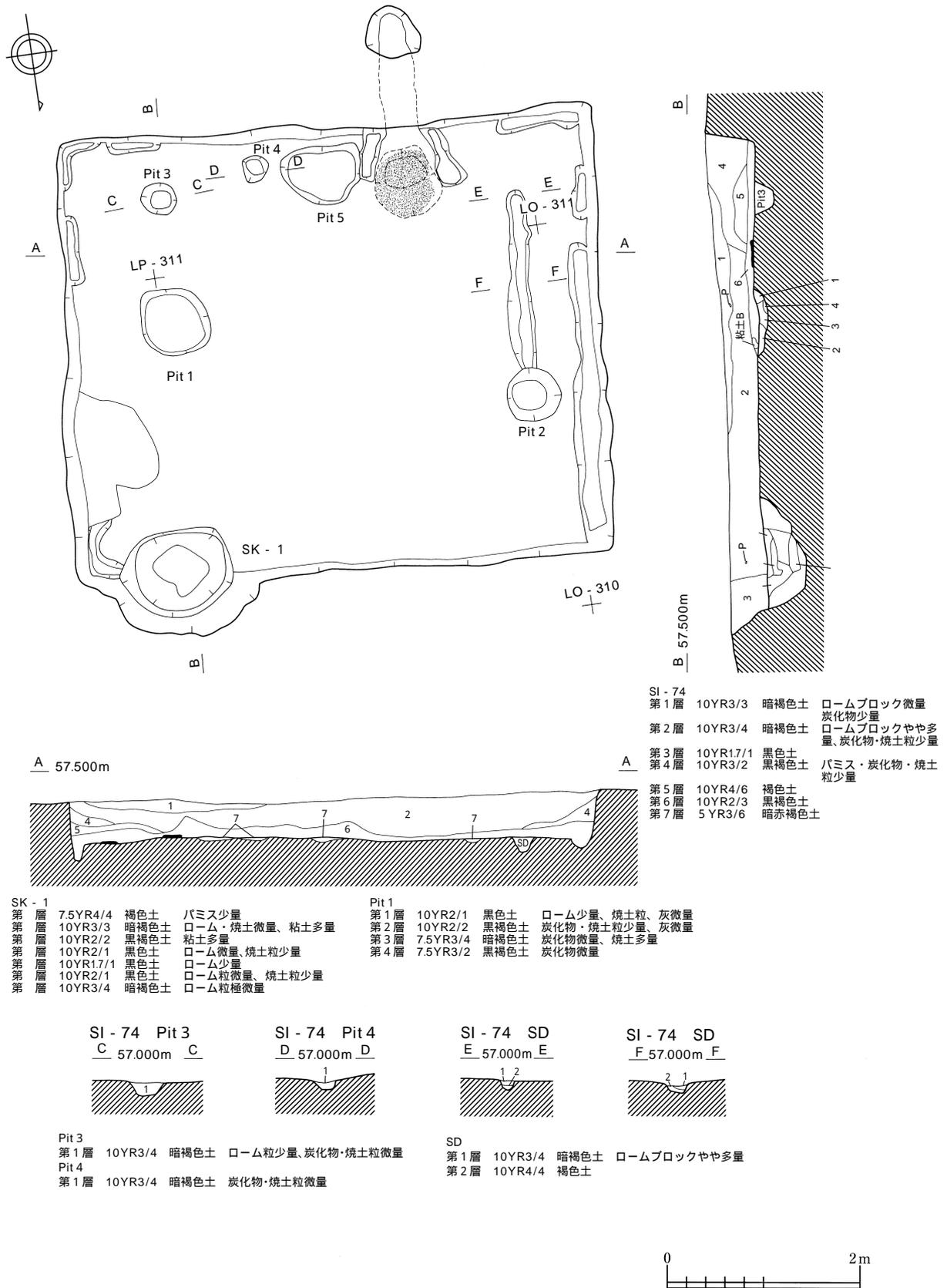
[壁溝] 住居北壁を除く壁から部分的に検出した。深さは平均10cmを測る。また住居西壁側から壁際から70cm住居寄りの部分から壁に平行する形で溝を検出した。深さは9cmを測る。

[ピット] 住居内から5基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 70×70×10cm、Pit 2 = 55×55×3cm、Pit 3 = 37×35×13cm、Pit 4 = 27×25×8cm、Pit 5 = 83×63×3cmを測る。いずれのピットも浅く支柱穴としての機能はなかったものと考えられる。

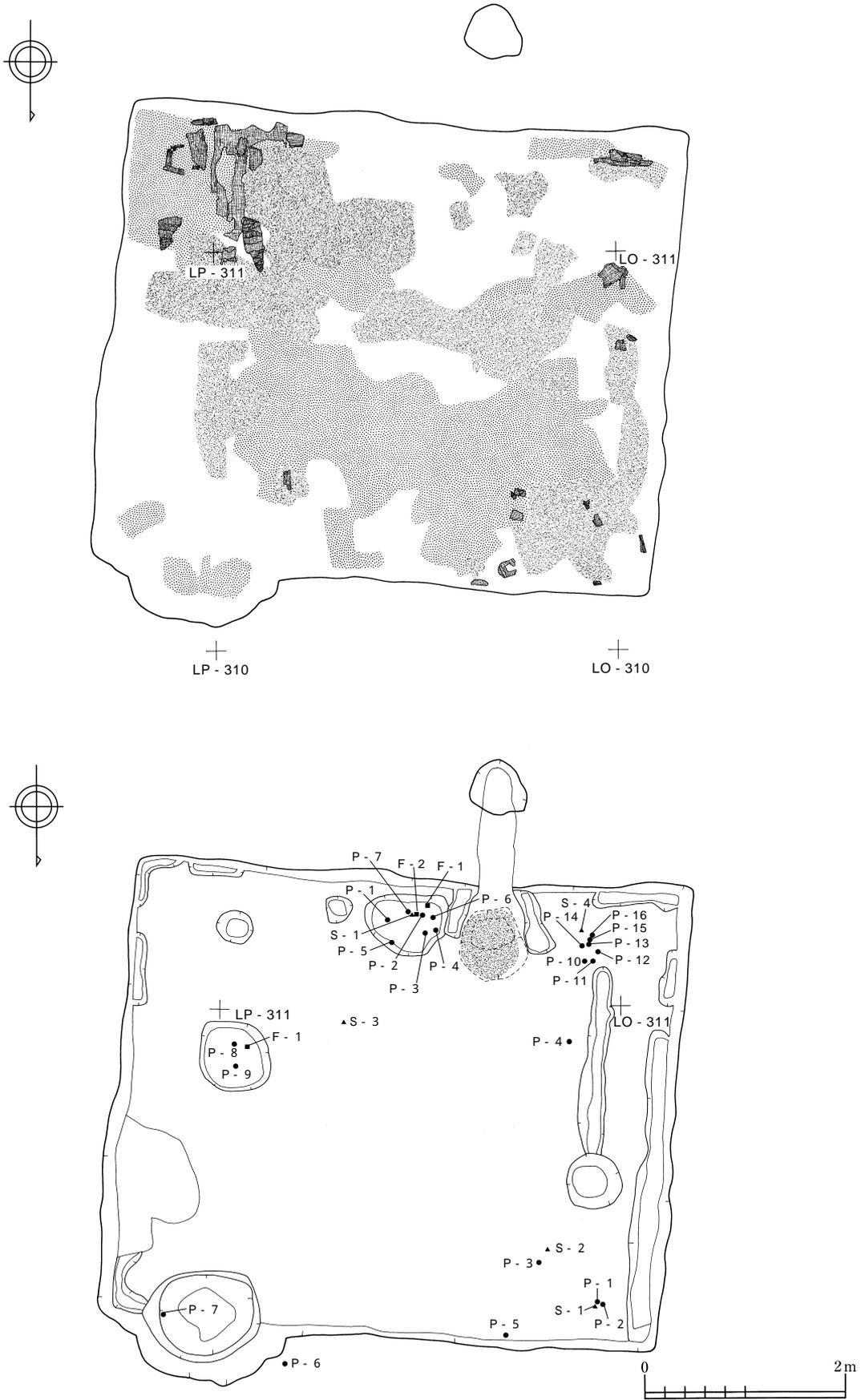
[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(65:35)の位置から検出している。構造は、地下式で、袖部幅108cm、煙道長125cmを測る。主軸はN-178°-Wである。構築は、芯材の出土が見られなかったことから粘土による構築であると考えられる。燃焼部天井は第8層が相当し、崩落した堆積状況を呈する。煙道は、住居壁際から16°の角度で起伏を持ちながら傾斜し、煙出部でほぼ



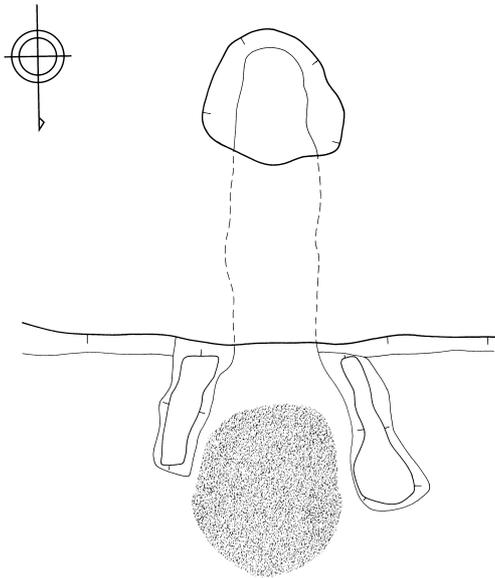
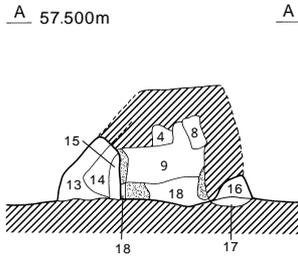
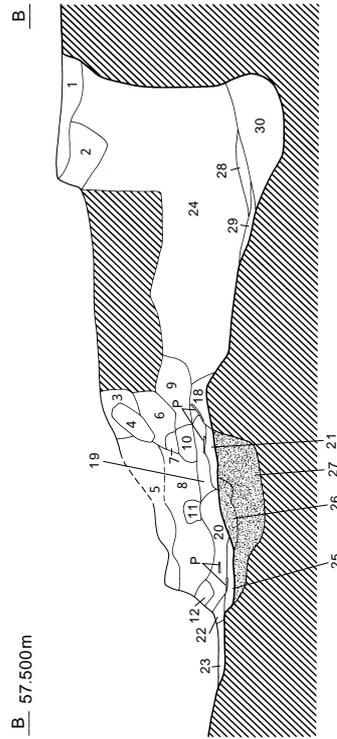
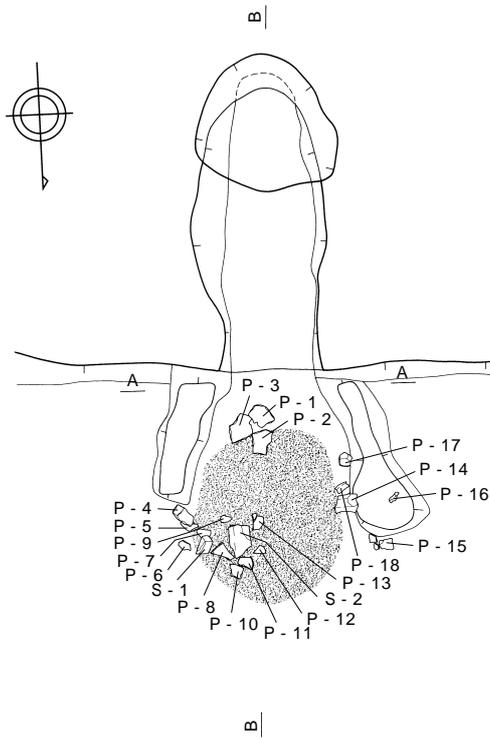
第187図 SI - 73



第188図 SI - 74



第189図 SI - 74



SI - 74	カマド		
第1層	7.5YR3/4	暗褐色土	炭化物極微量
第2層	7.5YR2/2	黒褐色土	焼土少量
第3層	10YR3/4	暗褐色土	ローム微量
第4層	7.5YR3/3	暗褐色土	
第5層	10YR2/1	黒色土	炭化物多量
第6層	10YR4/4	褐色土	ローム粒・炭化物微量
第7層	5YR3/4	暗赤褐色土	
第8層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒極微量、焼土微量
第9層	10YR2/3	黒褐色土	ローム少量、炭化物・焼土微量
第10層	5YR4/6	赤褐色土	ローム少量
第11層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒微量
第12層	5YR5/6	明赤褐色土	
第13層	7.5YR4/4	褐色土	ローム粒極微量
第14層	5YR3/4	暗赤褐色土	ローム粒極微量
第15層	5YR3/6	暗赤褐色土	
第16層	10YR3/3	暗褐色土	炭化物少量
第17層	10YR4/4	褐色土	ローム粒微量
第18層	5YR3/4	暗赤褐色土	焼土多量
第19層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒・炭化物微量、焼土少量
第20層	7.5YR3/3	暗褐色土	炭化物微量、焼土粒多量
第21層	5YR4/6	赤褐色土	
第22層	5YR3/6	暗赤褐色土	
第23層	10YR2/3	黒褐色土	炭化物少量、焼土粒多量
第24層	10YR2/3	黒褐色土	炭化物微量、焼土少量
第25層	7.5YR2/2	黒褐色土	
第26層	2.5YR3/6	暗赤褐色土	
第27層	2.5YR4/6	赤褐色土	
第28層	7.5YR5/6	明褐色土	炭化物少量、焼土微量
第29層	7.5YR5/6	明褐色土	
第30層	10YR2/1	黒色土	炭化物微量、焼土少量

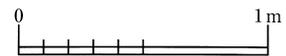
LO - 311

57.500m

A 57.500m

A

LO - 311



第190図 SI - 74

平坦になる。煙出奥壁は、やや丸みを帯びた立ち上がりを持ち、開口部近くで外傾しながら立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居北壁東隅部分から土坑 1 基を検出した。約半分が住居外に張り出しており、規模は117×90×40cmを測る。張り出し部分については、住居上部から掘り込みを持ち、本遺構に帰属しない可能性についても考慮されたが、住居焼失時点で床面に堆積した炭化物の範囲が土坑上に検出したため、焼失時には、土坑が床面の高さで埋まりきっていたものと判断した。また、住居廃絶後の堆積で掘り込み部分が埋没していることから本遺構に帰属させた。

[堆積土] 7層に分層した。床面に炭化材・炭化物ならびに赤化面を検出しており、局所的に焼土ブロックを混入している。全般的にロームブロック、焼土粒、炭化物等を含み、埋め戻し等による人為的堆積状況を呈する。

(木 村)

S I - 75 (第191図)

[位 置] グリッドLQ - 311・312で検出した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、304×284×54cmを測る。床面積は8.48m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁17cm、東壁25cm、南壁30cm、西壁22cmを測る。断面形はdで、緩やかに立ち上がる。壁面は、やや脆弱である。

[床] ほぼ床全面に掘り方を持ち、大谷火山灰層主体の地山土を貼り床としている。やや起伏があり、堅緻である。

[壁 溝] なし。

[ビット] 住居内から 1 基検出した。規模は45×45×6cmを測る。

[カマド] 住居南壁側から 1 基検出した。南壁 3 (70 : 30) の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅 (81) cm、煙道長105cmを測る。主軸はN - 169° - Eである。構築は、上部構造がほとんど残存しておらず、燃烧部における残存は、袖の基部と天井崩落土の一部 (第10層) のみである。また、煙道部についても天井が土層堆積上にブロック化した状態で検出したことから、意図的破壊が行われていた可能性が考えられる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて10層に分層した。第 1 ~ 3 層については、廃棄を伴う人為堆積層でそれ以外の部分については、自然堆積状況を呈する。

(木 村)

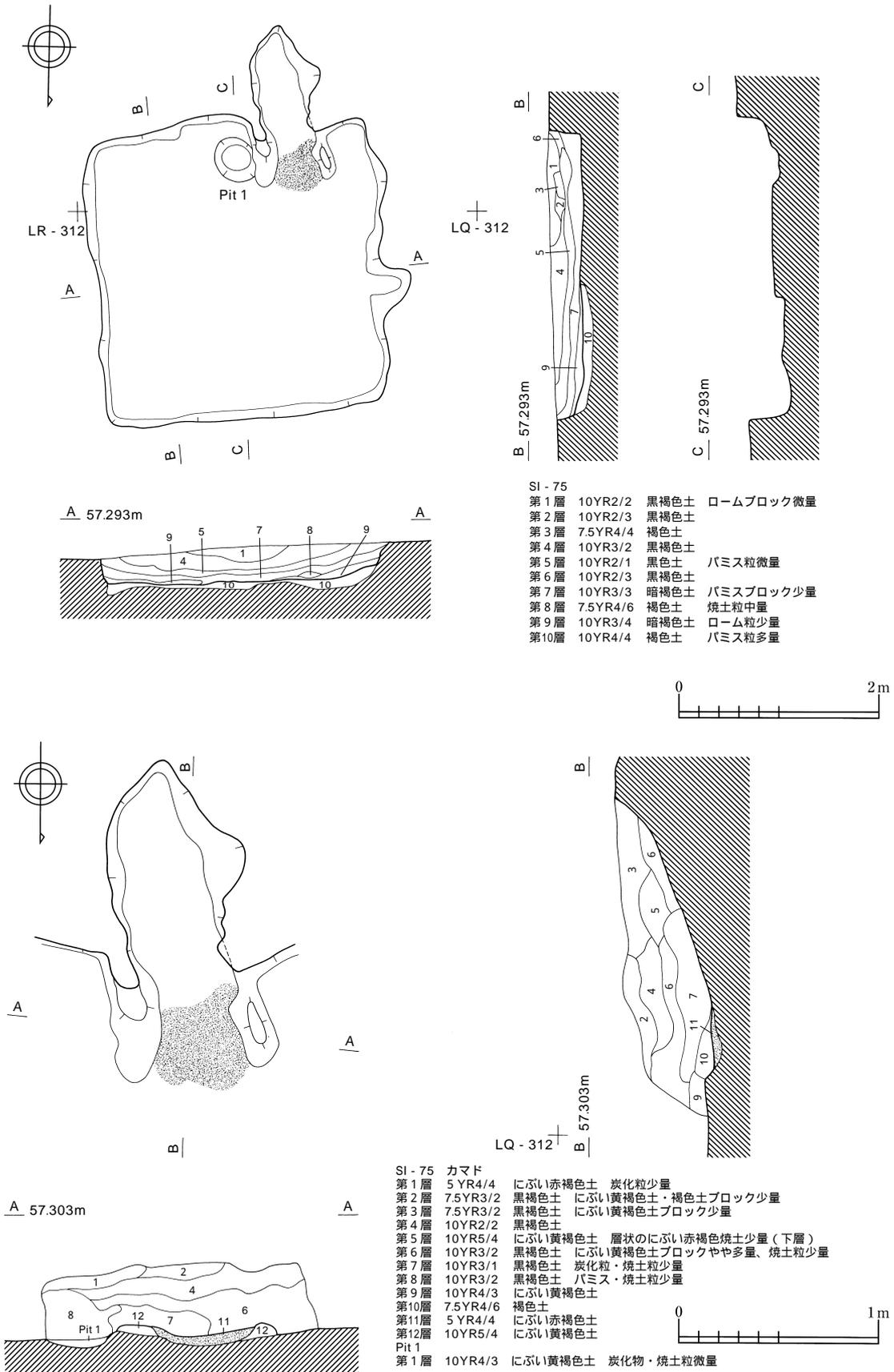
S I - 76 (第192~195図)

[位 置] グリッドLS - 310・311・312、LT - 310・311で検出した。

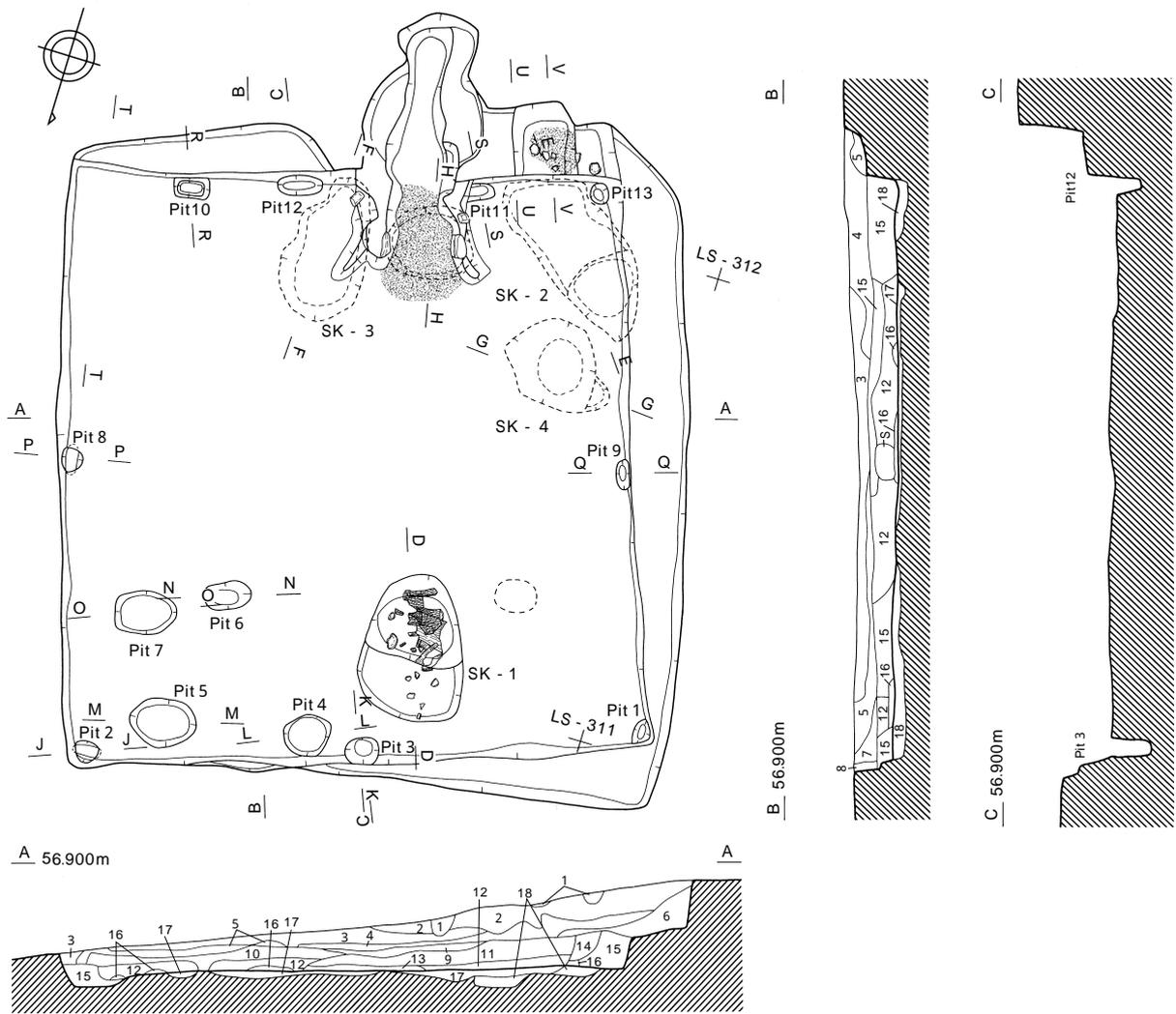
[重 複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、494×473×88cmを測る。床面積は23.133m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁41cm、東壁29cm、西壁76cm、南壁42cmを測る。断面形はeで、北壁、西壁、南壁において棚状の段を有する。本遺構は焼失住居であり、被熱により壁が部分的に赤化している。



第191図 SI - 75



SI - 76

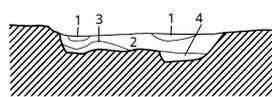
- | | |
|---------------------------------------|-------------------------------------|
| 第1層 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒中量、炭化粒微量 | 第11層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化物中量、焼土ブロック多量 |
| 第2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒中量、炭化粒少量 | 第12層 5 YR4/8 赤褐色土 にぶい黄褐色土少量 |
| 第3層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒中量、炭化粒・焼土粒少量 | 第13層 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒多量、焼土粒中量 |
| 第4層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量、炭化粒中量 | 第14層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒・炭化粒・焼土粒中量 |
| 第5層 10YR4/4 褐色土 ローム粒・焼土粒少量、炭化粒中量 | 第15層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土粒中量、焼土粒少量 |
| 第6層 10YR4/4 褐色土 ロームブロック少量、炭化粒中量、焼土粒微量 | 第16層 10YR17/1 黒色土 |
| 第7層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・炭化物少量 | 第17層 5 YR3/6 暗赤褐色土 炭化粒少量 |
| 第8層 10YR4/6 褐色土 炭化粒微量 | 第18層 10YR4/6 褐色土 炭化粒少量 |
| 第9層 10YR3/4 暗褐色土 炭化粒・焼土粒中量 | |
| 第10層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物少量、焼土粒・焼土ブロック多量 | |

SI - 76 SK - 1
D 56.300m



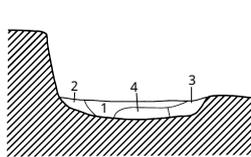
- SK - 1
- | |
|---------------------------|
| 第1層 10YR4/4 褐色土 炭化粒・焼土粒少量 |
| 第2層 10YR4/4 褐色土 焼土粒中量 |
| 第3層 5 YR4/4 にぶい赤褐色土 炭化粒多量 |
| 第4層 5 YR5/8 明赤褐色土 |
| 第5層 10YR17/1 黒色土 |
| 第6層 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒微量 |

SI - 76 SK - 2
E 56.300m

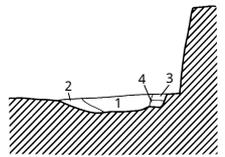


- SK - 2
- | |
|-------------------------------|
| 第1層 7.5YR4/4 褐色土 炭化粒少量、焼土粒中量 |
| 第2層 7.5YR3/4 暗褐色土 炭化粒多量、焼土粒中量 |
| 第3層 10YR4/4 褐色土 焼土粒中量 |
| 第4層 10YR3/4 暗褐色土 炭化粒・焼土粒中量 |
- SK - 3
- | |
|--------------------------------------|
| 第1層 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒・焼土粒中量 |
| 第2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化粒・焼土粒少量 |
| 第3層 10YR4/6 褐色土 炭化粒少量、焼土粒中量 |
| 第4層 7.5YR4/4 褐色土 ロームブロック多量、炭化粒・焼土粒中量 |

SI - 76 SK - 3
F 56.800m

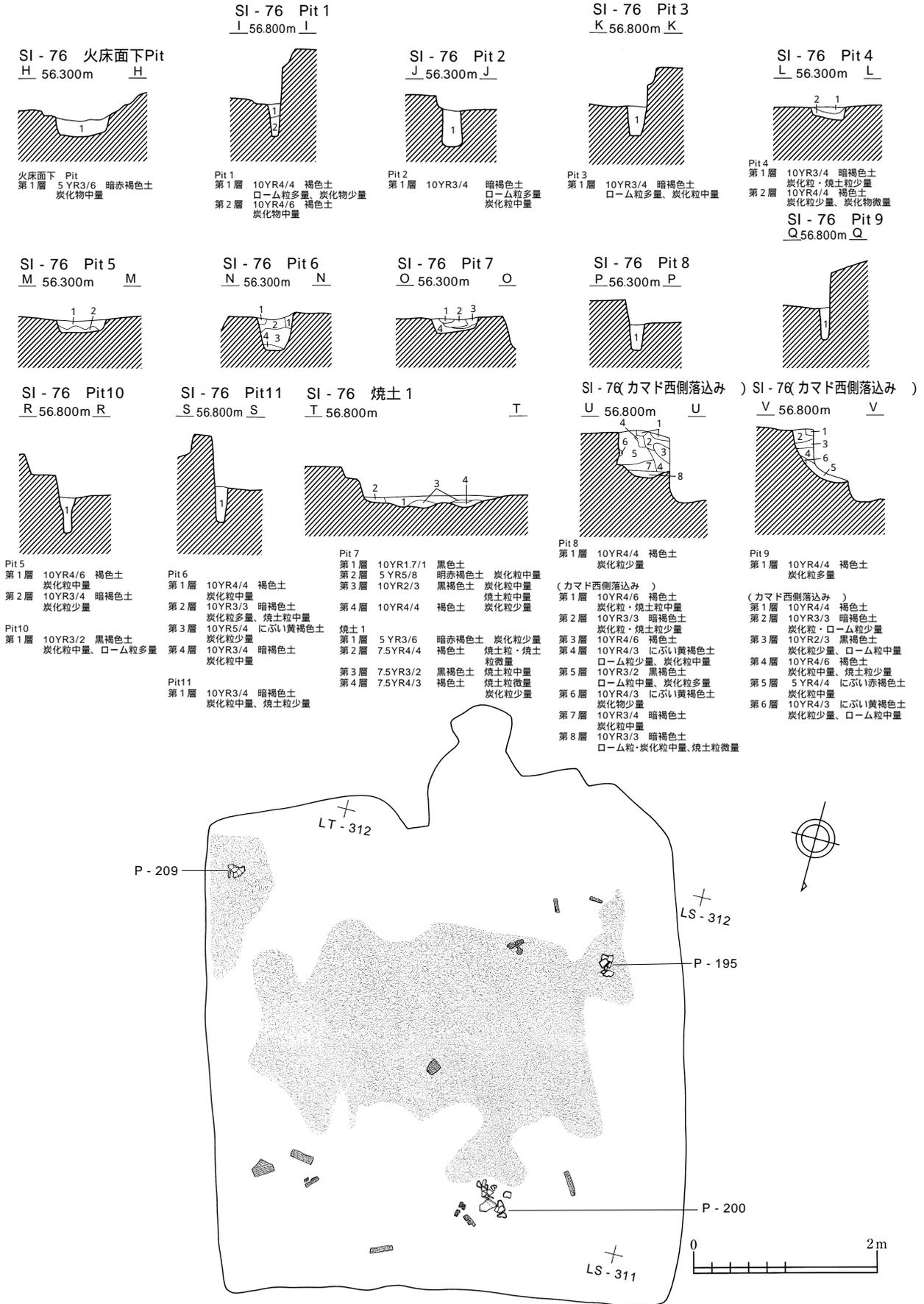


SI - 76 SK - 4
G 56.800m

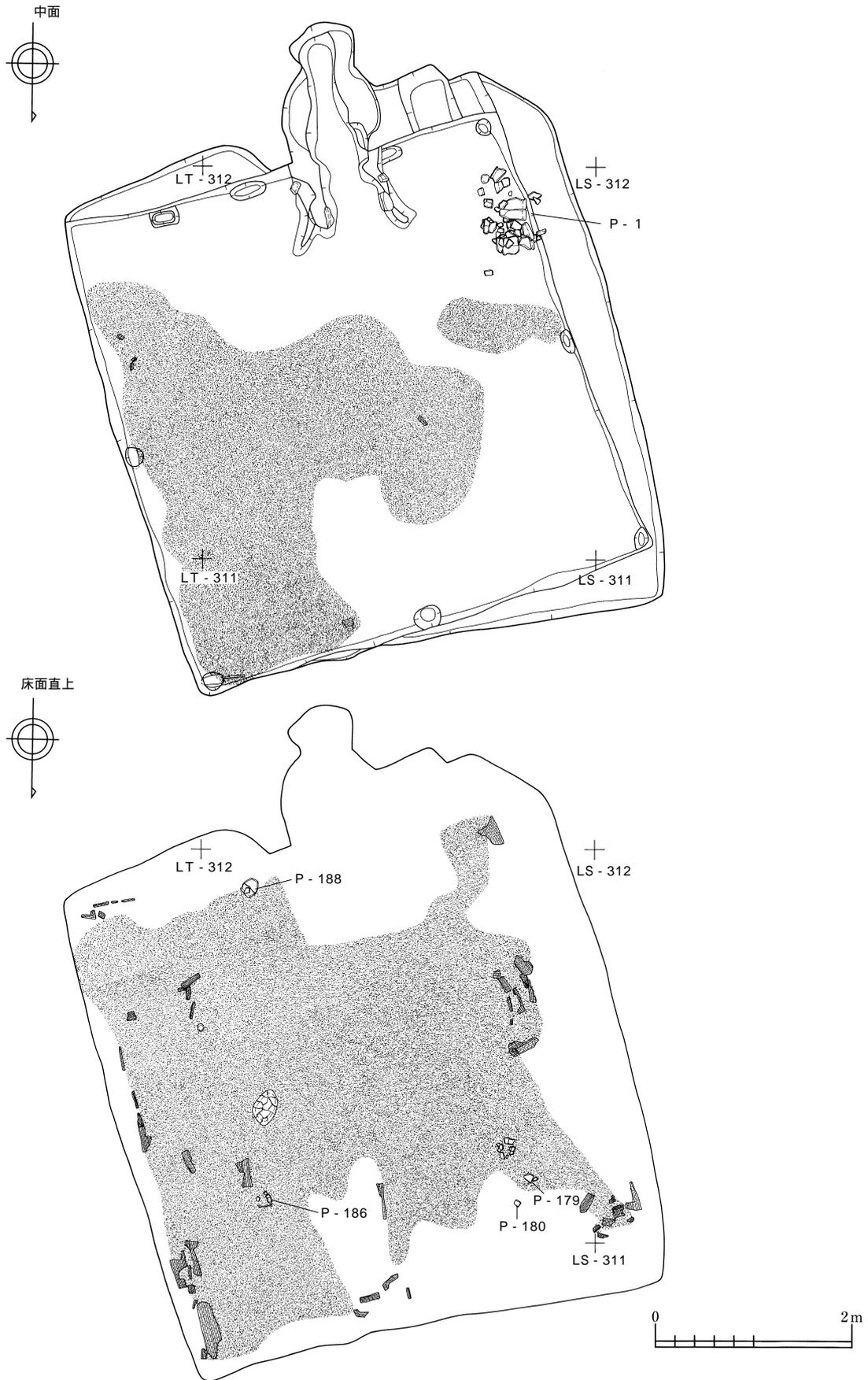


- SK - 4
- | |
|------------------------------------|
| 第1層 7.5YR3/4 暗褐色土 ローム粒・炭化粒中量、焼土粒多量 |
| 第2層 5 YR3/4 暗赤褐色土 炭化粒中量 |
| 第3層 5 YR4/8 赤褐色土 炭化粒中量 |
| 第4層 10YR4/6 褐色土 |
- 0 2m

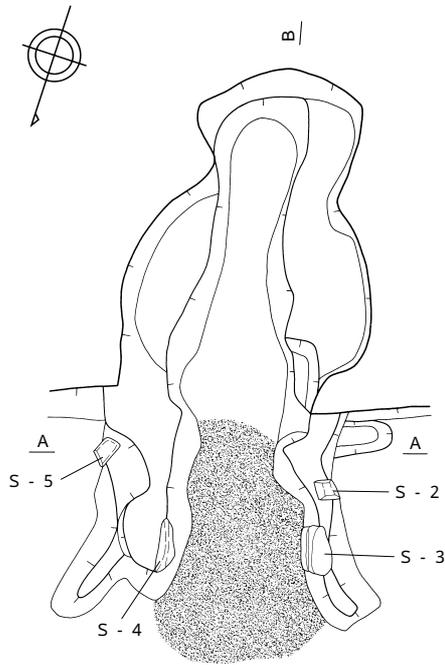
第192図 SI - 76



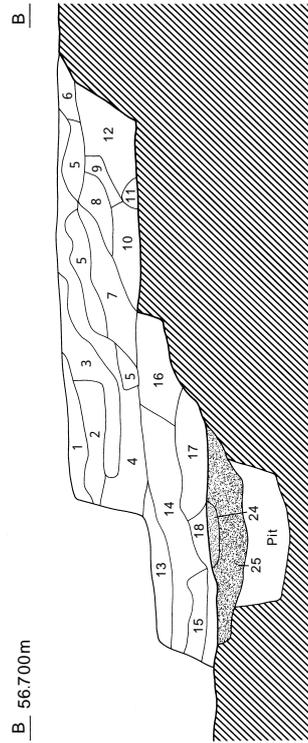
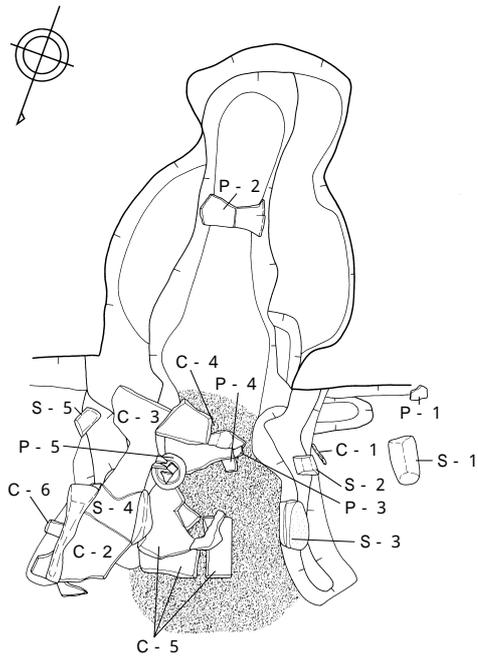
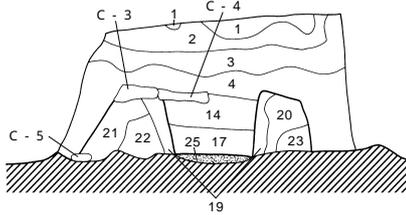
第193図 SI - 76



第194図 SI - 76



A 56.700m



B 56.700m

- SI - 76 カマド
- | | | | |
|------|----------|---------|----------------------|
| 第1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ローム粒多量、焼土粒微量 |
| 第2層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 炭化粒中量、焼土粒少量 |
| 第3層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 炭化粒・焼土粒少量 |
| 第4層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | ローム粒・焼土粒・炭化粒中量 |
| 第5層 | 7.5YR4/6 | 褐色土 | 炭化粒少量、焼土粒中量 |
| 第6層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | パミス少量、焼土粒中量 |
| 第7層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | ローム粒多量、炭化粒中量 |
| 第8層 | 5YR4/4 | にぶい赤褐色土 | ローム粒少量、炭化物中量 |
| 第9層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 炭化粒中量 |
| 第10層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ローム粒中量、炭化粒・焼土粒少量 |
| 第11層 | 10YR4/6 | 褐色土 | ローム粒中量、炭化粒少量 |
| 第12層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | ローム粒中量、炭化粒・焼土粒微量 |
| 第13層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 炭化粒多量、焼土粒中量、焼土ブロック微量 |
| 第14層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 炭化粒・焼土粒多量 |
| 第15層 | 5YR4/8 | 赤褐色土 | |
| 第16層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 炭化粒・焼土粒中量 |
| 第17層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 炭化粒中量 |
| 第18層 | 5YR3/2 | 暗赤褐色土 | 炭化粒中量 |
| 第19層 | 5YR3/4 | 暗赤褐色土 | 焼土粒・焼土ブロック中量 |
| 第20層 | 5YR4/8 | 赤褐色土 | |
| 第21層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 炭化粒少量、焼土粒中量 |
| 第22層 | 7.5YR4/4 | 褐色土 | 焼土粒・焼土ブロック粒中量 |
| 第23層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 炭化粒中量、焼土粒少量 |
| 第24層 | 7.5YR4/6 | 褐色土 | |
| 第25層 | 5YR3/6 | 暗赤褐色土 | |



LS-312

第195図 SI - 76

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。被熱により、広い範囲で赤化している。その直上において、焼け落ちた上屋の部材と思われる板状の炭化材や、粉状の炭化物を床面の広い範囲にわたって検出した。掘り方を有し、炭化物を含む第17・18層を充填し、床面としている。

[壁 溝] なし。

[ピット] 竪穴内より13基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 23×14×35cm、Pit 2 = 19×18×42cm、Pit 3 = 27×22×33cm、Pit 4 = 40×39×15cm、Pit 5 = 56×41×14cm、Pit 6 = 40×23×42cm、Pit 7 = 50×36×15cm、Pit 8 = 20×17×29cm、Pit 9 = 25×11×40cm、Pit10 = 30×17×40cm、Pit11 = 21×14cm、Pit12 = 41×17×21cm、Pit13 = 17×15cmを測る。主柱穴として機能していたものはないと考えられるが、Pit 1、2、3、8、9、10、11、12、13は壁柱穴と考えられる。

[カマド] 南壁3(62:38)の位置から1基検出した。構造は、半地下式で、袖部幅130cm、煙道長140cmを測る。主軸はN-168°-Eである。袖は粘土によって構築されており、芯材として石や羽口が装填されている。燃烧部は残存状況が比較的良好であり、天井部を構成していたと考えられる板状の粘土が袖の上部において出土している。これらは、焼成された粘土板ではなく、比較的軟質を呈するものであったため、取り上げの際、崩落している。火床面下部において、72×58×44cmの楕円形を呈するピットが存在し、炭化物を含む暗赤褐色土が充填されている。煙道部は、火床面から20°の角度で立ち上がり、住居の壁によって急角度に立ち上がった後、平坦となり、煙出部に至る。煙道部に堆積している5、9、11層は、煙道の天井を構成していた壁の崩落土と考えられる。自然堆積を呈する。

また、南壁4(86:14)の位置において、カマドの煙道状の落ち込みを検出した。底面が42×29cmの範囲でやや赤化しているが、火床面は確認できず、カマドの作り変えにより、廃絶したものであるかどうかは不明である。

[その他の付属施設] 土坑を4基検出した。そのうち、SK-1は、床面北壁付近より検出したものであり、SK-2~4は貼り床下において検出したものである。規模は、SK-1 = 121×88×23cm、SK-2 = 159×69×22cm、SK-3 = 121×70×14cm、SK-4 = 97×79×13cmを測る。SK-1は、焼土や炭化物を主体とする土層で、3層において樹皮状の炭化物が出土している。

[堆積土] 掘り方を含めて18層に分層した。上層から中層においては黒褐色、暗褐色を主体とする土層、中層から下層においては焼土、炭化物を多量に含んだ暗褐色、黄褐色を主体とする土層で、床面直上においては焼け落ちた上屋と思われる炭化材や焼土が散在する。上層の、暗褐色を呈する3、4層においては、鍛冶操業によって排出されたと考えられる鉄滓がやや多量に出土している。本遺構から出土した鍛冶関連遺物は、炉壁(溶解物を含む)86g、椀形鍛冶滓8,299g、椀形鍛冶滓(含鉄)652g、含鉄鉄滓148g、鉄器4g、総重量9,189gである。なお、椀形鍛冶滓8,299gの中には、直径30cm程度と推定できる特大サイズの椀形鍛冶滓4,715gが含まれている。これらは近隣に存在した鍛冶炉における廃棄物が、焼土、炭化物等と共に、廃絶した住居の落ち込みに廃棄されたものと認められることから、本遺構の堆積は、人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 77 (第196～198図)

[位置] グリッドLV・LW - 310・311で検出した。

[重複] S I - 78と重複している。新旧関係については、本遺構がS I - 78の堆積土を切っており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 長方形を呈し、535×326×100cmを測る。床面積は17.683㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁56cm、東壁26cm、南壁40cm、西壁100cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。

[床] 西壁側の部分で掘り方を持ち、大谷火山灰主体の地山土を充填している。地山土のみの床面との境界については段をなしている。床面は起伏があり、堅緻である。

[壁溝] 住居北壁、東壁ならびに南壁の一部で断続するが、ほぼ全周する形で検出した。深さは8cmを測る。壁溝の欠落部分には壁柱穴があり、板壁ならびに草壁の使い分けが考えられる。

[ピット] 住居内から7基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 32×22×50cm、Pit 2 = 43×22×41cm、Pit 3 = 35×23×31cm、Pit 4 = 59×27×31cm、Pit 5 = 24×21×19cm、Pit 6 = 55×33×34cm、Pit 7 = 23×20×15cmを測る。主柱穴として機能したと考えられるピットは、Pit 1～4である。

[カマド] 住居南壁側から2基検出した。南壁3(52:48)と南壁4(76:24)の位置から検出している。新旧関係は、南壁4側の左袖が残存しているが、燃烧部の上下構造が残存していない。そのため、住居廃絶時点で残存していたのは南壁3のみであると考えられる。南壁3のカマドの構造は、半地下式で、袖部幅105cm、煙道長145cmを測る。主軸はN - 152° - Eである。燃烧部袖は、転用羽口を芯材とし、粘土を用いて構築している。また、燃烧部天井は第8、17、18層が相当するが、第17層中から羽口が出土しており、天井についても芯材として転用羽口を利用したものと考えられる。煙道部は、軸線が途中で東寄りに20°カーブしている。煙道部天井は、第1層が相当し、月見野火山灰層の地山土を貼り付けて構築している。煙道は、住居壁際から28°の角度で立ち上がり、カマド軸線のカーブ地点で角度を7°に変え立ち上がる。煙出開口部には大谷火山灰層の地山土を貼り付けている。南壁4側のカマドの構造は、半地下式で、煙道長は112cmを測る。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で19°に角度を変え、煙出部へ向かって立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 9層に分層した。住居廃絶後の堆積土は第1～8層が相当し、東壁側の一部で壁の崩落が生じており、概ね自然堆積状況を呈する。

(木村)

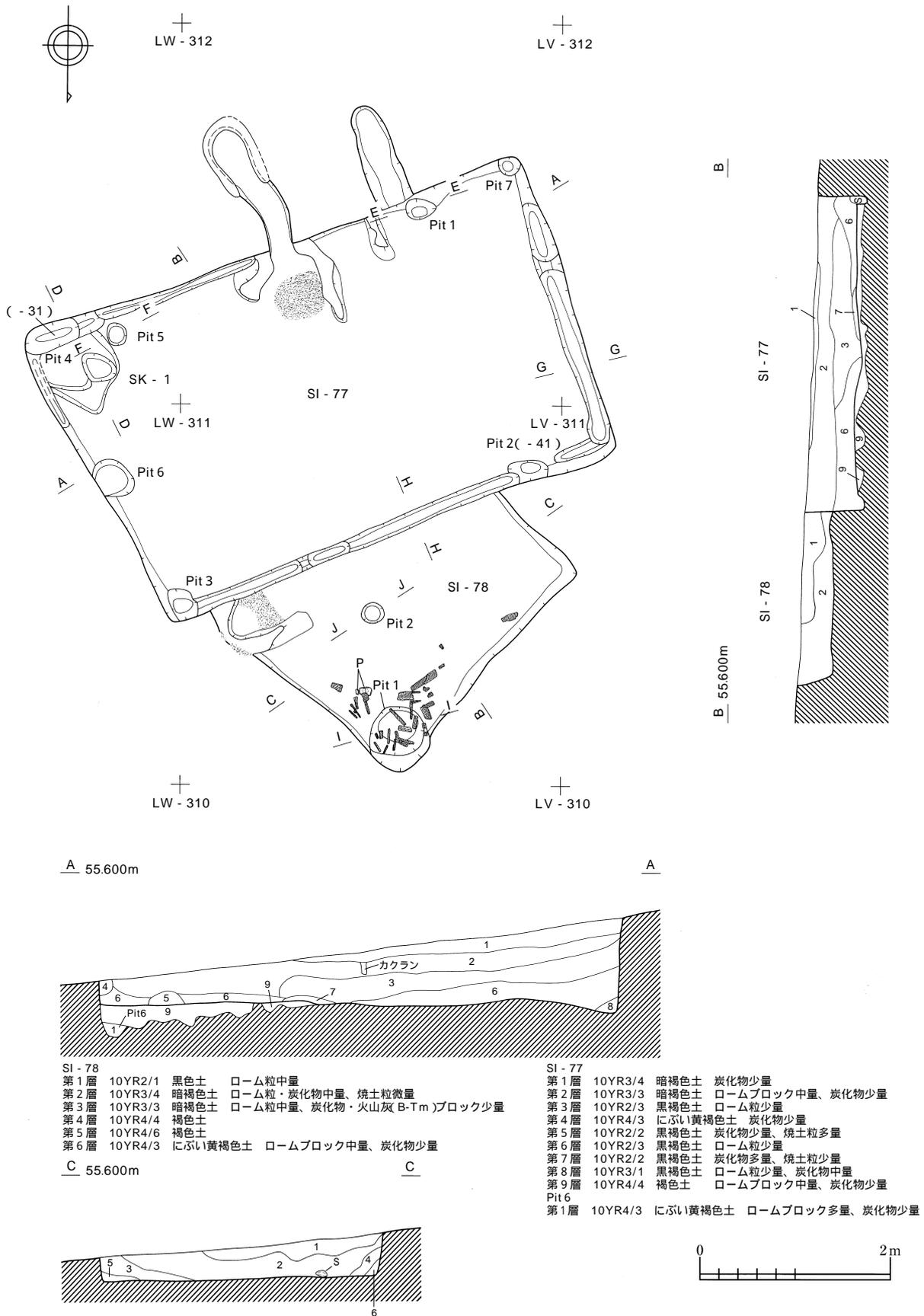
S I - 78 (第196、198図)

[位置] グリッドLV - 310で検出した。

[重複] S I - 77と重複している。本遺構の堆積土がS I - 77に切られており、本遺構の方が古い。

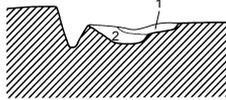
[平面形・規模] 切りあいのため、南東壁の情報は欠落しているが、残存している部分から方形を呈したものと考えられる。294×(180)×52cmを測る。床面積は(5.515)㎡を測る。

[壁] 切りあいのため、南東壁は残存していない。残存部分の壁高については、北東壁26cm、北西壁35cm、南西壁44cmを測る。断面形はaで、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。壁面は、やや脆弱で



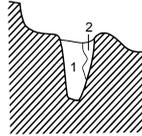
第196図 SI - 77 ・ 78

SI - 77 SK - 1
D 54.700m D



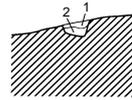
SK - 1
第1層 10YR4/4 褐色土 炭化物中量
第2層 10YR4/6 褐色土 炭化物少量

SI - 77 Pit 1
E 54.700m E



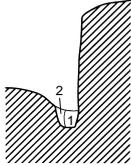
Pit 1
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒多量 炭化物少量
第2層 10YR4/4 炭化物少量

SI - 77 Pit 5
F 54.700m F



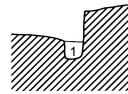
Pit 5
第1層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物中量
第2層 10YR4/4 褐色土 炭化物少量

SI - 77 壁溝 1
G 55.300m G

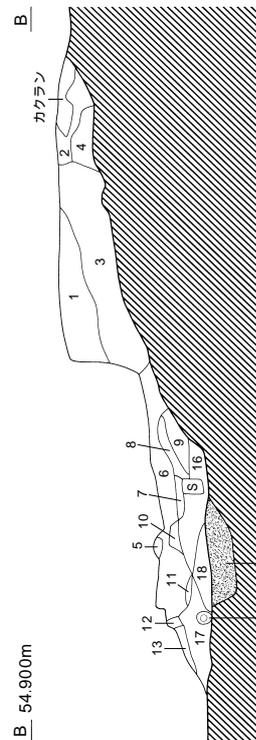
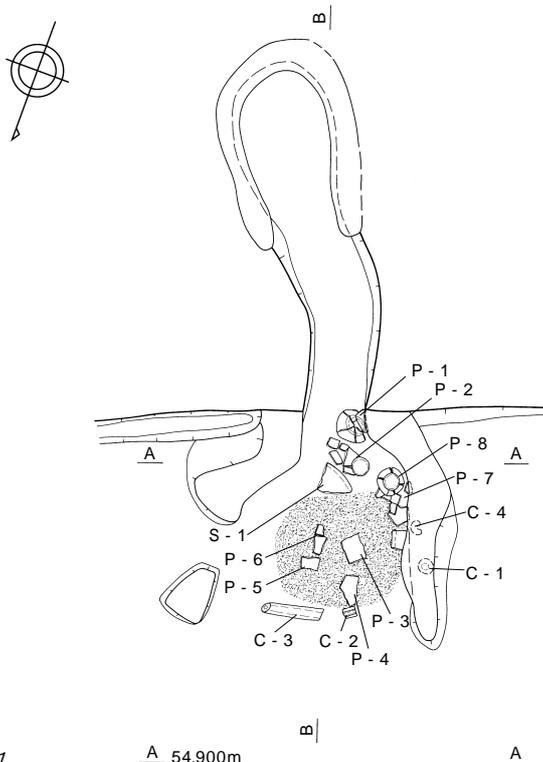
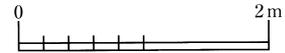


壁溝 1
第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒多量、炭化物少量
第2層 10YR4/6 褐色土 炭化物少量

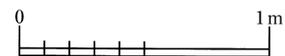
SI - 77 壁溝 2
H 54.700m H



壁溝 2
第1層 10YR4/6 褐色土 ローム粒少量、炭化物微量

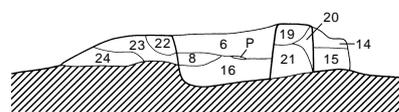


第11層 10YR3/4 暗褐色土 焼土ブロック多量
第12層 7.5YR3/2 黒褐色土 炭化粒少量、焼土粒多量
第13層 10YR4/4 褐色土 炭化粒・焼土粒少量
第14層 住居 (SI - 77) 覆土 6層
第15層 住居 (SI - 77) 覆土 7層
第16層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物多量
第17層 7.5YR4/3 褐色土 炭化粒少量、焼土粒中量
第18層 7.5YR4/4 褐色土 炭化物微量
第19層 5 YR4/8 赤褐色土 パミス少量
第20層 10YR4/6 褐色土 パミス中量
第21層 10YR3/4 暗褐色土 炭化粒・焼土粒少量
第22層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化粒少量、焼土粒微量
第23層 10YR4/4 褐色土 炭化粒少量、焼土粒多量
第24層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒少量、炭化物中量
第25層 5 YR3/6 暗赤褐色土 炭化粒少量



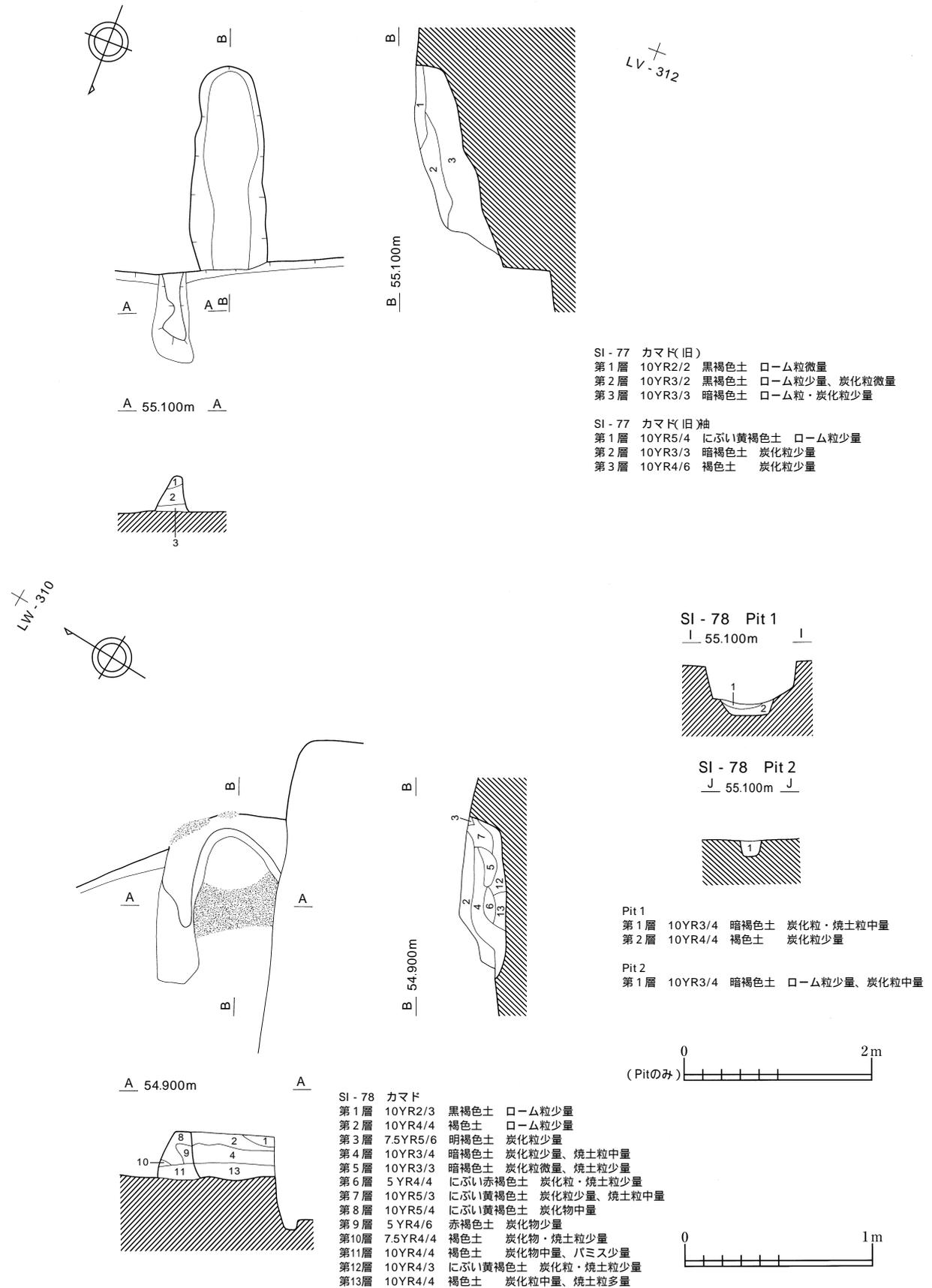
LW - 311

A 54.900m A



SI-77 カマド (新)
第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化物少量
第2層 10YR4/4 褐色土 ロームブロック・炭化粒・焼土粒少量
第3層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック・炭化粒・焼土粒少量
第4層 7.5YR3/2 黒褐色土 炭化粒中量、焼土粒少量
第5層 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒多量
第6層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒少量、炭化物中量
第7層 7.5YR3/4 暗褐色土 焼土粒多量
第8層 5 YR3/3 暗赤褐色土 炭化物少量
第9層 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒多量
第10層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物中量、パミス微量

第197図 SI - 77



第198図 SI - 77 ・ 78

ある。

[床] 月見野火山灰層の地山を床面としており、平坦である。床面はやや脆弱である。

[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から2基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 61 × 53 × 16cm、Pit 2 = 23 × 20 × 16cmを測る。主柱穴は、配置状況からPit 2が相当したと考えられる。

[カマド] 住居北東壁側から1基検出した。位置については、南東壁側が切られており残存部分からの推定値であるが、北東壁3(68:32)の位置から検出している。構造は、半地下式で、右袖部分がS I - 77に切られており、燃焼部残存長で(68)cm、煙道長25cmを測る。主軸はN - 42° - Eである。燃焼部の構築は、粘土によるものである。土層堆積において燃焼部天井は第6、13層が相当し、崩落した堆積状況を呈する。また、火床面は存在しない。煙道部天井は第3、7層が相当し、煙出部へ崩落した堆積状況を呈する。煙道は、住居壁際から2°の角度で煙出奥壁まで立ち上がり、外傾しながら立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 6層に分層した。住居壁際の第4～6層については、壁面の自然崩落による堆積で、第3層中には、B - T m火山灰がブロック状に堆積する。住居中央部で床面直上に堆積する第2層中には、炭化材とともに、礫や土器等が出土しており、人為的廃棄状況を呈するものと考えられる。

(木村)

S I - 79 (第199～202図)

[位置] グリッドL Z・MA - 311～313で検出した。

[重複] なし。

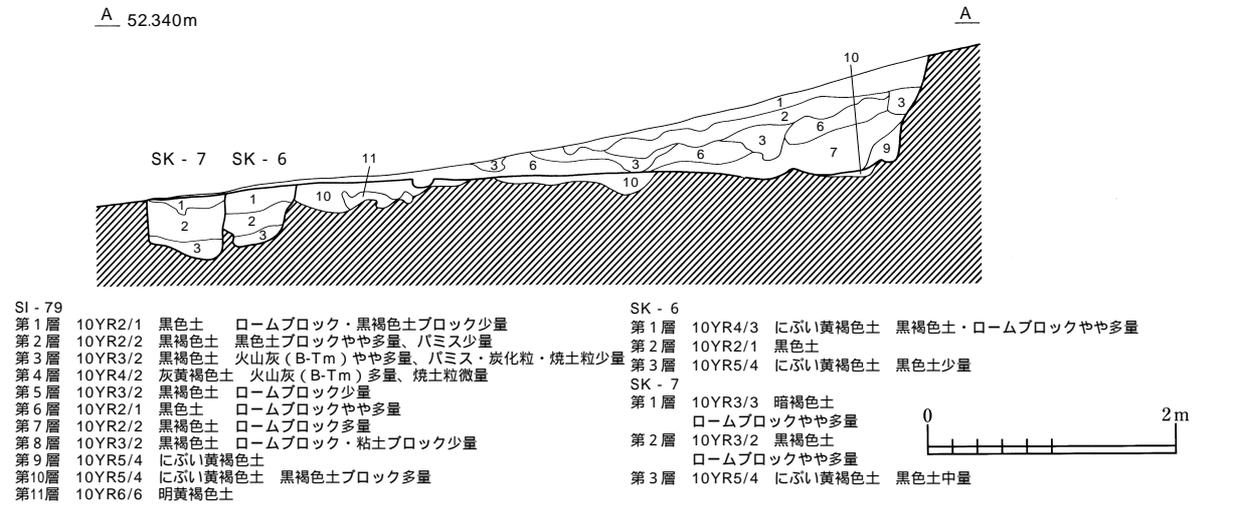
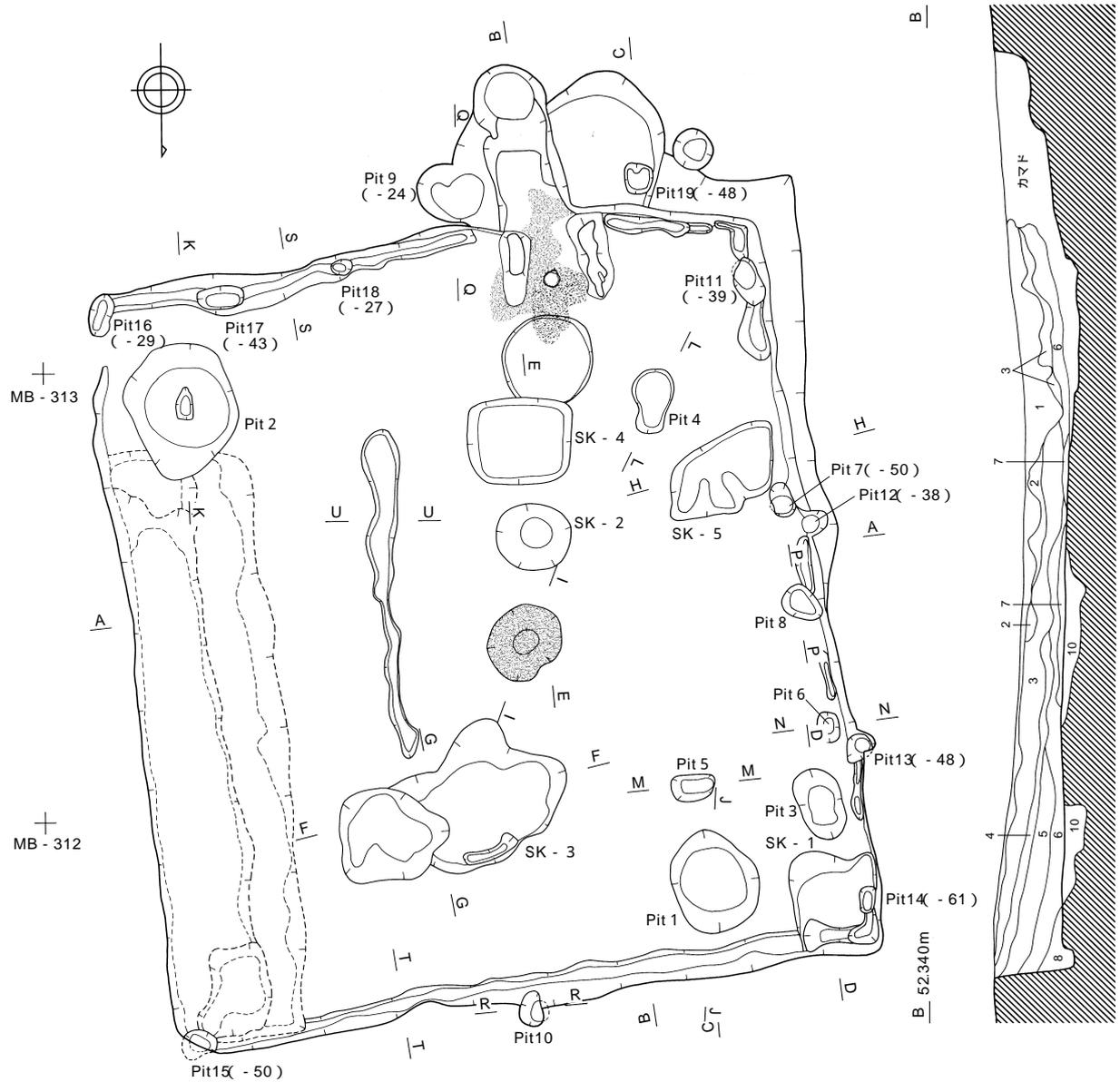
[平面形・規模] 方形を呈し、700 × 625 × 114cmを測る。床面積は43.386m²を測る。

[壁] 住居東壁部分は、削平のため残存していない。壁高は、北壁61cm、南壁58cm、西壁85cmを測る。壁面は堅緻である。

[床] 住居北壁側から東壁寄りの部分から掘り方を検出し、黒褐色土と月見野火山灰層の地山土の混合土が充填されている。起伏があり、やや脆弱である。それ以外の部分については、大谷火山灰層の地山を床面としている。貼り床部分と同様起伏があり、堅緻である。

[壁溝] 住居東壁以外から検出した。深さは平均17cmを測る。また、住居中央部で住居軸に平行する溝を1条検出した。深さは平均7cmを測る。間仕切り溝として機能したか、それ以外の施設に関連するものなのか不明である。

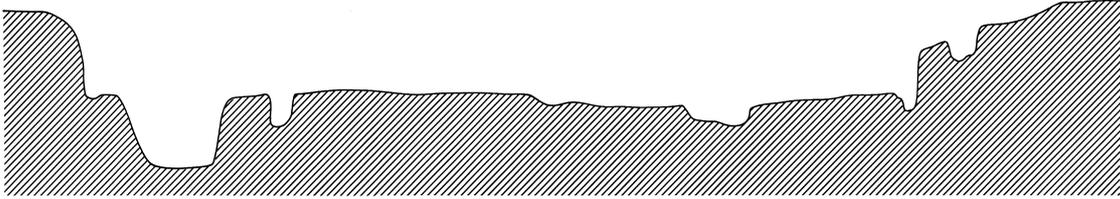
[ピット] 住居内外から19基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 92 × 78 × 57cm、Pit 2 = 120 × 100 × 68cm、Pit 3 = 65 × 40 × 14cm、Pit 4 = 57 × 38 × 10cm、Pit 5 = 40 × 23 × 28cm、Pit 6 = 27 × 20 × 28cm、Pit 7 = 31 × 18 × 50cm、Pit 8 = 38 × 29 × 8cm、Pit 9 = 68 × 50 × 24cm、Pit 10 = 32 × 20 × 58cm、Pit 11 = 35 × 23 × 39cm、Pit 12 = 25 × 23 × 38cm、Pit 13 = 25 × 21 × 48cm、Pit 14 = 23 × 13 × 61cm、Pit 15 = 32 × 25 × 50cm、Pit 16 = 38 × 20 × 29cm、Pit 17 = 40 × 20 × 43cm、Pit 18 = 19 × 8 × 27cm、Pit 19 = 27 × 24 × 48cmを測る。主柱穴と考えられるピットは、Pit 1、2、5で、北東側ならびに南西側の部分から主柱穴として機能したと考えられるピットは検出していない。また、壁柱穴はPit 6、7、8、10、11、12、13、14、15、16、17、18で、柱間が一定でない。



第199図 SI - 79

C 52.340m

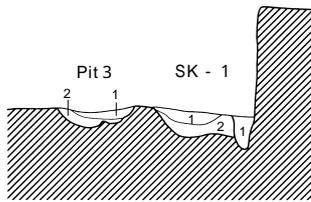
C



SI - 79 SK - 1、Pit 3、壁溝

D 52.500m

D

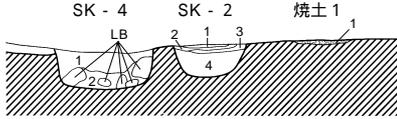


- SK - 1
第1層 10YR3/1 黒褐色土 炭化粒・パミス少量
第2層 10YR3/2 黒褐色土 ロームブロック多量
- Pit 3
第1層 10YR3/1 黒褐色土 炭化粒少量
第2層 10YR3/2 黒褐色土 ロームブロックやや多量
- 壁溝
第1層 10YR3/1 黒褐色土

SI - 79 SK - 2・4、焼土1

E 51.800m

E



- 焼土1
第1層 5YR4/4 にぶい赤褐色土 炭化粒やや多量
- SK - 4
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック少量
第2層 10YR2/1 黒色土 ロームブロック多量

SK - 2

- 第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土粒・焼土ブロックやや多量
第2層 10YR2/1 黒色土
第3層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土ブロック少量
第4層 10YR2/1 黒色土 粘土ブロックやや多量 焼土粒少量

SI - 79 SK - 3

F 51.800m

F

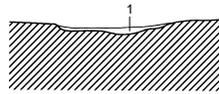


- SK - 3
第1層 10YR1.7/1 黒色土 ロームブロック少量

SI - 79 SK - 3

G 51.800m

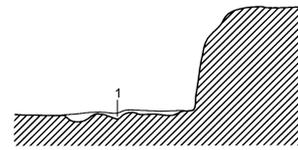
G



SI - 79 SK - 5

H 52.500m

H

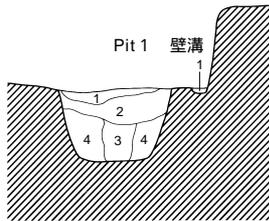


- SK - 5
第1層 10YR3/2 黒褐色土 灰多量、炭化物少量

SI - 79 Pit 1、壁溝

J 52.500m

J

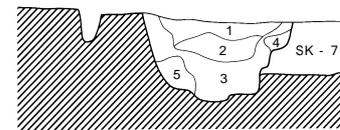


- Pit 1
第1層 10YR3/1 黒褐色土 ロームブロック少量
第2層 10YR2/1 黒色土 ロームブロック多量、焼土ブロック少量
第3層 10YR3/1 黒褐色土 ロームブロックやや多量
第4層 10YR1.7/1 黒色土 ロームブロック少量
- 壁溝
第1層 10YR3/2 黒褐色土

SI - 79 Pit 2

K 51.800m

K



- Pit 2
第1層 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒微量
第2層 10YR1.7/1 黒色土 ロームブロックやや多量
第3層 10YR4/3 にぶい黄褐色土
第4層 10YR2/1 黒色土 ロームブロックやや多量
第5層 10YR3/2 黒褐色土 ロームブロック多量、焼土粒微量

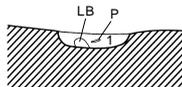
SI - 79 Pit 6

N 52.500m N

SI - 79 Pit 4

L 51.800m

L

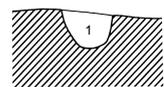


- Pit 4
第1層 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、焼土粒・炭化粒少量

SI - 79 Pit 5

M 51.800m

M



- Pit 5
第1層 10YR2/1 黒色土 ロームブロック少量

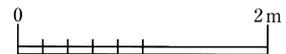
SI - 79 Pit 6

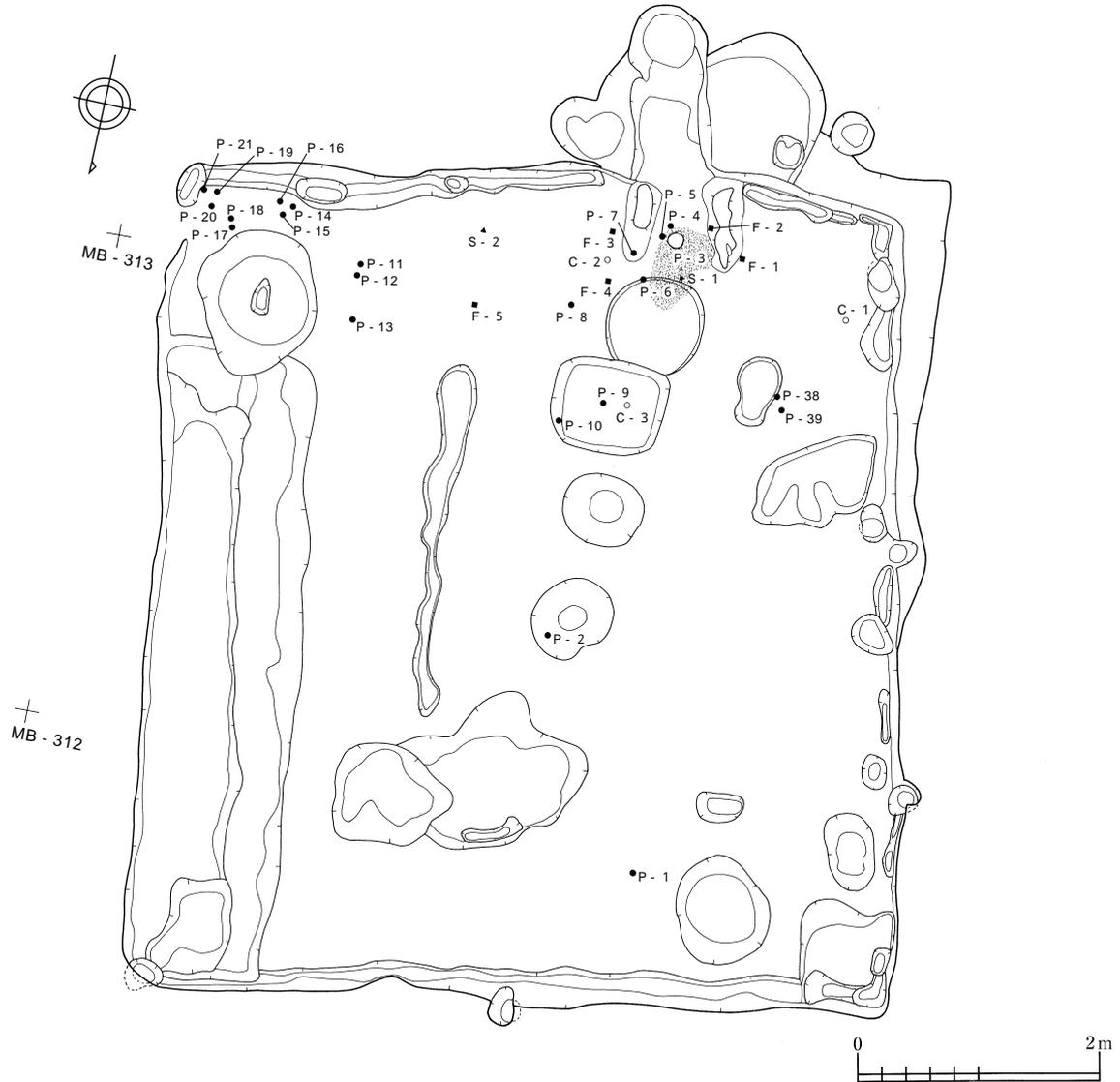
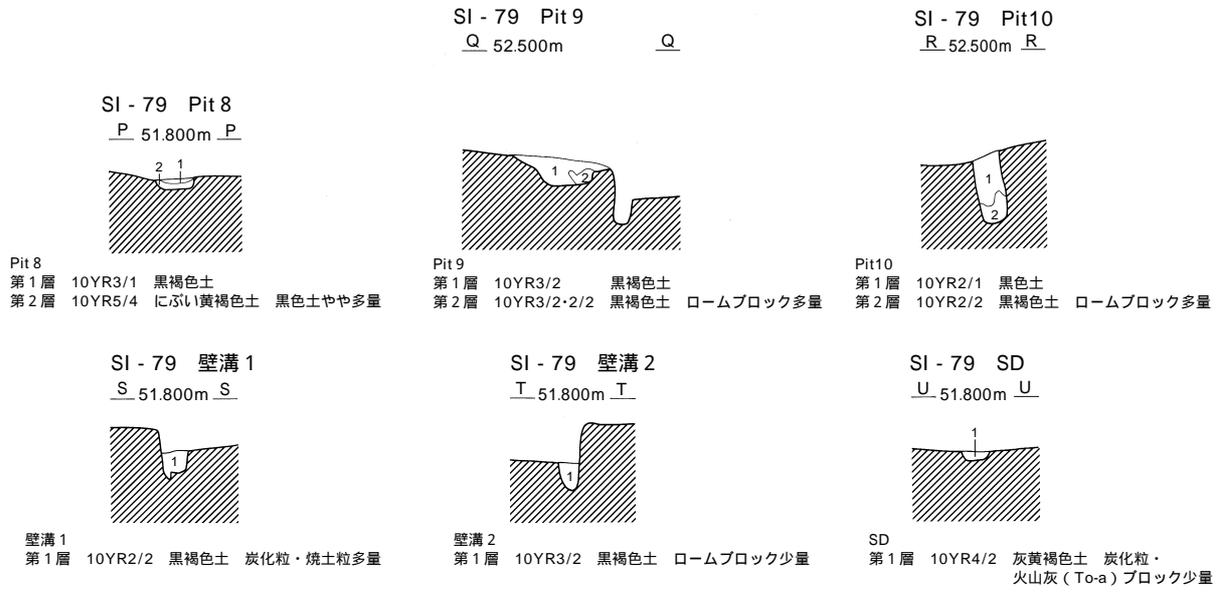
N 52.500m

N

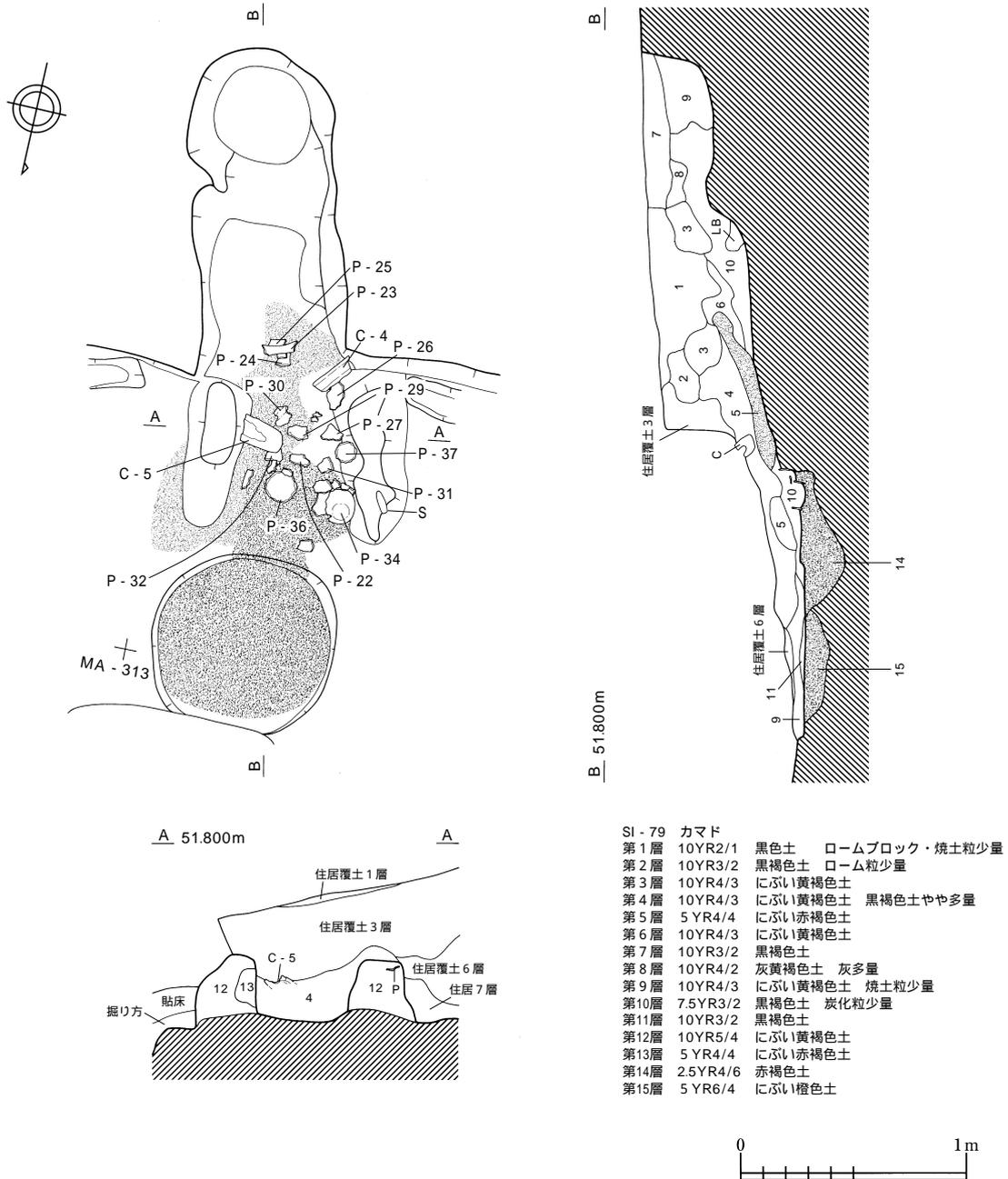


- Pit 6
第1層 10YR3/2 黒褐色土





第201図 SI - 79



第202図 SI - 79

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(66:34)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅99cm、煙道長145cmを測る。主軸はN - 165° - Eである。燃烧部袖は、粘土により構築されており、芯材は出土していない。燃烧部天井は、第4、5層が相当し、羽口、自然礫が包含していることから芯材として利用された可能性が考えられる。支脚は、土師器小甕胴部が設置されている。煙道部天井は、第3層が相当し、崩落した堆積状況を呈する。煙道は、住居壁際から11°の角度で立ち上がり、全煙道長の1/2の位置で45°の角度で外傾しながら立ち上がり、柱穴状に掘り込まれた煙出

部へ向かう。煙出奥壁は、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。また、焚口前庭部にも火床面がある。

[その他の付属施設] 住居南壁側の延長線上に S B - 06 が位置する。桁行の軸線が本遺構と同様の軸線であるため、本遺構に帰属した可能性が考えられる。また、住居中央部から赤化面を 70×63cm の範囲で検出した。それ以外に掘り方部分を含めて住居内から土坑 7 基を検出した。S K - 1 は、住居北壁西隅から検出した。規模は 85×75×24cm を測る。S K - 2 は、住居中央よりやや南壁よりから検出した。規模は 66×50×26cm を測る。S K - 3 は、住居中央よりやや北壁よりから検出した。規模は 210×113×18cm を測る。S K - 4 は、S K - 2 より南壁寄りの部分から検出した。規模は 92×77×35cm を測る。S K - 5 は、西壁中央部よりやや南壁寄りの部分から検出した。規模は 121×66×6cm を測る。S K - 6、7 は、いずれも東壁側から検出した掘り方の溝状の土坑である。S K - 6 の規模は 520×(66)×48cm を測る。S K - 7 の規模は 530×62×48cm を測る。

[堆積土] 掘り方部分を含めて 11 層に分層した。住居廃絶後の堆積は第 1～9 層で、全般的にロームブロック等が混入しており人為的堆積状況を呈する。第 3、4 層中に B - T m 火山灰がブロック状に多量混入している。

(木 村)

S I - 81 (第 203～205 図)

[位 置] グリッド L L・L M・L N - 312・313 で検出した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、676×612×84cm を測る。床面積は 40.44㎡ を測る。また西壁側は 470×55cm の張り出しが見られる。土層堆積上で住居廃絶時に張り出し部分は、他の壁の崩落土と同様の土層が堆積しており、張り出し部分は拡張部分に相当するものと考えられる。

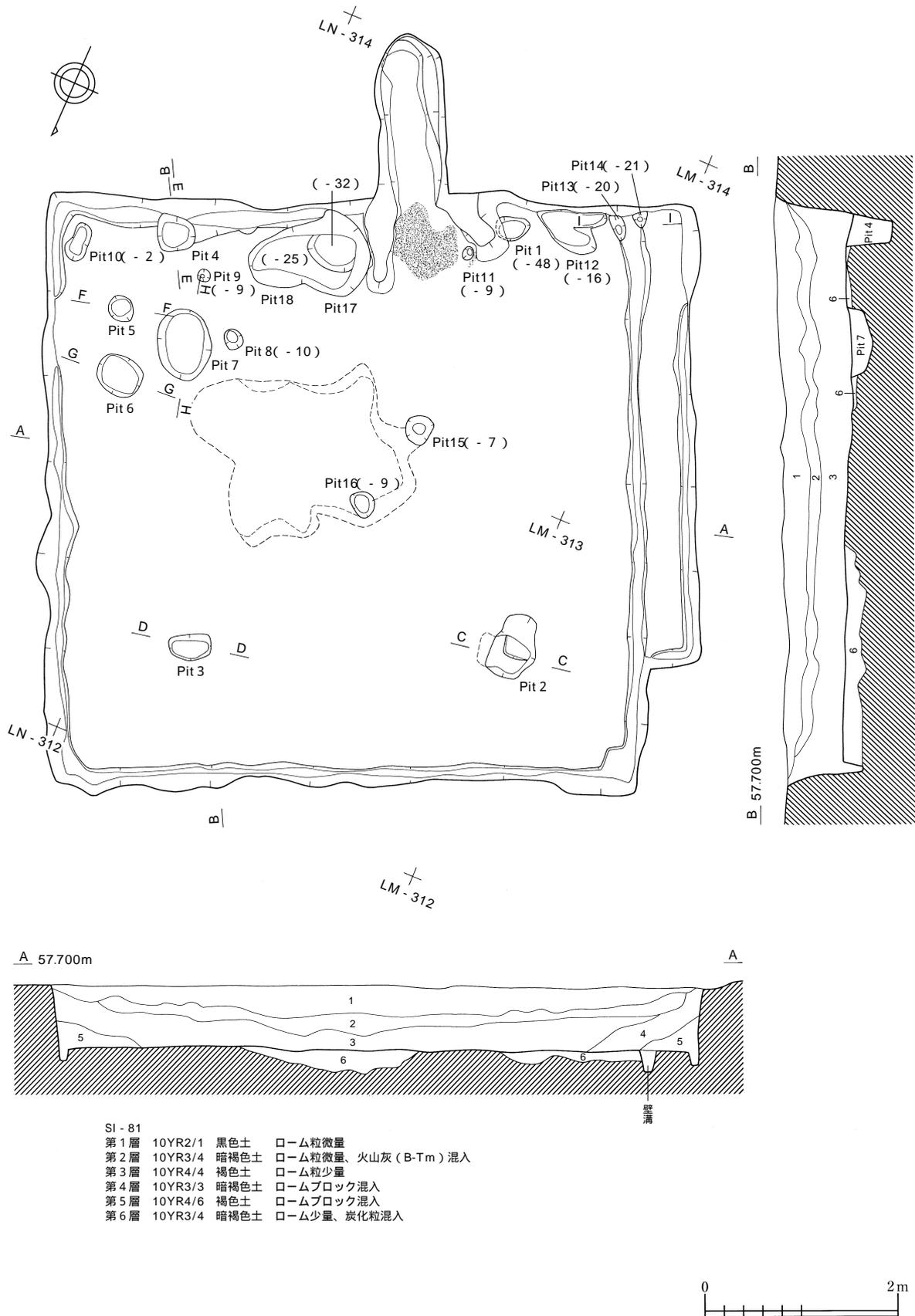
[壁] 壁高は、北壁 57cm、東壁 67cm、南壁 70cm、西壁 66cm を測る。断面形は a で、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 住居中央ならびに住居北壁～西壁側にかけて掘り方を持ち、暗褐色土が充填されている。それ以外の部分については、大谷火山灰層の地山を床面としている。床面は、やや起伏があり、貼り床部分は、しまりはあるがやや脆弱で、地山部分は堅緻である。

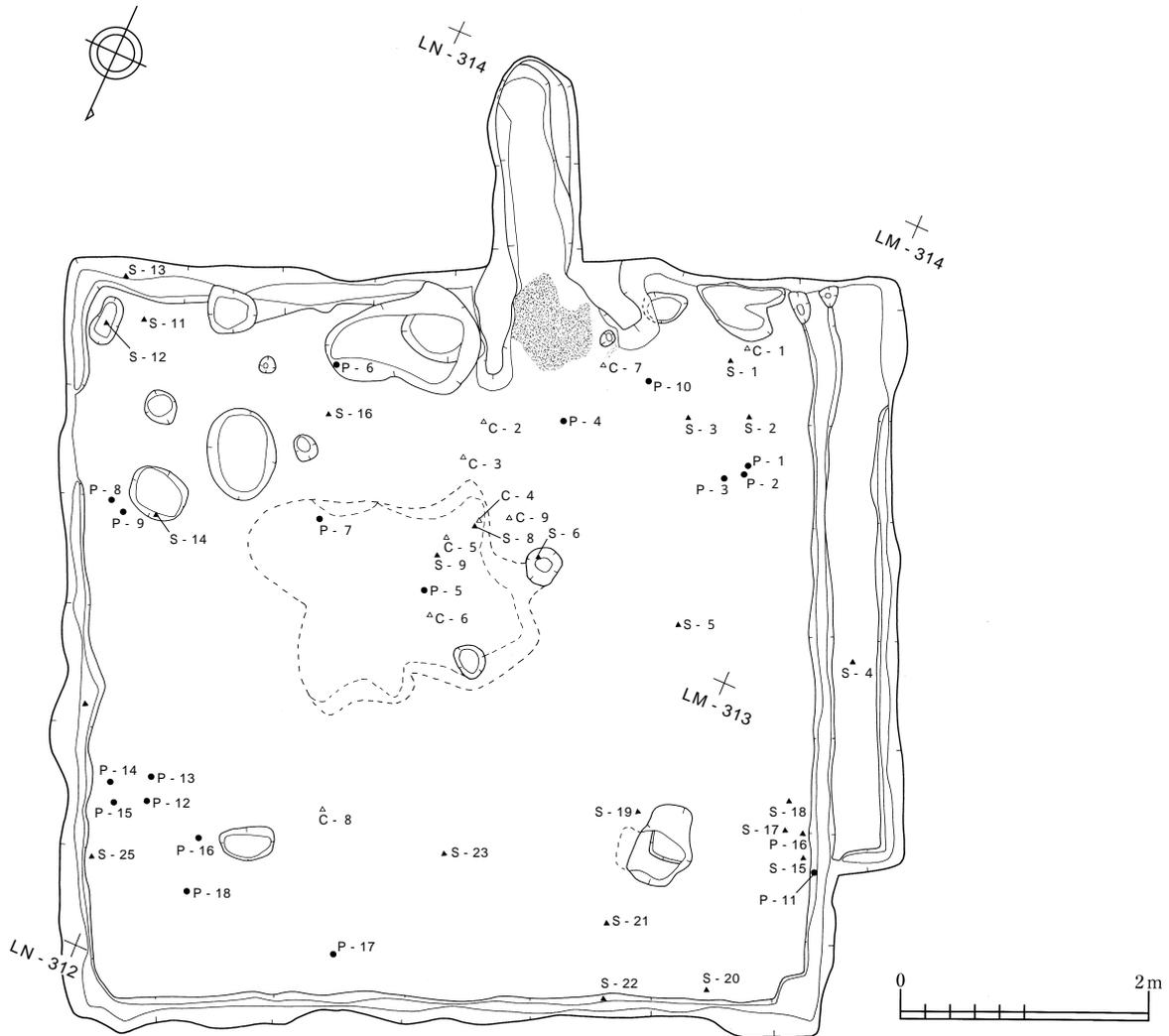
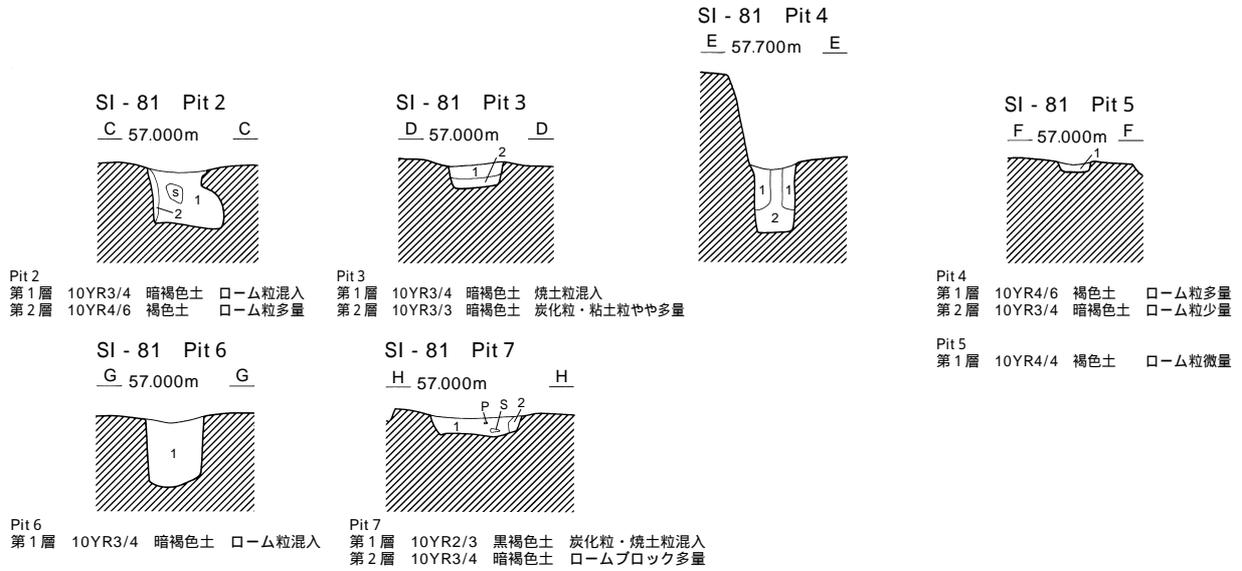
[壁 溝] 住居南壁側のカマド設置箇所が一部断続しているが、ほぼ全周する形で検出した。深さは平均 18cm を測る。また、張り出し部分からも壁溝を検出しており、深さは 13cm を測る。

[ピット] 掘り方部分を含めて住居内から 18 基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 35×26×48cm、Pit 2 = 69×46×43cm、Pit 3 = 48×27×18cm、Pit 4 = 45×40×56cm、Pit 5 = 29×25×8cm、Pit 6 = 47×40×54cm、Pit 7 = 75×55×15cm、Pit 8 = 21×17×10cm、Pit 9 = 13×13×9cm、Pit 10 = 40×22×2cm、Pit 11 = 14×11×9cm、Pit 12 = 72×35×16cm、Pit 13 = 26×13×20cm、Pit 14 = 15×13×21cm、Pit 15 = 30×30×7cm、Pit 16 = 28×22×9cm、Pit 17 = 125×90×32cm、Pit 18 = (70)×60×25cm を測る。このうち、主柱穴に相当すると考えられるピットは、Pit 1～4 である。

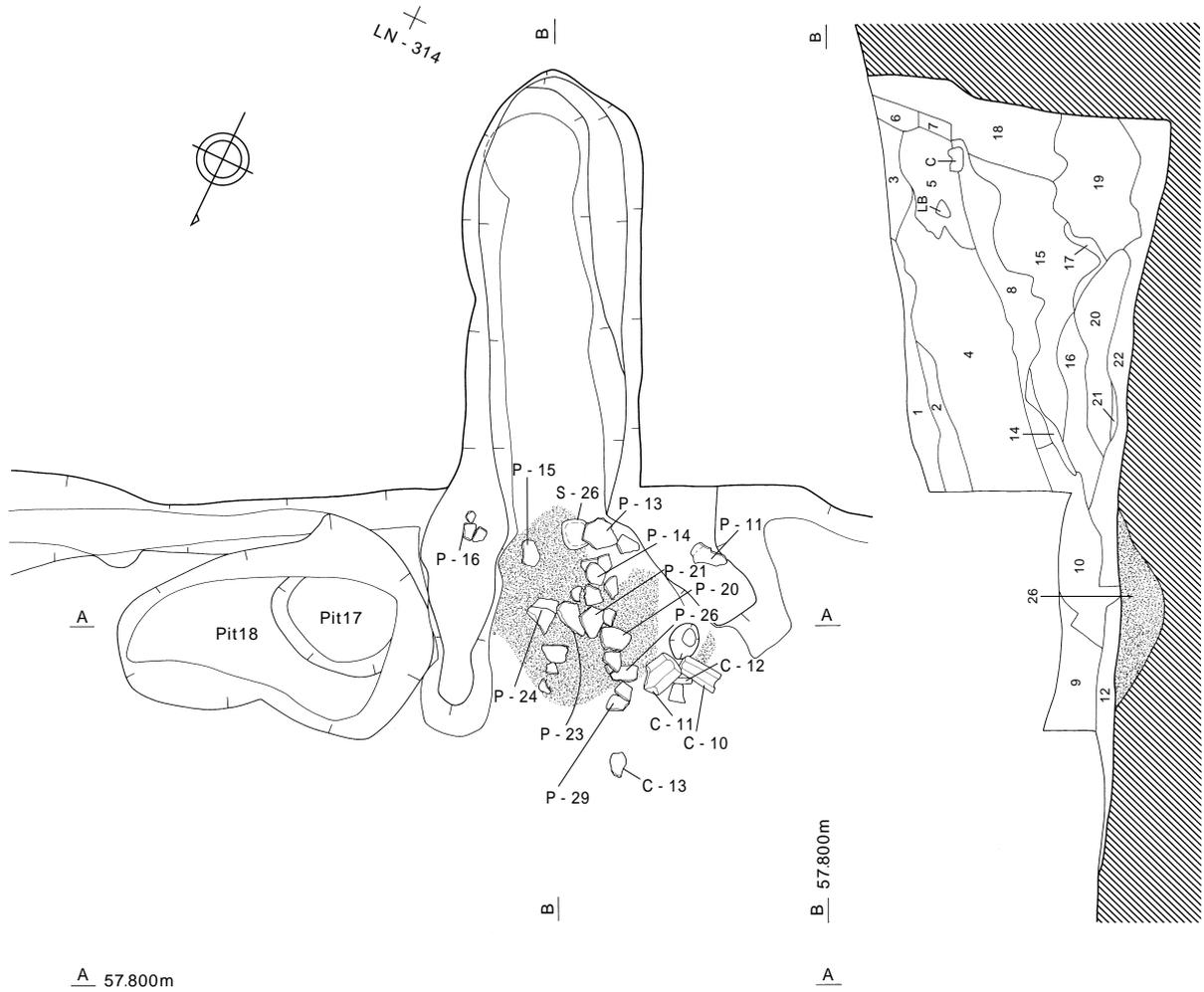
[カマド] 住居南壁側から 1 基検出した。南壁 3 (61:39) の位置から検出している。構造は、地下式で、袖部幅 122cm、煙道長 160cm を測る。主軸は N - 152° - E である。煙道部が土圧により崩落し、カマド右袖の一部が破壊されている状況で検出した。燃焼部の構築は、燃焼部から出土した遺物の



第203図 SI - 81

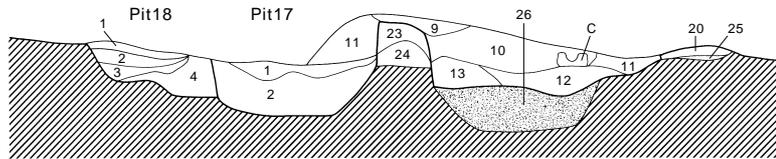


第204図 SI - 81



A 57.800m

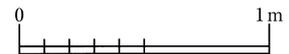
B 57.800m



- Pit 17**
 第1層 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒・焼土粒混入
 第2層 10YR4/4 褐色土 ローム粒・焼土粒混入
- Pit 18**
 第1層 10YR4/4 褐色土
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒少量
 第3層 10YR2/1 黒色土 炭化物多量
 第4層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒多量

- SI - 81 カマド**
 第1層 10YR2/2 黒褐色土
 第2層 10YR3/3 暗褐色土 火山灰(To-a)混入
 第3層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒混入
 第4層 10YR4/4 褐色土 焼土ブロック混入
 第5層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・焼土粒多量
 第6層 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒混入
 第7層 5 YR4/6 赤褐色土
 第8層 7.5YR3/4 暗褐色土 ローム粒・焼土粒混入
 第9層 7.5YR2/3 極暗褐色土 焼土粒混入
 第10層 10YR4/4 褐色土
 第11層 住居覆土
 第12層 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒少量
 第13層 5 YR3/4 暗赤褐色土
 第14層 5 YR3/6 暗赤褐色土
 第15層 10YR4/6 褐色土

- 第16層 10YR4/6 褐色土 しまりなし
 ボンボンしている
 第17層 5 YR3/6 暗赤褐色土
 第18層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒多量
 第19層 10YR3/4 暗褐色土
 第20層 10YR4/4 褐色土
 第21層 5 YR3/4 暗赤褐色土
 第22層 7.5YR2/3 極暗褐色土 焼土粒混入
 第23層 10YR3/4 暗褐色土
 第24層 10YR4/4 褐色土
 第25層 10YR3/4 暗褐色土
 第26層 5 YR3/6 暗赤褐色土



第205図 SI - 81

中に羽口が含まれることから転用羽口を芯材とし、粘土で構築したと考えられる。煙道部は、月見野火山灰層の掘り込み部分に大谷火山灰層の地山土を貼り付けて構築しており、土層堆積上では、崩落が生じた堆積状況を呈している。煙道は、住居壁際から5°の角度で傾斜しながら煙出部へ向かう。煙出奥壁では、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。第2層中にT o - a火山灰が混入している。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて6層に分層した。住居廃絶後の堆積土は、第1～5層である。第3～5層については、褐色土等の明色系の土層がロームブロック等を混入する形で堆積しており、人為的堆積状況を呈する。第1～2層については、自然堆積状況を呈する。また、第2層中からB - T m火山灰が粒状に検出した。

(木 村)

S I - 82 (第206、207図)

[位 置] グリッドLR・LS - 313で検出した。

[重 複] S I - 83と重複している。本遺構がS I - 83の堆積土を切っており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、387×342×66cmを測る。床面積は12.826㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁54cm、東壁38cm、南壁54cm、西壁63cmを測る。断面形はcで、北壁の一部で緩やかな立ち上がりが見られる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面は堅緻である。

[壁 溝] なし。

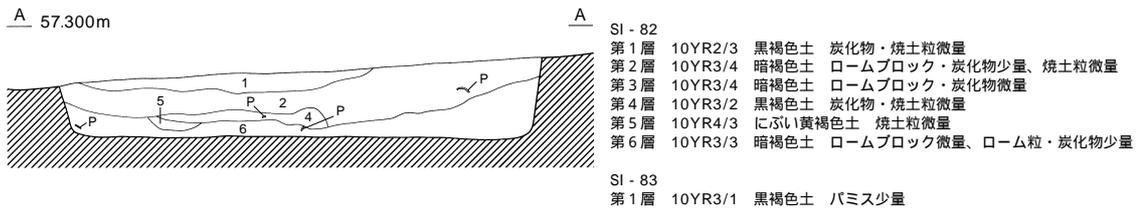
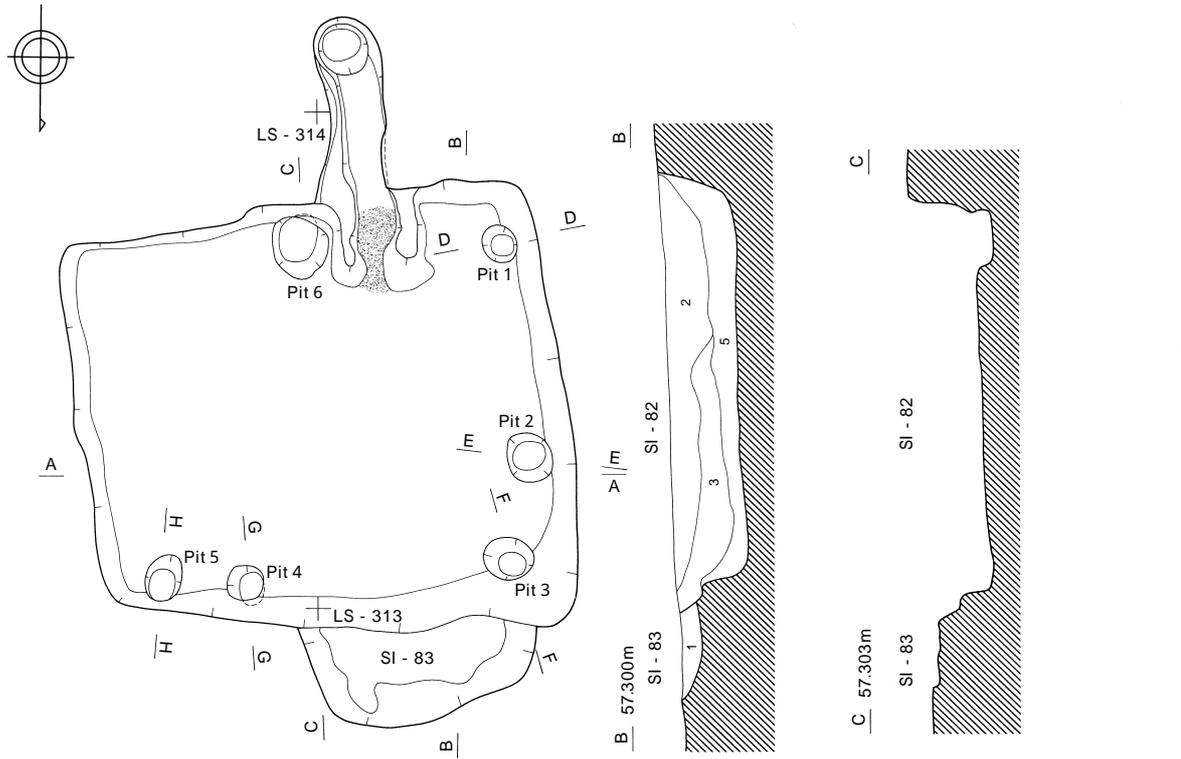
[ピット] 住居内から6基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 32×27×30cm、Pit 2 = 40×35×38cm、Pit 3 = 41×33×33cm、Pit 4 = 28×28×33cm、Pit 5 = 39×28×41cm、Pit 6 = 51×47×9cmを測る。住居西壁ならびに南壁隅の位置に配置しており、明確な柱穴配置状況については不明である。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(67:33)の位置から検出している。構造は、地下式で、袖部幅78cm、煙道長140cmを測る。主軸はN - 170.5° - Eである。粘土による構築で、燃烧部天井は第3、6層が相当する。煙道部は、崩落が生じており、煙出部が煙道部天井によって埋没した堆積状況を呈している。煙道は、住居壁際の壁面に沿って立ち上がった後、起伏を持ちながらほぼ水平に煙出部へ向かう。煙出奥壁では、やや内側に入り込みながら立ち上がり、開口部付近で外傾しながら立ち上がる。

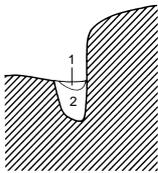
[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 6層に分層した。全般的に褐色土等の明色系の土層がロームブロック等を混入する形で堆積しており、人為的堆積状況を呈する。遺物出土状況についても第2層中から出土したものがほとんどで、廃棄もしくは流入の要素が考えられる。

(木 村)

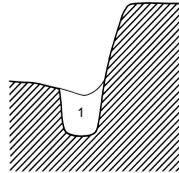


SI - 82 Pit 1
D 57.303m D



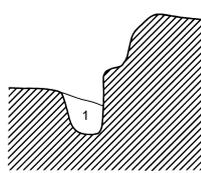
Pit 1
第1層 10YR3/2 黒褐色土
第2層 7.5YR4/4 褐色土

SI - 82 Pit 2
E 57.303m E



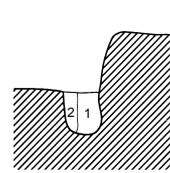
Pit 2
第1層 7.5YR4/4 褐色土

SI - 82 Pit 3
F 57.303m F



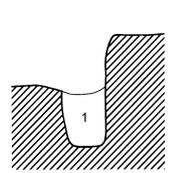
Pit 3
第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土

SI - 82 Pit 4
G 57.303m G

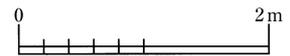


Pit 4
第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土
第2層 7.5YR4/4 褐色土

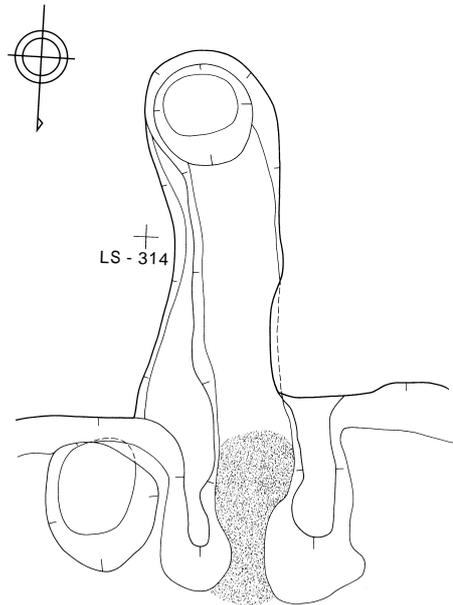
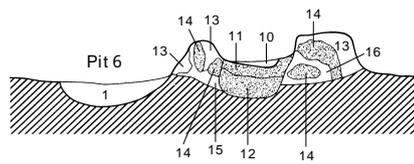
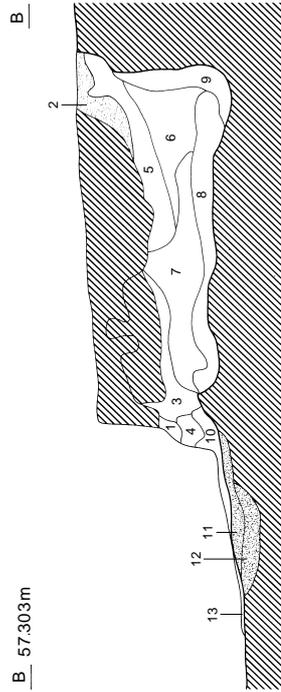
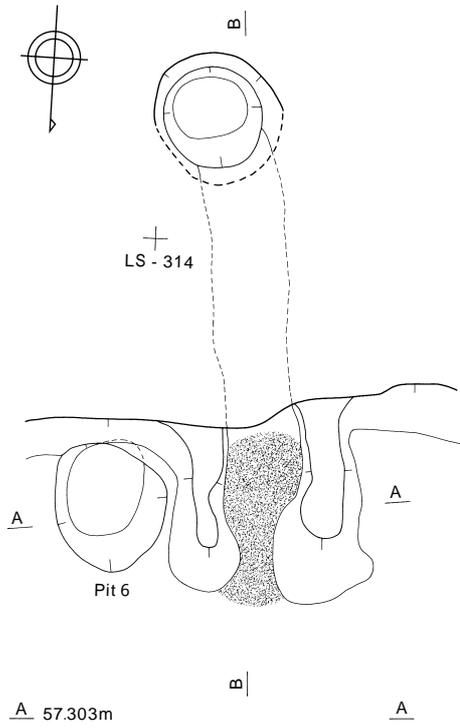
SI - 82 Pit 5
H 57.303m H



Pit 5
第1層 7.5YR4/4 褐色土
にぶい黄褐色土ブロック少量

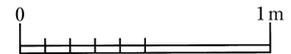


第206図 SI - 82 ・ 83

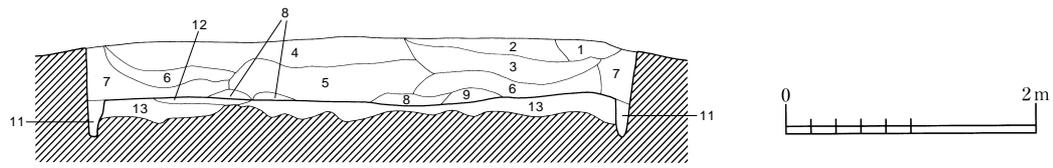
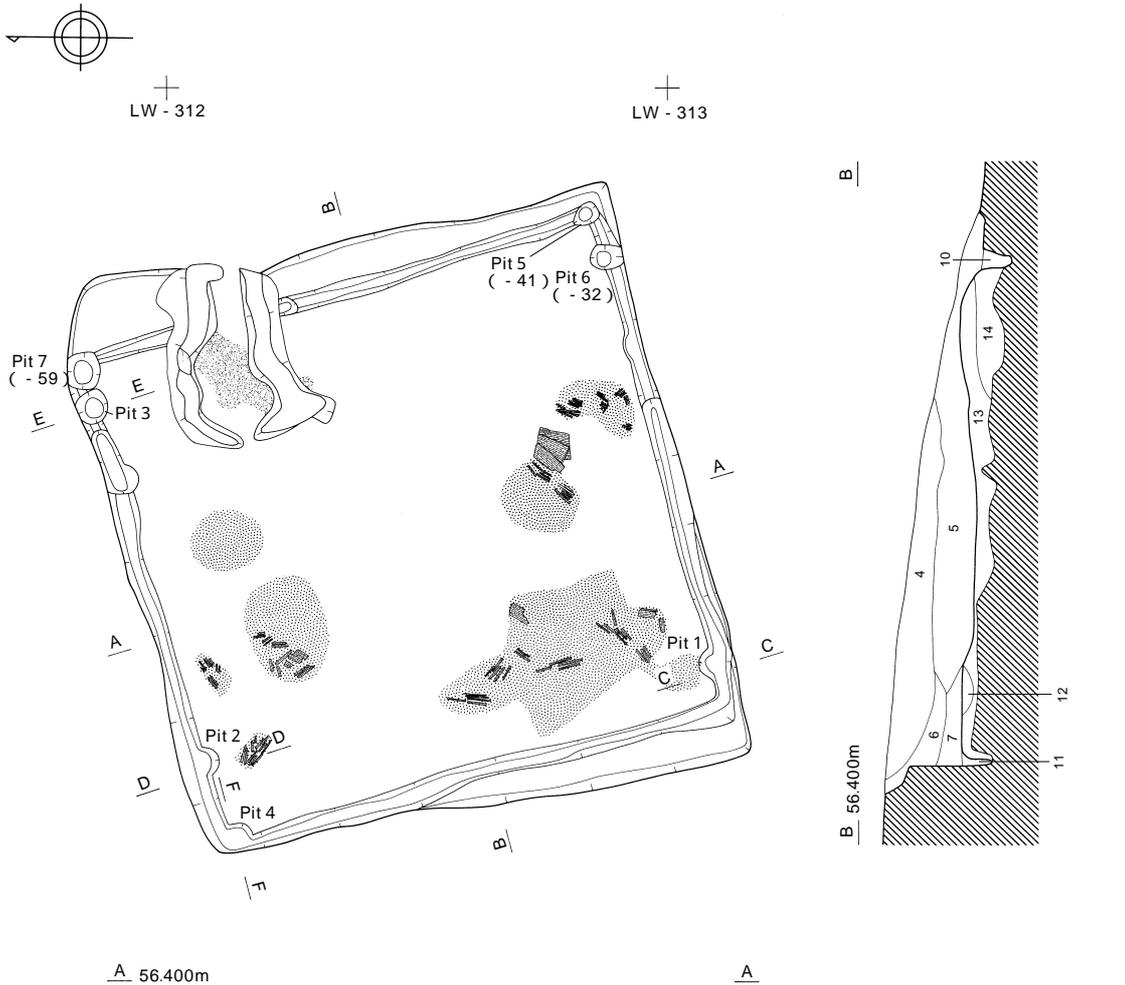


- SI - 82 カマド
- 第1層 10YR5/4 にぶい黄褐色土
 - 第2層 5 YR4/4 にぶい赤褐色土
 - 第3層 5 YR4/6 赤褐色土
 - 第4層 5 YR5/6 明赤褐色土
 - 第5層 10YR3/3 暗褐色土 赤褐色焼土ブロック少量
 - 第6層 10YR2/1 黒色土 パミス・炭化物少量
 - 第7層 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒少量
 - 第8層 7.5YR4/4 褐色土 ロームブロック少量
 - 第9層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 黒褐色土ブロックやや多量
 - 第10層 10YR3/2 黒褐色土
 - 第11層 5 YR4/4 にぶい赤褐色土
 - 第12層 2.5YR4/6 赤褐色土
 - 第13層 10YR4/4 褐色土
 - 第14層 2.5YR4/6 赤褐色土
 - 第15層 5 YR4/4 にぶい赤褐色土 赤褐色焼土ブロック多量
 - 第16層 10YR2/3 黒褐色土

- Pit 6
- 第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化物微量、焼土粒少量

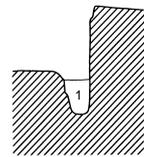


第207図 SI - 82



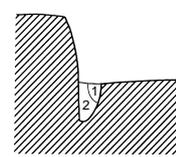
SI - 84	第7層	10YR2/2	黒褐色土	ロームブロック少量、炭化物・焼土粒微量
第1層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	ローム粒少量	
第2層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒微量	
第3層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒やや多量、炭化物微量、焼土粒少量	
第4層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒多量、炭化物・焼土粒微量	
第5層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒・火山灰(B-Tm)少量	
第6層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒微量、ロームブロック少量、炭化物・焼土粒微量	
	第8層	10YR2/1	黒色土	ロームブロック混入、炭化物多量
	第9層	10YR1.7/1	黒色土	炭化物多量
	第10層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	ローム粒中量、炭化物粒少量
	第11層	10YR3/4	暗褐色土	ロームブロック少量、炭化物中量
	第12層	10YR1.7/1	黒色土	
	第13層	10YR4/4	褐色土	炭化物粒少量、炭化物・バミス中量
	第14層	10YR3/3	暗褐色土	ロームブロック多量、炭化物中量

SI - 84 Pit 1
C 56.400m C



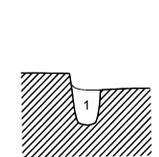
Pit 1
第1層 10YR4/6 褐色土
ロームブロック・炭化物粒中量

SI - 84 Pit 2
D 56.400m D



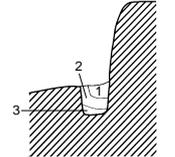
Pit 2
第1層 10YR4/6 褐色土
炭化物粒少量
第2層 10YR4/4 褐色土
ロームブロック少量
炭化物粒多量

SI - 84 Pit 3
E 56.400m E



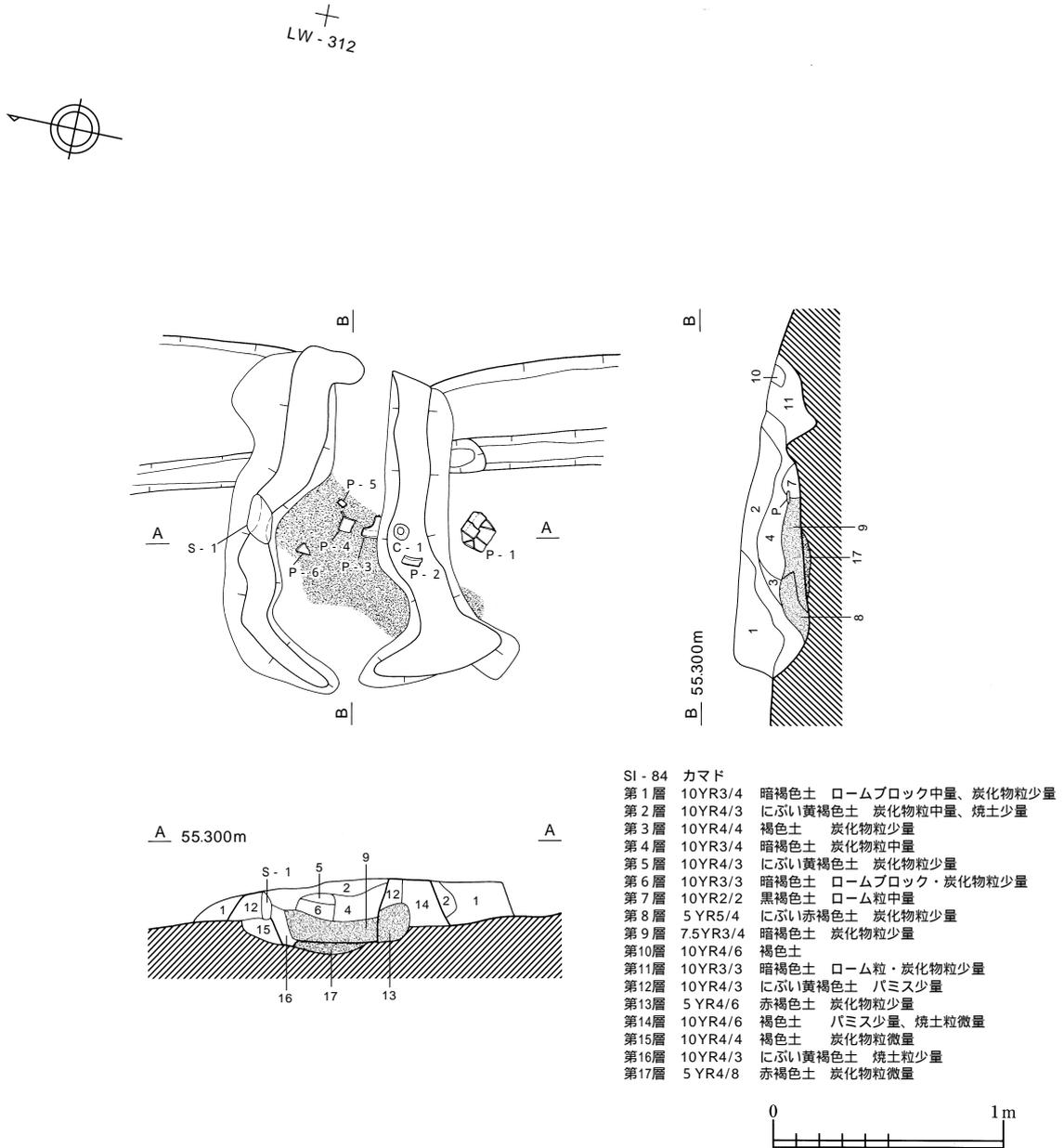
Pit 3
第1層 10YR4/6 褐色土
ローム粒少量、炭化物粒中量

SI - 84 Pit 4
F 56.400m F



Pit 4
第1層 10YR3/3 暗褐色土
ローム粒多量
炭化物粒少量
第2層 10YR4/4 褐色土
炭化物粒少量
第3層 10YR3/3 暗褐色土
ロームブロック多量
炭化物粒中量

第208図 SI - 84



第209図 SI - 84

SI - 84 (第208、209図)

[位置] グリッドLU・LV-311~313で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、470×450×66cmを測る。床面積は21.764m²を測る。

[壁] 壁高は、東壁側が削平されており、北壁40cm、東壁4cm、南壁40cm、西壁62cmを測る。断面形はeで、東西壁に棚状の段が見られる。壁面は堅緻である。

[床] ほぼ全面に掘り方を持ち、大谷火山灰層の地山土を充填して貼り床としている。床面は起伏があり、堅緻である。また、床面から炭化材・カヤ状炭化物が出土しており、本遺構は焼失住居である。

[壁溝] ほぼ全周して検出した。深さは平均31cmを測る。

[ピット] 住居内から7基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 27×25×33cm、Pit 2 = 22×22×

30cm、Pit 3 = 26 × 23 × 27cm、Pit 4 = 26 × 22 × 23cm、Pit 5 = 21 × 17 × 41cm、Pit 6 = 26 × 19 × 32cm、Pit 7 = 29 × 26 × 59cmを測る。カヤ状炭化物の出土状況をあわせると草壁の可能性が高いものと考えられる。

[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁2(29:71)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅128cm、煙道長40cmを測る。主軸はN - 87° - Eである。構築は、燃烧部袖には転用羽口ならびに自然礫を芯材としており、粘土を用いて構築している。燃烧部天井は第8、9層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道部天井は、第4層が相当し、燃烧部と同様崩落した堆積状況を呈している。煙道は、住居壁際から段をなし、壁溝に沿って煙出部へ延びる。煙出奥壁の立ち上がりは、外傾しながら立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて14層に分層した。住居廃絶後の堆積は第1～11層で、ロームブロック、炭化物等を多量に含む堆積土が堆積している。住居焼失後の人為堆積の状況を呈する。また、第5層中からB - T m火山灰を粒状に検出した。

(木村)

S I - 85 (第210、211図)

[位置] グリッドL X - 312、L X ・ L Y - 313で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、332 × 328 × 59cmを測る。床面積は10.701㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁38cm、東壁6cm、南壁28cm、西壁38cmを測る。断面形はcで、北壁ならびに南壁の一部で壁上部に緩やかな立ち上がりが見られる。壁面はやや脆弱である。

[床] 月見野火山灰層の地山を床面としており、起伏がある。床面は、しまりがあり、堅緻である。また、住居床面直上から遺物とともに小片化した炭化材ならびに炭化物を検出している。本遺構は焼失住居である。

[壁溝] 南北壁ならびに西壁から検出した。深さは平均12cmを測る。

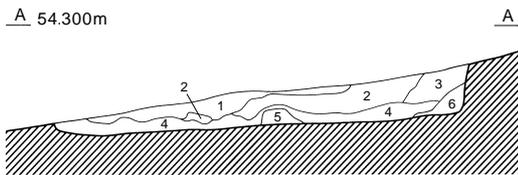
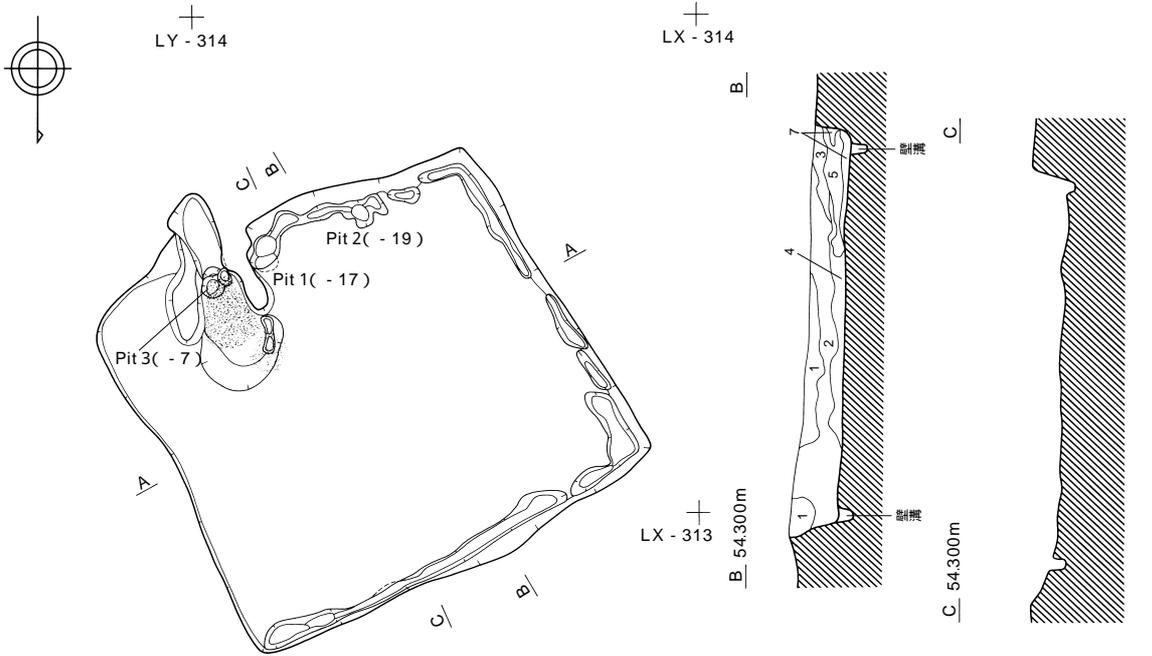
[ピット] 住居内から3基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 30 × 22 × 17cm、Pit 2 = 21 × 21 × 19cm、Pit 3 = 18 × 18 × 7cmを測る。いずれも住居南壁側から検出しており、主柱穴としての機能は考えられず、壁柱穴としての機能が考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁2(33:67)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅85cm、煙道長58cmを測る。主軸はN - 159° - Eである。構築は、粘土による構築で、燃烧部ならびに煙道部天井は第6層が相当する。支脚は、住居壁際付近に粘土を使って土盛を行い、その上に土師器甕破片を重ねて構築している。煙道は住居壁際から壁溝を埋めるように構築され、7°の角度で立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

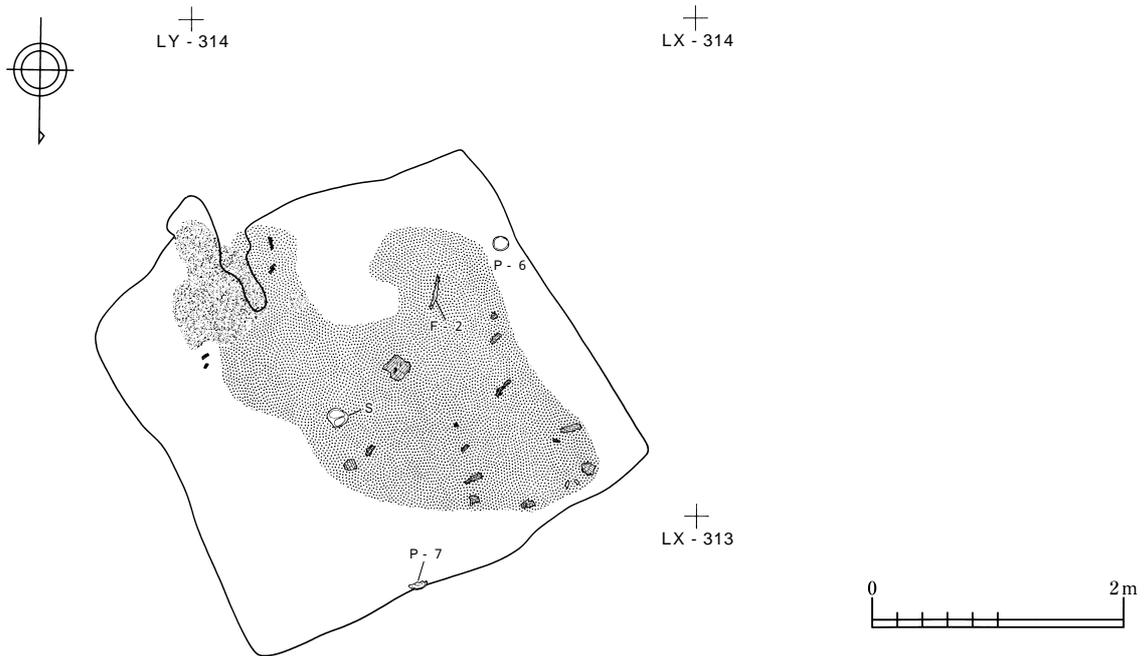
[堆積土] 7層に分層した。住居床面から炭化材、炭化物等を検出しているが、それ以外に第2層中から炭化材を検出した。住居廃絶後の第1～7層は、ロームブロック等が含まれ、埋め戻し等による人為的堆積状況を呈する。また、第1層中からT o - a火山灰をブロック状に検出した。

(木村)

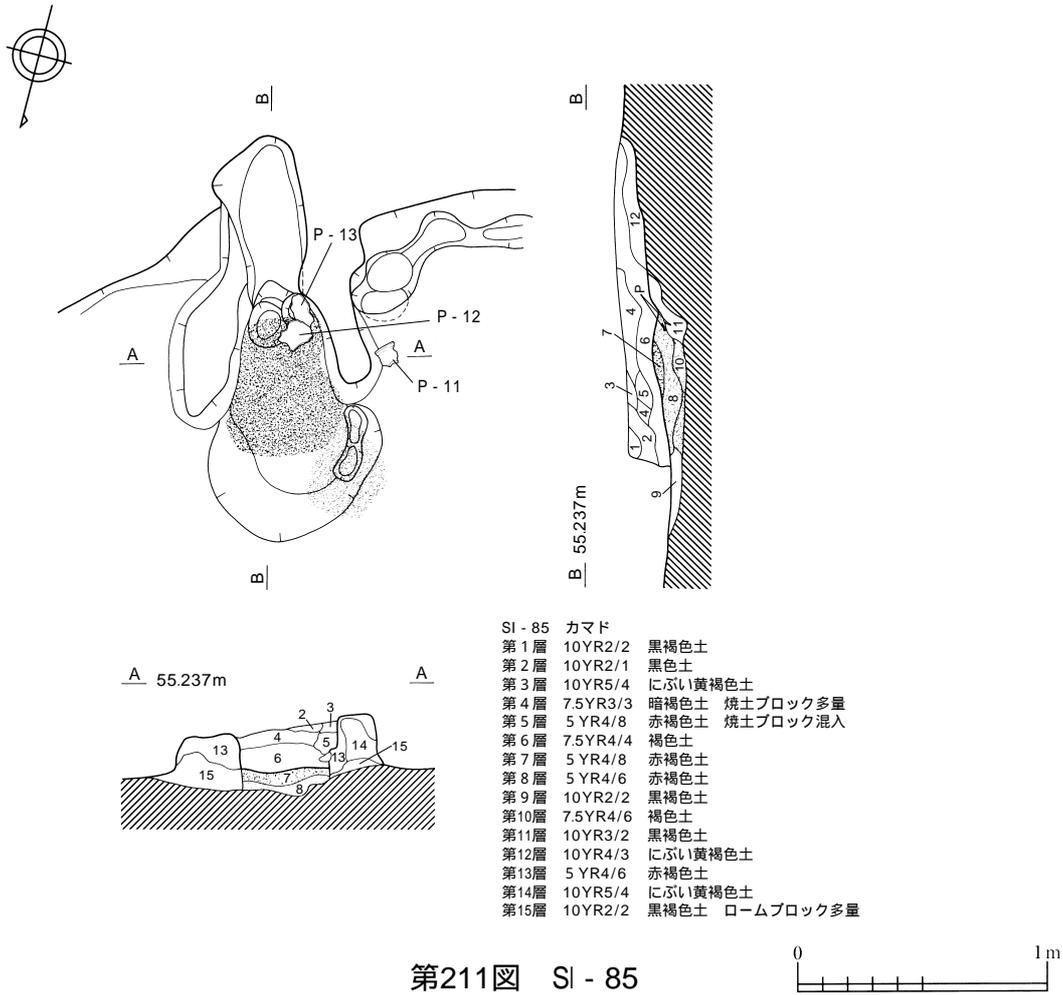


SI - 85

第1層	10YR2/1	黒色土	ローム・火山灰 (To-a)ブロック少量
第2層	10YR3/2	黒褐色土	ローム・粘土ブロック多量
第3層	10YR2/1	黒色土	ロームブロック少量
第4層	10YR1.7/1	黒色土	
第5層	10YR5/4	にぶい黄褐色土	
第6層	10YR2/1	黒色土	黒褐色土粒やや多量
第7層	10YR2/2	黒褐色土	炭化物粒・焼土粒微量



第210図 SI - 85



第211図 SI - 85

S I - 86 (第212図)

[位置] グリッドMA - 313・314で検出した。

[重複] SK - 102と重複している。SK - 102が本遺構を切っており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 不整形を呈し、320×250×78cmを測る。床面積は7.552m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁39cm、東壁40cm、南壁60cm、西壁74cmを測る。断面形はeで、南壁の一部で棚状の段を110×12×18cmの規模で検出した。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面は堅緻である。

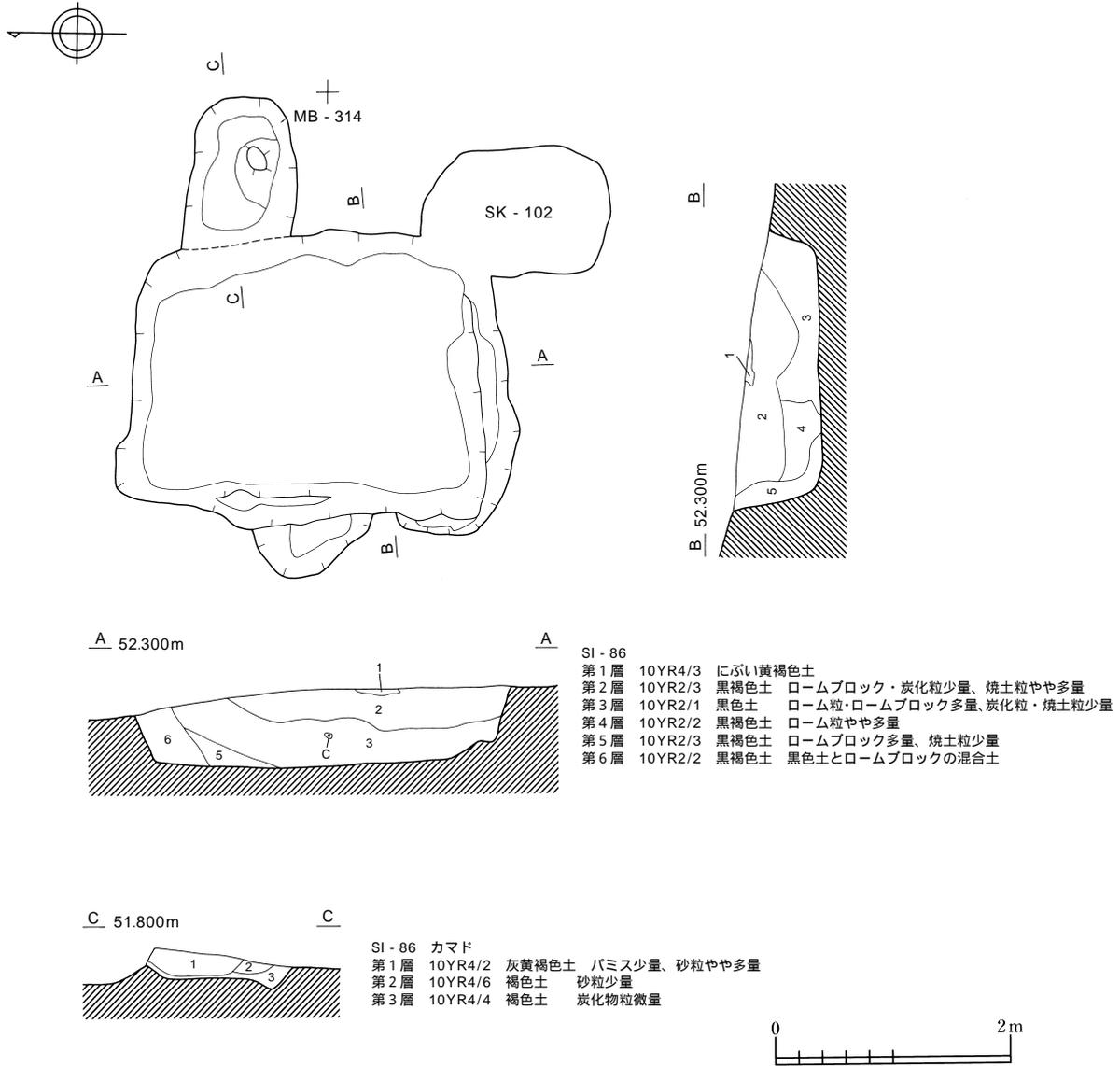
[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[カマド] 住居東壁側から煙道部のみ検出した。東壁2(30:70)の位置から検出している。構造は、半地下式で、煙道長は128cmを測る。主軸はN - 90° - Eである。煙道部天井の構築は、粘土によるものである。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、30°の角度で傾斜し、途中で角度を2°に変えやや起伏がありながら立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 6層に分層した。堆積土中にロームブロック、炭化物等が少量~多量混入しており、人為



第212図 SI - 86

的堆積状況を呈する。

(木 村)

SI - 87 (第213、214図)

[位置] グリッドLJ・LK - 316・317で検出した。

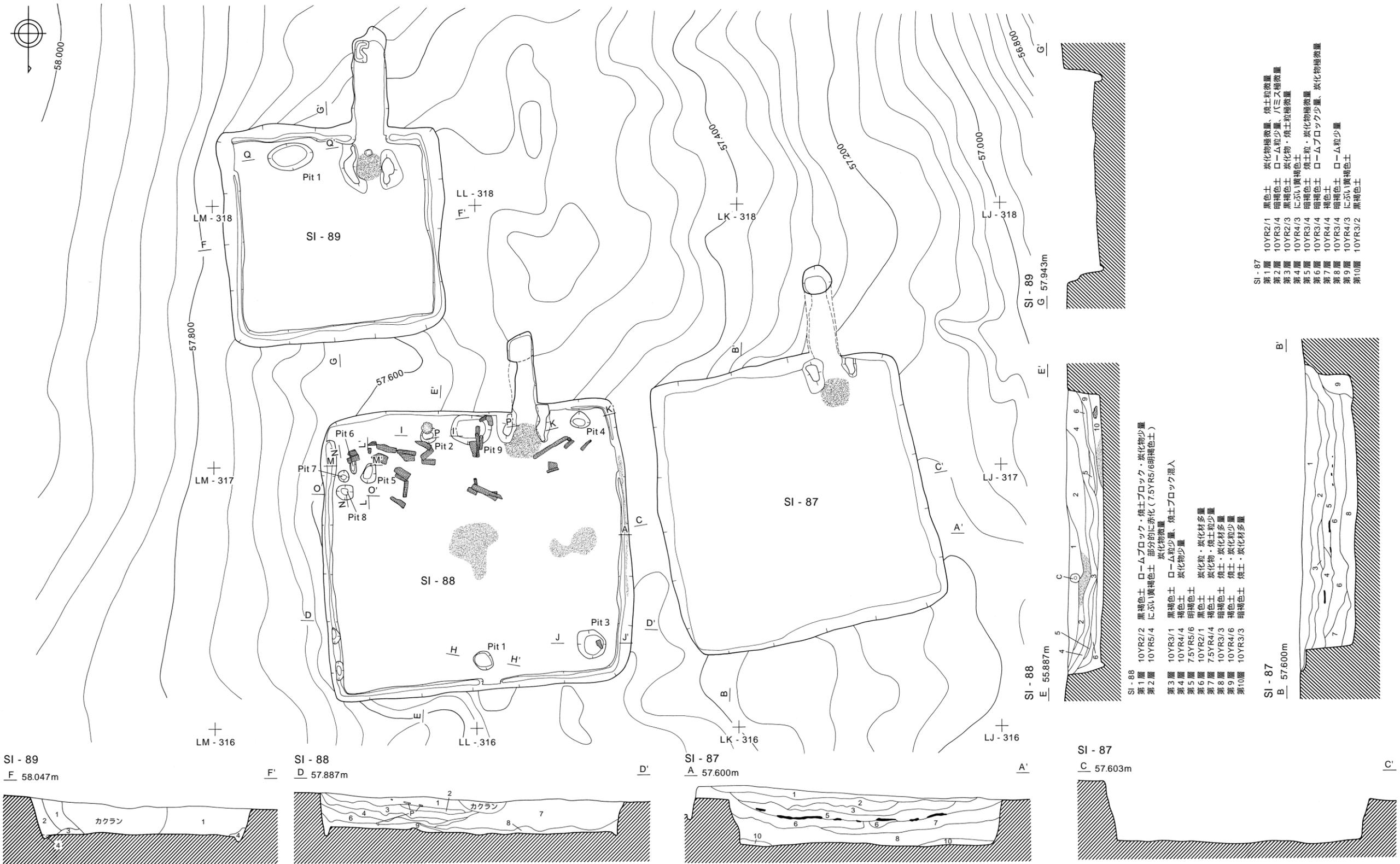
[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、422×400×95cmを測る。床面積は16.431m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁78cm、東壁90cm、南壁66cm、西壁68cmを測る。断面形はcで、壁上部で緩やかな形状が見られる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。

[壁溝] なし。



SI - 89
F 58.047m

SI - 88
D 57.887m

SI - 87
A 57.600m

SI - 87
C 57.603m

- SI - 89
 第1層 10YR4/4 褐色土 ロームブロック混入
 第2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 黒褐色土ブロック少量
 第3層 10YR5/4 にぶい黄褐色土
 第4層 10YR4/3 にぶい黄褐色土

- SI - 88
 第1層 黒褐色土 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 部分的に赤化(7.5YR5/6明褐色土)
 第3層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 炭化物微量
 第4層 黒褐色土 炭化物微量
 第5層 10YR3/1 暗褐色土 炭化物少量
 第6層 10YR4/4 明褐色土 炭化物少量
 第7層 7.5YR5/6 褐色土 炭化物少量
 第8層 10YR2/1 黒色土 炭化物・炭化材多量
 第9層 7.5YR4/4 褐色土 炭化物・焼土粒少量
 第10層 10YR3/3 暗褐色土 焼土・炭化材多量
 第11層 10YR4/6 褐色土 焼土・炭化材多量
 第12層 10YR3/3 暗褐色土 焼土・炭化材多量

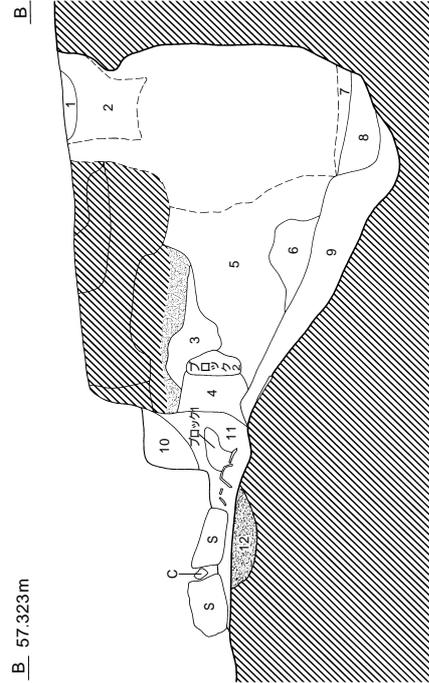
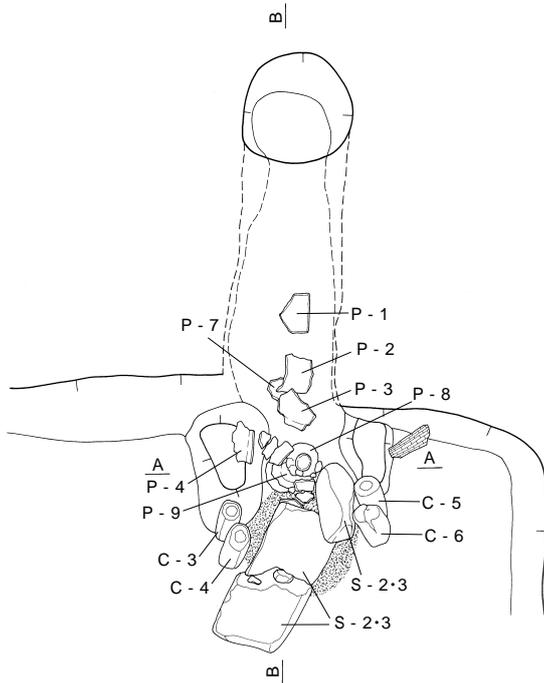
- SI - 87
 第1層 黒色土 炭化物微量、焼土粒微量
 第2層 10YR2/1 暗褐色土 ローム粒少量、パミス粒微量
 第3層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物・焼土粒微量
 第4層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化物・焼土粒微量
 第5層 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒・炭化物微量
 第6層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック少量、炭化物微量
 第7層 10YR4/4 暗褐色土 焼土粒、褐色土
 第8層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒少量
 第9層 10YR4/3 にぶい黄褐色土
 第10層 10YR3/2 黒褐色土

第213図 SI - 87 ・ SI - 88 ・ SI - 89

LK-318

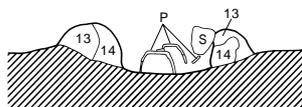


LJ-318



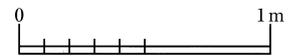
A 57.323m

A



- SI - 87 カマド
- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒微量
 - 第2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土
 - 第3層 7.5YR4/6 褐色土
 - 第4層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土粒・炭化物少量
 - 第5層 7.5YR4/4 褐色土
 - 第6層 10YR4/3 にぶい黄褐色土
 - 第7層 7.5YR4/4 褐色土
 - 第8層 10YR1.7/1 黒色土 炭化物多量
 - 第9層 7.5YR4/4 褐色土 暗赤褐色焼土ブロックやや多量、炭化物多量
 - 第10層 10YR4/3 にぶい黄褐色土
 - 第11層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物少量
 - 第12層 5 YR3/6 暗赤褐色土 炭化物多量
 - 第13層 5 YR3/4 暗赤褐色土 暗褐色土・炭化粒やや多量
 - 第14層 7.5YR4/4 褐色土

- ブロック1 10YR5/4 にぶい黄褐色土
- ブロック2 5 YR4/4 にぶい赤褐色土



第214図 SI - 87

[ピット] なし。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(74:26)の位置から検出している。構造は、地下式で、袖部の焚口部分が破壊されているが、袖部幅(75)cm、煙道長145cmを測る。主軸はN-169°-Eである。燃烧部の焚口部分から凝灰岩質の角礫ならびに自然礫、羽口等が出土しており、ま

た、袖部から羽口が突き刺さったまま出土したことから、礫ならびに転用羽口を芯材として利用し、粘土を用いて構築したものと考えられる。また、土師器小甕ならびに土師器甕底部を倒位に2個重ね支脚として設置している。煙道部は、部分的に天井の崩落が見られ、煙道は、住居壁際から32°の角度で傾斜し、煙出部付近で25°の角度で立ち上がる。また、煙出開口部は、部分的に月見野火山灰層の地山に大谷火山灰層の粘土を貼り付けて構築している。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 10層に分層した。第4、5層中に炭化物が層状に堆積しており、隣接するS I - 88が焼失住居であるため、炭化物の発成要因が考慮され、S I - 88の焼失時に第6～10層まで本遺構に土層が堆積していたと考えられる。

(木 村)

S I - 88 (第213、215図)

[位置] グリッドLK・LL - 316・317で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、468×424×55cmを測る。床面積は19.763m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁50cm、東壁51cm、南壁49cm、西壁45cmを測る。断面形はcで、壁上面の一部で緩やかな立ち上がりが見られる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、起伏がある。床面は堅緻である。また、住居中央部付近ならびに西壁中央部付近から赤化面を検出しており、併せて炭化材、炭化物を検出した。本遺構は、焼失住居である。隣接するS I - 87第4、5層中に炭化物堆積層を確認しており、本遺構の焼失後一部の炭化材がS I - 87の埋土へ廃棄された可能性が考えられる。

[壁溝] 住居北壁ならびに東西壁から検出した。深さは平均9cmを測る。

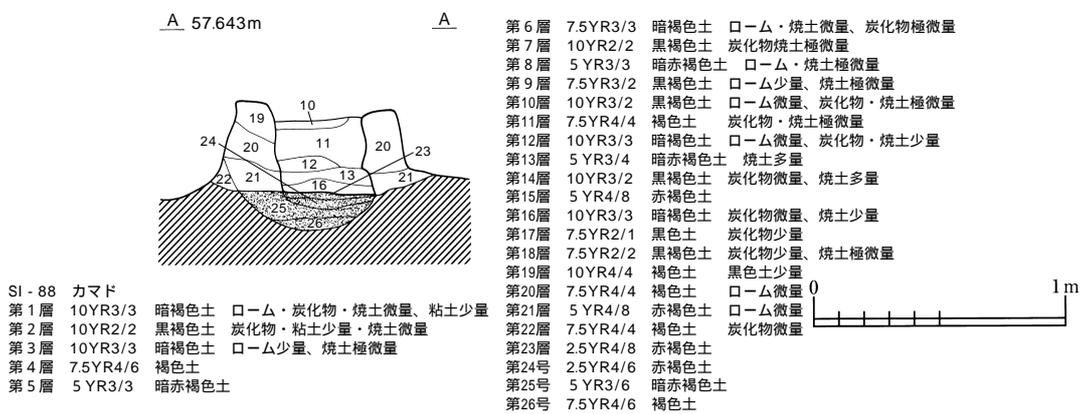
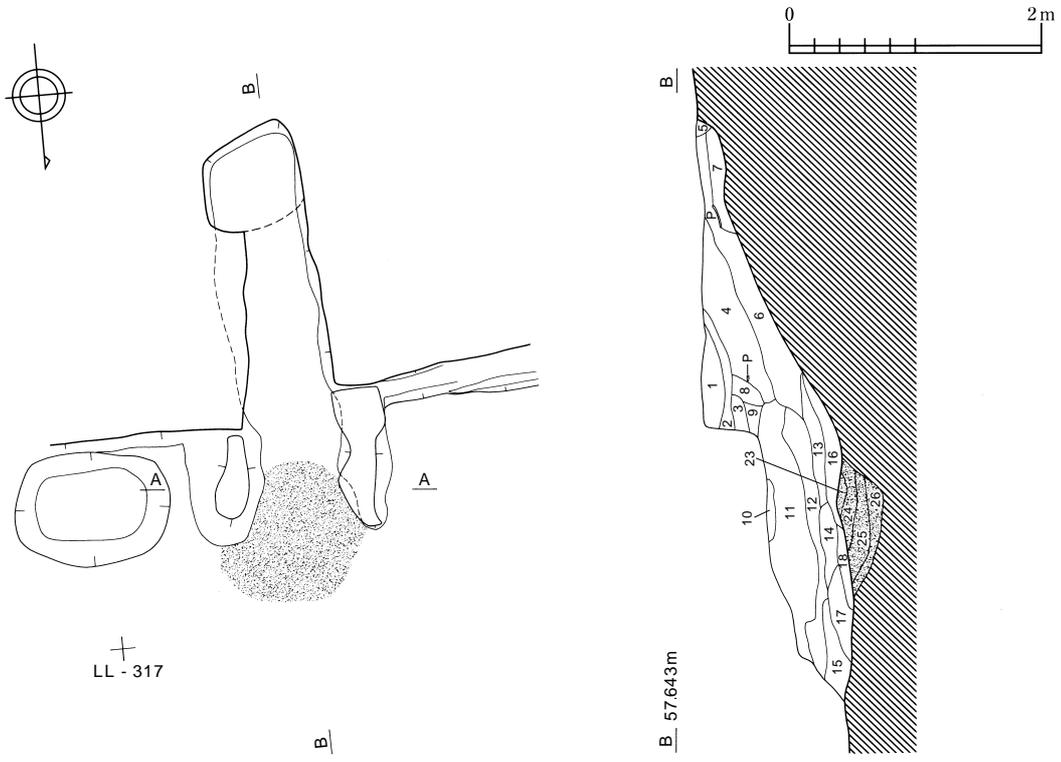
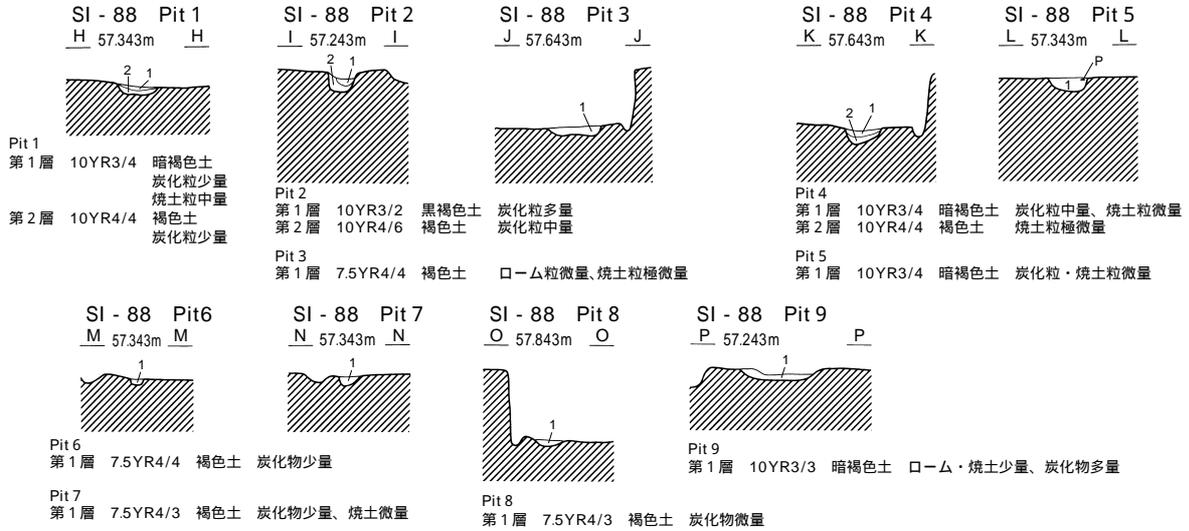
[ピット] 住居内から9基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 32×27×8cm、Pit 2 = 23×22×16cm、Pit 3 = 49×40×7cm、Pit 4 = 30×25×13cm、Pit 5 = 31×23×10cm、Pit 6 = 30×9×4cm、Pit 7 = 17×16×7cm、Pit 8 = 25×22×5cm、Pit 9 = 60×44×8cmを測る。いずれのピットも浅く支柱穴としての機能を充足し得るものはないと考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(68:32)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅77cm、煙道長110cmを測る。主軸はN - 177° - Eである。粘土による構築で、燃烧部天井は第11、12層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。また、煙道部天井は第4層が相当する。煙道は、住居壁際から28°の角度で浅いピット状の煙出部に向かって立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 10層に分層した。第1～6層は、住居廃絶後の堆積途中の廃棄層で焼土粒ならびに炭化物等と共に土器、羽口等が出土しており、本遺構が住居廃絶後に廃棄の場として利用された可能性が考えられる。第8、9層が焼失した炭化材・炭化物等の包含層でその上位の第7層は、焼失後の埋め戻し土層にあたり、地山土主体の堆積で中央部より西壁側を埋め戻している。

(木 村)



第215図 SI - 88

S I - 89 (第213、216図)

[位置] グリッドL L - 317・318で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、332×326×62cmを測る。床面積は10.76m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁47cm、東壁57cm、南壁46cm、西壁43cmを測る。断面形はcで、壁上面の一部で緩やかな立ち上がりが見られる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面は堅緻である。

[壁溝] カマド設置部分から検出しなかったが、住居内をほぼ全周する形で検出した。深さは平均5cmを測る。

[ピット] 住居内から1基検出した。規模は70×41×5cmを測る。土層堆積から柱穴としての機能ではなく、カマド脇ピットの機能が考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(69:31)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅90cm、煙道長150cmを測る。主軸はN - 179° - Eである。燃烧部は、天井ならびに袖の上部構造が破壊されており、崩落土は第5、7、8層が相当する。崩落土中から自然礫が1点出土しているが、出土位置が支脚の設置位置にもあたり、構築材に粘土以外のものが芯材として利用されたか不明である。煙道部天井は第2、3層が相当する。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 住居中央部の堆積土が攪乱によって壊されているが、それ以外の部分について4層に分層した。月見野火山灰層ならびに大谷火山灰層の地山土主体の堆積土で埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 90 (第217~219図)

[位置] グリッドL P・L Q・L R - 316・317で検出した。

[重複] なし。

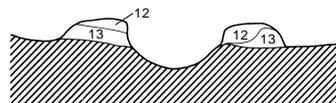
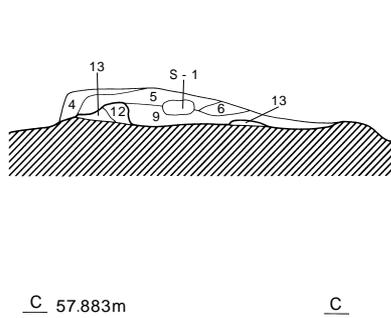
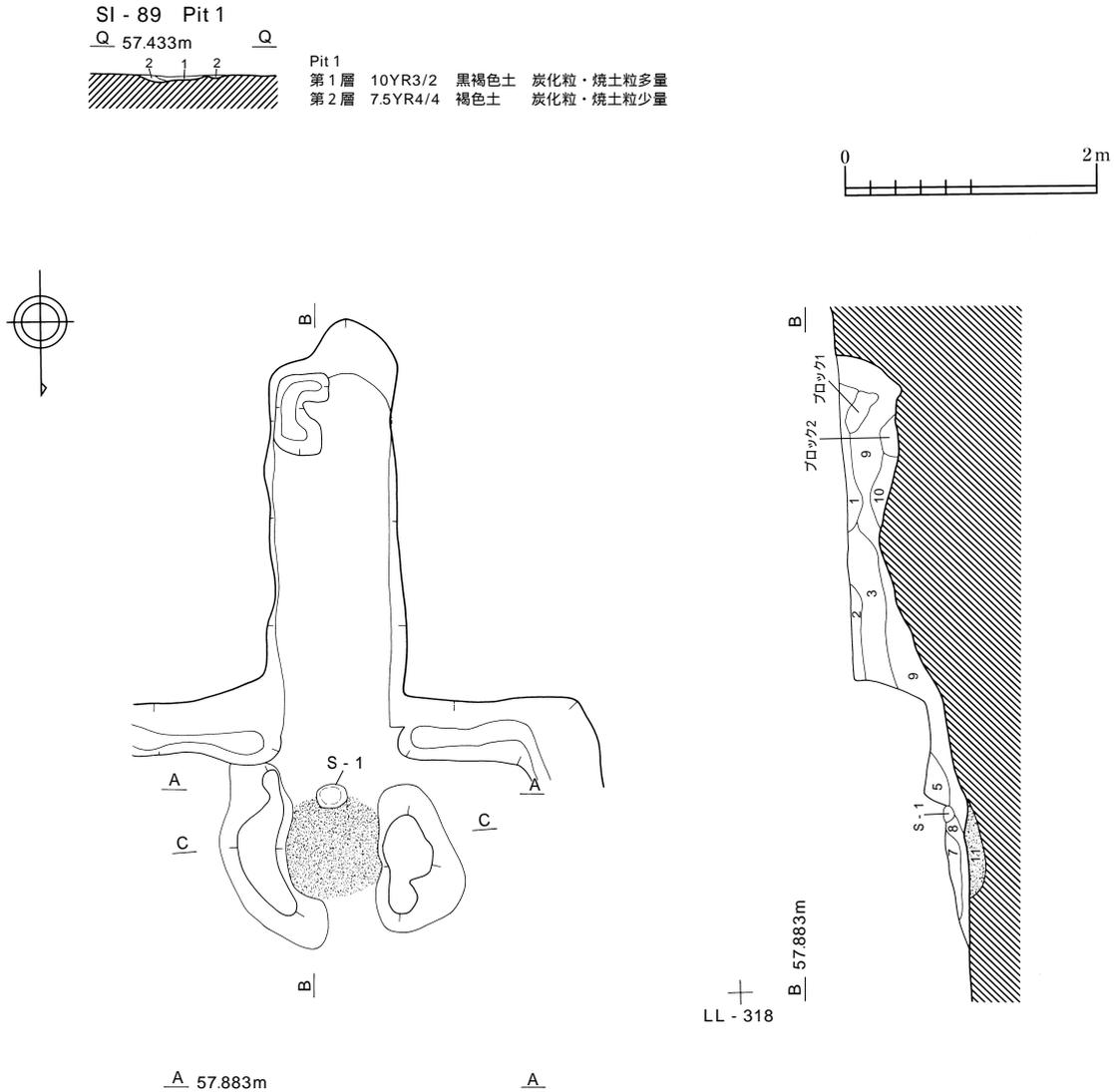
[平面形・規模] 方形を呈し、656×654×34cmを測る。床面積は40.476m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁28cm、東壁15cm、南壁26cm、西壁41cmを測る。断面形はaで、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

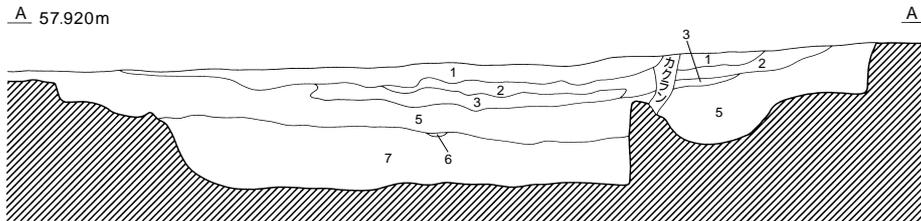
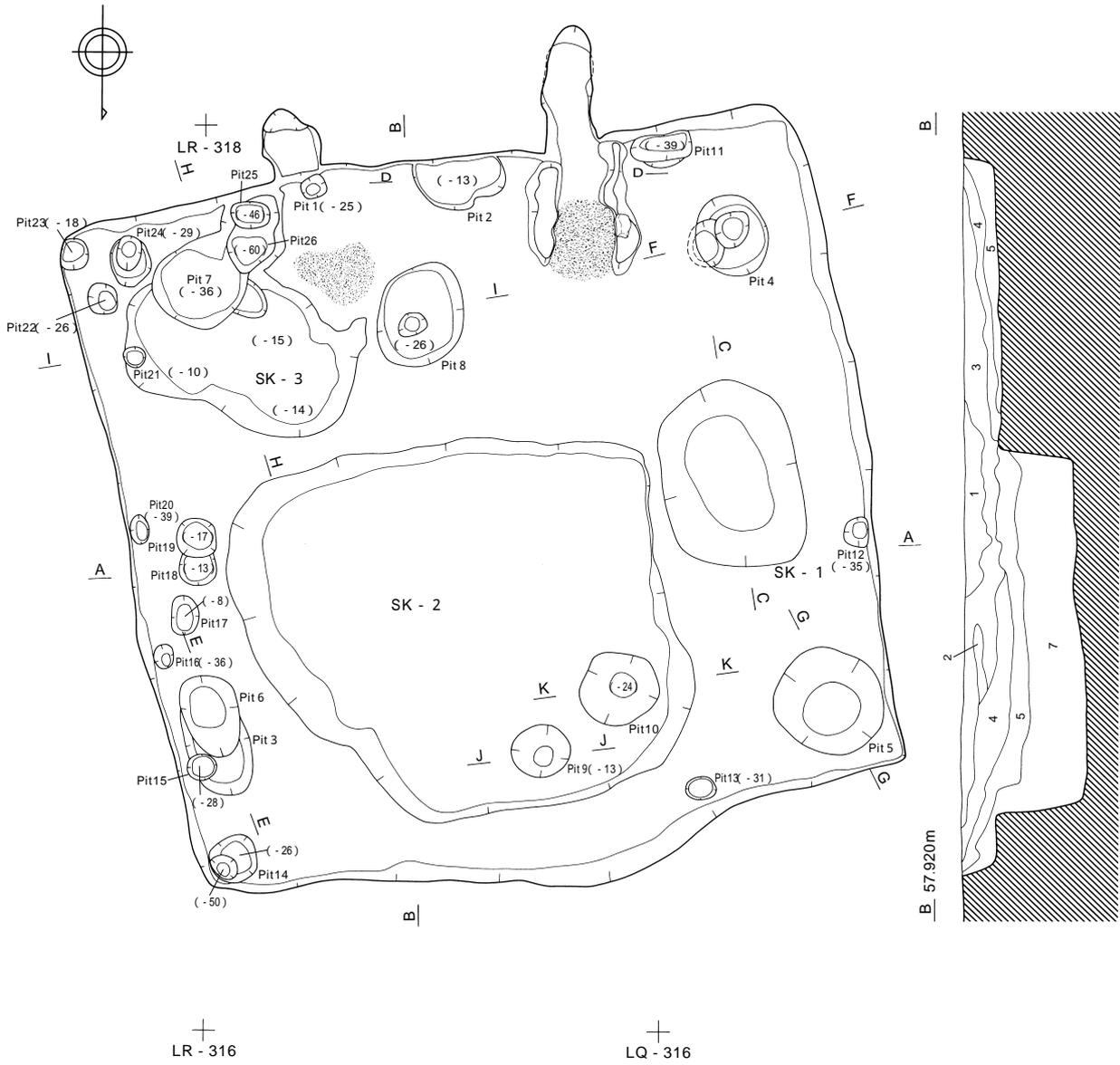
[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻であるが、住居内土坑が多く、土坑の覆土部分が床面に相当するものについてはやや脆弱である。

[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から26基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 23×19×25cm、Pit 2 = 80×43×13cm、Pit 3 = 98×52×6cm、Pit 4 = 73×63×50cm、Pit 5 = 98×96×41cm、Pit 6 = 75×49×40cm、Pit 7 = 85×75×36cm、Pit 8 = 86×77×26cm、Pit 9 = 52×47×13cm、Pit 10 = 69×64×24cm、Pit 11 = 54×23×39cm、Pit 12 = 26×21×35cm、Pit 13 = 27×21×31cm、Pit 14 = 42×40×50cm、Pit 15 = 26×22×28cm、Pit 16 = 21×17×36cm、Pit 17 = 35×24×8cm、Pit 18 = 35×33×13cm、Pit 19 = 38×36×17cm、Pit 20 = 26×16×39cm、Pit 21 = 19×18×45cm、Pit 22 = 30×26×26cm、Pit 23 = 28×25×18cm、Pit 24 = 45×37×29cm、Pit 25 = 45×25×46cm、



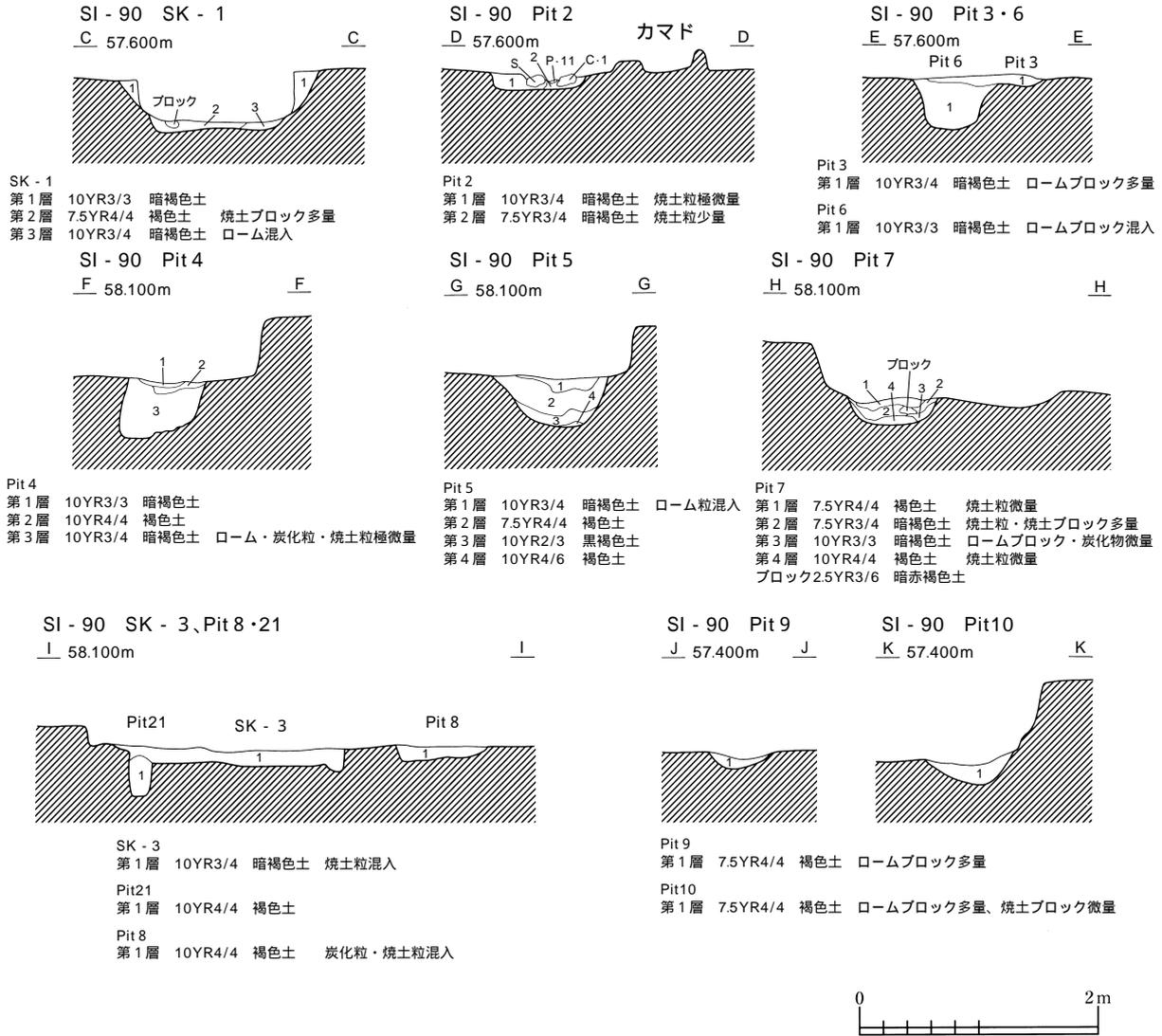
第216図 SI - 89



- SI - 90
- | | | | |
|-----|-----------|-------|----------------------|
| 第1層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 焼土粒極微量 |
| 第2層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒少量 |
| 第3層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ローム粒少量 |
| 第4層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | ローム粒・小礫混入 |
| 第5層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ローム粒・パミス・小礫混入 |
| 第6層 | 5 YR3/6 | 暗赤褐色土 | |
| 第7層 | 7.5YR4/4 | 褐色土 | ローム粒・パミス・小礫・炭化粒・焼土少量 |



第217図 SI - 90

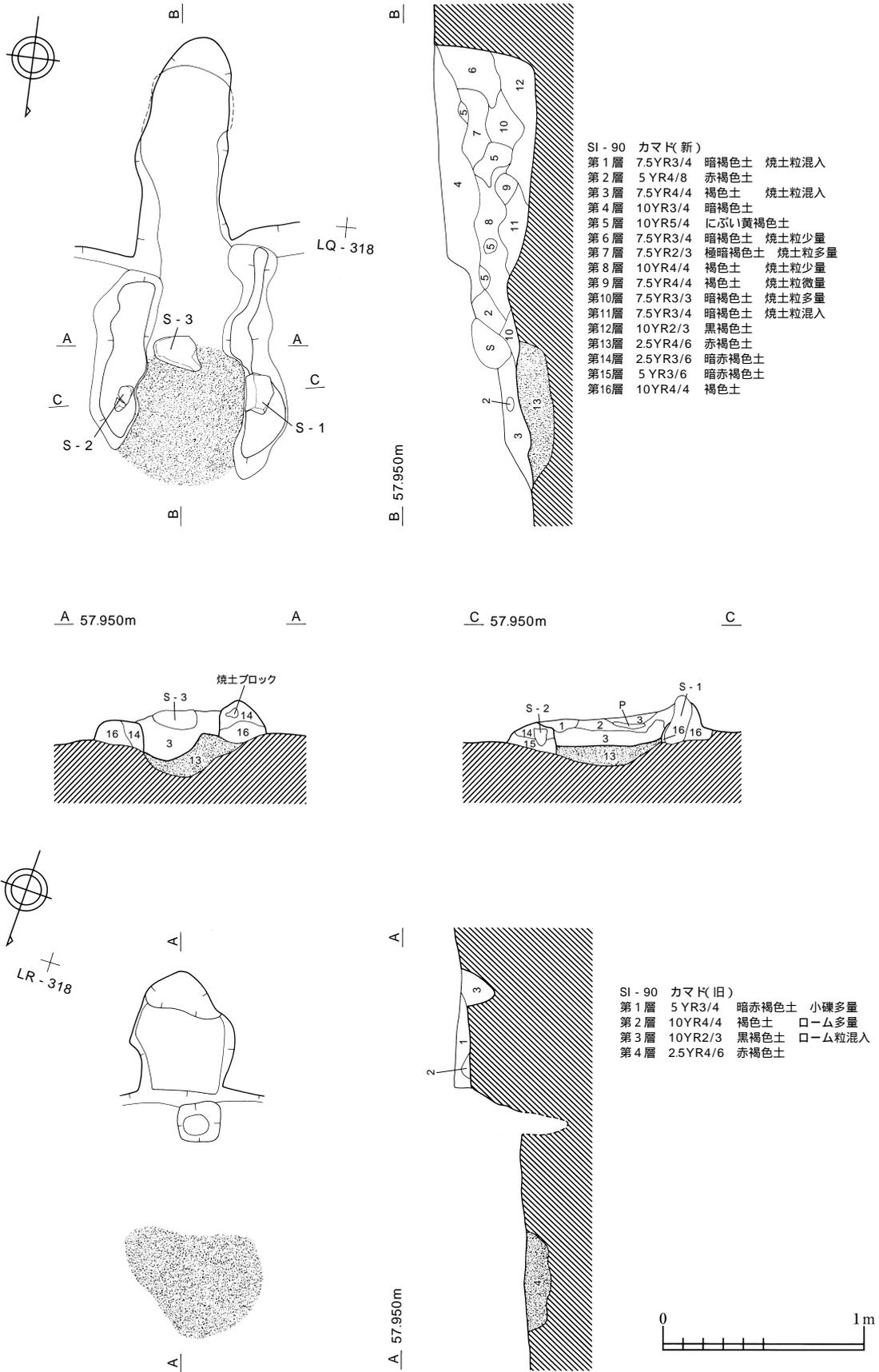


第218図 SI - 90

Pit26 = 41 × 36 × 60cmを測る。

主柱穴であったと考えられるピットは、Pit11、25、26で住居北壁側の柱穴については、明確な柱穴配置は不明である。また、壁柱穴を各壁から部分的に検出している。

[カマド] 住居南壁側から2基検出した。南壁2 (33 : 67) と南壁3 (70 : 30) の位置から検出している。新旧関係については、袖部の残存状況等から南壁2 < 南壁3である。南壁3のカマドの構造は、半地下式で、袖部幅99cm、煙道長103cmを測る。主軸はN - 176° - Eである。構築は、崩落した燃焼部天井の中から自然礫が出土しており、また、袖部にも芯材として自然礫が出土したことから自然礫を芯材として粘土を用いている。煙道部天井は、第4、5層が相当し、月見野火山灰層を主体とする地山粘土による構築である。局所的に崩落が起きた堆積状況を呈している。煙道は、住居壁際から15°の角度で緩やかに傾斜し、全煙道長1/3の地点でほぼ平坦に煙出部へ向かう。煙出奥壁は、緩やかに外傾しながら立ち上がる。



第219図 SI - 90

南壁2のカマドの構造は、半地下式である。燃烧部については、下部構造以外破壊されており、煙道長60cmを測る。主軸はN - 160° - Eである。煙道部は、天井崩落土が堆積している。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で角度を変え、ほぼ平坦に近い角度で煙出部に立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居内から土坑3基を検出した。SK - 1は、住居中央よりやや西壁寄りの部分で検出した。規模は166×118×49cmを測る。住居廃絶後に堆積した土が土坑の覆土として堆積しているため、住居廃絶時点で本土坑は、開口していたものと考えられる。SK - 2は、住居中央よりやや北壁寄りの部分から検出した。規模は375×331×81cmを測る。住居廃絶後に堆積した土がSK - 1と同様堆積しており、住居廃絶時点で隣接するSK - 1と同様開口していたものと考えられる。ただ、本土坑は住居北半分をほぼ占める施設であるため、住居内での存在形態については、開口部上面に板材を渡し、貯蔵施設として利用した。もしくは、本遺構が居住用ではなく作業用の住居であった等の要素等が考慮される。住居床面の東壁側の開口部上面がやや高い状態で検出したことや、鉄生産あるいは土器生産等の付属施設が検出しなかったことから貯蔵施設の要素が強いものと考えられる。SK - 3は、住居南壁東隅から検出した。規模は210×150×15cmを測る。

[堆積土] 7層に分層した。最下層に堆積する第7層は、焼土、炭化粒、パミス等を含む土層で、人為的に埋め戻された堆積状況を呈している。上位層については、自然堆積状況を呈する。

(木村)

SI - 91 (第220~222図)

[位置] グリッドLV・LW・LX - 314~316で検出した。

[重複] SI - 92ならびにSI - 93と重複している。本遺構がSI - 92ならびにSI - 93の堆積土を切っており、本遺構の方が新しい。また、本遺構SK - 2は、本遺構堆積土を切っており、本遺構より新しい遺構であるが、記述に際して本遺構に帰属させ記述した。

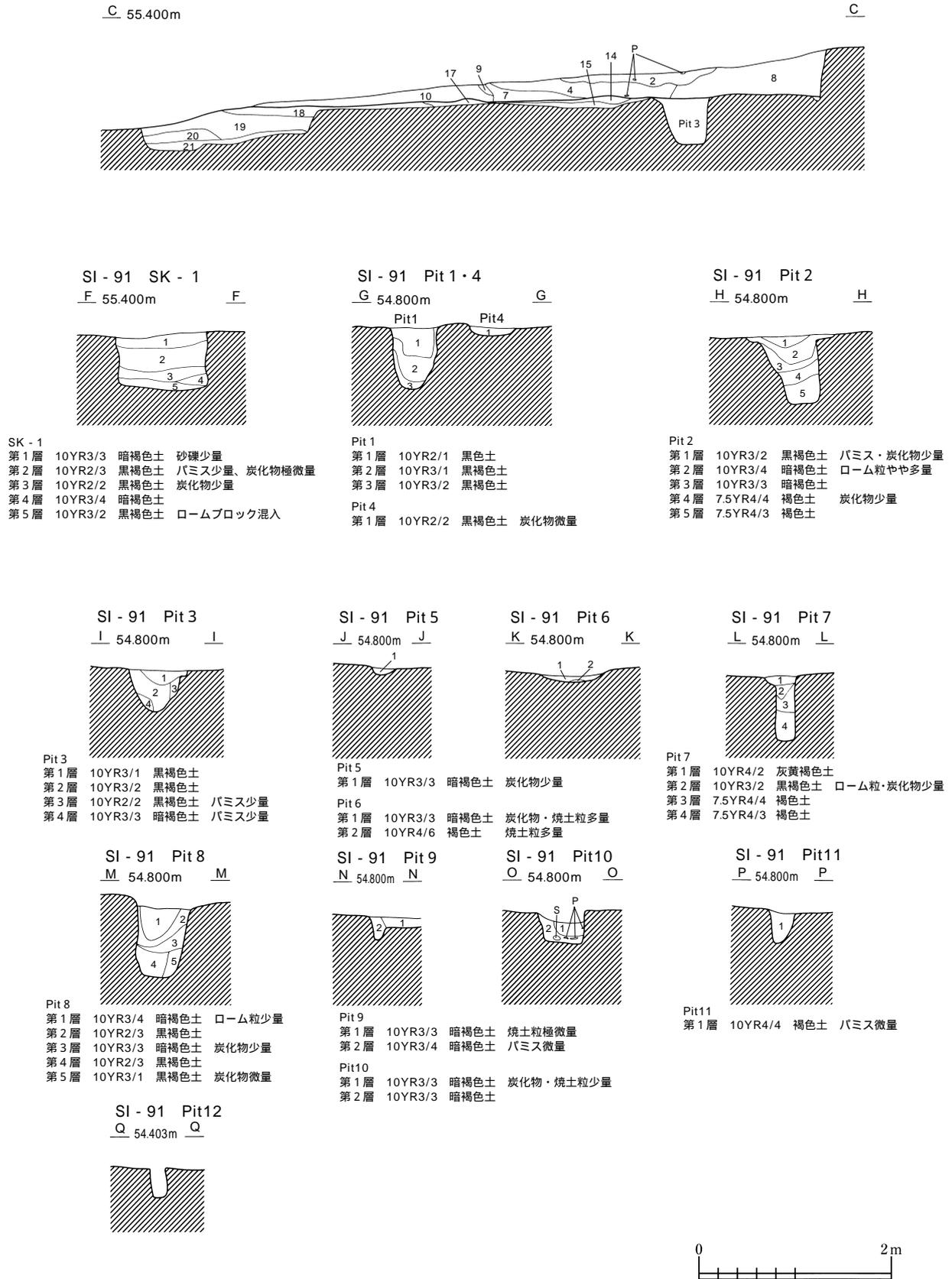
[平面形・規模] 台形を呈し、638×636×62cmを測る。床面積は39.622㎡を測る。

[壁] 壁高は、住居東壁側が削平ならびに切りあいのため、明瞭に残存していないが、北壁26cm、東壁(10)cm、南壁55cm、西壁55cmを測る。断面形はcで、西壁の一部の壁上部で緩やかな傾斜が見られる。壁面は、重複部分を除き堅緻である。

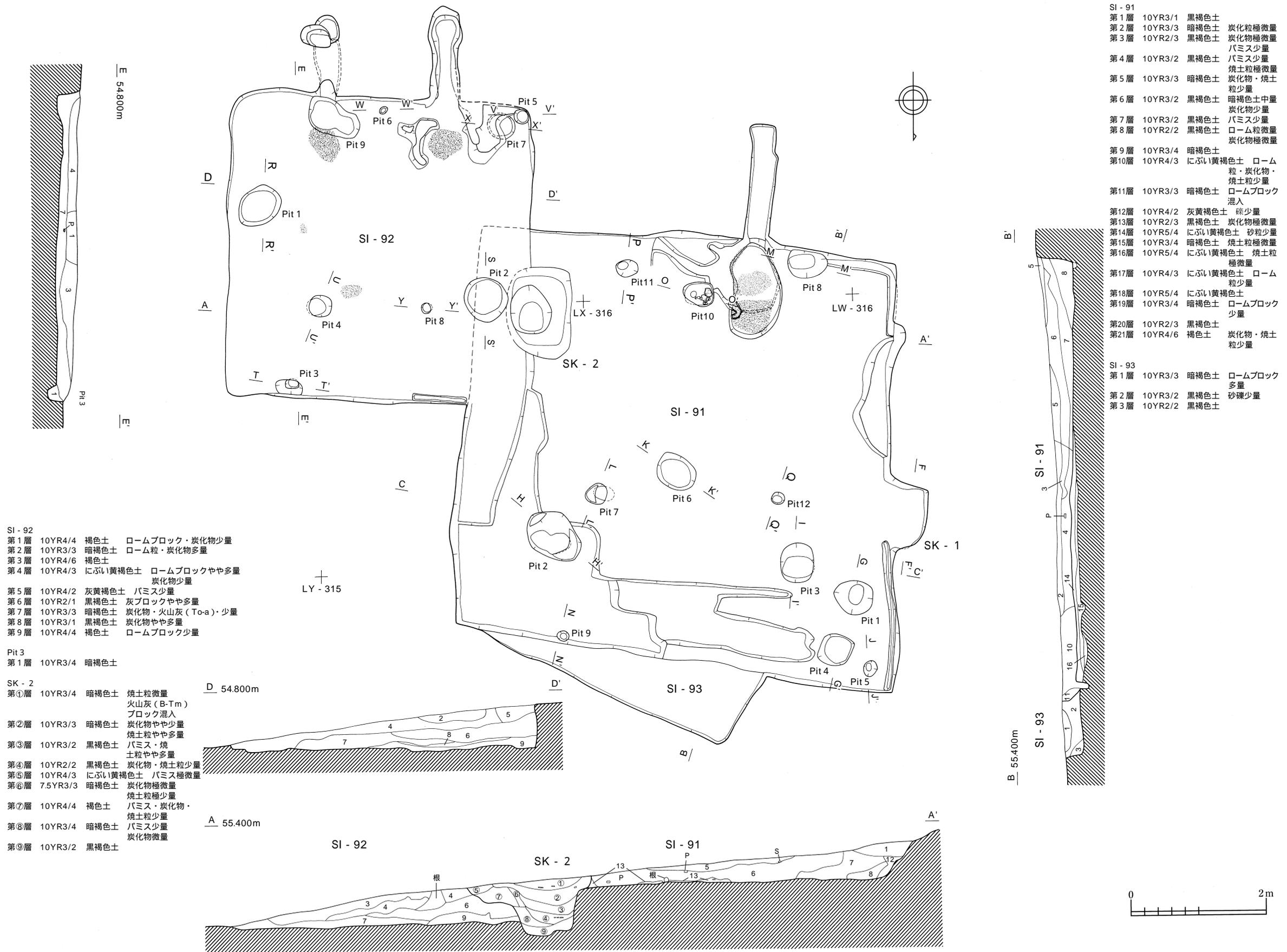
[床] 住居北側半分に浅い掘り方を持ち、また東壁部分は、深さ約45cmの掘り方を持っている。大谷火山灰層主体の地山土を貼り床として貼り付けている。床面は、やや起伏があり、SI - 92と重複部分については、やや脆弱でそれ以外の部分は、堅緻である。

[壁溝] 住居西壁ならびに南北壁側の一部から検出した。深さは平均8cmを測る。また、南壁壁溝から刀子ならびに鎌が出土した。

[ピット] 住居内から12基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 58×52×63cm、Pit 2 = 90×68×71cm、Pit 3 = 58×50×43cm、Pit 4 = 46×45×8cm、Pit 5 = 23×20×8cm、Pit 6 = 60×47×8cm、Pit 7 = 32×30×68cm、Pit 8 = 59×40×80cm、Pit 9 = 18×15×24cm、Pit 10 = 46×32×34cm、Pit 11 = 32×25×35cm、Pit 12 = 19×18×30cmを測る。主柱穴配置は、Pit 2、3、8の3本とPit 7、8、12の小規模な3本配列の2パターンがある。それ以外に対応する柱穴が見当たらないが、Pit 1が柱穴に相当する深さを持っている。



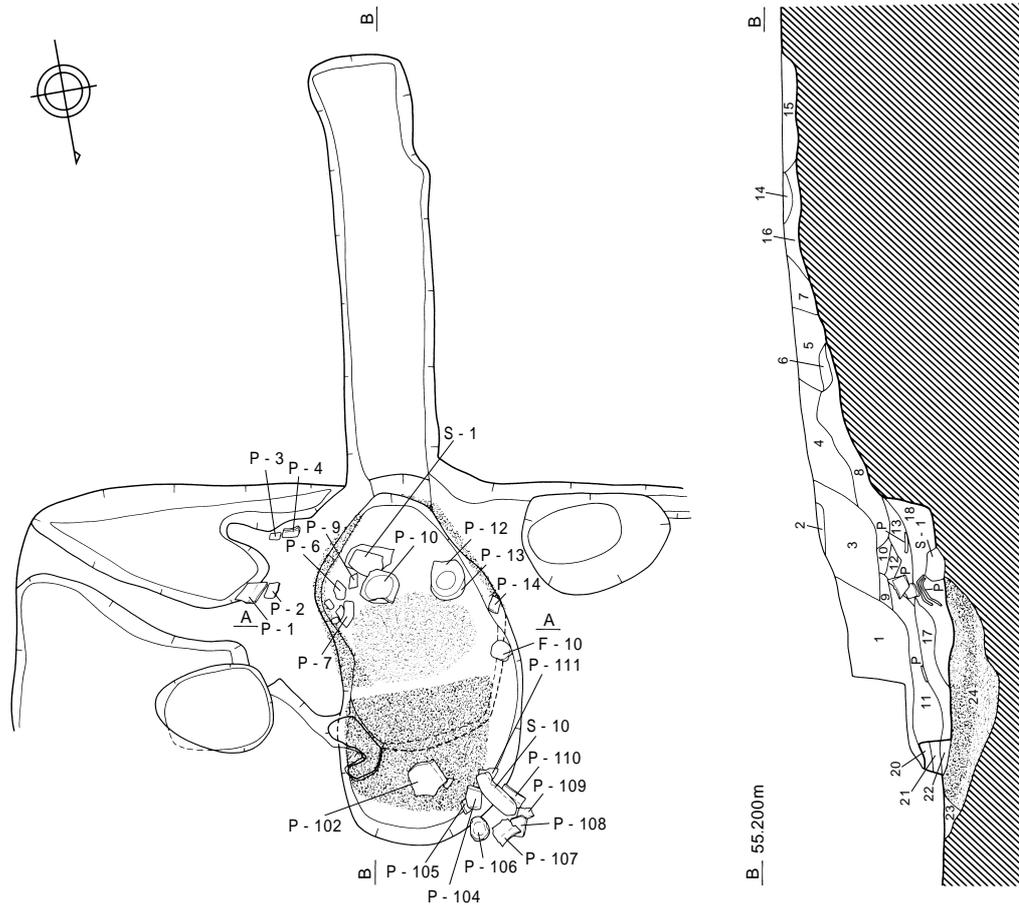
第220図 SI - 91



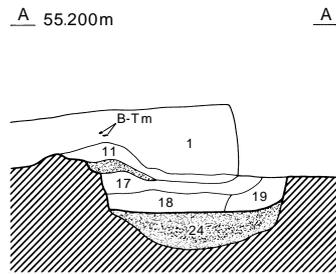
- SI - 92
- 第1層 10YR4/4 褐色土 ロームブロック・炭化物少量
 - 第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・炭化物多量
 - 第3層 10YR4/6 褐色土
 - 第4層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ロームブロックやや多量
炭化物少量
 - 第5層 10YR4/2 灰黄褐色土 バミス少量
 - 第6層 10YR2/1 黒褐色土 灰ブロックやや多量
 - 第7層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物・火山灰 (To-a) 少量
 - 第8層 10YR3/1 黒褐色土 炭化物やや多量
 - 第9層 10YR4/4 褐色土 ロームブロック少量
- Pit 3
- 第1層 10YR3/4 暗褐色土
- SK - 2
- 第①層 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒微量
火山灰 (B-Tm) ブロック混入
 - 第②層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物やや少量
焼土粒やや多量
 - 第③層 10YR3/2 黒褐色土 バミス・焼土粒やや多量
 - 第④層 10YR2/2 黒褐色土 炭化物・焼土粒少量
 - 第⑤層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 バミス極微量
 - 第⑥層 7.5YR3/3 暗褐色土 炭化物極微量
焼土粒極少量
 - 第⑦層 10YR4/4 褐色土 バミス・炭化物・
焼土粒少量
 - 第⑧層 10YR3/4 暗褐色土 バミス少量
炭化物微量
 - 第⑨層 10YR3/2 黒褐色土

- SI - 91
- 第1層 10YR3/1 黒褐色土
 - 第2層 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒極微量
 - 第3層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物極微量
バミス少量
 - 第4層 10YR3/2 黒褐色土 バミス少量
焼土粒極微量
 - 第5層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物・焼土粒少量
 - 第6層 10YR3/2 黒褐色土 暗褐色土中量
炭化物少量
 - 第7層 10YR3/2 黒褐色土 バミス少量
 - 第8層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒微量
炭化物極微量
 - 第9層 10YR3/4 暗褐色土
 - 第10層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒・炭化物・
焼土粒少量
 - 第11層 10YR3/3 暗褐色土 ロームブロック
混入
 - 第12層 10YR4/2 灰黄褐色土 砂少量
 - 第13層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物極微量
 - 第14層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 砂粒少量
 - 第15層 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒極微量
 - 第16層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 焼土粒
極微量
 - 第17層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒少量
 - 第18層 10YR5/4 にぶい黄褐色土
 - 第19層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック
少量
 - 第20層 10YR2/3 黒褐色土
 - 第21層 10YR4/6 褐色土 炭化物・焼土粒少量
- SI - 93
- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 ロームブロック
多量
 - 第2層 10YR3/2 黒褐色土 砂礫少量
 - 第3層 10YR2/2 黒褐色土

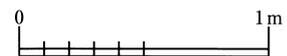
第221図 SI - 91 ・ SI - 92 ・ SI - 93



LX - 316



- SI - 91 カマド
- | | | |
|------|----------|------------------|
| 第1層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 焼土粒少量 |
| 第2層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 |
| 第3層 | 10YR4/4 | 褐色土 炭化物微量、焼土粒少量 |
| 第4層 | 10YR4/2 | 灰黄褐色土 ローム粒少量 |
| 第5層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 ローム粒少量 |
| 第6層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 焼土粒少量 |
| 第7層 | 10YR4/4 | 褐色土 ローム粒多量 |
| 第8層 | 5 YR4/4 | にぶい赤褐色土 赤色ローム粒多量 |
| 第9層 | 10YR4/4 | 褐色土 |
| 第10層 | 5 YR3/6 | 赤褐色土 焼土粒極微量 |
| 第11層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 焼土粒少量 |
| 第12層 | 10YR4/6 | 褐色土 |
| 第13層 | 5 YR3/4 | 暗赤褐色土 焼土ブロック少量 |
| 第14層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 焼土ブロック少量 |
| 第15層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 焼土粒やや多量 |
| 第16層 | 10YR4/4 | 褐色土 炭化物微量 |
| 第17層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 焼土粒多量 |
| 第18層 | 5 YR4/4 | にぶい赤褐色土 焼土粒少量 |
| 第19層 | 5 YR3/6 | 暗赤褐色土 焼土ブロック多量 |
| 第20層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 焼土粒多量 |
| 第21層 | 10YR3/1 | 黒褐色土 焼土粒少量 |
| 第22層 | 10YR4/4 | 褐色土 |
| 第23層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 焼土粒多量 |
| 第24層 | 5 YR3/4 | 暗赤褐色土 焼土粒多量 |



第222図 SI - 91

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(65:35)の位置から検出している。構造は、半地下式で、右袖は残存しておらず、煙道長170cmを測る。主軸はN-177°-Wである。構築は、カマド右袖側から自然礫、羽口、焼成粘土板の出土があったことから芯材として利用し、粘土で構築したものと考えられる。また、支脚として自然礫の上に打ち欠いた土師器甕底部を2個倒位に重ね設置したものと、土師器甕底部を倒置したのみのものが並列して検出した。燃烧部天井は第18層が相当し、右袖側が欠落しているが、崩落した堆積状況を呈している。火床面付近は、床面に対して4cm浅く掘り込んでいる。煙道部天井は、第8、16層が相当し、燃烧部と同様崩落した堆積状況を呈している。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で角度を18°に変え、緩やかに起伏を持ちながら煙出部へ向かう。煙出付近ではほぼ平坦に立ち上がる。

また、カマド左袖脇から地山の粘土で構築した90×25×5cmの段状の盛土を検出した。

[その他の施設] 住居西壁南側の部分から175×50×10cmのステップ状の段を検出した。住居の出入口施設もしくは棚状施設としての機能が考えられる。その他住居内から土坑2基を検出した。SK-1は、住居西壁際中央で検出した。規模は96×(65)×60cmを測る。SK-2は、本遺構より新しい土坑で、住居南壁側東隅の部分から検出した。規模は135×(95)×88cmを測る。土圧等により、覆土上面が横滑りした堆積状況を呈しており、覆土第7層はSI-91の堆積土第7層と同一の土層である。覆土中から土器と共に鉄製品が出土している。

[堆積土] 掘り方部分を含めて21層に分層した。住居廃絶後の堆積土は、第1~13層が相当する。堆積土は、地点毎で層序に違いが見られ、人為堆積状況を呈する。出土遺物についても覆土上層から出土例が多く、廃棄が伴ったことが考えられる。

(木村)

SI-92(第221、223~224図)

[位置] グリッドLX・LY-315・316で検出した。

[重複] SI-91と重複している。本遺構の堆積土がSI-91に切られており、本遺構の方が古い。

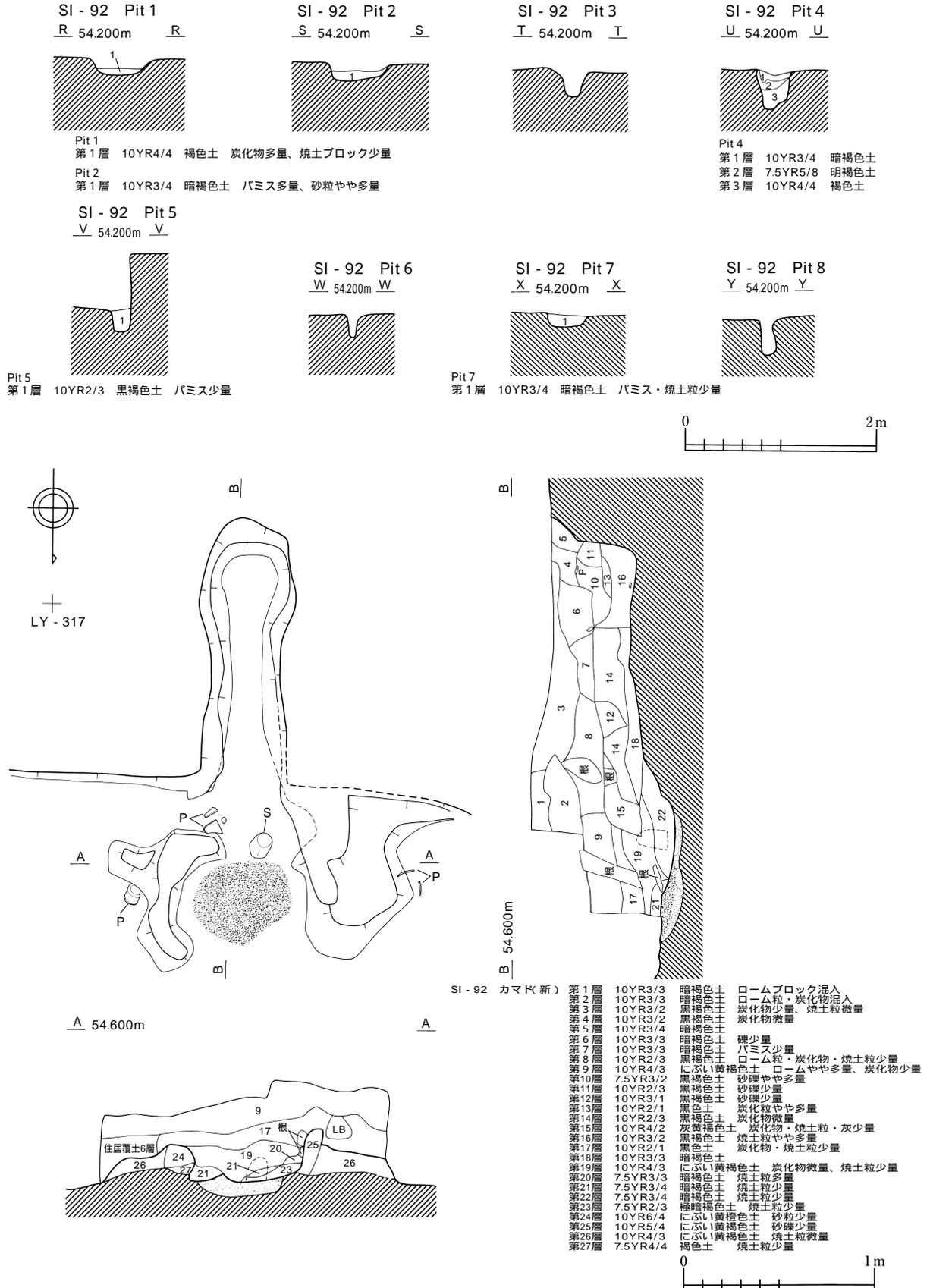
[平面形・規模] 方形を呈し、452×446×71cmを測る。床面積は20.192m²を測る。

[壁] 西壁北側をSI-91に切られているが、北壁10cm、東壁7cm、南壁35cm、西壁65cmを測る。壁面は、北壁~東壁にかけて月見野火山灰層の地山を壁面としており、やや脆弱である。それ以外の部分については堅緻である。

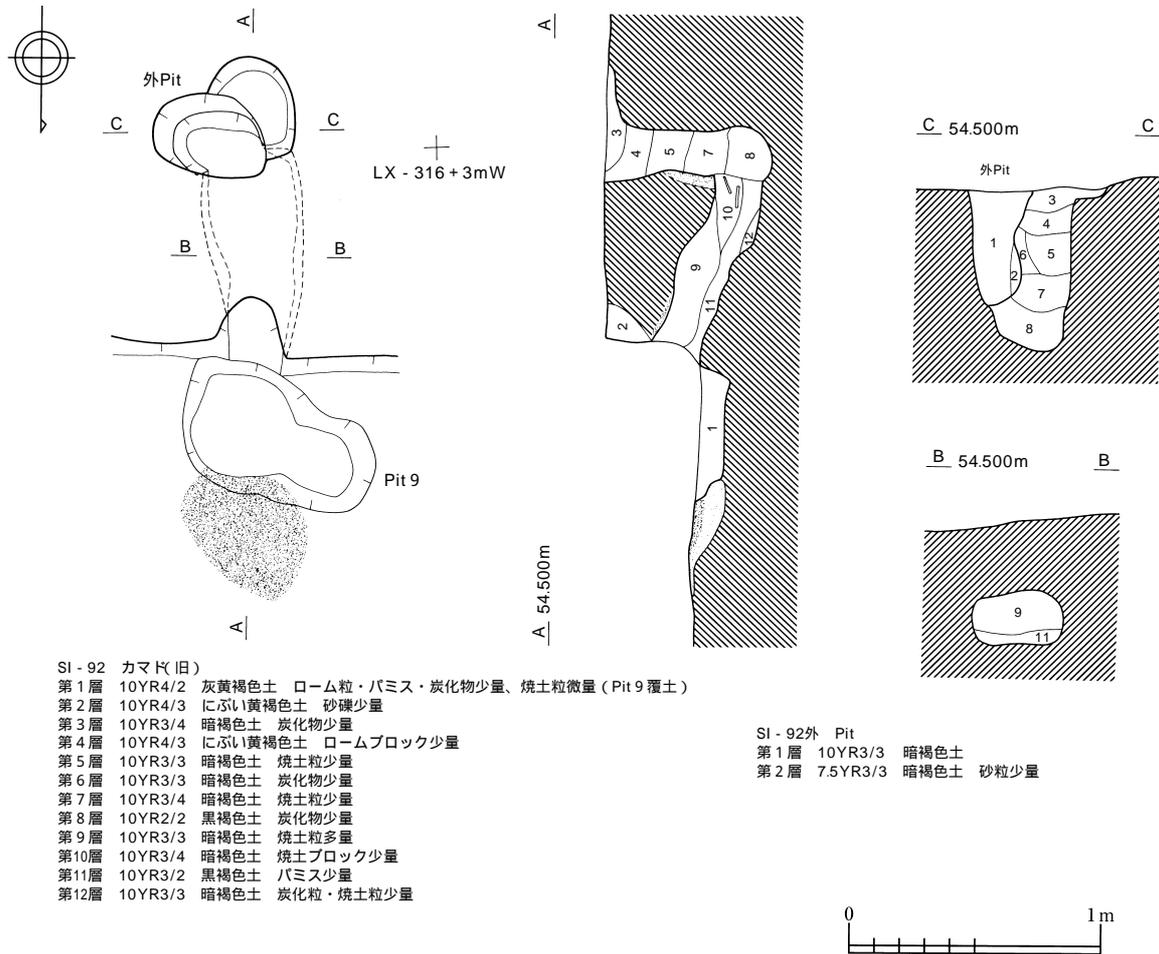
[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。また、住居中央部よりやや北壁寄りの部分(32×28cm)ならびに東壁寄りの部分(14×8cm)から赤化面を検出した。

[壁溝] 住居北壁部分から部分的に検出した。深さは2cmを測る。

[ピット] 住居内から9基検出した。各ピットの規模は、Pit1=70×53×17cm、Pit2=65×64×18cm、Pit3=41×20×26cm、Pit4=33×33×41cm、Pit5=23×21×22cm、Pit6=13×10×23cm、Pit7=41×38×14cm、Pit8=15×14×35cm、Pit9=80×50×10cmを測る。主柱配置については、Pit4が柱の設置痕が残存していたが、対応するピットを検出できなかった。また、壁柱穴についてもPit3、5など住居壁際にある程度の深さを持つピットが点在しているが明確な対応関係が見出せなかった。



第223図 SI - 92



第224図 SI - 92

[カマド] 住居南壁側から2基検出した。南壁2 (32:68)と南壁3 (72:28)の位置から検出している。新旧関係については、袖部の残存状況ならびに、南壁2側のカマドは、Pit 9によって切られていることから南壁2 < 南壁3の関係である。南壁3のカマドの構造は、半地下式で、袖部幅144cm、煙道長130cmを測る。主軸はN - 180° - Eである。構築は、燃烧部煙道部とも粘土によるもので、燃烧部天井は第19層、煙道部天井は第6、18層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。芯材は自然礫を設置している。煙道は、住居壁際から13°の角度でやや起伏を持ちながら立ち上がり、全煙道長の1/2の位置でほぼ平坦になり、煙出部へ向かう。煙出奥壁では、ほぼ垂直に近い形で立ち上がり、開口部付近で緩やかに外傾しながら立ち上がる。また、カマド左袖脇の壁面から鍬先が出土した。

南壁2のカマドの構造は、地下式で、燃烧部は下部構造のみが残存しており、煙道長は120cmを測る。煙道は、住居壁際から20°の角度で傾斜し、ピット状に掘られた煙出部と接する。また、煙出はピット状に再掘り込みが行われている。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 9層に分層した。ほぼ全般的にロームブロックを多量に含む堆積土で急激な埋め戻し等に

よる人為堆積状況を呈する。第7層中からT o - a火山灰がブロック状に混入して検出した。本遺構の廃絶後の堆積状況が急激で、S I - 91とほぼ主軸が同軸であるため、本遺構の廃絶時期とS I - 91の構築時期については、連続したものと考えられる。

(木 村)

S I - 93 (第221図)

[位置] グリッドLW・LX - 318・319で検出した。

[重複] S I - 91と重複している。本遺構の堆積土がS I - 91に切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] S I - 91に大部分が切られており、平面形は不明である。規模は、北壁の現存長で(402)cm、深さ32cmを測る。

[壁] 残存している壁は、北壁と西壁の一部のみで、北壁27cm、西壁31cmを測る。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面は堅緻である。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[カマド] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 残存部分について3層に分層した。第1層については、ロームブロック等を多量に含み人為堆積状況を呈するが、第2、3層については、自然堆積の様相を呈する。本遺構の廃絶時期とS I - 91の構築時期については、連続性は乏しいものと考えられる。

(木 村)

S I - 95 (第225～227図)

[位置] グリッドLW・LX - 318・319で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 台形を呈し、432×390×56cmを測る。床面積は16.936㎡を測る。

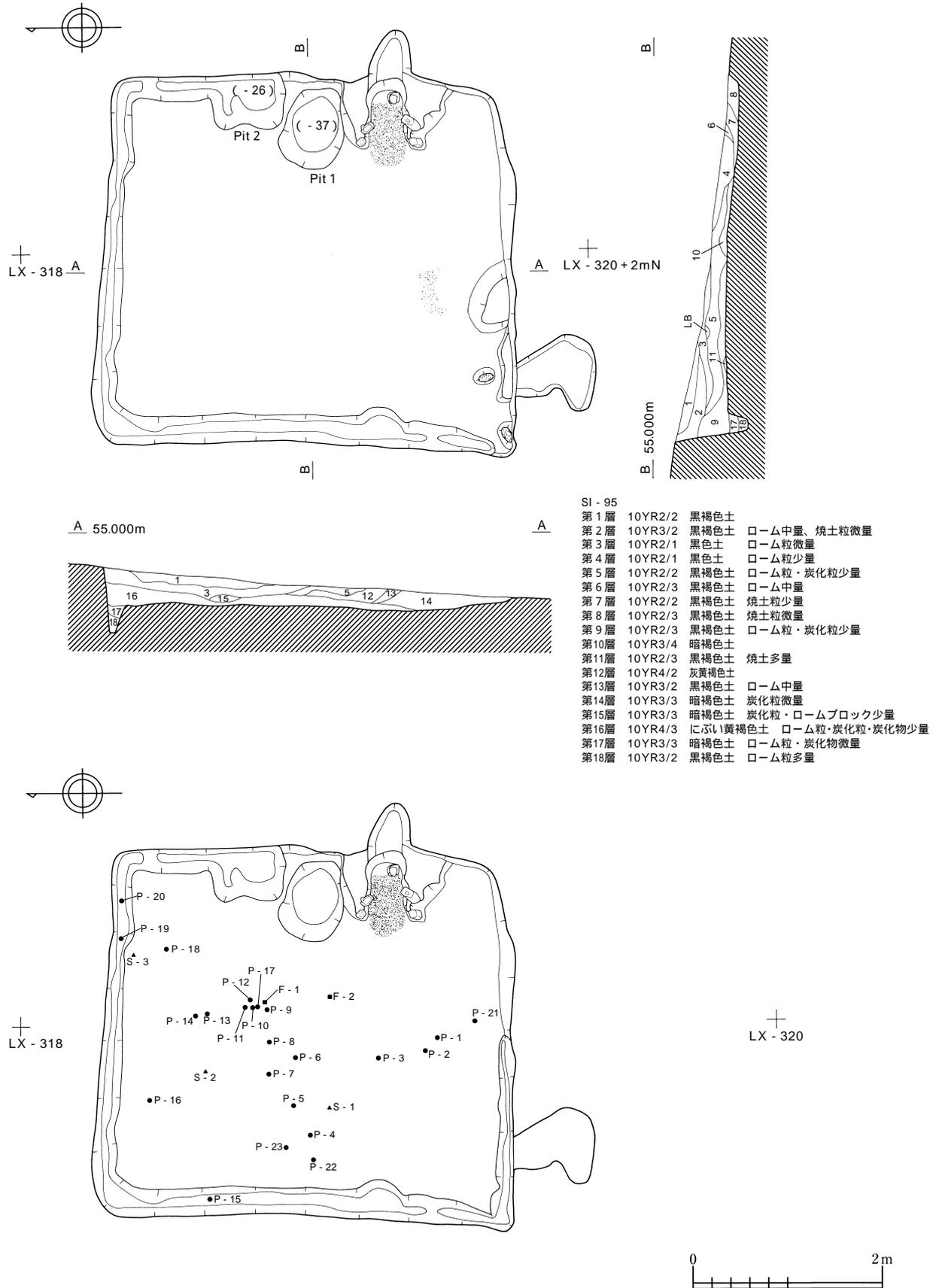
[壁] 壁高は、北壁41cm、東壁11cm、南壁8cm、西壁57cmを測る。断面形はaで、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。

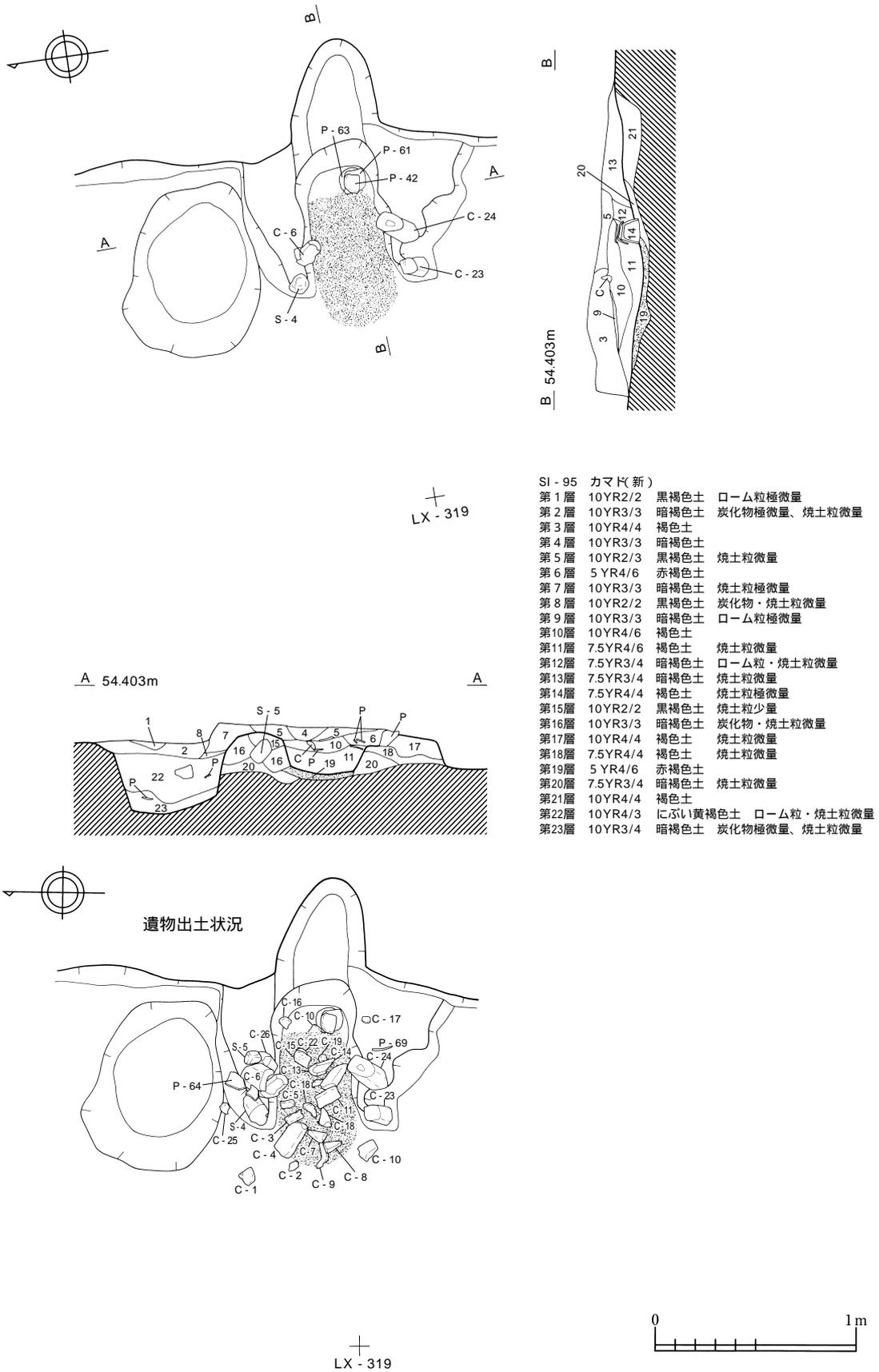
[壁溝] 住居南壁側部分を除いて検出した。深さは平均24cmを測る。

[ピット] 住居内から2基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 84×60×37cm、Pit 2 = 79×58×26cmを測る。いずれのピットも東壁寄りに集中しており、支柱穴としての機能を充足するものはないものと考えられる。

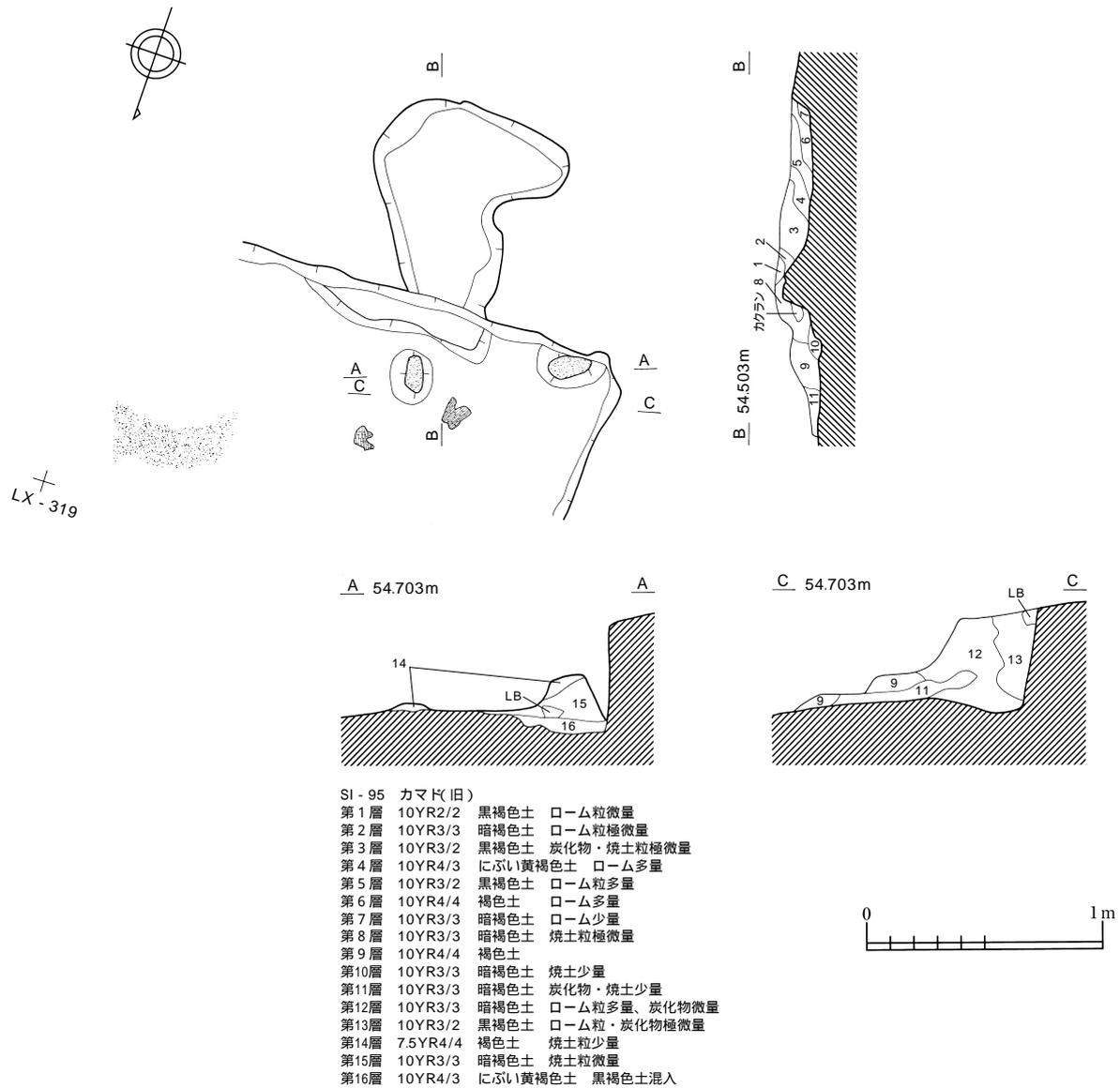
[カマド] 住居東壁側から1基、南壁側から1基検出した。東壁3(71:29)と南壁4(79:21)の位置から検出している。新旧関係は、袖の残存状況から東壁3>南壁4の関係である。東壁3のカマドの構造は、半地下式で、袖部幅98cm、煙道長143cmを測る。主軸はN - 92.5° - Eである。焚口付近から多量の羽口、自然礫等が出土している。また、袖部から構築材である羽口、自然礫が出土していることから、転用羽口ならびに自然礫を芯材とし、粘土を用いて構築したものと考えられる。



第225図 SI - 95



第226図 SI - 95



第227図 SI - 95

支脚は、土師器甕の底部を打ち欠き、倒位に3点重ねて設置している。燃烧部天井は、第11層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道部は、掘り方があり、大谷火山灰層主体の地山土を貼り付け煙道の角度を作り上げている。煙道は、住居壁際から10°の角度でやや起伏を持ちながら煙出部へ立ち上がる。南壁4のカマドは、煙道部のみの残存で、煙道長84cmを測る。主軸はN - 180° - Eである。発掘調査時点でカマドとして処理したが、煙道部の構造が不整形で、燃烧部の火床面についても明確に検出しなかったことから、カマド以外の遺構である可能性が考えられる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 18層に分層した。堆積土中にローム粒、焼土粒、炭化粒等が含まれ、灰黄褐色土などの明色系の土層が混入した堆積状況であったことから、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 96 (第228、229図)

[位置] グリッドMA・MB - 319・320で検出した。

[重複] SD - 15と重複している。新旧関係については不明である。

[平面形・規模] 方形を呈し、(746) × 694 × 114cmを測る。床面積は51.902㎡を測る。

[壁] 東壁側は削平のため壁が残存していない。壁高は、北壁60cm、南壁56cm、西壁107cmを測る。断面形はcで、壁上面で緩やかな傾斜が見られる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。

[壁溝] 南壁西隅ならびに西壁北隅から部分的に検出した。深さは平均6cmを測る。

[ピット] 住居内から28基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 69 × 58 × 28cm、Pit 2 = 25 × 20 × 4cm、Pit 3 = 47 × 39 × 17cm、Pit 4 = 38 × 33 × 11cm、Pit 5 = 38 × 33 × 48cm、Pit 6 = 57 × 32 × 17cm、Pit 7 = (115) × (50) × 16cm、Pit 8 = 47 × 32 × 16cm、Pit 9 = 47 × 23 × 14cm、Pit 10 = 38 × 33 × 13cm、Pit 11 = 33 × 25 × 25cm、Pit 12 = 50 × 35 × 12cm、Pit 13 = 36 × 18 × 14cm、Pit 14 = 35 × 31 × 17cm、Pit 15 = 40 × 35 × 16cm、Pit 16 = 45 × 40 × 11cm、Pit 17 = (80) × 72 × 24cm、Pit 18 = 53 × 42 × 23cm、Pit 19 = (47) × 37 × 20cm、Pit 20 = (90) × (35) × 14cm、Pit 21 = 85 × 58 × 21cm、Pit 22 = 28 × 25 × 50cm、Pit 23 = 37 × (28) × 11cm、Pit 24 = 72 × 41 × 30cm、Pit 25 = 99 × 56 × 17cm、Pit 26 = 42 × 24 × 18cm、Pit 27 = 34 × 24 × 17cm、Pit 28 = 80 × 70 × 76cmを測る。主柱配置については、Pit 5 が主柱穴として機能したことが考えられるが、対応するピットの配列が不明瞭であり、不明である。

[カマド] 住居南壁側から2基検出した。いずれも南壁3の位置((56:44)ならびに(66:34))から検出している。新旧関係については、袖部の残存状況等から(56:44) > (66:34)の関係である。カマド新の構造は、半地下式で、袖部幅58cm、煙道長140cmを測る。主軸はN - 175° - Wである。構築は、袖部上位ならびに燃焼部左脇から自然礫が出土しており、芯材として利用された可能性が考えられるが、袖部の中から芯材等は出土しておらず、粘土による構築である。カマドの改築による構築で、カマド旧と隣接しているため、軸線ならびに構造がやや不整形である。煙道部天井は、粘土による構築で、第5、6、8、9層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道は、住居壁際から5°の角度で起伏を持ちながら立ち上がり、全煙道長の1/2の地点で5°の角度で傾斜しながら煙出部へ向かう。煙出奥壁は、段を持ち外傾しながら立ち上がる。

カマド旧の構造は、半地下式で、袖部は残存しておらず、煙道長110cmを測る。主軸はN - 176° - Wである。煙道は、住居壁際から4°の角度で起伏を持ちながら立ち上がる。煙道奥壁では、外傾しながら緩やかに立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居中央から東壁側にかけて舟形状の土坑1基を検出した。規模は488 × 190 × 57cmを測る。急激に埋め戻されており、第1層は、住居の貼り床として機能したと考えられ、住居使用時に開口部は閉じていたものと考えられる。また、Pit 28の抜き取りに関連した第2層中からB - T m火山灰が検出している。

[堆積土] 17層に分層した。住居床面直上に堆積する第7層は、地山土主体の土層で埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。第2層中にB - T m火山灰がブロック状に堆積して検出した。

(木村)

S I - 104 (第230、231図)

[位置] グリッドLS・LT - 322・323で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、(514) × 506 × 98cmを測る。床面積は(26.52) m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁49cm、東壁30cm、南壁59cm、西壁87cmを測る。断面形はcで、壁上面の一部で緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。

[壁溝] 断続しながら全周する形で検出した。深さは平均13cmを測る。

[ピット] 住居内から6基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 59 × 50 × 15cm、Pit 2 = 125 × 113 × 28cm、Pit 3 = 42 × 32 × 8cm、Pit 4 = 36 × 35 × 10cm、Pit 5 = 20 × 18 × 4cm、Pit 6 = 12 × 11 × 5cmを測る。いずれのピットも浅く、支柱穴としての機能を充足し得るものはないと考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(70:30)の位置から検出している。構造は、地下式で、袖部幅(60)cm、煙道長135cmを測る。主軸はN - 178.5° - Eである。カマド検出時点で燃焼部は、多量のロームブロック・自然礫・土器を検出・出土しており破壊された検出状況であった。燃焼部の構築は、検出状況から自然礫を芯材として利用し、粘土を用いて構築したものと考えられる。燃焼部天井は、破壊によりブロック状に堆積している。煙道部は、月見野火山灰の地山層を掘り込む形で構築されており、煙出開口部では、掘り方を持ち、暗褐色土層を充填して煙出を構築している。煙道は、住居壁際から10°の角度で緩やかに傾斜し、ピット状に掘り込まれた煙出部へ向かう。煙出奥壁は垂直に近い形で立ち上がり、途中で段状に角度を変え立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 16層に分層した。堆積土中にロームブロック等が多量に含まれ、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 105 (第232図)

[位置] グリッドLW - 323で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、258 × 230 × 58cmを測る。床面積は6.8m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁28cm、東壁12cm、南壁34cm、西壁52cmを測る。断面形はaで、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。東壁側は、黒褐色土層を壁面としており、脆弱である。それ以外の壁については、地山を壁面としており堅緻である。

[床] 月見野火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面はしまりがあり、堅緻である。

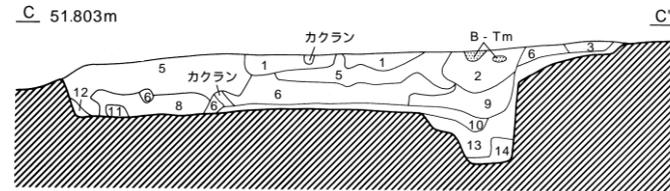
[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から2基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 31 × 28 × 14cm、Pit 2 = 26 × 21 × 3cmを測る。住居内のピットについては支柱穴の機能は充足できないものと考えられる。住居外にSB - 09があることから外柱穴としての要素が考えられる。

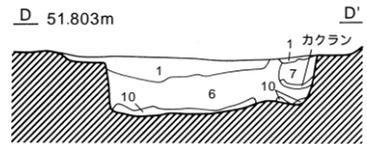
[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁3(67:33)の位置から検出している。構造は、半地



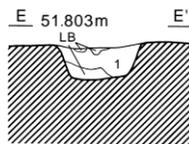
SI - 96 SK - 1



SI - 96 SK - 1

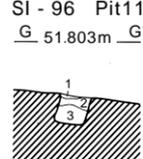
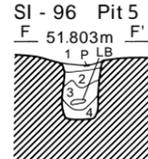


SI - 96 Pit 1



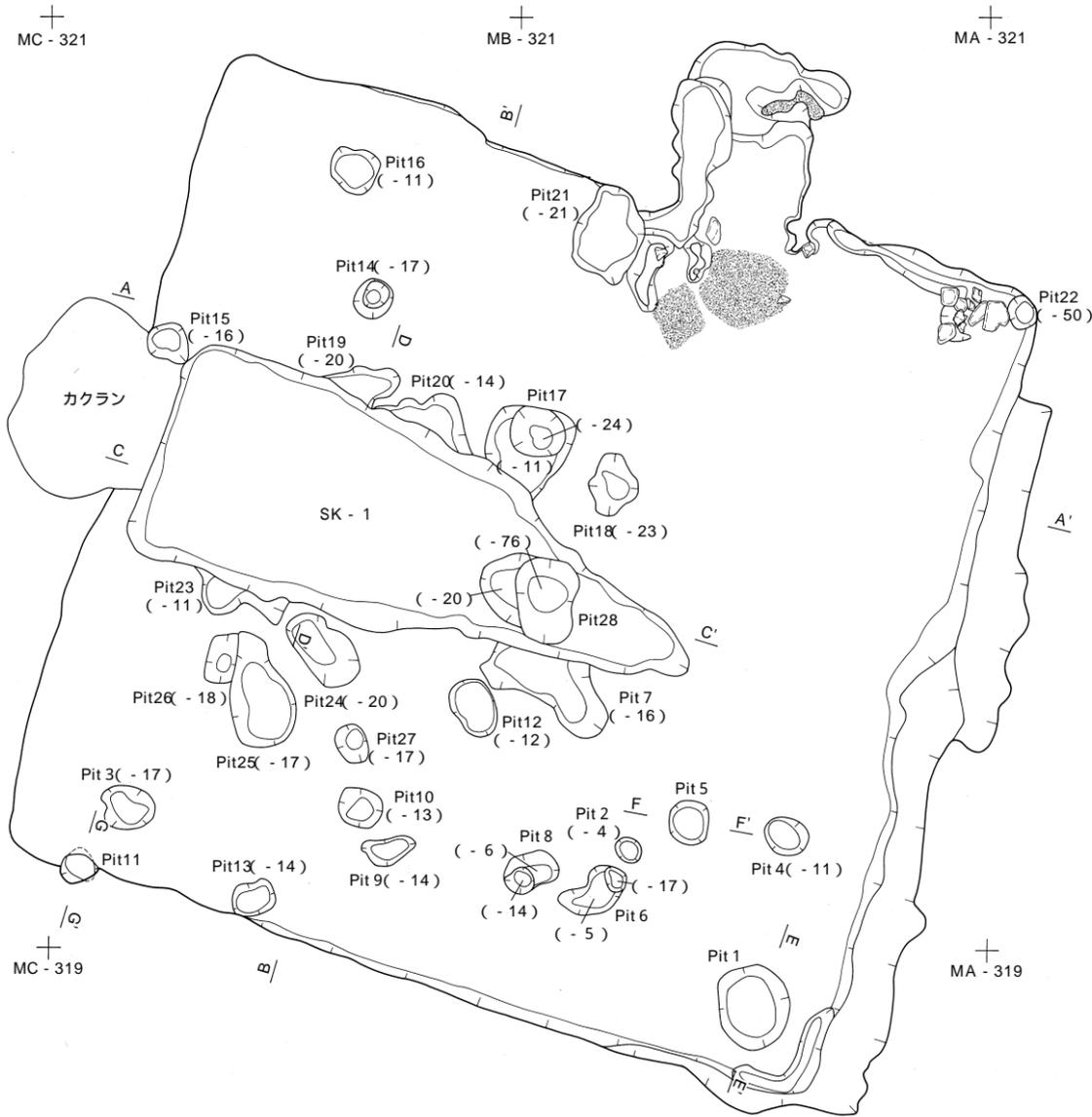
- SK - 1
- 第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化物・焼土粒微量
 - 第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・焼土粒微量、炭化物極微量
 - 第3層 10YR5/3 にぶい黄褐色土
 - 第4層 7.5YR4/4 褐色土 焼土粒極微量
 - 第5層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒・炭化物微量、焼土粒少量
 - 第6層 10YR4/4 褐色土 炭化物・焼土粒極微量
 - 第7層 10YR3/4 暗褐色土 ローム多量
 - 第8層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒多量、炭化物・焼土粒極微量
 - 第9層 7.5YR4/4 褐色土 炭化物極微量
 - 第10層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物・焼土粒極微量
 - 第11層 10YR4/4 褐色土 炭化物・焼土粒極微量
 - 第12層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒少量、炭化物・焼土粒微量
 - 第13層 7.5YR4/4 褐色土
 - 第14層 7.5YR4/4 褐色土 炭化物・焼土粒微量

Pit 1
第1層 10YR3/3 暗褐色土
LB 7.5YR4/4 褐色土

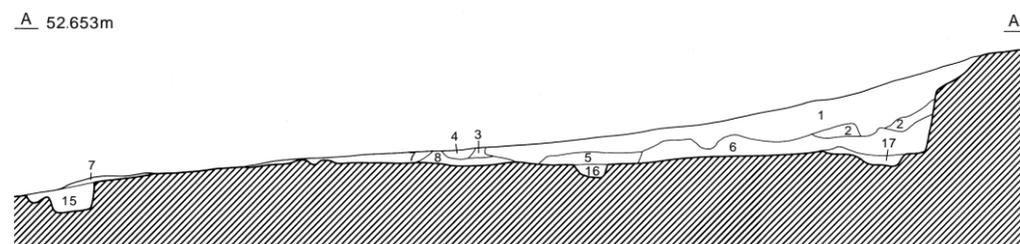


- Pit 5
- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物極微量、焼土粒微量
 - 第2層 7.5YR4/4 褐色土
 - 第3層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒多量、焼土粒微量
 - 第4層 7.5YR4/4 褐色土

- Pit 11
- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒微量
 - 第2層 10YR4/4 褐色土
 - 第3層 10YR3/3 暗褐色土 ローム多量



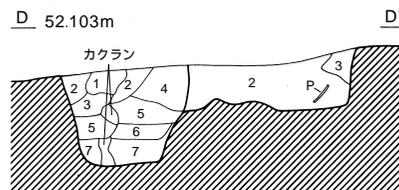
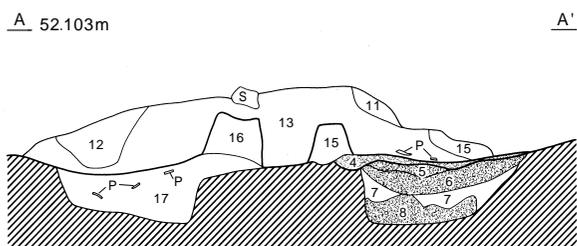
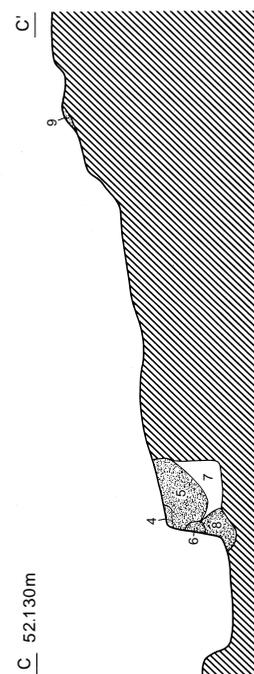
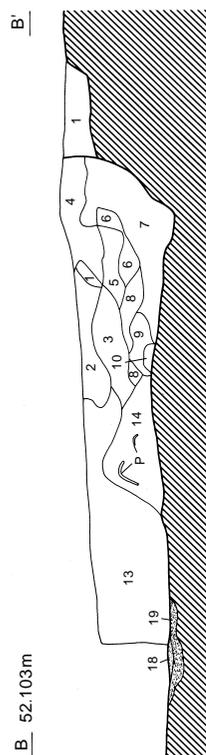
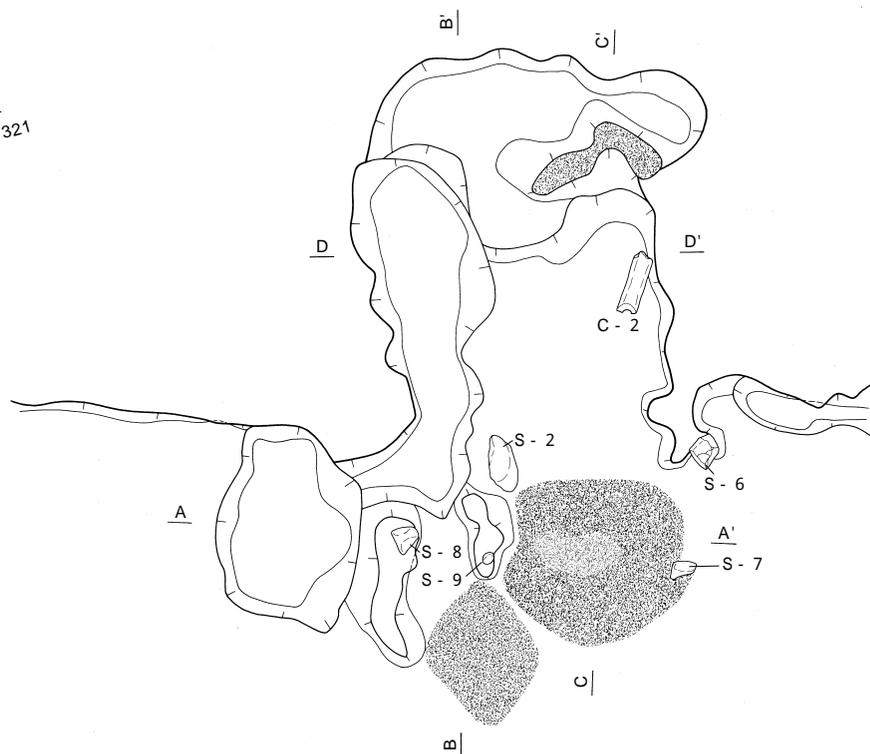
- SI - 96
- 第1層 10YR3/1 黒褐色土 ローム粒多量、炭化粒少量
 - 第2層 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒少量、火山灰(B-Tm)ブロック混入
 - 第3層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒多量
 - 第4層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒多量
 - 第5層 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒・炭化粒少量
 - 第6層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒少量
 - 第7層 10YR4/4 褐色土 炭化粒多量
 - 第8層 10YR4/3 にぶい黄褐色土
 - 第9層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒微量
 - 第10層 10YR3/2 黒褐色土
 - 第11層 10YR3/2 黒褐色土
 - 第12層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒微量
 - 第13層 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒微量
 - 第14層 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒微量、焼土粒少量
 - 第15層 10YR4/4 褐色土 炭化物極微量
 - 第16層 7.5YR4/3 褐色土 炭化物・焼土粒微量
 - 第17層 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒少量



第228図 SI - 96

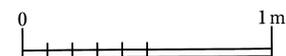


MB - 321

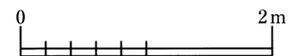
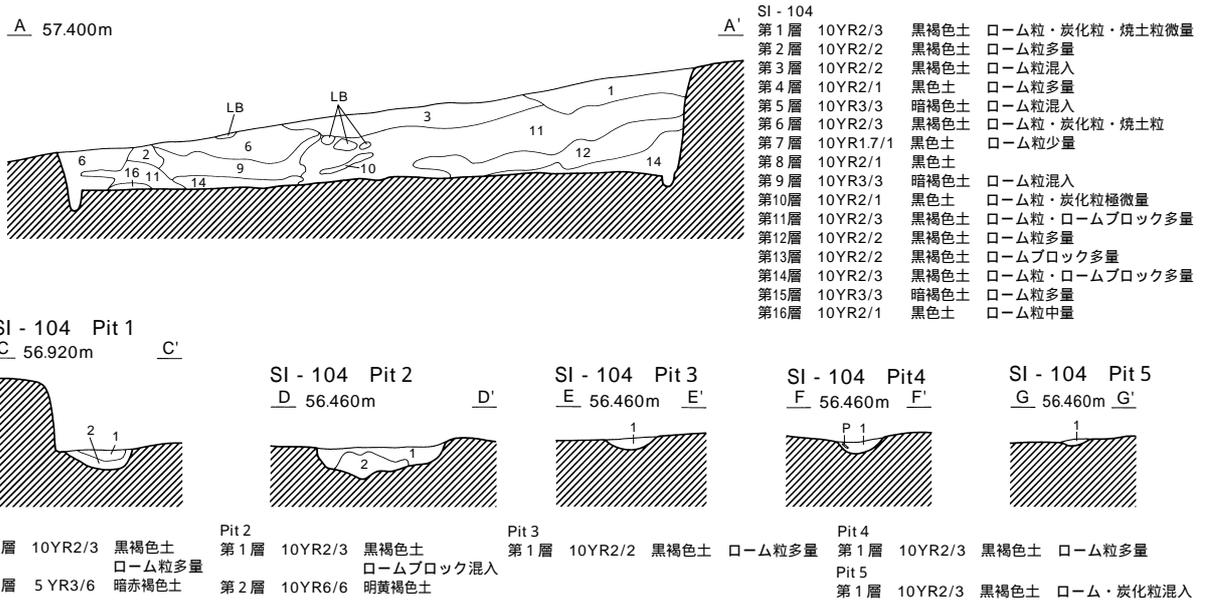
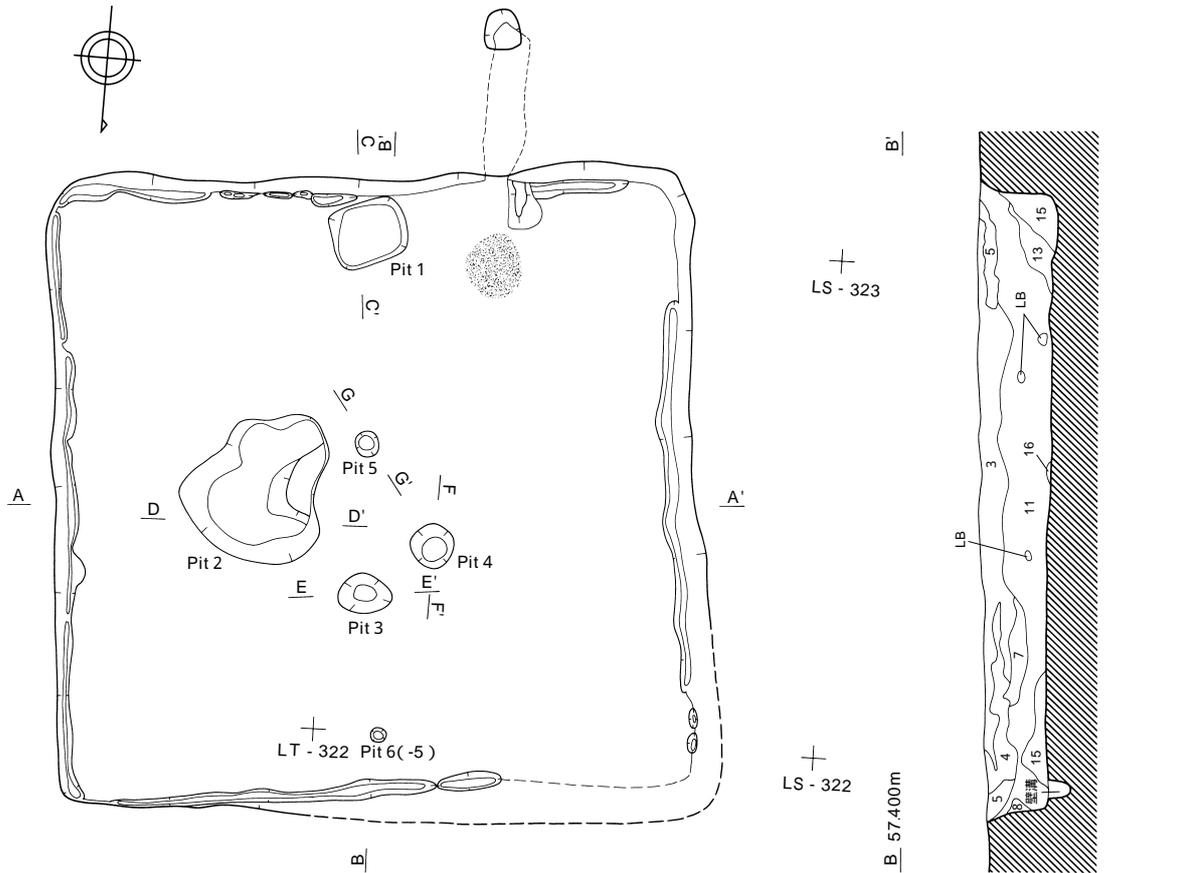


SI - 96 カマド(新)			
第1層	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒・焼土粒微量
第2層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒・焼土粒微量
第3層	10YR3/4	暗褐色土	炭化粒微量、焼土粒多量
第4層	7.5YR4/4	褐色土	
第5層	5 YR3/6	暗赤褐色土	
第6層	7.5YR4/4	褐色土	焼土多量
第7層	7.5YR3/4	暗褐色土	焼土多量
第8層	7.5YR4/4	褐色土	焼土粒微量
第9層	5 YR4/6	赤褐色土	
第10層	7.5YR4/4	褐色土	焼土粒少量
第11層	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒極微量
第12層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒微量、焼土粒極微量
第13層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	ローム粒・焼土粒・炭化物微量
第14層	10YR4/4	褐色土	炭化物・焼土粒極微量
第15層	7.5YR4/4	褐色土	焼土粒少量
第16層	10YR3/4	暗褐色土	炭化物・焼土粒微量
第17層	7.5YR4/4	褐色土	炭化物微量、焼土粒少量
第18層	7.5YR4/4	褐色土	
第19層	5 YR4/6	赤褐色土	

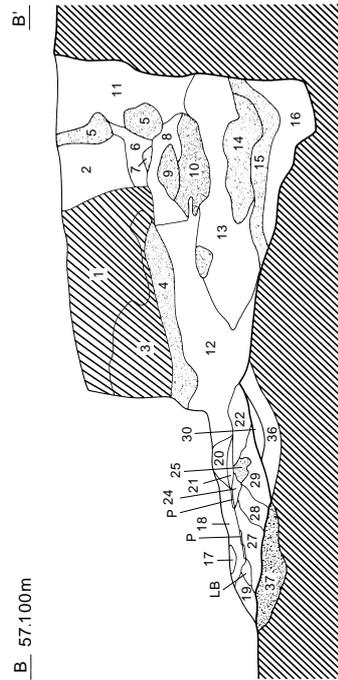
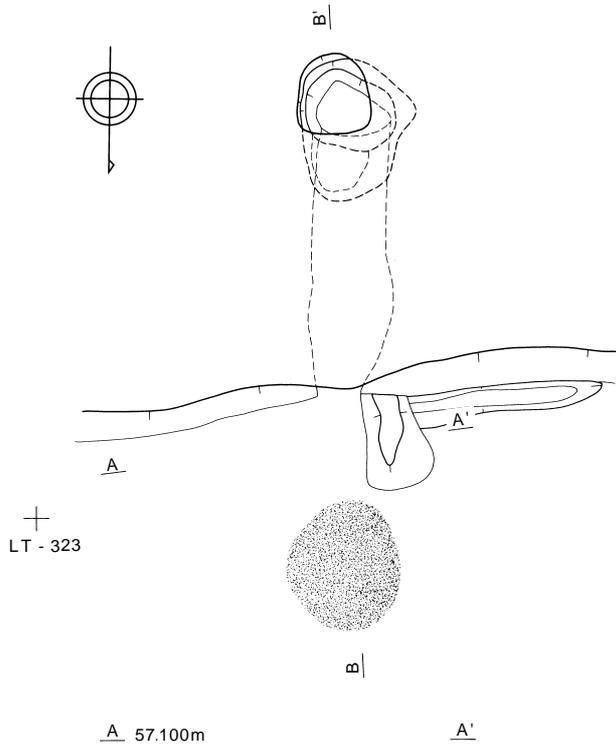
SI - 96 カマド(旧)			
第1層	7.5YR4/4	褐色土	
第2層	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒微量
第3層	5 YR4/4	にぶい赤褐色土	
第4層	7.5YR4/4	褐色土	焼土少量
第5層	5 YR4/8	赤褐色土	
第6層	5 YR4/6	赤褐色土	
第7層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒・焼土粒少量
第8層	5 YR4/6	赤褐色土	
第9層	5 YR4/4	にぶい赤褐色土	



第229図 SI - 96

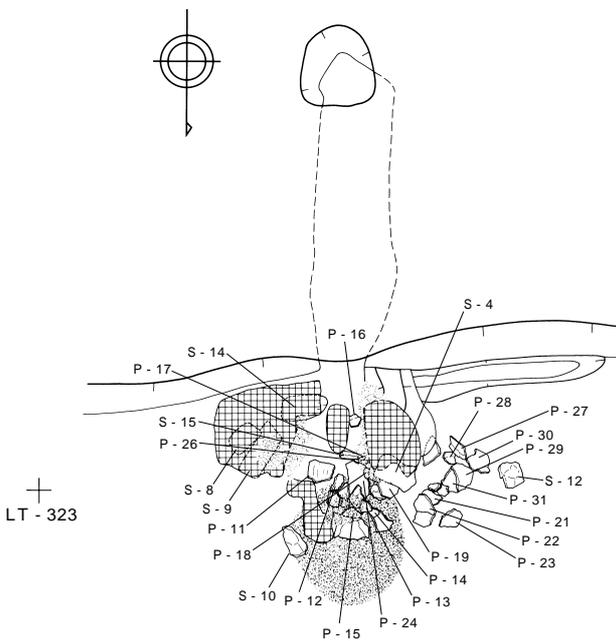
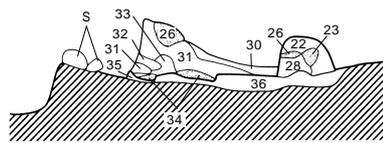


第230図 SI - 104



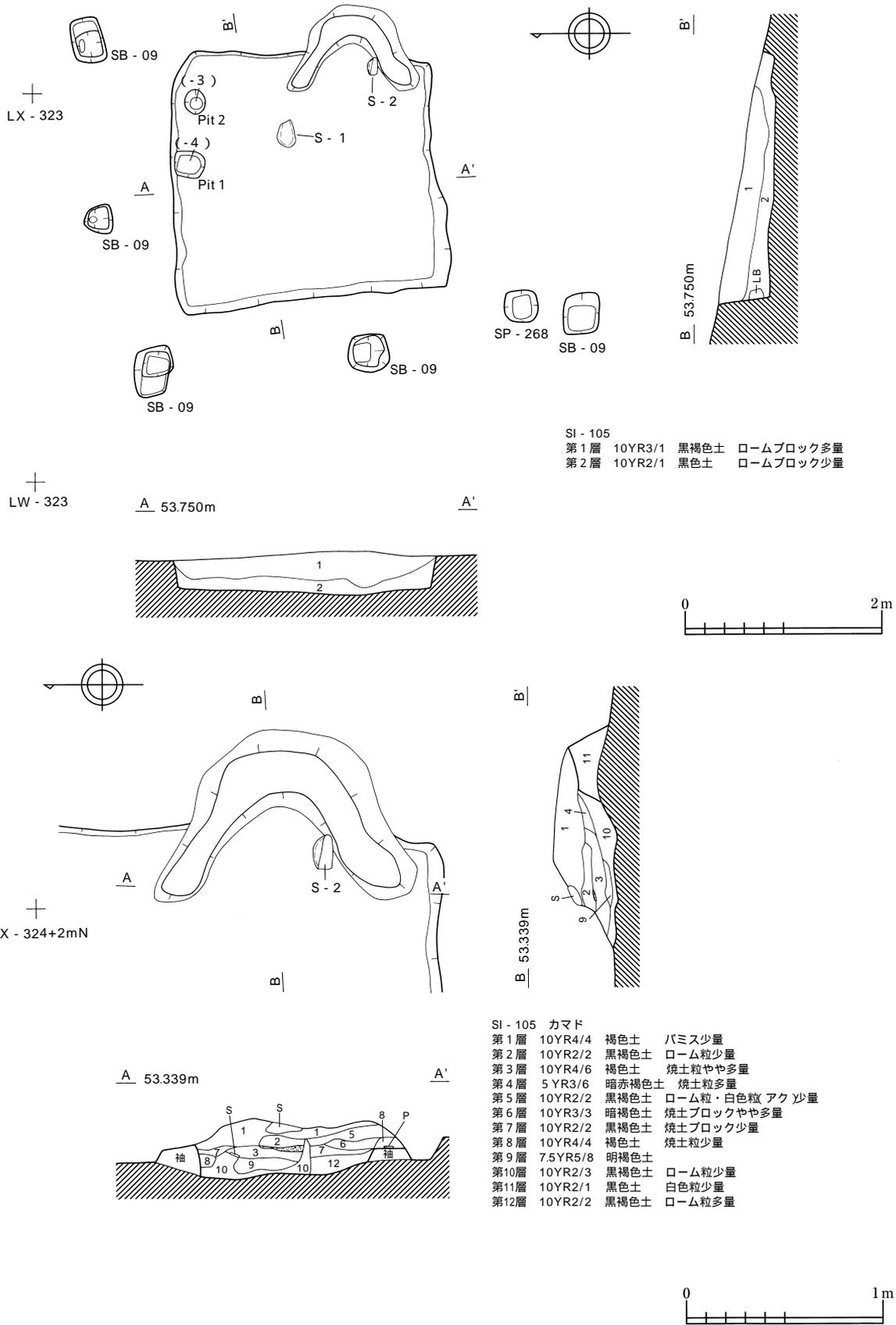
A 57.100m

A'



- SI - 104 カマド
- 第1層 10YR2/3 黒褐色土
 - 第2層 10YR3/3 暗褐色土 □-ム粒多量
 - 第3層 10YR6/8 明黄褐色土
 - 第4層 5YR4/8 赤褐色土
 - 第5層 5YR3/6 暗赤褐色土
 - 第6層 10YR3/3 暗褐色土 □-ム粒多量、焼土粒微量
 - 第7層 5YR3/6 暗赤褐色土
 - 第8層 7.5YR3/4 暗褐色土 □-ム粒、焼土粒微量
 - 第9層 5YR4/6 赤褐色土
 - 第10層 5YR3/6 暗赤褐色土
 - 第11層 10YR3/4 暗褐色土 □-ム粒、焼土粒少量
 - 第12層 7.5YR2/3 極暗褐色土 □-ム粒、焼土粒少量
 - 第13層 7.5YR3/4 暗褐色土 焼土粒多量
 - 第14層 5YR4/8 赤褐色土
 - 第15層 5YR2/2 黒褐色土
 - 第16層 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒混入
 - 第17層 10YR3/4 暗褐色土 □-ム粒混入
 - 第18層 10YR2/2 黒褐色土 □-ム粒、焼土粒微量
 - 第19層 7.5YR4/4 褐色土 焼土粒混入
 - 第20層 7.5YR4/6 褐色土
 - 第21層 5YR4/8 赤褐色土
 - 第22層 7.5YR4/4 褐色土 焼土粒混入
 - 第23層 2.5YR4/6 赤褐色土
 - 第24層 7.5YR3/4 暗褐色土 焼土粒多量
 - 第25層 2.5YR4/8 赤褐色土
 - 第26層 2.5YR3/6 暗赤褐色土
 - 第27層 7.5YR2/2 黒褐色土 焼土粒混入
 - 第28層 7.5YR3/4 暗褐色土 焼土粒混入
 - 第29層 7.5YR3/4 暗褐色土 炭化粒多量、焼土粒
 - 第30層 2.5YR4/6 赤褐色土
 - 第31層 7.5YR4/4 褐色土 焼土粒少量
 - 第32層 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒微量
 - 第33層 7.5YR4/4 褐色土 焼土粒混入
 - 第34層 5YR2/3 極暗赤褐色土
 - 第35層 2.5YR3/6 暗赤褐色土
 - 第36層 7.5YR4/4 褐色土 □-ム粒混入
 - 第37層 2.5YR4/6 赤褐色土

第231図 SI - 104



第232図 SI - 105

下式で、袖部幅130cm、煙道長30cmを測る。主軸はN - 88° - Eである。粘土による構築で、右袖側から自然礫が出土していることから一部芯材として用いられた可能性が考えられる。燃焼部から火床面が検出できなかった。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で角度を12°に変え、外傾しながら立ち上がる。

[その他の付属施設] [ピット] の項目で触れたが、住居を囲む形でS B - 09を検出している。住居南壁側、東壁側の部分からピットを検出できなかったことから柵としての可能性も持ちえている。

[堆積土] 2層に分層した。堆積土中にロームブロックが混入していることから、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木 村)

S I - 106 (第233、234図)

[位 置] グリッドL Y・L Z - 324・325で検出した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 台形を呈し、458×434×74cmを測る。床面積は19.862㎡を測る。

[壁] 大部分が削平を受けており、残存している部分は西壁ならびに南壁の一部に限られる。北壁(8)cm、東壁(9)cm、南壁15cm、西壁35cmを測る。西壁の壁面は地山であるが、他の壁は暗褐色土ならびに黒褐色土層を壁面としており脆弱である。

[床] 北西部分を除き、掘り方を持ち、黒褐色土とロームブロックの混合層を貼り床としている。床面はやや起伏があり、しまりがあるが、やや脆弱である。

[壁 溝] 住居東壁を除いて検出した。深さは平均8cmを測る。

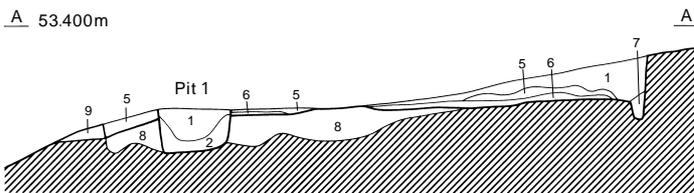
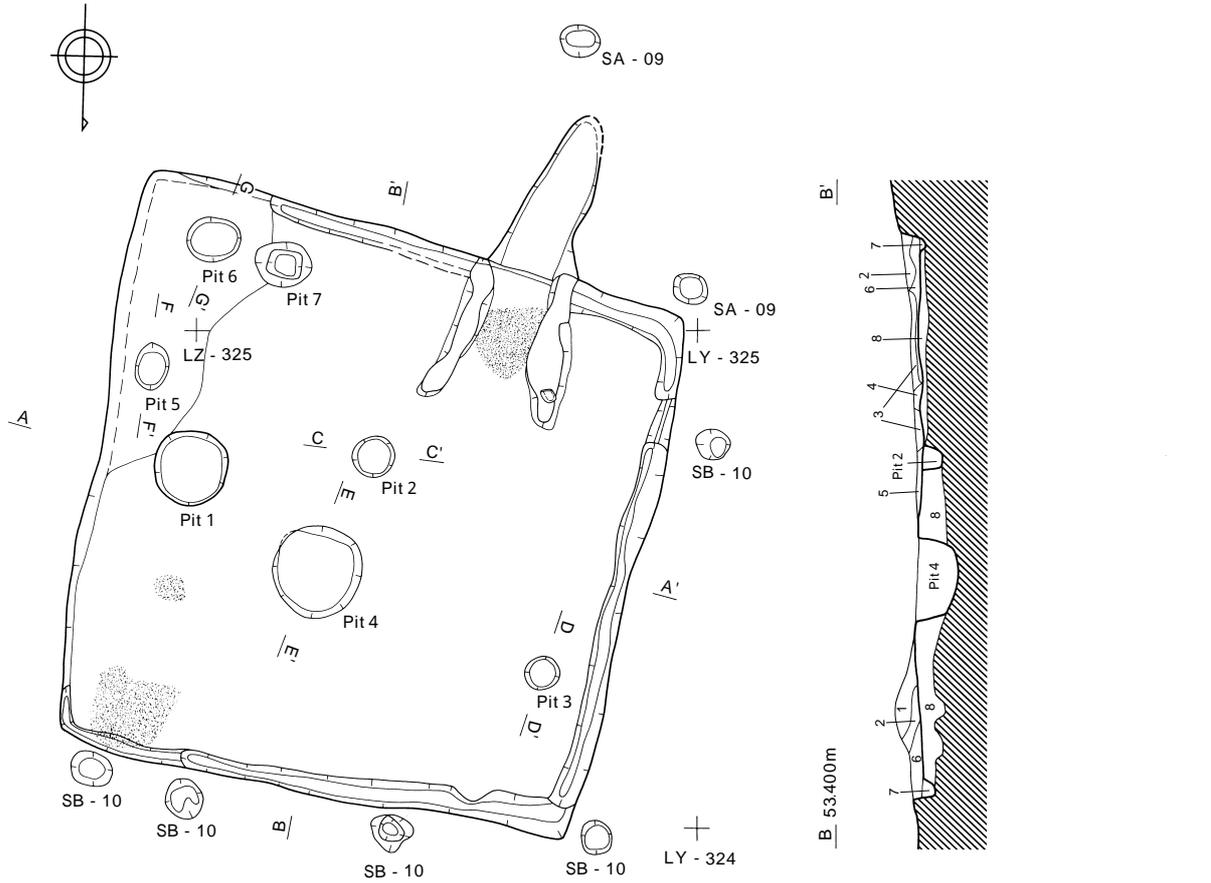
[ピット] 住居内から7基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 61×58×35cm、Pit 2 = 34×33×14cm、Pit 3 = 27×27×8cm、Pit 4 = 75×70×10cm、Pit 5 = 38×26×20cm、Pit 6 = 43×36×8cm、Pit 7 = 46×35×34cmを測る。このうち、Pit 1については、住居堆積土第5、6層を切った形で掘り込まれているが、堆積土そのものの残存状況が悪く、明確に新旧関係を提示できなかったため、本遺構に帰属させ提示した。主柱配置については、いずれのピットも浅く、主柱穴としての機能を充足し得ないものと考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(67:33)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅100cm、煙道長135cmを測る。主軸はN - 160° - Wである。燃焼部は、粘土ならびに黒褐色土による構築で、自然礫が、袖ならびに火床面上から出土していることから芯材として自然礫を利用した可能性が考えられる。支脚は、転用羽口と土師器小甕を組み合わせて設置している。支脚の設置部分は、粘土ならびに黒褐色土を使い、住居床面よりやや高い位置に設置している。

燃焼部ならびに煙道部天井は、第2、3層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道は住居壁際から22°の角度で起伏を持ちながら立ち上がり、煙出部付近でほぼ平坦になる。煙出奥壁は外傾しながら立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居北壁側と西壁の一部でS B - 10として取り扱った柱列がある。S I - 105と同様住居全体を囲う形でピットを検出しなかったため、本遺構の外柱穴としては明確に認定できない。柵等の要素についても考えられる。

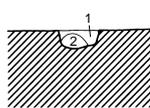
[堆積土] 掘り方部分を含めて9層に分層した。住居廃絶後の堆積土は第1～6層で、住居床直に堆



- SI - 106
- | | | | |
|-----|-----------|---------|-------------------|
| 第1層 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 火山灰 (To-a)・ローム粒少量 |
| 第2層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒・焼土粒中量 |
| 第3層 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 焼土粒混入 |
| 第4層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | ローム粒多量、焼土粒少量 |
| 第5層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | ローム粒少量 |
| 第6層 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 | パミス少量 |
| 第7層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ローム粒中量 |
| 第8層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | ロームブロック・ローム粒中量 |
| 第9層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | パミス少量 |

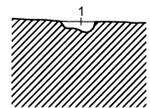
- Pit 1
- | | | | |
|-----|---------|------|--------------|
| 第1層 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | ローム粒中量、焼土粒少量 |
| 第2層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒中量 |

SI - 106 Pit 2
C 52.100m C'



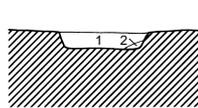
- Pit 2
- | | | | |
|-----|---------|------|--------|
| 第1層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒中量 |
| 第2層 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | |

SI - 106 Pit 3
D 52.100m D'



- Pit 3
- | | | | |
|-----|---------|------|---------------------|
| 第1層 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | ロームブロック多量
ローム粒中量 |
|-----|---------|------|---------------------|

SI - 106 Pit 4
E 52.100m E'



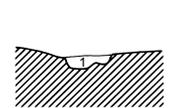
- Pit 4
- | | | | |
|-----|---------|------|---------------------|
| 第1層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ロームブロック多量
ローム粒中量 |
| 第2層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 微粒のローム粒少量 |

SI - 106 Pit 5
F 52.100m F'



- Pit 5
- | | | | |
|-----|---------|------|---------------------|
| 第1層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ロームブロック多量
ローム粒中量 |
|-----|---------|------|---------------------|

SI - 106 Pit 6
G 52.100m G'

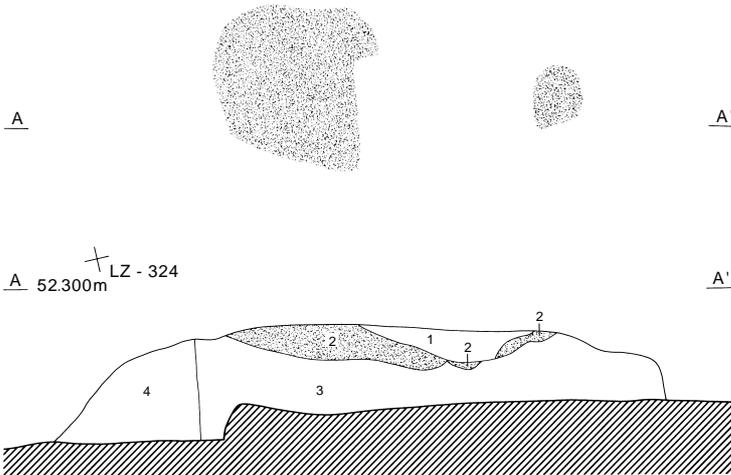


- Pit 6
- | | | | |
|-----|---------|------|--------------------|
| 第1層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ロームブロック・
ローム粒多量 |
|-----|---------|------|--------------------|

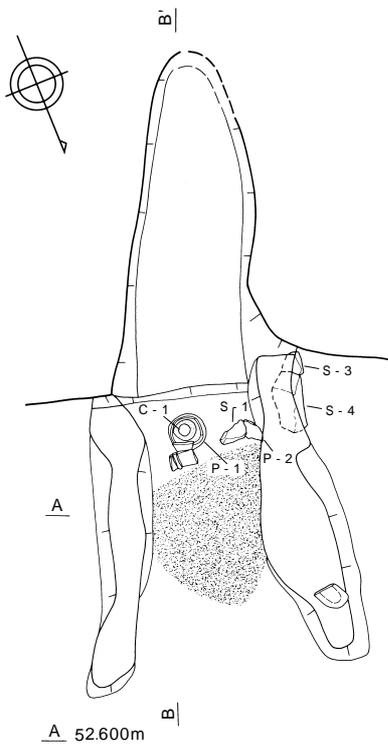


第233図 SI - 106

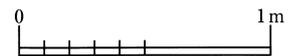
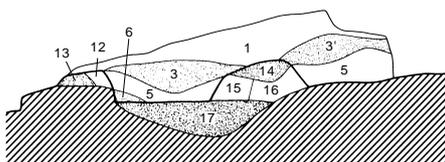
SI - 106 焼土 (S = 1/30)



焼土			
第1層	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒中量 焼土ブロック少量
第2層	7.5YR4/6	褐色土	炭化粒少量
第3層	10YR2/2	黒褐色土	焼土ブロック少量 ローム粒中量
第4層	10YR2/1	黒色土	火山灰 To-a 少量 ローム粒中量



SI - 106 カマド			
第1層	10YR2/1	黒色土	ローム粒中量 炭化粒・火山灰 To-a 少量
第2層	5 YR4/8	赤褐色土	
第3層	5 YR5/6	明赤褐色土	黒褐色土(10YR2/2)混入
第3'層	5 YR5/8	明赤褐色土	黒褐色土混入
第4層	10YR2/2	黒褐色土	微粒の焼土粒中量
第5層	10YR2/2	黒褐色土	ロームブロック少量 焼土粒中量・ローム粒中量
第6層	5 YR4/4	にぶい赤褐色土	炭化粒少量
第7層	10YR3/1	黒褐色土	ローム粒中量・微粒の焼土粒中量
第8層	5 YR5/6	明赤褐色土	バミス少量を含む
第9層	7.5YR5/6	明褐色土	炭化粒・ローム粒少量
第10層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒少量・焼土粒少量
第11層	10YR3/4	暗褐色土	微粒の焼土粒・ローム粒少量
第12層	10YR3/3	暗褐色土	炭化粒多量・焼土粒中量
第13層	5 YR4/4	にぶい赤褐色土	炭化粒中量
第14層	5 YR4/4	にぶい赤褐色土	炭化粒少量
第15層	10YR3/2	黒褐色土	焼土ブロック全体に多量 ロームブロック中量 炭化物少量を含む
第16層	10YR2/2	黒褐色土	ロームブロック・焼土粒中量 炭化粒少量
第17層	5 YR4/6	赤褐色土	炭化粒少量



第234図 SI - 106

積する第5、6層は、月見野火山灰主体の地山土ならびにローム粒が混入する土層で廃棄あるいは埋め戻しに伴う堆積土である。住居上層に堆積する第1層については、自然堆積で、T o - a火山灰が混入する。また、住居北壁左隅の部分から焼土層を60×55cm、22×20cmの範囲で2ヶ所検出した。

(木 村)

S I - 107 (第235、236図)

[位置] グリッドME・MD - 323で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、368×349×76cmを測る。床面積は12.265m²である。

[壁] 壁高は、北壁59cm、東壁19cm、西壁66cm、南壁46cmを測る。断面形はdで、壁は傾斜をもって緩やかに立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としており、堅緻である。

[壁溝] 南西隅において部分的に途切れるが、断続的にほぼ全周している。深さは平均7cmである。

[ピット] 竪穴内より2基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 32×31×33cm、Pit 2 = 25×25×11cmを測る。支柱穴として機能していたものはないと考えられる。

[カマド] 南壁3 (69:31) の位置から1基検出した。掘りすぎのため、燃烧部の詳しい構造及び堆積状況は不明である。推定袖部幅60cm、煙道長80cmを測る。主軸はN - 179° - Eである。部分的に残存する袖の状況からみると、粘土によって構築されており、芯材は確認できなかった。火床面は62×54cmの範囲で赤化している。煙道部は、半地下式を呈し、住居の壁で急激に立ち上がり、30°の角度で緩やかに立ち上がった後、煙出部付近で平坦となる。

北壁3の(76:24)の位置から、カマドの煙道状の突出部を検出した。底面において、焼土粒を多量に確認できたが、火床面や袖は確認できなかった。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 12層に分層した。上層は黒色、黒褐色を主体とする土層、中層から下層は黒褐色を主体とする土層である。中層にあたる第6、7層において、鍛冶炉の操業によって排出された鉄滓、炉壁等の遺物が多量に出土した。また、第6層の上面においては、部分的に焼土層が確認できた。本遺構から出土した鍛冶関連遺物は、炉壁(溶解物を含む)410g、流動滓4g、椀形鍛冶滓12,518g、椀形鍛冶滓(含鉄)1,082g、鉄塊系遺物()8g、含鉄鉄滓566g、総重量14,588gであり、金床石の破片が1点出土している。これらの遺物及び焼土は、近隣に存在した鍛冶炉において排出された遺物が、廃絶した住居の落ち込みに廃棄されたものと考えられる。本遺構の堆積は、鍛冶関連遺物の廃棄行為から、人為的要因が強いと考えられる。

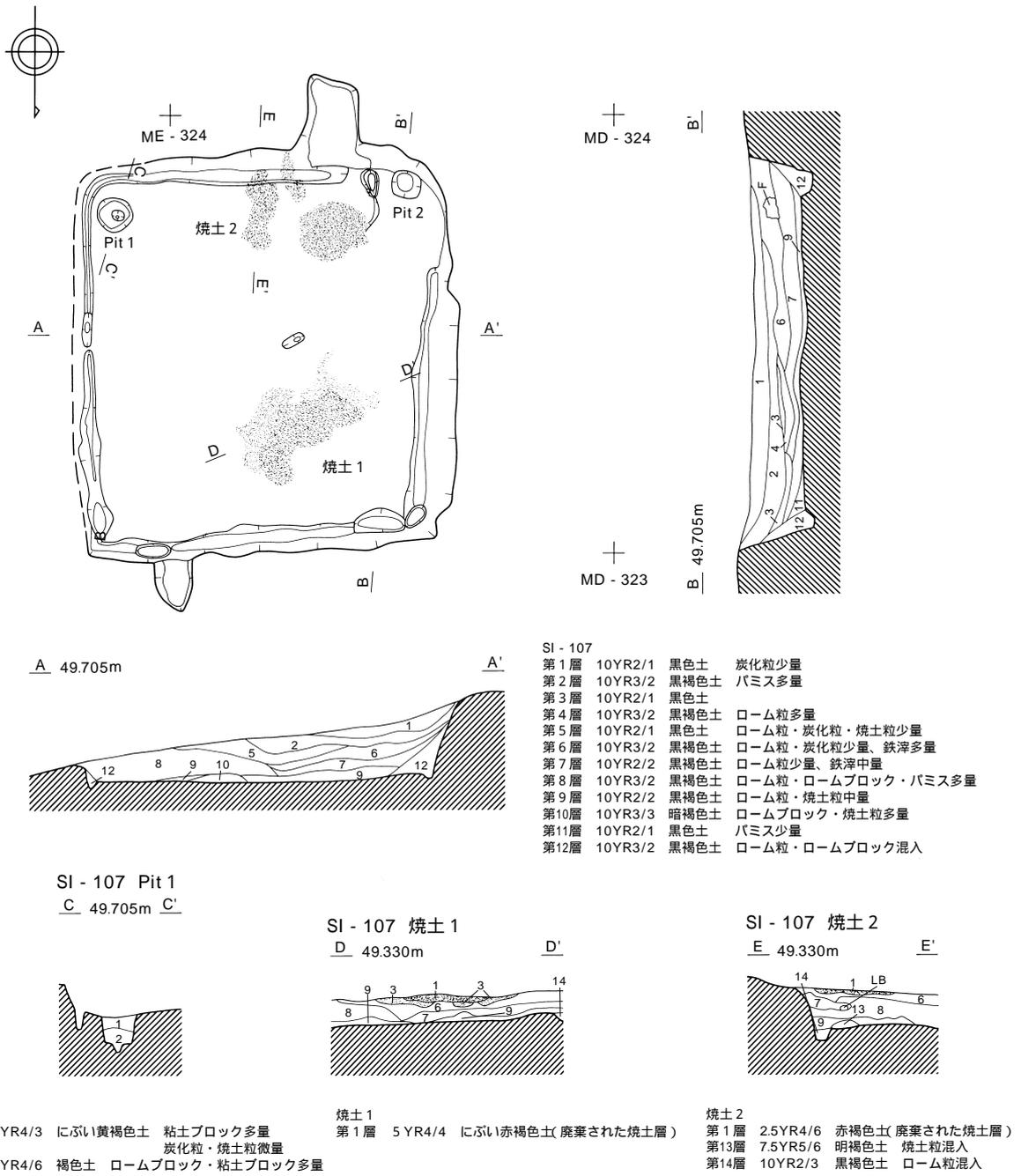
(設 楽)

S I - 108 (第237~242図)

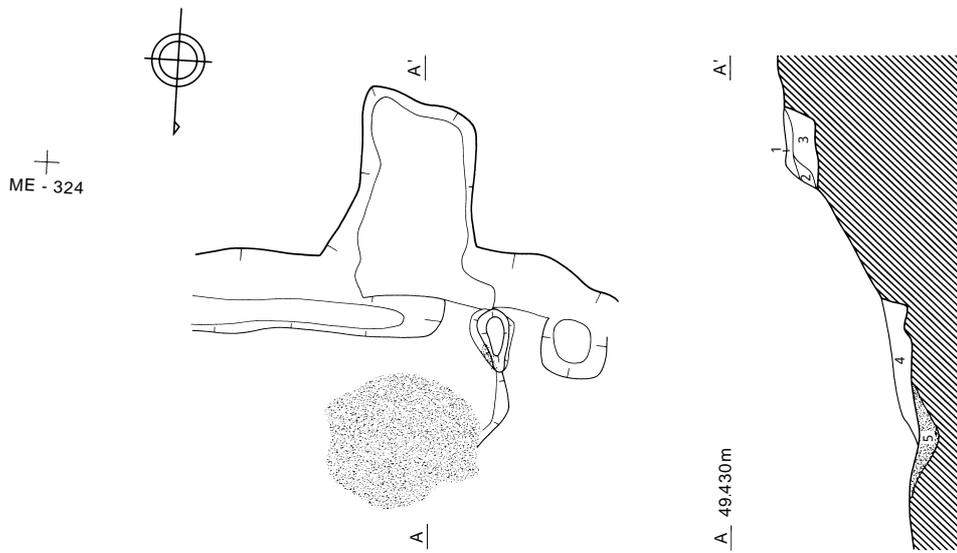
[位置] グリッドLO・LP・LQ - 326~328で検出した。

[重複] SP - 103、104と重複している。本遺構の堆積土上にSP - 103、104が構築されており、本遺構の方が古い。

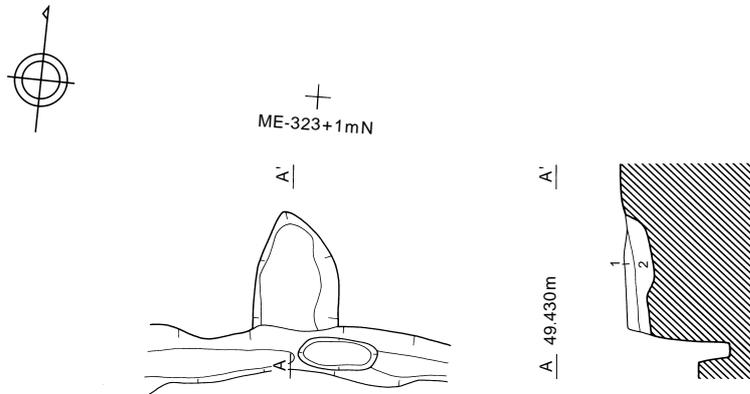
[平面形・規模] 方形を呈し、828×824×70cmを測る。床面積は67.872m²を測る。



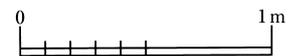
第235図 SI - 107



- SI - 107 カマド(新)
- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒・焼土粒混入
 - 第2層 5YR3/6 暗赤褐色土
 - 第3層 10YR4/4 褐色土 パミス・ローム粒混入
 - 第4層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 焼土多量
 - 第5層 5YR4/6 赤褐色土



- SI - 107 カマド(旧)
- 第1層 10YR2/1 黒色土 ローム粒混入
 - 第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒多量、底部に焼土粒多量



第236図 SI - 107

[壁] 東壁側が削平を受けており残存しておらず、壁高は、北壁28cm、南壁28cm、西壁40cmを測る。断面形はaで、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 住居東側部分に浅い掘り方を有し、大谷火山灰層の地山主体の粘土が充填されている。床面は、やや起伏があり、堅緻である。また、本遺構は、住居床面から炭化材、炭化物と共に赤化面ならびにPit 2、3、5から炭化した柱を検出したことから焼失住居である。

[壁 溝] 住居内をほぼ全周する形で検出した。深さは平均23cmを測る。東壁側の壁溝は、掘り方によって埋められており、北壁～東壁部分から壁柱穴が多数検出している。また、南壁東隅部分は、壁溝が住居壁面より外に1条設けられている。

[ピット] 掘り方部分を含めて28基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 73 × 70 × 12cm、Pit 2 = 95 × 63 × 34cm、Pit 3 = 88 × 67 × 45cm、Pit 4 = 70 × 60 × 25cm、Pit 5 = 61 × 60 × 23cm、Pit 6 = 25 × 17 × 39cm、Pit 7 = 43 × 43 × 9 cm、Pit 8 = 23 × 19 × 24cm、Pit 9 = 35 × 28 × 6 cm、Pit10 = 84 × 59 × 6 cm、Pit11 = 39 × 32 × 6 cm、Pit12 = 37 × 33 × 13cm、Pit13 = 46 × 45 × 21cm、Pit14 = 63 × 45 × 13cm、Pit15 = 20 × 19 × 24cm、Pit16 = 38 × 29 × 13cm、Pit17 = 22 × 21 × 2 cm、Pit18 = 22 × 13 × 36cm、Pit19 = 39 × 32 × 22cm、Pit20 = 43 × 20 × 21cm、Pit21 = 38 × 26 × 39cm、Pit22 = 29 × 23 × 41cm、Pit23 = 35 × 25 × 31cm、Pit24 = 38 × 38 × 8 cm、Pit25 = 31 × 29 × 15cm、Pit26 = 36 × 32 × 13cm、Pit27 = 41 × 36 × 11cm、Pit28 = 27 × 20 × 21cmを測る。本遺構は焼失住居であり、住居の焼失時点で柱が炭化した状態でPit 2、3、5から出土した。主柱配置については、Pit 2、3、4、5の4本柱であったことが考えられる。[壁 溝] の記述のとおり、住居北壁ならびに東壁から壁柱穴に相当すると考えられるピットを検出している。また、西壁中央部からPit 6、南壁中央部からPit28を検出しており、炭化材ならびに炭化物の検出状況を併せて、本遺構の壁については、板壁と草壁を組み合わせた可能性が考えられる。

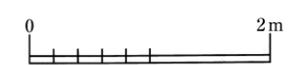
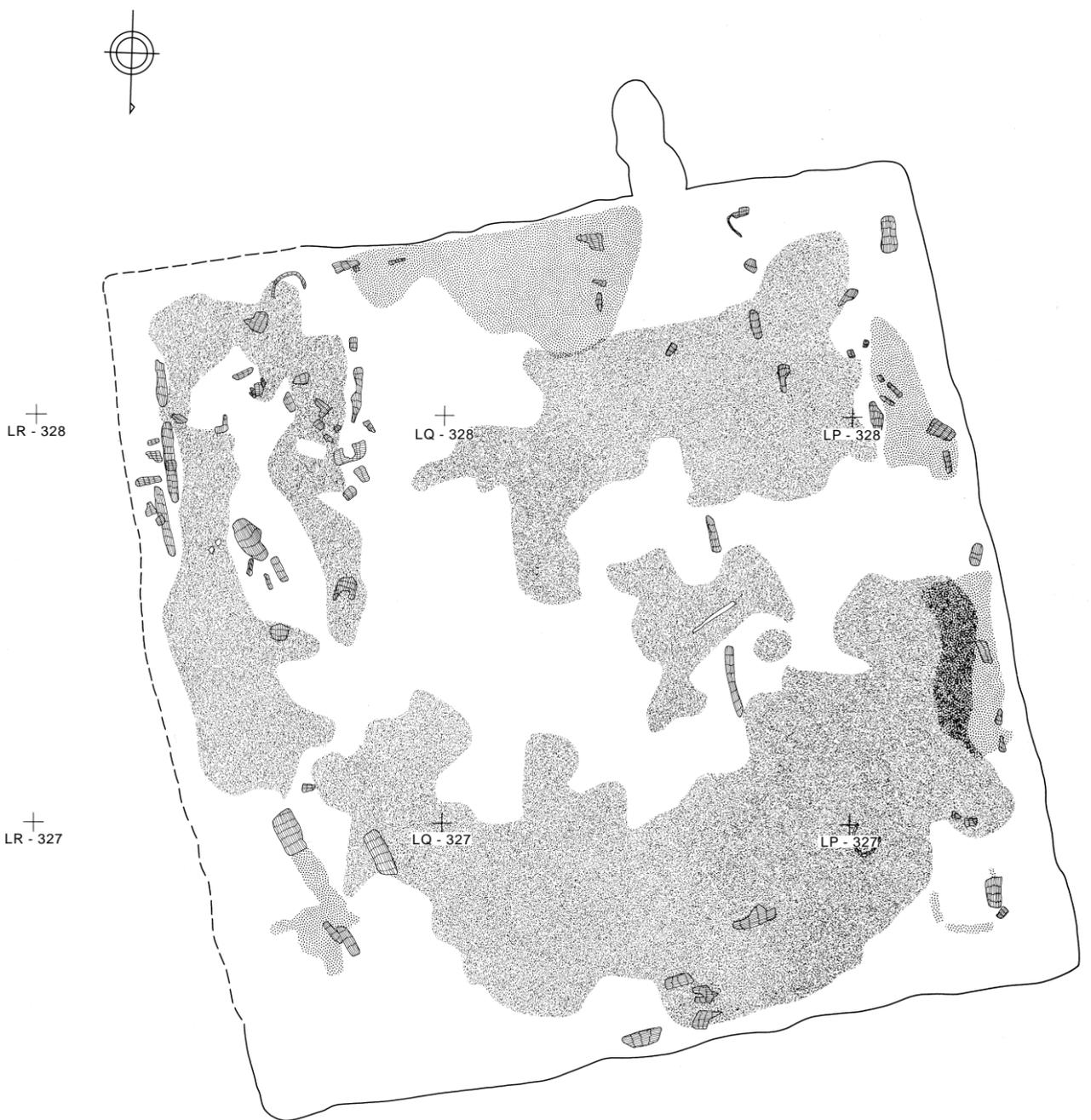
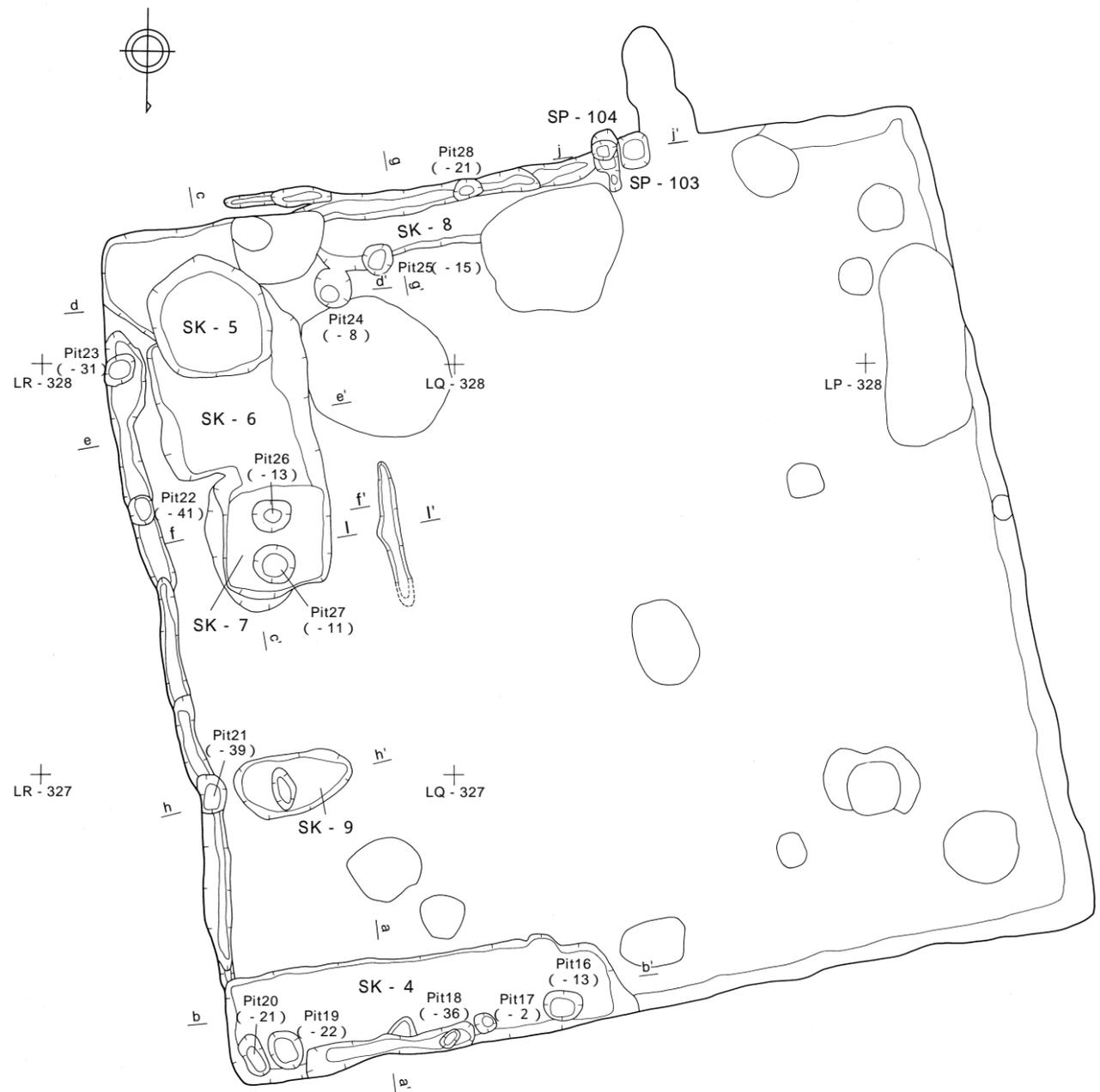
[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(70:30)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅114cm、煙道長115cmを測る。主軸はN - 168° - Eである。燃烧部袖の構築は、多量の転用羽口、自然礫を芯材とし、黒褐色土ならびに大谷火山灰層・月見野火山灰層主体の地山の粘土を用いて構築している。燃烧部天井は、第24層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道部天井は、黒褐色土ならびに大谷火山灰層の地山の粘土で構築されており、第17、18層が相当する。芯材として羽口が使われている。煙道は、地下式の構造と同様掘り込みが行われ、住居壁際から15°の角度で傾斜し、煙道部へ向かう。煙出奥壁下部は、壁面に対して最大17cm入り込んでいる。また、第2層はB - T m火山灰堆積層である。

[その他の付属施設] 掘り方部分を含めて住居内から土坑9基を検出した。SK - 1は、住居中央より南東側の部分で検出した。規模は153 × 125 × 28cmを測る。SK - 2は、カマド左袖脇から検出した。規模は135 × 120 × 34cmを測る。堆積土中に炭化粒・焼土粒が多く含まれ、カマド脇ピットと同様の機能が考えられる。SK - 3は、住居西壁際から検出した。規模は193 × 85 × 46cmを測る。SK - 4は、住居北壁東寄りの部分から検出した掘り方の土坑で、規模は375 × 107 × 17cmを測る。SK - 5は、住居南壁東隅の部分から検出した。規模は121 × 110 × 43cmを測る。SK - 6は、SK - 5と重複しており、SK - 5より北側の部分から検出した。規模は145 × (137) × 32cmを測る。SK - 7は、SK - 6と重複しており、東壁中央寄りの部分で検出した。規模は(128) × 121 × 58cmを測る。底面にPit26、27と取り扱ったピットを検出しており、柱穴として機能した可能性が考えられ

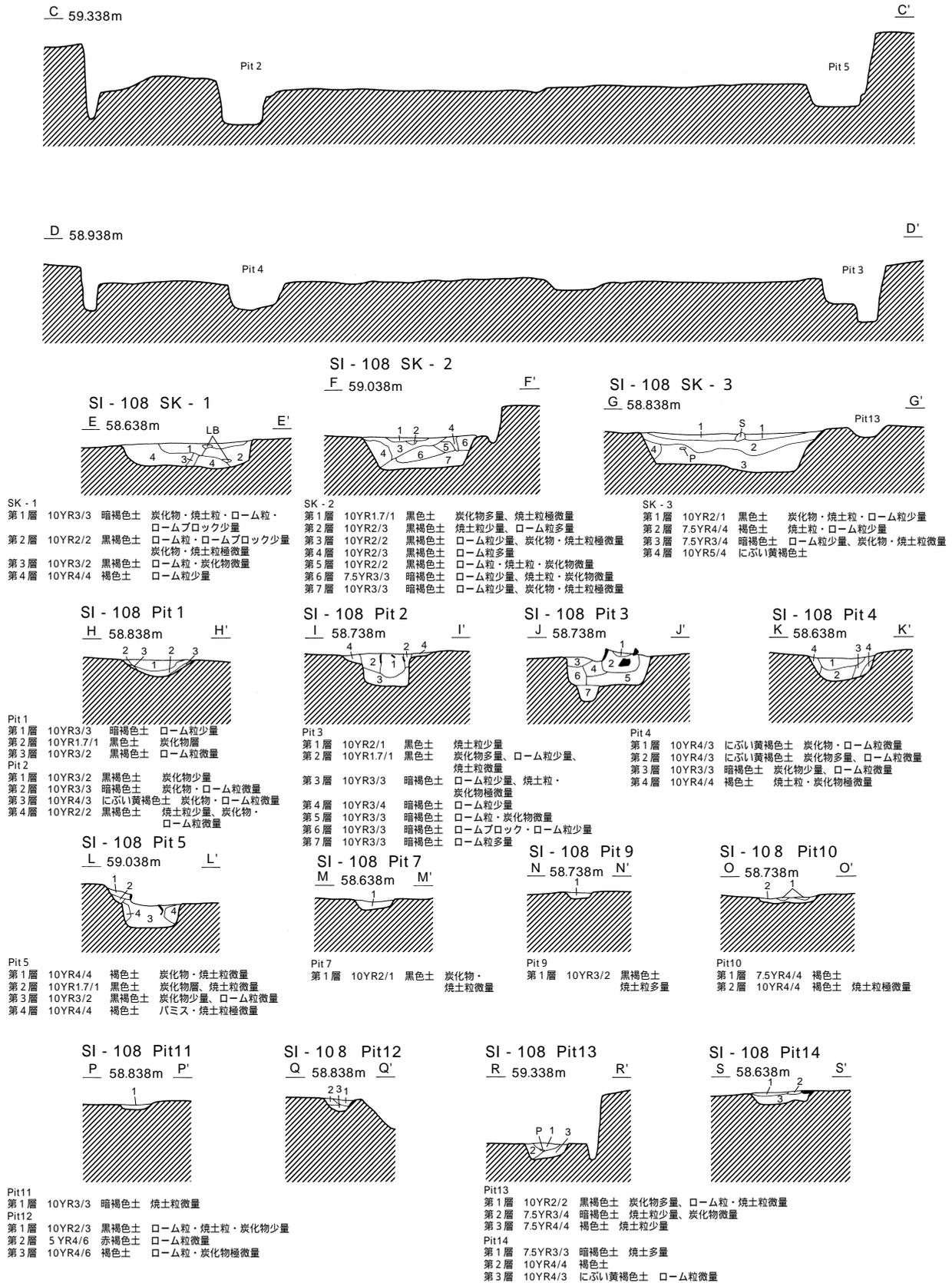


層	土色	特徴	層	土色	特徴
第1層	10YR1.7/1	黒色土 ローム粒極微量	第17層	5 YR4/4	にぶい赤褐色土
第2層	10YR2/1	黒色土 ローム粒・炭化物微量	第18層	10YR5/4	にぶい黄褐色土 ローム粒少量
第3層	10YR2/3	黒褐色土 焼土粒・ローム粒微量、炭化物極微量	第19層	10YR3/4	暗褐色土 ローム粒少量
第4層	10YR3/3	暗褐色土 炭化物・焼土粒・ローム粒少量	第20層	7.5YR5/4	にぶい褐色土 ローム・黒褐色土混入
第5層	10YR3/2	黒褐色土 炭化物・焼土粒微量、ローム粒少量	第21層	10YR2/1	黒褐色土 ローム粒少量、焼土粒微量
第6層	10YR3/2	黒褐色土 焼土ブロック微量、ローム多量	第22層	10YR3/3	暗褐色土 ローム粒少量
第7層	10YR2/1	黒色土 炭化物・焼土粒・ローム粒微量	第23層	10YR4/4	褐色土 ローム粒少量、炭化物微量
第8層	10YR1.7/1	黒色土 炭化物多量			
第9層	10YR3/2	黒褐色土 ローム粒少量、炭化物微量			
第10層	10YR3/4	暗褐色土 焼土粒多量			
第11層	5 YR4/4	にぶい赤褐色土 焼土ブロック			
第12層	10YR4/4	褐色土 ローム粒・炭化物極微量			
第13層	10YR4/3	にぶい黄褐色土 ローム粒・炭化物極微量			
第14層	10YR4/3	にぶい黄褐色土 ローム粒・炭化物・焼土粒極微量			
第15層	10YR2/2	黒褐色土 ローム粒・炭化物微量			
第16層	10YR4/6	褐色土			

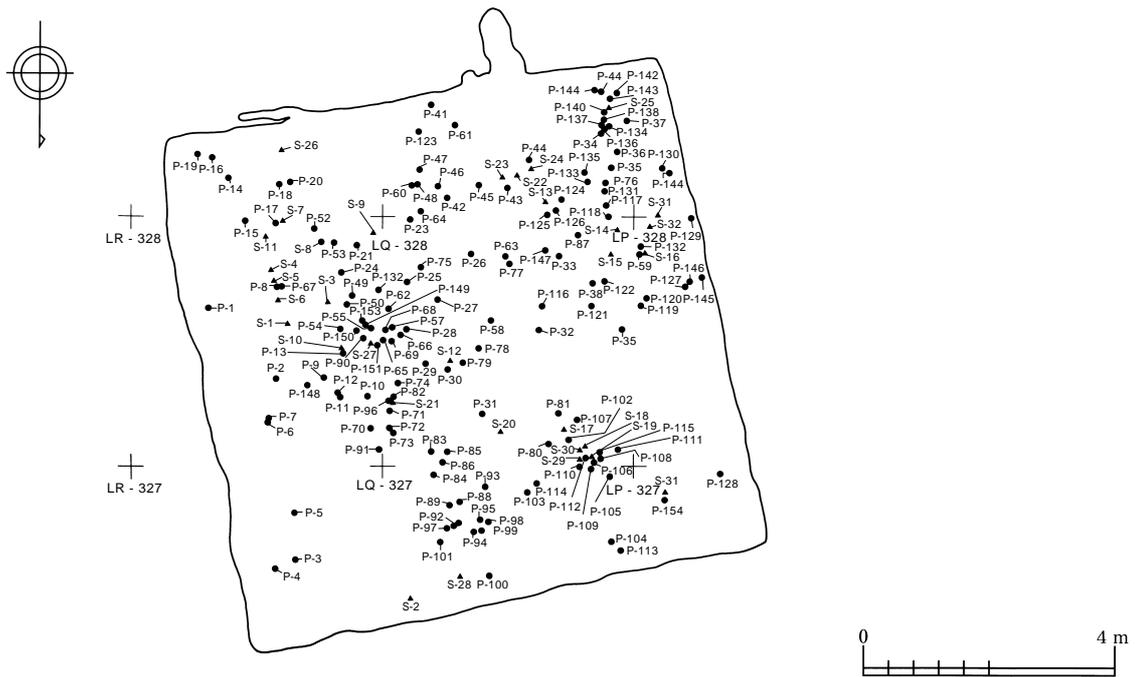
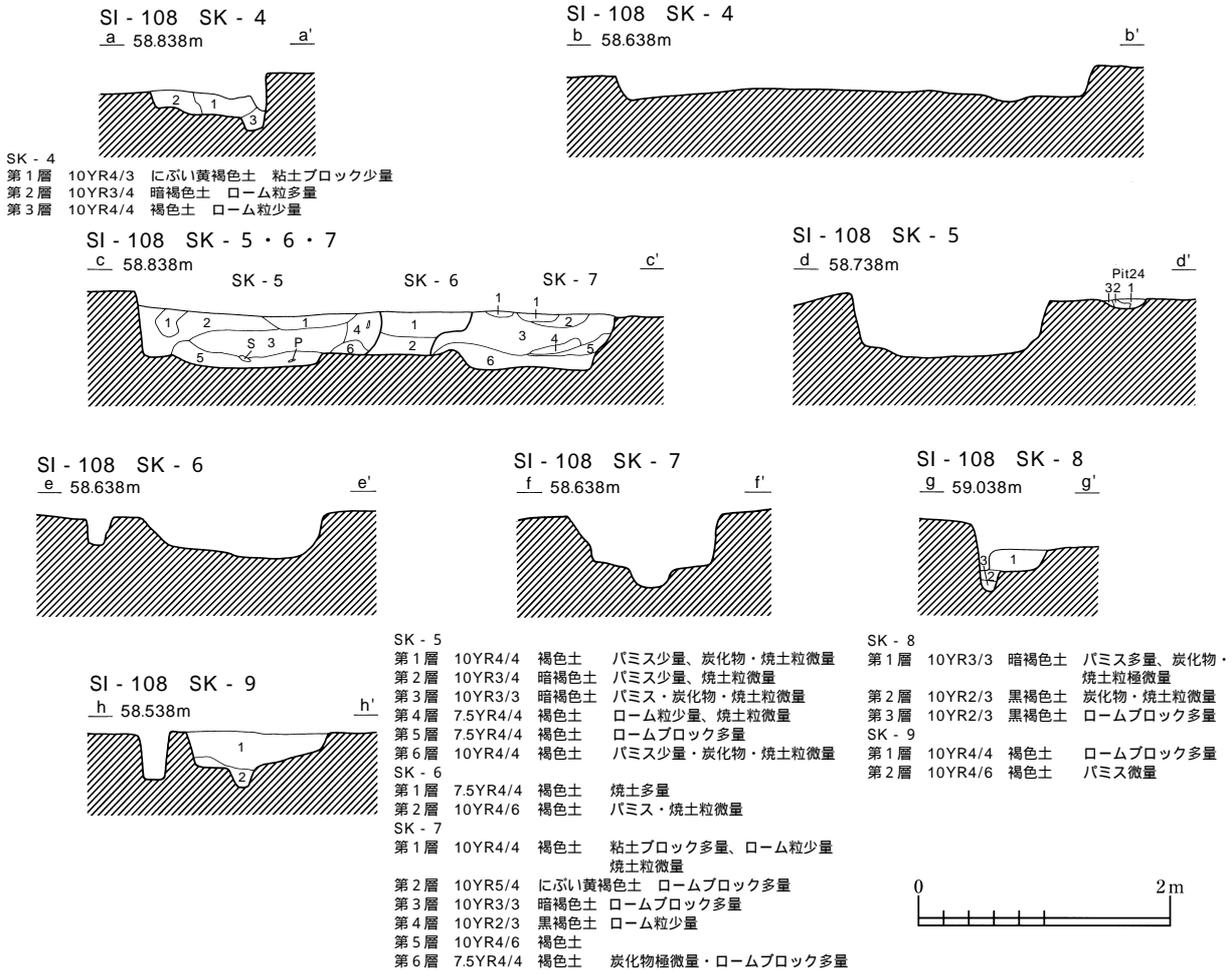
第237図 SI - 108



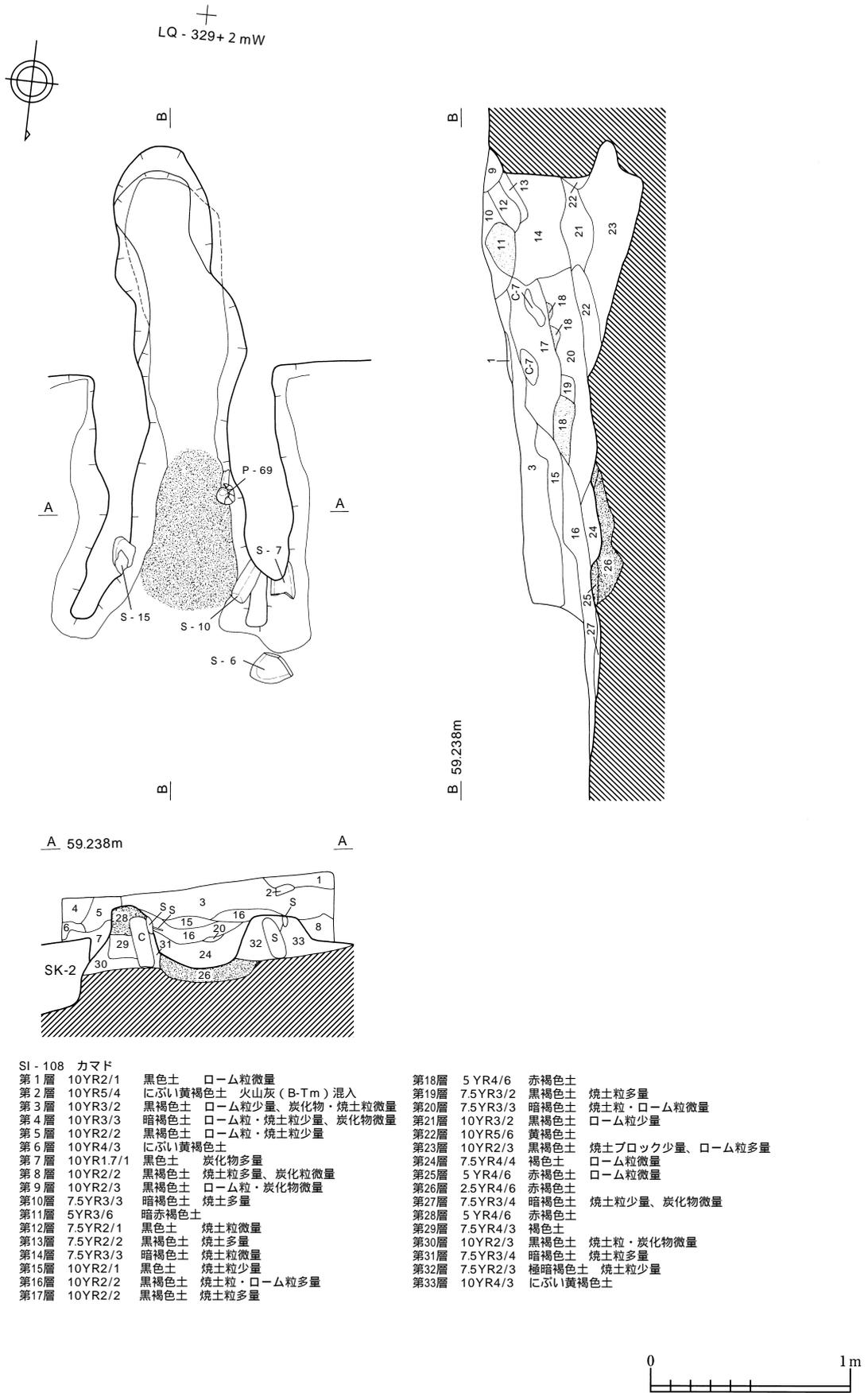
第238图 SI - 108



第239図 SI - 108

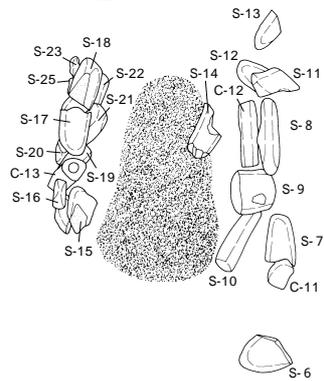
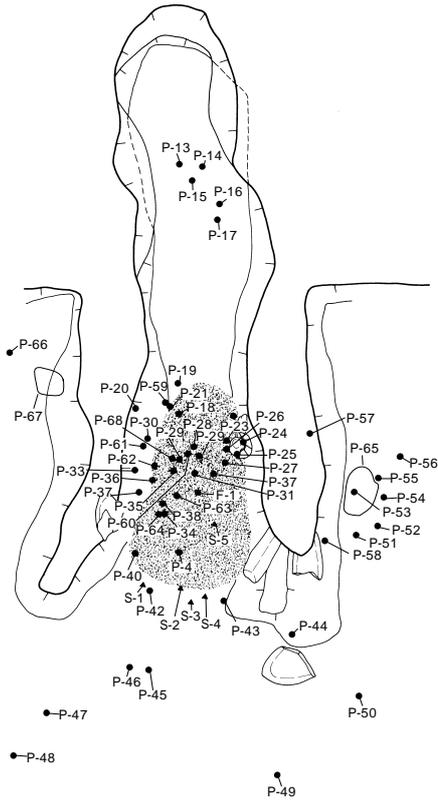


第240図 SI - 108

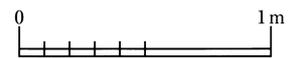


第241図 SI - 108

LQ - 329+1mW



LQ - 328+1mW



第242図 SI - 108

る。SK-8は、住居南壁側から検出した溝状の土坑である。規模は(180)×(40)×18cmを測る。SK-9は、住居東壁中央部分で検出した。規模は114×60×45cmを測る。SK-7と同様中央部に柱穴状の掘り込みが見られることから柱穴として機能した可能性が考えられる。

その他住居南壁外側からピット群を検出している。SP-99ならびにSP-101が同様の深さを持ち、柵列あるいは建物跡の可能性が考えられるが、周辺から対応するピットの検出が見られず、詳細は不明である。

[堆積土] 23層に分層した。住居廃絶後の堆積土は第1～15層で、焼失時の堆積層は第8層が相当する。第8層より上の堆積土は地点毎に堆積状況が異なっており、ローム粒、炭化粒等を含む土層が多く見られ、人為的堆積状況を呈する。多量の遺物が出土しており、大部分が炭化物、焼土検出面上(第8層直上)～覆土中層の位置からの出土で廃棄行為が伴っている。また、炭化物、焼土検出面直下から直刀が出土している。炭化材、遺物の出土状況を踏まえると本遺構については被災+廃棄行為が伴うケースが考えられる。

(木村)

SI-109(第243、244図)

[位置] グリッドLT・LU-327で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、276×248×72cmを測る。床面積は6.25㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁46cm、東壁18cm、南壁44cm、西壁43cmを測る。断面形はeで、北壁側から柵状の段を検出した。

[床] 住居東側～南側部分に掘り方を持ち、黒褐色土と月見野火山灰層主体の地山土の混合層を充填している。床面は、やや起伏があり、やや脆弱である。

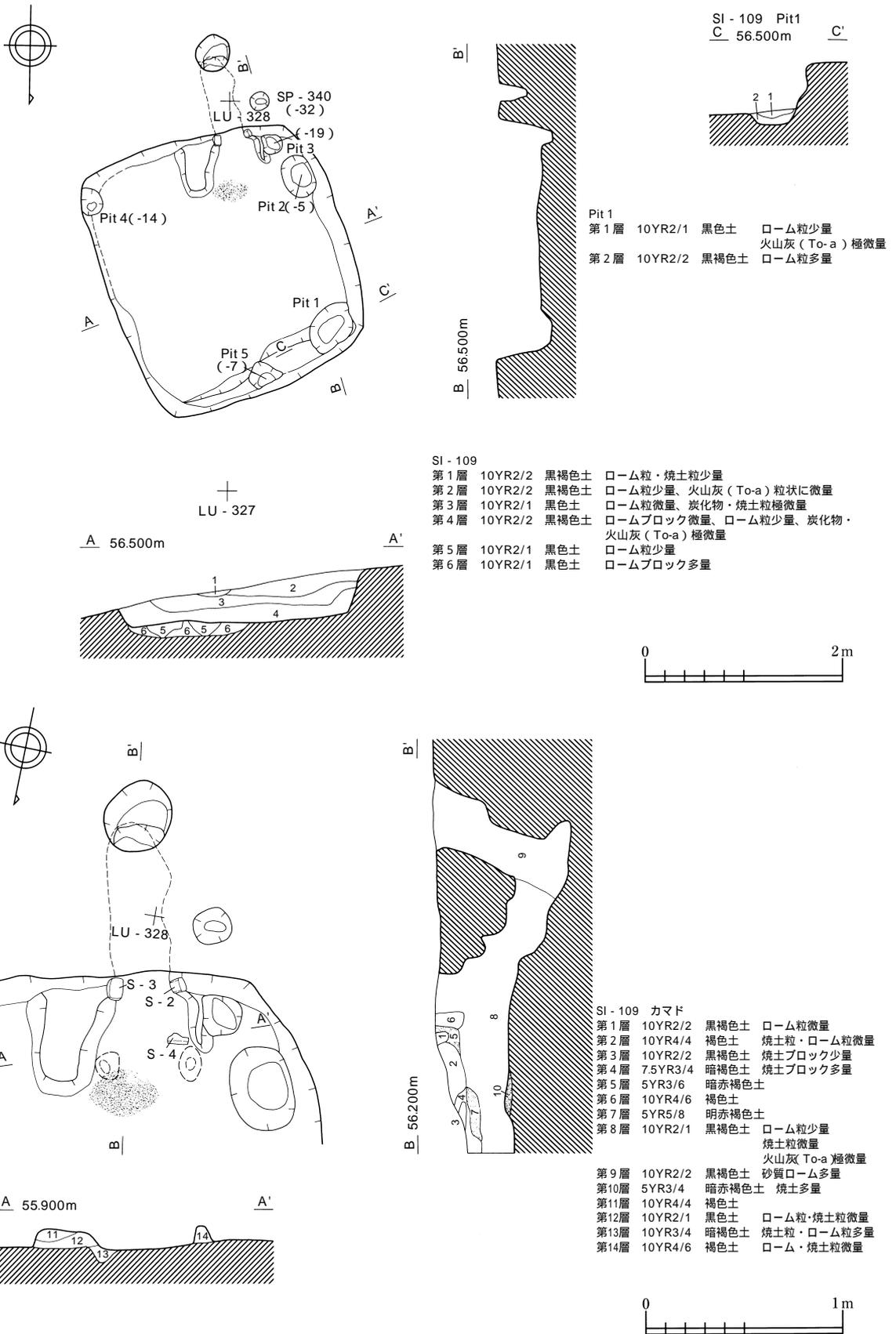
[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から5基検出した。各ピットの規模は、Pit1=57×37×13cm、Pit2=43×31×5cm、Pit3=22×21×19cm、Pit4=28×21×14cm、Pit5=26×25×7cmを測る。主柱穴と考えられるピットは、Pit1、3、4、5であり、不整配置を呈する。

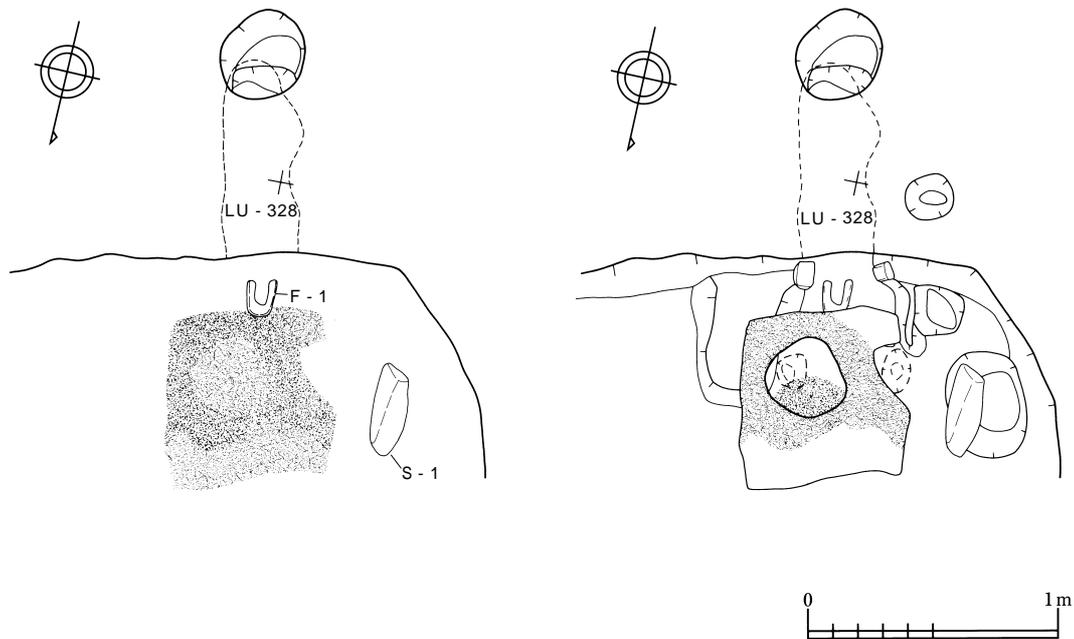
[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(71:29)の位置から検出している。構造は、地下式で、袖部幅86cm、煙道長100cmを測る。主軸はN-171.5°-Eである。構築は、右袖脇ならびに袖部から自然礫が出土しており、自然礫を芯材として粘土ならびに黒褐色土を用いて構築したものと考えられる。カマド右袖は、芯材であったと考えられる自然礫が袖部外から出土し、構築材の粘土の残存状況も悪いことから一部破壊されたことが考えられる。また、袖部より燃焼部中央寄りの部分から小規模なピット2基を検出していることから、芯材の装着痕等の可能性が考えられる。燃焼部天井については、良好に残存しており第3～7層が相当する。煙道部は、月見野火山灰層の地山を掘り込み構築されている。煙道は、住居壁際から26°の角度で起伏を持ちながら傾斜し、柱穴状に掘り込まれた煙出口にぶつかる。煙出奥壁下部は、壁面に対して10cm内側に入り込んでいる。

[その他の付属施設] 住居北壁側から柵状の段を検出した。規模は135×34×5cmを測る。カマドと対面する壁に構築されており、柵状施設に相当するののか、住居の出入り口に相当するののか不明である。

[堆積土] 掘り方部分を含めて6層に分層した。住居廃絶後の堆積土は第1～4層でローム粒、焼土



第243図 SI - 109



第244図 SI - 109

粒T o - a火山灰を粒状に混入し、人為堆積状況を呈する。

(木村)

SI - 117 (第245、246図)

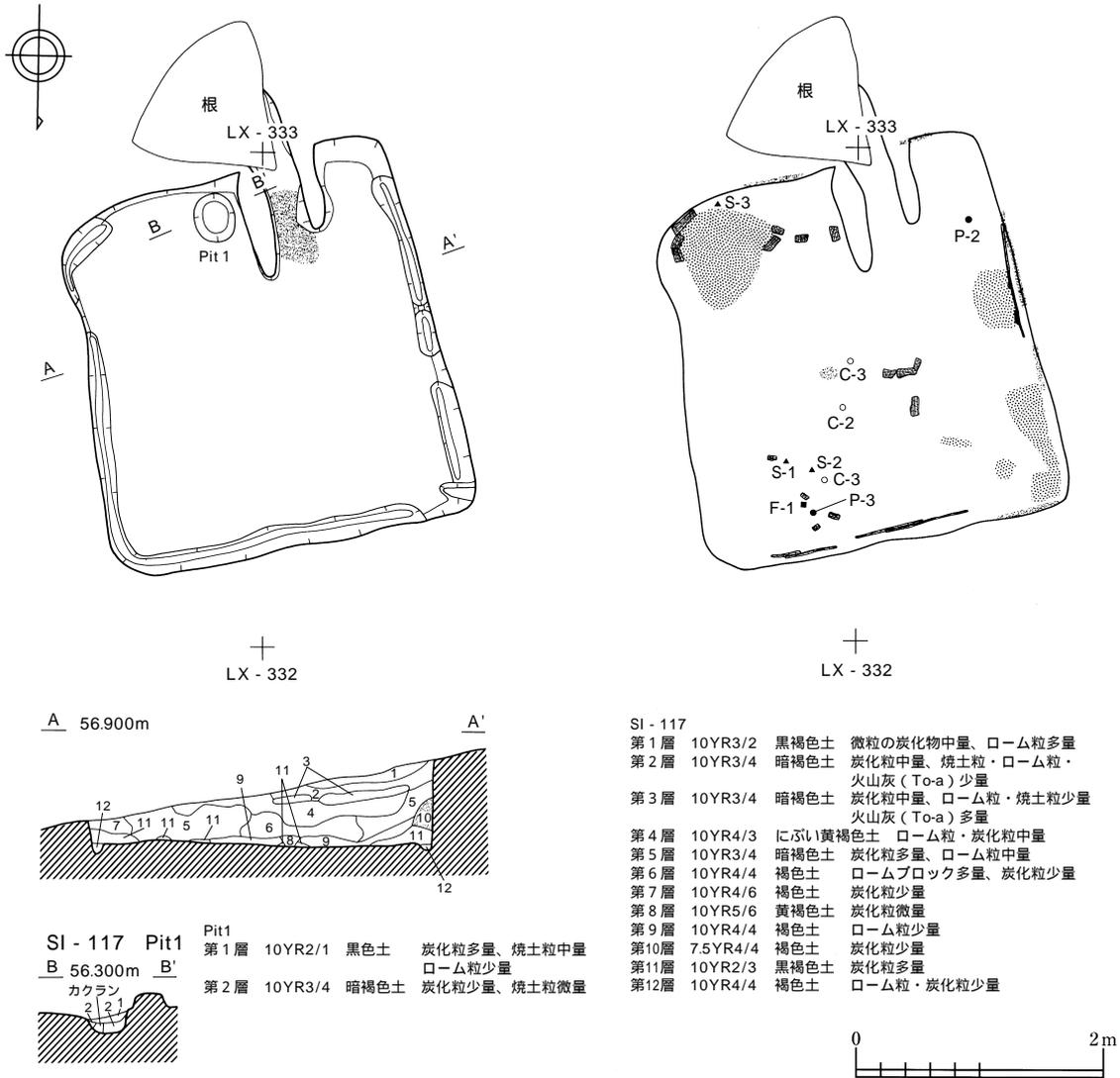
[位置] グリッドLW・LX - 332で検出した。

[重複] SI - 118のカマド旧と重複している。本遺構がSI - 118のカマド旧に切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、308×280×78cmを測る。床面積は8.723m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁36cm、東壁21cm、南壁67cm、西壁70cmを測る。断面形はaで、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。また、本遺構は焼失住居で北壁ならびに西壁から炭化した板材を検出しており、住居壁面についても赤化している。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。また、住居床面から焼土ならびに炭化材を検出している。



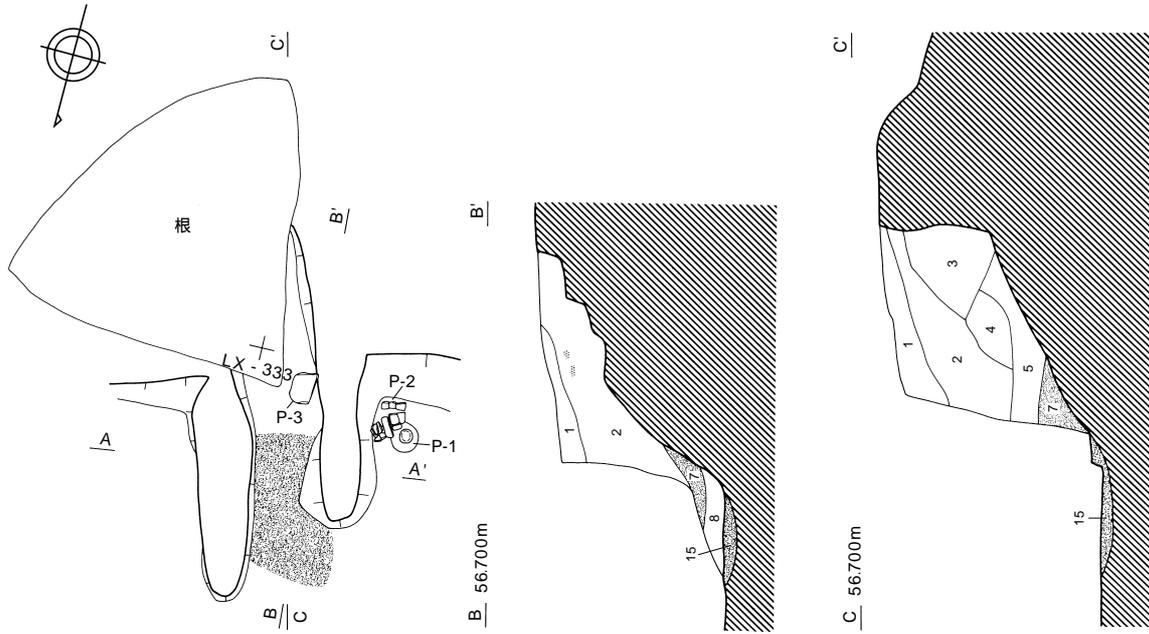
第245図 SI - 117

[壁 溝] 住居南壁側を除き検出した。深さは平均7cmを測る。[壁]の項目で記述したとおり、本遺構は焼失住居で北壁ならびに西壁から炭化した板材を検出している。板材は横棧状に残存しており、板壁の縦板ならびに土圧を留める役目を果たしていたものと考えられる。

[ピット] 住居内から1基検出した。規模は40×32×15cmを測る。柱穴としての機能より堆積土下層から焼土粒、炭化粒を含む土層であるため、カマド脇ピットとしての機能が考えられる。

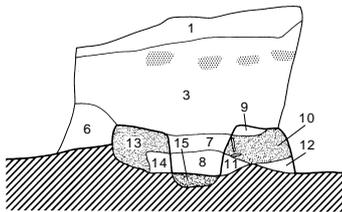
[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(66:34)の位置から検出している。根による攪乱をうけており、煙道部については、根の除去が困難であったため、西側部分を調査するに留まった。袖部幅72cm、煙道長(70)cmを測る。主軸はN-163.5°-Eである。燃焼部ならびに煙道部とも粘土による構築で、芯材等は出土していない。煙道は住居壁際から30°の角度で煙出部へ立ち上がる。第2層からB-Tm火山灰をブロック状に検出した。住居の堆積土中からB-Tm火山灰の包含層は検出しておらず、To-a火山灰の堆積層のみの検出であった。根による影響が考えられる。

[その他の付属施設] なし。



A 56.700m

A'



SI - 117 カマド

- | | | | |
|------|----------|---------|--|
| 第1層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 炭化粒少量、ローム粒中量 |
| 第2層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 火山灰 (B-Tm) ブロックが帯状に中量、炭化粒中量、焼土粒・ローム粒少量 |
| 第3層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 炭化粒少量 |
| 第4層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | ロームブロック・微粒の炭化粒少量 |
| 第5層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 炭化粒多量、ローム粒中量 |
| 第6層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 炭化粒・焼土粒少量 |
| 第7層 | 5YR3/4 | 暗赤褐色土 | 微粒の炭化粒少量 |
| 第8層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土粒中量、炭化粒少量 |
| 第9層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 炭化粒・焼土粒中量 |
| 第10層 | 5YR4/6 | 赤褐色土 | 炭化粒中量 |
| 第11層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土粒中量、微粒の炭化粒少量 |
| 第12層 | 7.5YR4/4 | 褐色土 | 微粒の炭化粒・焼土粒中量 |
| 第13層 | 5YR4/6 | 赤褐色土 | 炭化粒少量 |
| 第14層 | 7.5YR4/3 | 褐色土 | 焼土粒多量、微粒の炭化粒少量 |
| 第15層 | 5YR4/4 | にぶい赤褐色土 | |



第246図 SI - 117

[堆積土] 12層に分層した。住居焼失時点の堆積土は第11層で、炭化粒が多量に含まれる。西壁部分については壁面の崩落が生じており、第10層が相当する。第4～9層の堆積は、ロームブロック、炭化粒等を多く含み、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。上層の第3層中からT o - a火山灰を層状に検出している。また、第2層からもT o - a火山灰が粒状に混入して検出した。T o - a火山灰の堆積については、第3層に集中して堆積しており、雨水等による流れ込みにより溜った自然堆積である。

(木村)

S I - 118 (第247~249図)

[位置] グリッドLV - 330・331、LX - 330~332で検出した。

[重複] SN - 03・04と重複している。本遺構の上にSN - 03・04が構築されており、本遺構の方が古い。また、本遺構のカマド旧の煙道部がS I - 117を切っており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 一部削平を受けているが、長方形を呈し、 $528 \times (496) \times 87\text{cm}$ を測る。床面積は $(26.148)\text{m}^2$ を測る。また、東壁北隅部分から掘り方だけの検出であったが、張り出し部を $197 \times 140\text{cm}$ の規模で検出した。

[壁] 削平のため東壁側の情報は欠落しているが、壁高は、北壁11cm、南壁60cm、西壁75cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 住居北側~東側にかけて掘り方を有し、大谷火山灰層の地山土と黒色土の混合土を充填し、大谷火山灰層の地山土を貼り床としている。床面は起伏があり、やや脆弱である。また、床面から多量の炭化材・炭化物ならびに赤化面を検出しており、本遺構は焼失住居であったことが考えられる。

[壁溝] 住居北壁、西壁ならびに南壁の一部から検出した。深さは平均18cmを測る。

[ピット] 住居内から12基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = $55 \times 45 \times 27\text{cm}$ 、Pit 2 = $50 \times 45 \times 51\text{cm}$ 、Pit 3 = $32 \times 21 \times 12\text{cm}$ 、Pit 4 = $24 \times 17 \times 25\text{cm}$ 、Pit 5 = $55 \times 40 \times 47\text{cm}$ 、Pit 6 = $57 \times 45 \times 16\text{cm}$ 、Pit 7 = $36 \times 30 \times 8\text{cm}$ 、Pit 8 = $40 \times 30 \times 24\text{cm}$ 、Pit 9 = $26 \times 23 \times 25\text{cm}$ 、Pit 10 = $32 \times 18 \times 49\text{cm}$ 、Pit 11 = $28 \times 27 \times 19\text{cm}$ 、Pit 12 = $23 \times 16 \times 27\text{cm}$ を測る。このうち、支柱穴と考えられるピットは、Pit 2、5、6、7、8、10、11でカマドの改築に伴って柱穴配置についても位置をずらした形で掘り変えられている。

[カマド] 住居南壁側から2基検出した。南壁2(38:62)ならびに南壁3(65:35)の位置から検出している。新旧関係については、燃烧部の残存状況等から南壁2>南壁3の関係である。南壁2のカマドの構造は、半地下式で、袖部幅85cm、煙道長127cmを測る。主軸はN - 150° - Eである。燃烧部袖の構築は、自然礫ならびに転用羽口を芯材とし、粘土で構築している。また、焚口部分から硬化した炉壁が出土している。燃烧部天井は、第16層が相当し部分的に残存した堆積状況を呈している。煙道部は、軸線が途中から東偏し、S I - 117の壁部分と接しないように構築されている。煙道は、住居壁際から住居の壁面に沿って立ち上がり、途中で 17° の角度で傾斜しながら煙出部へ向かう。煙出部付近では、 5° の角度で緩やかに立ち上がる。煙出奥壁は、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。

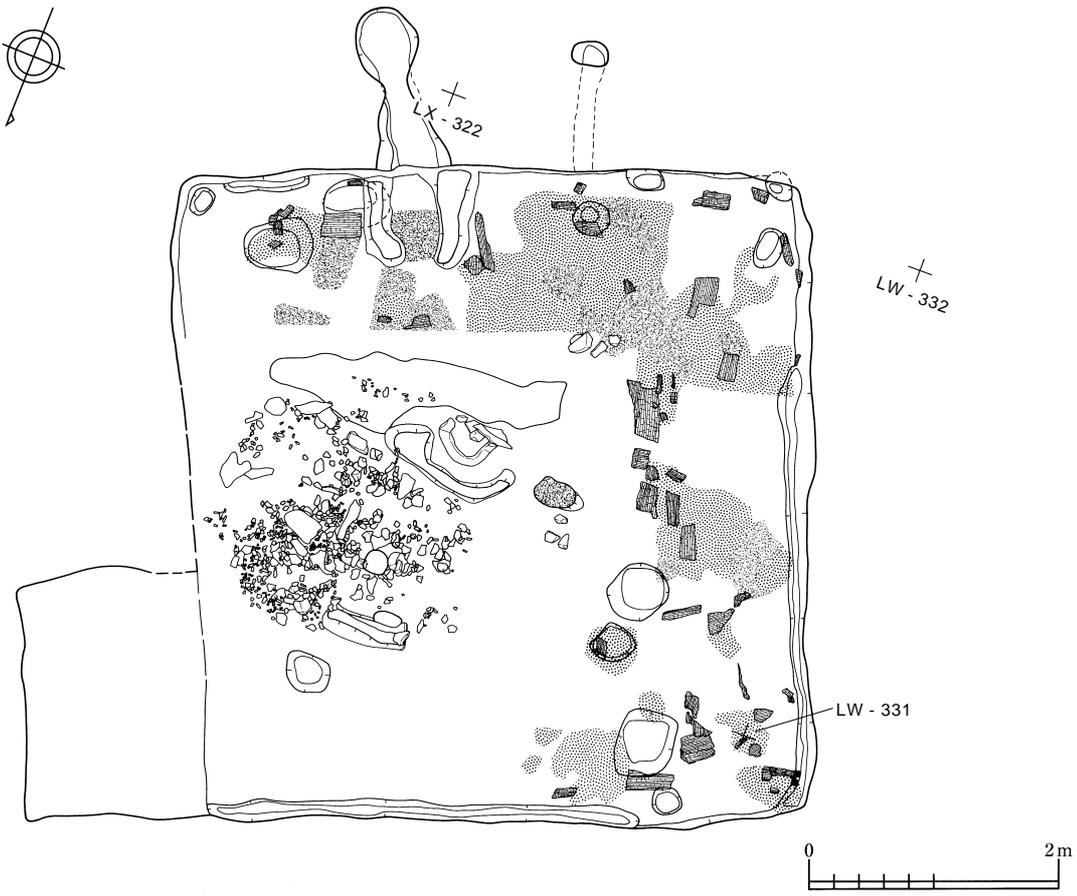
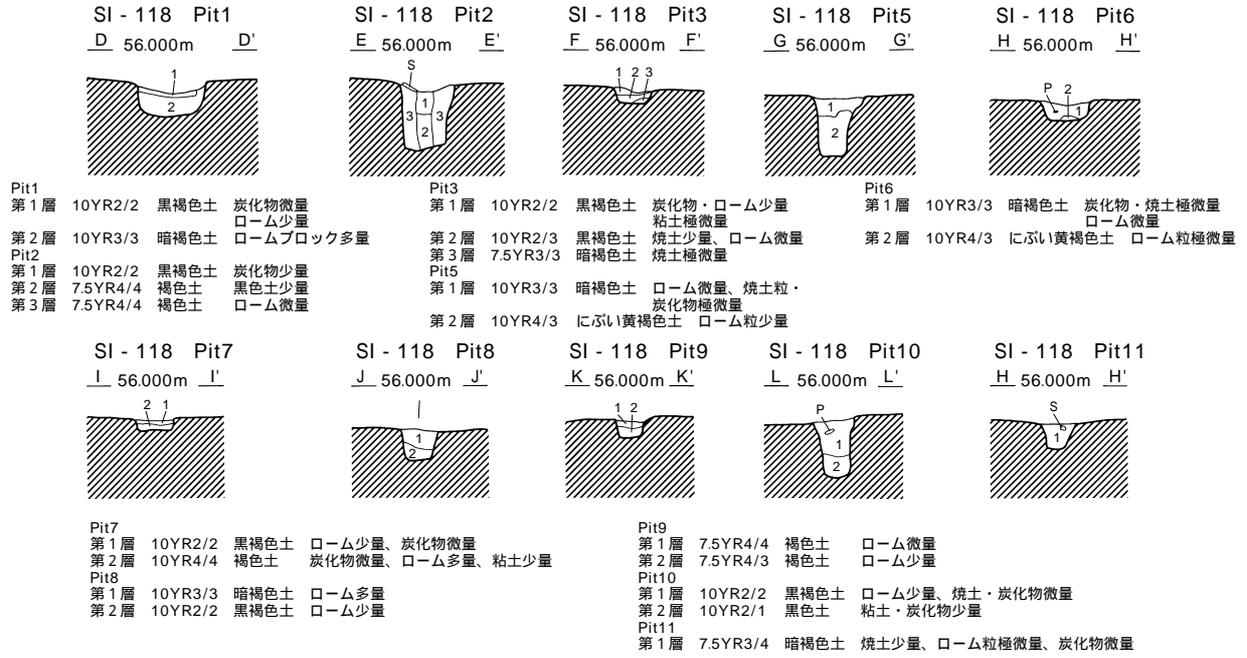
南壁3のカマドの構造は、地下式で、燃烧部上部ならびに下部構造についても欠落しており、煙道長107cmを測る。主軸はN - 167° - Eである。大谷火山灰層の地山を掘り込んでおり、住居壁際から 13° の角度で傾斜しピット状に掘り込まれた煙出部とぶつかる。煙道から多量の土器ならびに自然礫が出土しており、煙出開口部に堆積する第2層は、地山土で口を閉じる形で埋められている。カマドの廃棄に際して、廃棄行為が伴った埋め戻しが行われている。

[その他の付属施設] なし。

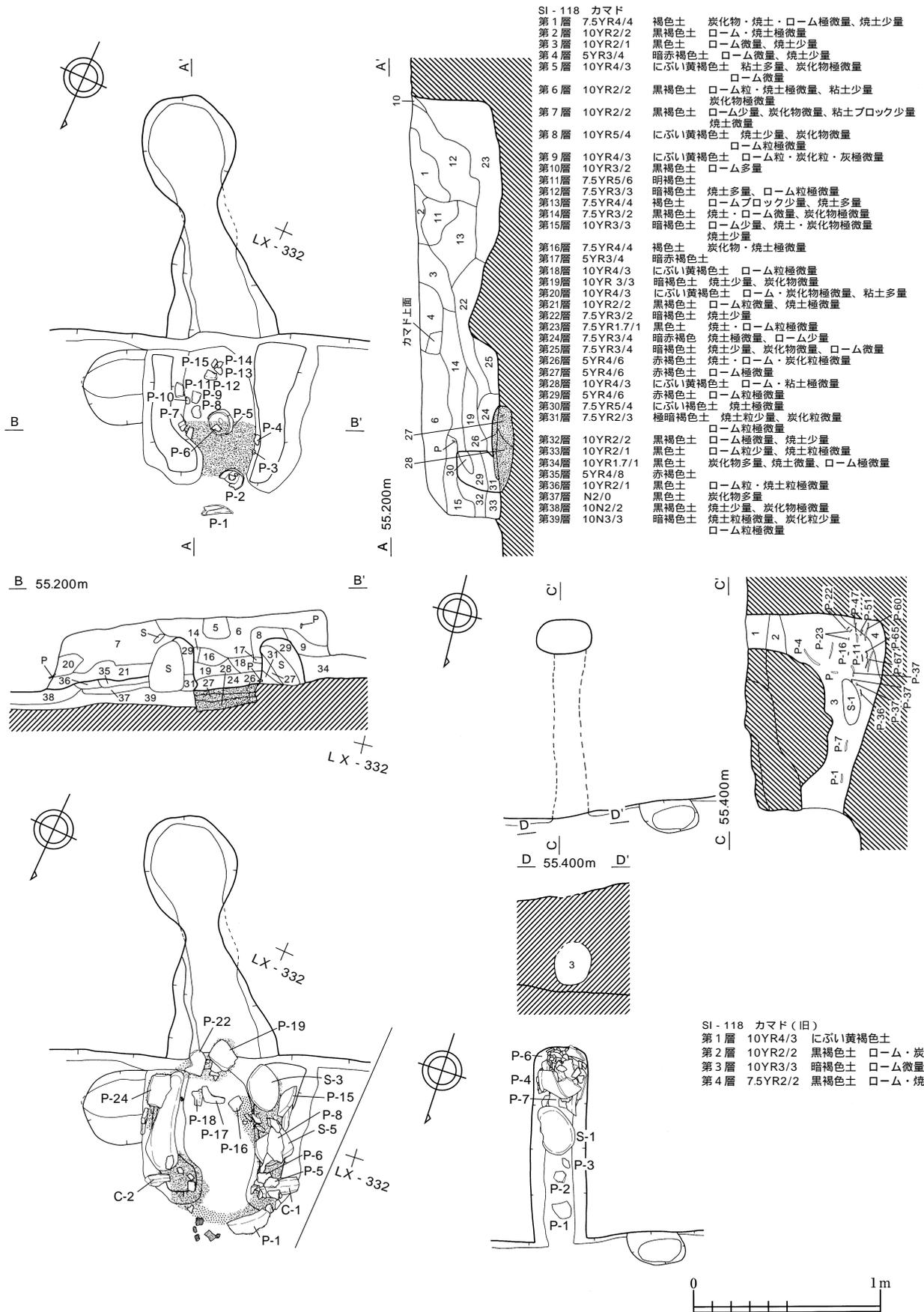
[堆積土] 掘り方部分を含めて29層に分層した。SN - 03・04の構築面は、第6層が相当する。第1~5層については、SN - 03・04の廃棄後の堆積で第1層中からB - Tm火山灰を粒状に検出した。本遺構の廃絶後の堆積土は、第7~14層までで、第12層が焼失によって生じた炭化材や焼土粒の堆積層である。住居焼失後、第6層~9層までで急激な埋め戻し等により、SN - 03・04の構築面を作り上げている。住居焼失時点からSN - 03・04の構築時期については、時期幅をあまりもたなかったこ



第247図 SI - 118



第248図 SI - 118



第249図 SI - 118

とが考えられる。また、掘り方部分の第29層中から T o - a 火山灰を粒状に検出した。

(木 村)

S I - 120 (第250、251図)

[位 置] グリッド L Y ・ L Z - 329で検出した。

[重 複] 煙道部で S N - 05と重複している。S N - 05が本遺構のカマド煙道部の粘土を切っており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 東側が削平されており、壁は残存していないが、床面の残存状態からみて、長方形を呈すると思われる。規模は300×258×60cmを測る。床面積は7.624㎡である。

[壁] 削平されているため、北壁、東壁の壁高については不明である。残存している西壁、南壁の壁高は、35cm、52cmである。断面形は d で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 月見野火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。本遺構は、西から東に緩やかに下る斜面上に立地しており、標高の低い側に相当する住居東側に掘り方を有する。掘り方には、ロームブロック、ローム粒を多量に含み黒褐色を呈する6層を充填し、床面としている。

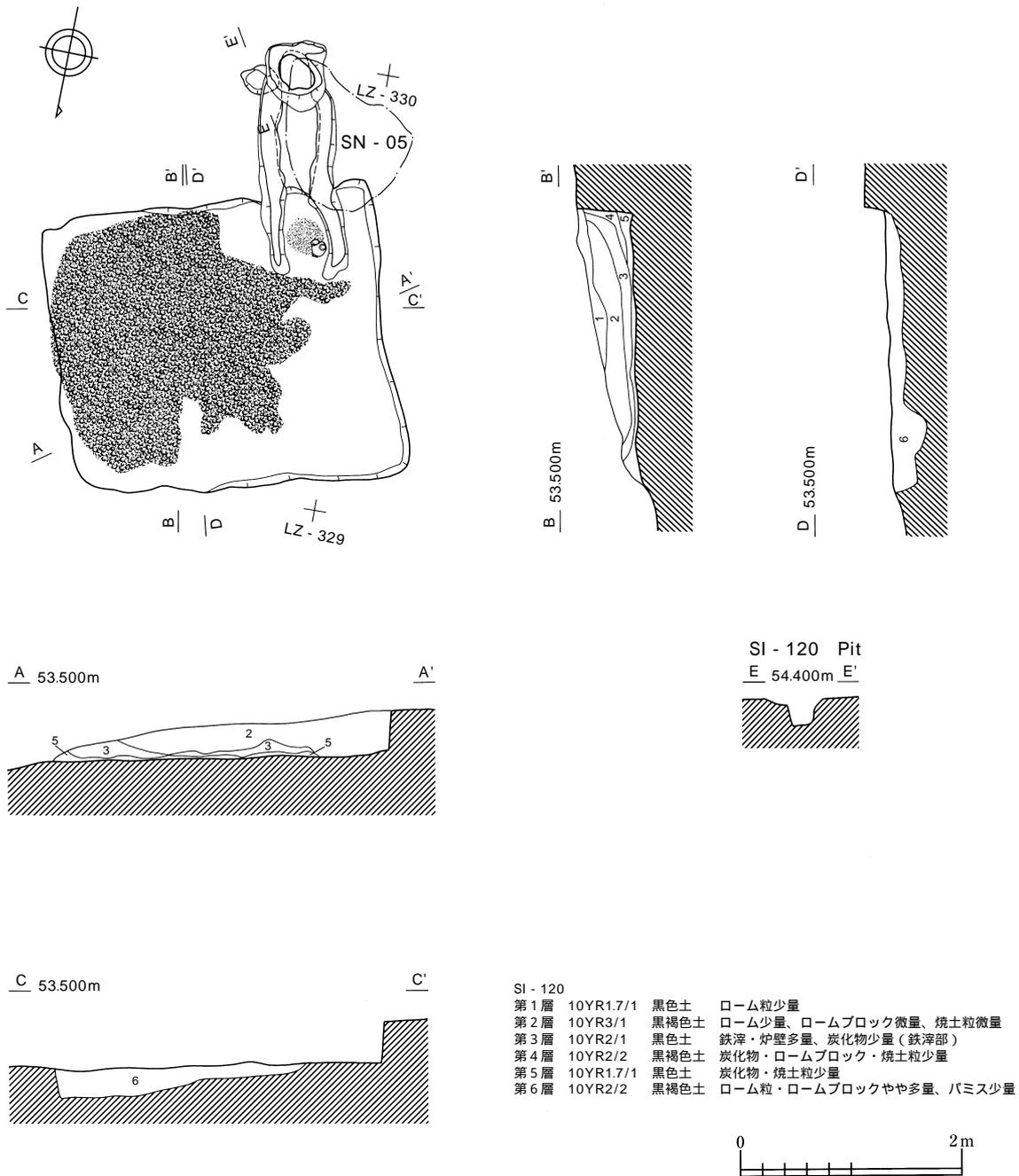
[壁 溝] なし。

[ピット] 竪穴外のカマド煙出部付近より1基検出した。規模は36×27×24cmを測る。煙出部を構成する粘土の下部から検出したものであるため、新旧関係からみて、本遺構の上屋構造に関連するピットである可能性は低い。

[カマド] 南壁4(79:21)の位置から1基検出した。構造は、半地下式で、袖部幅70cm、煙道長179cmを測る。主軸はN-166°-Eである。袖は粘土によって構築されており、芯材は装填されていない。火床面は69×67cmの範囲で赤化している。火床面の上部には、ローム粒、焼土粒を少量含む暗褐色土を挟んで、褐色を呈する1層が存在し、天井部を構成していた粘土が崩落したものと考えられる。煙道部は、火床面から10°の角度で傾斜し、住居の壁によって急角度に立ち上がり、そこから20°に角度を変え、煙出部付近で平坦となる。本遺構のカマドの煙道部、煙出部は残存状態が良好で、煙道部の天井を構成していた粘土や煙出部の煙突状の立ち上がりが確認できた。

[その他の付属施設] なし。

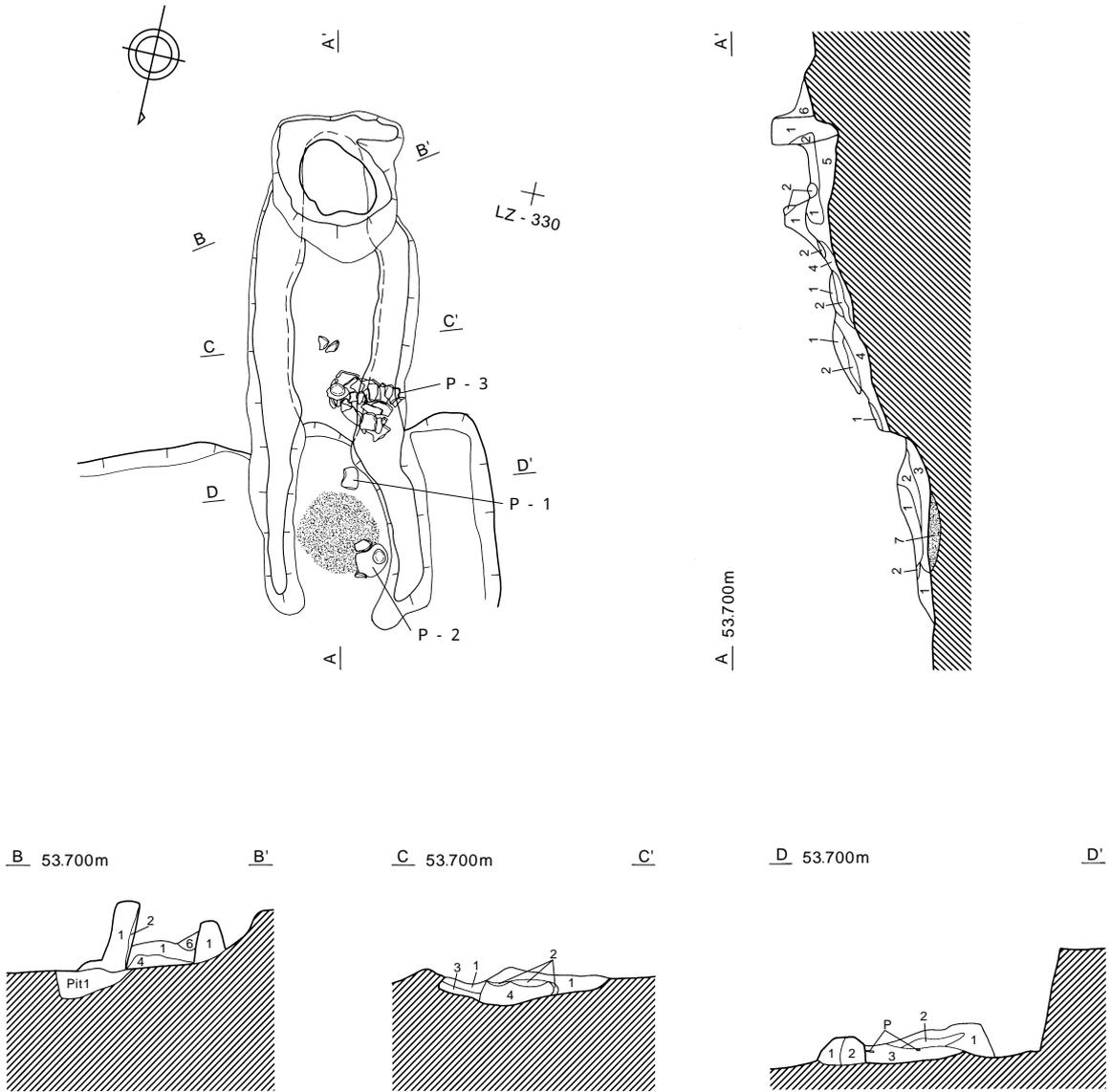
[堆積土] 掘り方を含めて6層に分層した。黒色、黒褐色を主体とする土層である。下層に近い3層から、炭化物、焼土粒、数点の羽口のほか、炉壁や鉄滓が多量に出土している。これらの鉄滓は、製鉄炉の操業によって排出された鉄滓や羽口を主体とし、鍛冶炉の操業によって排出された鉄滓が少量混じる。これらは近隣に存在した製鉄炉、鍛冶炉において排出された鉄滓等が廃絶した本遺構の落ち込みに廃棄されたものと認められることから、本遺構の堆積は、人為的要因が強いと考えられる。本遺構から出土した製鉄関連遺物は、炉壁(溶解物を含む)32,701g、砂鉄焼結塊1,358g、炉内滓34,134g、流動滓(単位流動滓を含む)53,112g、流動滓(鳥の足状)20,306g、流出孔滓1,898g、流出溝滓27,190g、鉄塊系遺物L()182g、M()24g、H()8g、()2,140g、その他(工具痕付滓、工具付着滓)3,852g、総重量176,805gである。鍛冶関連遺物は椀形鍛冶滓2,806g、鉄塊系遺物L()30g、総重量2,836gである。本遺構のカマド煙道部において、製鉄炉と考えられるS N - 05が重複しているが、土層堆積状況から見ると、本遺構が埋まりきった後に、S N - 05が構築されている。したがって、本遺構の3層から多量に出土している製鉄関連遺物は、S N - 05から排出さ



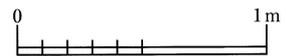
第250図 SI - 120

れたものではないと考えられる。本遺構から南西に10mほど離れて、同じく製鉄炉であると考えられるSN - 03が存在しており、本遺構出土の鉄滓、炉壁等はSN - 03の操業による廃棄物である可能性が高い。

(設 楽)



- SI - 120 カマド
- | | | | |
|------|------------|---------|------------|
| 第1層 | 10YR4/6 | 褐色土 | |
| 第2層 | 5 YR4/4 | にぶい赤褐色土 | |
| 第3層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒少量 |
| 第4層 | 7.5YR1.7/1 | 黒色土 | ローム粒・焼土粒微量 |
| 第5層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 焼土粒微量 |
| 第6層 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | ロームブロック少量 |
| 第7層 | 5 YR5/8 | 明赤褐色土 | |
| Pit1 | | | |
| 第1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ロームブロック少量 |



第251図 SI - 120

S I - 121 (第252図)

[位置] グリッドMA - 330で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 住居東側約半分が削平を受けており、詳細は不明である。残存する壁の情報から方形を呈したと推定され、規模は330×316×28cmを測る。床面積は(7.64)㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁14cm、南壁21cm、西壁18cmを測る。断面形は(b)で緩やかに立ち上がる。壁面はやや脆弱である。

[床] 掘り方を持ち、黒色土と大谷火山灰層主体のローム土の混合層が充填されている。床面はやや起伏があり、しまりがあり、やや堅緻である。

[壁溝] 残存部分から検出しなかった。

[ピット] 残存部分から検出しなかった。

[カマド] 南壁側から火床面を1ヶ所検出した。カマドの設置位置、構造等について詳細は不明である。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて2層に分層した。住居廃絶後の堆積土は第1層のみで、自然堆積の様相を呈する。

(木村)

S I - 122 (第253、254図)

[位置] グリッドMC・MD - 327・328で検出した。

[重複] 本遺構は、壁溝の残存状況が三重になって検出しており、本遺構は三段階にわたって拡張された住居であることが考えられる。しかし、遺構の残存状況が悪く、資料的に不確実な要素が含まれる。本遺構のみ記述に際して、最初に構築された住居(以下、第1段階と記述)、拡張1段階目(以下、第2段階と記述)、廃絶時点の住居(以下、第3段階と記述)と呼称し記述する。

[平面形・規模]

・第1段階

第1段階の住居の平面形は、長方形を呈したものと推定され、長軸(420)×短軸(396)cmを測る。床面積は、計測不可である。

・第2段階

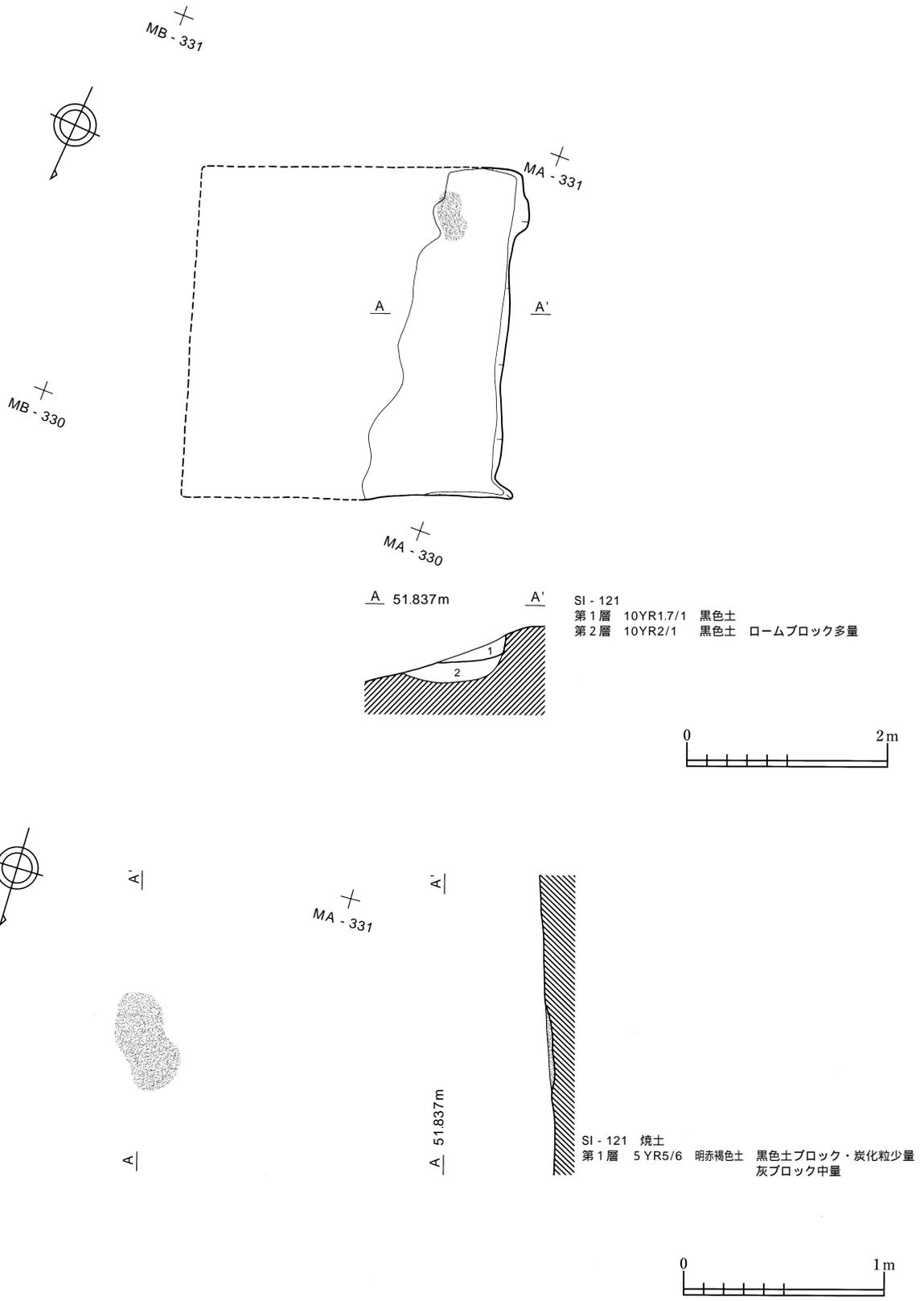
第2段階の住居の平面形は、長方形を呈したものと推定され、長軸(468)×短軸(448)cmを測る。床面積は、計測不可である。

・第3段階

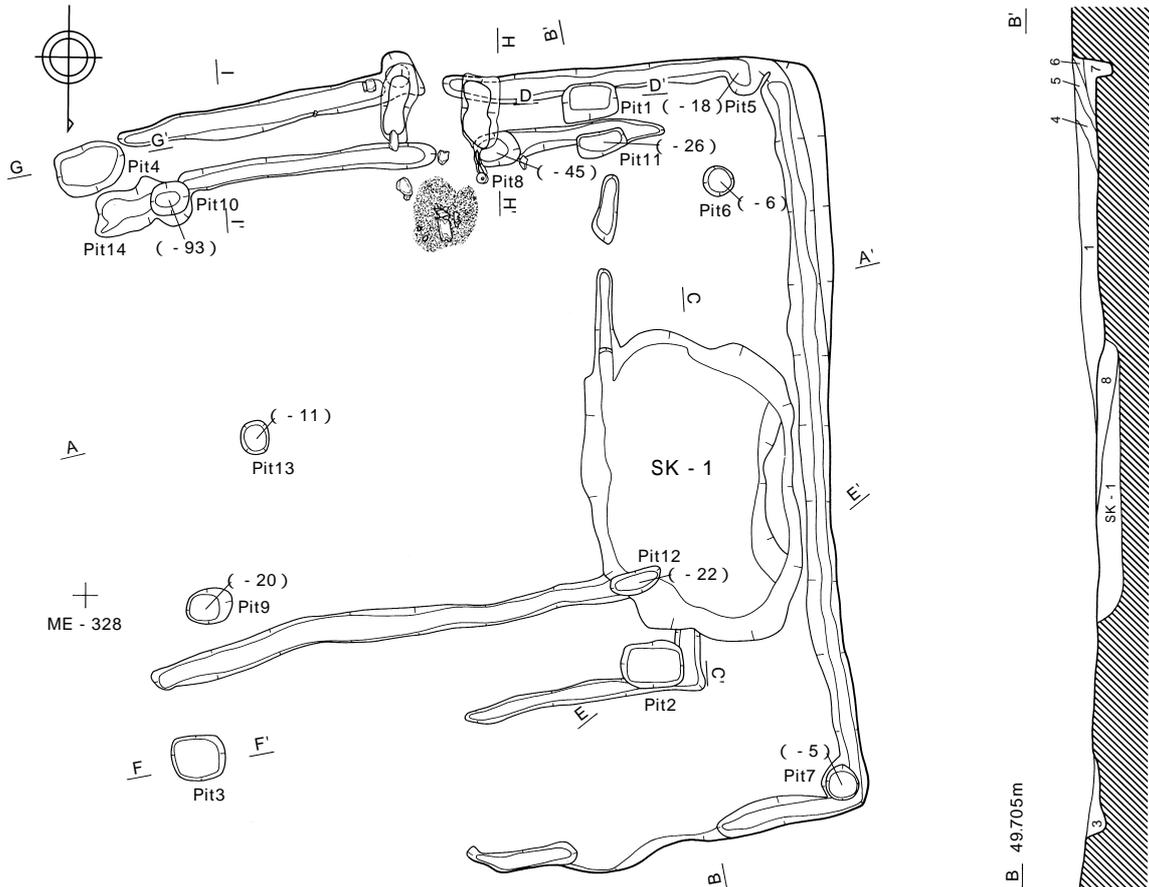
第3段階の住居の平面形は、方形を呈したと推定され、規模は646×(592)×30cmを測る。床面積は、計測不可である。

[壁] 残存しているのは第3段階の住居の壁のみで、北壁半分と東壁が削平を受けており詳細は不明である。残存部分の壁高は、北壁13cm、南壁17cm、西壁31cmを測る。断面形はcで、壁上部に緩やかな立ち上がりが見られる。

[床] 第3段階の住居は、掘り方の土坑SK - 1の一部と月見野火山灰層の地山を床面としており、



第252図 SI - 121

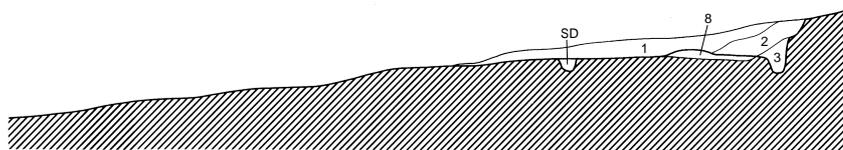


ME - 327

MD - 327

A 49.705m

A'



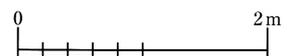
- SI - 122
- 第1層 10YR 3/1 黒褐色土 ローム粒・炭化粒微量
 - 第2層 10YR 2/1 黒色土 ロームブロック少量
 - 第3層 10YR 2/1 黒色土
 - 第4層 10YR 3/2 黒褐色土 ローム粒・焼土粒多量
 - 第5層 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 ローム中量、パミス微量
 - 第6層 10YR 3/3 暗褐色土 ローム中量、パミス微量
 - 第7層 10YR 3/2 黒褐色土 ローム粒少量
 - 第8層 10YR 3/1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量

SI - 122 SK - 1

C 49.326m



- SK - 1
- 第1層 10YR 1.7/1 黒色土 ロームブロック多量



第253図 SI - 122

やや起伏が見られる。各段階ともほぼ同レベルでの使用が考えられる。

[壁 溝]

・ 第 1 段階

削平を受けている東壁側を除きほぼ全周する形で検出した。西壁部分については、第 3 段階に掘り込まれた S K - 1 によって切られている。深さは平均 12cm を測る。

・ 第 2 段階

北壁ならびに西壁部分から部分的に検出した。南壁部分については、第 1 段階のものに部分的に溝が掘り足されて検出した。深さは平均 11cm を測る。

・ 第 3 段階

削平を受けている北壁半分ならびに東壁部分を除き断続的に検出した。深さは平均 17cm を測る。

[ピット] 住居内から 14 基検出した。段階毎の帰属関係については、第 2・3 段階時の支柱穴配置ならびに第 3 段階に帰属したと考えられる第 2 段階より外側に配置するピットについては明確に帰属が提示できたが、それ以外のピットについては、明確な帰属関係が追えないピットがある。

・ 第 2 段階

Pit 9、10、11、12 が支柱配置上の柱穴にあたりと考えられる。各ピットの規模は、Pit 9 = 38 × 28 × 28cm、Pit 10 = 31 × 25 × 93cm、Pit 11 = 38 × 21 × 26cm、Pit 12 = 42 × 18 × 22cm を測る。柱間は 355cm で約 12 尺である。

・ 第 3 段階

Pit 1 ~ 7 が本段階に帰属したと考えられる。各ピットの規模は、Pit 1 = 45 × 28 × 34cm、Pit 2 = 51 × 38 × 43cm、Pit 3 = 42 × 35 × 18cm、Pit 4 = 56 × 39 × 22cm、Pit 5 = (31) × 31 × 18cm、Pit 6 = 26 × 23 × 6 cm、Pit 7 = 28 × 25 × 5 cm を測る。支柱穴と考えられるピットは、Pit 1 ~ 4 である。

・ 第 1 ~ 3 段階 (詳細不明のピット)

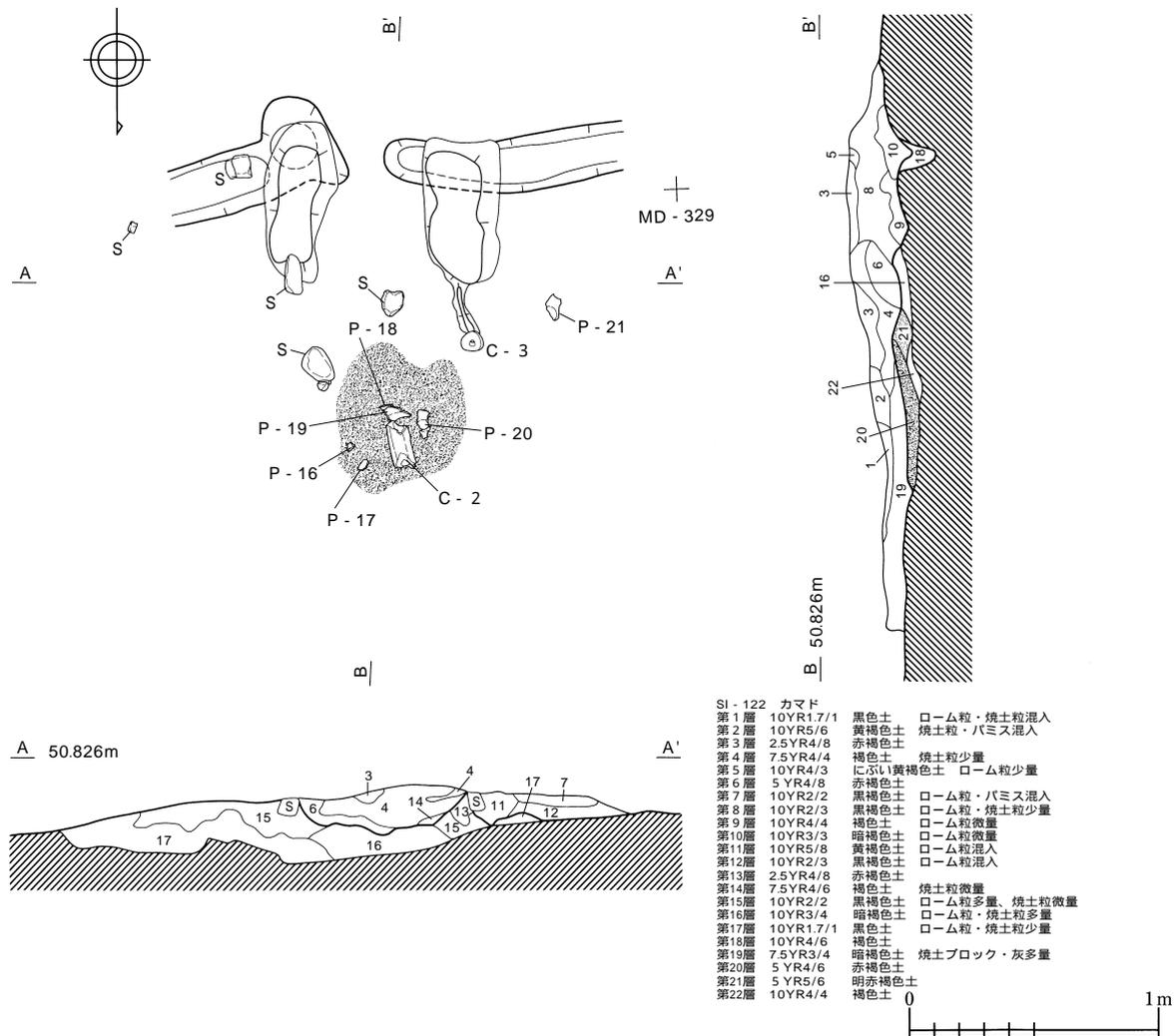
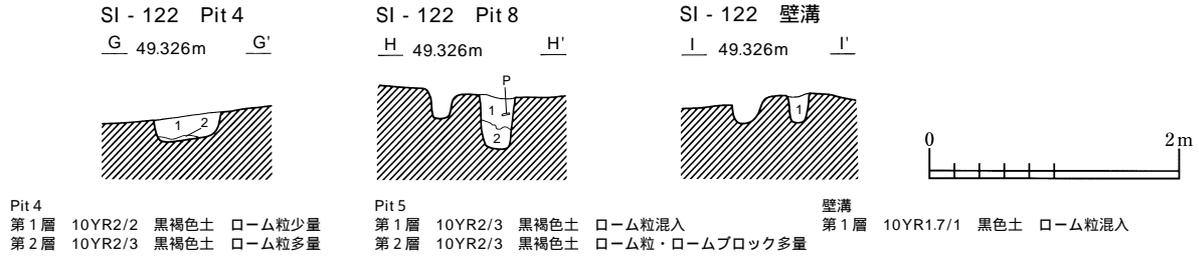
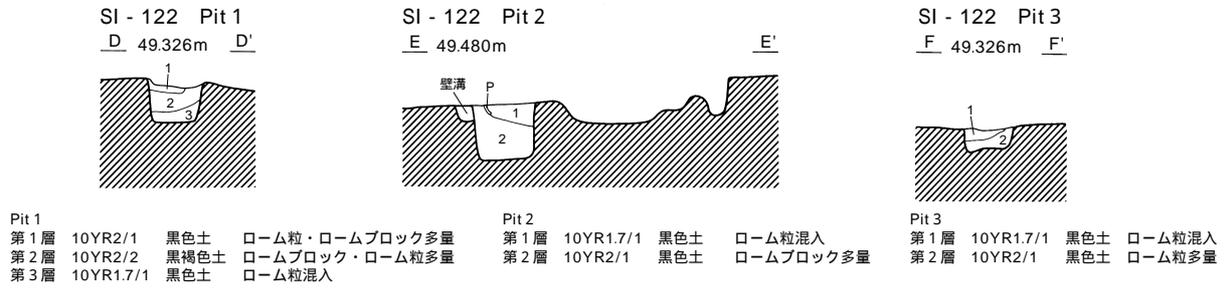
Pit 8 = 35 × 25 × 45cm、Pit 13 = 27 × 22 × 11cm、Pit 14 = 45 × (30) × 23cm を測る。Pit 8 については、第 1 ~ 2 段階での支柱穴として機能した可能性はあるが、対応関係が追えず、詳細は不明である。

[カマド] 第 3 段階のカマドのみを南壁側から 1 基検出した。位置については、東壁側が残存していないため、詳細は不明であるが、南壁 2 (50 : 50) の位置であるものと推定される。構造は、半地下式で、袖部ならびに煙道部の残存状況が悪く、袖部幅 (92) cm、煙道長 (67) cm を測る。主軸は N - 179° - E である。自然礫ならびに転用羽口を芯材として粘土ならびに黒色土を用いて構築している。煙道部天井は、第 3、5 層が相当する。煙道は、住居壁際より内側の部分から 7° の角度で起伏を持ちながら立ち上がる。

[その他の付属施設] 第 3 段階に帰属する土坑 1 基を検出した。規模は 245 × 170 × 21cm を測る。

[堆積土] 掘り方部分を含めて 8 層に分層した。住居廃絶後の堆積土は、第 1 ~ 7 層が相当する。住居壁際に堆積する第 2 ~ 7 層については、ロームブロック、焼土粒等を多く含み、人為的堆積状況を呈する。上位の第 1 層については、自然堆積状況を呈する。

(木 村)



第254図 SI - 122

S I - 123 (第255、256図)

[位置] グリッドMC・MD - 327・328で検出した。

[重複] SK - 150と重複している。削平のため、新旧関係については不明である。

[平面形・規模] 削平のため、東側半分が欠落しており、全体形は不明であるが、残存する床面の情報から長方形を呈したものと考えられる。規模は、(676) × (560) × 116cmを測る。床面積は(34.268) m²を測る。

[壁] 削平のため東壁側の情報は欠落しているが、壁高は、残存部分で北壁82cm、南壁85cm、西壁113cmを測る。断面形はdで、緩やかに立ち上がる。壁面は堅緻である。また、西壁ならびに北壁の一部は壁面が赤変化しており、焼土を含むローム土の堆積が見られることから本遺構が焼失住居の可能性が考えられる。

[床] 月見野火山灰層ならびに大谷火山灰層の地山土の混合土を貼り床としている。床面はやや起伏があり、堅緻である。

[壁溝] 南北壁ならびに西壁から部分的に検出した。深さは平均4cmを測る。

[ピット] 住居内外から15基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 71 × 68 × 69cm、Pit 2 = 45 × 31 × 47cm、Pit 3 = 38 × 23 × 18cm、Pit 4 = 68 × 48 × 8cm、Pit 5 = 70 × 57 × 35cm、Pit 6 = 29 × 22 × 47cm、Pit 7 = 42 × 28 × 36cm、Pit 8 = 71 × 70 × 75cm、Pit 9 = 40 × 38 × 51cm、Pit 10 = 74 × 52 × 31cm、Pit 11 = 82 × 63 × 46cm、Pit 12 = 26 × 22 × 30cm、Pit 13 = 28 × 24 × 11cm、Pit 14 = 34 × 24 × 22cm、Pit 15 = 32 × 21 × 30cmを測る。主柱配置については、住居外に位置するPit 8 とPit 1の底面の深さがほぼ同一であり、対応関係があった可能性が考えられるが、付近にカマドが位置し、物理的に柱穴配置となり得たかどうかは不明である。

[カマド] 南壁側から1基検出した。東壁側が削平されているため詳細については不明であるが、南壁3(64:36)の位置から検出したものと推定される。構造は、半地下式で、袖部ならびに煙道部の残存状況が悪く、袖部幅(94)cm、煙道長(30)cmを測る。主軸はN - 179° - Eである。

粘土による構築で、支脚として考えられる土師器小甕1個体が体部付近で破損した状況で出土した。煙道は、住居壁際より内側の部分から12°の角度で立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居内から土坑2基を検出した。SK - 1は、住居西壁中央部寄りの部分から検出した。規模は165 × 137 × 90cmを測る。SK - 2は、SK - 1よりやや住居中央寄りの位置から検出した。規模は130 × 87 × 19cmを測る。

[堆積土] 掘り方部分を含めて13層に分層した。貼り床層の第12層中には炭化物・炭化粒が多量に含まれる。住居廃絶後の堆積土は第1～11層で、第8層中には焼土ブロックが崩落して堆積している。壁面の赤変化の要素を踏まえると、本遺構の壁面崩落の要素が考えられる。第2層中からTo - a火山灰が層状に堆積して検出した。

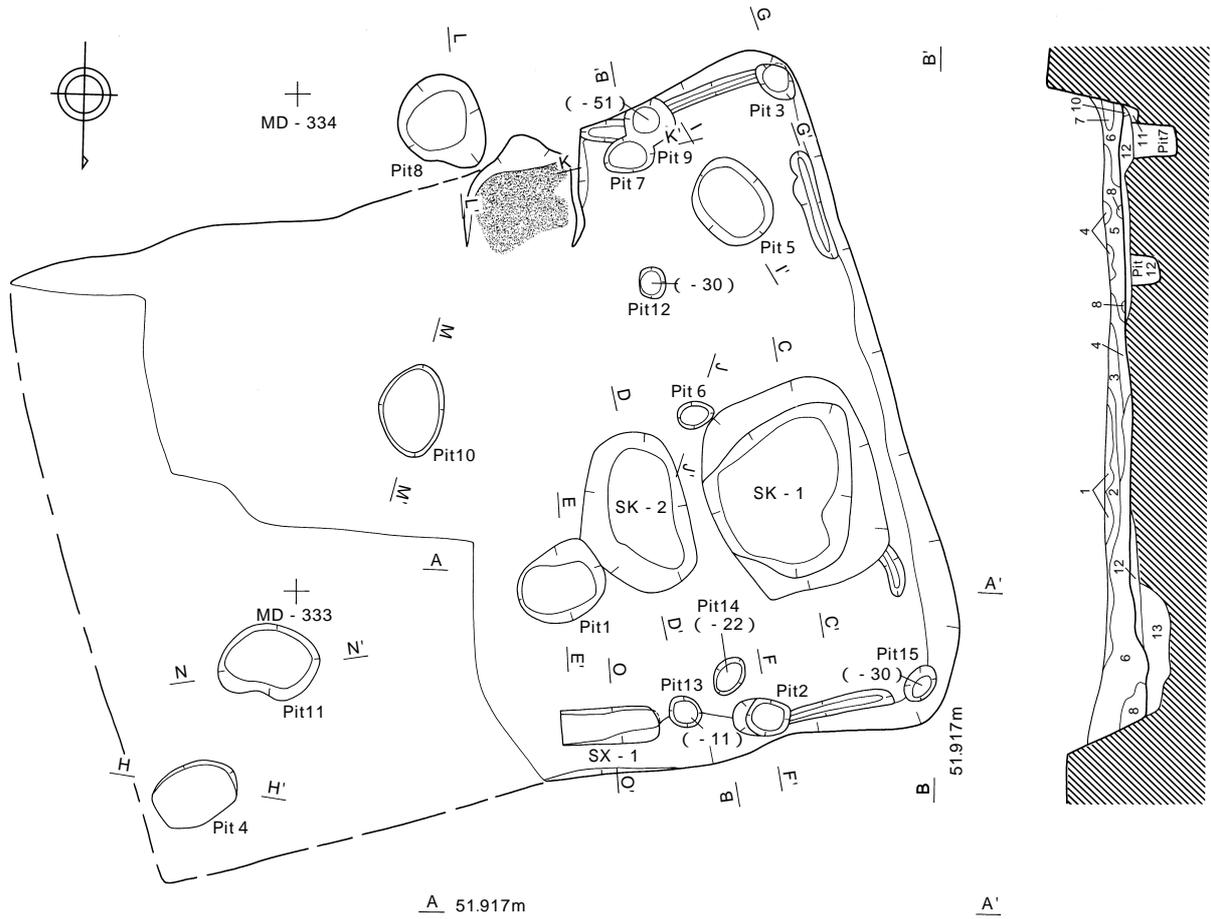
(木村)

S I - 124 (第257図)

[位置] グリッドMB - 334で検出した。

[重複] なし。

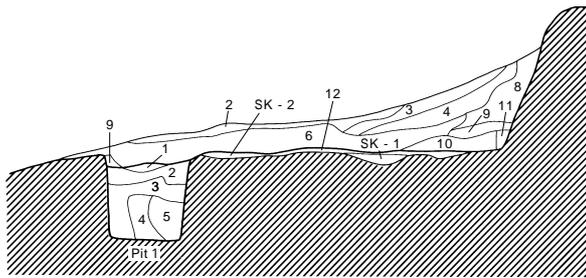
[平面形・規模] 削平のため、東側半分が欠落しており、全体形は不明であるが、残存する壁面の情



- SI - 123
- | | | | |
|------|---------|---------|----------------------------|
| 第1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ローム粒少量 |
| 第2層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ロームブロック微量
火山灰 (To-a) 多量 |
| 第3層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ロームブロック中量
炭化物粒少量 |
| 第4層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | ロームブロック中量
炭化物粒少量 |
| 第5層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ロームブロック少量
炭化物粒微量 |
| 第6層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ロームブロック中量
炭化物粒微量 |
| 第7層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ロームブロック少量
炭化物粒・ |
| 第8層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 炭化物粒・
焼土ブロック多量 |
| 第9層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒多量 |
| 第10層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | ロームブロック中量
ローム粒多量 |
| 第11層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒多量 |
| 第12層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | ロームブロック中量
炭化物粒多量 |
| 第13層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ロームブロック多量
炭化物粒中量 |

A 51.917m

A'

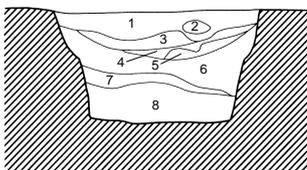


- | | | | | | | | |
|-------|---------|---------|-----------------|--------|---------|-----|--------|
| Pit 1 | | | | Pit 12 | | | |
| 第1層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ロームブロック多量 | 第1層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 炭化物粒中量 |
| 第2層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ローム粒・炭化物粒中量 | | | | |
| 第3層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | ロームブロック多量・炭化物中量 | | | | |
| 第4層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ロームブロック・炭化物多量 | | | | |
| 第5層 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 | 炭化物粒多量 | | | | |

SI - 123 SK - 1

C 50.817m

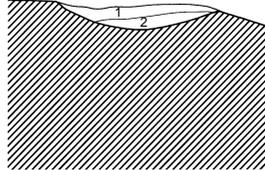
C'



SI - 123 SK - 2

D 50.817m

D'

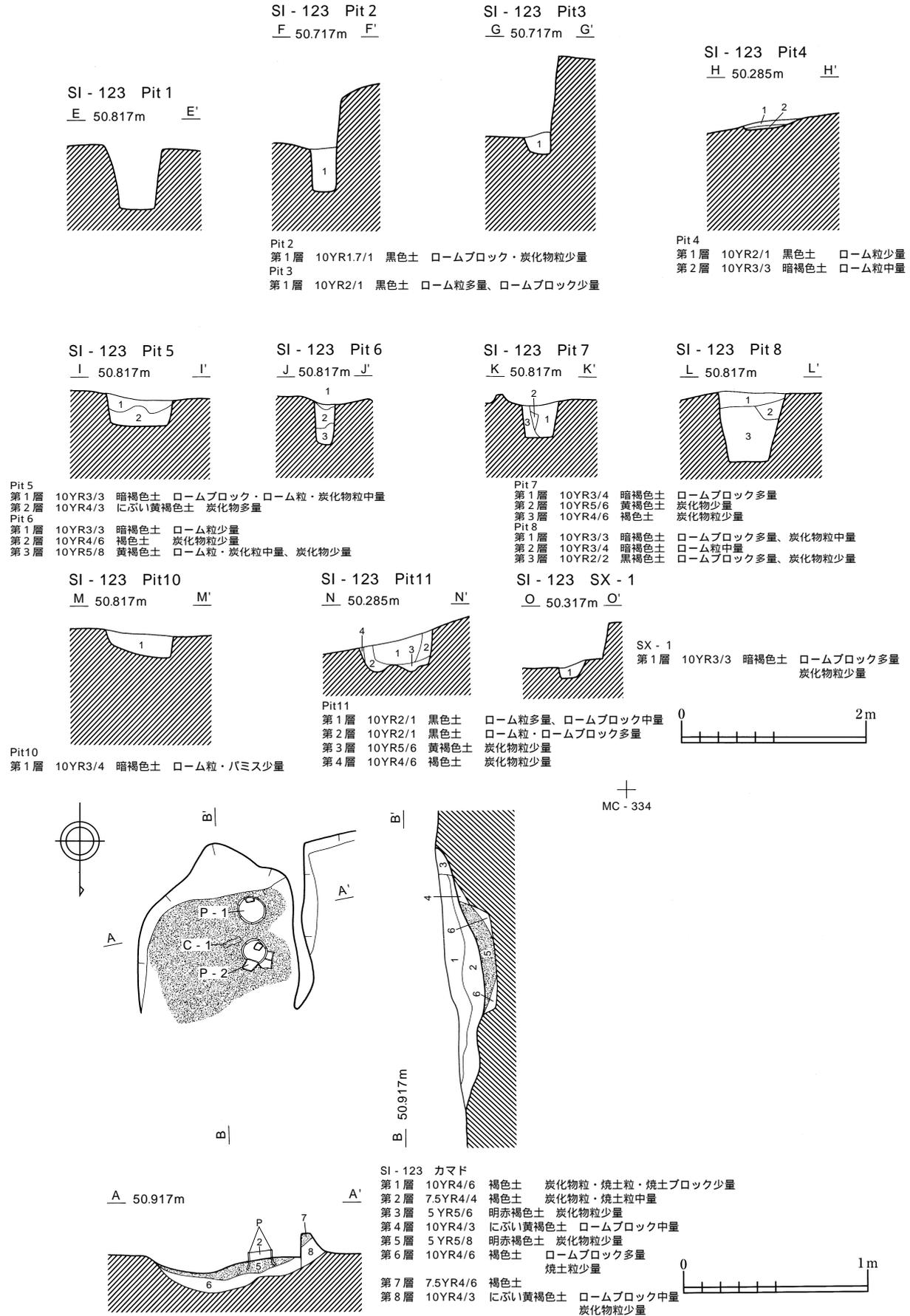


- | | | | |
|--------|---------|---------|------------------------|
| SK - 1 | | | |
| 第1層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | ロームブロック・炭化物多量
炭化物少量 |
| 第2層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 炭化物粒多量 |
| 第3層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 炭化物粒多量 |
| 第4層 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 | 炭化物粒多量 |
| 第5層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量 |
| 第6層 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 | 炭化物粒多量 |
| 第7層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ローム粒多量・ロームブロック少量 |
| 第8層 | 10YR6/4 | にぶい黄褐色土 | ロームブロック少量
炭化物粒多量 |

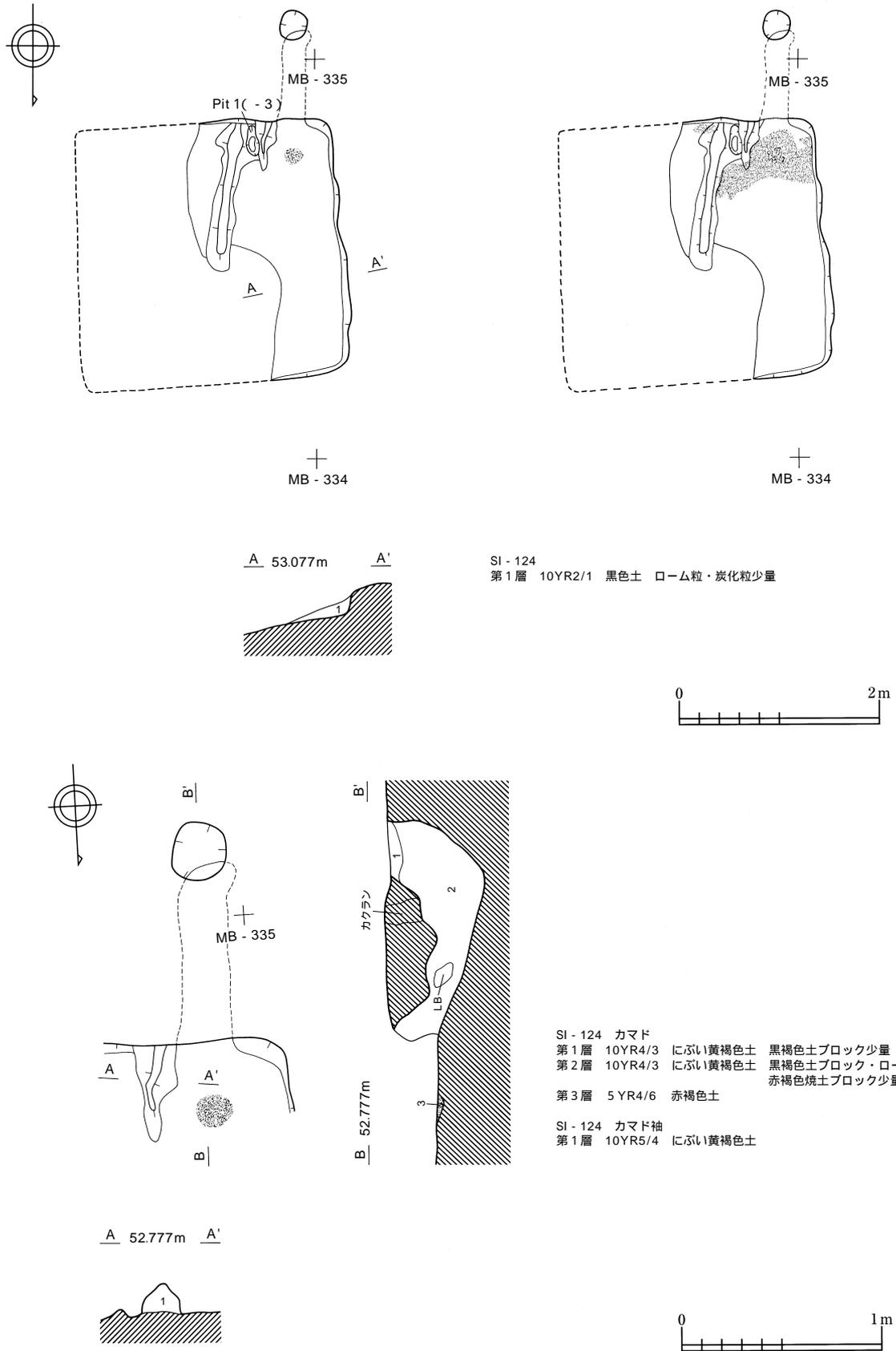
- | | | | |
|--------|----------|------|------------------|
| SK - 2 | | | |
| 第1層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ローム粒多量・ロームブロック少量 |
| 第2層 | 7.5YR5/8 | 明褐色土 | パミス中量 |



第255図 SI - 123



第256図 SI - 123



第257図 SI - 124

報等から方形を呈したものと考えられる。規模は 268 × 256 × 31cmを測る。床面積は (6.9) m²を測る。

[壁] 削平のため東壁側の情報は欠落しているが、壁高は、残存部分で北壁10cm、南壁16cm、西壁31cmを測る。断面形はbで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面はやや脆弱である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としている。床面は起伏がややあり、堅緻である。また、カマド左袖脇から中央部にかけて粘土の土盛を150 × 23 × 9 cmの規模で検出した。

[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から1基検出した。規模は30 × 13 × 3 cmを測る。主柱穴としての機能は充足し得ないものと考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。東壁側が削平されているため詳細については不明であるが、南壁4(84:16)の位置から検出したものと推定される。構造は、地下式で、燃焼部上部構造が破壊されており、住居西壁南隅側にブロック状に散逸して堆積している状況で検出している。煙道長は、109cmを測る。主軸はN - 179° - Wである。燃焼部の構築は、散逸して検出したブロック等から粘土によるものであったことが考えられる。煙道部は、大谷火山灰層の地山層を掘り込む形で構築されている。煙道は、住居壁際から18°の角度で傾斜しながら斜めに掘り込まれた煙出部と接する。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 1層に分層した。埋め戻し等の要素が確認できず自然堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 125 (新)(第258図)

[位置] グリッドL I - 337、L J・L K - 336~338、L L - 337・338で検出した。

[重複] S I - 125 (旧)と重複している。本遺構がS I - 125 (旧)の上部に構築されており、本遺構の方が新しい。

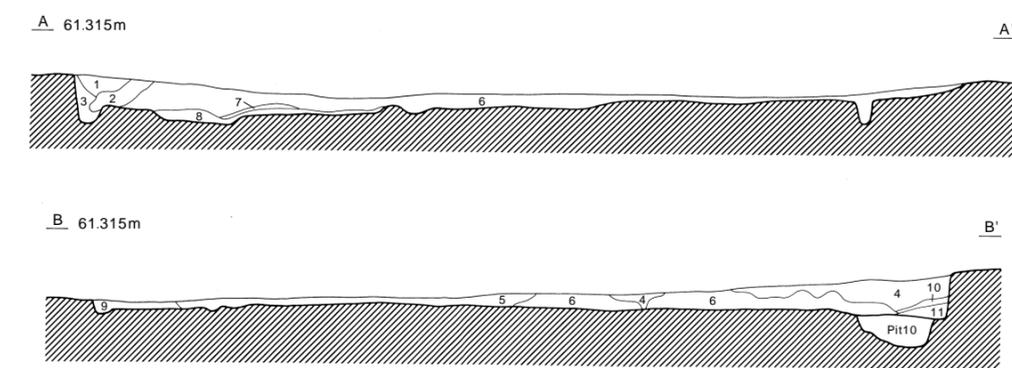
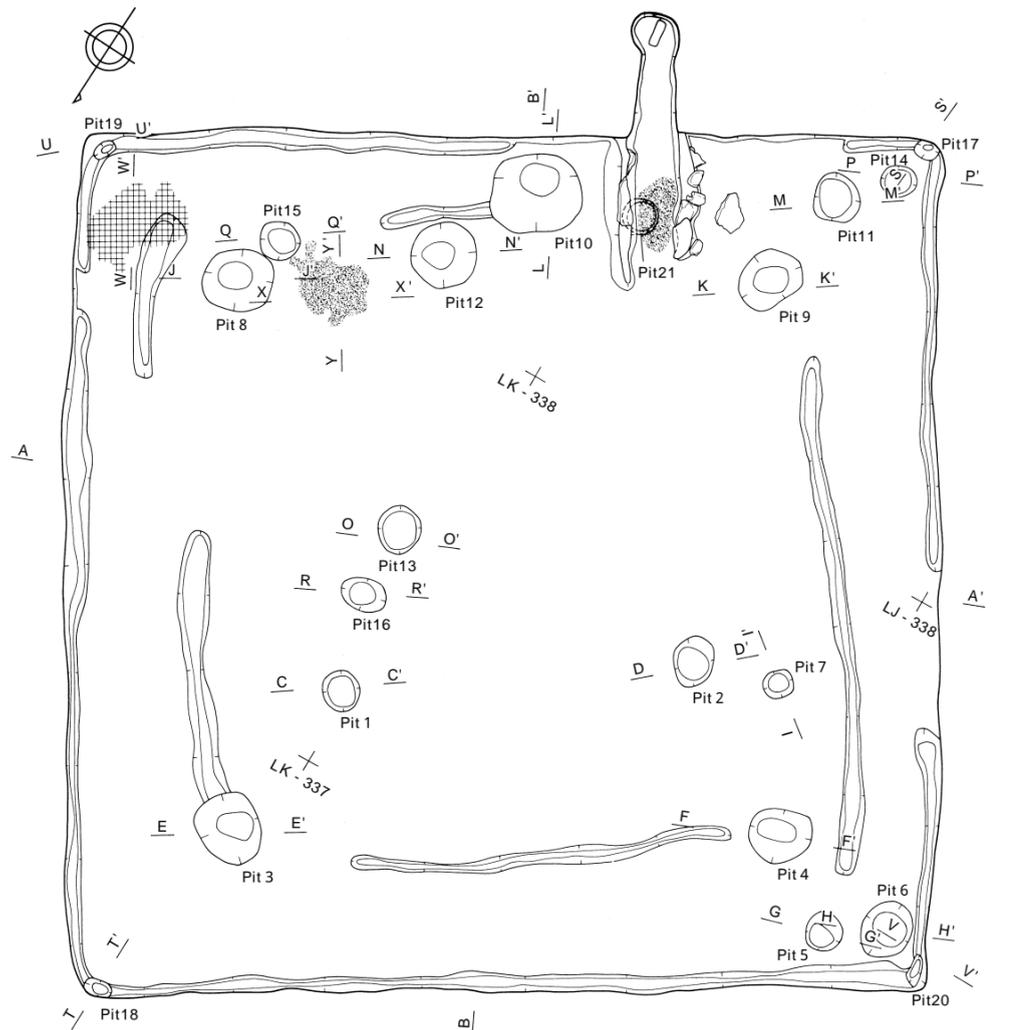
[平面形・規模] 方形を呈し、786 × 773 × 44cmを測る。床面積は59.55m²を測る。

[壁] 壁高は、北西壁8cm、北東壁26cm、南東壁41cm、南西壁7cmを測る。北西壁、南西壁は、削平されており、比較的残存状態の良い北東壁、南東壁から判断すると、断面形はaで、ほぼ垂直に近い形で立ち上がるものと考えられる。残存している壁面は堅緻である。

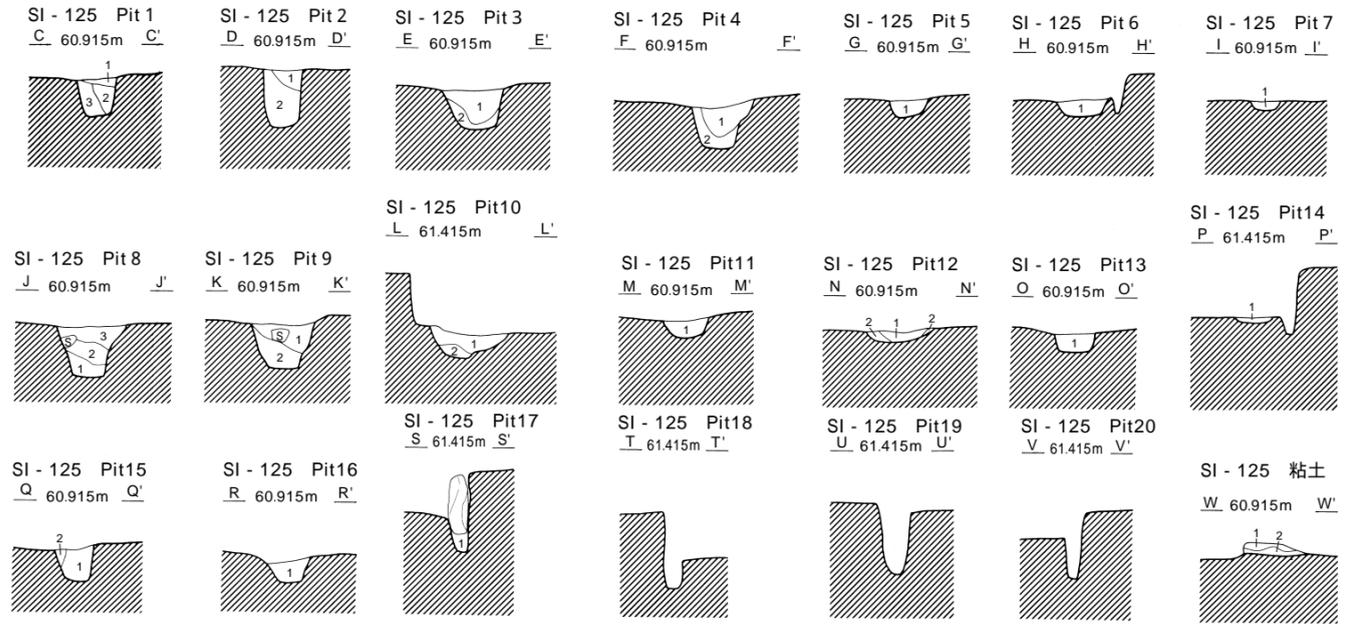
[床] 大谷火山灰層の地山を床面とし、若干の起伏がみられる。住居北西壁付近においてみられる若干の落ち込みに暗褐色を呈する8層が堆積している。S I - 125 (旧)の建て替えの際に、掘り下げすぎた部分に充填した土であると考えられる。

[壁溝] 北東壁、南東壁、南西壁において部分的に途切れるが、断続的にほぼ全周して検出した。深さは平均13cmを測る。北東壁に沿って構築されている壁溝の深さが比較的浅い。

[ピット] 竪穴内から17基検出した(Pit 3~Pit 14、Pit 16~20)。各ピットの規模は、Pit 3 = 65 × 54 × 38cm、Pit 4 = 57 × 50 × 38cm、Pit 5 = 36 × 33 × 15cm、Pit 6 = 54 × 44 × 14cm、Pit 7 = 27 × 24 × 7cm、Pit 8 = 65 × 57 × 45cm、Pit 9 = 60 × 46 × 42cm、Pit 10 = 83 × 69 × 28cm、Pit 11 = 46 × 42 × 18cm、Pit 12 = 59 × 57 × 10cm、Pit 13 = 44 × 38 × 16cm、Pit 14 = 32 × 29 × 5cm、Pit 16 = 43 × 30 × 22cm、Pit 17 = 21 × 16 × 30cm、Pit 18 = 25 × 15 × 25cm、Pit 19 = 21 × 12 × 55cm、Pit 20 = 29 × 12 × 36cmを測る。主柱穴として認定できるものはPit 3、4、8、9の4基で、壁柱穴と



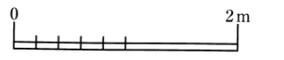
- SI - 125
- | | |
|-------------------------------|-----------------------------|
| 第1層 10YR4/4 褐色土 | 第7層 7.5YR4/6 褐色土 |
| 第2層 10YR3/4 暗褐色土 | 第8層 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒少量 |
| 第3層 7.5YR5/8 明褐色土 | 第9層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 |
| 第4層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物・焼土粒微量 | 第10層 10YR3/1 黒褐色土 ロームブロック少量 |
| 第5層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土粒・炭化粒少量 | 第11層 10YR3/4 暗褐色土 炭化粒少量 |
| 第6層 10YR4/6 褐色土 バミス微量 | |



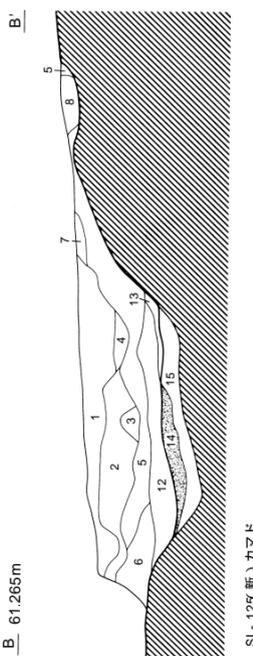
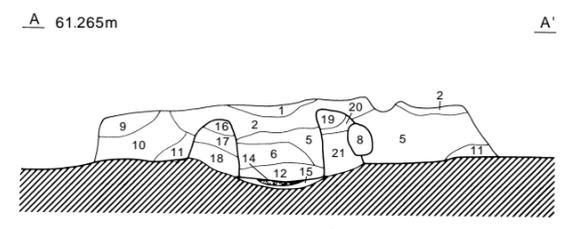
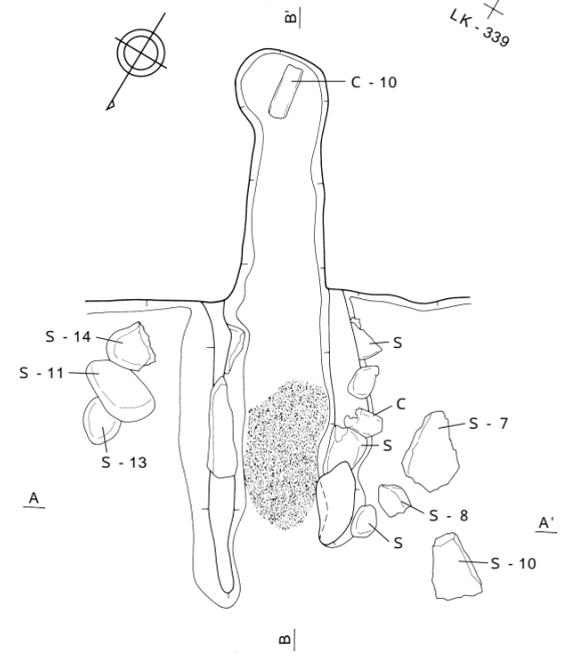
SI - 125 (旧)カマド
X 60.915m X'

SI - 125 (旧)カマド
Y 60.915m Y'

SI - 125 粘土
W 60.915m W'



- | | | |
|-------|---------------------|---------------|
| Pit1 | 第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 | ロームブロック・炭化物少量 |
| Pit2 | 第1層 10YR3/4 暗褐色土 | ロームブロック少量 |
| Pit3 | 第1層 10YR3/4 暗褐色土 | ロームブロック少量 |
| Pit4 | 第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 | 炭化物微量 |
| Pit5 | 第1層 10YR3/3 暗褐色土 | 炭化物微量 |
| Pit6 | 第1層 10YR3/3 暗褐色土 | 炭化物微量 |
| Pit7 | 第1層 10YR3/3 暗褐色土 | 炭化物微量 |
| Pit8 | 第1層 10YR3/4 暗褐色土 | 焼土粒・ローム粒少量 |
| Pit9 | 第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 | 炭化物微量 |
| Pit10 | 第1層 10YR3/4 暗褐色土 | 炭化物・焼土粒少量 |
| Pit11 | 第1層 10YR4/4 褐色土 | |
| Pit12 | 第1層 10YR4/4 褐色土 | |
| Pit13 | 第1層 10YR4/4 褐色土 | |
| Pit14 | 第1層 10YR4/4 褐色土 | 炭化物・バミス少量 |
| Pit15 | 第1層 10YR3/3 暗褐色土 | 炭化物微量 |
| Pit16 | 第2層 10YR4/6 褐色土 | 炭化物微量 |
| Pit17 | 第1層 7.5YR4/4 褐色土 | 炭化物微量 |
| Pit18 | 第1層 10YR4/6 褐色土 | 炭化物・焼土粒微量 |



- SI - 125(新)カマド
- | | |
|----------------------|--------------------|
| 第1層 10YR3/2 にぶい黄褐色土 | 炭化粒・焼土粒微量、白色の砂ブロック |
| 第2層 10YR4/3 赤褐色土 | 炭化粒・焼土粒微量 |
| 第3層 2.5YR4/6 赤褐色土 | |
| 第4層 5YR4/4 にぶい赤褐色土 | |
| 第5層 10YR3/4 暗褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第6層 10YR4/3 暗褐色土 | ローム粒少量 |
| 第7層 7.5YR3/2 黒褐色土 | 炭化物微量 |
| 第8層 10YR3/3 暗褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第9層 10YR3/4 暗褐色土 | ロームブロック少量 |
| 第10層 10YR3/4 暗褐色土 | ロームブロック少量 |
| 第11層 10YR4/6 褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第12層 7.5YR3/2 黒褐色土 | ロームブロック少量 |
| 第13層 5YR4/4 暗褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第14層 10YR3/6 暗褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第15層 7.5YR4/4 褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第16層 7.5YR5/4 にぶい褐色土 | 焼土粒・ローム粒少量 |
| 第17層 10YR4/6 褐色土 | ローム粒・ローム粒少量 |
| 第18層 10YR5/8 黄褐色土 | 炭化物・ローム粒少量 |
| 第19層 7.5YR4/3 褐色土 | 炭化物・ローム粒少量 |
| 第20層 10YR3/4 暗褐色土 | 炭化物・ローム粒少量 |
| 第21層 7.5YR4/4 褐色土 | |



SI - 125 粘土
第1層 10YR3/3 暗褐色土 白色の粘土やや多量
第2層 10YR4/4 褐色土

SI - 125(旧)カマド
第1層 2.5YR4/6 赤褐色土

第258図 SI - 125 (新) (旧)

して認定できるものはPit17、18、19、20の4基である。4基の支柱穴をそれぞれ結んだラインがほぼ正方形を呈するように配置され、4基の壁柱穴が住居の四隅に配置されている。Pit17の上部からは、安山岩質の礫を検出した。Pit7、12、13、16の4基については、ここでは、S I - 125（新）で扱っているものの、（新）・（旧）のPitの堆積土において明確な差異が認められず、（新）・（旧）のいずれに帰属するか明確に判断できなかった。この4基については、S I - 125（旧）に帰属する可能性もある。

[カマド] 住居南東壁側から1基検出した。南東壁3（66：34）の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅78cm、煙道長208cmを測る。主軸はN - 148° - Eである。袖は粘土によって構築されており、芯材として礫が装填されている。にぶい黄褐色を呈する2層が天井部構成していた粘土と考えられる。火床面は68cm×33cmの範囲で赤化している。煙道は、火床面から30°の角度で緩やかに立ち上がる。煙出部付近の底面において、羽口を1個体検出した。2次被熱が激しく、カマド使用時から置かれていたものと考えられる。

[その他の付属施設] 住居東隅の床面付近より、90×65cmの範囲で白色を呈する粘土を検出した。

[堆積土] 11層に分層した。かなり削平を受けているため、上層部分の堆積土は不明である。残存している下層部分の堆積土は、主として黄褐色、褐色を呈する。炭化物や焼土粒を混入する黄褐色、褐色土を主体とする土層の堆積状況からみて、本遺構の堆積は、人為的要因が強いと考えられる。

（設 楽）

S I - 125（旧）（第258図）

[位 置] L I - 337、L J・L K - 336～338で検出した。

[重 複] S I - 125（新）と重複している。本遺構の上にS I - 125（新）が構築されており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 壁が残存していないため、明確な平面形・規模は不明である。壁溝の周巡範囲から推定すると、方形を呈し、規模は598×582cmを測る。床面積は35.32㎡と推定される。

[壁] 建て替えにより、壁が削平されており、不明である。

[床] S I - 125（新）の床と重複しており、大谷火山灰層の地山を床面とし、若干の起伏がみられる。住居北西壁付近においてみられる若干の落ち込みに暗褐色を呈する8層が堆積している。

[壁 溝] 部分的に欠落しているが、断続的にほぼ全周して検出した。深さは平均12cmである。

[ピット] 竪穴内から4基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 42×33×33cm、Pit 2 = 46×36×51cm、Pit15 = 35×36×32cm、Pit21 = 32×31cmを測る。

これらの4基のピットは、支柱穴と考えられ、4本の支柱穴を長方形に配置している。

[カマド] 住居南東壁2（28：72）の位置から1基検出した。建て替えのため、袖、煙道部は残存しておらず、火床面のみ検出した。範囲は64×60cmである。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] S I - 125（新）の堆積土と同一である。

（設 楽）

S I - 127 (第259、260図)

[位置] グリッドLM・LN - 336・337で検出した。

[重複] SK - 154と重複している。本遺構の堆積土がSK - 154の堆積土に切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 長方形を呈し、 $490 \times 414 \times 40$ cmを測る。床面積は 20.613m^2 を測る。

[壁] 壁高は、北壁20cm、東壁33cm、南壁30cm、西壁27cmを測る。断面形はbで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面は、堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面は堅緻である。また、住居床面から赤化面を3ヶ所検出した。各赤化面の範囲は、 33×18 cm、 36×28 cm、 32×18 cmを測る。

[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から6基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = $32 \times 31 \times 18$ cm、Pit 2 = $33 \times 31 \times 12$ cm、Pit 3 = $48 \times 35 \times 5$ cm、Pit 4 = $30 \times 21 \times 7$ cm、Pit 5 = $40 \times 38 \times 16$ cm、Pit 6 = $58 \times 55 \times 27$ cmを測る。主柱穴としての機能を充足するピットは無いものと考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁1(24:76)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅108cm、煙道長36cmを測る。主軸はN - 175.5° - Wである。燃烧部袖は、自然礫ならびに転用羽口を芯材とし、粘土を用いて構築している。また、右袖部分が一部破壊された可能性があり、芯材である自然礫がPit 6の上層から出土している。燃烧部ならびに煙道部天井は第6層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道は、住居壁際から 30° の角度で立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 間層を含めて5層に分層した。堆積土中にロームブロック、ローム粒、炭化物等を含み、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 129 (第261、262図)

[位置] グリッドLU・LV - 335・336で検出した。

[重複] SK - 296と重複している。本遺構がSK - 296の堆積土を切られており、本遺構の方が古い。

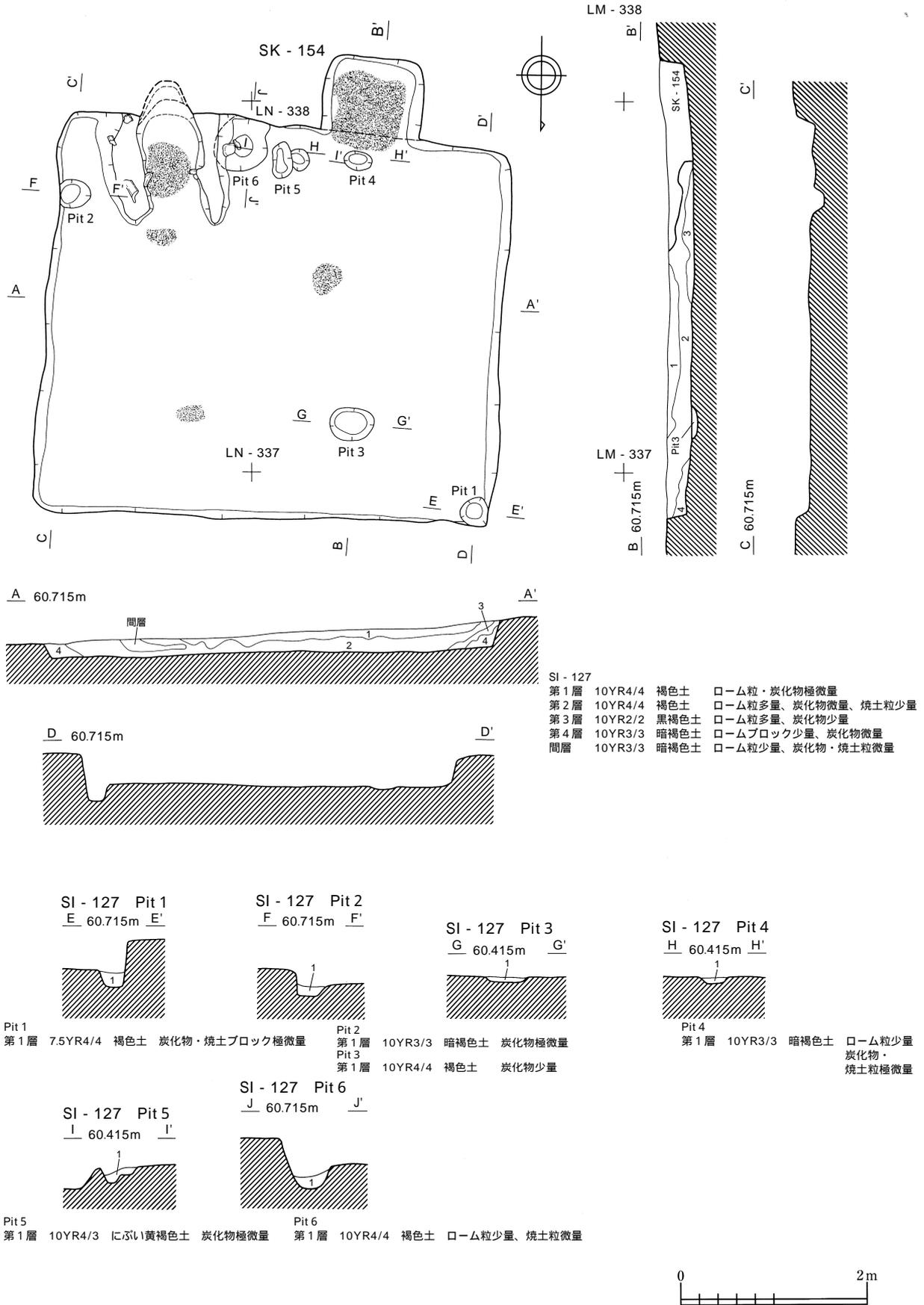
[平面形・規模] 削平のため、住居南壁～東壁側が欠落しており、全体形は不明であるが、残存する床面の情報から長方形を呈したのと考えられる。規模は $474 \times (394) \times 42$ cmを測る。床面積は 18.505m^2 を測る。

[壁] 削平のため情報は欠落しているが、壁高は、北壁28cm、東壁7cm、南壁5cm、西壁35cmを測る。断面形は(a)で、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

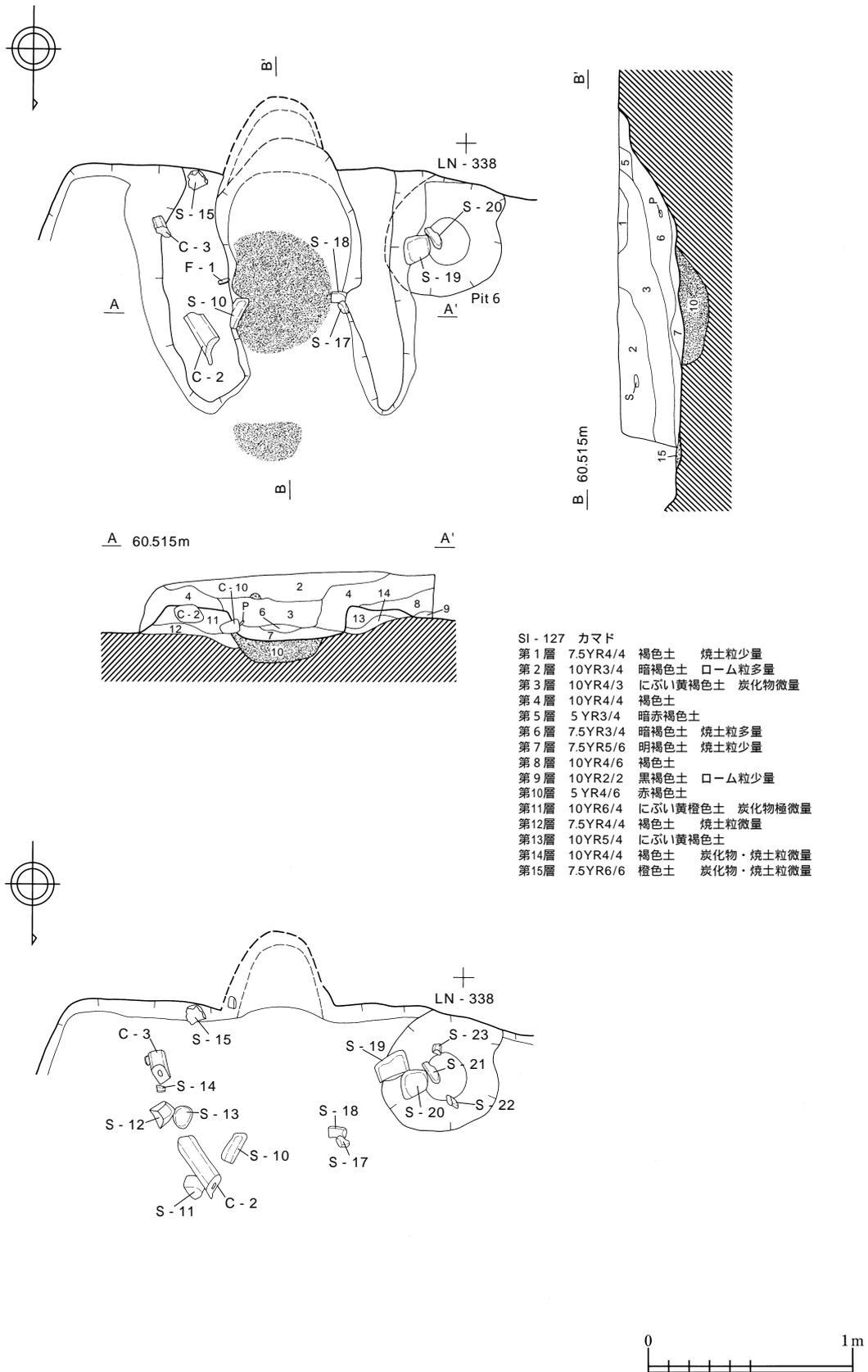
[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。また、住居床面から赤化面を3ヶ所検出した。各赤化面の範囲は、 72×43 cm、 59×33 cm、 69×32 cmを測る。

[壁溝] なし。

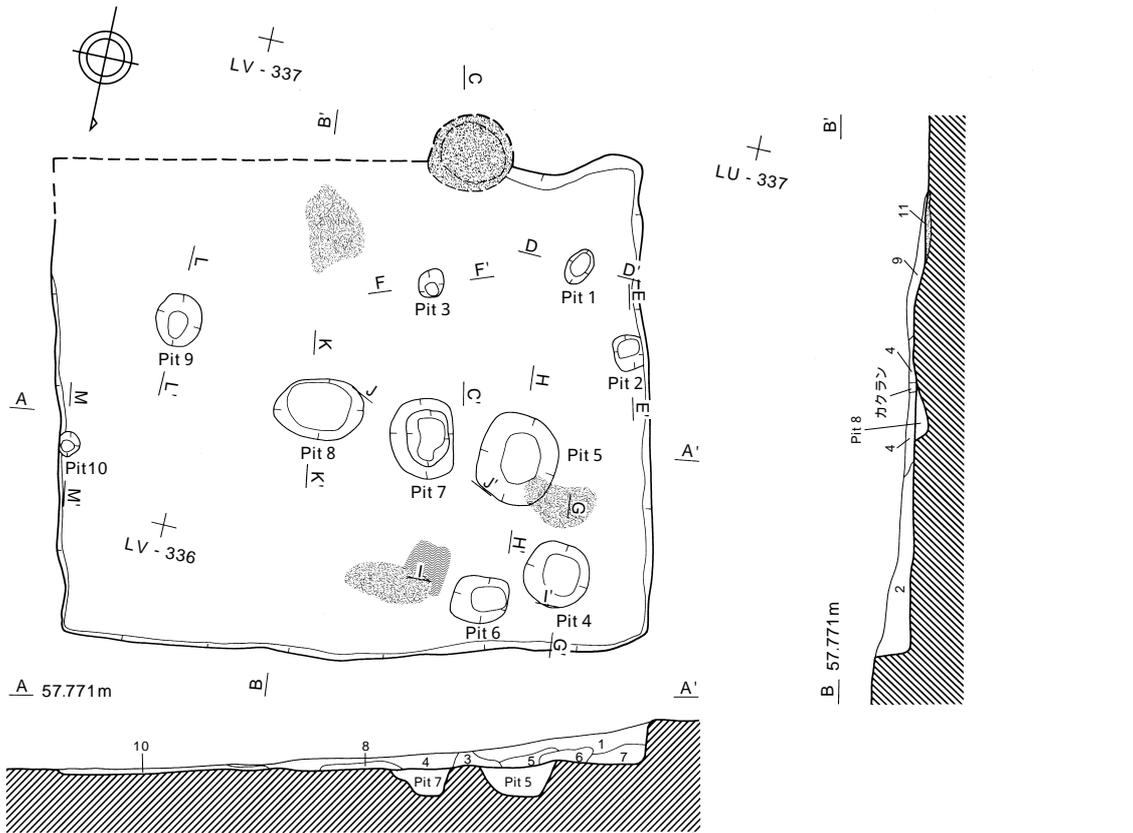
[ピット] 住居内から10基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = $31 \times 20 \times 7$ cm、Pit 2 = $28 \times 22 \times 17$ cm、Pit 3 = $24 \times 20 \times 23$ cm、Pit 4 = $53 \times 52 \times 17$ cm、Pit 5 = $72 \times 62 \times 25$ cm、Pit 6 = $50 \times 40 \times 4$ cm、Pit 7 = $65 \times 50 \times 22$ cm、Pit 8 = $72 \times 50 \times 9$ cm、Pit 9 = $42 \times 37 \times 9$ cm、Pit 10 = $21 \times 16 \times$



第259図 SI - 127

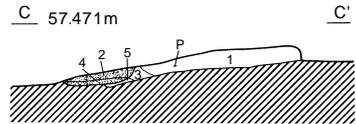


第260図 SI - 127

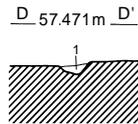


層	色	成分	層	色	成分
第1層	7.5YR3/3 暗褐色土	焼土粒微量、炭化粒・火山灰(To-a)・ローム粒極微量	第7層	10YR3/3 暗褐色土	炭化粒・焼土粒極微量、ローム粒微量
第2層	7.5YR4/4 褐色土	ローム粒少量、炭化粒極微量	第8層	10YR3/3 暗褐色土	炭化粒極微量、ローム粒微量
第3層	7.5YR4/4 褐色土	炭化粒微量、焼土少量、ロームブロック微量	第9層	7.5YR4/4 褐色土	ローム粒極微量
第4層	10YR3/3 暗褐色土	炭化粒・焼土粒・ローム粒極微量	第10層	7.5YR4/6 褐色土	
第5層	10YR2/2 黒褐色土	炭化粒・焼土粒・ローム粒極微量	第11層	5YR3/3 暗赤褐色土	焼土粒混入
第6層	7.5YR4/4 褐色土	炭化粒極微量、焼土粒少量、ローム粒極微量			

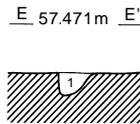
SI - 129 カマド



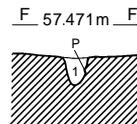
SI - 129 Pit 1



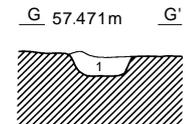
SI - 129 Pit 2



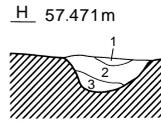
SI - 129 Pit 3



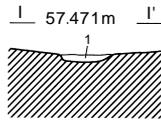
SI - 129 Pit 4



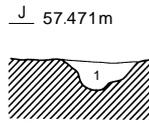
SI - 129 Pit 5



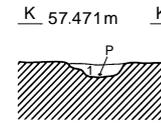
SI - 129 Pit 6



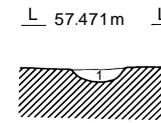
SI - 129 Pit 7



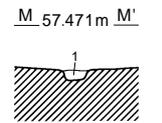
SI - 129 Pit 8



SI - 129 Pit 9



SI - 129 Pit 10



カマド

第1層	7.5YR3/3 暗褐色土	焼土極微量、炭化物微量、ローム粒極微量
第2層	2.5YR4/6 赤褐色土	
第3層	7.5YR4/4 褐色土	ローム粒極微量
第4層	5YR4/6 赤褐色土	
第5層	7.5YR4/6 褐色土	ローム粒極微量
Pit 1	第1層 7.5YR4/3 褐色土	粘土微量
Pit 2	第1層 7.5YR4/4 褐色土	粘土極微量
Pit 3	第1層 7.5YR4/4 褐色土	
Pit 4	第1層 10YR3/3 暗褐色土	焼土・炭化物極微量
Pit 5	第1層 10YR2/2 黒褐色土	炭化物・焼土微量、ローム粒極微量
	第2層 7.5YR4/4 褐色土	焼土・炭化物極微量
	第3層 10YR2/2 黒褐色土	炭化物少量、ローム粒極微量

Pit 6

第1層	7.5YR3/4 暗褐色土	焼土・炭化物極微量
-----	---------------	-----------

Pit 7

第1層	10YR3/3 暗褐色土	焼土極微量、炭化物微量、ローム粒極微量
		粘土ブロック混入

Pit 8

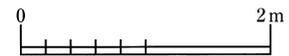
第1層	7.5YR4/3 褐色土	炭化物極微量
-----	--------------	--------

Pit 9

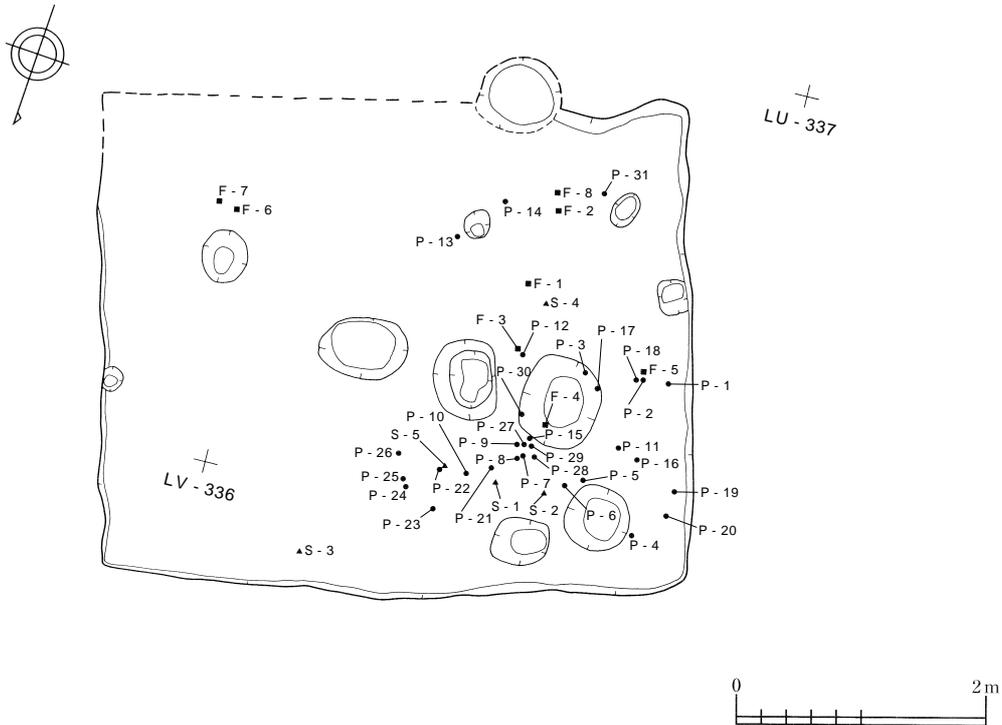
第1層	10YR2/1 黒色土	ローム少量
-----	-------------	-------

Pit 10

第1層	10YR3/3 暗褐色土	ローム極微量
-----	--------------	--------



第261図 SI - 129



第262図 SI - 129

7cmを測る。主柱配置については、明確な対応関係等が負えず不明である。

[カマド] 削平のため、カマド上部構造は検出できず、南壁3(70:30)の位置から火床面を検出したのみである。詳細については不明である。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 11層に分層した。全般的にロームブロック、ローム粒、炭化粒、焼土等を含む土層堆積で、埋め戻し等による人為的堆積状況を呈する。第1層中からT o - a火山灰を粒状に検出した。

(木 村)

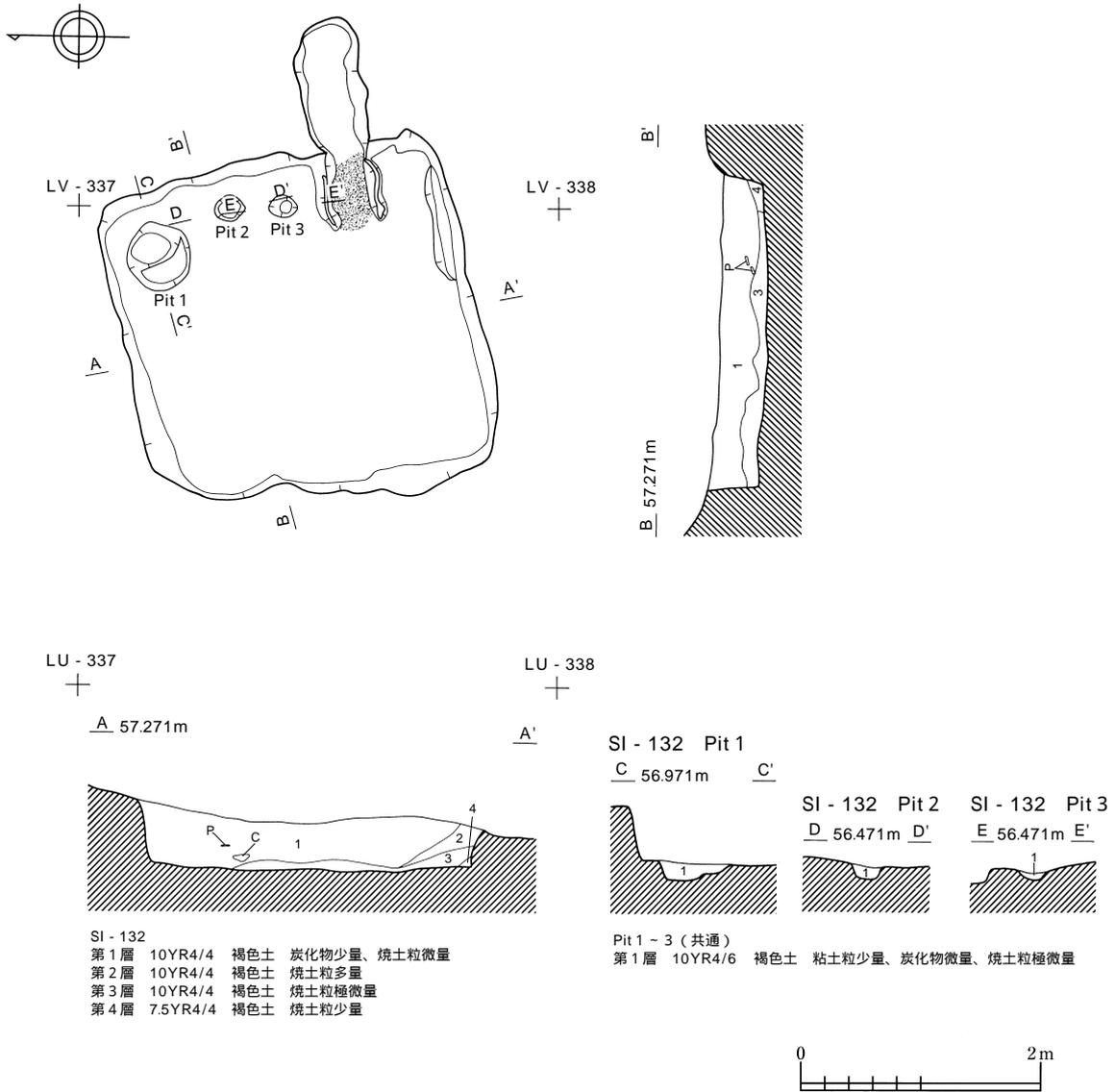
SI - 132 (第263、264図)

[位置] グリッドLU・LV - 337で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 台形を呈し、292×264×74cmを測る。床面積は8.059m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁54cm、東壁45cm、南壁33cm、西壁43cmを測る。断面形はcで、壁上部の一部で緩やかな立ち上がりが見られる。壁面は堅緻である。



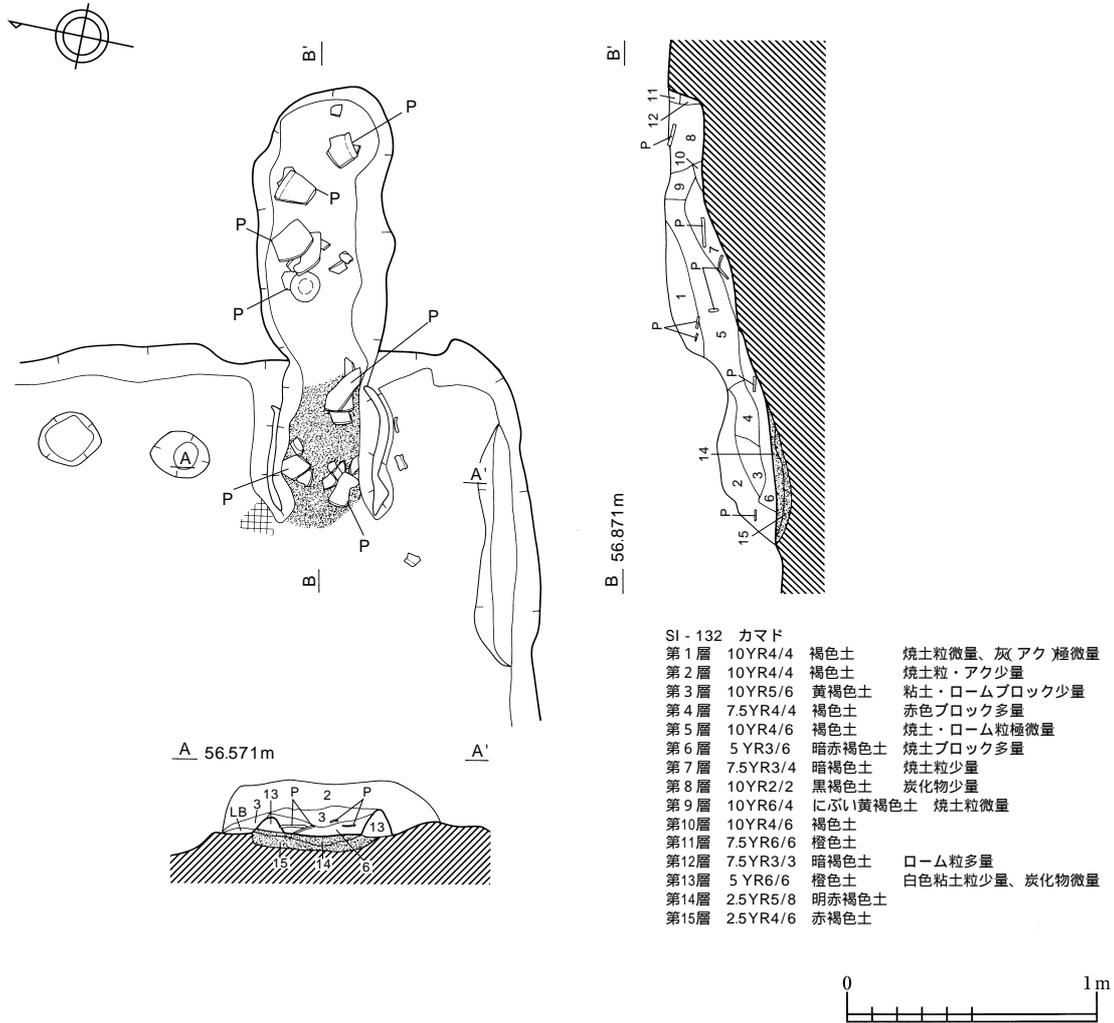
第263図 SI - 132

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。

[壁 溝] なし。

[ピット] 住居内から3基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 60×54×16cm、Pit 2 = 24×22×12cm、Pit 3 = 24×18×8cmを測る。いずれのピットも浅く、住居堆積土第3層と同様の土が堆積しており、主柱穴としての要素は低く、住居廃絶時点でピットが開口していたものと考えられる。

[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁3(74:26)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅56cm、煙道長105cmを測る。主軸はN-80°-Eである。燃烧部ならびに煙道部の構築は、粘土による構築で、崩落した堆積状況をていしている。燃烧部ならびに煙道部底面から破片化した土器が出土しており、カマド廃絶時点での廃棄の出土状況を呈している。煙道は、住居壁際から18°の角度で起伏を持ちながら立ち上がり、煙出部付近でほぼ平坦になる。煙出奥壁は、ほぼ垂直に



第264図 SI - 132

立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 4層に分層した。大谷火山灰層主体の地山土が堆積しており、埋め戻し等による人為的堆積状況を呈する。

(木村)

SI - 133 (第265、266図)

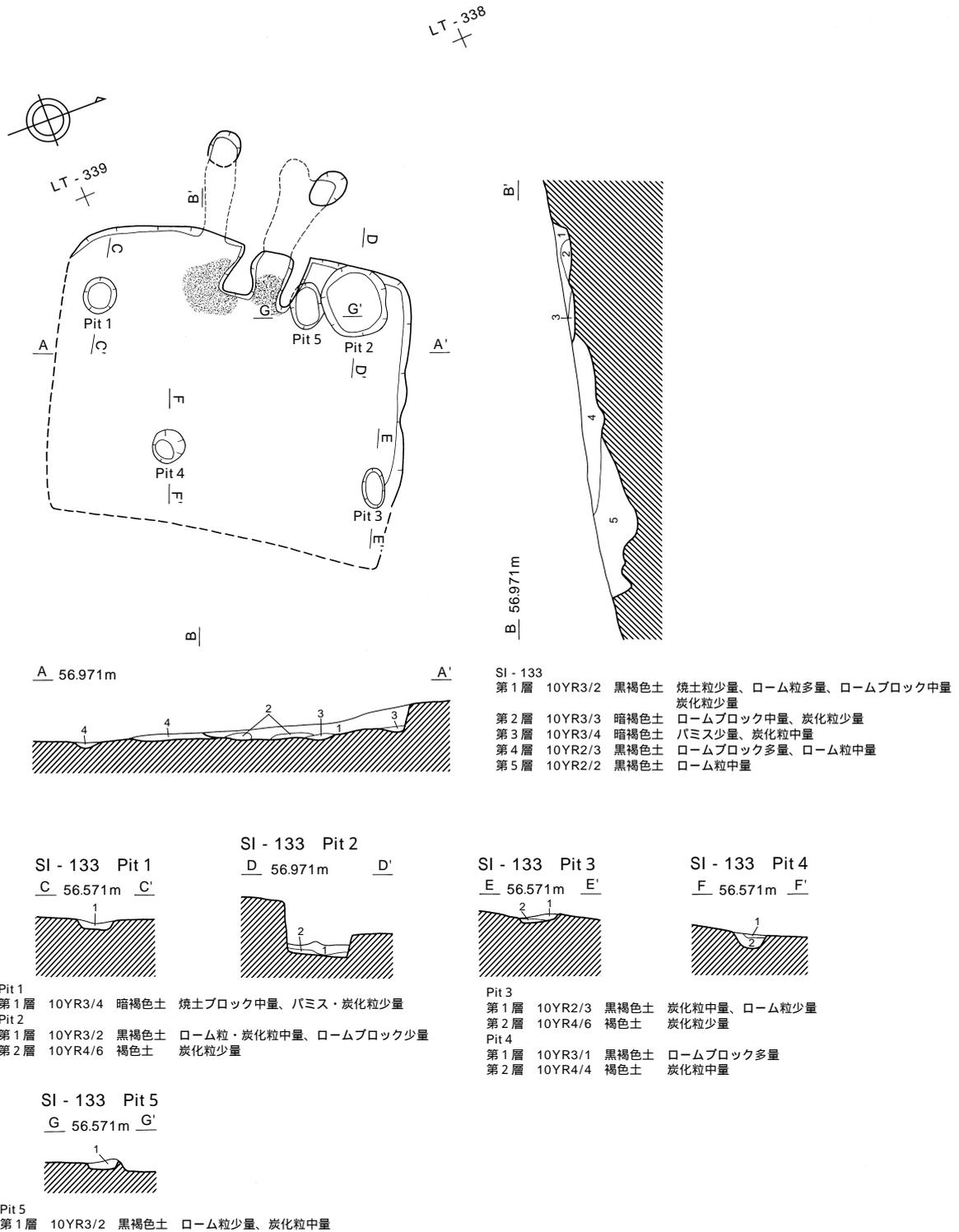
[位置] グリッドLT - 338・339で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 削平のため、東壁～南壁側の情報が欠落しているが、掘り方等の残存状況から長方形を呈したものと考えられ、(344) × (292) × 84cmを測る。床面積は 9.053 m²を測る。

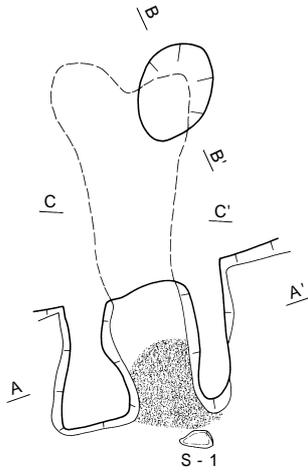
[壁] 削平のため、東壁ならびに南壁の大部分の情報が欠落している。壁高は、北壁27cm、西壁17cmを測る。断面形は(d)で、緩やかに立ち上がる。壁面はやや脆弱である。

[床] 住居東側半分掘り方を有し、黒褐色土とロームブロックの混合層が充填されている。西側半



第265図 SI - 133

LT-339

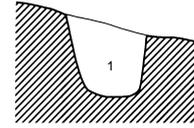


A 56.771m

A'

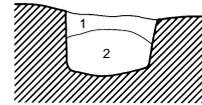
B 56.771m

B'



C 56.771m

C'



SI - 133 カマド(新)

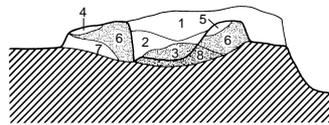
- | | | | |
|-----|----------|-------|------------------|
| 第1層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | ローム粒多量、焼土粒・炭化粒少量 |
| 第2層 | 7.5YR4/3 | 褐色土 | 炭化粒・焼土粒中量 |
| 第3層 | 5 YR3/6 | 暗赤褐色土 | 炭化粒少量 |
| 第4層 | 10YR3/4 | 褐色土 | パミス中量、焼土粒少量 |
| 第5層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 焼土粒中量、炭化粒少量 |
| 第6層 | 5 YR3/6 | 暗赤褐色土 | 炭化粒少量 |
| 第7層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土粒中量、炭化粒微量 |
| 第8層 | 5 YR7/4 | 暗赤褐色土 | パミス少量 |

カマド(新) 煙出部

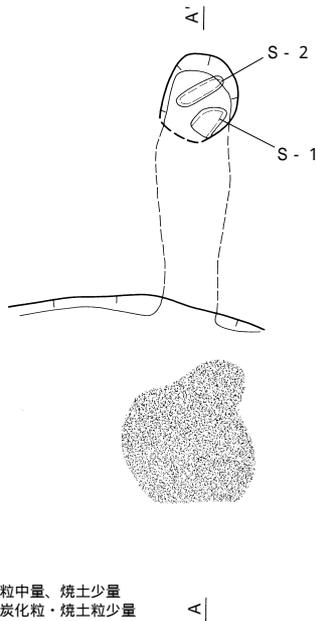
- | | | | |
|-----|---------|------|--------------|
| 第1層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒多量、炭化粒少量 |
|-----|---------|------|--------------|

カマド(新) 煙道部

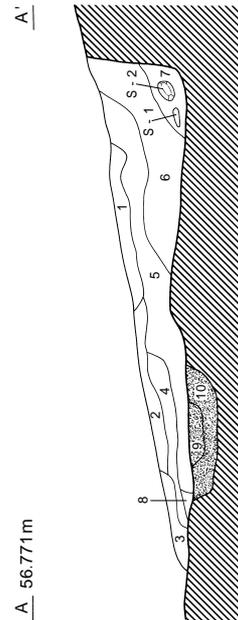
- | | | | |
|-----|---------|------|------------------|
| 第1層 | 10YR4/4 | 褐色土 | |
| 第2層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | ローム粒中量、焼土粒・炭化粒少量 |



LT-339



A



A' 56.771m

0 1m

SI - 133 カマド(旧)

- | | | | |
|------|----------|-------|------------------|
| 第1層 | 10YR4/4 | 褐色土 | |
| 第2層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | ローム粒・炭化粒中量、焼土少量 |
| 第3層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒中量、炭化粒・焼土粒少量 |
| 第4層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 炭化粒中量、ローム粒少量 |
| 第5層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 炭化粒中量、ローム粒・焼土粒少量 |
| 第6層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | ローム粒中量、炭化粒少量 |
| 第7層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | ローム粒・炭化粒・焼土粒少量 |
| 第8層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 焼土粒・ローム粒少量 |
| 第9層 | 7.5YR4/6 | 褐色土 | 炭化粒微量 |
| 第10層 | 5 YR3/6 | 暗赤褐色土 | 炭化粒少量 |

第266図 SI - 133

分については、大谷火山灰層の地山面を床面としており、起伏がややあり、やや脆弱である。

[壁 溝] なし。

[ピット] 住居内から5基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 37 × 32 × 8 cm、Pit 2 = 70 × 68 × 22 cm、Pit 3 = 40 × 22 × 7 cm、Pit 4 = 32 × 31 × 16 cm、Pit 5 = 45 × 30 × 6 cmを測る。主柱配置については不明である。

[カマド] 住居西壁側から2基検出した。西壁2(40:60)と西壁3(58:42)の位置から検出している。新旧関係については、袖部の残存状況から西壁2 < 西壁3の関係である。西壁3のカマドの構造は、地下式で、袖部幅70cm、煙道長100cmを測る。主軸はN - 38° - Wである。燃烧部の構築は粘土によるもので、天井は、第2、3層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道部は、大谷火山灰層の地山を掘り込み、作り上げているが、煙出が煙道の主軸ラインからやや北寄りにずれた位置に作り上げられている。

西壁2のカマドの構造は、地下式で、燃烧部の上部構造は残存しておらず、煙道長100cmを測る。主軸はN - 65° - Wである。煙道部は、大谷火山灰層の地山を掘り込み構築している。煙道は、住居壁際から7°の角度で緩やかに傾斜し、煙出奥壁でほぼ垂直に立ち上がる。煙出底面直上から自然礫2点が出土した。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて5層に分層した。削平のため、部分的に残存するのみであるが、住居廃絶後の堆積土は第1～3層で、ロームブロック等を多量に含む堆積土であった。埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 134 (第267図)

[位置] グリッドLS・LT - 340・341で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 削平のため、詳細は不明であるが、残存する壁の情報から方形を呈したものと推定され、558 × (550) × 42cmを測る。床面積は(30.22) m²を測る。

[壁] 削平のため、東壁ならびに南壁の情報は欠落している。残存部分の壁高は、北壁18cm、西壁16cmを測る。壁面はやや脆弱である。

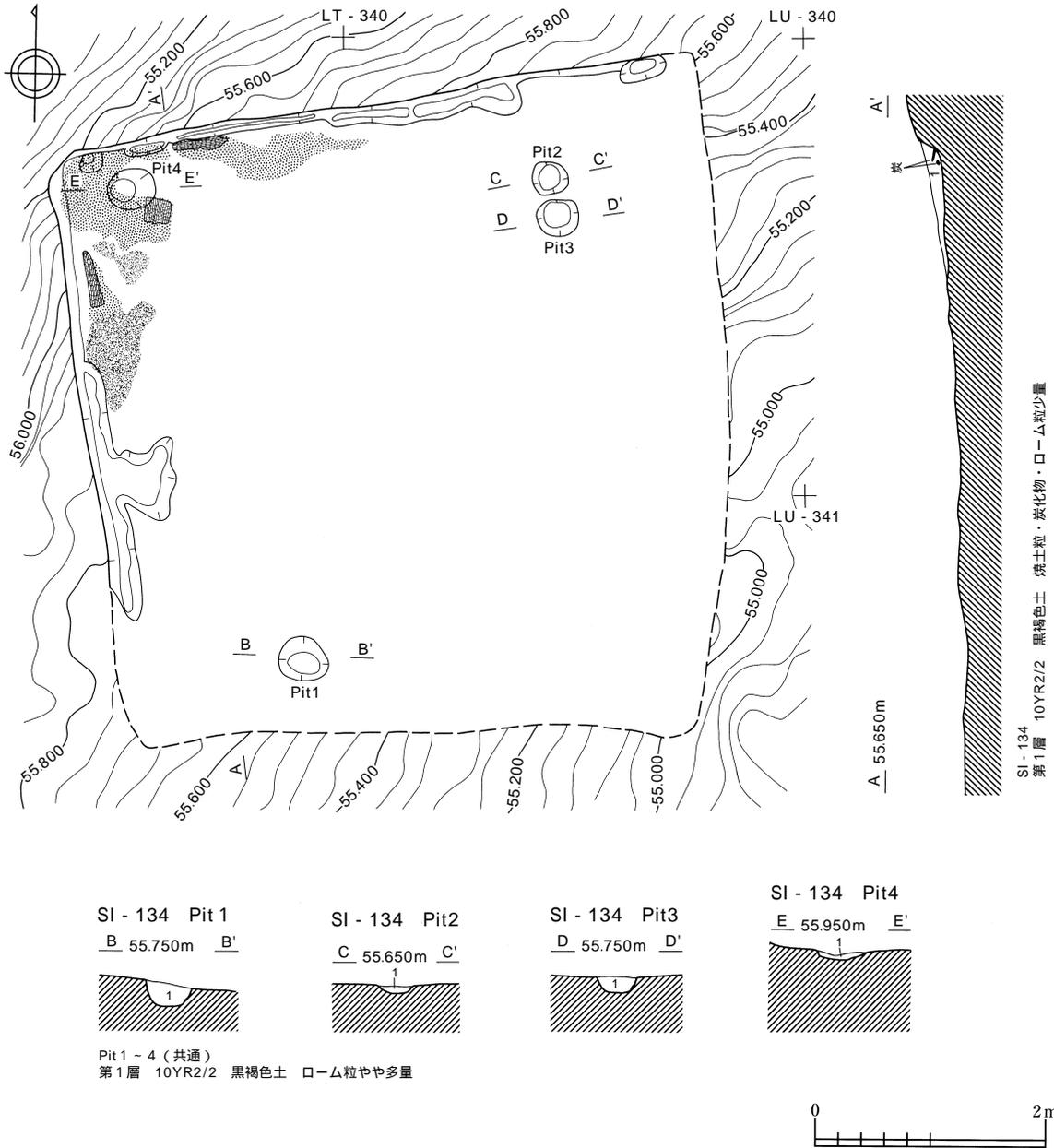
[床] 削平のため、大部分の床面の情報は欠落している。残存する床面は、大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面はやや脆弱である。

[壁 溝] 住居北壁ならびに西壁から検出した。深さは平均5cmを測る。

[ピット] 住居内から4基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 43 × 39 × 23 cm、Pit 2 = 31 × 29 × 7 cm、Pit 3 = 36 × 32 × 13 cm、Pit 4 = 42 × 35 × 8 cmを測る。主柱配置については不明である。

[カマド] 削平のため残存部分からの検出はなし。

[堆積土] 削平のため、ほとんど堆積土は残存していないが、残存部分について1層に分層した。住居北西側から炭化材・炭化物を検出し、併せて焼土層を検出した。残存部分の床面から赤化面を検出しておらず、削平のため、床面全体の情報が不足しているため、本遺構が焼失住居であったか詳細は不明



第267図 SI - 134

である。

(木 村)

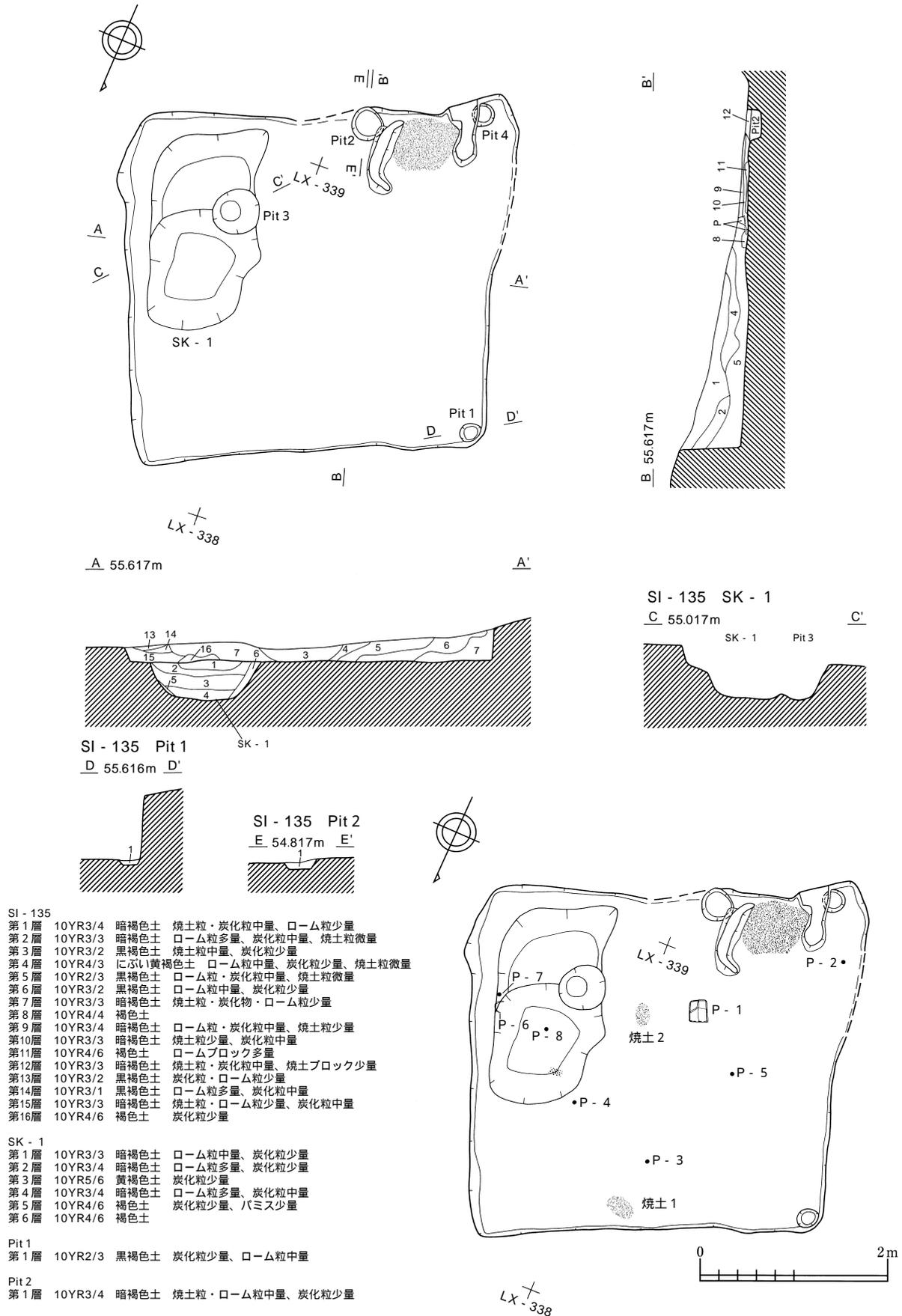
SI - 135 (第268、269図)

[位置] グリッドLW・LX - 338・339で検出した。

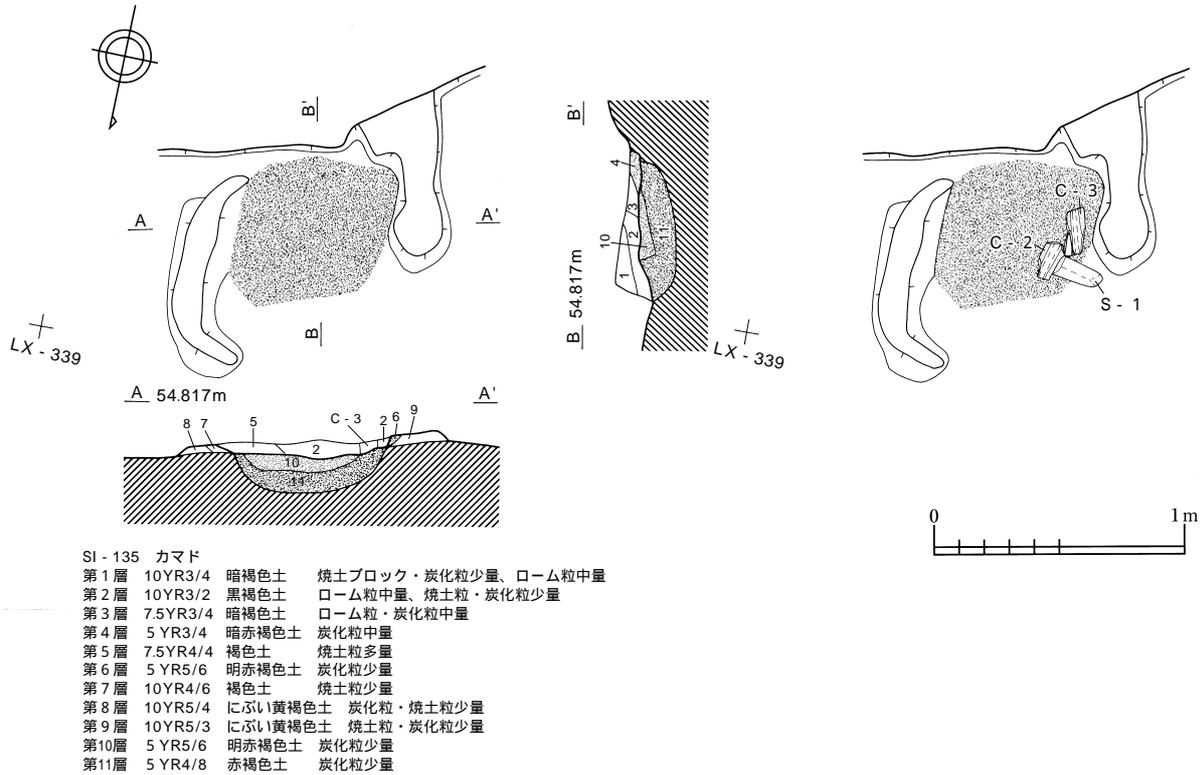
[重複] なし。

[平面形・規模] 台形を呈し、394×370×86cmを測る。床面積は14.558m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁65cm、東壁16cm、南壁4cm、西壁44cmを測る。断面形はaで、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。



第268図 SI - 135



第269図 SI - 135

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面は堅緻である。

[壁 溝] なし。

[ピット] 住居内から4基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 24 × 18 × 6 cm、Pit 2 = 34 × 33 × 8 cm、Pit 3 = 52 × 48 × 40 cm、Pit 4 = 24 × 24 × 10 cmを測る。主柱穴としての機能を充足するピットはないものと考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁4(77:23)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅110cm、煙道長12cmを測る。主軸はN - 162° - Eである。燃烧部ならびに煙道部の上部構造のほとんどが破壊されていた。粘土による構築で、火床面上から羽口ならびに自然礫が出土していることから、芯材として利用された可能性が考えられる。煙道は、住居壁際から40°の角度で立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居南壁西隅の掘り方部分から土坑1基を検出した。規模は212 × 118 × 44 cmを測る。

[堆積土] 16層に分層した。全般的に地山土、ロームブロック等を多く含み、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木 村)

S I - 136 (第270、271図)

[位置] グリッドL Z - 337・338で検出した。

[重複] S K - 167と重複している。本遺構の堆積土をS K - 167が切っており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 台形を呈し、465×428×78cmを測る。床面積は19.908m²を測る。

また、西壁～北壁にかけて棚状の浅い掘り込みが付属する。

[壁] 削平のため、東壁側が残存していない。壁高は、北壁42cm、南壁48cm、西壁78cmを測る。断面形はeで、棚状の段を有する。

[床] 住居東～南側にかけて掘り方を有し、月見野火山灰層ならびに大谷火山灰層の地山土を充填し、住居床面全体に大谷火山灰層主体の地山土を貼り床として貼り付けている。床面はやや起伏があり、堅緻である。

[壁溝] 住居南北壁ならびに西壁から検出した。深さは平均12cmを測る。

[ピット] 住居内外から5基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 46×46×10cm、Pit 2 = 25×24×21cm、Pit 3 = 55×53×35cm、Pit 4 = 32×30×8cm、Pit 5 = 27×26×4cmを測る。主柱穴として考えられるピットは、Pit 2のみである。

[カマド] 南壁側から火床面を1ヶ所検出した。火床面上に多量の自然礫、土器の出土があったことから廃絶時点で破壊された可能性が考えられる。主軸・規模等についての詳細は不明である。

[その他の付属施設] 住居内から土坑2基を検出した。S K - 1は、住居北壁西隅から検出した。規模は118×104×28cmを測る。S K - 2は、住居中央部から検出した。規模は178×163×33cmを測る。

[堆積土] 掘り方部分を含めて13層に分層した。住居廃絶後の堆積土は第1～9層で、褐色土主体の第5層が住居全体を埋め尽くしており、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。第6層からT o - a火山灰を検出した。

(木村)

S I - 137 (第272図)

[位置] グリッドL Y・L Z - 340で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 台形を呈し、386×356×20cmを測る。床面積は13.903m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁9cm、東壁9cm、南壁6cm、西壁14cmを測る。断面形はdで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面は脆弱である。

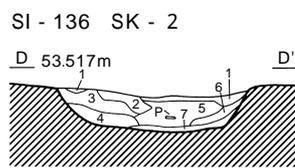
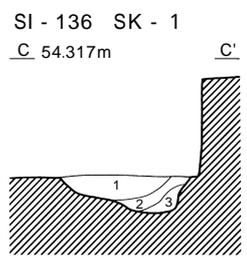
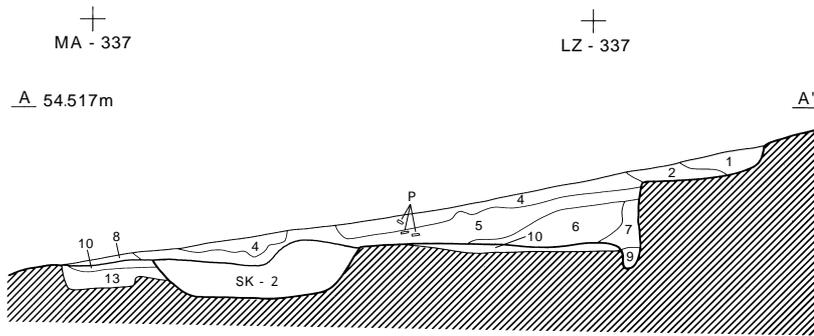
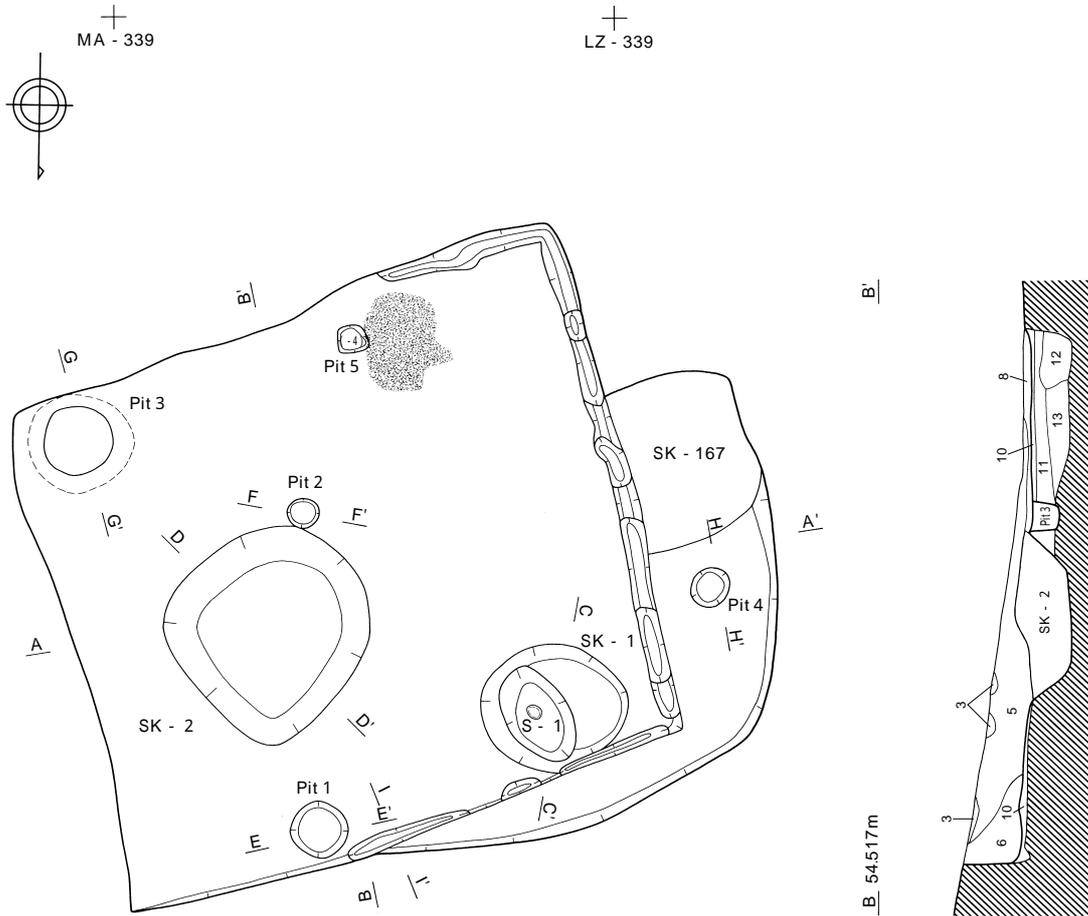
[床] 月見野火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面はやや脆弱である。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁3(69:31)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅100cm、煙道長(22)cmを測る。主軸はN - 90° - Eである。構築は、粘土による構築で、燃焼部天井は第2層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道部は、住居外に浅い掘り込みが残存しているだけで詳細については不明である。

[その他の付属施設] なし。



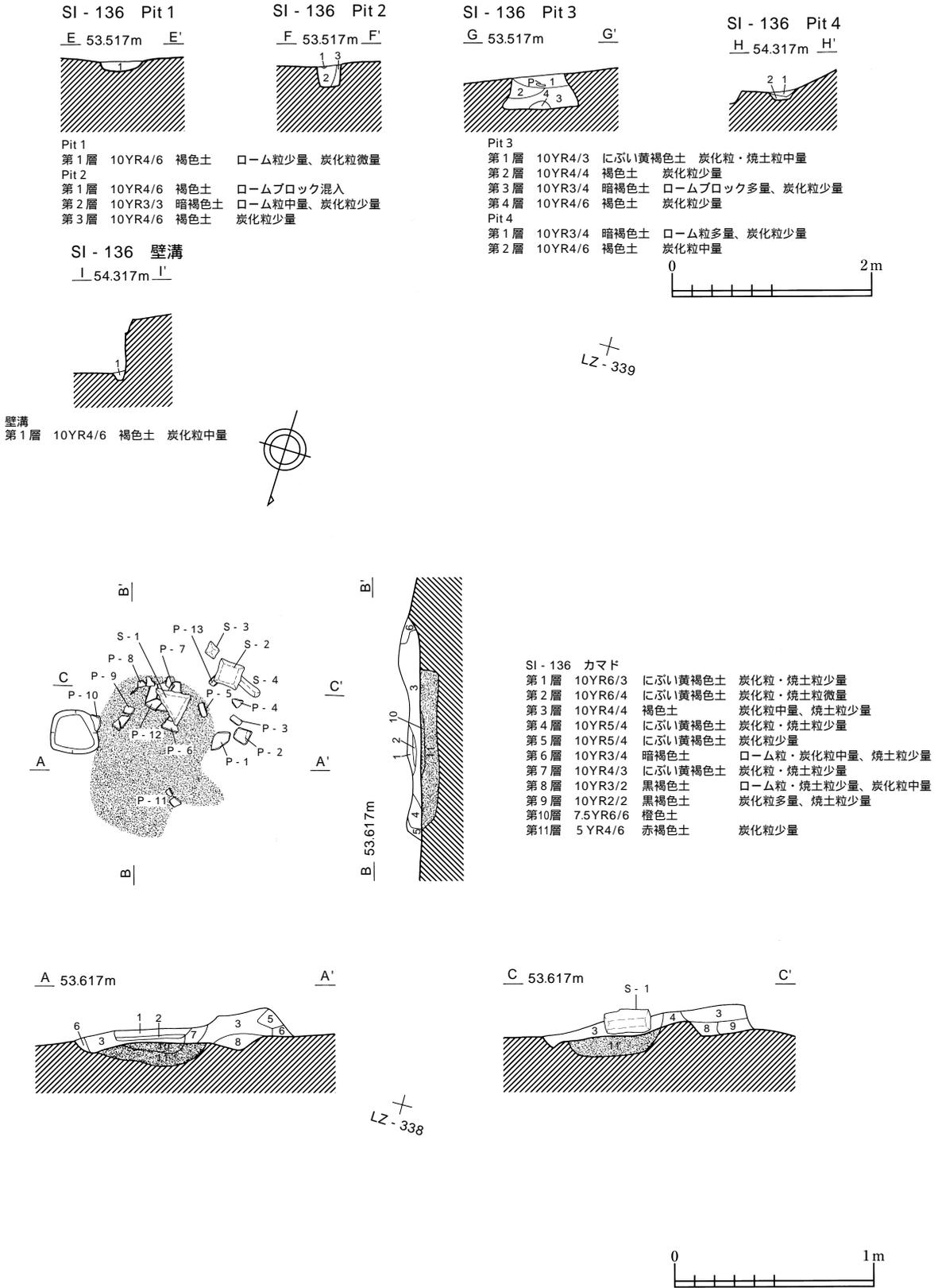
- SK - 1
- 第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒・炭化粒・焼土粒少量
 - 第2層 10YR4/4 褐色土 炭化粒中量
 - 第3層 10YR4/6 褐色土 炭化粒中量

- SK - 2
- 第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒少量、炭化粒微量
 - 第2層 7.5YR3/4 暗褐色土 ローム粒・焼土中量、炭化粒少量
 - 第3層 10YR3/3 暗褐色土 ロームブロック多量、炭化粒少量
 - 第4層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒少量、焼土粒微量
 - 第5層 10YR4/4 褐色土 ローム粒少量、炭化粒中量
 - 第6層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・炭化粒中量
 - 第7層 10YR4/6 褐色土 炭化粒多量

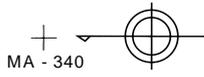
- SI - 136
- 第1層 10YR3/2 黒褐色土 炭化物粒・焼土粒少量
 - 第2層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロック・炭化物粒中量
 - 第3層 10YR4/2 灰黄褐色土 ローム粒少量、炭化物粒微量
 - 第4層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒少量、炭化物粒中量
 - 第5層 10YR4/4 褐色土 炭化物粒中量、パミス少量
 - 第6層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒中量、炭化物粒多量、火山灰 (To - a) 少量
 - 第7層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒中量、炭化物粒・焼土粒少量
 - 第8層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 炭化物粒少量
 - 第9層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒・炭化物粒多量
 - 第10層 10YR4/6 褐色土 炭化物粒中量
 - 第11層 10YR4/6 褐色土 ロームブロック・炭化物粒少量
 - 第12層 10YR4/4 褐色土 ローム粒微量、炭化物粒・焼土ブロック少量
 - 第13層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物粒中量、パミス微量



第270図 SI - 136



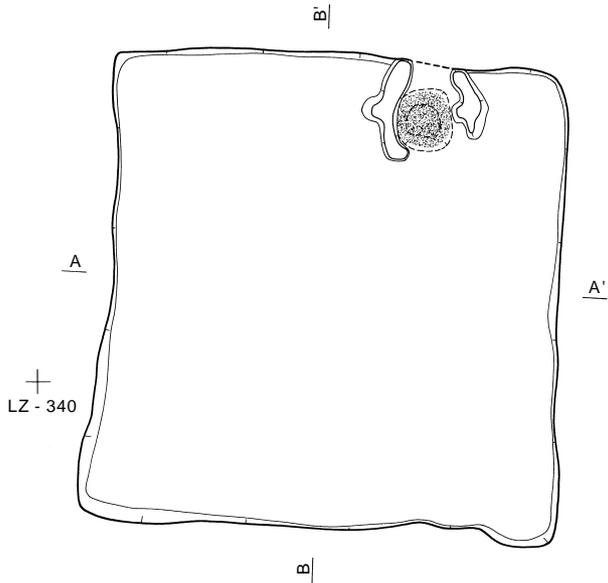
第271図 SI - 136



MA - 340



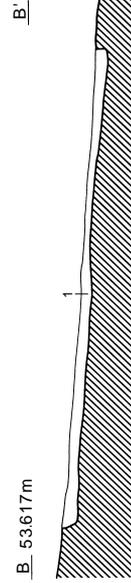
MA - 341



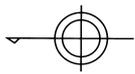
LZ - 340

A 53.617m

A'

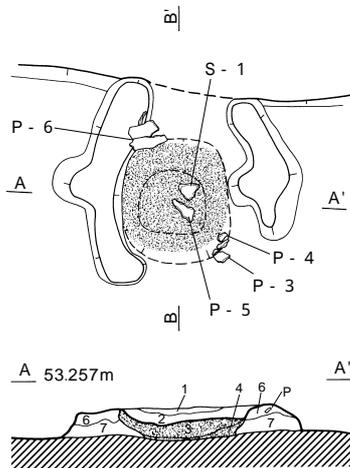
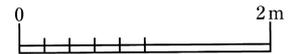


B 53.617m



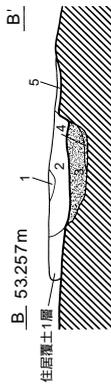
MA - 341

SI - 137
 第1層 10YR2/1 黒色土 ロームブロック・炭化物粒少量
 第2層 10YR6/6 明黄褐色土



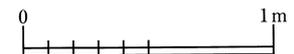
A 53.257m

A'



B 53.257m

SI - 137 カマド
 第1層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物粒・焼土粒少量
 第2層 7.5YR4/6 褐色土 焼土粒少量
 第3層 7.5YR5/6 明褐色土
 第4層 7.5YR4/4 褐色土
 第5層 7.5YR3/3 暗褐色土
 第6層 7.5YR3/3 暗褐色土 焼土ブロック多量
 第7層 10YR2/2 黒褐色土 黒色土多量



第272図 SI - 137

[堆積土] 2層に分層した。削平のため残存状況が悪く、詳細については不明である。

(木村)

S I - 138 (第273~276図)

[位置] グリッドMD・ME - 342・343で検出した。西から東に向かって下る緩やかな斜面上に位置する。

[重複] なし。

[平面形・規模] 東側半分が削平されているため、明確な平面形・規模は不明であるが、残存部分から推定して、方形を呈し、532×410×51cmを測る。

[壁] 壁高は、北壁16cm、西壁35cm、南壁38cmを測り、東壁は削平により残存していない。南壁のカマド煙道西側部分から西壁に沿って張り出しを有し、竪穴外屋内空間であった可能性がある。断面形はdである。

[床] 月見野火山灰層の地山を掘り込んで床面としており、堅緻である。

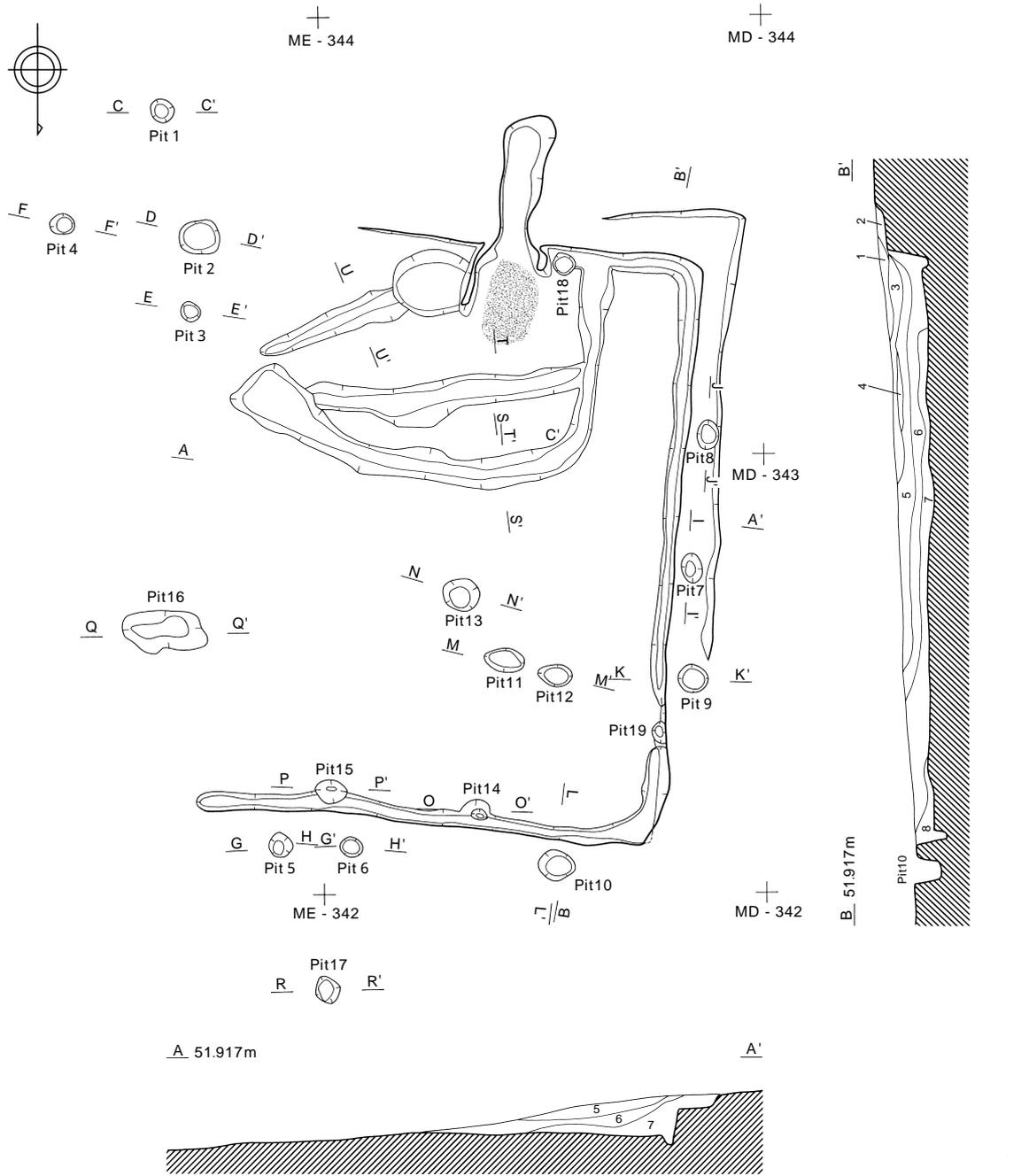
[壁溝] 東壁に沿う部分は削平により検出できなかったが、北壁、西壁、南壁については部分的に途切れるが、断続的にほぼ全周している。深さは平均8cmである。

[ピット] 竪穴内から10基(Pit 2、3、11~16、18、19)、住居外から9基(Pit 1、4~10、17)、計19基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 22×19×12cm、Pit 2 = 36×32×17cm、Pit 3 = 19×16×7cm、Pit 4 = 22×19×14cm、Pit 5 = 22×19×12cm、Pit 1 = 22×19×12cm、Pit 1 = 22×19×12cm、Pit 1 = 23×22×13cm、Pit 6 = 21×18×6cm、Pit 7 = 28×19×18cm、Pit 8 = 27×19×15cm、Pit 9 = 27×26×31cm、Pit10 = 33×28×11cm、Pit11 = 36×23×45cm、Pit12 = 31×22×9cm、Pit13 = 32×30×27cm、Pit14 = 27×17×42cm、Pit15 = 29×22×33cm、Pit16 = 78×41×49cm、Pit17 = 26×22×19cm、Pit18 = 21×19×32cm、Pit19 = 21×12cmを測る。主柱穴として機能していたものはないと考えられるが、Pit 3、14、15、18、19は壁柱穴、Pit 5~10、17は竪穴外柱穴と考えられる。特に、Pit14、15については出入口施設、Pit 5、6、10、17については、それに伴う庇状の施設に関連する可能性がある。

[カマド] 南壁より1基検出した。南壁東側が削平されているため、壁における設置位置の比率は不明であるが、凡そ南壁3の位置に相当すると考えられる。構造は、地下式で、煙道部をトンネル状に掘り込んだものではなく、一度掘り込んだ上に粘土を貼って天井を構築したものと考えられる。袖部幅74cm、煙道長120cmを測る。主軸はN - 174° - Wである。袖は粘土によって構築されており、芯材は装填されていない。西側の袖の欠損部分は掘りすぎによるものである。火床面は78×46cmの範囲で赤化している。火床面の直上においては、燃焼部の天井を構成していたと考えられる褐色を呈する粘土を検出している。煙道部は、火床面から5°の角度で微妙に下り、煙出部付近で平坦となる。

[その他の付属施設] 屋内施設として、カマドの北側において、U字状の溝1条、直線状の溝2条を検出した。U字状の溝は一方の端部が住居の壁溝と連結し、直線状の溝2条のうち、1条は、両端部がU字状の溝と連結している。堆積土は、炭化物や焼土が混じった黒色、暗褐色を呈する土層である。住居の壁溝と連結しているものもあることから、排水を目的として構築された可能性もあるが、炭化物、焼土を多量に含む堆積土に着目すると、排水以外の用途も否定できない。

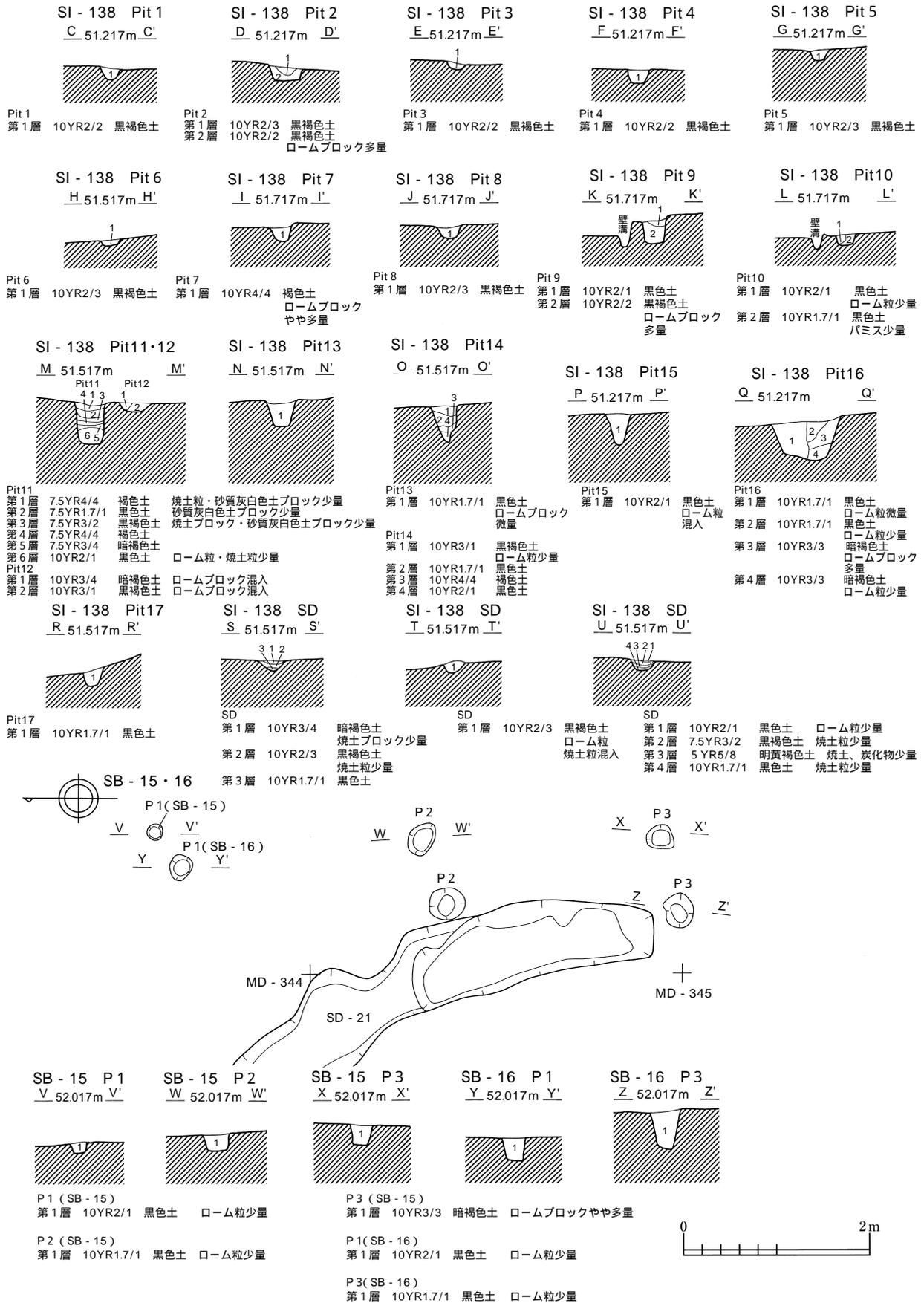
屋外施設として、住居の北東側から南西側を弧状に巡る外周溝2条(S D - 21、S D - 22)と、カ



SI - 138

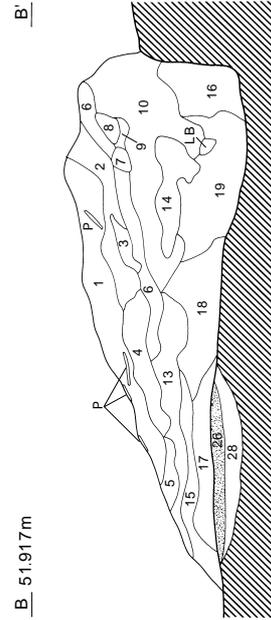
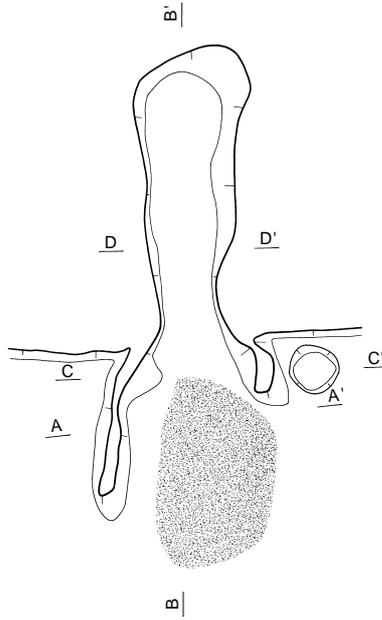
第1層	10YR2/2	黒褐色土	炭化物微量、パミス少量
第2層	10YR3/3	暗褐色土	パミス少量
第3層	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒少量
第4層	10YR3/1	黒褐色土	ローム粒混入
第5層	10YR1.7/1	黒色土	ロームブロック少量
第6層	10YR2/3	黒褐色土	ロームブロック少量
第7層	10YR2/1	黒色土	ロームブロック微量
第8層	10YR2/3	黒褐色土	ロームブロック多量

第273図 SI - 138



第274図 SI - 138

ME - 344



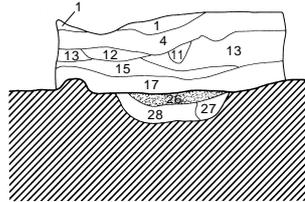
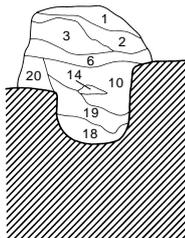
ME - 343+1mS

D 51.917m

D'

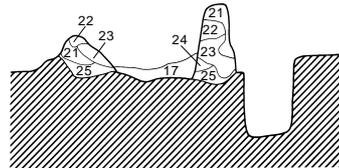
A 51.917m

A'



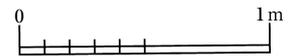
C 51.517m

C'

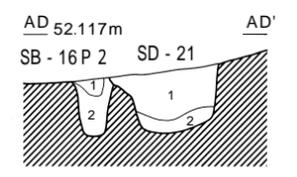
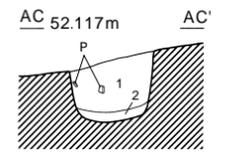


SI - 138 カマド

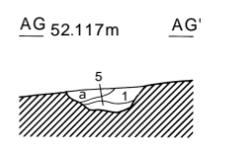
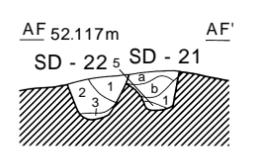
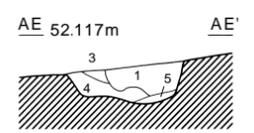
- 第1層 7.5YR4/6 褐色土 (天井部)
- 第2層 7.5YR4/2 灰褐色土
- 第3層 5YR4/8 赤褐色土
- 第4層 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒微量
- 第5層 5YR5/8 明赤褐色土
- 第6層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量
- 第7層 5YR4/4 にぶい赤褐色土
- 第8層 7.5YR3/2 黒褐色土 焼土粒少量
- 第9層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量
- 第10層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量
- 第11層 7.5YR3/1 黒褐色土
- 第12層 10YR6/6 明黄褐色土
- 第13層 10YR3/4 暗褐色土 ローム中量、焼土粒微量
- 第14層 7.5YR5/6 明赤褐色土
- 第15層 10YR2/1 黒色土 焼土粒少量
- 第16層 10YR4/4 褐色土 ローム・焼土粒微量
- 第17層 7.5YR4/4 褐色土 焼土粒少量、焼土ブロック微量
- 第18層 10YR4/6 褐色土 ローム・焼土粒微量
- 第19層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物・焼土ブロック少量
- 第20層 7.5YR3/2 黒褐色土 焼土粒微量、バミス少量
- 第21層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック少量
- 第22層 5YR3/6 暗褐色土
- 第23層 10YR3/2 黒褐色土 ロームブロック少量
- 第24層 10YR2/1 黒色土 ロームブロック少量
- 第25層 10YR3/3 暗褐色土 ロームブロックやや多量
- 第26層 5YR5/8 明赤褐色土
- 第27層 5YR4/4 にぶい赤褐色土 ロームブロック・焼土粒少量、炭化物微量
- 第28層 10YR5/6 黄褐色土



第275図 SI - 138

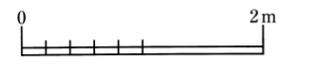
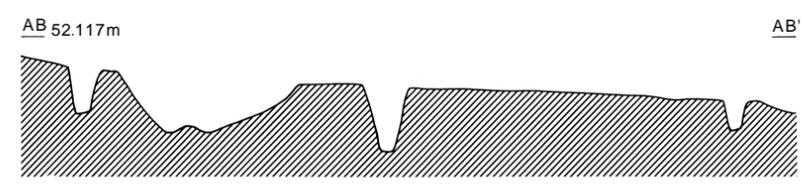
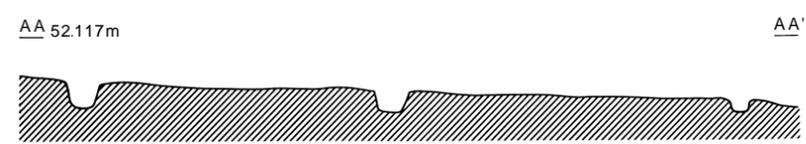


SB - 16 P2
第1層 10YR2/1 黒色土
第2層 10YR1.7/1 黒色土 ローム粒多量



SD - 21
第1層 10YR2/1 黒色土 焼土粒少量
第2層 10YR1.7/1 黒色土 ローム粒少量
第3層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒少量
第4層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロックやや多量
第5層 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒多量
第a層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒微量
第b層 10YR2/3 黒褐色土 ロームブロック多量

SD - 22
第1層 10YR3/2 黒褐色土 砂粒少量
第2層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック多量
第3層 10YR2/1 黒色土 白色粒微量



第276図 SI - 138 、SB - 15・16、SD - 21・22

マド煙道部南側に構築されている、3本の柱穴列2基を検出した。2条の外周溝については、SD-22の堆積土がSD-21の堆積土を切っており、SD-21の方が古い。両者ともに、黒色、黒褐色を主体とする土層が堆積しており、ローム粒、ロームブロックを混入する。柱穴列については、柱穴の間隔が250～260cmを測る。本来、1間×2間の掘立柱建物であったと考えられるが、低位な東側の柱穴列が削平され、高位な西側の柱穴列のみ確認されたものと考えられる。また、柱穴列が近接して2基存在しているのは、建て替えによるものと考えられる。竪穴式住居の周りに外周溝が巡り、カマド煙道部の背後に1間×2間の掘立柱建物が存在する遺構は、青森県浪岡町周辺の遺跡や、本市では朝日山(3)遺跡で検出例があり、また類似した遺構として、発茶沢(1)遺跡では、外周溝ではなく、周堤が巡る例がある。

[堆積土] 8層に分層した。黒色、黒褐色を主体とする土層である。自然堆積を呈すると考えられる。
(設 楽)

SI-139(第277図)

[位置] グリッドME-344・345で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 住居約半分が削平のため、残存しておらず、残存している床面等の情報から長方形を呈していたものと推定され、398×338×16cmを測る。床面積は13.288㎡を測る。

[壁] 削平のため、残存している壁は、西壁ならびに南北壁の一部である。壁高は、北壁11cm、南壁15cm、西壁15cmを測る。断面形は(d)で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面はやや脆弱である。

[床] 掘り方を有し、黒褐色土が充填されている。その上に大谷火山灰層主体の地山を貼り床として貼り付けている。床面は起伏があり、やや堅緻である。また、住居中央部分よりやや西壁寄りの部分から赤化面を47×42cmの範囲で検出した。

[壁溝] なし。

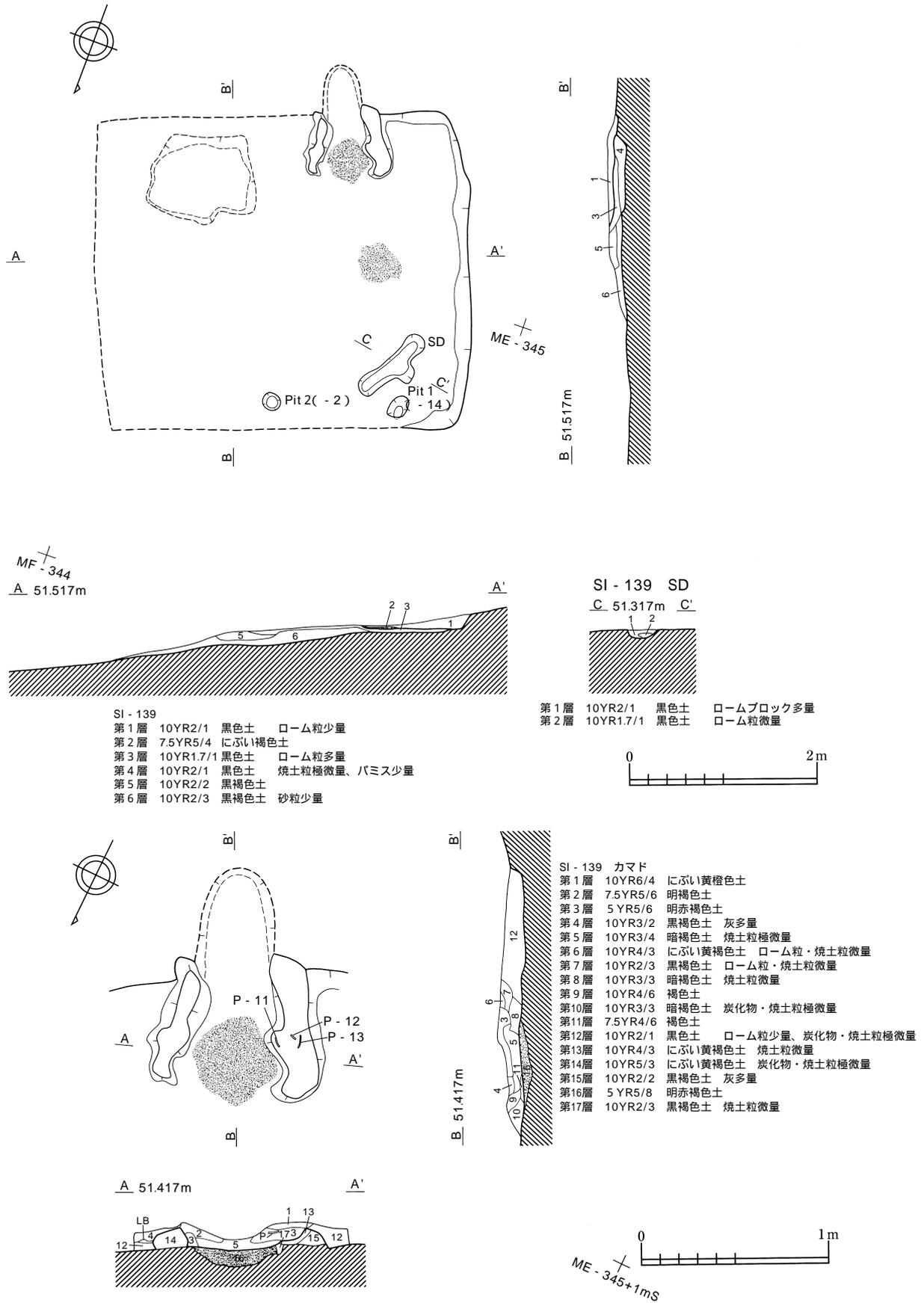
[ピット] 住居内から2基検出した。各ピットの規模は、Pit1=26×19×14cm、Pit2=19×18×2cmを測る。いずれのピットも住居北壁側に偏在しており、支柱穴としての機能を満たすものはないと考えられる。

[カマド] 南壁側から1基検出した。削平のため、位置については推定値であるが、南壁3(68):(32)の位置から検出したものと推定される。構造は、半地下式で、袖部幅92cm、煙道長60cmを測る。燃烧部は、粘土による構築で、天井は、第2、3層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道部は、根により破壊されており、天井構築土は、粒状化しておりほとんど残存していない。煙道は、住居壁際から1°の角度で傾斜し、全煙道長の1/4の地点でほぼ平坦になる。煙出奥壁は、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居北西部分から溝状の遺構を1基検出した。規模は88×33×10cmを測る。また、南壁側掘り方部分から土坑1基を検出した。規模は117×91×14cmを測る。

[堆積土] 削平のため詳細は不明であるが、残存部分について掘り方部分を含めて6層に分層した。削平のため、住居廃絶後の堆積土は、第1層のみである。

(木 村)



第277図 SI - 139

S I - 140 (第278図)

[位置] グリッドLK～LM - 348～350で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 削平のため住居東壁～南壁側の情報が欠落しているが、残存している床面の情報から台形を呈したものと推定され、542 × 468 × 48cmを測る。床面積は 24.692 m²を測る。

[壁] 削平のため、残存部分は、北壁ならびに東西壁の一部である。壁高は、北壁40cm、東壁11cm、西壁48cmを測る。断面形は(a)で、垂直に近い形で外傾しながら立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 削平のため、住居北側のみの残存であるが、大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。

[壁溝] 住居西壁南隅から部分的に検出した。深さは4cmを測る。

[ピット] 住居内から8基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 32 × 28 × 7cm、Pit 2 = 25 × 18 × 24cm、Pit 3 = 41 × 21 × 10cm、Pit 4 = 21 × 20 × 31cm、Pit 5 = 38 × 32 × 65cm、Pit 6 = 27 × 26 × 6cm、Pit 7 = 24 × 19 × 4cm、Pit 8 = 45 × 40 × 25cmを測る。主柱穴は、Pit 5のみの検出で、対応するピットの検出はできなかった。また、北壁際ならびに西壁際からピットを検出しており、本遺構は壁柱穴を伴った住居であることが考えられる。

[カマド] 住居東壁から燃烧部の火床面のみを検出した。位置については削平のため推定値であるが、東壁4(76):(24)の位置から検出したものと推定される。カマドの構造、構築についての詳細は不明である。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 削平のため詳細は不明であるが、残存部分について2層に分層した。第1層中にB-Tm火山灰を層状に多量検出した。

(木村)

S I - 141 (第279、280図)

[位置] グリッドLQ～LR - 349・350で検出した。西から東に向かって下る緩やかな斜面上に位置する。

[重複] なし。

[平面形・規模] 東側半分が削平されているため、明確な平面形・規模は不明であるが、残存部分している西壁のラインは直線的でなく、多少歪んでおり、不整形を呈する。残存する西側の軸長は、578cmを測る。

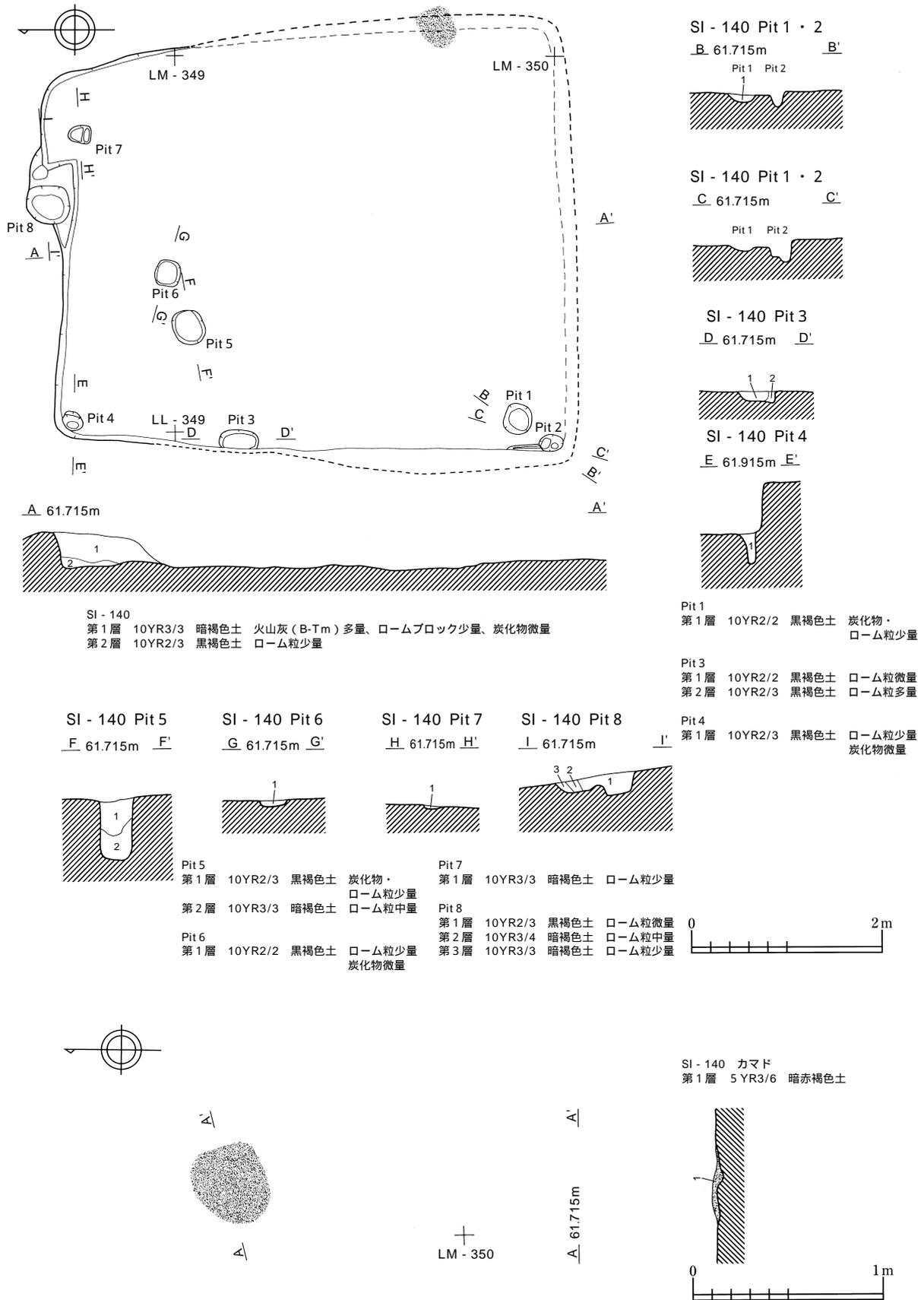
[壁] 壁高は、西壁28cm、南壁11cmを測り、北壁、東壁は削平により残存していない。残存する西壁から推定すると、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としており、堅緻である。

[壁溝] 北壁の一部分及び西壁において、部分的に途切れながら断続的に検出した。北壁においては、確認できなかった。東壁については、削平により不明である。深さは平均9cmである。

[ピット] 竪穴内から2基検出した。2基は共に、鍛冶操業に関連するピットと考えられるため、[その他の付属施設]で記述する。

[カマド] 南壁より1基検出した。燃烧部と煙道上部が削平されており、火床面と、煙道と考えられ



第278図 SI - 140

る長方形の突出部のみ検出した。南壁東側が残存していないため、壁における設置位置の比率は不明であるが、凡そ南壁3の位置に相当すると考えられる。火床面は、73×62cmの範囲で赤化している。煙道部の明確な構造は不明であるが、煙道と考えられる突出部の底面が部分的に赤化しており、また、底面のレベルは火床面とほぼ同じであることから、地下式構造であった可能性が高い。煙道長は、138cmを測り、主軸はN - 94° - Eである。

[その他の付属施設] 床面から、鍛冶操業に関連すると考えられるピット2基と、土坑1基を検出した。

Pit 1は鍛冶炉と考えられ、51×46cmの不整楕円形の平面を呈する。平面北側と南側に若干の張り出しがみられ、羽口の装着部と考えられる。深さ17cmを測り、断面は椀形を呈する。底面は青灰色を呈し、かなり硬化しており、面的に滓の溶着がみられる。その上層においては、炭化物を多量に含む黒褐色土、ローム粒、焼土粒、炭化物を含む暗褐色土が確認できた。堆積土及び底面からは鍛造剥片等の遺物は確認できず、Pit 1周辺の床面においても、住居確認時点でかなり削平を受け、床面が露出している状態であったため、鍛造剥片等の遺物は確認できなかったが、第1層において、金床石の破片と考えられる遺物が1点、第2層において流動滓が数点出土した。

Pit 2は、45×42cmの円形の平面を呈する。深さは12cmを測り、椀形の断面を呈する。2層に分層でき、下層あたる第2層は炭化物を多量に混入する黒褐色土で、上層にあたる第1層はローム粒、炭化物を少量含む暗褐色土である。底面は、Pit 1のそれと異なり、滓分の付着、硬化等がみられず、被熱の痕跡は確認できなかった。鍛冶炉と考えられるPit 1と近接しており、金床石が据えられていた場所であった可能性もある。堆積土及び底面からは鍛造剥片等の遺物は確認できなかった。

S K - 1は、168×98cmの楕円形の平面を呈し、深さ33cmを測る。落ち込みが2段になっており、内部に99×50cmの楕円形の平面を呈する落ち込みが確認できた。7層に分層でき、ロームブロック、焼土が多量に混入している。Pit 1の東側に存在しているが、鍛冶操業との関連性については不明である。

[堆積土] 3層に分層した。暗褐色を主体とする土層である。かなり攪乱を受けているが、自然堆積を呈すると考えられる。本遺構から出土した鍛冶関連遺物は、流動滓38g、椀形鍛冶滓408g、総重量466gで、金床石の破片が1点出土している。

(設 楽)

S I - 142 (第281～283図)

[位 置] グリッドL T・L U - 348・349で検出した。

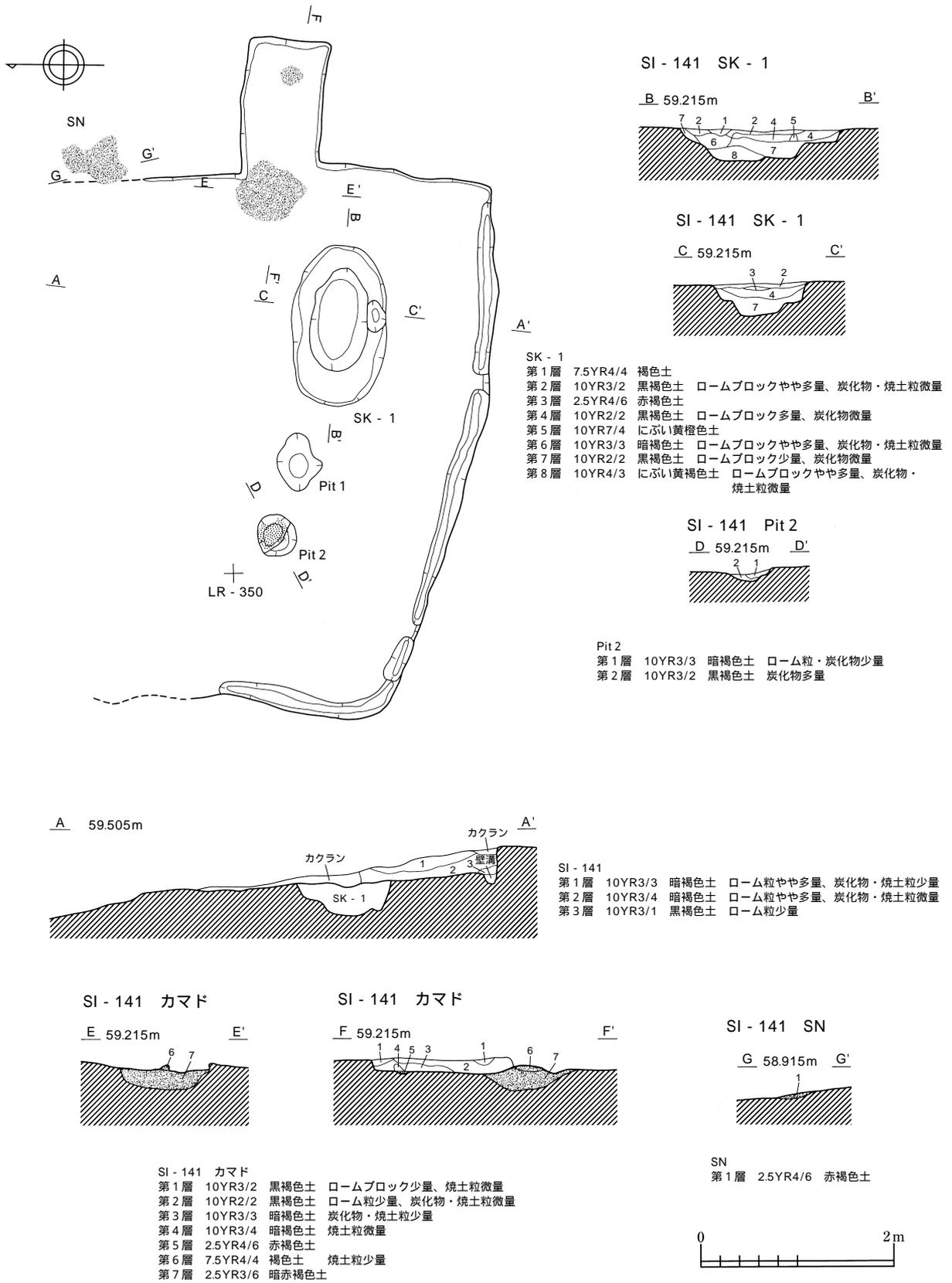
[重 複] なし。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、340×328×36cmを測る。床面積は11.04m²を測る。

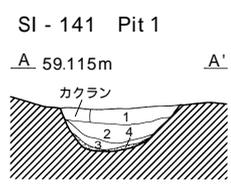
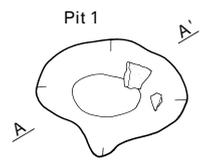
[壁] 壁高は、北壁8cm、東壁12cm、南壁21cm、西壁22cmを測る。断面形はdで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。西壁部分は壁面に向かってやや傾斜を有する。床面は堅緻である。また、床面ならびに床直から多量の炭化材ならびに赤化面を検出しており、本遺構は焼失住居である。

[壁 溝] なし。



第279図 SI - 141



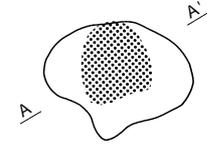
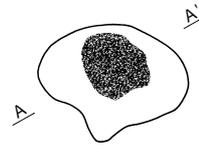
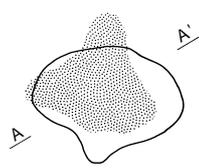
Pit 1

第1層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒・焼土粒・炭化物少量
第2層	10YR3/1	黒褐色土	炭化物多量、焼土粒少量
第3層	5 YR3/1	黒褐色土	床面に鉄が面的に付着する かなり硬化している (青灰色)
第4層	2.5YR3/3	暗赤褐色土	

炭化物の範囲

鉄の付着する範囲

底面が黒く硬化している範囲

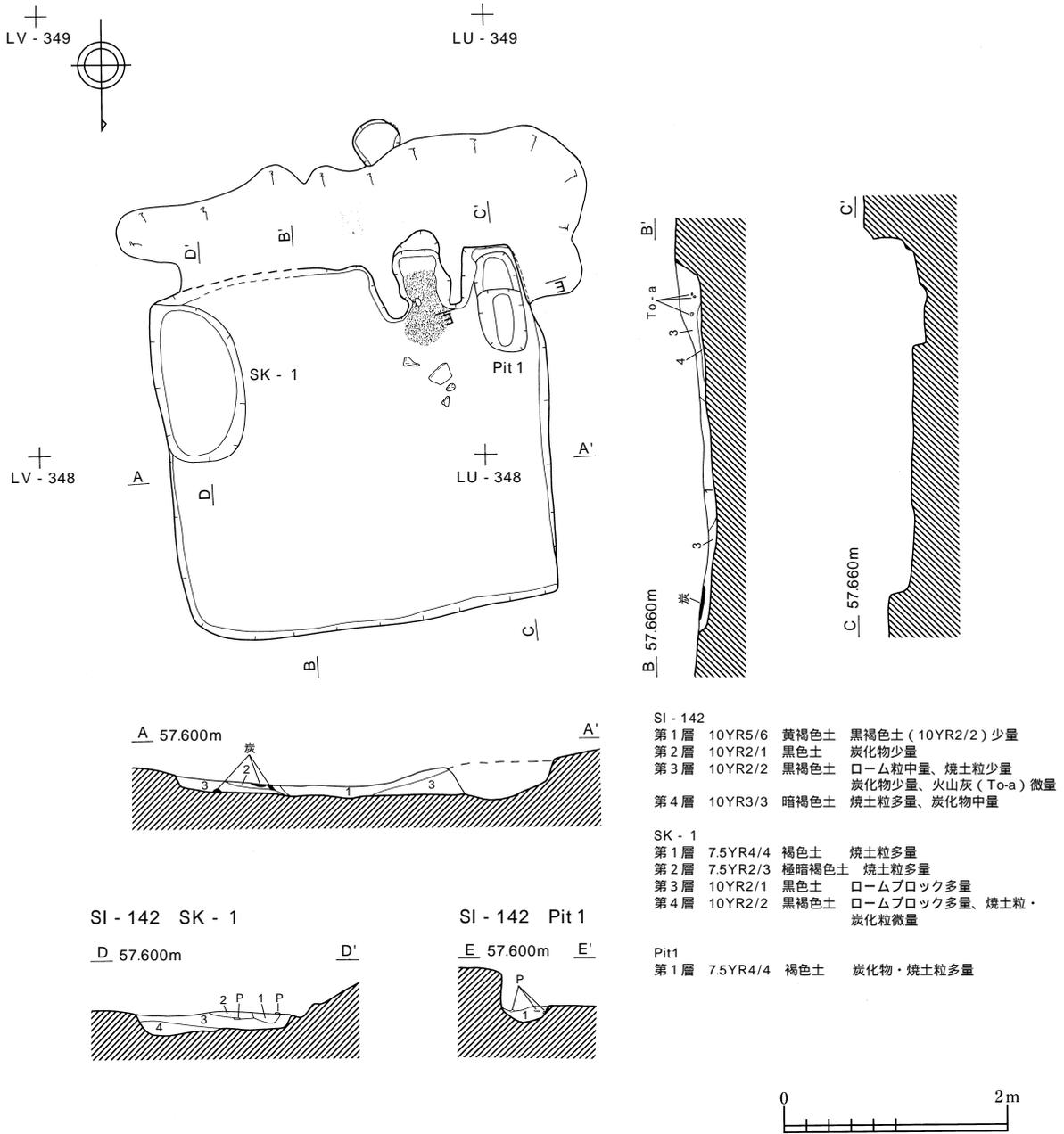


第280図 SI - 141

[ピット] 住居内から1基検出した。規模は90×41×15cmを測る。堆積土中に炭化粒ならびに焼土粒を含みカマド脇ピットとしての機能が考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。煙道部が攪乱により削平されており、袖部幅40cm、煙道長122cmを測る。主軸はN - 175.5° - Eである。燃烧部袖の構築は、転用羽口を芯材とし、粘土を用いて構築している。燃烧部天井は、堆積土中に残存しておらず、本遺構の焼失時点で生じた炭化材が火床面直上に堆積していることから天井部は破壊されていたことが考えられる。煙道部は、削平により詳細は不明であるが、残存していた煙出部の構造から半地下式であると考えられる。

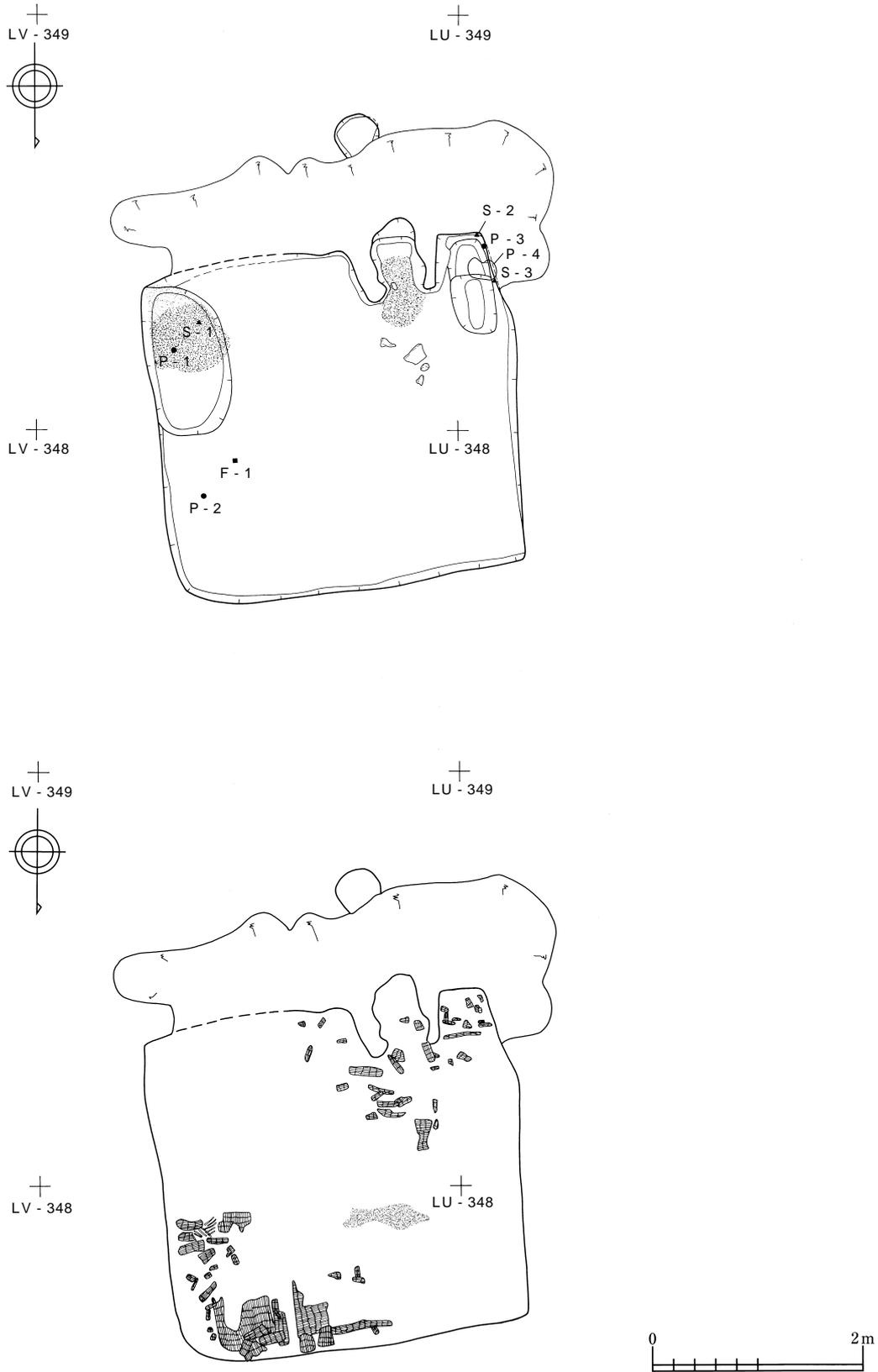
[その他の付属施設] 住居東壁南寄りの部分から土坑1基を検出した。規模は143×79×18cmを測る。第1、2層は、住居焼失時点で被熱を受けた堆積土であり、住居焼失時点で本土坑は、埋まりきった状態であったことが考えられる。



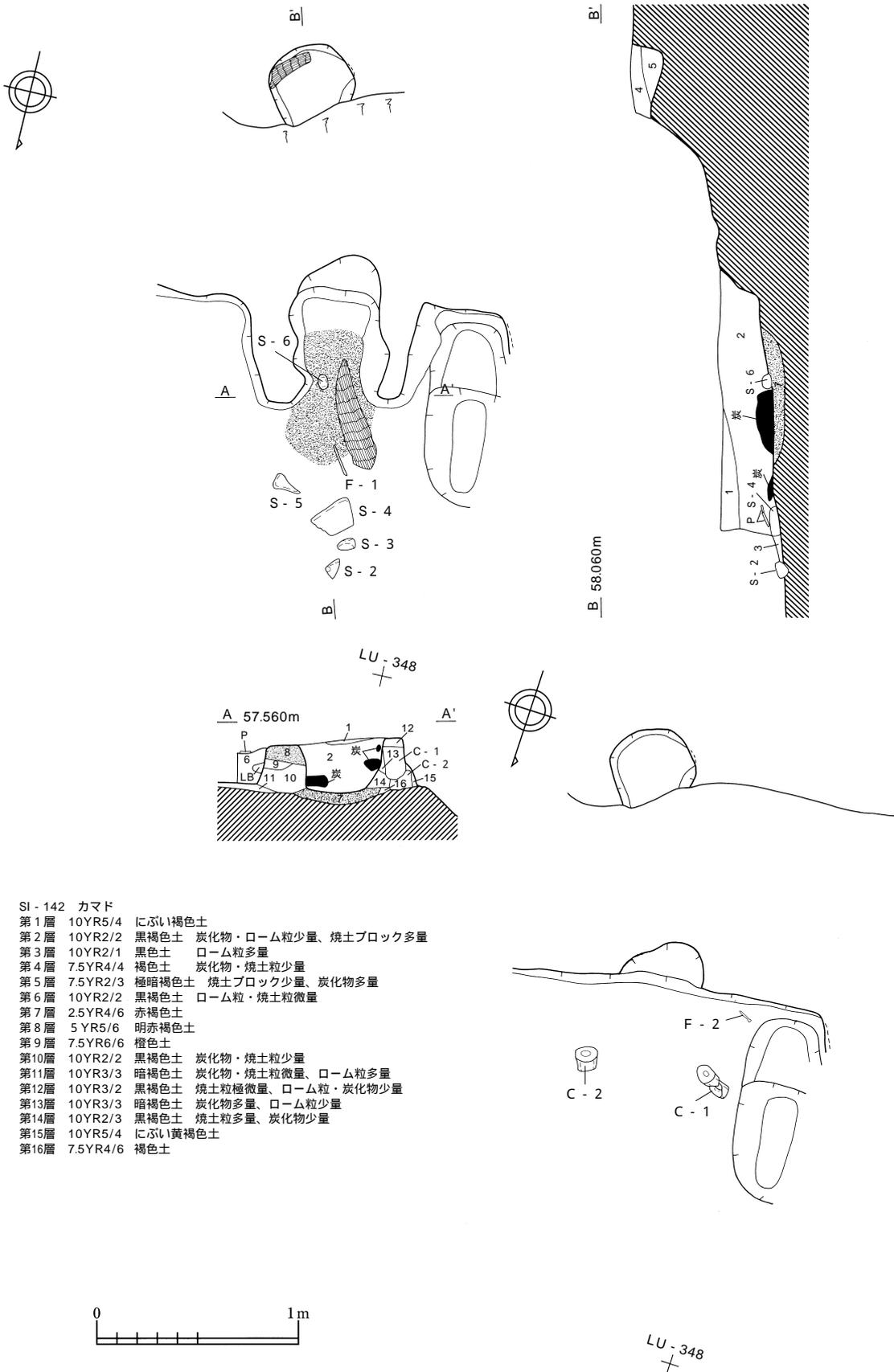
第281図 SI - 142

[堆積土] 4層に分層した。住居焼失時点での堆積土は第4層のみで、第1～3層については、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。第3層中からTo-a火山灰を粒状に検出した。また、埋め戻しの第2層中から床面検出と同様の炭化材が検出していることから、住居焼失後から埋没にかけての時期幅については短期間であったことが考えられる。

(木村)

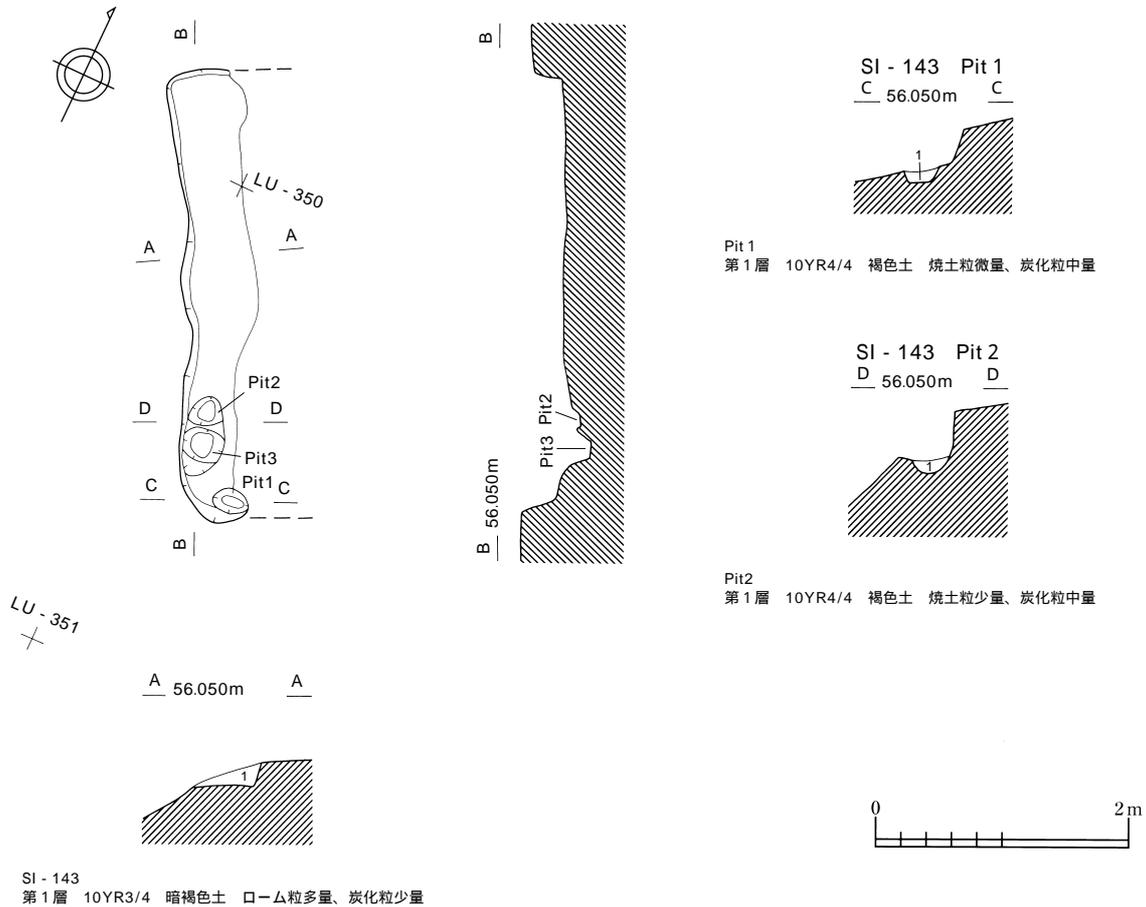


第282図 SI - 142



- SI - 142 カマド
- 第1層 10YR5/4 にぶい褐色土
 - 第2層 10YR2/2 黒褐色土 炭化物・ローム粒少量、焼土ブロック多量
 - 第3層 10YR2/1 黒色土 ローム粒多量
 - 第4層 7.5YR4/4 褐色土 炭化物・焼土粒少量
 - 第5層 7.5YR2/3 極暗褐色土 焼土ブロック少量、炭化物多量
 - 第6層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒・焼土粒微量
 - 第7層 2.5YR4/6 赤褐色土
 - 第8層 5YR5/6 明赤褐色土
 - 第9層 7.5YR6/6 橙色土
 - 第10層 10YR2/2 黒褐色土 炭化物・焼土粒少量
 - 第11層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物・焼土粒微量、ローム粒多量
 - 第12層 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒極微量、ローム粒・炭化物少量
 - 第13層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物多量、ローム粒少量
 - 第14層 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒多量、炭化物少量
 - 第15層 10YR5/4 にぶい黄褐色土
 - 第16層 7.5YR4/6 褐色土

第283図 SI - 142



第284図 SI - 143

SI - 143 (第284図)

[位置] グリッドLT・LU - 349・350で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 削平のため、残存しているのは西壁ならびに南北壁の一部のみで、詳細は不明である。規模は、南北軸(364)cm、深さ(20)cmを測る。

[壁] 残存部分での壁高は、北壁19cm、南壁13cm、西壁20cmを測る。断面形は(d)で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 残存部分は、大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面は堅緻である。

[壁溝] 残存部分からの検出はなし。

[ピット] 住居内から3基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 29 × 20 × 11cm、Pit 2 = 29 × 24 × 11cm、Pit 3 = 32 × 24 × 17cmを測る。主柱配置等の詳細については不明である。

[カマド] 残存部分からの検出はなし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 大部分が削平を受けており、詳細について不明であるが、残存部分について1層に分層した。

(木村)

S I - 144 (第285、286図)

[位置] グリッドLU・LV - 346・347で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 長方形を呈し、362×360×90cmを測る。床面積は12.246m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁8cm、東壁23cm、南壁66cm、西壁39cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 住居西壁側の一部を除き浅い掘り方を有し、ロームブロックを多量に含む黒褐色土が充填され、その上に大谷火山灰層主体の地山土を貼り床として貼り付けている。床面はやや起伏があり、やや堅緻である。また、床面ならびに床直から炭化材を検出した。本遺構についてもS I - 142と同様焼失住居の可能性が考えられる。

[壁溝] 東壁ならびに南壁の一部を除き検出した。深さは平均11cmを測る。

[ピット] 住居内から3基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 24×23×9cm、Pit 2 = 53×29×11cm、Pit 3 = 56×40×8cmを測る。柱穴として機能したと考えられるピットはPit 1のみである。

[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁3(72:28)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅66cm、煙道長65cmを測る。主軸はN - 110° - Eである。燃烧部ならびに煙道部の構築は粘土によるもので、第2層が天井に相当し、崩落した堆積状況を呈している。また、支脚として土師器椀を倒位に設置している。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で角度を16°に変え、煙出部へ立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含め11層に分層した。住居廃絶後の堆積土は第1～9層で床面直上に堆積する第7層中から炭化材を検出している。上層の第1～6層は、ロームブロック等を多量に含み埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 145 (第287、288図)

[位置] グリッドLU・LV - 345・346で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、384×340×76cmを測る。床面積は12.516m²を測る。

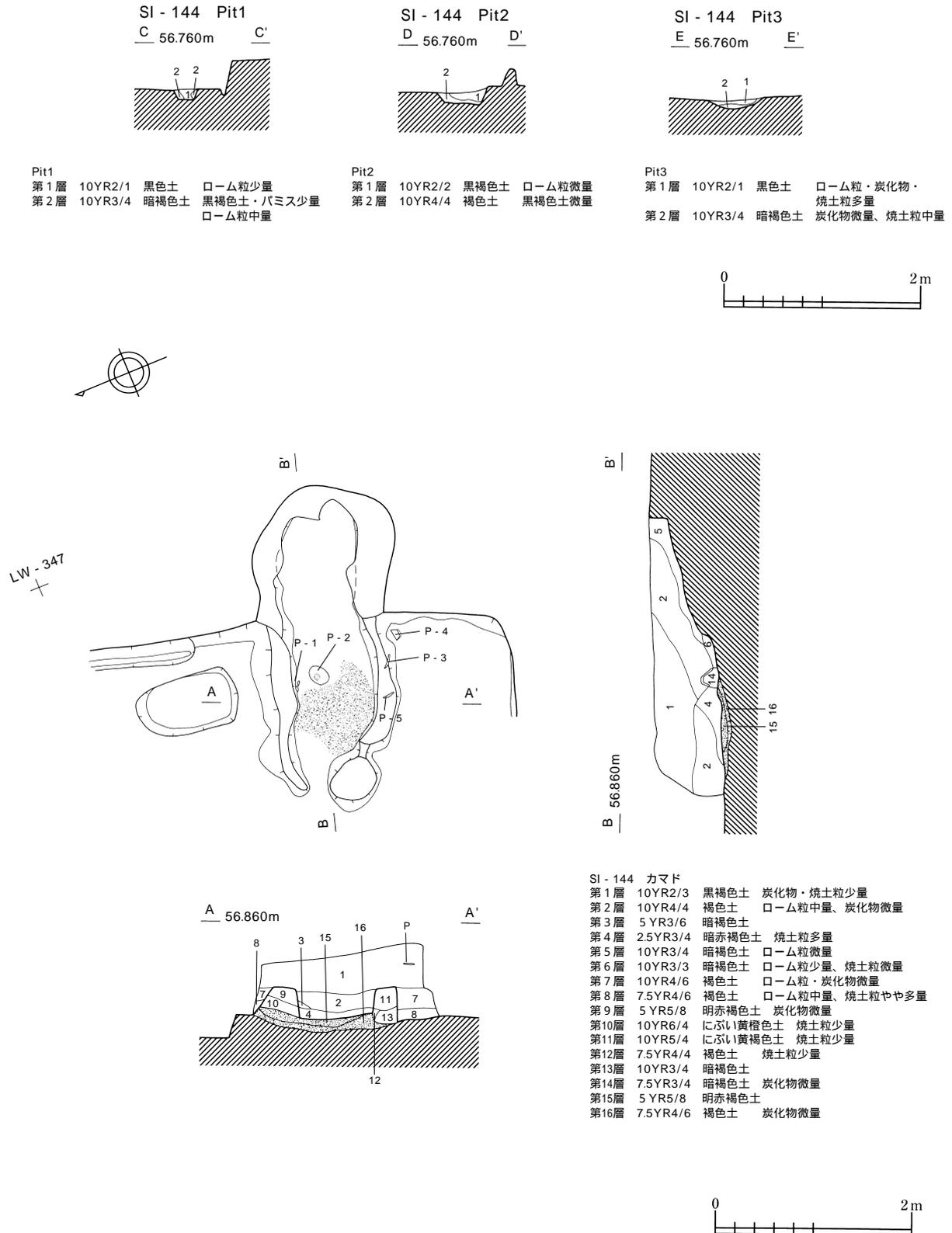
[壁] 壁高は、北壁4cm、東壁14cm、南壁53cm、西壁25cmを測る。断面形はdで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 全面に掘り方を持ち、黒褐色土と月見野火山灰層主体の地山土が混合して充填されている。床面はやや起伏があり、やや脆弱である。

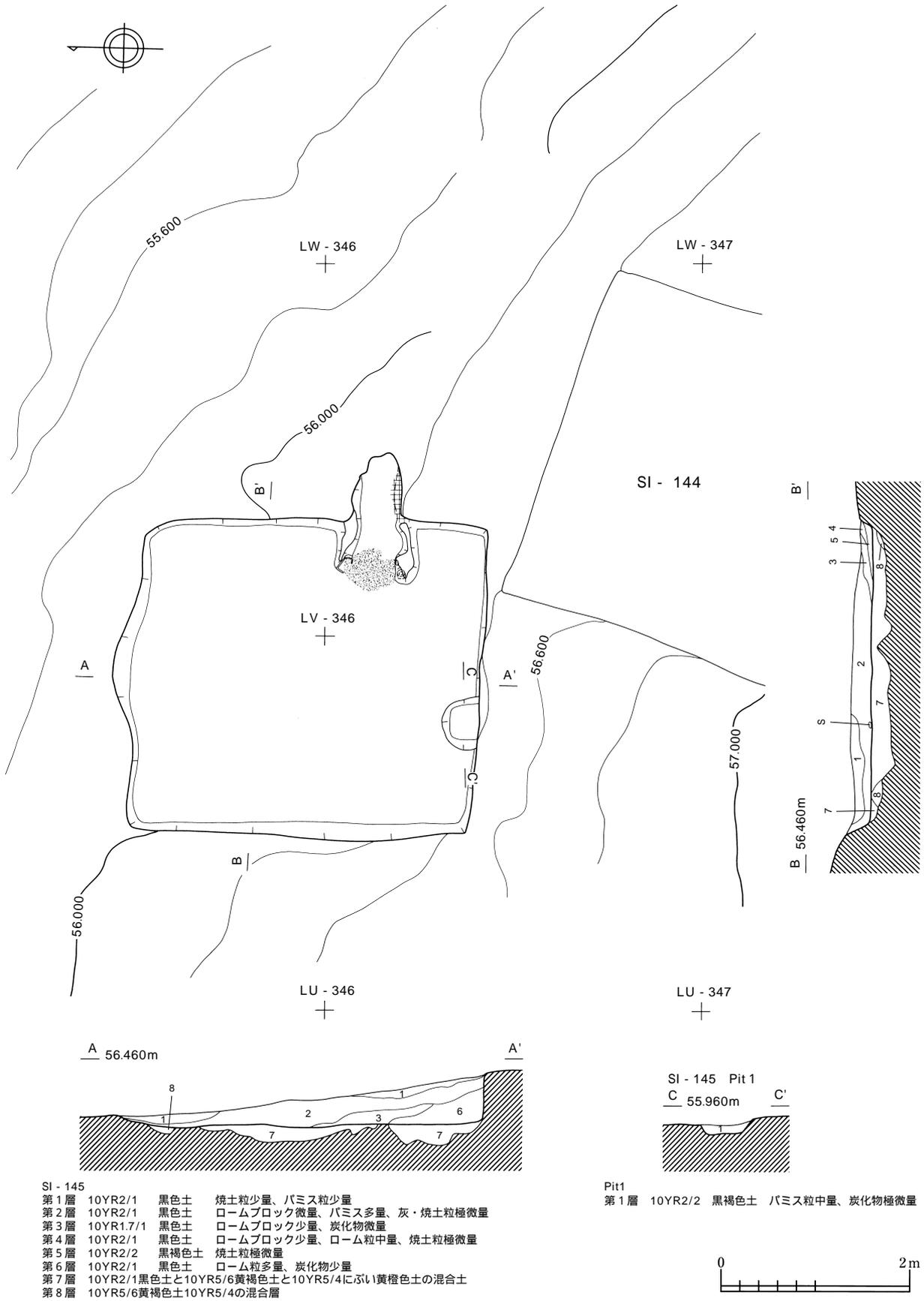
[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から1基検出した。規模は55×39×10cmを測る。主柱穴としての機能は充足し得ないものと考えられる。

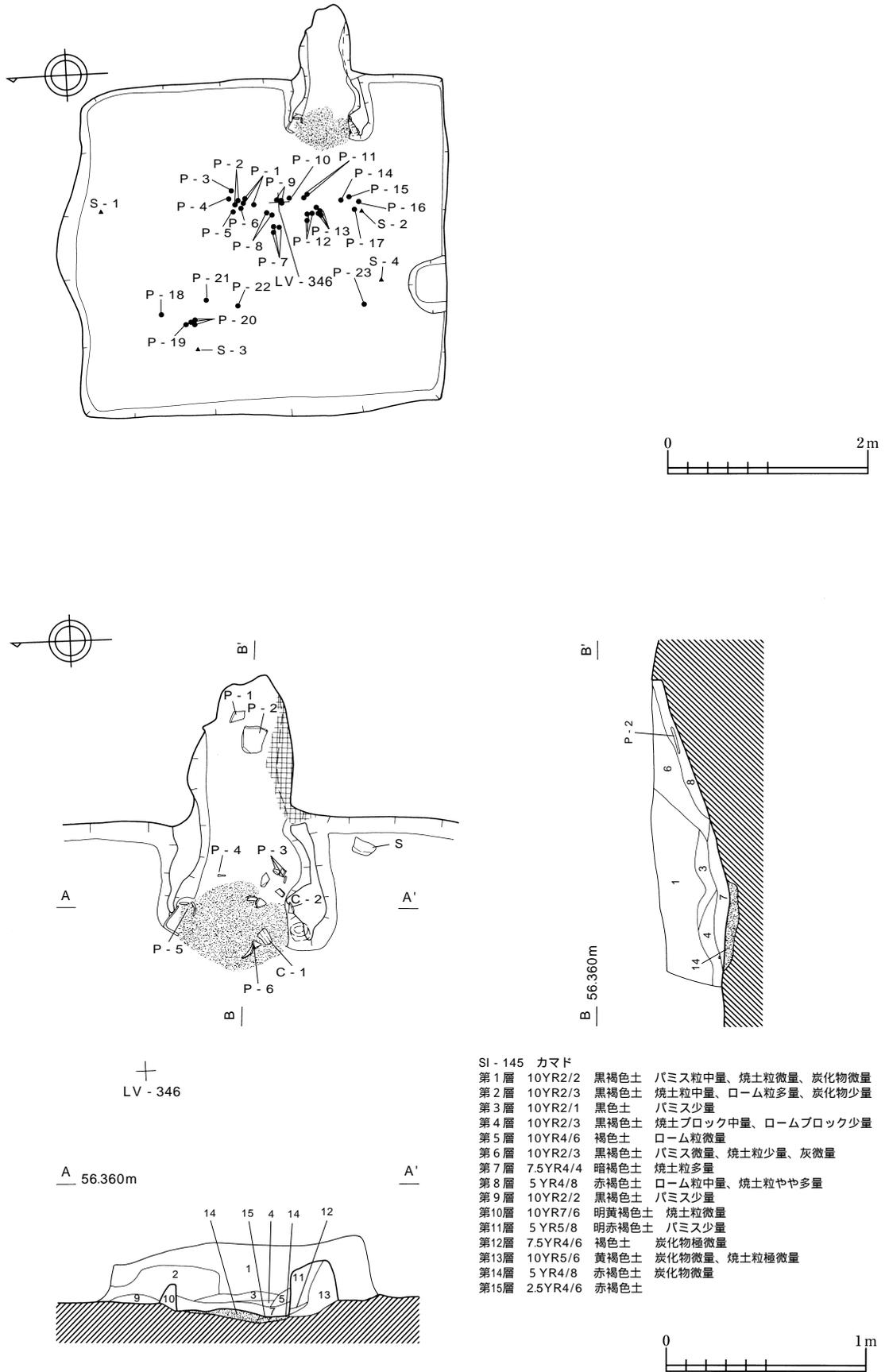
[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁3(72:28)の位置から検出している。主軸はN - 95° - Eである。燃烧部袖は、転用羽口を芯材としており、粘土を用いて構築している。燃烧部天井



第286図 SI - 144



第287図 SI - 145



第288図 SI - 145

については、破壊されており、土層堆積上に残存していない。火床面ならびに前庭部から羽口、土器等の出土があった。煙道部天井は、第8層が相当し、崩落した堆積状況を呈する。煙道は、住居壁際から16°の角度で煙道部へ立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて8層に分層した。住居廃絶後の堆積土は第1～7層で、ロームブロック、焼土粒、炭化物等を含む。埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 146 (第289、290図)

[位置] グリッドLT～LV - 343・344で検出した。

[重複] S I - 147と重複している。削平のため、詳細は不明である。

[平面形・規模] 台形を呈し、(544)×530×34cmを測る。床面積は29.436㎡を測る。

[壁] 削平のため、住居北側半分の壁の情報は不明である。壁高は、東壁7cm、南壁27cm、西壁5cmを測る。断面形はfで、削平のため、壁面と床面の明確な区分ができない部分が多い。壁面はやや脆弱である。

[床] 残存部分については、掘り方を持ち、大谷火山灰層主体の地山を貼り床として貼り付けている。床面はやや起伏があり、堅緻である。

[壁溝] 住居東西壁ならびに南壁から検出した。深さは平均13cmを測る。

[ピット] 住居内外から8基検出した。削平のため、明確な帰属関係等が追えなかったため、住居外のピットについては他の遺構に帰属する可能性がある。各ピットの規模は、Pit 1 = 36×32×23cm、Pit 2 = 40×38×30cm、Pit 3 = 48×37×18cm、Pit 4 = 53×45×35cm、Pit 5 = 42×38×8cm、Pit 6 = 43×40×18cm、Pit 7 = 52×39×12cm、Pit 8 = 42×33×18cm、Pit 9 = 45×38×44cmを測る。支柱穴として考えられるピットは、Pit 2、9である。

[カマド] 残存部分からの検出はなし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 削平を受けており、上部の堆積土について詳細は不明であるが、残存部分について掘り方を含めて13層に分層した。住居廃絶後の堆積土は第1～9層が相当し、焼土粒・炭化粒等が含まれる。

(木村)

S I - 147 (第289図)

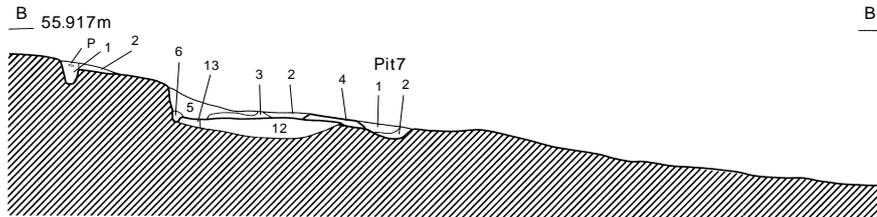
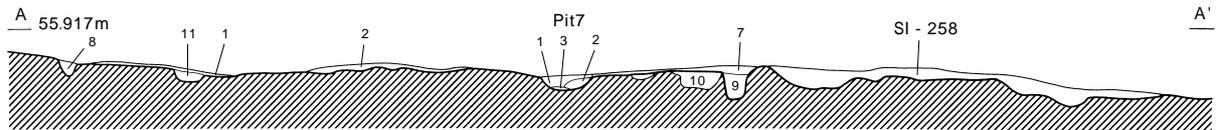
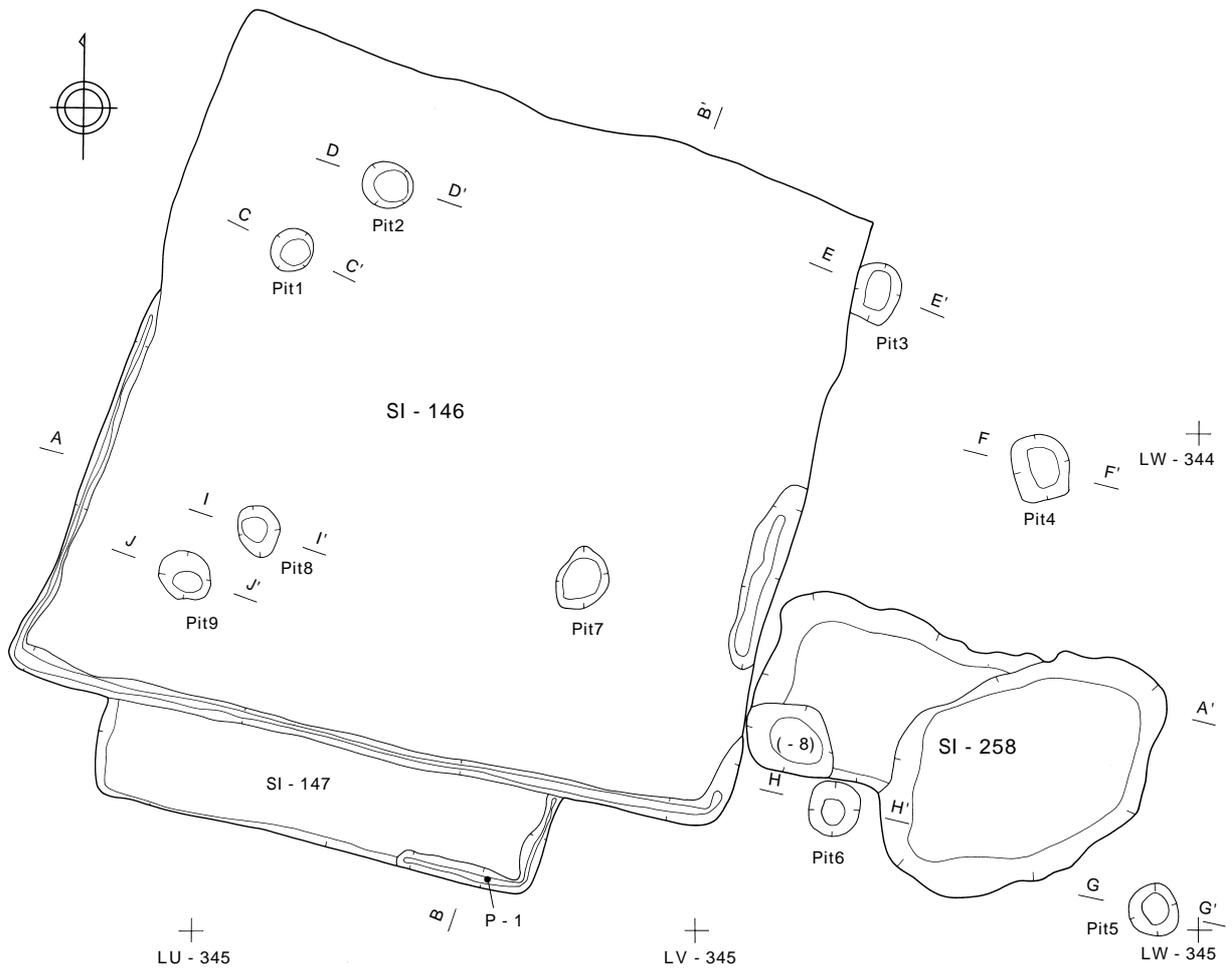
[位置] グリッドLT・LU - 344で検出した。

[重複] S I - 146と重複している。削平のため、詳細は不明である。

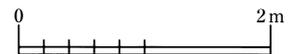
[平面形・規模] S I - 146の上部の堆積土が削平のため、詳細が不明であるため本遺構の規模等についても詳細は不明である。壁長が残存しているのは南壁側のみで370cmを測る。

[壁] 削平のため、残存壁は東西壁の一部と南壁側である。壁高は、東壁7cm、南壁8cm、西壁12cmを測る。断面形は(d)で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面は脆弱である。

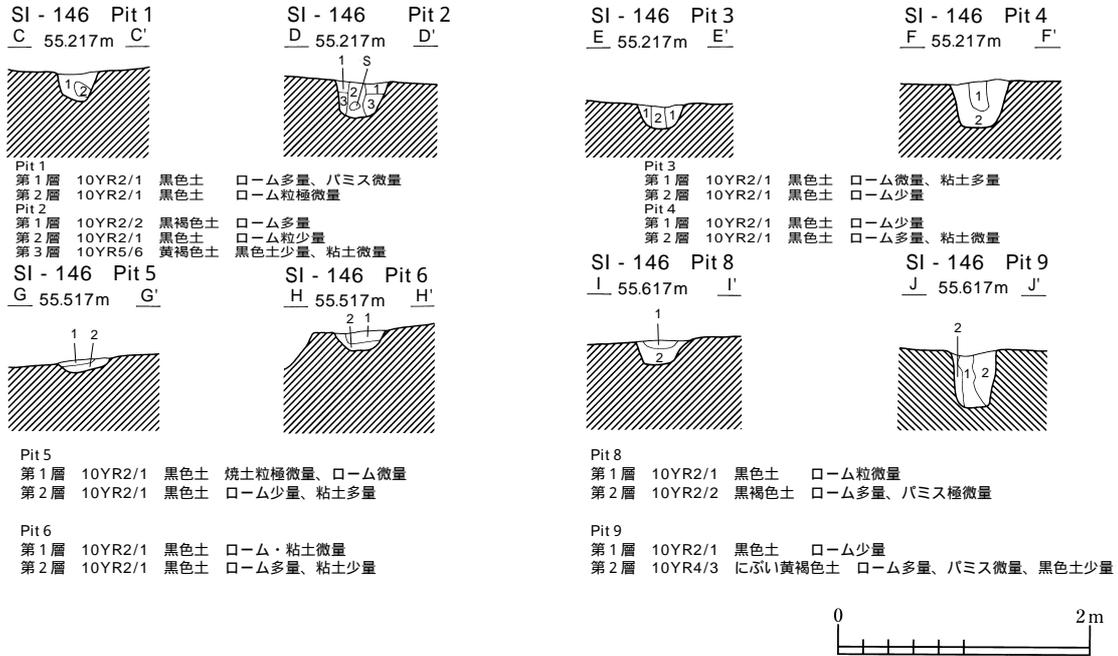
[床] 月見野火山灰層に地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面はやや脆弱である。



SI - 146				Pit7			
第1層	10YR2/1	黒色土	焼土極微量、ローム少量	第1層	10YR2/2	黒褐色土	焼土極微量、ローム少量、炭化物微量
第2層	10YR2/2	黒褐色土	ローム多量	第2層	10YR3/3	黒褐色土	焼土極微量、粘土微量
第3層	10YR2/1	黒色土	焼土極微量、ローム少量、パミス微量	第3層	10YR4/4	褐色土	ローム粒・粘土・焼土粒微量
第4層	7.5YR4/4	褐色土	焼土極微量、ローム微量	SI - 147			
第5層	10YR2/2	黒褐色土	焼土極微量、ローム少量、粘土極微量、パミス微量	第1層	10YR3/3	暗褐色土	
第6層	10YR2/1	黒色土	ローム多量、パミス・粘土少量	第2層	10YR2/1	黒色土	
第7層	10YR2/1	黒色土	焼土・炭化物極微量、ローム粒少量				
第8層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒微量				
第9層	10YR3/3	暗褐色土	粘土少量、黒色土微量				
第10層	10YR1.7/1	黒色土	ローム多量、粘土少量、パミス微量				
第11層	10YR2/1	黒色土	ローム多量				
第12層	10YR2/1	黒色土	焼土極微量、ローム多量、粘土微量				
第13層	7.5YR4/6	褐色土	黒色土微量				



第289図 SI - 146 ・ SI - 147



第290図 SI - 146

[壁溝] 東壁ならびに南壁の一部で検出した。深さは14cmを測る。また、壁溝から須恵器皿1点が出土した。

[ピット] 残存部分からの検出はなし。

[カマド] 残存部分からの検出はなし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 残存部分について2層に分層した。削平のため、詳細は不明であるが、自然堆積の様相を呈する。

(木村)

SI - 148 (第291~294図)

[位置] グリッドLG~LI-344・345、LH-346で検出した。

[重複] なし。

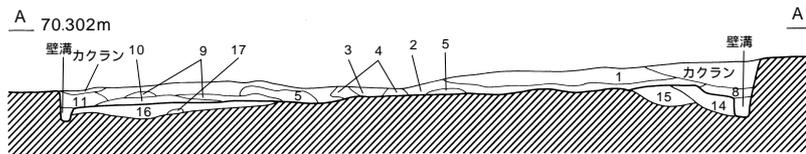
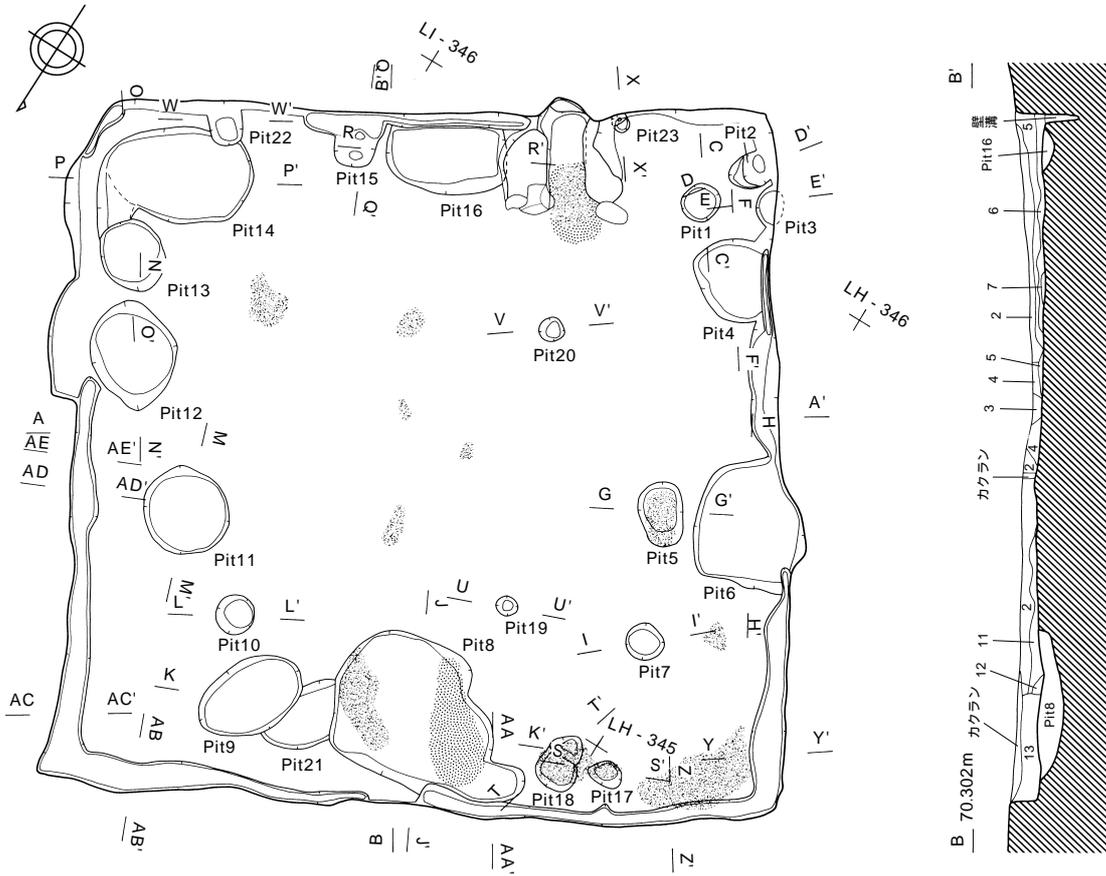
[平面形・規模] 方形を呈し、560×556×31cmを測る。床面積は31.768m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁21cm、東壁14cm、南壁23cm、西壁31cmを測る。断面形aで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

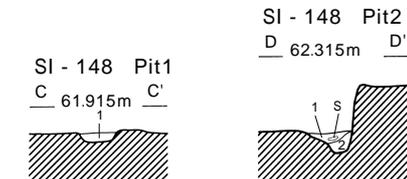
[床] 東西壁際付近に掘り方を持ち、大谷火山灰層主体の地山土を充填している。それ以外の部分については大谷火山灰層の地山を床面としている。床面は、起伏があり、堅緻である。また、床直から多量の炭化物、炭化粒、焼土粒ならびに床面から赤化面を検出しており、本遺構は焼失住居であったことが考えられる。

[壁溝] 断続しながら全周する形で検出した。深さは平均16cmを測る。

[ピット] 住居内から23基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 31×30×8cm、Pit 2 = 35×29×16cm、Pit 3 = 32×25×19cm、Pit 4 = 67×60×9cm、Pit 5 = 52×36×13cm、Pit 6 = 103×

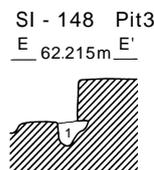


層	土質	特徴
第1層	10YR3/4 暗褐色土	
第2層	10YR3/2 黒褐色土	焼土粒・ローム粒中量、炭化物極微量
第3層	10YR3/3 暗褐色土	ロームブロック少量
第4層	10YR3/4 暗褐色土	ローム粒中量、炭化物微量
第5層	10YR3/4 暗褐色土	炭化物極微量、ローム粒中量、焼土粒微量
第6層	10YR3/2 黒褐色土	ローム粒少量
第7層	10YR4/4 褐色土	
第8層	7.5YR4/4 褐色土	焼土粒微量
第9層	5YR4/8 赤褐色土	
第10層	10YR2/2 黒褐色土	ローム少量
第11層	10YR3/3 暗褐色土	ロームブロック極微量
第12層	10YR2/3 黒褐色土	ローム粒極微量
第13層	7.5YR4/6 褐色土	焼土粒微量、ロームブロック中量
第14層	10YR4/4 褐色土	ローム粒極微量、炭化物少量
第15層	10YR4/6 褐色土	ロームブロック微量、焼土粒・炭化物少量
第16層	10YR3/3 暗褐色土	炭化物中量、ロームブロック少量
第17層	10YR5/6 黄褐色土	

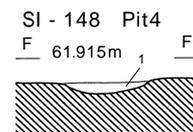


Pit1
第1層 7.5YR4/4 褐色土 焼土粒少量、炭化物混入

Pit2
第1層 7.5YR4/4 褐色土 焼土粒少量、炭化物微量
第2層 7.5YR4/3 褐色土



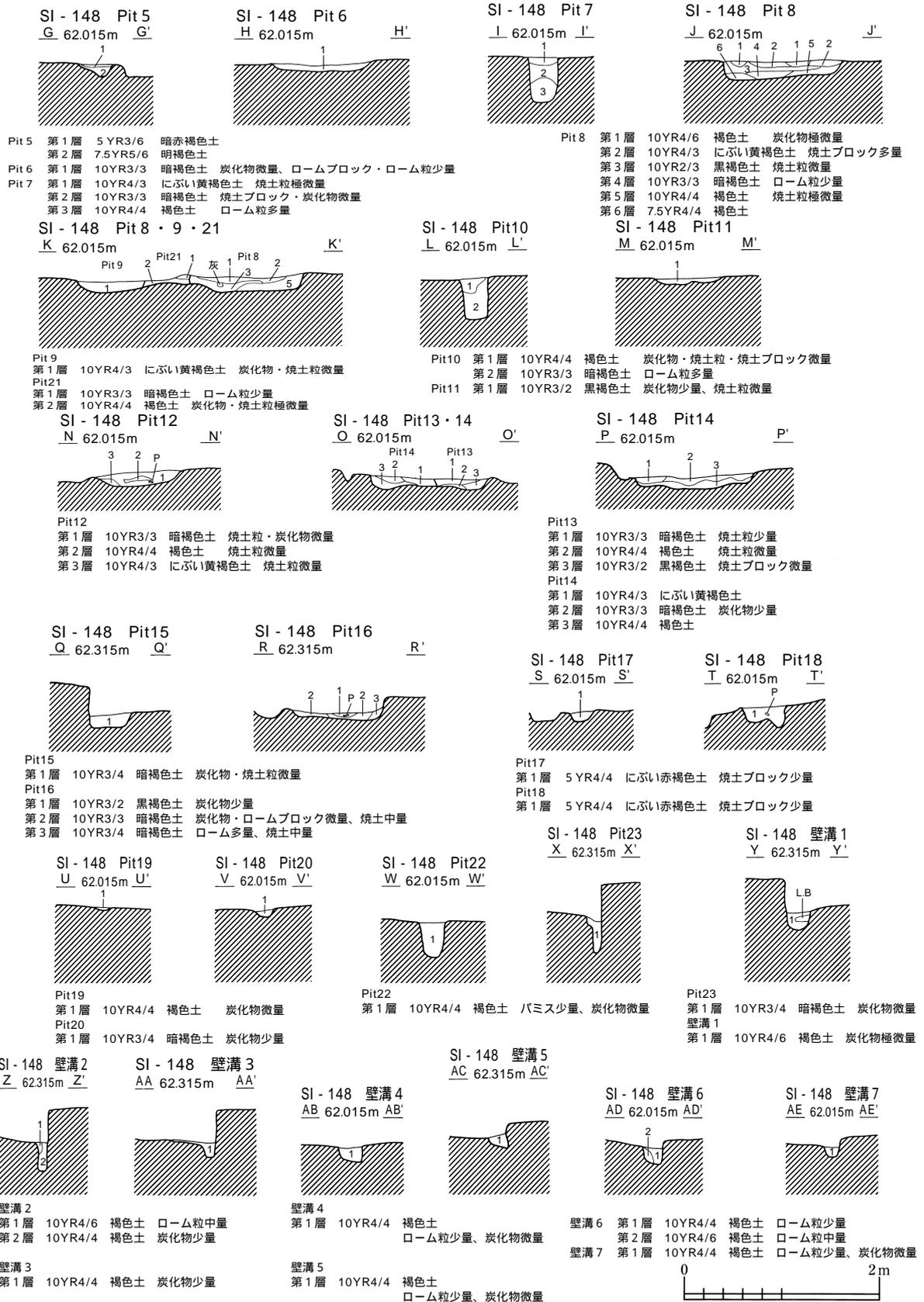
Pit3
第1層 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒極微量
ロームブロック少量



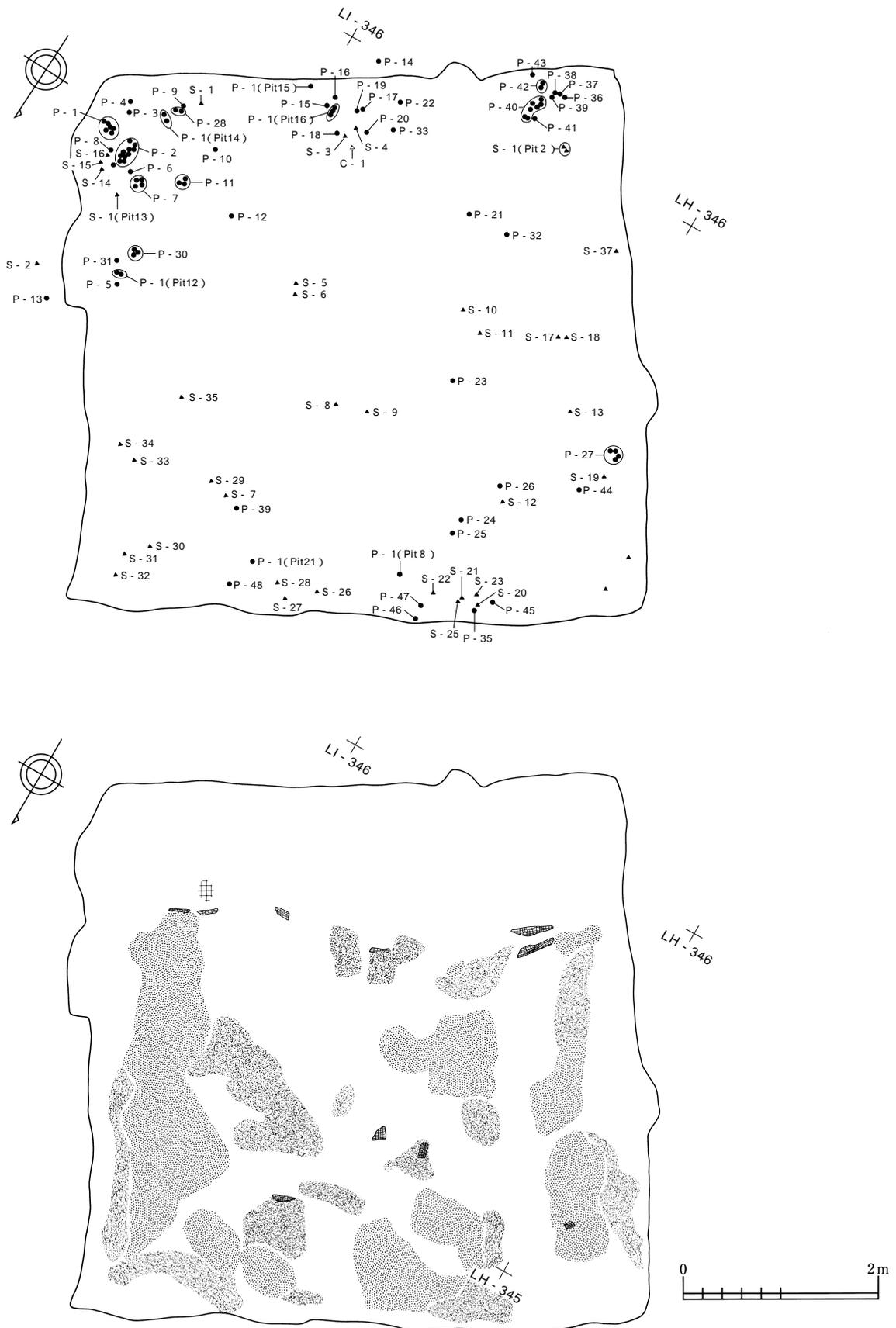
Pit4
第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土粒・炭化物微量、ロームブロック少量



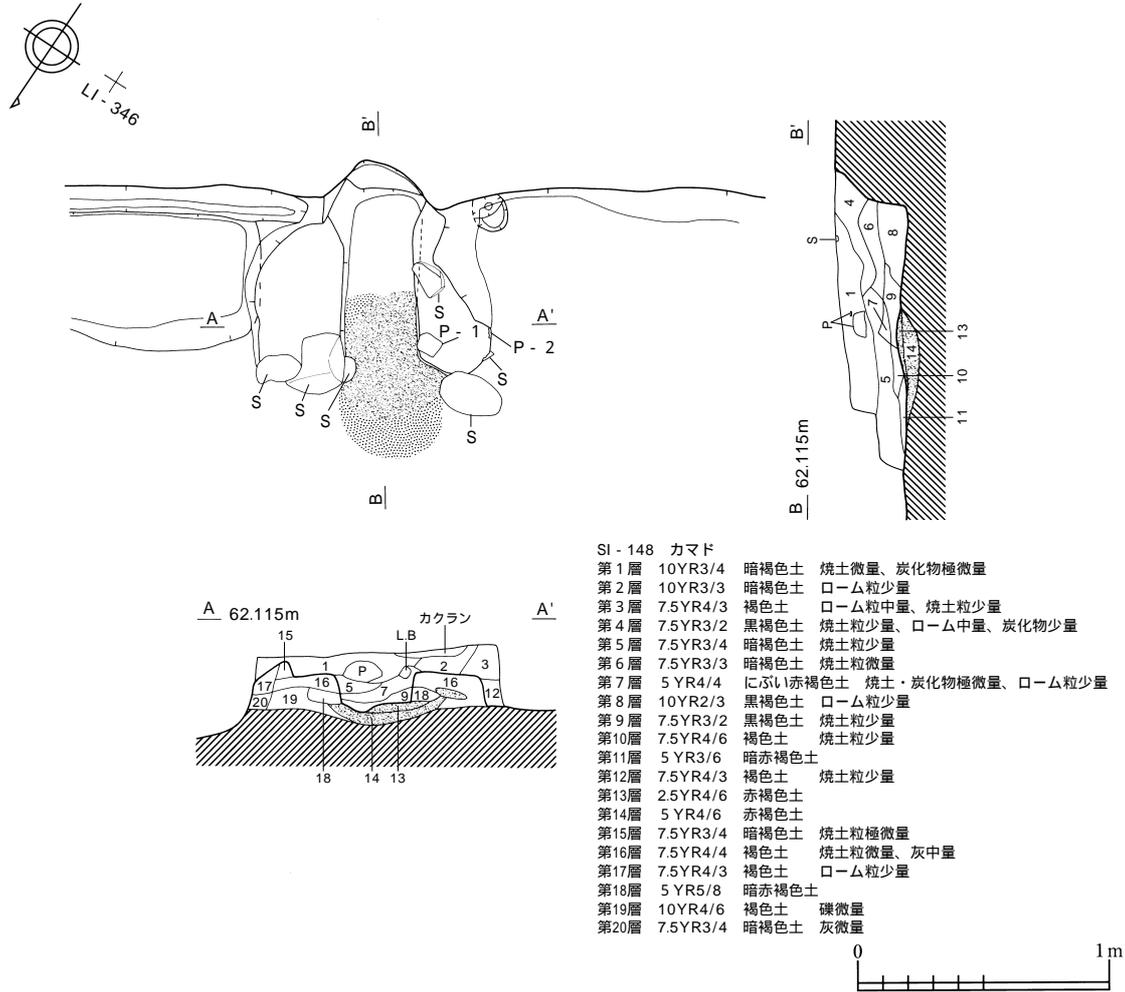
第291図 SI - 148



第292図 SI - 148



第293図 SI - 148



第294図 SI - 148

88 × 8 cm、Pit 7 = 31 × 29 × 46cm、Pit 8 = 128 × 115 × 17cm、Pit 9 = 88 × 56 × 13cm、Pit10 = 31 × 30 × 42cm、Pit11 = 70 × 65 × 7 cm、Pit12 = 88 × 70 × 14cm、Pit13 = 58 × 50 × 12cm、Pit14 = 120 × 78 × 14cm、Pit15 = 33 × 30 × 13cm、Pit16 = 97 × 56 × 24cm、Pit17 = 28 × 20 × 11cm、Pit18 = 45 × 34 × 23cm、Pit19 = 18 × 16 × 4 cm、Pit20 = 19 × 19 × 9 cm、Pit21 = (63) × 48 × 10cm、Pit22 = 28 × 26 × 36cm、Pit23 = 13 × 11 × 38cmを測る。主柱穴として考えられるピットは、Pit 7、10、22、23である。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(71:29)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅97cm、煙道長20cmを測る。主軸はN-142°-Eである。燃烧部袖は、自然礫を芯材としており、粘土を用いて構築している。燃烧部天井は第7、10、11層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道部天井は、第6層が相当し、燃烧部と同様崩落した堆積状況を呈している。煙道は、住居壁際より手前の部分からほぼ床面と同様の高さで立ち上がり、住居壁際で壁面に沿って立ち上がり、途中で45°の角度で急激に立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて17層に分層した。住居廃絶後の堆積土は、第1~13層で、床面直上に堆積する第9層は、焼失時に生じた焼土層である。埋め戻し等による人為堆積状況を呈している。

(木村)

S I - 149 (第295、296図)

[位置] グリッドL B・L C - 346・347で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 長方形を呈し、412×328×62cmを測る。床面積は12.938㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁33cm、東壁46cm、南壁50cm、西壁34cmを測る。断面形はcで、壁上部で一部緩やかな立ち上がりが見られる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。

[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から2基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 92×48×5 cm、Pit 2 = 45×31×13cmを測る。いずれのピットについても柱穴としての機能は果たさなかったものと考えられる。

[カマド] 東壁側から1基検出した。東壁3(72:28)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅70cm、煙道長75cmを測る。主軸はN - 127.5° - Eである。燃烧部袖は、自然礫を芯材としており、粘土を用いて構築している。燃烧部天井は、第8層が相当し、芯材である自然礫が包含しており、崩落した堆積状況を呈している。煙道部天井は、第4層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道は、住居壁際より手前の部分から段を持ち15°の角度で立ち上がり、住居壁際部分で角度を変え、段を持ちながら25°の角度で立ち上がる。また、煙出付近では傾斜を10°に変え、煙出奥壁部分では緩やかに外傾しながら立ち上がる。火床面上から土器がつぶれた状況で出土した。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 一部攪乱により土層が乱されているが、6層に分層した。壁面の崩落を含む土層堆積で、自然堆積状況を呈する。また、第1層中からB - T m火山灰を微量検出した。

(木村)

S I - 150 (第297、298図)

[位置] グリッドK Z・L A - 347・348で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、440×428×81cmを測る。床面積は18.591㎡を測る。

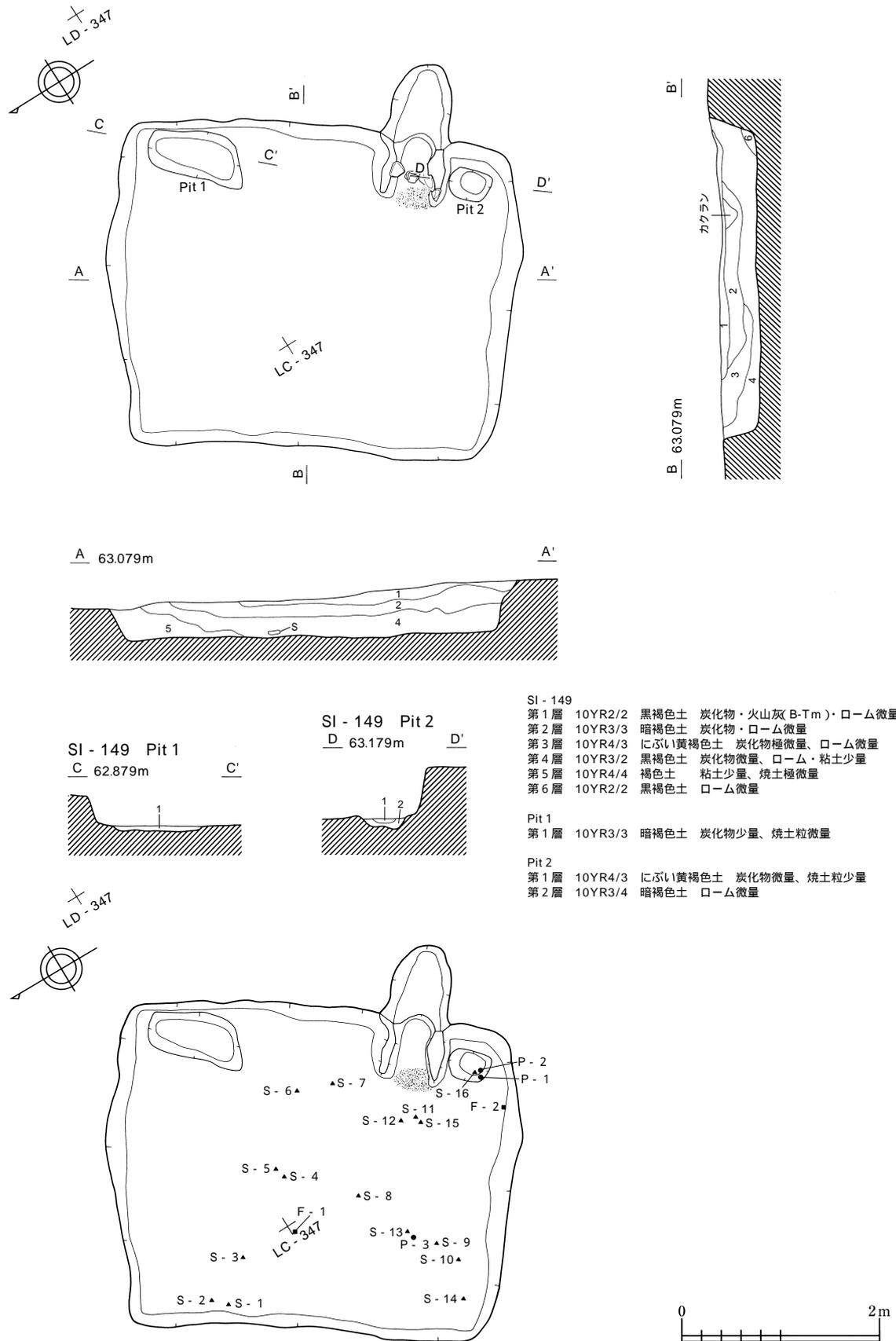
[壁] 壁高は、北壁58cm、東壁65cm、南壁74cm、西壁57cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 南壁側の一部を除きほぼ床面全面に掘り方を有し、月見野火山灰層ならびに大谷火山灰層の地山土を貼り床として貼り付けている。床面はやや起伏があり、脆弱な部分と堅緻な部分がある。

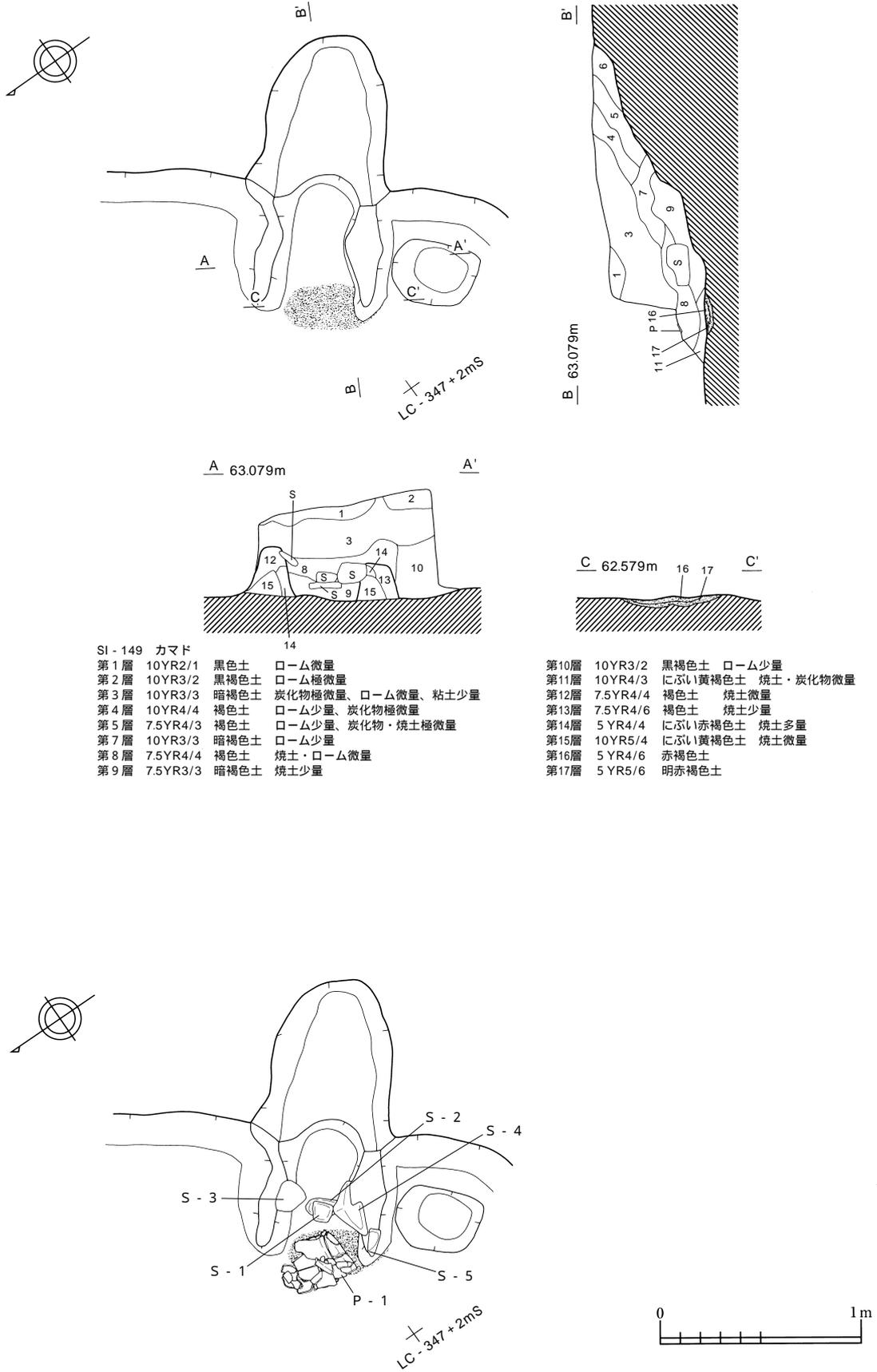
[壁溝] カマド設置部分を除きほぼ全周する形で検出した。深さは平均13cmを測る。

[ピット] 住居内から3基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 20×19×8 cm、Pit 2 = 29×23×6 cm、Pit 3 = 45×44×26cmを測る。主柱穴として考えられるピットはPit 1であるが、Pit 3についても関連した可能性が考えられる。

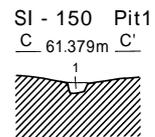
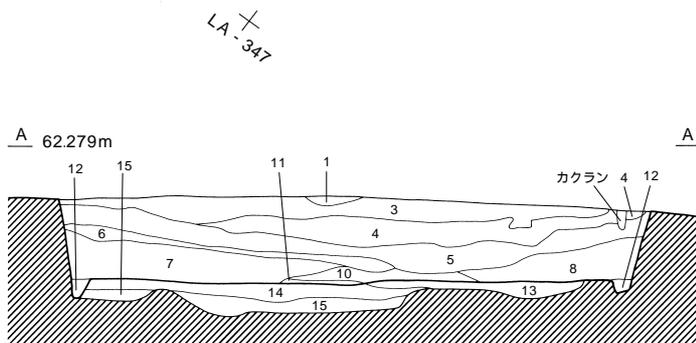
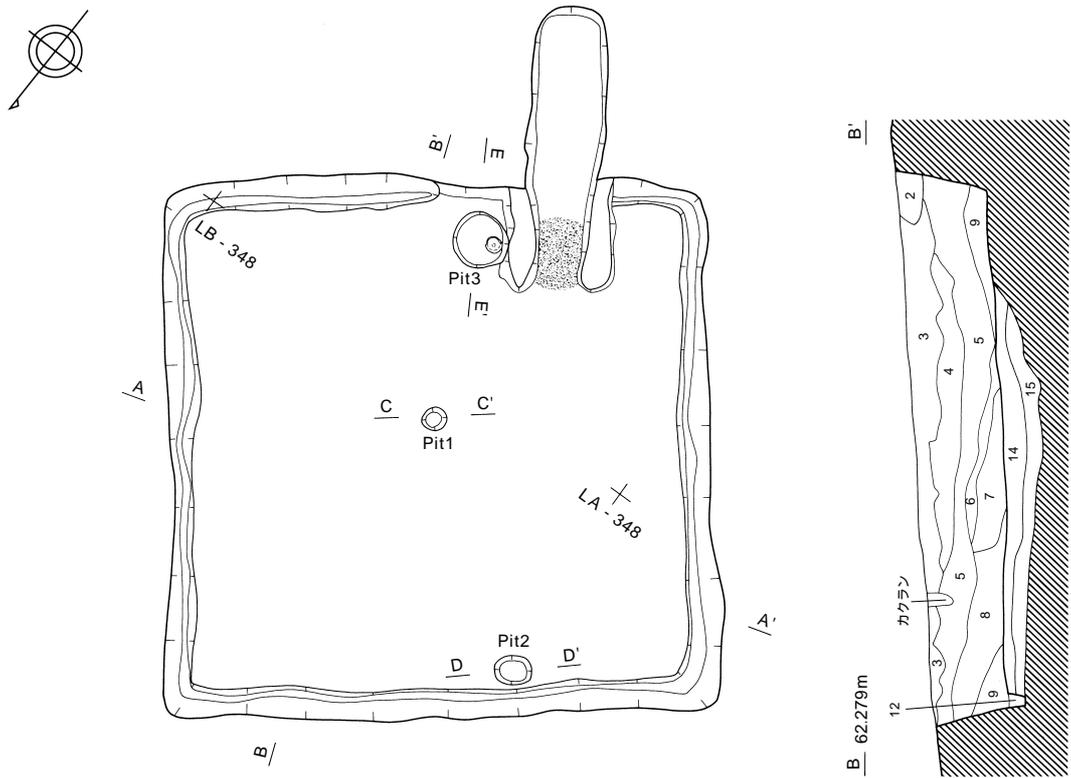
[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(73:27)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅84cm、煙道長140cmを測る。主軸はN - 143° - Eである。燃烧部の構築は粘土によるもので天井は第13層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。また、支脚として土師器椀を倒置している。煙道部天井は第8層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道は、住居壁際より手前



第295図 SI-149

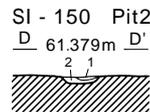


第296図 SI - 149

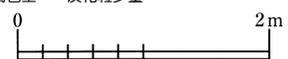
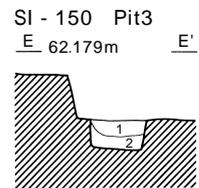


Pit1
第1層 10YR3/4 暗褐色土 炭化粒・ローム粒少量

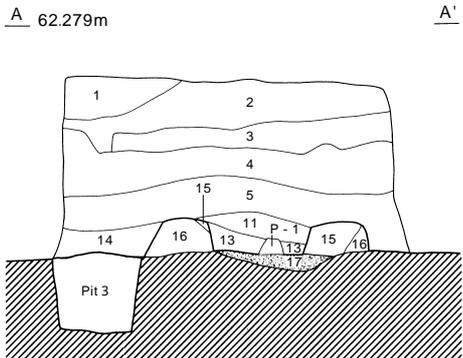
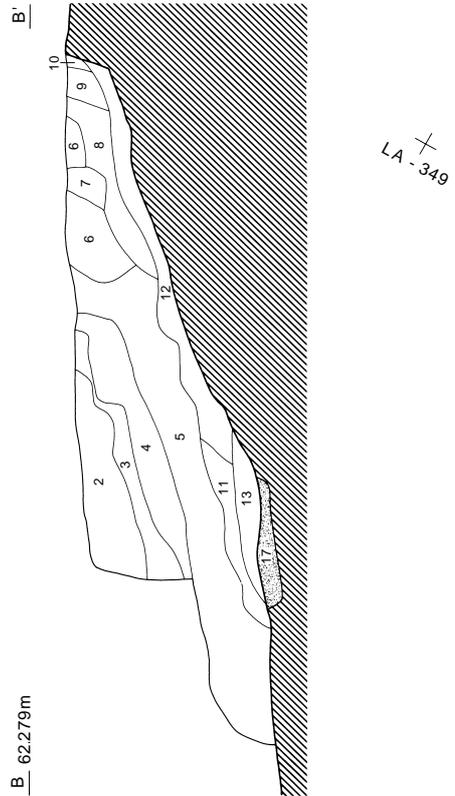
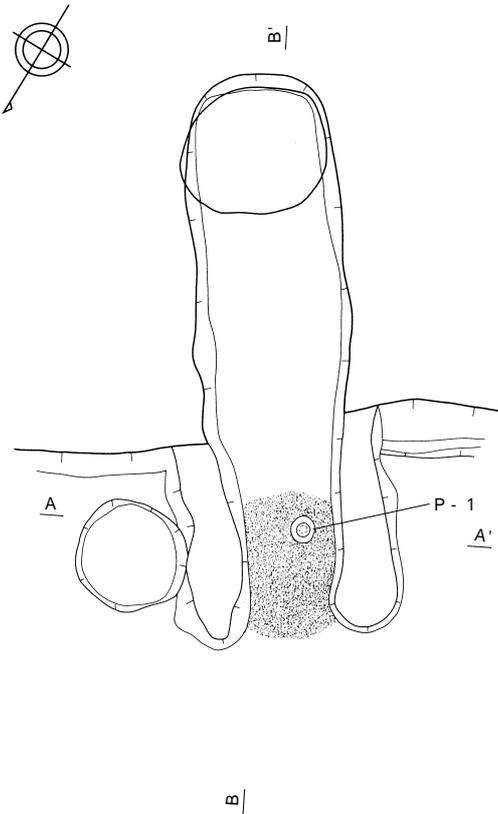
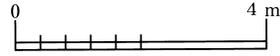
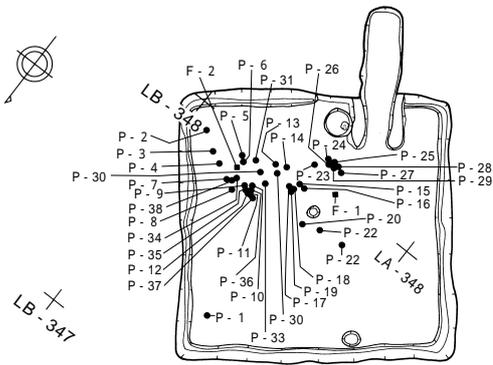
- SI - 150
- | | | | |
|------|---------|---------|-----------------------------|
| 第1層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 微粒の炭化粒少量、ローム粒中量 |
| 第2層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 微粒の炭化粒少量、ローム粒中量 |
| 第3層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 微粒の炭化粒・ローム粒少量 |
| 第4層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 微粒の炭化粒少量、ローム粒中量
微粒の焼土粒微量 |
| 第5層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 炭化粒中量、ローム粒少量 |
| 第6層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 炭化粒中量、微粒の焼土微量、ローム粒少量 |
| 第7層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 炭化粒少量、ローム粒中量 |
| 第8層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 炭化粒少量、ローム粒中量 |
| 第9層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 炭化粒中量、ロームブロック・ローム粒少量 |
| 第10層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 炭化粒・焼土少量 |
| 第11層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 微粒の炭化粒少量 |
| 第12層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 炭化粒・ローム粒少量 |
| 第13層 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | ロームブロック・炭化粒中量
ローム粒少量 |
| 第14層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 微粒の炭化粒少量 |
| 第15層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 炭化粒中量、パミス少量 |



- SI - 150 Pit2
- | | | | |
|-----|---------|------|-----------|
| 第1層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 炭化粒・パミス少量 |
| 第2層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 微粒の炭化物少量 |
- Pit3
- | | | | |
|-----|---------|-----|------------|
| 第1層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 炭化粒・ローム粒少量 |
| 第2層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 炭化粒少量 |

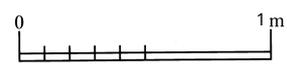


第297図 SI - 150



SI - 150 カマド

第1層	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒中量、炭化粒微量
第2層	10YR2/1	黒色土	ローム粒・微粒の焼土少量
第3層	10YR3/3	暗褐色土	炭化粒中量、焼土粒少量
第4層	10YR3/4	暗褐色土	炭化粒中量、焼土粒・ローム粒少量
第5層	10YR3/2	黒褐色土	炭化粒・焼土粒中量、ローム粒少量
第6層	10YR4/6	褐色土	焼土粒・微粒の炭化粒少量
第7層	5 YR3/4	暗赤褐色土	微粒の炭化粒少量
第8層	7.5YR4/4	褐色土	炭化粒・微粒の焼土少量
第9層	5 YR3/6	暗赤褐色土	微粒の炭化粒少量含
第10層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	微粒の炭化粒・微粒の焼土粒少量
第11層	7.5YR3/4	暗褐色土	焼土粒・微粒の炭化粒少量
第12層	10YR3/4	暗褐色土	焼土粒・微粒の炭化粒中量
第13層	5 YR4/4	にぶい赤褐色土	焼土ブロック多量、微粒の炭化粒中量
第14層	10YR4/4	褐色土	微粒の炭化物・ローム粒中量
第15層	5 YR4/6	赤褐色土	炭化粒・焼土粒(5 YR4/8 赤褐色土)中量 パミス少量
第16層	10YR4/6	褐色土	パミス・微粒の炭化粒少量
第17層	5 YR4/8	赤褐色土	微粒の炭化粒少量



第298図 SI - 150

の部分から25°の角度で起伏を持ちながら煙出へ向かって立ち上がる。煙出奥壁は垂直に近い形で立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて15層に分層した。住居廃絶後の堆積土は、第1～12層で住居中央部床直上に堆積する第10層は大谷火山灰層主体の地山土で埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。本遺構出土遺物についても大部分が廃棄に伴うものであると考えられる。

(木村)

S I - 151 (第299、300図)

[位置] グリッドK Z・L A - 345・346で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 不整形を呈し、430×424×46cmを測る。床面積は17.8㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁18cm、東壁25cm、南壁27cm、西壁12cmを測る。断面形はdで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面は堅緻である。

[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から3基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 46×43×31cm、Pit 2 = 36×33×8cm、Pit 3 = 40×37×8cmを測る。主柱穴として考えられるピットはPit 1である。また、Pit 3は、焼土粒が検出していることからカマド脇ピットとしての機能が考えられる。

[カマド] 南壁側から1基検出した。南壁3(73:27)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅84cm、煙道長65cmを測る。主軸はN - 120° - Eである。燃烧部の構築は粘土によるもので、右袖の一部は欠落している。燃烧部天井は、第4、5、7、8、9層が相当し、ブロック状に崩落した堆積状況を呈している。煙道部天井は、第1層が相当する。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で27°に角度を変え、煙出部へ立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 住居南壁側の一部が攪乱により土層堆積が乱されているが、残存部分について9層に分層した。北壁側に堆積している第3、4層は、大谷火山灰層主体の地山土を含む土層堆積で、壁面側から倒落した堆積状況を呈している。自然堆積状況を呈する。

(木村)

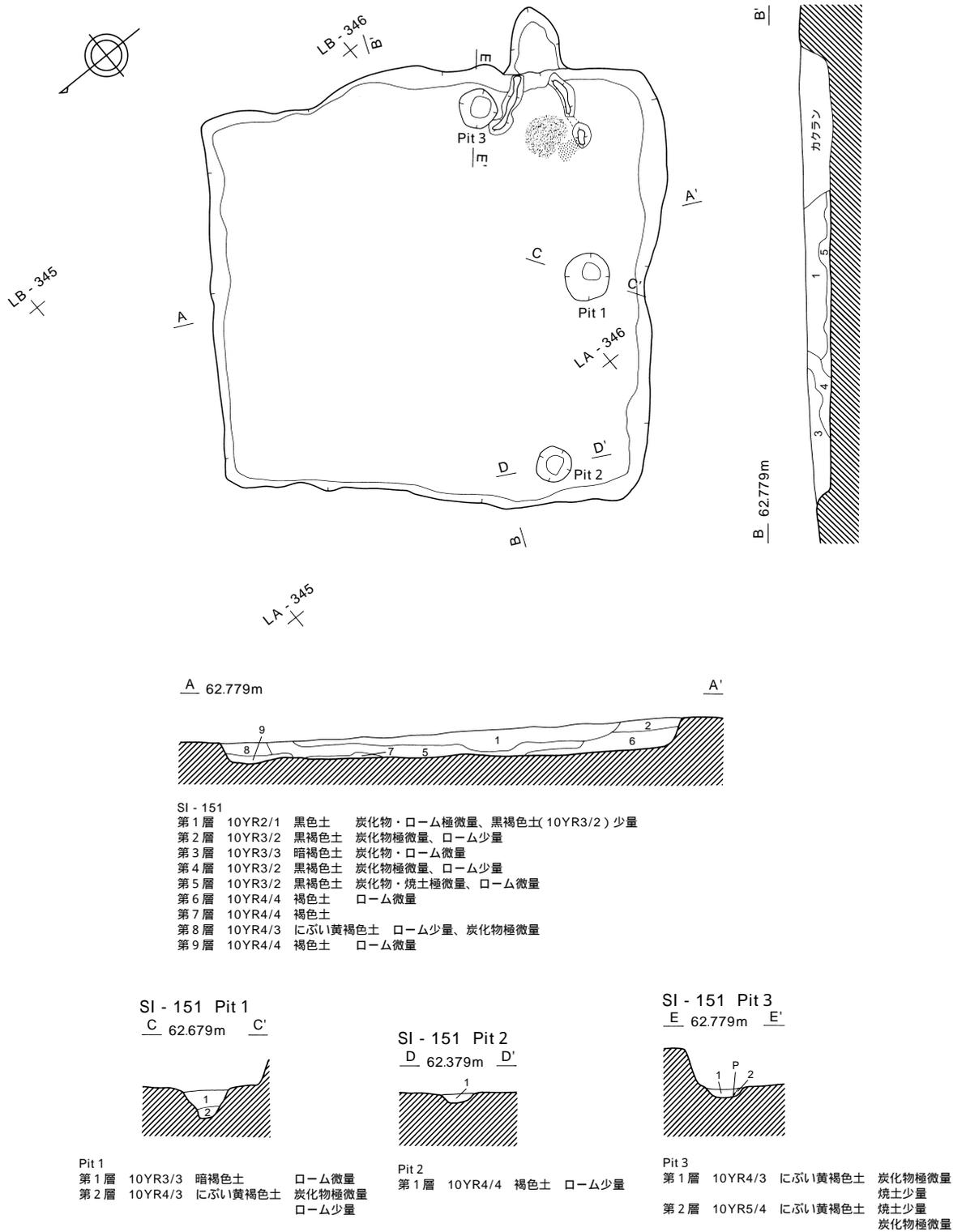
S I - 152 (第301図)

[位置] グリッドL G - 346で検出した。

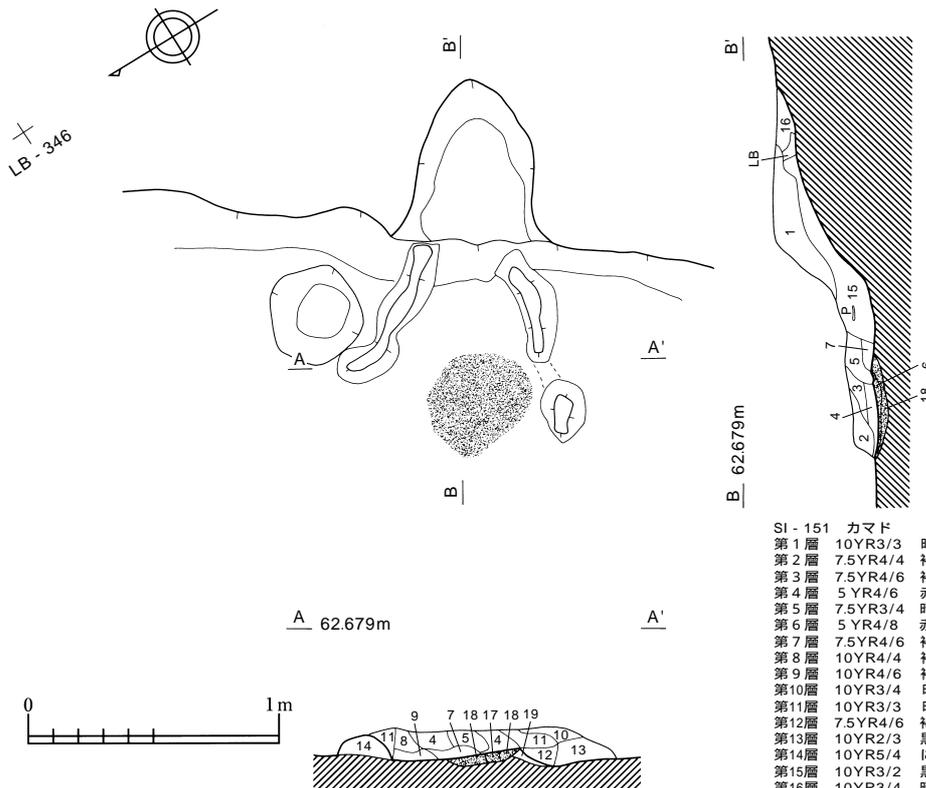
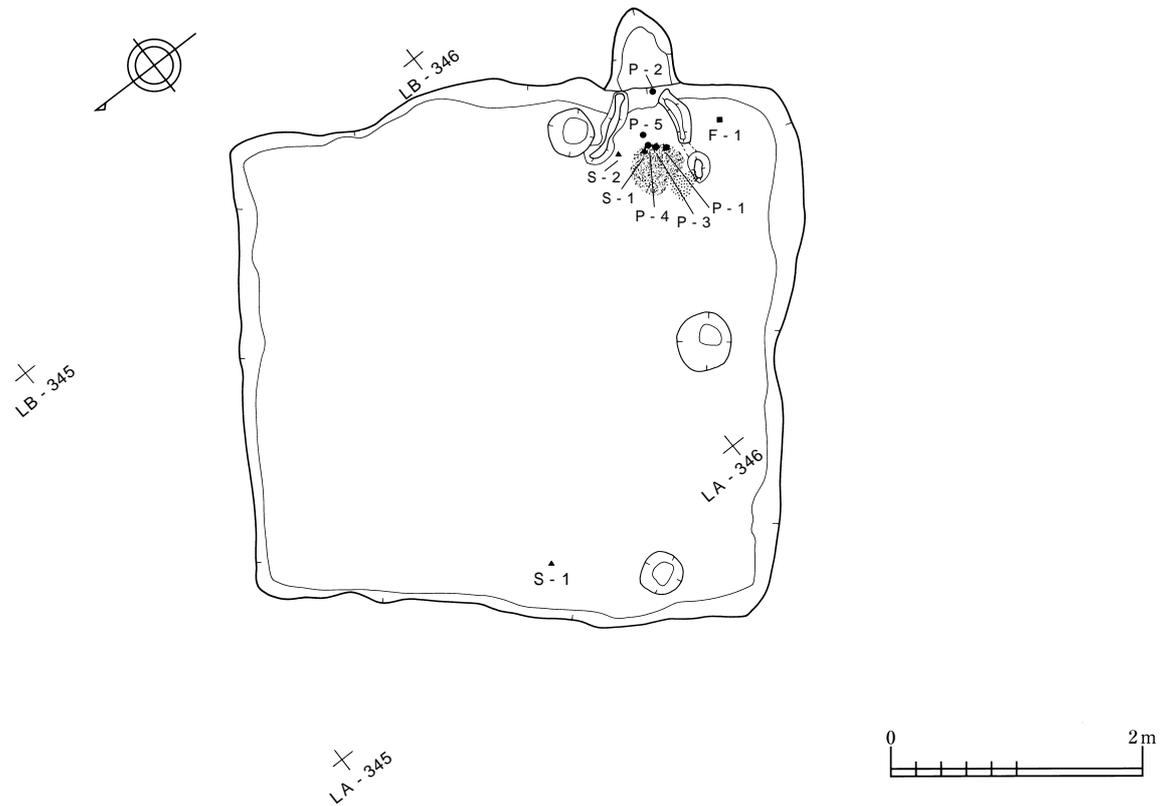
[重複] S I - 153と重複している。新旧関係については、本遺構がS I - 153の堆積土を切っており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 不整形を呈し、210×(164)×22cmを測る。床面積は(3.28)㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁2cm、東壁4cm、南壁13cm、西壁6cmを測る。断面形はdで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面は、S I - 153の重複部分についてはS I - 153の堆積土を壁面としており脆弱で、それ以外の部分についてもやや脆弱である。

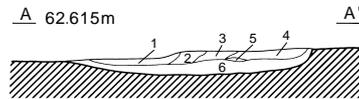
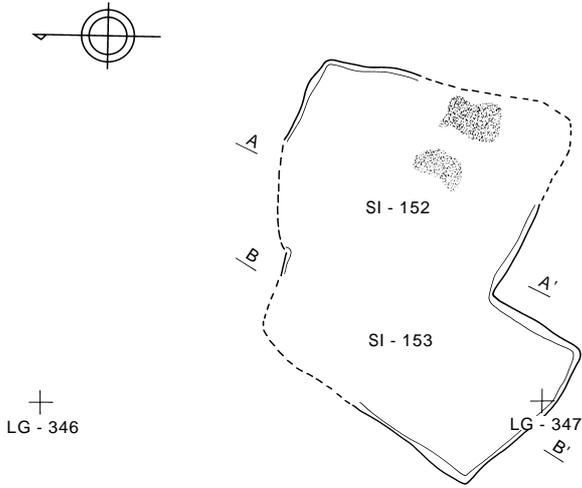


第299図 SI - 151



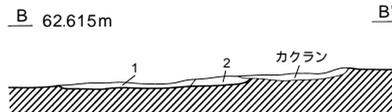
層	土質	特徴
第1層	10YR3/3 暗褐色土	灰微量
第2層	7.5YR4/4 褐色土	灰少量、焼土粒・炭化物微量
第3層	7.5YR4/6 褐色土	焼土粒微量
第4層	5 YR4/6 赤褐色土	炭化物極微量
第5層	7.5YR3/4 暗褐色土	焼土粒極微量、口-ム粒微量
第6層	5 YR4/8 赤褐色土	炭化物・焼土粒少量
第7層	7.5YR4/6 褐色土	焼土粒中量
第8層	10YR4/4 褐色土	焼土粒・灰極微量
第9層	10YR4/6 褐色土	
第10層	10YR3/4 暗褐色土	口-ム粒極微量
第11層	10YR3/3 暗褐色土	焼土粒多量
第12層	7.5YR4/6 褐色土	焼土粒微量
第13層	10YR2/3 黒褐色土	焼土粒少量
第14層	10YR5/4 にぶい黄褐色土	灰多量、焼土粒少量
第15層	10YR3/2 黒褐色土	口-ム粒微量、炭化物極微量
第16層	10YR3/4 暗褐色土	口-ム粒少量
第17層	2.5YR4/6 赤褐色土	
第18層	5 YR3/6 暗赤褐色土	
第19層	7.5YR3/4 暗褐色土	口-ム粒微量

第300図 SI - 151



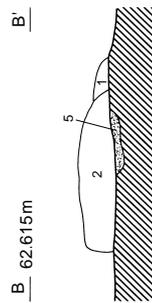
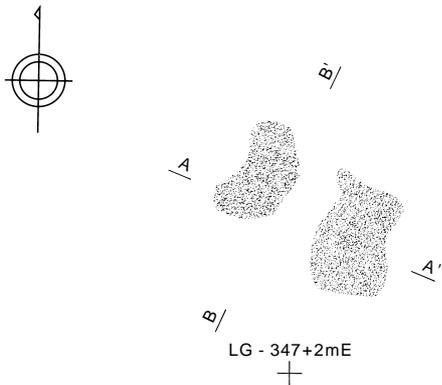
SI - 152

第1層	10YR3/4	暗褐色土	ロームブロック中量、ローム粒少量、焼土粒微量
第2層	10YR4/4	褐色土	ロームブロック中量
第3層	10YR2/3	黒褐色土	ロームブロック中量
第4層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒少量、炭化物微量
第5層	10YR5/6	黄褐色土	
第6層	10YR4/4	褐色土	ロームブロック多量



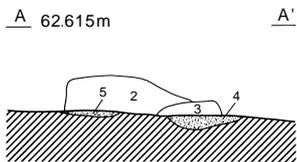
SI - 153

第1層	10YR4/4	褐色土	ロームブロック少量
第2層	10YR2/3	黒褐色土	



SI - 152 カマド

第1層	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒微量、ローム粒少量、ロームブロック微量
第2層	10YR2/3	黒褐色土	焼土粒少量、火山灰 (To-a) 粒極微量
第3層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒少量
第4層	5 YR3/6	暗赤褐色土	
第5層	5 YR4/8	赤褐色土	



第301図 SI - 152・153

- [床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや傾斜がある。床面はやや脆弱である。
- [壁溝] なし。
- [ピット] なし。
- [カマド] 住居東壁側から燃焼部火床面のみを検出した。東壁3(60:40)の位置から検出している。上部構造が残存しておらず、構造等についての詳細は不明である。
- [その他の付属施設] なし。
- [堆積土] 6層に分層した。住居床面上に堆積している第6層は、地山土主体のロームブロックを多量に含む土層で、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

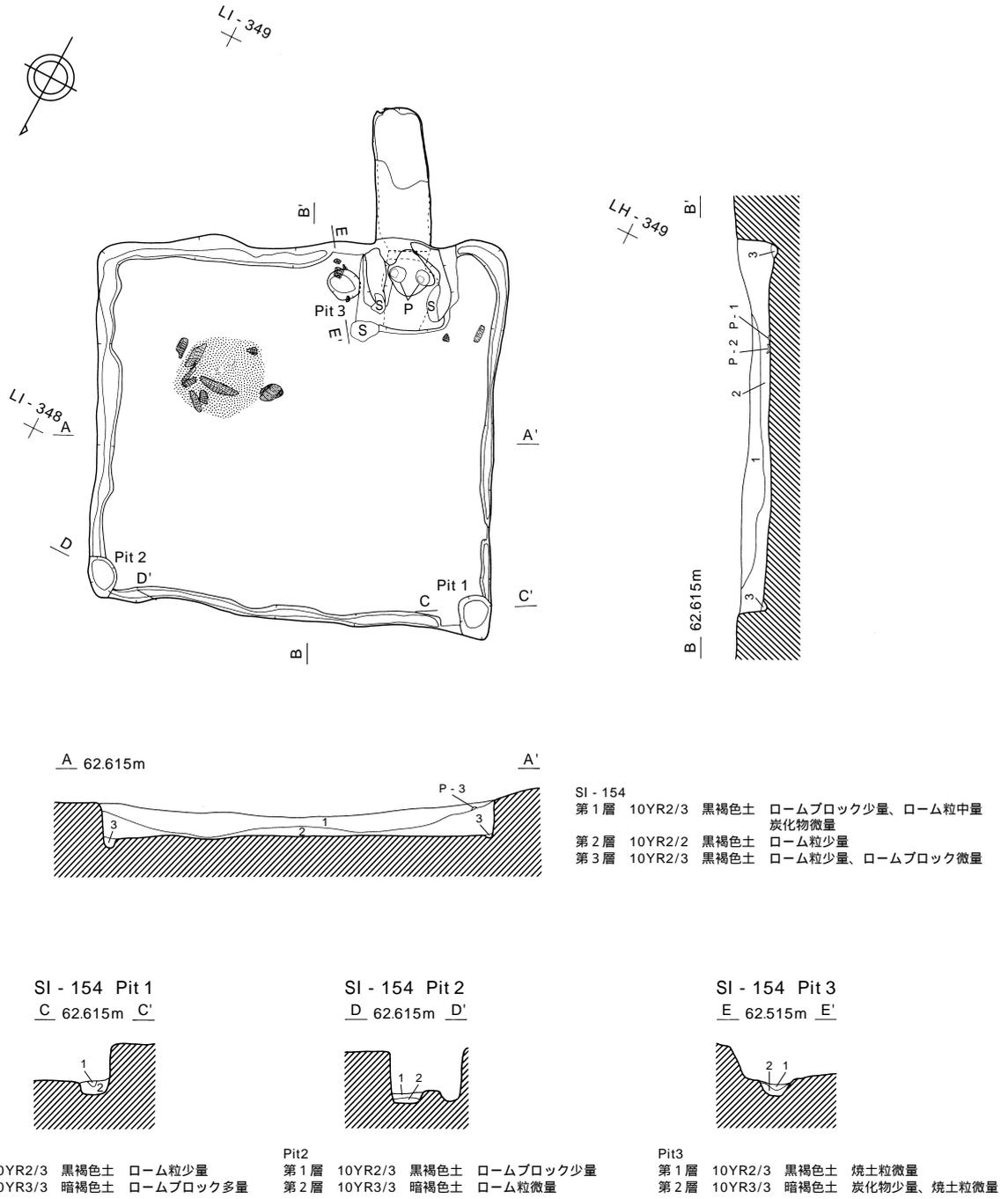
S I - 153 (第301図)

- [位置] グリッドL F・L G - 346・347で検出した。
- [重複] S I - 152と重複している。本遺構の堆積土がS I - 152の堆積土に切られているため、本遺構の方が古い。
- [平面形・規模] 不整形を呈し、 $234 \times (126) \times 7$ cmを測る。床面積は (2.92) m²を測る。
- [壁] 削平ならびにS I - 152の重複により、ほとんど残存していないが、壁高は、北壁4 cm、東壁12 cm、南壁3 cm、西壁5 cmを測る。断面形は(d)で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面はやや脆弱である。
- [床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面はやや脆弱である。
- [壁溝] なし。
- [ピット] なし。
- [カマド] 残存部分からの検出はなし。
- [その他の付属施設] なし。
- [堆積土] 攪乱により土層堆積が乱されているが、残存部分について2層に分層した。上層に堆積する第1層は、ロームブロック等を含み人為堆積状況を呈する。

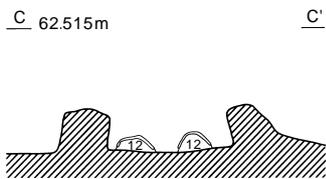
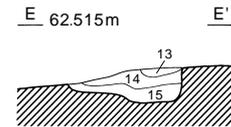
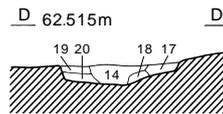
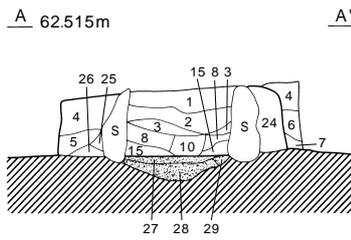
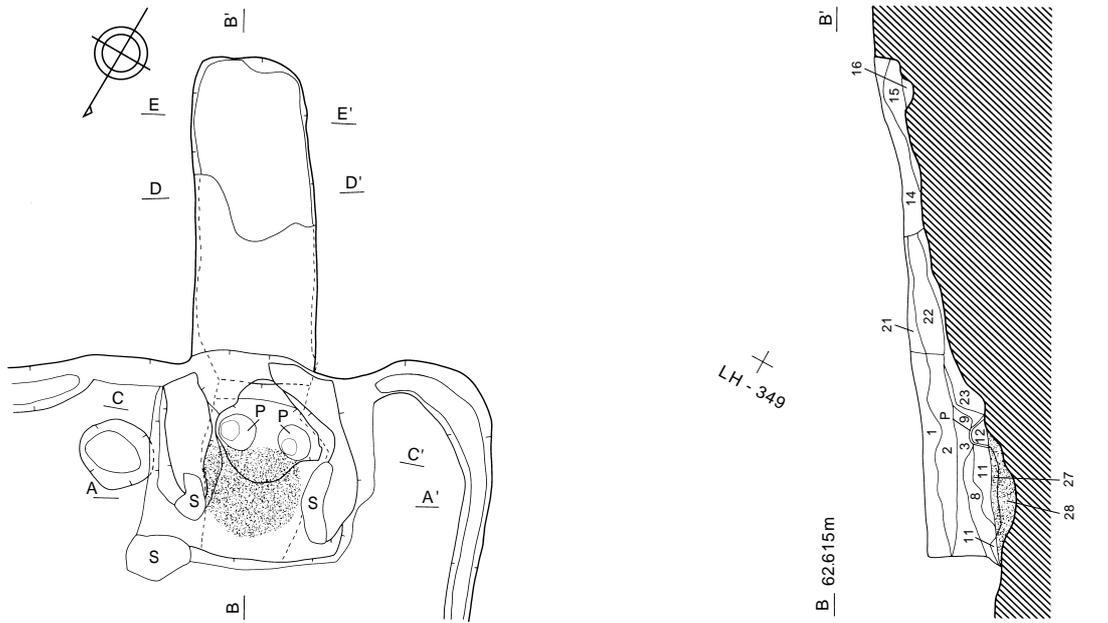
(木村)

S I - 154 (第302、303図)

- [位置] グリッドL G・L H - 347・348で検出した。
- [重複] なし。
- [平面形・規模] 隅丸方形を呈し、 $358 \times 336 \times 46$ cmを測る。床面積は 12.39 m²を測る。
- [壁] 壁高は、北壁21 cm、東壁32 cm、南壁31 cm、西壁33 cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。
- [床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。また、カマド周辺部ならびに住居中央部より南東寄りの部分から赤化面・炭化物・炭化粒を検出した。本遺構は、焼失住居の要素が一部ではあるが考えられる。
- [壁溝] カマド設置部分を除き、ほぼ全周する形で検出した。深さは平均5 cmを測る。
- [ピット] 住居内から3基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = $41 \times 30 \times 11$ cm、Pit 2 = $39 \times 25 \times$

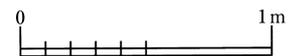


第302図 SI - 154



SI - 154 カマド

第1層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒・ロームブロック少量、炭化物極微量
第2層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒微量
第3層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒少量、炭化物微量
第4層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒少量
第5層	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒微量
第6層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒多量
第7層	10YR3/4	暗褐色土	
第8層	7.5YR4/4	褐色土	焼土粒微量
第9層	7.5YR3/4	暗褐色土	焼土粒中量、パミス少量
第10層	5 YR3/6	暗赤褐色土	炭化物・焼土粒・灰微量
第11層	5 YR4/4	にぶい赤褐色土	焼土粒少量
第12層	5 YR3/6	暗赤褐色土	
第13層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒・焼土粒少量
第14層	7.5YR3/3	暗褐色土	焼土粒中量、ローム粒少量
第15層	7.5YR2/3	極暗褐色土	炭化物極微量
第16層	7.5YR3/4	暗褐色土	
第17層	7.5YR4/4	褐色土	焼土粒少量
第18層	7.5YR4/6	褐色土	炭化物微量
第19層	7.5YR4/4	褐色土	焼土粒中量
第20層	7.5YR3/3	暗褐色土	ローム粒微量
第21層	7.5YR4/4	褐色土	焼土粒中量
第22層	7.5YR2/2	黒褐色土	ローム粒少量
第23層	7.5YR3/4	暗褐色土	焼土粒少量
第24層	10YR4/4	褐色土	焼土粒少量、パミス微量
第25層	7.5YR4/4	褐色土	
第26層	7.5YR4/6	褐色土	ローム粒少量
第27層	5 YR4/8	赤褐色土	
第28層	5 YR4/4	にぶい赤褐色土	
第29層	5 YR4/6	赤褐色土	



第303図 SI - 154

11cm、Pit 3 = 28 × 25 × 13cmを測る。Pit 1、2 が柱穴として機能したことが考えられる。また、Pit 3 は底面から焼土粒等を検出しており、カマド脇ピットとしての機能が考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁4(75:25)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅89cm、煙道長124cmを測る。主軸はN - 148° - Eである。燃焼部袖の構築は、自然礫ならびに転用羽口を芯材とし、粘土を用いて構築している。燃焼部天井は、第8、11層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。また、支脚として土師器椀ならびに甕底部を並列して倒位に設置している。煙道部天井は第21層が相当し、粘土を用いて構築している。煙道は、住居壁際から壁面にそって立ち上がり、途中で角度を14°に変え、起伏を持ちながら立ち上がる。煙出奥壁はほぼ垂直に近い形で立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 3層に分層した。住居廃絶後の堆積のみで、概ね自然堆積状況を呈する。

(木 村)

S I - 155 (第304図)

[位置] グリッドLC - 352・353で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 不整形を呈し、322 × 210 × 54cmを測る。床面積は6.784m²である。

[壁] 壁高は、北壁13cm、東壁27cm、南壁18cm、西壁12cmを測る。断面形はcで、壁上部の一部で緩やかな傾斜が見られる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。

[壁溝] 西壁、南壁の一部を除き検出した。深さは平均8cmを測る。

[ピット] 住居内から5基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 23 × 21 × 32cm、Pit 2 = 14 × 13 × 9cm、Pit 3 = 48 × 48 × 16cm、Pit 4 = 16 × 12 × 9cm、Pit 5 = 26 × 15 × 32cmを測る。Pit 2、4、5 が柱穴としての機能が考えられる。Pit 1については、住居の土層堆積を切った形で存在しているため、本遺構に帰属しない可能性が考えられる。

[カマド] 住居北壁側から燃焼部火床面を1ヶ所検出した。北壁2(29:71)の位置から検出している。カマドの構造等についての詳細は不明である。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 8層に分層した。第1層については、攪乱等の要因による土層堆積状況が考えられる。それ以外の土層については概ね自然堆積状況を呈する。

(木 村)

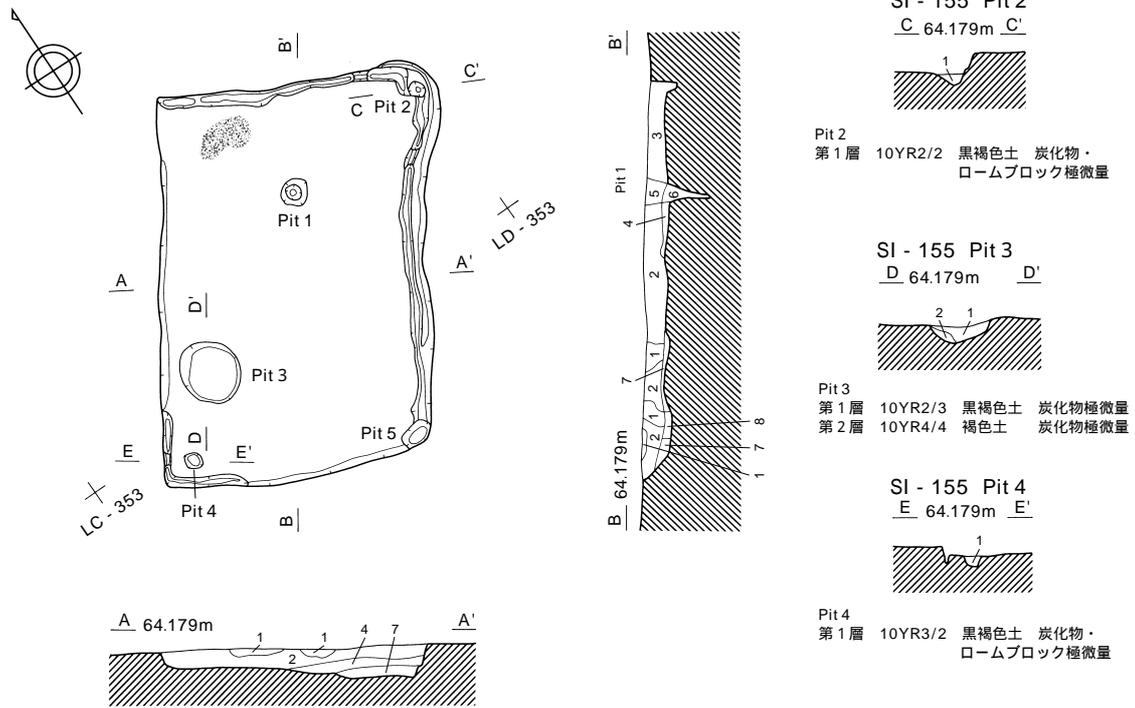
S I - 156 (第305~307図)

[位置] グリッドLD - 352、LE - 351~353、LF - 352で検出した。

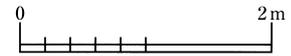
[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、502 × 498 × 68cmを測る。床面積は25.017m²を測る。

[壁] 壁高は、北西壁37cm、北東壁28cm、南東壁33cm、南西壁56cmを測る。断面形はaで、ほぼ垂直に立ち上がる。壁面は堅緻である。



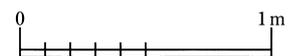
- SI - 155
- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 炭化物・焼土粒・ロームブロック極微量
 - 第2層 10YR3/2 黒褐色土 炭化物・焼土粒・ロームブロック極微量
 - 第3層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物・焼土粒極微量
 - 第4層 10YR4/4 褐色土 炭化物極微量
 - 第5層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物極微量
 - 第6層 10YR4/4 褐色土 ロームブロック極微量
 - 第7層 10YR4/4 褐色土 炭化物極微量
 - 第8層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物・ロームブロック極微量



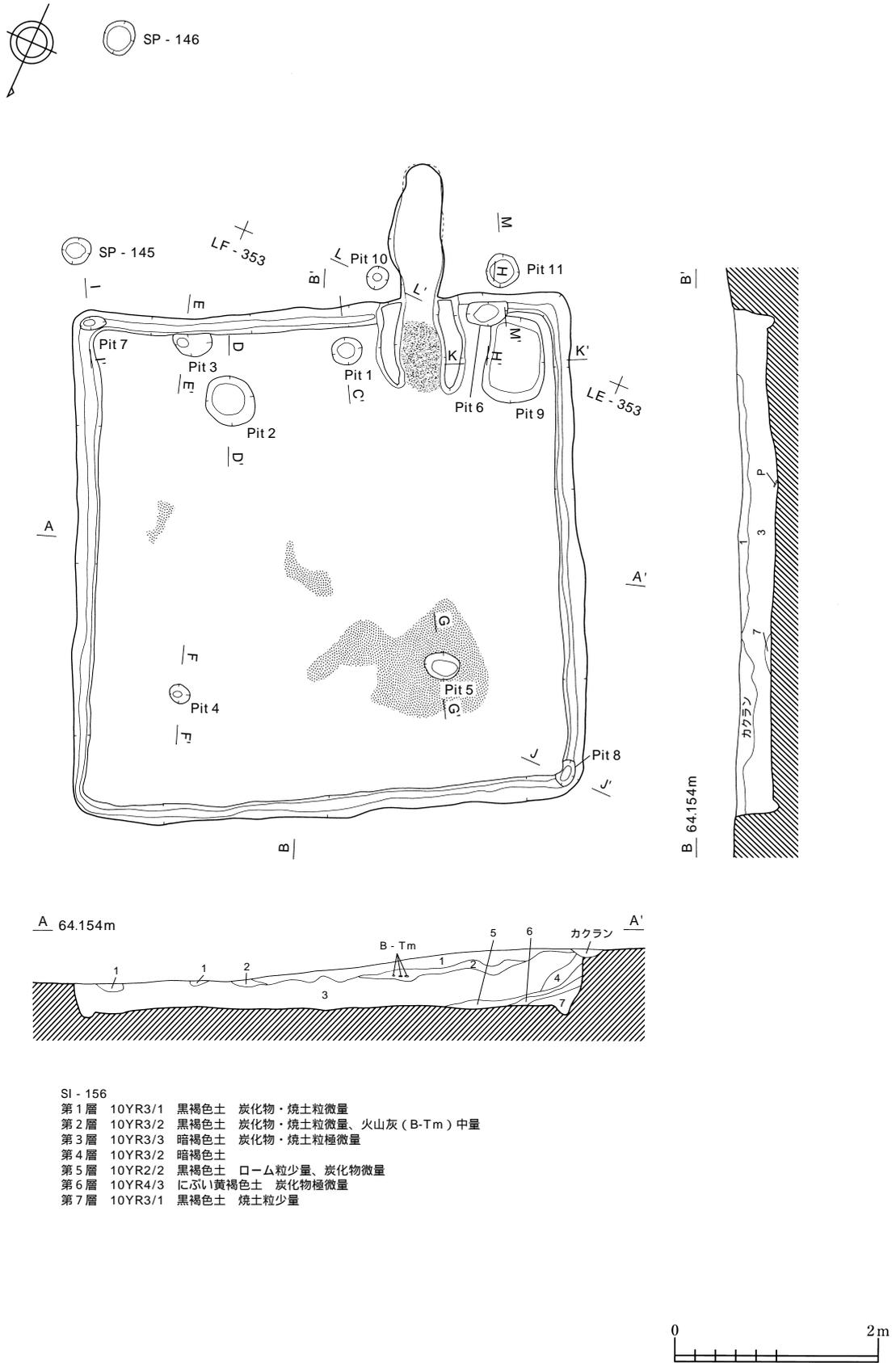
LD - 352
+ 2 mS



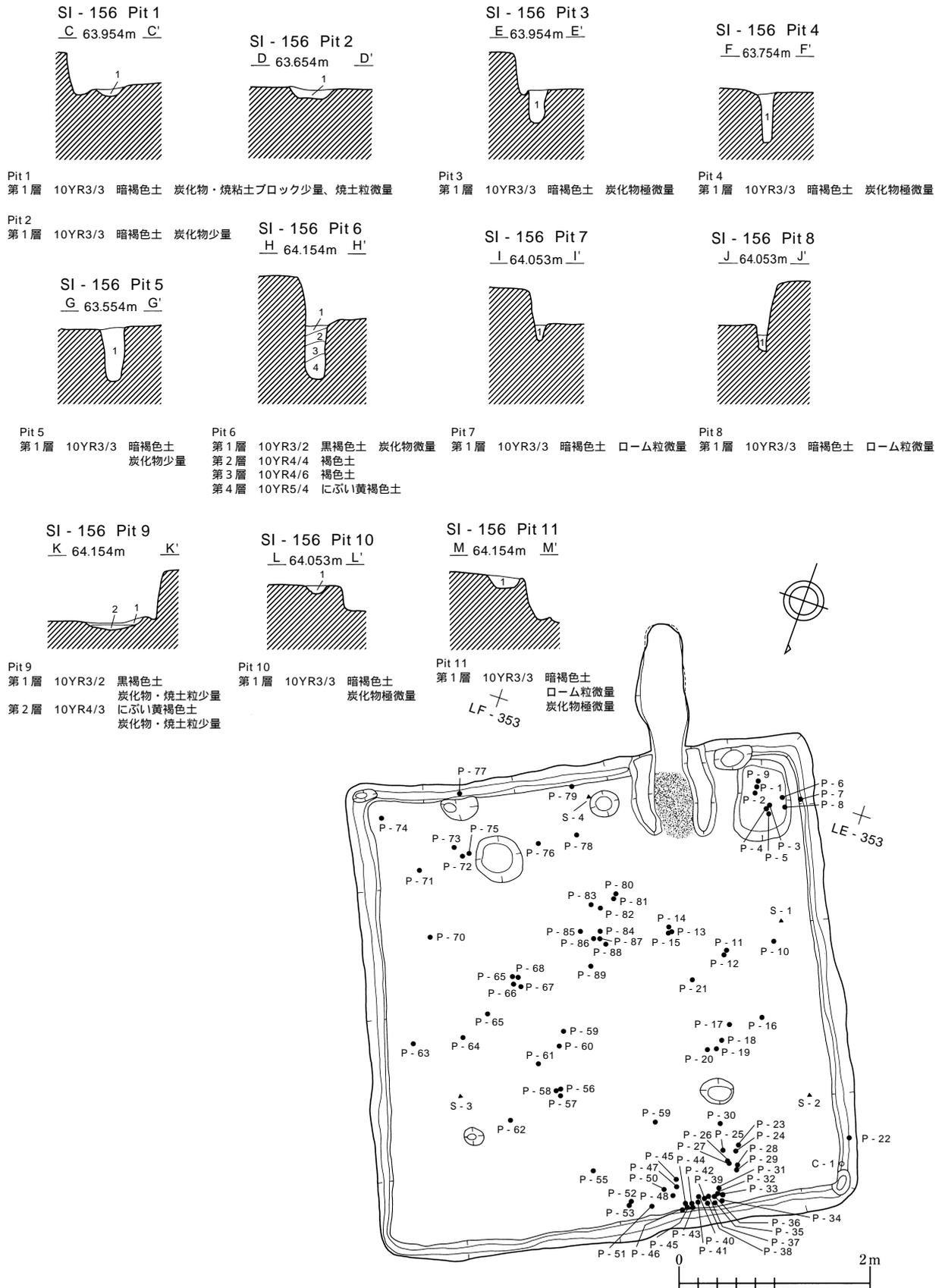
- SI - 155 カマド
- 第1層 7.5YR3/4 暗褐色土 炭化物極微量、焼土粒多量
 - 第2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土粒極微量



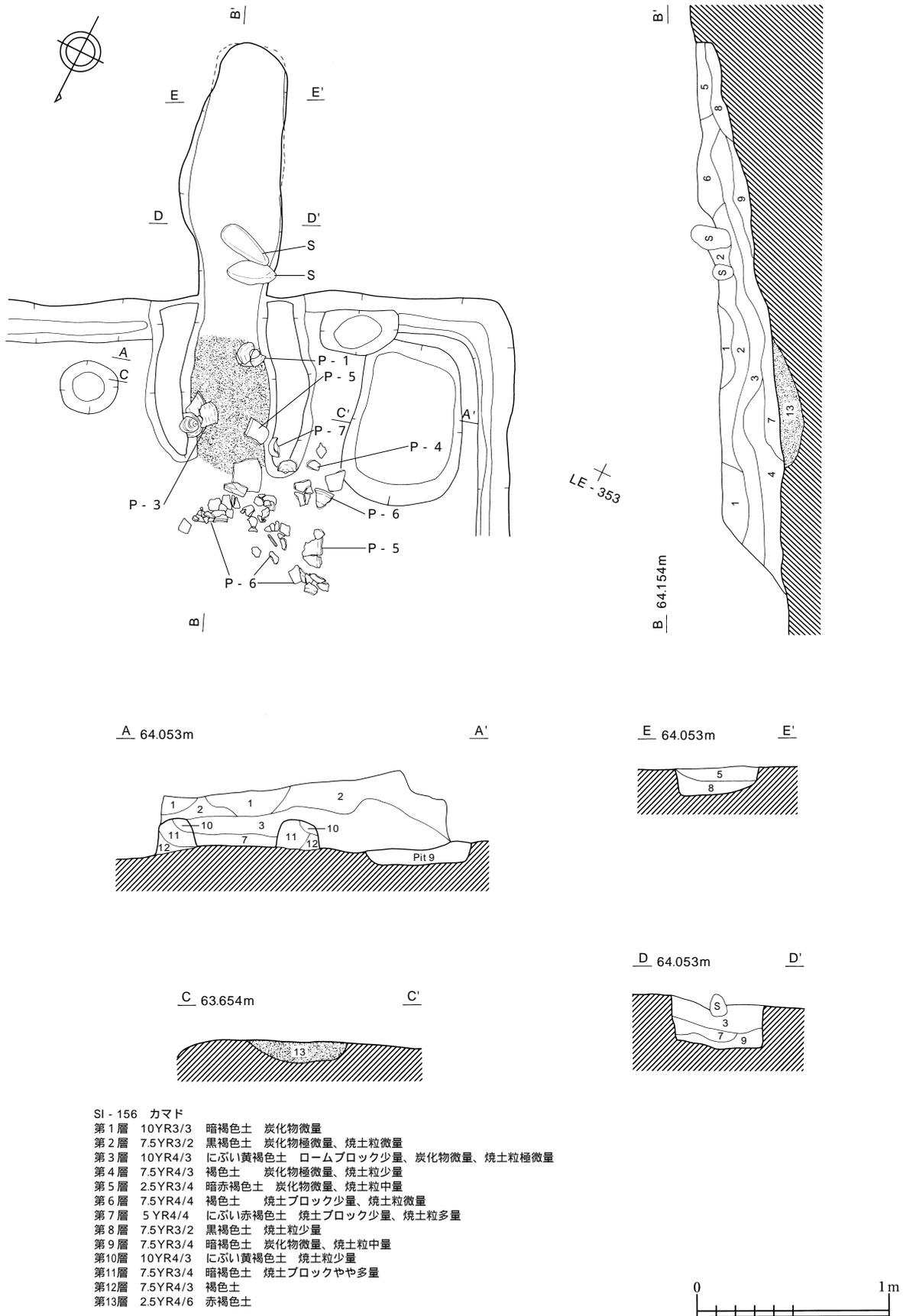
第304図 SI - 155



第305図 SI - 156



第306図 SI - 156



第307図 SI - 156

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としている。本遺構は焼失住居ではないが、Pit 5 周辺を中心として、床面に部分的に炭化物が広がっている。

[壁溝] ほぼ全周して検出した。深さは平均 7 cm を測る。

[ピット] 竪穴内から 9 基 (Pit 1 ~ 9)、竪穴外より 2 基 (Pit 10、11) 検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 31 × 28 × 10 cm、Pit 2 = 54 × 47 × 13 cm、Pit 3 = 40 × 22 × 35 cm、Pit 4 = 21 × 17 × 54 cm、Pit 5 = 35 × 27 × 57 cm、Pit 6 = 40 × 24 × 51 cm、Pit 7 = 23 × 13 × 17 cm、Pit 8 = 28 × 13 × 28 cm、Pit 9 = 23 × 21 × 13 cm、Pit 10 = 23 × 21 × 9 cm、Pit 11 = 33 × 32 × 15 cm を測る。支柱穴として認定できるものは Pit 3 ~ 6 の 4 基で、壁柱穴として認定できるものは Pit 7、8 の 2 基である。4 基の支柱穴をそれぞれ結んだラインが四角形を呈するように配置され、2 基の壁柱穴が東隅、西隅に配置されている。

[カマド] 住居南東壁 3 (70 : 30) の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅 87 cm、煙道長 228 cm を測る。主軸は N - 155° - E である。袖は粘土によって構築されている。芯材は出土していない。火床面の範囲は 72 × 54 cm を測り、火床面の上部には、天井部の崩落土と考えられる 7 層に混じって土師器鍋、甕の破片が出土した。また、火床面直上においては、土師器の椀が倒位に 2 個重なった状態のものと、甕の下半部が倒位になったものが出土しており、支脚として機能していたと考えられる。煙道部は、火床面から 5° の角度で緩やかに立ち上がり、煙出部に至る。煙道部に堆積している 2 層からは、安山岩質の礫が 2 点出土しており、煙道部の天井部に据えられていた礫であると考えられる。本遺構のカマドは、燃焼部の遺物出土状態、天井部と考えられる土層の崩落状況から、意図的な破壊は行われていないと考えられ、住居に投げ込まれた土砂等の土圧で押し潰されたと考えられる。カマド煙道部両側において確認できる Pit 10、11 は、庇状の施設に関連する柱穴であった可能性がある。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 7 層に分層した。上層は黒褐色を中心とした土層で、中層から下層はローム質の暗褐色を呈する 3 層である。中層から下層まで単一層が堆積しており、人為的に埋め戻されたと考えられる。埋め戻された土層と考えられる 3 層の上層に堆積している 2 層においては、B - T m 火山灰を混入する。

(設楽)

S I - 157 (第 308、309 図)

[位置] グリッド L G - 352、L H - 351・352 で検出した。

[重複] なし。

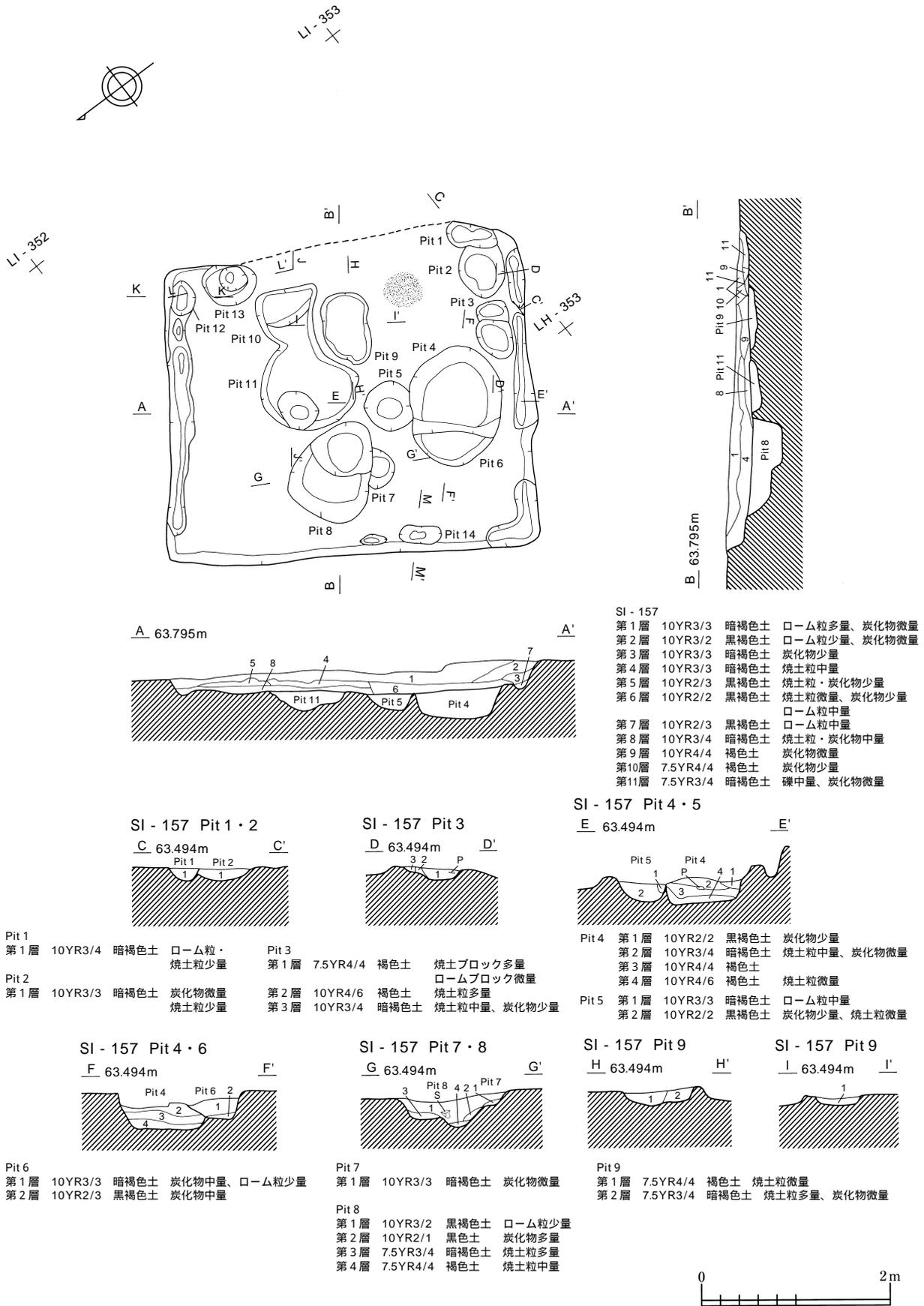
[平面形・規模] 台形を呈し、388 × (338) × 34 cm を測る。床面積は (12.928) m² を測る。

[壁] 壁高は、北壁 18 cm、東壁 6 cm、南壁 28 cm、西壁 18 cm を測る。断面形は d で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面は堅緻である。

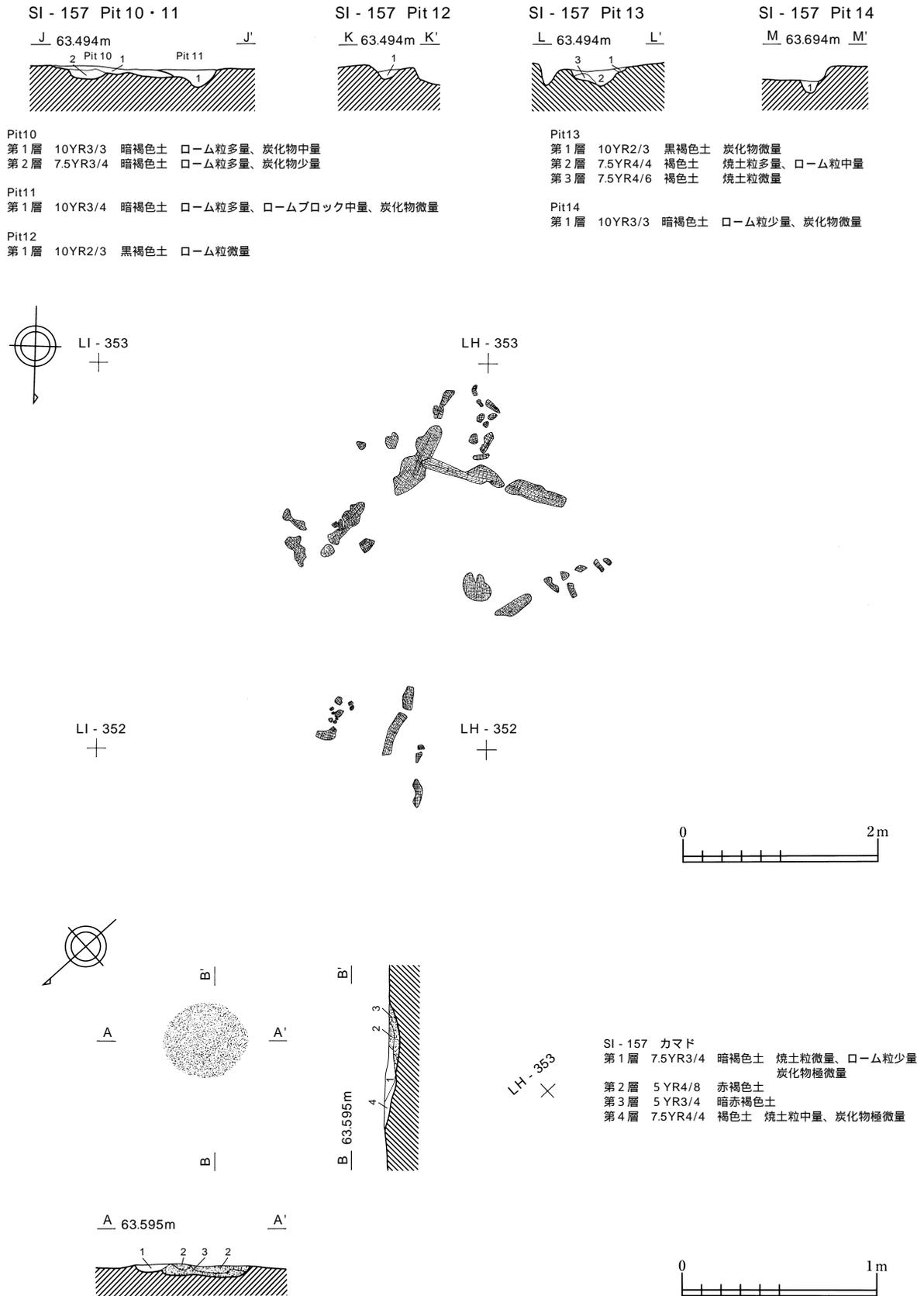
[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、起伏がある。床面は堅緻である。また、本遺構床面直上から炭化材・炭化物を検出しており、本遺構は焼失住居の可能性が考えられる。

[壁溝] 南北壁側から検出した。深さは平均 4 cm を測る。

[ピット] 住居内から 14 基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 55 × 27 × 13 cm、Pit 2 = (54) × 48 × 12 cm、Pit 3 = 62 × 37 × 11 cm、Pit 4 = 98 × (90) × 30 cm、Pit 5 = 54 × (50) × 23 cm、Pit



第308図 SI - 157



第309図 SI - 157

6 = 81 × (55) × 32cm、Pit 7 = 44 × (25) × 12cm、Pit 8 = 108 × 88 × 19cm、Pit 9 = 78 × 51 × 14cm、Pit10 = 120 × 60 × 12cm、Pit11 = 102 × 95 × 17cm、Pit12 = 37 × 25 × 10cm、Pit13 = 58 × 45 × 17cm、Pit14 = 45 × 19 × 13cmを測る。住居中央部にかけて密集しており、明確な主柱配置については不明である。

[カマド] 住居東壁側から燃焼部火床面のみを1ヶ所検出した。削平のため構造等については不明である。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 11層に分層した。床直に堆積する第8層中には炭化物等が含まれ住居焼失後の形成層である。上位に堆積する第1層は、ロームブロックが多量に含まれ、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 158 (第310、311図)

[位置] グリッドLB・LC - 357・358で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、364 × 360 × 50cmを測る。床面積は13.101m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁21cm、東壁9cm、南壁12cm、西壁18cmを測る。断面形はcで、壁上部で一部緩やかな立ち上がりが見られる。壁面は堅緻である。

[床] ほぼ全面に掘り方を有し、大谷火山灰層主体の地山土と黒褐色土の混合土が充填され床面としている。床面にはやや起伏が見られ、硬度については、住居中央部より南側部分が硬質で、北側部分がやや脆弱である。また、住居中央部から赤化面を31 × 29cmの範囲で検出した。

[壁溝] 住居北壁ならびに西壁側から検出した。深さは平均12cmを測る。

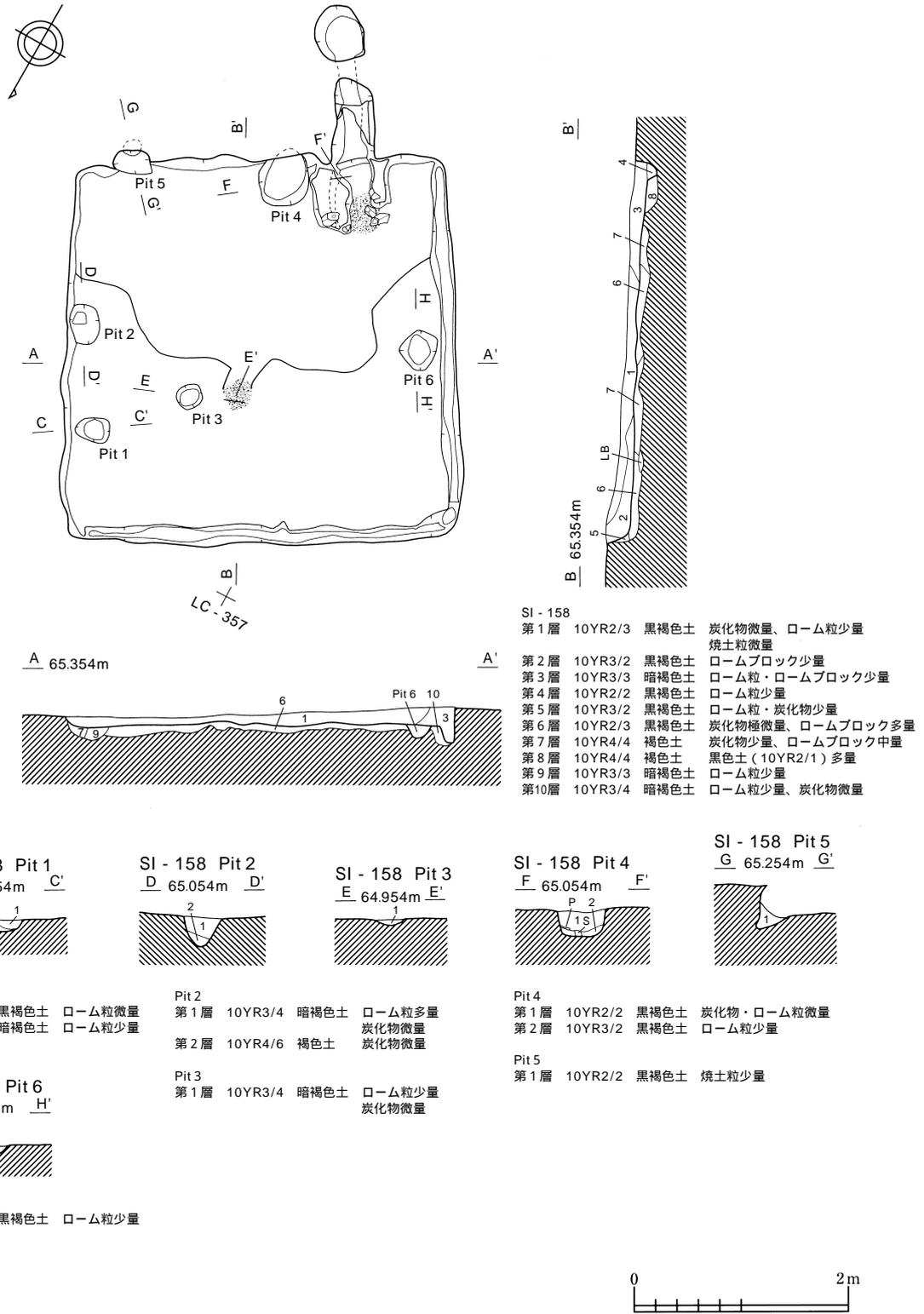
[ピット] 住居内から6基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 32 × 24 × 11cm、Pit 2 = 38 × 27 × 27cm、Pit 3 = 25 × 23 × 5cm、Pit 4 = 47 × 45 × 22cm、Pit 5 = 35 × 22 × 14cm、Pit 6 = 38 × 35 × 9cmを測る。明確な主柱配置については、対応関係が追えず不明である。Pit 5については住居外壁に入り込む形で掘り込まれている。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁4(77:23)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅72cm、煙道長148cmを測る。主軸はN - 140° - Eである。燃焼部袖の構築は、自然礫、転用羽口を芯材とし、粘土を用いて構築している。燃焼部天井は第6層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道部天井は、煙出部手前まで掘り込まれ、暗褐色系の土を貼り付けて構築している。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で角度を15°に変え傾斜し、全煙道長の約1/2の地点でほぼ平坦になり、煙出へ向かう。煙出奥壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。

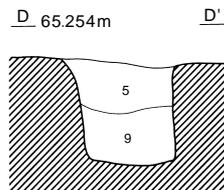
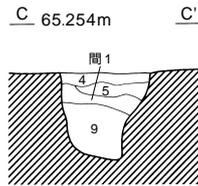
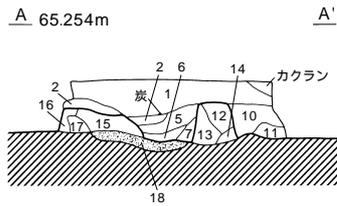
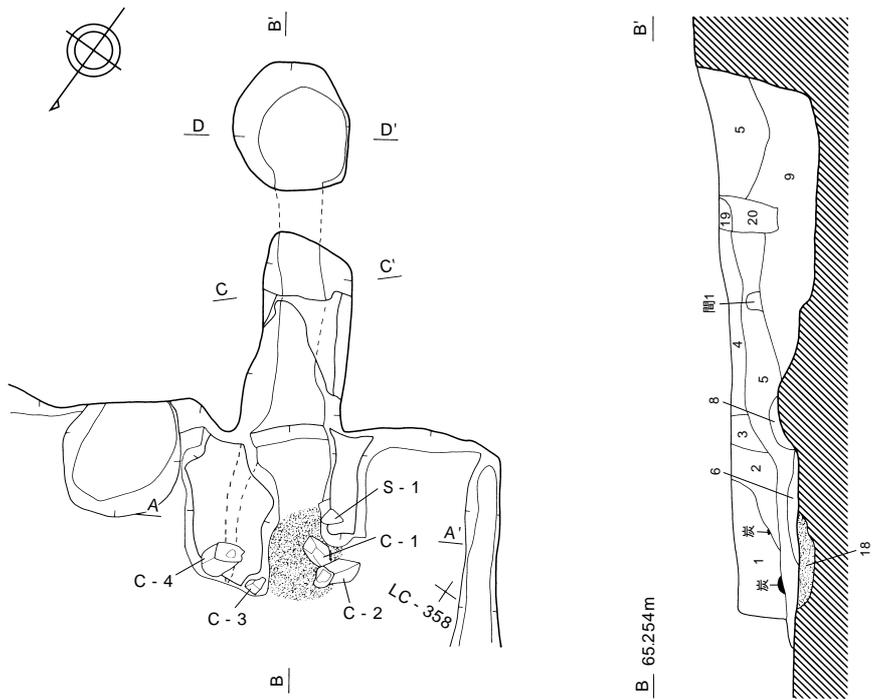
[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 10層に分層した。住居廃絶後の堆積土は、第1～4層でロームブロック等を含み、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

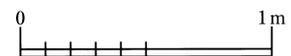


第310図 SI - 158



SI - 158 カマド

第1層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒少量、ロームブロック・焼土粒微量 炭化物少量
第2層	10YR2/2	黒褐色土	炭化物少量、ローム粒微量
第3層	10YR3/4	暗褐色土	炭化物少量、ロームブロック多量
第4層	10YR3/3	暗褐色土	炭化物微量
第5層	10YR3/2	黒褐色土	炭化物極微量、灰・焼土粒少量
第6層	7.5YR4/6	褐色土	焼土粒中量
第7層	10YR2/2	黒褐色土	焼土粒中量
第8層	10YR5/6	黄褐色土	
第9層	10YR2/2	黒褐色土	
第10層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	灰多量、焼土粒中量
第11層	10YR3/4	暗褐色土	焼土粒少量
第12層	5 YR4/4	にぶい赤褐色土	灰少量
第13層	5 YR4/4	にぶい赤褐色土	
第14層	10YR4/4	褐色土	炭化物極微量
第15層	5 YR4/6	赤褐色土	焼土粒多量、礫中量
第16層	10YR3/4	暗褐色土	焼土粒微量
第17層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	
第18層	2.5YR4/6	赤褐色土	
第19層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	
第20層	10YR4/6	褐色土	
間1	10YR4/6	褐色土	



第311図 SI - 158

S I - 159 (第312、313図)

[位置] グリッドL H・L I - 356で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、 $303 \times 301 \times 39\text{cm}$ を測る。床面積は 9.014m^2 を測る。

[壁] 壁高は、北壁28cm、東壁20cm、南壁32cm、西壁31cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ちあがる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。

[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から2基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = $31 \times 30 \times 9\text{cm}$ 、Pit 2 = $21 \times 16 \times 8\text{cm}$ を測る。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁4(76:24)の位置から検出している。構造は、地下式で、袖部幅90cm、煙道長120cmを測る。主軸はN - 144° - Eである。燃烧部の構築は粘土によるもので、天井は第5層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。支脚として転用羽口を利用している。煙道部は、大谷火山灰層を掘り込み構築しており、煙道は住居壁際から 25° の角度で傾斜しながら煙出へ向かう。煙出開口部付近から廃棄された土師器甕が出土している。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 5層に分層した。第1～3層は、ロームブロック・ローム粒等を多量に含み埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 160 (第314～316図)

[位置] グリッドL I・L J - 354～356、L K - 355で検出した。

[重複] なし。

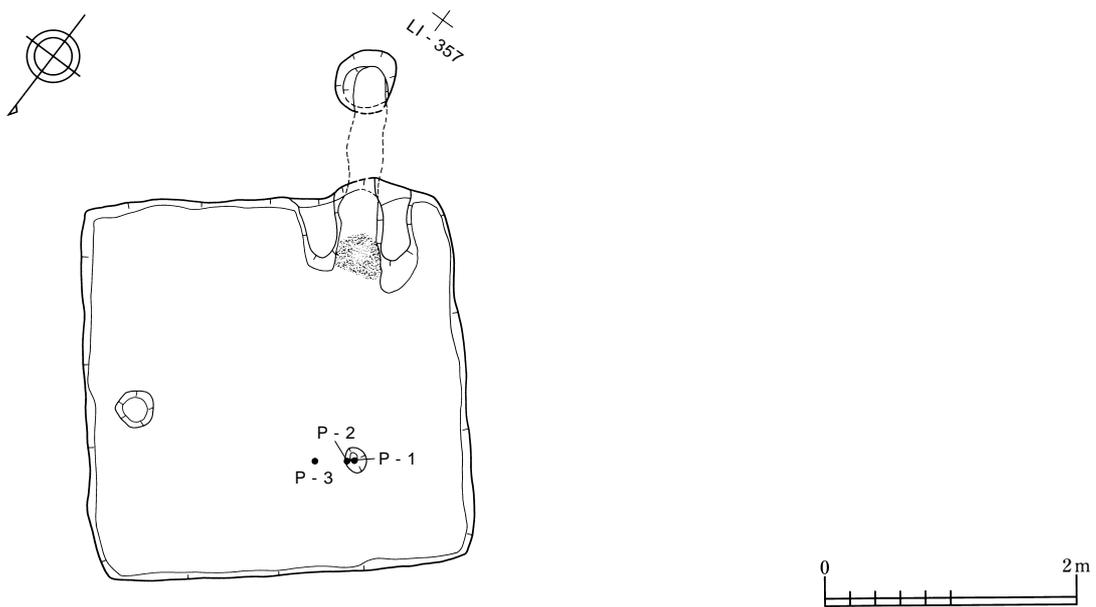
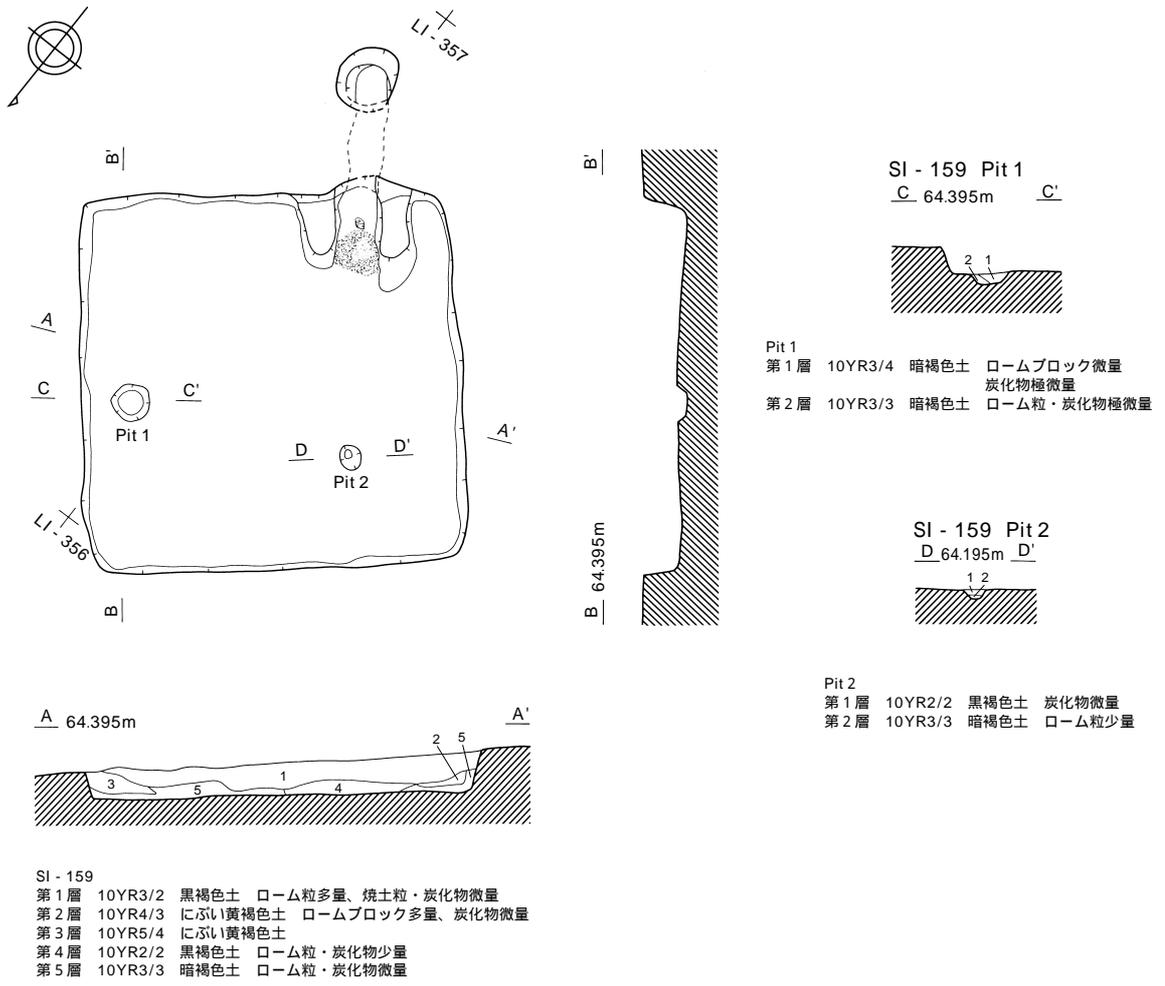
[平面形・規模] 攪乱により破壊されているため、全体形等の詳細については不明であるが、残存する壁から方形を呈したものと推定され、 $632 \times (396) \times 48\text{cm}$ を測る。床面積は $(26.036)\text{m}^2$ を測る。

[壁] 壁高は残存部分で、北壁40cm、南壁23cm、西壁39cmを測る。残存部分の断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

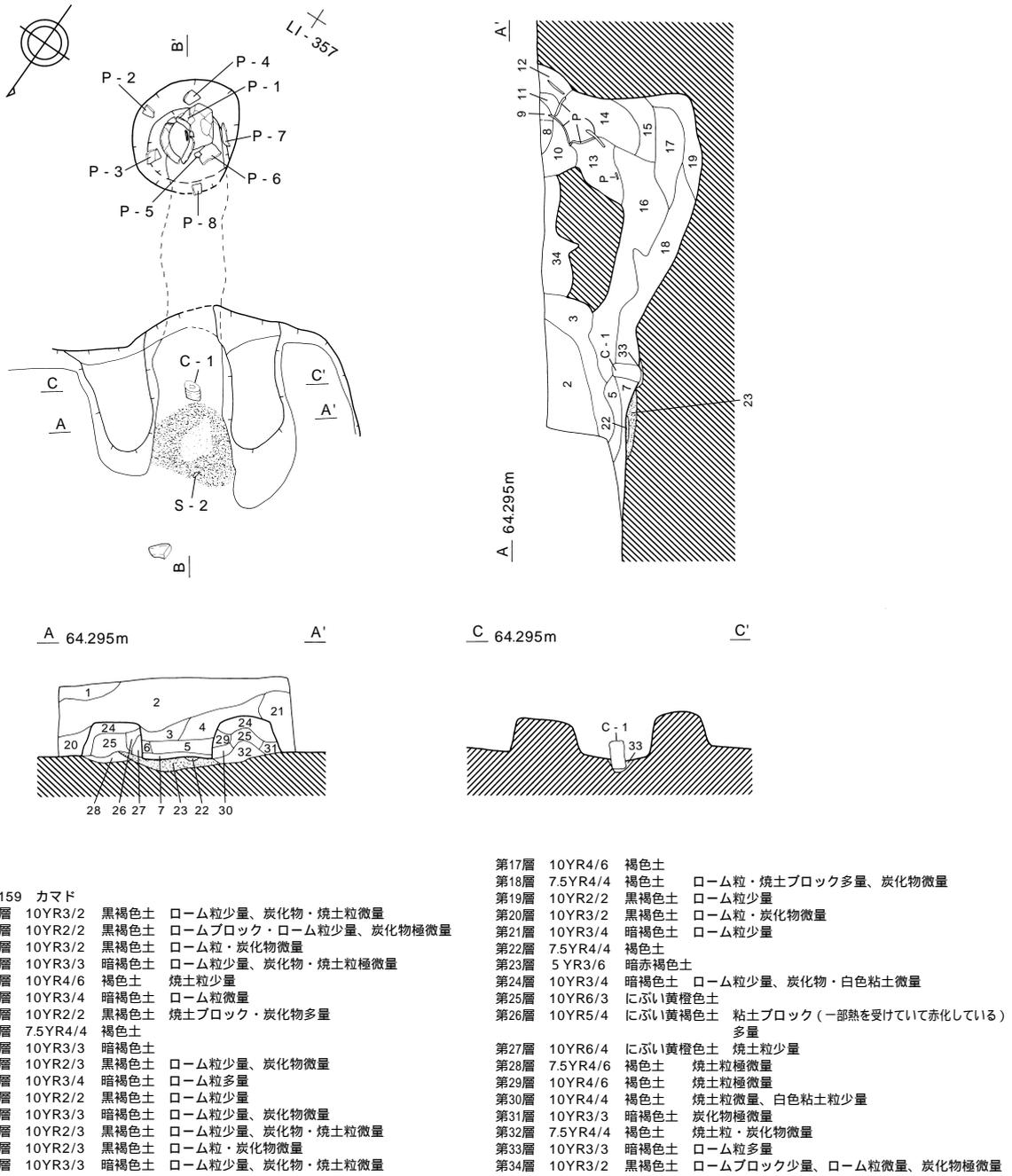
[床] 攪乱によって破壊されているため、住居東側の情報は不明であるが、残存部分については大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。

[壁溝] 残存部分での検出はなし。

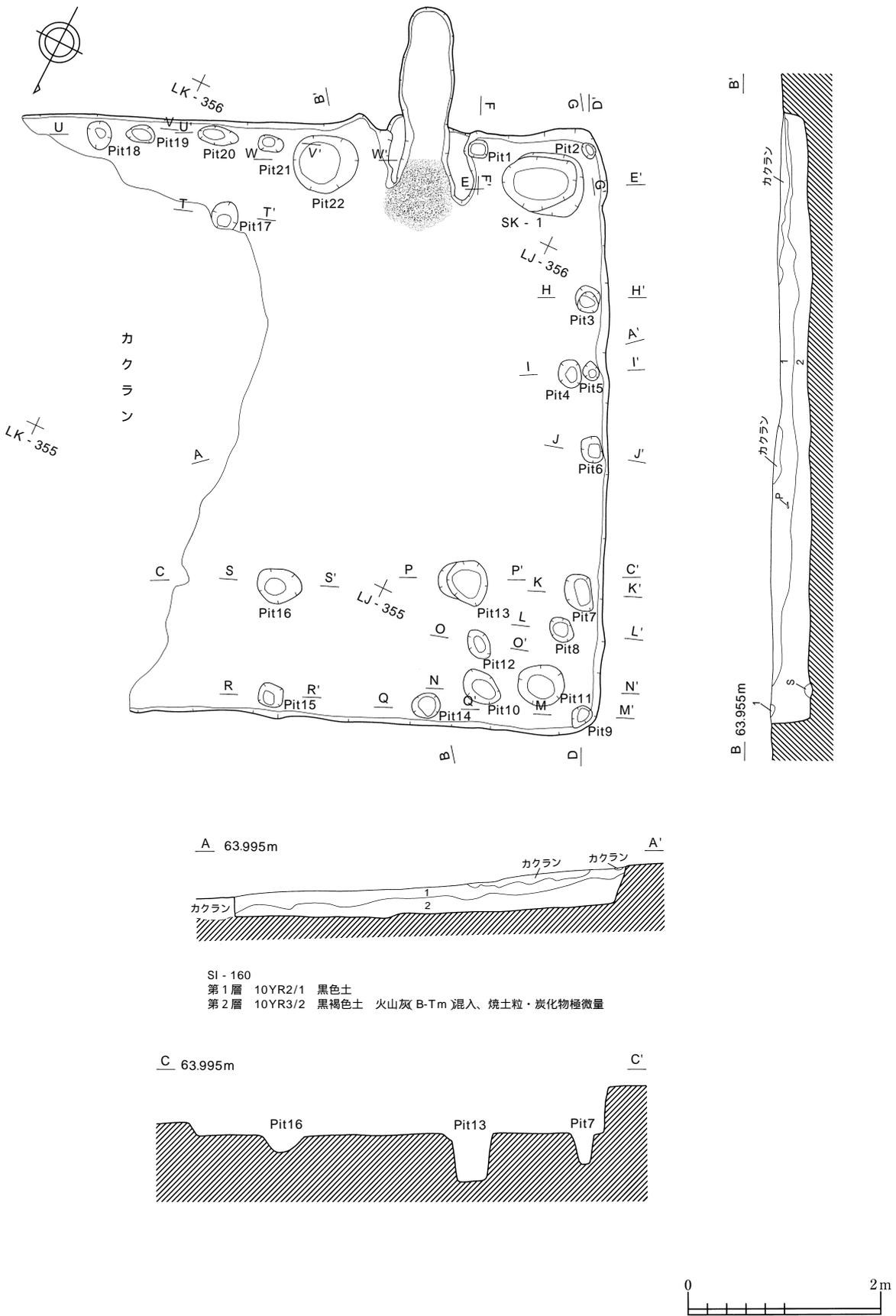
[ピット] 残存部分から22基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = $20 \times 19 \times 51\text{cm}$ 、Pit 2 = $18 \times 13 \times 30\text{cm}$ 、Pit 3 = $30 \times 26 \times 25\text{cm}$ 、Pit 4 = $30 \times 23 \times 6\text{cm}$ 、Pit 5 = $20 \times 17 \times 10\text{cm}$ 、Pit 6 = $28 \times 20 \times 23\text{cm}$ 、Pit 7 = $38 \times 27 \times 32\text{cm}$ 、Pit 8 = $28 \times 21 \times 8\text{cm}$ 、Pit 9 = $26 \times 18 \times 34\text{cm}$ 、Pit 10 = $44 \times 30 \times 13\text{cm}$ 、Pit 11 = $48 \times 44 \times 17\text{cm}$ 、Pit 12 = $33 \times 22 \times 8\text{cm}$ 、Pit 13 = $50 \times 50 \times 50\text{cm}$ 、Pit 14 = $30 \times 26 \times 31\text{cm}$ 、Pit 15 = $29 \times 25 \times 35\text{cm}$ 、Pit 16 = $46 \times 37 \times 15\text{cm}$ 、Pit 17 = $31 \times 28 \times 15\text{cm}$ 、Pit 18 = $30 \times 25 \times 21\text{cm}$ 、Pit 19 = $30 \times 18 \times 54\text{cm}$ 、Pit 20 = $43 \times 20 \times 11\text{cm}$ 、Pit 21 = $26 \times 17 \times 25\text{cm}$ 、Pit 22 = $67 \times 61 \times 10\text{cm}$ を測る。主柱穴としての機能が考えられるピットは、Pit 1、13、19である。また、壁柱穴としての機能が考えられるピットは、Pit 2、3、5、6、7、9、14、15、18、20で



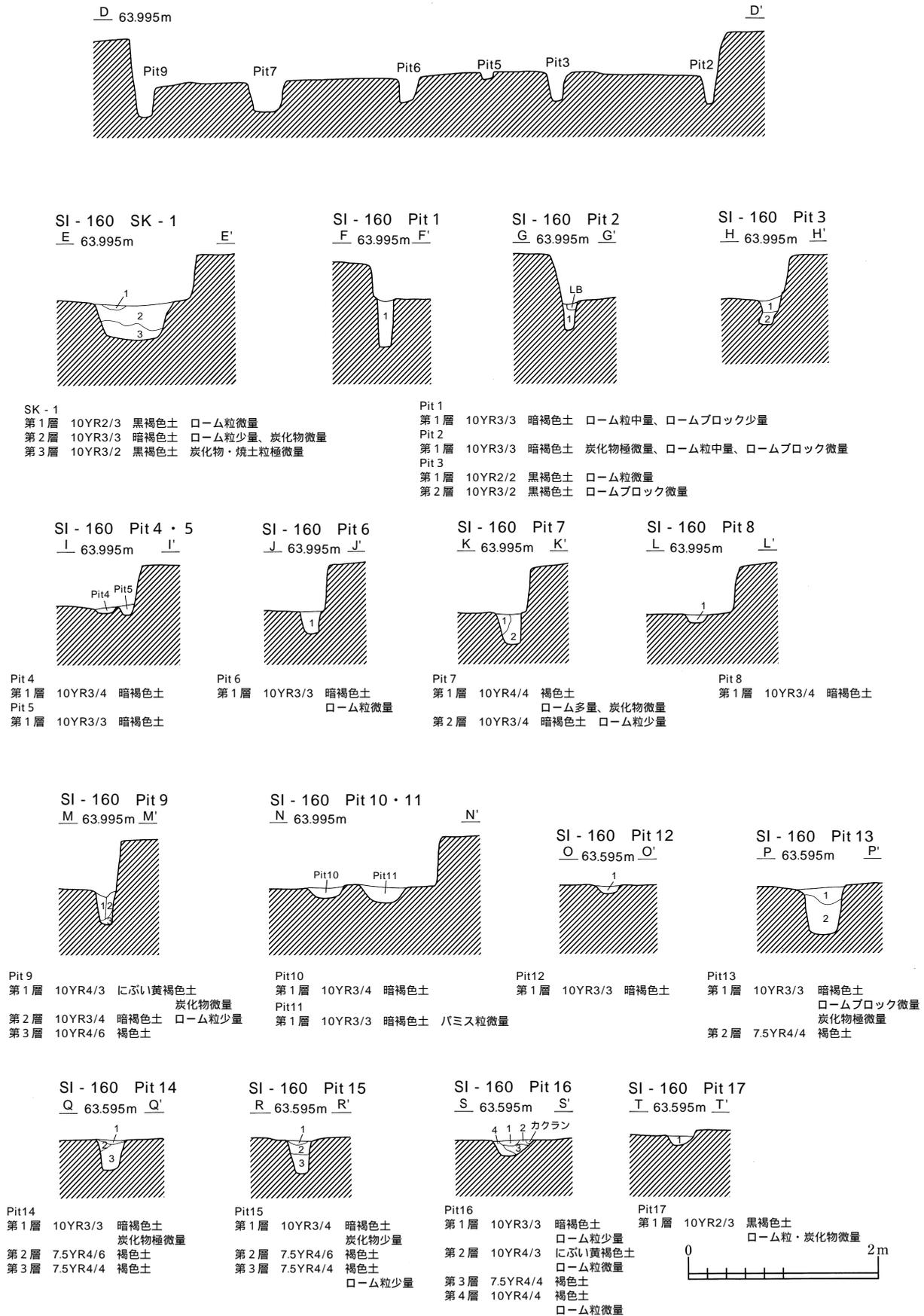
第312図 SI - 159



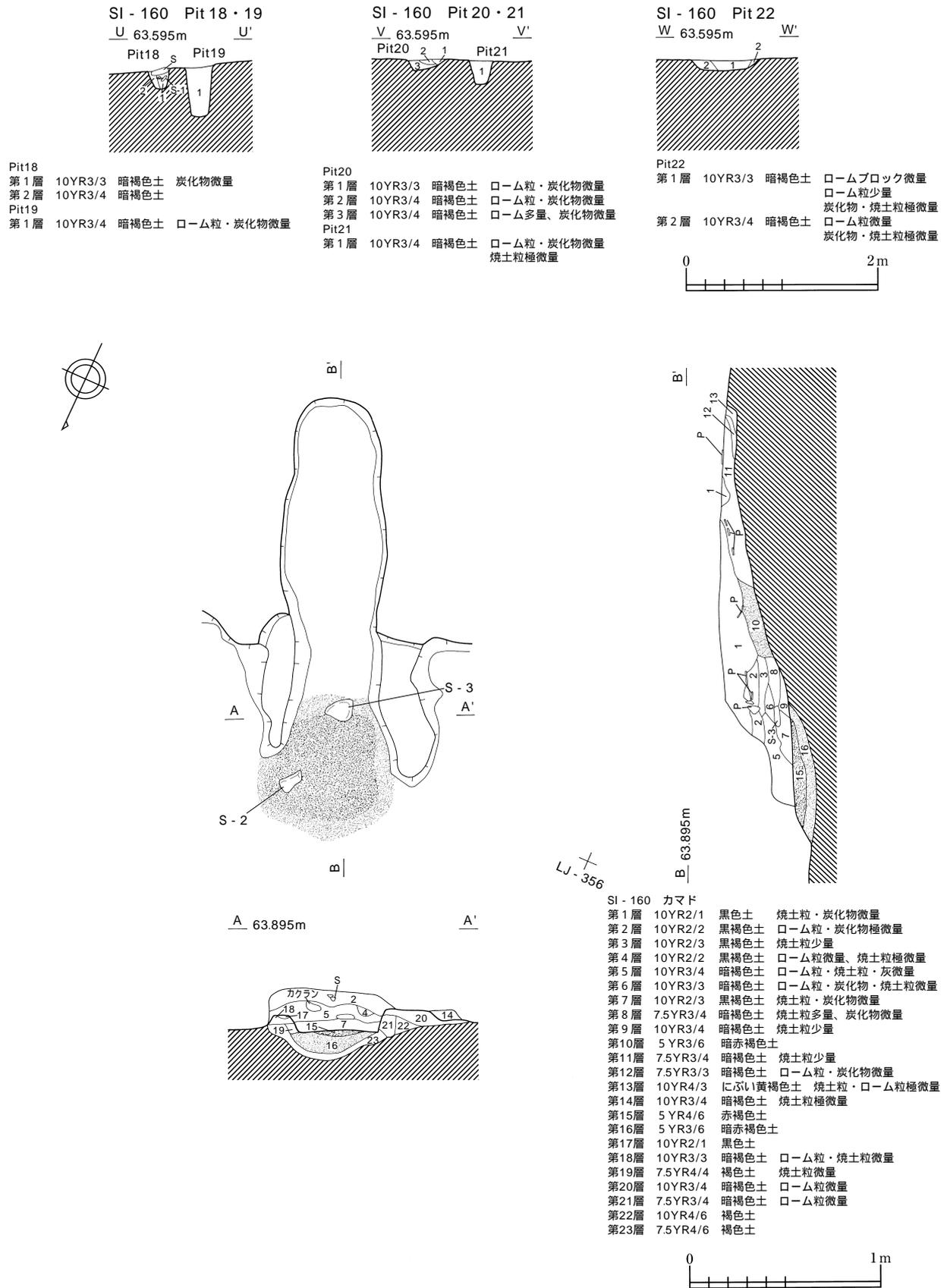
第313図 SI - 159



第314図 SI - 160



第315図 SI - 160



第316図 SI - 160

ある。

[カマド] 南壁側から1基検出した。東壁側が破壊されているため推定値であるが、壁柱穴の柱間等の情報から南壁3(71):(29)の位置から検出したものと推定される。構造は、半地下式で、袖部幅92cm、煙道長130cmを測る。主軸はN-158°-Eである。燃烧部の構築は粘土によるもので、燃烧部天井は第5層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道部天井は、第10層が相当し、部分的に崩落して残存した堆積状況を呈している。煙道は、住居壁際から16°の角度で立ち上がり、煙出付近ではほぼ平坦になる。煙出奥壁は、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居南壁西隅から土坑1基を検出した。規模は85×66×35cmを測る。底面直上に堆積する第3層中から焼土粒ならびに炭化粒を検出しており、カマド脇ピットとしての機能が考えられる。

[堆積土] 攪乱により住居東側の土層堆積が残存していないが、残存部分について2層に分層した。第2層中にB-Tm火山灰が粒状に混入している。自然堆積状況を呈する。

(木村)

SI-161(第317、318図)

[位置] グリッドLL-354・355で検出した。

[重複] SK-193と重複している。本遺構の堆積土がSK-193に切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 攪乱により一部の情報が欠落しているが、不整形を呈し、438×404×34cmを測る。床面積は(17.504)m²を測る。

[壁] 攪乱により、南壁の一部ならびに東西壁の壁面の情報が部分的に欠落しているが、壁高は、北壁20cm、南壁27cm、西壁21cmを測る。残存部分の断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。また、住居中央部から赤化面を32×21cm、56×18cmの範囲で検出した。

[壁溝] 北壁ならびに西壁から部分的に検出した。深さは平均4cmを測る。

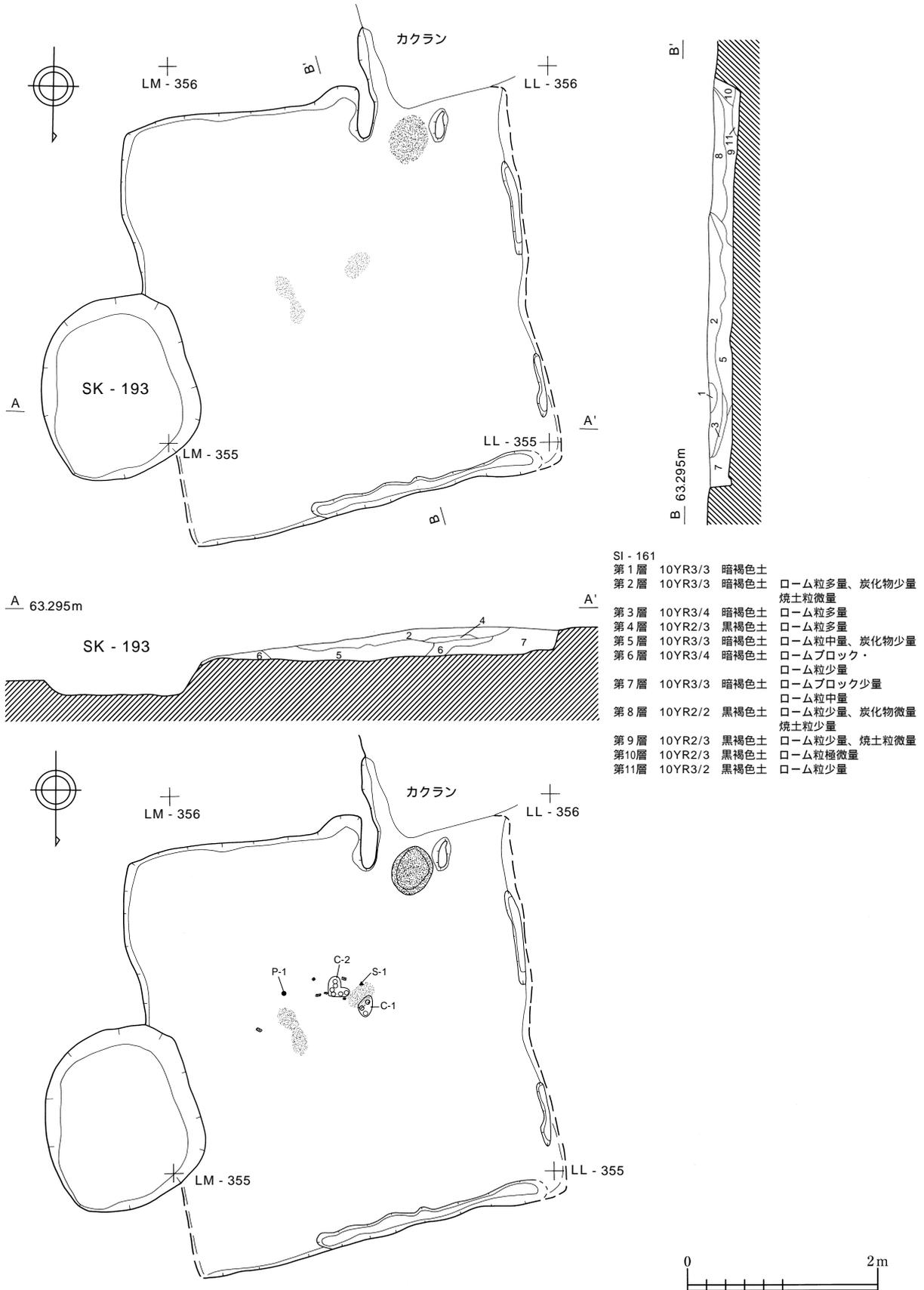
[ピット] なし。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(74:26)の位置から検出している。煙道部約半分が攪乱により破壊されている。構造は、半地下式で、袖部幅100cm、煙道長(80)cmを測る。燃烧部袖は、自然礫ならびに土師器甕胴部下半を芯材として倒位に設置し、粘土を用いて構築している。燃烧部天井は第6層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道部は攪乱により大部分が破壊されており、構造の詳細については不明である。

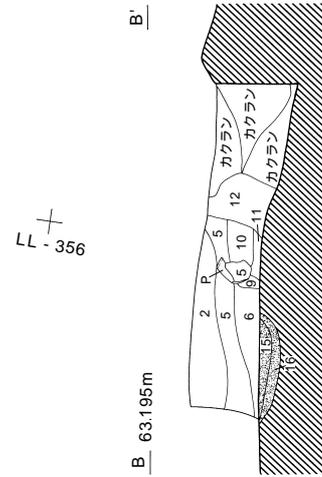
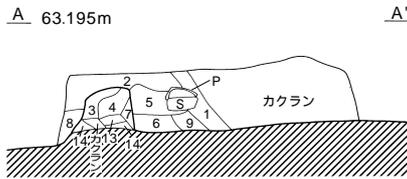
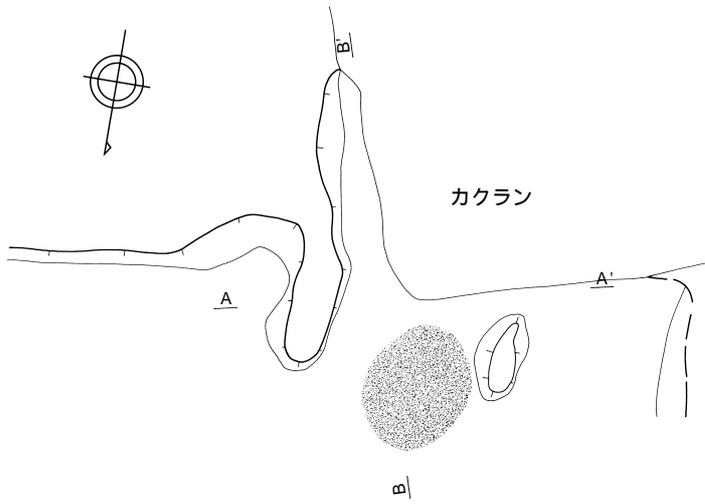
[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 11層に分層した。壁際に堆積する第7~11層は自然堆積状況を呈するが、住居中央部分に堆積する第1~6層は、ロームブロック・焼土粒等を含み、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

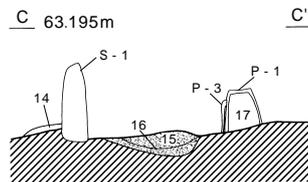
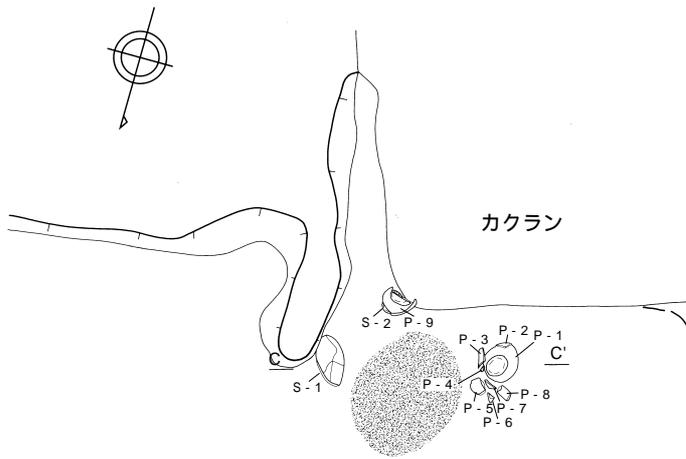
(木村)



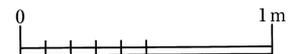
第317図 SI - 161



- SI - 161 カマド
- | | | | |
|------|----------|---------|--------------|
| 第1層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土粒多量 |
| 第2層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | ローム粒多量、炭化物少量 |
| 第3層 | 7.5YR5/6 | 明褐色土 | 焼土粒微量 |
| 第4層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | |
| 第5層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | ローム粒中量、焼土粒混入 |
| 第6層 | 7.5YR4/4 | 褐色土 | ローム粒中量、焼土粒混入 |
| 第7層 | 5 YR4/4 | にぶい赤褐色土 | |
| 第8層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | |
| 第9層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土粒中量 |
| 第10層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | ローム粒少量 |
| 第11層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 焼土粒微量 |
| 第12層 | 10YR4/4 | 褐色土 | |
| 第13層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 焼土粒微量 |
| 第14層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第15層 | 5 YR4/4 | にぶい赤褐色土 | |
| 第16層 | 2.5YR4/8 | 赤褐色土 | |
| 第17層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | |



LL-356



第318図 SI - 161

S I - 162 (第319、320図)

[位置] グリッドL L・L M - 353・354で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、398×372×48cmを測る。床面積は14.625m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁15cm、東壁4cm、南壁28cm、西壁32cmを測る。断面形は(c)で、壁上部の一部で緩やかな立ち上がりが見られる。壁面は堅緻である。

[床] 浅い掘り方の土坑を有するが、それ以外の部分については大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面は堅緻である。また、床面直上から焼土粒を125×65cmの範囲で検出した。

[壁溝] 南壁ならびに東壁の一部で断続するが、全周する形で検出した。深さは平均4cmを測る。

[ピット] 住居内から4基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 27×20×6cm、Pit 2 = 28×21×20cm、Pit 3 = 50×35×10cm、Pit 4 = 30×27×6cmを測る。主柱配置については不明である。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(74:26)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅85cm、煙道長59cmを測る。主軸はN - 148° - Eである。燃烧部袖は、自然礫を芯材としており、粘土を用いて構築している。燃烧部天井は第8層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道部天井は、第5層が相当し、燃烧部天井と同様崩落した堆積状況を呈している。煙道は、住居壁際より手前の部分から23°の角度で立ち上がり、煙出部へ向かう。

[その他の付属施設] 掘り方部分を含めて土坑4基を検出した。S K - 1は、住居北壁側やや東寄り部分から検出した。規模は135×100×18cmを測る。堆積土中に焼土粒等を検出しており、底面から破片化した土器が出土している。カマド脇ピットの機能とほぼ同様の役割を果たしたものと考えられる。S K - 2は、住居北壁側やや西寄り部分から検出した。規模は110×95×9cmを測る。堆積土中にS K - 1と同様焼土粒等を検出した。底面から30×21×11cmのピット状の落ち込みを検出した。S K - 3は、住居南壁側カマド左袖脇部分から検出した。規模は92×75×12cmを測る。堆積土中から焼土粒・炭化粒等を検出しており、破片化した土器が底面から出土していることからカマド脇ピットとしての機能が考えられる。S K - 4は住居東側から検出した。規模は203×135×8cmを測る。

[堆積土] 8層に分層した。全般的にローム粒・焼土粒を含み、大谷火山灰層主体の地山土の堆積が見られる。急激な埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 163 (第321、322図)

[位置] グリッドL O・L P - 352・353で検出した。

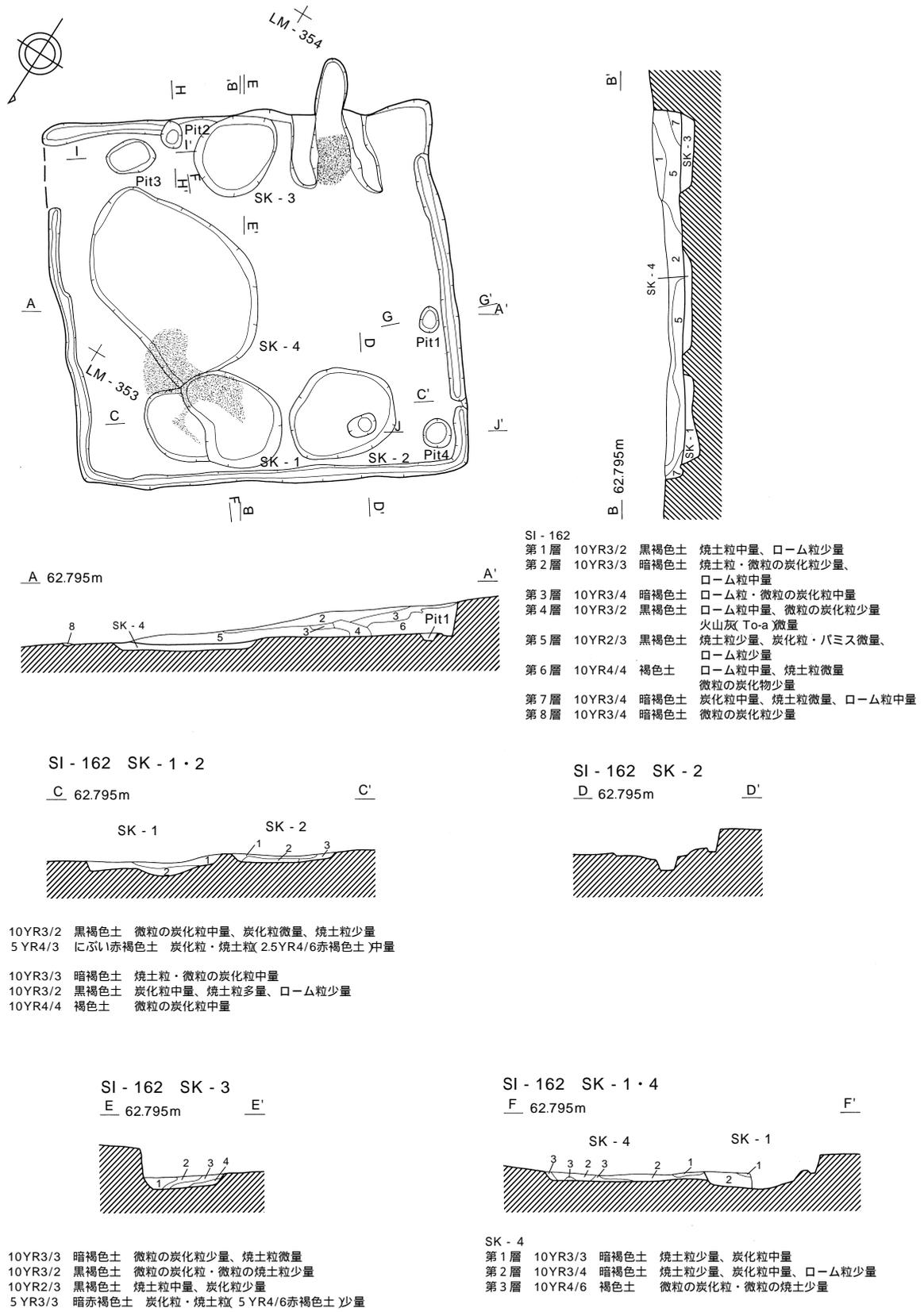
[重複] なし。

[平面形・規模] 東側が削平されているため、正確な平面形、規模は不明であるが、方形を呈し、規模は512×492×33cmと推定される。床面積は24.432m²と推定される。

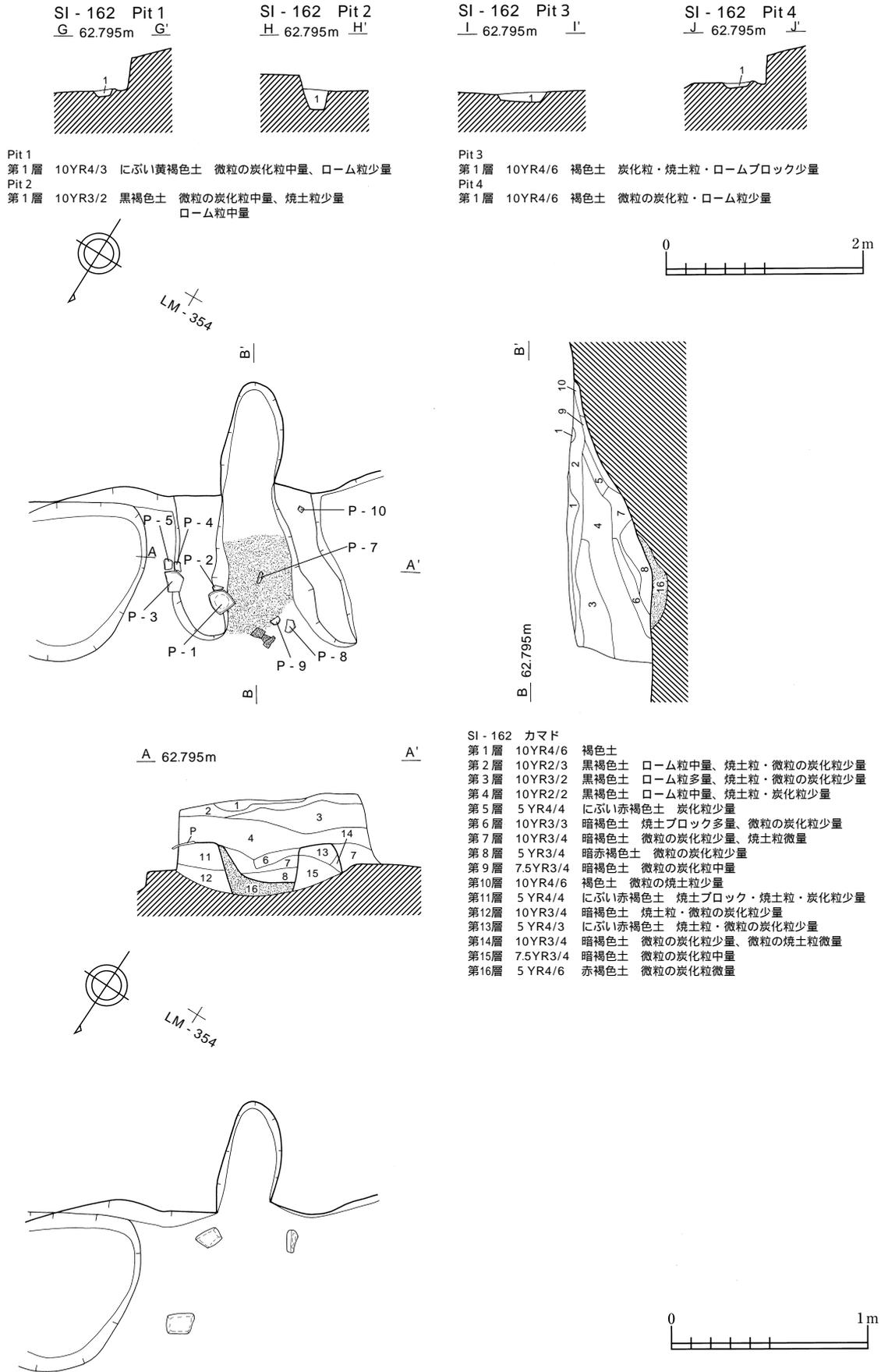
[壁] 南東壁33cmを測る。その他は削平により、壁がほとんど残存していないため、不明である。断面形は不明である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としている。北西壁付近の一部分が赤化していた。

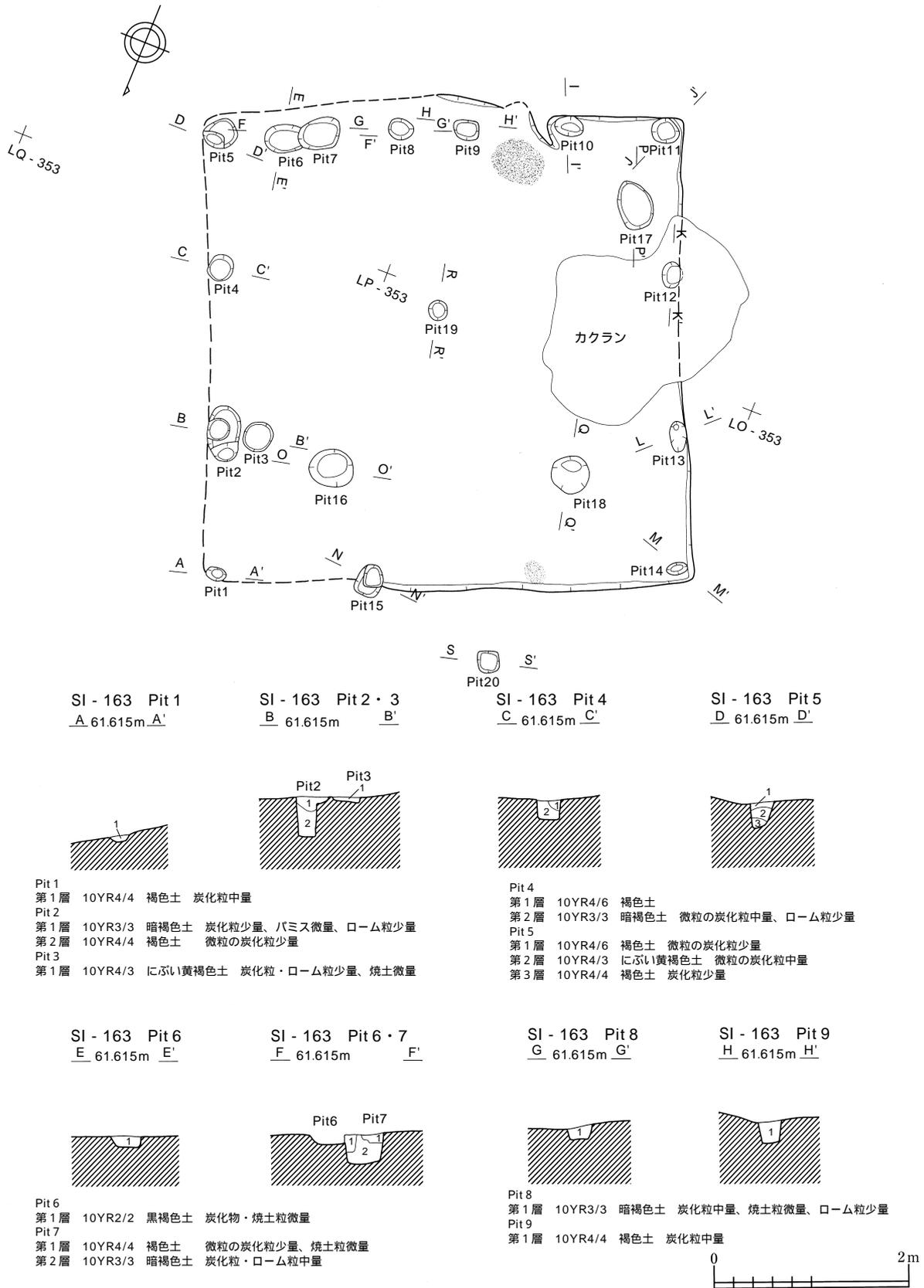
[壁溝] なし。



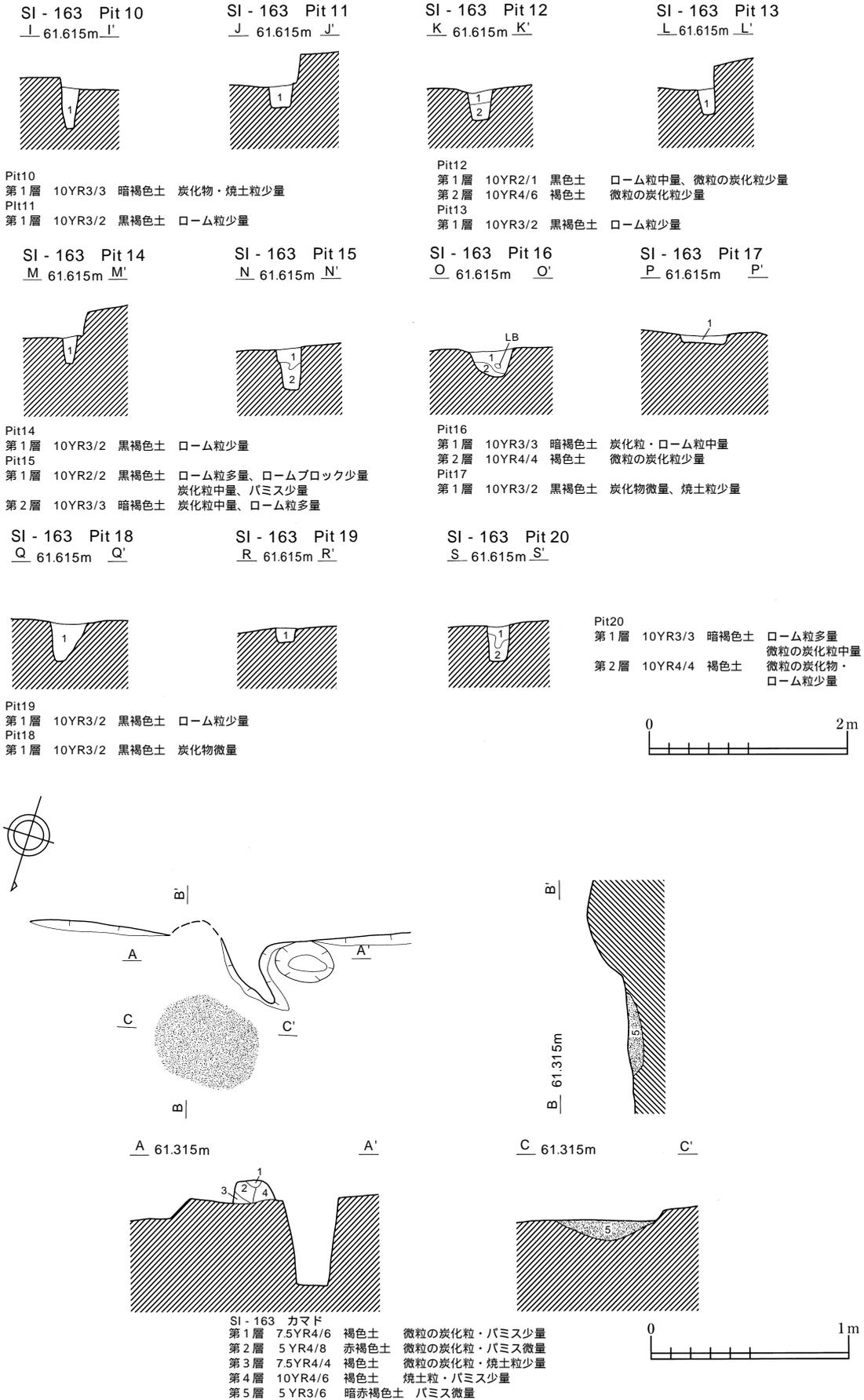
第319図 SI - 162



第320図 SI - 162



第321図 SI - 163



第322図 SI - 163

[ピット] 竪穴内から19基(Pit 1～19)、竪穴外から1基検出した(Pit20)。各ピットの規模はPit 1 = 21×14cm、Pit 2 = 59×34×41cm、Pit 3 = 32×30×6cm、Pit 4 = 28×25×20cm、Pit 5 = 36×31×27cm、Pit 6 = 40×29×11cm、Pit 7 = 46×33×31cm、Pit 8 = 26×22×15cm、Pit 9 = 26×21×24cm、Pit10 = 29×21×42cm、Pit11 = 30×26×23cm、Pit12 = 27×18×32cm、Pit13 = 32×18×26cm、Pit14 = 22×13×30cm、Pit15 = 35×27×44cm、Pit16 = 46×40×30cm、Pit17 = 52×35×10cm、Pit18 = 40×39×40cm、Pit19 = 22×20×15cm、Pit20 = 23×22×35cmを測る。主柱穴として認定できるものはPit 7、10、16、18の4基で、壁柱穴として認定できるものはPit 1、2、4、5、7～15の13基、竪穴外柱穴として認定できるものはPit20の1基である。4基の主柱穴はそれぞれを結んだラインが長方形を呈するように配置され、壁柱穴はそれぞれが約160cmの間隔で全周して設置されている。

[カマド] 削平のため、燃烧部、煙道部等は確認できなかったが、火床面と考えられる赤化範囲を住居南東壁3(66:34)の位置から1基検出した。赤化範囲は、54×44cmである。構造、袖部幅、煙道長、堆積状況は不明である。南西側の袖が部分的に残存しており、残存する袖から推定する主軸はN-70°-Eである。残存している袖は粘土によって構築されており、芯材は装填されていない。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 削平により、堆積状況は不明である。

(設 楽)

SI - 164 (第323図)

[位置] グリッドLQ - 352で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 削平により、南東隅部分のみ検出であり、詳しい規模、平面形は不明である。

[壁] 南東壁13cmを測り、その他の壁は削平により、壁がほとんど残存していないため、不明である。断面形は不明である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としている。

[壁溝] 確認できなかった。

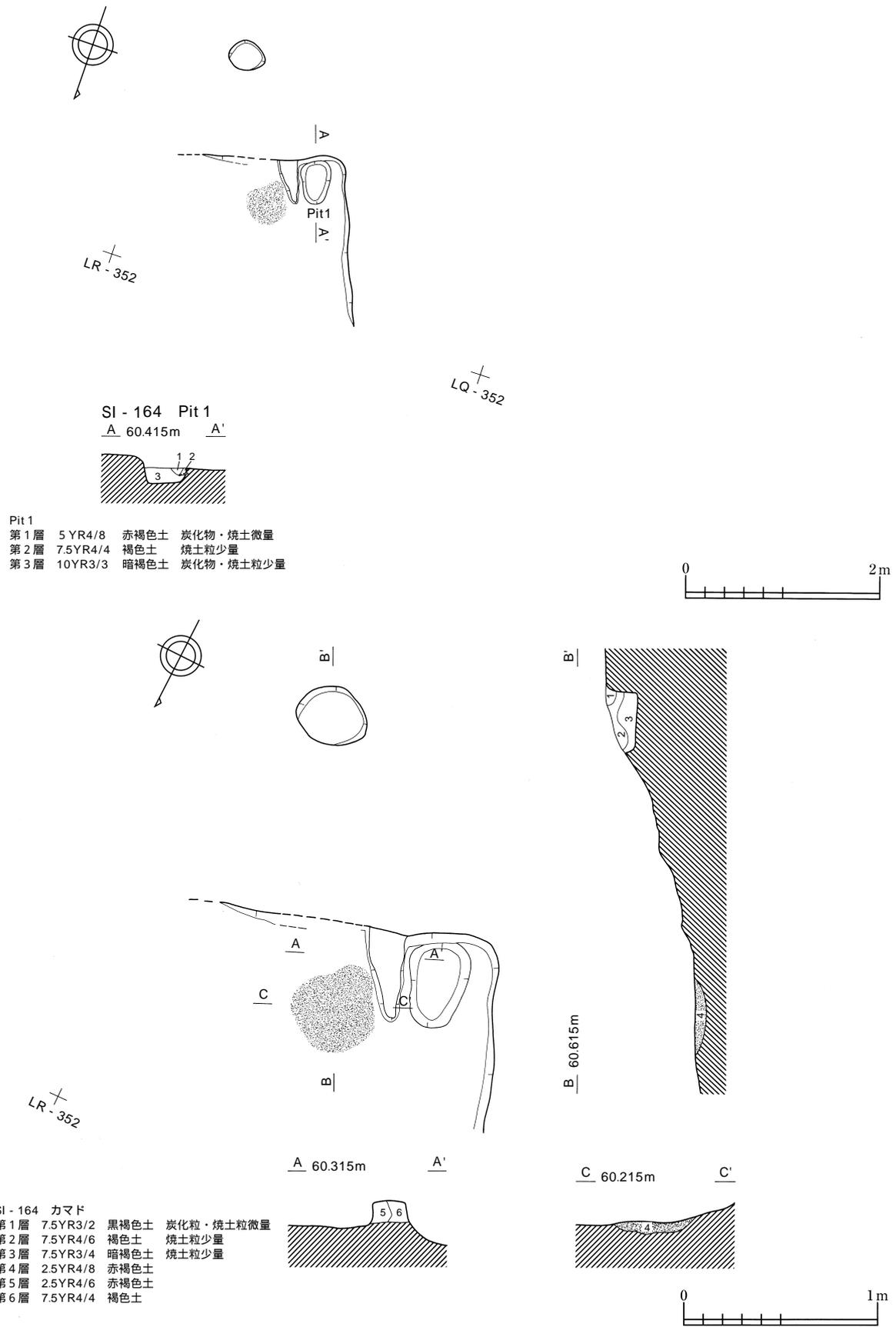
[ピット] 竪穴内の南東隅から1基検出した。Pit1の規模は44×32×17cmを測る。ピットの底面から、土師器椀1点と椀形鍛冶滓1点が出土した。

[カマド] 南東壁より1基検出した。燃烧部と煙道中間部が削平されており、西側の袖部、火床面と、煙出付近と考えられる落ち込みを検出した。南東壁が削平されているため、壁における設置位置の比率は不明であるが、凡そ南壁4の位置に相当すると考えられる。残存している袖は粘土によって構築されており、芯材は装填されていない。火床面は、48×46cmの範囲で赤化している。煙道部の明確な構造は不明であるが、煙道部底面は傾斜を有していたと考えられ、半地下式であった可能性が高い。煙道長は122cmを測り、主軸はN-152°-Eである。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 削平により、堆積状況は不明である。

(設 楽)



第323図 SI - 164

S I - 165 (第324、325図)

[位置] グリッドL S・L T - 352・353で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 削平のため、北壁側の情報が欠落しているが、残存部分から台形を呈したものと考えられ、 $(366) \times 320 \times 48\text{cm}$ を測る。床面積は $(12.655) \text{m}^2$ を測る。

[壁] 削平のため、北壁ならびに東壁の一部が残存していない。残存部分での壁高は、東壁8cm、南壁14cm、西壁40cmを測る。残存部分の断面形は(c)で、壁上部の一部で緩やかな立ち上がりが見られる。壁面は堅緻である。

[床] 浅い掘り方を部分的に有し、暗褐色土ならびに黒褐色土が充填されている。それ以外の部分については大谷火山灰層の地山を床面としており堅緻である。

[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から3基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = $23 \times 23 \times 9\text{cm}$ 、Pit 2 = $60 \times 55 \times 38\text{cm}$ 、Pit 3 = $63 \times 50 \times 13\text{cm}$ を測る。柱穴としての機能が考えられるピットはPit 2である。

[カマド] 東壁側から1基検出した。東壁3(69:31)の位置から検出している。また、南壁側から燃烧部火床面のみを1ヶ所検出した。南壁3(65:35)の位置から検出している。新旧関係については東壁3 > 南壁3の関係である。東壁3のカマドは、煙道部が削平のため破壊されており、袖部幅60cmを測る。主軸はN - 70° - Eである。燃烧部袖の構築は、黒褐色土で構築されている。天井部については残存していない。燃烧部下部については浅い掘り込みが行われ、黒褐色土が充填されその上に大谷火山灰層の地山を貼り付けて構築している。煙道部の構造、構築等については、破壊されており詳細は不明である。南壁3については、火床面のみが残存で詳細については不明である。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 一部削平を受けているが、残存部分について6層に分層した。住居廃絶後の堆積土は、第1～4層で、概ね自然堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 166 (第326図)

[位置] グリッドL X・L Y - 350・351で検出した。

[重複] なし。

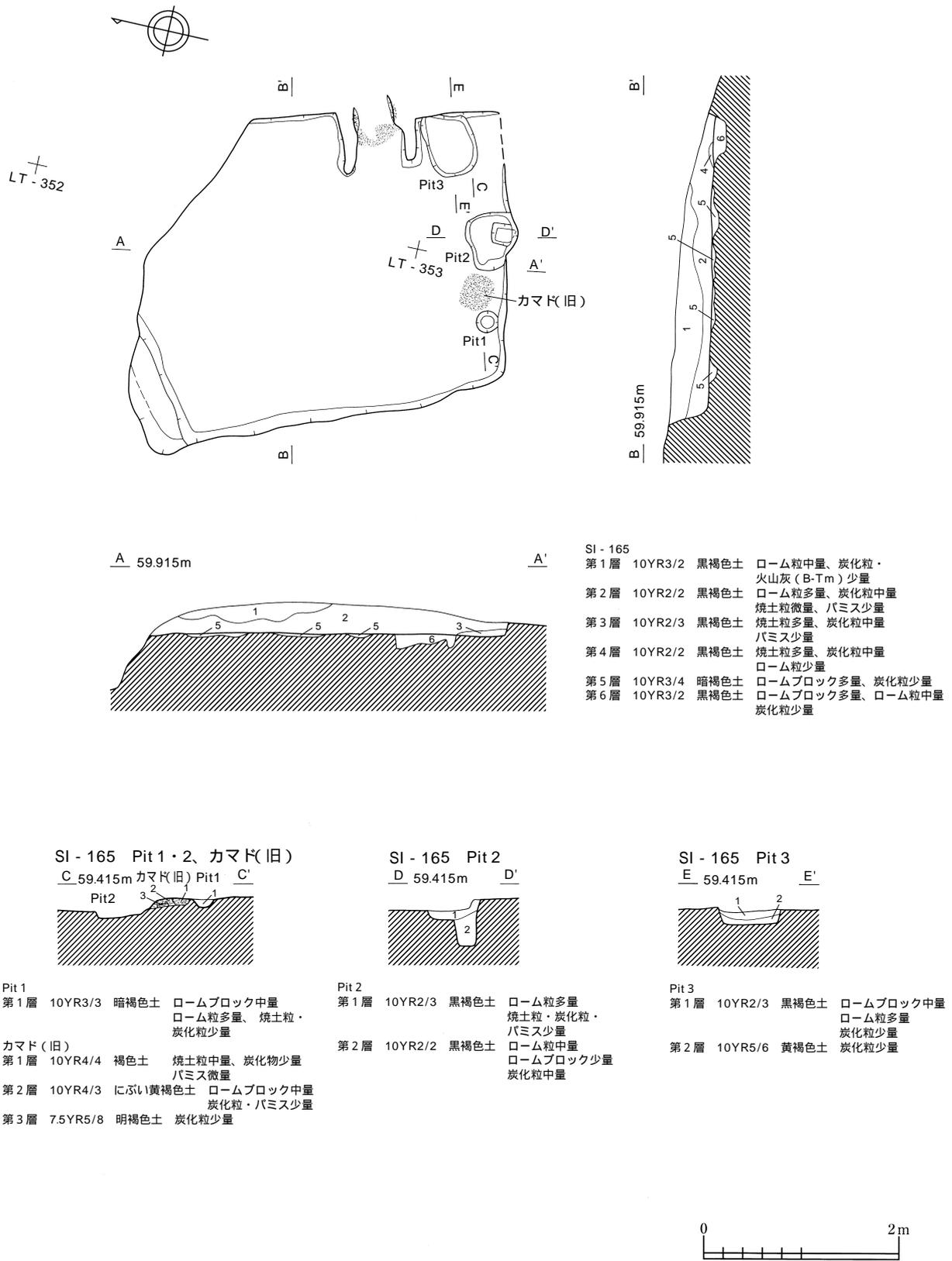
[平面形・規模] 住居南側が攪乱により破壊を受けているため、南北方向の規模については残存部分からの推定値であるが、 $480 \times 454 \times 45\text{cm}$ を測る。床面積は 21.892m^2 を測る。

[壁] 攪乱、削平のため、残存している部分は北壁と西壁の一部である。壁高は、北壁5cm、西壁37cmを測る。残存部分の断面形は(a)で、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

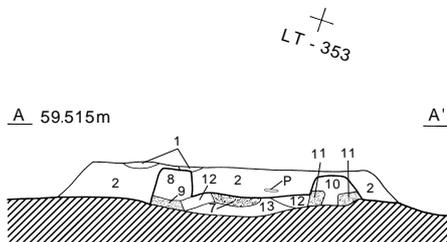
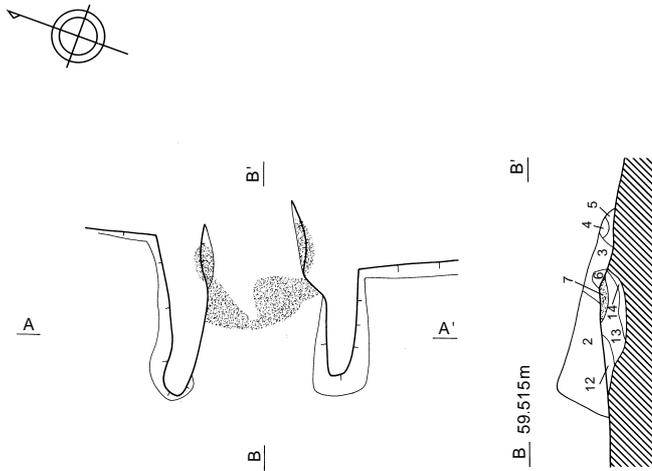
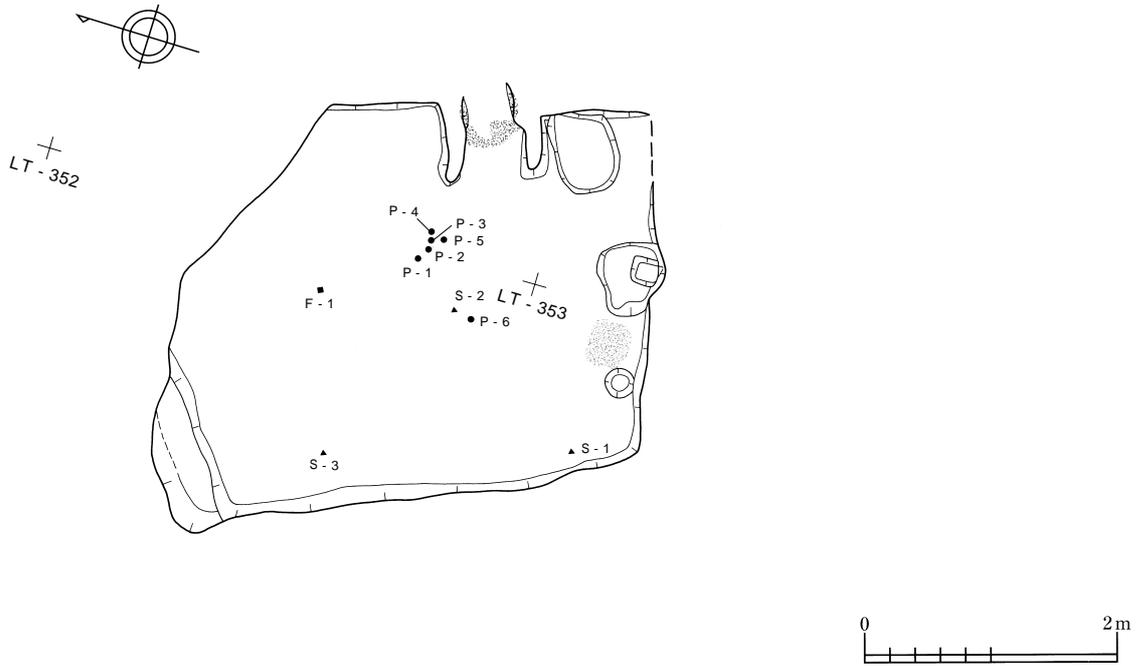
[床] 攪乱、削平のため、住居東～南側の情報は欠落しているが、残存部分の床面は、大谷火山灰層の地山を床面としており、起伏がある。床面は堅緻である。

[壁溝] 残存部分では住居北壁側ならびに西壁側から検出した。深さは22cmを測る。

[ピット] 住居内から3基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = $39 \times 35 \times 63\text{cm}$ 、Pit 2 = $(37) \times (32) \times (50)\text{cm}$ 、Pit 3 = $32 \times 14 \times 4\text{cm}$ を測る。主柱穴としての機能が考えられるピットはPit 1、2である。

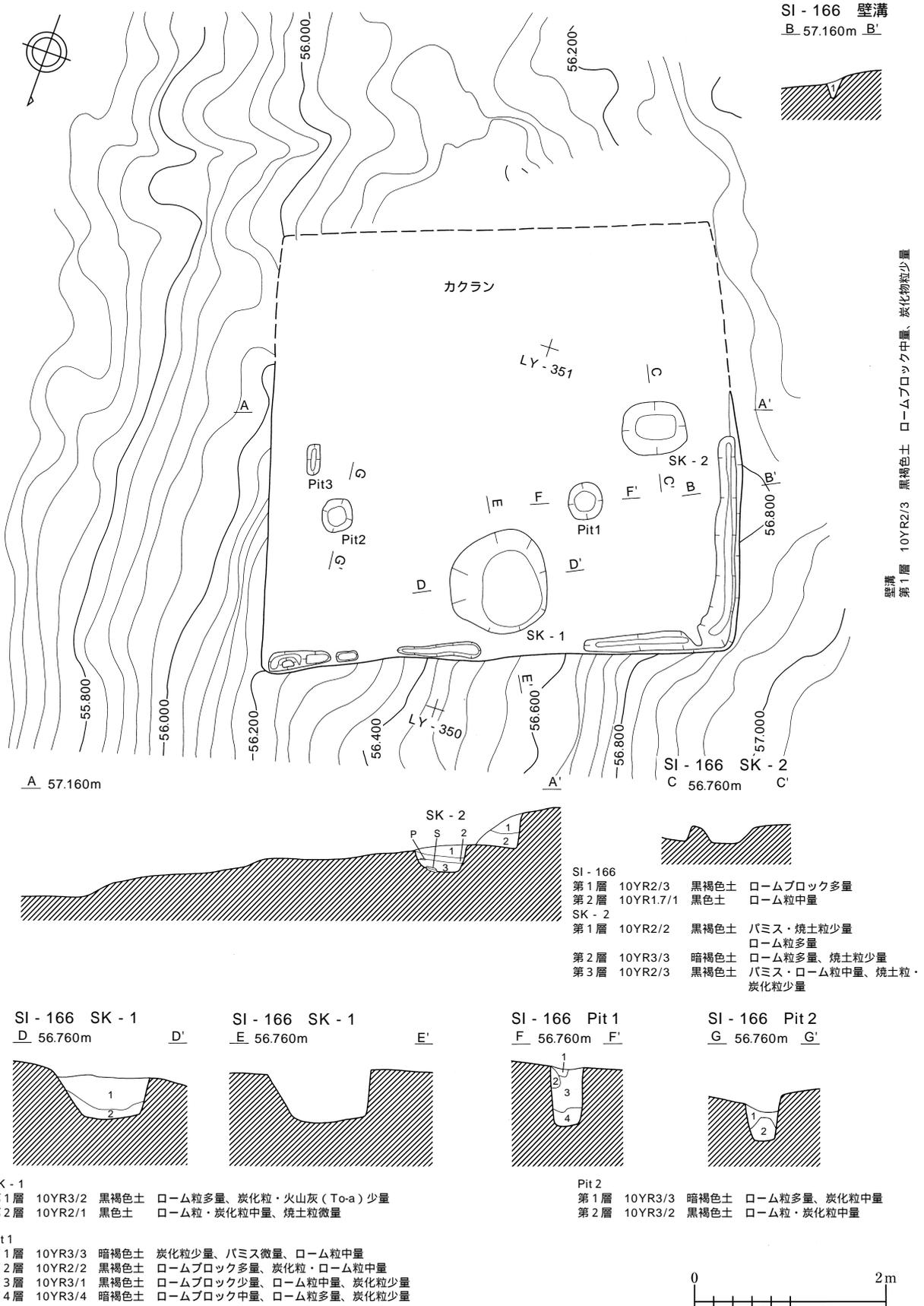


第324図 SI - 165



- SI - 165 カマド
- 第1層 10YR6/6 明黄褐色土
 - 第2層 10YR3/2 黒褐色土 バミス少量、ローム粒中量、炭化粒少量
 - 第3層 10YR3/4 暗褐色土 焼土ブロック・焼土粒・炭化粒少量
 - 第4層 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒少量
 - 第5層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土粒・炭化粒少量
 - 第6層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土粒・炭化粒少量
 - 第7層 5YR3/6 暗赤褐色土 炭化粒微量
 - 第8層 10YR2/2 黒褐色土 炭化粒少量、焼土粒微量
 - 第9層 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒多量、炭化粒少量
 - 第10層 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒・ローム粒少量
 - 第11層 5YR3/6 暗赤褐色土 炭化粒微量
 - 第12層 10YR4/6 褐色土 バミス少量、炭化粒微量
 - 第13層 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒・炭化粒・ロームブロック少量
 - 第14層 10YR4/6 褐色土 炭化粒少量

第325図 SI - 165



第326図 SI - 166

[カマド] 残存部分からの検出はなし。

[その他の付属施設] 住居内から土坑2基を検出した。SK-1は、住居北壁寄り中央から検出した。規模は107×101×44cmを測る。SK-2は、住居東壁寄り中央から検出した。規模は66×55×18cmを測る。

[堆積土] 削平のため、残存部分について2層に分層した。堆積状況の詳細については不明である。

(木村)

SI-167(第327、328図)

[位置] グリッドMB-349・350で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 東壁部分が削平を受けているが、残存する壁等の情報から方形を呈していたものと考えられ、422×406×72cmを測る。床面積は17.004m²を測る。

[壁] 東壁側ならびに南壁側の一部が削平を受けており、詳細については不明であるが、残存部分の壁高は、北壁28cm、南壁37cm、西壁66cmを測る。断面形は(c)で、壁上部の一部で緩やかな立ち上がりが見られる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。また、カマド周辺にかけての床面は、赤化している部分が見られ、周辺部の土層堆積において焼土粒、炭化物等を検出していることから、本遺構は焼失住居であると考えられる。

[壁溝] 住居北壁ならびに西壁の一部から検出した。深さは平均6cmを測る。

[ピット] 住居内から7基検出した。各ピットの規模は、Pit1=31×21×26cm、Pit2=28×24×21cm、Pit3=31×23×17cm、Pit4=27×20×14cm、Pit5=30×26×14cm、Pit6=23×17×11cm、Pit7=32×26×16cmを測る。主柱穴としての機能が考えられるピットは、Pit1～4である。

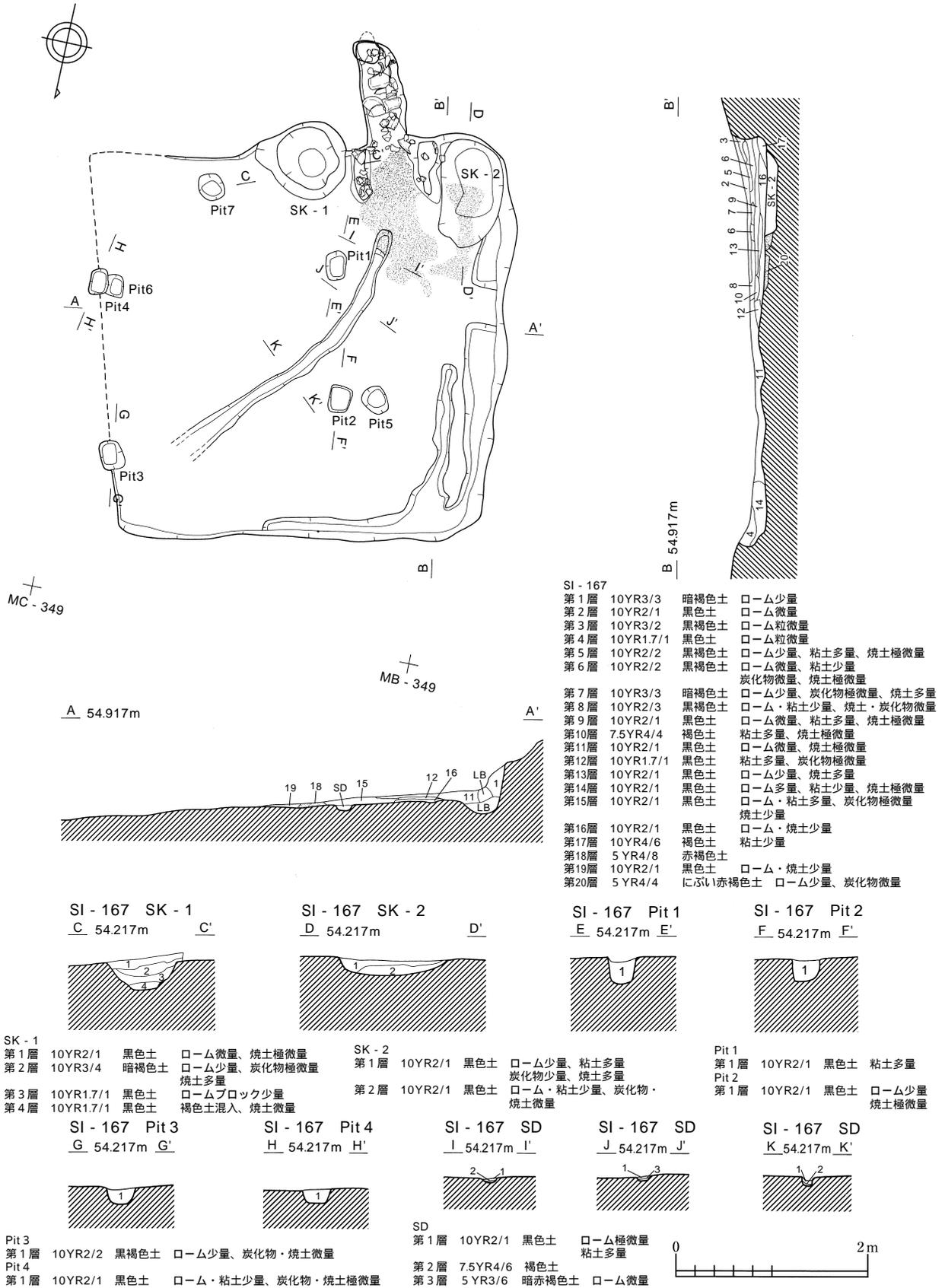
[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(72:28)の位置から検出している。構造は、地下式で、袖部幅90cm、煙道長100cmを測る。主軸はN-163°-Eである。燃烧部の構築は粘土によるもので、燃烧部天井についてはブロック化した状態で堆積している。煙道部は、大谷火山灰層の地山を掘り込んだ形で構築している。煙道は、住居壁際から起伏を持ちながらほぼ水平に煙出部へ向かう。煙出奥壁は、内傾しながら立ち上がり、途中で角度を変えほぼ垂直に近い形で立ち上がる。

燃烧部上面ならびに煙道内部～煙出にかけて多量の土器、自然礫等が出土しており、カマドの廃絶に際して故意の廃棄が考えられる。

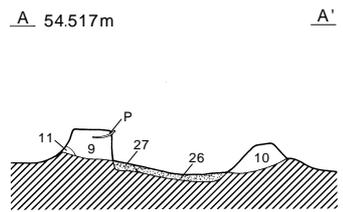
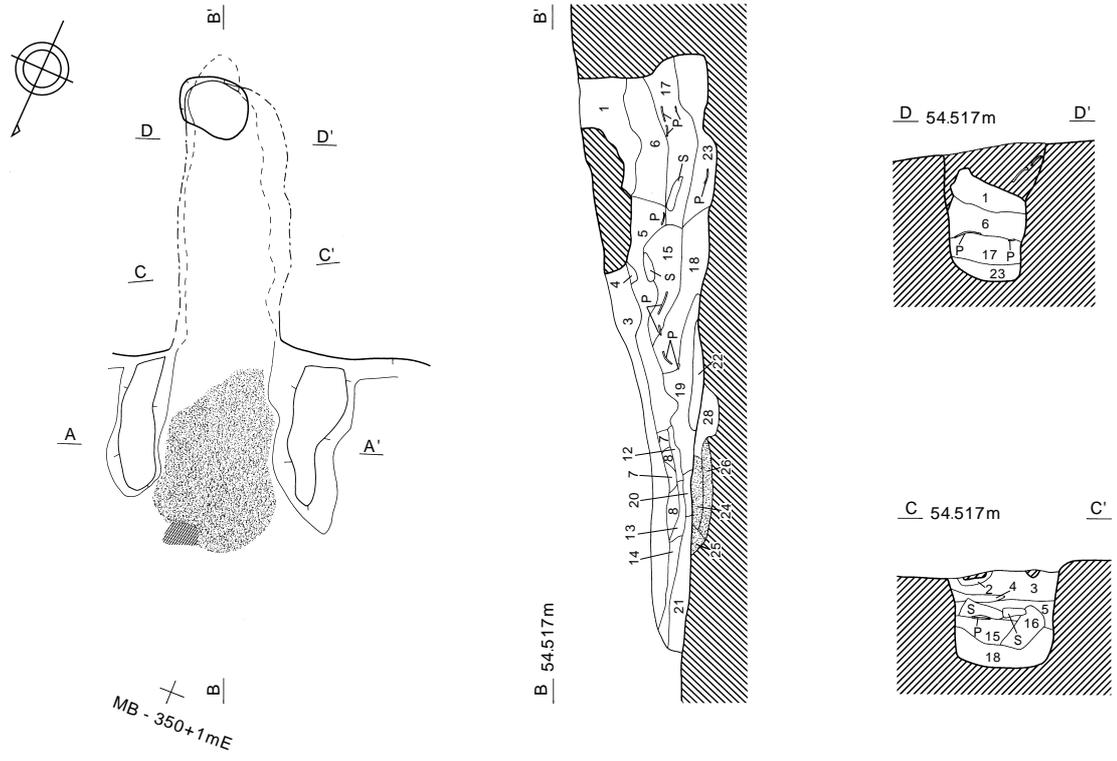
[その他の付属施設] カマド付近から住居北東壁に向かって延びる溝を1条検出した。深さは平均4cmを測る。また、住居内から土坑2基を検出した。SK-1は、住居南壁側中央から検出した。規模は95×85×29cmを測る。SK-2は、住居南壁西隅から検出した。規模は114×63×16cmを測る。堆積土上面に焼土が堆積しており、住居焼失時点で開口部は閉じていたと考えられる。

[堆積土] 削平のため、堆積土についても欠落を生じているが、残存部分について20層に分層した。全般的に焼土粒、炭化物等を含む土層堆積であるが、床面から炭化材等の検出はほとんどない状況であった。埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。住居の焼失の要素と、カマド周辺部での赤化の集中ならびにカマドの破壊状況と遺物の廃棄状況を併せて、住居廃絶時点での意図的焼失の要素が考えられる。

(木村)

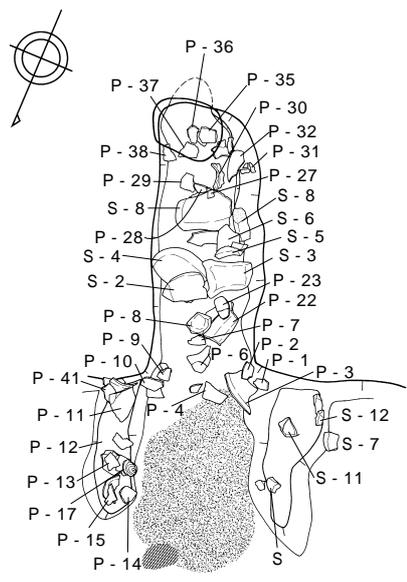


第327図 SI - 167



SI - 167 カマド

第1層	10YR2/1	黒色土	ローム微量、焼土少量
第2層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	ローム粒多量
第3層	10YR2/1	黒色土	ローム・焼土微量、粘土少量
第4層	10YR2/1	黒色土	ローム粒多量、焼土粒少量
第5層	10YR2/1	黒色土	ローム少量、炭化物・焼土微量
第6層	7.5YR4/4	褐色土	粘土・焼土多量
第7層	5 YR4/8	赤褐色土	ローム・炭化物極微量
第8層	10YR1.7/1	黒色土	ローム極微量、炭化物多量
第9層	7.5YR4/4	褐色土	粘土・焼土少量、炭化物極微量
第10層	7.5YR4/4	褐色土	
第11層	5 YR4/6	赤褐色土	ローム極微量、焼土多量
第12層	10YR2/3	黒褐色土	炭化物微量
第13層	10YR5/4	にぶい黄褐色土	ローム極微量、焼土少量
第14層	10YR3/3	暗褐色土	ローム微量、炭化物極微量、焼土少量
第15層	10YR3/3	暗褐色土	粘土少量、ローム多量、焼土微量
第16層	7.5YR4/4	褐色土	炭化物・焼土微量
第17層	10YR3/1	黒褐色土	ローム微量、炭化物多量
第18層	5 YR4/6	赤褐色土	
第19層	10YR4/4	褐色土	炭化物極微量、焼土少量、灰多量
第20層	7.5YR4/6	褐色土	炭化物極微量
第21層	10YR2/1	黒色土	粘土多量、焼土極微量
第22層	10YR2/3	黒褐色土	ローム微量、炭化物・焼土多量
第23層	7.5YR3/4	暗褐色土	ローム微量、炭化物・焼土少量
第24層	7.5YR6/6	橙色土	
第25層	7.5YR4/4	褐色土	炭化物極微量、焼土少量
第26層	5 YR4/8	赤褐色土	
第27層	5 YR5/4	にぶい赤褐色土	
第28層	10YR2/1	黒色土	炭化物・焼土極微量



MB - 350

第328図 SI - 167

S I - 168 (第329図)

[位置] グリッドMB - 350・351で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 長方形を呈し、 $304 \times (254) \times 30\text{cm}$ を測る。床面積は 7.737m^2 を測る。

[壁] 削平のため、北壁～東壁の情報は欠落している。残存する壁高は、南壁27cm、西壁17cmを測る。断面形は(a)で、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。また、東壁際床直からローム層を検出した。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[カマド] 住居東壁側から燃焼部火床面のみを1ヶ所検出した。東壁3(71:29)の位置から検出している。構造等については残存しておらず不明である。火床面上の堆積土は、構築材がブロック化した形で堆積しており、破壊された可能性が考えられる。

[その他の付属施設] 住居北壁東隅から土坑1基を検出した。規模は $98 \times 57 \times 10\text{cm}$ を測る。

[堆積土] 削平により一部残存していないが、残存部分について4層に分層した。全般的にロームブロック等が混入し、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。また、西壁部分では、覆土上層に多量の土器片が出土しており、廃棄行為について伴ったものと考えられる。

(木村)

S I - 169 (第330、331図)

[位置] グリッドLK - 359・360、LL - 360で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 長方形を呈し、 $301 \times (290) \times 38\text{cm}$ を測る。床面積は 8.872m^2 を測る。

[壁] 削平のため東壁側の情報は欠落している。残存部分での壁高は、北壁4cm、南壁15cm、西壁20cmを測る。断面形はdで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、起伏がある。床面は堅緻である。

[壁溝] なし。

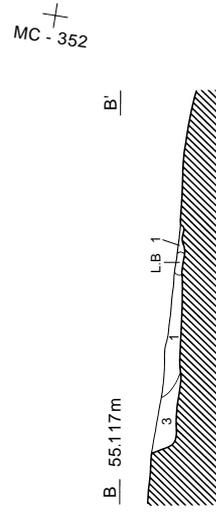
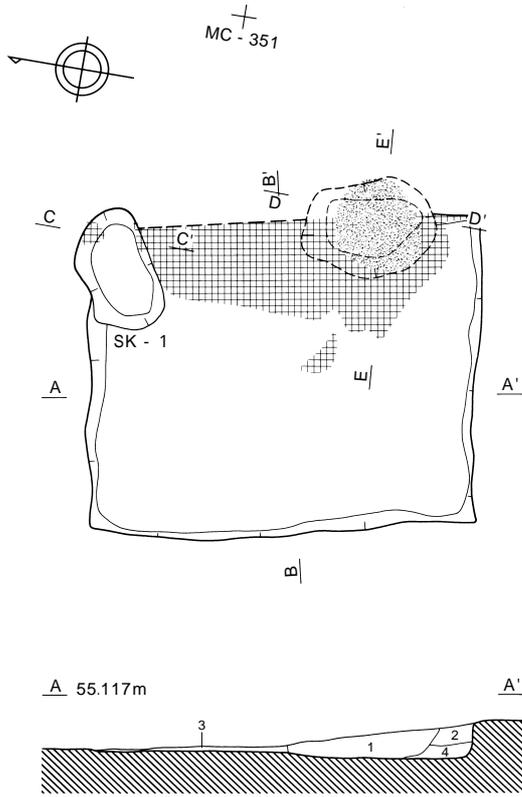
[ピット] 住居内から5基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = $101 \times 78 \times 25\text{cm}$ 、Pit 2 = $35 \times 35 \times 8\text{cm}$ 、Pit 3 = $31 \times 27 \times 25\text{cm}$ 、Pit 4 = $21 \times 20 \times 5\text{cm}$ 、Pit 5 = $76 \times 48 \times 19\text{cm}$ を測る。支柱配置については不明で、柱穴として機能したと考えられるピットはPit 3である。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(66:34)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅72cm、煙道長18cmを測る。主軸はN - 148° - Eである。燃焼部の構築は粘土によるもので、天井は第9、10層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道部天井は10層が相当し、燃焼部と同様崩落した堆積状況を呈している。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で30°の角度で急激に外傾しながら立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 5層に分層した。概ね自然堆積状況を呈する。

(木村)

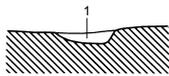


MB - 352

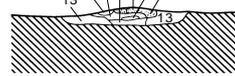
SI - 168

- | | | | |
|-----|---------|------|-------------------|
| 第1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ローム少量、炭化物・焼土極微量 |
| 第2層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ローム多量、粘土少量、焼土微量 |
| 第3層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ローム微量、炭化物極微量、焼土微量 |
| 第4層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム多量 |

SI - 168 SK - 1
C 55.117m C'



SI - 168 カマド
D 55.117m D'



SI - 168 カマド
E 55.117m E'

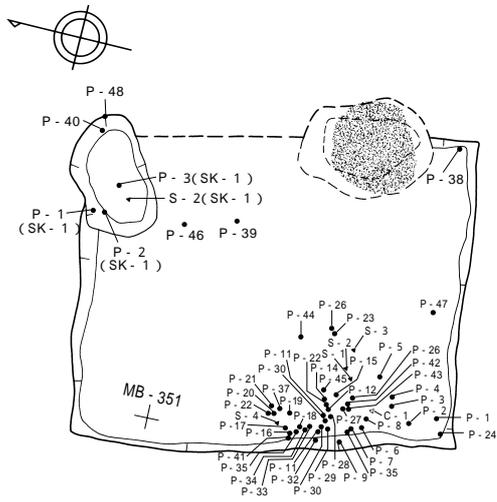


SK - 1

- 第1層 10YR1.7/1 黒色土 ローム・粘土・炭化物微量、焼土少量

SI - 168 カマド

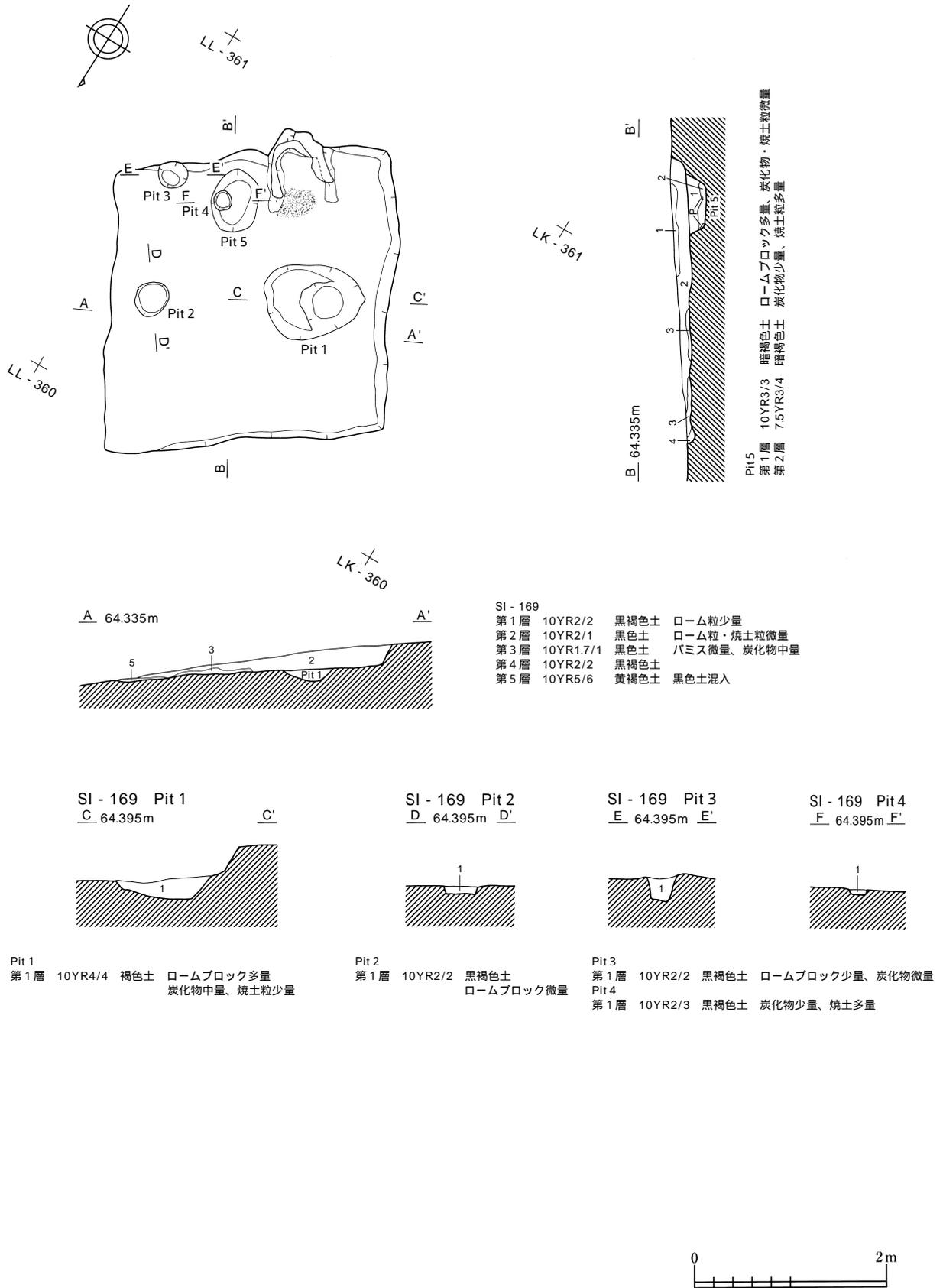
- | | | | |
|------|-----------|-------|-------------------|
| 第1層 | 5YR3/6 | 暗赤褐色土 | |
| 第2層 | 7.5YR4/4 | 褐色土 | 粘土少量、焼土多量 |
| 第3層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 焼土極微量 |
| 第4層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ローム微量 |
| 第5層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | ローム極微量、炭化物微量、焼土少量 |
| 第6層 | 5YR4/8 | 赤褐色土 | ローム微量 |
| 第7層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ローム少量、炭化物微量、焼土少量 |
| 第8層 | 5YR3/4 | 暗赤褐色土 | |
| 第9層 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | ローム極微量 |
| 第10層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ローム微量、粘土・焼土少量 |
| 第11層 | 7.5YR4/4 | 褐色土 | 焼土微量 |
| 第12層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 焼土・粘土少量 |
| 第13層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | ローム多量 |



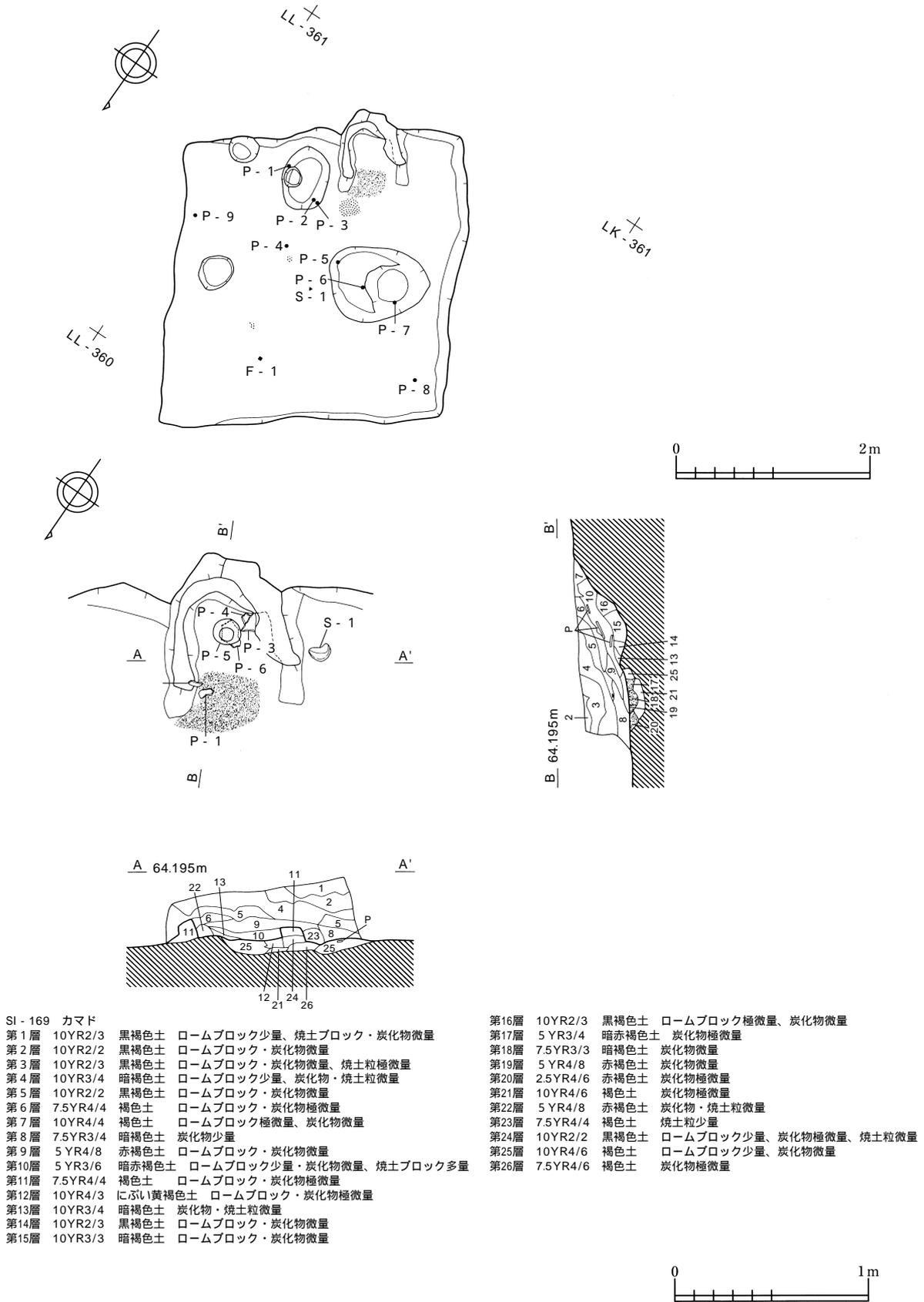
MB - 352



第329図 SI - 168



第330図 SI - 169



第331図 SI - 169

S I - 170 (第332~334図)

[位置] グリッドLT - 356、LS・LT - 357・358で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 台形を呈し、438×386×57cmを測る。床面積は(16.264) m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁3cm、東壁22cm、南壁41cm、西壁57cmを測る。断面形はeで、住居南壁に棚状の段を有する。壁面は堅緻である。

[床] ほぼ全面に浅い掘り方を持ち、暗褐色土系の土が充填され、月見野火山灰層主体の地山を貼り床として貼り付けている。床面はやや起伏があり、堅緻である。また、住居中央部から北側にかけて赤化面ならびに炭化物を検出しており、本遺構は焼失住居である。

[壁溝] カマド設置部分を除きほぼ全周する形で検出した。深さは平均11cmを測る。

[ピット] 住居内から3基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 65×55×18cm、Pit 2 = 50×37×7cm、Pit 3 = 61×50×13cmを測る。主柱穴はないものと考えられる。Pit 1は、堆積土中に焼土粒・炭化粒等が含まれ、カマド脇ピットとしての機能が考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(70:30)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅121cm、煙道長147cmを測る。主軸はN - 145° - Eである。燃烧部の構築は粘土によるもので、天井は、第18層が相当し崩落した堆積状況を呈する。煙道部天井は、第12、13層が相当し、燃烧部と同様崩落した堆積状況を呈する。煙道は、住居壁際から24°の角度で立ち上がり、全煙道長1/3の位置で20°に角度を変え、煙出部付近ではほぼ平坦に立ち上がる。煙出奥壁は、段状に立ち上がる。煙道部底面直上から「夫」字墨書土器1点が出土した。

[その他の付属施設] 南壁側から棚状の段を検出した。規模は120×28×12cmを測る。また、住居中央部よりやや西寄りの部分から土坑1基を検出した。規模は185×150×16cmを測る。

[堆積土] 掘り方部分を含めて13層に分層した。住居廃絶後の堆積土は、第1~10層で、床直に堆積する第5層中には住居焼失時の影響が見受けられない。遺物の出土についても壁際の上層からの出土で廃棄行為に伴う埋め戻し等の人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 171 (第335、336図)

[位置] グリッドLR・LS - 359・360で検出した。

[重複] S I - 172と重複している。S I - 172の床面に本遺構の壁溝が掘り込まれていることから、本遺構の方が新しい。

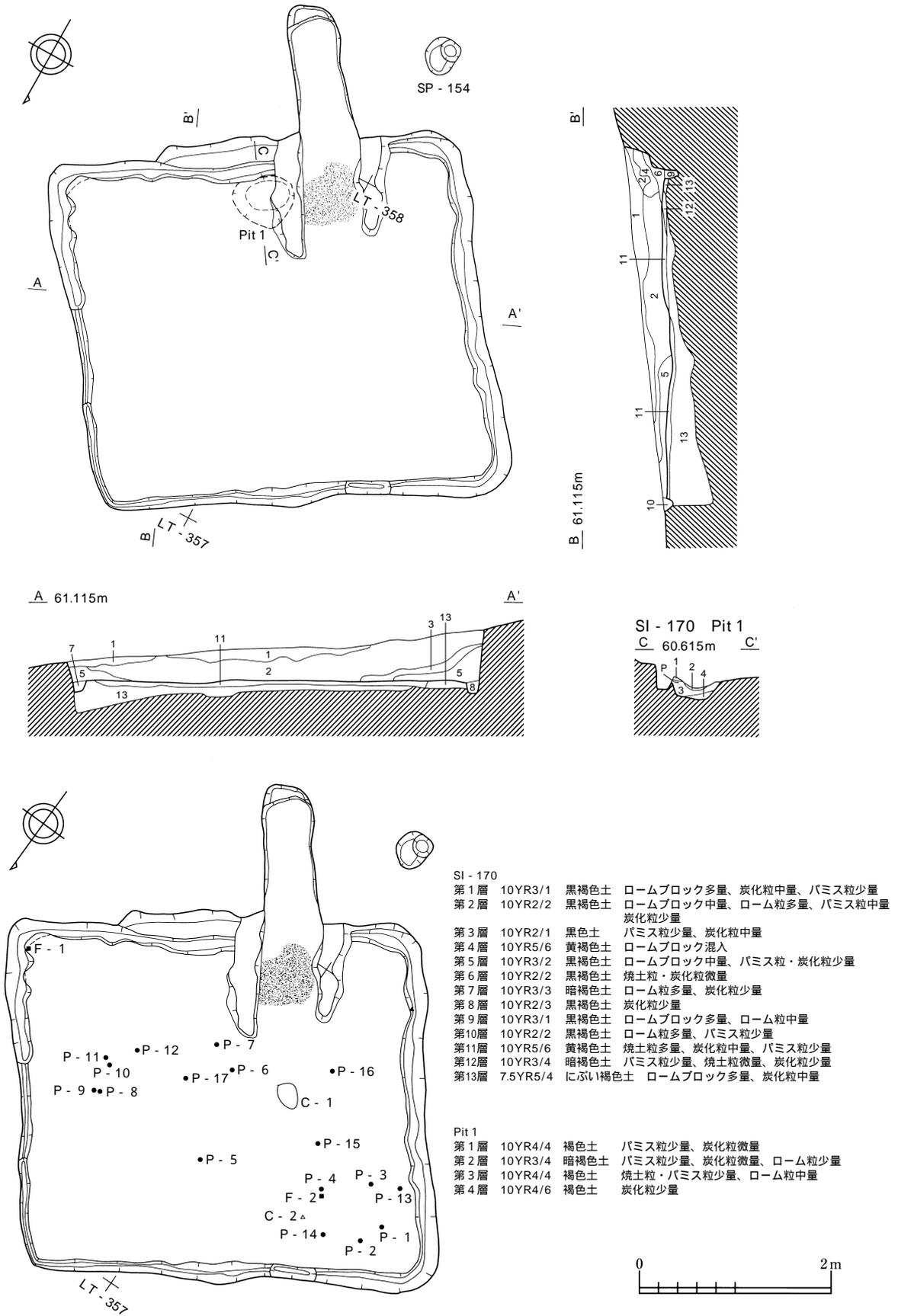
[平面形・規模] 方形を呈し、366×346×80cmを測る。床面積は12.605m²を測る。

[壁] 壁高は、北西壁26cm、南西壁22cm、北東壁11cmを測る。削平により南東壁は残存していない。断面形はaで、ほぼ垂直に立ち上がる。壁面は堅緻である。

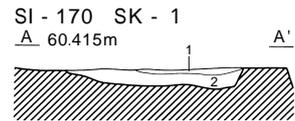
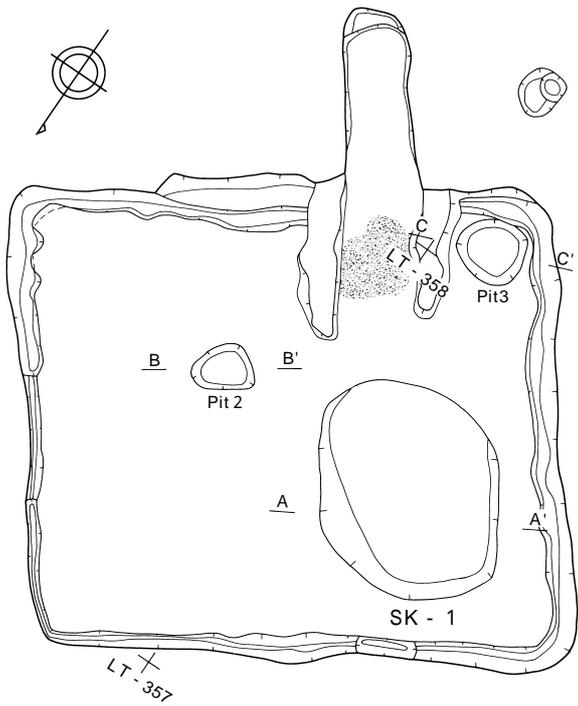
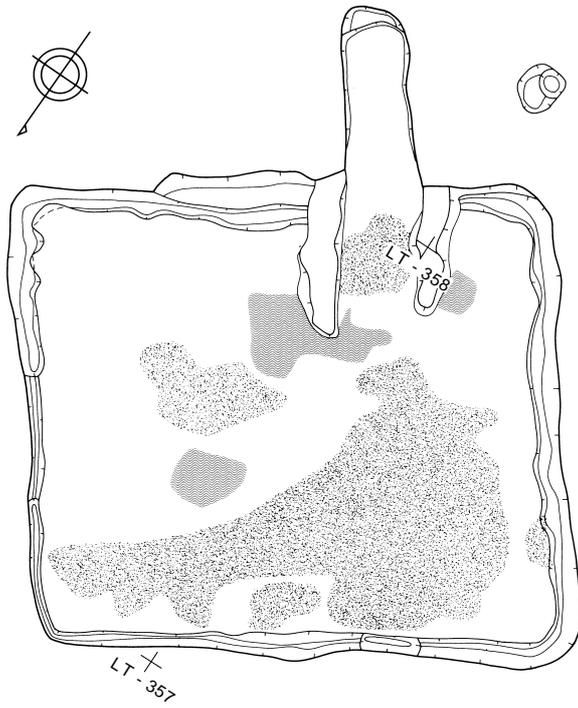
[床] 月見野火山灰層の地山を床面としている。部分的に掘り方を有し、灰黄褐色、黒褐色を主体とする土が充填されている。

[壁溝] ほぼ全周して検出した。深さは平均7cmを測る。

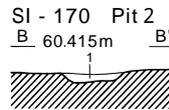
[ピット] 壁内から4基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 32×28×14cm、Pit 2 = 40×38×19cm、Pit 3 = 73×65×21cm、Pit 4 = 49×46×20cmを測る。主柱穴及び壁柱穴として認定できる



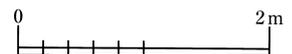
第332図 SI - 170



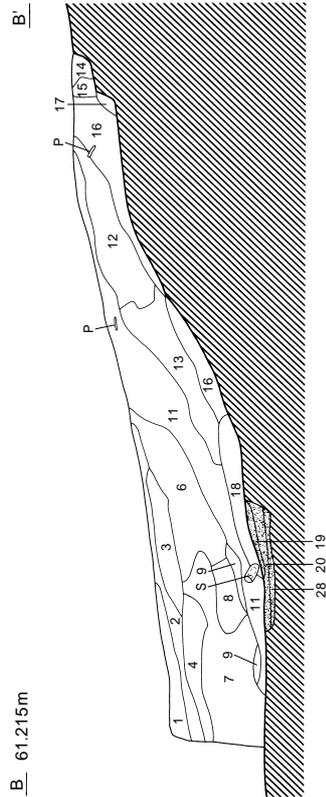
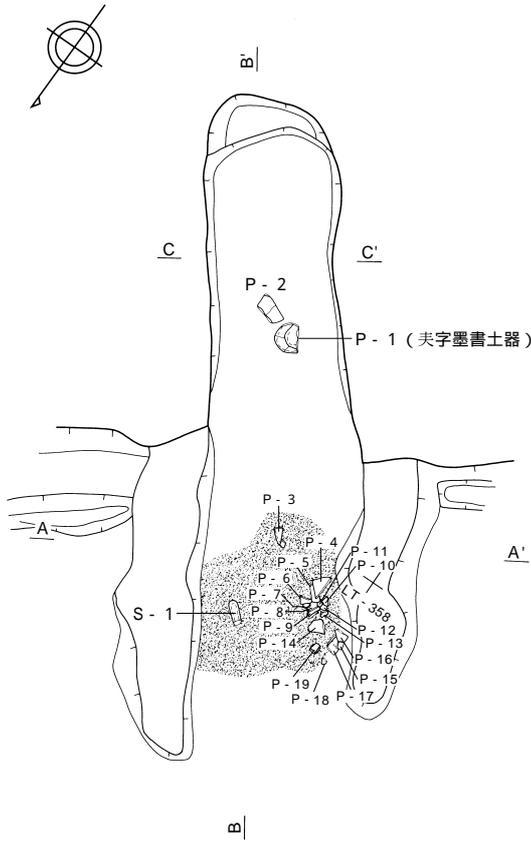
- SK - 1
- | | | | |
|-----|----------|------|---------------------------------------|
| 第1層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 焼土ブロック (5 YR4/8暗褐色土) 多量
炭化粒・ローム粒中量 |
| 第2層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ローム粒・ロームブロック多量、炭化粒少量 |



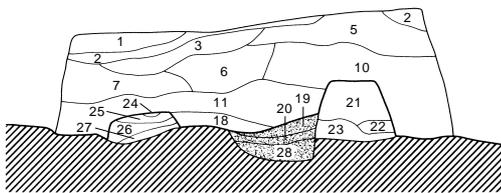
- Pit 2
- | | | | |
|-----|---------|-------|--------------|
| 第1層 | 5 YR3/6 | 暗赤褐色土 | パミス粒微量、炭化粒少量 |
|-----|---------|-------|--------------|
- Pit 3
- | | | | |
|-----|---------|---------|---------------------------------------|
| 第1層 | 5 YR4/4 | にぶい赤褐色土 | 焼土粒 (5 YR3/6暗赤褐色土) 多量
炭化粒中量、ローム粒少量 |
| 第2層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 焼土粒・炭化粒少量 |
| 第3層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 炭化粒多量、焼土粒・ローム粒中量 |



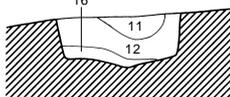
第333図 SI - 170



A 61.215m

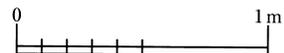


C 61.215m



SI - 170 カマド

- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 パミス粒少量、ロームブロック中量
- 第2層 10YR2/1 黒色土 パミス粒・焼土粒・炭化粒少量
褐色土 (10YR4/4)
- 第3層 10YR2/1 黒色土 ローム粒・焼土粒・パミス粒少量
- 第4層 10YR3/1 黒褐色土 ローム粒・炭化粒少量
- 第5層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 パミス粒少量、焼土粒・
ロームブロック中量、ローム粒少量
- 第6層 10YR2/1 黒褐色土 ローム粒中量、ロームブロック・
焼土・炭化粒少量
- 第7層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒中量、炭化粒少量
- 第8層 10YR3/2 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒多量、炭化粒中量
- 第9層 10YR4/4 褐色土 ロームブロック混入
- 第10層 10YR2/1 黒色土 ロームブロック少量、ローム粒中量、炭化粒少量
- 第11層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒中量、炭化粒少量
- 第12層 10YR4/4 褐色土 灰 (10YR7/2にぶい黄褐色土) 多量
パミス粒・炭化粒少量
- 第13層 10YR4/6 褐色土 炭化粒・パミス粒少量
- 第14層 5 YR3/3 暗赤褐色土 炭化粒・ローム粒少量
- 第15層 10YR4/6 褐色土 炭化粒少量
- 第16層 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒少量、炭化粒中量
- 第17層 10YR7/2 にぶい黄褐色土 灰混入
- 第18層 5 YR4/6 赤褐色土 炭化粒少量
- 第19層 5 YR4/4 にぶい赤褐色土 炭化粒・パミス粒中量
焼土粒 (5 YR4/8赤褐色土) 少量
- 第20層 5 YR4/6 赤褐色土 パミス粒中量
- 第21層 10YR3/3 暗褐色土 パミス粒中量、炭化粒少量、焼土粒微量
- 第22層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 パミス粒・焼土粒少量
- 第23層 7.5YR3/4 暗褐色土 パミス粒・炭化粒少量
- 第24層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化粒少量
- 第25層 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒少量、焼土粒微量
- 第26層 10YR3/4 暗褐色土 パミス粒・炭化粒・焼土粒少量
- 第27層 10YR5/8 黄褐色土 炭化粒・ローム粒少量
- 第28層 5 YR4/4 にぶい赤褐色土 パミス粒微量



第334図 SI - 170

ものはない。

[カマド] 住居北東壁3(73:27)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅72cm、煙道長45cmを測る。主軸はN-57°-Eである。袖は粘土によって構築されており、芯材と考えられる羽口や礫が出土している。火床面の範囲は46×46cmを測り、その上部には、黒褐色、暗褐色を主体とする土が堆積している。また、火床面の直上において、内面が黒色処理された土師器椀が倒位で出土しており、支脚として機能していたものと考えられる。煙道部は、火床面から10°の角度で緩やかに立ち上がる。本遺構のカマドは、燃焼部、煙道部の堆積において、天井部や袖部の崩落土に相当する土層が確認できず、黒褐色、暗褐色主体の土層がほぼプライマリーな堆積状況を呈していることから、カマドの破壊が行われている可能性がある。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方を含めて6層に分層した。住居南側が床面まで削平されているため、北側の堆積土のみ確認できた。黒褐色、暗褐色を主体とする土層が堆積している。自然堆積を呈すると思われる。

(設 楽)

S I - 172 (第335、337図)

[位 置] グリッドLR・LS-360で検出した。

[重 複] S I - 171と重複している。本遺構の床面にS I - 171の壁溝が掘り込まれていることから、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] S I - 171に切られているため、詳しい平面形、規模は不明であるが、長方形を呈し、390×242×58cmと推定できる。面積は11.148m²と推定できる。

[壁] 壁高は、南西壁40cm、南東壁30cm、北東壁14cmを測る。削平、切り合いにより北西壁は不明である。断面形はaで、やや外傾しながらほぼ垂直に立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 月見野火山灰層の地山を床面としている。部分的に掘り方を有し、黒褐色、黒色を主体とする土が充填されている。

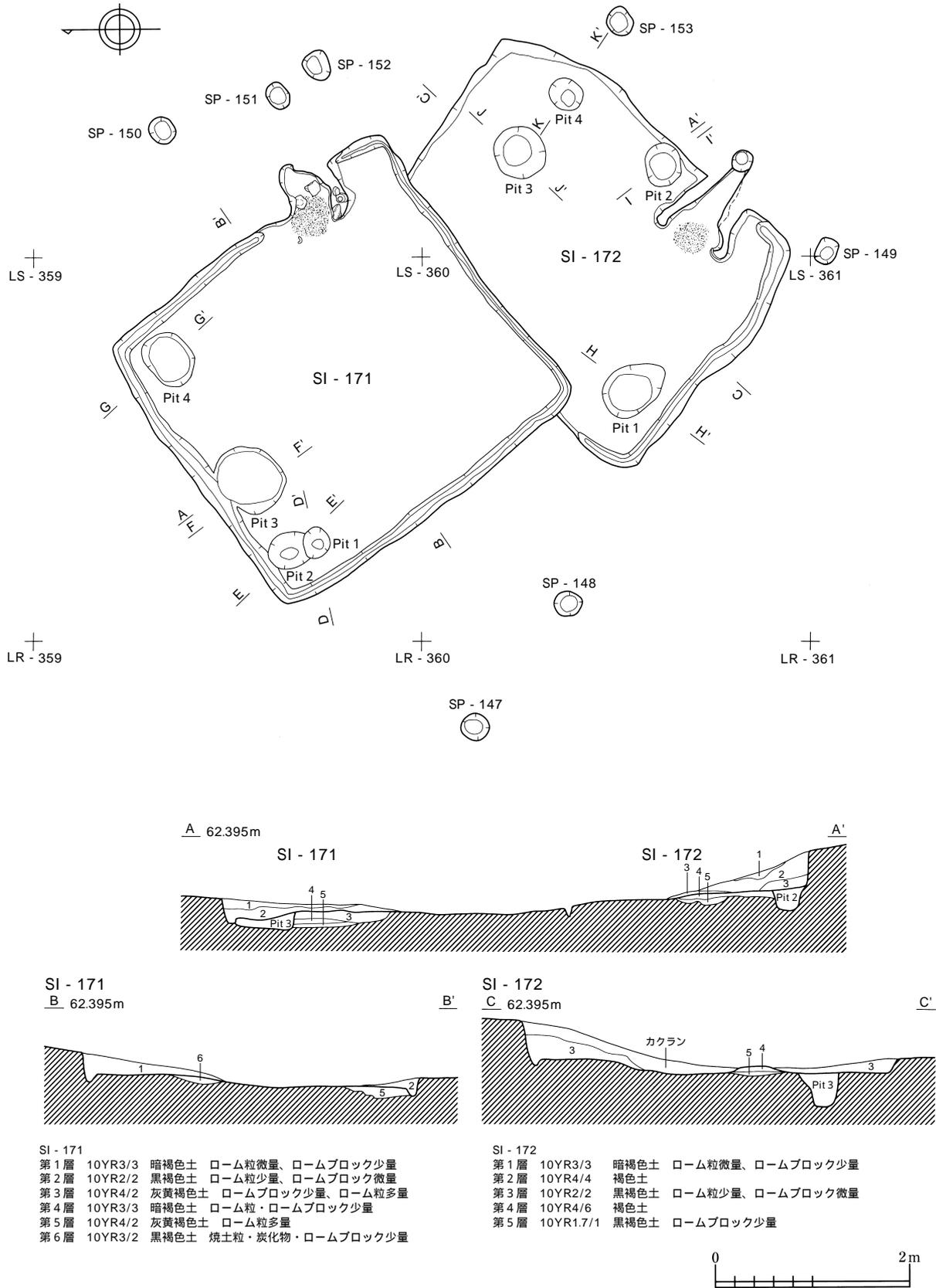
[壁 溝] 南西壁において検出した。深さは平均7cmを測る。

[ピット] 竪穴内から4基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 71×49×28cm、Pit 2 = 41×36×19cm、Pit 3 = 54×52×34cm、Pit 4 = 36×32×20cmを測る。主柱穴及び壁柱穴として認定できるものはない。

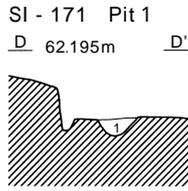
[カマド] 住居南東壁3(72:28)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅90cm、煙道長42cmを測る。主軸はN-122°-Eである。袖は粘土によって構築されており、芯材は装填されていない。火床面の範囲は37×35cmを測る。火床面の上部には、焼土ブロックを混入する暗褐色を挟んで、褐色を呈する粘土が堆積しており、天井部の崩落土と考えられる。煙道部は、火床面から15°の角度で緩やかに立ち上がり、住居の壁で急激に立ち上がった後、煙出部付近でピット状に落ち込む。燃焼部及び煙道部の堆積状況については、攪乱により不明な点が多いが、天井部の崩落土と考えられる褐色を呈する粘土、袖の残存状況からみて、本遺構のカマドは意図的な破壊は行われていない。

[その他の付属施設] なし。

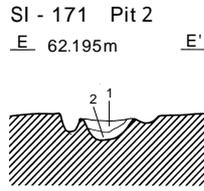
[堆積土] 掘り方を含めて5層に分層した。住居北側が床面まで削平されているため、南側の堆積土のみ確認できた。下層は黒褐色を呈する3層、上層は褐色を主体とする2層が堆積している。褐色を呈



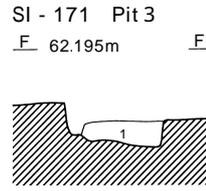
第335図 SI - 171 ・ SI - 172



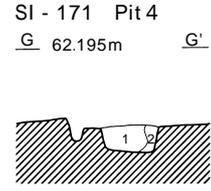
Pit 1
第1層 10YR3/2 黒褐色土 ロームブロック少量



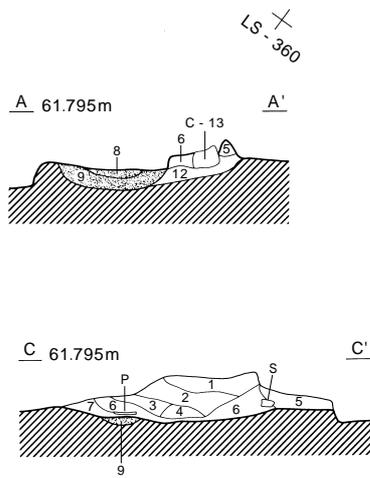
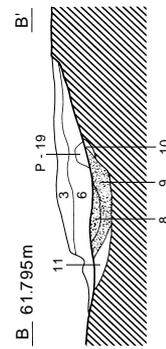
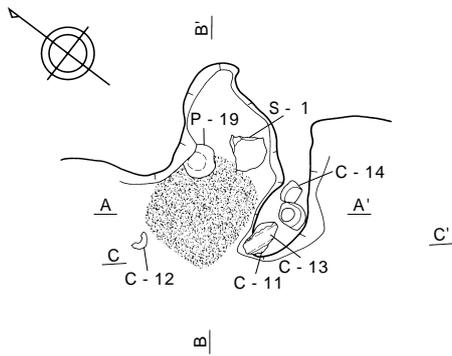
Pit 2
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒少量、炭化物微量
第2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ロームブロック少量



Pit 3
第1層 10YR3/2 黒褐色土 ロームブロック少量、炭化物・焼土粒微量



Pit 4
第1層 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒・バミス微量
第2層 10YR3/2 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒少量

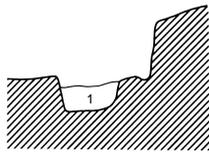


- SI - 171 カマド
- 第1層 7.5YR3/3 暗褐色土 炭化物少量、焼土やや多量
 - 第2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒少量、焼土粒混入
 - 第3層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物微量、焼土粒少量
 - 第4層 10YR6/6 明黄褐色土 炭化物微量
 - 第5層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 炭化物少量
 - 第6層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物・焼土粒・焼土ブロック微量
 - 第7層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物微量、焼土粒少量
 - 第8層 5YR6/8 橙色土
 - 第9層 5YR4/6 赤褐色土
 - 第10層 5YR3/2 黒褐色土 焼土粒少量
 - 第11層 7.5YR3/2 黒褐色土 焼土粒少量
 - 第12層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物・ロームブロック少量

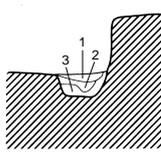


第336図 SI - 171

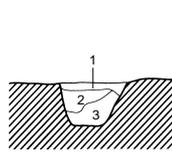
SI - 172 Pit 1
H 62.495m H'



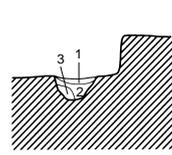
SI - 172 Pit 2
I 62.495m I'



SI - 172 Pit 3
J 62.495m J'



SI - 172 Pit 4
K 62.495m K'

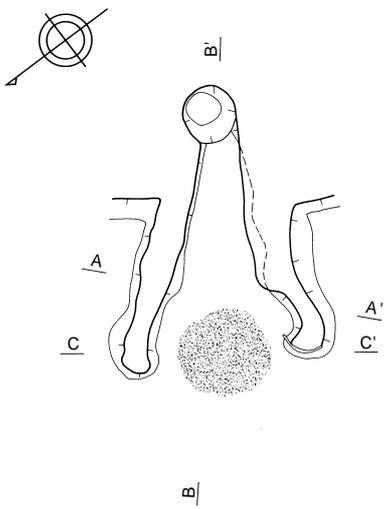


Pit 1
第1層 10YR1.7/1 黒色土 ロームブロック・ローム粒少量

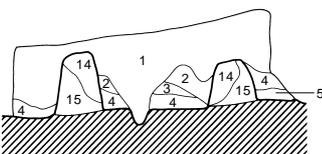
Pit 2
第1層 10YR3/2 黒褐色土 ロームブロック・パミス少量
第2層 10YR2/1 黒色土 パミス・焼土粒・炭化粒微量
第3層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量

Pit 3
第1層 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量
第2層 10YR2/1 黒色土 ローム粒・ロームブロックやや多量
第3層 10YR2/1 黒色土 ローム粒・ロームブロック少量

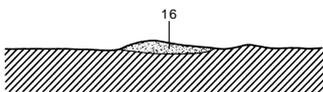
Pit 4
第1層 7.5YR3/3 暗褐色土 炭化物・焼土粒少量
第2層 7.5YR4/6 褐色土 ロームブロック少量、炭化物微量
第3層 10YR3/1 黒褐色土 ローム粒やや少量、炭化物微量



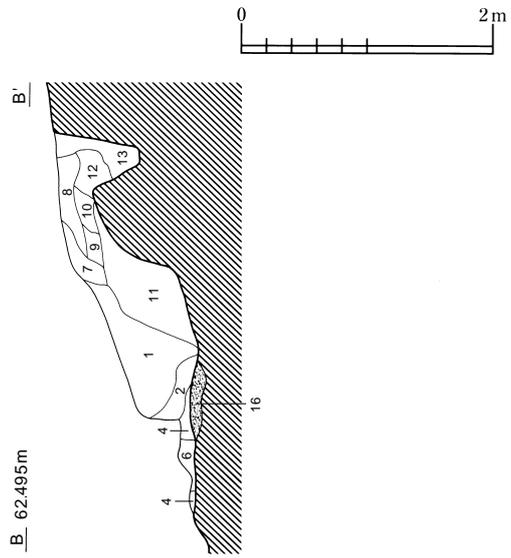
A 62.495m A'



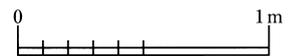
C 62.495m C'



LS-361



SI - 172 カマド
第1層 カクラン
第2層 7.5YR3/4 暗褐色土 粘土ブロック・焼土ブロック少量
第3層 10YR4/4 褐色土 粘土ブロック少量、焼土ブロック微量
第4層 10YR3/3 暗褐色土 焼土ブロック少量
第5層 10YR7/2 にぶい黄褐色土 炭化物微量
第6層 10YR4/6 褐色土 パミス微量
第7層 10YR4/6 褐色土
第8層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量
第9層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒やや多量、炭化物・焼土粒少量
第10層 10YR2/2 黒褐色土 焼土ブロック少量
第11層 7.5YR3/2 黒褐色土 上層に焼土ブロック少量
第12層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック少量、焼土粒微量
第13層 10YR3/1 黒褐色土 ロームブロック・炭化物微量
第14層 5 YR4/6 赤褐色土
第15層 7.5YR4/4 褐色土
第16層 5 YR4/4 にぶい赤褐色土



第337図 SI - 172

する3層が周辺から廃棄された土層と考えられることから、本遺構の堆積は人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 173 (第338、339図)

[位置] グリッドLU・LV - 358・359で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 攪乱により一部破壊されているが、不整形を呈し、366×346×55cmを測る。床面積は10.705m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁7cm、東壁26cm、南壁48cm、西壁22cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。

[壁溝] カマド設置部分を除き、ほぼ全周する形で検出した。深さは平均12cmを測る。

[ピット] 住居内から5基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 40×35×10cm、Pit 2 = 26×26×18cm、Pit 3 = 38×14×14cm、Pit 4 = 27×18×14cm、Pit 5 = 27×25×30cmを測る。いずれのピットについても柱穴として機能した可能性が考えられる。また、住居外にはSP - 159~161のピット群が点在しており、本遺構から検出したピットと同規模のものであるため、本遺構と関連した可能性についても考えられる。

[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁3(72:28)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅93cm、煙道長110cmを測る。主軸はN - 99° - Eである。燃烧部袖は、粘土により構築されている。燃烧部天井は残存しておらず、焼土粒等が堆積土中に混入するのみである。煙道部天井は第6層が相当し、若干崩落した堆積状況を呈している。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で8°に角度を変え立ち上がる。煙出開口部も残存しており、第4層が相当する。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 攪乱により一部土層堆積が乱されているが、残存部分について7層に分層した。概ね自然堆積状況を呈するが、住居西壁際の第3層上に炭化物が集中する範囲を検出しており、一部廃棄が伴った可能性が考えられる。

(木 村)

S I - 174 (第340図)

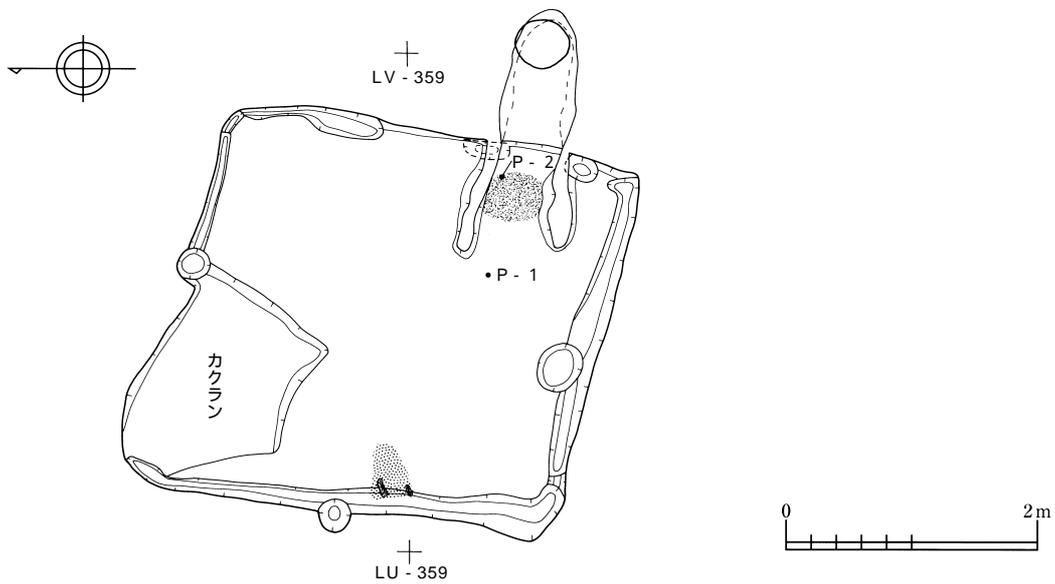
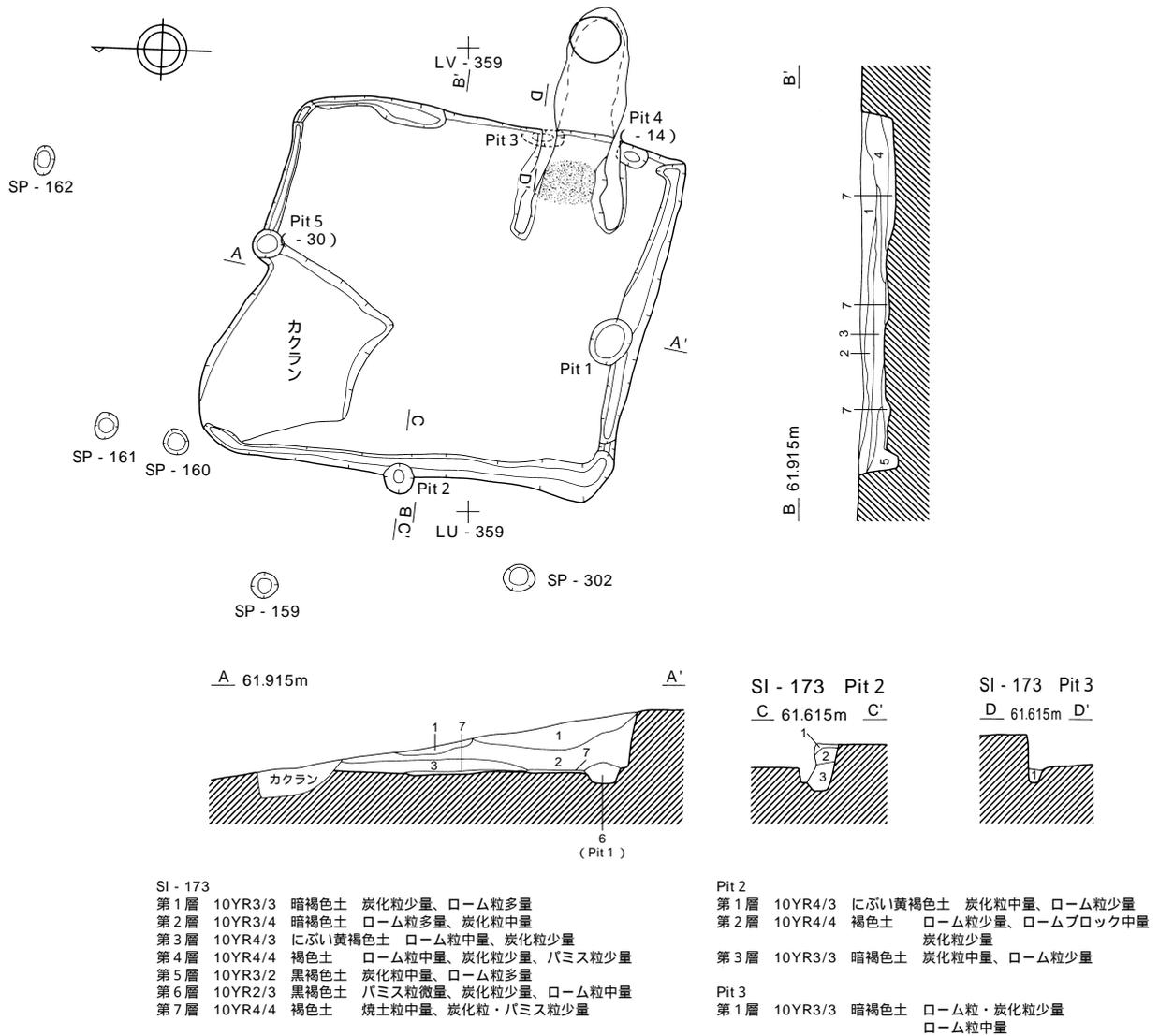
[位置] グリッドLW - 360、LX - 359・360で検出した。

[重複] SK - 197、198、199と重複している。本遺構の廃絶後、各土坑が構築されており、本遺構の方が古い。

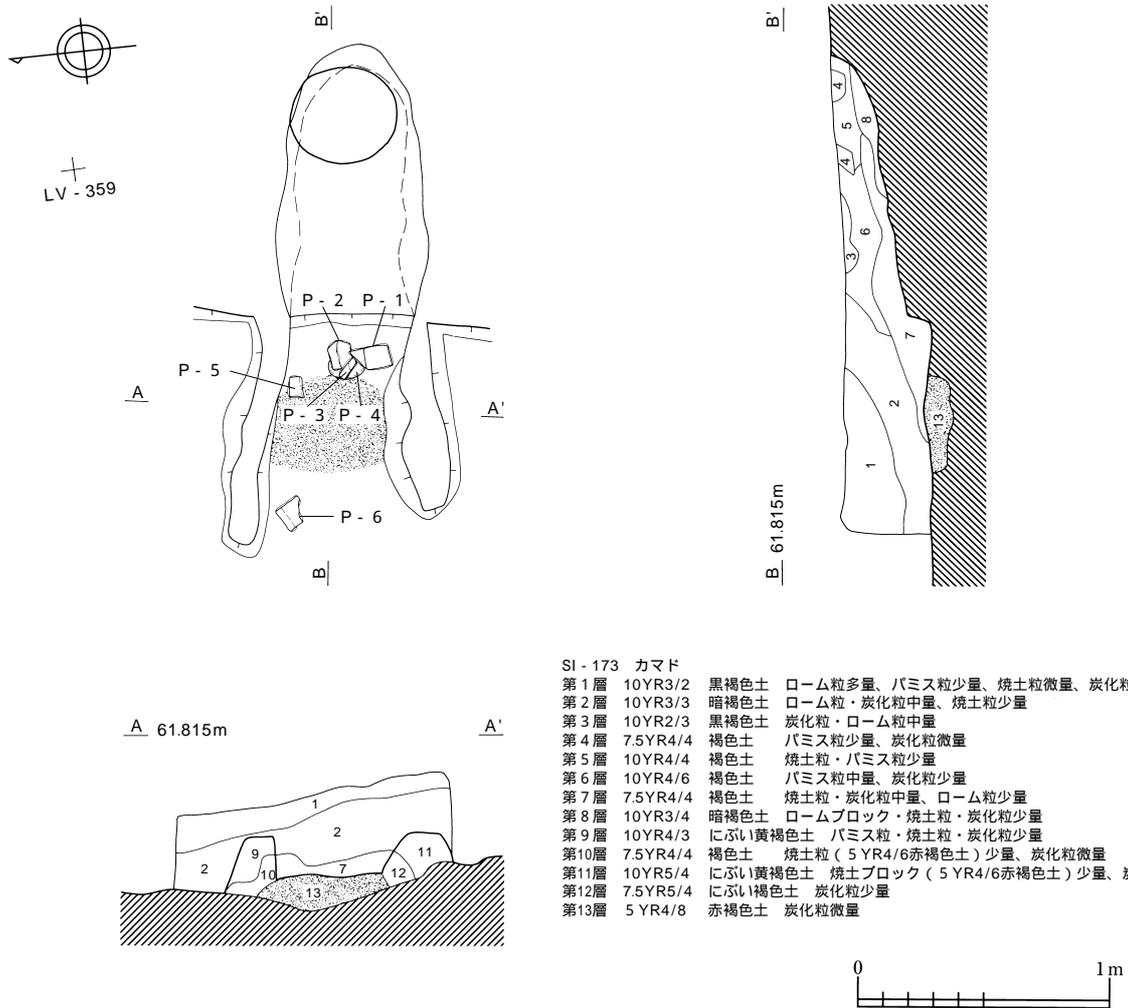
[平面形・規模] 台形を呈し、304×300×67cmを測る。床面積は9.049m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁25cm、東壁29cm、南壁36cm、西壁(65)cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 浅い掘り方を持ち、大谷火山灰層の地山を充填して貼り床としている。床面はやや起伏があり、堅緻である。



第338図 SI - 173



第339図 SI - 173

〔壁 溝〕 住居南北壁、東壁から部分的に検出した。深さは平均 8 cmを測る。

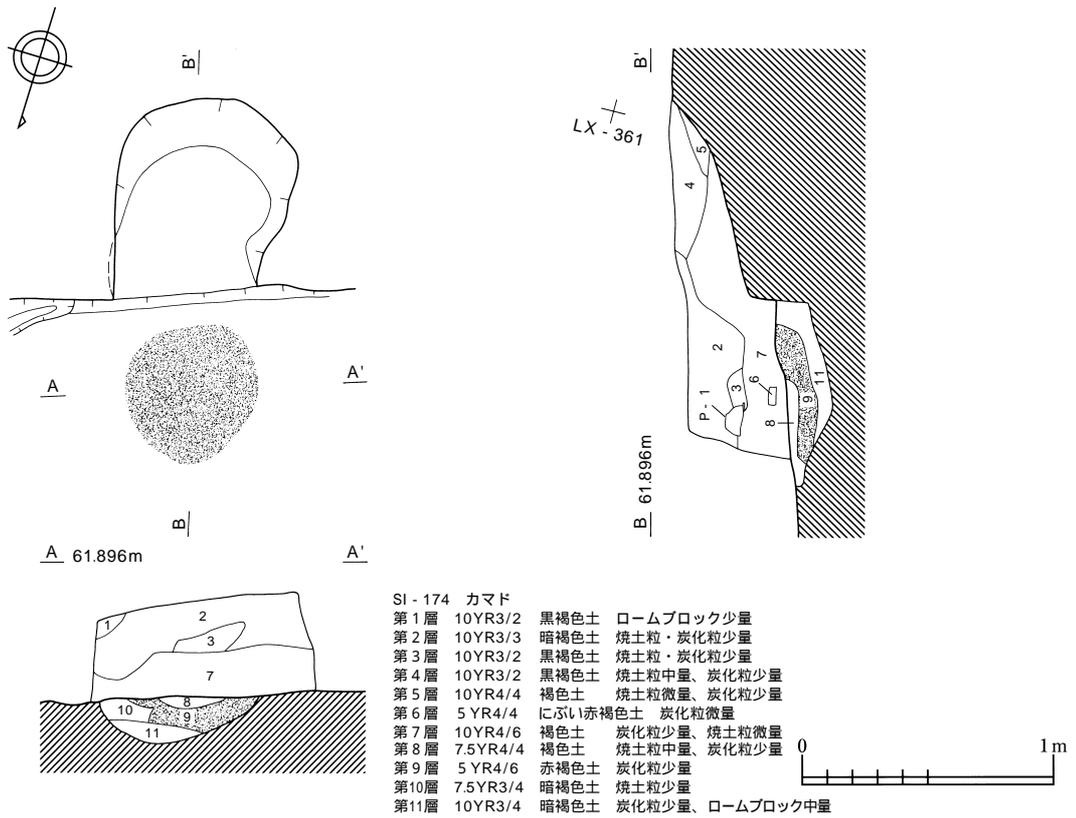
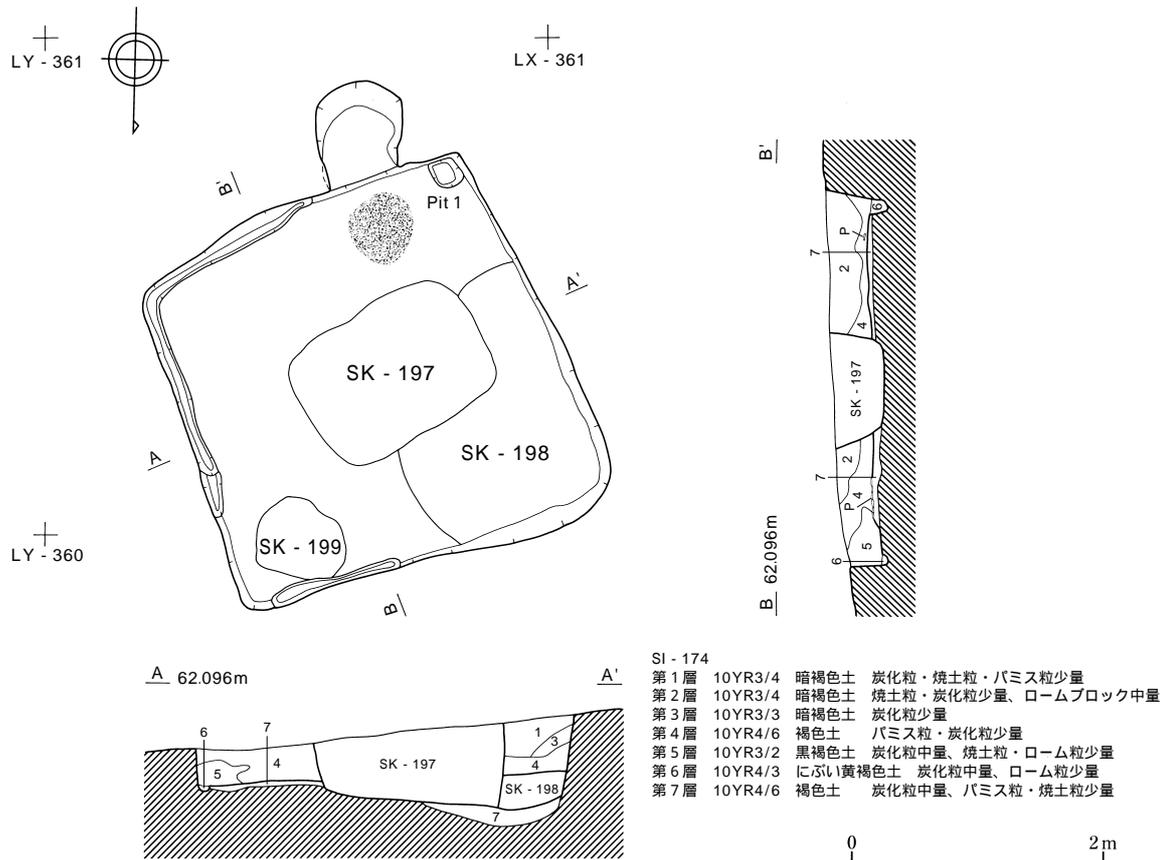
〔ピット〕 住居内から 1 基検出した。規模は24×21×6 cmを測る。

〔カマド〕 住居南壁側から 1 基検出した。南壁 3（72：28）の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部は残存しておらず、煙道長は78cmを測る。主軸はN - 165° - Eである。燃烧部、煙道部の上部構造は破壊されており、土層堆積上に残存していない。燃烧部下部は土坑状に掘り込みが行われ、暗褐色系の土を充填している。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で15°に角度を変え立ち上がる。

〔その他の付属施設〕 なし。

〔堆積土〕 掘り方部分を含めて 7 層に分層した。急激な埋め戻し等による人為堆積状況を呈している。また、土坑構築時にセクション面での確認プラン以外からも土坑に関連した遺物の出土が見られることから、堆積土そのものも住居に帰属する堆積ではなく、土坑廃絶後以降の堆積に起因する可能性が考えられる。

（木 村）



第340図 SI - 174

S I - 175 (第341、342図)

[位置] グリッドL Y・L Z - 357・358で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 長方形を呈し、364×329×21cmを測る。床面積は11.804㎡を測る。

[壁] 削平のため、南壁以外の壁はほとんど残存していない。南壁の壁高は、27cmを測る。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。

[壁溝] カマド設置部分を除いてほぼ全周する形で検出した。深さは平均17cmを測る。

[ピット] 住居内から5基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 36×29×11cm、Pit 2 = 46×(19)×8cm、Pit 3 = 68×64×35cmを測る。Pit 3の覆土中には焼土ブロック等が含まれ、カマド脇ピットとしての機能が考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁4(76:24)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅80cm、煙道長120cmを測る。主軸はN - 168.5° - Eである。燃烧部袖は自然礫を芯材として粘土を用いて構築している。燃烧部ならびに煙道部天井は第7、8層が相当し、崩落した堆積状況を呈する。カマド周辺部には多量の土器・自然礫等が出土しており、廃棄行為が行われた可能性が考えられる。

[その他の付属施設] なし。

(木村)

S I - 176 (第343図)

[位置] グリッドM C - 358で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 不整形を呈し、(242)×230×52cmを測る。床面積は5.248㎡を測る。

[壁] 東壁ならびに南壁の一部が削平されており、残存部分の壁高は、北壁15cm、南壁4cm、西壁30cmを測る。断面形は(a)で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面はやや脆弱である。

[床] 削平を受けている。大谷火山灰層の主体の地山を貼り床として貼り付けている。床面は起伏があり、堅緻である。

[壁溝] 東壁側から検出した。深さは(9)cmを測る。

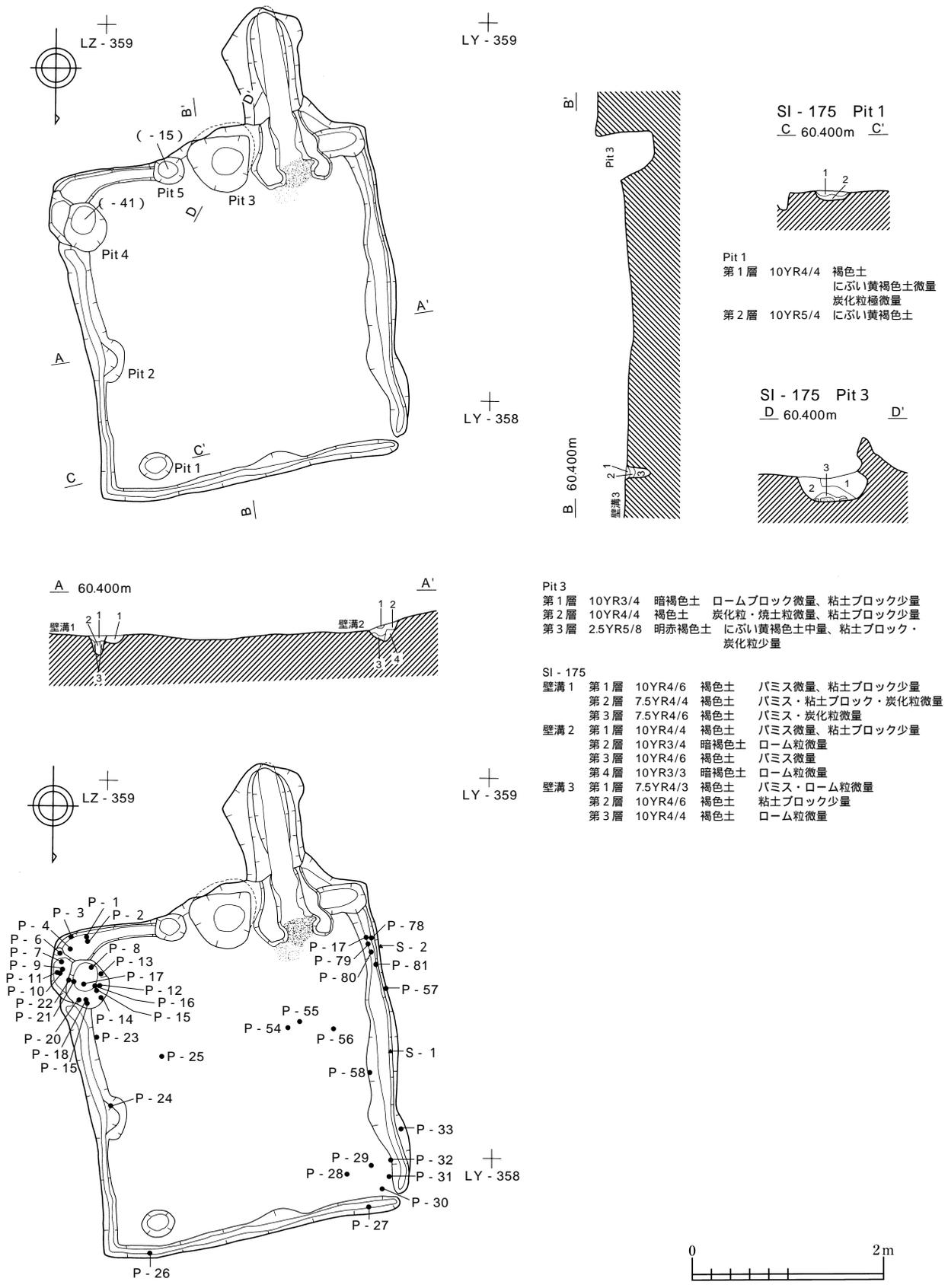
[ピット] 住居内から1基検出した。規模は96×65×9cmを測る。堆積土中に焼土ブロックがやや多量に含まれる。

[カマド] 住居北壁側から赤化面ならびに焼土層を検出した。残存状況から半地下式のカマドの可能性が考えられる。残存部分での推定煙道長は18cmである。主軸はN - 20° - Wである。構築についての詳細は不明である。

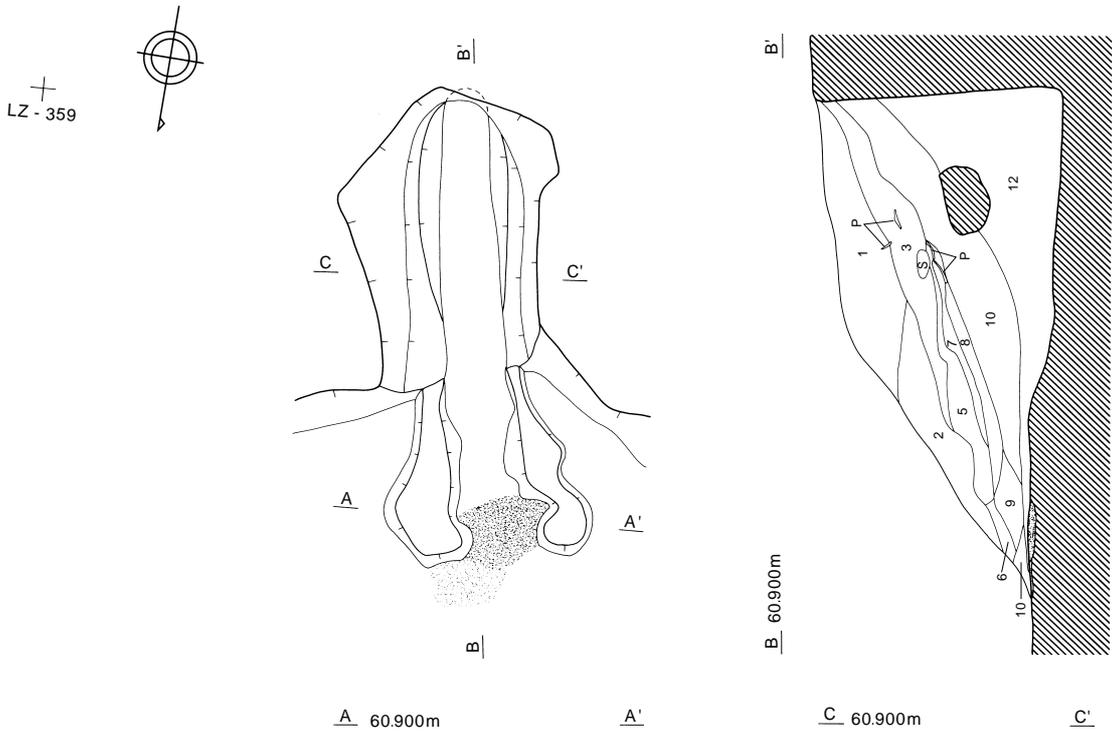
[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 9層に分層した。住居廃絶後以降の堆積土は第1～8層であり、概ね自然堆積状況を呈する。

(木村)



第341図 SI - 175

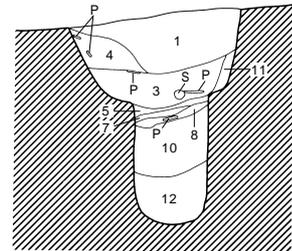
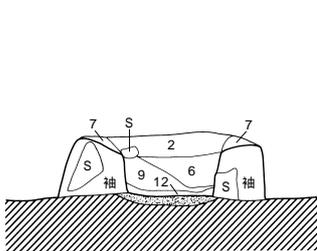


A 60.900m

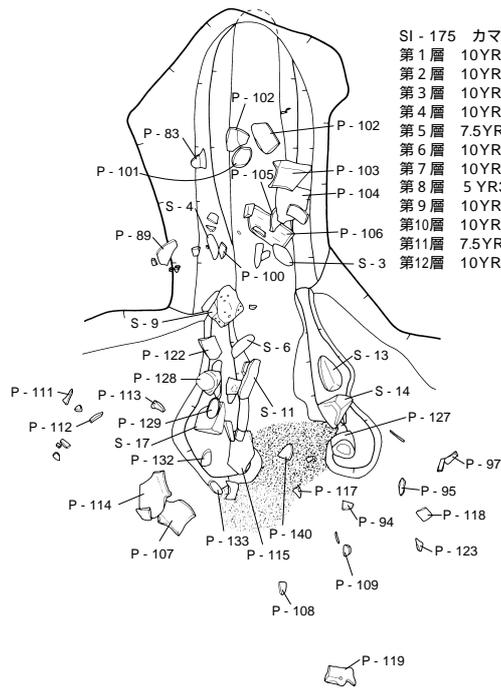
A'

C 60.900m

C'



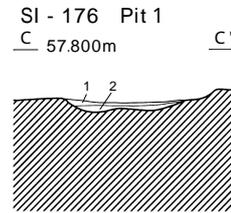
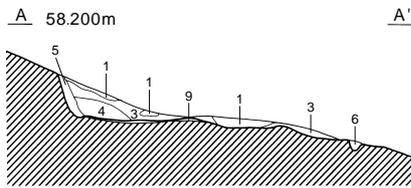
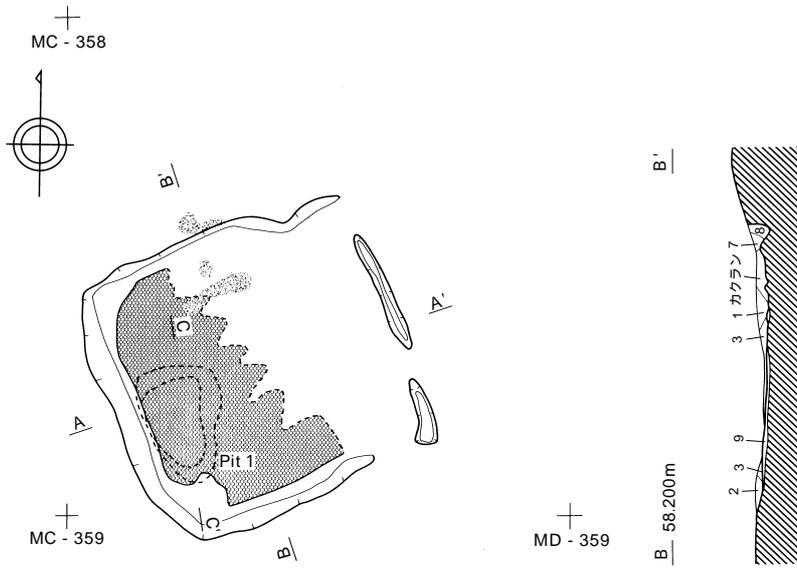
LZ-359



- SI - 175 カマド
- | | | | |
|------|----------|---------|---------------------|
| 第1層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 黄褐色土ブロック少量、バミス微量 |
| 第2層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 炭化粒・バミス・ローム粒微量 |
| 第3層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 炭化粒・ローム粒微量、焼土粒極微量 |
| 第4層 | 10YR3/4 | 褐色土 | バミス・炭化粒微量 |
| 第5層 | 7.5YR4/6 | 褐色土 | バミス極微量、焼土中量 |
| 第6層 | 10YR4/6 | 褐色土 | バミス・炭化粒・焼土粒微量 |
| 第7層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 褐色土少量、バミス・炭化粒・焼土粒微量 |
| 第8層 | 5YR3/4 | 暗赤褐色土 | 褐色土少量、バミス微量 |
| 第9層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 炭化粒・焼土粒少量、ローム粒微量 |
| 第10層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | バミス極微量、焼土微量 |
| 第11層 | 7.5YR5/6 | 明褐色土 | 褐色土少量、炭化粒・バミス微量 |
| 第12層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 明褐色土・炭化粒・焼土ブロック微量 |

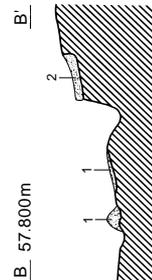
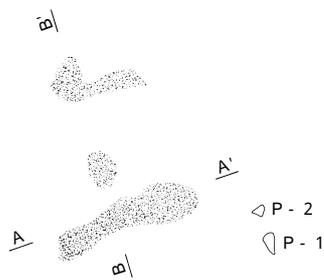
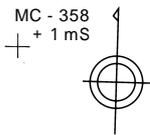


第342図 SI - 175

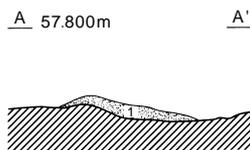


- SI - 176
- | | | | |
|-----|----------|------|----------------|
| 第1層 | 7.5YR5/8 | 明褐色土 | □-ム粒・炭化粒極微量 |
| 第2層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | □-ム粒・炭化粒少量 |
| 第3層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | □-ム粒少量、炭化粒微量 |
| 第4層 | 10YR4/4 | 褐色土 | □-ム粒少量、炭化粒微量 |
| 第5層 | 10YR4/6 | 褐色土 | □-ム粒やや多量、炭化粒少量 |
| 第6層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | □-ム粒少量 |
| 第7層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | □-ム粒少量、炭化粒極微量 |
| 第8層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | □-ム粒極微量 |
| 第9層 | 10YR4/6 | 褐色土 | |

- Pit 1
- | | | |
|-----|---------|-------------------------|
| 第1層 | 10YR4/6 | 褐色土 |
| 第2層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 炭化粒・焼土粒・焼土ブロックやや多量 |



- SI - 176 カマド
- | | | |
|-----|---------|---------------|
| 第1層 | 5 YR3/4 | 暗赤褐色土 炭化粒やや多量 |
| 第2層 | 5 YR3/6 | 暗赤褐色土 炭化粒微量 |



第343図 SI - 176

S I - 177 (第344、345図)

[位置] グリッドL G・L H - 366・367で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、386×380×51cmを測る。床面積は15.132m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁25cm、東壁48cm、南壁47cm、西壁34cmを測る。断面形はaで、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、起伏がある。床面は堅緻である。

[壁溝] 西壁の一部から検出した。深さは6cmを測る。

[ピット] 住居内から5基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 28×19×5cm、Pit 2 = 87×73×20cm、Pit 3 = 62×59×18cm、Pit 4 = 27×24×11cm、Pit 5 = 56×54×28cmを測る。明確な支柱配置は不明である。Pit 5は、堆積土中に焼土粒が含まれ、カマド脇ピットとしての機能が考えられる。また、Pit 3についても同様の機能が考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(68:32)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅94cm、煙道長126cmを測る。主軸はN - 143° - Eである。燃烧部袖は、自然礫を芯材とし、粘土を用いて構築している。燃烧部ならびに煙道部天井は残存しておらず、局所的にブロック化した状態で堆積土中に混入するのみである。燃烧部前庭部から羽口が出土しており、芯材として用いられた可能性が考えられる。煙道は、住居壁際から58°の角度で立ち上がり、途中で20°に角度を変え、全煙道長2/3の位置で5°の傾斜に変え、煙出部付近で15°の角度で立ち上がる。煙出部付近は煙道部の軸線よりやや西寄りに軸線を変えている。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 6層に分層した。暗褐色土・褐色土の明色系土が主体で、ロームブロックが多量に含まれる。埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 178 (第346~348図)

[位置] グリッドL J・L K - 367・368で検出した。

[重複] なし。

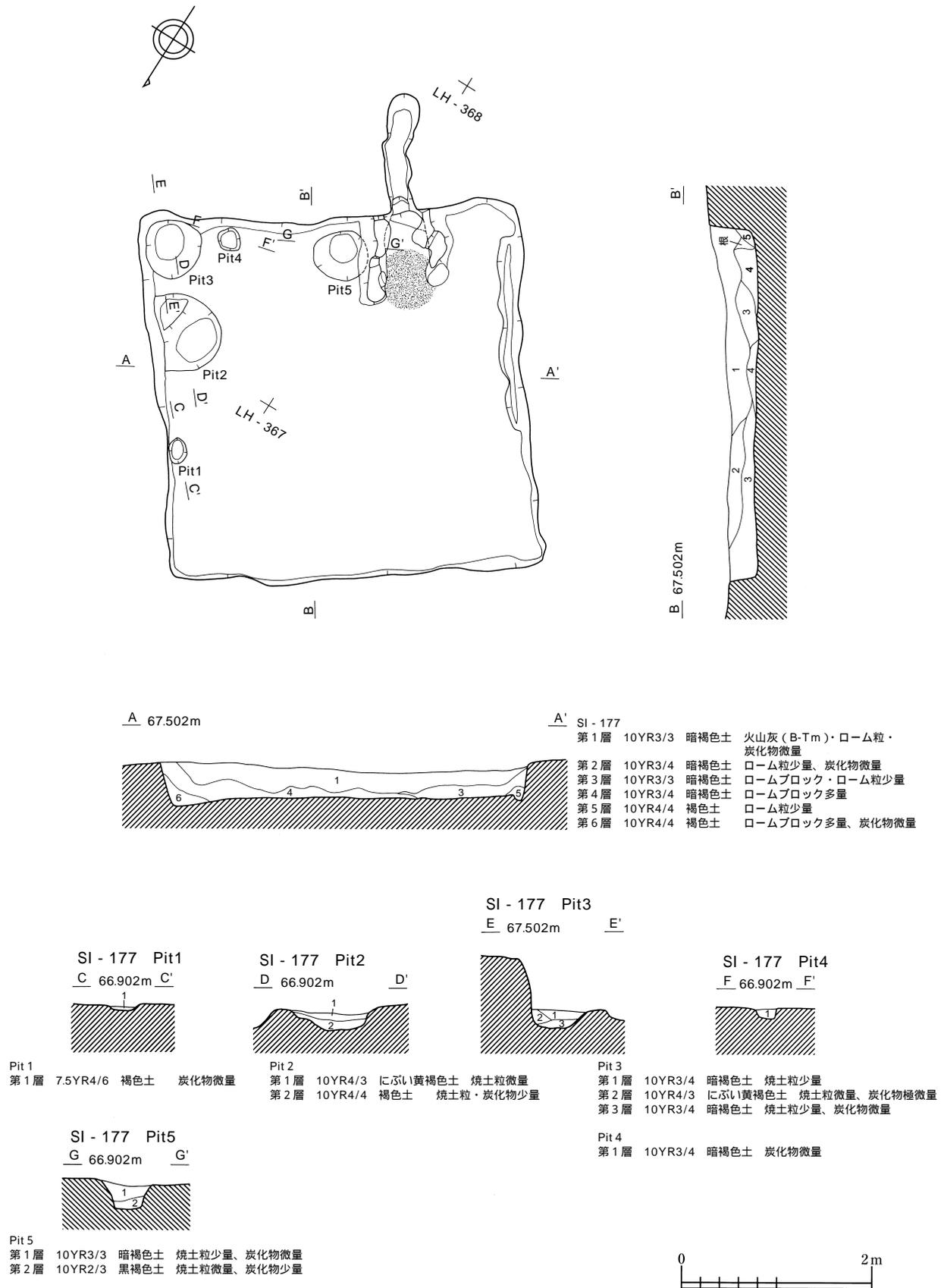
[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、368×368×60cmを測る。床面積は12.871m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁42cm、東壁27cm、南壁41cm、西壁60cmを測る。断面形はcで、壁上部で一部緩やかな立ち上がりが見られる。南壁側の一部が黒褐色土とロームブロックの混合層を壁面としている部分があり、やや脆弱である。それ以外の壁面は堅緻である。

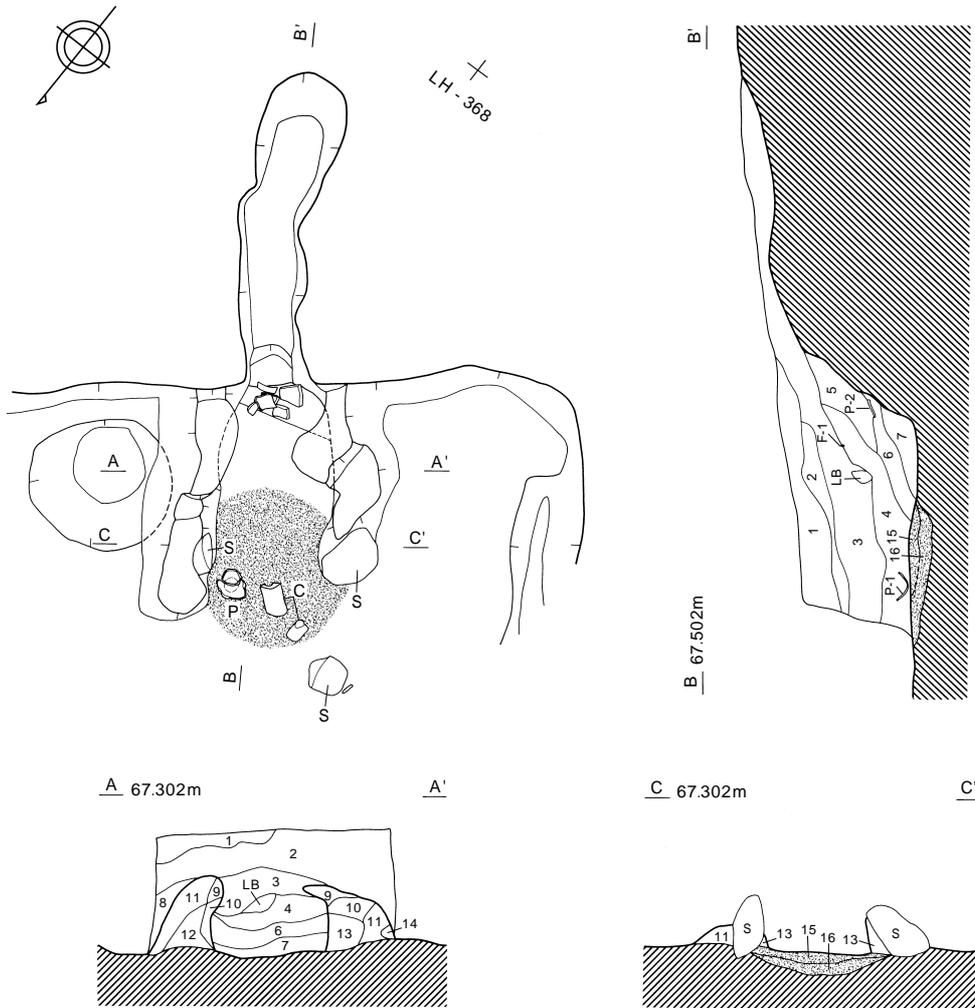
[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。また、住居床面から炭化材・炭化物等を検出しており、本遺構は焼失住居である。

[壁溝] なし。

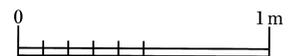
[ピット] 住居内から7基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 72×62×7cm、Pit 2 = 51×46×13cm、Pit 3 = 49×41×18cm、Pit 4 = 49×44×17cm、Pit 5 = 58×58×19cm、Pit 6 = 101×35×21cm、Pit 7 = 61×57×27cmを測る。支柱穴としての機能が考えられるピットは、Pit 3、4、6、7であるが、Pit 2についても柱穴として機能した可能性が考えられる。いずれのピットの堆積土



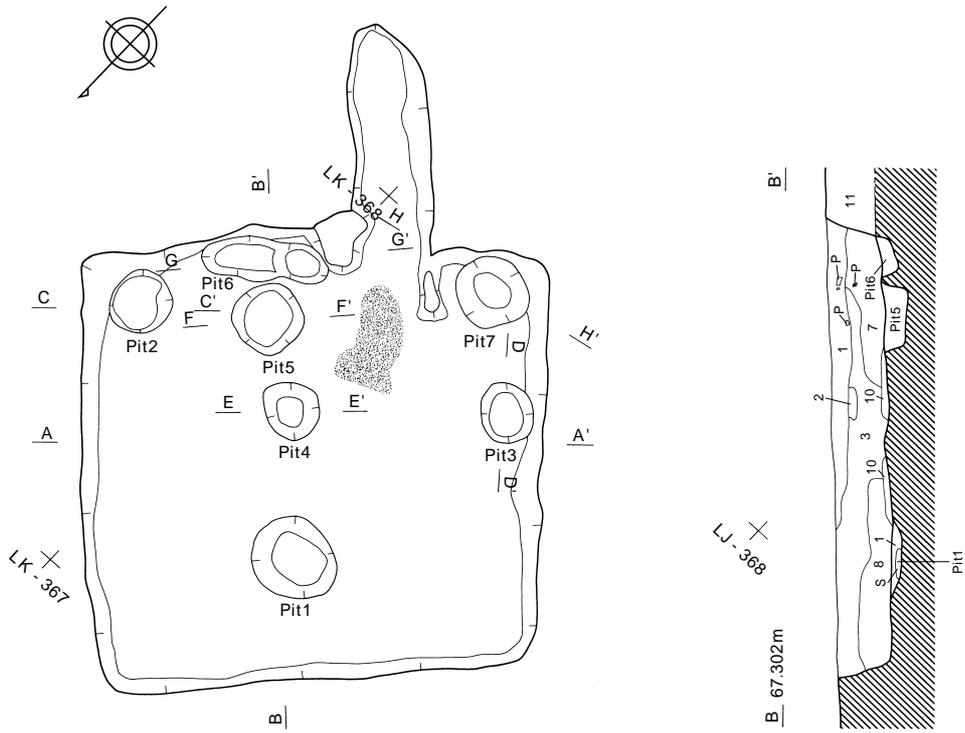
第344図 SI - 177



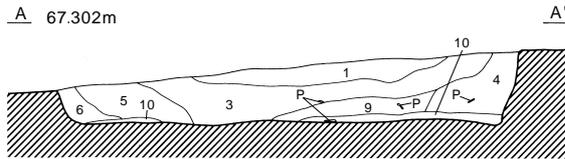
- SI - 177 カマド
- | | | | |
|------|----------|---------|------------------|
| 第1層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ローム粒・炭化物微量 |
| 第2層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ローム粒・炭化物少量 |
| 第3層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 灰中量、ローム粒少量、炭化物微量 |
| 第4層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | ローム粒多量、炭化物・焼土粒微量 |
| 第5層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 炭化物微量 |
| 第6層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 焼土粒多量 |
| 第7層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土粒多量 |
| 第8層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒多量 |
| 第9層 | 10YR8/4 | 浅黄橙色土 | 焼土粒少量 |
| 第10層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 焼土粒中量 |
| 第11層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 灰中量 |
| 第12層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 灰微量 |
| 第13層 | 7.5YR4/4 | 褐色土 | ローム粒少量 |
| 第14層 | 7.5YR4/3 | 褐色土 | 灰中量、焼土粒少量 |
| 第15層 | 2.5YR5/8 | 明赤褐色土 | |
| 第16層 | 5 YR3/6 | 暗赤褐色土 | |



第345図 SI - 177

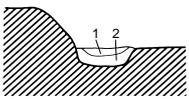


- SI - 178
- | | | | |
|------|---------|---------|---------------------------|
| 第1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ローム・焼土・炭化物極微量、火山灰(B-Tm)微量 |
| 第2層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 火山灰(B-Tm)多量 |
| 第3層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 炭化物極微量、焼土・ローム・火山灰(B-Tm)微量 |
| 第4層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 炭化物微量、焼土極微量、ローム少量 |
| 第5層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 焼土・炭化物極微量、粘土少量 |
| 第6層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム微量 |
| 第7層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 炭化物・焼土少量、ローム微量 |
| 第8層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 粘土少量、炭化物微量 |
| 第9層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 焼土少量、炭化物極微量、ローム少量 |
| 第10層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 炭化物多量 |
| 第11層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ロームブロック多量 |
- Pit 1
- | | | | |
|-----|---------|------|-----------|
| 第1層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 粘土・炭化物極微量 |
|-----|---------|------|-----------|



SI - 178 Pit2

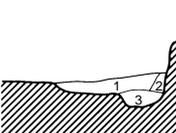
C 67.002m C'



- Pit 2
- | | | | |
|-----|---------|------|-----------------|
| 第1層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 炭化物・焼土・ローム微量 |
| 第2層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土・ローム極微量、炭化物微量 |
- Pit 3
- | | | | |
|-----|---------|-------|-----------------|
| 第1層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 焼土・ローム微量、炭化物極微量 |
| 第2層 | 5YR3/4 | 暗赤褐色土 | ローム・焼土微量 |

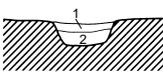
SI - 178 Pit6

G 67.302m G'



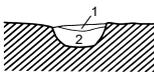
SI - 178 Pit3

D 66.802m D'



SI - 178 Pit4

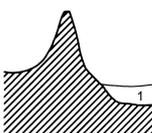
E 66.802m E'



- Pit 4
- | | | | |
|-----|----------|------|-----------------|
| 第1層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 炭化物多量、焼土微量 |
| 第2層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土・ローム少量、炭化物極微量 |
- Pit 5
- | | | | |
|-----|----------|------|-------------------|
| 第1層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土少量、炭化物微量 |
| 第2層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 焼土微量、ローム少量、炭化物極微量 |
| 第3層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土・炭化物極微量 |

SI - 178 Pit7

H 67.302m H'



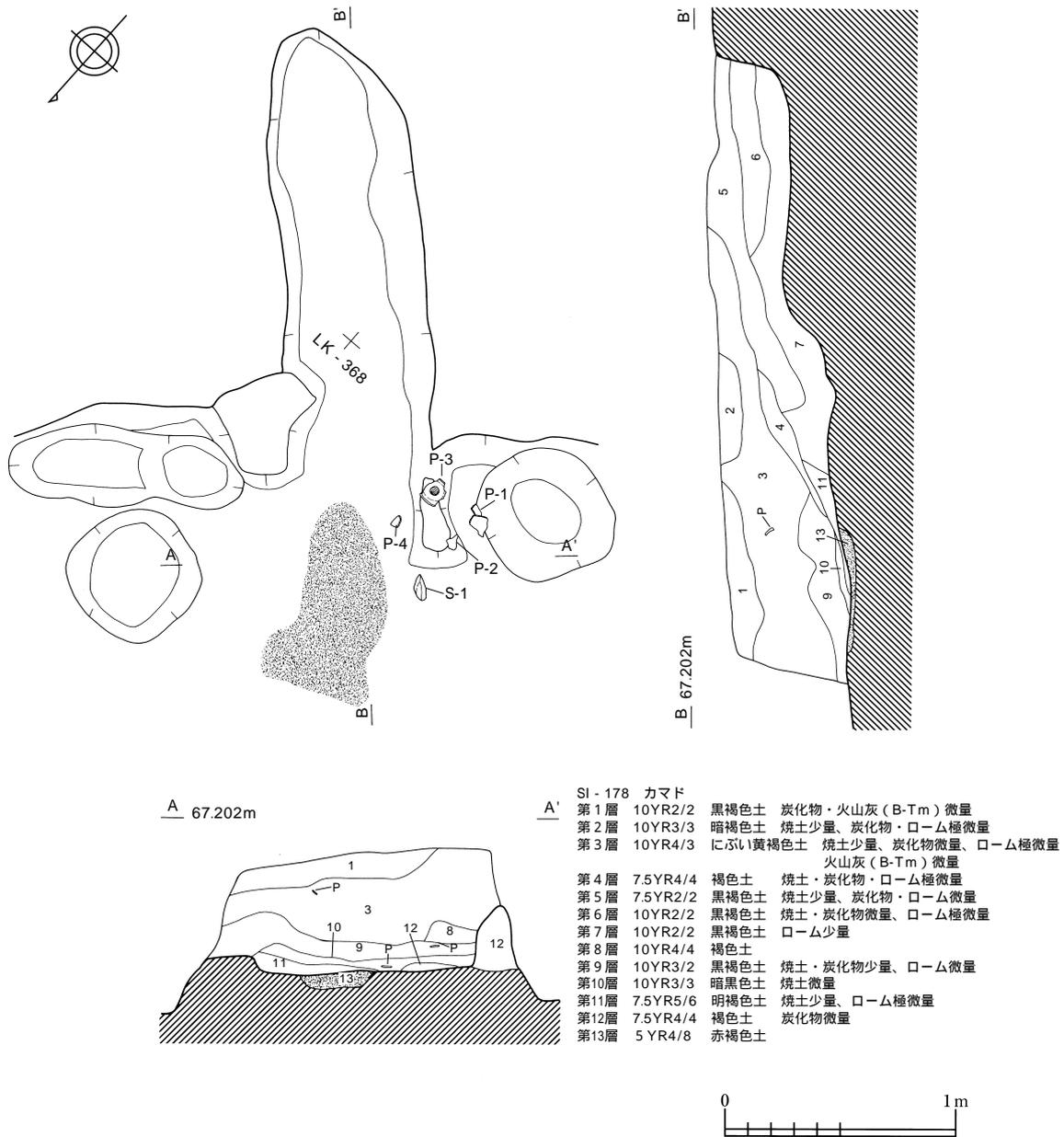
- Pit 6
- | | | | |
|-----|----------|------|---------------|
| 第1層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 焼土少量、炭化物・粘土微量 |
| 第2層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土・粘土微量 |
| 第3層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 粘土・炭化物・ローム微量 |
- Pit 7
- | | | | |
|-----|---------|------|------------------|
| 第1層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土微量、ローム極微量、粘土少量 |
|-----|---------|------|------------------|



第346図 SI - 178



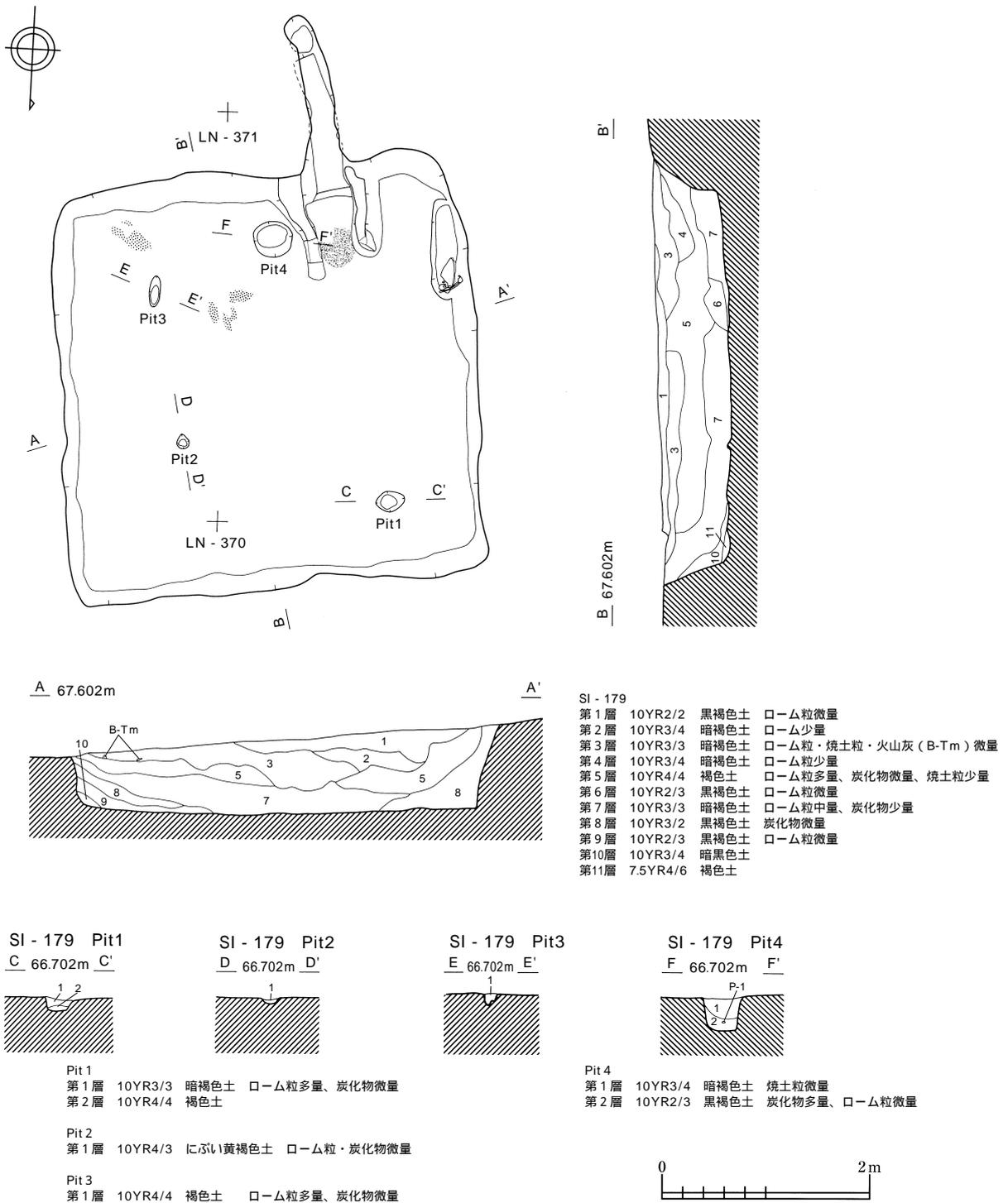
第347図 SI - 178



第348図 SI - 178

中にも焼土粒・炭化粒が含まれ、焼失後の成層過程によるものである。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(64:36)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅76cm、煙道長150cmを測る。主軸はN-135°-Eである。燃烧部袖は、粘土を用いて構築しており、左袖部分はほとんど残存していない。また、燃烧部天井は、第11層が相当したものと考えられ、カマド堆積土中に部分的に堆積するのみである。煙道部についても燃烧部と同様で、ほとんど残存していない。煙道は、住居壁際より手前の部分から立ち上がり、住居壁際よりやや奥に入り込んだ部分から段状に立ち上がり、ほぼ平坦なまま煙出部へ向かう。煙出奥壁は、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。



第349図 SI - 179

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 11層に分層した。床面直上に堆積する第10層は、焼失時点で生じた炭化材の包含層である。上位の土層については、焼土粒・炭化粒を含み、破片化した遺物の出土があったことから、一部廃棄を伴う堆積状況であることが考えられる。第1～3層中からB-Tm火山灰を検出した。

(木村)

S I - 179 (第349、350図)

[位置] グリッドLM・LN - 369・370で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、414×412×90cmを測る。床面積は16.13m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁60cm、東壁48cm、南壁62cm、西壁82cmを測る。断面形はcで、壁上面で一部緩やかな立ち上がりが見られる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。また、住居南壁側床直から炭化物を少量検出している。

[壁溝] 西壁の一部で検出した。深さは10cmを測る。

[ピット] 住居内から4基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 28×21×12cm、Pit 2 = 14×11×5cm、Pit 3 = 31×10×11cm、Pit 4 = 38×36×33cmを測る。Pit 4のピットを除いていずれのピットも小規模であり、支柱穴としての機能を充足しなかったものと考えられる。Pit 4については、堆積土中に焼土粒を含みカマド脇ピットとしての機能が考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(68:32)の位置から検出している。構造は、地下式で、袖部幅76cm、煙道長150cmを測る。主軸はN - 167° - Eである。燃烧部袖は、自然礫を芯材としており、粘土を用いて構築している。燃烧部天井は、第20層が相当し崩落した堆積状況を呈している。煙道部は、大谷火山灰層を掘り込んで構築しているが、廃絶の時点で天井が崩落しており、第9、10層が相当する。煙道は、ほぼ平坦に煙出部へ向かい、ピット状に掘り込まれた煙出と合流する。煙出奥壁は、垂直に近い形で立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 11層に分層した。住居中央に堆積する第5層はローム粒が多量に含まれ、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。上位に堆積する第3層中にB - T m火山灰を粒状に検出した。

(木村)

S I - 180 (第351、352図)

[位置] グリッドLL・LM - 367・368で検出した。

[重複] SP - 169と重複している。本遺構がSP - 169に切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 台形を呈し、368×330×66cmを測る。床面積は11.648m²を測る。

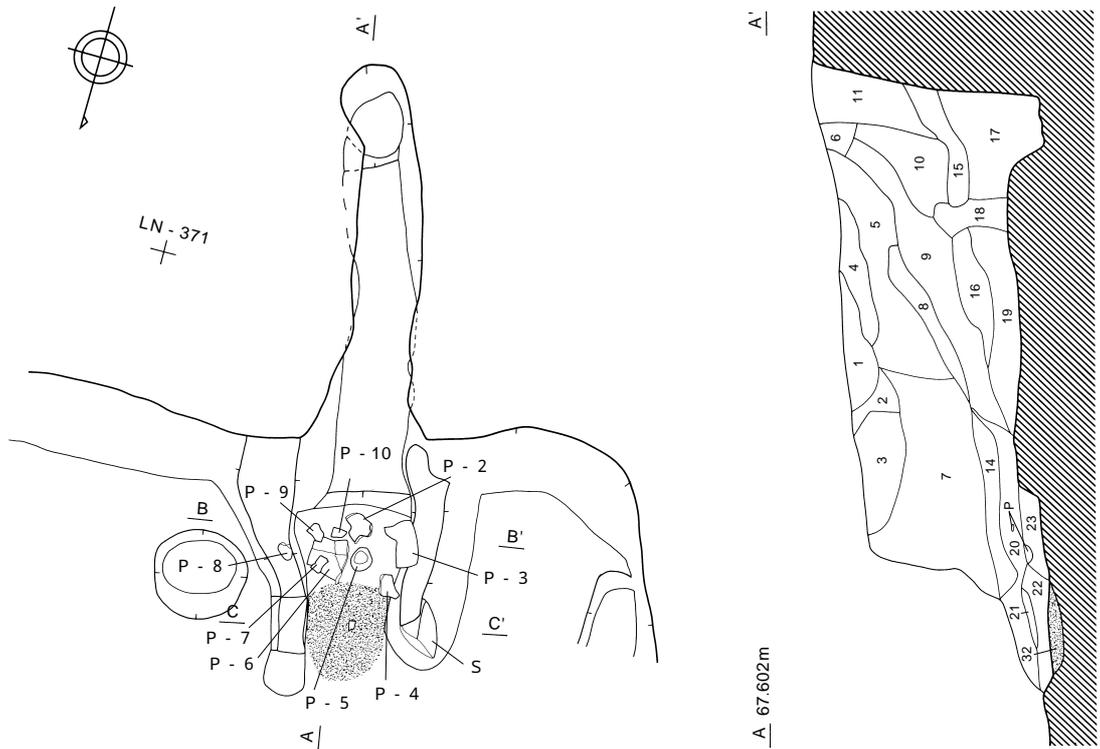
[壁] 壁高は、北壁37cm、東壁40cm、南壁56cm、西壁58cmを測る。断面形はcで、壁上部で一部緩やかな立ち上がりが見られる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。

[壁溝] 東壁の一部で検出した。深さは4cmを測る。

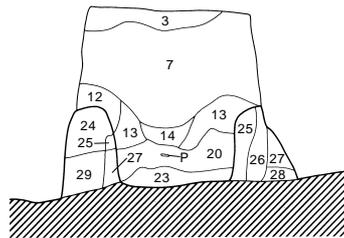
[ピット] 住居内から2基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 38×20×6cm、Pit 2 = 25×20×7cmを測る。いずれのピットも柱穴として機能した可能性が考えられる。

[カマド] 南壁側から1基検出した。南壁2(31:69)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅82cm、煙道長164cmを測る。主軸はN - 171° - Eである。燃烧部の構築は、カマド左袖脇から自然礫が出土しており、また、燃烧部天井に相当したと考えられる第4層中に自然礫が出土したことから芯材として自然礫を利用し、粘土を用いて構築したものと考えられる。煙道部天井は破壊され



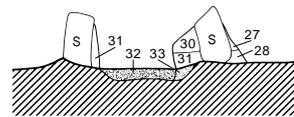
B 67.402m

B'



C 66.902m

C'



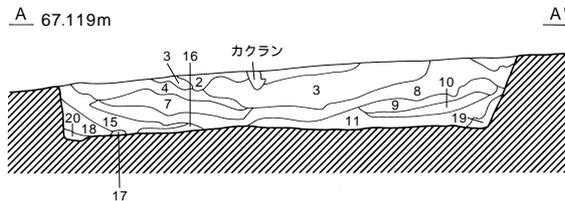
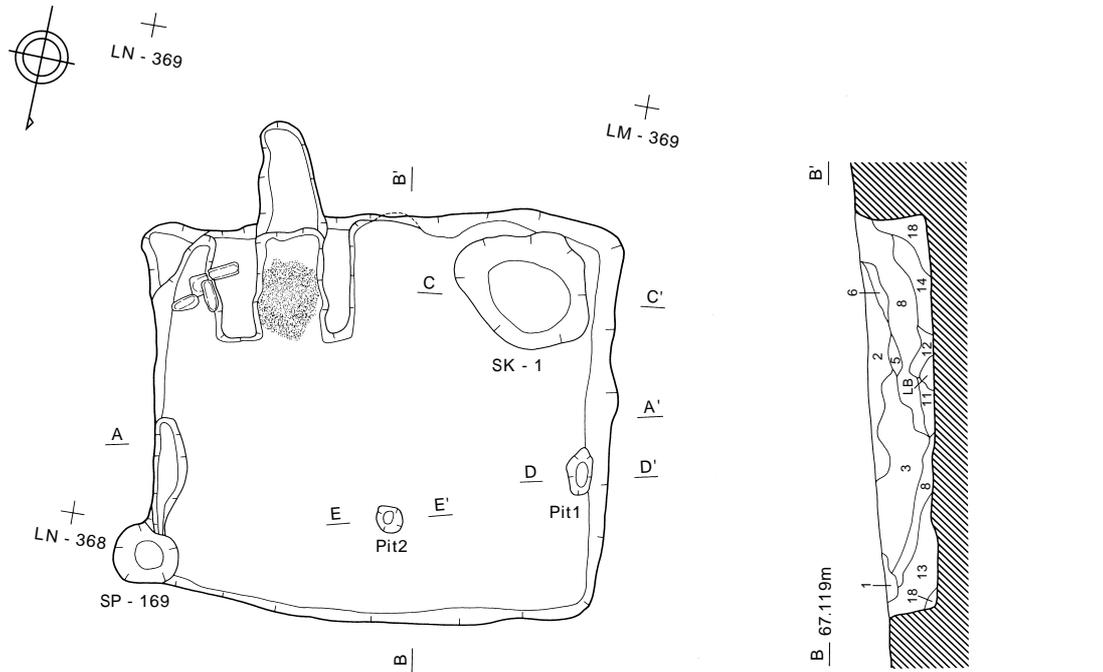
SI - 179 カマド

第1層	10YR3/4	暗褐色土	焼土粒微量、ローム粒多量、炭化物中量
第2層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒少量、炭化物微量
第3層	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒少量
第4層	7.5YR4/4	褐色土	焼土粒少量
第5層	10YR4/4	褐色土	ローム粒少量、焼土粒微量
第6層	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒少量
第7層	10YR3/3	暗褐色土	ロームブロック少量、ローム粒多量、焼土粒微量
第8層	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒微量
第9層	10YR4/6	褐色土	
第10層	5 YR4/4	にぶい赤褐色土	炭化物少量、焼土粒中量
第11層	10YR3/4	暗褐色土	炭化物・焼土粒微量
第12層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒微量
第13層	10YR4/6	褐色土	炭化物・焼土粒・パミス微量
第14層	10YR3/4	暗褐色土	焼土粒中量、ローム粒少量
第15層	10YR3/3	暗褐色土	
第16層	10YR4/4	褐色土	
第17層	10YR2/3	黒褐色土	炭化物少量
第18層	7.5YR3/4	暗褐色土	焼土ブロック少量
第19層	10YR4/6	褐色土	ロームブロック・焼土ブロック少量
第20層	10YR3/4	暗褐色土	焼土粒多量、炭化物少量

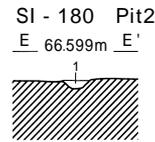
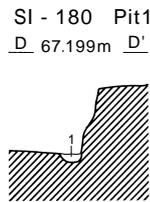
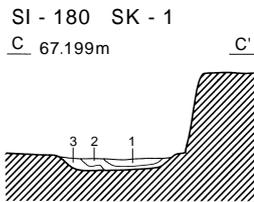
第21層	5 YR3/6	暗赤褐色土	
第22層	7.5YR3/4	暗褐色土	焼土粒微量
第23層	7.5YR4/4	褐色土	炭化物中量、焼土粒微量
第24層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒少量
第25層	7.5YR4/4	褐色土	
第26層	10YR5/6	黄褐色土	灰微量、炭化物微量
第27層	10YR4/4	褐色土	焼土粒極微量
第28層	10YR3/4	暗褐色土	炭化物微量
第29層	10YR4/4	褐色土	パミス微量、ローム粒少量
第30層	7.5YR4/3	褐色土	焼土粒中量
第31層	7.5YR4/4	褐色土	焼土粒少量
第32層	5 YR4/8	赤褐色土	
第33層	5 YR3/6	暗赤褐色土	焼土粒少量



第350図 SI - 179



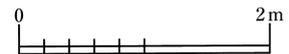
SI - 180	第1層	10YR2/1	黒色土		第11層	10YR3/4	暗褐色土	炭化物・焼土粒微量
	第2層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒微量、炭化物・焼土粒極微量	第12層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒少量、炭化物・焼土粒微量
	第3層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒多量、炭化物・焼土粒極微量	第13層	10YR4/4	褐色土	炭化物極微量
	第4層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒少量、炭化物・焼土粒極微量	第14層	10YR3/4	暗褐色土	ロームブロック多量、炭化物微量
	第5層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒多量	第15層	10YR3/4	暗褐色土	ロームブロック多量、炭化物極微量
	第6層	10YR2/3	黒褐色土	ロームブロック少量、焼土粒・炭化物極微量	第16層	10YR2/2	黒褐色土	炭化物多量、ローム粒微量、焼土粒極微量
	第7層	10YR3/3	暗褐色土	ロームブロック多量、焼土粒極微量	第17層	5YR3/6	暗赤褐色土	
	第8層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒少量、炭化物・焼土粒微量	第18層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒少量、炭化物極微量
	第9層	10YR3/4	暗褐色土	炭化物極微量	第19層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒微量
	第10層	10YR3/3	暗褐色土	炭化物極微量	第20層	10YR4/4	褐色土	ローム粒微量



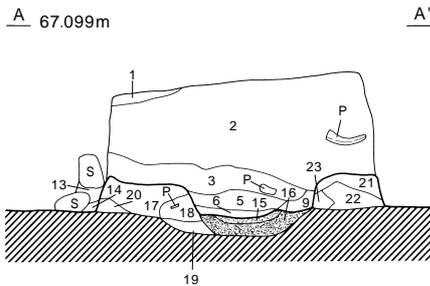
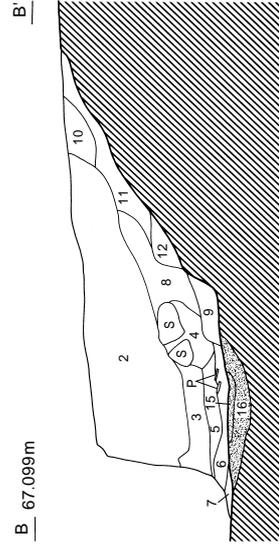
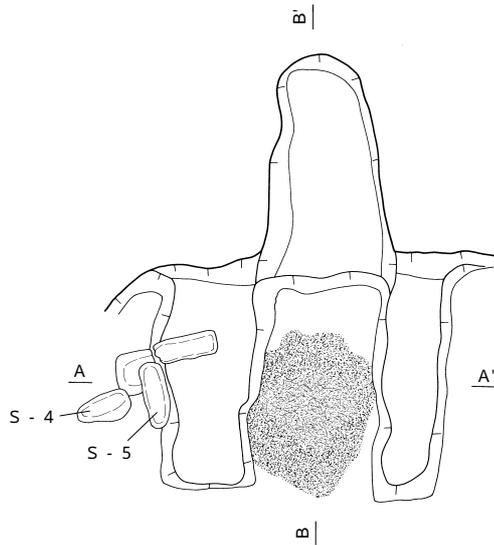
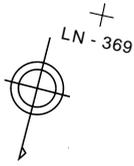
SK - 1	第1層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒多量、炭化物・焼土粒微量
	第2層	7.5YR4/4	褐色土	ローム・暗褐色土(10YR3/3)若干混入、炭化物・焼土粒極微量
	第3層	10YR4/4	褐色土	ローム粒多量、炭化物極微量

Pit1	第1層	10YR3/4	暗褐色土	炭化物微量
------	-----	---------	------	-------

Pit2	第1層	10YR4/4	褐色土	炭化物微量
------	-----	---------	-----	-------

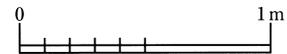


第351図 SI - 180



SI - 180 カマド

第1層	10YR2/2	黒褐色土	ロームブロック多量
第2層	10YR3/3	暗褐色土	ロームブロック少量、炭化物・焼土粒微量
第3層	10YR4/4	褐色土	
第4層	7.5YR4/4	褐色土	焼土ブロック少量
第5層	7.5YR2/2	黒褐色土	ロームブロック少量、焼土ブロック多量
第6層	7.5YR4/6	褐色土	
第7層	7.5YR2/3	極暗褐色土	焼土粒微量
第8層	7.5YR3/4	暗褐色土	焼土粒少量、炭化物微量
第9層	7.5YR2/2	黒褐色土	焼土粒少量
第10層	10YR3/4	暗褐色土	焼土粒・炭化物微量
第11層	7.5YR3/3	暗褐色土	焼土粒少量、炭化物微量
第12層	10YR3/3	暗褐色土	ロームブロック少量
第13層	7.5YR3/4	暗褐色土	焼土粒少量
第14層	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒微量
第15層	7.5YR7/6	橙色土	
第16層	5YR4/6	赤褐色土	
第17層	7.5YR4/4	褐色土	焼土粒微量
第18層	7.5YR4/4	褐色土	焼土粒多量、炭化物微量
第19層	7.5YR4/6	褐色土	焼土粒少量
第20層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒・焼土粒極微量
第21層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒少量
第22層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒多量、焼土粒少量、炭化物極微量
第23層	7.5YR3/4	暗褐色土	焼土粒多量



第352 図 SI - 180

ており、粒状化した構築材が第8層中に含まれて検出した。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で30°に角度を変え、立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居南壁西隅で土坑1基を検出した。規模は118×97×9cmを測る。堆積土中に焼土粒・炭化物等を含み、カマド脇ピットとほぼ同様の機能を持ったものと考えられる。

[堆積土] 20層に分層した。ロームブロック、焼土粒等が含まれ、急激な埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 181 (第353、354図)

[位置] グリッドLN - 364、LM・LN・LO - 365・366で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 長方形を呈し、598×568×66cmを測る。床面積は34.1㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁7cm、東壁3cm、南壁44cm、西壁60cmを測る。断面形はaで、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 北壁～東壁側の一部に浅い掘り方を有し、大谷火山灰層主体の地山を充填している。床面はほぼ平坦で、堅緻である。

[壁溝] 南壁側を除いて検出した。深さは平均8cmを測る。

[ピット] 住居内から12基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 21×17×18cm、Pit 2 = 90×67×13cm、Pit 3 = 65×56×11cm、Pit 4 = 43×42×5cm、Pit 5 = 88×56×15cm、Pit 6 = 48×43×8cm、Pit 7 = 63×62×45cm、Pit 8 = 126×88×19cm、Pit 9 = 57×40×31cm、Pit 10 = 48×34×11cm、Pit 11 = 40×23×39cm、Pit 12 = 55×48×40cmを測る。主柱穴として機能したと考えられるピットは、Pit 5、10、11、12である。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(59:41)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅82cm、煙道長164cmを測る。主軸はN - 152° - Eである。燃烧部袖は、自然礫を芯材としており、粘土を用いて構築している。燃烧部天井は、第6層が相当し、崩落した堆積状況を呈する。煙道部天井は、第1層が相当する。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で18°に角度を変え、起伏を持ちながら煙出部へ立ち上がる。煙出はピット状に掘り込まれており、煙出奥壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。燃烧部火床面上から破片化した土器が出土している。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて11層に分層した。住居廃絶後の堆積土は、第1～7層である。S I - 179と同様一部廃棄が伴う堆積状況である。

(木村)

S I - 182 (第355～357図)

[位置] グリッドLO - 361～363、LP - 362で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、447×438×78cmを測る。床面積は19.19㎡を測る。

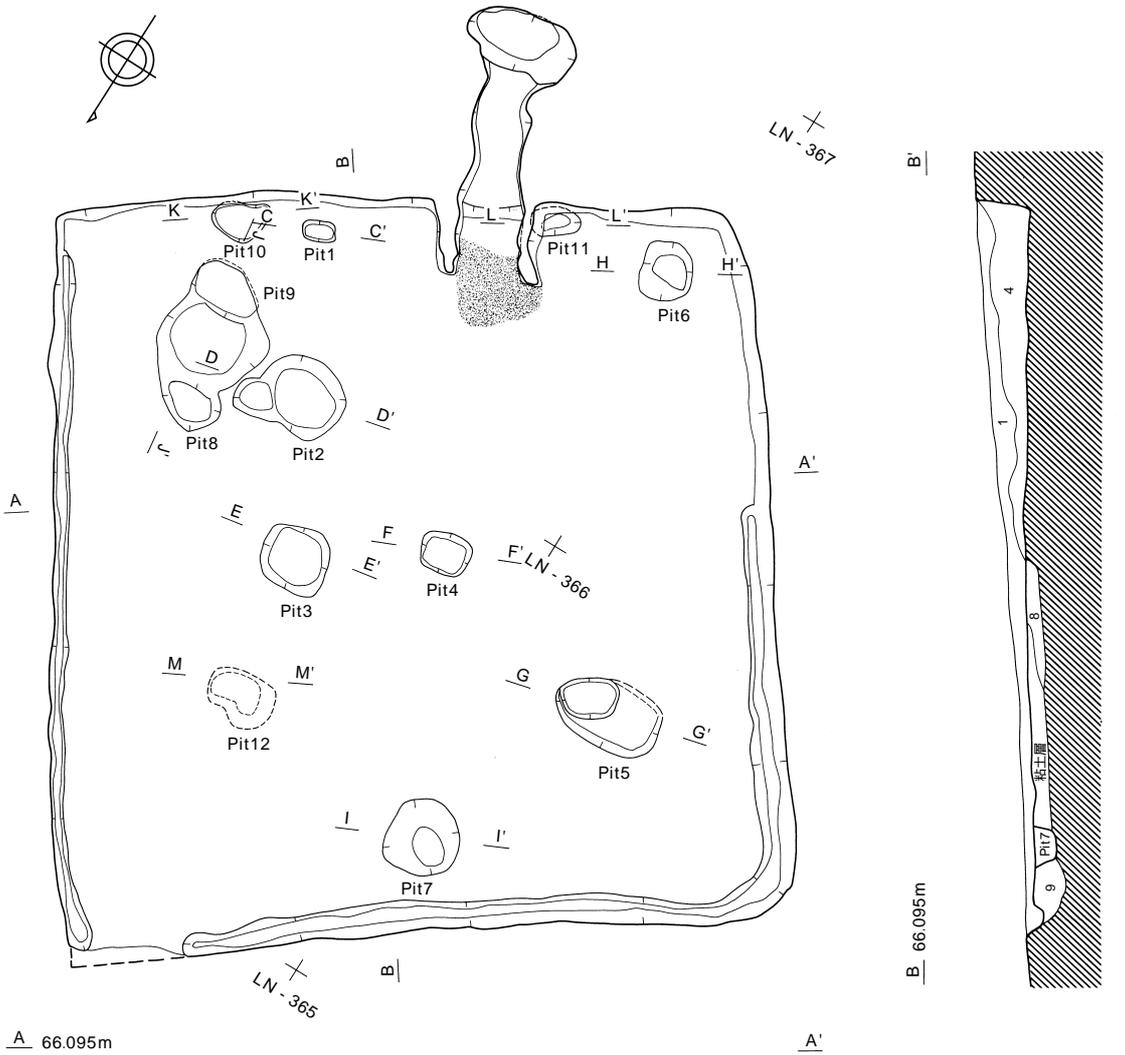
[壁] 壁高は、北壁37cm、東壁35cm、南壁60cm、西壁66cmを測る。断面形はaで、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 東側半分に掘り方を持ち、黒色土とロームブロックの混合層が充填され、その上に大谷火山灰層主体の地山を貼り床として貼り付けている。床面はやや起伏があり、堅緻である。また、床面から炭化物・炭化粒を検出しており、本遺構は焼失住居である。

[壁溝] 断続しながらほぼ全周する形で検出した。深さは平均10cmを測る。

[ピット] 住居内から2基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 75×56×33cm、Pit 2 = 22×18×11cmを測る。

[カマド] 住居南壁側で検出した。南壁4(76:24)の位置から検出している。構造は、半地下式で、



SI - 181

- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 炭化物・火山灰 (B-Tm) 極微量、ローム微量、焼土粒微量
- 第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム微量、焼土・炭化物極微量
- 第3層 10YR2/2 黒褐色土 焼土極微量、炭化物微量、ローム少量、火山灰微量
- 第4層 10YR3/2 黒褐色土 炭化物微量、ローム少量、焼土極微量、火山灰微量、粘土少量
- 第5層 7.5YR5/4 にぶい褐色土 ローム微量
- 第6層 10YR3/3 暗褐色土 ローム微量

- 第7層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物少量、焼土極微量
- 第8層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘土多量、ローム少量
- 第9層 10YR3/2 黒褐色土 粘土多量、ローム微量
- 第10層 10YR4/4 褐色土 ローム微量
- 第11層 10YR4/4 褐色土 ローム多量

SI - 181 Pit1
C 65.495m C'



- Pit1
- 第1層 10YR3/2 黒褐色土 ローム微量、粘土少量
- Pit2
- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 焼土少量、炭化物微量、ローム極微量
 - 第2層 7.5YR4/4 褐色土 焼土・炭化物極微量
 - 第3層 7.5YR3/3 暗褐色土 焼土多量、粘土少量

SI - 181 Pit2
D 65.495m D'

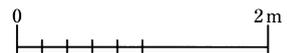


SI - 181 Pit3
E 65.495m E'

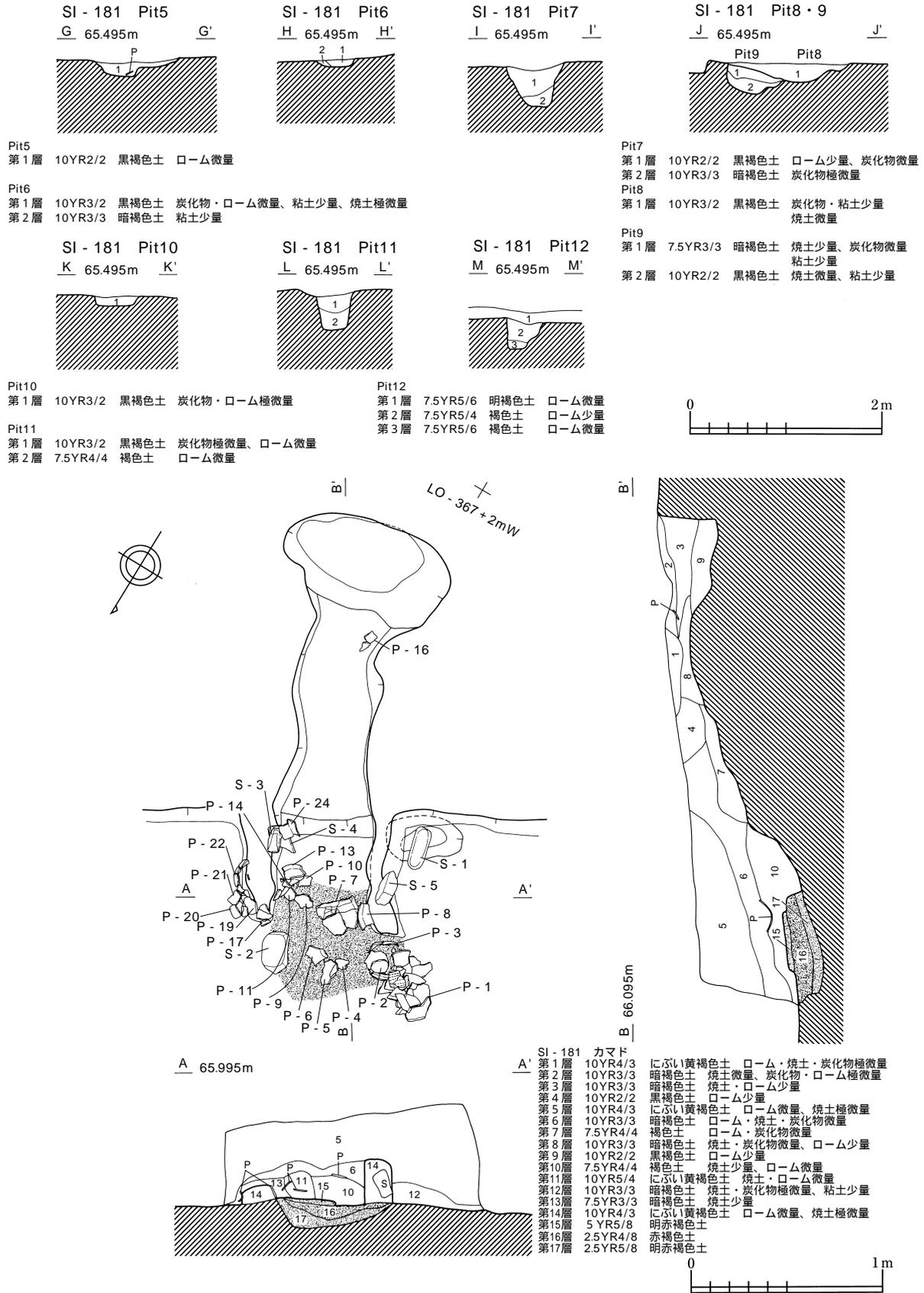


- Pit3
- 第1層 10YR3/2 黒褐色土 焼土・炭化物微量
 - 第2層 7.5YR4/4 褐色土 焼土少量、炭化物・ローム微量
- Pit4
- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 焼土・炭化物・ローム微量

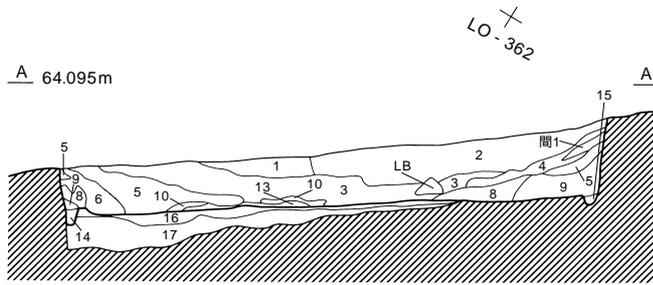
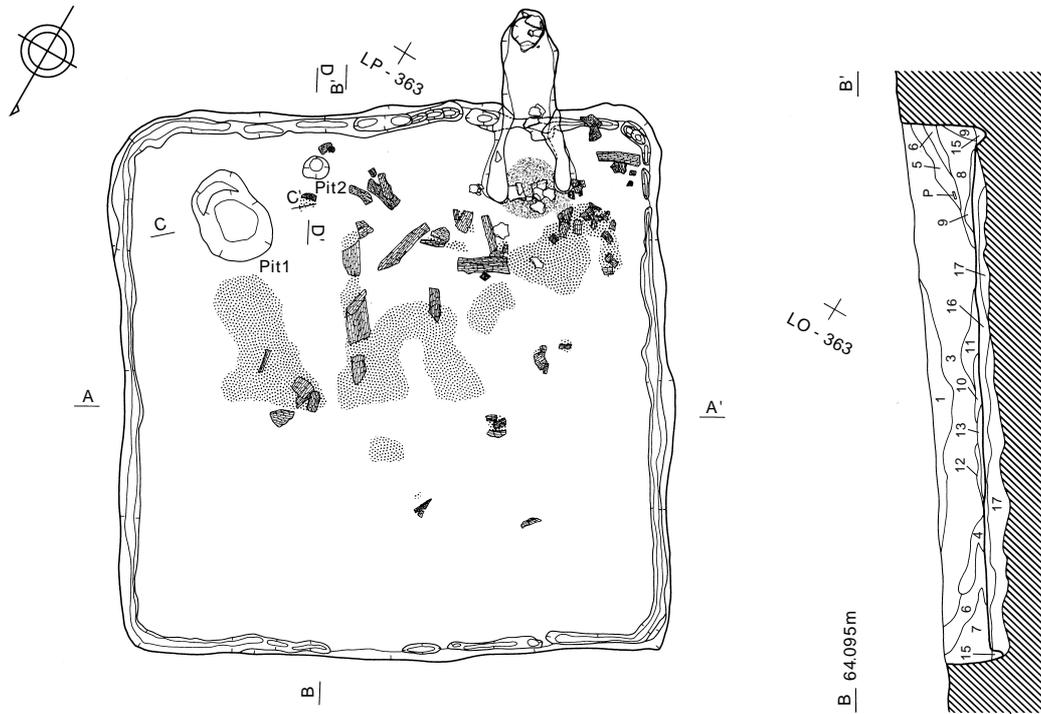
SI - 181 Pit4
F 65.495m F'



第353図 SI - 181



第354図 SI - 181



SI - 182

第1層	10YR2/1	黒色土	ローム粒中量、ロームブロック少量	第12層	10YR4/4	褐色土	炭化物微量
第2層	10YR1.7/1	黒色土	ロームブロック中量、炭化物少量	第13層	10YR2/2	黒褐色土	ロームブロック少量
第3層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒多量、ロームブロック中量、炭化物少量	第14層	10YR4/4	褐色土	ロームブロック極微量
第4層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒少量、ロームブロック多量	第15層	10YR4/6	褐色土	ロームブロック極微量
第5層	10YR2/1	黒色土	ローム粒多量	第16層	10YR4/6	褐色土	ローム粒微量
第6層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒少量、焼土粒極微量	第17層	10YR1.7/1	黒色土	ロームブロック多量
第7層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒・ロームブロック多量、炭化物微量	間 1	10YR1.7/1	黒色土	
第8層	10YR2/2	黒褐色土	ロームブロック微量				
第9層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒・ロームブロック中量				
第10層	5YR3/6	暗赤褐色土	炭化物微量、焼土ブロック多量				
第11層	10YR3/3	暗褐色土	ロームブロック多量、炭化物中量				

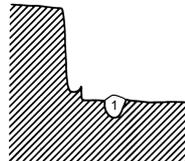
SI - 182 Pit1
C 63.895m C'



Pit1

第1層	10YR2/2	黒褐色土	ロームブロック少量
第2層	10YR3/3	暗褐色土	ロームブロック多量、炭化物微量、焼土粒極微量
第3層	10YR4/4	褐色土	ロームブロック微量、炭化物極微量

SI - 182 Pit2
D 64.095m D'

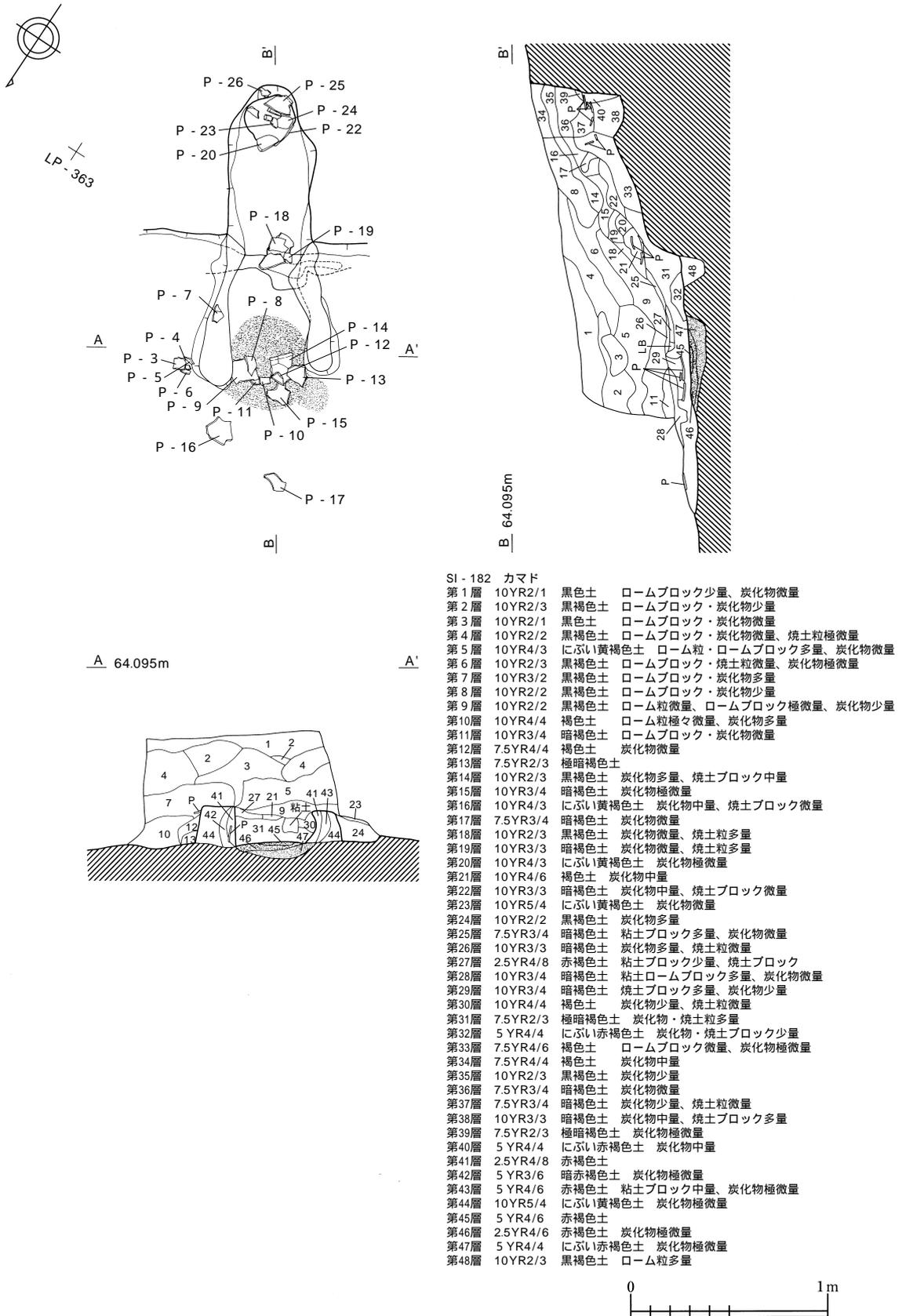


Pit 2

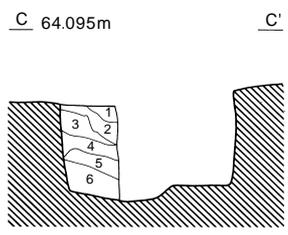
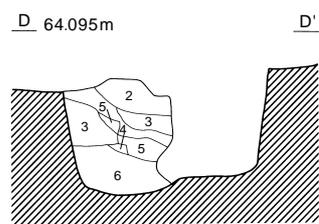
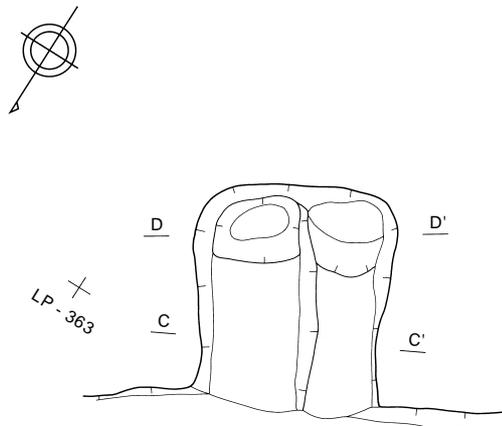
第1層	10YR4/6	褐色土
-----	---------	-----



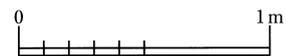
第355図 SI - 182



第356図 SI - 182



- SI - 182 カマド 掘り方
- 第1層 7.5YR4/4 褐色土 炭化物多量・焼土粒中量
 - 第2層 7.5YR2/3 極暗褐色土 ロームブロック・炭化物・焼土粒微量
 - 第3層 10YR4/6 褐色土 ロームブロック・炭化物極微量
 - 第4層 7.5YR4/4 褐色土 炭化物極微量
 - 第5層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ロームブロック多量
 - 第6層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック少量



第357図 SI - 182

袖部幅76cm、煙道長87cmを測る。主軸はN - 148° - Eである。燃烧部は、粘土を用いて構築している。煙道部は、掘り方を持ち、大谷火山灰層主体の地山が充填されている。煙道は住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で18°に角度を変えピット状に掘り込まれた煙出部へ立ち上がる。煙出奥壁は外傾しながら立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方、間層を含めて18層に分層した。住居廃絶後の堆積土は、第1～15層で、住居の焼失時に関連する土層は第10、13層である。上位の堆積土中にはロームブロックが多量に含まれ、急激な埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 183 (第358～360図)

[位置] グリッドL O・L P - 366～368、L Q - 367で検出した。

[重複] S P - 170～173と重複している。本遺構がS P - 170～173に切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 台形を呈し、570×542×70cmを測る。床面積は29.36㎡である。

[壁] 壁高は、北壁42cm、東壁5cm、南壁34cm、西壁60cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 住居中央～東壁側の一部に浅い掘り方を有し、ロームブロックを多量に含む黒褐色土が充填され、その上に大谷火山灰層主体の地山を貼り床として貼り付けている。それ以外の部分については大谷火山灰層の地山を床面としており、起伏がややあり、堅緻である。また、住居中央部に浅い落ち込みを検出した。

[壁溝] 断続的であるが、住居を全周する形で検出した。深さは平均8cmを測る。

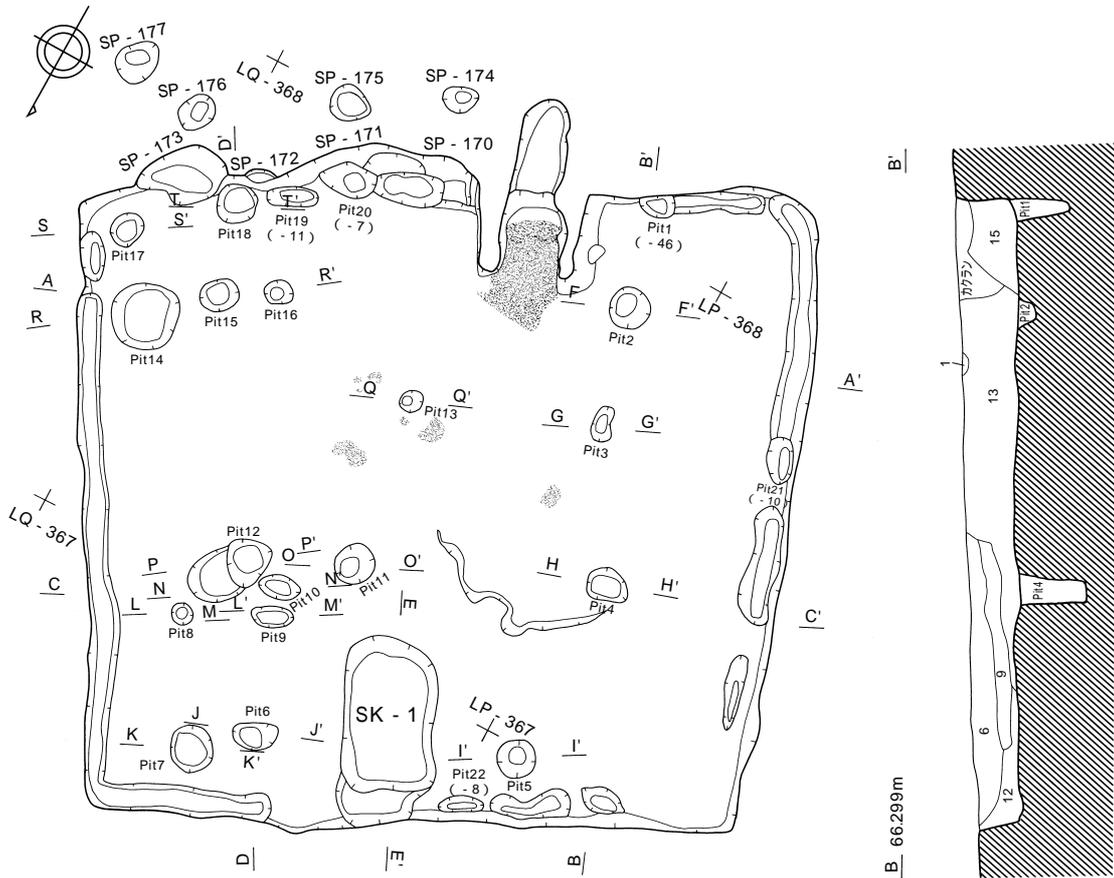
[ピット] 住居内から22基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 29×19×46cm、Pit 2 = 34×33×22cm、Pit 3 = 29×16×10cm、Pit 4 = 34×27×53cm、Pit 5 = 31×30×11cm、Pit 6 = 37×23×9cm、Pit 7 = 38×34×7cm、Pit 8 = 18×18×5cm、Pit 9 = 34×13×9cm、Pit 10 = 35×21×11cm、Pit 11 = 34×31×23cm、Pit 12 = 72×39×55cm、Pit 13 = 20×17×12cm、Pit 14 = 55×54×17cm、Pit 15 = 32×25×11cm、Pit 16 = 24×19×20cm、Pit 17 = 28×24×8cm、Pit 18 = 35×33×58cm、Pit 19 = 40×16×11cm、Pit 20 = 47×30×7cm、Pit 21 = 38×21×10cm、Pit 22 = 37×13×8cmを測る。主柱穴は、Pit 1、4、12、18である。

[カマド] 南壁側から1基検出した。南壁3(62:38)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅95cm、煙道長76cmを測る。主軸はN - 158° - Eである。燃烧部は、粘土による構築で、天井は第4層が相当し、崩落した堆積状況を呈する。煙道部天井は、第8層が相当し、部分的に残存した堆積状況を呈している。煙道は、住居壁際から、壁面に沿って立ち上がり、途中で13°に角度を変え、煙出部へ立ち上がる。

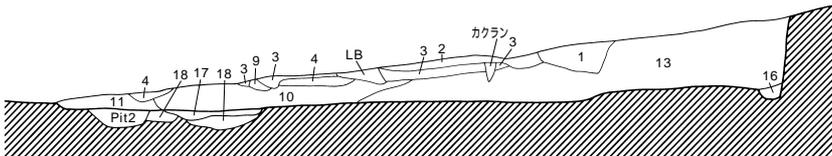
[その他の付属施設] 住居北壁側中央から土坑1基を検出した。規模は154×75×38cmを測る。

[堆積土] 掘り方部分を含めて18層に分層した。住居北半分と南半分で堆積状況が異なっており、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

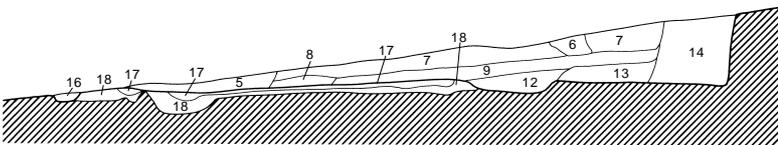
(木村)



A 66.299m

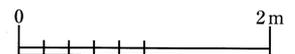


C 66.299m



SI - 183

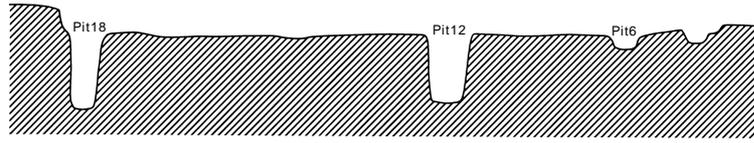
第1層	10YR2/2	黒褐色土	炭化物極微量	第10層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒多量、炭化物・焼土粒微量
第2層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒少量、炭化物微量	第11層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒・焼土粒少量、炭化物微量
第3層	10YR3/3	暗褐色土	ロームブロック多量、焼土粒微量	第12層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒微量、炭化物極微量
第4層	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒少量、炭化物・焼土粒微量	第13層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒多量、炭化物微量
第5層	10YR3/2	黒褐色土	ロームブロック少量、炭化物・焼土粒極微量	第14層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒・炭化物微量、焼土粒極微量
第6層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒少量	第15層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒少量、炭化物・焼土粒極微量
第7層	10YR3/3	暗褐色土	ロームブロック・ローム粒少量、炭化物微量	第16層	10YR3/3	暗褐色土	炭化物極微量
第8層	10YR2/2	黒褐色土	炭化物・焼土粒微量	第17層	10YR4/4	褐色土	
第9層	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒少量、炭化物・焼土粒極微量	第18層	10YR3/2	黒褐色土	ロームブロック多量



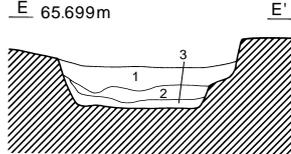
第358図 SI - 183

D 66.299m

D'

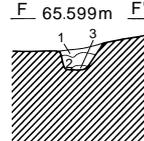


SI - 183 SK - 1



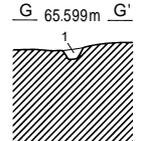
SK - 1
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム
ブロック少量、炭化物微量
第2層 10YR2/3 黒褐色土 ローム
ブロック、ローム粒、炭化物、
焼土粒微量
第3層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物極微量

SI - 183 Pit 2



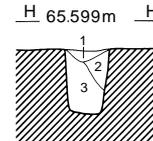
Pit 2
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム
粒、炭化物極微量
第2層 10YR2/2 黒褐色土 炭化物、
焼土粒極微量
第3層 10YR4/4 褐色土 焼土粒少量

SI - 183 Pit 3



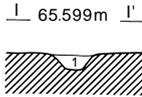
Pit 3
第1層 10YR3/4 暗褐色土
ロームブロック多量

SI - 183 Pit 4



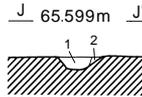
Pit 4
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム
粒少量、焼土粒微量
第2層 10YR2/3 黒褐色土 ローム
粒少量
第3層 10YR3/4 暗褐色土 ローム
粒、炭化物微量

SI - 183 Pit 5



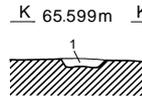
Pit 5
第1層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック多量、炭化物極微量

SI - 183 Pit 6



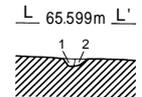
Pit 6
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒少量
第2層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒少量

SI - 183 Pit 7



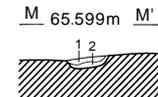
Pit 7
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム
粒微量、炭化物、焼土粒極微量

SI - 183 Pit 8



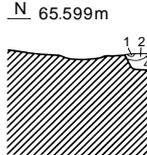
Pit 8
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒極微量
第2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒少量

SI - 183 Pit 9



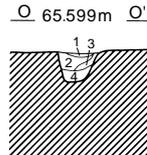
Pit 9
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒少量
炭化物、焼土粒微量
第2層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒少量

SI - 183 Pit 10



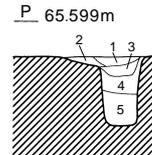
Pit 10
第1層 10YR3/3 暗褐色土
焼土粒微量
第2層 10YR4/6 赤褐色土
第3層 10YR3/3 暗褐色土
焼土粒、炭化物微量
第4層 10YR4/4 褐色土

SI - 183 Pit 11



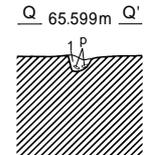
Pit 11
第1層 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒少量
炭化物微量
第2層 10YR3/4 暗褐色土 ローム多量
第3層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒少
量、焼土粒、炭化物微量
第4層 10YR4/4 褐色土

SI - 183 Pit 12



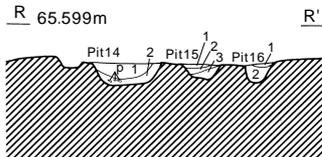
Pit 12
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム
粒微量、炭化物、焼土粒極微量
第2層 10YR3/4 暗褐色土 ローム
多量、炭化物極微量
第3層 10YR3/3 暗褐色土 ローム
粒少量、焼土粒極微量
第4層 10YR3/3 暗褐色土 ロームブロック多量
第5層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック多量

SI - 183 Pit 13



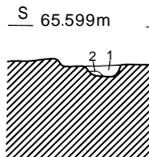
Pit 13
第1層 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒少量
炭化物微量

SI - 183 Pit 14・15・16



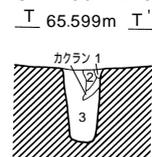
Pit 14
第1層 7.5YR3/4 暗褐色土 焼土粒少量、炭化物微量
第2層 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒、炭化物極微量
Pit 15
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒微量、炭化物、
焼土粒極微量
第2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒少量
第3層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒多量
Pit 16
第1層 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒少量、炭化物、ローム粒微量
第2層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒多量

SI - 183 Pit 17

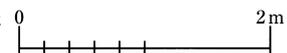


Pit 17
第1層 10YR3/4 暗褐色土
ローム粒少量
第2層 10YR4/4 褐色土

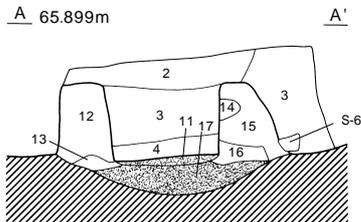
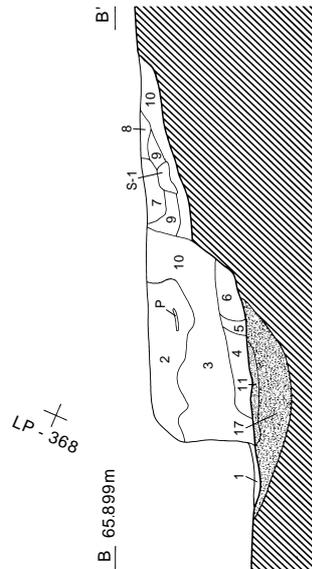
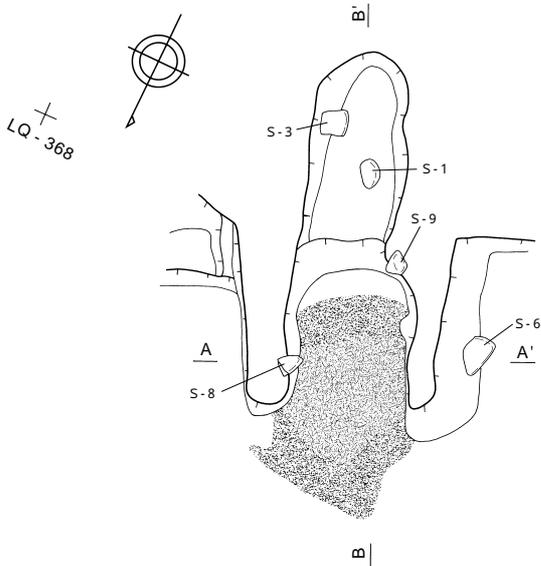
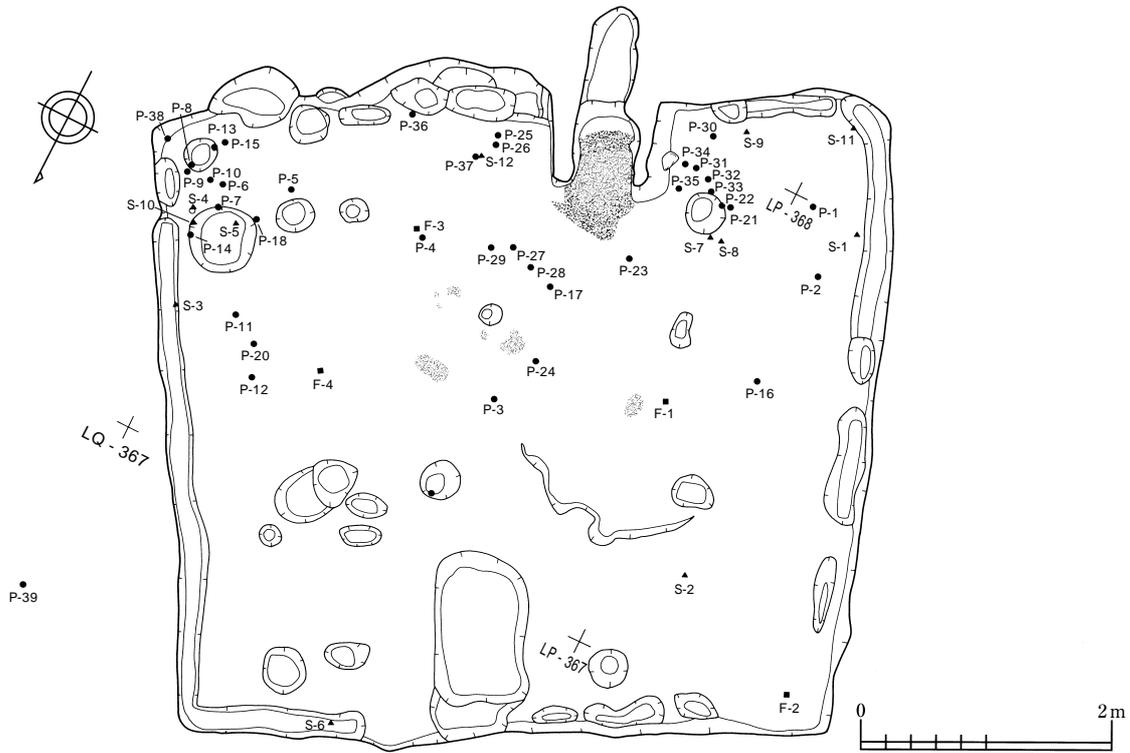
SI - 183 Pit 18



Pit 18
第1層 10YR4/4 褐色土
第2層 10YR4/6 褐色土
第3層 10YR3/4 暗褐色土
ローム粒多量



第359図 SI - 183



SI-183 カマド

第1層	7.5YR3/3	暗褐色土	焼土粒多量
第2層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒・炭化物極微量
第3層	10YR2/3	黒褐色土	ロームブロック少量、炭化物微量
第4層	7.5YR4/4	褐色土	焼土粒少量
第5層	5YR4/6	赤褐色土	焼土粒少量
第6層	7.5YR3/4	暗褐色土	焼土粒少量
第7層	10YR2/3	黒褐色土	焼土粒少量
第8層	7.5YR3/4	暗褐色土	焼土粒多量
第9層	7.5YR2/3	極暗褐色土	焼土ブロック多量
第10層	7.5YR3/3	暗褐色土	炭化物微量
第11層	7.5YR6/6	橙色土	
第12層	10YR4/4	褐色土	焼土粒・ローム粒微量
第13層	10YR4/6	褐色土	焼土粒微量
第14層	10YR3/2	黒褐色土	
第15層	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒微量
第16層	10YR4/4	褐色土	焼土粒微量
第17層	2.5YR4/6	赤褐色土	

第360図 SI-183

S I - 185 (第361～363図)

[位置] グリッドL O - 371、L P - 370・371、L Q - 371で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、458×406×74cmを測る。床面積は18.867m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁57cm、東壁7cm、南壁48cm、西壁71cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 住居東壁側の部分に掘り方を持ち、暗褐色土が充填され、その上に大谷火山灰層主体の地山を貼り床として貼り付けている。それ以外の部分については大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦で、堅緻である。また、床面から赤化面ならびに炭化物・炭化粒、崩落粘土層を検出し、本遺構は焼失住居である。

[壁溝] 断続的であるが、住居内を全周する形で検出した。深さは平均6cmを測る。

[ピット] 住居内から6基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 65×59×11cm、Pit 2 = 63×58×19cm、Pit 3 = 49×42×12cm、Pit 4 = 41×32×9cm、Pit 5 = 32×32×12cm、Pit 6 = 32×28×22cmを測る。主柱穴と考えられるピットは、Pit 1～4で、Pit 6についてもカマド旧使用時点で柱穴として機能した可能性が考えられ、カマド新構築時点で廃絶されたと考えられる。

[カマド] 南壁側から2基検出した。南壁2(32:68)と南壁3(66:34)の位置で検出している。新旧関係については、燃烧部の残存状況から南壁2>南壁3の関係である。南壁2のカマドの構造は、半地下式で、袖部幅89cm、煙道長40cmを測る。主軸はN-165°-Eである。粘土による構築で、燃烧部天井は第2層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。燃烧部の下部構造は、Pit 6の開口部を削平し、大谷火山灰層主体の地山を貼り付けて構築している。煙道部天井は、第6層が相当し、赤化の度合いが激しい。煙道は、住居壁際より手前の部分から11°の角度で立ち上がる。煙出奥壁は外傾しながら立ち上がる。

南壁3のカマドの構造は、半地下式で、燃烧部上部構造は残存しておらず、煙道長140cmを測る。主軸はN-164°-Eである。カマドの作り変えによって廃絶されており、煙道部の堆積土についてもほとんど構築材が残存していなかった。煙道は、住居壁際から立ち上がり、途中で6°に角度を変え、全煙道長の1/2の地点でやや傾斜し、煙出部へ立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居西壁中央寄りの位置から土坑1基を検出した。規模は125×93×27cmを測る。

[堆積土] 掘り方部分を含めて11層に分層した。住居焼失時点での形成層は、第3～8層で、上位の第1、2層中にはロームブロック等が含まれ、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

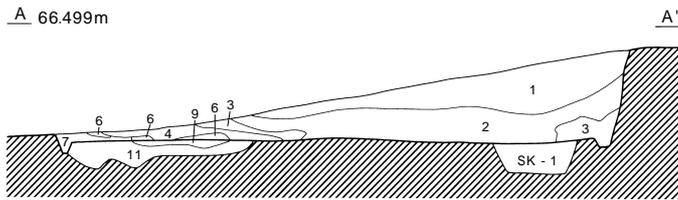
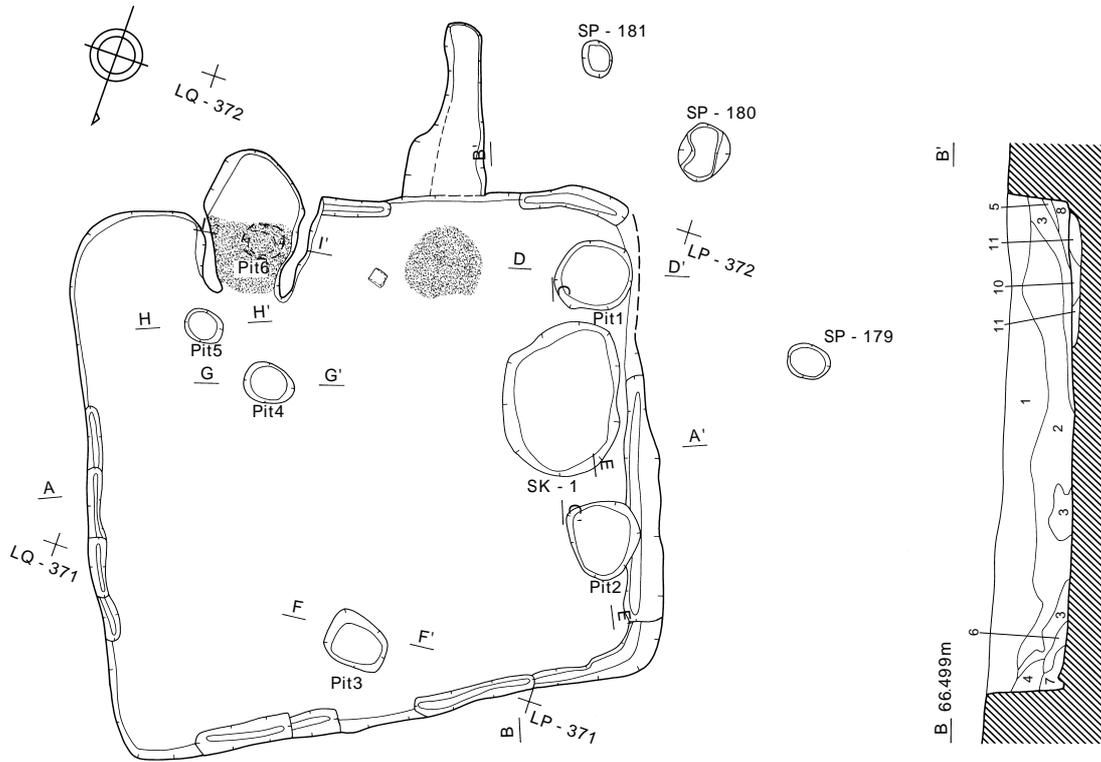
S I - 186 (第364、365図)

[位置] グリッドL Q・L R - 369・370で検出した。

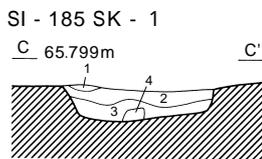
[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、368×362×75cmを測る。床面積は13.213m²を測る。

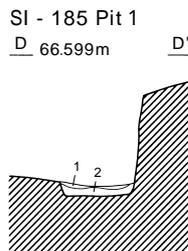
[壁] 壁高は、北壁34cm、東壁18cm、南壁40cm、西壁70cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は、東壁ならびに南壁東側の一部が黒褐色土系の地山を壁面としており、やや脆



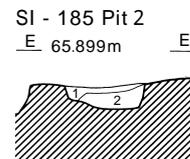
層	土質	特徴
第1層	10YR2/3 黒褐色土	バミス少量、ローム粒中量
第2層	10YR2/2 黒褐色土	ロームブロック・炭化粒少量
第3層	10YR3/2 黒褐色土	ローム粒中量、ロームブロック少量
第4層	10YR2/2 黒褐色土	炭化粒中量
第5層	10YR2/2 黒褐色土	ローム粒・炭化粒中量
第6層	7.5YR4/6 褐色土	微粒の焼土粒微量
第7層	10YR2/1 黒色土	ローム粒・微粒の炭化粒中量
第8層	10YR2/3 黒褐色土	微粒の焼土粒・炭化粒少量
第9層	10YR4/6 褐色土	焼土粒少量、微粒の焼土粒中量
第10層	10YR3/4 暗褐色土	ローム粒少量、炭化粒中量
第11層	10YR3/4 暗褐色土	焼土粒・炭化粒中量、バミス少量
		ローム粒中量、微粒の炭化粒少量
		ローム粒中量
		ロームブロック・ローム粒多量
		炭化粒中量



層	土質	特徴
第1層	10YR3/2 黒褐色土	微粒の炭化粒・微粒の焼土粒少量
第2層	10YR2/3 黒褐色土	ローム粒中量
第3層	10YR2/2 黒褐色土	焼土粒中量、焼土ブロック・炭化粒少量、ローム粒中量
第4層	10YR4/6 褐色土	焼土粒微量、微粒の焼土粒・炭化粒少量、ローム粒中量



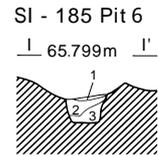
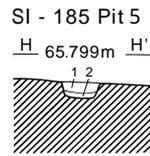
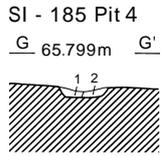
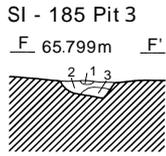
層	土質	特徴
第1層	10YR2/2 黒褐色土	ローム粒中量
第2層	10YR4/4 褐色土	炭化粒少量



層	土質	特徴
第1層	10YR2/2 黒褐色土	ローム粒中量
第2層	10YR2/1 黒色土	微粒の炭化粒少量
		ローム粒・微粒の炭化粒少量



第361図 SI - 185



Pit 3

- 第1層 10YR4/6 褐色土 微粒の炭化粒少量
- 第2層 10YR2/3 黒褐色土 ロームブロック少量、ローム粒中量
微粒の炭化粒少量
- 第3層 10YR4/4 褐色土 微粒の炭化粒少量

Pit 4

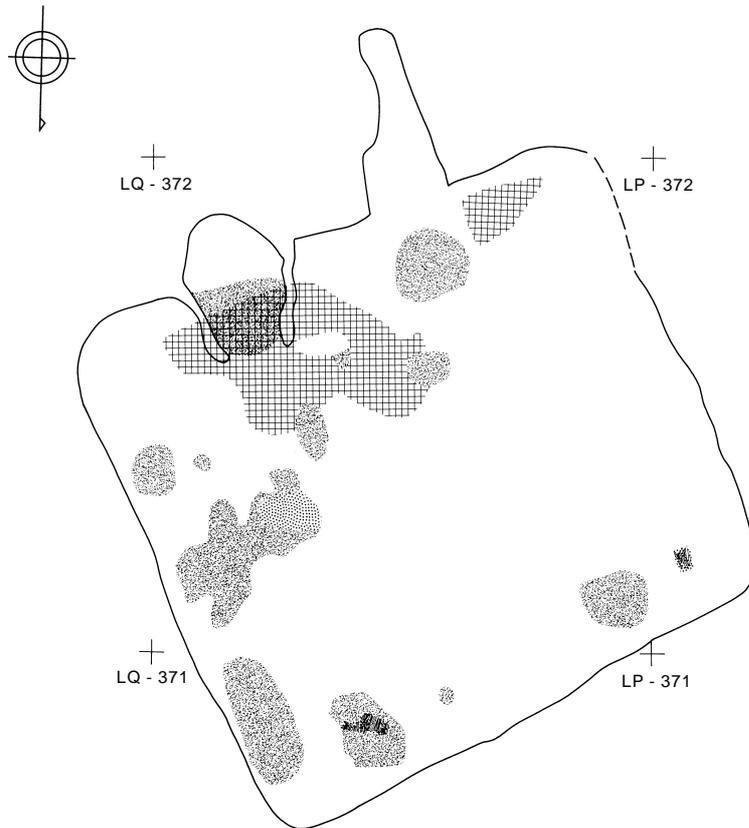
- 第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒中量、炭化粒少量
- 第2層 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒少量、パミス微量

Pit 5

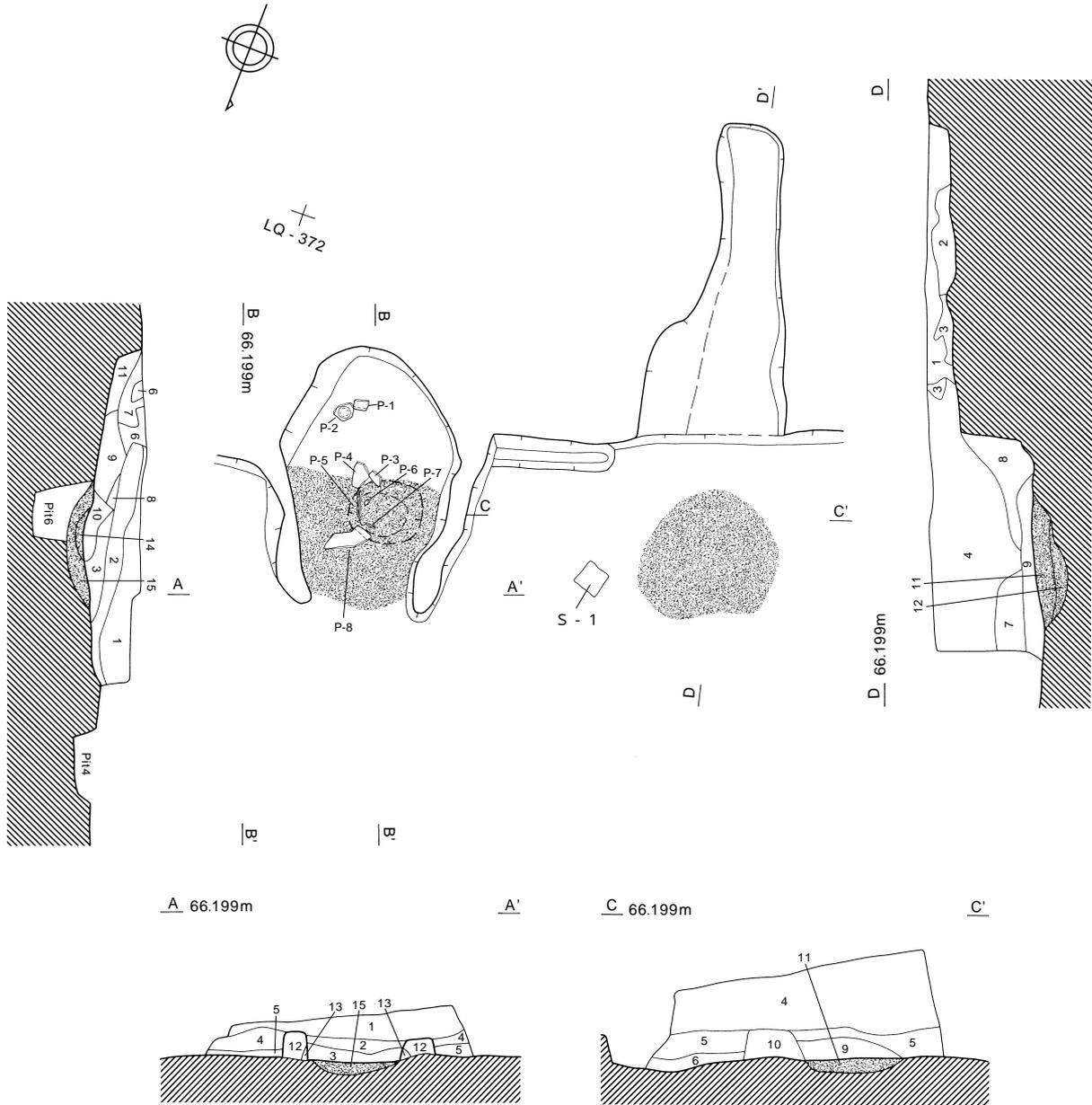
- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒中量、ロームブロック・炭化粒少量
- 第2層 10YR2/3 黒褐色土 ロームブロック多量、炭化粒少量

Pit 6

- 第1層 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒多量、炭化粒少量
- 第2層 10YR2/1 黒色土 ローム粒少量、炭化粒・ローム粒中量
- 第3層 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒中量、炭化粒少量



第362図 SI - 185

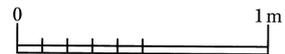


SI - 185 カマド (新)

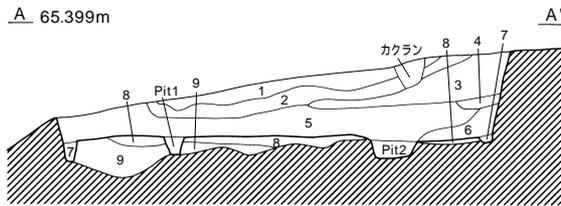
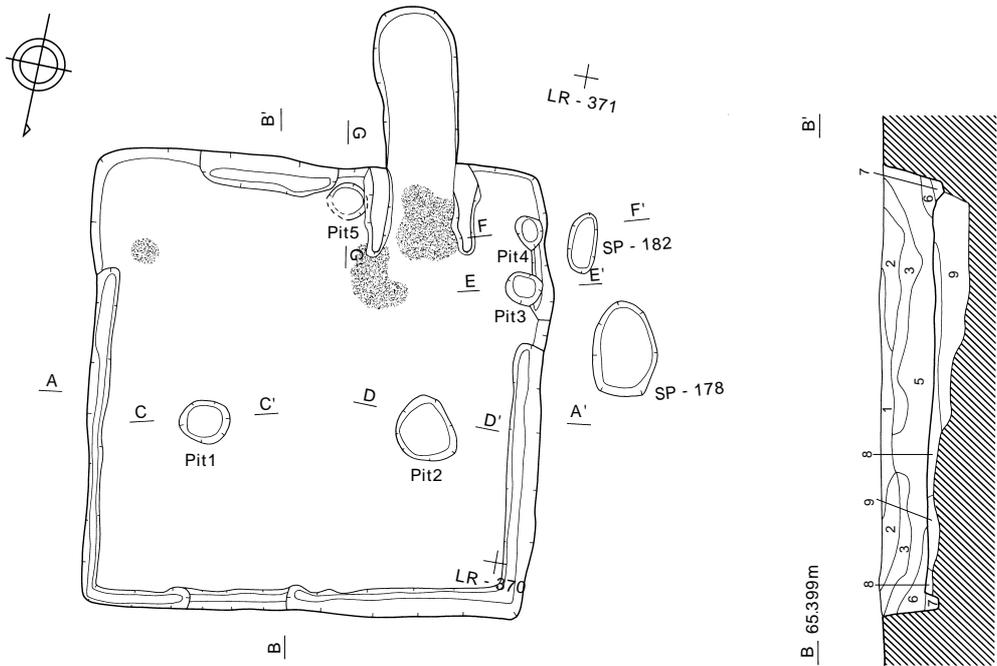
- 第1層 10YR3/1 黒褐色土 ローム粒・炭化粒中量、焼土粒微量
- 第2層 10YR4/4 褐色土 微粒の炭化粒・炭化粒少量
- 第3層 5 YR3/6 暗赤褐色土 微粒の炭化粒少量
- 第4層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化粒・焼土粒・バミス少量
- 第5層 10YR3/2 黒褐色土 炭化粒・焼土粒少量
- 第6層 5 YR3/2 暗赤褐色土 炭化粒少量
- 第7層 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・微粒の炭化粒少量
- 第8層 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒中量、微粒の炭化粒少量
- 第9層 5 YR3/4 暗赤褐色土 炭化粒少量
- 第10層 7.5YR3/4 暗褐色土 バミス少量、焼土粒中量、微粒の炭化粒微量
- 第11層 10YR3/4 暗褐色土 微粒の炭化粒中量、ローム粒少量
- 第12層 10YR4/4 褐色土 焼土粒・微粒の炭化粒少量
- 第13層 5 YR4/8 赤褐色土 微粒の炭化粒少量
- 第14層 5 YR5/8 明赤褐色土 微粒の炭化粒少量
- 第15層 5 YR4/6 赤褐色土 バミス・微粒の炭化粒少量

SI - 185 カマド (旧)

- 第1層 10YR2/3 黒褐色土 微粒の炭化粒・ローム粒中量、微粒の焼土粒少量
- 第2層 10YR3/3 暗褐色土 バミス・炭化粒少量
- 第3層 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒中量、微粒の炭化粒少量
- 第4層 10YR3/1 黒褐色土 ロームブロック少量、ローム粒中量、焼土粒微量
- 第5層 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒少量、ローム粒中量、微粒の炭化粒少量含
- 第6層 10YR3/4 暗褐色土 微粒の焼土粒・ローム粒少量
- 第7層 10YR2/1 黒色土 ローム粒・微粒の炭化粒少量
- 第8層 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・ローム粒・炭化粒少量
- 第9層 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒多量、微粒の炭化粒中量
- 第10層 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒・炭化粒中量、バミス少量
- 第11層 5 YR4/8 赤褐色土 バミス少量
- 第12層 5 YR5/8 明赤褐色土

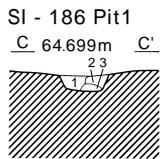


第363図 SI - 185



SI - 186

第1層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒・炭化粒中量、焼土粒微量
第2層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒・ロームブロック中量 炭化粒・焼土粒少量
第3層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒・炭化粒少量
第4層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	焼土粒・炭化粒中量
第5層	10YR3/2	黒褐色土	焼土粒・ローム粒中量、ローム ブロック・炭化粒少量
第6層	10YR3/1	黒褐色土	ローム粒少量
第7層	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒多量、微粒の炭化粒少量
第8層	10YR4/6	褐色土	パミス少量、炭化粒・ローム粒少量
第9層	10YR3/3	暗褐色土	ロームブロック少量、ローム粒中量 微粒の炭化粒少量



Pit 1

第1層	10YR4/4	褐色土	ローム粒中量、微粒の炭化粒少量 微粒の焼土粒微量
第2層	10YR4/6	褐色土	パミス・ローム粒少量
第3層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	微粒の炭化粒・パミス少量、ローム粒微量

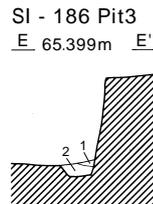
Pit2

第1層	10YR2/2	黒褐色土	炭化粒少量、焼土粒微量、ローム粒少量
第2層	10YR3/4	暗褐色土	焼土粒中量、微粒の炭化粒少量
第3層	7.5YR4/4	褐色土	焼土粒多量、炭化粒中量



Pit 5

第1層	10YR3/4	暗褐色土	焼土ブロック少量、炭化粒中量
第2層	10YR4/6	褐色土	微粒の炭化粒少量

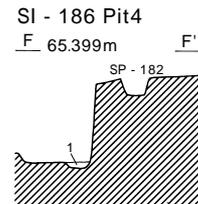


Pit 3

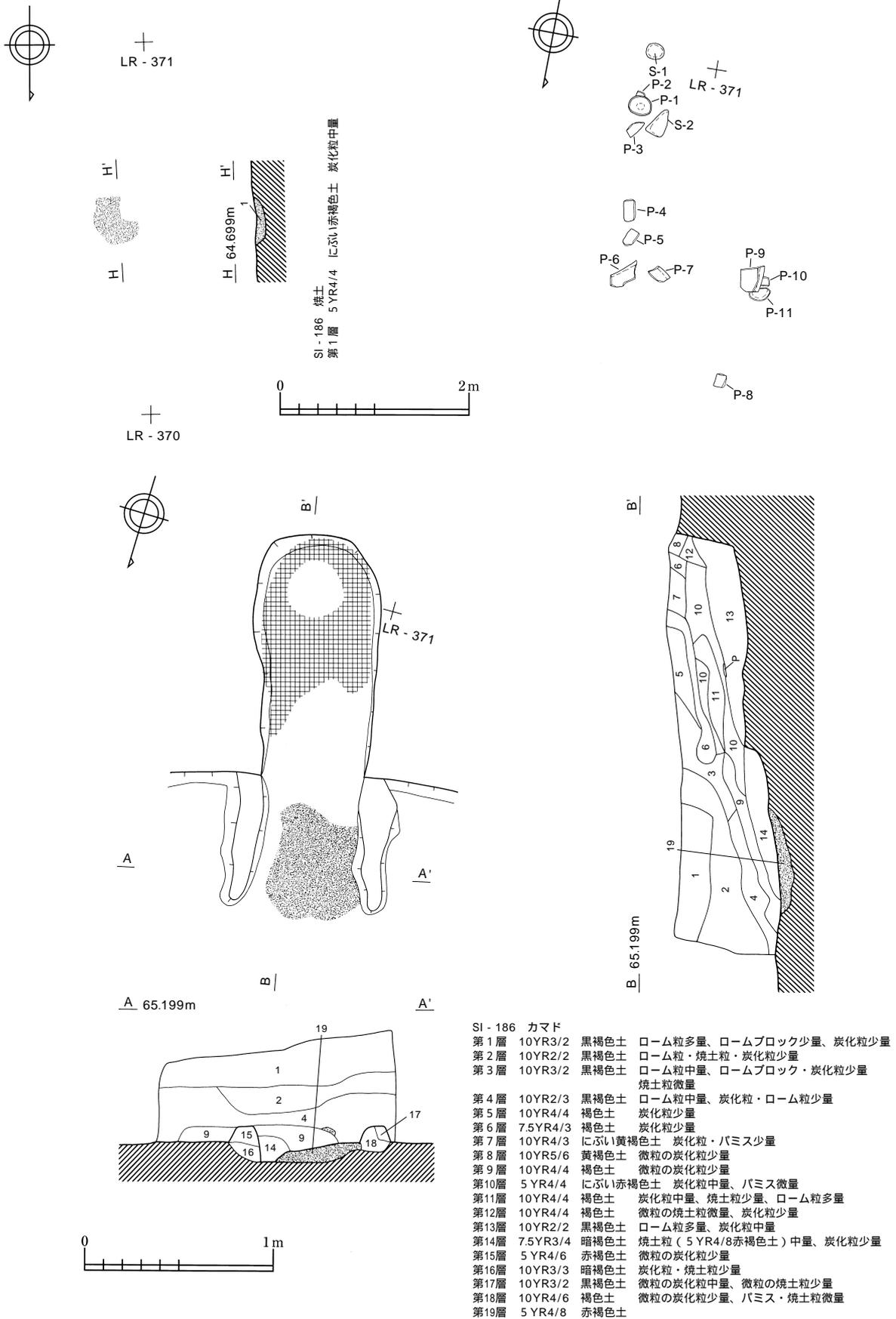
第1層	10YR2/2	黒褐色土	微粒の焼土粒・ローム粒少量
第2層	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒・焼土ブロック少量 ローム粒中量、微粒の炭化粒少量

Pit 4

第1層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒中量、焼土粒少量
-----	---------	------	--------------



第364図 SI - 186



第365図 SI - 186

弱である。それ以外の部分については堅緻である。

[床] 全面に掘り方を有し、ロームブロックを含む暗褐色土が充填され、大谷火山灰層主体の地山を貼り床として貼り付けている。床面は、やや起伏があり、堅緻である。また、住居南東側から赤化面を22×21cmの範囲で検出し、床面直上から炭化物(カヤ状)を検出した。

[壁溝] 断続的であるが、住居内を全周する形で検出した。深さは平均10cmを測る。

[ピット] 住居内から5基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 41×36×12cm、Pit 2 = 54×45×23cm、Pit 3 = 30×26×10cm、Pit 4 = 25×20×4cm、Pit 5 = 33×29×10cmを測る。主柱穴としての機能が考えられるピットは、Pit 1、2である。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(74:26)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅88cm、煙道長127cmを測る。主軸はN - 165° - Eである。燃焼部の構築は粘土によるものである。天井は第9層が相当し、崩落した堆積状況を呈し、一部カマド左袖外の部分にも堆積している。また、燃焼部前庭部には焼土溜りを53×8×11cmの規模で検出した。煙道部天井は、第5、6層が相当し、若干沈下した堆積状況を呈している。煙道は住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で2°に角度を変え、全煙道長の1/2の位置でやや傾斜し、煙出部へ立ち上がる。煙出開口部は、煙道部天井と同様の土と月見野火山灰層主体の地山を貼り付けて構築している。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて9層に分層した。全般的にロームブロック、焼土粒・炭化粒が含まれ、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。また、本遺構床面から赤化面ならびに床直から炭化物を検出しているが、局所的に限られており、焼失住居とは断定できない。

(木村)

S I - 188 (第366~369図)

[位置] グリッドLQ~LS - 363・364、LR - 362で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 台形を呈し、592×560×83cmを測る。床面積は32.477㎡を測る。

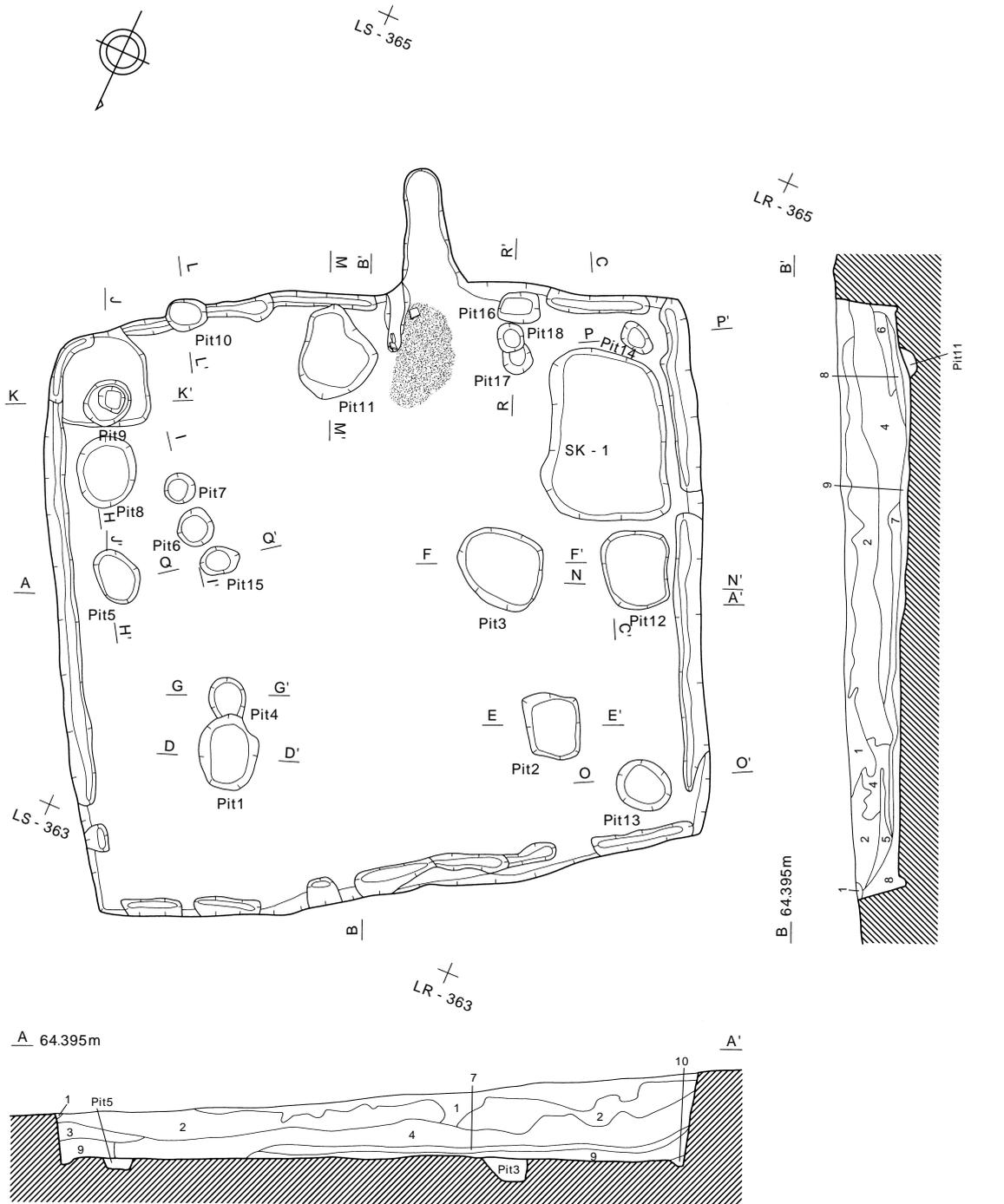
[壁] 壁高は、北壁35cm、東壁42cm、南壁54cm、西壁83cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、起伏がある。床面は堅緻である。また、床直から焼土、炭化材、炭化物を検出した。

[壁溝] 断続的に全周する形で検出した。深さは平均6cmを測る。

[ピット] 住居内から18基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 70×56×58cm、Pit 2 = 65×49×59cm、Pit 3 = 83×72×23cm、Pit 4 = (35)×35×11cm、Pit 5 = 54×39×12cm、Pit 6 = 35×34×18cm、Pit 7 = 29×28×23cm、Pit 8 = 67×54×14cm、Pit 9 = 90×90×36cm、Pit 10 = 38×30×47cm、Pit 11 = 87×74×10cm、Pit 12 = 72×62×18cm、Pit 13 = 53×47×33cm、Pit 14 = 35×22×7cm、Pit 15 = 38×28×6cm、Pit 16 = 38×29×48cm、Pit 17 = 32×27×11cm、Pit 18 = 25×24×14cmを測る。主柱穴としての機能が考えられるピットは、Pit 1、2、10、16である。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(59:41)の位置から検出している。構造は、半地



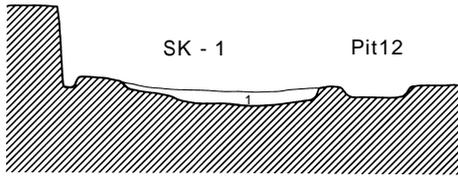
SI - 188

第1層	10YR3/1	黒褐色土	ローム粒中量
第2層	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒多量、ロームブロック・炭化粒少量、火山灰(B-Tm)混入
第3層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒多量、ロームブロック・炭化粒少量
第4層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒・炭化粒少量
第5層	10YR2/1	黒色土	炭化粒少量、ローム粒中量
第6層	10YR4/4	褐色土	炭化粒・焼土粒少量
第7層	10YR2/2	黒褐色土	炭化粒中量、ローム粒少量
第8層	10YR2/3	黒褐色土	焼土粒・炭化粒中量
第9層	10YR2/3	黒褐色土	炭化粒少量、ローム粒中量
第10層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	ローム粒・微粒の炭化粒少量

第366図 SI - 188

SI - 188 SK - 1、Pit12

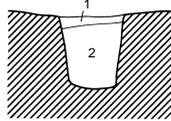
C 64.495m C'



SK - 1
第1層 10YR4/6 褐色土 微粒の炭化粒少量、焼土粒・炭化物微量、ローム粒中量

SI - 188 Pit1

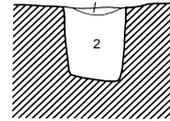
D 63.359m D'



Pit 1
第1層 10YR3/4 暗褐色土 炭化粒・ローム粒少量
第2層 10YR4/6 褐色土 微粒の炭化粒中量

SI - 188 Pit2

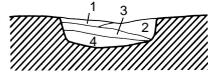
E 63.359m E'



Pit 2
第1層 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒・ローム粒少量
第2層 10YR4/6 褐色土 炭化粒中量

SI - 188 Pit3

F 63.359m F'



Pit 3
第1層 10YR3/4 暗褐色土 微粒の炭化粒中量、焼土粒・ローム粒少量
第2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ロームブロック・炭化粒中量
第3層 5YR4/4 にぶい赤褐色土 焼土粒(5YR4/8赤褐色土)少量、炭化粒中量
ローム粒少量
第4層 10YR4/6 褐色土 ローム粒中量、微粒の炭化粒少量
Pit 4
第1層 10YR3/3 暗褐色土 微粒の炭化粒・ローム粒少量
第2層 10YR3/4 暗褐色土 炭化粒少量、ローム粒中量

SI - 188 Pit4

G 63.359m G'



SI - 188 Pit5

H 63.359m H'



Pit 5
第1層 10YR3/2 黒褐色土 炭化粒中量、ローム粒少量、焼土粒微量
第2層 10YR4/4 褐色土 微粒の炭化粒少量
Pit 6
第1層 10YR3/3 暗褐色土 微粒の炭化粒・ローム粒少量
第2層 10YR3/4 暗褐色土 微粒の炭化粒少量、焼土粒微量
Pit 7
第1層 10YR4/4 褐色土 炭化粒・焼土粒少量、ローム粒中量
第2層 10YR4/6 褐色土 炭化粒少量、微粒の炭化粒中量、ローム粒少量

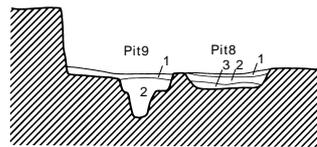
SI - 188 Pit6・7

I 63.359m I'



SI - 188 Pit8・9

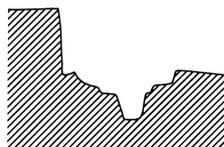
J 64.495m J'



Pit 8
第1層 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒・焼土粒・ローム粒少量
第2層 5YR5/8 明赤褐色土 微粒の炭化粒中量、0.5mm程のアク?(10YR7/2にぶい黄橙色土)微量
第3層 10YR3/4 暗褐色土 微粒の焼土粒少量

SI - 188 Pit9

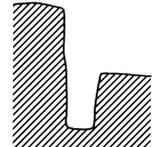
K 64.495m K'



Pit 9
第1層 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒中量、焼土粒少量
第2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 微粒の炭化粒少量、ローム粒中量

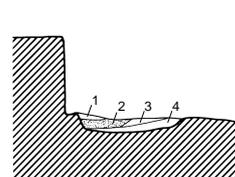
SI - 188 Pit10

L 64.495m L'



SI - 188 Pit11

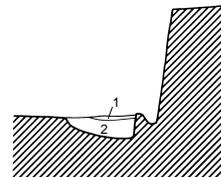
M 64.495m M'



Pit 11
第1層 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒多量、微粒の炭化粒少量
第2層 5YR4/4 にぶい赤褐色土 炭化粒・ローム粒少量
第3層 10YR3/4 暗褐色土 炭化粒中量、ローム粒多量
第4層 10YR4/6 褐色土 微粒の炭化粒少量
Pit 12
第1層 10YR3/3 暗褐色土 微粒の炭化粒中量、ローム粒少量
第2層 10YR4/4 褐色土 微粒の炭化粒・ローム粒中量

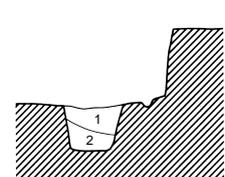
SI - 188 Pit12

N 64.495m N'



SI - 188 Pit13

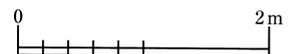
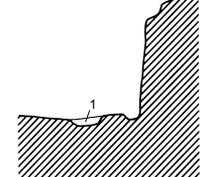
O 64.495m O'



Pit 13
第1層 10YR4/6 褐色土 微粒の炭化粒中量
第2層 10YR4/4 褐色土 炭化粒中量
Pit 14
第1層 10YR4/4 褐色土 微粒の炭化粒少量

SI - 188 Pit14

P 64.495m P'



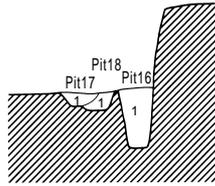
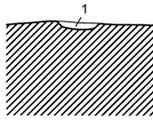
第367図 SI - 188

SI - 188 Pit16・17・18

R 64.495m R'

SI - 188 Pit15

Q 63.595m Q'



Pit15
第1層 10YR4/4 褐色土 微粒の炭化粒少量、炭化粒微量、微粒のローム粒少量

Pit16
第1層 10YR3/3 暗褐色土 微粒の炭化粒中量、ローム粒多量

Pit17
第1層 10YR4/4 褐色土 焼土粒・炭化粒少量、ローム粒中量

Pit18
第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土粒少量、炭化粒中量



LS - 365

LR - 365

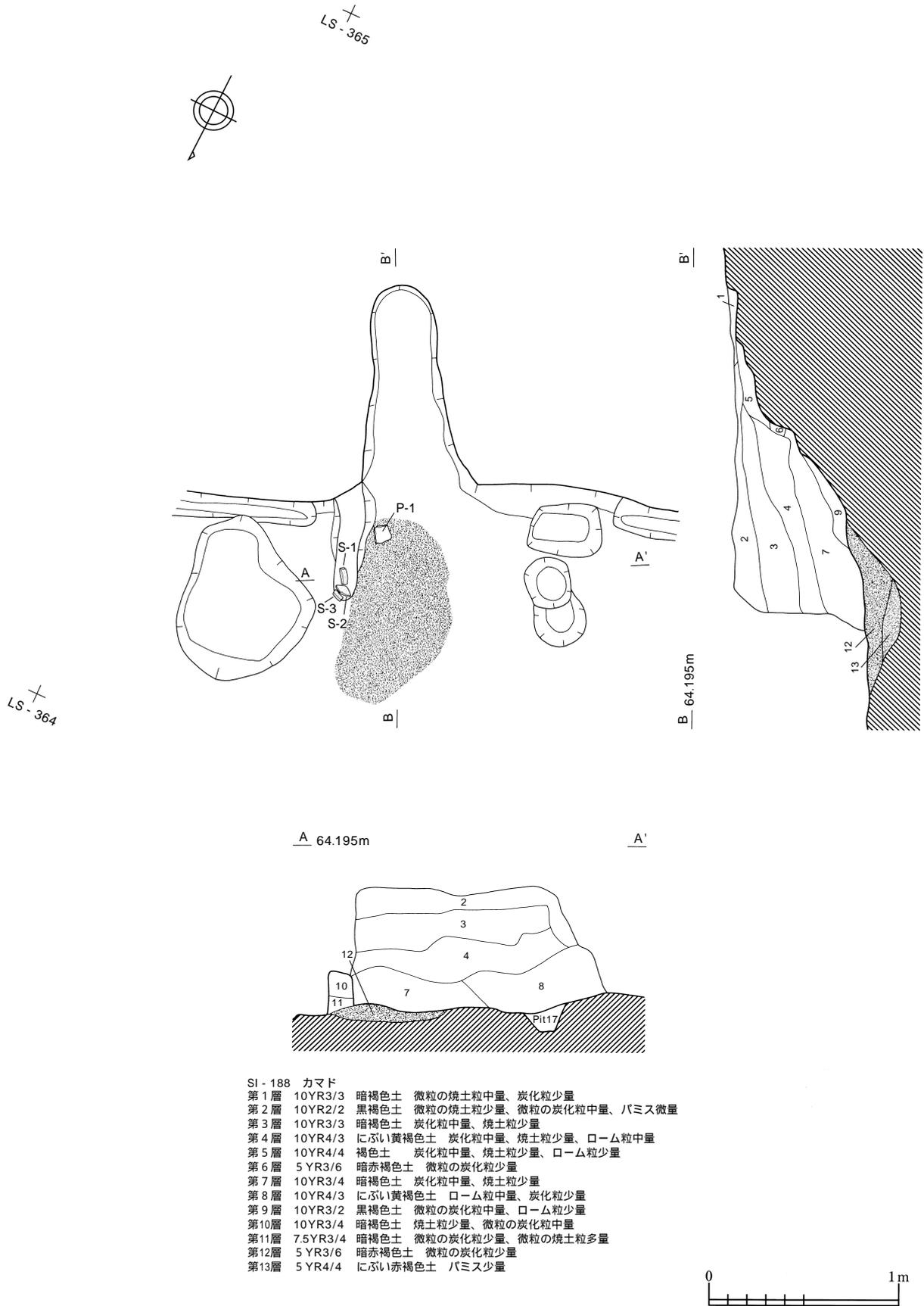


LS - 363

LR - 363



第368図 SI - 188



- SI - 188 カマド
- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 微粒の焼土粒中量、炭化粒少量
 - 第2層 10YR2/2 黒褐色土 微粒の焼土粒少量、微粒の炭化粒中量、パミス微量
 - 第3層 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒中量、焼土粒少量
 - 第4層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化粒中量、焼土粒少量、ローム粒中量
 - 第5層 10YR4/4 褐色土 炭化粒中量、焼土粒少量、ローム粒少量
 - 第6層 5 YR3/6 暗赤褐色土 微粒の炭化粒少量
 - 第7層 10YR3/4 暗褐色土 炭化粒中量、焼土粒少量
 - 第8層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒中量、炭化粒少量
 - 第9層 10YR3/2 黒褐色土 微粒の炭化粒中量、ローム粒少量
 - 第10層 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒少量、微粒の炭化粒中量
 - 第11層 7.5YR3/4 暗褐色土 微粒の炭化粒少量、微粒の焼土粒多量
 - 第12層 5 YR3/6 暗赤褐色土 微粒の炭化粒少量
 - 第13層 5 YR4/4 にぶい赤褐色土 パミス少量

第369図 SI - 188

下式で、袖部幅74cm、煙道長80cmを測る。主軸はN - 154° - Eである。燃烧部上部構造ならびに右袖部分が破壊されており、左袖上部から自然礫が出土している。構築にあたって、自然礫を芯材として利用した可能性が考えられる。煙道部天井は、第5層が相当し崩落した堆積状況を呈する。

煙道は住居壁際より手前の部分から30°の角度で起伏を持ちながら立ち上がり、全煙道長の1/2の地点で10°に角度を変え、煙出付近ではやや傾斜する。煙出奥壁は垂直に近い形で立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居西壁側南寄りの部分から土坑1基を検出した。規模は161×115×13cmを測る。

[堆積土] 10層に分層した。焼土層は第8層が相当し、炭化材の包含層についても第4層中からの検出で本遺構は生活時点で焼失していないことが考えられる。ただし、出土遺物の一部に二次被熱の痕跡があり、廃絶直後に焼成が行なわれた要素も捨てきれない。上位に堆積する第2層は埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。また、B - T m火山灰を第2層中から粒状に検出した。

(木 村)

S I - 189 (第370~372図)

[位置] グリッドLT・LU・LV - 361・362、LU - 363で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、676×660×63cmを測る。床面積は43.322m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁18cm、東壁28cm、南壁30cm、西壁52cmを測る。断面形はdで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。

[壁 溝] 断続的であるが、住居を全周する形で検出した。深さは平均11cmを測る。

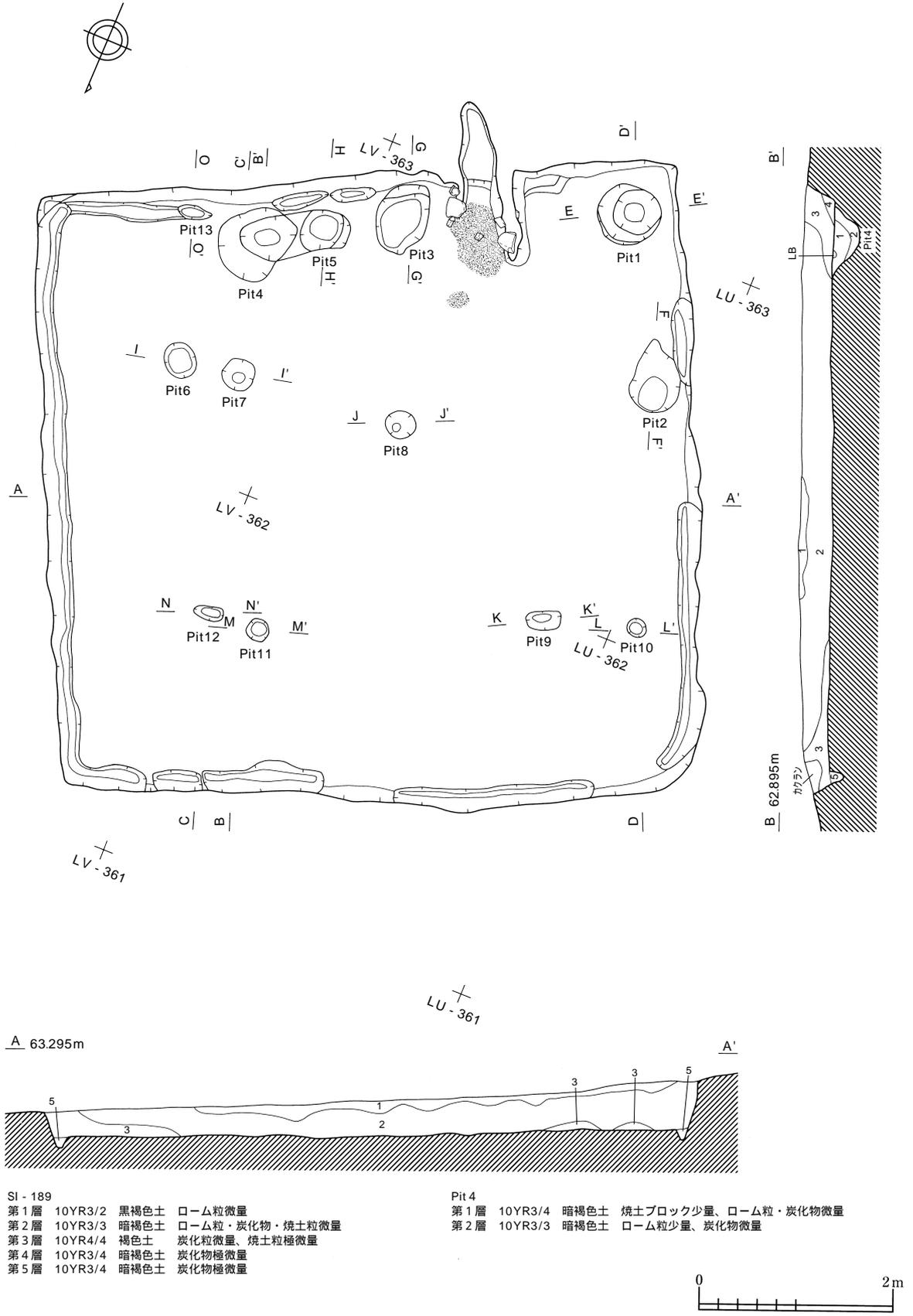
[ピット] 住居内から13基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 66×65×58cm、Pit 2 = 77×53×22cm、Pit 3 = 77×54×23cm、Pit 4 = 79×68×26cm、Pit 5 = 52×40×27cm、Pit 6 = 39×33×14cm、Pit 7 = 34×32×33cm、Pit 8 = 32×29×8cm、Pit 9 = 36×20×16cm、Pit 10 = 21×19×5cm、Pit 11 = 25×21×6cm、Pit 12 = 31×14×17cm、Pit 13 = 35×14×30cmを測る。主柱穴と考えられるピットは、Pit 9、12、13である。それ以外にPit 2、3、7が柱穴として機能した可能性が考えられる。

[カマド] 住居南壁側から検出した。南壁3 (68 : 32) の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅74cm、煙道長80cmを測る。主軸はN - 155° - Eである。燃烧部の構築は、焼成粘土板、自然礫を芯材とし、粘土を用いて構築している。カマド左袖が破壊されており、芯材の設置痕が第11層の部分に残存している。煙道部天井についても一部破壊されており、粒状化した構築材が堆積土中に含まれるのみである。煙道は、住居壁際から、20°の角度で立ち上がり、途中で3°に角度を変え、煙出部へ立ち上がる。また、カマド前庭部付近から赤化面を23×18cmの規模で検出した。

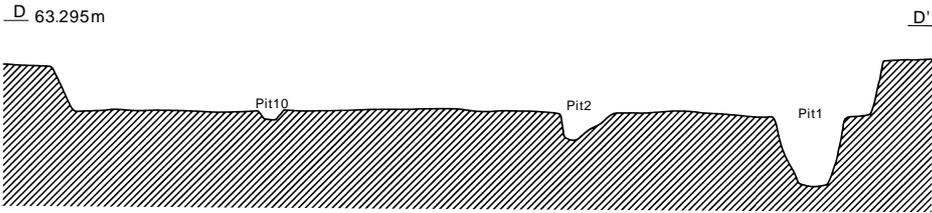
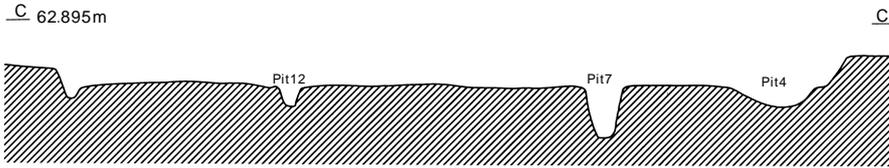
[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 5層に分層した。概ね自然堆積状況を呈する。また、本遺構から出土した遺物については、大部分が第2層からの出土であり、摩滅の度合いが少なく破片化しており、第2層の成層については一部廃棄が伴った可能性が考えられる。

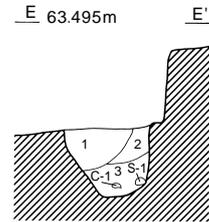
(木 村)



第370図 SI - 189



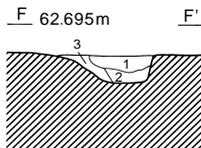
SI - 189 Pit1



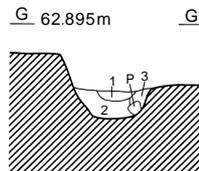
Pit 1
 第1層 10YR3/3 暗褐色土 ロームブロック・炭化物微量
 第2層 10YR2/1 黒色土 炭化物微量
 第3層 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒・炭化物微量

Pit 2
 第1層 7.5YR4/4 褐色土 焼土粒極微量
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム少量
 第3層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・炭化物微量

SI - 189 Pit2



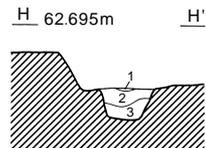
SI - 189 Pit3



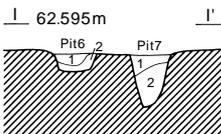
Pit 3
 第1層 7.5YR4/4 褐色土
 第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・焼土粒極微量
 第3層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土粒・炭化物極微量

Pit 5
 第1層 10YR4/4 褐色土 焼土粒・炭化物微量
 第2層 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・炭化物微量
 第3層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ロームブロック多量、焼土粒・炭化物微量

SI - 189 Pit5



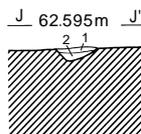
SI - 189 Pit6・7



Pit 6
 第1層 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・炭化物微量
 第2層 10YR3/2 黒褐色土 炭化物多量、焼土粒微量

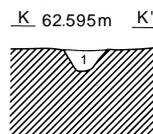
Pit 7
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物極微量
 第2層 10YR2/3 黒褐色土 焼土ブロック少量
 炭化物微量

SI - 189 Pit8



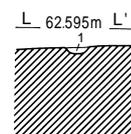
Pit 8
 第1層 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・炭化物微量
 第2層 10YR4/4 褐色土 炭化物極微量

SI - 189 Pit9



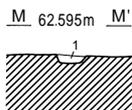
Pit 9
 第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒少量、炭化物微量

SI - 189 Pit10



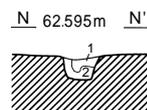
Pit 10
 第1層 7.5YR4/4 褐色土 炭化物極微量

SI - 189 Pit11



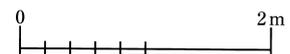
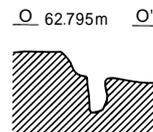
Pit 11
 第1層 10YR3/4 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物微量

SI - 189 Pit12

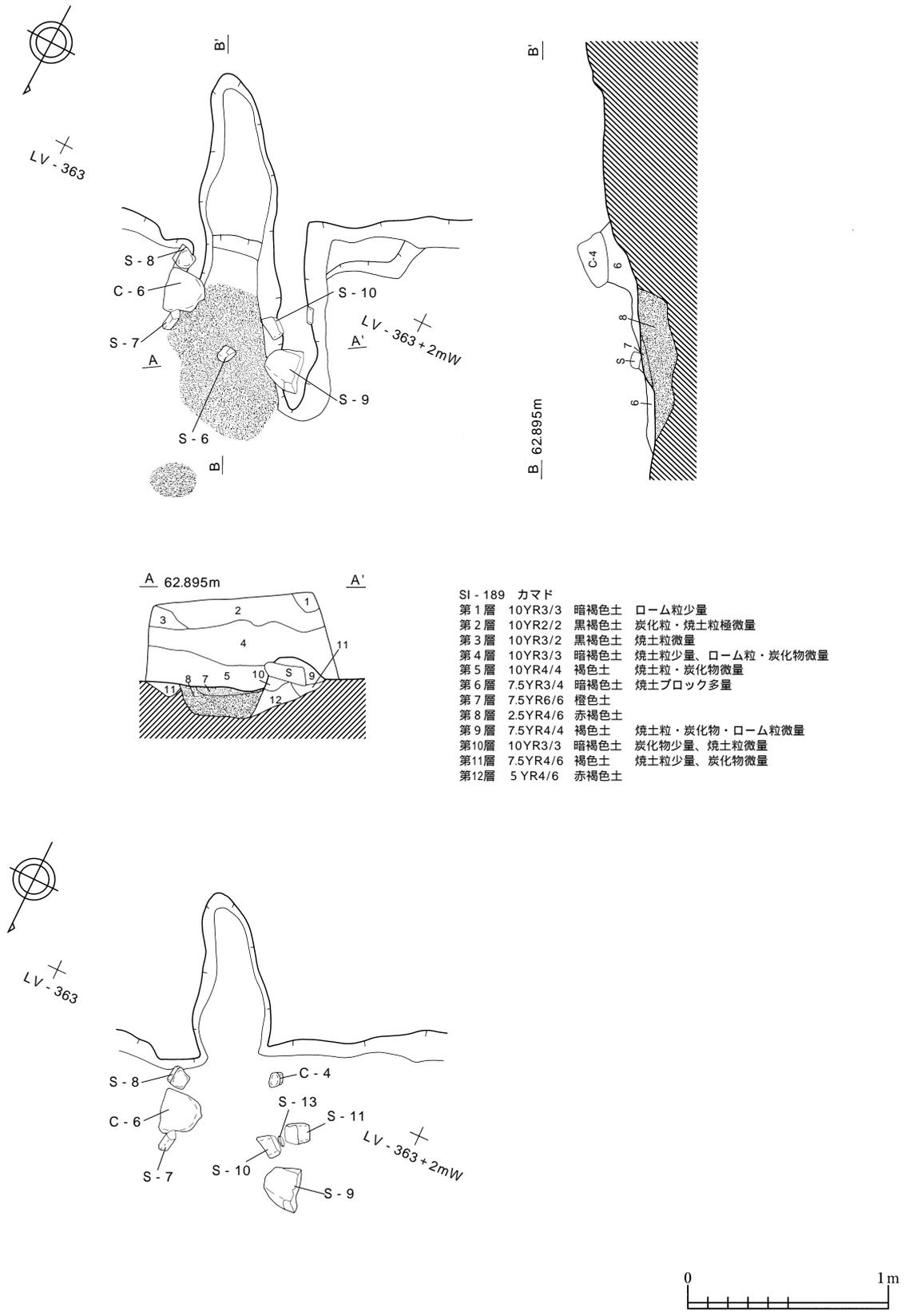


Pit 12
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 炭化物少量
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 炭化物微量、ローム粒多量

SI - 189 Pit13



第371図 SI - 189



第372図 SI-189

S I - 190 (第373、374図)

[位置] グリッドLU - 363・364で検出した。

[重複] S I - 191と重複している。本遺構がS I - 191の堆積土を切っており、本遺構の方が新しい。ただし、重複部分が攪乱により乱されており、厳密に言いきれない要素がある。

[平面形・規模] 方形を呈し、266×260×58cmを測る。床面積は(6.974)㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁34cm、東壁32cm、南壁37cm、西壁52cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は、S I - 191と重複部分については壁面がS I - 191の堆積土であり、やや脆弱である。それ以外の部分については地山を壁面としており、堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、起伏がある。床面は堅緻である。

[壁溝] 住居北壁側から1基検出した。深さは12cmを測る。

[ピット] なし。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(73:27)の位置から検出した。構造は、半地下式で、袖部幅86cm、煙道長160cmを測る。主軸はN - 164° - Eである。燃烧部ならびに煙道部とも粘土による構築で、燃烧部の上部構造はほとんど破壊されている。煙道は、住居壁際から25°の角度で立ち上がり、途中で5°に角度を変え、煙出部へ向かう。煙出部付近では、一度外傾しながら立ち上がり、ピット状に掘り込まれた煙出につながる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 一部攪乱により堆積状況が乱されているが、残存部分について11層に分層した。埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 191 (第373・374図)

[位置] グリッドLU・LV - 363・364で検出した。

[重複] S I - 190と重複している。本遺構の堆積土がS I - 190に切られており、本遺構の方が古い。ただし、新旧関係については前述の要素を持ちえている。

[平面形・規模] S I - 190の重複部分ならびに攪乱による影響で一部形が不整形であるが、方形を呈し、338×296×40cmを測る。床面積は9.583㎡を測る。

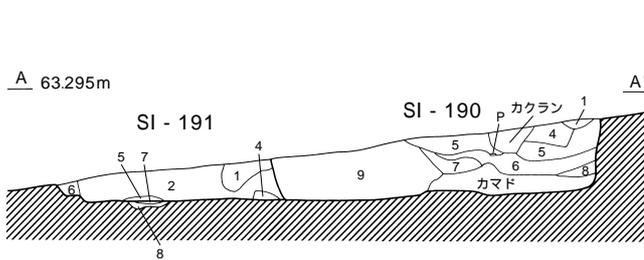
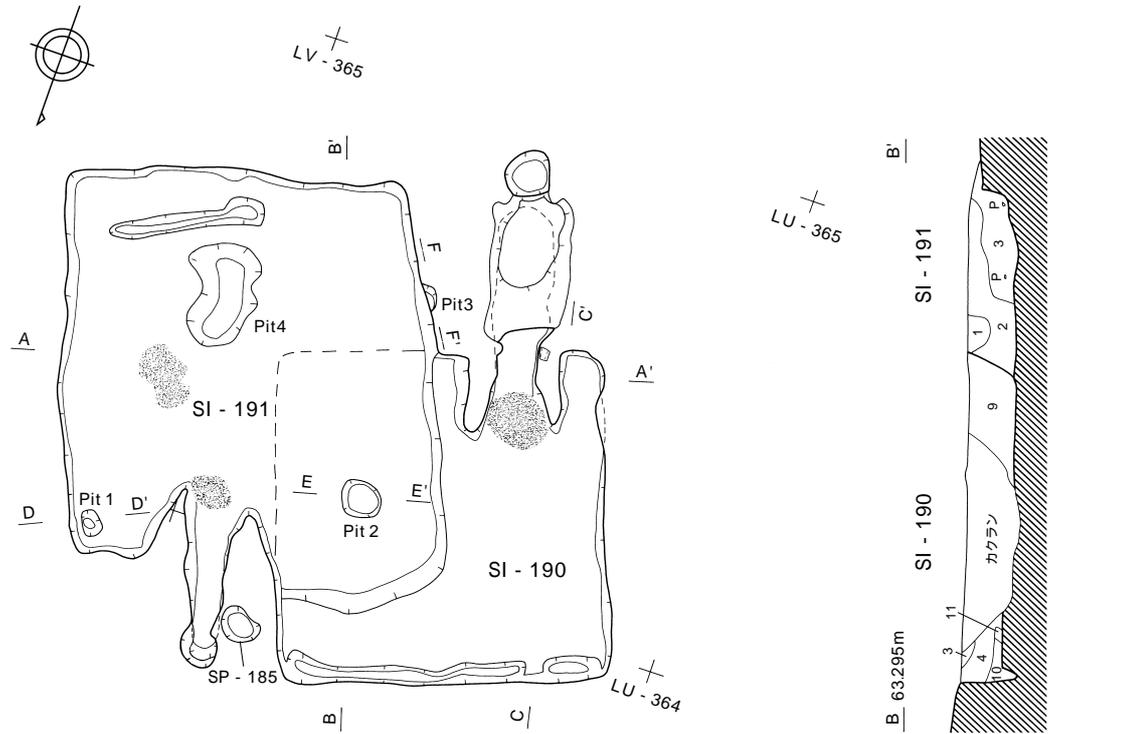
[壁] S I - 190に西壁と北壁の一部が切られているが、残存部分の壁高は、北壁24cm、東壁15cm、南壁20cm、西壁34cmを測る。断面形はcで、壁上部の一部で緩やかな立ち上がりが見られる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。また、住居中央部から赤化面を54×38cmの範囲で検出した。

[壁溝] 住居南壁側から部分的に検出した。深さは6cmを測る。

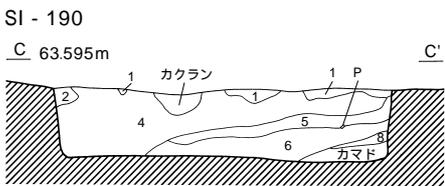
[ピット] 住居内外から4基検出した。重複するS I - 190に関連する可能性を持つピットもあるが、提示にあたって本遺構に帰属させた。各ピットの規模は、Pit 1 = 21×21×11cm、Pit 2 = 34×30×6cm、Pit 3 = 22×(8)×23cm、Pit 4 = 85×58×11cmを測る。

[カマド] 住居北壁側から1基検出した。北壁3(64:36)の位置から検出している。構造は、地下式で、袖部幅30cm、煙道長82cmを測る。主軸はN - 15° - Wである。燃烧部の構築は粘土によるも



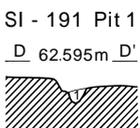
SI - 190

第1層	10YR2/1	黒色土	炭化物・焼土粒極微量
第2層	10YR3/4	暗褐色土	
第3層	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒多量、炭化物極微量
第4層	10YR3/3	暗褐色土	ローム多量、炭化物・焼土粒微量
第5層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒少量、炭化物・焼土粒微量
第6層	10YR3/3	暗褐色土	ローム多量、炭化物極微量
第7層	10YR3/3	暗褐色土	炭化物・焼土粒微量
第8層	10YR2/1	黒色土	
第9層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒・炭化物・焼土粒少量
第10層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒少量、炭化物極微量
第11層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒・炭化物微量



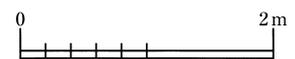
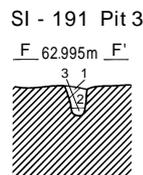
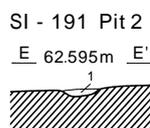
SI - 191

第1層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒少量、炭化物・焼土粒微量
第2層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒少量、炭化物・焼土粒極微量
第3層	10YR2/2	黒褐色土	ロームブロック少量、炭化物・焼土粒微量
第4層	7.5YR4/4	褐色土	
第5層	10YR2/1	黒色土	炭化物・焼土粒微量
第6層	10YR4/4	褐色土	炭化物極微量
第7層	5YR4/6	赤褐色土	
第8層	10YR3/2	黒褐色土	ロームブロック少量



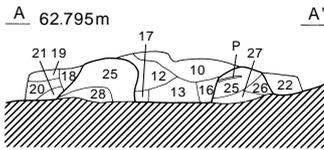
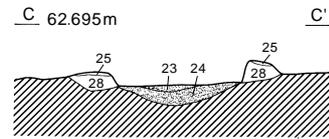
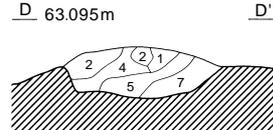
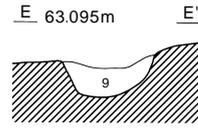
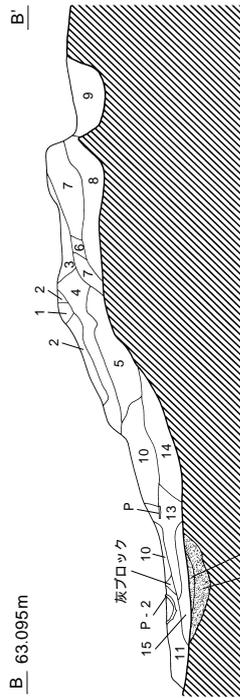
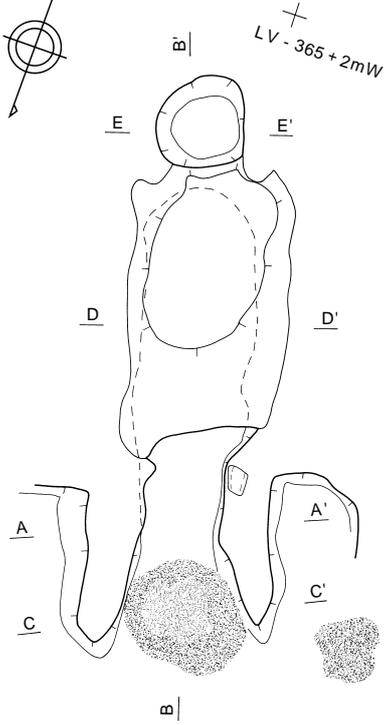
SI - 191 Pit 1

Pit 1	第1層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒多量
Pit 2	第1層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒・焼土粒・炭化物微量
Pit 3	第1層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒微量
	第2層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒多量
	第3層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒少量



第373図 SI - 190 ・ SI - 191

SI - 190 カマド

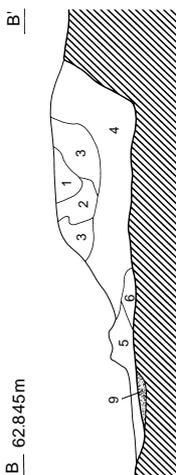
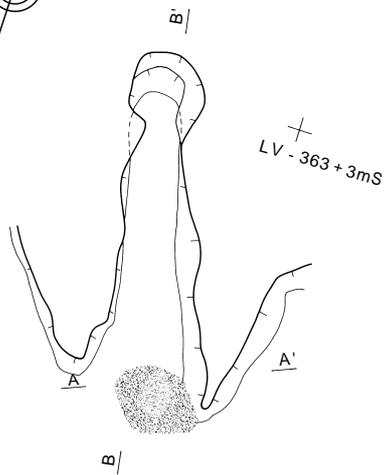


SI - 190 カマド

- | | | | |
|------|----------|---------|---------------------|
| 第1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ローム粒少量 |
| 第2層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 焼土粒微量 |
| 第3層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 焼土粒・ローム粒少量 |
| 第4層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | ローム粒多量、焼土粒・炭化物微量 |
| 第5層 | 7.5YR4/4 | 褐色土 | 焼土粒・炭化物微量 |
| 第6層 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 | バミス少量 |
| 第7層 | 7.5YR4/4 | 褐色土 | 焼土粒・炭化物極微量 |
| 第8層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 焼土ブロック・ローム粒少量、炭化物微量 |
| 第9層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒・炭化物少量 |
| 第10層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 焼土ブロック・灰ブロック少量 |
| 第11層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ローム粒多量、焼土粒・炭化物微量 |
| 第12層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土ブロック多量 |
| 第13層 | 7.5YR4/3 | 褐色土 | 焼土粒多量、炭化物微量 |
| 第14層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土粒少量 |

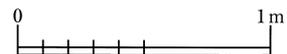
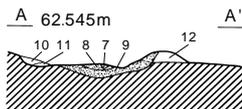
- | | | | |
|------|----------|---------|-------------------|
| 第15層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 焼土粒多量、炭化物微量 |
| 第16層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土ブロック少量、灰微量 |
| 第17層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 焼土ブロック多量 |
| 第18層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土粒・炭化物微量 |
| 第19層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土ブロック・灰少量 |
| 第20層 | 7.5YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒微量 |
| 第21層 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | |
| 第22層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 焼土粒・炭化物極微量 |
| 第23層 | 7.5YR6/6 | 橙色土 | |
| 第24層 | 5YR3/4 | 暗赤褐色土 | |
| 第25層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 焼土ブロック・灰粒多量、炭化物微量 |
| 第26層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒・焼土粒微量 |
| 第27層 | 7.5YR4/4 | 褐色土 | 焼土粒微量 |
| 第28層 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色土 | 灰多量 |

SI - 191 カマド



SI - 191 カマド

- | | | | |
|------|-----------|------|--------------|
| 第1層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | ローム粒・炭化物微量 |
| 第2層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ローム粒少量 |
| 第3層 | 10YR4/4 | 褐色土 | |
| 第4層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | ローム粒少量、炭化物微量 |
| 第5層 | 7.5YR4/4 | 褐色土 | |
| 第6層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ローム粒少量、炭化物微量 |
| 第7層 | 7.5YR4/6 | 褐色土 | |
| 第8層 | 5YR4/8 | 赤褐色土 | |
| 第9層 | 5YR4/6 | 赤褐色土 | |
| 第10層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | |
| 第11層 | 7.5YR4/4 | 褐色土 | 焼土粒多量、炭化物微量 |
| 第12層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 焼土粒微量 |



第374図 SI - 190 ・ SI - 191

ので、残存状況が悪い。天井は第5、6層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道部の構築は掘り込みによる構築で、天井については一部土層に影響を受けている。煙道は、住居壁際より手前部分からほぼ平坦に煙出部へ向かう。煙出奥壁はゆるやかに外傾しながら立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] S I - 190によって堆積土の一部が切られているが、残存部分について8層に分層した。急激な埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 192 (第375、376図)

[位置] グリッドLV・LW - 365・366で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、390×366×78cmを測る。床面積は14.267m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁58cm、東壁26cm、南壁60cm、西壁72cmを測る。断面形はcで、壁上部の一部で緩やかな立ち上がりが見られる。壁面は堅緻である。

[床] 一部浅い落ち込みがあり、黒色土が充填されているが、それ以外の部分については、大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面は堅緻である。また、住居東壁床直から灰溜りを検出した。

[壁溝] 東西壁から部分的に検出した。深さは平均6cmを測る。

[ピット] 住居内から7基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 38×31×12cm、Pit 2 = 31×26×7cm、Pit 3 = 32×27×23cm、Pit 4 = 23×19×12cm、Pit 5 = 20×14×11cm、Pit 6 = 38×30×7cm、Pit 7 = 26×23×5cmを測る。

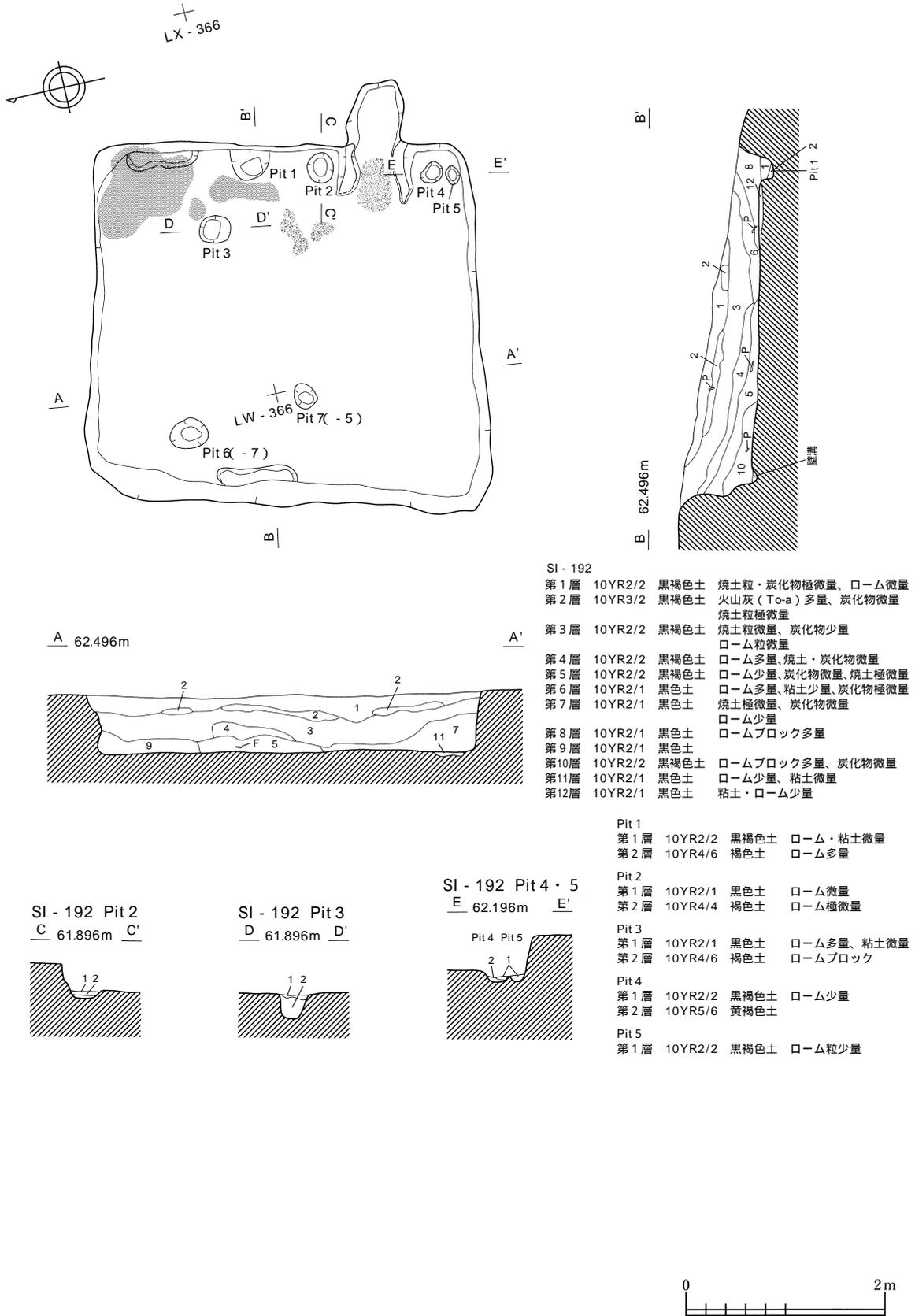
主柱穴として考えられるピットは、Pit 3である。

[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁3(74:26)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅75cm、煙道長63cmを測る。主軸はN - 106.5° - Eである。粘土による構築で、燃烧部天井は第9、10層が相当し、崩落した堆積状況を呈する。煙道部天井は、第5層が相当し、燃烧部と同様崩落した堆積状況を呈する。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で13°に角度を変え、起伏を持ちながら立ち上がる。また支脚として土師器椀2点、小甕体部～底部片1点を利用している。

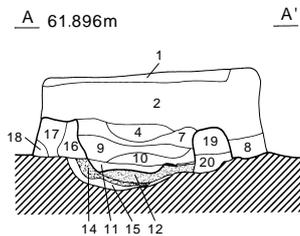
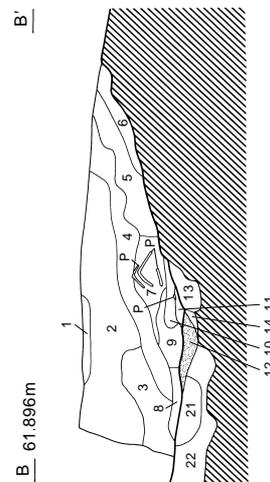
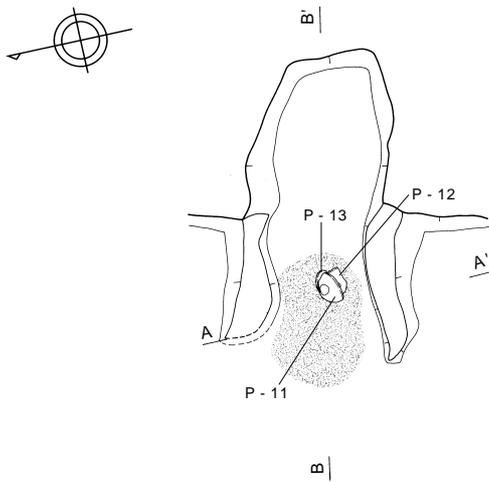
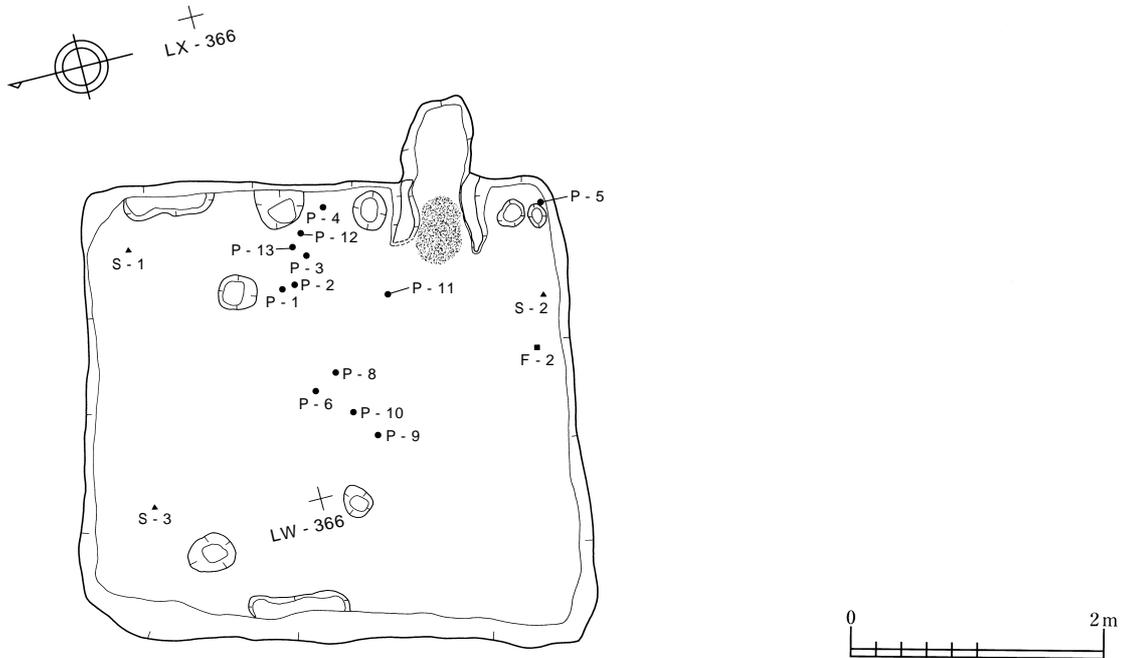
[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 12層に分層した。概ね自然堆積状況を呈する。第2層中からT o - a火山灰を検出した。

(木村)



第375図 SI - 192



SI - 192 カマド

第1層	10YR2/1	黒色土	ローム粒極微量
第2層	10YR3/2	黒褐色土	ローム少量、炭化粒極微量、粘土微量
第3層	10YR2/3	黒褐色土	ローム・粘土少量
第4層	10YR2/2	黒褐色土	ローム微量、焼土粒極微量、炭化粒・粘土微量
第5層	5YR4/4	にぶい赤褐色土	粘土微量
第6層	7.5YR3/3	暗褐色土	ローム粒極微量
第7層	5YR5/6	明赤褐色土	ローム粒極微量
第8層	7.5YR2/2	黒褐色土	焼土粒・ローム粒・炭化粒極微量
第9層	5YR3/4	暗赤褐色土	焼土粒・ローム粒極微量
第10層	2.5YR4/8	赤褐色土	
第11層	7.5YR3/3	暗褐色土	焼土粒極少量
第12層	5YR4/6	赤褐色土	ローム多量
第13層	7.5YR4/6	褐色土	バミス・焼土微量
第14層	5YR3/4	暗赤褐色土	
第15層	10YR3/3	暗褐色土	ローム多量
第16層	5YR3/6	暗赤褐色土	
第17層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	焼土少量
第18層	10YR2/1	黒色土	焼土少量
第19層	7.5YR4/4	褐色土	ローム・焼土極微量
第20層	7.5YR3/2	黒褐色土	炭化物・ローム微量
第21層	10YR2/2	黒褐色土	炭化物・粘土微量、ローム少量
第22層	10YR4/4	褐色土	粘土微量、バミス極微量



第376図 SI - 192

S I - 193 (第377~379図)

[位置] グリッドLW・LX - 366・367、LY - 366で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 長方形を呈し、490×488×65cmを測る。床面積は24.024㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁13cm、東壁26cm、南壁54cm、西壁62cmを測る。断面形はcで、壁上部の一部で緩やかな立ち上がりが見られる。黒褐色土系の地山を壁面としており、やや脆弱である。

[床] ほぼ全面に掘り方を持ち、ロームブロックを含む黒褐色土が充填され床面としている。床面は起伏があり、ややしまりがあるが、やや脆弱である。

[壁溝] 断続的ではあるが、全周する形で検出した。深さは平均7cmを測る。

[ピット] 住居内から20基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 47×33×58cm、Pit 2 = 50×38×58cm、Pit 3 = 68×67×32cm、Pit 4 = 108×98×18cm、Pit 5 = 22×19×15cm、Pit 6 = 33×17×18cm、Pit 7 = 25×25×28cm、Pit 8 = 22×20×22cm、Pit 9 = 31×30×26cm、Pit10 = 66×55×24cm、Pit11 = 48×42×35cm、Pit12 = 58×51×53cm、Pit13 = 38×33×13cm、Pit14 = 29×18×13cm、Pit15 = 20×20×28cm、Pit16 = 23×13×13cm、Pit17 = 28×24×12cm、Pit18 = 31×20×19cm、Pit19 = 34×25×16cm、Pit20 = 21×16×24cmを測る。支柱穴としての機能が考えられるピットは、Pit 1、2である。また、壁柱穴は、Pit 5、6、7、8、9、12、14、15、16、17、18、19が考えられる。

[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁3(54:46)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅(65)cm、煙道長95cmを測る。主軸はN - 137.5° - Eである。燃烧部袖は、転用羽口を芯材としており、粘土を用いて構築している。煙道部天井は月見野火山灰層主体の粘土が利用されており、崩落した堆積状況を呈している。煙道は住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で20°に角度を変え、全煙道長1/3の地点で1°に角度を変え、起伏を持ちながら立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 16層に分層した。貼り床構築層の第13層の住居中央部分については、連続溝状に掘削痕がある。平面的に溝跡として検出できなかったため、根太としての機能は考えられない。住居廃絶後以降の堆積土は第1~10層で、第4~10層は概ね自然堆積状況を呈するが、第1~3層については、月見野火山灰層主体の褐色土系の土質が堆積しており、急激な埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 194 (第380図)

[位置] グリッドLZ - 369で検出した。

[重複] なし。

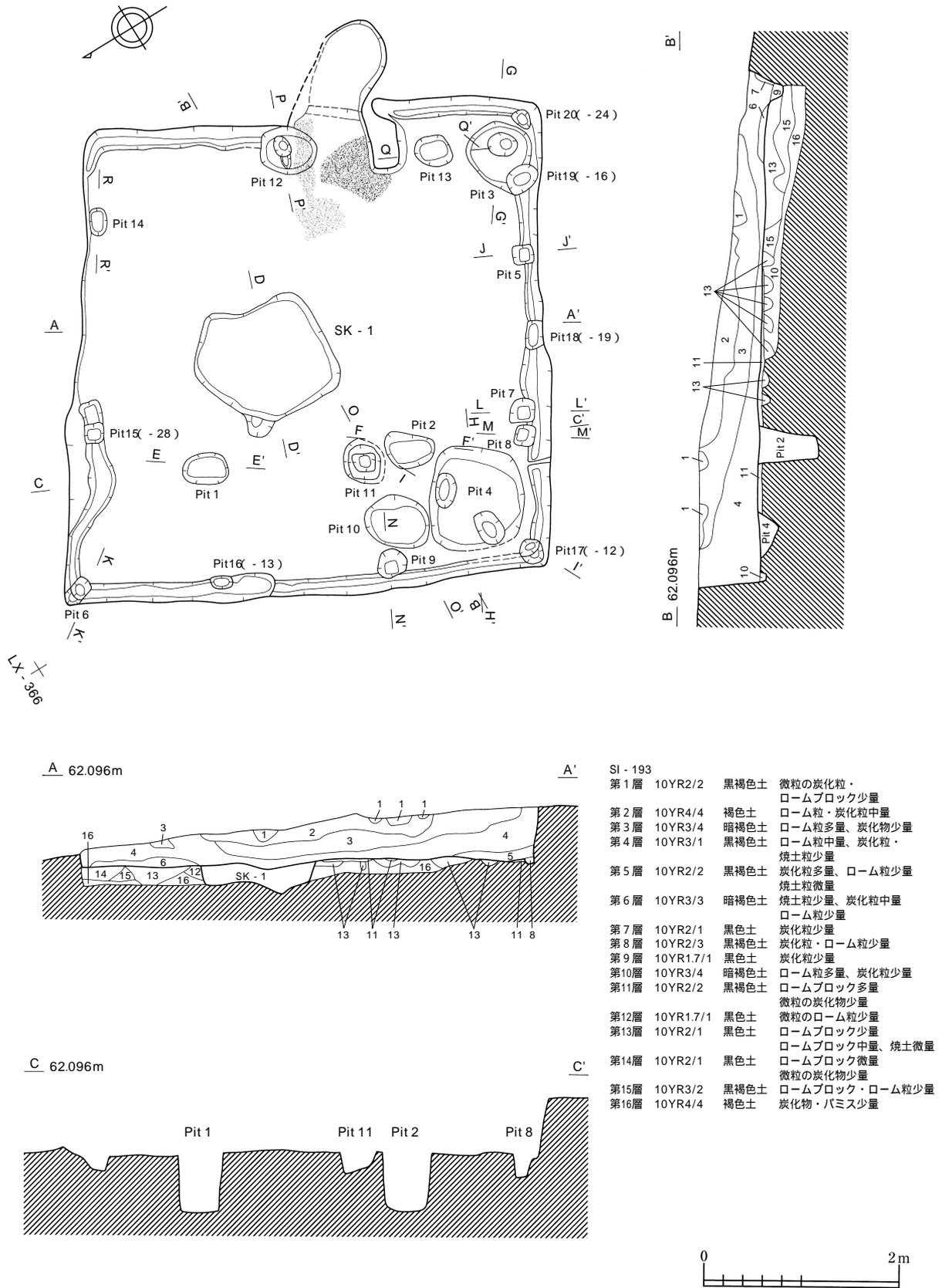
[平面形・規模] 不整形を呈し、286×280×50cmを測る。床面積は8.609㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁13cm、東壁12cm、南壁16cm、西壁25cmを測る。断面形はdで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。

[床] 月見野火山灰層の地山を床面としており、東側に向かって傾斜がある。床面は脆弱である。

[壁溝] なし。

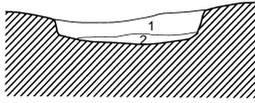
[ピット] 住居内から1基検出した。規模は23×19×11cmを測る。



第377図 SI - 193

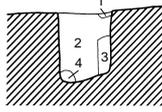
SI - 193 Pit 3
G 62.096m G'

SI - 193 SK - 1
D 61.596m D'



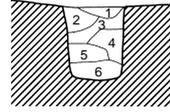
SK - 1
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒少量、ロームブロック・炭化粒中量
第2層 10YR2/1 黒色土 ローム粒・炭化粒中量

SI - 193 Pit 1
E 61.596m E'

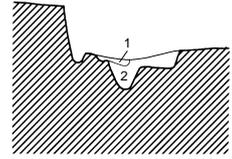


Pit 1
第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化粒少量
第2層 10YR3/1 黒褐色土 ローム粒中量
第3層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック多量、炭化粒少量
第4層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 炭化粒少量

SI - 193 Pit 2
F 61.596m F'

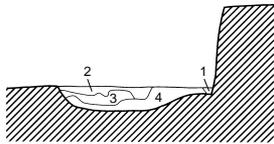


Pit 2
第1層 10YR2/1 黒色土 炭化粒・ローム粒少量
第2層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒 (10YR2/1) 中量
第3層 10YR5/6 黄褐色土 ローム粒中量、黒色土少量
第4層 10YR3/1 黒褐色土 炭化粒・ローム粒中量
第5層 10YR4/6 褐色土 ロームブロック多量、炭化粒少量
第6層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・炭化粒多量



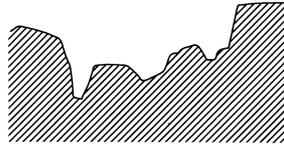
Pit 3
第1層 10YR1.7/1 黒色土 炭化粒少量
第2層 10YR3/1 黒褐色土 炭化粒少量、ローム粒中量、ロームブロック少量

SI - 193 Pit 4
H 62.096m H'

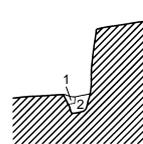


Pit 4
第1層 10YR3/2 黒褐色土 炭化粒少量
第2層 10YR3/3 暗褐色土 パミス・ローム粒・炭化粒少量
第3層 10YR3/4 暗褐色土 パミス中量、ローム粒多量、炭化粒少量
第4層 10YR4/6 褐色土 パミス少量、炭化粒・ローム粒中量

SI - 193 Pit 4
I 62.096m I'

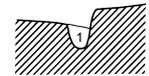


SI - 193 Pit 5
J 62.096m J'



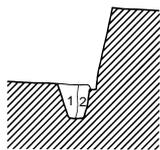
Pit 5
第1層 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒・炭化粒少量
第2層 10YR2/2 黒褐色土 パミス・炭化粒・ローム粒少量

SI - 193 Pit 6
K 62.096m K'



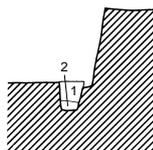
Pit 6
第1層 10YR3/2 黒褐色土 ロームブロック少量、ローム粒中量
炭化粒少量

SI - 193 Pit 7
L 62.096m L'



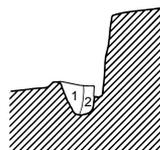
Pit 7
第1層 10YR4/4 褐色土 ローム粒多量
第2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒中量、炭化粒少量

SI - 193 Pit 8
M 62.096m M'



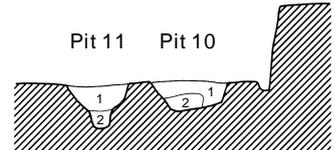
Pit 8
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒多量、パミス少量
第2層 10YR4/4 褐色土 パミス・炭化粒少量

SI - 193 Pit 9
N 62.096m N'



Pit 9
第1層 10YR4/4 褐色土 パミス・炭化粒少量
第2層 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒多量、炭化粒少量

SI - 193 Pit 10・11
O 62.096m O'



Pit 10
第1層 10YR2/3 黒褐色土 パミス少量、ロームブロック多量
ローム粒少量
第2層 10YR4/4 褐色土 ロームブロック多量

Pit 11
第1層 10YR3/4 暗褐色土 パミス少量、ロームブロック中量
ローム粒多量
第2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒多量、炭化粒中量

SI - 193 Pit 12
P 61.596m P'

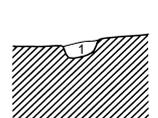


SI - 193 Pit 13
Q 61.596m Q'



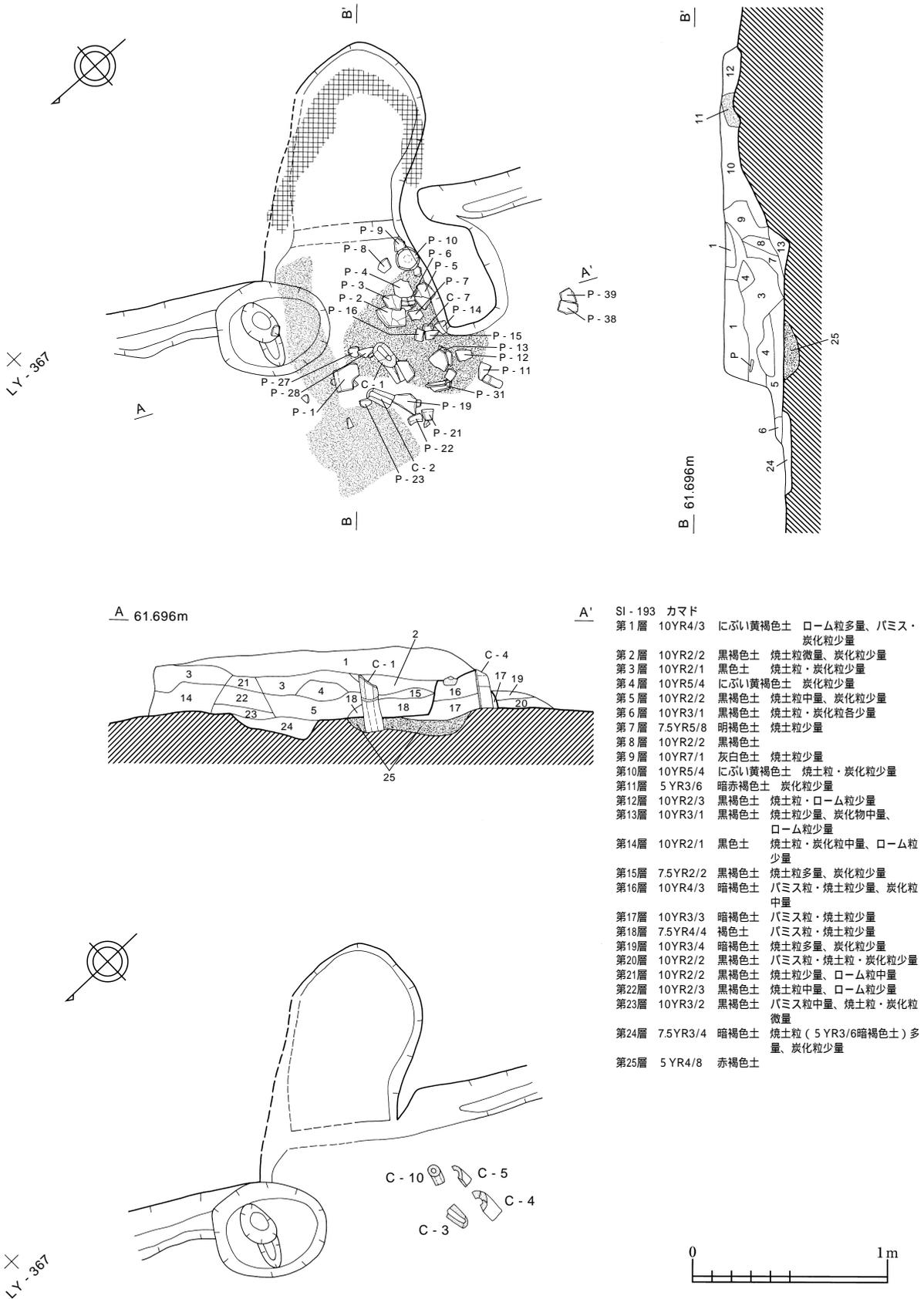
Pit 13
第1層 10YR2/2 黒褐色土 パミス微量、ローム粒少量

SI - 193 Pit 14
R 61.596m R'

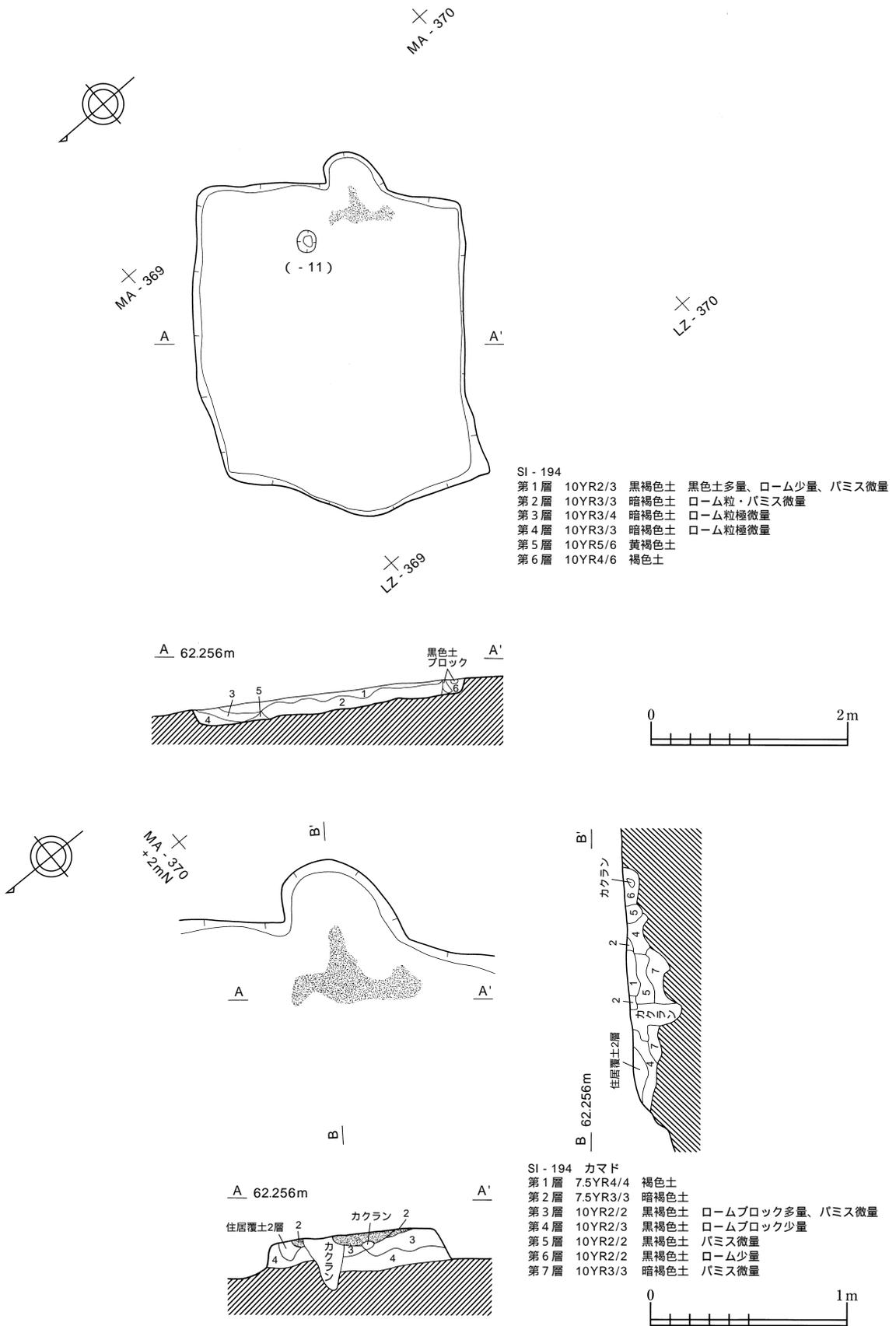


Pit 14
第1層 10YR7/3 にぶい黄褐色土 焼土粒少量





第379図 SI - 193



第380図 SI - 194

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(59:41)の位置から検出している。構造は、半地下式で、燃焼部上部構造については残存しておらず、上面に焼土層が堆積するのみである。煙道長は、35cmを測る。主軸はN-129°-Eである。煙道部天井についても構築土が残存しておらず、黒褐色土が堆積しているのみである。煙道は、住居壁際から15°の角度で起伏を持ちながら立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 6層に分層した。黒褐色土と黒色土の混合層が認められ、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 195 (第381図)

[位置] グリッドMB-367・368で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 削平ならびに攪乱のため、北壁側の情報が欠落しているが、隅丸方形を呈したものと考えられ、314×309×63cmを測る。床面積は9.436 m²を測る。

[壁] 削平のため北壁側の情報は欠落しているが、残存部分についての壁高は、東壁32cm、南壁55cm、西壁40cmを測る。断面形はdで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面はやや脆弱である。

[床] 掘り方を有し、月見野火山灰層主体の地山と黒色土の混合土が充填され床面としている。やや起伏があり、脆弱である。

[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から1基検出した。規模は77×61×15cmを測る。

[カマド] 住居東壁側から燃焼部火床面のみを検出した。下部構造に掘り込みを持ち、暗褐色土が充填されている。上部構造・主軸等についての詳細は不明である。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて3層に分層した。住居廃絶後の堆積土は第1層のみで、ロームブロック等を含み、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 196 (第382、383図)

[位置] グリッドLX-362、LY-361~363、LZ-362で検出した。

[重複] 遺構内Pit 1として取り扱ったピットと重複している。ピットの規模は98×73×32cmを測る。本遺構の堆積土を切って構築されており、本遺構より新しい。

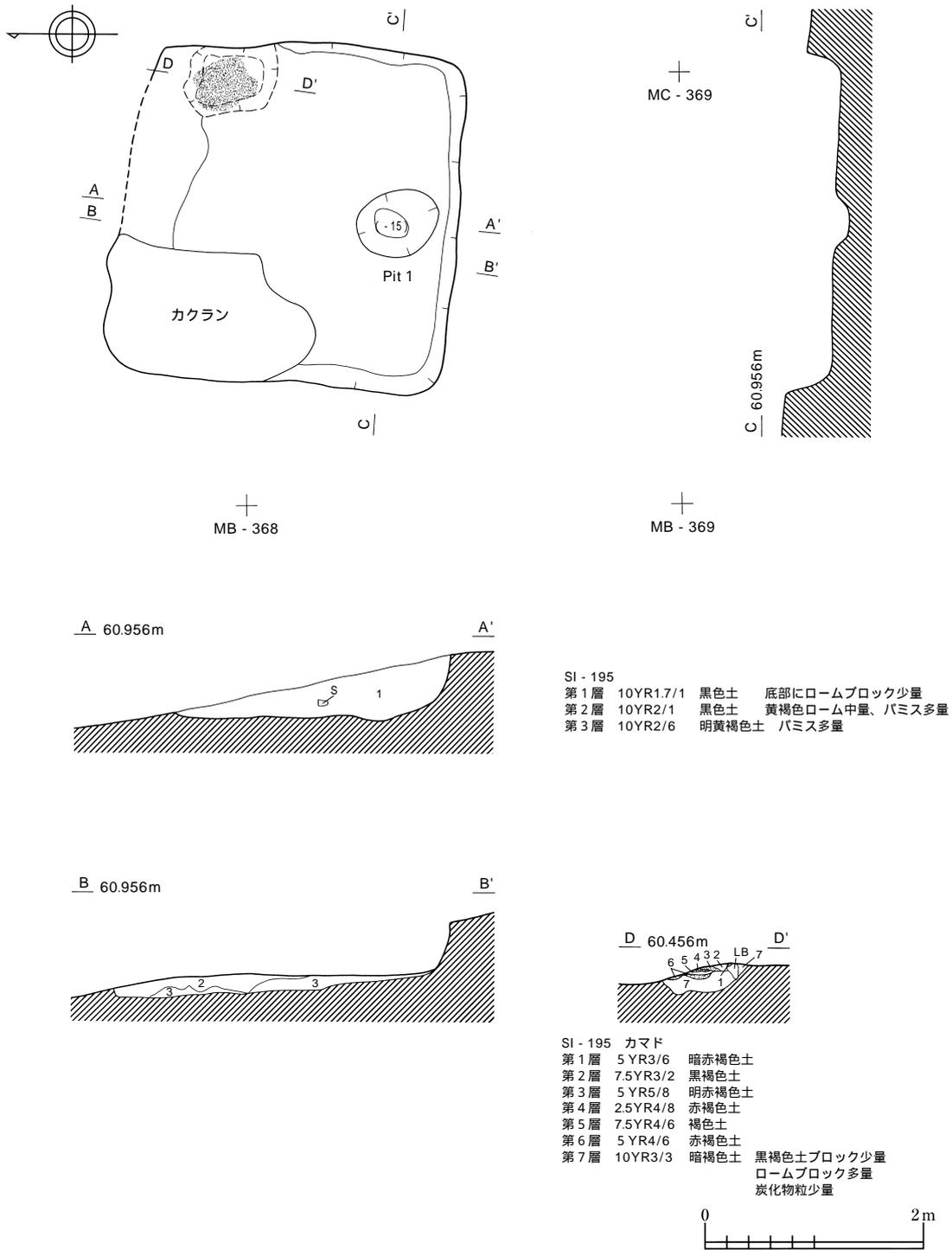
[平面形・規模] 台形を呈し、482×374×70cmを測る。床面積は17.152m²を測る。

[壁] 東壁側が削平を受けているが、壁高は、北壁38cm、東壁11cm、南壁25cm、西壁35cmを測る。断面形はcで、壁上部で緩やかな立ち上がりが見られる。壁面は堅緻である。

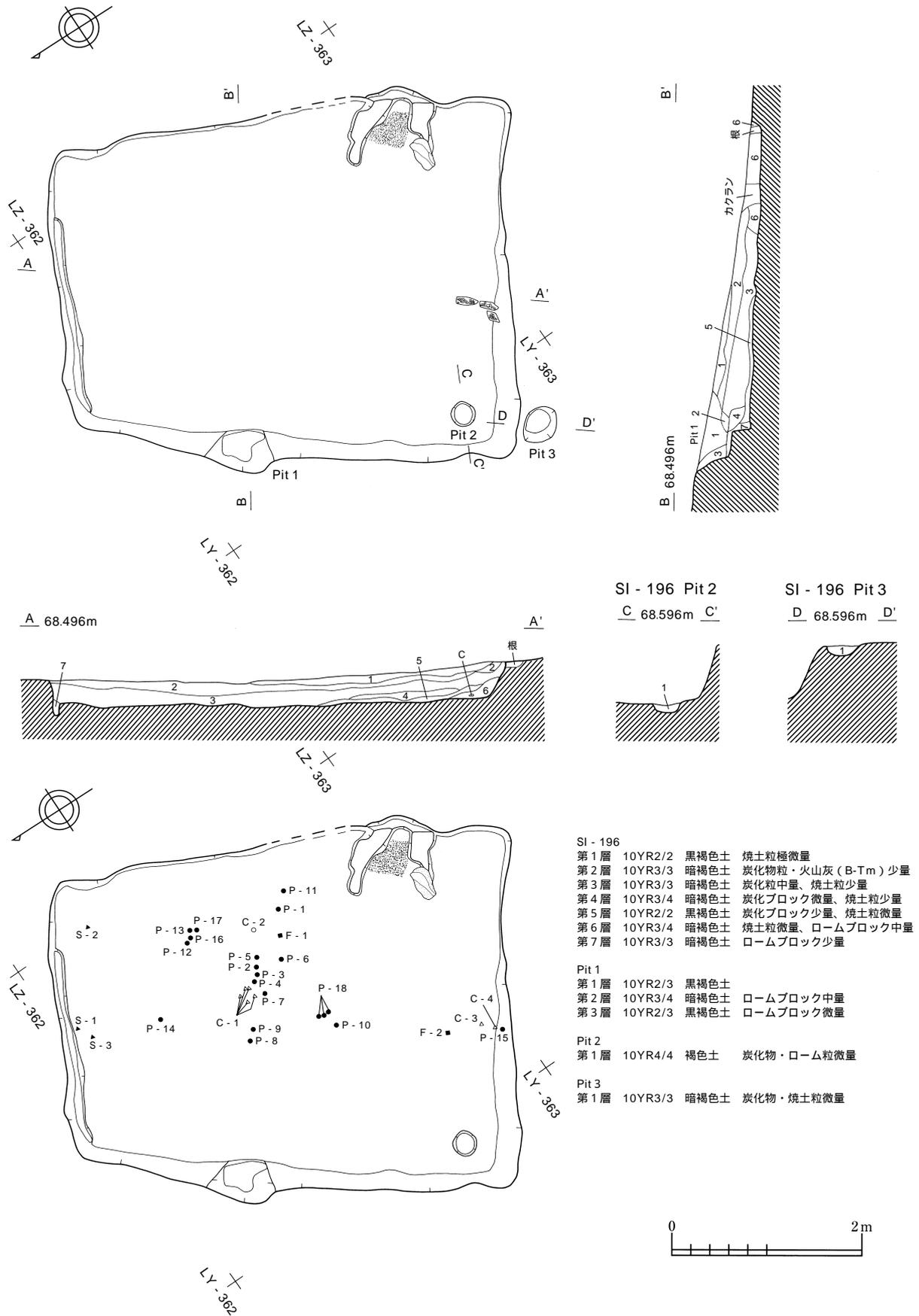
[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。床面から炭化材が少量検出した。

[壁溝] 北壁側から検出した。深さは12cmを測る。

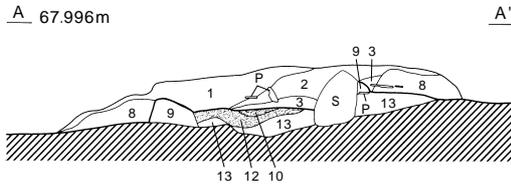
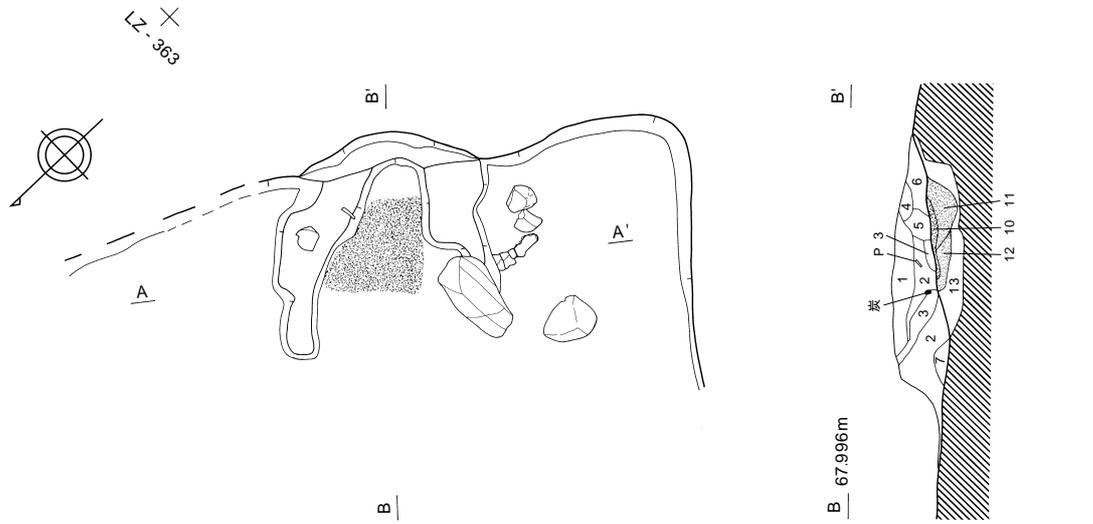
[ピット] 住居内外から2基検出した。各ピットの規模は、Pit 2 = 26×26×8cm、Pit 3 = 45×



第381図 SI - 195

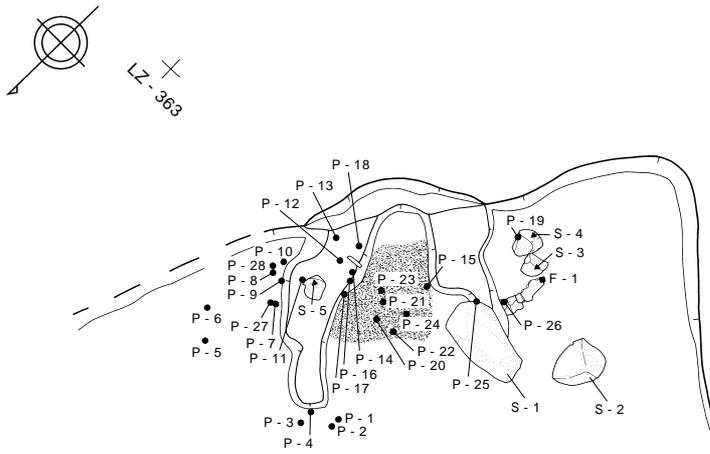


第382図 SI - 196



SI - 196 カマド

第1層	10YR2/3	黒褐色土	炭化物・ローム粒微量
第2層	10YR3/3	暗褐色土	炭化物・焼土粒微量
第3層	7.5YR3/4	暗褐色土	焼土粒多量
第4層	5 YR3/6	暗赤褐色土	
第5層	7.5YR4/4	褐色土	焼土粒微量
第6層	5 YR4/4	にぶい赤褐色土	
第7層	10YR5/4	にぶい黄褐色土	焼土粒微量
第8層	10YR5/4	にぶい黄褐色土	焼土ブロック少量
第9層	10YR5/4	にぶい黄褐色土	
第10層	5 YR4/8	赤褐色土	
第11層	5 YR5/8	明赤褐色土	ローム粒少量
第12層	7.5YR5/8	明褐色土	
第13層	10YR3/4	暗褐色土	ロームブロック少量



第383図 SI - 196

35×10cmを測る。

[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁4(76:24)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅89cm、煙道長9cmを測る。主軸はN-136°-Eである。カマド周辺部のみ地下構造を持ち、暗褐色土が充填されている。燃焼部袖には凝灰岩質の自然礫を芯材とし、粘土を用いて構築している。燃焼部天井は残存状況が悪く、周辺部に芯材であったと考えられる自然礫が散乱した状況で出土したことからカマドの破壊がなされたものと考えられる。煙道部天井は第6層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道は住居壁際から20°の角度で立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 7層に分層した。一部攪乱により土層が乱されているが、床直に堆積する第5、6層から炭化ブロック、焼土粒が検出しており、床面から検出した炭化材の要素を踏まえて、本遺構で焼失もしくは焼失後の廃棄が行われた可能性が考えられる。上層に堆積する第1～3層は炭化粒、焼土粒が混入する。自然堆積状況を呈する。第2層中からB-Tm火山灰を粒状に検出した。

(木村)

S I - 197 (第384～386図)

[位置] グリッドMD・ME-362・363・364で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、542×494×53cmを測る。床面積は26.323m²を測る。

[壁] 削平により東壁側の情報が欠落しているが、残存部分については、北壁18cm、南壁41cm、西壁35cmを測る。断面形は(a)で、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面は堅緻である。また、床面から赤化面、床直から炭化物を検出しており、本遺構は焼失住居であると考えられる。

[壁溝] 南北壁ならびに西壁から検出した。深さは平均2cmを測る。

[ピット] 住居内から4基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 62×48×15cm、Pit 2 = 55×45×18cm、Pit 3 = 24×16×41cm、Pit 4 = 36×27×33cmを測る。

主柱穴としての機能が考えられるピットはPit 3、4である。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(53:47)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅94cm、煙道長121cmを測る。主軸はN-153°-Eである。燃焼部袖は、自然礫を芯材とし、粘土を用いて構築している。燃焼部天井は第3、5層が相当し、崩落した堆積状況を呈する。煙道部天井は、第6層が相当し、燃焼部と同様崩落した堆積状況を呈する。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で6°に角度を変え、緩やかに立ち上がる。

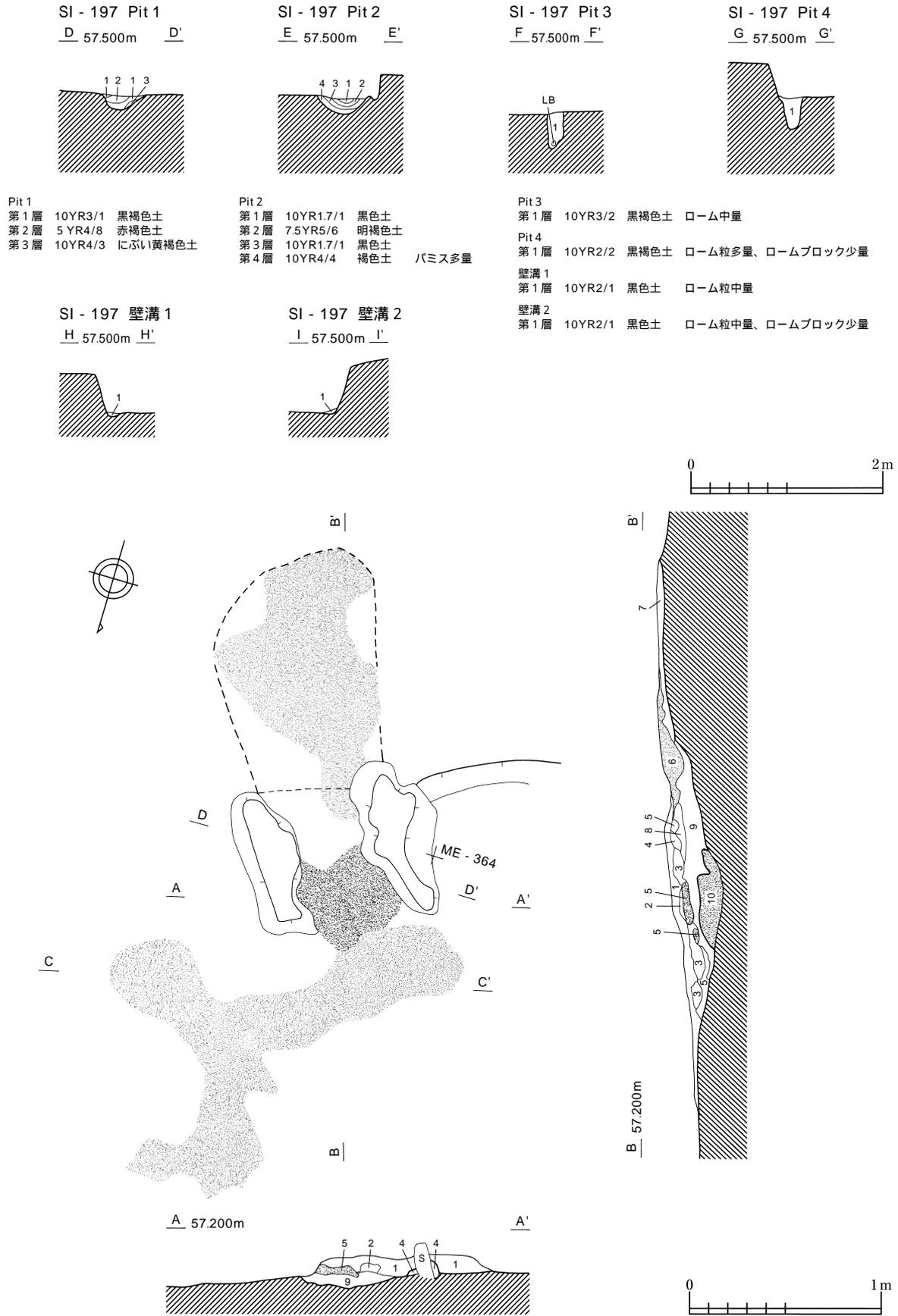
[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 4層に分層した。壁の崩落が生じており、概ね自然堆積状況を呈する。第2層はB-Tm火山灰堆積層である。

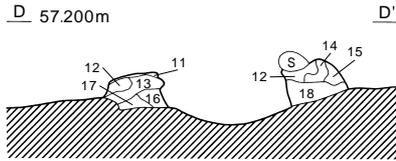
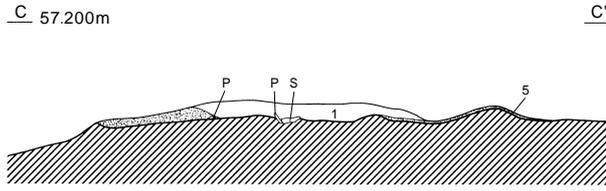
(木村)



第384図 SI - 197

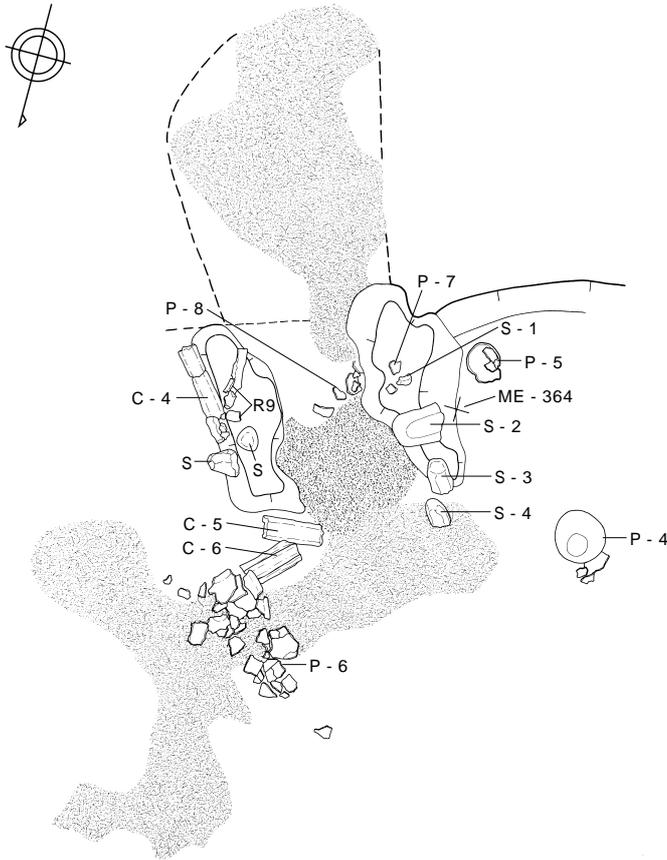


第385図 SI - 197



SI - 197 カマド

第1層	10YR2/1	黒色土	焼土粒少量
第2層	10YR4/4	褐色土	
第3層	10YR4/4	褐色土	黒色土中量
第4層	10YR6/4	にぶい黄褐色土	
第5層	2.5YR3/6	暗赤褐色土	
第6層	5YR3/4	暗赤褐色土	
第7層	10YR2/2	黒褐色土	
第8層	10YR3/3	暗褐色土	
第9層	10YR2/3	黒褐色土	焼土粒微量
第10層	5YR4/8	赤褐色土	
第11層	2.5YR7/3	淡赤褐色土	灰と砂礫が混入
第12層	10YR2/2	黒褐色土	
第13層	10YR2/1	黒色土	
第14層	10YR5/4	にぶい黄褐色土	ロームブロック混入
第15層	10YR6/4	にぶい黄褐色土	
第16層	10YR3/2	黒褐色土	
第17層	10YR3/3	暗褐色土	
第18層	7.5YR2/1	黒色土	焼土粒少量



第386図 SI - 197

S I - 198 (第387、388図)

[位置] グリッドMG - 362で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、266×244×50cmを測る。床面積は6.46m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁25cm、東壁15cm、南壁43cm、西壁48cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ちあがる。壁面はやや脆弱である。

[床] ほぼ全面に掘り方を有し、ロームブロックと黒褐色土の混合層が充填され床面としている。起伏がややあり、やや脆弱である。また、床直から焼土層ならびに炭化材・炭化物を検出しており、焼失住居の可能性が考えられる。

[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から1基検出した。規模は37×33×8cmを測る。

[カマド] 東壁側から1基検出した。東壁3(64:36)の位置から検出している。構造は、半地下式で、燃焼部ならびに煙道部上部構造はほとんど残存しておらず、燃焼部に一部崩落した構築材が堆積するのみである。煙道長109cmを測る。主軸はN - 85° - Eである。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で緩やかに角度を変え立ち上がる。また、カマドの左隣から袖状の構築物を有するSN - 1を検出した。

[その他の付属施設] 住居南壁側から土坑1基を検出した。規模は95×83×25cmを測る。

[堆積土] 掘り方部分を含めて8層に分層した。第3～5層についてはカマドの堆積層である。住居廃絶後に堆積した第2層中にはロームブロックが多量に含まれ、人為堆積状況を呈する。上層に堆積する第1層中にはB - T m火山灰が含まれる。

(木村)

S I - 199 (第389、390図)

[位置] グリッドMG・MH - 364・365で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、334×282×31cmを測る。床面積は9.004m²を測る。

[壁] 削平のため東壁の情報が欠落しているが、残存部分での壁高は、北壁15cm、南壁14cm、西壁31cmを測る。断面形は(a)で、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

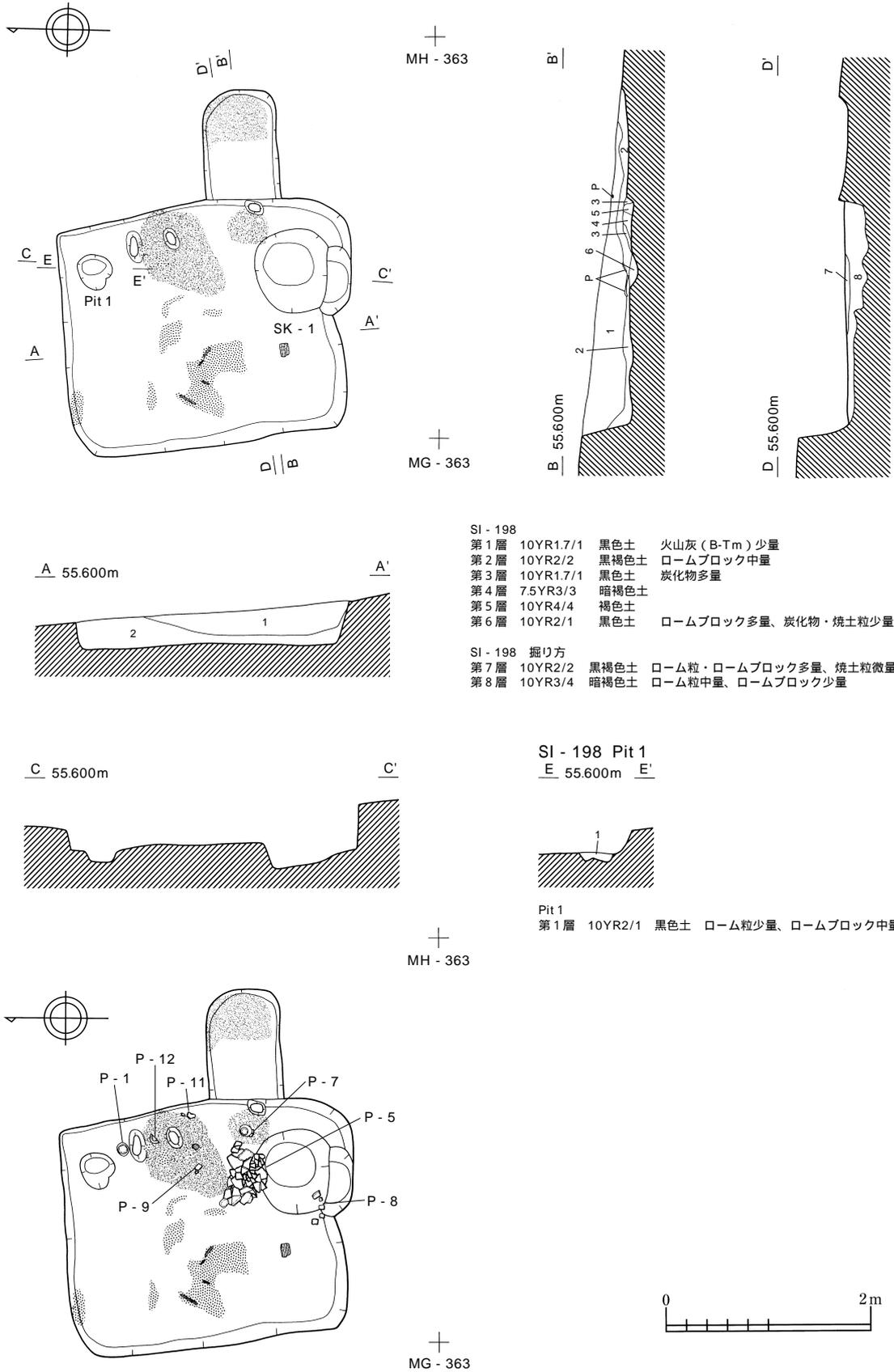
[床] 東壁側に掘り方を持ち、ロームブロックと黒色土の混合層が充填されている。それ以外の部分については、大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面は、貼り床部分はやや脆弱で、地山部分は堅緻である。

[壁溝] 東壁側が削平のため、一部残存していないが、残存部分については全周する形で検出した。深さは平均7cmを測る。

[ピット] 住居内から2基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 21×19×10cm、Pit 2 = 18×18×13cmを測る。

[カマド] 住居東壁側から燃焼部火床面であったと考えられる赤化面を2ヶ所検出した。東壁2(28:72)と東壁3(67:33)の位置から検出している。新旧関係、主軸、構造等の詳細は不明である。

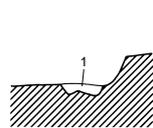
[その他の付属施設] なし。



- SI - 198
- | | | | |
|-----|-----------|------|---------------------|
| 第1層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 火山灰 (B-Tm) 少量 |
| 第2層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ロームブロック中量 |
| 第3層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 炭化物多量 |
| 第4層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | |
| 第5層 | 10YR4/4 | 褐色土 | |
| 第6層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ロームブロック多量、炭化物・焼土粒少量 |

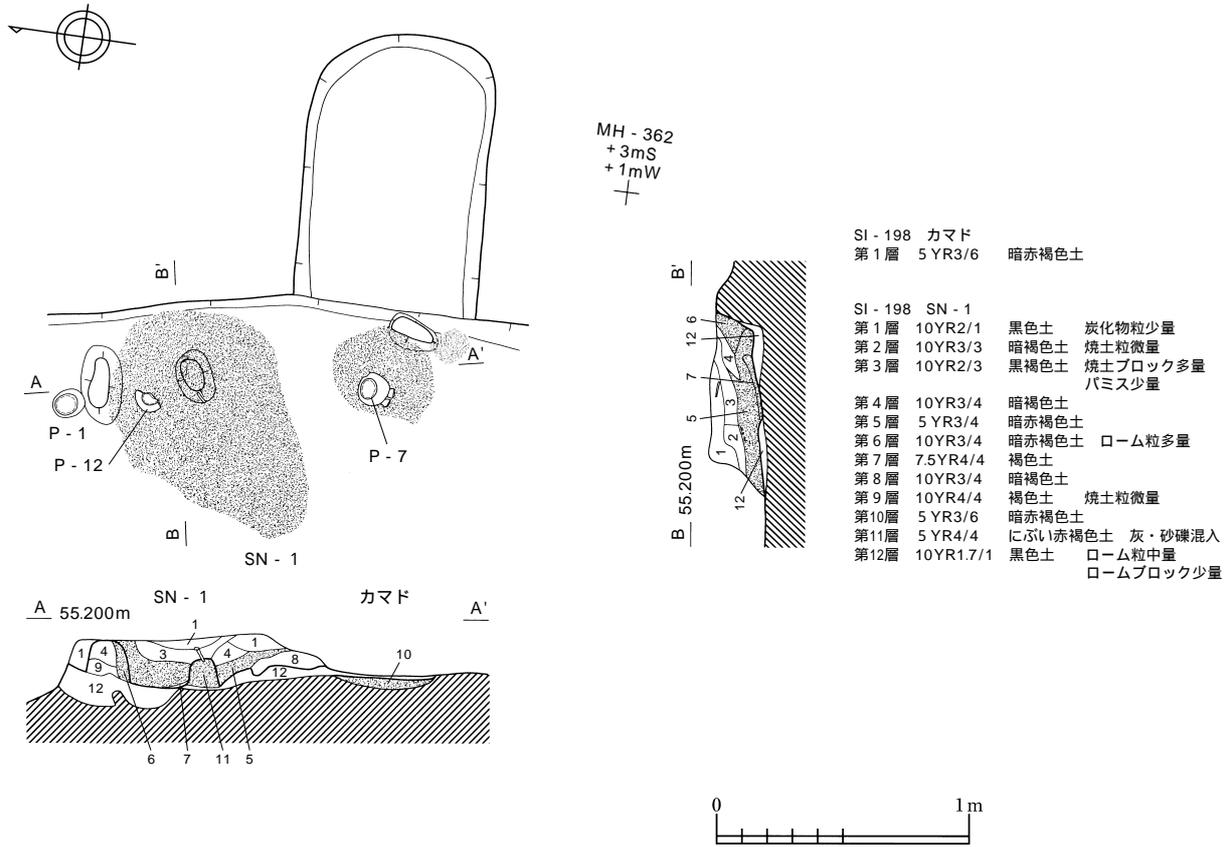
- SI - 198 掘り方
- | | | | |
|-----|---------|------|----------------------|
| 第7層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量、焼土粒微量 |
| 第8層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | ローム粒中量、ロームブロック少量 |

SI - 198 Pit 1



- Pit 1
- | | | | |
|-----|---------|-----|------------------|
| 第1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ローム粒少量、ロームブロック中量 |
|-----|---------|-----|------------------|

第387図 SI - 198



第388図 SI - 198

[堆積土] 掘り方部分を含めて3層に分層した。住居廃絶後の堆積土は第1層のみの単層で、概ね自然堆積状況を呈する。

(木村)

SI - 200 (第391、392図)

[位置] グリッドLK・LL - 373・374で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 台形を呈し、354×322×15cmを測る。床面積は11.07m²を測る。

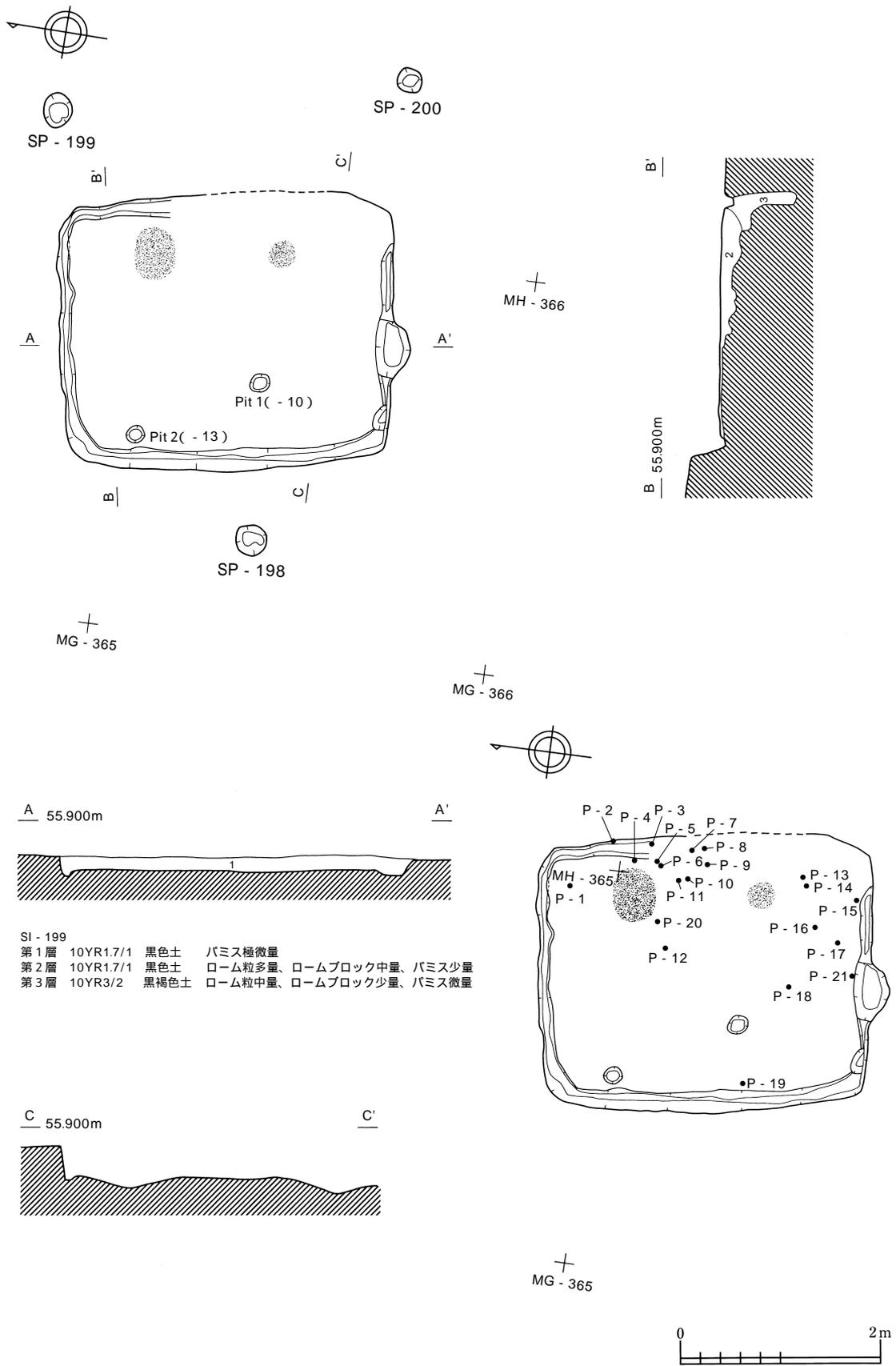
[壁] 削平のため、大部分が残存しておらず、残存部分での壁高は、北壁6cm、東壁3cm、南壁4cm、西壁11cmを測る。断面形はxで、詳細については不明である。壁面はやや脆弱である。

[床] 月見野火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面はやや脆弱である。

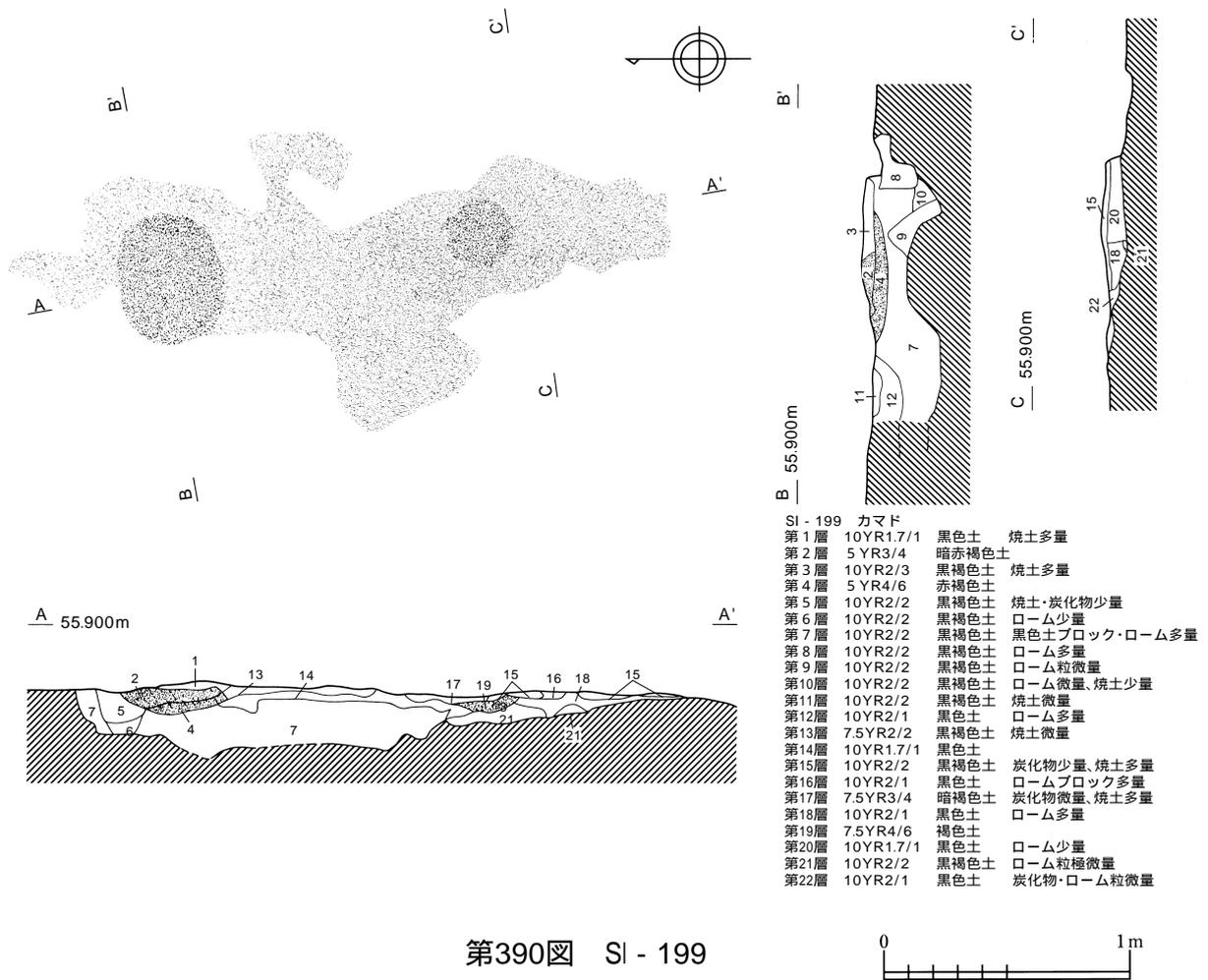
[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から5基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 26×23×7cm、Pit 2 = 43×40×5cm、Pit 3 = 73×47×13cm、Pit 4 = 80×79×10cm、Pit 5 = 52×37×10cmを測る。いずれのピットについても柱穴としての機能は持たないものと考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(72:28)の位置から検出している。残存状況が悪く、燃焼部左袖ならびに天井が残存しておらず、煙道長14cmを測る。主軸はN - 158° - Eである。残存しているカマド右袖部分は粘土による構築である。



第389図 SI - 199



第390図 SI - 199

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 3層に分層した。堆積土中にロームブロックが混入しており、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

SI - 202 (第393、394図)

[位置] グリッドLN・LO - 374・375で検出した。

[重複] なし。

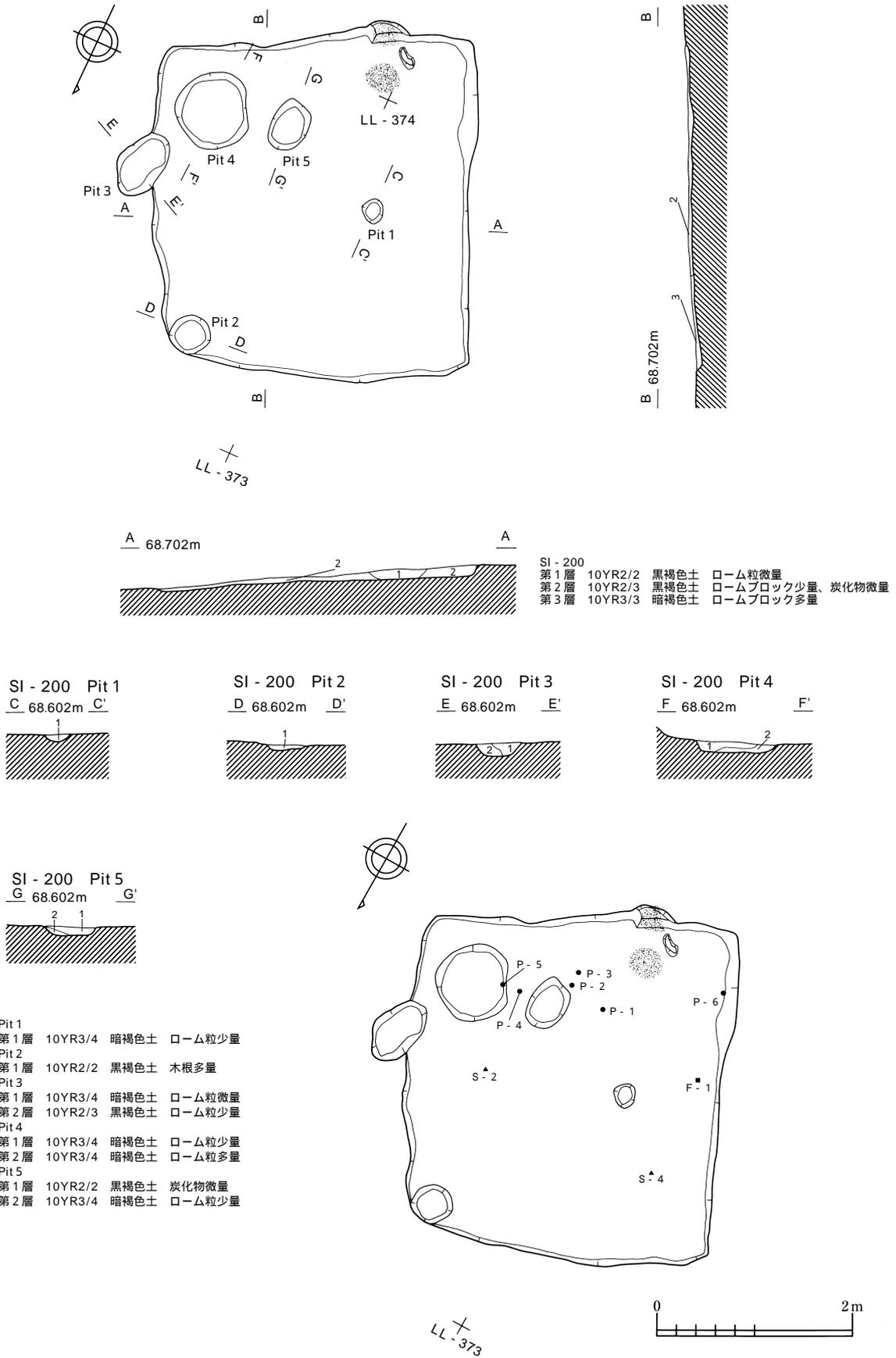
[平面形・規模] 長方形を呈し、370×336×45cmを測る。床面積は12.428㎡を測る。

[壁] 削平のため、東壁側の情報は欠落しているが、壁高は、北壁33cm、南壁20cm、西壁47cmを測る。断面形はcで、壁上部の一部で緩やかな立ち上がりが見られる。壁面はやや脆弱である。

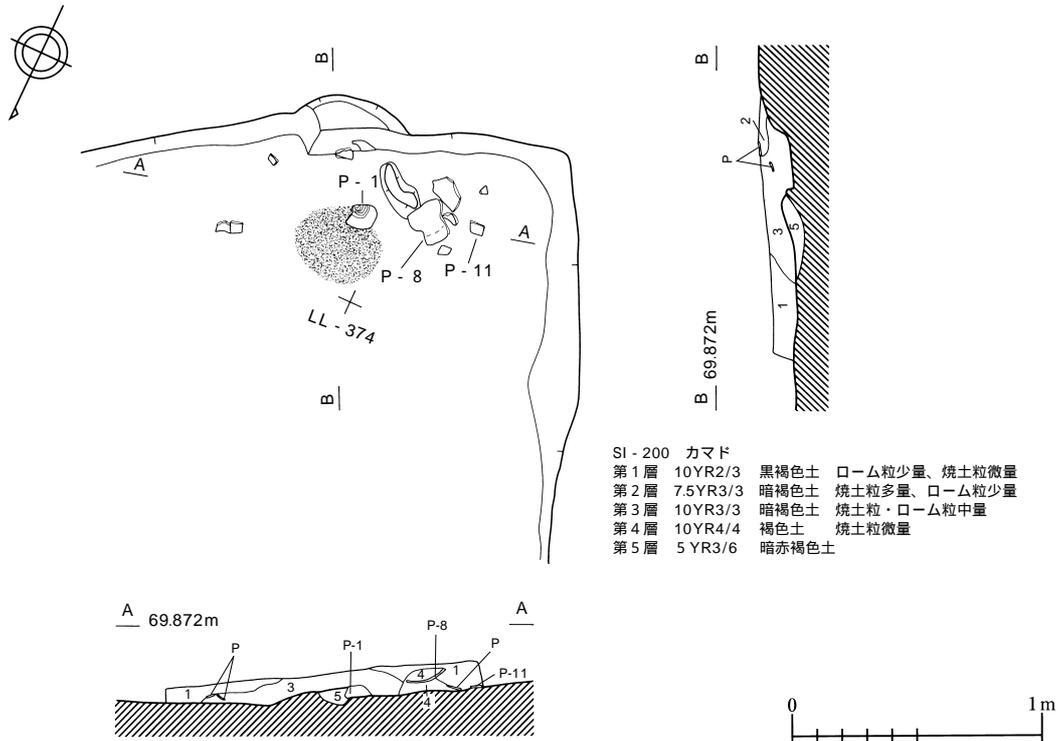
[床] ほぼ全面に掘り方を有し、ロームブロックを混入する黒褐色土が充填されている。床面は起伏があり、やや脆弱である。

[壁溝] カマド設置部分を除きほぼ全周する形で検出した。深さは平均10cmを測る。

[ピット] 住居内から5基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 84×73×51cmを測る。Pit 2 =



第391図 SI - 200



第392図 SI - 200

33×32×20cm、Pit 3 = 30×27×26cm、Pit 4 = 39×38×13cm、Pit 5 = 35×26×14cmを測る。柱穴として機能したと考えられるピットは、Pit 1、2である。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(67:33)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅79cm、煙道長41cmを測る。主軸はN-130°-Eである。燃烧部袖は、粘土ならびに黒褐色土を用いて構築している。燃烧部天井は第7層が相当し、粒状化した構築土が崩落して堆積している。煙道部天井は第4層が相当し、燃烧部と同様崩落した堆積状況を呈している。煙道は住居壁際から27°の角度でやや起伏を持ちながら立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて10層に分層した。住居廃絶後の堆積土は第1～5層で、廃絶後第2～5層が自然堆積したのち、急激に埋め戻されており、人為堆積土は第1層が相当する。

(木村)

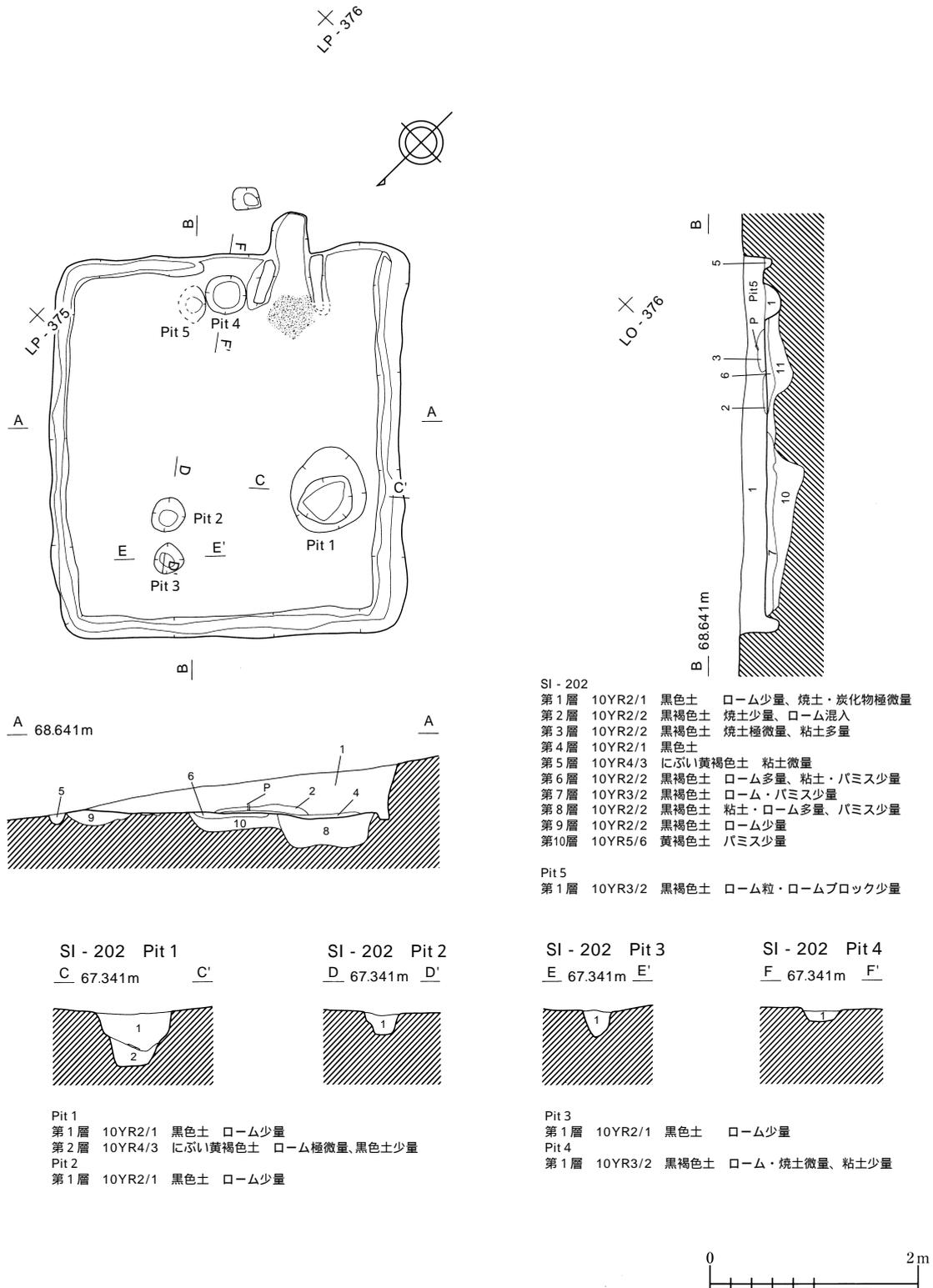
SI - 203 (第395、396図)

[位置] グリッドLR-372、LQ・LR-373で検出した。

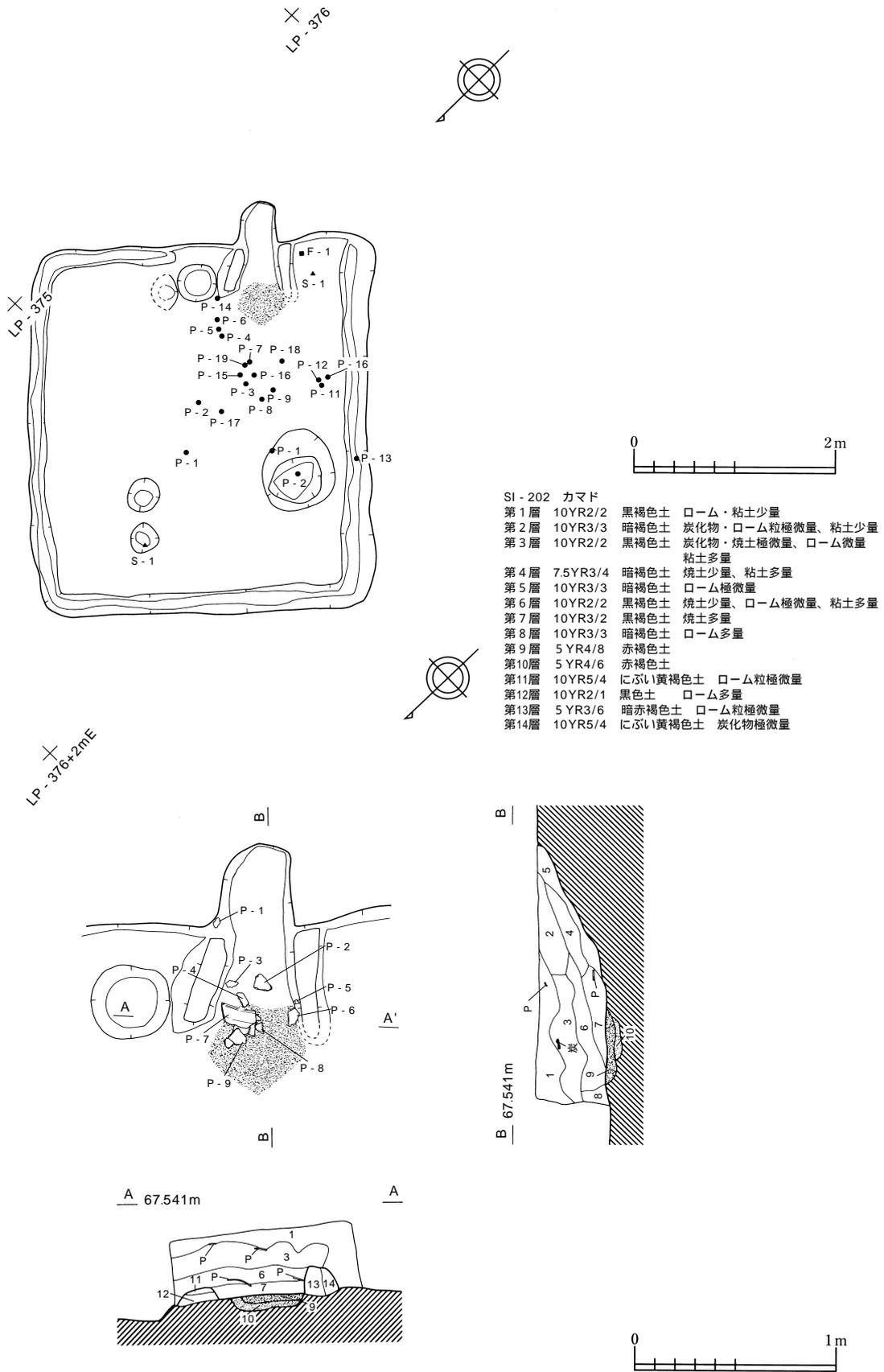
[重複] なし。

[平面形・規模] 長方形を呈し、296×260×52cmを測る。床面積は7.588m²を測る。

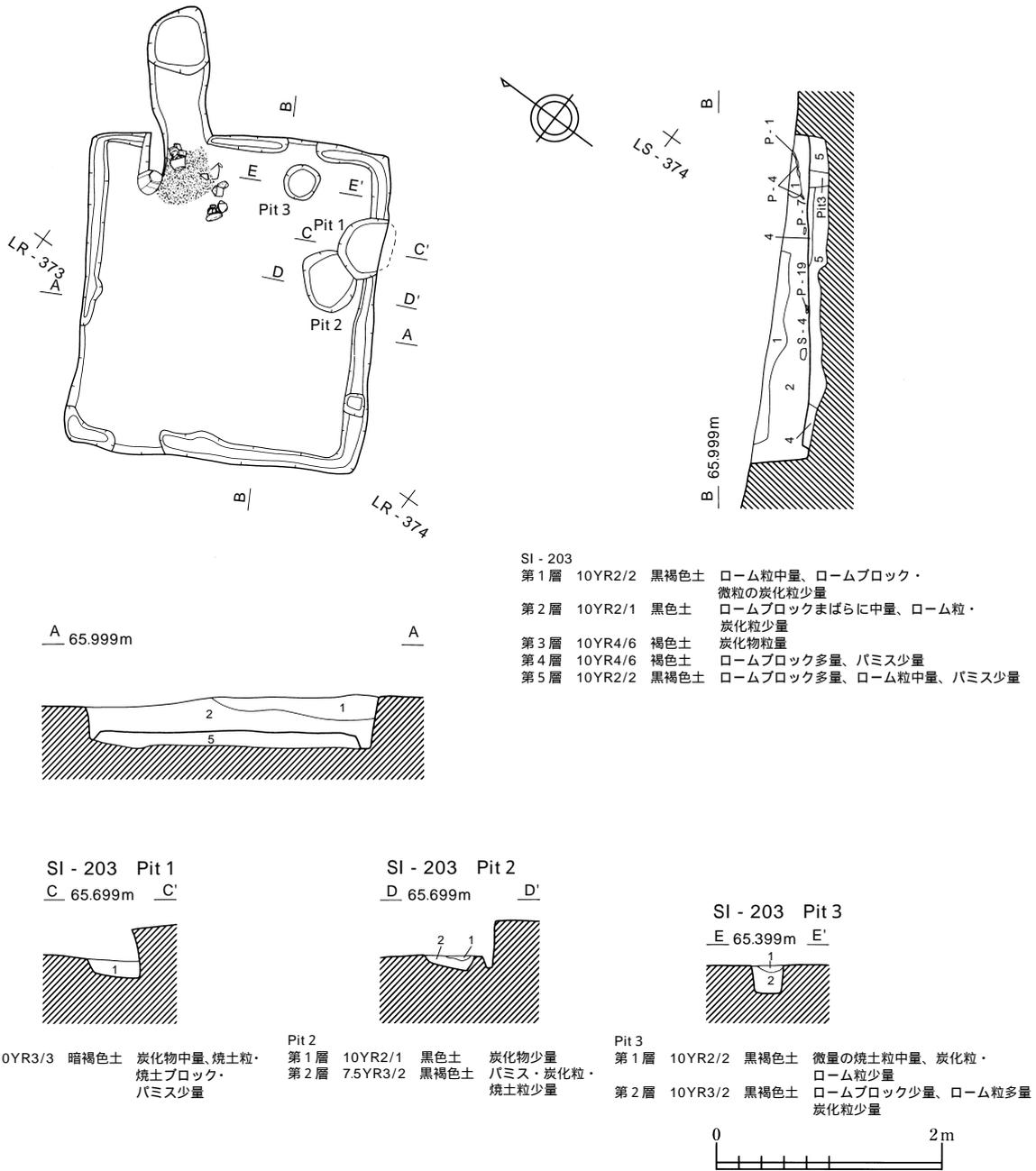
[壁] 壁高は、北壁47cm、東壁36cm、南壁12cm、西壁24cmを測る。断面形はaで、ほぼ垂直に近い形で立ちあがる。壁面は堅緻である。



第393図 SI - 202



第394図 SI - 202

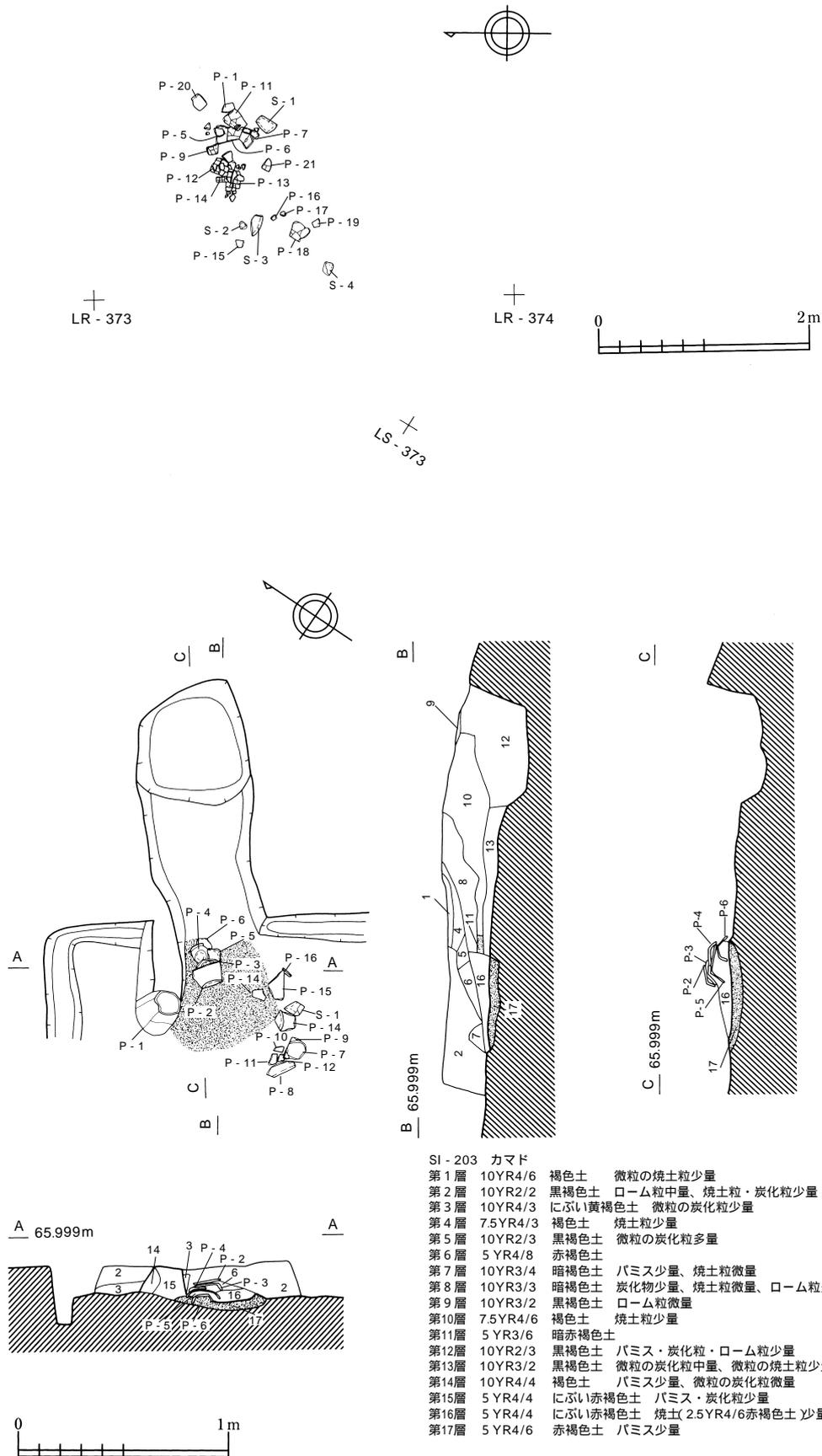


第395図 SI - 203

[床] 全面に掘り方を有し、ロームブロックと黒褐色土の混合土が充填され床面としている。部分的に大谷火山灰層主体の地山を貼り床として貼り付けている。床面はほぼ平坦でしまりはあるが、やや脆弱である。

[壁 溝] 断続しながら住居を全周する形で検出した。深さは平均 8 cm を測る。

[ピット] 住居内から 3 基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 58 × 47 × 14cm、Pit 2 = 55 × 45 × 14cm、Pit 3 = 32 × 32 × 23cm を測る。柱穴として機能したと考えられるピットは Pit 3 である。



第396図 SI - 203

[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁2(30:70)の位置から検出している。構造は、半地下式で、燃焼部右袖部分が破壊されており、煙道長115cmを測る。主軸はN-50.5°-Eである。燃焼部袖は、芯材として土師器甕の口縁部を打ち欠き倒置し、粘土を用いて構築している。カマド検出時点で土師器甕については底部も欠損していた。また、支脚として土師器椀、小甕の底部片を重ねて設置している。燃焼部天井は、第6層が相当し、部分的に残存し崩落した堆積状況を呈している。煙道部天井は、第8、10層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道は、住居壁際からほぼ平坦に立ち上がり、ピット状に掘り込まれた煙出部と接する。煙出奥壁は、外傾しながら立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方を含めて5層に分層した。住居廃絶後の堆積土は、第1~3層で、急激な埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

SI-204(第397、398図)

[位置] グリッドLW・LX-371で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 台形を呈し、270×238×61cmを測る。床面積は6.213m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁36cm、東壁52cm、南壁58cm、西壁38cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は、黒褐色土を壁面としており、やや脆弱である。

[床] ほぼ全面に掘り方を有し、月見野火山灰層主体の地山土と黒褐色土の混合層が充填されている。床面はほぼ平坦で、やや脆弱である。

[壁溝] なし。

[ピット] 住居東壁際から1基検出した。規模は53×(30)×5cmを測る。

[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁2(28:72)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅88cm、煙道長83cmを測る。主軸はN-94°-Eである。燃焼部は粘土で構築されており、天井は第6層が相当し、崩落した堆積状況を呈する。煙道部天井は、第3、4層が相当し、ロームと黒褐色土を用いて構築している。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で17°に角度を変え、起伏を持ちながらピット状に掘り込まれた煙出部へ傾斜する。煙出奥壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

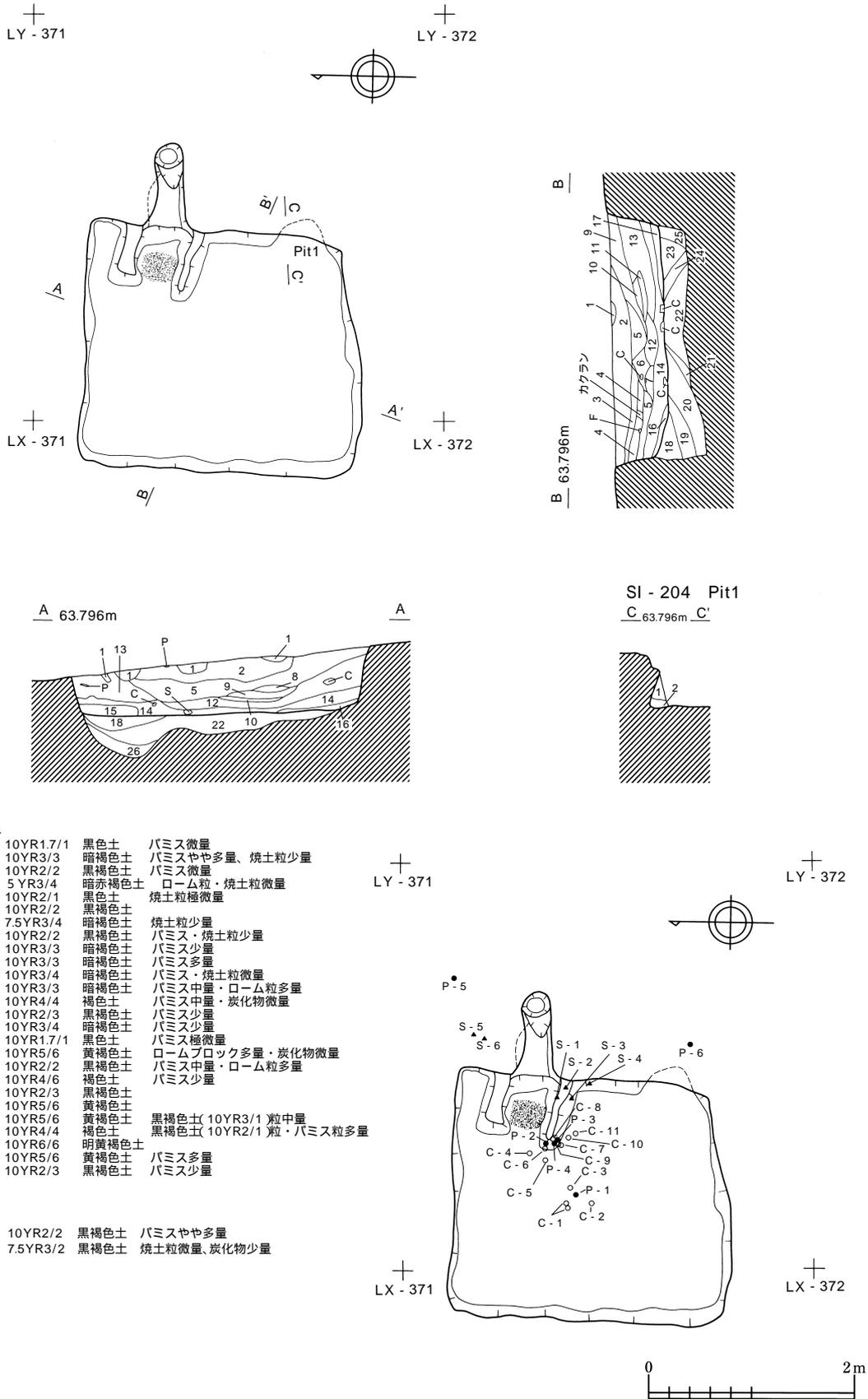
[堆積土] 掘り方部分を含めて26層に分層した。堆積土中にローム粒、ロームブロック、パミス粒等が全般的に見られ、中央部付近の堆積状況について入り組んだ堆積状況を呈していることから、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

SI-205(第399、400図)

[位置] グリッドMC・MD-372・373・374で検出した。

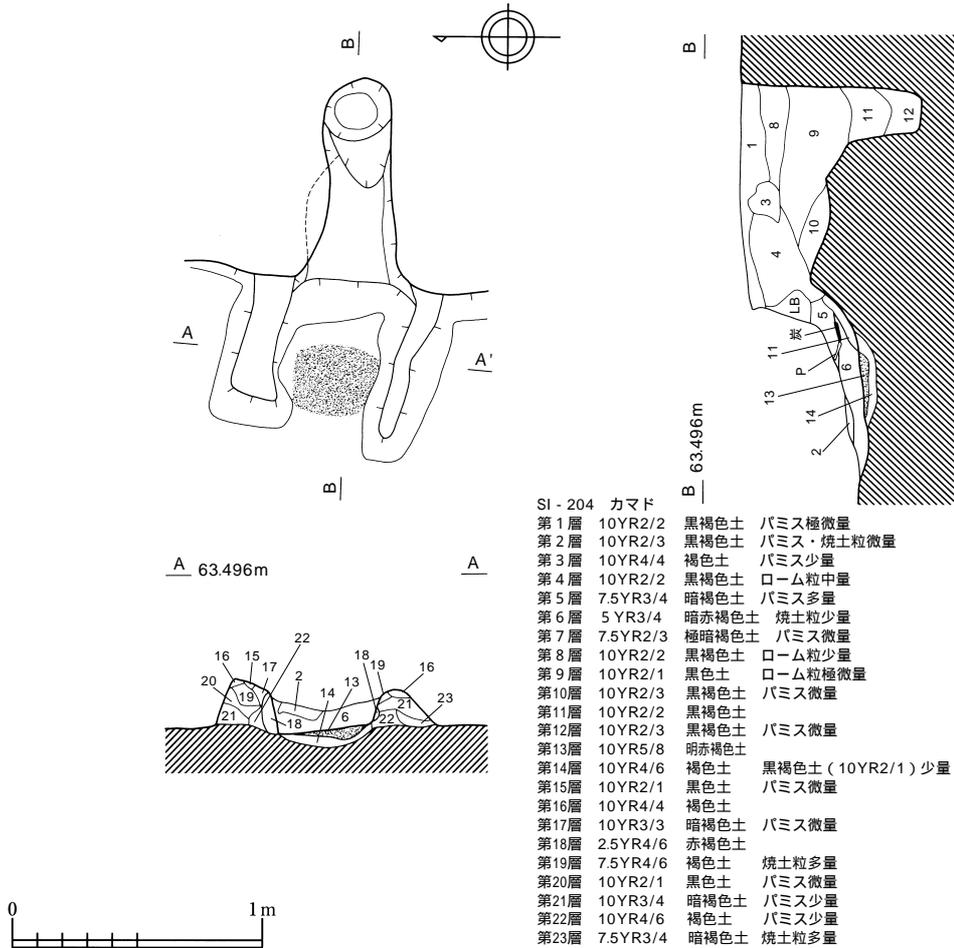
[重複] SI-206と重複している。層序において新旧関係は明瞭ではないが、床面の残存状況等を踏まえると本遺構の方が新しいものと考えられる。



第397図 SI - 204

+

LY - 371



第398図 SI - 204

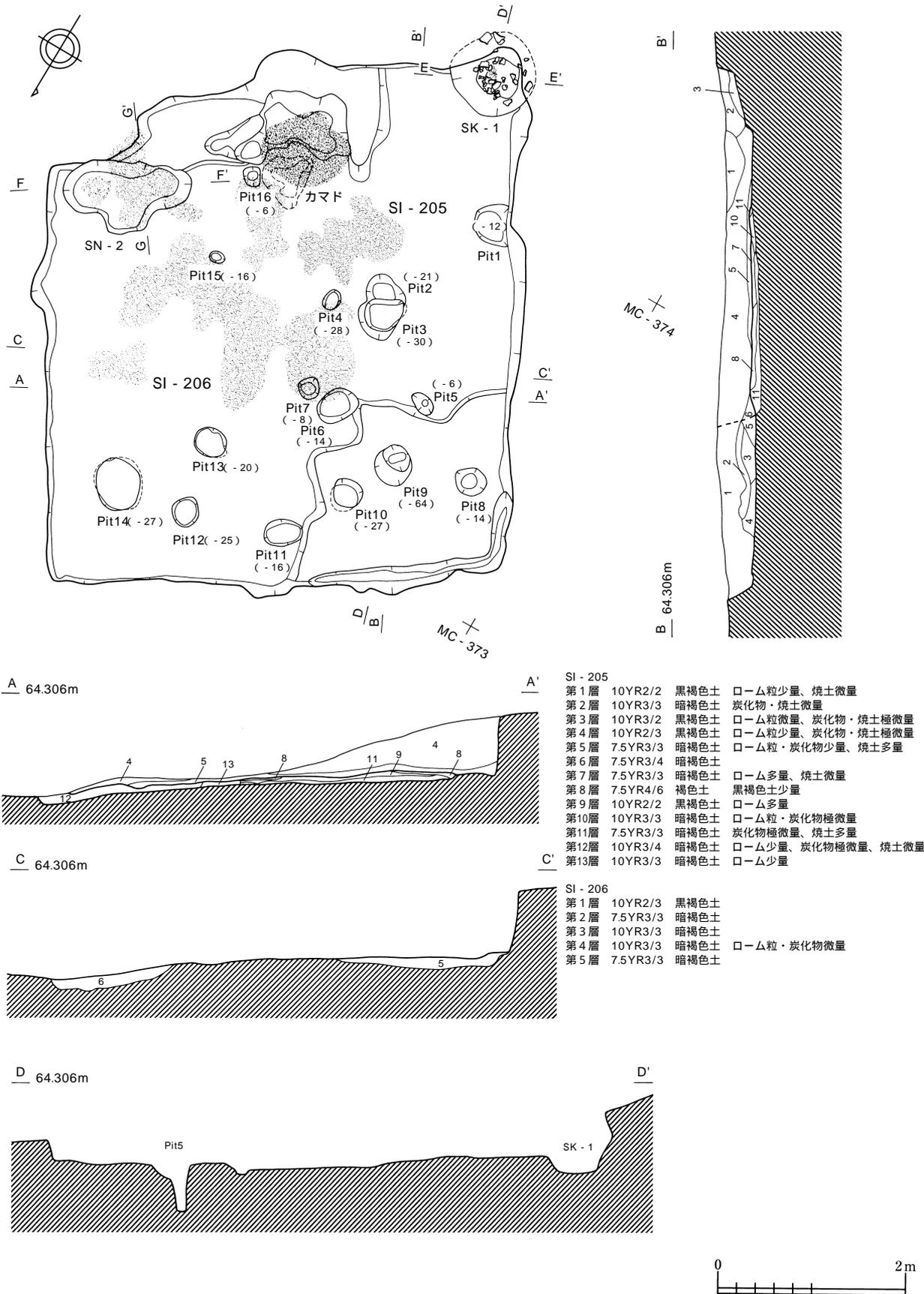
[平面形・規模] 重複のため明瞭ではないが、不整形を呈し、(420) × (370) × 65cmを測る。床面積は13.3㎡を測る。

[壁] 切りあいのため残存状況が悪く、壁高として明瞭なのは南壁と西壁のみである。残存部分の壁高は、南壁35cm、西壁64cmを測る。

[床] S I - 206の床面上に貼り床を貼り付けて床面としている。床面は起伏がややあり、堅緻である。また、本遺構の範囲内の床面は赤化しており、本遺構は焼失住居であったことが考えられる。

[壁溝] なし。

[ピット] S I - 206と重複しているため、帰属関係について不明瞭なピットが多い。S I - 206の記述において一括して提示する。



第399図 SI - 205 ・ SI - 206

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁2(44:66)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅166cm、煙道長32cmを測る。主軸はN-141°-Eである。遺存状況が悪く、転用羽口ならびに自然礫を芯材としており、粘土を用いて構築している。天井は粘土による構築である。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で15°に角度を変え立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居南壁西隅の部分から土坑1基を検出した。規模は93×90×32cmを測る。

[堆積土] 掘り方部分を含めて13層に分層した。S I - 206との重複部分については、土色が同色で、層界が明確でなく、廃絶後の堆積状況の詳細については不明である。

(木 村)

S I - 206 (第399、400図)

[位置] グリッドMC-372・373で検出した。

[重複] S I - 205と重複する。層序において新旧関係は明瞭ではないが、本遺構の床面の上部にS I - 205の床面が構築されており、本遺構の方が古いものと考えられる。

[平面形・規模] S I - 205と重複しているため、詳細について不明であるが、長方形を呈したものと推定され、(500)×(450)×75cmを測る。床面積は(20.12)㎡を測る。

[壁] 削平ならびに切り合いのため、明確に残存しているのは北壁ならびに西壁のみである。壁高は、北壁25cm、西壁68cmを測る。断面形は(d)で緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 東壁側に掘り方を有し、暗褐色土が充填されている。床面はやや起伏があり、やや脆弱である。

[壁溝] 住居北壁西隅の部分から検出した。深さは2cmを測る。

[ピット] S I - 205と重複部分のピットをあわせて16基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 43×34×12cm、Pit 2 = 40×(27)×21cm、Pit 3 = 53×45×30cm、Pit 4 = 22×17×28cm、Pit 5 = 28×16×6cm、Pit 6 = 45×33×14cm、Pit 7 = 25×23×8cm、Pit 8 = 34×31×14cm、Pit 9 = 40×37×64cm、Pit 10 = 32×30×27cm、Pit 11 = 42×30×16cm、Pit 12 = 34×30×25cm、Pit 13 = 35×32×20cm、Pit 14 = 56×45×27cm、Pit 15 = 17×11×16cm、Pit 16 = 21×16×6cmを測る。主柱配置等については不明である。

[カマド] カマドの検出はなかったが、SN-2と取り扱った部分の東側部分について、燃焼部火床面と同様に被熱を受けており、カマドとして機能した可能性が考えられる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 5層に分層した。全般的にS I - 205の堆積土とほぼ同色で堆積状況の詳細については不明である。

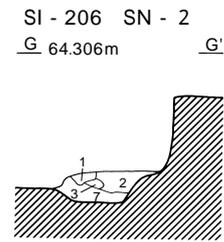
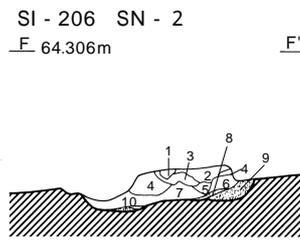
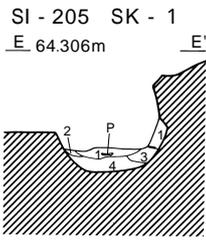
(木 村)

S I - 207 (第401図)

[位置] グリッドMG・MH-372・373で検出した。

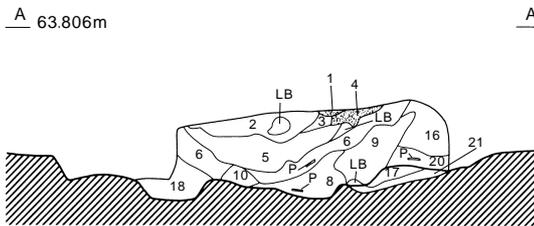
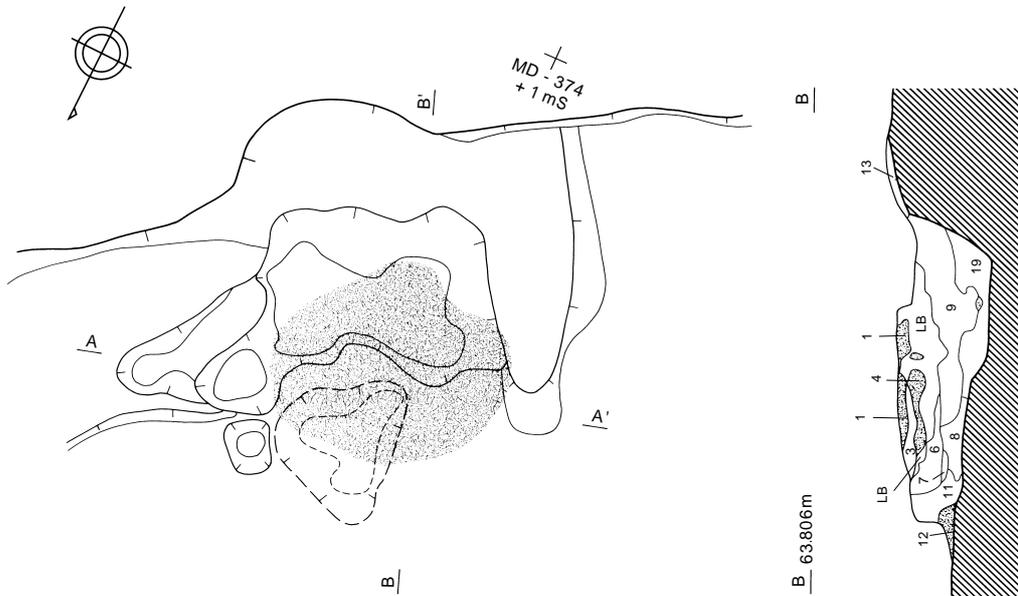
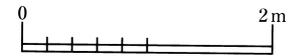
[重複] なし。

[平面形・規模] 削平のため東側半分の情報は欠落している。方形を呈したものと推定され、226×

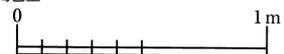


- SK - 1
第1層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物微量、焼土少量
第2層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物・焼土極微量
第3層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒・焼土微量
第4層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック微量、焼土ブロック少量

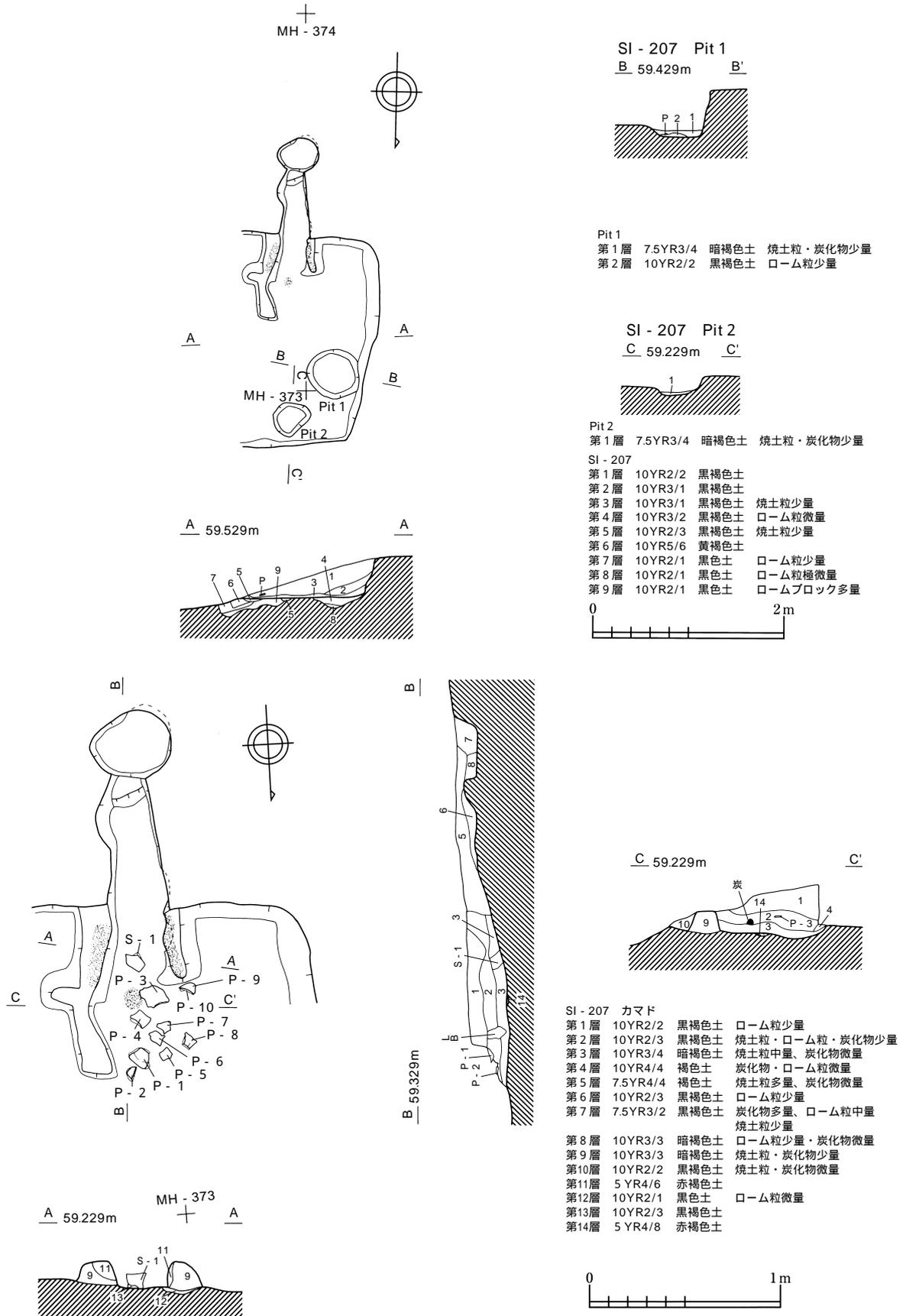
- SN - 2
第1層 7.5YR4/4 褐色土 炭化粒微量
第2層 5YR3/4 暗赤褐色土 ローム粒極微量 炭化物微量、焼土多量
第3層 2.5YR4/6 赤褐色土
第4層 7.5YR4/4 褐色土 炭化物・焼土粒極微量
第5層 10YR3/4 暗褐色土 ローム少量、炭化物・焼土極微量
第6層 7.5YR3/2 黒褐色土 炭化物・焼土極微量
第7層 10YR3/4 暗褐色土 ローム少量、炭化物極微量、焼土粒微量
第8層 5YR4/4 にぶい赤褐色土 炭化物極微量、焼土少量
第9層 5YR3/4 暗赤褐色土 炭化物極微量、焼土少量
第10層 5YR3/4 暗赤褐色土 炭化物微量、焼土多量



- SI - 205 カマド
第1層 2.5YR4/8 赤褐色土
第2層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物微量、焼土多量
第3層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物微量、焼土少量
第4層 5YR3/6 暗赤褐色土
第5層 7.5YR4/6 褐色土 黒褐色土混入、焼土少量
第6層 10YR1.7/1 黒色土 ローム粒極微量、焼土微量
第7層 10YR3/3 暗褐色土 焼土極微量
第8層 7.5YR3/4 暗褐色土 ローム少量、焼土微量
第9層 10YR3/2 暗赤褐色土 ローム・焼土ブロック多量
第10層 10YR3/3 暗褐色土 ローム多量、炭化物極微量、焼土微量
第11層 7.5YR3/4 暗褐色土 焼土微量
第12層 5YR3/6 暗赤褐色土 焼土少量
第13層 7.5YR3/4 暗褐色土 ローム多量
第14層 7.5YR3/3 暗褐色土 ローム粒極微量
第15層 7.5YR3/2 暗褐色土 ローム少量、炭化物・焼土微量
第16層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物・ローム粒極微量
第17層 2.5YR4/6 赤褐色土
第18層 10YR2/3 暗褐色土 ローム微量、炭化物・焼土極微量
第19層 10YR4/6 褐色土
第20層 7.5YR3/4 暗褐色土 焼土少量
第21層 2.5YR3/6 暗赤褐色土



第400図 SI - 205 ・ SI - 206



第401図 SI - 207

(150) × 40cmを測る。床面積は、(3.008) m²を測る。

[壁] 削平のため東壁の情報は欠落している。残存部分での壁高は、北壁12cm、南壁32cm、西壁39cmを測る。断面形は(a)で、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 壁際部分に掘り方を持ち、黒褐色土が充填されている。床面はほぼ平坦で、やや脆弱である。

[壁溝] なし。

[ピット] 残存部分で2基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 56 × 53 × 8 cm、Pit 2 = 40 × 32 × 7 cmを測る。いずれのピットも柱穴としての機能は充足し得なかったものと考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。検出位置については残存壁からの推定値であるが、南壁3(67:33)の位置から検出したものと推定される。構造は、半地下式で、袖部幅83cm、煙道長107cmを測る。主軸はN - 178.5° - Wである。燃烧部は、粘土による構築で天井は第3層が相当する。また、支脚として自然礫が設置されている。煙道部天井は、粘土による構築で天井は第5層が相当し、崩落した堆積状況を呈する。煙道は、18°の角度で起伏を持ちながら立ち上がり、ピット状に掘り込まれた煙出部に接する。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて9層に分層した。住居廃絶後の堆積土は第1～3層で、概ね自然堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 208 (第402、403図)

[位置] グリッドLL・LM - 375・376で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、538 × 410 × 7 cmを測る。床面積は21.232m²を測る。また、西壁北側部分には不整形の張り出しを検出した。攪乱によって土層がほとんど欠落しており、本遺構に明確に帰属したかどうかは不明であるが、張り出し部分からピットを検出しており、本遺構に帰属した可能性がわずかながらにあるため本遺構に帰属させ提示した。

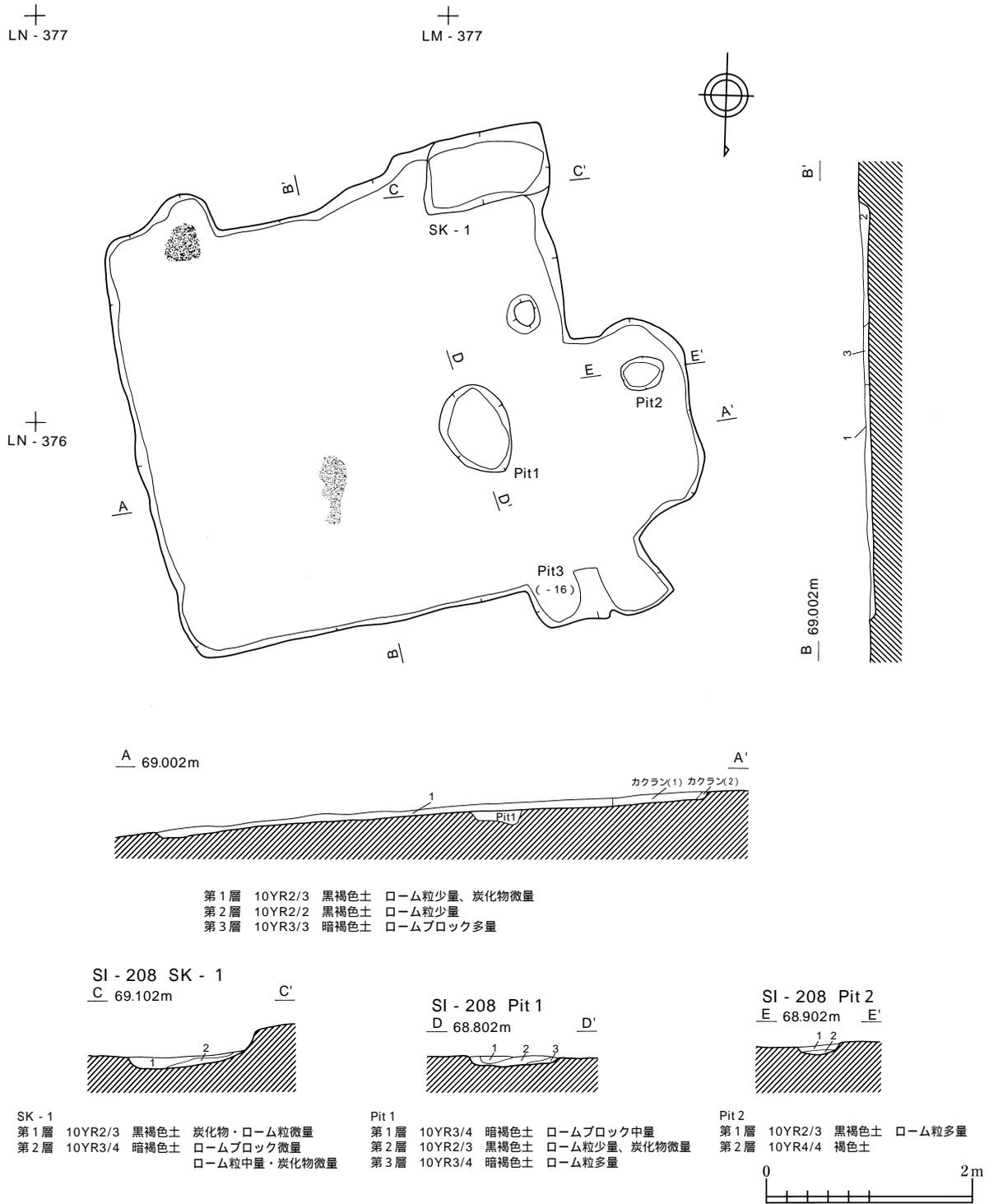
[壁] 削平のため、壁面上部については不明であるが、残存部分についての壁高は、北壁5cm、東壁7cm、南壁11cm、西壁10cmを測る。断面形は(a)で、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は脆弱である。

[床] 月見野火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面はやや脆弱である。また、住居中央部よりやや東寄りの部分から赤化面を70 × 28cmの範囲で検出した。

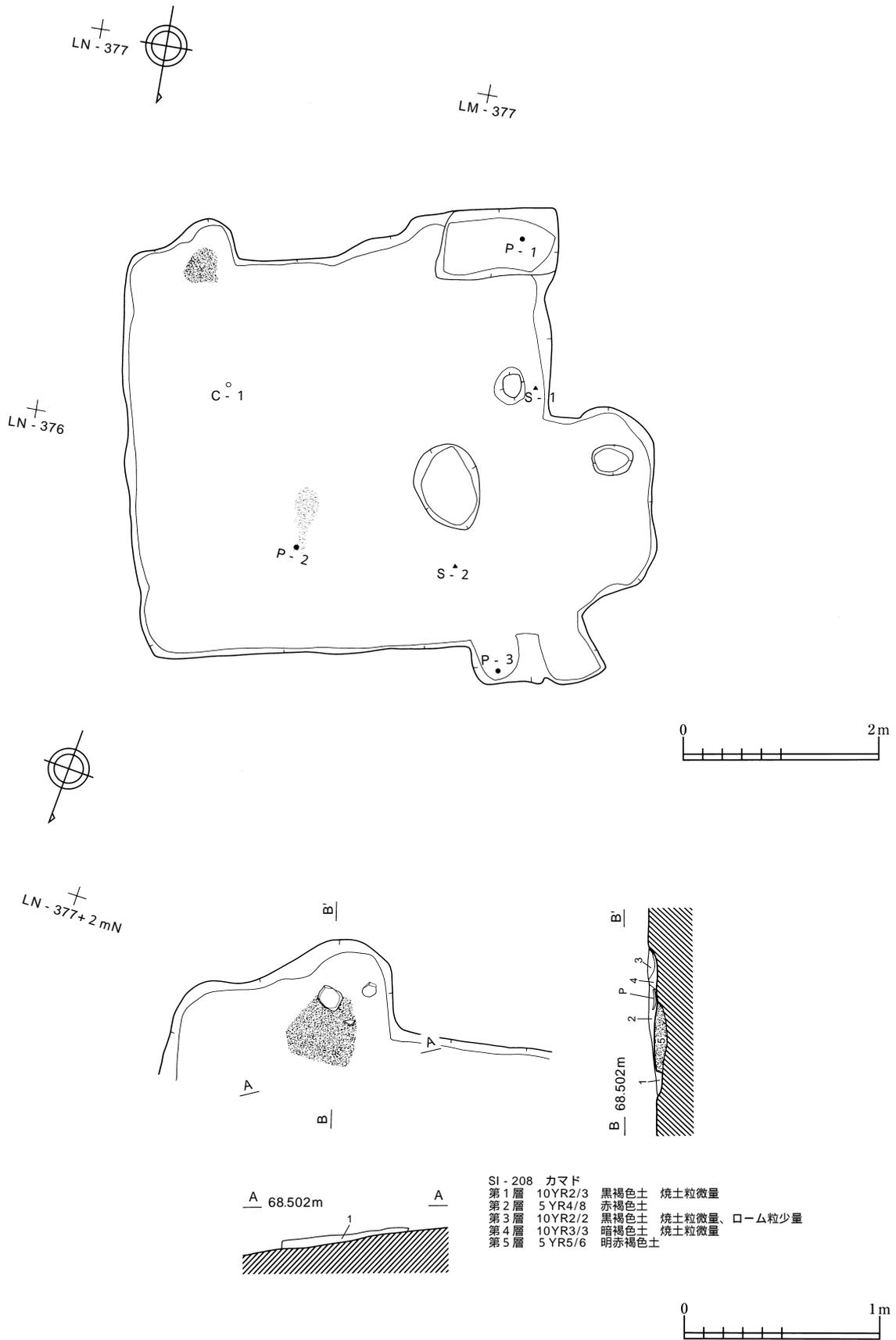
[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から3基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 93 × 66 × 10cm、Pit 2 = 42 × 33 × 9 cm、Pit 3 = 70 × (49) × 16cmを測る。いずれのピットも柱穴としての機能は充足し得ないものと考えられる。

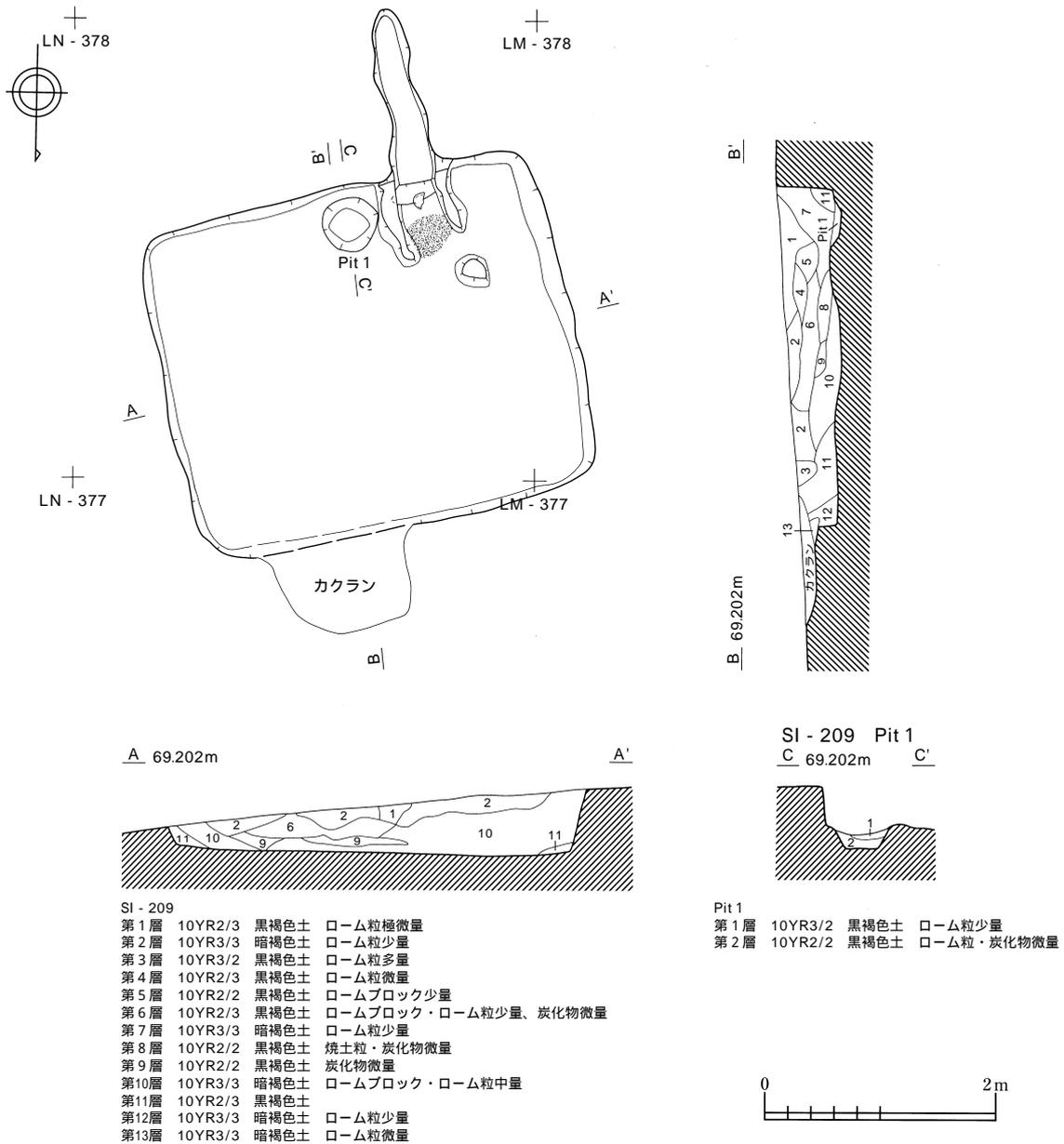
[カマド] 南壁側から1基検出した。南壁1(21:79)の位置から検出している。構造は、半地下式で、燃烧部が破壊されており、煙道長28cmを測る。主軸はN - 176° - Eである。燃烧部については破壊されており、構造等の詳細は不明である。煙道部天井は粘土による構築で第2層が相当し、崩落した堆積状況を呈する。



第402図 SI - 208



第403図 SI - 208



第404図 SI - 209

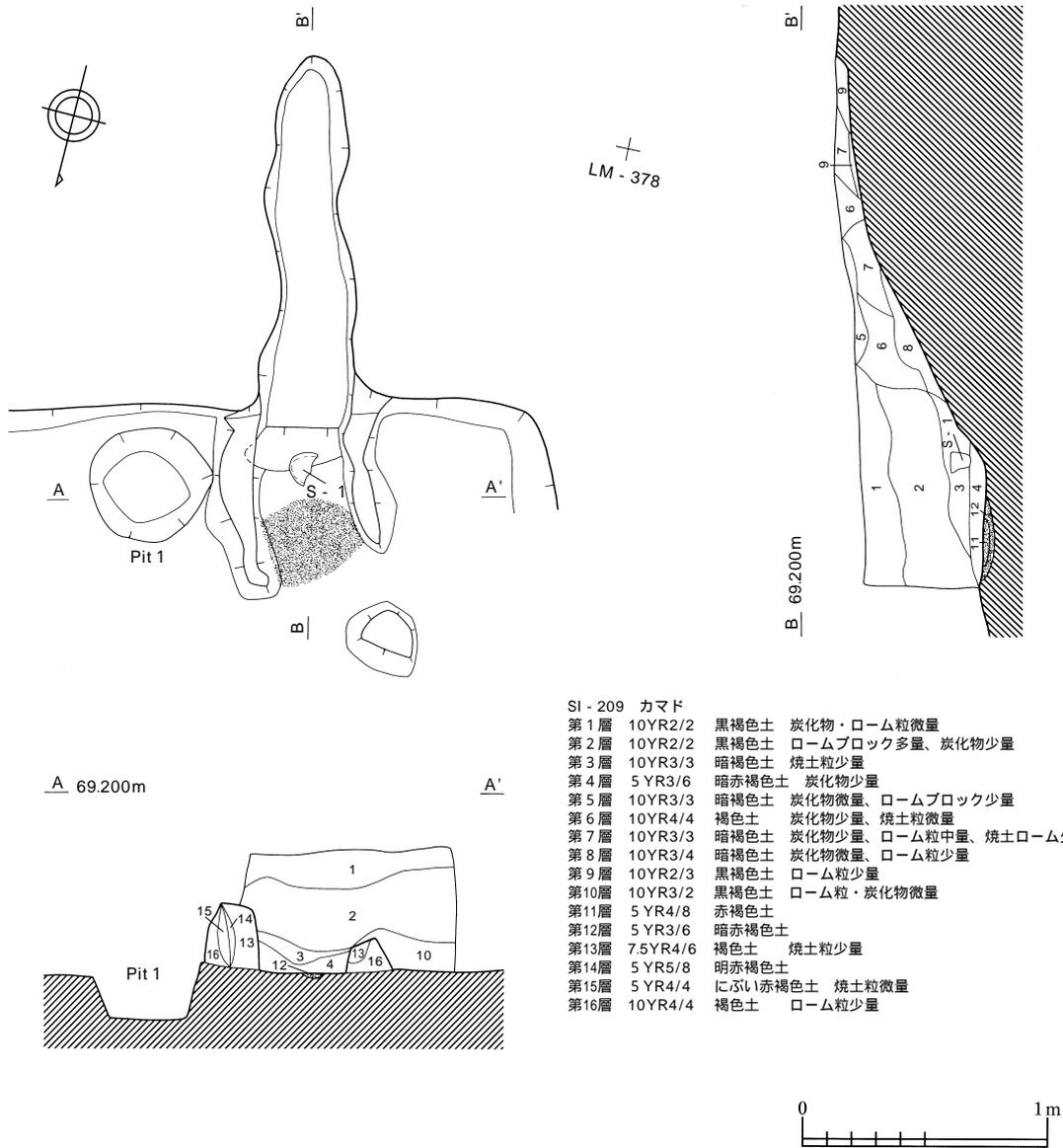
[その他の付属施設] 住居南壁西隅側から土坑1基を検出した。規模は125×70×13cmを測る。

[堆積土] 残存部分について3層に分層した。詳細については不明であるが、住居中央部に堆積する第3層中にロームブロックが多量に含まれることから埋め戻し等による人為堆積状況を呈するものと考えられる。

(木村)

SI - 209 (第404、405図)

[位置] グリッドLL - 377、LM - 376・377で検出した。



第405図 SI - 209

[重複] なし。

[平面形・規模] 長方形を呈し、362×302×58cmを測る。床面積は10.525m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁30cm、東壁15cm、南壁50cm、西壁55cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ちあがる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、起伏がある。床面は堅緻である。

[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から1基検出した。規模は50×48×18cmを測る。カマド脇ピットとしての機能が考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(70:30)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅74cm、煙道長152cmを測る。主軸はN-167°-Eである。燃烧部袖は、粘土を用い

て構築しており、天井は、第3、4層が相当し、崩落した堆積状況を呈する。第3層中から自然礫が1点出土しており、芯材として利用された可能性が一部ある。煙道部天井は、第6、7層が相当し、大谷火山灰層主体の地山土と暗褐色土を併せて構築している。煙道は、住居壁際から30°の角度で立ち上がり、全煙道長の1/2の位置で9°に角度を変え、煙出部付近では平坦に近い形で立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 13層に分層した。急激な埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木 村)

S I - 210 (第406図)

[位 置] グリッドL N・L O - 375・376で検出した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、266×250×40cmを測る。床面積は6.56m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁20cm、東壁16cm、南壁35cm、西壁32cmを測る。断面形はdで緩やかな立ち上がりが見られるが、南壁側は、やや内側に入り込み内傾しながら立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 南壁寄りの部分に一部浅い掘り方を有し、ロームブロックを多量に含む黒褐色土が充填されており、その上部に大谷火山灰層主体の地山土を貼り床として貼り付けている。床面はほぼ平坦で、堅緻である。

[壁 溝] なし。

[ピット] なし。

[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁3(69:31)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅70cm、煙道長32cmを測る。主軸はN - 81° - Eである。燃烧部の構築は粘土によるもので、燃烧部天井については、粒状化した状態で堆積が確認されたのみであった。また、支脚として土師器椀を倒位に1点設置している。煙道部天井は第3層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道は住居壁際から21°の角度で起伏を持ちながら立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居北壁東隅から土坑1基を検出した。規模は98×84×8cmを測る。

[堆積土] 掘り方部分を含めて11層に分層した。住居廃絶後の堆積土は、第1～9層で、全般的に焼土粒・ローム粒が含まれ、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木 村)

S I - 211 (第407、408図)

[位 置] グリッドL O・L P - 376・377で検出した。

[重 複] なし。

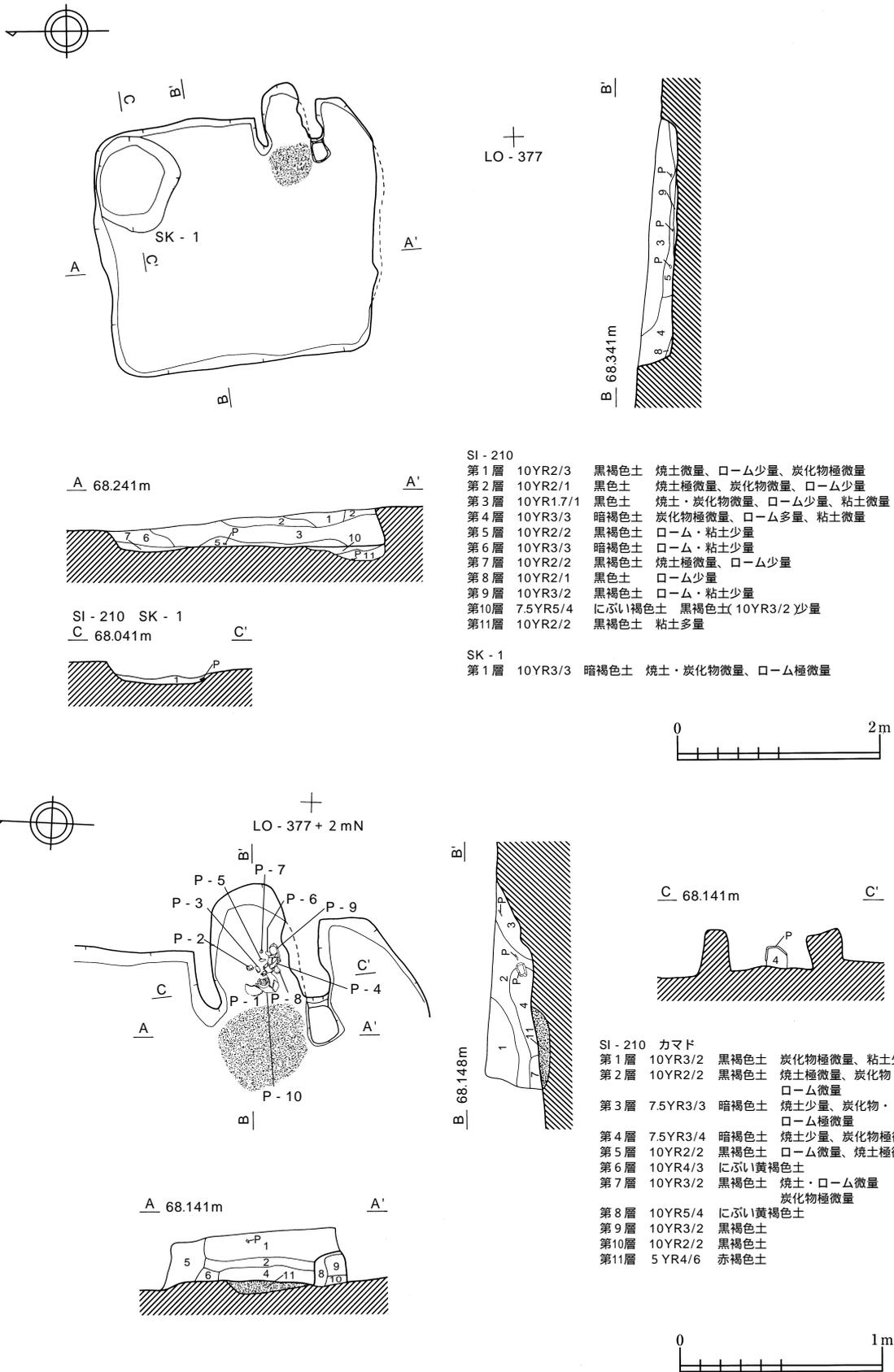
[平面形・規模] 方形を呈し、324×312×68cmを測る。床面積は10.428m²を測る。

[壁] 壁高は、北東壁28cm、南東壁47cm、南西壁65cm、北西壁46cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

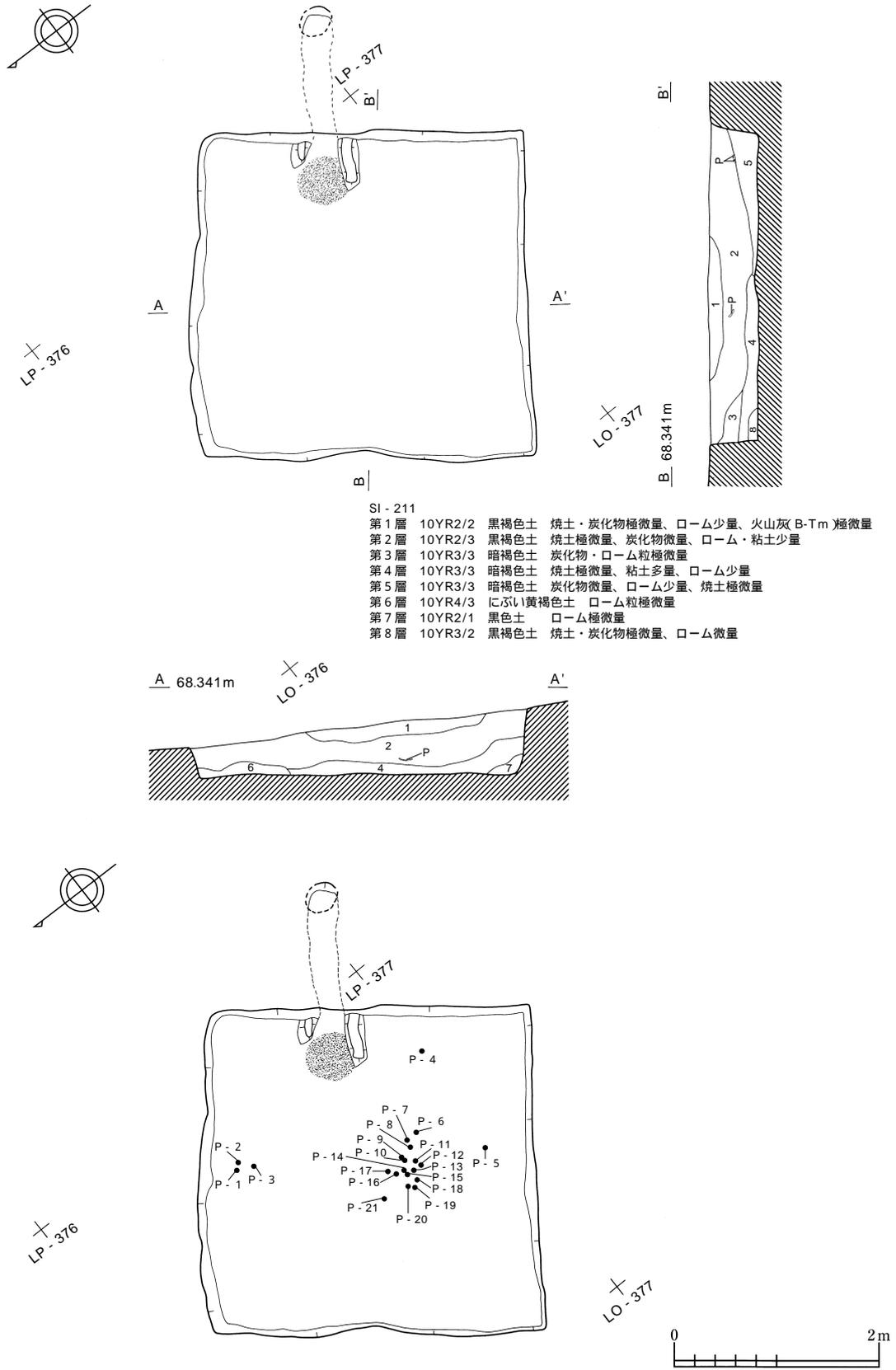
[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。

[壁 溝] なし。

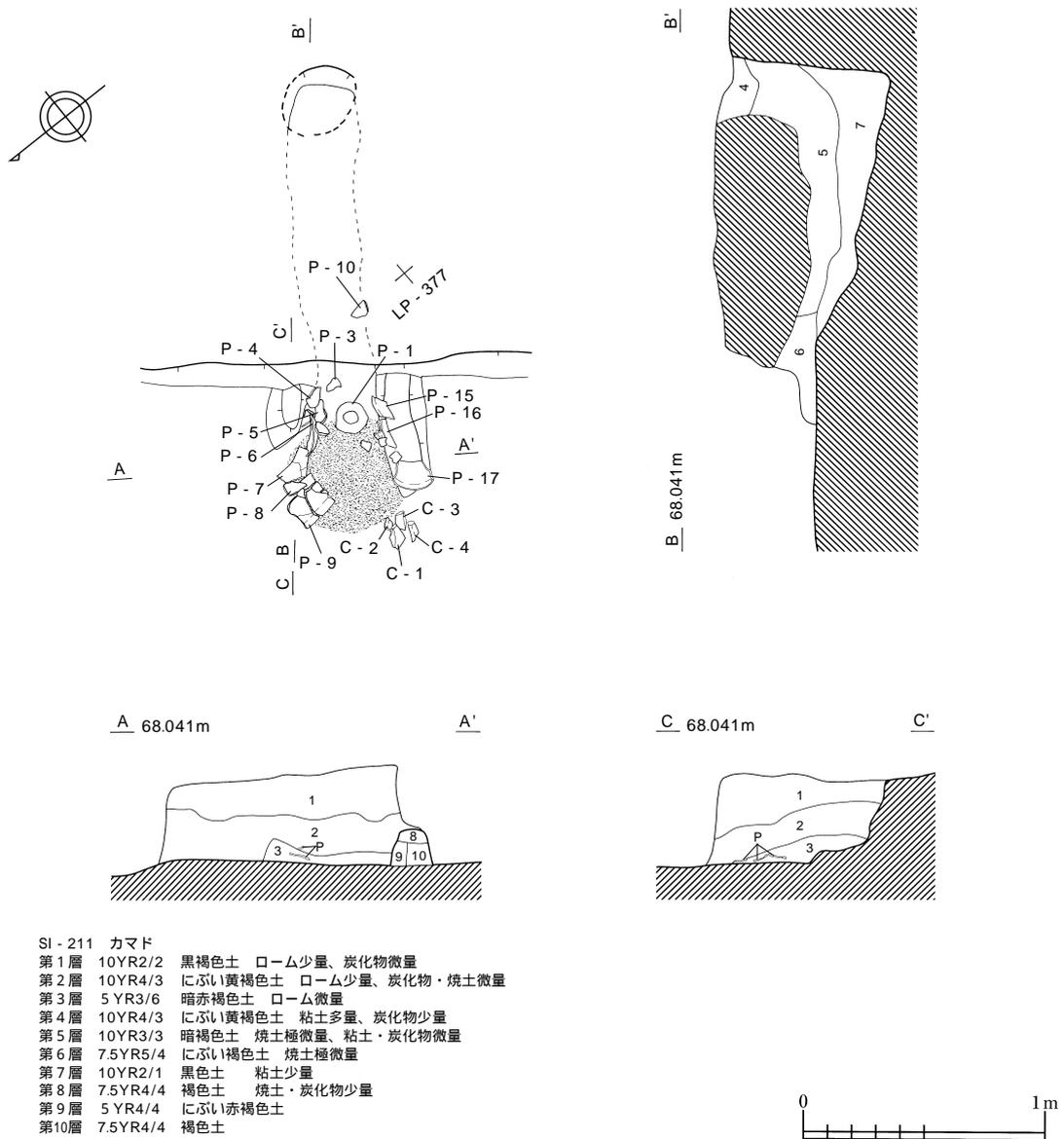
[ピット] なし。



第406図 SI - 210



第407図 SI - 211



第408図 SI - 211

[カマド] 住居南東壁側から1基検出した。南東壁2(39:61)の位置から検出している。構造は、地下式で、袖部幅67cm、煙道長124cmを測る。主軸はN-125°-Eである。燃焼部左袖ならびに天井は破壊されており、構築土の残滓は第3層が相当する。支脚として土師器甕底部を倒位に設置している。煙道部は、大谷火山灰層の地山部分を掘り込んで構築しており、住居壁際から20°の角度で起伏を持ち傾斜しながら煙出部へ傾斜する。煙出奥壁はほぼ垂直に近い形で立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 8層に分層した。住居中央に堆積する第4層には粘土が多量に含まれ、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 212 (新)(第409~411図)

[位置] グリッドLS・LT - 375・376で検出した。

[重複] S I - 212 (旧)と重複している。本遺構がS I - 212 (旧)の上に構築されており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 長方形を呈し、554×510×82cmを測る。床面積は30.128㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁27cm、東壁23cm、南壁80cm、西壁38cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は、壁面上部を暗褐色土系の土層を壁面としており、やや脆弱である。

[床] S I - 212 (旧)の重複部分については、ロームブロックを多量に含む暗褐色土が貼り床として貼り付けられている。また、東壁側については、浅い掘り方を持ち、S I - 212 (旧)の重複部分と同様に貼り床が貼り付けられている。床面はやや起伏があり、やや堅緻である。また、床面から赤化面ならびに炭化材を検出しており、本遺構は焼失住居であったことが考えられる。

[壁溝] 住居内をほぼ全周する形で検出した。深さは平均21cmを測る。

[ピット] 住居内外から16基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 28×25×26cm、Pit 2 = 37×30×45cm、Pit 3 = 42×(30)×12cm、Pit 4 = 37×24×17cm、Pit 5 = 32×21×7cm、Pit 6 = 27×26×4cm、Pit 7 = 40×35×10cm、Pit 8 = (35)×30×4cm、Pit 9 = 33×25×5cm、Pit 10 = 118×98×70cm、Pit 11 = 175×110×13cm、Pit 12 = 25×23×10cm、Pit 13 = 90×55×7cm、Pit 14 = 35×24×13cm、Pit 15 = 45×36×55cm、Pit 16 = 38×28×36cmを測る。主柱穴としての機能が考えられるピットは、Pit 2、15のみで、対応するピットの検出はなかったが、4本柱として機能したものと考えられる。

[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁3(60:40)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅74cm、煙道長54cmを測る。主軸はN - 123° - Eである。燃烧部袖は、転用羽口を芯材とし、粘土を用いて構築している。燃烧部ならびに煙道部天井は、第1層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で20°に角度を変え立ち上がる。煙出奥壁は垂直に近い形で立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] S I - 212 (旧)と重複しており、S I - 212 (旧)の廃絶後の堆積がS I - 212 (新)の掘り方形成時点での埋土に相当する。S I - 212 (旧) S I - 212 (新)への構築の時間幅は連続したものであったことが考えられる。本遺構廃絶後の堆積土は、第1~10層で、住居中央部に堆積する第3層中にロームブロックならびに焼土ブロックが多量に含まれ、人為堆積状況を呈する。埋没した上面にB - T m火山灰が層状に堆積している。

(木村)

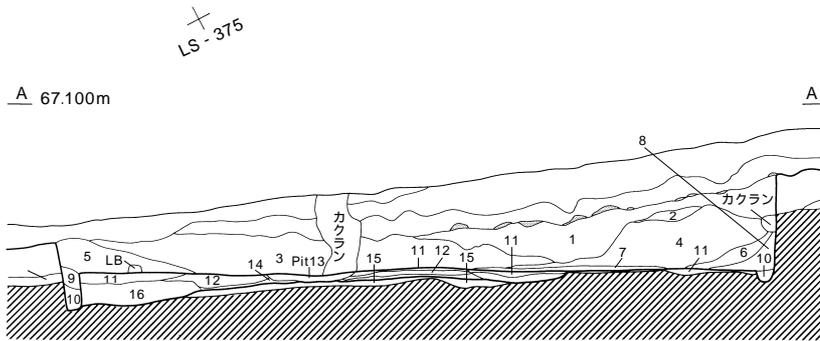
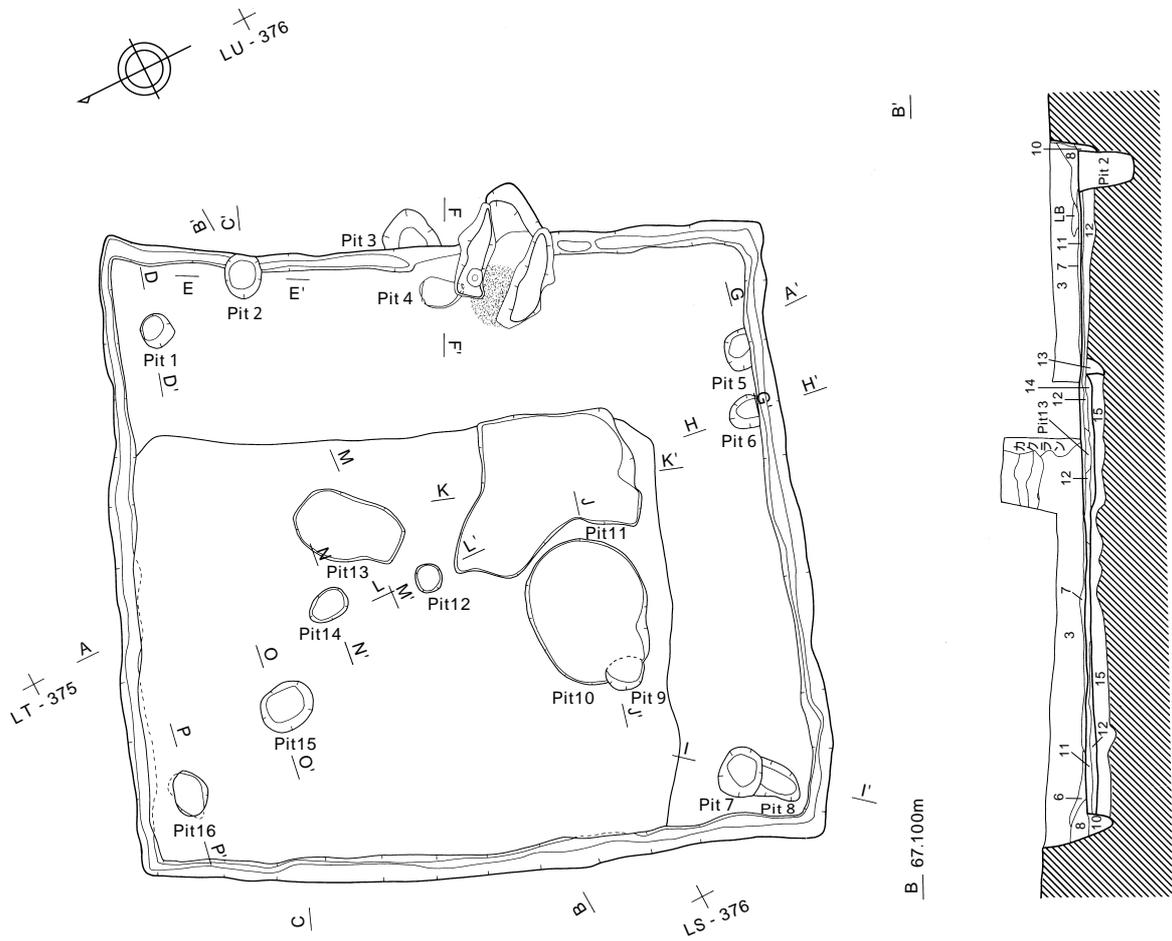
S I - 212 (旧)(第409、412図)

[位置] グリッドLS・LT - 375、LS - 376で検出した。

[重複] S I - 212 (新)と重複している。本遺構の上にS I - 212 (新)が構築されており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 長方形を呈し、441×358×(55)cmを測る。床面積は13.12㎡を測る。

[壁] 切り合いのため、壁上部の情報は欠落しているが、壁高は、北壁53cm、東壁30cm、南壁



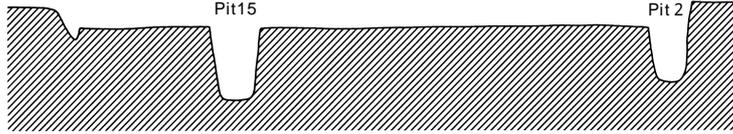
層	土色	成分	層	土色	成分
第1層	7.5YR3/1 黒褐色土	炭化物・ローム粒・ロームブロック少量 焼土粒極微量	第9層	10YR3/3 暗褐色土	ローム粒・ロームブロック多量
第2層	10YR3/1 黒褐色土	灰黄褐色土ブロック混入 ロームブロック少量	第10層	10YR2/2 黒褐色土	ローム粒微量、黄色粒少量
第3層	10YR2/2 黒褐色土	ロームブロック・焼土ブロック多量 炭化物少量、白色粒極少量	第11層	10YR3/4 暗褐色土	ロームブロック多量
第4層	10YR3/1 黒褐色土	ローム粒・ロームブロック少量	第12層	10YR2/2 黒褐色土	ローム粒多量
第5層	10YR2/2 黒褐色土	ローム粒・ロームブロック少量 炭化粒・焼土粒極微量	第13層	10YR2/2 黒褐色土	ローム粒・焼土粒微量
第6層	10YR3/4 暗褐色土	ローム粒多量、焼土ブロック混入	第14層	10YR3/2 黒褐色土	ロームブロック多量
第7層	10YR3/1 黒褐色土	ローム粒・白色粒極少量	第15層	10YR3/1 黒褐色土	ロームブロック多量
第8層	10YR2/2 黒褐色土	ローム粒少量	第16層	10YR2/2 黒褐色土	ロームブロック多量、焼土粒微量



第409図 SI - 212(新)・(旧)

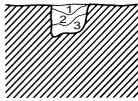
C 67.100m

C'



SI - 212(新) Pit 1

D 66.000m D'

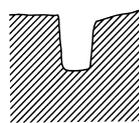


Pit 1

第1層 10YR2/2 黒褐色土 黄色粒少量
第2層 10YR2/2 黒褐色土 黄色粒多量、ローム粒微量
第3層 10YR4/4 褐色土 黄色粒・白色粒微量、ロームブロック混入

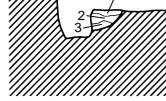
SI - 212(新) Pit 2

E 66.000m E'



SI - 212(新) Pit 4

F 66.000m F'

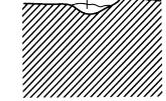


Pit 4

第1層 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒微量
第2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒・焼土粒微量
第3層 10YR4/4 褐色土 ローム粒多量

SI - 212(新) Pit 5

G 66.000m G'

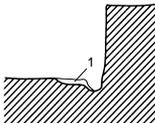


Pit 5

第1層 10YR3/1 黒褐色土 ローム粒少量

SI - 212(新) Pit 6

H 66.600m H'

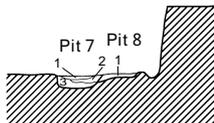


Pit 6

第1層 10YR1.7/1 黒色土 黄色粒極微量

SI - 212(新) Pit 7・8

I 66.600m I'



Pit 7

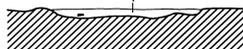
第1層 7.5YR5/8 明褐色土
第2層 10YR1.7/1 黒色土 ローム粒微量 焼土粒極微量
第3層 7.5YR4/4 褐色土 焼土粒微量

Pit 8

第1層 7.5YR4/3 褐色土 ローム粒極微量

SI - 212(新) Pit 10

J 66.000m J'



Pit 10

第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒極微量

SI - 212(新) Pit 11

K 66.000m K'

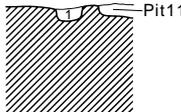


Pit 11

第1層 7.5YR2/2 黒褐色土 ロームブロック多量
第2層 7.5YR2/1 黒色土 ローム粒極微量
第3層 7.5YR2/2 黒褐色土

SI - 212(新) Pit 12

L 66.000m L'

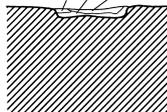


Pit 12

第1層 10YR2/2 黒褐色土 褐色土ブロック微量 ロームブロック多量
焼土粒極微量

SI - 212(新) Pit 13

M 66.000m M'



SI - 212(新) Pit 14

N 66.000m N'

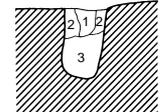


Pit 13

第1層 10YR2/2 黒褐色土 黄色粒極微量
第2層 7.5YR3/2 黒褐色土 焼土粒多量
第3層 10YR2/3 黒褐色土 黄色粒・焼土粒極微量

SI - 212(新) Pit 15

O 66.000m O'



Pit 14

第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒極微量
第2層 10YR3/1 黒褐色土 ロームブロック微量 ローム粒少量

Pit 15

第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒多量 炭化物微量 焼土粒極微量
第2層 10YR4/4 褐色土 ローム粒多量
第3層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量

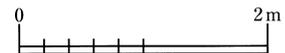
SI - 212(新) Pit 16

P 66.000m P'

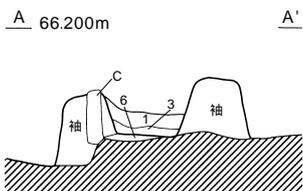
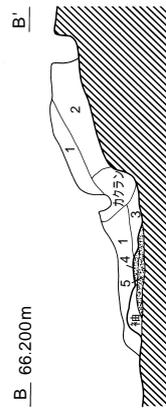
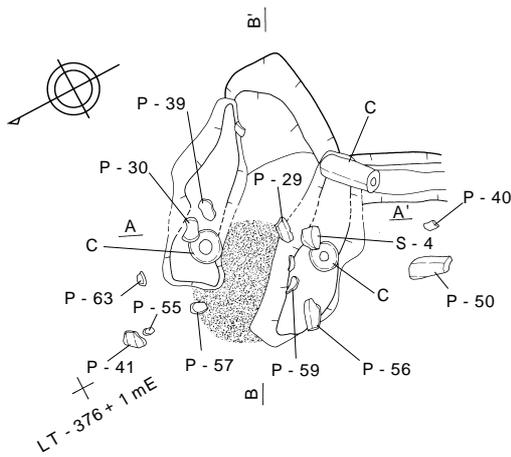
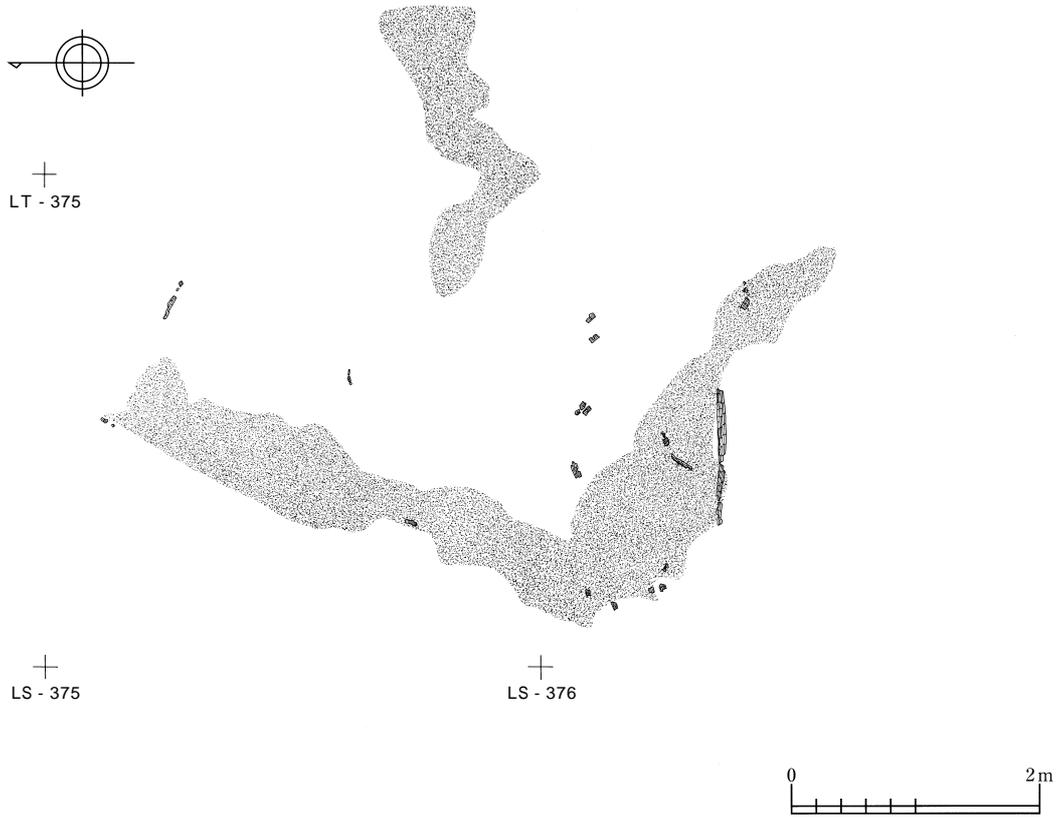


Pit 16

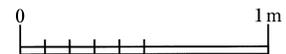
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック・黄色粒多量
第2層 10YR2/2 黒褐色土 黄色粒多量



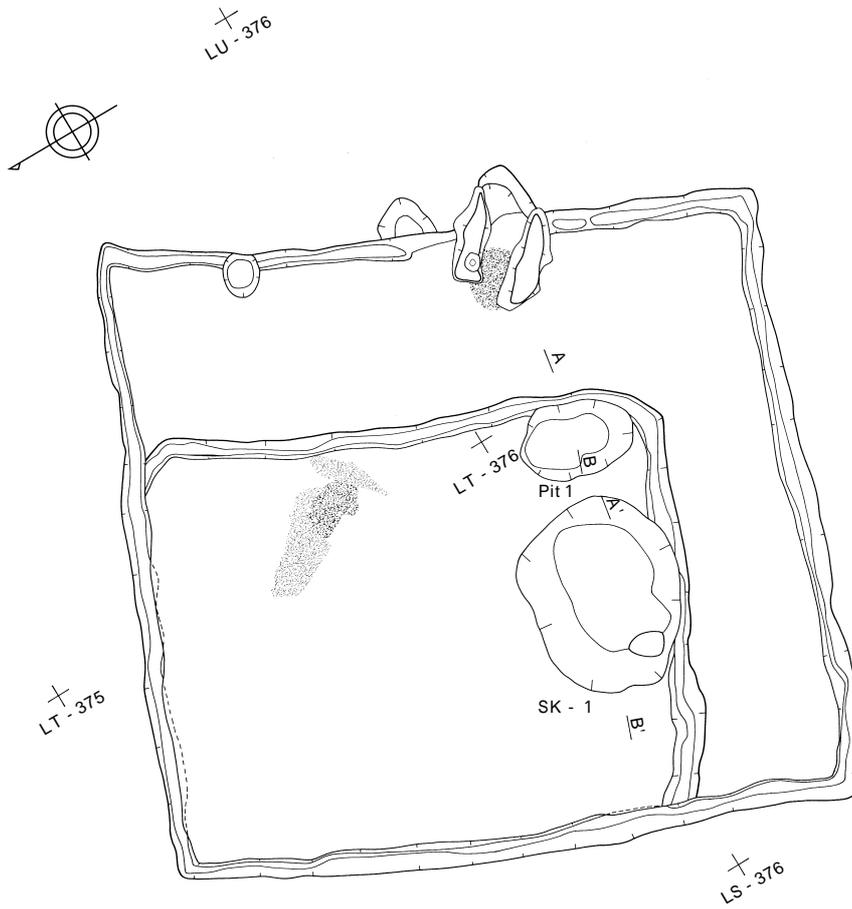
第410図 SI - 212(新)



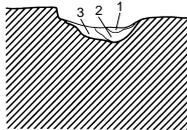
- SI-212(新) カマド
- | | | | |
|-----|----------|-------|---------------|
| 第1層 | 2.5YR4/6 | 赤褐色土 | |
| 第2層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 焼土粒多量、黄色粒微量 |
| 第3層 | 7.5YR2/3 | 極暗褐色土 | 黄色粒・ロームブロック多量 |
| 第4層 | 2.5YR4/6 | 赤褐色土 | |
| 第5層 | 5 YR4/8 | 赤褐色土 | |
| 第6層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 黄色粒・ロームブロック多量 |



第411図 SI-212(新)



SK - 212(旧) Pit 1
A 66.000m A'

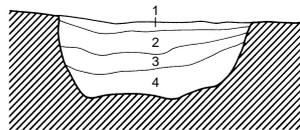


Pit 1

第1層	10YR1.7/1	黒色土	ロームブロック極微量
第2層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒多量
第3層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒微量

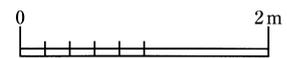
LS - 375

SK - 212(旧) SK - 1
B 66.000m B'



SK - 1

第1層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒少量
第2層	10YR2/2	黒褐色土	暗褐色土・ロームブロック・ローム粒少量
第3層	10YR3/1	黒褐色土	暗褐色土少量、ロームブロック多量
第4層	10YR1.7/1	黒色土	炭化粒・焼土粒極微量



第412図 SI - 212(旧)

80 cm、西壁45cmを測る。断面形は(a)で、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 掘り方を有し、ロームブロックと黒褐色土の混合層が充填されて床面としている。床面は起伏があり、やや脆弱である。

[壁溝] 住居内を全周する形で検出した。深さは平均4cmである。

[ピット] 住居内から1基検出した。規模は95×63×18cmを測る。柱穴としての機能は充足しなかったものと考えられる。

[カマド] 住居東壁側から燃烧部火床面と考えられる赤化面を検出した。東壁2(38:62)の位置から検出している。カマドの構造等についての詳細は不明である。

[その他の付属施設] 住居南壁中央寄りの位置から土坑1基を検出した。規模は160×125×62cmを測る。

[堆積土] S I - 212(新)の[堆積土]で記述したとおり、本遺構の廃絶からS I - 212(新)への時間幅は連続したものであったため、本遺構廃絶後の堆積土は、S I - 212(新)の構築層となっている。

(木村)

S I - 213(第413図)

[位置] グリッドLS-377で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 台形を呈し、206×200×35cmを測る。床面積は4.112m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁8cm、東壁8cm、南壁13cm、西壁28cmを測る。断面形はdで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面はやや堅緻である。

[床] ほぼ全面に掘り方をもち、ロームブロックを多量に含む黒褐色土が充填され、床面としている。床面はやや起伏があり、やや脆弱である。

[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から2基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 22×19×4cm、Pit 2 = 30×28×8cmを測る。いずれのピットも柱穴としての機能は充足し得なかったものと考えられる。

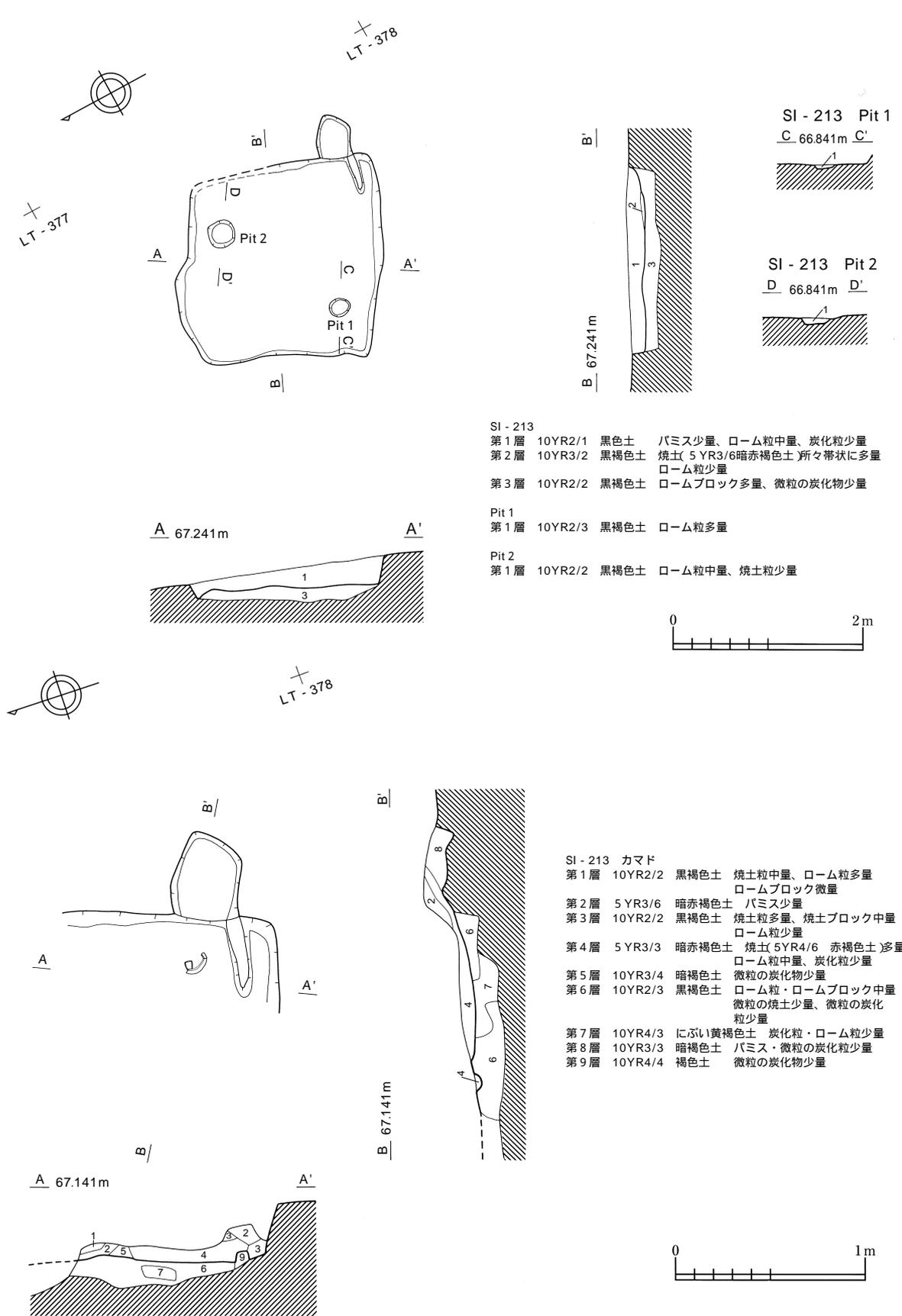
[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁4(80:20)の位置から検出している。構造は、半地下式で、カマド左袖部分が破壊されており、煙道長46cmを測る。主軸はN-116°-Eである。燃烧部は、下部構造をもち、暗褐色土と月見野火山灰主体のロームブロックの混合層が充填されている。残存部分から考えられる燃烧部の構築は粘土によるもので、第4層が相当すると考えられる。

煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で30°に角度を変え、全煙道長の1/3の地点で15°に傾斜しながら煙出部へ向かう。煙出奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて3層に分層した。住居廃絶後の堆積土は第1~2層が相当し、住居全体に堆積している第1層中にはロームブロックが多量に含まれ、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)



第413図 SI - 213

S I - 214 (第414~416図)

[位置] グリッドMB・MC - 376で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 長方形を呈し、324×284×40cmを測る。床面積は8.862㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁12cm、東壁9cm、南壁50cm、西壁35cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 南壁側部分以外に掘り方を持ち、ロームブロックと黒褐色土の混合土を充填させている。床面は起伏があり、やや硬さが不均一である。また、本遺構北壁側床面から赤化面、灰溜り、炭化物を検出し、本遺構は焼失住居であったことが考えられる。

[壁溝] 南壁側を除いて検出した。深さは平均8cmを測る。

[ピット] 住居内から12基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 64×52×21cm、Pit 2 = (33)×31×11cm、Pit 3 = 50×42×7cm、Pit 4 = 66×65×9cm、Pit 5 = 47×35×17cm、Pit 6 = 28×20×8cm、Pit 7 = 29×24×15cm、Pit 8 = 39×23×12cm、Pit 9 = 32×27×11cm、Pit 10 = 34×30×15cm、Pit 11 = 26×18×17cm、Pit 12 = 31×23×14cmを測る。主柱穴として機能したと考えられるピットは、Pit 7、10である。

[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁3(55:45)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅64cm、煙道長108cmを測る。主軸はN - 89° - Eである。燃烧部に下部構造を持ち、暗褐色土ならびに褐色土を充填して構築している。燃烧部袖の構築は、自然礫、転用羽口を芯材とした粘土によるもので、天井は第8、10層が相当し、崩落した堆積状況を呈する。煙道部天井は、第11層が相当し、燃烧部と同様崩落した堆積状況を呈する。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて20層に分層した。全般的に焼土粒、ローム粒等を含み、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 216 (第417~419図)

[位置] グリッドLO~LQ - 380・381で検出した。

[重複] SK - 14とSP - 322と重複している。SK - 14の堆積土を本遺構が切っており、SP - 322に本遺構の堆積土が切られている新旧関係はSK - 14 < S I - 216 < SP - 322である。

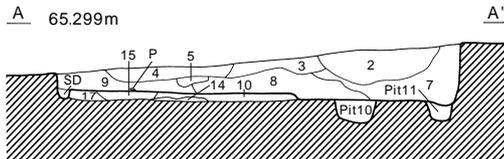
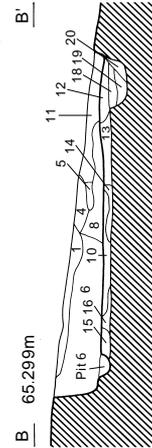
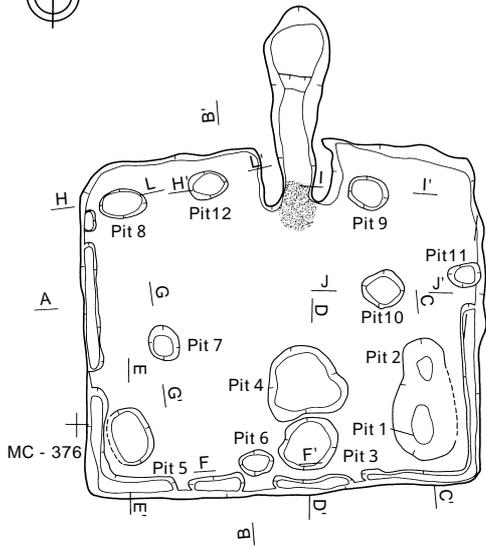
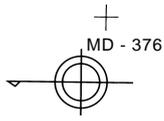
[平面形・規模] 方形を呈し、468×460×65cmを測る。床面積は21.846㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁53cm、東壁40cm、南壁60cm、西壁58cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ちあがる。壁面は、SK - 14の重複部分は脆弱で、それ以外の部分については堅緻である。

[床] 北壁側の部分については、浅い掘り方を持ち、黒褐色土が充填され、その上に貼り床として褐色土が貼り付けられている。床面は起伏がややあり、堅緻である。また、カマド周辺部から炭化材、炭化物を検出しており、本遺構は焼失住居の可能性が考えられる。

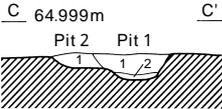
[壁溝] 住居南壁側を除き検出した。深さは平均11cmを測る。

[ピット] 住居内から12基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 40×35×57cm、Pit 2 = 45×38×49cm、Pit 3 = 58×34×14cm、Pit 4 = 18×15×13cm、Pit 5 = 59×33×9cm、Pit 6 = 36×30×



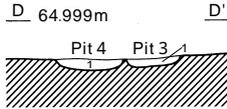
- SI - 214
- | | | | |
|------|----------|------|--------------------|
| 第1層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 焼土粒・炭化粒極微量、ローム少量 |
| 第2層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 炭化粒極微量、ローム少量 |
| 第3層 | 10YR4/4 | 褐色土 | ローム少量 |
| 第4層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 焼土極微量、炭化粒・粘土・ローム微量 |
| 第5層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 粘土少量 |
| 第6層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 焼土粒・炭化物極微量、ローム少量 |
| 第7層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土粒極微量、炭化粒微量、ローム少量 |
| 第8層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 焼土極微量、ローム少量 |
| 第9層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 焼土・炭化物極微量、ローム微量 |
| 第10層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 焼土粒・炭化粒極微量、粘土少量 |
| 第11層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土粒・炭化粒極微量、ローム少量 |
| 第12層 | 5YR4/6 | 赤褐色土 | 炭化物・灰微量 |
| 第13層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 焼土微量、炭化物極微量、ローム少量 |
| 第14層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 焼土極微量 |
| 第15層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム多量 |
| 第16層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土微量、ローム・炭化物極微量 |
| 第17層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土極微量、粘土多量 |
| 第18層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 炭化物極微量、粘土多量 |
| 第19層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 焼土・ローム極微量、粘土少量 |
| 第20層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 焼土極微量、粘土多量 |

SI - 214 Pit 1・2



- Pit 1
- | | | | |
|-----|----------|------|----------------|
| 第1層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 炭化物極微量、焼土・粘土微量 |
| 第2層 | 7.5YR4/6 | 褐色土 | 粘土多量 |
- Pit 2
- | | | | |
|-----|---------|------|----------------|
| 第1層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土・炭化物極微量、粘土少量 |
|-----|---------|------|----------------|
- Pit 3
- | | | | |
|-----|---------|-----|----------------|
| 第1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 炭化物・焼土極微量、粘土少量 |
|-----|---------|-----|----------------|
- Pit 4
- | | | | |
|-----|---------|------|----------------|
| 第1層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土微量、炭化物・ローム少量 |
|-----|---------|------|----------------|

SI - 214 Pit 3・4

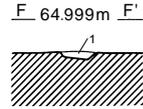


SI - 214 Pit 5

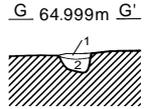


- Pit 5
- | | | | |
|-----|----------|------|---------------------|
| 第1層 | 7.5YR2/2 | 黒褐色土 | 焼土微量、焼けた粘土少量、炭化物極微量 |
| 第2層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 粘土多量 |
- Pit 6
- | | | | |
|-----|---------|------|----------------|
| 第1層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 焼土・ローム極微量、粘土少量 |
|-----|---------|------|----------------|
- Pit 7
- | | | | |
|-----|---------|-------|-------------------|
| 第1層 | 5YR3/4 | 暗赤褐色土 | 焼土多量、ローム微量、炭化物極微量 |
| 第2層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土・炭化物極微量、粘土少量 |

SI - 214 Pit 6



SI - 214 Pit 7



SI - 214 Pit 8



- Pit 8
- | | | | |
|-----|---------|------|----------------|
| 第1層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土・炭化物極微量、粘土多量 |
|-----|---------|------|----------------|
- Pit 9
- | | | | |
|-----|---------|------|------------------|
| 第1層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土粒・炭化粒極微量、ローム少量 |
|-----|---------|------|------------------|

SI - 214 Pit 9



SI - 214 Pit 10



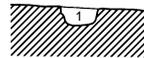
- Pit 10
- | | | | |
|-----|---------|------|---------------|
| 第1層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 焼土微量、炭化物・粘土少量 |
|-----|---------|------|---------------|

SI - 214 Pit 11

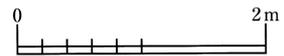


- Pit 11
- | | | | |
|-----|---------|------|-----------------|
| 第1層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム少量
炭化物極微量 |
|-----|---------|------|-----------------|

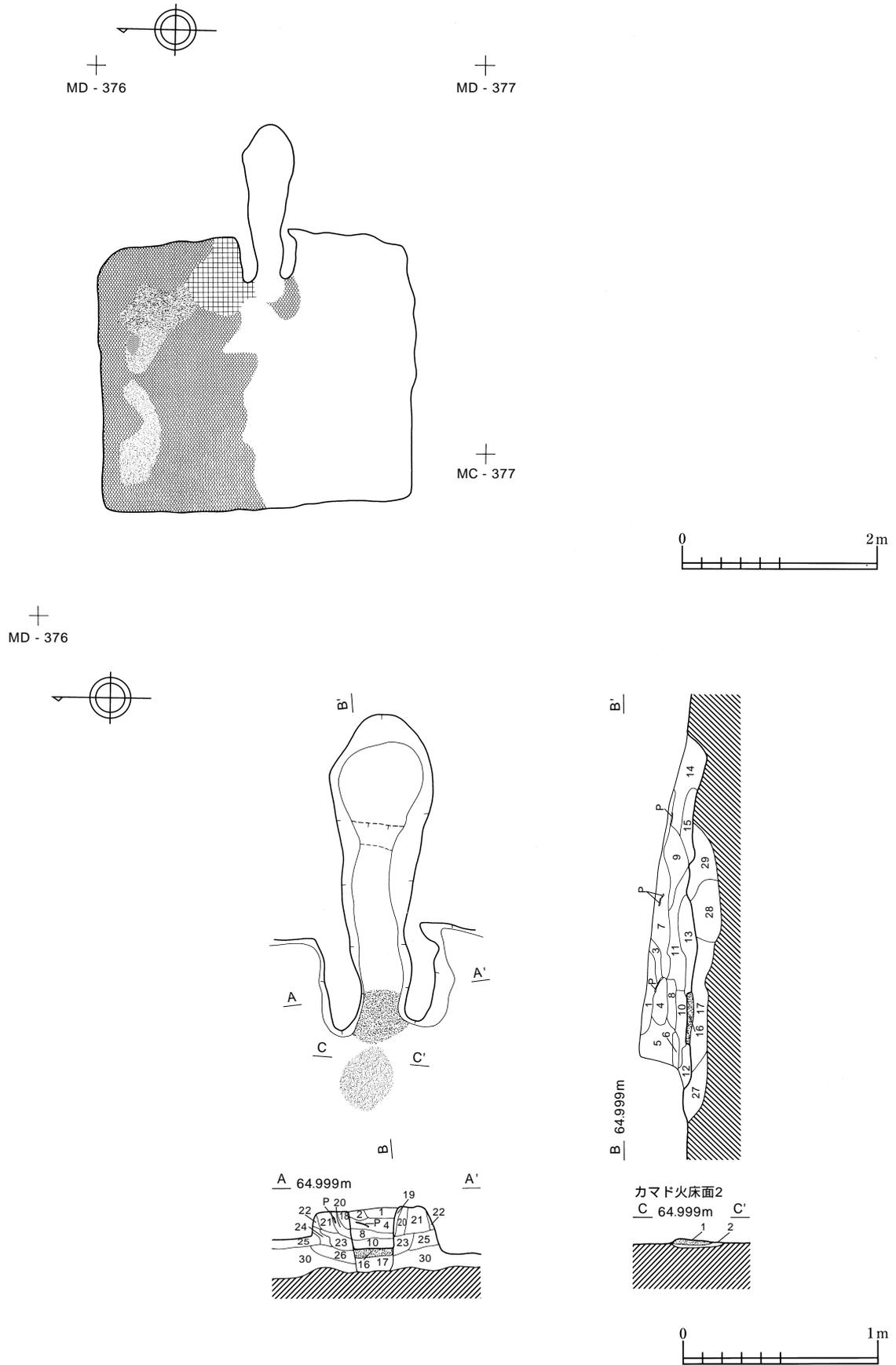
SI - 214 Pit 12



- Pit 12
- | | | | |
|-----|---------|------|-------------------|
| 第1層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 炭化物微量、ローム少量、焼土極微量 |
|-----|---------|------|-------------------|



第414図 SI - 214



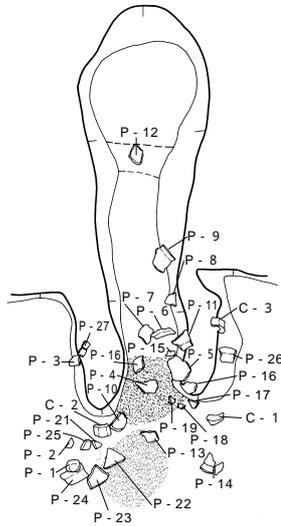
第415図 SI - 214

SI - 214 カマド					
第1層	10YR3/2	黒褐色土	焼土極微量、ローム少量	第16層	5 YR5/6 明赤褐色土
第2層	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒微量	第17層	7.5YR3/3 暗褐色土 焼土微量、炭化物・ローム極微量
第3層	10YR5/4	にぶい黄褐色土	焼土極微量	第18層	10YR3/2 黒褐色土 焼土極微量
第4層	10YR5/4	にぶい黄褐色土	焼土極微量	第19層	7.5YR5/4 にぶい褐色土 焼土極微量、黒色土少量
第5層	10YR3/3	暗褐色土	焼土微量、炭化物微量、粘土少量	第20層	5 YR5/6 明褐色土
第6層	10YR2/2	黒褐色土	焼土粒極微量、ローム微量	第21層	10YR6/4 にぶい黄褐色土 炭化物極微量
第7層	10YR2/2	黒褐色土	焼土少量、ローム・炭化物微量	第22層	7.5YR5/4 にぶい褐色土 焼土粒微量
第8層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	焼土極微量、ローム少量	第23層	7.5YR4/4 褐色土 焼土粒少量、ローム極微量
第9層	7.5YR2/2	黒褐色土	焼土多量、ローム微量	第24層	5 YR5/6 明赤褐色土
第10層	7.5YR5/6	明褐色土	焼土粒・ローム・炭化物極微量	第25層	7.5YR5/4 にぶい褐色土 炭化物極微量、焼土少量
第11層	7.5YR3/4	暗褐色土	焼土・粘土少量、ローム微量	第26層	5 YR3/3 明赤褐色土 焼土多量、ローム・炭化物微量
第12層	10YR2/2	黒褐色土	焼土少量、炭化物極微量、ローム微量	第27層	10YR3/3 暗褐色土 焼土微量、炭化物極微量、粘土少量
第13層	7.5YR3/3	暗褐色土	焼土・ローム微量、炭化物極微量	第28層	10YR3/3 暗褐色土 焼土極微量、ローム微量
第14層	10YR2/2	黒褐色土	焼土粒極微量、ローム粒少量	第29層	10YR2/1 黒色土 炭化物微量、焼土少量、ローム微量
第15層	7.5YR2/2	黒褐色土	焼土微量、ローム少量	第30層	10YR2/2 黒褐色土 焼土・炭化物極微量、ローム少量



MD - 376

SI - 214 カマド火床面2
 第1層 5 YR3/6 暗赤褐色土
 第2層 7.5YR4/6 褐色土



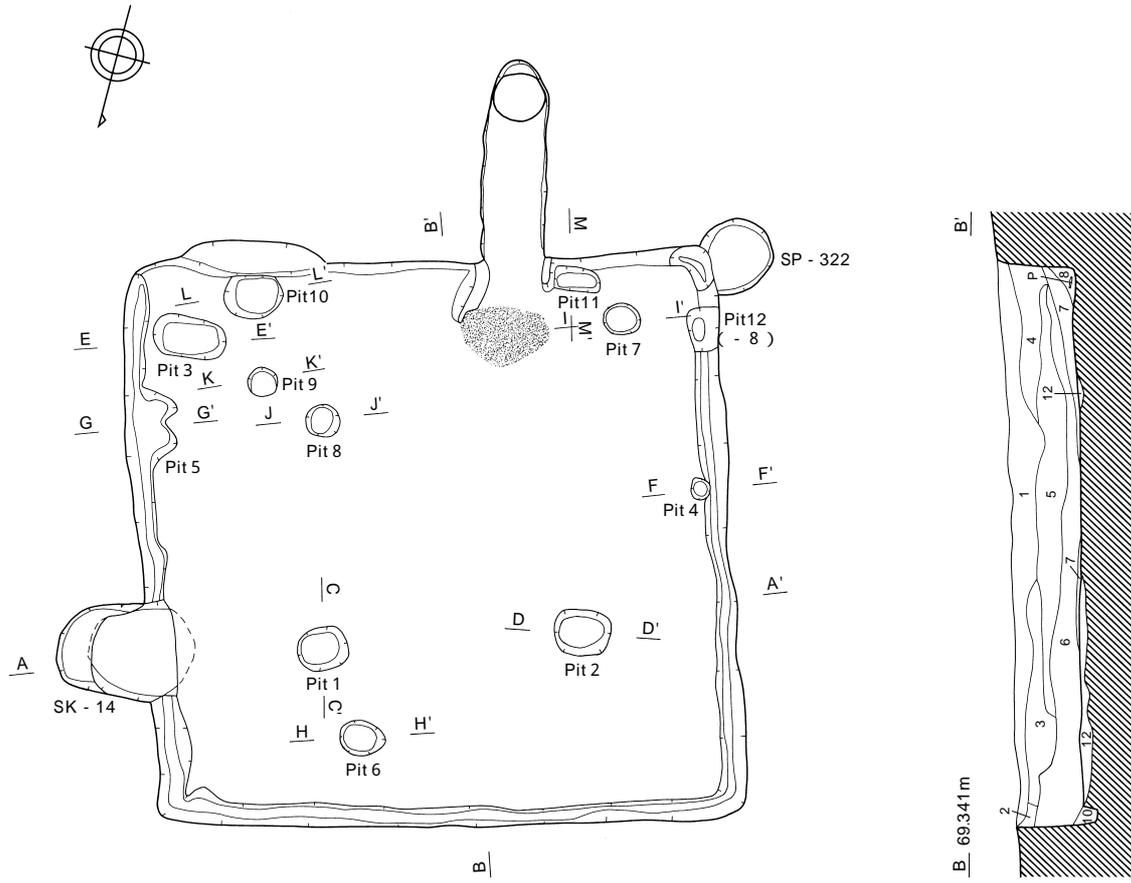
第416図 SI - 214

13cm、Pit 7 = 30 × 25 × 4 cm、Pit 8 = 27 × 26 × 4 cm、Pit 9 = 24 × 23 × 3 cm、Pit 10 = 47 × 35 × 5 cm、Pit 11 = 36 × 19 × 42cm、Pit 12 = 35 × 26 × 8 cmを測る。支柱穴と考えられるピットは、Pit 1、2、10、11である。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(65:35)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅72cm、煙道長159cmを測る。主軸はN - 171° - Eである。燃烧部の上部構造の遺存状況が悪く、カマド右袖はほとんど残存していない。粘土による構築で、燃烧部天井は、第8層が相当し、崩落した堆積状況を呈する。煙道部天井は第3層が相当し、燃烧部と同様崩落した堆積状況を呈する。煙道は、住居壁際から28°の角度で立ち上がる。

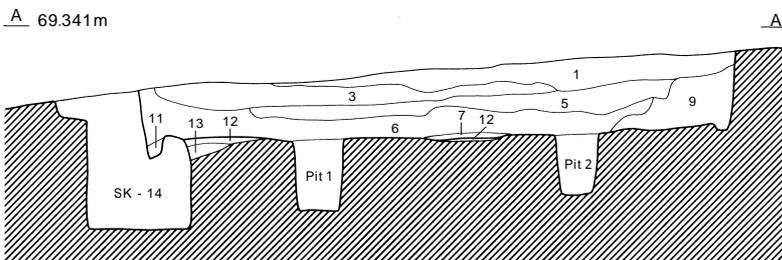
[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて13層に分層した。住居廃絶後の堆積土は第1~11層で、焼失時点での



LQ - 380

LP - 380



SI - 216

第1層 10YR3/1 黒褐色土 焼土粒少量、ローム粒中量、炭化粒少量

第2層 10YR4/6 褐色土

第3層 10YR3/4 暗褐色土 バミス少量、ローム粒中量、微粒の炭化粒少量

第4層 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒中量、ローム粒・炭化粒少量

第5層 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒・ローム粒中量、ロームブロック・炭化粒少量

第6層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック中量、炭化粒少量

第7層 10YR2/1 黒色土 炭化粒中量、ローム粒少量

第8層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック中量、ローム粒多量、炭化粒少量

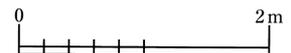
第9層 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒多量、微粒の炭化物少量

第10層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ロームブロック多量

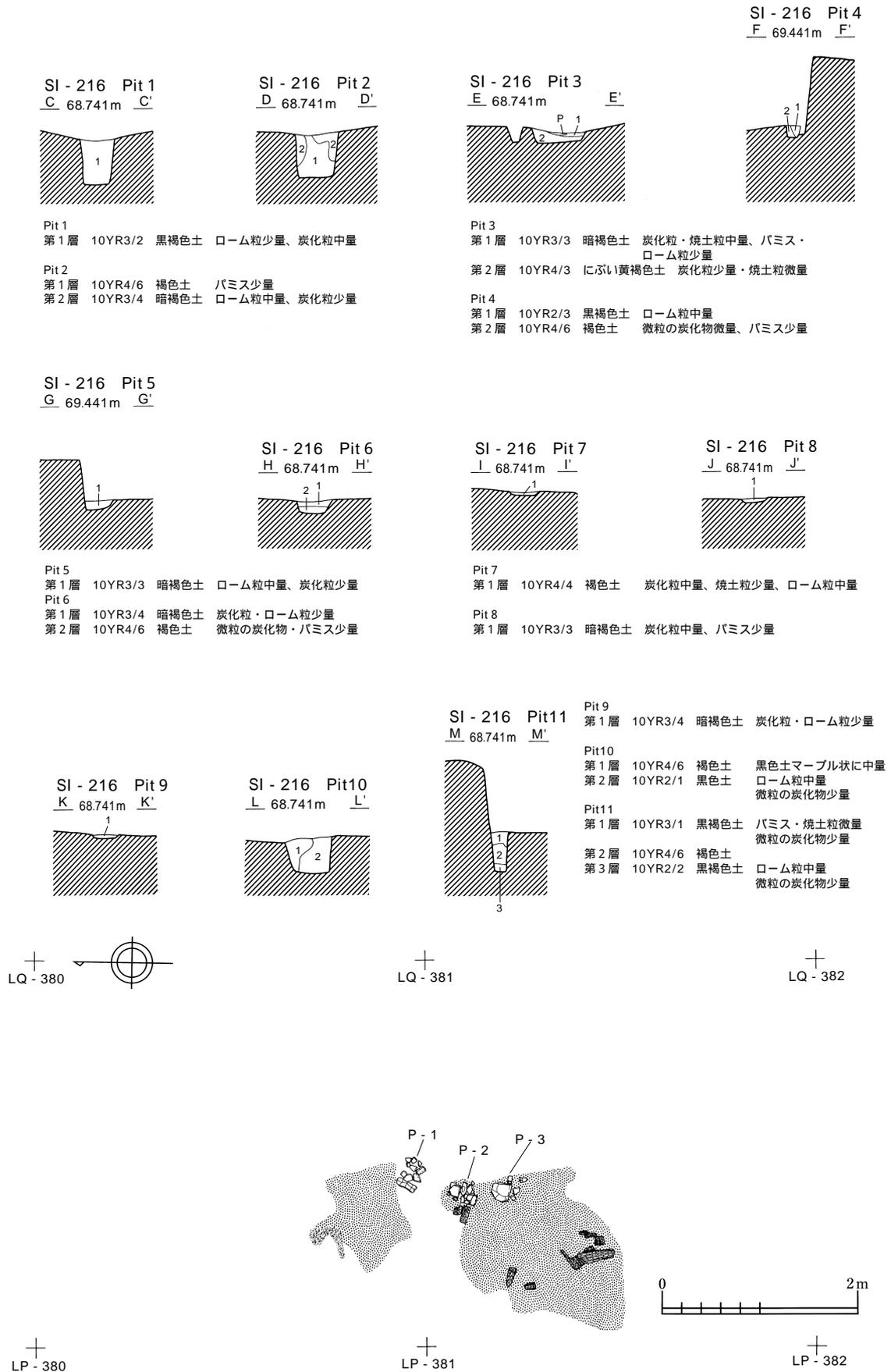
第11層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒多量、微粒の炭化物少量

第12層 10YR4/6 褐色土 ロームブロック少量、ローム粒・バミス中量、炭化粒少量

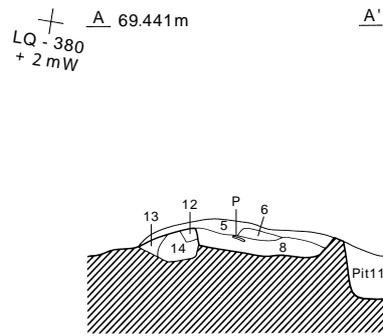
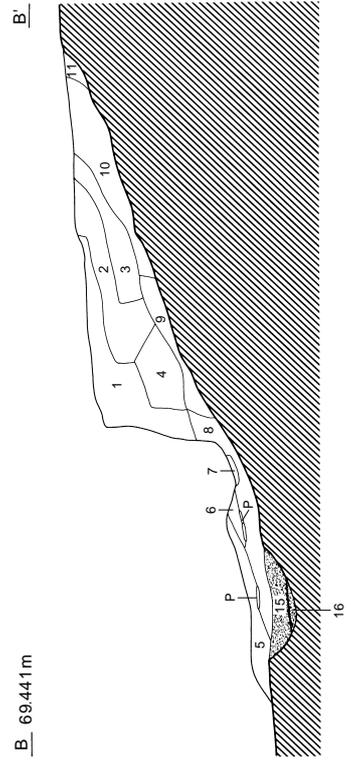
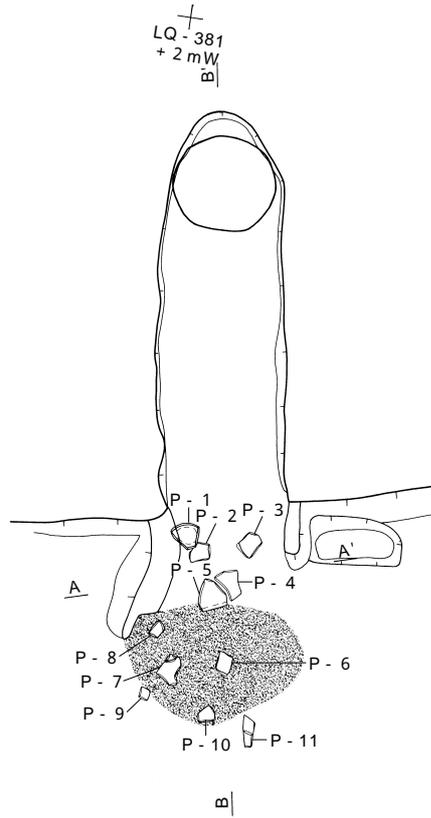
第13層 10YR2/2 黒褐色土 バミス少量、ローム粒多量



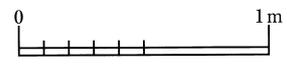
第417図 SI - 216



第418図 SI - 216



- SI - 216 カマド
- | | | | |
|------|----------|---------|------------------------------|
| 第1層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 炭化粒少量、焼土粒中量、パミス・ローム粒少量 |
| 第2層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土粒少量、焼土微量、炭化粒・パミス・ローム粒少量 |
| 第3層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 焼土粒・炭化粒少量 |
| 第4層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 微粒の炭化物少量、炭化粒微量 |
| 第5層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 炭化粒中量、焼土粒・ローム粒少量 |
| 第6層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 微粒の炭化物少量 |
| 第7層 | 5 YR3/4 | 暗赤褐色土 | 微粒の炭化物少量 |
| 第8層 | 7.5YR4/3 | 褐色土 | 焼土粒中量、焼土ブロック微量、微粒の炭化物・ローム粒少量 |
| 第9層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 微粒の炭化物・パミス少量 |
| 第10層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土粒中量、炭化粒・ローム粒少量 |
| 第11層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 微粒の炭化物・焼土粒少量 |
| 第12層 | 5 YR3/4 | 暗赤褐色土 | パミス微量、微粒の炭化物少量 |
| 第13層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 微粒の炭化物・焼土少量 |
| 第14層 | 10YR4/6 | 褐色土 | パミス・微粒の炭化物少量 |
| 第15層 | 5 YR5/8 | 明赤褐色土 | 微粒の炭化物少量 |
| 第16層 | 5 YR4/4 | にぶい赤褐色土 | |



第419図 SI - 216

形成層は第7層である。上位の堆積層については、全般的にロームブロック、焼土粒、炭化粒等が含まれ、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 217 (第420図)

[位置] グリッドLU - 385・386で検出した。

[重複] S I - 03と重複している。削平により、土層関係等の明確な切り合い関係等は追えなかったが、S I - 03は縄文時代に帰属することから本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 削平のため、全体形等の詳細は不明であるが、残存長については、(219) × (170) × 19cmを測る。

[壁] 削平のため、ほとんど残存しておらず、残存部分での壁高は、南壁10cm、西壁20cmを測る。断面形は(a)で、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 浅い掘り方を有し、大谷火山灰層主体の地山を貼り床として貼り付けている。床面は起伏があり、堅緻である。

[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から2基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 29 × 16 × 21cm、Pit 2 = 20 × 19 × 25cmを測る。いずれのピットも柱穴として機能した可能性は持つが、主柱配置については不明である。

[カマド] 南壁側から1基検出した。位置については、壁が削平されており詳細は不明である。構造は、半地下式で、袖部幅62cm、煙道長135cmを測る。主軸はN - 161° - Eである。燃烧部は粘土による構築で、遺存状況が悪く、第4層が燃烧部天井と考えられる。煙道部天井は、第8層が相当し、崩落した堆積状況を呈する。煙道は、住居壁際より外寄りの部分から8°の角度で緩やかに立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 残存部分について掘り方部分を含めて5層に分層した。住居廃絶後の堆積土は第1、2層であるが、堆積状況の詳細については不明である。

(木村)

S I - 219 (第421図)

[位置] グリッドLY・LZ - 382、LZ - 383で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 攪乱により破壊されているため、詳細は不明であるが、残存して検出した床面から推定される平面形は長方形を呈したものと推定され、規模は370 × 250 × 45cmを測る。

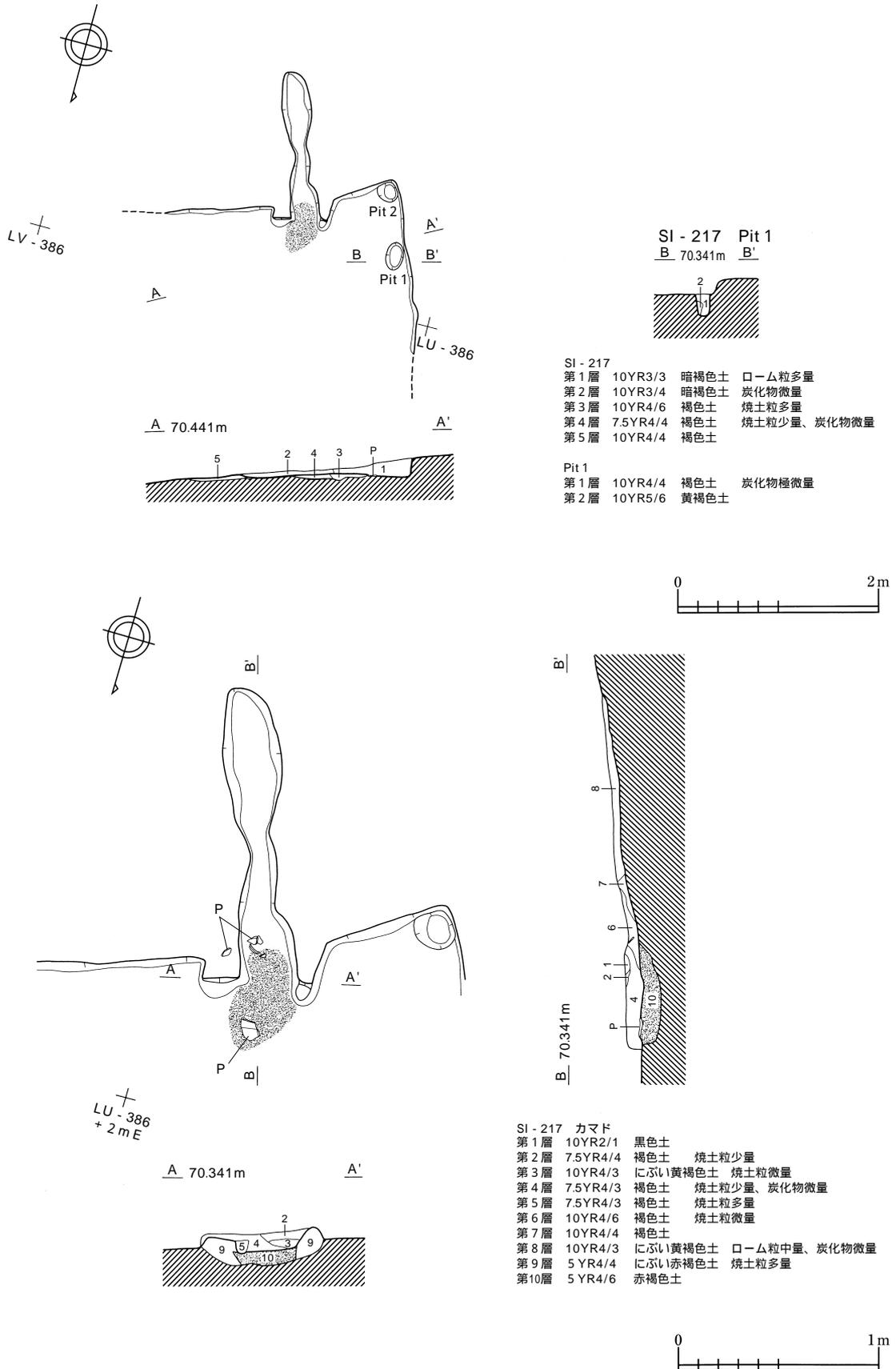
[壁] 攪乱のため破壊されており、明確に本遺構に帰属したと考えられる壁は南壁と西壁のみである。残存部分での壁高は、南壁10cm、西壁21cmを測る。断面形は(a)で、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 掘り方を持ち、暗褐色土とロームブロックの混合層が充填され、その上に大谷火山灰層主体の地山を貼り床として貼り付けている。東壁側に向かって傾斜しており、堅緻である。

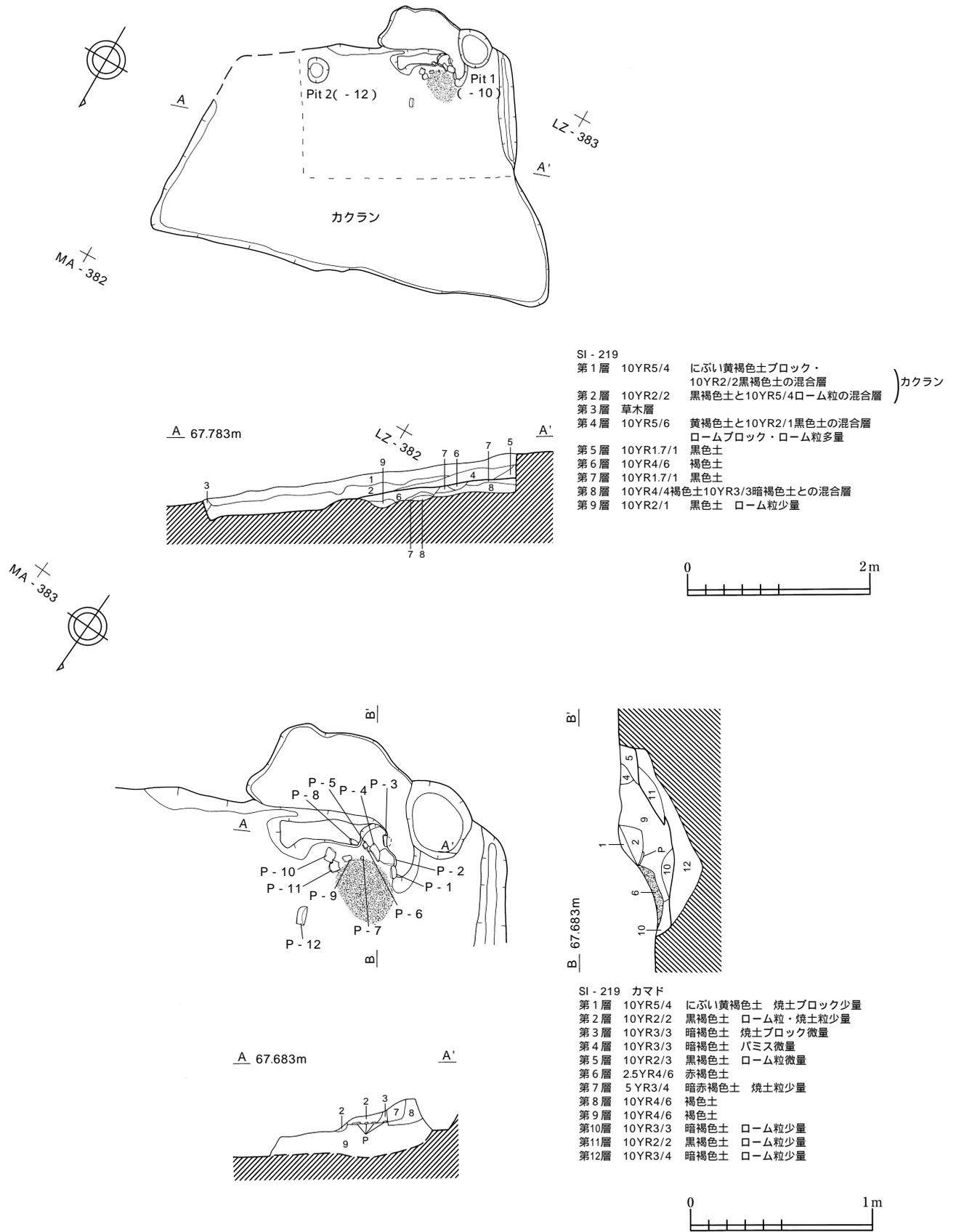
[壁溝] 西壁側から部分的に検出した。深さは8cmを測る。

[ピット] 住居内から2基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 47 × 36 × 10cm、Pit 2 = 28 × 23 × 12cmを測る。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。残存部分からの推定値であるが、南壁3(65:35)の位置から検出している。構造は、半地下式で、左袖が残存しておらず、煙道長は43cmを測る。粘土による構築で、燃烧部ならびに煙道部の天井は第9層が相当する。煙道は住居壁際から30°の角度で立ち上



第420図 SI - 217



第421図 SI - 219

がり、途中で5°に角度を変え、立ち上がる。煙出奥壁は垂直に近い形で立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 攪乱部分ならびに掘り方部分を含めて9層に分層した。第1～3層は攪乱層であり、住居堆積層は第4層以下の土層が相当する。住居中央部に堆積していたと考えられる第4層は、ロームブロック等が多量に含まれ、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 220 (第422～424図)

[位置] グリッドL U・L V - 391・392、L V - 393で検出した。

[重複] S I - 07、08と重複している。本遺構がいずれの遺構の堆積土を切っており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 方形を呈し、448×428×50cmを測る。床面積は16.712m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁45cm、東壁50cm、南壁41cm、西壁30cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は、S I - 07、08との重複部分については堆積土を壁面としており、やや脆弱である。また、それ以外の部分については、地山を壁面としており堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。

[壁溝] カマド設置部分を除き全周して検出した。深さは平均9cmを測る。

[ピット] 住居内から9基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 35×33×10cm、Pit 2 = 30×25×5cm、Pit 3 = 35×29×3cm、Pit 4 = 42×28×5cm、Pit 5 = 47×35×5cm、Pit 6 = 35×16×10cm、Pit 7 = 28×26×16cm、Pit 8 = 24×20×21cm、Pit 9 = 26×18×19cmを測る。主柱配置については、いずれのピットも浅く対応関係等が不明瞭であるため詳細は不明である。

[カマド] 南壁側から1基検出した。南壁4(88:12)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅109cm、煙道長164cmを測る。主軸はN - 178.5° - Wである。燃焼部の構築は、粘土と暗褐色土の混合土によって構築されており、カマド周辺から自然礫が出土していることから、芯材として利用された可能性についても考えられる。燃焼部天井は、第11層が相当し、崩落した堆積状況を呈する。煙道部天井は、燃焼部と同様粘土と暗褐色土が用いられ、第2～4層が相当し、崩落した堆積状況を呈する。煙道は、住居壁際から壁面にそって立ち上がり、途中で19°に角度を変え、全煙道長の2/5の位置で4°に角度を変え煙出部へ向かう。煙出は浅い土坑状に窪んでいる。

[その他の付属施設] 住居中央よりやや北西寄りの位置から土坑1基を検出した。規模は155×150×18cmを測る。

[堆積土] 攪乱により一部土層が乱されているが、11層に分層した。概ね、壁の崩落等も含んだ自然堆積状況を呈する。

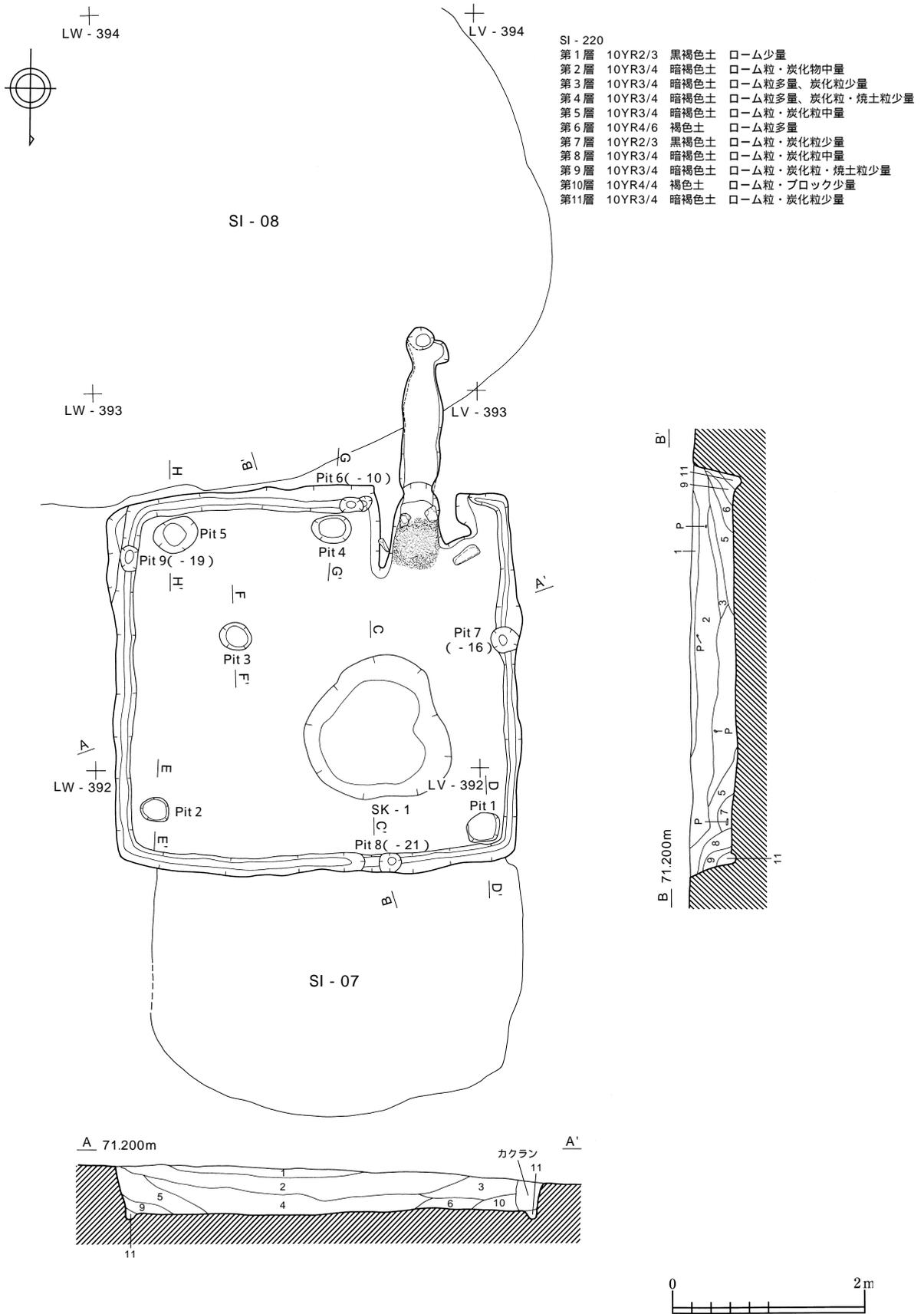
(木村)

S I - 221 (第425、426図)

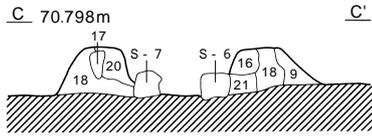
[位置] グリッドMA - 388、MA・MB - 389～390で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 一部削平を受けているが、残存する床面から方形を呈したものと考えられ、442×

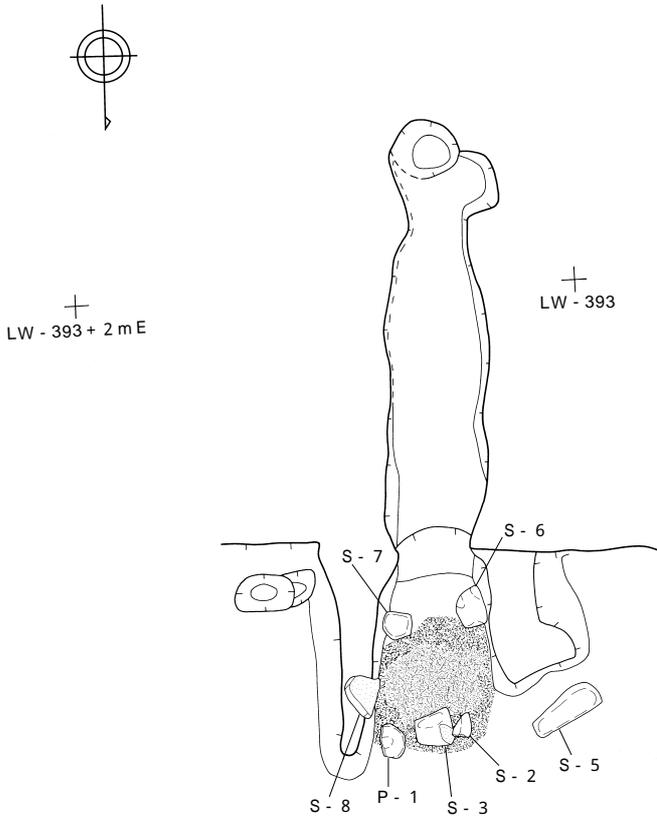


第422図 SI - 220

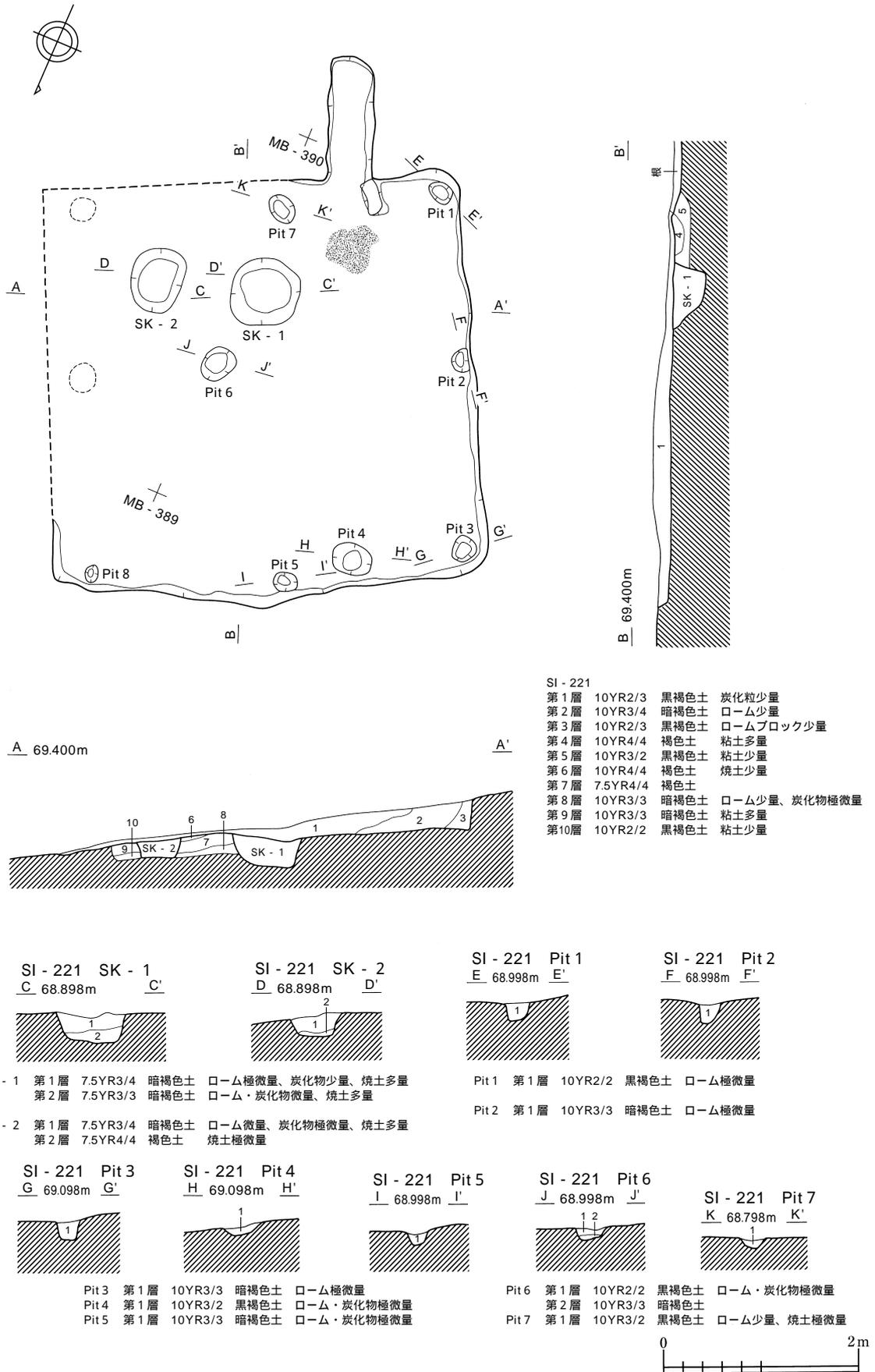


SI - 220 カマド

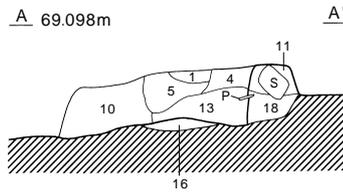
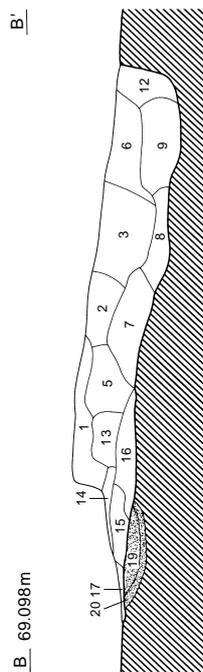
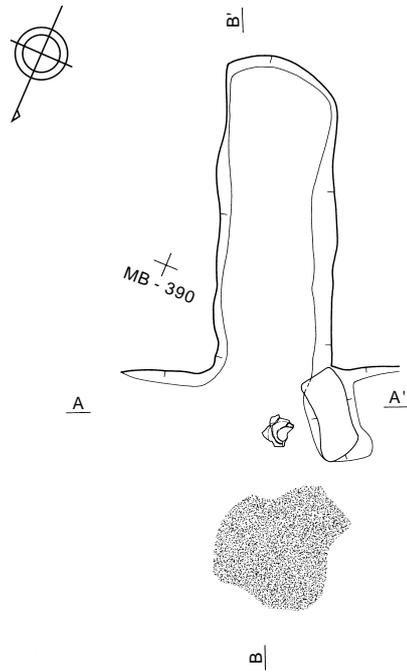
第1層	7.5YR3/3	暗褐色土	焼土粒少量、炭化物極微量
第2層	7.5YR3/4	暗褐色土	焼土・炭化物微量
第3層	7.5YR4/4	褐色土	
第4層	7.5YR3/3	暗褐色土	焼土粒多量、炭化物微量
第5層	7.5YR3/2	黒褐色土	焼土粒極微量
第6層	10YR2/3	黒褐色土	焼土多量
第7層	10YR2/2	黒褐色土	焼土粒少量
第8層	10YR2/3	黒褐色土	焼土粒・炭化物少量
第9層	10YR4/4	褐色土	ローム粒・炭化物・焼土粒微量
第10層	7.5YR4/4	褐色土	焼土ブロック多量
第11層	7.5YR4/6	褐色土	焼土ブロック多量
第12層	5 YR4/4	にぶい赤褐色土	焼土ブロック多量
第13層	7.5YR6/8	橙色土	
第14層	2.5YR4/6	赤褐色土	
第15層	5 YR4/6	赤褐色土	
第16層	7.5YR3/4	暗褐色土	焼土ブロック少量
第17層	5 YR4/6	赤褐色土	
第18層	7.5YR4/4	褐色土	焼土ブロック・炭化物微量
第19層	7.5YR3/3	暗褐色土	焼土粒多量、炭化物微量
第20層	10YR3/4	暗褐色土	焼土粒・炭化物微量
第21層	7.5YR3/4	暗褐色土	ローム粒・焼土粒少量



第424図 SI - 220

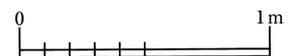
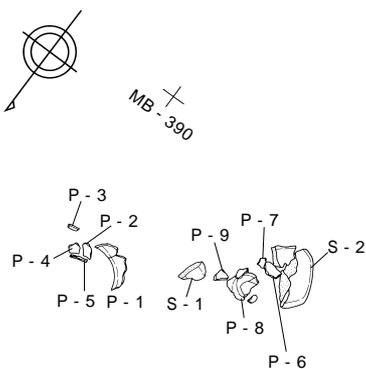


第425図 SI - 221



SI - 221 カマド

第1層	10YR3/4	暗褐色土	ローム微量、粘土・焼土少量
第2層	7.5YR3/4	暗褐色土	炭化物微量、焼土多量
第3層	5 YR3/4	暗赤褐色土	ローム・炭化物極微量、焼土多量
第4層	7.5YR4/4	褐色土	粘土少量、炭化物極微量
第5層	7.5YR2/2	黒褐色土	ローム・炭化物微量、焼土少量
第6層	7.5YR3/3	暗褐色土	ローム・炭化物微量、焼土少量
第7層	7.5YR3/2	黒褐色土	炭化物微量、焼土少量
第8層	7.5YR4/4	褐色土	ローム・炭化物・焼土極微量
第9層	7.5YR3/2	黒褐色土	ローム少量、炭化物・焼土微量
第10層	10YR3/3	暗褐色土	粘土少量、炭化物極微量、焼土微量
第11層	10YR3/2	黒褐色土	焼土微量
第12層	10YR3/3	暗褐色土	粘土少量、焼土極微量
第13層	7.5YR3/4	暗褐色土	ローム微量、焼土少量
第14層	10YR3/4	暗褐色土	焼土少量
第15層	7.5YR4/4	褐色土	炭化物極微量、焼土少量
第16層	5 YR4/4	にぶい赤褐色土	炭化物・焼土微量
第17層	10YR3/3	暗褐色土	焼土微量
第18層	7.5YR3/4	暗褐色土	ローム・炭化物極微量、焼土少量
第19層	2.5YR4/6	赤褐色土	
第20層	5 YR3/6	暗赤褐色土	



第426図 SI - 221

(436) × 35cmを測る。床面積は(18.586) m²を測る。

[壁] 削平のため、東壁側の情報は欠落しているが、残存部分の壁高は、北壁12cm、南壁20cm、西壁30cmを測る。断面形は(d)で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面はやや脆弱である。

[床] 住居東側部分に掘り方を有し、大谷火山灰層の地山土が充填され床面としている。床面は、起伏があり、堅緻である。

[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から8基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 26 × 22 × 18cm、Pit 2 = 24 × 17 × 20cm、Pit 3 = 26 × 24 × 20cm、Pit 4 = 40 × 33 × 13cm、Pit 5 = 25 × 21 × 13cm、Pit 6 = 38 × 32 × 12cm、Pit 7 = 32 × 24 × 11cm、Pit 8 = 19 × 14 × 14cmを測る。壁柱穴としてPit 1、2、3、5、7、8が機能したと考えられ、検出できなかったが東壁側にも同規模のピットが存在した可能性が考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(73:27)の位置から検出している。構造は、半地下式で、カマド左袖部分が破壊されており、煙道長127cmを測る。主軸はN - 157° - Eである。燃烧部袖の構築は、自然礫を芯材としており、暗褐色土ならびに黒褐色土を利用して構築している。天井ならびに左袖部分が破壊されており、残滓が第13、14層として堆積している。煙道部天井は、第2、3、6層が相当し、暗褐色土系の土が用いられており、崩落した堆積状況を呈している。煙道は、住居壁際から10°の角度で緩やかに起伏を持ちながら傾斜し、煙出部ではほぼ平坦になる。

[その他の付属施設] 住居中央よりやや南寄りの部分から土坑2基を検出した。SK - 1は、75 × 73 × 32cmを測る。堆積土中に焼土粒が多量に含まれる。SK - 2は、67 × 53 × 23cmを測る。SK - 1と同様堆積土中に焼土粒が多量に含まれ、いずれもカマド脇ピットと同様の機能を果たした可能性が考えられる。

[堆積土] 掘り方部分を含めて10層に分層した。住居廃絶後の堆積土は、第1～3層で壁の崩落を一部含む自然堆積状況を呈する。

(木村)

SI - 222 (第427、428図)

[位置] グリッドMD・ME - 385・386で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 長方形を呈し、454 × (398) × 86cmを測る。床面積は(17.062) m²を測る。

[壁] 削平のため、東壁側がほとんど残存していないが、残存部分での壁高は、北壁13cm、東壁2cm、南壁38cm、西壁74cmを測る。断面形はdで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。また、西壁の一部では段状に立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 住居北～東側部分にかけて掘り方を持ち、大谷火山灰層主体の地山土が充填されている。床面は起伏があり、やや脆弱である。

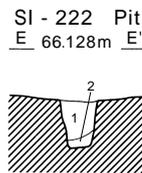
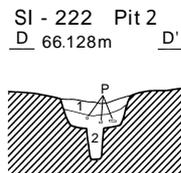
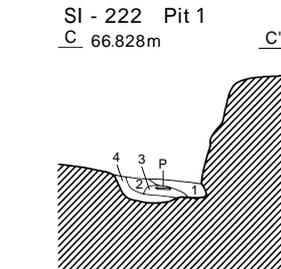
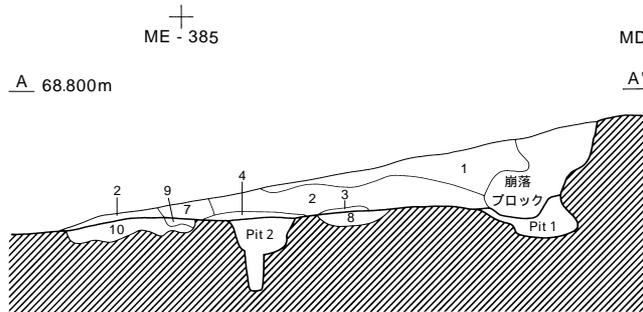
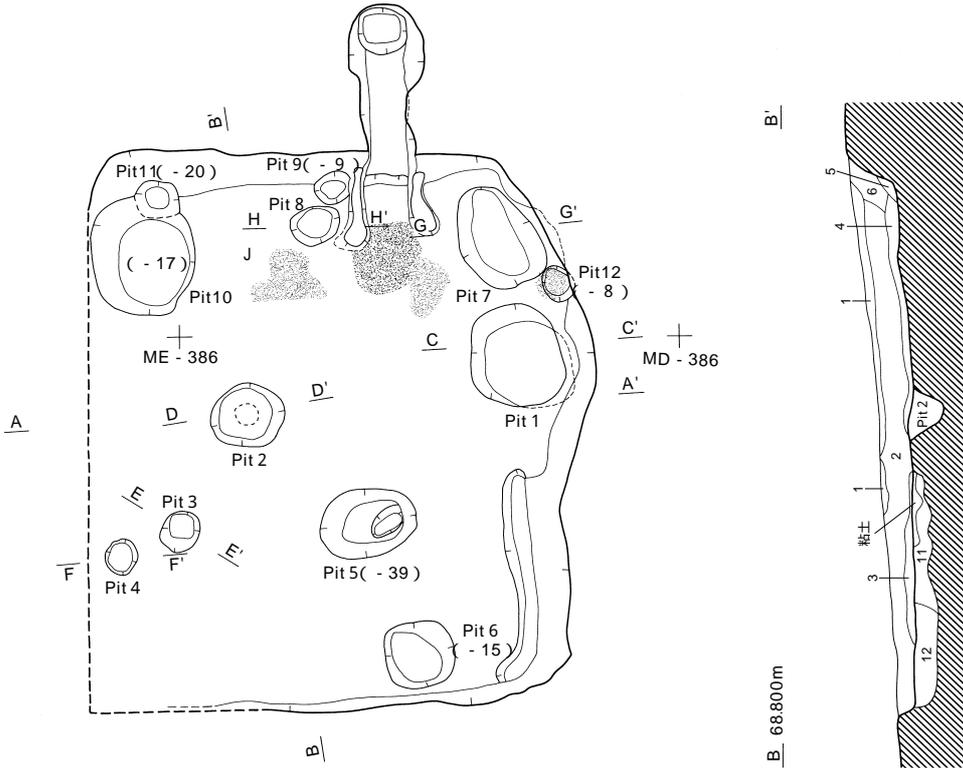
[壁溝] 住居西壁北隅から部分的に検出した。深さは2cmを測る。

[ピット] 住居内から12基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 84 × 73 × 22cm、Pit 2 = 60 × 53 × 24cm、Pit 3 = 35 × 29 × 37cm、Pit 4 = 30 × 26 × 17cm、Pit 5 = 80 × 61 × 39cm、Pit 6 = 60 × 59 × 15cm、Pit 7 = 86 × 60 × 23cm、Pit 8 = 40 × 31 × 8cm、Pit 9 = 30 × 25 × 9cm、Pit10 = 97 × 80 ×



ME - 387

MD - 387

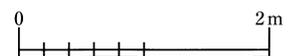


- SI - 222
- 第1層 10YR3/4 暗褐色土 炭化粒・焼土粒・ローム粒(層起因)少量
 - 第2層 10YR3/4 暗褐色土 ローム(層起因)粒・ロームブロック 黒褐色土多量混入
 - 第3層 10YR3/4 暗褐色土 ローム(層起因)ブロック
 - 第4層 10YR3/4 暗褐色土 ローム(層起因)粒・炭化物粒・焼土粒少量、黒褐色土混入
 - 第5層 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒少量
 - 第6層 10YR3/4 暗褐色土 ローム(層起因)少量、黒褐色土
 - 第7層 10YR3/4 暗褐色土 木根痕
 - 第8層 7.5YR4/4 褐色土 粘土多量、ローム少量
 - 第9層 7.5YR5/4 にぶい褐色土 粘土層に黒色土・ローム少量
 - 第10層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック多量
 - 第11層 7.5YR4/6 褐色土 ローム多量、粘土少量
 - 第12層 10YR2/2 黒褐色土 ローム多量、粘土微量

- Pit 1
- 第1層 10YR2/1 黒色土 焼土極微量、ローム少量、粘土微量
 - 第2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム少量
 - 第3層 10YR2/3 黒褐色土 ローム多量
 - 第4層 7.5YR3/4 暗褐色土 粘土多量

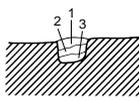
- Pit 2
- 第1層 5YR4/6 赤褐色土 焼土多量、炭化物極微量
 - 第2層 10YR2/3 黒褐色土 焼土・炭化物微量

- Pit 3
- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム・粘土微量
 - 第2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘土多量

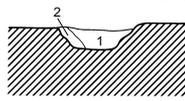


第427図 SI - 222

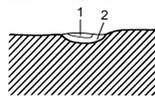
SI - 222 Pit 4
F 66.128m F'



SI - 222 Pit 7
G 66.128m G'



SI - 222 Pit 8
H 66.128m H'



Pit 4

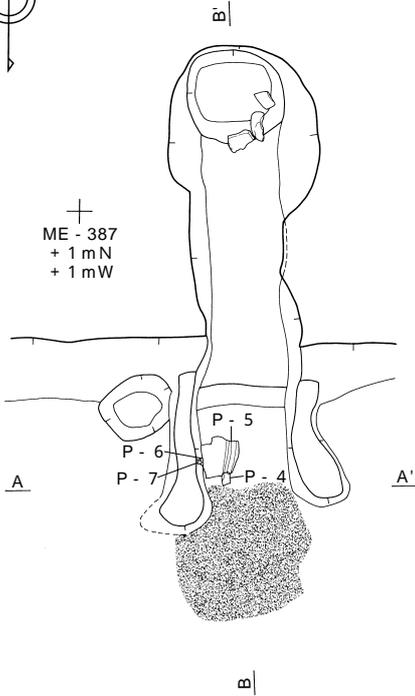
- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム少量
- 第2層 7.5YR4/6 褐色土 ローム微量、粘土少量
- 第3層 10YR3/2 黒褐色土 ローム微量

Pit 7

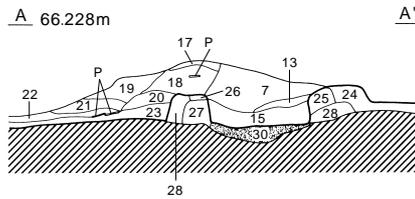
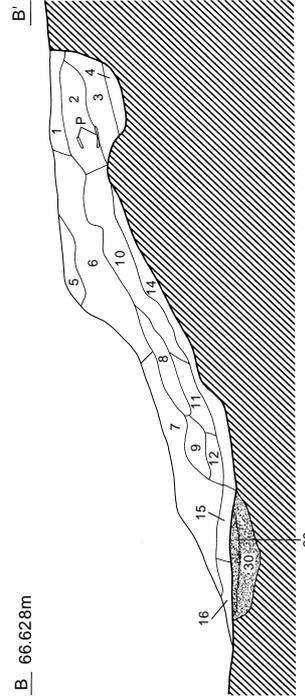
- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック多量、焼土極微量
- 第2層 10YR3/3 暗褐色土 焼土・ローム少量

Pit 8

- 第1層 7.5YR3/4 暗褐色土 焼土多量、炭化物極微量
- 第2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土少量、ローム微量、炭化物極微量



ME - 387
+ 1 m N
+ 1 m W



A 66.228m

SI - 222 カマド

- 第1層 7.5YR3/3 暗褐色土 焼土少量、ローム極微量
- 第2層 5YR3/2 暗赤褐色土 焼土少量、ローム微量
- 第3層 7.5YR1.7/1 黒色土 焼土微量
- 第4層 10YR1.7/1 黒色土 ローム極微量
- 第5層 10YR3/2 黒褐色土 焼土・ローム微量、炭化物極微量
- 第6層 7.5YR4/4 褐色土 ローム粒微量、焼土粒極微量、粘土微量
- 第7層 10YR3/2 黒褐色土 焼土極微量、ローム・粘土少量
- 第8層 5YR4/4 にぶい赤褐色土 粘土少量、炭化物極微量、ローム微量
- 第9層 7.5YR3/3 暗褐色土 ローム微量、炭化物極微量、粘土少量
- 第10層 7.5YR2/2 黒褐色土 焼土少量、ローム微量
- 第11層 7.5YR3/4 褐色土 ローム・炭化物極微量、焼土少量
- 第12層 5YR4/6 赤褐色土 ローム極微量
- 第13層 7.5YR4/4 褐色土 ローム微量、焼土極微量
- 第14層 5YR2/1 黒褐色土 焼土少量、ローム微量
- 第15層 7.5YR5/6 明褐色土 焼土微量
- 第16層 10YR2/2 黒褐色土 焼土少量、炭化物極微量
- 第17層 10YR3/3 暗褐色土 焼土・炭化物極微量、粘土少量
- 第18層 10YR2/2 黒褐色土 焼土極微量、ローム微量、粘土少量
- 第19層 10YR3/2 黒褐色土 焼土微量、炭化物極微量、ローム微量、粘土少量
- 第20層 10YR4/4 褐色土 焼土・ローム微量
- 第21層 10YR3/3 暗褐色土 焼土少量、ローム微量
- 第22層 7.5YR3/4 暗赤褐色土 焼土・ローム少量
- 第23層 10YR3/3 暗褐色土 焼土極微量、ローム微量
- 第24層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ローム・焼土少量、炭化物極微量
- 第25層 7.5YR3/4 暗褐色土
- 第26層 5YR4/6 赤褐色土 焼土微量
- 第27層 5YR3/6 暗赤褐色土 焼土微量、炭化物極微量
- 第28層 7.5YR4/4 褐色土 焼土・炭化物・ローム極微量
- 第29層 2.5YR5/8 明赤褐色土
- 第30層 2.5YR4/6 赤褐色土



第428図 SI - 222

17cm、Pit11 = 35 × (29) × 20cm、Pit12 = 30 × 25 × 8 cmを測る。主柱穴として機能したと考えられるピットは、Pit 3、5、11である。また、Pit 2 は、底面中央に軸受けの穴があり、ロクロピットとしての可能性が考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(69:31)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅76cm、煙道長137cmを測る。主軸はN - 179° - Eである。燃焼部の構築は月見野火山灰層主体の地山土ならびに暗褐色系の土によって構築されており、天井は土層堆積上に残存していない。煙道部天井は第6層が相当し、大谷火山灰層主体の地山土を用いて構築している。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で20°に角度を変え起伏を持ちながらピット状に掘り込まれた煙出部へ立ち上がる。

[その他の付属施設] [ピット]の項目で記述したが、ロクロピット1基を検出した。周辺部に土器焼成を行ったと考えられる土坑(SK - 234、235)を検出しており、土器製作関連施設としての機能が考えられる。

[堆積土] 掘り方部分を含めて12層に分層した。住居西壁部分には、貼り付けた壁面がすべり落ちたような堆積状況を呈しており、壁面に一部補修等が加えられていた可能性が考えられる。それ以外の堆積は、概ね自然堆積状況を呈する。

(木村)

SI - 223 (第429~432図)

[位置] グリッドME・MF・MG - 384・385、MF - 386で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 台形を呈し、604 × 564 × 113cmを測る。床面積は33.614㎡を測る。

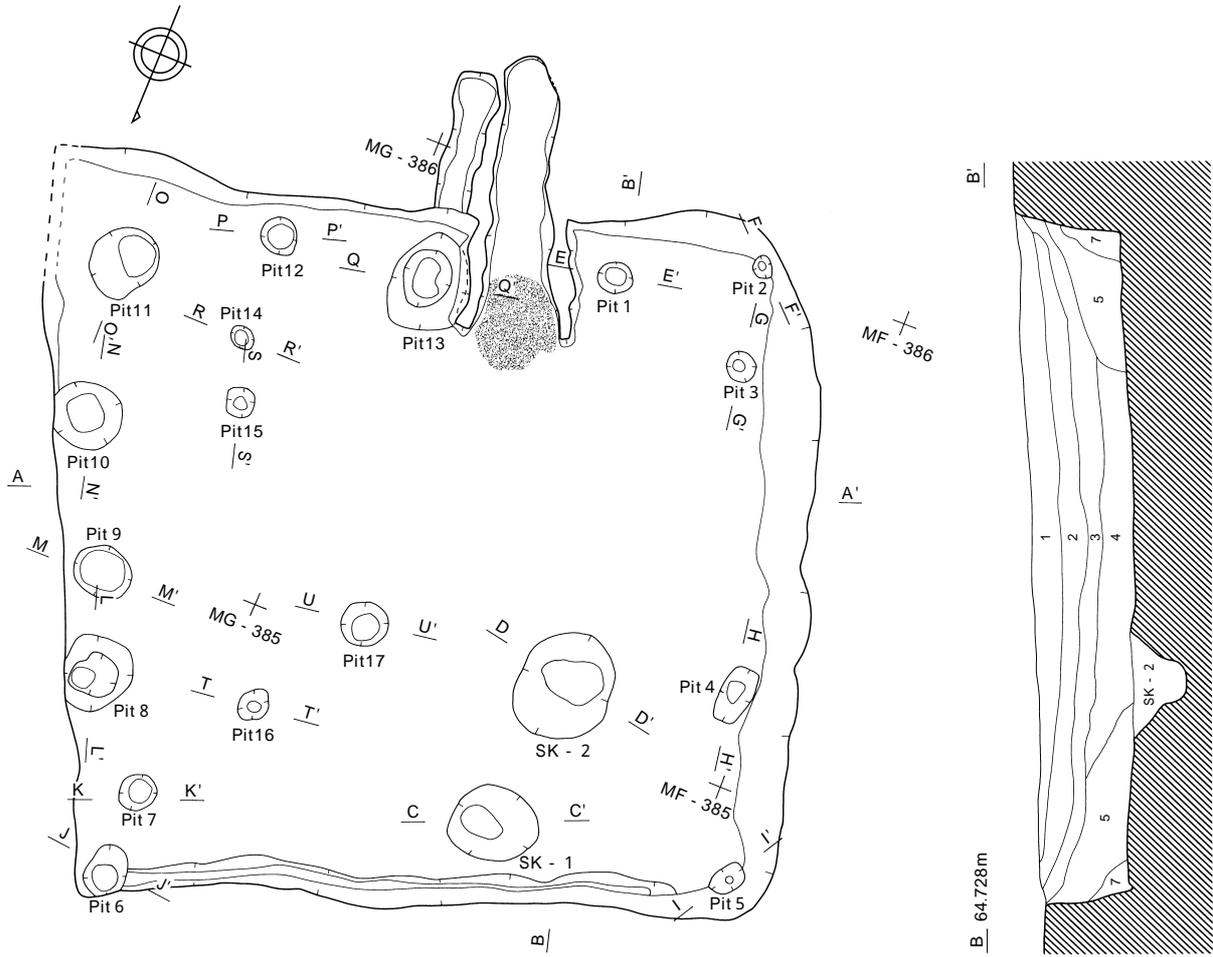
[壁] 東壁側は削平のためほとんど残存していないが、残存部分での壁高は、北壁77cm、南壁86cm、西壁110cmを測る。断面形はcで、壁上部の一部で緩やかな立ち上がりが見られる。壁面は堅緻である。

[床] 住居東側部分に掘り方を持ち、黒色土と大谷火山灰層主体の地山の混合土が充填されている。床面は、やや起伏があり、掘り方部分についてはやや脆弱でそれ以外の部分については堅緻である。

[壁溝] 住居北壁側から検出した。深さは4cmを測る。壁溝の検出部分から壁柱穴を検出しておらず、他の壁と異なった壁面であったことが考えられる。

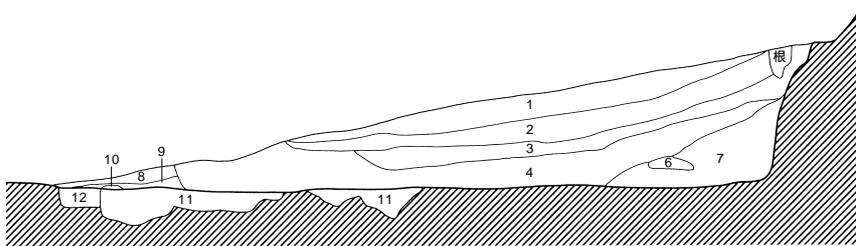
[ピット] 住居内から17基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 28 × 26 × 13cm、Pit 2 = 19 × 15 × 14cm、Pit 3 = 26 × 23 × 14cm、Pit 4 = 47 × 26 × 9 cm、Pit 5 = 30 × 19 × 24cm、Pit 6 = 45 × 32 × 20cm、Pit 7 = 31 × 29 × 8 cm、Pit 8 = 63 × 55 × 48cm、Pit 9 = 48 × 42 × 25cm、Pit10 = 53 × 52 × 20cm、Pit11 = 60 × 53 × 30cm、Pit12 = 32 × 29 × 7 cm、Pit13 = 82 × 55 × 26cm、Pit14 = 21 × 16 × 4 cm、Pit15 = 23 × 22 × 15cm、Pit16 = 30 × 23 × 22cm、Pit17 = 38 × 37 × 38cmを測る。壁柱穴と考えられるピットはPit 1、2、3、4、5、6、8、9、10、12であり、主柱穴についてはPit15、16の組合せもしくはPit17が相当したと考えられる。Pit15の掘り込みから自然礫が出土しており、礎石として機能した可能性が考えられる。

[カマド] 住居南壁側から2基検出した。いずれも南壁3の位置から検出している。新旧関係については、燃焼部の残存状況から(54:46) < (65:35)の関係である。カマド新の構造は、半地下式で、



A 65.228m

A'

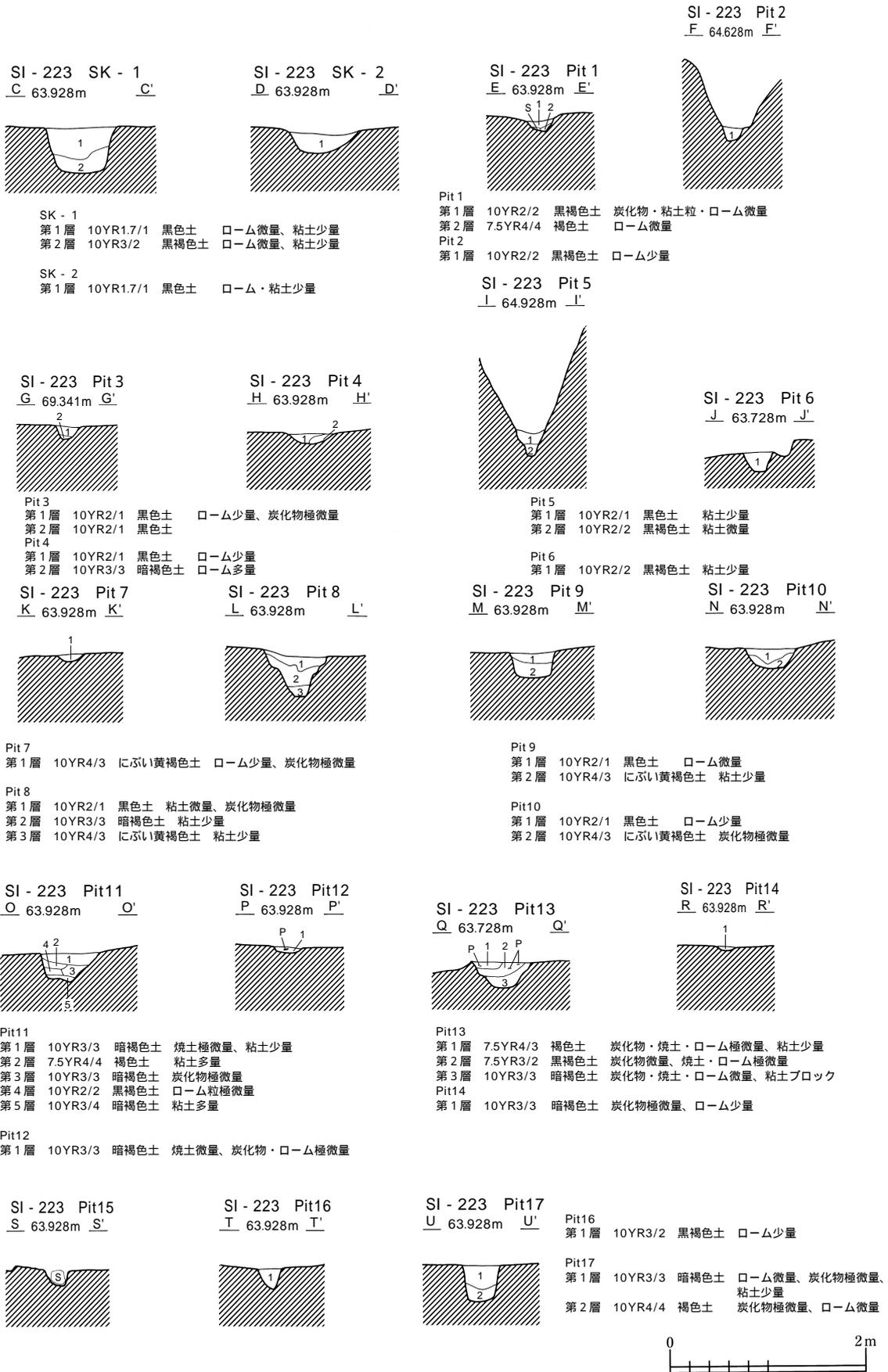


SI - 223

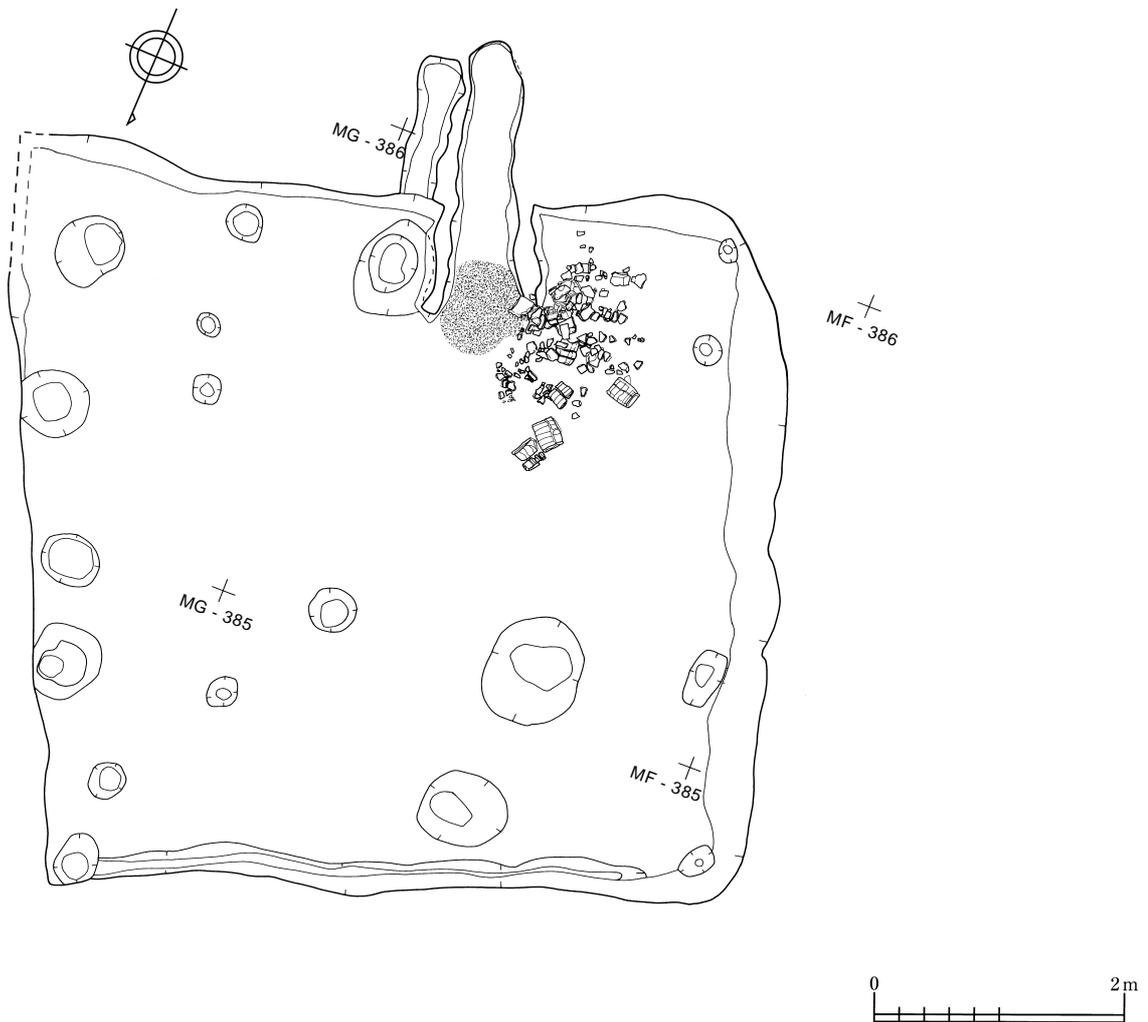
- | | | | |
|------|----------|------|-----------------------|
| 第1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | □-△粒少量、火山灰 (B-Tm) 混入 |
| 第2層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | □-△粒中量 |
| 第3層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | □-△粒中量 |
| 第4層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | □-△粒少量、暗褐色土混入 |
| 第5層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | □-△粒少量、黒色土・暗褐色土混入 |
| 第6層 | 7.5YR4/6 | 褐色土 | □-△ブロック混入 |
| 第7層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | □-△粒少量 |
| 第8層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | □-△少量、黒色土少量 |
| 第9層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | □-△少量 |
| 第10層 | 7.5YR4/6 | 褐色土 | |
| 第11層 | 7.5YR4/6 | 褐色土 | □-△微量、黒色土少量 |
| 第12層 | 7.5YR5/6 | 明褐色土 | □-△・黒褐色土 (10YR3/2) 微量 |



第429図 SI - 223



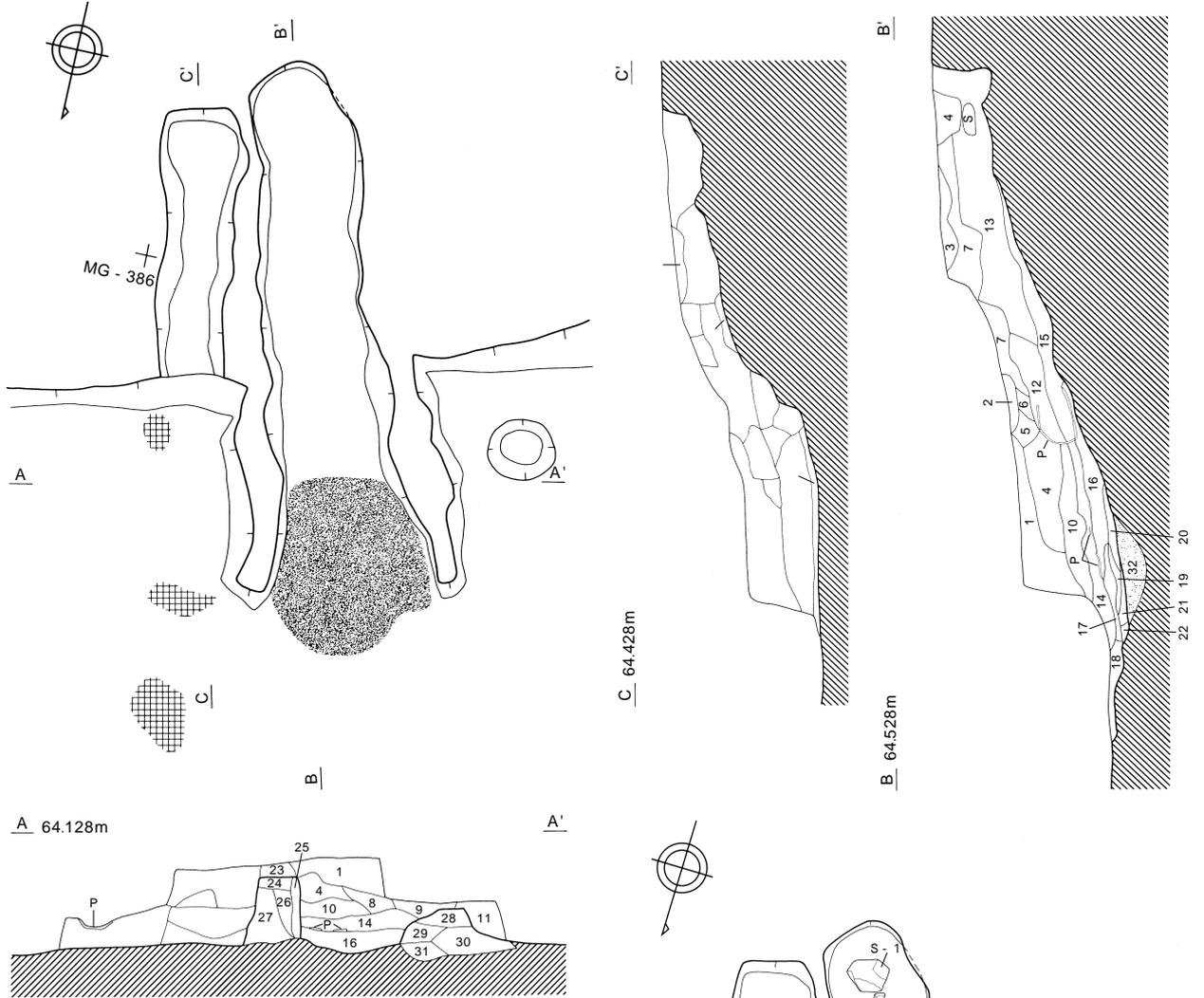
第430図 SI - 223



第431図 SI - 223

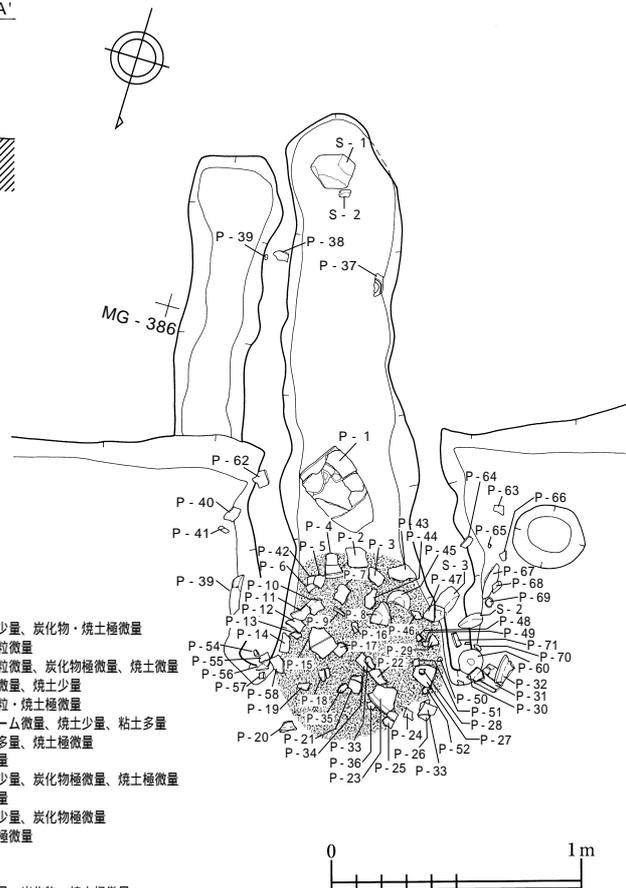
袖部幅98cm、煙道長133cmを測る。主軸はN - 162.5° - Eである。燃烧部袖の構築は粘土によるもので天井については第14層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道部天井は第13層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。第13層中には自然礫が包含しており、芯材として一部機能した可能性が考えられる。煙道は、住居壁際より手前の部分から20°の角度で起伏を持ちながら立ち上がる。煙出奥壁部分は垂直に立ち上がる。燃烧口部分には、土師器甕が倒置の状態出土しており、焚口周辺部からも多量の土器片が出土していることからカマド廃絶時点で廃棄が伴った可能性が考えられる。堆積土第1層中にはT o - a火山灰が含まれる。

カマド旧の構造は、半地下式で、袖部は残存しておらず、煙道長115cmを測る。主軸はN - 162.5° - Eである。カマド廃絶時点で壁際の煙道部付近を暗褐色土ならびに褐色土の土で埋めており、構築材等についての詳細については不明である。煙道は、住居壁際から壁面に沿って段を持ちながら立



- SI - 223 カマド(新)
- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 □-ム・焼土少量、火山灰(To-a)・炭化物微量
 - 第2層 10YR3/3 暗褐色土 □-ム少量、炭化物・焼土極微量
 - 第3層 10YR2/1 黒色土 □-ム粒微量
 - 第4層 10YR2/1 黒色土 粘土少量、焼土極微量
 - 第5層 10YR5/4 黒褐色土 □-ム微量
 - 第6層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物少量、焼土極微量
 - 第7層 10YR3/2 黒褐色土 □-ム粒微量、焼土極微量
 - 第8層 7.5YR4/4 褐色土
 - 第9層 10YR3/3 暗褐色土 □-ム微量、粘土少量
 - 第10層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 □-ム・炭化物微量、焼土少量
 - 第11層 10YR4/4 褐色土 粘土・□-ム少量、炭化物極微量
 - 第12層 7.5YR3/2 黒褐色土 □-ム・炭化物極微量、焼土微量
 - 第13層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 □-ム・炭化物微量、灰白色(10YR7/1)粘土少量
 - 第14層 5YR4/4 にぶい赤褐色土 粘土・焼土少量
 - 第15層 7.5YR3/2 黒褐色土 □-ム・焼土微量
 - 第16層 7.5YR2/3 極暗褐色土 □-ム微量、焼土少量、炭化物極微量
 - 第17層 7.5YR4/6 褐色土 □-ム微量、焼土少量、炭化物極微量
 - 第18層 10YR4/4 褐色土 □-ム少量、焼土極微量、炭化物微量
 - 第19層 5YR5/8 明赤褐色土 □-ム微量
 - 第20層 5YR4/6 赤褐色土 炭化物極微量
 - 第21層 7.5YR4/4 褐色土 □-ム微量、焼土少量
 - 第22層 5YR3/6 暗赤褐色土 □-ム微量
 - 第23層 10YR4/4 褐色土 炭化物微量、焼土少量
 - 第24層 7.5YR3/3 暗褐色土 焼土少量
 - 第25層 2.5YR4/8 赤褐色土
 - 第26層 5YR3/6 暗赤褐色土 焼土粒極微量
 - 第27層 7.5YR4/4 褐色土 焼土粒極微量
 - 第28層 7.5YR4/4 褐色土 焼土粒・炭化物極微量
 - 第29層 5YR4/4 にぶい赤褐色土 □-ム・焼土粒微量
 - 第30層 7.5YR4/4 褐色土 □-ム少量、焼土微量
 - 第31層 7.5YR5/6 明褐色土
 - 第32層 2.5YR4/6 赤褐色土

- SI - 223 カマド(旧)
- 第1層 10YR3/2 黒褐色土 □-ム少量、炭化物・焼土極微量
 - 第2層 10YR2/1 黒色土 □-ム粒微量
 - 第3層 10YR2/3 黒褐色土 □-ム粒微量、炭化物極微量、焼土微量
 - 第4層 7.5YR4/4 褐色土 □-ム微量、焼土少量
 - 第5層 10YR3/2 黒褐色土 □-ム粒・焼土極微量
 - 第6層 7.5YR5/4 にぶい褐色土 □-ム微量、焼土少量、粘土多量
 - 第7層 7.5YR4/4 褐色土 □-ム多量、焼土極微量
 - 第8層 10YR2/3 暗褐色土 焼土少量
 - 第9層 10YR2/2 黒褐色土 □-ム少量、炭化物極微量、焼土極微量
 - 第10層 7.5YR4/4 褐色土 粘土多量
 - 第11層 10YR3/3 暗褐色土 □-ム少量、炭化物極微量
 - 第12層 7.5YR4/4 褐色土 炭化物極微量
 - 第13層 10YR2/1 黒色土
 - 第14層 7.5YR4/4 褐色土
 - 第15層 10YR3/3 暗褐色土 粘土少量、炭化物・焼土極微量
 - 第16層 10YR2/2 黒褐色土 □-ム微量、粘土少量、炭化物極微量



第432図 SI - 223

ち上がり、途中で15°に角度を変え、煙出部へ向かう。煙出は浅い土坑状に掘り込まれており、煙道部と段をもって境界となっている。煙出奥壁は垂直に近い形で立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居中央部より北側の位置から土坑2基を検出した。SK-1は、72×61×45cmを測る。SK-2は、92×75×24cmを測る。

[堆積土] 掘り方部分を含めて12層に分層した。住居廃絶後の堆積土は、第1～10層で住居東壁側に堆積する第8～10層はロームブロックを含む土層で壁の崩落が一部生じている可能性が考えられる。概ね自然堆積状況を呈する。第2層と第3層の層界面からB-Tm火山灰が層状に検出している。

また、カマド右袖周辺部から扁平の土筒状土製品等が出土しており、カマド周辺部の廃棄状況を併せ廃絶にあたって廃棄行為が伴った可能性が考えられる。

(木村)

SI-224 (第433図)

[位置] グリッドMB・MC-393・394で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 不整形を呈し、376×350×55cmを測る。床面積は12.797m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁52cm、東壁14cm、南壁15cm、西壁51cmを測る。断面形はdで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。東壁寄りの部分に浅い落ち込みが見られる。床面は堅緻である。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[カマド] 住居南壁側から燃焼部火床面ならびに袖の一部を検出した。南壁4(75:25)の位置から検出している。構造は、半地下式を呈したものと考えられるが、周辺部から自然礫が出土しており、構築材として利用された可能性があるが、詳細については不明である。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 8層に分層した。住居中央部に堆積する第6層中には炭化粒が多量に含まれ一部廃棄等がなされた可能性が考えられる。上層の堆積については概ね自然堆積状況を呈する。

(木村)

SI-225 (第434、435図)

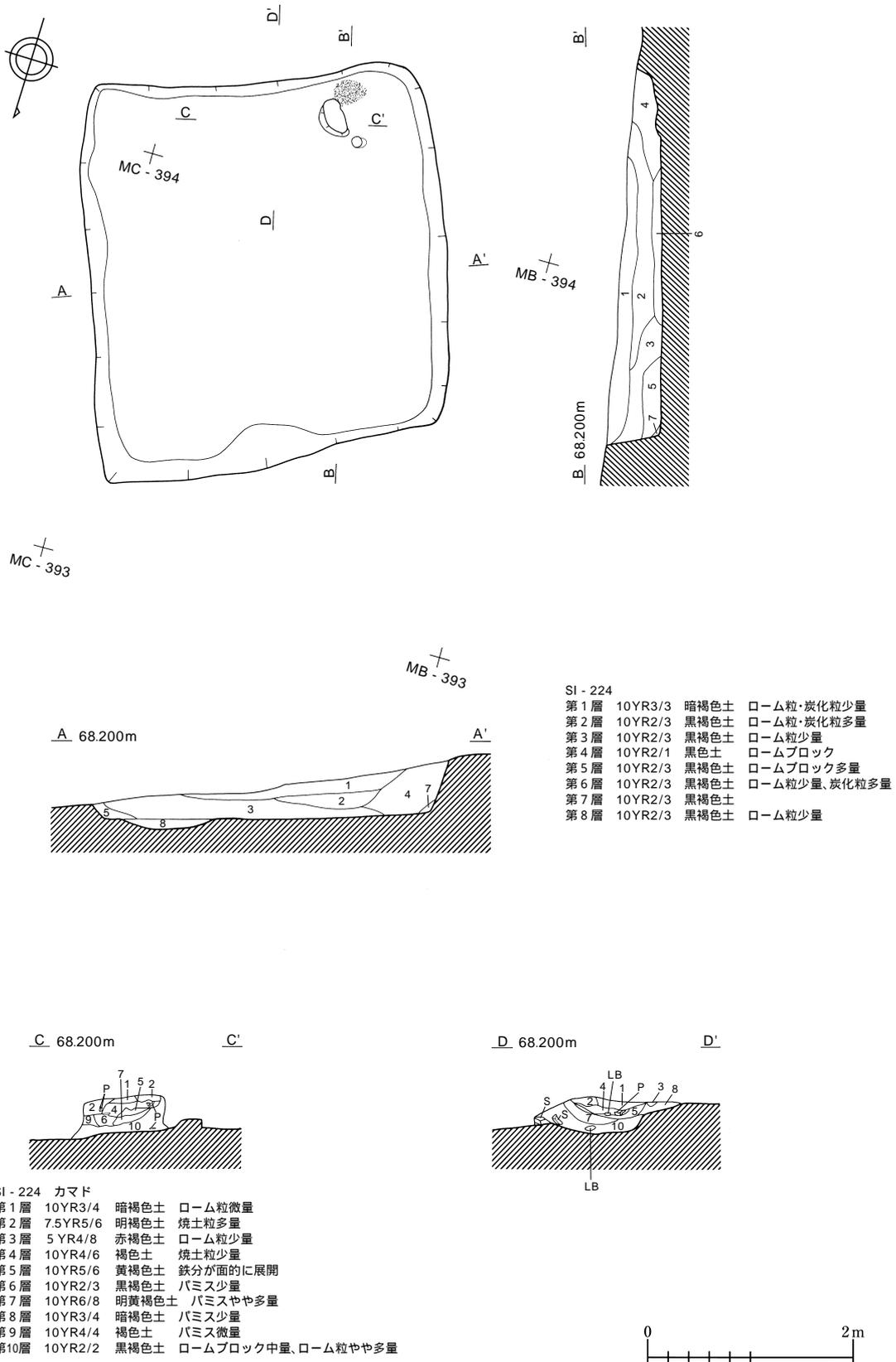
[位置] グリッドMD・ME-389・390、MF-390で検出した。

[重複] なし。

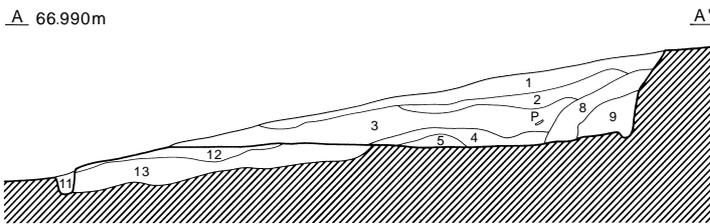
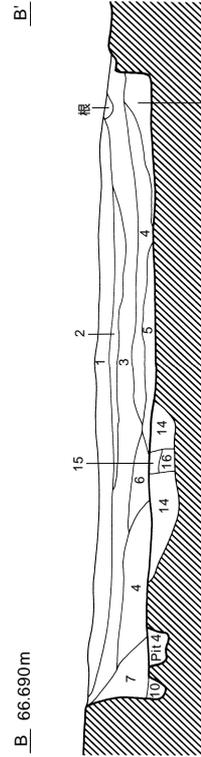
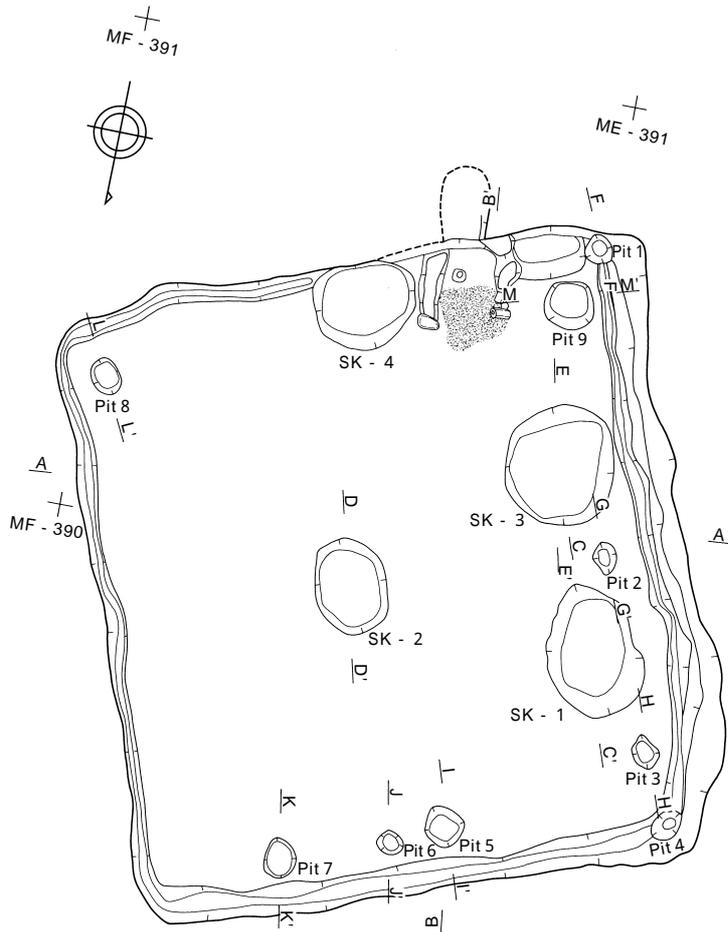
[平面形・規模] 長方形を呈し、510×468×80cmを測る。床面積は24.267m²を測る。

[壁] 東壁側が削平を受けており、情報が欠落しているが、残存部分での壁高は、北壁50cm、南壁35cm、西壁65cmを測る。断面形はcで、壁上部の一部で緩やかな立ち上がりが見られる。壁面は壁上部が黒褐色土層を壁面としておりやや脆弱で、壁下部は大谷火山灰層の地山を壁面としており堅緻である。

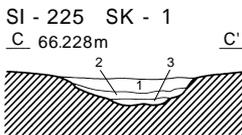
[床] 住居東側部分に掘り方を持ち、黒色土とロームブロックの混合層が充填されており、その上部



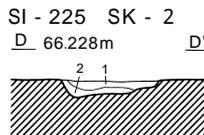
第433図 SI - 224



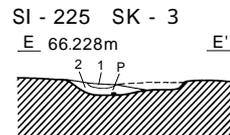
- SI - 225
- 第1層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物粒、焼土粒少量
火山灰 (B-Tm) 混入
 - 第2層 10YR2/3 黒褐色土 炭化粒、焼土粒微量
 - 第3層 10YR2/1 黒色土 炭化粒、焼土粒極微量
 - 第4層 10YR3/3 暗褐色土 黒褐色土混入、炭化粒少量
ローム粒多量
 - 第5層 10YR2/2 黒褐色土
 - 第6層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒少量
 - 第7層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒少量
 - 第8層 10YR3/4 暗褐色土 黒褐色土混入、ローム粒、炭化粒多量
 - 第9層 10YR2/2 黒褐色土
 - 第10層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒多量
 - 第11層 10YR2/1 黒色土 ローム粒微量
 - 第12層 10YR4/4 褐色土 黒色土少量、粘土多量、ローム混入
 - 第13層 10YR2/1 黒色土 ロームブロック少量
 - 第14層 10YR2/1 黒色土 ローム粒極微量
 - 第15層 10YR2/2 黒褐色土 粘土少量
 - 第16層 10YR3/2 黒褐色土 ローム多量



- SI - 225 SK - 1
- C 66.228m C'
- SK - 1
 - 第1層 10YR2/2 黒褐色土 焼土・ローム極微量
炭化物微量、粘土少量
 - 第2層 10YR3/3 暗褐色土 粘土多量
 - 第3層 10YR2/1 黒色土 炭化物・粘土少量
焼土極微量



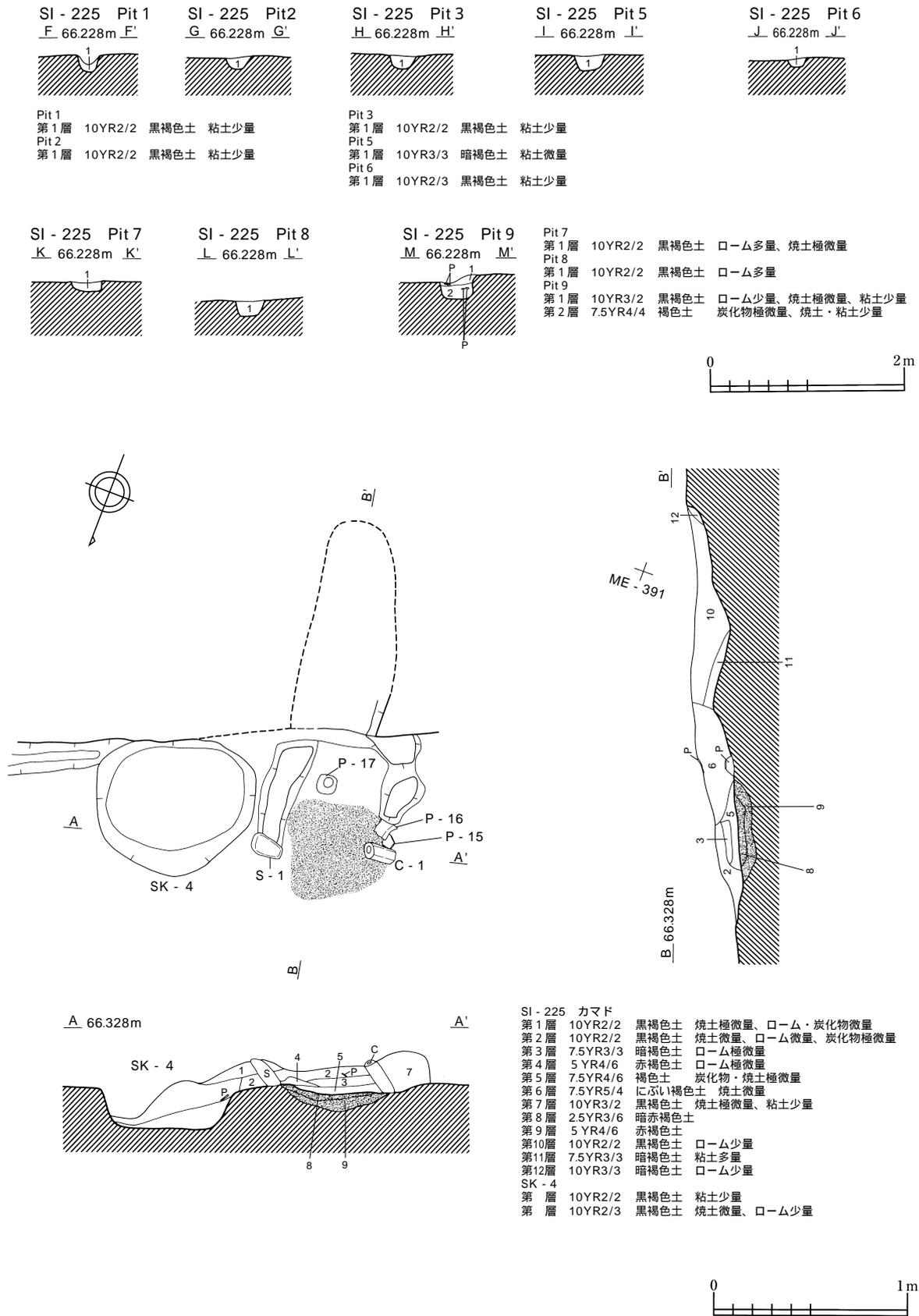
- SI - 225 SK - 2
- D 66.228m D'
- SK - 2
 - 第1層 10YR2/2 黒褐色土 焼土・炭化物極微量
ローム微量
 - 第2層 10YR3/4 暗褐色土 焼土・炭化物極微量
ローム微量、粘土少量



- SI - 225 SK - 3
- E 66.228m E'
- SK - 3
 - 第1層 10YR3/2 黒褐色土 焼土微量、炭化物・
ローム極微量
 - 第2層 7.5YR4/4 褐色土 焼土・ローム少量
炭化物極微量



第434図 SI - 225



第435図 SI - 225

に大谷火山灰層主体の地山を貼り床として貼り付けている。床面はやや起伏があり、やや脆弱である。

[壁 溝] カマド設置部分を除き全周して検出した。深さは平均20cmを測る。

[ピット] 住居内から9基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 25 × 22 × 17cm、Pit 2 = 26 × 20 × 12cm、Pit 3 = 28 × 21 × 13cm、Pit 4 = 28 × 20 × 9cm、Pit 5 = 33 × 31 × 14cm、Pit 6 = 22 × 19 × 9cm、Pit 7 = 32 × 25 × 10cm、Pit 8 = 29 × 22 × 16cm、Pit 9 = 40 × 39 × 23cmを測る。支柱配置等については不明である。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(69:31)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅74cm、煙道長105cmを測る。主軸はN - 166° - Eである。燃烧部袖の構築は、自然礫ならびに転用羽口を芯材とし、黒褐色土を用いて構築している。天井は、暗褐色土と粘土が用いられており第3、4層が相当する。支脚として土師器椀が倒位に1点設置されている。煙道部天井は、部分的に残存しており第12層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、10°の角度で傾斜したのち20°の角度で立ち上がり、煙出部付近で10°の角度で立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居内から土坑4基を検出した。SK - 1は、住居西壁中央部よりやや北寄りの部分から検出した。規模は107 × 78 × 23cmを測る。SK - 2は、住居中央部から検出した。規模は78 × 58 × 13cmを測る。SK - 3は、住居西壁中央部よりやや南寄りの部分から検出した。規模は97 × 87 × 8cmを測る。SK - 4は、住居南壁中央部から検出した。規模は84 × 69 × 21cmを測る。

[堆積土] 掘り方部分を含めて16層に分層した。第15、16層は、ピットとして機能した可能性が考えられるが、平面形で明確なプランを確認できなかった。住居廃絶後の堆積土は第1～11層で、一部崩落を含む自然堆積状況を呈する。第1層中にB - T m火山灰が含まれる。

(木 村)

SI - 226 (第436、437図)

[位置] グリッドME・MF - 391・392で検出した。

[重複] SK - 230と重複している。本遺構がSK - 230の堆積土を切っており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、388 × 356 × 65cmを測る。床面積は13.283m²を測る。

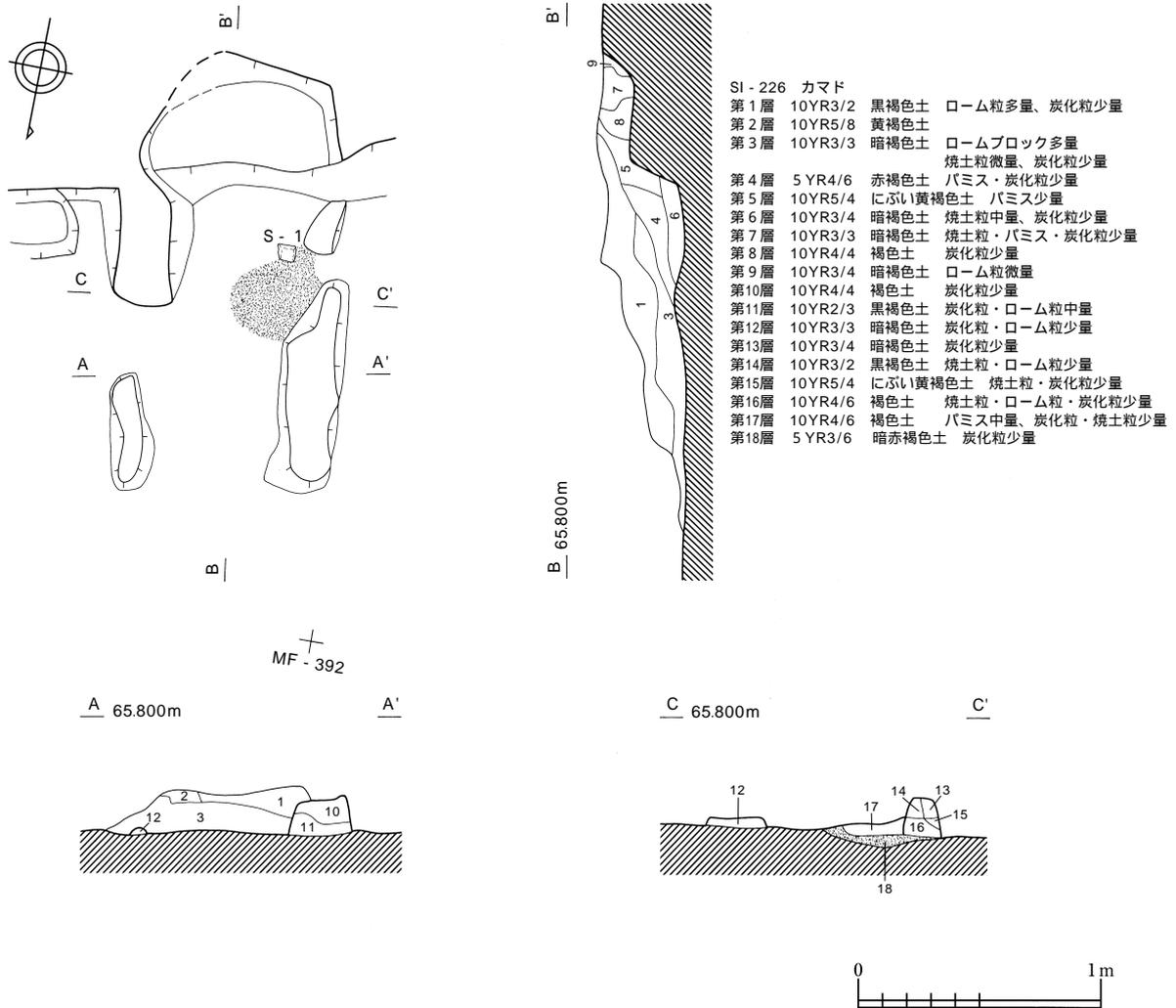
[壁] 壁高は、北壁60cm、東壁10cm、南壁28cm、西壁63cmを測る。断面形はcで、壁上部の一部で緩やかな立ち上がりが見られる。壁面は堅緻である。

[床] ほぼ全面に掘り方を持ち、大谷火山灰層主体の地山土を充填して床面としている。床面はやや起伏があり、堅緻である。

[壁 溝] 断続しながら住居を全周する形で検出した。溝幅が他の住居のものに比べて比較的広く、最大35cmを測る。深さは平均11cmを測る。

[ピット] なし。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(68:32)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅100cm、煙道長45cmを測る。主軸はN - 174° - Eである。焚口前庭部部分に袖状の構築物が残存しており、廃絶時点の破壊によって生じたものか、構造上そのようなものであったのかは不明である。燃烧部は、粘土による構築で、天井は第3層が相当する。煙道部天井は、第5、8層が相



第437図 SI - 226

当し、燃烧部と同様崩落した堆積状況を呈する。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で4°に角度を変え、傾斜しながら煙出部へ向かう。煙出奥壁は、外傾しながら立ち上がる。

[その他の付属施設] 本遺構外からS B - 19として取り扱った柱穴群を検出した。本遺構内から柱穴を確認しておらず、S B - 19が外柱穴として機能した可能性が一部ではあるが考えられる。

[堆積土] 掘り方部分を含めて11層に分層した。堆積土中にロームブロックを多量に含む土層が床面直上に堆積していることから埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。第1層中からB - T m火山灰を粒状に検出した。

(木村)

S I - 227 (第438、439図)

[位置] グリッドM I・M J - 387・388で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 台形を呈し、416×406×128cmを測る。床面積は16.972m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁28cm、東壁32cm、南壁43cm、西壁100cmを測る。断面形はbで、壁上部で緩やかな立ち上がりが見られる。壁面は、東壁が黒褐色土層ならびに風倒木層を壁面としておりやや脆弱で、それ以外の部分についても壁上部については黒褐色土層を壁面としておりやや脆弱である。壁下部については、大谷火山灰層の地山を壁面としており堅緻である。

[床] 住居東側～南側にかけて掘り方を持ち、大谷火山灰層主体の地山を充填し床面としている。床面はほぼ平坦で、堅緻である。住居北壁西隅部分から赤化面を54×27cmの規模で検出した。また、住居中央部から炭化物・炭化粒を77×63cmの範囲で検出した。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(73:27)の位置から検出している。構造は、地下式で、燃烧部袖は残存しておらず煙道長92cmを測る。主軸はN-153°-Eである。燃烧部は、ほとんど破壊されているが、残滓の堆積は第4層が相当する。煙道部の構築は、大谷火山灰層の地山を掘り込んで構築されており、住居床面から2°の角度で傾斜し、住居壁際部分から4°の角度で緩やかに立ち上がりながらピット状に掘り込まれた煙出部と合流する。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて16層に分層した。住居廃絶後の堆積土は第1～14層であり、住居床面中央部に堆積する第8層については、ロームブロックが多量に含まれ、炭化物、焼土粒等も含まれ、床面から検出した炭化物・炭化粒の集中範囲については、廃棄による形成が考えられる。よって、本遺構の成層について一部廃棄を伴う人為的堆積状況を呈しており、上層の堆積については概ね自然堆積状況を呈する。第1層中からB-Tm火山灰を検出している。

(木村)

S I - 228 (第440図)

[位置] グリッドMM・MN - 385・386、MN - 387で検出した。

[重複] なし。

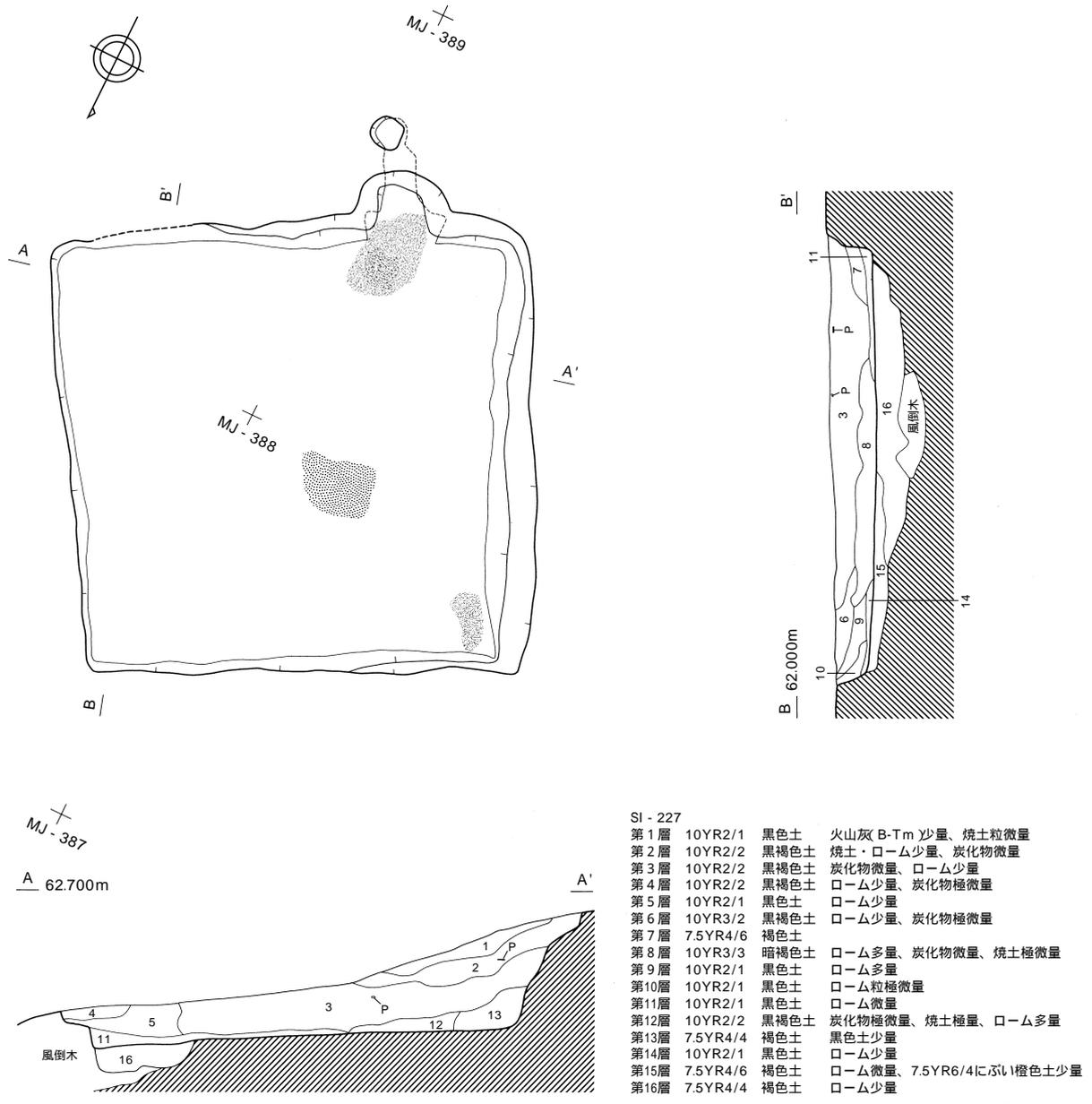
[平面形・規模] 長方形を呈し、434×292×57cmを測る。床面積は12.335m²を測る。

[壁] 削平のため、北東壁はほとんど残存しておらず、残存部分での壁高は、北東壁15cm、南東壁23cm、南西壁45cm、北西壁32cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 住居全面に浅い凹凸の掘り方を持ち、ロームブロックと黒褐色土の混合土ならびに大谷火山灰層主体の地山土が充填され床面としている。床面はやや起伏があり、やや脆弱である。

[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から3基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 36×31×17cm、Pit 2 = 15×12×7cm、Pit 3 = 31×27×15cmを測る。いずれのピットも南壁側に集中しており、柱穴としての機能を



第438図 SI - 227

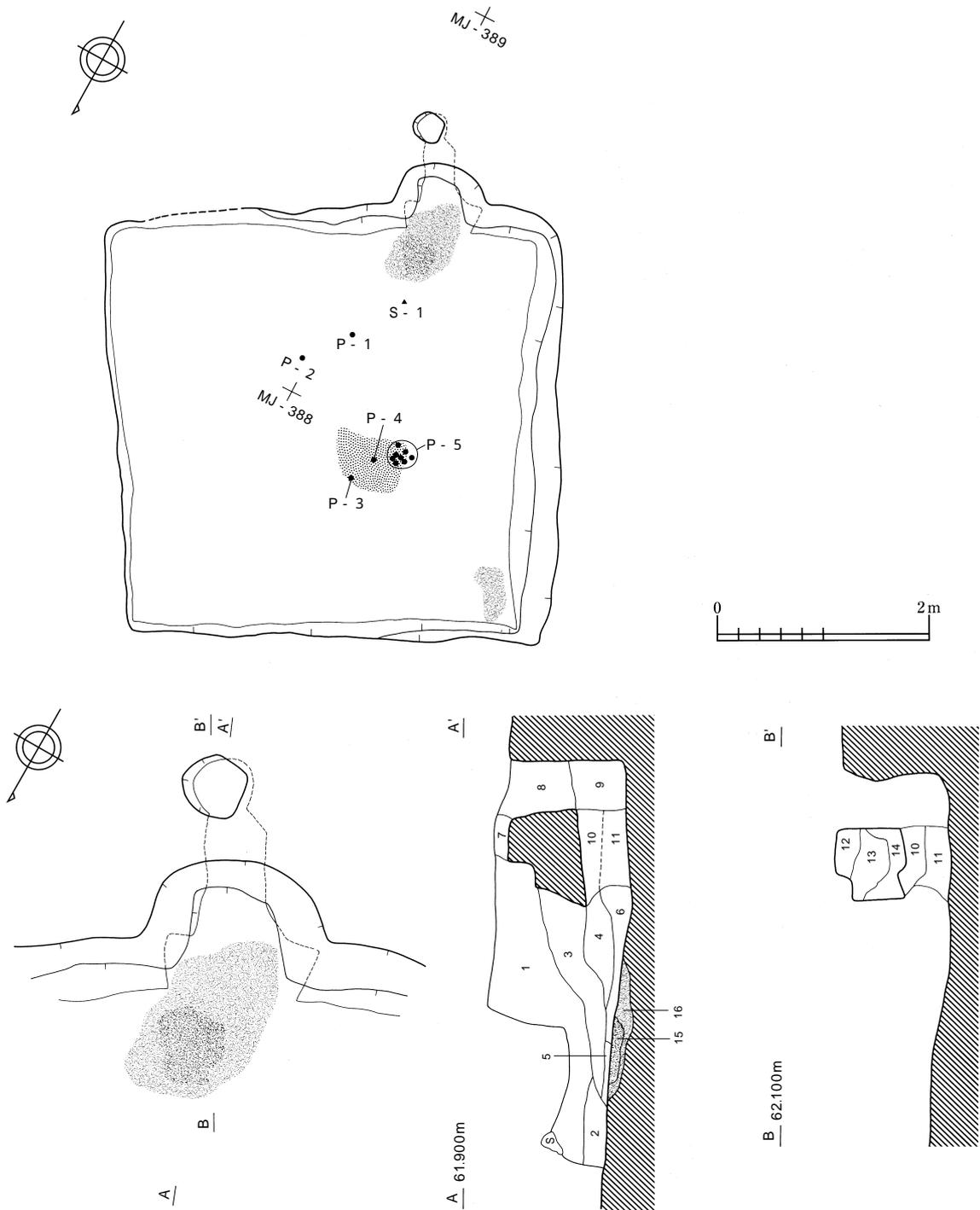
果たすものはないと考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁4(77:23)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅76cm、煙道長68cmを測る。主軸はN-142°-Eである。燃烧部袖は、自然礫を芯材とし、粘土を用いて構築している。燃烧部ならびに煙道部天井は第5層が相当し、部分的に崩落した堆積状況を呈する。支脚として土師器甕の底部2点を倒位に重ね設置している。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で16°に角度を変え、起伏を持ちながら立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

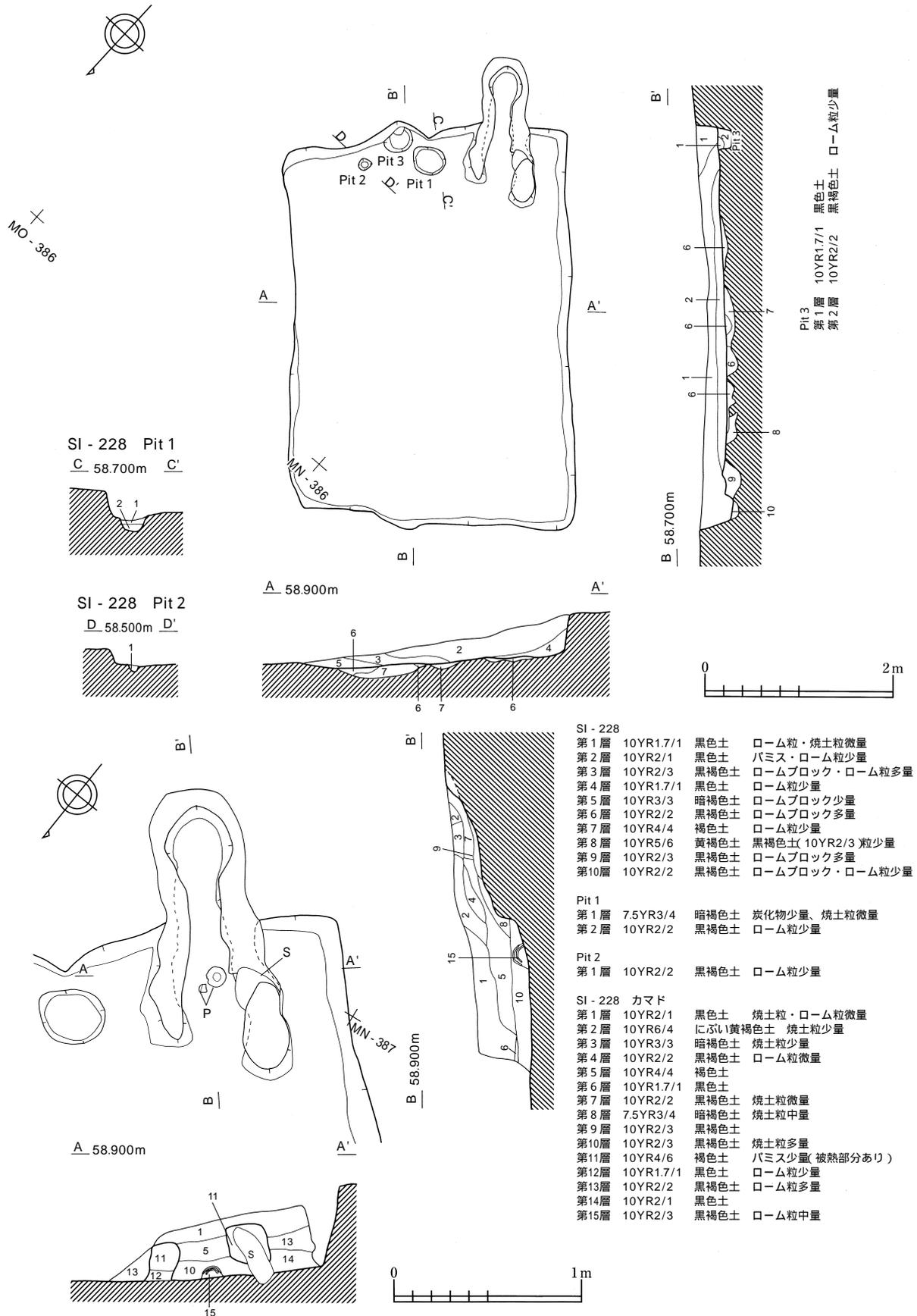
[堆積土] 掘り方部分を含めて10層に分層した。住居廃絶後の堆積土は第1~5層で、全般的にロームブロック、パミスブロックを含む堆積土である。埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)



層	色	特徴
SI - 227 カマド		
第1層	10YR2/1 黒色土	炭化物微量、焼土極微量、ローム粒少量
第2層	10YR2/1 黒色土	ローム少量
第3層	10YR1.7/1 黒色土	ローム粒少量、焼土ブロック微量
第4層	7.5YR5/6 明褐色土	焼土多量
第5層	10YR2/2 黒褐色土	炭化物微量、ローム・焼土少量
第6層	7.5YR4/4 褐色土	焼土微量、炭化物極微量
第7層	10YR3/2 黒褐色土	ローム微量、黒色土少量
第8層	10YR2/1 黒色土	ローム粒極微量
第9層	7.5YR3/3 暗褐色土	ローム微量、焼土少量
第10層	10YR1.7/1 黒色土	ローム粒極微量
第11層	10YR3/3 暗褐色土	焼土微量、ローム粒少量
第12層	10YR4/3 にぶい黄褐色土	黒色土少量
第13層	7.5YR5/6 明褐色土	
第14層	5YR4/6 赤褐色土	
第15層	2.5YR4/6 赤褐色土	
第16層	2.5YR4/8 赤褐色土	

第439図 SI - 227



第440図 SI - 228

S I - 229 (第441図)

[位置] グリッドMN - 386・387で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 不整形を呈し、182×148×17cmを測る。床面積は2.668㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁10cm、東壁15cm、南壁11cm、西壁3cmを測る。断面形はdで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面はやや脆弱である。

[床] 月見野火山灰層の地山を床面としており、やや傾斜がある。床面はやや脆弱である。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[カマド] 住居東壁側から焼土層を確認した。東壁3(64:36)の位置から検出している。床面下部まで掘り込みが行われており、上部構造が破壊された検出状況であった。周辺から自然礫等の出土があったことからカマドとして機能した可能性が高いものと考えられる。構造等の詳細については不明である。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 5層に分層した。床直の堆積状況が不均一で、住居全体に堆積している第1層についても埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 230 (第442、443図)

[位置] グリッドMA・MB - 401で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、358×352×48cmを測る。床面積は12.189㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁35cm、東壁28cm、南壁48cm、西壁40cmを測る。断面形はcで、壁上部の一部で緩やかな立ち上がりが見られる。壁面はやや脆弱である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。

[壁溝] 住居北壁ならびに西壁から検出した。深さは平均11cmを測る。

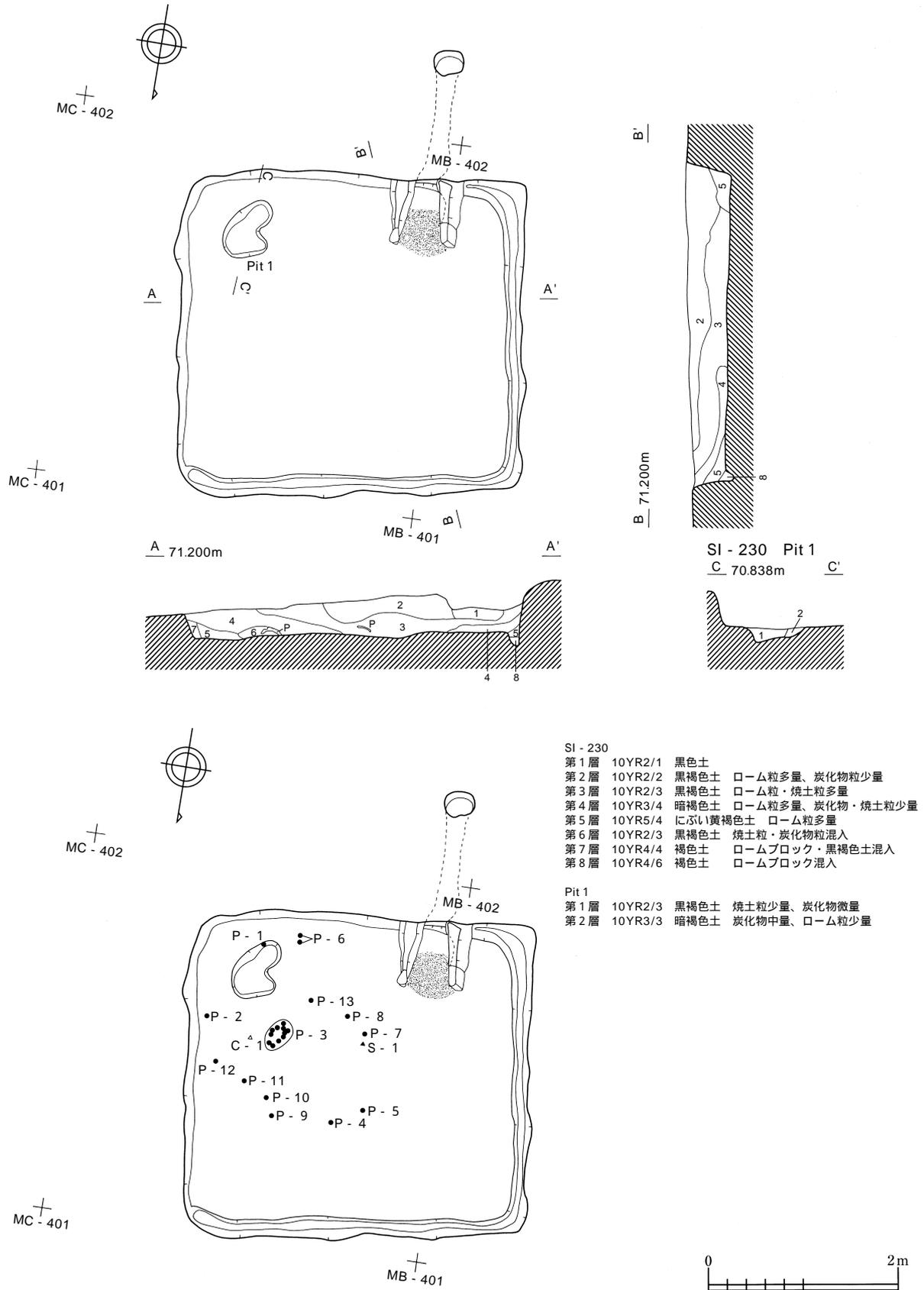
[ピット] 住居内から1基検出した。規模は68×48×15cmを測る。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(70:30)の位置から検出している。構造は、地下式で、袖部幅71cm、煙道長140cmを測る。主軸はN - 180° - Eである。燃烧部袖は、凝灰岩質の角礫を芯材とし、粘土ならびに黒褐色土を用いて構築している。芯材の礫については、焚口前庭部周辺にも散布した状況で出土したことから廃絶に際して破壊が行われた可能性が考えられる。燃烧部天井については破壊されており、土層堆積土中に構築材は残滓としてブロック化した状況で検出した。支脚として土師器甕が倒位に設置されている。煙道部は、大谷火山灰層の地山を掘り込んで構築されており、住居床面よりやや高い位置から掘り込みが行われている。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で5°の角度で傾斜し、全煙道長の1/3の位置でほぼ平坦になり煙出部へ向かう。

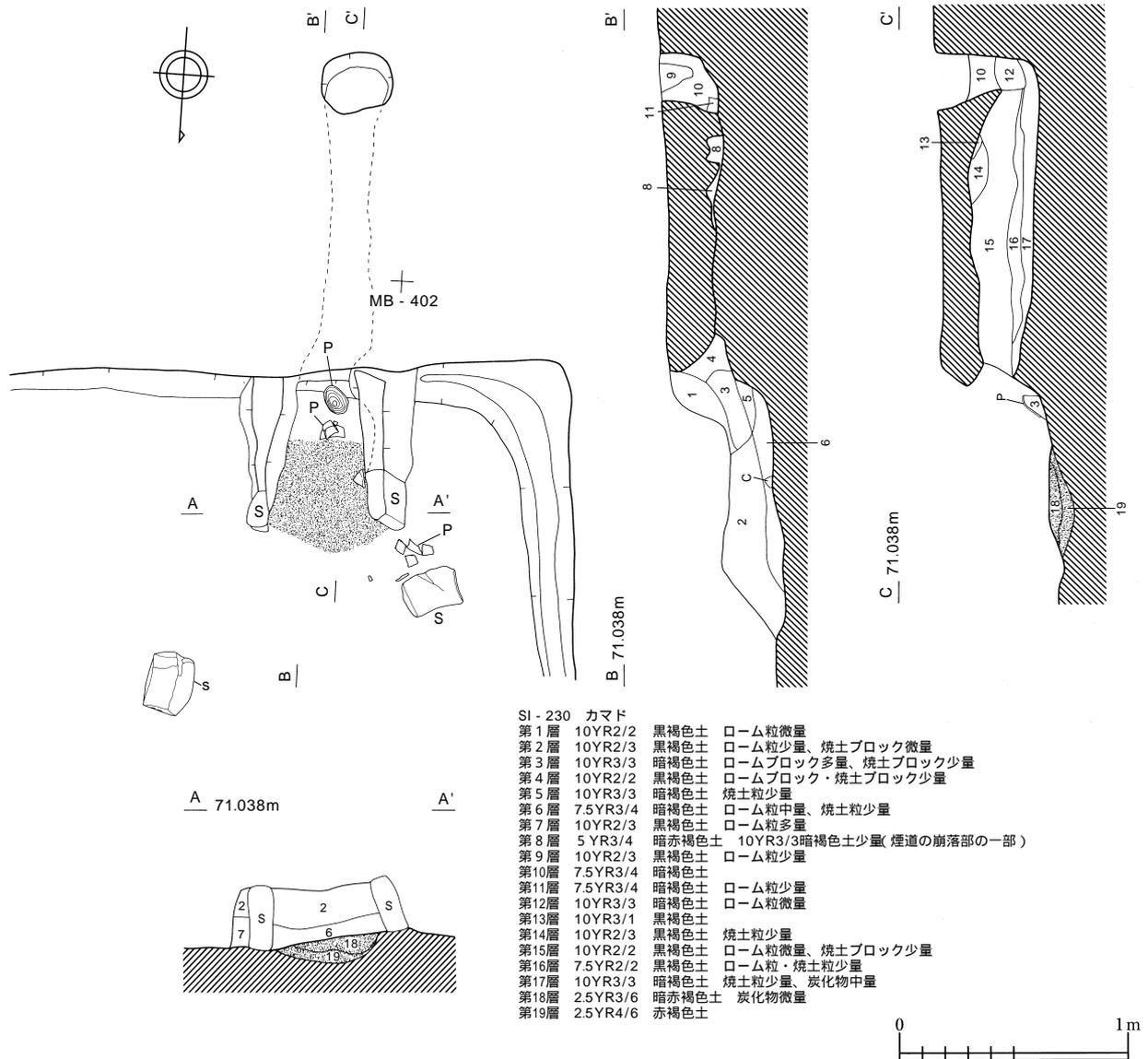
[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 8層に分層した。壁際で崩落、流入土が観察され、概ね自然堆積状況を呈する。

(木村)



第442図 SI - 230

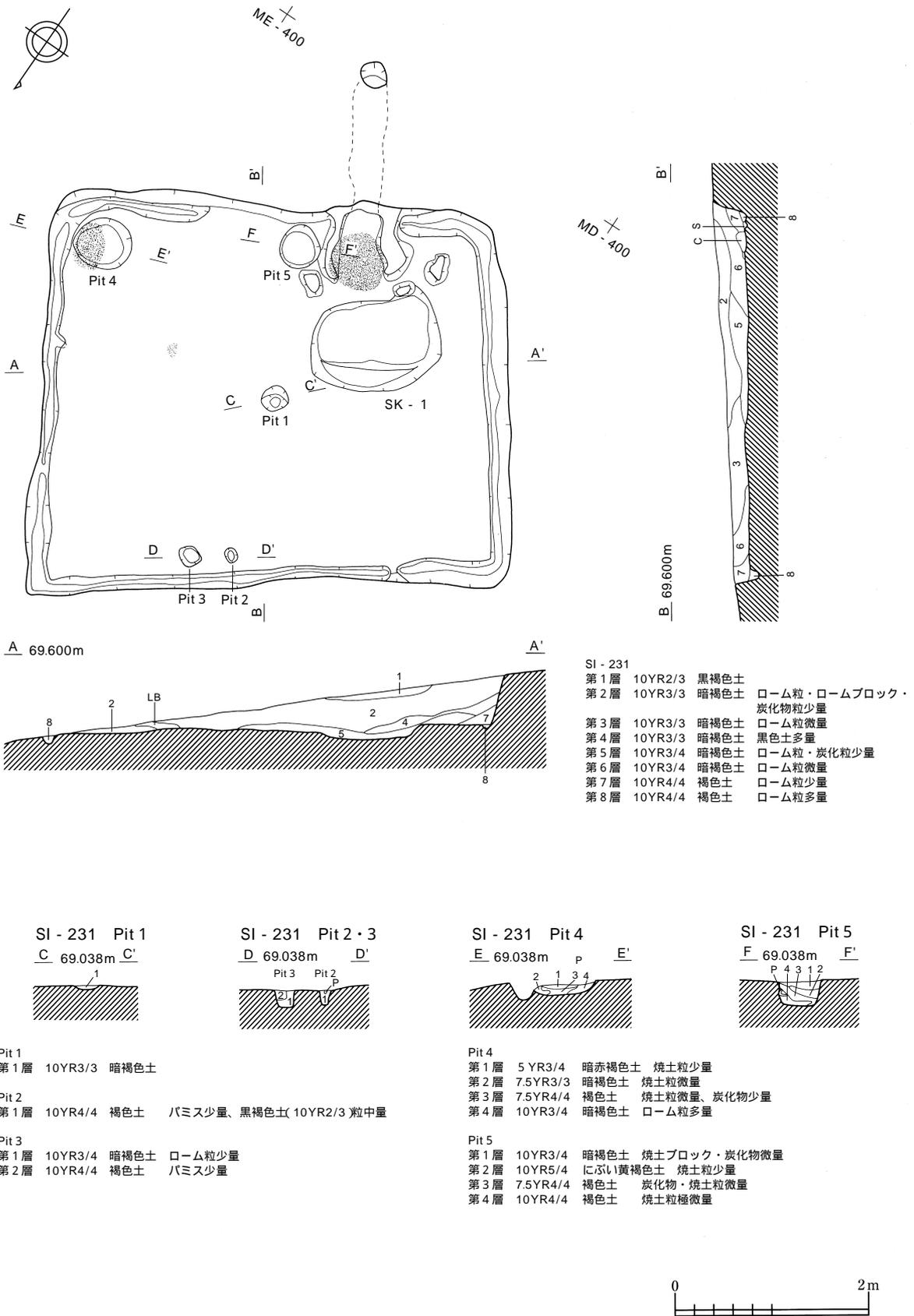


第443図 SI - 230

い。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(70:30)の位置から検出している。構造は、地下式で、袖部幅94cm、煙道長146cmを測る。主軸はN - 151° - Eである。燃烧部袖は、粘土を用いて構築されており、天井については破壊されており、構築材については焚口前庭部周辺ならびに堆積土中にブロック化した状態で検出した。支脚として土師器碗2点を倒位に重ね設置している。煙道部は、大谷火山灰層の地山を掘り込んで構築されている。煙道は、住居壁際より手前の部分から13°の角度で緩やかに傾斜し、全煙道長2/3の位置で5°の角度で起伏を持ちながら煙出部へ立ち上がる。煙出奥壁はやや丸みを帯びた立ち上がりを持ち、開口部付近では緩やかに角度を変え外傾しながら立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居中央部より南西寄りの部分から土坑1基を検出した。規模は135×95×15cmを測る。堆積状況から住居廃絶時点で開口していたものと考えられる。



第444図 SI - 231

[堆積土] 8層に分層した。一部ロームブロック等の混入が見られるが、概ね自然堆積状況を呈する。
(木村)

S I - 232 (第446、447図)

[位置] グリッドM I・MK - 395・396、M J - 394・395・396で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、506×490×95cmを測る。床面積は(24.159) m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁18cm、東壁5cm、南壁26cm、西壁88cmを測る。断面形は(a)で垂直に近い形で立ち上がる。壁面は、住居東壁側が黒褐色土層を壁面としておりやや脆弱で、それ以外の部分については堅緻である。

[床] 住居北壁～東壁側にかけて掘り方を持ち、黒褐色土が充填され、その上に大谷火山灰層主体の地山を貼り床として貼り付けて床面としている。他の部分については、大谷火山灰層の地山を床面としている。床面は起伏があり、掘り方がある部分は脆弱で、地山部分は堅緻である。

[壁溝] 住居南北壁ならびに西壁から検出した。深さは平均10cmを測る。

[ピット] 住居内から9基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = (38) × 37 × 11cm、Pit 2 = 47 × 40 × 7cm、Pit 3 = 30 × 22 × 8cm、Pit 4 = 33 × 23 × 10cm、Pit 5 = 48 × 45 × 55cm、Pit 6 = 42 × 30 × 53cm、Pit 7 = 93 × 74 × 13cm、Pit 8 = 33 × 26 × 20cm、Pit 9 = 39 × 26 × 26cm、Pit 10 = 39 × 10 × 42cmを測る。主柱穴はPit 6、9、10である。それ以外にPit 5が柱穴として機能した可能性がある。

[カマド] 住居南壁側から2基検出した。いずれも南壁3の位置から検出している。新旧関係については、燃烧部の残存状況から(63:37) > (73:27)の関係である。カマド新の構造は、半地下式で、袖部幅85cm、煙道長115cmを測る。主軸はN - 145° - Eである。燃烧部袖は、自然礫を芯材とし、粘土ならびに暗褐色土を用いて構築している。燃烧部天井は破壊されており、多量の土器、自然礫が廃棄された検出状況であり、詳細は不明であるが自然礫を芯材とした可能性が考えられる。煙道部天井は、第5層が相当し、部分的に残存した堆積状況を呈する。煙道は、住居壁際から32°の角度で立ち上がり全煙道長1/3の位置で5°に角度を変え、起伏を持ちながら煙出部へ立ち上がる。

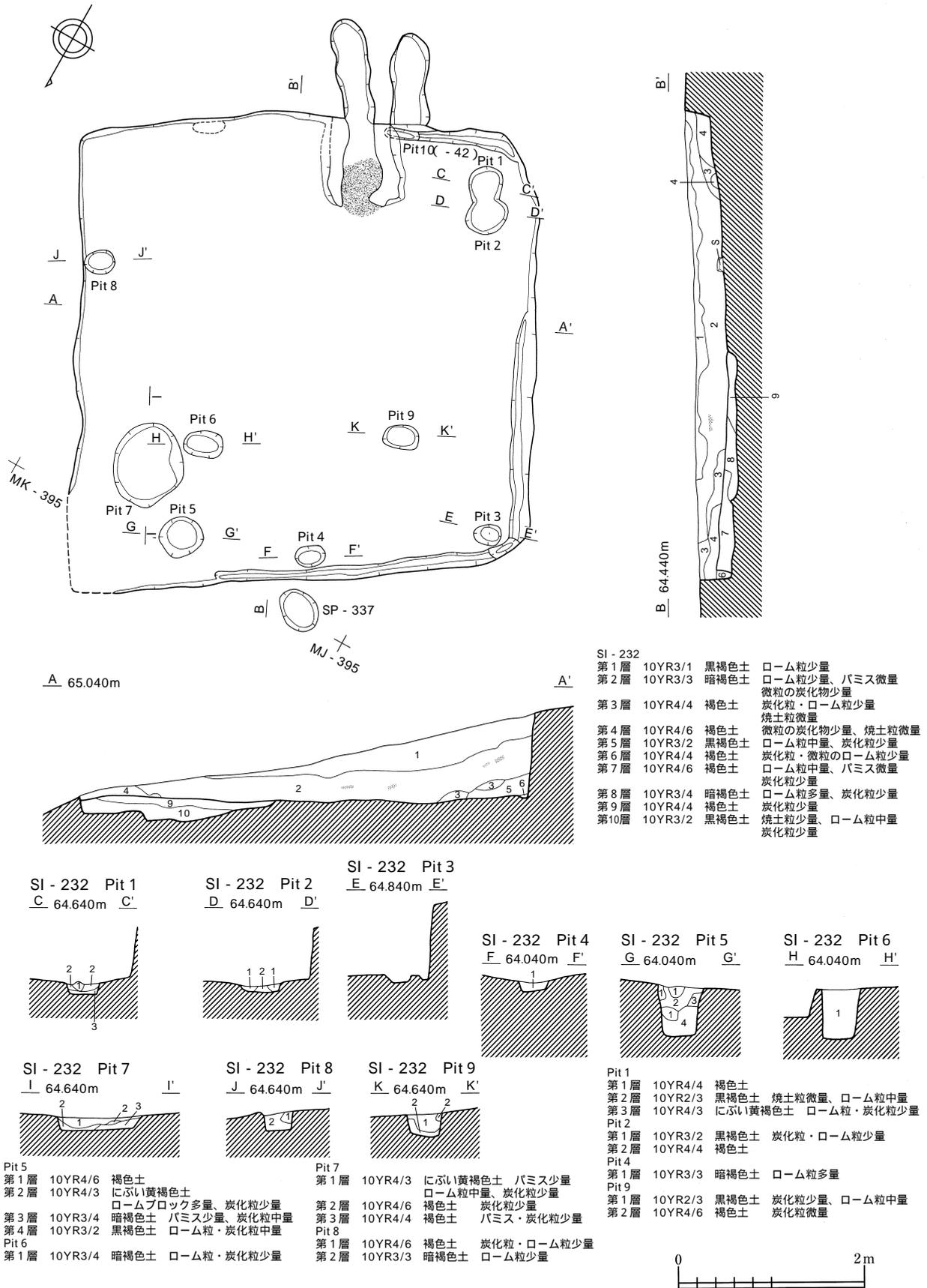
また、カマド右袖脇から土師器甕2点が潰れた状態で出土している。

カマド旧の構造は、半地下式で、燃烧部は残存しておらず、煙道長98cmを測る。主軸はN - 155° - Eである。煙道部は、埋め戻し等による堆積状況で構築土がブロック化した状態で堆積していた。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、途中で15°に角度を変え、起伏を持ちながら立ち上がる。

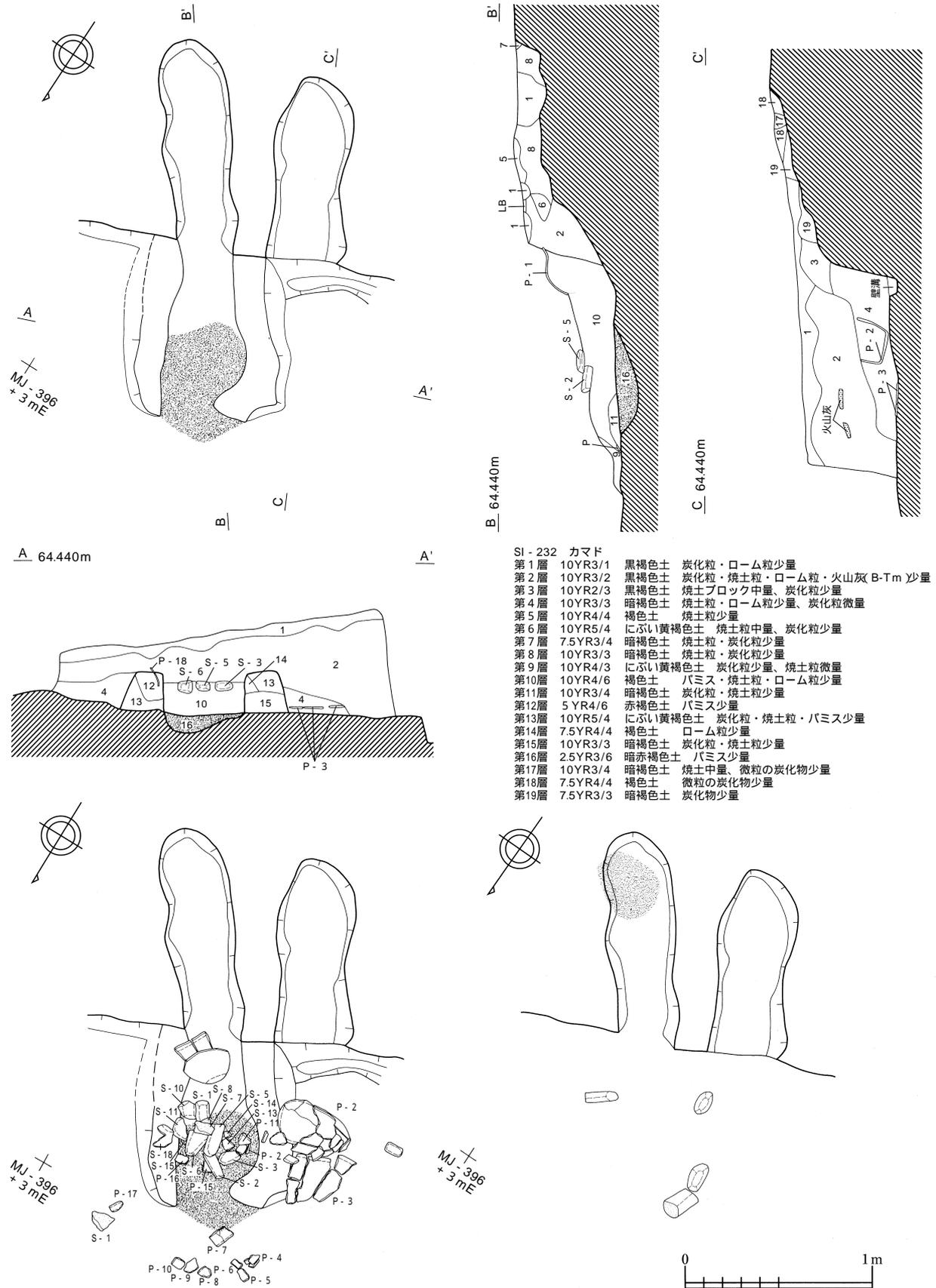
[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて10層に分層した。住居壁際に堆積する第3～5層については一部廃棄が伴う堆積層である。上層の第1、2層は概ね自然堆積状況を呈する。第2層中層からB - T m火山灰を層状に検出した。

(木村)



第446図 SI - 232



第447図 SI - 232

S I - 233 (第448図)

[位置] グリッドMM - 390・391で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 不整形を呈し、234×218×50cmを測る。床面積は4.864㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁13cm、東壁5cm、南壁15cm、西壁50cmを測る。断面形は(d)で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] ほぼ全面に掘り方を持ち、暗褐色土ならびに黒褐色土が充填されている。また、貼り床として大谷火山灰層主体の地山を貼り付けている部分もある。床面は起伏があり、やや脆弱である。

[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から2基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 104×59×8cm、Pit 2 = 68×48×17cmを測る。いずれのピットも柱穴としての機能は果たさないものと考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(65:35)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅68cm、煙道長54cmを測る。主軸はN - 154° - Eである。燃烧部袖は、粘土による構築で、一部崩落が生じており火床面上に第10層が堆積している。燃烧部ならびに煙道部天井は第5層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。また、支脚として自然礫が1点設置されている。煙道は、住居壁際から25°の角度で立ち上がり、煙出部付近でほぼ平坦になる。煙出奥壁は、垂直に近い形で立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて14層に分層した。ロームブロックがほぼ全面に多量に含まれ、急激な埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 234 (第449、450図)

[位置] グリッドMN・MO - 388~390で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、468×428×65cmを測る。床面積は19.625㎡を測る。

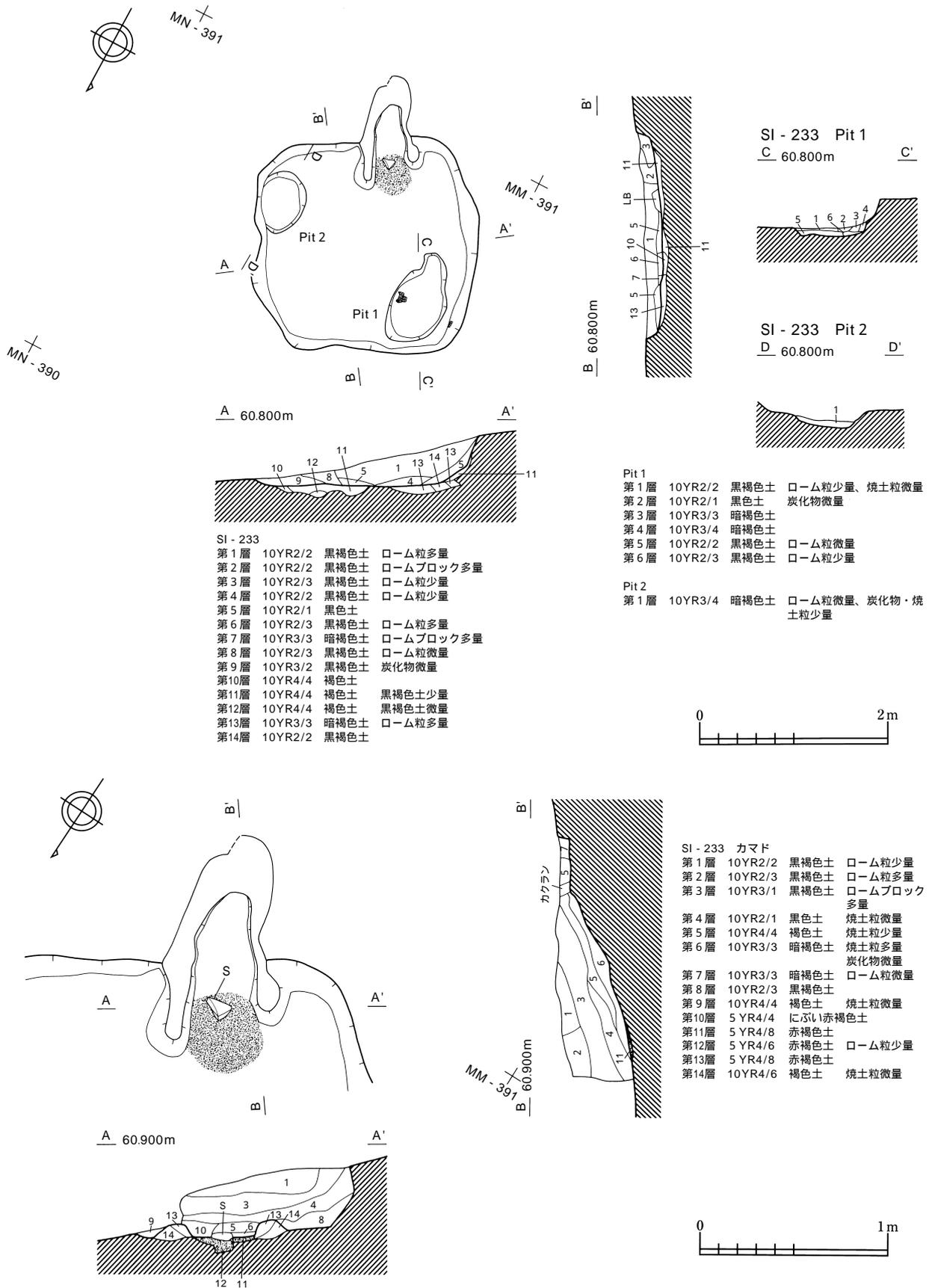
[壁] 壁高は、北壁9cm、東壁15cm、南壁35cm、西壁12cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面はやや脆弱である。

[床] 住居各壁際寄りの部分に掘り方を持ち、暗褐色土ならびに黒褐色土が充填され床面としている。床面は起伏があり、傾斜しており脆弱である。住居南西隅から鉄鍬先が2点重なって出土した。

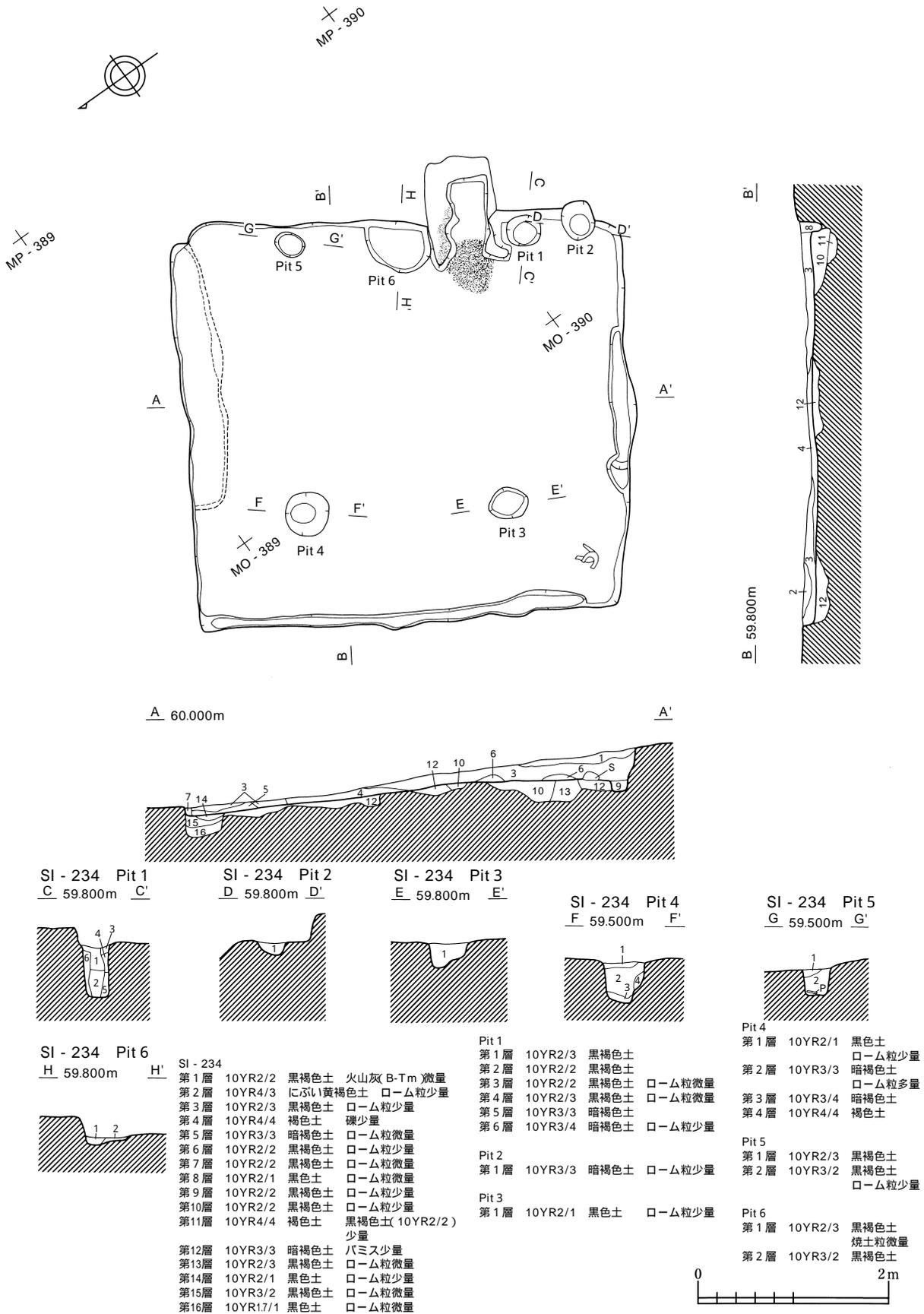
[壁溝] 住居南壁ならびに西壁から検出した。また、北壁側から幅の広い溝状の掘り方を検出した。深さは平均10cmを測る。

[ピット] 住居内から6基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 36×32×58cm、Pit 2 = 41×35×12cm、Pit 3 = 44×33×26cm、Pit 4 = 45×45×41cm、Pit 5 = 32×24×28cm、Pit 6 = 70×48×10cmを測る。主柱穴として機能したと考えられるピットは、Pit 1、3、4、5である。

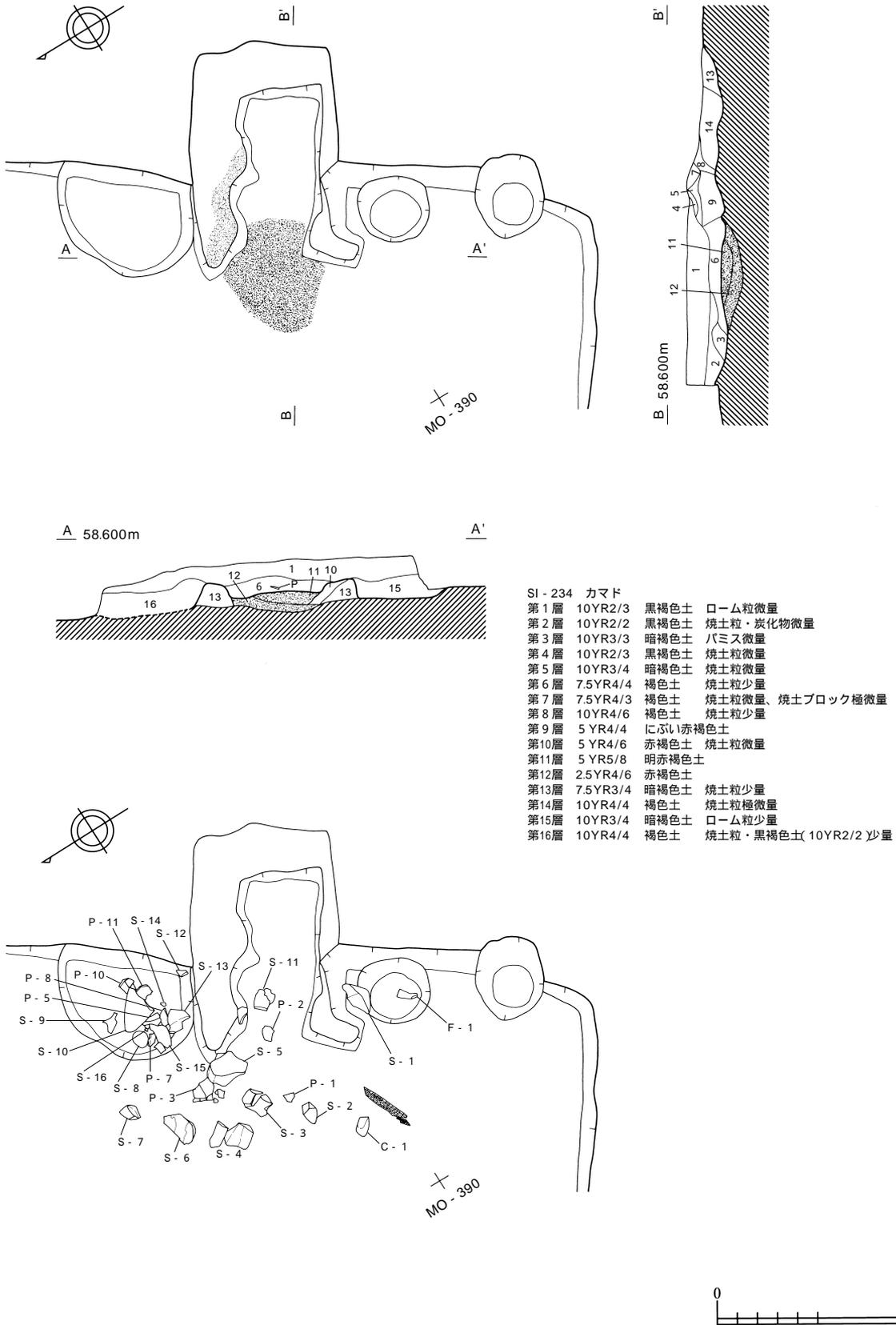
[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁3(66:34)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅85cm、煙道長62cmを測る。主軸はN - 120° - Eである。燃烧部袖は、粘土を用いて構築されており、一部破壊されている。焚口前庭部から自然礫が多量に出土したことから芯材として



第448図 SI - 233



第449図 SI - 234



第450図 SI - 234

用いられた可能性が考えられる。燃烧部天井は第6層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道部天井は第5、7、8層が相当し、粘土と暗褐色土により構築されている。煙道は、住居壁際から2°の角度で起伏を持ちながら立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて16層に分層した。礫を含む土層が見られ、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 235 (第451図)

[位置] グリッドLZ・MA - 405・406で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、252×218×45cmを測る。床面積は5.231m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁37cm、東壁13cm、南壁22cm、西壁35cmを測る。断面形はdで、緩やかに外傾しながら立ちあがる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面は堅緻である。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(69:31)の位置から検出している。構造は、地下式で、袖部幅72cm、煙道長132cmを測る。主軸はN - 137° - Eである。燃烧部の構築は粘土によるもので、天井については土層堆積上に残存していない。支脚として土師器小甕の底部が倒置されている。煙道部は、大谷火山灰層の地山を掘り込んで構築されている。煙道は、住居壁際から18°の角度で傾斜し、ピット状に掘り込まれた煙出部に接する。煙出奥壁は垂直に近い形で立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 6層に分層した。ロームブロックが多量に含まれる堆積層で、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 236 (第452、453図)

[位置] グリッドMF・MG - 403・404で検出した。

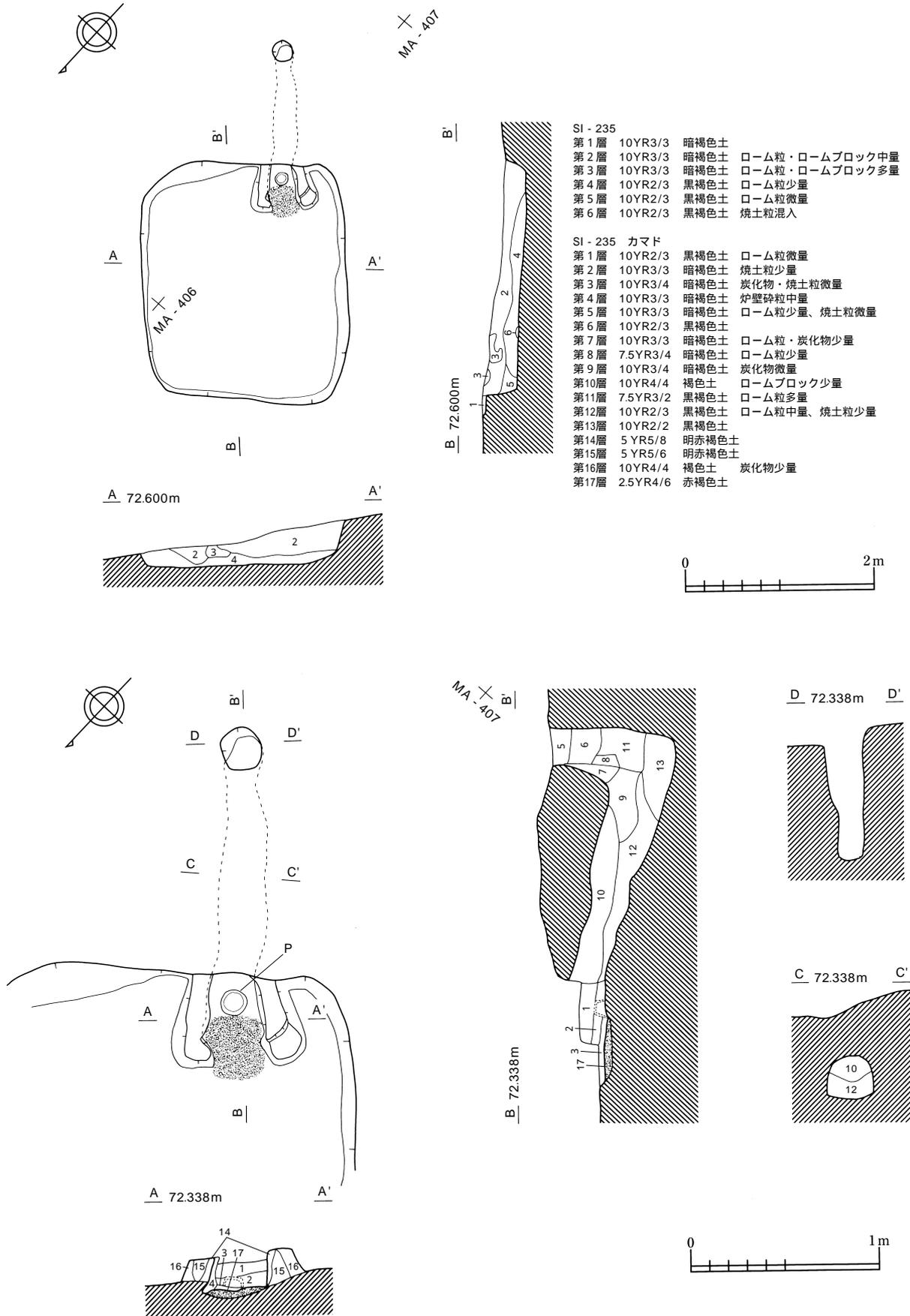
[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、496×(478)×54cmを測る。床面積は24.266m²を測る。

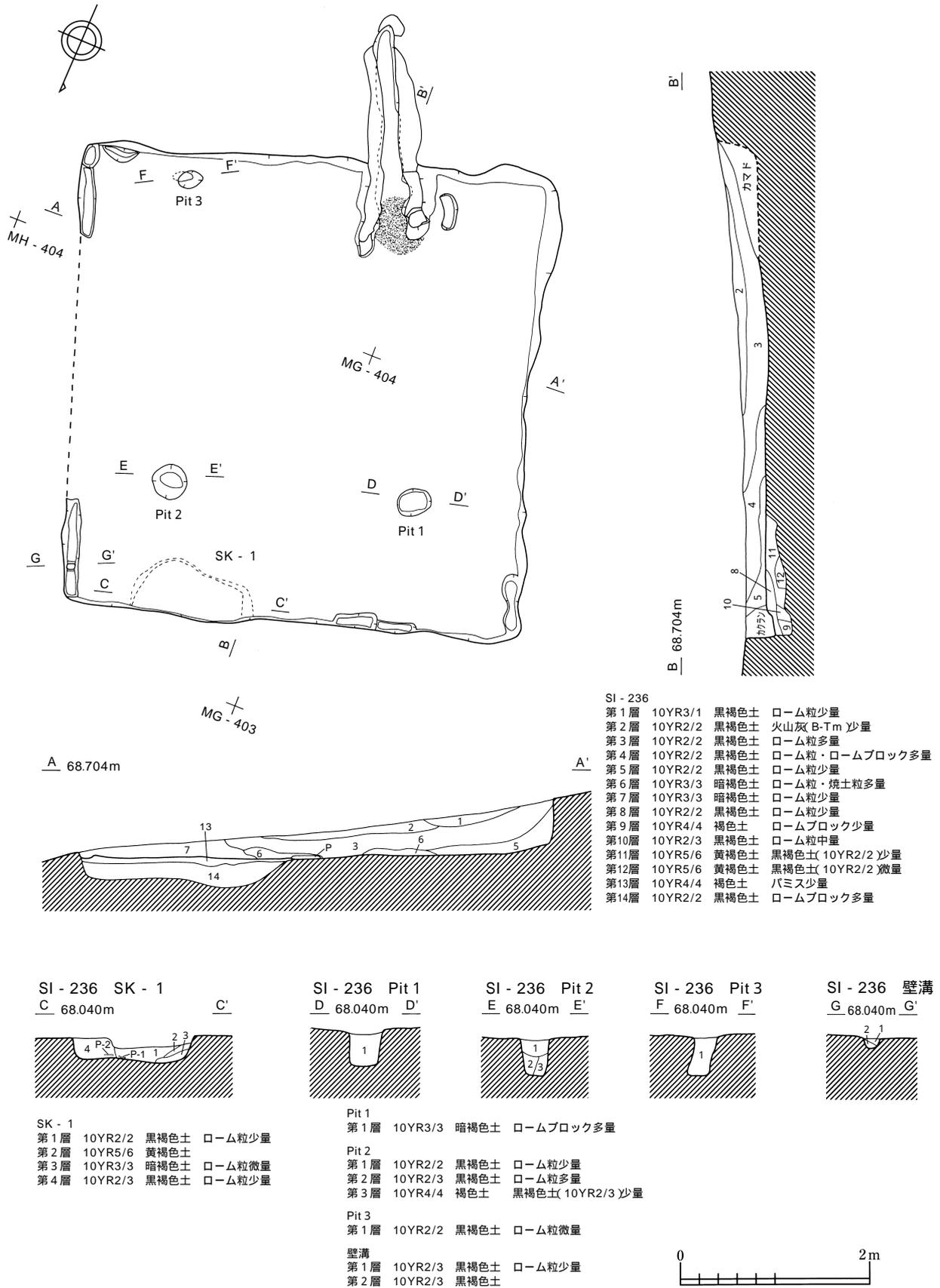
[壁] 壁高は、北壁32cm、東壁6cm、南壁40cm、西壁50cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は東壁側ならびに南北壁の壁上部は黒褐色土層を壁面としており、脆弱である。

[床] 住居東側部分は掘り方を持ち、ロームブロックを多量に含む黒褐色土が充填されている。その上に大谷火山灰層の地山を貼り床として貼り付けている。床面はほぼ平坦で、貼り床部分はやや起伏がある。

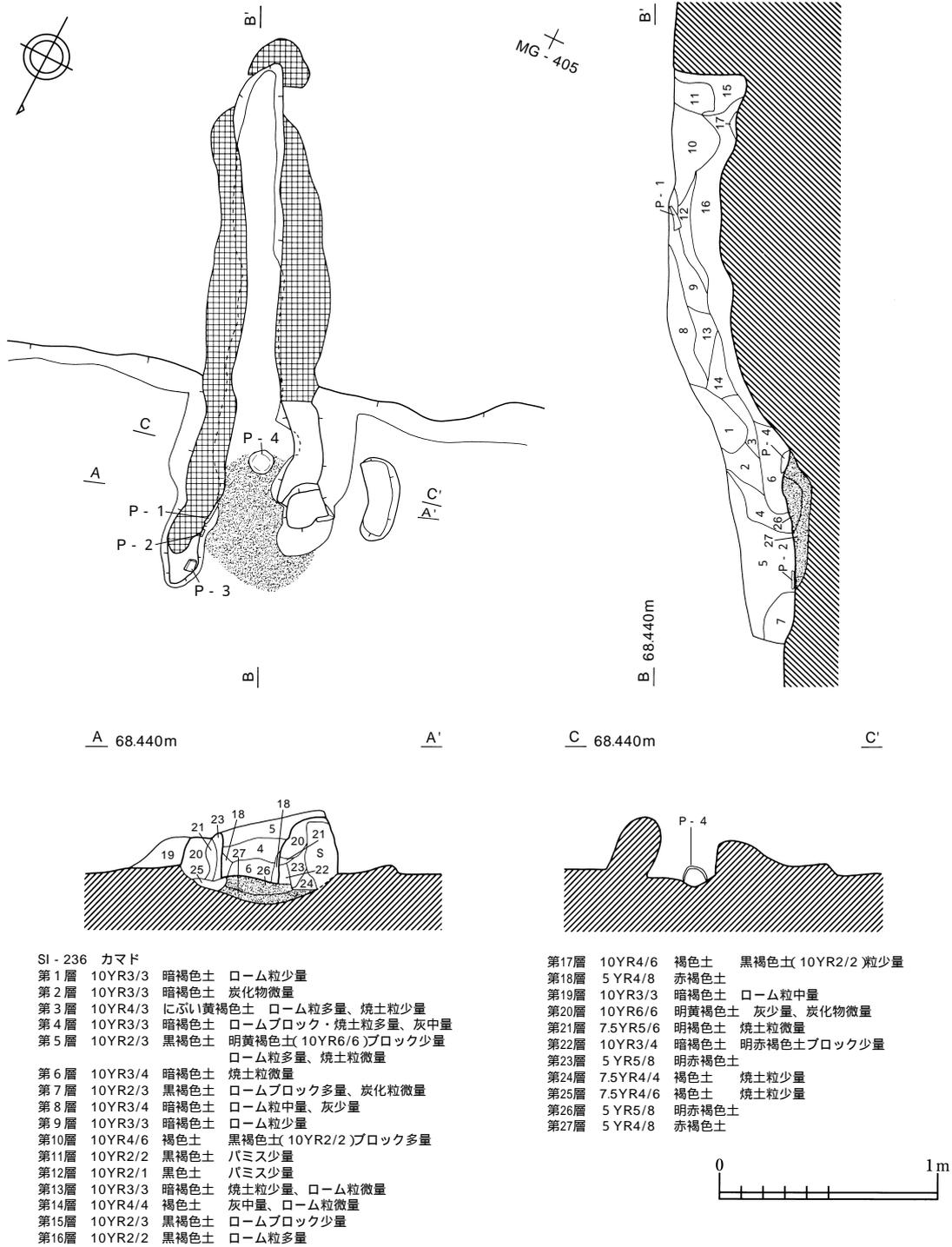
[壁溝] 住居東西壁隅ならびに北壁から部分的に検出した。深さは平均13cmを測る。



第451図 SI - 235



第452図 SI - 236



第453図 SI - 236

[ピット] 住居内から3基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 37×29×38cm、Pit 2 = 37×37×38cm、Pit 3 = 26×18×42cmを測る。いずれのピットも支柱穴として機能を果たしたものと考えられる。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(65:35)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅75cm、煙道長147cmを測る。主軸はN-155°-Eである。燃烧部袖は、自然礫を芯材とし、粘土を用いて構築している。煙道部天井は、第9、13、14層が相当し、粘土と暗褐色土を用

いて構築しており、崩落した堆積状況を呈する。煙道は、住居壁際から36°の角度で立ち上がり、途中で8°に角度を変え、起伏を持ちながら煙出部へ立ち上がる。煙出部分は煙出奥壁に向かって10°の角度で傾斜している。煙出奥壁は垂直に立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居北壁部分から掘り方土坑を1基検出した。規模は125×60×26cmを測る。

[堆積土] 掘り方部分を含めて14層に分層した。住居廃絶後の堆積土は第1～7層で概ね自然堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 237 (第454、455図)

[位置] グリッドMF・MG - 409～411、MH - 410・411で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、514×504×103cmを測る。床面積は26.256㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁27cm、東壁56cm、南壁83cm、西壁62cmを測る。断面形はcで、壁上部の一部で緩やかな立ち上がりが見られる。壁面は堅緻である。

[床] 住居北壁側に掘り方を持ち、暗褐色土が充填されている。その上に大谷火山灰層主体の地山土が貼り床として貼り付けられている。他の部分については大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面は堅緻である。また、床面からB - T m火山灰を検出している。

[壁溝] 断続的に住居内を全周する形で検出した。深さは平均14cmを測る。

[ピット] 住居内から5基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 35×32×47cm、Pit 2 = 48×35×29cm、Pit 3 = 42×35×32cm、Pit 4 = 35×35×24cm、Pit 5 = 23×20×7cmを測る。主柱穴として機能したと考えられるピットは、Pit 1、2、3、4である。このうちPit 2、3の覆土中にB - T m火山灰がブロック状に堆積している。

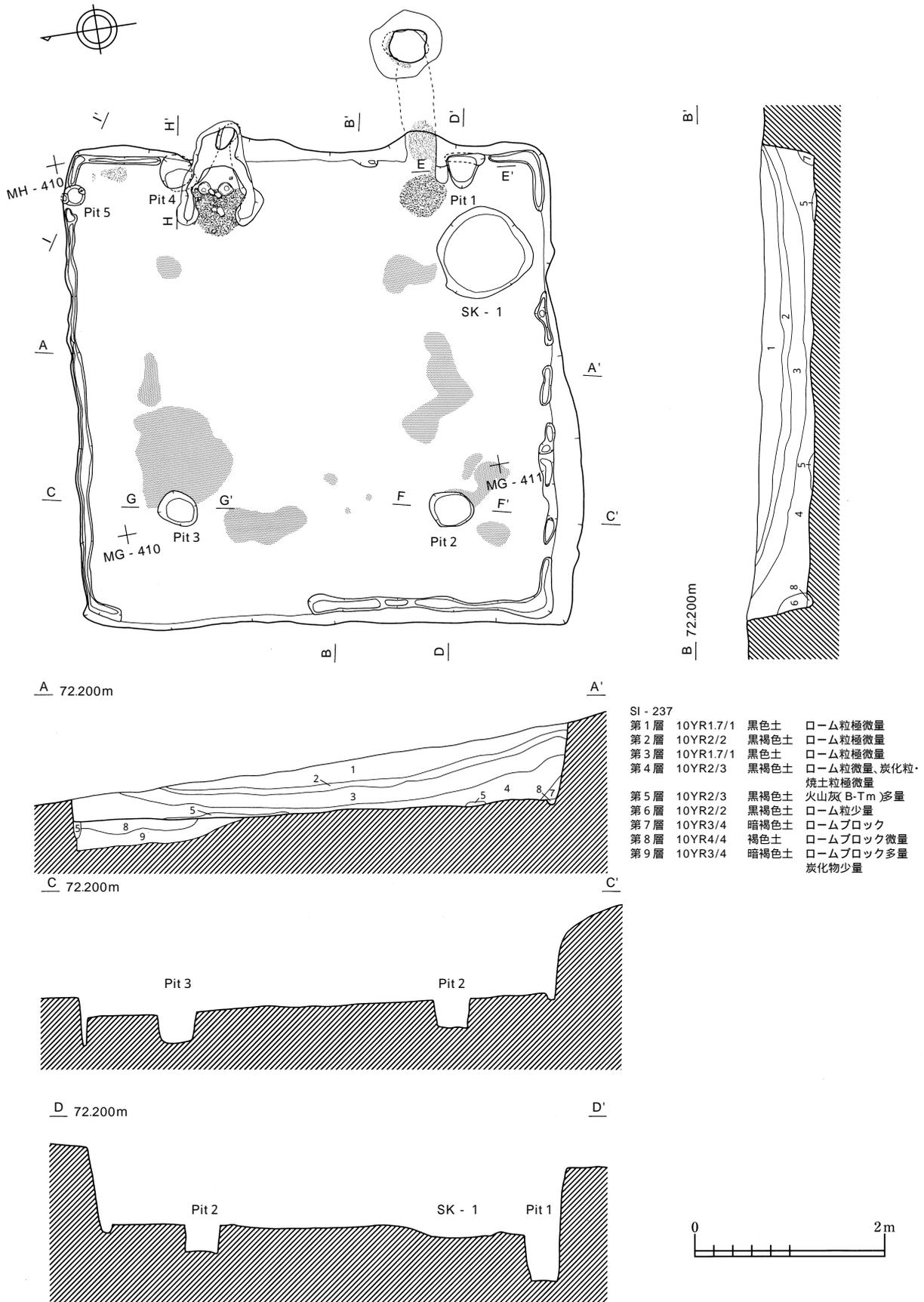
[カマド] 住居東壁側から2基検出した。東壁2(31:69)と東壁3(73:27)の位置から検出している。新旧関係については、燃烧部の残存状況から東壁2 > 東壁3の関係である。東壁2のカマドの構造は、半地下式で、袖部幅93cm、煙道長35cmを測る。主軸はN - 107° - Eである。構築は粘土によるもので、支脚として土師器椀2点を並列に倒置している。煙道は、住居壁際から30°の角度で急激に立ち上がり、煙出奥壁付近で内傾しながら立ち上がる。

東壁3のカマドの構造は、地下式で、袖部は基部が部分的に残存するのみで、煙道長132cmを測る。主軸はN - 95° - Eである。煙道部は、大谷火山灰層の地山を掘り込んで構築されている。煙道は、住居壁際から16°の角度で傾斜しながら煙出部へ向かいピット状に掘り込まれた煙出部と接する。煙出開口部は掘り方を持ち、月見野火山灰層主体の地山を貼り付けて構築している。

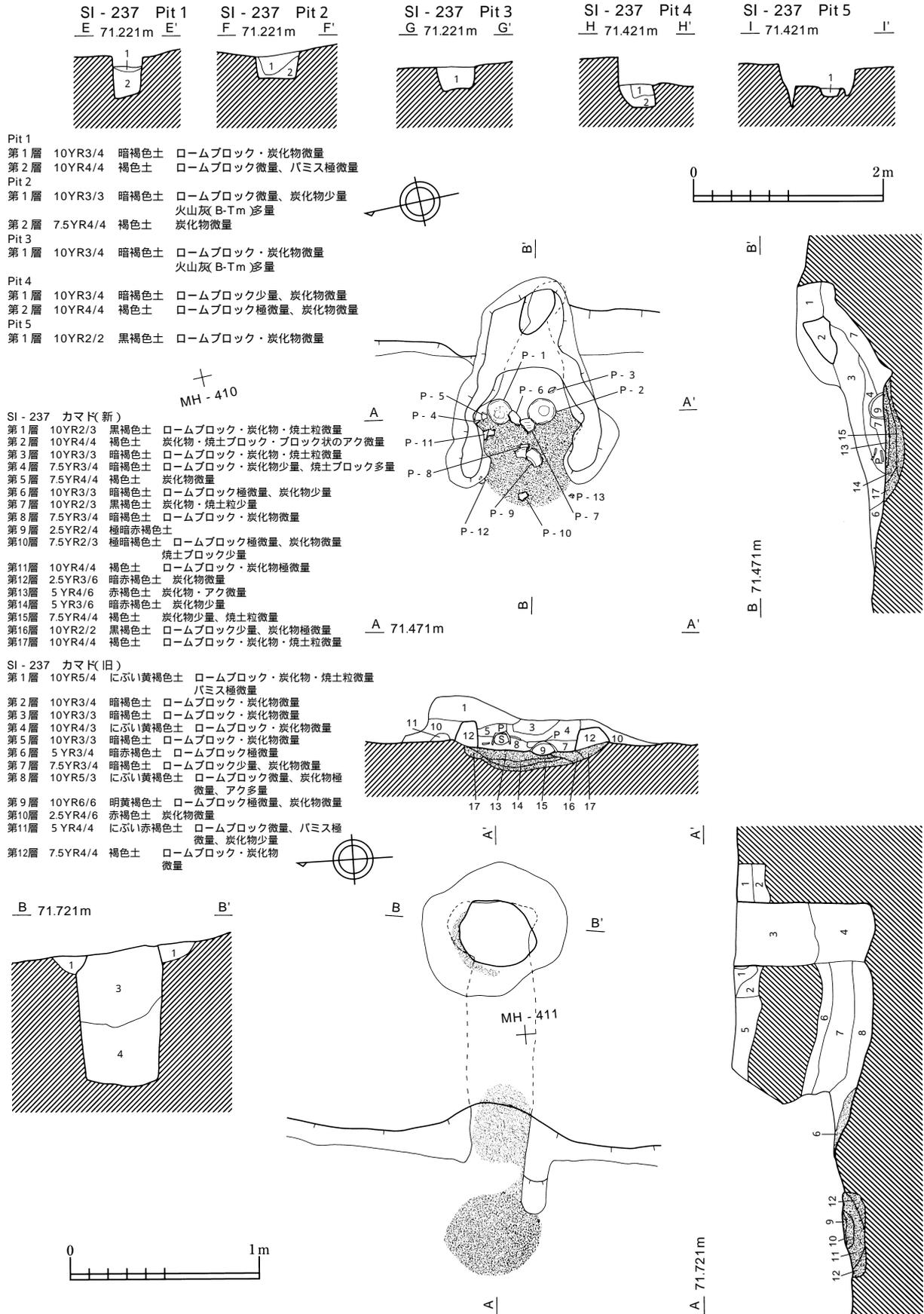
[その他の付属施設] 住居南壁東寄りの部分から土坑1基を検出した。規模は100×96×7cmを測る。

[堆積土] 掘り方部分を含めて9層に分層した。住居床面中央部に堆積する第5層中にB - T m火山灰がブロック状に堆積している。概ね自然堆積状況を呈する。

(木村)



第454図 SI - 237



第455図 SI - 237

S I - 238 (第456図)

[位置] グリッドMK・ML - 409・410で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、336×318×74cmを測る。床面積は10.892m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁37cm、東壁31cm、南壁78cm、西壁83cmを測る。断面形はaで、一部凹凸が激しい部分があるが、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 北壁～東壁側の部分に掘り方を持ち、ロームブロックと黒褐色土の混合土を充填し、床面としている。それ以外の部分については大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面は、掘り方がある部分はやや脆弱で、それ以外の部分については堅緻である。

[壁溝] 住居東壁側を除き断続的に検出した。深さは平均8cmを測る。

[ピット] なし。

[カマド] 住居東壁から1基検出した。東壁3(69:31)の位置から検出している。構造は、半地下式で、袖部幅90cm、煙道長76cmを測る。主軸はN - 105° - Eである。燃烧部袖は、粘土による構築で、天井は土層堆積上に残存しておらず、破壊された可能性が考えられる。燃烧部下部に浅い掘り方を持ち、黒色土ならびに褐色土系の土を充填している。支脚として土師器椀1点を倒置している。煙道部天井は第8層が相当し、崩落した堆積状況を呈する。煙道は、住居壁際から30°の角度で起伏を持ちながら立ち上がり、煙出部付近で10°に角度を変え、緩やかに立ち上がる。煙出奥壁部分の掘りこみは煙道部の掘り込み部分に比べて一段高くなっており、カマド使用時には、地山土が充填されていたのみの掘り方であった可能性について考えられる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含め12層に分層した。住居廃絶後の堆積土は第1～9層で、概ね自然堆積状況を呈する。第2層中からB - T m火山灰を層状に検出した。

(木村)

S I - 239 (第457、458図)

[位置] グリッドMM・MN - 406・407、MN - 408、MO - 407で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、470×450×70cmを測る。床面積は21.312m²を測る。

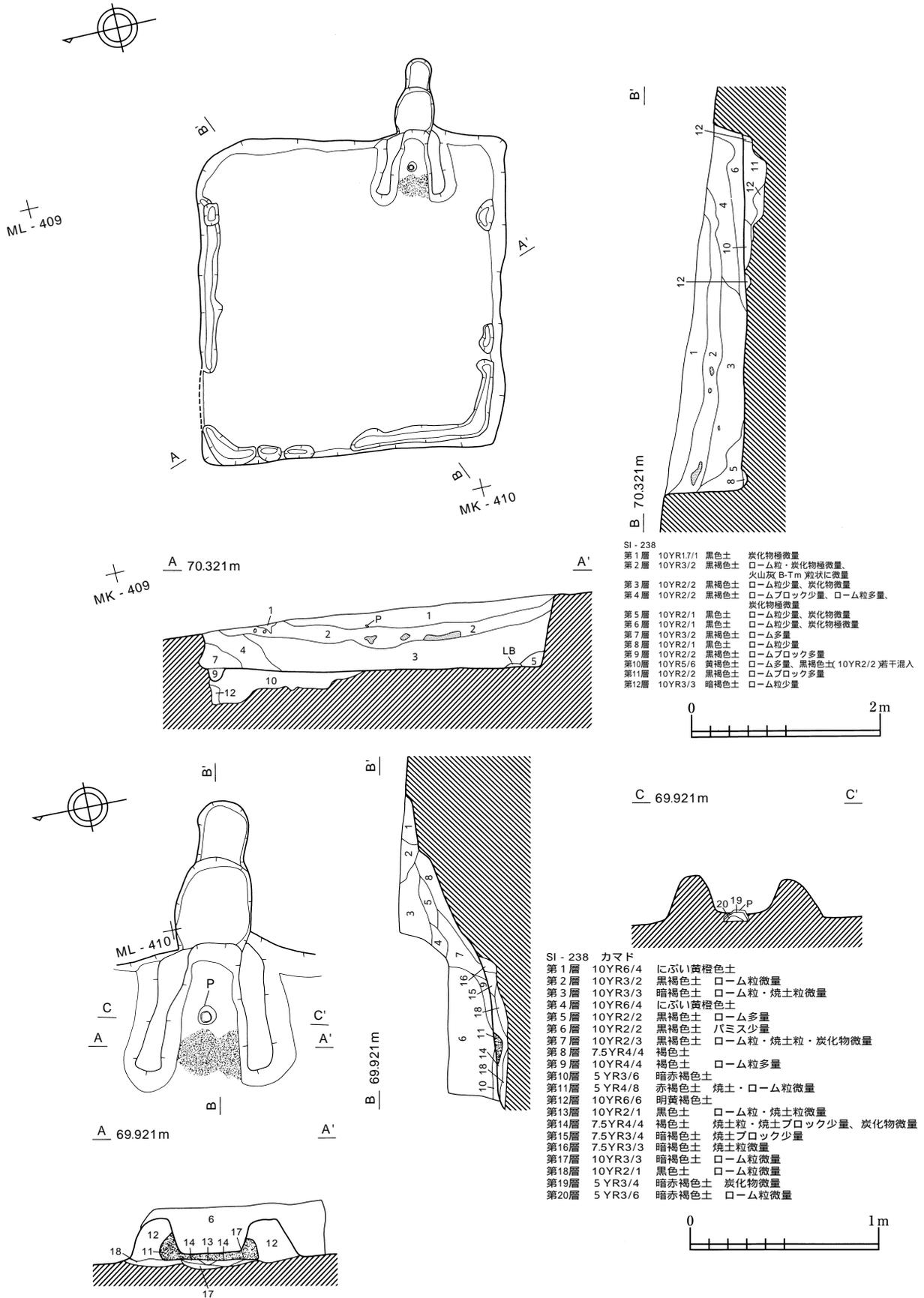
[壁] 壁高は、北壁27cm、東壁50cm、南壁68cm、西壁10cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面とし、やや起伏がある。床面は堅緻である。また、住居中央部から赤化面を58×41cmの範囲で検出した。

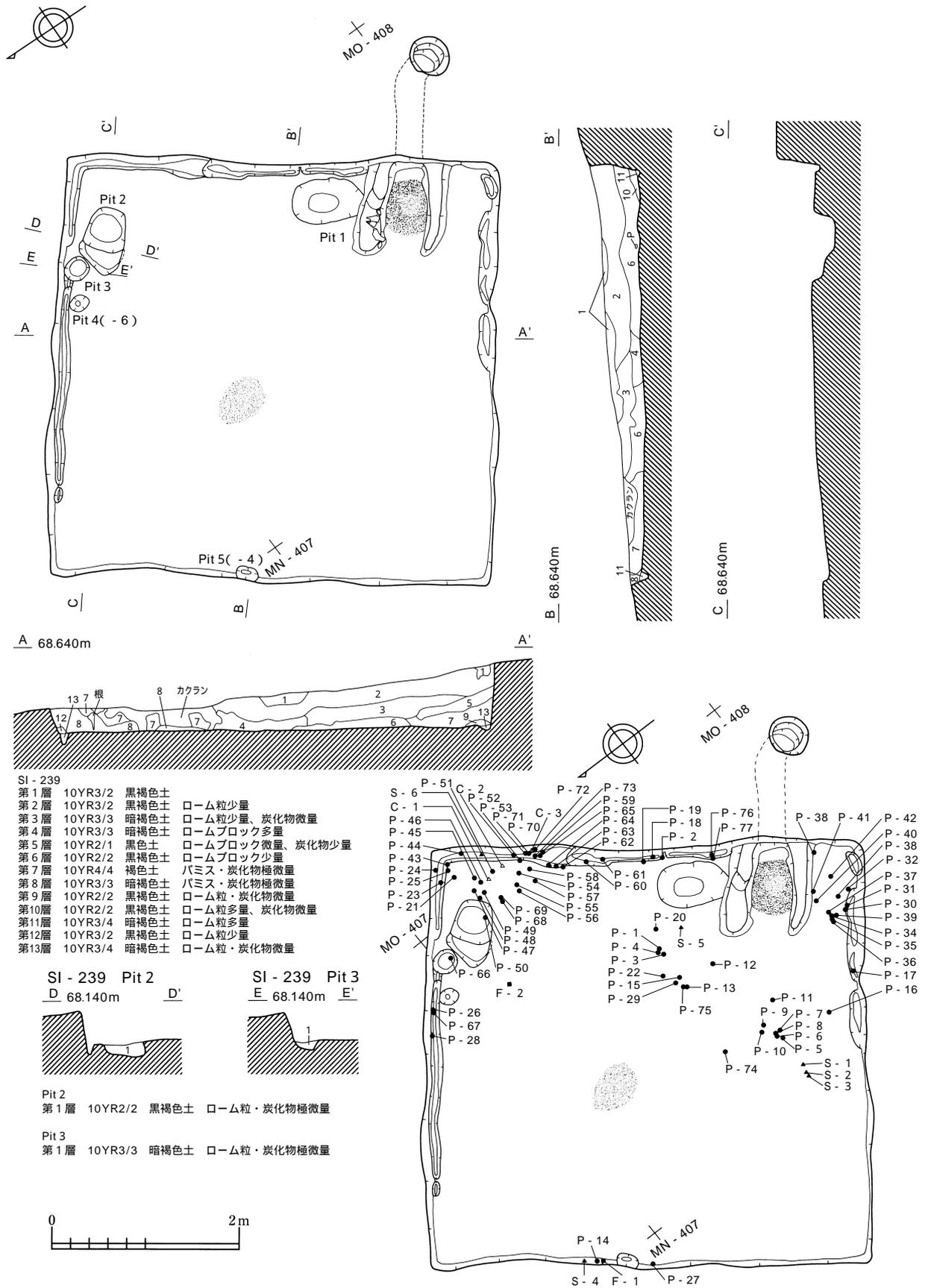
[壁溝] 住居南北壁ならびに東壁から断続的に検出した。深さは平均7cmを測る。

[ピット] 住居内から5基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 77×48×12cm、Pit 2 = 73×48×16cm、Pit 3 = 27×24×10cm、Pit 4 = 20×17×6cm、Pit 5 = 24×13×4cmを測る。いずれのピットも支柱穴としての機能を充足し得えなかったと考えられる。

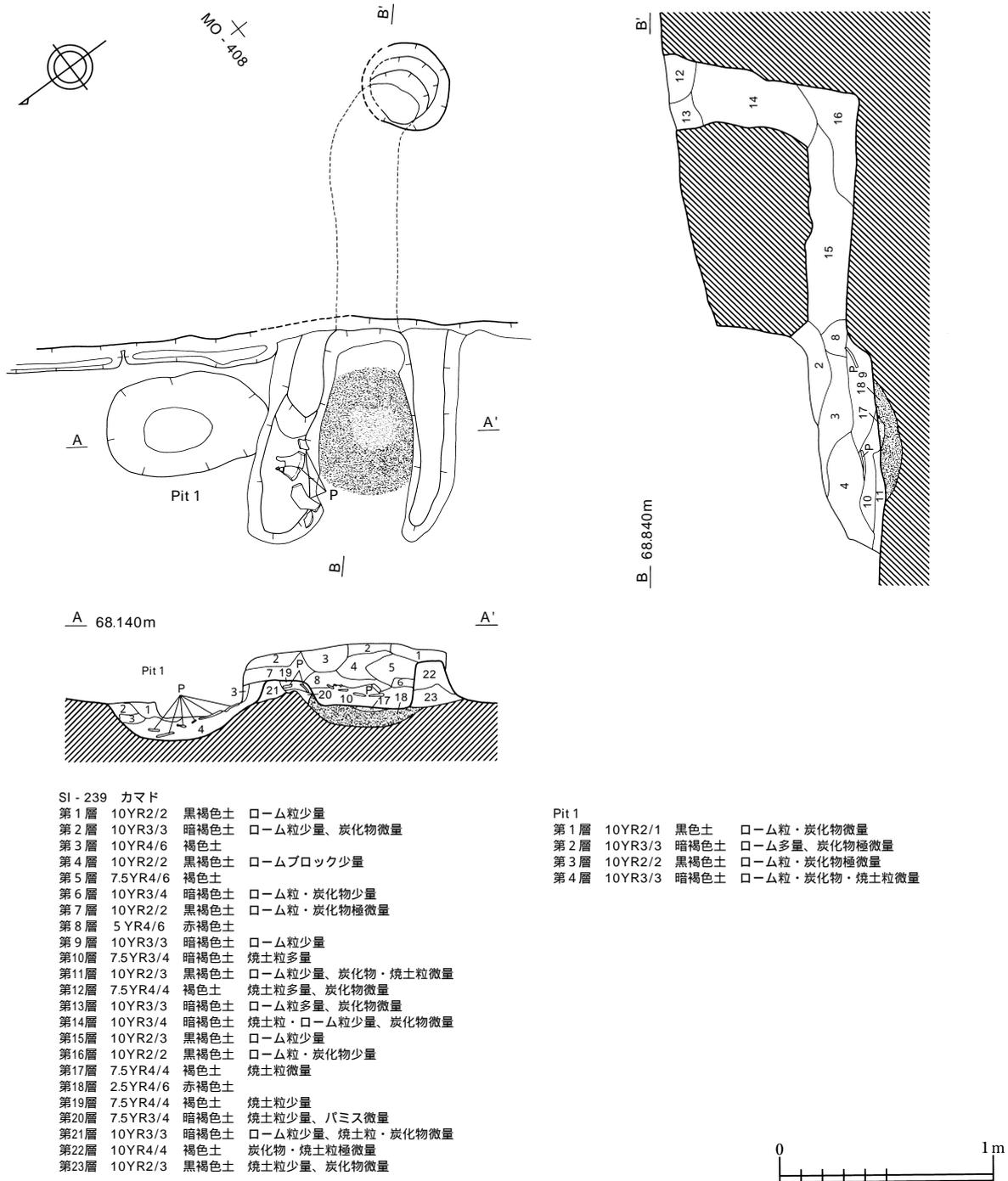
[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁4(78:22)の位置から検出している。構造は、地下式で、袖部幅92cm、煙道長132cmを測る。主軸はN - 133° - Eである。燃烧部袖は、粘土、暗褐色



第456図 SI - 238



第457図 SI - 239



第458図 SI - 239

土ならびに黒褐色土を用いて構築されており、天井は、第3、5層が相当し、部分的に崩落が生じた堆積状況を呈する。煙道部は、大谷火山灰層の地山を掘り込み構築されており、煙出部付近でピット状に掘り込まれた煙出と煙道の軸線がずれていて南側に軸線を変え煙出と接している。煙道は、住居壁際から立ち上がり、床面から10cmの高さの位置からほぼ水平に煙出部へ向かう。煙出奥壁は垂直に近い形で外傾しながら立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 一部攪乱により土層堆積が乱されているが13層に分層した。ロームブロックが多量に含まれ、住居壁際床直に遺物の出土が出土していることから廃棄を伴う人為的堆積状況を呈する。

(木 村)

S I - 240 (第459、460図)

[位置] グリッドMQ・MR - 405で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 不整形を呈し、330×278×65cmを測る。床面積は8.812m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁9cm、東壁45cm、南壁63cm、西壁28cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 土坑状の掘り方を持ち、黒色土ならびにロームが充填され、大谷火山灰層主体の地山を貼り床として貼り付けている。他の部分は、大谷火山灰層の地山を床面としておりほぼ平坦である。床面は、貼り床部分はやや脆弱で、地山部分は堅緻である。

[壁溝] なし。

[ピット] 住居内から4基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 38×25×7cm、Pit 2 = 37×28×10cm、Pit 3 = 77×68×10cm、Pit 4 = 52×50×5cmを測る。いずれのピットも主柱穴としての機能を充足し得なかったと考えられる。

[カマド] 住居東壁側から1基検出した。東壁3(68:32)の位置から検出している。構造は、地下式で、袖部幅68cm、煙道長120cmを測る。主軸はN - 113° - Eである。燃烧部袖は、粘土ならびに暗褐色土による構築であるが、袖脇から羽口が出土しており一部芯材として用いられた可能性が考えられる。天井は第16層が相当し、崩落した堆積状況を呈している。煙道部は、大谷火山灰層の地山を掘り込んで構築されている。煙道は、住居壁際より手前の部分から段を持ち立ち上がり、壁際の部分から14°の角度で傾斜し、ピット状に掘り込まれた煙出と接する。煙出奥壁は、ほぼ垂直に近い形で立ち上がる。

[その他の付属施設] 住居東壁側から不整形の落ち込みを検出した。規模は162×25×3cmを測る。

[堆積土] 掘り方部分を含めて18層に分層した。住居廃絶後の堆積土は、第1～12層で全般的に焼土粒・炭化物を含み埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木 村)

S I - 241 (第461図)

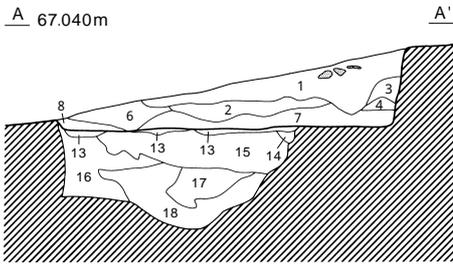
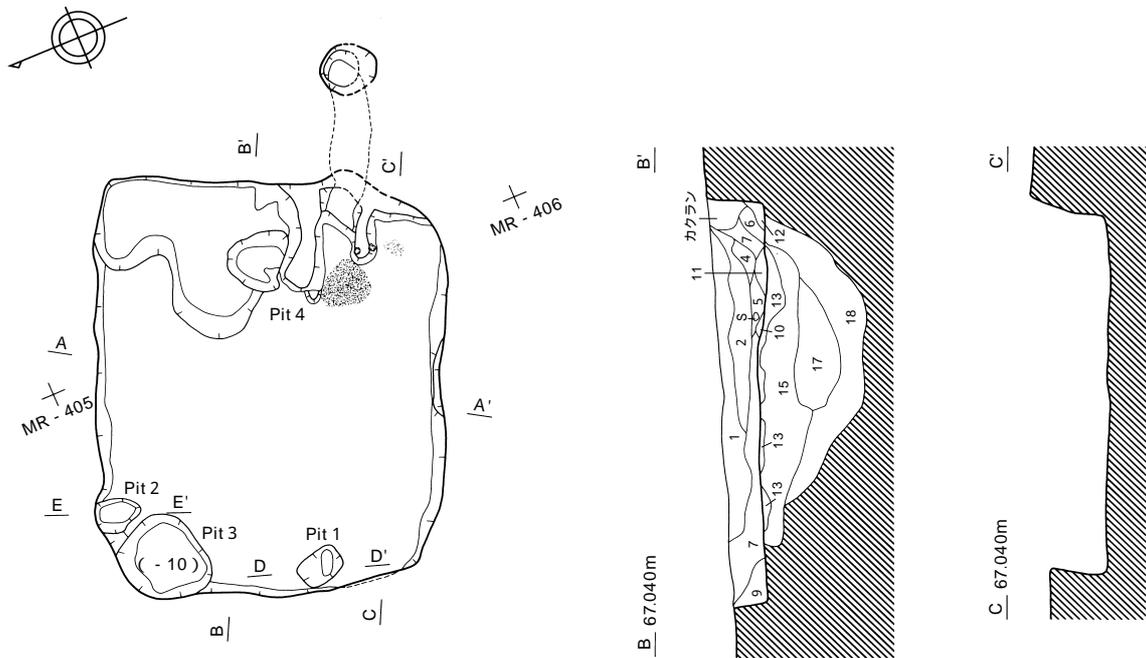
[位置] グリッドMP・MQ - 413・414で検出した。

[重複] SK - 248と重複している。本遺構の堆積土がSK - 248に切られており、本遺構の方が古い。

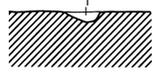
[平面形・規模] 長方形を呈し、326×284×64cmを測ると推定できる。床面積は8.948m²を測る。

[壁] 壁高は、北西壁26cm、南西壁54cm、南東壁53cm、北東壁25cmを測る。削平、切り合いにより北西壁は不明である。断面形はaで、やや外傾しながらほぼ垂直に立ち上がる。壁面は堅緻である。

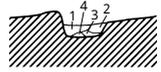
[床] 大谷火山灰層の地山を床面としている。



SI - 240 Pit 1
D 66.440m D'



SI - 240 Pit 2
E 66.440m E'



SI - 240

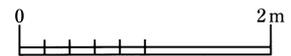
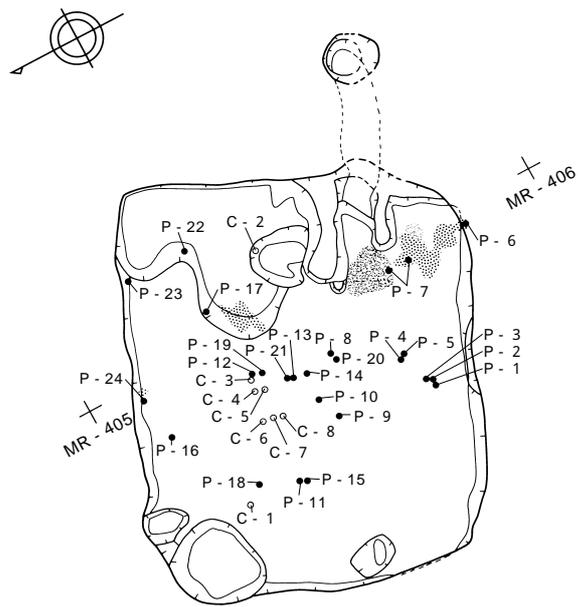
- | | | | |
|------|----------|------|------------------------------|
| 第1層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ロームブロック・炭化物微量、火山灰(B-Tm)粒状に混入 |
| 第2層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ローム粒・炭化物極微量 |
| 第3層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ロームブロック・炭化物微量、ローム粒多量 |
| 第4層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム多量 |
| 第5層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 焼土粒多量、炭化物少量 |
| 第6層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ローム粒少量、炭化物微量 |
| 第7層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒少量、炭化物・焼土粒微量 |
| 第8層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 炭化物・焼土粒微量 |
| 第9層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ローム粒極微量 |
| 第10層 | 10YR17/1 | 黒色土 | 炭化物多量・焼土粒微量 |
| 第11層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | ロームブロック少量 |
| 第12層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | ローム粒少量 |
| 第13層 | 10YR4/4 | 褐色土 | |
| 第14層 | 10YR5/8 | 黄褐色土 | |
| 第15層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ロームブロック微量 |
| 第16層 | 10YR4/6 | 褐色土 | |
| 第17層 | 10YR4/6 | 褐色土 | |
| 第18層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ロームブロック多量 |

Pit 1

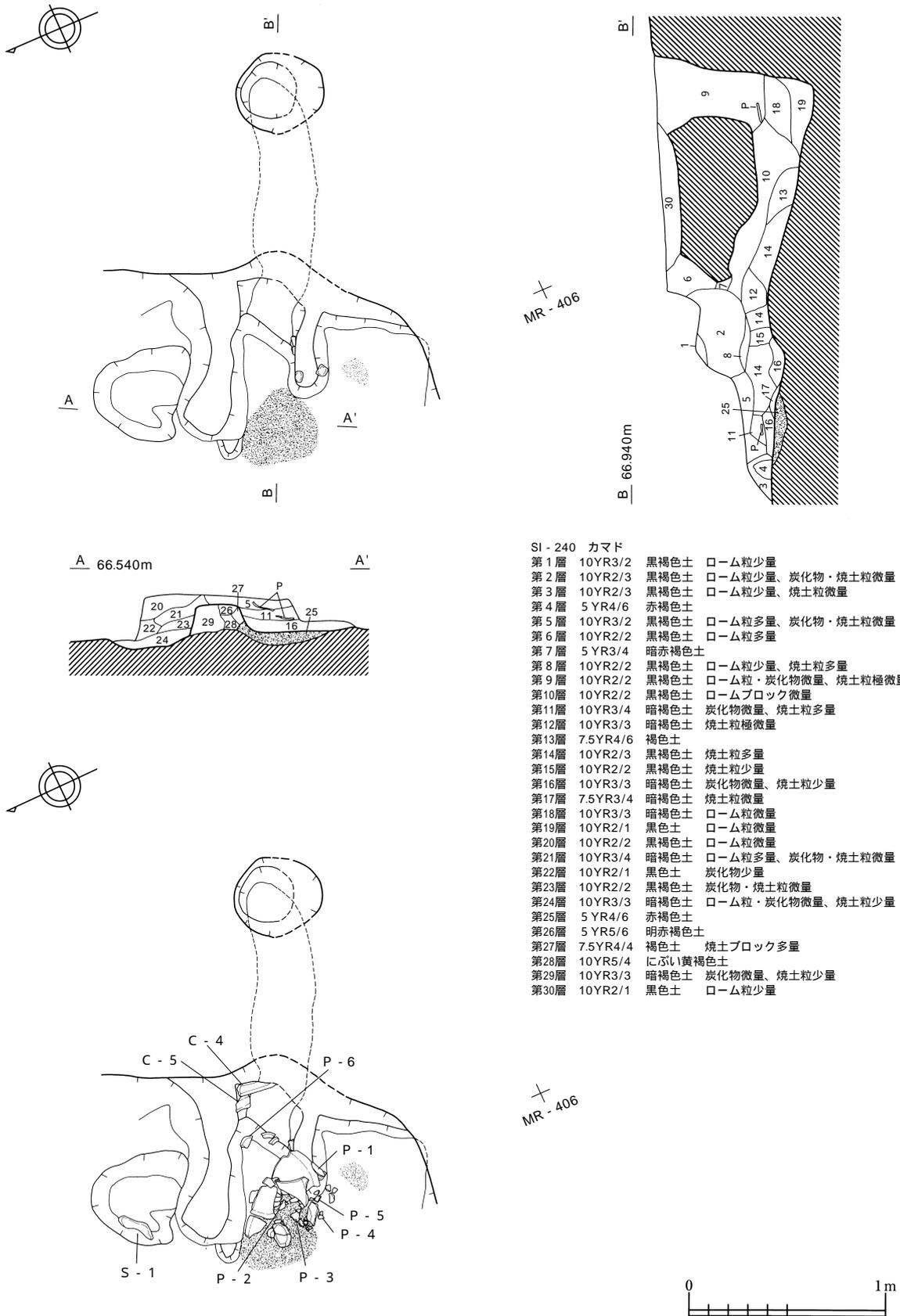
- | | | | |
|-----|---------|------|------------|
| 第1層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | ローム粒・炭化物微量 |
|-----|---------|------|------------|

Pit 2

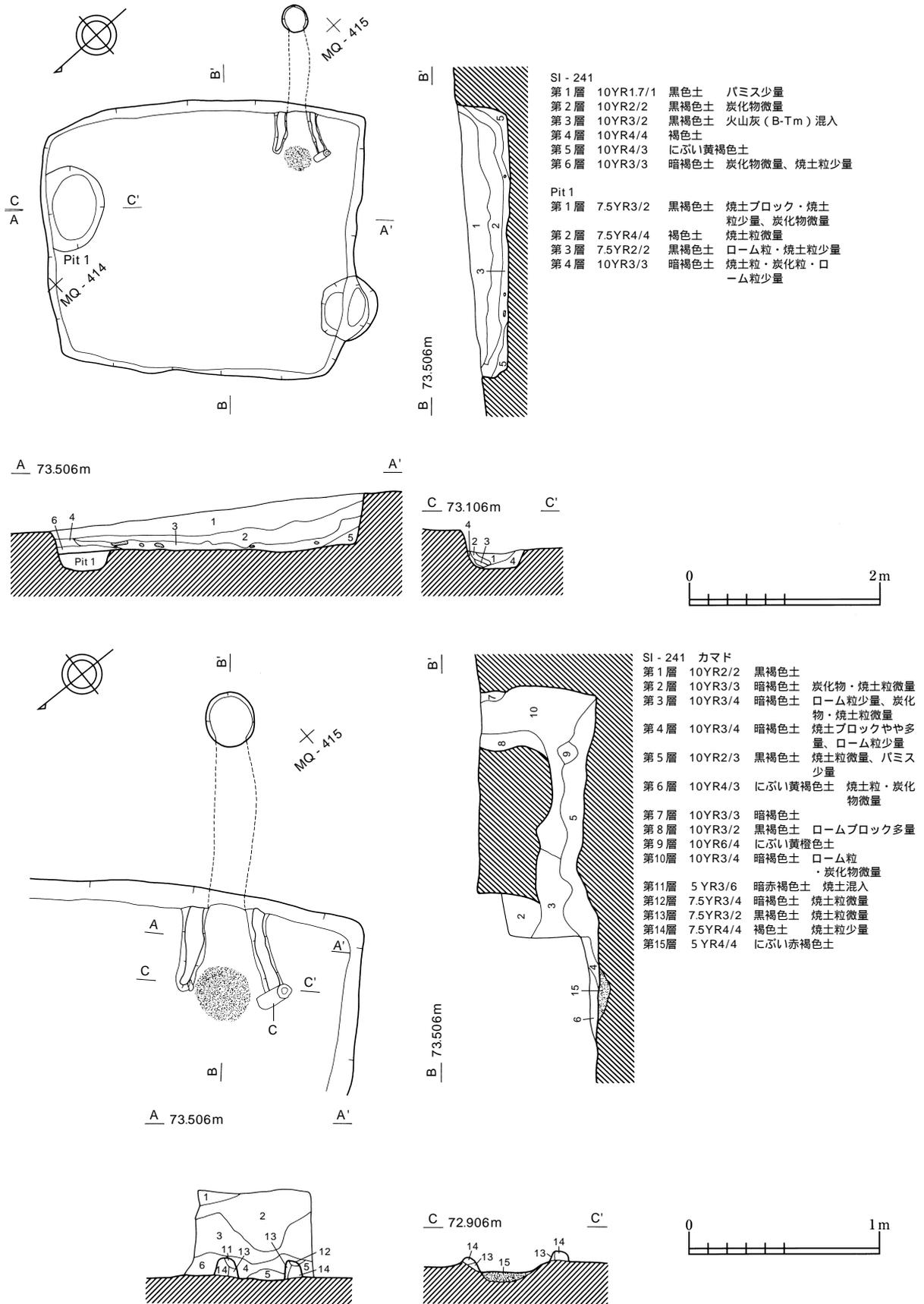
- | | | | |
|-----|---------|------|---------------|
| 第1層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | ローム粒多量、炭化物極微量 |
| 第2層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | ローム粒微量 |
| 第3層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム粒微量 |
| 第4層 | 10YR4/6 | 褐色土 | |



第459図 SI - 240



第460図 SI - 240



第461図 SI - 241

[壁 溝] なし。

[ピット] 竪穴内から1基検出した。規模は90×66×18cmを測る。

[カマド] 住居南東壁3(79:21)の位置から検出している。構造は、地下式で、袖部幅56cm、煙道長105cmを測る。主軸はN-130.5°-Eである。袖は粘土によって構築されており、南西側の袖に芯材として羽口が装填されている。火床面の範囲は29×27cmを測る。焼土ブロックを多量に混入し暗褐色を呈する4層、にぶい黄褐色を呈する6層は、燃焼部の天井及び袖の崩落土と考えられる。煙道部は、火床面から15°の角度で緩やかに立ち上がり、中間部で平坦となり、煙出部へと立ち上がる。堆積状況からみて、本遺構のカマドは土圧により押し潰された状態を呈していることから、意図的な破壊は行われていないと考えられる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 6層に分層した。最下層に黒褐色土、下層壁際に壁の崩落土と考えられる褐色土、上層に黒色、暗褐色を呈する土層が堆積している。レンズ状の堆積を呈していることから、自然堆積を呈すると思われる。
(設 楽)

S I - 242 (第462、463図)

[位 置] グリッドMN-419、MO-418~420、MP-419で検出した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、438×432×78cmを測る。床面積は18.17m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁50cm、東壁46cm、南壁72cm、西壁68cmを測る。断面形はcで、壁上部の一部で緩やかな立ち上がりが見られる。壁面は堅緻である。

[床] 一部に浅い落ち込みがあり、焼土粒・炭化粒を含む大谷火山灰層主体の地山が充填されている。それ以外の部分は、大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面は堅緻である。

[壁 溝] 断続的に住居を全周する形で検出した。深さは平均11cmを測る。

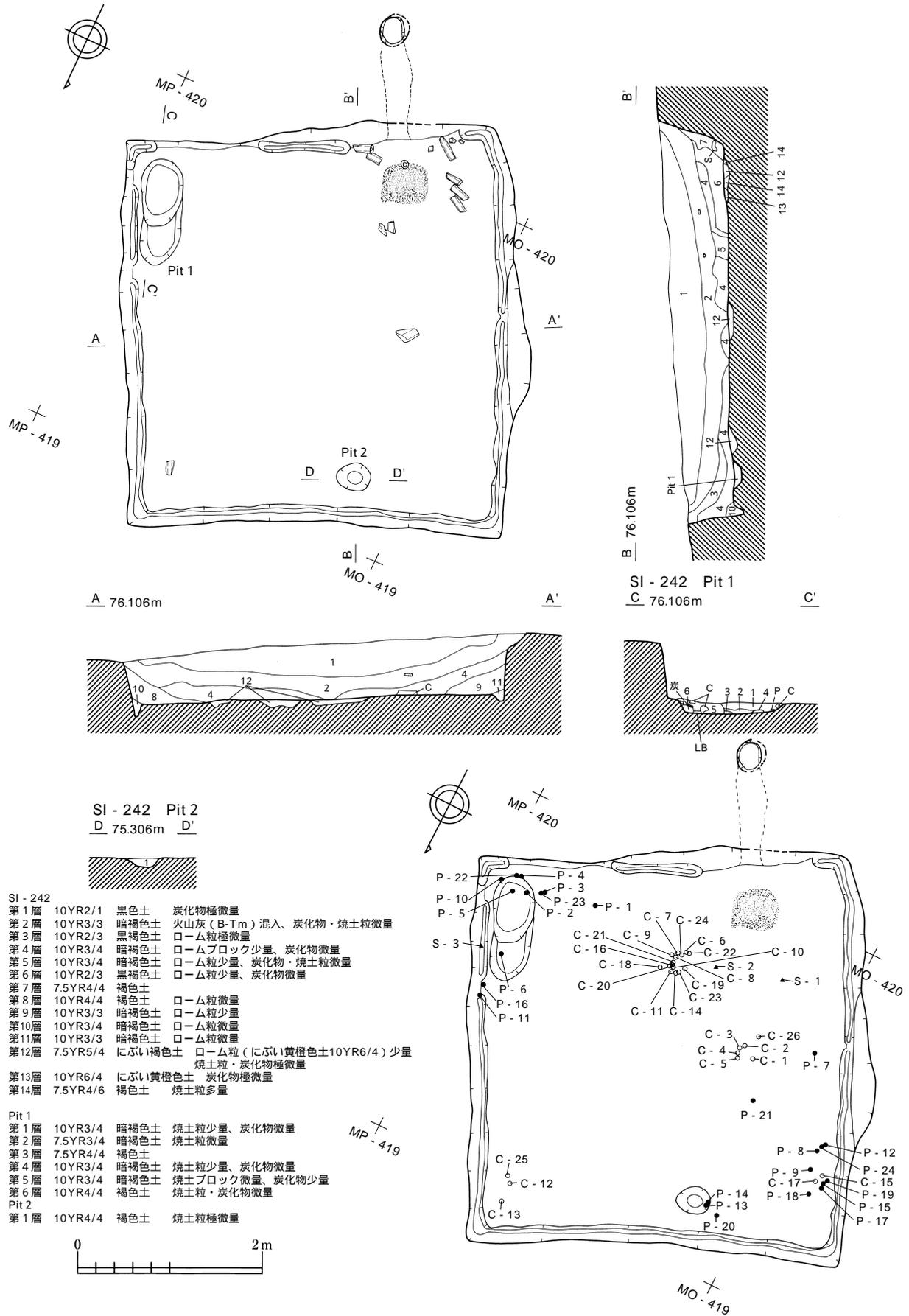
[ピット] 住居内から2基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 115×45×12cm、Pit 2 = 37×32×10cmを測る。いずれのピットも支柱穴としての機能は充足し得なかったものと考えられる。Pit 1覆土中から羽口が出土している。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(71:29)の位置から検出している。構造は、地下式で、燃焼部は上部構造が破壊されており、煙道長118cmを測る。主軸はN-151°-Eである。燃焼部付近から羽口が散乱した状況で出土しているが、住居中央部からも羽口がまとまって出土しており、廃棄時点での産物である可能性があるため、芯材として羽口の転用については明瞭でない。また、支脚として土師器小甕が倒位に設置されている。煙道部は大谷火山灰層の地山を掘り込んで構築されており、ピット状に掘り込まれた煙出と接している。煙道は、住居壁際から起伏を持ちながらほぼ水平に煙出部へ向かう。

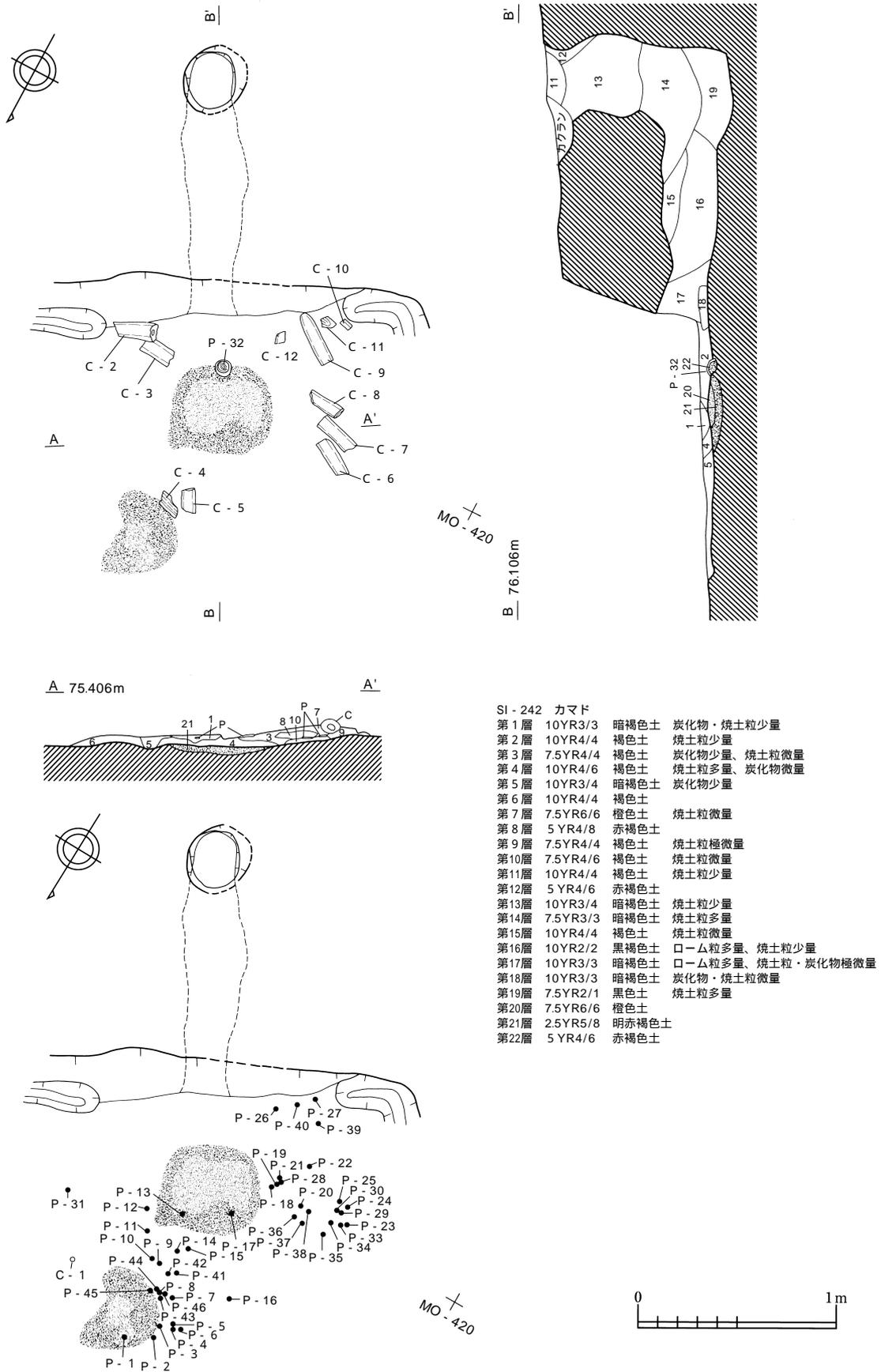
[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて14層に分層した。床面ならびに床面直上から多量の遺物が出土しているが、ロームブロック、ローム粒、炭化物、焼土粒を含む堆積土で廃棄である可能性が考えられる。廃棄を伴う埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。また、第2層中からB-Tm火山灰を検出した。

(木 村)



第462図 SI - 242



第463図 SI - 242

S I - 243 (第464図)

[位置] グリッドMM - 423・424、MN - 424で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、348×344×25cmを測る。床面積は11.84m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁28cm、東壁32cm、南壁33cm、西壁27cmを測る。断面形はdで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。

[壁溝] 住居南壁側を除き検出した。深さは平均7cmを測る。

[ピット] 住居内から2基検出した。各ピットの規模は、Pit 1 = 75×55×16cm、Pit 2 = 49×49×30cmを測る。Pit 2については柱穴として機能した可能性が考えられるが、対応関係が追えず詳細については不明である。

[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁4(75:25)の位置から検出している。構造は、地下式で、袖部幅68cm、煙道長126cmを測る。主軸はN - 150° - Eである。燃烧部の構築は粘土によるもので、天井は第6層が相当し、崩落した堆積状況を呈する。支脚として土師器小甕を倒置している。煙道部は、大谷火山灰層の地山を掘り込み構築されており、ピット状に掘り込まれた煙出と接している。煙出の掘り込みは煙道部より深く、煙道より13cm落ち込んでいる。煙道は、住居壁際から壁面に沿って立ち上がり、床面から8cmの高さの位置で4°の角度で傾斜しながら煙出部へ向かう。煙出奥壁は垂直に立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 5層に分層したが、第2層の両端部には褐色土系の土層の堆積がみられる。一般的にロームブロックが含まれ、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 244 (第465、466図)

[位置] グリッドMP - 421、MQ - 420・421で検出した。

[重複] SK - 251と重複している。本遺構がSK - 251の堆積土を切って構築されており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 方形を呈し、428×422×42cmを測る。床面積は7.664m²を測る。

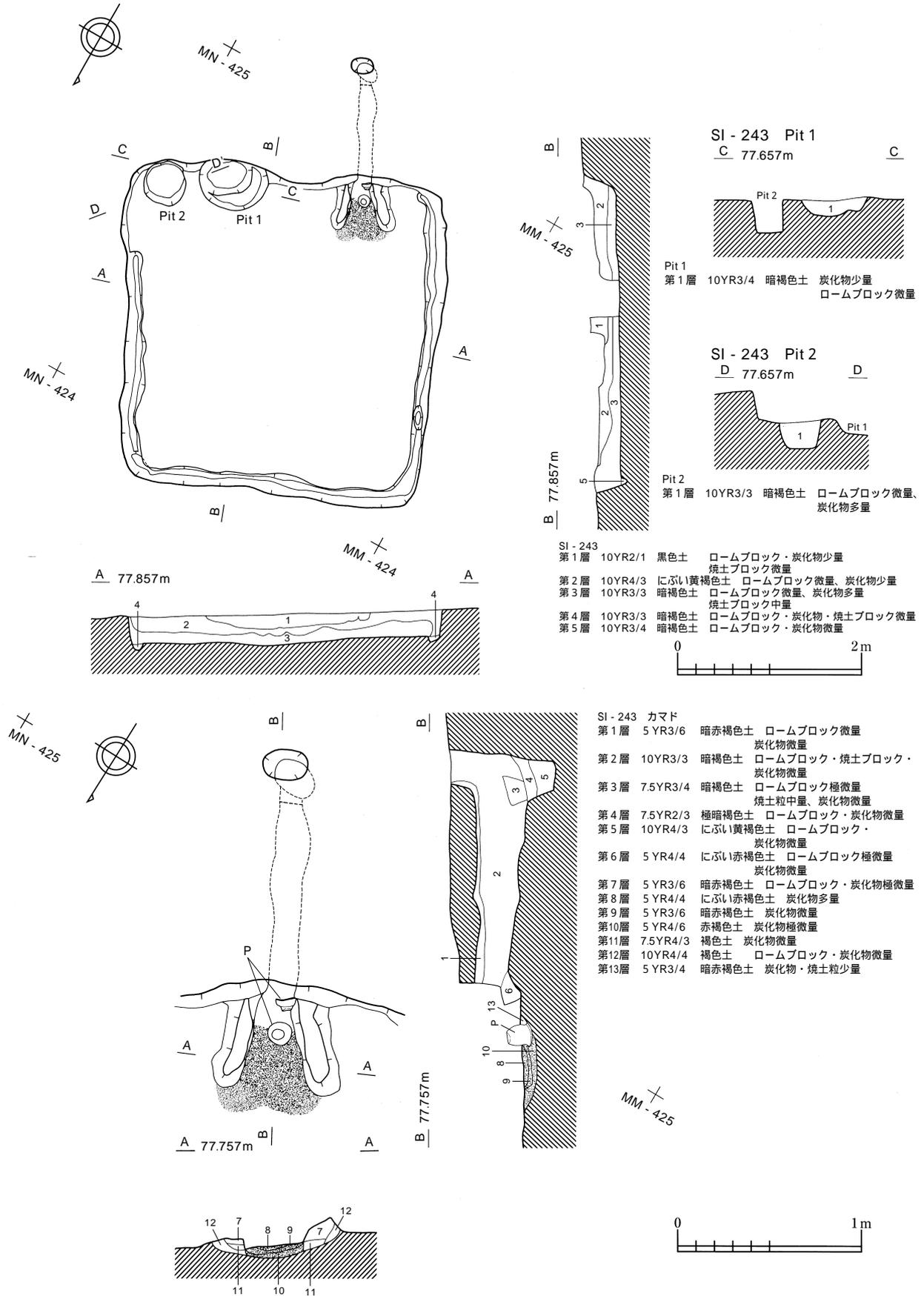
[壁] 壁高は、北壁24cm、東壁17cm、南壁35cm、西壁45cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻であるが、南壁の壁上部の一部が風倒木を切っており、その部分の壁面は脆弱である。

[床] 東壁際部分に掘り方を持ち、黒褐色土とロームブロックの混合土が充填されており、その上に大谷火山灰層主体の地山土を貼り床として貼り付けている。床面はほぼ平坦で、堅緻である。また、床面から赤化面ならびに炭化材・炭化粒を多量に検出しており、本遺構は焼失住居である。

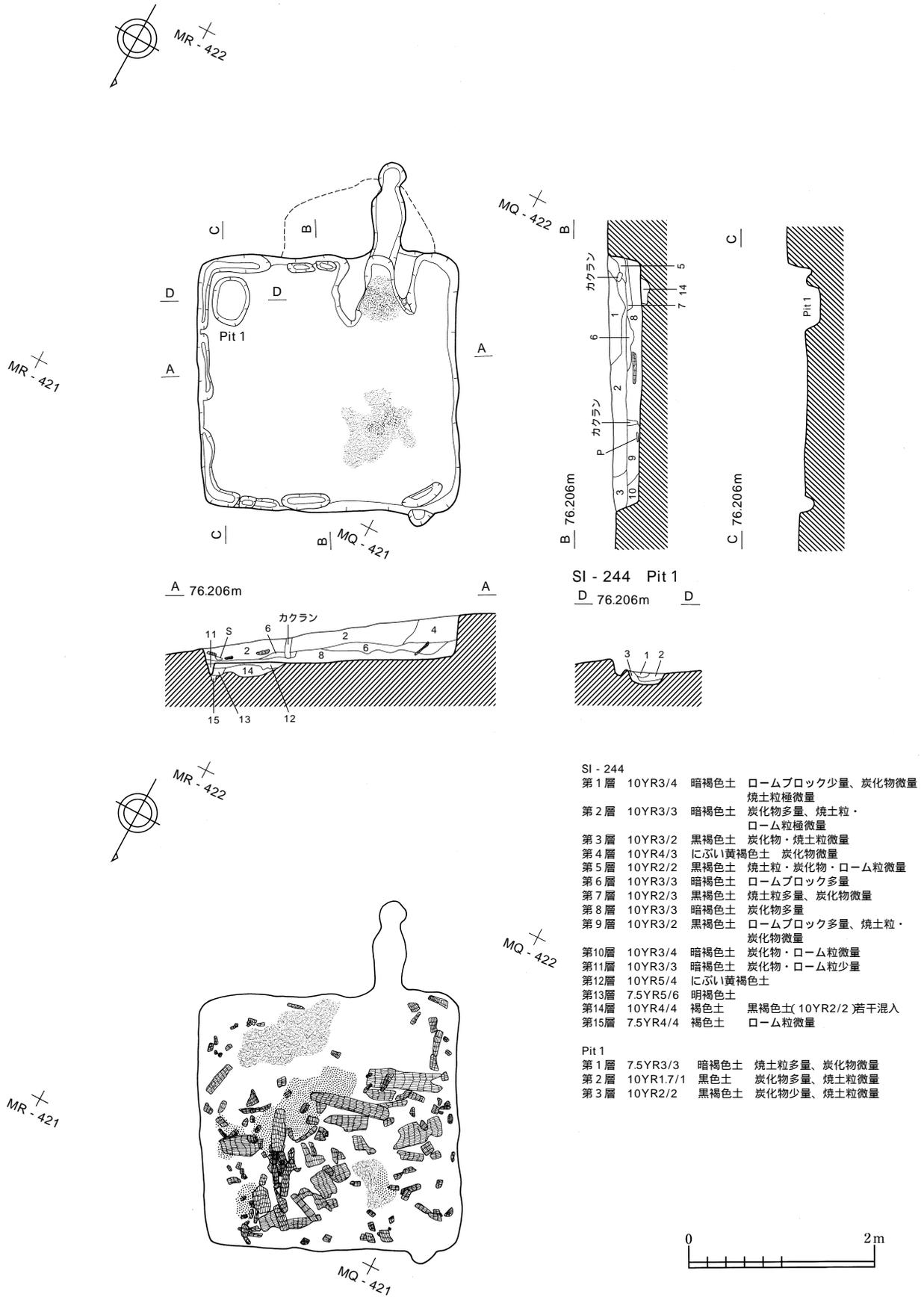
[壁溝] 住居西壁側を除き断続した形で検出した。深さは平均10cmを測る。

[ピット] 住居内から1基検出した。規模は53×40×13cmを測る。堆積土は住居焼失後の堆積土とほぼ同様であり、柱穴以外の機能を果たしたものと考えられる。

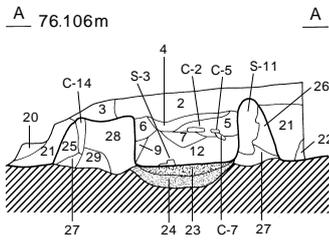
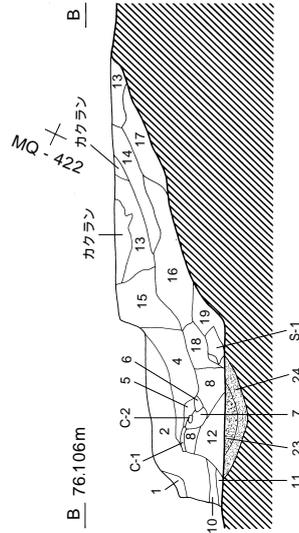
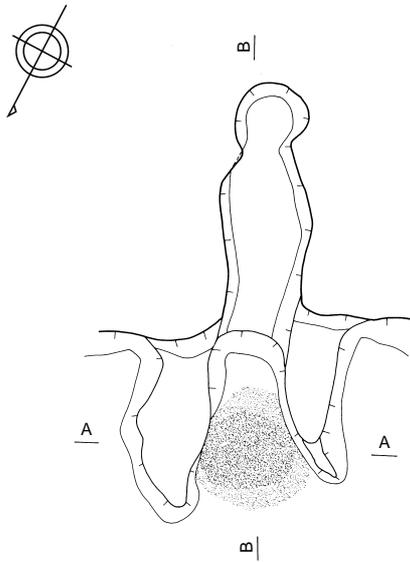
[カマド] 住居南壁側から1基検出した。南壁3(70:30)の位置から検出している。構造は、半地



第464図 SI - 243

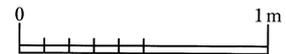
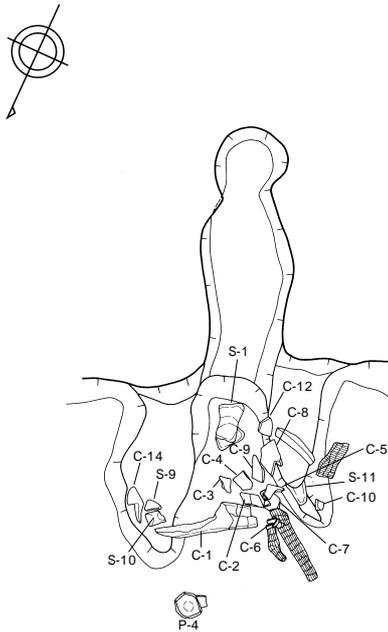


第465図 SI - 244



SI - 244 カマド

- | | | | |
|------|-----------|---------|------------------|
| 第1層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 炭化物・ローム粒多量 |
| 第2層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | ローム粒多量、炭化物・焼土粒微量 |
| 第3層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 炭化物微量 |
| 第4層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 炭化物・焼土粒微量 |
| 第5層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 炭化物微量 |
| 第6層 | 7.5YR4/4 | 褐色土 | 炭化物・焼土粒少量 |
| 第7層 | 5YR3/4 | 暗赤褐色土 | |
| 第8層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 焼土粒少量、炭化物微量 |
| 第9層 | 5YR4/8 | 赤褐色土 | |
| 第10層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 焼土粒微量 |
| 第11層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第12層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 焼土粒・炭化物微量 |
| 第13層 | 10YR4/4 | 褐色土 | |
| 第14層 | 5YR4/4 | にぶい赤褐色土 | |
| 第15層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | ローム粒・炭化物・焼土粒微量 |
| 第16層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土粒多量、炭化物微量 |
| 第17層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 焼土粒・炭化物微量 |
| 第18層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 焼土ブロック多量 |
| 第19層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 焼土粒極微量 |
| 第20層 | 5YR4/6 | 赤褐色土 | |
| 第21層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土粒少量、炭化物微量 |
| 第22層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 炭化物多量、焼土粒微量 |
| 第23層 | 2.5YR4/8 | 赤褐色土 | |
| 第24層 | 5YR3/6 | 暗赤褐色土 | |
| 第25層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 焼土粒少量 |
| 第26層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 炭化物多量、焼土粒極微量 |
| 第27層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第28層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 焼土粒少量、炭化物微量 |
| 第29層 | 10YR4/4 | 褐色土 | |



第466図 SI - 244

下式で、袖部幅71cm、煙道長105cmを測る。主軸はN - 157° - Eである。燃烧部袖は、自然礫ならびに転用羽口を芯材としており、天井については住居焼失時に倒壊した状況で、自然礫ならびに羽口が散らばった出土状況であったことから、芯材として袖同様自然礫ならびに転用羽口が用いられ、暗褐色土を用いて構築した可能性が考えられる。また、支脚設置位置に自然礫1点が出土していることから支脚として自然礫が設置されていた可能性が考えられる。煙道部天井は、第13、14層が相当し、若干沈下した堆積状況を呈する。煙道は、住居壁際から20°の角度で起伏を持ちながら立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方部分を含めて15層に分層した。住居焼失後の形成層は第8層で、その上部に堆積する第6層にはロームブロックが多量に含まれ、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 245 (第467、468図)

[位置] グリッドMQ・MR - 419・420で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、428×422×72cmを測る。面積は18.199m²を測る。

[壁] 壁高は、北西壁34cm、南西壁56cm、南東壁42cm、北東壁25cmを測る。断面形はaで、やや外傾しながらほぼ垂直に立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としている。掘り方を有し、焼土粒・炭化物を微量に混入する暗褐色土が充填されている。

[壁溝] カマド付近において部分的に欠落するが、ほぼ全周して検出した。深さは平均12cmを測る。

[ピット] 竪穴内から1基検出した。規模は52×50×36cmを測る。

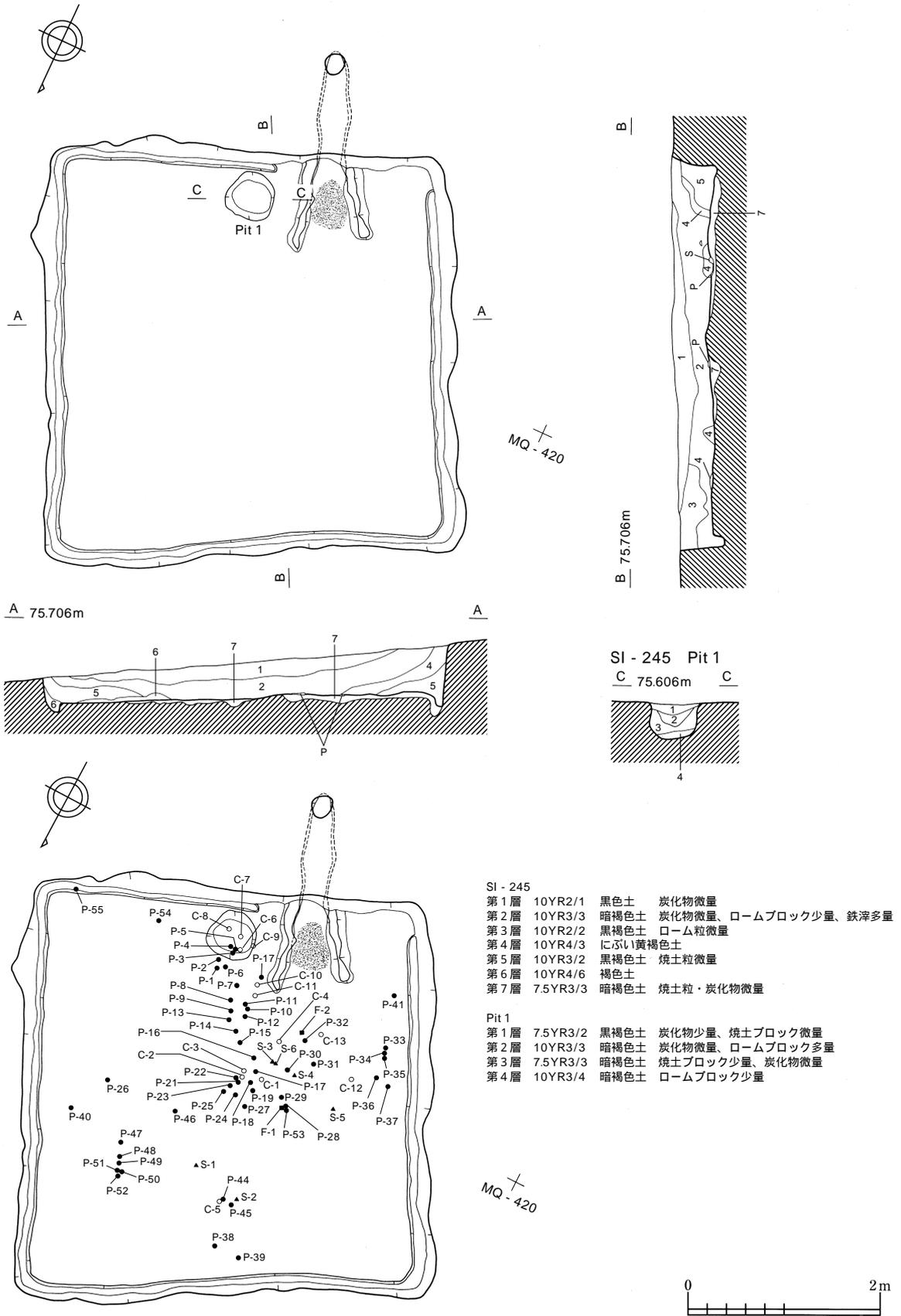
[カマド] 住居南東壁3(72:28)の位置から検出している。構造は、地下式で、袖部幅71cm、煙道長105cmを測る。主軸はN - 157° - Eである。袖は粘土によって構築されており、両袖に芯材として礫が装填されている。火床面の範囲は52×39cmを測る。火床面は床面のレベルよりやや低位にあることから、床面をやや掘り込んで燃烧部が構築されたと考えられる。燃烧部の天井に相当する土層は確認できなかった。煙道部は、20°の角度で緩やかに下り、一旦平坦になり、煙出部へ立ち上がる。袖、煙道部の残存状態からみて、本遺構のカマドは、意図的な破壊は行われていないと考えられる。

[その他の付属施設] なし。

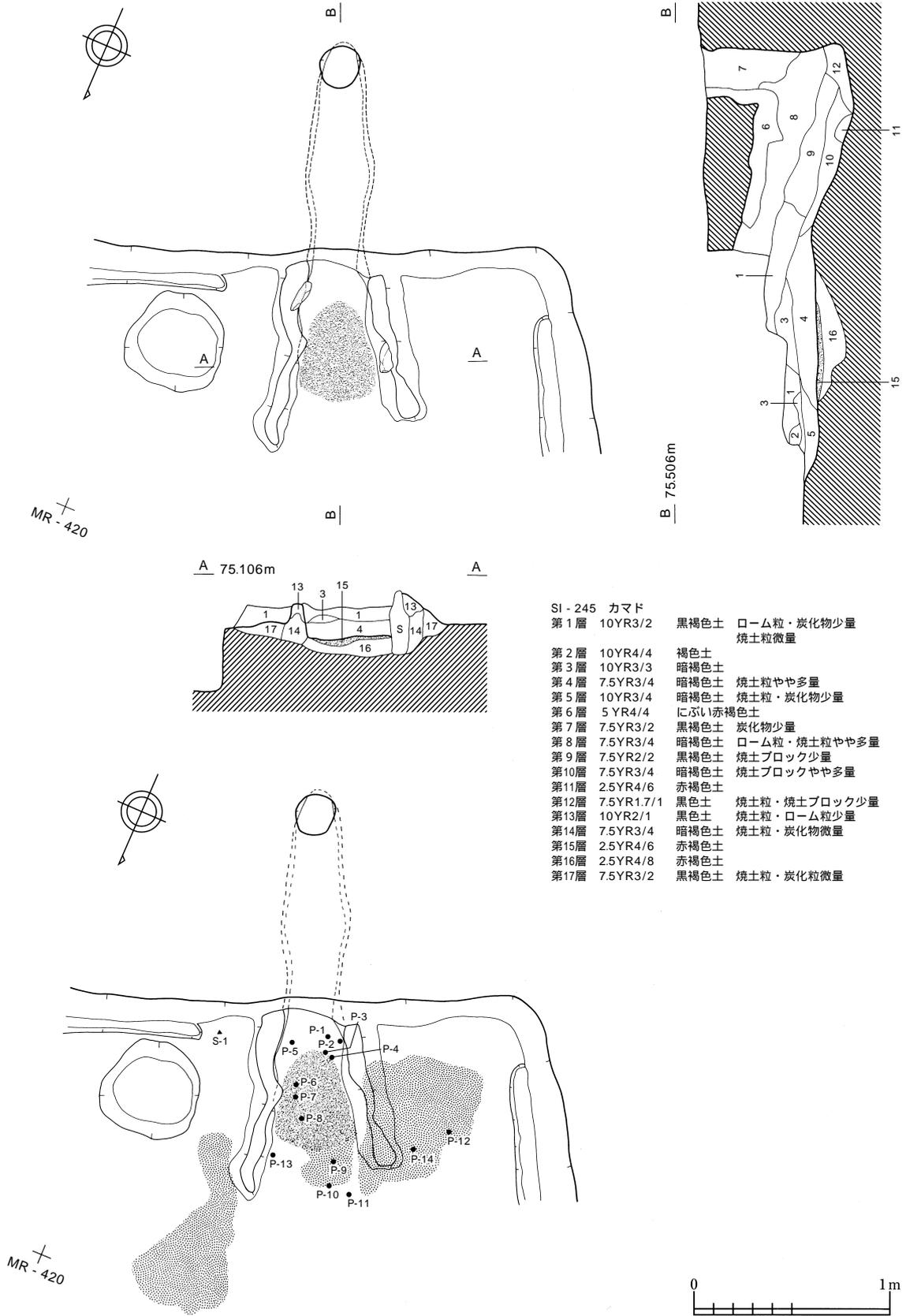
[堆積土] 7層に分層した。下層から中層にかけては暗褐色を呈する第2層、下層の壁際に黒褐色を呈する第3、5層、上層に黒色を呈する1層が堆積している。下層から中層にかけての2層からは、椀形鍛冶滓を主体とした、鍛冶炉の操業によって排出されたと考えられる鉄滓が多量に出土している。本遺構から南側に数十m離れた県埋文センター調査地区において、鍛冶炉が検出されており、本遺構から出土した鉄滓は、この鍛冶炉から排出され、廃棄された可能性が高い。本遺構から出土した鍛冶関連遺物は、炉壁(溶解物を含む)392g、鍛冶滓772g、流動滓90g、椀形鍛冶滓7,777g、椀形鍛冶滓(含鉄)2,370g、鉄塊系遺物()20g、含鉄鉄滓632g、鉄器16g、総重量12,069gである。

本遺構の堆積土は、鉄滓を多量に混入する2層が主体をなしていることから、人為的要因が強いと考えられる。

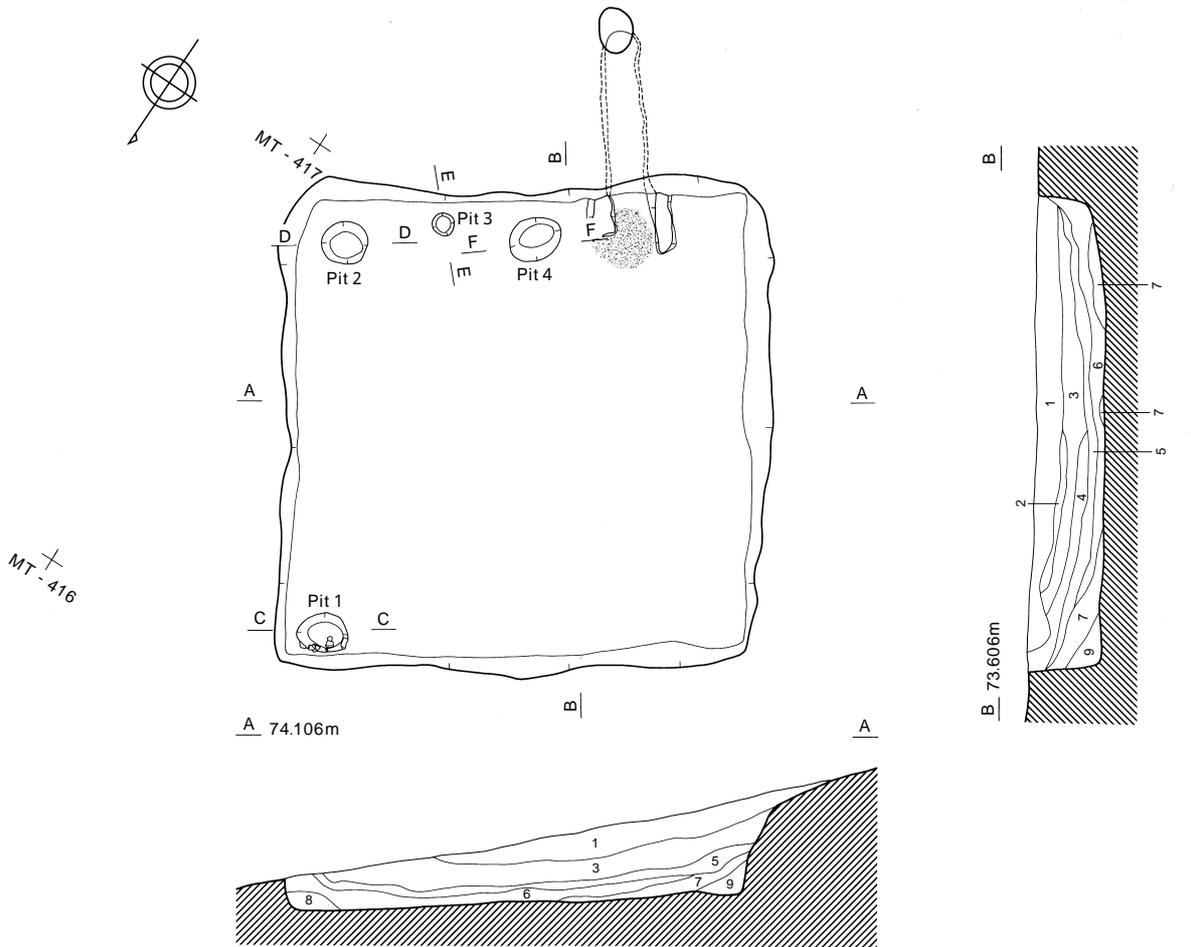
(設楽)



第467図 SI - 245



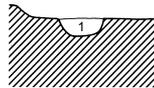
第468図 SI - 245



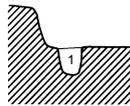
SI - 246 Pit 1
C 73.206m C



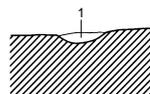
SI - 246 Pit 2
D 73.206m D



SI - 246 Pit 3
E 73.206m E



SI - 246 Pit 4
F 73.206m F



SI - 246

- | | | | |
|-----|---------|------|-------------------|
| 第1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | ローム粒少量 |
| 第2層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ローム粒少量、ロームブロック微量 |
| 第3層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 第4層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ローム粒少量、炭化物微量 |
| 第5層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 炭化物微量、火山灰(B-Tm)混入 |
| 第6層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ローム粒少量、炭化物微量 |
| 第7層 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | ローム粒少量、焼土粒微量 |
| 第8層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | |
| 第9層 | 10YR4/6 | 褐色土 | |

Pit 2

- | | | | |
|-----|---------|------|---------------------|
| 第1層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 炭化物・ロームブロック少量、焼土粒微量 |
|-----|---------|------|---------------------|

Pit 3

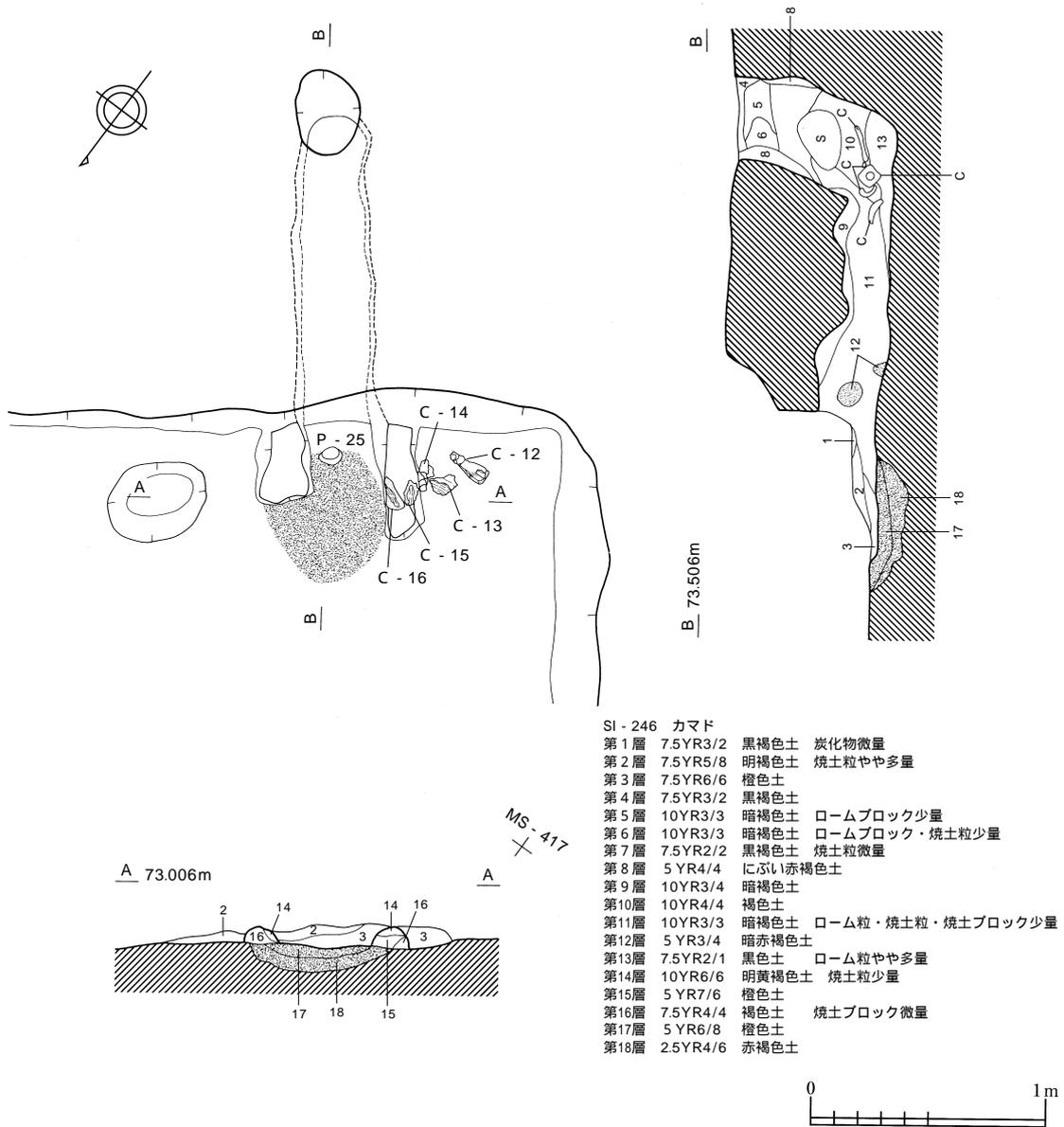
- | | | | |
|-----|---------|------|-------|
| 第1層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 炭化物微量 |
|-----|---------|------|-------|

Pit 4

- | | | | |
|-----|----------|------|-----------|
| 第1層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 炭化物・焼土粒微量 |
|-----|----------|------|-----------|



第469図 SI - 246



第470図 SI - 246

SI - 246 (第469、470図)

[位置] グリッドMR・MS - 416・417で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、392×390×118cmを測る。面積は15.162m²を測る。

[壁] 壁高は、北西壁58cm、南西壁73cm、南東壁38cm、北東壁26cmを測る。断面形はaで、やや外傾しながらほぼ垂直に立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、堅緻である。

[壁 溝] なし。

[ピット] 竪穴内から4基検出した。規模は、Pit 1 = 41 × 32 × 17cm、Pit 2 = 37 × 36 × 15cm、Pit 3 = 19 × 18 × 22cm、Pit 4 = 44 × 40 × 9 cmを測る。

[カマド] 住居南東壁3(74:26)の位置から検出している。構造は、地下式で、袖部幅71cm、煙道長142cmを測る。主軸はN - 144° - Eである。袖は粘土によって構築されており、芯材は装填されていない。火床面の範囲は57 × 52cmを測る。火床面の直上には、燃焼部天井の崩落土と考えられる3層が堆積している。煙道部の底面は、火床面と同じレベルを保ち、煙出部で立ち上がる。燃焼部、煙道部の残存状態からみて、本遺構のカマドは、意図的な破壊は行われていないと考えられる。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 9層に分層した。下層は、黒褐色、暗褐色を呈する土層、北西～南西壁際の下層には壁の崩落土と考えられる褐色を呈する土層、中層は暗褐色を呈する土層、上層は黒色を呈する土層が堆積している。本遺構は、黒褐色、暗褐色を呈する土層がレンズ状に堆積していることから、自然堆積を呈すると思われる。

(設 楽)

2. 竪穴遺構

本報告における竪穴遺構とは竪穴式住居跡と異なりカマド相当施設を持たない遺構について適用した。作業施設、土坑状の機能を持つものも含まれる。類型化にあたって、平面プラン・断面形等の抽出については、竪穴式住居跡と同様の取扱いとした。

S I - 25 (第471図)

[位 置] グリッドL S - 294で検出した。

[重 複] S I - 26、S K - 42と重複している。本遺構の堆積土がS I - 26、S K - 42の堆積土を切っており本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 不整形を呈し、260 × 245 × 33cmを測る。床面積は5.964m²である。

[壁] 壁高は、北壁20cm、東壁15cm、南壁17cm、西壁33cmを測る。断面形はaで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁 溝] なし。

[ピット] なし。竪穴内北東側より1基検出した。規模は36 × 27 × 11cmである。

[その他の付属施設] 南壁側から焼土溜りを64 × 63cmの範囲で検出した。ブロック化した焼土が堆積しており、カマドであった可能性も考えられるが詳細は不明である。また、南壁側のS K - 42の重複部分上から鉄滓が集中して出土した。

[堆積土] 1層に分層した。T o - a火山灰が粒状に混入している。本遺構の堆積土からは、炉壁12g、流動滓4g、椀形鍛冶滓2,548g、含鉄鉄滓224g、その他(工具付着滓)2g、総重量2,790gの鍛冶関連遺物が出土している。近隣に存在した鍛冶炉からの排出物が本遺構に廃棄されたと考えられる。埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木 村)

S I - 26 (第471図)

[位置] グリッドL S - 294で検出した。

[重複] S I - 25、S K - 42と重複している。本遺構の堆積土がS I - 25に切られており本遺構の方が古い。S K - 42との関係は、S I - 25の重複上にあり、本遺構との新旧関係については不明である。

[平面形・規模] 切り合いのため、全体形等の詳細は不明であるが、残存部分から長方形を呈したものと考えられ、190×(55)×22cmを測る。

[壁] 切り合いのため東壁側の情報は欠落している。残存部分での壁高は、北壁16cm、南壁5cm、西壁20cmを測る。断面形は(a)で、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 切り合いのため詳細については不明であるが、残存部分については大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 1層に分層した。大谷火山灰層主体の地山土中心の堆積で埋め戻し等による人為的堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 38 (第471図)

[位置] グリッドL Y - 305で検出した。

[重複] S I - 40、S K - 51と重複している。新旧関係は、土層堆積からS I - 40 < S K - 51 < S I - 38の関係である。

[平面形・規模] 方形を呈し、263×190×74cmを測る。床面積は4.802㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁48cm、東壁69cm、南壁70cm、西壁57cmを測る。断面形はcで、壁上部の一部で緩やかに外傾しながら立ち上がる。また、S K - 51との重複部分については、やや内傾があった立ち上がりを持つ。壁面は、S I - 40、S K - 51との重複部分についてはやや脆弱で、他の部分については堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

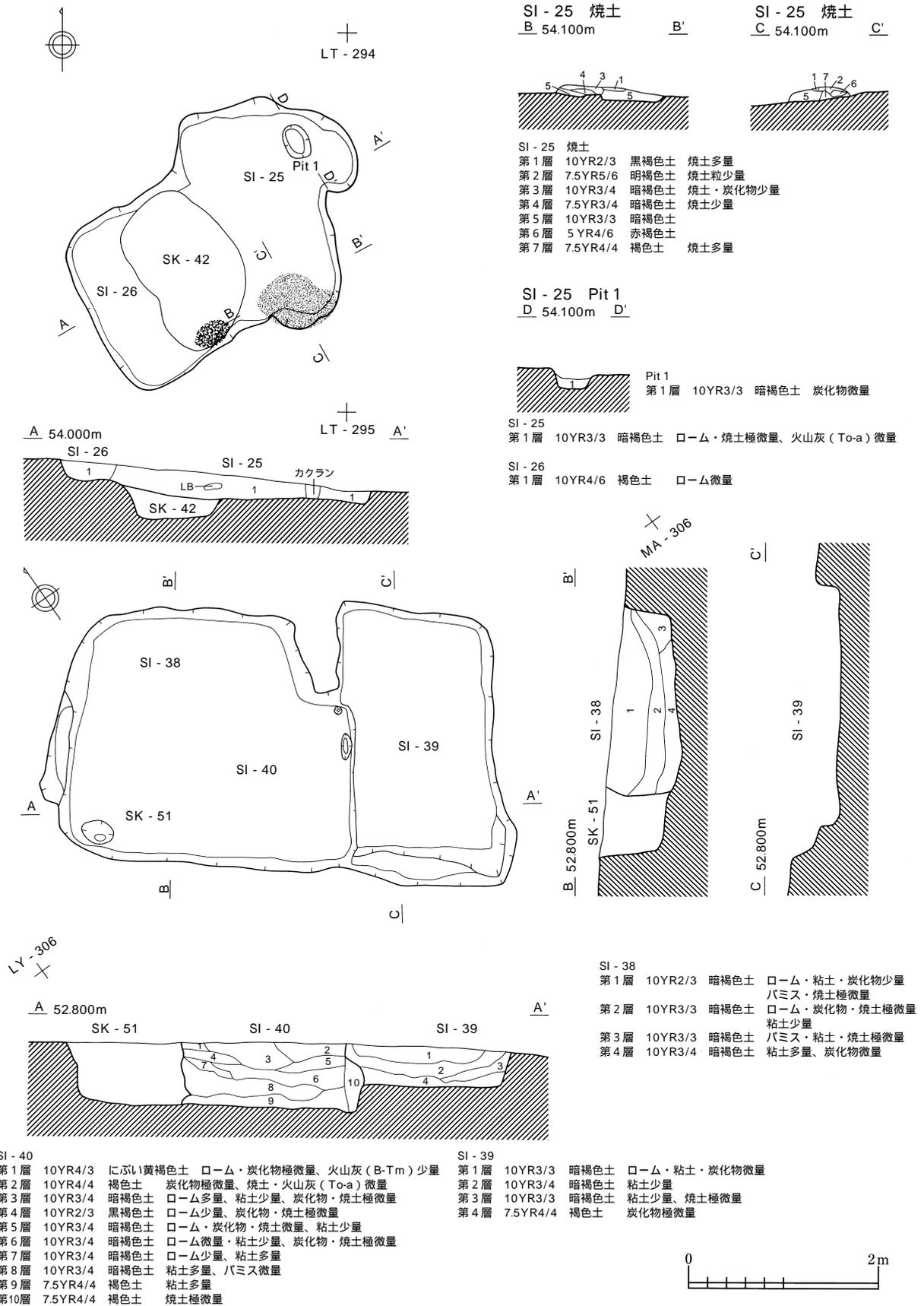
[堆積土] 4層に分層した。最下層の堆積する第4層中に粘土が多量に混入しており、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。

(木村)

S I - 39 (第471図)

[位置] グリッドL Z - 305・306、L Y - 306で検出した。

[重複] S I - 40と重複している。本遺構がS I - 40の堆積土を切っており、本遺構の方が新しい。



第471図 SI - 25・26(上段) SI - 38~40(下段)

[平面形・規模] 長方形を呈し、 $294 \times 173 \times 44\text{cm}$ を測る。床面積は 5.086m^2 を測る。

[壁] 壁高は、北壁 24cm 、東壁 37cm 、南壁 50cm 、西壁 42cm を測る。断面形はeで、南壁側に棚状の段を有する。壁面は、S I - 40との重複部分はやや脆弱で、他の部分については堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面は堅緻である。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 4層に分層した。大谷火山灰層主体の地山土が最下層に堆積しており、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。また、S I - 38の堆積土と類似しており、本遺構とS I - 38の関係は、同時期に廃棄された可能性が考えられる。

(木村)

S I - 40 (第471図)

[位置] グリッドL Y - 305・306で検出した。

[重複] S I - 38・39、S K - 51と重複している。新旧関係は、土層堆積からいずれの遺構よりも本遺構が古い。

[平面形・規模] 切り合いのため、平面形についての詳細は不明であるが、S K - 51の重複部分まで延び、長方形を呈したものと考えられ、 $320 \times (190) \times 65\text{cm}$ を測る。床面積は 6.08m^2 を測る。

[壁] 北壁側がS I - 38、東壁側がS I - 39、西壁側がS K - 51との重複部分であるため詳細は不明であるが、南壁側の壁高は 63cm を測る。断面形は(a)で、垂直に近い形で立ち上がる。南壁側の壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏がある。床面は堅緻である。

[壁溝] 竪穴東壁北隅の部分に浅いピット状の掘り込みを検出しており、板材の設置痕の可能性が考えられる。深さは 3cm を測る。

[ピット] S K - 51と重複部分からピット1基を検出した。明確に本遺構に帰属したか不明であるが、記述に際して本遺構に帰属させた。規模は $34 \times 25 \times 13\text{cm}$ を測る。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 10層に分層した。全般的にロームブロックが混入しており、急激な埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。第1層中からB - T m火山灰、第2層中からT o - a火山灰を粒状に検出した。

(木村)

S I - 41 (第472図)

[位置] グリッドL Z - 301・302で検出した。

[重複] S K - 61と重複している。本遺構がS K - 61の堆積土を切っており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 平面は台形を呈し、 $210 \times 197 \times 66\text{cm}$ を測る。床面積は 3.858m^2 である。

[壁] 壁高は、北西壁 47cm 、南西壁 63cm 、北東壁 33cm 、南東壁 58cm を測る。断面形はbで、底面からほぼ垂直に立ち上がり、壁上部で緩やかな傾斜がみられる。

[床] 月見野火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。平坦である。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 9層に分層した。下層の壁際には、ローム粒を多量に混入し、黒色を呈する第9層が堆積し、南西壁の第9層直上においては、焼土を多量に混入する第7層が部分的に堆積している。そのほか、黒色、黒褐色を主体とする土層である。中層から上層にかけての第3層においては、To-a火山灰を確認できる。下層においては、焼土を混入する第7層、中層においてはロームブロックを多量に混入する第6層を確認できることから、本遺構の堆積は人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 43 (第472図)

[位置] グリッドMD・ME - 300で検出した。

[重複] SD - 05と重複している。本遺構がSD - 05の堆積土を切っており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 平面は長方形を呈し、240×130×60cmを測る。床面積は2.9312m²である。

[壁] 壁高は、南西壁25cm、南東壁36cmを測る。断面形はdで、やや外反しながら緩やかに立ち上がる。

[床] 月見野火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。床面の中央南東側が部分的に赤化しており、周辺から炭化物を少量確認できた。赤化部分の範囲は、42×35cmである。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 3層に分層した。下層において、黒色を呈する3層、上層において褐色を呈する1層が部分的に確認できるが、堆積土の大半は、炭化物を少量混入し黒褐色を呈する2層である。本遺構の堆積は人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 45 (第472図)

[位置] グリッドMD・ME - 299で検出した。

[重複] S I - 44と重複している。本遺構の堆積土がS I - 44に切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 東側から南東側がS I - 44に切られているため、明確な平面形、規模は不明であるが、平面は隅丸方形を呈すると思われる。規模は推定で、294 × 274 × (41) cmを測る。

[壁] 壁高は、南西壁25cm、南東壁36cmを測る。断面形はaで、ほぼ垂直に立ち上がる。

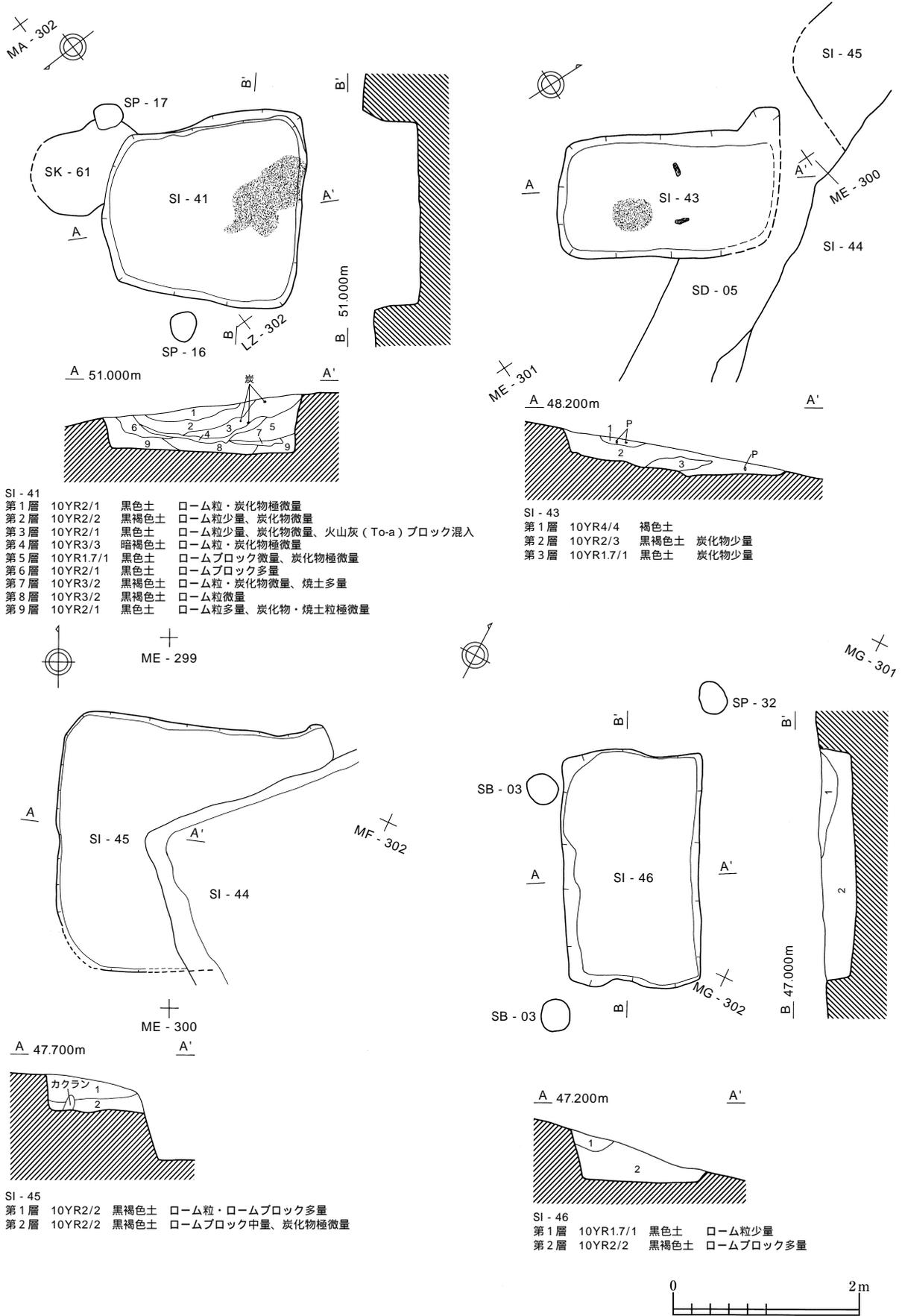
[床] 月見野火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 2層に分層した。いずれも黒褐色を呈する土層であるが、上層において、ロームブロックを多量に混入する。本遺構の堆積は人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)



第472図 SI - 41(上段左) SI - 43(上段右) SI - 45(下段左) SI - 46(下段右)

S I - 46 (第472図)

[位置] グリッドMF - 301・302で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面は長方形を呈し、252×144×58cmを測る。床面積は3.676㎡である。

[壁] 壁高は、北西壁34cm、南西壁53cm、北東壁13cm、南東壁25cmを測る。断面形はdで、やや外反しながら緩やかに立ち上がる。

[床] 月見野火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 2層に分層した。上層は黒色を呈する土層、下層は黒褐色を呈する土層であり、下層の黒褐色土にはロームブロックが多量に混入している。本遺構の堆積は、堆積土の大半がロームブロックを多量に混入し黒褐色を呈する層で占められることから、埋め戻し等の人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 47 (第473図)

[位置] グリッドMD - 304・305で検出した。

[重複] S P - 34と重複している。本遺構がS P - 34の堆積土を切っており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 平面は長方形を呈し、282×172×66cmを測る。床面積は4.850㎡である。

[壁] 壁高は、西壁60cm、東壁32cmを測る。断面形はaで、ほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 月見野火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 3層に分層した。下層は暗褐色を呈する土層、中層は黒褐色を呈する土層、上層は焼土ブロックを混入し、暗褐色を呈する土層である。焼土ブロックを混入する上層の暗褐色土は、土砂の廃棄に伴うものと考えられることから、本遺構の堆積は人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 49 (第473図)

[位置] グリッドMC - 305・306で検出した。

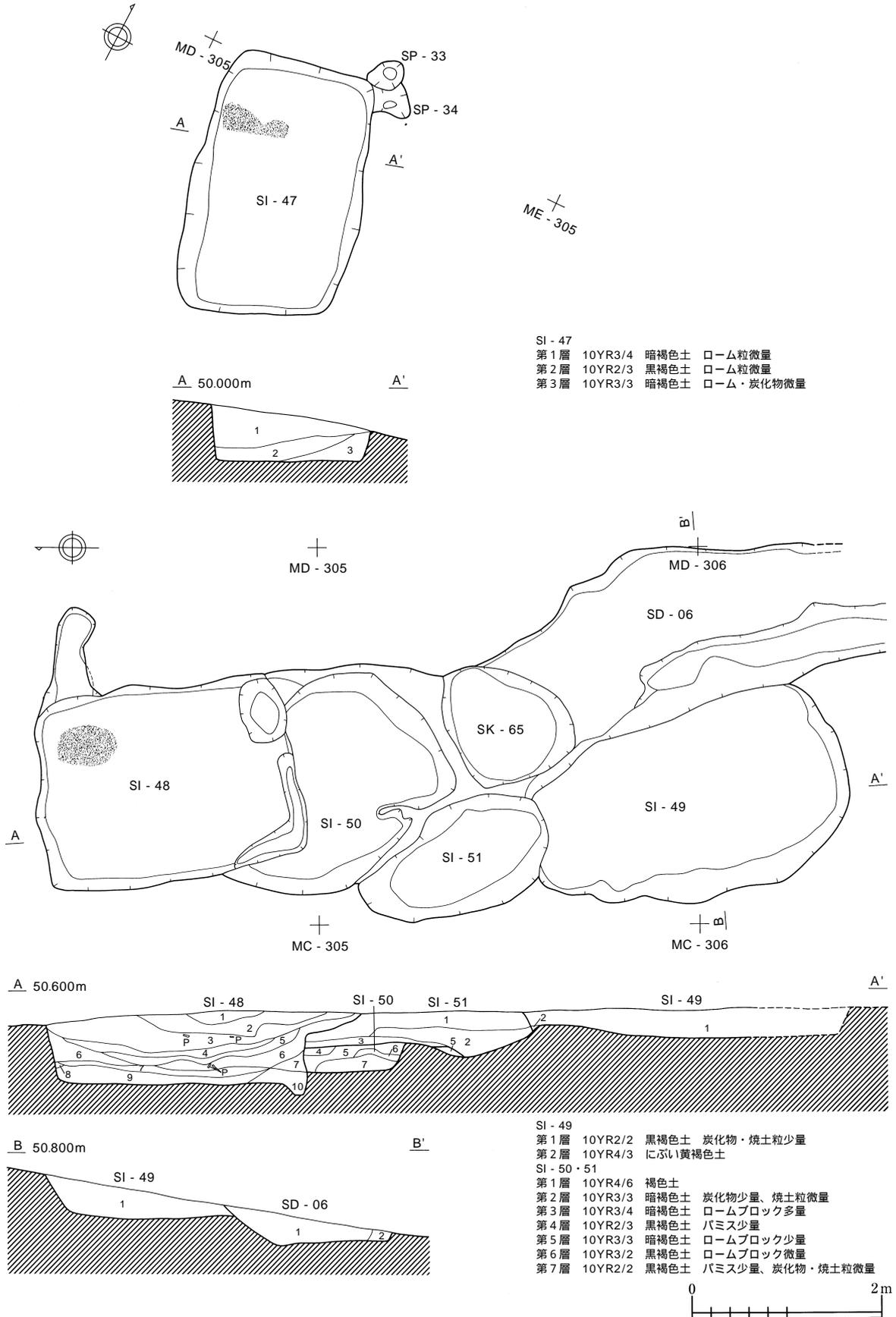
[重複] S I - 51、S K - 64、S D - 06と重複している。新旧関係は、S D - 06 > S I - 49 > S I - 51 > S K - 64である。

[平面形・規模] 切り合いにより、明確な平面形・規模は不明であるが、残存長で(335)×(192)×32cmを測る。平面形は不整形を呈すると推定される。床面積は推定で6.235㎡である。

[壁] 壁高は、西壁41cm、南壁29cmを測る。断面形はbで、やや外反しながら緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[ピット] なし。



第473図 SI - 47(上段) SI - 49 ~ 51(下段)

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 2層に分層した。S I - 51との重複部分において、にぶい黄褐色を呈する2層が確認できるが、それ以外の部分は黒褐色を呈する1層が堆積している。にぶい黄褐色を呈する2層は、脆弱な重複部分の床面として充填された土と考えられる。本遺構の堆積は、人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 50 (第473図)

[位置] グリッドMC - 304・305で検出した。

[重複] S I - 48、S I - 51、S K - 65と重複している。新旧関係は、S I - 48 > S I - 51 > S K - 65 > S I - 50である。

[平面形・規模] 切り合いにより、明確な平面形・規模は不明であるが、残存長で(270) × (233) × 64cmを測る。平面形は不整形を呈すると推定される。

[壁] 不明である。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 4層に分層した。下層は黒褐色、上層は暗褐色を主体とする土層である。元来、さらに上位に土層が堆積していたと考えられるが、S I - 51構築時に削平されたと考えられる。本遺構の堆積は、人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 51 (第473図)

[位置] グリッドMC - 305で検出した。

[重複] S I - 49、S I - 50、S K - 65と重複している。新旧関係は、S I - 49 > S I - 51 > S K - 65 > S I - 50である。

[平面形・規模] 切り合いにより、明確な平面形・規模は不明であるが、残存長で(205) × (116) × 49cmを測る。

[壁] 不明である。

[床] 部分的に大谷火山灰層の地山を床面とし、それ以外は、S I - 50の堆積土を掘り込んで、ロームブロックを多量に混入する暗褐色土を貼って床面としている。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 3層に分層した。下層は、炭化物、焼土粒が少量混入した暗褐色土、上層は褐色土である。本遺構の堆積は、人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 52 (第474図)

[位置] グリッドME - 306・307で検出した。

[重複] SB-04と重複している。本遺構が、SB-04のP1の上部に構築されていることから、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 長方形を呈し、330×196×86cmを測る。

[壁] 北壁27cm、西壁60cm、東壁4cm、南壁31cmを測る。断面形はaでほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 月見野火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。斜面上位に相当する西側から、斜面下位に相当する東側に向かって床面が緩やかに傾斜している。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 10層に分層した。下層～中層は、暗褐色、黒褐色を呈する土層、上層は黒褐色を呈する土層である。これらの土層がレンズ状の堆積状況を呈しており、自然堆積と考えられる。

(設楽)

SI-53(第474図)

[位置] グリッドME-309・310で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、190×174×64cmを測る。

[壁] 北壁48cm、西壁62cm、東壁32cm、南壁45cmを測る。断面形はdで緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[床] 月見野火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁溝] 部分的に欠落するが、断続的にほぼ全周して検出した。深さは平均5cmである。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] 南東隅において、張出部を検出した。確認面から底面までの深さは、10cmから17cmである。底面において被熱の痕跡は確認できず、覆土中からも焼土、炭化物は確認できなかった。また、竪穴の床面においても、火床面は確認できなかったことから、カマドの煙道とは考えられない。出入口施設であった可能性がある。

[堆積土] 3層に分層した。竪穴内の堆積土は、東壁の壁溝に堆積している黒褐色土を除けば、ローム粒、ロームブロックを少量混入し黒色を呈する土層によるものである。張出部分には、ロームブロックを少量混入する暗褐色土が堆積している。本遺構の堆積土は、埋め戻しによる人為的要因が強いと考えられる。

(設楽)

SI-56(第474図)

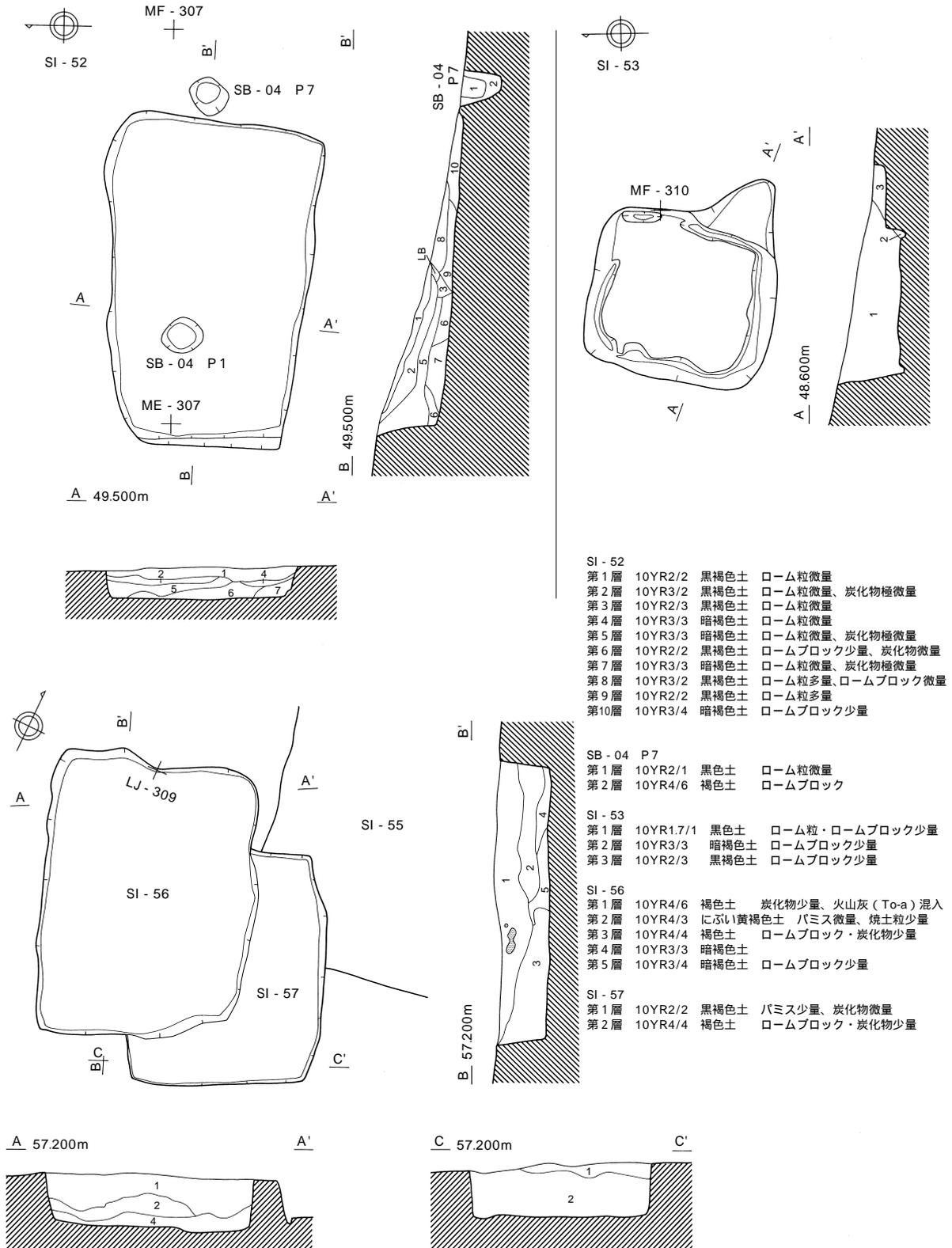
[位置] グリッドLI-309、LJ-309で検出した。

[重複] SI-57と重複している。本遺構がSI-57の堆積土を切っており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 長方形を呈し、270×216×61cmを測る。

[壁] 北西壁51cm、南西壁47cm、北東壁48cm、南東壁50cmを測る。断面形はaでほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。



第474図 SI - 52(上段左) SI - 53(上段右) SI - 56・57(下段)

[壁 溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 5層に分層した。下層は暗褐色を主体とする土層、中層から上層は褐色を主体とする土層である。上層に堆積している、褐色を呈する1層では、T o - a火山灰をブロック状に確認でき、二次堆積と考えられる。本遺構の堆積は、褐色を呈する土層を主体としており、埋め戻しによる人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 57 (第474図)

[位 置] グリッドLJ - 309で検出した。

[重 複] S I - 56、S I - 55と重複している。新旧関係は、S I - 56 > S I - 57 > S I - 55である。

[平面形・規模] 長方形を呈し、(240) × (202) × 58cmを測る。切り合いにより、北西側は残存していないため、床面積は不明である。

[壁] 北東壁53cm、南西壁46cmを測る。断面形はaでほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁 溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 2層に分層した。堆積土は、下層から上層まで、褐色を呈する土層であり、上層の北東側において、黒褐色を呈する土層が確認できた。本遺構の堆積は、褐色を呈する土層によるものであることから、人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 60 (第475図)

[位 置] グリッドLM・LN - 306で検出した。

[重 複] S I - 58と重複している。本遺構の堆積土が、S I - 58に切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 切り合いにより、南西側から南東側にかけて残存していないが、方形を呈すると推定できる。規模は(318) × (258) × 38cmを測る。床面積は不明である。

[壁] 北壁30cm、東壁32cmを測る。断面形はaでほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁 溝] 北壁、東壁においては、断続的に周巡している。西壁の残存部分においては確認できなかったが、南壁の残存部分においては東壁からの壁溝が連続している。

[ピット] 竪穴内の南東隅から1基検出した。規模は49 × 44 × 17cmを測る。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 3層に分層した。壁溝部分において、暗褐色を呈する2層、黒褐色を呈する3層が堆積し

ているが、竪穴内の堆積土は、褐色を呈する土層によるものである。1層には、二次堆積と考えられる T o - a 火山灰がブロック状に混入している。本遺構の堆積は、埋め戻しによる人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 61 (第475図)

[位 置] グリッドLM・LN - 309で検出した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、194×168×40cmを測る。床面積は3.078m²を測る。

[壁] 北壁33cm、西壁37cm、東壁29cm、南壁40cmを測る。断面形はaでほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 月見野火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁 溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 5層に分層した。下層は、にぶい黄褐色を呈する土層、中層は、炭化物、焼土粒、ローム粒を混入する黒褐色を呈する土層、上層は、暗褐色を主体とし、上位に焼土層を有する土層である。本遺構の堆積は、焼土粒、炭化物を混入する土層によるものであり、土砂の廃棄を想定させることから、人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 62 (第475図)

[位 置] グリッドLN - 308で検出した。

[重 複] S I - 63、S D - 12と重複している。新旧関係は、S I - 62 > S D - 12 > S I - 63である。

[平面形・規模] 長方形を呈し、西壁において部分的に張出をもつ。規模は185×90×36cmで、床面積は1.665m²を測る。

[壁] 北壁27cm、西壁26cm、東壁25cm、南壁32cmを測る。断面形はcであり、西壁上部で一部緩やかな傾斜がみられる。

[床] 月見野火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

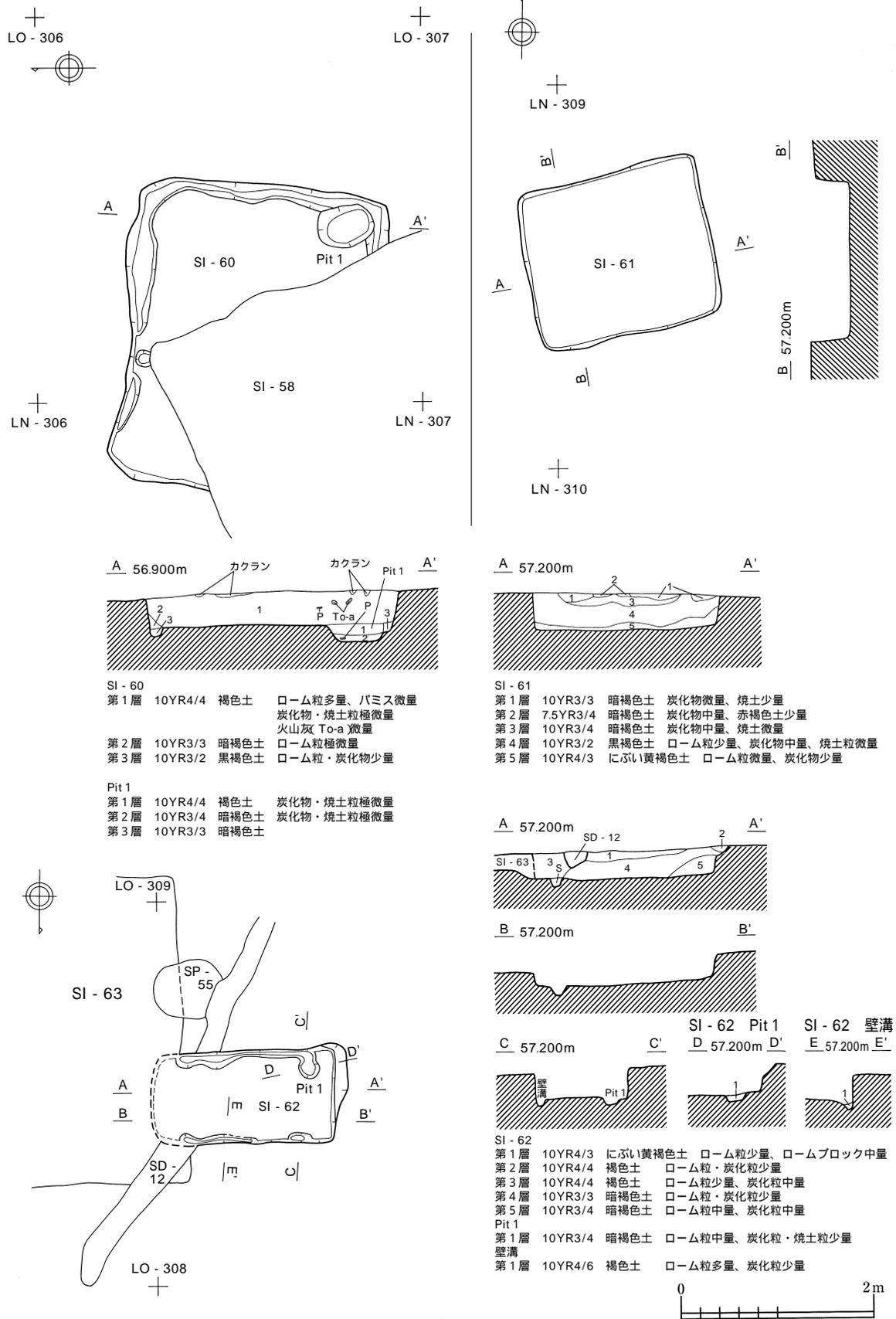
[壁 溝] 北壁と南壁において検出した。北壁における壁溝は断続的に残存し、南壁における壁溝は全体的に残存している。深さは平均7cmである。

[ピット] 竪穴内の南西隅付近において、1基検出した。規模は21×16×7cmである。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 5層に分層した。東壁付近は上層から中層まで、ローム粒、炭化物を混入し、褐色を呈する土層、それ以外の部分は、下層から中層まで暗褐色を呈する土層、上層はにぶい黄褐色を呈する土層が堆積している。ローム粒、炭化物を含む土層が西側から流れ込んだような状況を呈していることから、本遺構の堆積は、埋め戻しによる人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)



第475図 SI - 60(上段左)、SI - 61(上段右)、SI - 62(下段)

S I - 64 (第476図)

[位置] グリッドL O・L P - 308で検出した。

[重複] S I - 63と重複している。本遺構がS I - 63の堆積土を切っており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 方形を呈し、 $242 \times 220 \times 13$ cmで、床面積は 5.324m^2 を測る。

[壁] 北西壁10cm、南西壁12cm、南東壁12cm、北東壁7cmを測る。断面形はdであり、緩やかに立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。掘り方を有し、ロームブロック、炭化物、焼土粒を混入し、暗褐色を呈する6層が充填されている。

[壁溝] なし。

[ピット] 竪穴内より8基検出した。規模は、Pit 1 = $29 \times 29 \times 7$ cm、Pit 2 = $19 \times 17 \times 5$ cm、Pit 3 = $36 \times 26 \times 5$ cm、Pit 4 = $29 \times 19 \times 11$ cm、Pit 5 = $27 \times 25 \times 11$ cm、Pit 6 = $31 \times 31 \times 8$ cm、Pit 7 = $30 \times 24 \times 9$ cm、Pit 8 = $26 \times 26 \times 7$ cmを測る。Pit 1 ~ 5、8は、壁柱穴の可能性がある。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 掘り方を含めて6層に分層した。下層から壁際においては、にぶい黄褐色を呈する土層、中層には黒褐色を呈する土層、上層には暗褐色を呈する土層が堆積している。本遺構の堆積は、地山の土と黒褐色・暗褐色の土層が混在した状況を呈していることから、人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 69 (第476図)

[位置] グリッドL T - 308で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 台形を呈し、 $240 \times 201 \times 42$ cmで、床面積は 4.75m^2 を測る。

[壁] 北壁26cm、南壁42cmを測る。断面形はaであり、ほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 2層に分層した。下層は暗褐色、上層は黒褐色を呈する土層である。自然堆積を呈すると考えられる。

(設 楽)

S I - 80 (第476図)

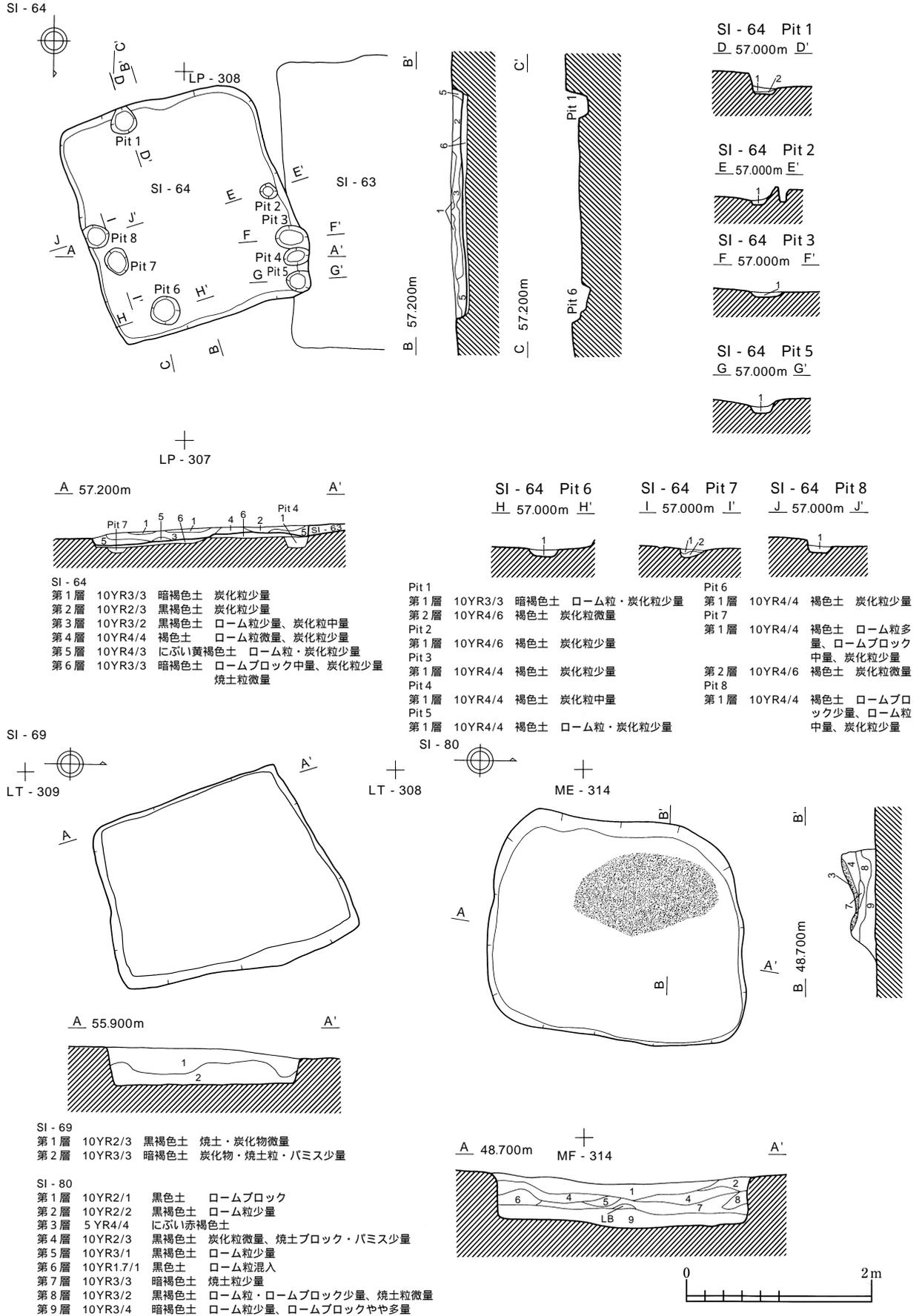
[位置] グリッドM E - 313・314で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 不整形を呈し、 $276 \times 234 \times 60$ cmで、床面積は 6.095m^2 を測る。

[壁] 北壁49cm、南壁47cmを測る。断面形はbであり、壁上部で緩やかな立ち上がりがみられる。

[床] 月見野火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。



第476図 SI - 64(上段) SI - 69(下段左) SI - 80(下段右)

[壁 溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 9層に分層した。下層は、暗褐色を呈し、ローム粒を少量、ロームブロックをやや多量に混入する土層、中層は暗褐色、黒褐色を主体する土層、上層は黒色を呈し、ロームブロックを混入する土層である。中層には焼土層が存在しており、土砂の廃棄が想定される。本遺構の堆積は、人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 83 (第206図)

[位 置] グリッドLR - 312で検出した。

[重 複] S I - 82と重複している。本遺構の堆積土がS I - 82によって切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 切りあいのため、全体形の詳細については不明であるが、残存部分から隅丸方形を呈したものと考えられ、 $180 \times (100) \times 16\text{cm}$ を測る。

[壁] 残存部分での壁高は、北壁15cm、東壁6cm、西壁9cmを測る。断面形はdで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面はやや脆弱である。

[床] 月見野火山灰層の地山を床面としている。床面はやや起伏があり、脆弱である。

[壁 溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 1層に分層した。黒褐色を呈し、パミス、ローム粒が少量混入する。自然堆積状況を呈する。

(木 村)

S I - 94 (第477図)

[位 置] グリッドLZ - 317で検出した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 不整形を呈する。 $242 \times 192 \times 52\text{cm}$ で、床面積は 4.472m^2 を測る。

[壁] 北壁23cm、南壁33cmを測る。断面形はdであり、緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[床] 月見野火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁 溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 4層に分層した。暗褐色・黒褐色を呈する土層を主体としている。自然堆積を呈すると考えられる。

(設 楽)

S I - 97 (第477図)

[位置] グリッドLZ・MA - 321で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈する。256×228×33cmで、床面積は5.454m²を測る。

[壁] 西壁33cm、東壁17cmを測る。断面形はdであり、緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 5層に分層した。本遺構の堆積は、暗褐色を呈する土層と、にぶい黄褐色、褐色を呈する土層が混在しており、人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 98 (第477図)

[位置] グリッドLZ・MA - 322で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 長方形を呈する。252×141×40cmで、床面積は3.553m²を測る。

[壁] 北西壁40cm、南東壁19cmを測る。断面形はdであり、緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[床] 月見野火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 8層に分層した。6～8層を切るようにして、1～5層がナベ底状の断面を呈して堆積している。本遺構は、廃絶後、6～8層を主体とする土層が廃棄され、それを再度掘り込んで構築された落ち込みに1～5層が堆積したと考えられる。6、7、8層は、土砂の廃棄によると考えられ、1～5層は、自然堆積を呈すると考えられる。

(設 楽)

S I - 99 (第477図)

[位置] グリッドLL・LM - 323で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 長方形を呈する。302×162×36cmで、床面積は4.688m²を測る。

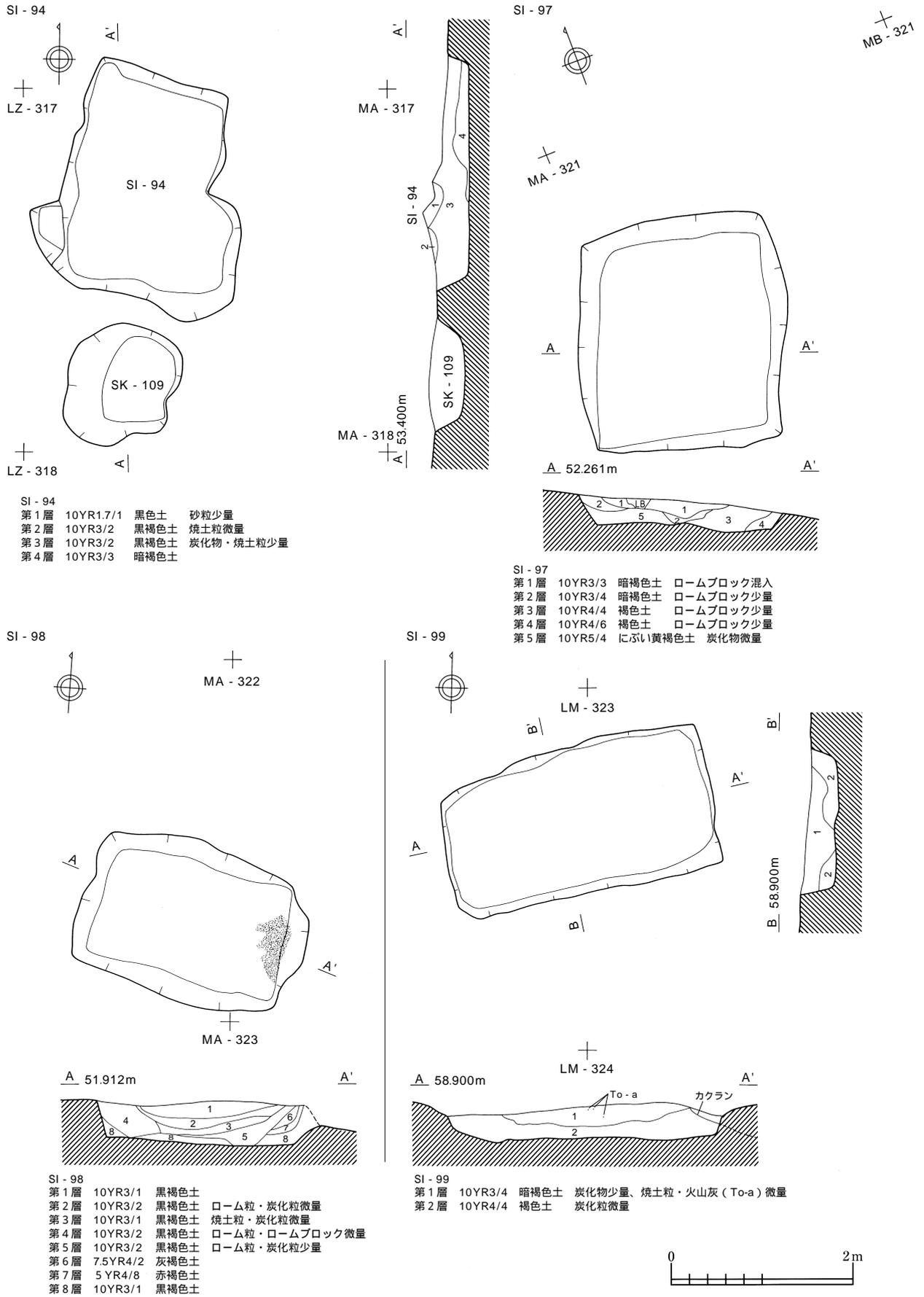
[壁] 北壁25cm、西壁27cm、東壁20cm、南壁36cmを測る。断面形はdであり、緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。



第477図 SI - 94(上段左) SI - 97(下段右) SI - 98(下段左) SI - 99(下段右)

[堆積土] 2層に分層した。下層は炭化物を混入し、褐色を呈する土層、上層は焼土粒、炭化物を混入し、暗褐色を呈する土層が堆積している。上層の1層には、T o - a火山灰がブロック状に混入している。本遺構の堆積は、人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 100 (第478図)

[位 置] グリッドL O - 322・323で検出した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈する。190×185×37cmで、床面積は3.515m²を測る。

[壁] 北壁35cm、南壁37cmを測る。断面形はaであり、ほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁 溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 3層に分層した。下層はロームブロックを少量混入し、にぶい黄褐色を呈する土層、中層は炭化物、焼土粒を少量混入し、暗褐色を呈する土層、上層は焼土粒、炭化物を混入し褐色を呈する土層である。本遺構の堆積は、人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 101 (第478図)

[位 置] グリッドL O - 323で検出した。

[重 複] S K - 122と重複している。本遺構がS K - 122を切っており本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 方形を呈する。199×197×37cmで、床面積は3.920m²を測る。

[壁] 北壁30cm、西壁40cm、東壁38cm、南壁38cmを測る。断面形はaであり、ほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

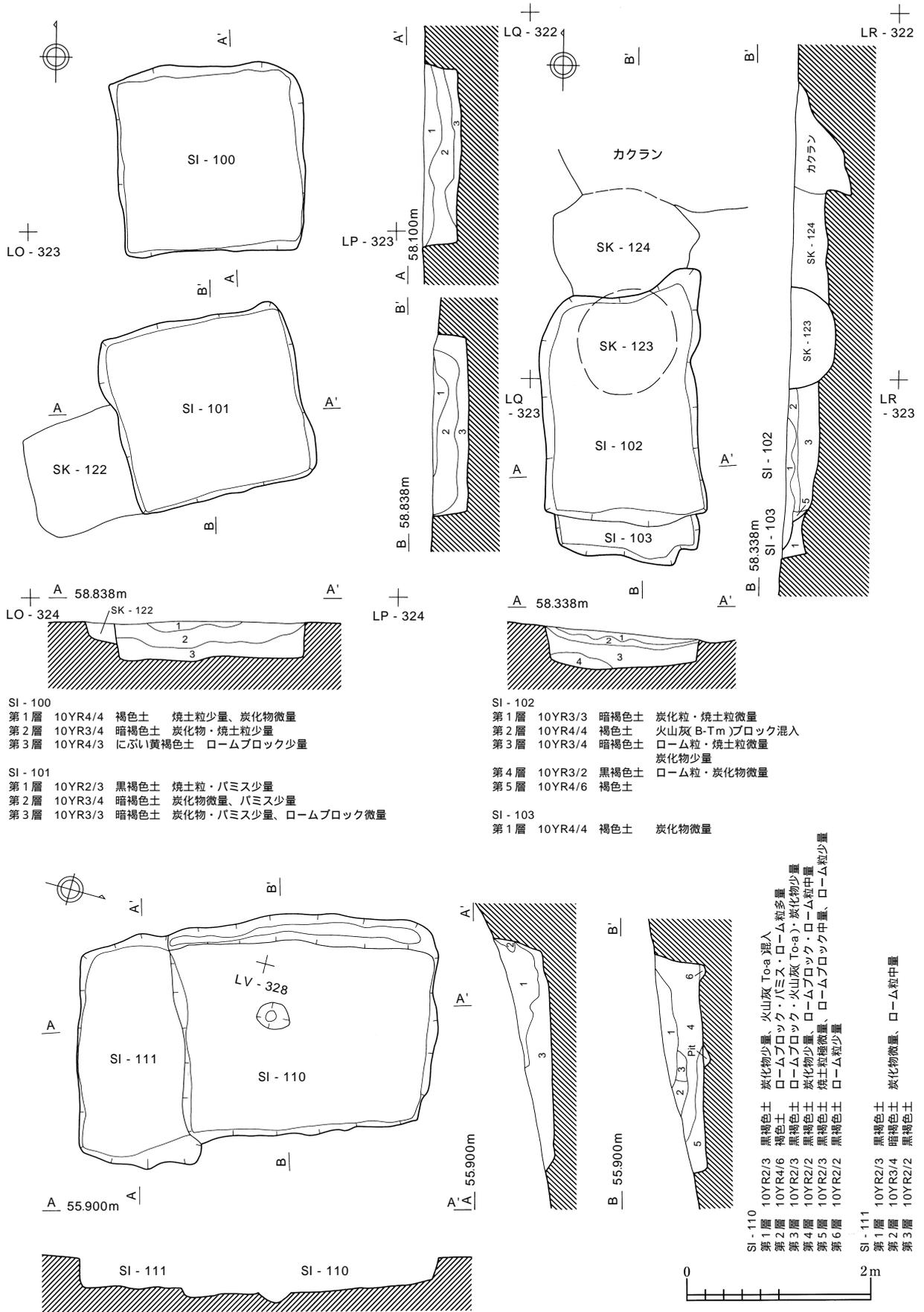
[堆積土] 3層に分層した。下層は炭化物、ロームブロックを混入し、暗褐色を呈する土層、中層は炭化物を混入し、暗褐色を呈する土層、上層は焼土粒を混入し黒褐色を呈する土層である。本遺構の堆積は、レンズ状を呈し、自然堆積と考えられる。

(設 楽)

S I - 102 (第478図)

[位 置] グリッドL Q - 322・323で検出した。

[重 複] S I - 103、S K - 123、S K - 124と重複している。新旧関係は、S K - 123 > S K - 124 > S I - 102 > S I - 103である。



第478図 SI - 100・101(上段左) SI - 102・103(上段右) SI - 110・111(下段)

[平面形・規模] 長方形を呈する。265×176×36cmで、床面積は4.664m²を測る。

[壁] 西壁36cm、東壁24cm、南壁10cmを測る。断面形はaであり、ほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 5層に分層した。下層は炭化物、焼土粒を混入し、暗褐色を主体とする土層、中層はB-Tm火山灰をブロック状に混入し、褐色を呈する土層、上層は炭化物、焼土粒を混入し暗褐色を呈する土層である。S I - 103との重複部分においては、褐色を呈する5層が確認でき、壁と考えられる。中層の褐色土は埋め戻しによるものと考えられ、本遺構の堆積は、人為的要因が強いと考えられる。

(設楽)

S I - 103 (第478図)

[位置] グリッドLQ - 323で検出した。

[重複] S I - 102と重複している。本遺構の堆積土がS I - 102に切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 切り合いにより、平面形は不明である。

[壁] 南壁26cmを測る。断面形はaであり、ほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 堆積土は、炭化物を混入し、褐色を呈する土層による単一層である。埋め戻しによるものと考えられる。

(設楽)

S I - 110 (第478図)

[位置] グリッドLU・LV - 327・328で検出した。

[重複] S I - 111と重複している。本遺構がS I - 111を切っており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 長方形を呈する。252×220×50cmを測る。床面積は5.554m²を測る。

[壁] 北壁24cm、西壁50cm、東壁14cm、南壁40cmを測る。断面形はaであり、ほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁溝] 西壁に沿って検出した。深さは6cmである。

[ピット] 竪穴内中央南側より、1基検出した。規模は36×29×11cmを測る。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 6層に分層した。下層から上層まで炭化物、焼土粒、ロームブロックを混入し、黒褐色を主体とする土層である。上層の1層と3層においては、T o - a火山灰が混入しており、2次堆積と考

えられる。本遺構の堆積は、人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 111 (第478図)

[位 置] グリッドL V - 328で検出した。

[重 複] S I - 110と重複している。本遺構がS I - 110に切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 切り合いにより、北壁側の情報が欠落しているが、 $220 \times (118) \times 60\text{cm}$ を測る。床面積は $(2.693) \text{m}^2$ を測る。

[壁] 西壁52cm、東壁10cm、南壁29cmを測る。断面形はaであり、ほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁 溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 3層に分層した。下層は暗褐色、上層は黒褐色を呈する土層である。本遺構の堆積は、人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 112 (第479図)

[位 置] グリッドL T・L U - 332で検出した。

[重 複] S I - 113と重複している。本遺構がS I - 113に切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 切り合いにより、正確な平面形、規模、床面積は不明であるが、残存規模で $210 \times (115) \times 36\text{cm}$ を測る。方形を呈すると推定できる。

[壁] 西壁30cm、東壁南壁28cmを測る。断面形はaであり、ほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁 溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 2層に分層した。いずれの土層についても炭化物・ロームブロックが混入する。自然堆積を呈する。

(設 楽)

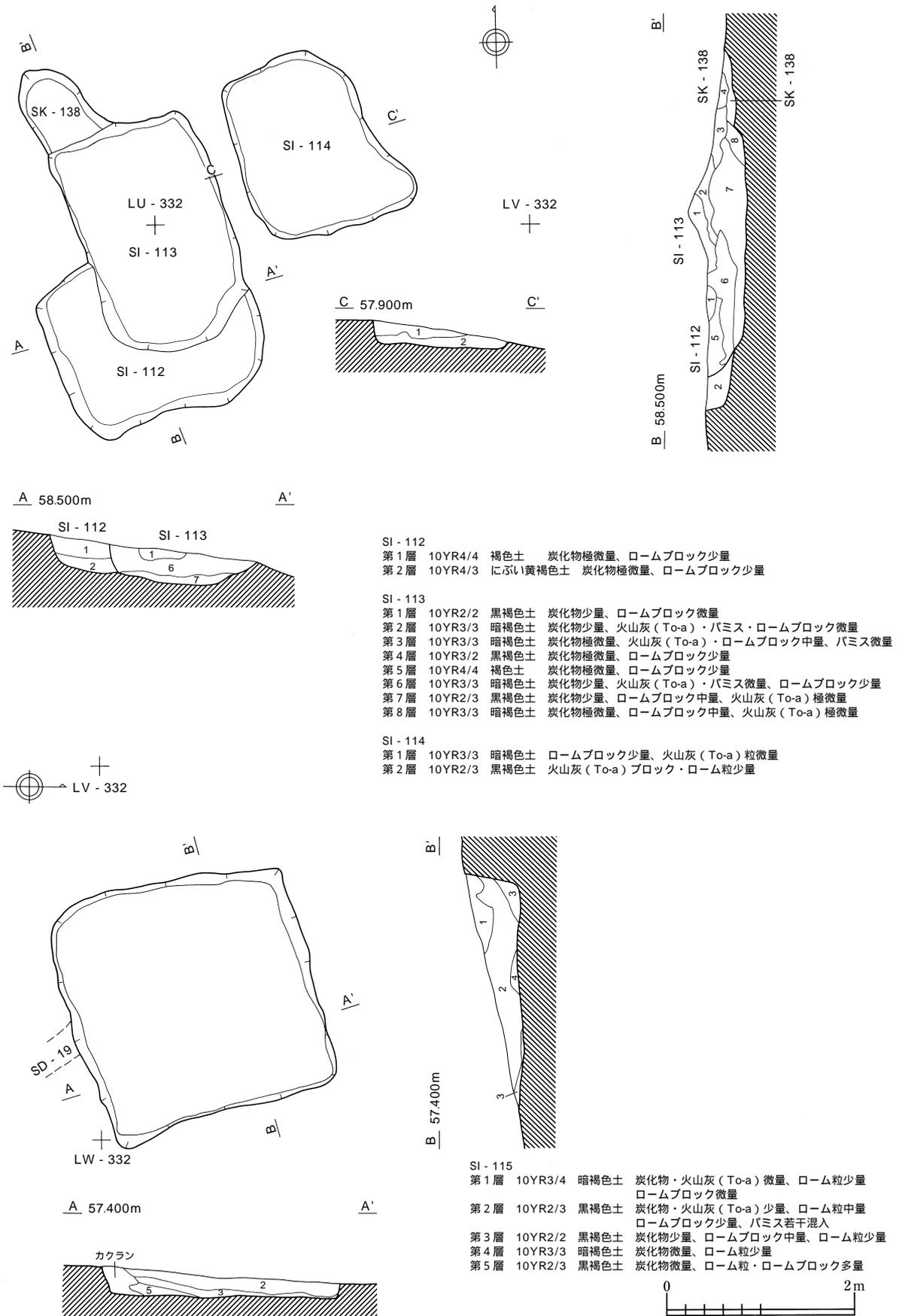
S I - 113 (第479図)

[位 置] グリッドL T・L U - 331・332で検出した。

[重 複] S I - 112、S K - 138と重複している。本遺構がS I - 112、S K - 138の堆積土を切っており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 長方形を呈し、規模は $278 \times 155 \times 37\text{cm}$ を測る。

[壁] 北壁18cm、西壁31cm、東壁27cm、南壁37cmを測る。断面形はdであり、緩やかな傾斜をもって立ち上がる。



第479図 SI - 112 ~ 114(上段) SI - 115(下段)

[床] 月見野火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁 溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 8層に分層した。上層において、褐色を呈する土層が部分的にみられるが、それ以外の部分は、ロームブロック、T o - a火山灰を混入し、暗褐色、黒褐色を主体とする土層が堆積している。本遺構の堆積は人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 114 (第479図)

[位 置] グリッドL U - 331・332で検出した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、南東側に張り出しをもつ。規模は165×135×22cmを測る。

[壁] 南西壁22cm、北東壁27cmを測る。断面形はaであり、ほぼ垂直に立ち上がる

[床] 月見野火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁 溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 2層に分層した。下層はロームブロック、T o - a火山灰を混入し黒褐色を呈する土層、上層は、T o - a火山灰、ローム粒を混入し暗褐色を呈する土層が堆積している。本遺構の堆積はロームブロック、ローム粒が混在した土層が主体を占めることから、人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 115 (第479図)

[位 置] グリッドL V - 331・332で検出した。

[重 複] S D - 19と重複している。本遺構がS D - 19の堆積土を切っており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 方形を呈し、260×256×59cmを測る。床面積は6.248m²を測る。

[壁] 北壁16cm、西壁56cm、南壁28cmを測る。断面形はaであり、ほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁 溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 5層に分層した。下層から中層は、炭化物、ロームブロックを混入し黒褐色を主体とする土層、上層は炭化物を混入し暗褐色を呈する土層である。上層の1層と中層の2層において、T o - a火山灰が確認できる。本遺構の堆積は人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 116 (第480図)

[位置] グリッドLV・LW - 332・333で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、355×310×80cmを測る。北壁において、拡張部分と考えられる、263×65cmほどの張出しを確認できた。床面積は11.005㎡を測る。

[壁] 北壁45cm、西壁80cm、東壁40cm、南壁67cmを測る。断面形はaであり、ほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 拡張前は、大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としているが、拡張後は、褐色を呈し白色粘土粒を混入する7層を貼って、その上面を床面としている。

[壁溝] 部分的に検出した。堆積土については、概ね褐色を呈し、白色粘土粒を混入する土層が確認でき、拡張後に貼った7層と同一層と認定できることから、本遺構の壁溝は拡張前に機能していたと考えられる。深さは18cmである。

[ピット] 竪穴内より、3基検出した。規模は、Pit 1 = 22×19×4cm、Pit 2 = 31×30×14cm、Pit 3 = 32×29×6cmを測る。いずれも柱穴として認定できない。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 貼り床を含めて7層に分層した。壁際に褐色、暗褐色を呈する土層、下層にはにぶい黄褐色を呈する土層、中層～上層には暗褐色を呈する土層が堆積している。上層に堆積している暗褐色土においては、ロームブロックを多量に混入していることから、本遺構の堆積は、人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 119 (第480図)

[位置] グリッドLV - 329、LW - 329・330で検出した。

[重複] SP - 276と重複している。本遺構がSP - 276に切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 長方形を呈し、278×133×34cmを測る。床面積は3.697㎡を測る。

[壁] 北壁13cm、西壁34cm、東壁5cm、南壁19cmを測る。断面形はaであり、ほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁溝] なし。

[ピット] なし。

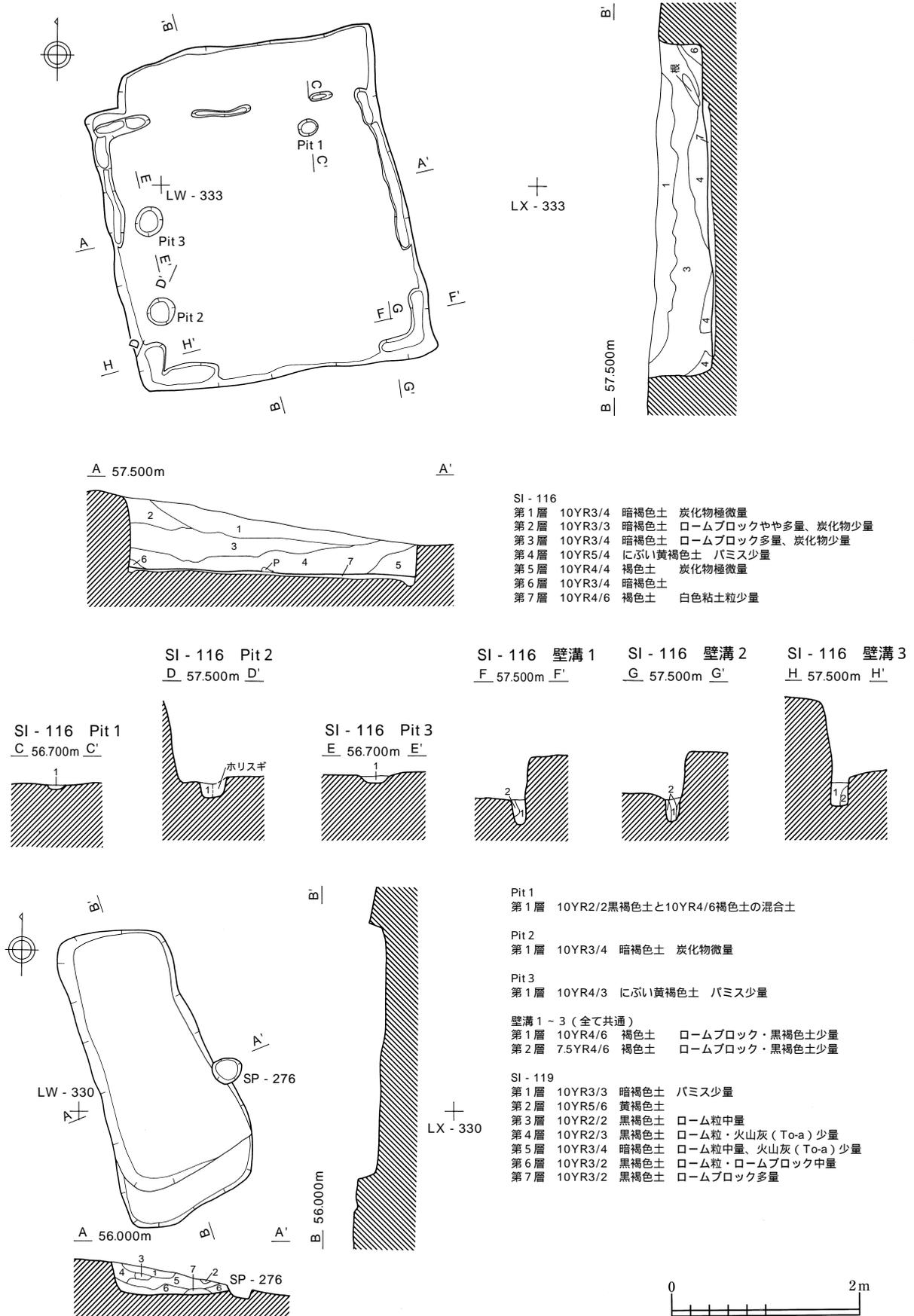
[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 7層に分層した。下層は黒褐色、上層は暗褐色を主体とする土層である。部分的にTo - a火山灰を少量混入する。本遺構の堆積は、土砂の廃棄に伴うと考えられるロームブロック、ローム粒を多量に混入する土層であることから、人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I 126 (第481図)

[位置] グリッドLL・LM - 338・339で検出した。



第480図 SI - 116(上段) SI - 119(下段)

- [重複] SK - 153と重複している。本遺構がSK - 153に切られており、本遺構の方が古い。
- [平面形・規模] 方形を呈し、 $249 \times 238 \times 29\text{cm}$ を測る。床面積は 5.926m^2 を測る。
- [壁] 北壁19cm、西壁29cm、東壁16cm、南壁28cmを測る。断面形はaであり、ほぼ垂直に立ち上がる。
- [床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。
- [壁溝] なし。
- [ピット] 竪穴内より5基検出した。規模は、Pit 1 = $30 \times 25 \times 6\text{cm}$ 、Pit 2 = $34 \times 32 \times 23\text{cm}$ 、Pit 3 = $39 \times 34 \times 7\text{cm}$ 、Pit 4 = $34 \times 32 \times 33\text{cm}$ 、Pit 5 = $40 \times 34 \times 7\text{cm}$ を測る。Pit 3、4は、柱穴としての機能を充足し得る深さを有するが、他の住居で見られる柱穴配置の規格性には当てはまらない。
- [その他の付属施設] 床面中央西側より、 $22 \times 16\text{cm}$ の赤化範囲を検出した。地床炉であった可能性がある。
- [堆積土] 12層に分層した。下層は、暗褐色を主体とする土層、中層から上層は黒褐色を主体とする土層である。上層において、To - a火山灰がブロック状に確認できる。本遺構の堆積は、土砂の廃棄に伴うと考えられるロームブロック、ローム粒を多量に混入する土層であることから、人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

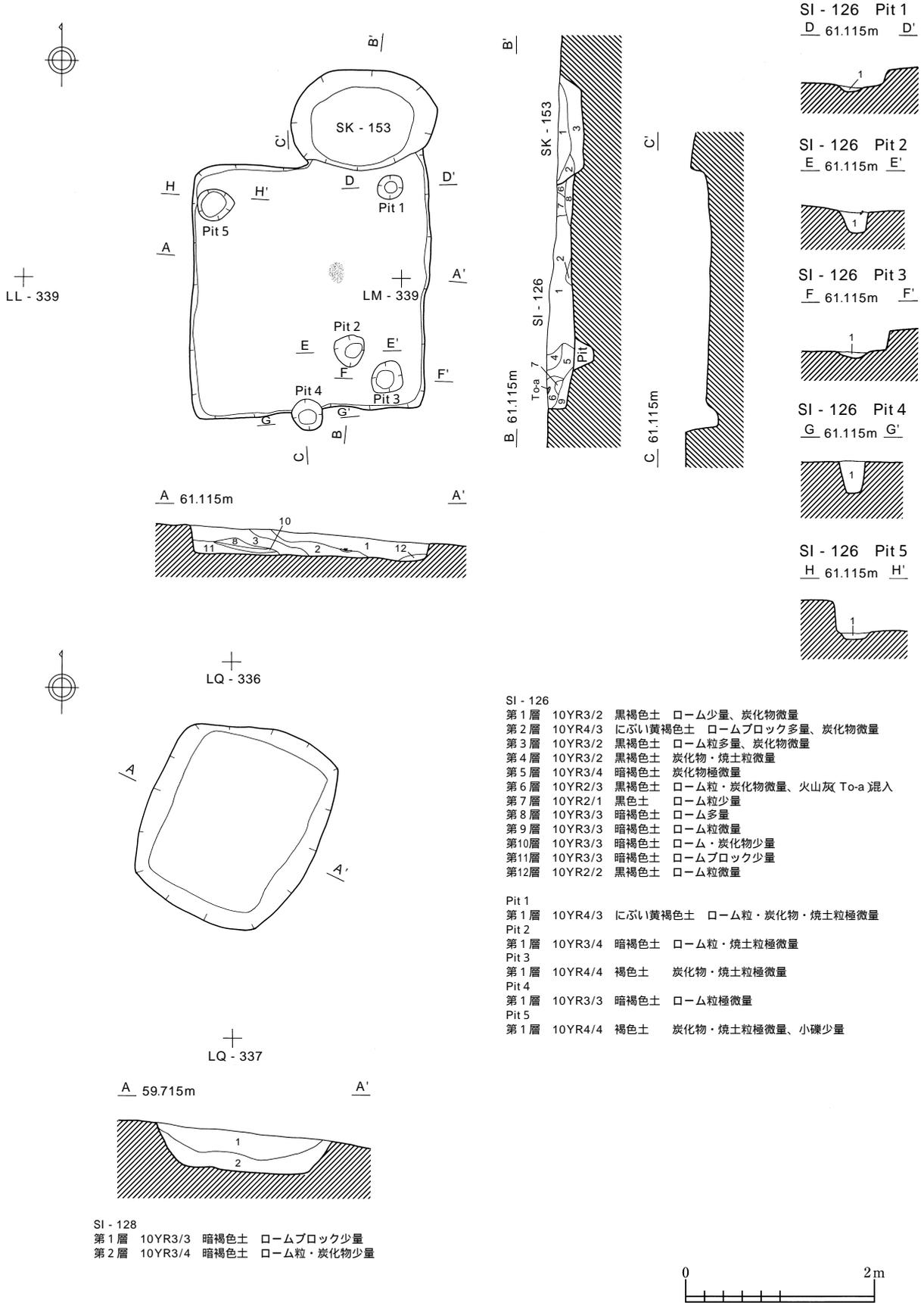
SI 128 (第481図)

- [位置] グリッドLP・LQ - 336で検出した。
- [重複] なし。
- [平面形・規模] 方形を呈し、 $199 \times 158 \times 43\text{cm}$ を測る。床面積は 3.084m^2 を測る。
- [壁] 北西壁45cm、南東壁34cmを測る。断面形はdであり、緩やかな傾斜をもって立ち上がる。
- [床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。
- [壁溝] なし。
- [ピット] なし。
- [その他の付属施設] なし。
- [堆積土] 2層に分層した。暗褐色を呈する土層が堆積している。自然堆積と考えられる。

(設 楽)

SI 130 (第482図)

- [位置] グリッドLZ - 334・335で検出した。西から東へ下る斜面上に位置している。
- [重複] SI - 131と重複している。本遺構がSI - 131の堆積土を切っており、本遺構の方が新しい。
- [平面形・規模] 斜面下位に相当する東側が削平されているため、詳しい平面形、規模は不明である。残存部分の規模・床面積は、 $359 \times (141) \times 30\text{cm}$ ・ 5.062m^2 を測る。
- [壁] 北壁19cm、西壁29cm、南壁12cmを測る。断面形はdであり、緩やかな傾斜をもって立ち上がる。
- [床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。



第481図 SI - 126(上段) SI - 128(下段)

[壁 溝] なし。

[ピット] 竪穴内より1基検出した。規模は50×32cmである。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 7層に分層した。暗褐色、褐色を主体とする土層が堆積している。上層にB-Tm火山灰が混入する。暗褐色土、褐色土が混在しており、本遺構の堆積は人為的要因が強い。

(設 楽)

S I 131 (第482図)

[位 置] グリッドLZ-334で検出した。西から東へ下る斜面上に位置している。

[重 複] S I - 130と重複している。本遺構がS I - 130に切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] S I - 130と重複しており斜面下位に相当する東側が削平されているため、詳しい平面形、規模は不明である。

[壁] 北壁19cm、西壁29cm、南壁12cmを測る。断面形はdであり、緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁 溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 2層に分層した。上層に褐色を呈する土層、下層に暗褐色を呈する土層が堆積している。ロームブロック、ローム粒が混入しており、本遺構の堆積は人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I 184 (第483図)

[位 置] グリッドLP・LQ-368で検出した。

[重 複] SP-338と重複している。本遺構がSP-338に切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 方形を呈し、199×172×43cmを測る。床面積は3.423m²を測る。

[壁] 北西壁29cm、南西壁42cm、北東壁20cm、南東壁22cmを測る。断面形はaであり、ほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 月見野火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。

[壁 溝] なし。

[ピット] なし。

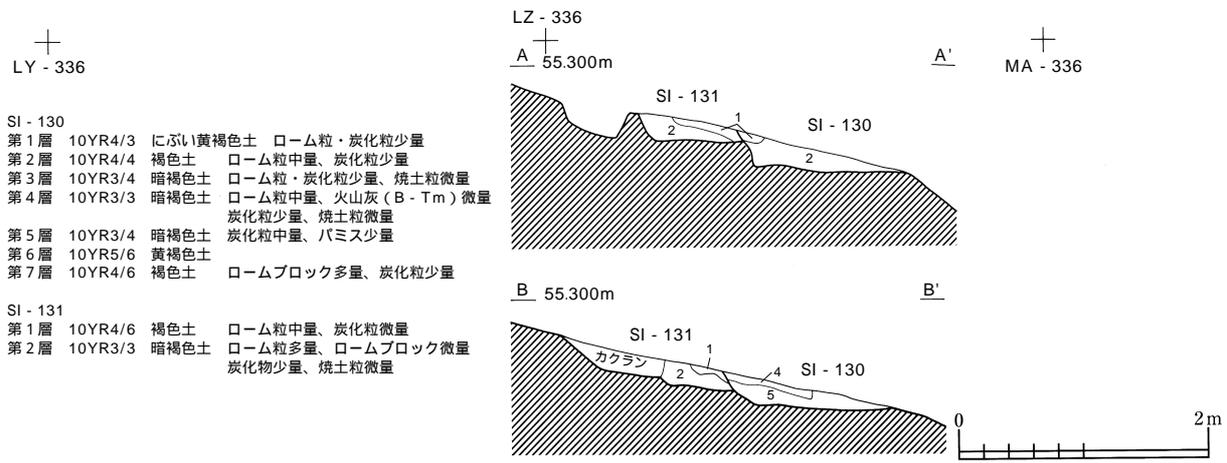
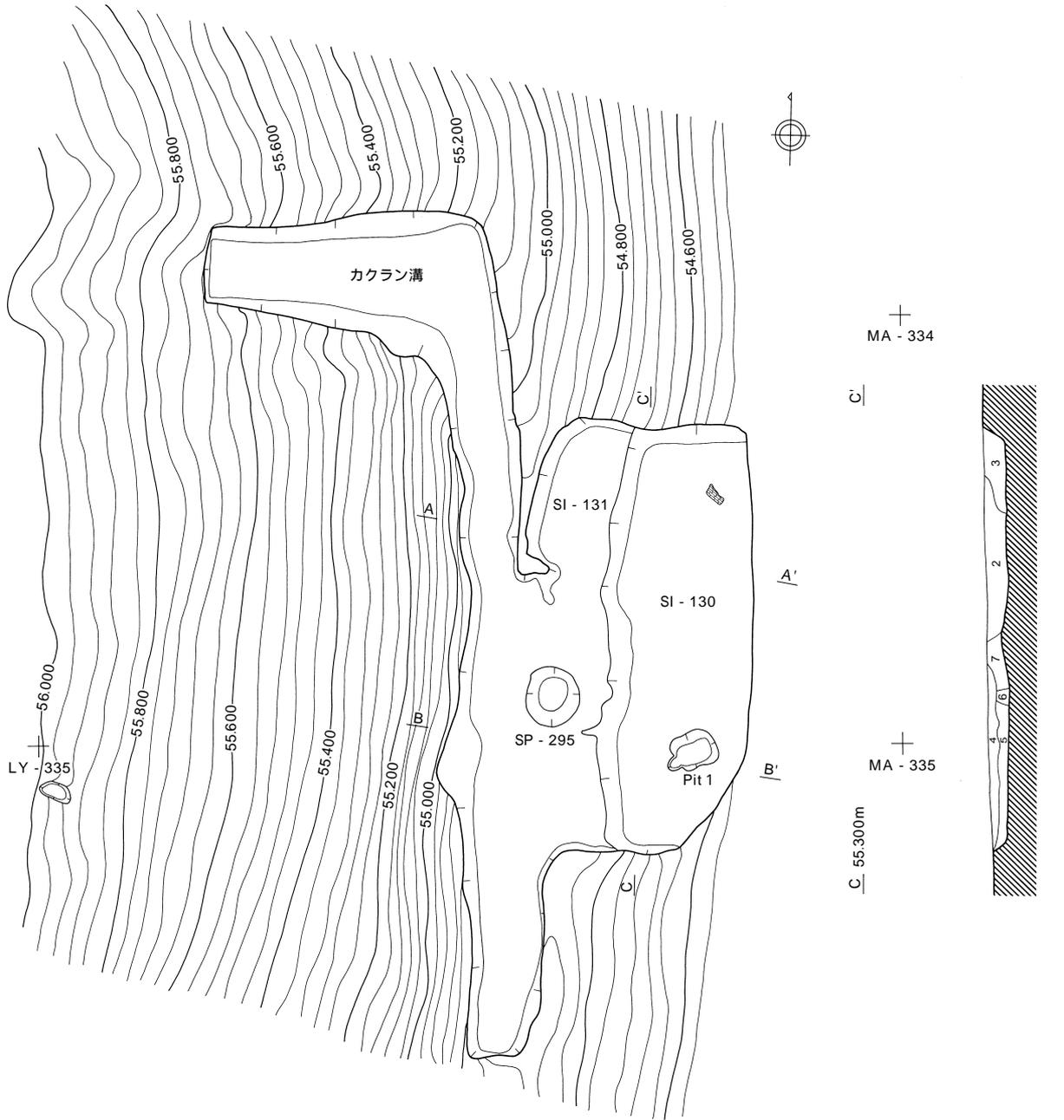
[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 3層に分層した。焼土粒、炭化物、ロームブロックを混入し、暗褐色を呈する土層を主体としている。本遺構の堆積は、人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I 187 (第483図)

[位 置] グリッドLQ・LR-365、LQ-366で検出した。



第482図 SI - 130・131

[重 複] S P - 339と重複している。本遺構がS P - 339に切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 方形を呈し、266×222×17cmを測る。床面積は5.905m²を測る。

[壁] 北壁8cm、西壁18cm、東壁6cm、南壁7cmを測る。断面形はaであり、ほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。掘り方を有する。炭化物、ローム粒を混入し、褐色を呈する7層を貼って床面としている。

[壁 溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] 床面中央より土坑を1基検出した。規模は90×89×12cmを測る。

[堆積土] 貼り床を含めて7層に分層した。褐色、黒褐色を主体とする土層が堆積している。中層の2層の2層において、多量の炭化物が確認できる。褐色、黒褐色の土層が混在していることから、本遺構の堆積は人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I 201 (第484図)

[位 置] グリッドL L - 371、L M - 371・372で検出した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、254×234×16cmを測る。床面積は5.944m²を測る。

[壁] 北壁17cm、西壁10cm、東壁12cm、南壁7cmを測る。断面形はaであり、ほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。床面中央において、17×13cmの範囲で赤化している。

[壁 溝] なし。

[ピット] 竪穴内より7基検出した。規模は、Pit 1 = 25×23×10cm、Pit 2 = 103×81×9cm、Pit 3 = 26×17×3cm、Pit 4 = 28×21×5cm、Pit 5 = 63×43×3cm、Pit 6 = 14×13×6cm、Pit 7 = 10×8×6cmを測る。いずれも柱穴として認定できない。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 4層に分層した。ロームブロック、ローム粒を混入し、黒褐色を主体とする土層が堆積している。本遺構の堆積は人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I 215 (第484図)

[位 置] グリッドM D - 375で検出した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 長方形を呈し、184×152×43cmを測る。床面積は2.797m²を測る。

[壁] 北壁34cm、西壁45cm、東壁37cm、南壁43cmを測る。断面形はaであり、ほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。若干の起伏をもつ。

[壁 溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 7層に分層した。下層～中層は暗褐色を主体とする土層、上層は黒褐色を主体とする土層である。上層の黒褐色を呈する1層の下位において、B - T m火山灰がブロック状に混入している。中層においては、炭化物・焼土粒に混じって、土師器の破片が出土しており、廃棄行為に伴うと考えられる。本遺構の堆積は、人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I 218 (第484図)

[位 置] グリッドLW・LX - 385・386で検出した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 方形を呈し、南東壁中央において、張出しを有する。規模は、256×221×23cmを測る。床面積は5.658m²を測る。

[壁] 南西壁6cm、南東壁25cm、北東壁18cmを測る。断面形はaであり、ほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層の地山を掘り込んで床面としている。若干の起伏をもつ。

[壁 溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 9層に分層した。黒褐色、暗褐色を主体とする土層である。下層から中層において、焼土ブロック、炭化物が混入しており、廃棄行為に伴うものと考えられる。本遺構の堆積は人為的要因が強いと考えられる。

(設 楽)

S I - 247 (第485図)

[位 置] グリッドLM・LN - 373で検出した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 削平のため、南東部分の情報が欠落しているが、残存部分から不整形を呈したものと考えられ、(258)×244×30cmを測る。床面積は(6.204)m²を測る。

[壁] 壁高は、北壁10cm、東壁4cm、南壁10cm、西壁16cmを測る。断面形はdで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁面はやや脆弱である。

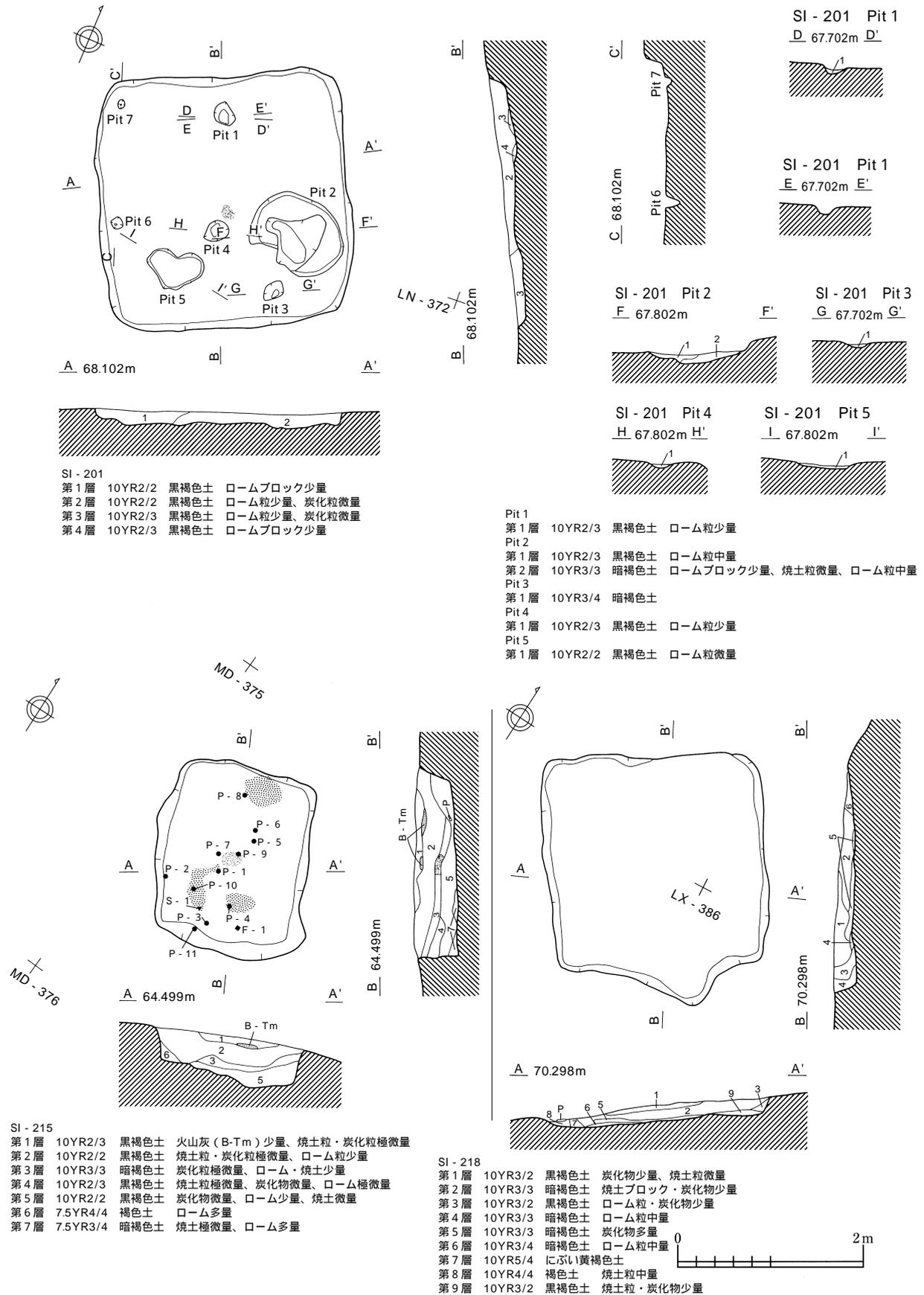
[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、起伏が激しい。床面はやや脆弱である。

[壁 溝] なし。

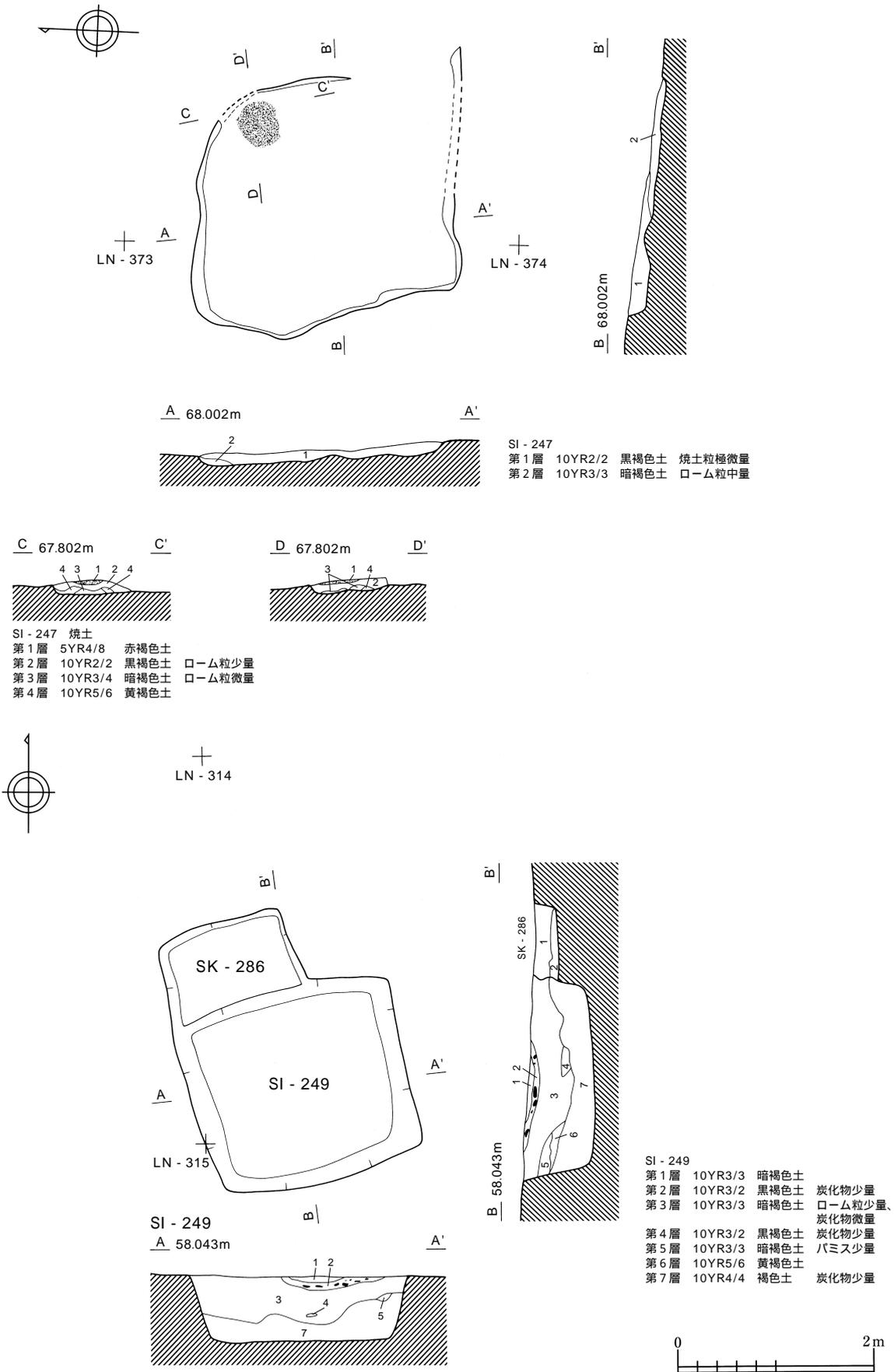
[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 2層に分層した。概ね自然堆積状況を呈する。東壁側の上面から焼土層を47×40cmの範囲で1ヶ所検出した。カマドの可能性も考慮されたが、土層堆積ならびに残存状況等から本遺構の使用時期には帰属しない可能性が高いことから住居として取り扱わなかった。



第484図 SI - 201(上段) SI - 215(下段左) SI - 218(下段右)



第485図 SI - 247(上段) \ SI - 249(下段)

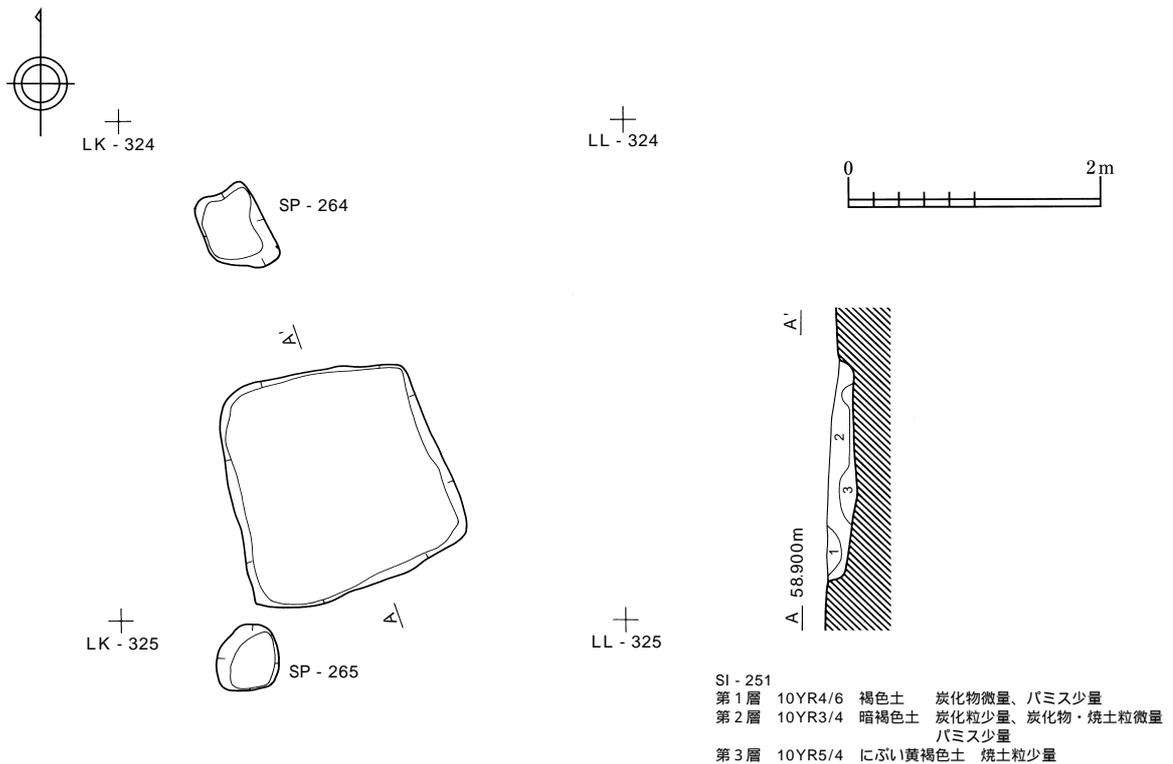
SI - 249 (第485図)

- [位置] グリッドLM - 314、LN - 314・315で検出した。
- [重複] SK - 286と重複している。本遺構がSK - 286の堆積土を切っており本遺構の方が新しい。
- [平面形・規模] 方形を呈し、220×212×69cmを測る。床面積は4.33m²を測る。
- [壁] 壁高は、北壁55cm、東壁65cm、南壁69cm、西壁68cmを測る。断面形はaで、SK - 286との重複部分は不整形で脆弱であるが、他の部分は垂直に近い形で立ち上がり、堅緻である。
- [床] 大谷火山灰層の地山を床面としておりほぼ平坦である。床面は堅緻である。
- [壁溝] なし。
- [ピット] なし。
- [その他の付属施設] なし。
- [堆積土] 7層に分層した。底面直上に堆積している第7層は大谷火山灰層の地山土主体の堆積土で、埋め戻し等による人為堆積状況を呈する。上層の第1～3層は概ね自然堆積状況を呈し、第2層中から炭化物が検出している。

(木村)

SI - 251 (第486図)

- [位置] グリッドLK - 324で検出した。
- [重複] なし。
- [平面形・規模] 台形を呈し、178×170×21cmを測る。床面積は2.856m²を測る。
- [壁] 壁高は、北壁12cm、東壁15cm、南壁14cm、西壁16cmを測る。断面形はaで、垂直に近い形で立ち上がる。壁面は堅緻である。
- [床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面は堅緻である。



第486図 SI - 251

[壁 溝] なし。

[ピット] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 3層に分層した。崩落土の流入が見られるが、概ね自然堆積状況を呈する。

(木 村)

報 告 書 抄 録

ふりがな	のぎいせきはくつちょうさほうこくしょにへいあんじだいいこうへんいち							
書名	野木遺跡発掘調査報告書 平安時代遺構編1							
副書名								
巻次								
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第54集 - 3							
編著者名	木村 淳一、設楽 政健							
編集機関	青森市教育委員会							
所在地	〒030-8555 青森県青森市中央一丁目22 - 5 TEL017 - 734 - 1111							
発行年月日	西暦2001年3月21日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
のぎ木	あおもりしおおあざ 青森市大字 のぎあざやまくち 野木字山口	02201	210	40° 50 38	140° 45 15	19970512~ 19971121 19980420~ 19981106	69,900	工業団地造成 (青森中核工 業団地造成工 事)に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
野木	集落跡	平安	竪穴式住居跡 196軒 竪穴遺構 52基 土坑 221基 ピット 221基 柵 12列 掘立柱建物跡 19棟 鉄生産関連遺構 4基 畝状遺構 1ヶ所	土師器 須恵器 羽口 鉄製品				

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962 『三内壺園遺跡調査概報』	”	第38集	1998 『野木遺跡発掘調査報告書』
”	2	1965 『四ツ石遺跡調査概報』	”	第39集	1998 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
”	3	1967 『玉清水遺跡調査概報』	”	第40集	1998 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
”	4	1970 『三内丸山遺跡調査概報』	”	第41集	1998 『野木遺跡発掘調査概報』
”	5	1971 『野木和遺跡調査報告書』	”	第42集	1998 『熊沢遺跡発掘調査概報』
”	6	1971 『玉清水 遺跡発掘調査報告書』	”	第43集	1999 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
”	7	1971 『大浦遺跡調査報告書』	”	第44集	1999 『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』
”	8	1973 『孫内遺跡発掘調査報告書』	”	第45集	1999 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
		1979 『蛭沢遺跡』	”	第46集	1999 『新町野・野木遺跡発掘調査概報』
		1983 『四戸橋遺跡調査報告書』	”	第47集	1999 『稲山遺跡発掘調査概報』
青森市の埋蔵文化財	1983	『山野峠遺跡』	”	第48集	2000 『熊沢遺跡発掘調査報告書』
”	1985	『長森遺跡発掘調査報告書』	”	第49集	2000 『稲山遺跡発掘調査概報』
”	1986	『田茂木野遺跡発掘調査報告書』	”	第50集	2000 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
”	1987	『横内城跡発掘調査報告書』	”	第51集	2000 『桜峯(1)・雲谷山吹(3)遺跡発掘調査報告書』
”	1988	『三内丸山 遺跡発掘調査報告書』	”	第52集	2000 『大矢沢野田(1)遺跡調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書			”	第53集	2000 『市内遺跡発掘調査報告書』
”	第16集	1991 『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』	”	第54集-1-6	
”	第17集	1992 『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』	”		
”	第18集	1993 『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』		2001	『新町野遺跡発掘調査報告書』
”	第19集	1993 『市内遺跡発掘調査報告書』			『野木遺跡発掘調査報告書』
”	第20集	1993 『小牧野遺跡発掘調査概報』			
”	第21集	1994 『市内遺跡詳細分布調査報告書』			
”	第22集	1994 『小三内遺跡発掘調査報告書』			
”	第23集	1994 『三内丸山(2)・小三内遺跡発掘調査報告書』			
”	第24集	1995 『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』			
”	第25集	1995 『市内遺跡詳細分布調査報告書』			
”	第26集	1995 『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』			
”	第27集	1996 『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』			
”	第28集	1996 『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』			
”	第29集	1996 『市内遺跡詳細分布調査報告書』			
”	第30集	1996 『小牧野遺跡発掘調査報告書』			
”	第31集	1997 『市内遺跡詳細分布調査報告書』			
”	第32集	1997 『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』			
”	第33集	1997 『新町野遺跡試掘調査報告書』			
”	第34集	1997 『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』			
”	第35集	1997 『小牧野遺跡発掘調査報告書』			
”	第36集	1998 『桜峯(1)遺跡発掘調査報告書』			
”	第37集	1998 『新町野遺跡発掘調査報告書』			

青森市埋蔵文化財調査報告書第54集 - 3

野木遺跡発掘調査報告書 (平安時代遺構編1)

発行年月日 平成13年3月21日

発行 青森市教育委員会
〒030-8555 青森市中央一丁目22-5
TEL 017-734-1111

印刷 第一印刷株式会社
〒038-0003 青森市石江字江渡3-1
TEL 017-782-2333

